日本名著全集
江戸文藝之部第三巻

西鶴名作集

下

LIBRARY
FEB 21 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

この卷の裝幀——

背及表紙意匠　小杉未醒氏畫
見返し前附・後附　小早川秋聲氏畫
背文字　渡邊新三郎氏筆
扉文字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

PL
755
.35
N5
V.2

西鶴名作集下卷目錄

（目錄をはり）

例言

西鶴名作集上下二卷を校訂するに方つて、最も努めたのは、原本の面影を髣髴することであつた。誤字にも訛字にも、また今の假名づかひに合はぬものにも、一切私意を加へまい、見す見す備書の誤脫とおもはれるものにも、斧正を施すまい、之れがために、一讀直に誤植多き書と豫斷せられるのも致し方がないと考へた。後から書き足した文字が、行の右また左に小さく添へられてゐるのさへ、その儘に寫し出さうとした。かういふ事からも、後の研究者が意外な問題を見出しはせぬかと思つたからである。

西鶴の著作の翻刊されたのは少くない、しかも、多くは今の文法により、今の字義に從つて校訂されてゐる。かくては、西鶴本來の面目を逸し、西鶴獨特の語法、また用語用字の例を考へる重要な資料を棄てさせはしまいか。その氣づかひが、一に原本に忠ならんとしたのであつた。

句讀點と振假名とに、特に注意を拂つたのも同じ理由による。それ等を精しく、また音の清濁を明にするためには、もとより書毎に數本を準備する必要がある。さいはひに「一懐硯」と「名殘の友」とが、一部の完本、二三册の缺本を得たにとゞまる外、參照ほど意にかなふものがあつた。たゞ、校訂者の粗漫が幾多の見おとしをしてゐることは、その無學が幾多の誤讀をしてゐることゝ共に、最も寒心に堪へない。

西鶴の書には、他の浮世草子に於いて、つひに見出し難き幾多の新造字がある。それ等は漏すところなくそのまゝを移した。さうすると、略字までも棄て難くなり、はては、古の木版の世界の約束と今の活字の世界の約束の相異をも忘れ、一途に明朝活字の書法・かたさを歎じ、用なき略字三昧に陷つたことも尠くなか

つた。また草書體をそのまゝに楷書風に結晶させ、或は草體のあとを露はに殘して、前後の字體との調和を破つたのも二三でない。校訂者彼文字を知らず、草楷の別を辨へずとのそしりは甘じてうけるにしても、原本の形骸に拘はつて、原本の靈魂を逸し、私意を加へまいとして、さかしらに墮した結果を憾みとする。西鶴がみづからの原稿を今日の印刷に附したなら、彼は最も素直に活字の世界の約束を守つてゐたのであらうことは想像するに難くない。

しかし、さういふ難は難として、この書が從來の書に比して、やゝ原本の風貌に近づき得たとするならば、また相應な信憑を寄せ得るとしたならば、功は一に編輯部諸子の細心の工夫による。特に記して謝意を表する。

なほ、二三の書きのこし難きものがある。原本の句讀點、書によつて•を用ゐ、また。を用ゐ、時に二者を混淆してゐる。今、解說にその別を記すことにして、すべて。とした。たゞ「一代男」には用意のこれに及ばないものがあつた。原字の極めて曖昧なのは、ほゞ正字に近づけて讀むことにした。判讀の標準に動なきことを保し難い。漢字と變體假名との別も注意したが、時にその區別の標準に狂ひがあつたらう。變體假名ではないが、假名の「や」と、漢字の「也」との間に、意外な誤讀をなしてゐはせぬかも氣づかはしい。片假名のハと平假名のハとの別に至つては、原本に於いてつひに明にし得なかつた、しばらく、平假名とのみ見た。

解説　その一

山口剛

「西鶴名作集」上下二卷收むるところ、西鶴の眞作と稱せらるゝものゝ外、多少の疑義を藏するものをも籠めて、すべて二十一部。その一々について簡短な解題を試むること、左の如し。

好色一代男

體裁は美濃紙形の大いさ、いはゆる大本である。八卷八册。卷一から卷七までは毎卷二十二丁、卷八は十八丁。柱には「男」とあり。本文の行數十一行、句點は・を用ゐてゐる、四卷のみ。を混用する。

天和二年十月の刊行。初版の奥附に、「天和二壬戌年陽月中旬　大坂思案橋　荒砥屋孫兵衛可心板」とある。

落月庵西吟署名の跋文がある。西吟は西鶴門下の俳士である。跋文によつて、西鶴の作であること、また版下が西吟の筆であることが知られる。さし繪五十四圖、大方西鶴の筆に成るとのことである。

この書に數版ある中に、第二版の秋田屋版は、第一版の奥附の荒砥屋云々を「大坂安堂寺町五丁目心齋筋南横町　秋田屋市兵衛板行」と改めてゐる。第三版の大野木版は奥附を除き、卷八の本文末に「大坂住　大野木市兵衛板」と彫りそへてゐる、これはまた西吟の跋文を省いてゐる。第二版、第三版ともに出版年月を

詳にしない。
以上大坂版の外に、江戸版がある。半紙本の大いさ、すなはち中本である。本文の内容に違ひはないが、漢字を假名に改めたところが多い。さし繪は菱川師宣である。

第一版の奥附には、「貞享元甲子暦三月上旬　大和繪師菱河吉兵衛師宣　日本橋南貳町目川瀬石町　川崎七郎兵衛板行」

第二版の奥附には、「貞享四丁卯年九月中旬　日本橋青物町　大津屋四郎兵衛板　大和繪師菱川吉兵衛師宣筆」

第三版の奥附には「正月吉日　日本橋南詰　萬屋清兵衛板行大和繪師菱川吉兵衛師宣筆」とある。以上の三者みな同じ版式である、版木移譲のあとが見られる。

「庵樓」さし繪西吟像

「好色一代男」は、世之介といふ當代の蕩兒を主人公とする長篇小説の形式をとつてゐる。早熟な彼の春の

目ざめの七歳の出來事に筆を起して、六十歳の女護島渡りに終る。全篇五十四章、これを五十四年間の年立によつて目を立てる。たゞし、西鶴の誤か、西吟の誤かは知らねど、卷六の目錄には錯亂がある。當然、四十二歳から四十八歳に至る筈なのが、また三十六歳にかへつて四十二歳までを數へてゐる。尤も、江戸版では、この誤を訂正してゐる。

この年立も、全篇の構造も、ともに「源氏物語」に擬した趣向であることは、すでに世に知られてゐる。平安朝の榮華の權化ともいふべき源氏君を、當代の人物化し、當代享樂の權化としたのが、世之介であつた。彼のものゝあはれは「雲がくれ」の卷の名にそのはてを見せるのを、此は飽くこと知らぬ享樂に女護島に渡ることになつてゐる。作者の人と時とのけぢめが最も明に見られる。一篇の構想が「源氏物語」の筋を追ふだけでなく、どの章も皆何等かの形に於いて「源氏」の事件と交渉を有つ。作者が最も多く心を籠めて、彼を俳諧化したことが認め

天和二壬戌年陽月中旬
大坂安堂寺町五丁目心齋筋南横町
秋田屋市兵衛板行

秋田屋版奥附

られる。なほ中に籠めてある「謠曲」「伊勢物語」などの古典の翻案ぶりと共に注意すべきであらう。

形式としては長篇小說の組織をとりながら、實は獨立してゐる各章である、すなはち五十四の短篇が世之介の名の下に集合してゐるに過ぎない。しかし、その間にも、世之介の一生に大きい段取だけは劃してゐる、またそれを通じて作者の懷抱する企圖を知らせてゐる。

腰元に對する幼い戀にはじまつて、貧家の入聟にをはる卷一卷二は、むしろ少年の性慾の發達を語るものであつた。その中の從姉、隣家の女房、念者、撞木町の遊女、兵庫の湯女、淸水坂の私娼、仁王堂の飛子、後家、人妻、木辻町の遊女、街道の出女、江戸の私娼、大坂の私娼は、その少年の心情態度のうつりゆく徑路を示すために、對象として藉り用ゐられたやうである。

卷三卷四は諸國の遊里、遊女、また好色に關する風慣を敍することが詳である。橋本の私娼、京の妾、嶋の髮長、小倉のたたじやう、下關の稻荷町、大坂の蓮葉女、大原の雜魚寢、寺泊の遊女、坂田の勸進比丘尼、しやく、千瓢、縣御子、水戸の御藏の粗挽、追分の遊女、江戸の屋敷女中、京の十日限の手かけもの、島原の遊女、泉州佐野迦葉寺あたりの漁夫の女房のしのび合ひの相圖、さては死人の爪商ひなどを傳へるために、しばらく世之介の視聽を藉りる形である。前二卷とはおのづから主客が顚倒されてゐる。尤も、作者は一面に於いて、これ等の經驗から、世之介夭成の好色心が一段の訓練を得て、他日の粹に達する道程を示してゐる。すなはち、世之介の諸國放浪は好色修行であつた。假名草子にしばしば現はれる諸國遊樂の僧を還俗させ、好色に精進させたところに、新しい作意が見られる。

卷五から卷八まで、大方、三都名妓傳である。島原の吉野、奴三笠、藤浪、初音、野秋、もとの高橋、今の

高橋、薫、吉崎、新町の夕霧、御舟、和州、吾妻、吉原の吉田、小紫、高雄などの名が見える。外に無名の太夫がある、これは太夫のさもしさを主題とする場合である。また大津柴屋町、室、堺の袋町、筑前の柳町についていふ章もある、これ等は皆島原、新町、吉原を標準として、その侘しさをいふことになつてゐる。たゞ長崎の丸山には禮讃の辭がある、その地の風もとより然るべく、また女護島渡り直前の章として、工夫おのづから然るべきものがあつたらう。なほ宮川町の野郎遊び、末社の岩清水詣など、どれもどれも粋の世界の描寫ならぬものはない。これ等の巻に於ける世之介は、その世界に逍遙遊する粋客となつてゐる、粋客となる資格はいろいろある、作者西鶴はそれ等を世之介の修行ものがたりを通して説明してゐる。その中で最も重いのは金である。西鶴は世之介をすでに父の遺産を貰ひうけた大々盡として扱つてゐる。作意のあるところが明である。

粋といふことの解説も、三都の名妓の紹介も、諸國の好色生活も、また「源氏」の面白い節々を俳諧化することも、「源氏」全體の筋をとり入れることも、一人の當世男を仕立て上げることも、あれもこれも一緒に扱はうといふのが西鶴の意圖であつた。事の成否はしばらく措く、その意圖の存在は、毎章を本文二丁半、さし繪半丁、都合三丁に限つて書くといふ末梢的のものからも、明に承認される。たゞし、三丁の約束は江戸版にあつては守られてゐない。

上方版「一代男」巻五初頁

七才

けした所が恋のはじまり

桜もちるになげき月はかぎりありて入佐山爰に但馬の国
かねほる里の辺に浮世の事を外になして色道ふたつ
に寝ても覚ても夢介と替名よばれて名古屋三
左加賀の八などゝ七つ紋のひしにくみして身は酒にひた
し一条通り夜更て戻り橋或時は若衆出立
姿をかえて墨染の長袖又はたて髪かづら化物が通るとは
誠にこれぞかしそれも彦七が顔して願はくは
かみころされてもと通へばなを見捨がたくて其比名高き
中にもかづらきかほる三夕思ひ／＼に身請して
嵯峨に引込或は東山の片陰又は藤の森ひそかにすみ
なして契りかさなりて此うちの腹よりむまれて世
之介と名によぶあらはに書しるす迄もなし知る人はしるぞかし

江戸版「一代男」巻一初頁

三十五　後には様付てよぶ

江戸版「一代男」巻五初頁

江戸版「一代男」卷一首章さし繪

江戸版「一代男」卷四首章さし繪

一代男に生れてのそれこそねがひのちらなれと京にて
まうせいづゝのむかしより見すぐし。天和二のとしか
こゝろのをくにゆきかよひてはだなりけり

貞享元甲子暦三月上旬

大和絵師
菱河吉兵衛師宣

日本橋南貳町目川瀬石町
川崎七郎兵衛板

江戸初版「一代男」奥附

諸艶大鑑（しよえんおほかゞみ）

題簽及び内題ともに「諸艶大鑑」、旁書して「好色二代男」といつてゐる。「一代男」の續篇を意味するこの別名の方が却つて世に聞えてゐる。

大本、八卷八冊。卷一、二は二十二丁、卷三は二十二丁、卷四は二十丁、卷五は二十一丁、卷六は二十二丁、卷七は二十一丁、卷八は二十丁。柱には、「二代」とある。本文の行數、十二行。句點は殆ど全部。である。

序跋なく、作者名なけれど、西鶴の作として疑はれざるもの、さし繪また西鶴の筆といはれてゐる。貞享元年初夏の刊行。初版の奥附にいふ、

右全部八冊世の慰草を何かなと尋ねて忍ふ草靡き草皆戀草是を集め令開板者也

右全部八冊世乃慰草を何のかと尋ね忍ふ草靡き草皆戀草是を集め令開板者也
貞享元甲子年　參河屋久兵衛板
江戸本石町拾間店
大坂呉服町眞斎橋筋角
書林　池田屋三良右衛門板

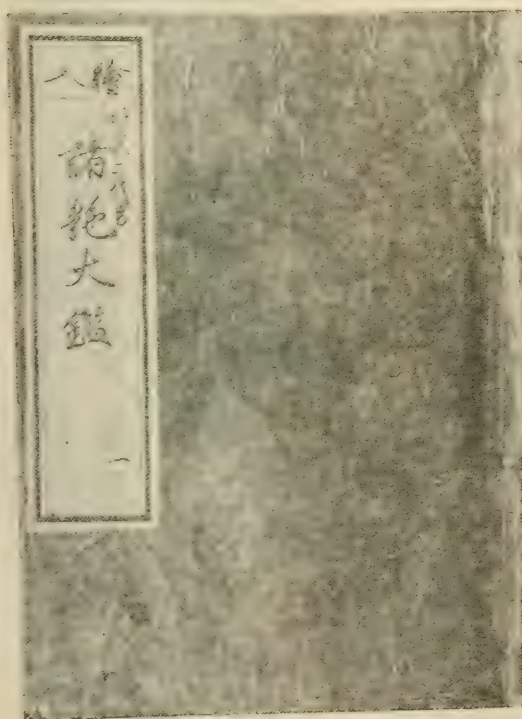
再版「諸艶大鑑」奥附

貞享元甲子年初夏大坂呉服町眞齋橋筋角
書林　池田屋三良右衞門板

再版の奥附は、この「初夏」を削つて、その下に「江戸本石町拾間店　參河屋久兵衞板」を加へてゐる。

「諸艷大鑑」は世傳といふ粹客の聞書した色里の評判記といふ體裁をなしてゐる。各卷五章、すなはち四十の短篇集である、その世傳を「一代男」の世之介の遺子とするのが、「一代男」との間に於ける關係である。他は與かるところがない。彼にあつては、世之介が粹に到達するまでの過程を叙するために、前半を費してゐたが、これにあつては、世傳が年若くして、亡父から色道の秘傳を授かることを發端としてゐるだけに、はじめから「一代男」の卷五以下の態度、すなはち粹の眼を以て遊里遊女遊客を觀察することが作意になつてゐる。

「諸艷大鑑」表紙

當時すでに幾多の色里評判の書があつた、たとへば「内證論」「まさり草」「白鳥」「遊女割竹集」「太夫前

巾着」の類である。これ等は叙して未だ盡さず、事を傳へて信ならぬものがある、世傳はそれ等を認めず、殊に惡きを拾ふに急な態度を陋とする故に、此者ありと標榜するだけに、大方は太夫の美點を擧げてゐる。太夫は三都の名たゝるもの、薄雲、高橋、吉野、小紫、小太夫、野秋、勝山、越中、薫、夕霧、左門、花月、丹州、井筒、背山の類である。「一代男」の中の者と出入するところがある。たゞ注意せられるのは、彼に於いては一二の特例となつてゐる京と江戸の太夫の交渉の事件が、これに於いては數多いことである。この事實は三都の遊里の上下の比較論の多いことと合せ考ふべきである。

三都の名妓以外、長崎の金山、また奈良木辻、伏見撞木町の遊女の誰かれの名が見える。それぞれ推稱するに足る美點を擧げる場合である。また、三都の太夫で名を遂したものもある、これ等の行爲に、殆ど骨を穿つほどの惡口を浴せかける場合である。「一代男」で、邊陬の地の遊女に與へた以上の痛罵である。極端なる褒貶の差を遊女の上に示すと共に、この書が強く見せてゐるのは、遊里を繞る暗さである。遊女の身過のやるせなさ、遊客の遊びの金につまる苦しさの、忌憚なき暴露である。これが「一代男」の明るさと大きい相異をなしてゐる。

その明暗の差が明瞭に見られるのは、「一代男」と「諸艶大鑑」の結末の落想である。世之介の老いての後の女護島渡りと、世傳の未だ若くしての大往生とは、何といふ相異であらう。しかも、二者共に當然の歸趨であることは、一通讀、たゞちに首肯される。

西鶴は、この二書の色調の對比をけざやかにする意圖を有してゐた。事の小なるものは、二書終章前の一章に於いて見られる。すなはち女護島に先つ長崎、往生に先つ松前といふ地理的對比である。

どうして、西鶴はかゝる案を懐いたか。原據との關係が大きい理由をなすのであらう。「一代男」の原據は「源氏物語」である、しかも、源氏の君の榮華の生涯を敍した正篇である。「諸艶大鑑」の原據も、また「源氏物語」である、しかも、正篇に對して續篇といふべき「宇治十帖」である。「宇治十帖」に書かれたのは源氏の君の子として養はれてゐた薫の君の多恨の生活である。正篇の明るさに對して、これは暗さに終始してゐる。西鶴はその薫を以て世傳として案を立てたのである。なほ各章のいづれに於いても、「宇治十帖」のあるものに擬りもし、また少くとも觸れもしてゐる、二者の間に何等かの交渉を有せざるものはない。たゞ、原據との關係が、「一代男」の場合ほど緊密でない。前者よりも自由な翻案ぶり、俳諧化ぶりが見られる。

「諸艶大鑑」にいふものは、西鶴が首章で揚言してゐるやうに事實が多からう、それと共に、「宇治十帖」以外「謠曲」「伊勢」などを翻案した場合も少くないやうである。最も明に見られるのは「宇治拾遺物語」との交渉である。

「宇治拾遺物語」は、宇治のほとりに籠りゐる大納言隆國が往來の者を呼び集めて物語させたものゝ聞書であると傳へられた。西鶴はその傳へをうけて、世傳をして、島原の出口の茶屋で、やり手の老婆から諸國の諸分を聞くことにさせたのである。發端すでに然り、書中なほ彼に取材したのも二三でない。目錄に、たとへば、一女護島より美面島渡る事、一島原の衣裝替り姿の事などの如く、何々の事といふのが、「一代男」のよりも多く列べられてゐるのも、彼の書の目の立て方に擬したためであらう。

「諸艶大鑑」巻四初頁

西鶴諸國はなし

「西鶴諸國はなし」とは題簽にしるすところである。内題には「近年諸國咄大下馬」とある。大本、五卷五册。序文がある、卷一、二十二丁、卷二、三は各二十一丁、卷四、五、各十七丁である。柱に「大」とある。本文行數は十行、句點は卷一、二は・、卷三、四、五は。・を混用してゐる。さし繪、また版下、すべて西鶴の筆に成るとのことである。

貞享二年の刊行。奥附に、「貞享二年丑正月吉日　大坂伏見呉服町眞齋橋筋角　池田三郎右衞門開板」と見ゆ。

「世間の廣き事國々を見めぐりてはなしの種をもとめぬ」と序のはじめにいふやうに、諸國の珍奇の談を別に分類もすることなく書き集めてゐる。各卷、七章、全部三十五話である。今、國を以て分てば次のやうに數へられる。

奈良四、江戸四、京三、伏見二の外、攝津三、河内三、信濃二、相模二、紀伊二、和泉一、駿河一、常陸一、飛驒一、播磨一、但馬一、若狹一、筑前一、奥州一。

これ等の話の中には、飜案せられた支那の說話、またわが古書所載のものも混淆してゐるやうである。必ずしも國々を見めぐつての聞書のみではない。貞享の頃には、假名草子時代からひきつゞいて、志怪の書が頻りに行はれてゐた。西鶴また何かの意あつて、流行を追つたのであらう。志怪の書が諸國ばなしの形式を

とること、また當時の常であつた、西鶴またこれに倣つたものであらう。しかし、西鶴の筆にはおのづから時流と異なるものがある。

その頃の作者は、靈界不思議の事を傳へるに努めるとともに、教訓に託し、また和漢の故事を引くことに努めた。西鶴はもとより教訓を避ける、また博識を衒はない、更に不思議のことのみを傳へない。むしろ怪談としては現實の色が濃い。奇談異聞の書として見るべきである。いろいろの社會的條件のもとに、當時の民衆はこの種のものを大いに喜んでゐた。西鶴は他にも理由があるが、一つの理由はそれに應じて筆を執つたのであらう。

本書の序の末に、「都の嵯峨に四十一迄大振袖の女あり是をおもふに人はばけもの世にない物はなし」といつてゐる。現實の濃度がすでに明である。

この書の本題は「大下馬」である、「近年諸國はなし」とは説明的に附した別名である。近年と斷つたのは、當時、むかし話の體をとることの多い志怪の書、すなはち怪談の書に對して、斬新を飾るためであらう。題簽の「西鶴諸國はなし」の號は、その頃ひきつゞいて行はれてゐた「一休咄」「一休諸國物語」「一休關東咄」などの命名ぶりに倣つてのことであらう。もとより西鶴みづからの發意か、書肆の發意に出でたかを詳にしない。もし西鶴自身の案であつたならば、彼の自ら負ふところの強さを見るべく、書肆の案であるならば、西鶴の盛名がおのづからさうさせたのであらう。少しく考へるところがある。「解説その二」にゆづる。

「西鶴諸國はなし」卷一初頁

近代艶隱者

題簽には「扶桑近代艶隱者」とあり。大本、五巻五冊。巻一、二十丁、巻二、十七丁、巻三、十九丁、巻四、十八丁、巻五、二十丁。本文の行數、十一行。句點は巻一は。、巻二、三、五は・、巻四は。・を混へ用ひてゐる。柱には「近代」とあり。

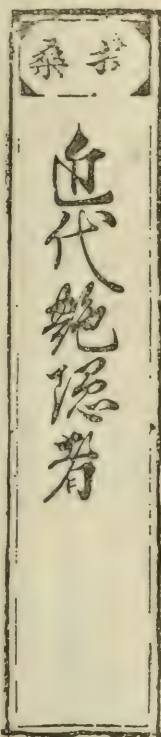
貞享三年の刊行。奥附に「貞享三丙寅歳孟春良辰　攝陽順慶町心齋橋筋角　書肆河内屋善兵衛」とある。

序文あり、難波俳林西鶴と署名してゐる。これによれば、この書は淡備西鷺軒橋泉の筆録に成るとのことであるが、けだし假託であらう。尤も、この事あるがために、更に作風の他と異なるものあることをも合はせて、西鶴の作でないと疑はれてもゐる。しかし、自分は種々の理由のもとに、西鶴十三回忌追善句集「心葉」の「物語あまた書れたる中に風流なる名を取りて、　闇の香や名は埋れぬ艶隱者　萬海」を文字通りに信じてゐる。

版下、またさし繪、共に西鶴の筆であるとのことである。もし、橋泉の作であるとすれば、西鶴が彼のために版下を書き、またさし繪を描いたことになる。西鶴にさういふ事がないとは斷じ難いが、この場合はさうでなからう。その橋泉は何人であるか、今日では、その人となりは勿論、實在の人であるか、ないかさへ詳でない。繋辭の嗤をみづから與へながら、西鷺は西鶴、橋泉は狂仙の戯れか、などと自分は竊に思つてゐる。

艶隱者を讀んでやさゐんじやといふ、そのやさは風流を意味する。序文の中、すでに風流男女を訓じて、

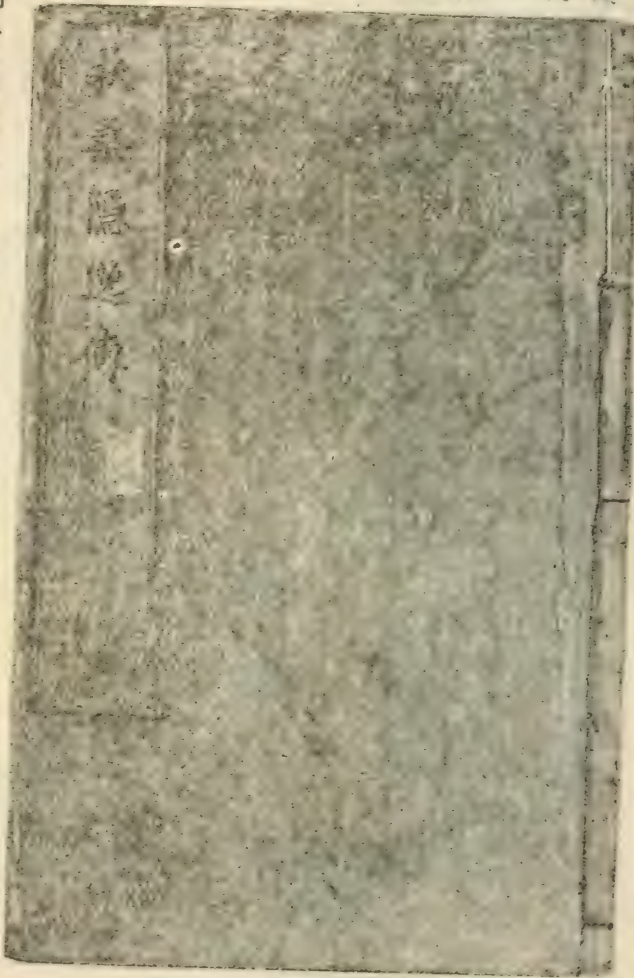
やさをとこおんなといつてゐる。本文の中、しばしば風流を訓じてやさといつてゐる。單なる隱逸者の義ではない。書中、かゝる風流隱者を傳すること三十六人。これを毎卷五條、すべて二十五條に分けて叙してゐる。

傳は一趣向の下に列ねられてゐる。すなはち旅僧橋泉が靈山に到つて、靈窟の中に入り、觀音の示現のままに草庵を結ぶ。その籠居の間に見聞したのが、一違例を除くの外、卷一及び二の人物である。彼が窟中を出でて諸國行脚の途に邂逅したのが、卷三、四、五の人物である。前者は京及び江戸の住に限り、後者はそれ以外、大坂、奈良、近江、尾張、駿河、相模、筑前、長門、安藝、備後、備前の住に亘つてゐる。この人人はいづれも名を缺いてゐる。序文にいふ、ひとりひとり名のなき人を尋ねしに、皆世に傳へし人也、其身の取置に氣を付て見しに、いはでそれとは隱れなしと。またいふ、屈(窟)中に有て見しと書しは死去し人也、行脚に寄て書しは世にある人と。然らば、窟に見、行脚に遭つた人物の別は、過去人現在人の別である。果してさうであらうか。すでに、行脚に寄せて書くといふやうに、その人必ずしもその國に住まなかつたのである、或は過去現在の別もまた寄せていふことがなからうか。いはでこれとは隱れなしといふ行動から推すれば、確にその人と知られる古隱遁者もある。しかし現存の人物といふ中に、あまりに多く支那の書「列仙傳」「高士傳」の人物に類似したのを見る。それぱかりか、艶隱者どもの言葉には、「高士傳」の文辭もそのまゝにとり入れられてゐることが注意せられる。この書の發端か趣向として、「遊仙窟」に觸れ、書中の用語が少なからず同書に負ふことあるが如く、人

近代艶隱者

艶隱者題簽

物の扱ひに於いて、それ等の書に據るところがなかつたらうか。題簽の「扶桑」またこれ等に對する意がなからうか。「列仙傳」「高士傳」に見られるのは老莊の思想、また之れから派出する享樂の思想である。「艶隱者」の「艶」は殊に後者と交渉を有することが深い。しかも、西鶴その人の上にもいさゝかこれに適ふものがあると思はれる。自分はその點に於いて、西鶴にこの作あるを怪まない。

題簽の「扶桑」に就いては前にいつた。それはまたさし當つては元政の作である「扶桑隱逸傳」に倣つたのであらうか。その書は奈良朝から宗祇時代の隱者七十五人の傳を列ねてゐる。いふところの「近代」は、けだし、その後を襲ふの意でなからうか。

「扶桑隱逸傳」表紙

西鶴著作の題號往々その種の工夫がある、これもその一つであらう。「艶隱者」には「隱逸傳」の文辭を承け、またその旨趣を敷衍した跡がかなり多い。内容に於ける影響の顯著なることが知られる。また「隱逸傳」の上卷、白箸翁のくだり、これに對するために、その頃藤杜に住ひする一異人の例を擧げてゐる。殊に近代の隱者に就いていはうとしたのは、或はそれ等から暗示を得たのかも知れない。西鶴の書籍に接する、その感應極めて敏なる事例に照して、この疑ひを懷くことも、或は容さるるであらう。

扶桑隱逸傳　上卷

三一

「扶桑隱逸傳」さし繪

扶桑艶隠者巻三初頁

好色五人女（こうしょくごにんおんな）

大本、五巻五冊。巻一、十八丁、巻二、二十二丁、巻三、二十一丁、巻四、二十丁、巻五、十八丁。本文の行數、十一行。巻一、二、五、及び巻三の後半に句點なし、巻三の前半。點、巻四。。・を併せ用ゐてゐる。柱には「五人女」とあり。

貞享三年の刊行。奥附に、「貞享三龍集丙寅歳仲春上旬日　攝州書肆　北御堂前森田庄太郎板」

一本の奥附「貞享三龍集丙寅歳仲春上旬日　武州書林　青物町清兵衛店　攝州書肆北御堂前森田庄太郎板」、再版であらう。

改題して「當世女容氣」といふがある。氣質物流行の氣運に乘じての改題である。奥附「浪華書肆　順慶町壹丁目　拖玉軒田原平兵衛梓」

貞享三龍集丙寅歳仲春上旬日
武州書林　青物町　清兵衛店
攝州書肆　北御堂前　森田庄太郎板

一本「好色五人女」奥附

題簽、巻一は「好色五人女」の上に「ひめぢにすげがさ」と冠らせ、巻二は「てんまにたる」巻三は「みやこにこよみ」巻四は「江戸に青物」巻五は「さつまにあらし」と冠らせてゐる。一つ一つ國所を明にするための趣向と見られる。

内題として、巻一、「姿姫路清十郎物語」巻二、「情を入し樽屋物かたり」巻三、「中段に見る暦屋物語」巻四、「戀草からげし八百屋物語」巻五、「戀の山源五兵衛物語」とある。

内題すでにこれを明にするが如く、毎巻おのおの、一話を収めてゐる。他の作が多くの小話を収載するのとやゝ類を異にしてゐる。また「好色一代男」と別趣の長篇小説としてうけとられる。

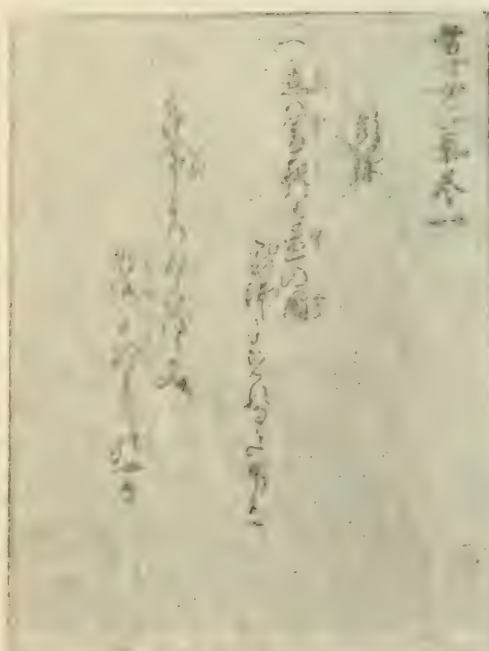
巻一のお夏清十郎の悲劇は、寛文初年に起つた事件といはれてゐる。早く世に傳へられ、唄にもうたはれ、歌舞伎狂言にも脚色されてゐる。巻二の樽屋おせんの悲劇は、貞享二年正月二十二日、大阪に起つた事件である。すなはち本書刊行の前年に當る。巻三のおさん茂右衛門事件は、天和三年八月の粟田口の刑死に於いて、巻四の八百屋お七事件は同三月の鈴森の刑

「當世女容氣」奥附

死に於いて落著を遂げたものである。卷五のおまん源五兵衛事件は、寛文初年のことだといふ。これ等皆巷說に、流行唄によつて喧傳せられる事件である。西鶴はこれ等著名の事件を藉りて、縱橫に、五つの戀の相、女の心意氣を書き分けたのである。

樽屋事件を除くの外は、すでに年月も遠かつてゐるために、事實も漠たるものがあらう。それだけに、西鶴はおもふまゝに趣向を凝したのであらう。おまん源五兵衛事件の如き、本來は心中沙汰である。それを喜劇に書きかへたところに著しい事實變更の跡が見られる。殆ど眼前の事件であつた樽屋事件にしても、西鶴は果して事實に據つたのであらうか。當時うたはれた祭文によれば、おせんの不義の動機は、子の愛にひかされたことである。隣人長右衛門が夫の留守に來ておせんに迫つて拒まれる、長右は聽かないなら松之介を殺すと刄を擬する、おせんは仕方なく意に從はうとする。そこへ夫忠兵衛が歸つて來

「當世女容氣」西鶴

「五人女」ノ內題ヲ備レル「女容氣」

る。おせんは悔恨して自害したのである。ところが西鶴のおせんの不義の動機は、隣人の妻の嫉妬に對する反抗である。いづれが事實であるかを詳にしない。たゞ「五人女」の女の配列の順序からいへば、どうしても勝氣の女をあの位置に置く必要があつたと思はれる。それにも西鶴の意圖が窺はれる。

おさん茂右衛門事件も、八百屋お七事件も、「五人女」の述作によつて、また新しいものとして世に迎へられたやうである。

「大きやうじおさん歌さいもん」の一節に、「すかたはくちて名はのこる、京でおさんとかうしよくの、五人女の一のふて、よのくちずさみひとむかし」と見え、「八百屋お七歌さいもん」の一節に、「五人女の三のふで、いろもかはりてゐどざくら」と見えてゐる。後の者はともあれ、歌さいもんのおさんは、「五人女」を云々しながら、傳へる事件は、西鶴のおさんと

歌·祭文「たるやおせん」

少なからぬ違ひがある。或はおさんの名は、も一度さえかへつたものゝ、語るところは依然として當時なほ事實として信じてゐたものであつたらうか。さうだとすれば、こゝにも西鶴の趣向が見られる筈である。

近松の「薩摩歌」「五十年忌歌念佛」及び「大經師昔暦」は、「五人女」の中の三篇と取材を同じうし、しかも、その影響を受くることが多い。たゞその中心點とこの中心點との間に大きい距離が存する。その距離に卽して、それ等の作は、しばしば二家の作風を比較決定する資料となつてゐる。

「五人女」は毎巻五段に分れてゐる。この五人の女を主題としてゐるものが、どれも五段に分れてゐることとは、五の事件の配列と共に注意される。配列とは何であるか。「春の海しづかに寶舟の浪枕」に罪を起して、寶の明神の出現などもあるおなつの事件をはじめに、久七と樽屋がいどみ合ひや、あらぬ嫌疑にかつとなつて身を誤るおせんの事件がこれにつゞき、夫の留守の間さびしさに堪へかねるいとしさから、圖太さにかはる女心を見せたおさんの事件、戀に心狂うて附火の罪を犯すお七の事件がこれにつゞき、若衆好きの女嫌ひの源五兵衛が、若衆姿に身をかへた女に征伏されるおまんの事件に結んでゐる順序である。この順序は、直に祝言、修羅、女、狂、鬼畜の征伏とも考へられる。すなはち能の五番立である。西鶴は畢竟女をシテとする五の能の心でこれを書いたのでなかつたか。いな、能の番組を小說にうつしたのでなかつたか。もしさうだとすると、毎巻が五段に分れてゐるのも、序、破一段、破二段、破三段、急と名づける能の五段の組織と考へられる。少くともおまんの物語を「一角仙人」と合せ考へ、おなつの物語を「高砂」と合せ考へたならば、その間の消息を明になし得ることであらう。尤も、この事は舞臺の演出と照合すべく、單なる謠曲の文との照合だけでは、未だ足らぬものがあらう。

「好色五人女」巻一初頁

好色一代女

大本、六巻六冊。巻一、二十四丁、巻二、二十丁、巻三、巻四、十九丁、巻五、十六丁、巻六、二十丁。本文の行數十二行、句點はすべて。・を混用してゐる。柱は「好色一代女」とあり。さし繪は吉田半兵衛、貞享三年の刊行。巻六の末尾に「貞享三年林鐘中浣日大坂眞齋橋筋呉服町角　岡田三郎右衞門版」とあり。「繪入好色一代女」の題簽の外に、色紙型外題の貼られた本がある、現存のものには完備したのが少い。おそらく初版特製本であらう。文辭また喜ぶべきものがある。本集收載するところの「一代女」には、各葉を寫眞で示しておいたが、細書のこととて、讀み易からぬものがある。今、便宜のために、活字に移す。

巻一

姿のかくれ里にたつね入
世ニ有程の女物語　きけば聞程
都は櫻咲ひかし山の事
何國にも女は
あれどこんなものは
千人の中にも
ないといふは捨金貳百兩
島原見た目に
外の紅葉も月も地女も

巻二

梅いき大神のつくり花
此句ひきかすに一代驚
目のあき所がないが
鹿も鳴はおもしろし
床のにしきも木もふるし
大黒殿のたはらは
戀のかくし所此寺には
ゐびすの鯛も有
女の筆のはたらくは
かへす／＼いたづらと
おもひとり

巻三

近年に振袖のこしもと
おかぬは
りんきのやむにはあらず
勝手づく
形はともあれ
物越ひとつでもつた女房
小哥聞て後
只はいなせじ菅笠姿
ひとつは又髪かたち也
よく結なれて此奉公人

卷四

同じ女にうまれながら
人のたはふれ聞耳立るも
よしなき世や
絲による戀衣ぬい女も
自慢の袖口
明暮むねのもゆるは
ふじといへる茶の間
こぎりの
中通の女半季に
六十日のかねの別れ

卷五

うちもらされの大臣
わるいはしりながら
折ふしは八坂へ
あがり湯もぬるひ女
かゝるは迷惑なれど
あかかゝすせなかに
腹を耕て
丸つくしの扇
大かたにせをつかます女
仕切あつて
出舟までのなさけな

卷六

よべ是はや來て
かへる姿やもめんきる物
又藤の時分にお出
とまらんせ〳〵
是木枕も二つか有が
夜ふけて
付添の君かねまき
むかしにかへる驚く人に
よしなき長ばなし

「好色一代女」にしるされてゐるのは、女性一代の好色生活である。作者は、それをある一人の女の懺悔として扱つてゐる。女は年老いて尼となる、若い男どもにみづからの身の上を物語る。すなはち假名草子以來行はれてゐる比丘尼の懺悔物語の形式を藉りてゐる。

「一代女」はいふまでもなく「一代男」に對をなしてゐる。扱ひの態度手法からいへば同じであるが、扱はれる事に、男性女性のちがひがあるだけに、結果に於ける二者の開きはかなりに大きくなつてゐる。世之介をして諸國を旅行させるやうなことはこれには期待されない。この女の舞臺は殆ど京、大坂、江戸に限られてゐる。それ等を繋ぐ途上のものは、一事例の外すべて棄却されてゐる。堺、古市、桑名の地名も見えてはゐるが、ほんの觸れたといふにとゞまる、さら狹く限定せらるるだけに、女性の好色生活の特相は細かく扱は

れる。八人藝、國主の妾、太夫、天神、十五、寺小姓、大黒、女祐筆、町人腰元、呉服所腰元、表使、歌比丘尼、髪上、嫁入かひ添女、お物師、茶間女、中居、茶屋者、通女、傳受女、町女房、蓮葉、居物、暗者、旅籠女、針賣、遣手、惣嫁これである。

これ等の順序は高きより低きに下る。女の閲歴の墮落である。その墮落の悔恨がつひに尼とならせる、發端の老尼がその人であつた。「一代男」の行方と全く反對であつて、しかも「二代男」の結着と相似て、また相異なるものがある。作者の意向の推移として注意すべきであらう。しかし、たゞちに作者が反省的態度をとるやうに變つたといふのは當らない。

女の生活の遞下から諦悟までの趣向は、比丘物比丘尼物に、しばしば見うけられる死屍變相に據るやうである。尤も、西鶴はそれ等の原據とされてゐる「九相詩」をも念頭においたやうである。事は容易に書中の文辭によつても考へられる。例の戯れである。この戯れは發端の底に「遊仙窟」を潜ませることに於いて、更に甚しきを加へてゐる。

さういふ輪廓構成の戯れとともに、その中に女性の身分に伴ふ好色生活の種々相を盡し、またそれ等の相に階級を附ける趣向とを合せて、しかも、貞享の代の背景環境の前に、「女」を描き出して深刻に徹した作者の手腕は驚くべきである。この書には、序跋もなければ作者名もない、しかし、誰一人疑ふ者のないほどに西鶴らしさを見せてゐる。

道に入とすゝめ修行よおもひ出。かなしく念仏三昧
に明暮妻戸とざし。稀なる人遠ざかれしく。
酒は気を乱すの本なり。ちうづう死せざる人ハ兎角
猶浮世のよしなや。しく／＼懺悔に身の曇
晴て。心の月清く春の夜の慰者。我は一代女
なれば。何か隠して益なしと。胸の蓮華ひら
けてしぼむまでの身の事。たとへ流を立たれ
ばとて心は濁りぬべきや

貞享三丙寅歳
林鐘中浣日
大坂真齋橋筋呉服町角
書林　罡田三郎右衛門版

「好色一代女」巻六終頁

本朝二十不孝

大本、五卷五冊。卷一、二十丁、卷二、十九丁、卷三、十六丁、卷四、十八丁、卷五、十七丁。本文の行數十一行。句點は ○ と ● とを混用してゐる。柱の文字は「二十不孝」さし繪は吉田半兵衞。

貞享三年の刊行、卷尾に「貞享三曆丙寅霜月吉辰　江戸青物町　萬屋清兵衞　大坂吳服町八丁目　岡田三郎右衞門　同平野町三丁目　千種五兵衞板」とある。序文には、「貞享三稔孟陬日」と見えてゐる。

序文には「鶴永」「松壽」の二印を附してゐる。刻文ともに西鶴の別號である。目錄に、畫の意匠を加へてゐる、けだし、作者の創案であらう。

この書、後年改題して「新因果物語」といふがあるときくが、管見未だ及ばず。また自分がこれまで從來見るところの數本皆題簽を缺くがために、しかといひかねるが、或は「新因果物語」の別名をも附記したのがありはせぬかと思つてゐる。

「本朝二十不孝」の題號が、支那の二十四孝に據ることはいふまでもない。每卷四章、二十の不孝者の談を集めてゐる。これ亦諸國ばなしの形式をとる。京、大坂、江戸、各一話の外、山城、大和、攝津、和泉、紀伊、近江、伊勢、駿河、相模、下野、松前、加賀、越前、安藝、土佐、讃岐、筑前、肥前各一話である。

序文の一節にいふ、

生としいける輩孝なる道をしらすんは天の咎を遁るべからす其例は諸國見聞するに不孝の輩眼前に其罪

を顯はす是を枠にちりはめ孝をすゝむる一助ならんかし

勸懲の意を寓するに似てゐる。しかし、必ずしもさうでない。作者の感興は、むしろ不孝者の行爲に存するやうである。といつて、不孝不德を禮讃するのでない。その罪を叙し來り叙し去つて淡々たるものがある。また二十四孝を翻して二十不孝と題することに、別に世の道德を揶揄の念もない。しかし、とにかくに序文に於いて標榜した勸懲の態度は、その一端にせよ、書中に示す必要があつたらう。すなはち、その種のものを一部の首尾に配したことが注意せられる。卷一の「今の都も世は借物」と卷五の「古き都を立出て雨」がそれである。前者は遊蕩の資に窮するあまり、父を毒害しようとした不孝者が、却つてその毒のために命を失ふ因果應報談であり、後者は鄕里を追はれた不孝者が、やゝ心を改めて江戸で稼いでゐる時、貧しき家の孝行者に感動して、助力を吝まなかつたために、意外の好運に惠まれるめでたばなしである。他の十八話の中にも、これに類したものはある、けれどそれほどの色調

「大倭二十四孝」表紙

はつひに見られない。意識的配列であることが考へられる。首尾の二話は、また京と江戸とに於いて、地理的對照をなしてゐることも注意せられる。

二十四孝の漢土は我に傳へられて年久しい、殊に江戸時代の初期には道徳教訓の書として、それをしるしたものが少くない。段々と改作の書もあつたが、彼の目をさながらに踏襲して、我國のことにしたものには、淺井了意の「大倭二十四孝」がある。同じくその名をそのまゝに承けながら、内容に於いて、努めて當世の相を描き、孝行に新解釋を加へようとしたものに、月尋堂の「時勢二十四孝」がある。一は西鶴の作に先ち、一は後れてゐる。ともに「二十不孝」の特相を觀るためには好箇の參考資料とならう。

「今様二十四孝」表紙

男色大鑑（なんしょくおほかゞみ）

大本、八卷八冊。卷一、二十七丁、卷二、三十一丁、卷三、二十四丁、卷四、二十三丁、卷五、二十五丁、卷六、二十二丁、卷七、二十七丁、卷八、二十四丁。

八卷を十冊に分つのもある。卷二の十五丁までを卷二とし、以下を卷二末とする。卷七の十二までを卷七とし、以下を卷七末としてゐる。

本文の行數十二行、句點、卷一、四、五、七は殆ど〻、卷二、三は•。混用、たゞし•が多い。柱の文字は「大」。

題簽は男色大鑑の上に「本朝若風俗」と冠らせてある。內題には「男色大鑑」の下に「本朝若風俗」としるしてゐる。後年改題して、「本朝若風俗」といふものがあるとのことである。

序文あり、「鶴永」「松壽」の二印を附してゐる。さし繪は吉田半兵衞とのことである。

貞享四年の刊行。序文には貞享四年龍集丁卯陬日とある。奥附に「貞享四丁卯年正月吉日　大坂伏見吳服町淀屋橋南　書林　深江屋太郎兵衞　京二條通　山崎屋市兵衞板行」とある。

一本の奥附、以上の版元の外に「江戶日本橋青物町萬屋清兵衞」を加刻してゐる。

また改題して「古今武士形氣」といふ異本があるといふ。大坂心齋橋南四丁目東側吉文字屋市兵衞　同安土町北へ入西側　同源十郎　江戶日本橋南三丁目西側　同治郎兵衞の合版、出版年月未詳のよし、未だ原本を見ることが出來ないから、何ともいひかねるが、おそらく、前半だけを仕立直したのでなからうか。さ

うだとすれば最もふさはしい題號である、多分、氣質物の流行を極めた享保前後の改題でないかと想像される。

男色を褒めたゝえ女色を貶み「日本紀」を引いて、男色の起原を天神三代に附會するのが、序文の大旨である。巻一の首章また和漢の故事を引いて、男女の優劣を論じ、結論として「たゞ遊興は男色ぞかし」といつてゐる。次章以下、男色道の人々の傳を立てる。その列傳體と、列傳體に入るの運び、いさゝか平安朝の歴史物語「大かゞみ」に通ずるものがある、「大鏡」の名のある所以であらう。當然「好色二代男」を本題とすべきものを「諸艶大鑑」といつたその大鑑と同じ意であらう。すなはち彼は名妓列傳であつた。

その頃男色の流行は甚しい。西鶴にこの書のあることは不思議でない。しかし自分の前著「一代男」をまで罵るのは何故であるか。彼にいふこと少き方面に力を籠めたためであらう。女色を貶するのは、男色を稱するための手段に過ぎなからう。共に一趣向としての言葉のやうにうけとられる。

「日本紀」の引用、和漢の先蹤を擧げるのも、男色のために氣を吐いて、女色を壓する趣向から出てゐよう。さらぬものを事々しくいふところに、飽くまで眞面目の態度をとるところから、滑稽を導き出さうとする眞面目と滑稽の交錯、そこからこの書が生れてゐる。男色に關して和漢の先蹤をいふものに、すでに「よだれかけ」がある。扱ひの相異がおのづから西鶴の作意を明にする。

武家の衆道事件に關する書、當時少くなかつたらう。たとへば未刊のものであるが、「男色大鑑」巻三「藥はきかぬ房枕」と關係深き「藻屑物語」の如きがある。たゞ廣く亘つて列傳の體をとつたのはなからう。

毎巻五章、全部四十章、巻一の首章を除いて、三十九章に現はれる人物によつて、おのづから二に分たれる。巻一から巻四までは、殆ど武士の事に係り、巻五から巻八までは歌舞伎子に關する、この分類また「大かゞみ」の體に觸れてのことであらう。

前四巻には、生來の女嫌ひ、または美妻に死別して衆道に入る者の記事などもあるが、多くは武士の衆道と義理との纏綿する事件が書かれてある。後の「武道傳來記」に編入すべき敵討物も少くない。もとより諸國の藩中の出來事として傳へられてゐる。

後四巻の歌舞伎子の傳は巻八が一章のうちに數人を列ねるの外、他の巻では、二異例を除いて、一章一人として傳を立てゝゐる。すなはち藤村初太夫、平井靜馬、玉川千之丞、玉村主膳、玉村吉彌、伊藤小太夫、小櫻千之助、瀧井山三郎、大吉彌、鈴木平八、吉田伊織、藤村半太夫、松嶋半彌、戶川早之丞、上村辰彌、嵐今京之助である。書かれたる事は、多く衆道の義理、尠ならぬ意氣を中心としてゐる。

この前後の部分を地理的に考へれば、前者に京、會津、鹿兒嶋、明石、郡山、仙臺、上野、和歌山などの藩中の事件であるが、最も多きは江戶の出來事である、すなはち江戶詰の諸藩士のこととして傳へられてゐる。後者は一人を除く外は、皆上方の歌舞伎子である。その一異例である玉村主膳の事件も、江戶を離れた河内の國高貴寺を背景としてゐる。また玉川吉彌には江戶の舞臺の事件をとつてゐるが、特に京の歌舞伎子なることを斷り、また京の出來事の延長として書いてゐる。未だ、かういふ地理的相異が何の意に出づるかを詳にしない。いさゝかの思ひ寄りは、「解說その二」にゆづる。

「大鑑」の命名に、後の自負はあつたらう。

懐硯（ふところすゞり）

大本、五巻五冊。巻一、二十三丁、巻二、二十丁、巻三、二十一丁、巻四、二十丁、巻五、十九丁。たゞし、各巻の丁附は、二丁目の次が必ず「三ノ四」となつて、直に「五」につゞいてゐる。本文の行數十二行。巻一、三、四、五は・。の混用、巻二は・のみを用ゐてゐる。柱には「宿」の文字がある。

貞享四年の刊行と思はれる。管見の及ぶところ、一全本と二缺本のみであるが、奥附がなく、從つて出版年月を確めることが出來ない。たゞ、序文に「貞享四年花見月初旬」とあるによつて、貞享四年刊行を推定するに過ぎない。

その奥附のないのは、五冊本がなほ缺本であるかとも疑はれるが、惣目錄の體裁から推し、また最終章の末尾を祝言めかす言葉で結ぶ西鶴著作の例から考へ、また更にこれを剽竊したる「一筆の初そめ」と合せ考へれば、やはり五冊を完本とすべきであらう。

底本また題簽を缺く。從つて「懐硯」以外、いかなる別名があつたかを詳にしない。柱の文字の「宿」は、いづれ、その別名に關するものであらう。しかも、總目次以外、毎巻に目錄なく、また本文のはじめに内題もない。序文には西鶴の名もなく、また印章もない。しかし、はやく西鶴の作と信ぜられ、また文辭から推して疑ふふしもないやうである。さし繪は吉田半兵衞とのことである。

「懐硯」は奇談怪談集である。例の諸國ばなしの形式である。江戸の二話、京の一話の外、山城、大和、攝

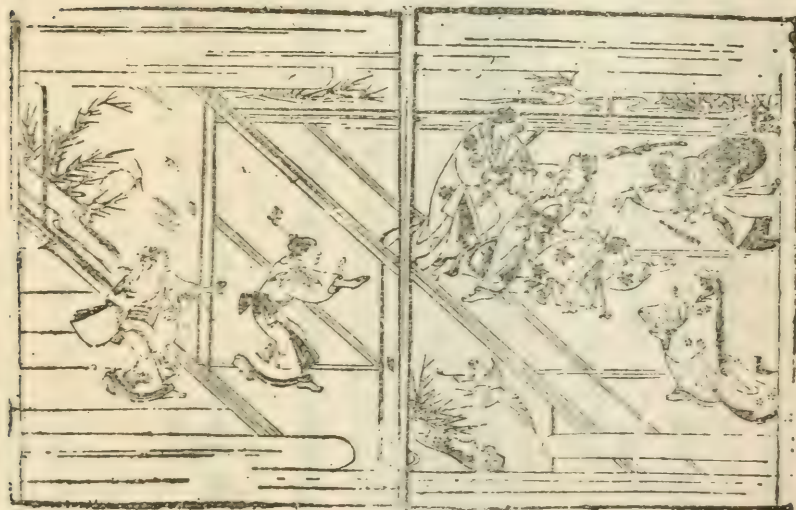
津、河内、伊勢、播磨、紀伊、近江、駿河、相模、下總、飛驒、越中、越後、出雲、筑前、筑後、日向、大隅、各一話及び讃岐二話である。毎卷五話、すべて二十五話である。配列は京にはじまつて、江戸にをはる、その間は飛び飛びで、地理上の聯絡はない、すべて、西鶴の全著作に見るが如くである。

朝良の晝におどろき我八つにさかりぬ、日暮て道をいそぎ何國を宿ときさだめがたきは身の果墓なやとおもひ籠しより修行に出給ひ、世の人こゝろ銘々木々の花の都にさへ人同じからす、まして遠國にはかはれる事ともありのまゝに、物がたりの種にもやと旅硯の海ひろく言葉の山たかく

と卷一のはじめにいつてゐる。序文にいふところと合はせて、「懷硯」の題意おのづから明である。書中の記事が、すべて旅行者われなる者の見聞であるとしてゐることが、體として前著「西鶴諸國ばなし」と趣を異にする。

この書に參照すべきものに、今西鶴の著「筆の初そめ」がある。寶永二年の刊行にかゝる。序あり、難波今西鶴と署し、また「松壽」の印章がある。その文によれば、今西鶴は西鶴の弟子であつた。彼は先師の著「一目玉鉾」を讀んでふと思ひ立つて諸國の旅に出で、歸り來つてこの五冊を著はすといふのである。しかし、その言は僞である。新に二章を書き加へた外は、「懷硯」舊版木の利用出來るだけを利用して、順序をかへつゝ、その十八章を拔きとつたものである。小見出しはすべて變へてある。たとへば、卷一の三「長持には時ならぬ太鼓　留守の娘利發を出す事」を變へて、「善惡ふたつの堺町　朽てくちぬは武士の心底　二度世に出しは娘の才覺」といふが如し。

「筆の初そめ」序　　　　同本文

「筆の初そめ」さしゑ

武道傳來記

大本、八卷八册、卷一、二十六丁、卷二、二十一丁、卷三、二十一丁、卷四、二十三丁、卷五、二十一丁、卷六、二十三丁、卷七、二十丁、卷八、二十一丁。本文の行數、十三行。句點は卷一、三、四、五、六、七は。・は混用、卷二、卷八は。である。柱に「武道」とあり。

貞享四年の刊行、奥附に「貞享四年夘初夏　江戸日本橋青物町　萬屋清兵衛　大坂呉服町眞齋橋筋角　岡田三郎右衛門」とある。

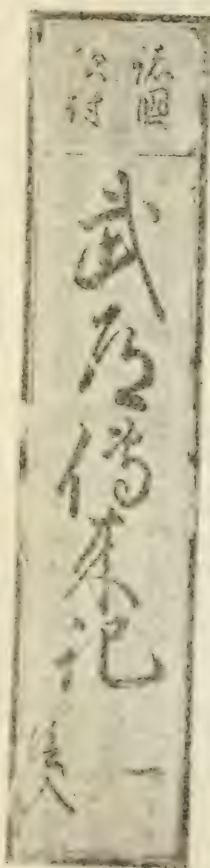
序文あり、「鶴永」「松壽」の印欵を附してゐる。また序文の結びの辭に「久かたの雲によろこびの舞鶴是を集ぬ」とあり、西鶴の名を暗示したのであらう。

題簽に「諸國敵討武道傳來記」とあり、内題また「武道傳來記」に傍書して、「諸國敵討」といふ。

序文に、爲朝、武藏坊、朝比奈の武勇は見ぬ世の事、こゝに中古武道の忠義諸國に高名の敵討そのはたらきを聞傳へて編述する旨をいつてゐるやうに、毎卷四話、すべて三十二の敵討談を集めてゐる。その中、年代を明記するものに、天正、大永がある。明記しないものも、中古といふ點から、大方その頃の事件をほのめかすのであらうが、風俗の叙述その他がずつと下れる年代を思はせるのも少くない。

いふところの諸國とは、近江、安土、奥州福島、同若松、同仙臺、播州姫路、同立野、安藝廣嶋、肥後の熊本、阿波徳嶋、松前、出羽庄内、豊後の府内、伊豫宇和島、美作津山、駿河府中、肥前島原、伊勢の大橋、

大和奈良、その他、能登、佐渡、壹岐、京、但馬、飛騨、越、日向、薩摩、參河、出羽、相模、下野などである。尤も、これ等は事件發生の地で、必ずしも敵討の地を意味しない。

序文には、諸國に高名の敵討、其はたらき聞傳へ云々とあるも、作者の筆は、其後の敵討物に必ず伴ふやうな武勇談に專らでない。たまたまその種のものがないのではない。勿論あることはあるが數としてはほんの僅である。中に幾人をも返討にするものがある。辭としては頻りにその武勇を稱へてゐながら、心はその人の運命を奇なりと見て喜んでゐるやうである。或は敵を討つべく努めてゐるうちに、つひに討たずして止むものがある、これに至つては特に作者の興を惹いたやうである。すなはち作者の筆は、敵討そのものよりも、むしろ敵討前後の事情に委曲を盡すものである。敵を討つ、討たれるといふよりは、敵といふものが出現する經緯の方が主題である。敵討を續る雰圍氣の描寫である。

故に、これ等の敵討を世によくある形式をとつて年表風のものを作らうとすれば、どうしても纏りかねる。討つ者と討たれるものゝ關係が極めて複雜であるためである。討つたものを、また討つといふ二重敵討、三重敵討さへ見られるからである。

作者は後の敵討物のやうに敵なるものに對して、憎惡の情を寄せない、また讀者をして必ずしも敵討の成功を熱望することを懷かしめやうとはしない。筆は淡く輕くのみ動いてゐる。背中敵を打ちおほせて後、出

「武道傳來記」題簽

家する事件が少なからず傳へられてゐる。好んでかゝる物語を選擇した作者の懐抱するところが何であるか、ほゞ考へられなくはない。

作者は、また衆道關係に就いて叙することが多い。敵討事件の發生原因として、また助太刀として或は敵討後の武勇禮讃の結果、男性間の戀となるものとして、或は敵同志の不思議な因果として、最も精しく、最も細かき筆のあとが讀まれる「傳來記」一部から、これ等を除いたならば、量に於いて質に於いて、いかに寂寞たるものがあらう。作者が何故にこの事に努めたか、これは深く考へるまでもない。また、その事は「男色大鑑」の前半と極めて緊密な關係を有してゐる。

この年「諸國敵討」といふ書が出版された。別名を「武道一覽」といふ。神保氏入道の筆に係る。時の好みが考へられる。西鶴の作もまたその時好に乘じたものがあつたらう。尤も、「武道傳來記」とその「諸國敵討」とは、作の上には別に交渉がないと思はれる。しかし、相互の書名の間には關係が考へられなくもない。勿論、賣物としての條件である。すなはち書肆が中に介在して、二者殆ど暗合せるやうな題號を附けさせたのであらう、當時の出版界にその例が少くない。

第二　毒薬は箱入の命

「武道傳來記」卷一第八丁

「武道傳來記」巻八終頁

武家義理物語

大本、六巻六冊。巻一、二十一丁、巻二、三、十八丁、巻四、十九丁、巻五、十七丁、巻六、二十丁。本文の行數、十一行。句點は。を用ゐる。柱に「武家義理物語」とあり。

貞享五年(改元元祿元年)の刊行。初版の奥附に「貞享五戊辰歳二月吉祥日　大坂心斎橋筋淡路町南江入丁　安井加兵衛梓京寺町通五條上ル丁　山岡市兵衛　江戸日本橋万町角　萬屋清兵衛」とある。序文にも「貞享五戊辰年秋月吉祥日」とある。

後摺のものは、奥附の「貞享五戊辰歳」を削り、「二「」吉祥日」のみを殘し、また序文の年號を削つてゐる。

序文には、「鶴永」「松壽」の印欵がある。

巻一、三、五は各五章、巻二、四、六は各四章、隔巻に五四と交錯してゐる。通じて二十七章、二章に亘る一話があるゆゑに、すべて二十六話を収載してゐる。序の一節にいふ。

　弓馬は侍の役目たり、自然のために、知行をあたへ置れし主命を忘れ時の喧嘩口論自分の事に一命を捨るは、まことある武の道にはあらず義理に身を果せるは、至極の所古今その物かたりを聞つたへて、其類を是に集る物ならし

進行の意ほど推せられる。資料として見れば、「武道傳來記」「男色大鑑」と質を同じうするものが多いが、

義理を高調する扱ひに於いて、多少の相異が認められる。またいふまでもなく、事を武家階級に限つてゐる。

序に、古今に亘り、義理によつて部を立てるといつてゐるやうに、義理の談でありさへすれば、必ずしも時と所とに拘はらない。この點は「武道傳來記」などの國どころを重んずるものと、體裁上おのづから相異がある。

京、鎌倉、江戸、大坂の外、近江、丹波、丹後、攝津、大和、山城、駿河、加賀、石見、讃岐、長門などが數へられるが、國のさだかならぬも少くない。或は西國、上方などと漠然と示すものもある。

序にいふ「古今その物かたり」といふ古今の最も古きものは鎌倉時代、最も新しいものは、この書刊行の八ケ月前の出來事である。大體に於いて、織豊時代、江戸時代初期、やゝ下れるものゝ數は殆ど對等になつてゐる。その他、時代をしかと斷らぬものもある。

時と所との空漠なるものゝ存在が累をなして、その時、その所を明に示してゐるものをさへ、さながらに信ぜさせない場合もある。たとへば巻一の第一話の如き、それである。青砥藤綱が滑川に錢を拾はせた話は古くから世に傳へられてゐる。しばらくその傳へのまゝに信ずるとする。しかし、その夜の人夫の中に、西鶴が傳へるやうな正道の士、千馬孫九郎がゐたといふことも直に信ずべきであらうか。西鶴にその人を何の書によつて知り得たのであらうか。その書果して存してゐるのであらうか。疑ひはその書なく、その人なく、たゞ西鶴の肚裏のものなることを思はせる。更にまたこの種の人物、事蹟は索めるに從つて、書中なほ少なからず指摘される。

巻一の第二話「瘊子はむかしの面影」に於ける明智日向守はもとり實在の人である、しかし、疱瘡のあと醜き女を妻としてゐたことは果して事實であらうか。世にその傳へあり、その事を載せた書あらう。なほ鄭重にそれ等を探索すべきであるが、ともすると、聯想はまづ劉延式とその妻の奇蹟に及びがちである。劉延式の婚約の女は盲目となつた。結婚の日迫るに及んで女の親は堅く辭退する。延式は聽かない。親は義を重んじて、なほわが家より娶るとならば、盲目の姉に代へて妹をまゐらせうといふ。延式はなほ承服しない。彼はいふ、盲目の女、我に歸かずは、いづくに歸かれうぞ。一生をやもめぐらしにさせるに忍びないとつひに迎へて妻とした。やがて二子を儲けた。二子共に聰明、官途榮達を得たとのことである。

しばらく、明智日向の事蹟を、これの翻案なりと考へてみる。さうすると、その程度の翻案三四ならず、數多く見出される。

以上の考へ方にして大過なしとするならば、一方に支那の故事を巧みに移し出すことに努めたわけである、また、それとともに、事實の眞を精細に傳へようとする努力も、書中に認められる。巻二の「御堂の太鼓うつたり敲」は、貞享四年六月三日の出來事、大坂御堂前の敵討として後々まで喧傳された事件である。作者が特に二章に亘つて詳密な記事をなしてゐることも注意すべきであらう。なほ讀者周知の事實を誤りなく傳ふることに於いて、翻案の筆をも、その時、その所に、その人あり、その事あることを信ぜさせるに足りる。作者に果してさう考へがなかつたとはいはれない。よしまた、たまたま彼の事件に筆を精しくしたにせよ、一度立てた一章一話の格を破るほど、精しく書いたことが自然にさうなつたにせよ、讀者にはなほ如上の信を起させたのであらう。

一　我物ゆへに裸川

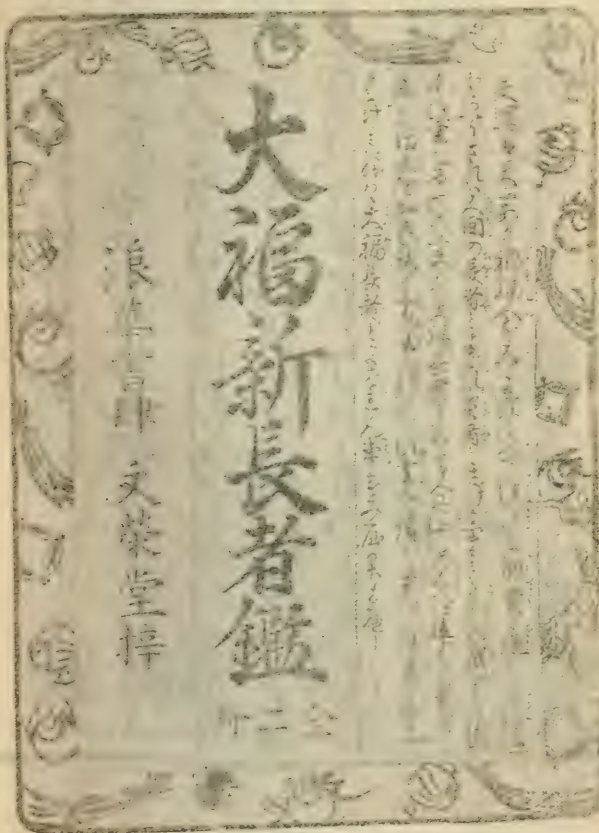
「家武義理物語」巻一初頁

「武家義理物語」巻六総頁

日本永代藏（にっぽんえいたいくら）

大本、六卷六册。卷一、十九丁、卷二、二十丁、卷三、十九丁、卷四、五、二十丁、卷六、十八丁。本文の行數、十三行、句點は卷一は。●混用、卷二は章によつて○また。、卷三は●、卷四、五、混用、卷六は●、柱の文字「大福新長者敎」、序跋なく、また作者の署名印章なし、さし繪は吉田半兵衞とのことである。

貞享五年改元元祿元年の刊行。一本の奥附に「貞享五戊辰年正月吉日　京江戸書林　二條通䊵屋町西村梅風軒　大坂書肆　北御堂前森田庄太郎刊板」とあり。奥附に附記あり「此ヨリ人は一代名は末代甚忍記　全部八册　仁之部義

「永代藏」改題本扉

之部譴之部信之部板行仕候」

一本の奥附、前本奥附のうち「江戸神田新革屋町西村梅風軒」なし。

一本の奥附、「貞享五戊辰年正月吉日」の外「大坂書肆　北御堂前森田庄太郎刊板」

文政中、改題して、「大福新長者鑑」といふがあり、大坂文栄堂の出版である。奥附は舊板三都本をそのまゝに残す、上下二卷に合綴してゐる。山本借署名の序を附す。

此書何人の作を知らす文體古雅にして質素を崇とみ驕奢を抑へ貯財富家を教ゆ抑顔回が夭盗跖か奇天の命はしるべからずといへと陶朱猗頓の富亦自勤むるにあり孔子も富て求むべくは執鞭の士といへども我またこれをせんと宣へり左あれど道理に違ひし富は浮雲の

上方版表紙

譬あり此書の主意を自得せは財の山を積とも悖而出る患ひなく子孫長く繁榮すべし則ち大福新長者鑑にあらはす年文政甲申初秋書於文榮書堂　山本偕

これ等數版の外に異本がある、奥附を缺いてゐるので、出版年月發行書肆を詳にしない。しかし、江戸版と稱せられてゐる。如上の上方版と全く版式を異にしてゐる行數を十五行に增してゐる舊版の漢字を假名にあらためたもの尤多い、さし繪の大體は舊版の構圖に據りながら多少の相異がある、なほ上方版の「一代男」を書き直した江戸版に於けるが如し。

この版に於いて、注意すべきは、舊版の各卷各章の順序が全く改められてゐることである。すなはち地理的統一の下に成されたことが認められる。今參考のために、その目次を擧げる。

江戸版「永代藏」表紙

「日本永代藏」の題簽には、本題の下に、「大福新長者教」と小書してある。また卷一では、本文のはじめに、「本朝永代藏」といふ內題がある。たゞし、目錄の前には、他の卷同樣に「日本永代藏」とある。卷一以外では、本文のはじめの內題を缺いてゐる。

目錄には、家名を示した暖簾の圖の意匠がある。「二十不孝」の目錄と共に、注意すべきである。けだし、西鶴その人の工夫に出づるものであらう。

「日本永代藏」は每卷五章、通じて三十章、みな町人階級の生活に取材してゐる。專ら貧富の二途に就いていつてゐる。町人物の初作である。

江戶の富豪の話にはじまつて、京の富豪の話にをはる。その他すべて諸國ばなしの形式をとること、西鶴著作の通例の如くである。京四、江戶六、大坂二、堺二、長崎一の外、山城三、大和二、和泉一、越前二、紀伊一、近江一、美作一、常陸一、駿河一、豐後一、羽後一に分れてゐる。順序に地理的聯絡のないこと、また例の如し。

富貧の大體別からいへば、富十七、貧十一、その區別なきもの二を數へる。もと富める者の貧しくなつたもの、貧しき者の運命いかにともし難くして、終生貧しきに蠢くもの、貧しきが富んでまた貧しきにかへるもの、各その別はあるものゝ、要するに貧窮者の事蹟もかなりに多い。しかもなほ「日本永代藏」といふのは、首尾に京江戶の富豪のめでたばなしを配してゐるやうに、町人生活の光明の一面に卽していふのである。卷六、大尾の一句にいふ、永代藏にをさまる時津御國靜かなりと。題號の意義おのづから明である。もし、

内容から見れば、「町人盛衰記」などとよぶべきであらうか。

題簽にも、また柱にも見えてゐるやうに、この書の別名は、「大福新長者教」である。「新長者教」の名は、當然舊長者教に對する答である。世にその名に呼ぶ書がある。寛永の刊本である。かまだや、なはや、いづみやといふ長者があつたが、ある時、かまだや長者が童の問ひに答へて長者になる方法を口授する教訓の書である。「永代蔵」巻五「三匁五分曙のかね」の中に、「播州の網干に鎌有りしが、この許に遣はし置き、那波屋殿といふ分限を見ならへ」とある那波屋はこのなばやのことであらう。西鶴はその書に擬して、いさゝか教訓の意を寓しようとしたのである。

書中、西鶴が寄與する教訓の辭は隨所に散見する。富をいふのは富に導くための積極的教訓、貧をいふのは貧を避けよとの消極的教訓を期したものと解せられる。しかし、彼の話し上手は、その教訓の本意を忘れて、事例の面白きにのみ興を催させる。或は西鶴の心も彼にあらずして、かへつて此にあつたのであらうか。いな、貧に苦しむのも、富に奢るのも、町人の榮えるのも、衰へるのも、たゞ眼前の浮雲と觀ずる靜けさが胸字に存してゐたためであらう。

彼は、しばしば町人が常道に立つて富を致し、富を守るべきことをいふ、しかも筆はまた權道の才覺機智を喜んでゐるやうである。また彼は經濟眼を以て各地方色を見る。かつて、彼は好色眼を以て、京、江戸、大坂、長崎の地方色の別を視たことであるが、同じ地方が經濟眼ではどう見られたか、町人物と好色本とを對讀する者にとつて少なからぬ興趣があらう。更に町人の盛衰の叙述の底に流れる彼の經濟思想は、さきに好色本の遊廓生活の描寫を通じてなせる文明批評と共に、深く考ふべき多くのものを藏してゐる。

本朝永代藏巻之一

初午ハ乗てくる仕合

天道言すして國土に恵みを施し人ハ実あつて偽りおほし其心ハ本虚にして物に應して跡なし是善悪の中に立てすぐなる今の御代をゆたかにわたるは人の人たるが故に常の人にハあらず一生一大事身を過るの業士農工商の外出家神職にかぎらず始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜へし是二親の外に命の親なり人間長くみれハ朝をしらず短くおもへハ夕におどろくされハ天地ハ萬物の逆旅光陰ハ百代の過客浮世ハ夢幻といふ時の間の煙死すれハ何ぞ金銀瓦石にハおとれり黄泉の用にハ立がたし然りといへども残して子孫のためとはなりぬひそかにおもふに世にある

上方版「永代藏」卷一初頁

上方版「永代藏」卷六終頁

初午は乗てくる仕合

天道ものいはずして国土に恵みふかし。人は実あつて偽りおほし。其心は本虚にして物に応じて跡なし。是善悪の中に立て、すぐなる今の御代をゆたかにわたるは、人の人たるがゆへに常の人にはあらず。一生一大事身を過るの業、士農工商の外、出家・神職にかぎらず、始末大明神の御託宣にまかせ、金銀を溜べし。是、二親の外に命の親なり。人間長くみれば朝をしらず、短くおもへば夕におどろく。されば天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢幻といふ。時の間の煙、死すれば何ぞ金銀瓦石には劣れり。黄泉の用には立がたし。然りといへども、残して子孫のためとはなりぬ。ひそかに思ふに、世に有程の願ひ、何によらず銀徳にて叶はざる事、天が下に五つあり。それより外はなかりき。是にましたる宝船のあるべきや。見ぬ島の鬼の持し隠れ笠・かくれ蓑も、暴雨の役に立ねば、手遠きねがひを捨て、近道にそれぞれの家業をはげむべし。

江戸版「永代藏」巻一初頁

新可笑記

大本、五巻五冊。巻一、二、各二十九丁、巻三、二十一丁、巻四、二十五、巻五、二十三丁である。本文の行數、十一行。句點、巻一、三は・に少しく。を混へ、巻二は。、巻四、五は・を用ゐる。柱の文字は「新笑」とあり。

序文に、難波俳林西鶴の署名及び「松壽」の印あり。さし繪の筆者は不明。

元祿元年の刊行。奥附に「元祿元戊辰稔　十一月吉日　江戸日本橋青物町　萬屋清兵衛　大坂眞齋橋筋呉服町角　岡田三郎右衛門板行」とある。

序文の一節にいふ、

明暮世間の慰み草を集めて詠めし中に昔淀の川水を硯に移して人の見るために道理を書

「可笑記」本文

つゝけ是を可笑記として殘されし誰かわらふへき物にはあらす此題號をかりて新たに笑わるゝ合點

すなはち題號の基づくところは「可笑記」にある。「可笑記」は如儡子の作、寛永十九年の刊。儒教の見解を以て世を諷諭せんとする教訓の書である。書中往々自己の用ゐられない憤懣の情を寄せてゐる。可笑を以て題するは妄言徒に讀者の笑を招かんとの意である。その序の結びにいふ、

まことに傍觀の莞爾掌をあはせん事必せり、かるかゆへに此草案を名づけて、可笑記としかいふ

西鶴が「新可笑記」の序に於いて、「可笑記」の可笑を否定したのは、その書が笑はれるどころか、餘りに眞面目過ぎ、餘りに教訓過ぎると見てのことらしい。新に、笑はれるつもりで、「新可笑記」を書いたといふのは「可笑記」ほど眞面目でなく、教訓もほどほどに心がけてのことであらう。「新可笑記」はその意圖によつて、いろいろの種類の、しかも面白い筋の話を、教訓を標準にして、集めなしたものである。五卷二十六章を、もし別の標準で分類しなほしたならば、「義理物語」「傳來記」「櫻陰比事」「艶隱者」「二十不孝」中に組み込まるべきものが多い。殊に「義理物語」に屬するものが多いのは、教訓の性質上當然である。

毎章は必ず古代といふ語で筆を起してゐる。「可笑記」各章の起筆「むかし」に倣ふためである。古代が意味する時代の中には、遠く武烈天皇御宇をさすものもあるが、大方はさまで古くなく、中には最近の事件もあるやうである。年號を明に斷るもの一ところ、後奈良院大永二年の春といふがあり、たゞし書かれたる材料の時代はそれより少しく後の事になつてゐる。

これを土地の上からいへば、都一、播磨三、近江二、陸奥二の外、大和、河內、攝津、伊勢、駿河、下野出羽、加賀、越後、信濃、出雲、石見各一、その他、所をしかといはぬもの、漠然と關東、九州とのみいふ

もの各一である。江戸はつひに見るところがない。しかも、他の諸國ばなし式の作の多くが、京坂またはその近みと江戸とによつて首尾をなすのと違つて、これは九州にはじまつて加賀にをはる。この遠隔の地の選擇は、漠然たる時の觀念を有つ「古代」の語の使用と或る意味の聯絡を保つてゐるやうである。

この書の目錄は、たとへば巻一の第一話が「理非の命勝負武士は人を助くる一言の事」に於けるやうに、どの題目も、必ず「武士は」となつてゐる。話の筋はみな武士生活に聯關してゐる。その意味に於いて、この書はいはゆる武士物の分類に屬すべきである。しかし、話の重心は必ずしも武士生活、武士精神にない。わづかにそれ等の一端に觸れてのみをはるのが少くない。巻一の「先例の命乞　武士は內證をみせざる事」の話の中心は大工の淺智惠になる。敎訓としては、その無用の分別心を控へよといふ點にある。しかも、たゞ話の背景に武士邸があるがために、强ひて、武士に對する敎訓談となし、無理からに、この題目を附して、「武士は」の統一を保たせたのである。

さういふ例からいへば、巻二の「官女に人のしらぬ灸所　武士とは各別長袖の事」には、なほ一段の注意を要するものがある。

武烈王が最愛の妃に死別れたかなしさから、木隈こじといふ佛師に命じて、その像を刻ませる。像は正のものさながらに出來た。叡感淺からず、大に褒めたゝへられる。しかし、佛師偶然の落筆のあとを、灸所を示すものと見られ、あのあとは我と妃のみが知つてゐて、他には知るもののない筈なのをと、疑ひをかけられて、急に佛師を憎みなされる。その寃をいとほしむ妃の妹が、神に祈禱して君に申し上げる機を待つ、不思議の出來事あつて、妃は君に召される。佛師は漸く罪を赦される。

この一章には、帝と繪師と官女とのみがあつて、武士は與かるところがなし。なほも題目の統一は、「武士とは」を要求する。從つて、「武士とは各別長袖の事」とやゝ窮したものを附したのである。

更にまた、この一條の話には、あまりなる時代錯誤がある、なほまた翻案臭の甚しきものが見える。もとより西鶴はその難のあるべきことを豫想してゐる。すなはち附言していふ、「かゝるためしは唐土にも呉道子といへる畫師が官女のうつし繪に、こぼれ墨其まゝに蠅子とうたがはれしも佛師木眼の身のうへにおなじ」恐らくはこれがこの話の原據であつたらう、原據をそれとなく示したものであらう。かういふ扱ひが他にもある。それとなく翻案を試みてゐるものは、その數決して少なくないやうである。それとも暗合かといへば、暗合の數のあまりに多いことに驚かされる。もし、翻案と見てゆけば、原據はさまで珍しいものでないらしい。その頃に相當に知られてゐる話からとつたものであらう。從つて、彼此相對して、西鶴の移植の手腕の鮮さが今更に感ぜられる。たゞ佛師木眼の一條の如きは、たまたま拙劣な例を見せたのであらう。

少し翻案に就いていひ過ぎるやうであるが、西鶴は決して翻案のみで滿足するものでない。よし、ある話を翻案したにせよ、必ず前後に何ものかを配して全然新しいことにしてしまふ。たとへば、卷二の「中にぶらりと假年寄」の場合の如き、高砂の左官が高きに上つて假年寄になるといふのは、誰も知る韋誕が高閣の扁額を書いて白髮になる話に據つたらう。作者また「是れぞ唐土の何の額を打ちたるに相同じ」といふ。しかも、假年寄の左官を中心とする裁判物になると、韋誕の故事に關はらぬものである。西鶴の翻案の態度が、その頃に多い奇談物作者の態度と異なることを認むべきであらう。

一 理非の命勝負

「新可笑記」巻一初頁

「新可笑記」巻五初頁

本朝櫻陰比事

大本。五卷五册。卷一、二、四各二十四丁、卷三、二十一丁、卷五、二十丁。本文の行數十二行。句點、卷一、二は。・混用、卷三、四、五は殆ど・を用ゐてゐる。柱には「櫻陰」とあり。

目錄以下本文まですべて西鶴の筆であるとのことである。

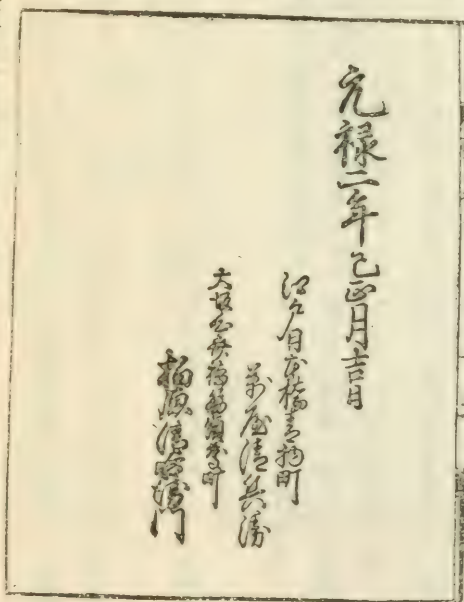
さし繪また吉田半兵衞とのことあるある。

序文なく、西鶴署名なく、印章なし。文辭やゝ常と異なるものがあるために、或は擬作かと疑はれたこともあるがやはり西鶴の作と見られる。前後の西鶴作と銘うたれたものとの關係からさう考へられる。

元祿二年の刊。奥附に、「元祿二年巳正月吉日　江戶日本橋靑物町　萬屋淸兵衞　大坂高麗橋貝齋橋筋南入雁金屋庄左衞門板行」

一本、前版の奥附のうち、雁金屋署名を削り、新に「大坂心齋橋順慶町　柏原淸右衞門」を加へたと見られるのがある。再版であらう。

再版「櫻陰比事」奥附

萬屋、雁金屋版本の題簽の中には、單なる一、二でなしに、卷數に趣向を凝したものを見る。卷二に「ふ

とある。まだ卷一の分を寓目する機を得ない。

んべつ　小判貳兩」卷三に「しあん　小判三兩」卷四に「じひ　小判四兩」卷五に「かんにん　小判五兩」

題號の「本朝」はいふまでもなく漢土のものに對するためである、すなはち「櫻陰比事」の名は「棠陰比事」である。原本の棠陰といふのは召伯の故事による訴訟の義である。その棠を櫻にかへたのは、漢を和に移すの謂である。事は「櫻陰比事」のはじめの言葉によつて知られる。

夫大唐の花は甘棠の陰に召伯遊んで詩をうたへり、和朝の花は櫻の木かけゆたかに歌を吟じ、此時なるかな御代の山も動ず

「棠陰比事」は、宋の四明桂の選にかゝる。序によれば、四明桂は法官であつた。常に法を行うて、罪なきを罰せざるかを憂へた。すなはち暇ある毎に、和魯公父子の疑獄集を取り、參るに開封の鄭公が折獄龜鑑を以てし、事を比し、辭を屬し、聯て七十二韻を成して、この書を編したとのことである。疑獄の斷は話として面白く、また明教の理を托するに便がある。從つて、いろいろの意味から讀まれたのであらう。我國でも意外にはやく、朝鮮版本が渡來して行はれたやうである。慶長には、すでに翻刻され、後、假名交りに書き直されて出版した。數版がある。

「棠陰比事」の比事とは、たとへば、向相訪賊と錢推求奴の如く、二事實を對比することである。假名交り文の版は依然として、その形を保存してゐる。しかし、「櫻陰比事」の比事は、たゞ名をのみ傳へて、その實がない。要するに、疑獄の談を系統なく集めなしたのである。

棠陰比事物語巻第一

慶安版「棠陰比事物語」

五巻を通じて四十四章、毎章必ず「むかし都の町に」を起筆とする。たゞし巻一の第一章だけは、序言めくものではじめてゐるために、その詞はあとの方に見えてゐる。

書かれたる事實は必ずしもむかしでない、むしろその頃の世相を語るものである。また必ず都に限られたものでもない。しかも、特に都をいふは、法官を所司代に歸するためである。所司代に歸するのは、板倉勝重父子に附會するためである。勝重父子の判決例に「板倉政要」がある。西鶴はそれ等から資料を得、また「棠陰比事」の事件を參照し、更に自家の見聞を合はせて、この事を成したのである。もし、その據るところをとつて西鶴の筆のあとを見れば、いかに巧みに、當代化し、また都の事件めかしたかゞ認められる。

「櫻陰比事」の四十四の斷獄は種々の目によつて分類される。分類はいかやうにもせよ、貫くところは機智の働き、心理徴候の穿ちにある。少くとも、その點に於いては、西鶴の他の作と共通のものが少くない。

この書行はれて以來、直接に間接にその影響を受けた書が幾つかある。中にも「本朝藤陰比事」はその題名までも交渉があることを明にしてゐる。それのみか、その書のはじめにも、

國ゆたかに民安らかなる春をむかへ、蔽芾たる木陰をのこし、翦ことなかれ拜ことなかれと、正しきを慕ふ唐土の書の名に劣らじと、倭國の櫻に事を比べしより、それに似たる卷々を閲すれば、猶勝れたる事の漏たるを本意なく思ひ云々

と斷つてゐる。

しかし、この書と「櫻陰比事」との間には、どうしても棄て難い距離がある。この書で、いかに西鶴の眞似をしようとしても出來かねるのは、人の心の底のからくりを見やぶることである。西鶴はそのからくりを

奉行の眼を藉りて覗、その事件に托していふのである「藤陰比事」の作者にはその眼がない。故に書くものは事件のみである、といつて、事件にもさう珍奇がない、そこで新しい趣向として目安書、訴狀を見せることにしてゐる。

すなはち、各章のはじめには必ず訴狀を載せる、事件の大略をそれで知らしておき、次に奉行の處置をしるすことになつてゐる。どちらかといへば前の方が興味の主點となつてゐる。

「本朝藤陰比事」本文

「櫻陰比事」卷五終頁

一目玉鉾（ひとめたまほこ）

大本、四巻四册。卷一、二十五丁、卷二、十九丁、卷三、二十四丁、卷四、二十丁。各丁を上下二段に分ち、上は本文下は繪圖となつてゐる。本文の行數はほゞ十六行、時に十五行となつてゐる。句點なし。柱の文字は「一目玉鉾」

序文あり、「難波俳林」の下に「松壽」「鶴」の印欵がある。

元祿二年の刊行。

序に、「維時元祿二年己巳正月吉辰」とある。奥附に「元祿貳年巳正月吉日　大坂高麗橋心斎橋筋南入町　雁金屋庄左衞門板」とある。

一本の奥附、「元祿貳年己正月吉日大坂心斎橋南四丁目　書林　定榮堂　吉文字屋市兵衞藏板」

一本の奥附「享保三戊戌年　五月吉祥日　江戸日本橋南二丁目　小河彦九郎　京寺町松原上ル丁　菊屋七郎兵衞　大坂心齊橋筋順慶町　柏原屋清右衞門」

享保三戊戌年
五月吉祥日
江戸日本橋南二丁目　小河彦九郎
京寺町松原上ル丁　菊屋七郎兵衞
大坂心齊橋筋順慶町　柏原屋清右衞門

享保版「一目玉鉾」奥附

序の結びに「日の出の濱より西泊の海迄長旅の枕詞に一目玉鉾と名は見えわたりたる道しるべぞかし」といふが如く、日の出の濱、夷千嶋にはじまり、壹岐對馬に至る案内の書である。神社佛閣、城下、宿驛、また歌枕を擧げて、簡明な説明を加へ、歌枕には古歌を引いてゐる。歌の中には西鶴みづからのもあるかと思はれる。

卷一は夷千嶋より江戸まで、卷二は江戸から東海道筋を大井川まで、卷三は金谷から長柄川附近まで、卷四は大坂から四國九州を經て對馬に至る。すなはち東海道を詳細にして、他を省略し、殊に九州をば、ほんのかい撫でに誌してゐる。

所どころに挿む諸國の好色のたよりは西鶴なればこそと思はれる。たとへば、奥州の固山のくだりに、

此宿東路には人の情もふかし旅人をとまれと小手まねきの女姿もさのみいやしからず髪も兵庫まげに物かたく白粉は雪の曙をあさむき口紅は夕日に移りてさりとてはをかし後ろ帯見よき所がらの風俗是も一慰とてかり枕おもしろし

といふが類である。それ等から、彼が作品の素材の幾つかを拾ふことが出來さうである。たとへば、卷一の離小島のくだりでは「諸艶大鑑」の卷八「有まて美人執行」との關係を、また卷二の江尻のくだりの若狭若松及び卷三の芋川のくだりの、髭男髑髏そばきり上手の里云々では「一代男」卷二の「旅のでき心」との交渉を思はせられる。

この書に於いて、注意されることは、記事に錯亂があり、引歌に誤謬の多いことである。當時すでに名所歌の集は少くない、參照に何の不便があらう。それにも拘はらず、頻りに原歌を離れたもの丶あるのは、忽

忙の際の作かを思はせる、勿論、西鶴の作品を通じて考へれば、彼にこの種の作あることを怪まないが、どうしてからまで推敲を缺くものを刊行したのであらうか。何かやむなき事情の伏在してゐはせぬか。

「一目玉鉾」の名は地理案内の書にふさはしいものであるが、作者命名の本義は、おそらく下段の繪圖が繪卷物風になつてゐることにあつたらう。作者著述の眞意からいへば、上段の解說は二の町にあつたらう。それにしても、かゝる形式の書は從來すでに存してゐたらうが、精しくは知らず、なほ索めようが、今はその書がないと豫斷する。その豫斷の下に、西鶴の創意を見るべく、また西鶴が相當の誇を以て、この書を刊行したのでないかと思はれる。

上下二段、文と繪とを併ふ形式を、しばらくさし措いて、本文だけでいへば、元祿四年版の「日本鹿子」こそ、最も多く、「一目玉鉾」に類似してゐる。

「日本鹿子」の序の一節にいふ、

江戸鹿子といふ書を見るに、まことかぎり知られぬむさしのゝわかむらさきの硯の海をかへほして、書あつめたるまき／＼まことに見ぬ江戸もの語、遠國に居ながらかしこくまに合るは、此珍書の德によれり、それに習てまた日本鹿子と題して、國々所々津々浦々の里數あるは古跡神社佛閣、あるは名所名物やうのこと書あつめてさくらの板となしぬ云々

いふところの「江戸鹿子」は貞享四年の版本、作者は藤田理兵衛である、江戸の地理を、坂、堀、池、山、或は神社佛閣、諸職匠その他に分類してその一々に、解說を加へたものである。

「江戸鹿子」と「日本鹿子」の間には、別な交渉があるが、體裁そのものゝ上から推せば、二者の間にはま

「江戸鹿子」本文

「日本鹿子」本文

「東海道分間繪圖」大井川

だ相應の距離がある。すなはち、二者は中間に「一目玉鉾」をおくことに於いて、正しい關係となるやうである。「一目玉鉾」は多少「江戸鹿子」の影響をうけてゐるが、更に多く「日本鹿子」は「江戸鹿子」よりも「一目玉鉾」の影響をうけてゐるかと見られるからである。

「日本鹿子」の作者は、何故にその序に於いて「一目玉鉾」に言及しなかつたか。一體が、その作者磯貝舟也は、これも序文にいつてゐることであるが、遠江懸河の産である。すなはち「新吉原つね／＼草」と署名し「懸河昔」と肩書せる磯貝捨若その人であらう。「つね／＼草」の刊行は元祿二年三月、「一目玉鉾」刊行の同年、わづか二ケ月の後に出たものである。しかも、「徒然草」の本文と註釋とに擬したこの書には、本文の作者名の外に、註者として「一代男世之助」の名を署してゐる。「一代男」の常として、上方版、江戸版ともに世之介と書いて、世之助と書いてゐない。この點やゝ不安であるが、とにかくに、一應は西鶴と關係ありやなしやを考へたくなる。しかし、こゝにはさし

「一目玉鉾」大井川

當りの問題でない。たゞその「一代男世之助」が假託であつてもすでに西鶴の作と聯絡をとる以上、彼は「日本鹿子」に於いて、何故に「一日玉鉾」に言及しなかつたか。もし、その「世之助」が眞に西鶴であるならば、なほ更のことである。この事は勿論「一日玉鉾」當面の問題でなからう。しかも、延いてこれ等の問題に考へ及ばねばならぬほど、その書の出版には何等かの事情があるやうに思はれる。もし西鶴の作が、「日本鹿子」の稿本を見て、それを摸倣したのだとなると、慌しい著作ぶりの理由も認められなくはない。さうなると、大坂の西鶴としてのみは、考へられなくなる。「一日玉鉾」はつひに「一日玉鉾」だけの問題でなく、西鶴その人の閲歴のうへに大きい問題を提出することになる。とにかく、考へさせられる書である。

「一日玉鉾」は「東海道分間繪圖」との關係に於いて、更に一疑問を加へる。それは主として、下段のさし繪との關係である。「分間繪圖」は元祿三年孟春、すなはち「一日玉鉾」出版後一年の刊行である。作者は遠近道印、繪師は菱川師宣と署名してゐる。五卷よりなる。みな三分一町の割合で里程を明にし、宿驛橋梁寺社の位置を示し、更にまた女童の眼を慰ましめるために、人物をも配してゐる。構圖ほゞ「一日玉鉾」と相似てゐる。中に殆ど相同じものさへある。大井川の圖これである。暗合としてはやゝ過ぎはしまいか。それならば「分間繪圖」は「一日玉鉾」の影響の下にあるといはうか。すなはち、その繪圖は「一日玉鉾」の東海道の圖を借りて、それに道程を正しうしたのに過ぎなかつたのであらうか。

「分間繪圖」の序によれば、道印の立案は、たゞ里程を正しくすることに專らであつて、人物のあしらへなどは考へなかつた、それを師宣の工夫で、今見るやうに改めたのであるとのことである。直接か間接か知らないが、師宣と西鶴とはすでに江戸版「一代男」に於いて交渉があつた。師宣の工夫が、また西鶴の新著

に基づくものがあつたらうの推定は、必ずしも否定されない。

こゝにまた疑問がある。「東海道分間繪圖」の作者遠近道印は、さきに「分間江戸圖」を著はしたその人と同名異人のやうである。序の文からさう推讀される。然らば後の遠近道印とは果して何者であらうか。

かりに空想を以て、その人を西鶴としてみる。さうすると、「一日玉鉾」のさし繪は師宣筆か、さなくも師宣案といふことにたらう。さう解釋するには、江戸住の西鶴を考へねばならない。浮世草子以外、繪圖の案にまでかゝはる彼を考へねばならない。西鶴の江戸居住説はさきに眞山青果氏によつて提唱されてゐるにしても、この道印を西鶴と見ることはどうであらう。空想はそれをゆるすにしても、正確の資料の缺如をどうしたらよからう。

何はあれ、さういふ疑問を懐かせる「一日玉鉾」が大坂から出版されたのである。西鶴としては名譽の作ではないが、つひに重要な問題の書であらう。

元禄参年庚午孟春吉日

作者 遠近道印

繪師 菱川吉兵衛

大門通新大坂町
板木屋七郎兵衛板

「東海道分間繪圖」奥附

「一目玉鉾」巻一初頁

世間胸算用（せけんむねさんよう）

大本、五卷五册。卷一、二十二丁、卷二、三、四、各二十丁、卷五、二十一丁。本文の行數十行、句點なし。柱には「胸算用」とあり。

序あり、難波西鶴と署名し、「松壽」と捺印してゐる。さし繪の筆者不明。

題簽は「繪入世間胸算用大晦日ハ一日千金」とある。内題は「胸算用」註して「大晦日は一日千金」といふことと題簽と同じ。

元祿五年の刊行。序に「元祿五申歳初春」と見ゆ。奥附には「元祿五壬申年初陽吉日書肆　京二條通堺町上村平左衞門　江戸靑物町　萬屋淸兵衞　大坂梶木町　伊丹屋太郎右衞門板行」と見ゆ。

再版本の奥附には「元祿十二年己卯年八月吉旦　大坂本町壹丁目萬屋彦太郎板」と見ゆ。

この書は西鶴在世最後の作である。毎卷四章、通じて二十章、みな大晦日の出來事を記述してゐる。「大晦日は一日千金」の小標目のある所以である。

繪入
世間胸算用
大晦日ハ一日千金
一

「胸算用」題簽

漠然と上方をさすもの三、京四、大坂九、その他江戸、堺、奈良、長崎各一。そのうち奈良は、大晦日の行事である庭竈、長崎は同じ行事の杜餅について語り、堺は大體始末の土地で大晦日にも動ぜぬ家々であるが、時に貧者あつて、年の瀬越しかねるさまをいひ、江戸は大名氣の寛濶どころなることを說く。しかも、その三地方はみな京大坂との間に何等かの聯絡を立てゝゐる。すなはち、この書に於いて、これまでの諸國ばなし式の形は破れて、視野を京大坂に限定したのである。

この地理的限定はまた大晦日一日といふ時間的限定と相俟つて、町人の經濟生活の尖端をとらへたのである。作者の趣向はそこにあつた。彼の常に心掛けてゐた內面暴露の秘術は、こゝに至つて全機能を發揮したのである。傑作といはれてゐる。

元祿十二己卯年八月吉旦
書肆　大坂本町二丁目
萬屋彥太郎板

再版「胸算用」奥附

たゞ春を迎へる支度に忙しい富豪の叙述もある。それには日比の心掛け、始末が說かれてゐる。說く態度には殆ど敎訓を伴はない、たまたまあつても極めて稀薄である。「日本永代藏」との相異點である。敎訓にかはるに輕い滑稽の存在が認められる。

金あり顔におちつき拂ひながら、胸のうちの四苦八苦、そのやりくりの巧みを才覺と稱へると共に、不正

手段の裏を露はすものが多い。最もよく世相を語るものである。その暴露にも、殊更の興味を伴はないで淡々として叙してゐる。たとへば巻一の「問屋の寛濶女」の振手形の場合の如し。手形にははじめから不渡を期してゐる不正漢もある。しかも、その者の行爲について多くをいふ事なしに、不渡か否かが、たしかめられる前に、轉々と掛乞から掛乞の手に渡つて、どさくさと入り亂れる。その時のあかぬものを銀の替りに扱つて豐かな春を迎へるをかしさを叙する。憎いおちつきである。これが隨所に見られる。

はじめから貧しくて、どうして年の瀨を越さうかのあはれむべき小い魂膽がある。作者はこれを小質屋を藉り、詰つての夜市を藉りて描き出す。その藉りるものが多く意外に出づる。趣向の變化が認められる。あはれなる遣繰には涙と共に笑が伴ふ。巧まざる悲喜の交錯がある。人生の縮圖もこゝに極まるといはう。

思ふがまゝになるも、ならぬも、一日の胸算用である。作者の筆は最も輕く當はづれの胸算用に動く。金を貸して貰つた御機嫌とりに、舞ひ踊つてゐるうち、不意の急用からその金をとりかへされる「年の内の餠花は詠め」の如き、擔ひゆく荷を金と睨んで夜盜どもが奪つてみると、旅人が頻りに、明日の御用にはとても立つまいといつた通りに、荷物は數の子であつたといふ「奈良の庭竈」の如きものは、主題以外に興ある挿話である。さういふ例は幾つとなく數へられる。現に、今いふところも皆挿話として書かれてゐる。しかも、作者はそれに重きをおけばこそ、おのおのの標目以外、更に、前者には「大晦日に無用の仕形舞」、後者には「山路を越ゆる數の子」といふ小見出しを設けたのである。作意のほどが明に見られる。

「胸算用」卷五初頁

西鶴置土産（おきみやげ）

大本、五巻五册。巻一、二十五丁、巻二、十八丁、巻三、十四丁、巻四、十七丁、巻五、十八丁。しかし、柱の丁附は實數と合つてゐない。巻一は序目錄等前附三丁を除き、本文は一から九までを數へ、次の一丁を「一〇ノ一五」と數へ、次の十六丁から順に數へて二十四丁に至つてゐる。本文は一―九、一〇ノ一五、一六―二三。巻三以下本文丁附一を缺いて二に起る、すなはち巻三は二―九、一〇ノ二〇、二一―二四、巻四は二―九、一〇ノ一五、一六―二二。巻五は二―九、一〇ノ一五、一六―二一、尤もこの巻には、跋奥附二丁が加はる。

巻三の本文全部十一丁と巻四の第一章の五丁半は、西鶴の原稿をそのまゝに刻してゐる。編者は一三の巻より是迄西鶴正筆也」と極めをつけてゐる。

本文の行數、西鶴原稿の分は十二行、他は十一行。句點、巻一と巻三は。・混用、他は。を用ゆ。柱に「置土産」とあり。

題簽は巻一は「繪入西鶴置土産」とある。巻二以下、題名の書きぶりをかへてゐる。巻二、「西鶴をきみやけ」巻三、「西鶴遠記見家計」巻四、「西鶴御紀美家計」巻五、「西鶴を喜みやけ」である。內題は「西鶴置土産」と一定してゐる。各巻目錄のところに、「大全目錄」とある。

元祿六年の刊、西鶴歿後二月の後である。奥附に「書林　京洛寺町五條上ル町　田中庄兵衛　武江靑物町萬屋淸兵衛　浪花堺筋備後町　八尾甚左衛門　元祿六癸酉載冬月吉日」とある。また附記して「西鶴俗つれ

つれ　自作追付出來申候」とある。

一本、奥附なく、巻五の末尾に「京五條通升屋　青山爲兵衞版行」とある。

巻一のはじめに、西鶴の肖像及び辭世の句、及び追善發句をかゝげてゐる。また團水の序、西鶴の序がある。團水序には「松壽」「平元」の印章、西鶴序に「松壽」の印章がある。

跋文あり、署名なし。版元としての言葉と解せらる。

さし繪は蒔繪師源三郎だとのことである。

この書は、團水の序及び跋文に見ゆるが如く、西鶴の遺稿である。たゞし、編次に就いては團水の意が少なからず加はつてゐたのであらう。少くとも一部のをはりに「都もさびし朝腹の獻立」を掲ゑたことなども、遺稿としての、追善出版としての用意かと思はれる。なほ、京と大坂の違ひこそあれ、その章の庵主の法師に西鶴その人の面影を偲ばせようとしたらしい。殊に、今の讀者にも「彼の法師美食好み」などの句によつて、西鶴十三回忌追善俳諧集「心葉」の中に、傳へてゐる「下戸なれば飲酒の苦をのがれて美食を貯へて人に喰せて樂む」西鶴その人を聯想させるほどの用意が認められる。當時に於いてはなほ更のことであつたらう。最後の句、白帷子のこと、また南無阿彌の言葉などが團水の加筆であることは疑ひのないことであらう。

しかし、また西鶴その人にも、この用意がなかつたとはいはれない。彼の作の例でいへば、最終章を祝言めかすのであるが、これを浮世草子絶筆の意で書いたとすれば、或はかういふ結びをなし、またみづからを何とはなしに語りもするであらう。さうなると、編次も西鶴であり、團水の加筆もないことになる。とにかく疑ひを存すべきである。

各巻三章、通じて十五章、みな遊女買の身のはてをしるしてゐる。西鶴の序文の一節「去程に女郎買さんごじゆの緒じめさげながら此里やめたるは獨もなし、手が見えて是非なく身を隱せる人其かぎりなき中にも、凡萬人のしれる色道のうはもり、なれる行末あつめて此外になし、是を大全とす」は、一部の大意を明にするものである。

貧してなほ太夫買當時の意氣を失はぬ男のけなげさ、子寶を儲け得た樂しさゆゑに貧に堪へてゐる以前の大盡と太夫のあはれさ、分散の後やがてはじめた餅屋の暖簾になほ太夫の定紋をつける男のしをらしさ、かういふ境涯は、これまでの彼の好色物、町人物に未だ見うけない。西鶴の心にくいほどのおちつきが見られる。

土地から見れば、大坂五、京五、江戸一、江戸と京に亙るもの二、大坂と京に亙るもの一、外に奈良一を數へる。また太夫としては藤嵜、野秋、金太夫、野風、吉州、小太夫、越前、濃紫、吉野、小主水、唐土その他がある。これ等の太夫を繞る事件は、「諸艶大鑑」に於いて少なからぬ類型が認められる。それよりも、直にその書の書き直しとも見られないことはない。

「置土產」の解説は「彼岸櫻」に言及することを要する。「彼岸櫻」と「置土產」の關係は、なほ上方版「一代男」「永代藏」と江戶版のそれに似てゐる。半紙本の大さに改めたことも、さし繪が大方の構圖を同じうしながら、多少の異同があることも、漢字を多く假名に書きかへたことも似てゐる。

題簽の題名は五卷ながら書體を異にしてゐる。なほ「置土產」の場合と同じ。卷一、「ひが無左久羅」卷二「ひうんさくら」卷三「彼岸佐具羅」卷四「ひうむ左久羅」卷五「彼岸櫻」である。

巻頭には版元志村孫七の序がある。その文にいふ、

此置土産は難波の書林乞まうけて此友のもて遊びとなしぬ予猶一帖の名残世に廣からぬ事をおもひ今はた武蔵野の月にうつして先生の追善をなす冬こもり千種の色は春雨に彩りをなし櫻の板にちりはむる誠に時を得たりや二月の下旬先翁の花の種を残しけるよと再吟して彼岸櫻と呼事しかり于時元祿甲戌衣更着下旬

江府之書林
志村孫七開板

「彼岸櫻」の題號の由來、また開板の元祿七年すなはち「置土産」出版の翌年であることは、この序文のおいてで明である。尤も、この書には奥附がなく、刊記がない、從つて出版年月も版元の名もこの序によつてのみ知られる。序に於いても「此置土産」といつてゐるが「彼岸櫻」の序の一丁の柱には「置土産」とある、以下各卷を通して「土産」とある。

次に追善句を載せてゐる。上下二段に分ち、上段には「置土産」所載のものを載せ、下段に新に江戸のそれを加へてゐる。上段には「追善發句大坂俳師」と書き添へ、また盡、死出置所、櫻、蔦とやうに假名を附けてゐる。下段は左の如し。

同江戸俳師作者不知

春

蓑虫も彼岸さくらを臺哉

紫雲とも見つ化野の花菫

夏

抹香にはたき交てん若楓

さなきだに梅雨にしたるを袂哉

穐

其人の筆の跡とへきり〳〵す

色も香も空にかへりぬ秋の梅

冬

来迎や西にむかへは北時雨

祈禱にもなれな師走の手向花

次の頁には西鶴の肖像と、辭世の句がある。その風貌はかなり「置土産」所載のものと異なつてゐる。おもふに江戸の繪師の筆僻によつて、少なからず樣かへられたものと思はれる。この繪師が「置土産」のさし繪を描きかへたもののすべてが、何處となく、剛く、堅く、いかつくなつてゐることから、推定される。おそらく西鶴の眞の風格は、上方阪のそれであつたらう。その方が作品を讀んで髣髴するその人と、ほゞ一致するやうに、少くとも自分だけには思はれる。

また團水の序、西鶴の序がある、字の大さ、字の配りはさながらであるが、體はやゝ異なつてゐる。奥附のないことは前にいつた、また跋文を缺いてゐる。西鶴の原稿を刻してゐない「彼岸櫻」には用なき跋文であるためであらう。本文は一わたり對讀したところでは、異同がないやうである。たゞ「置土産」末尾の

「南無阿彌南無阿彌」だけを省略してゐるやうである。

「置土產」と「彼岸櫻」の關係がこのとほりだとすれば、「置土產」と殆ど全く內容を同じうしてゐる、いな、たゞ一章をさしかへただけで、他は全く剽竊した「風流門出加增藏」―― 寶永五年、江戸書林小谷茂左衞門版、奥村政信畫――は、書の體裁として、「置土產」「彼岸櫻」のどちらに屬してゐることであらうか、いさゝかの疑問を懷かされる。江戸板なるが故に、當然「彼岸櫻」からかと思ふとさうでない、直接「置土產」の本文をそのまゝである。末尾の「南無阿彌」は削つてある。いかに「彼岸櫻」が江戸でも行はれなかつたかが推せられる。今日「彼岸櫻」の傳本甚だ乏しいのは、それがためであらう。

「加增藏」は「置土產」卷頭の「大釜の拔き殘し」を除いて、新に「親は後家江戸くだり」を書きそへてゐる。發端といふ體をなしてゐる。他は順序までも原版さながらである。たゞし、小見出しは更へてゐる、たとへば、原の「四十九日の勸忍是からは皆我物」を「妻子の爲に何も身すぎ」とするたぐひである。

こゝに注意してよいのは「加增藏」の發端は、かなりの日出度ばなしになつてゐる。大坂の好色男が江戸へ來て、髮結となつて身代とりつき、大坂を本店、江戸をはじめ、所々に出見世、歌仙分限つゞくものがないといつてゐる。おのづから他の章と色調を異にしてゐる。もとより西鶴の原意にかなはぬことも甚しい。「置土產」の名を避けるのは、西鶴と全然緣のない作に仕立直した書として、また春の出版として、當然であるが、發端の趣向はやゝ過ぎはすまいか。

これ等は、別に「置土產」の解說には要もないことであらうが、「俗つれづれ」解說の準備として一言したのである。

「置土產」卷三初頁
（西鶴筆）

「置土産」巻四・六丁裏
（西鶴筆）

西鶴織留

大本、六卷六册。卷一、二十三丁、卷二、二十丁、卷三、十七丁、卷四、十九丁、卷五、十六丁、卷六、十七丁。たゞし、卷五の丁附が十八丁にをはつてゐるのは、七丁目を「七ノ九」としたためである。本文の行數十二行、句點は。を用ゐてゐる。柱の文字は「世の人心」

西鶴の序がある、「難波西鶴」の署名、陽刻陰刻の「松壽」の二印がある。また團水の序がある。

題簽は「繪入西鶴織留」、また「西鶴おりとめ」とあり。たゞし、卷一、及び二には傍書して「本朝町人鑑」とあり、卷三以下に「世の人こゝろ」とある。內題また卷一、二は、「西鶴織留本朝町人鑑」卷三以下「西鶴織留世の人心」とあり、尤も「世農人心」と書いた卷もある。

元祿七年の刊行。團水の序に「元祿七年戌卯月上旬」とあり。奧附に、「元祿七甲戌年三月吉日　江戸萬屋清兵衞　大坂雁金屋庄兵衞　京上村屋平左衞門板」とある。

再版本の奧附、「正德二壬辰年五月吉日　大坂書林　岩國屋德兵衞　大塚屋權兵衞　油屋與兵衞　開板」

團水の序の略にいふ、西鶴は前者「日本永代藏」に合はせて、「本朝町人鑑」「世の人心」を著はして、三部の書と名づくるの意があつた。たゞ後の二部を半書いたまゝで病歿した。後に團水が書肆の乞にまかせ、その半づつをとり合はせて一部としたものが、この「織留」であると。卷一及び二に「本朝町人鑑」卷三以下に「世の人心」の小題を附したのは、それがためであつた。

「本朝町人鑑」は「永代藏」の續篇と見られる。富ある者に對しては、その富を致す過程を示してゐる、いふところの才覺と、また正直とに重心をおいてゐる。貧しき者に對しては、運命と觀じて靜に貧に處する心境をうつしてゐる。すなはち、町人生活の光明の方面に於いて、「永代藏」より徹底してゐる。中に異例あつて、暗い事件に終始する「古帳よりは十八口」の如きもあるが、むしろ、明い常道にかへれとの教訓であらう。その章の表面も老母の教訓になつてゐることが注意される。

二卷八章の中大晦日の事件とするものが多い、しかも、大方は、その大晦日の苦しさを脱して、新生命を拓くことになつてゐる。歸趨は違へど、趣向のうちに「胸算用」との交渉が認められる。

この遺稿はいつ頃の筆であらうか。卷二の「保津川のながれ山崎の長者」のはじめに、

本朝は天照太神元年より今元祿二年の初春まで

と見えてゐる。この元祿二年を注意すべきであらう。果して、元祿二年のものであるならば、西鶴はこの書にとりかゝるはじめには「甚忍記」と題する豫定でなかつたらうか。「永代藏」の奥附に、「此跡より人は一代名は末代甚忍記全部八冊仁之部義之部禮之部智之部信之部板行仕候」とある豫告の書はこれでなかつたらうか。「町人鑑」の内容から、また豫告書の題號から、そのやうに推定される。

推定は更に「甚忍記」の名を「本朝町人鑑」にかへた理由にまで及ばねばならない。「日本永代藏」との聯絡のためであらう。殊に「永代藏」の卷一の内題にだけに見かけられた「本朝永代藏」の「本朝」に就いても一應は考ふべきであらう。更にまた内容から見て、「町人鑑」がおちつく事であらう。卷二の「五十日歸りにおふくろの異見」一身すぎかなしき一人が遠國に渡り二度かせぎ出して分限になつた話の中に、

人皆見およひ其身一代のはたらき是れ町人の鑑ぞかし
といふがある。この句、この書の全體に亘つていへる。題號として、その言葉が選ばれた理由であらう。

「世の人心」の執筆は「町人鑑」よりやゝおくれてゐたかと思はれる。とにかくに、この書は「永代藏」の型から遠く離れてゐる。かれには致富の途を主として、その途を拓く人の心の動きの叙述を客としてゐる。これは金の問題を少し片寄せて、人の心の變化の追求に專らである。「永代藏」の場合とは主客の顚倒がある。故に人の階級職業の種類の多く廣きに亘つて細かい觀察を加へてゐる。いはゞ、卷三の「色は當座の無分別」のうちの一句「されば世の人心何時となく替り行定め難し」は、別に直接の關係がないが、また題號と意を同じうしないのでもない。

やゝ注意すべきは、西鶴のいふ「世の人心」の意である、これは何もこの作にはじまつたのでない。おそらく、西鶴に世の推移變遷を靜に見迎へ見おくる心がなかつたら、とても彼の全著作はなかつたらう。「世の人心」はそれほど、彼にあつては重い言葉である。全著作中、兩所に見られるわけである。今、それを中心として、一部をなさうとしたのは、餘りに當然すぎることとである。

「町人鑑」では、なほ「永代藏」と共に、諸國の長者ばなしといふ形があつた。たゞ二卷にとゞまる故に、數からいつて京坂のが多いといふ結果になつたのであらう。三卷以下では他國のが多かつたらうと推せられる。「世の人心」になると、その形を捨てゝ、大方京坂の範圍にとどめてゐる、この事はこの書が後の氣質物に模倣せらるゝことの多いのと共に、注意せねばならない。

〔一〕津の國のかくれ里

「西鶴織留」巻一初頁

一 官女のうつり気

「西鶴織留」巻六初頁

俗つれ〲

大本、五卷五册。卷一、十七丁、卷二、十八丁、卷三、十五丁、卷四、十六丁、卷五、十五丁である。ただし、丁附は實數と合はない。卷一序三丁を除いた本文の丁附が十九丁にをはり、卷二が二十三丁、卷三が二十丁、卷四が二十一丁、卷五が二十丁にをはる、どの卷も十丁目を「十ノ十五」と丁附してゐる。

本文の行數、卷二の「只とる物は澤桔梗銀で取物はけいせい」と卷五の「金の土用干御羅の口乞」が十二行である外は、みな十一行である。尤も、卷三の半丁には十行のものもある。章によつて書體もかはる。十二行の分が、最もよく「置土産」にいはゆる西鶴正筆と一致してゐる。句點は。と・を混用してゐる、全體の體裁は雜然として亂れてゐる。

題簽は、「俗徒然」また「俗つれゝゝ」、上に西鶴と冠してゐる。柱の文字は「俗つれ〲」。

さし繪は蒔繪師源三郎であるとのことである。

元祿八年の刊行。奥附に「元祿八乙亥曆孟春吉日　書林　京洛寺町五條上ル町　田中庄兵衞　浪花堺筋備後町　八尾甚左衞門」とあり。書林署名の序には「元祿八乙亥年初春吉辰」團水の序には「元祿八亥龍集正月のはじめ」とある。

團水の序文には「松壽」「平元」の二印がある。

卷頭には、月の夜、草庵にもの書いてゐる西鶴の畫像を載せてゐる。像は兼好の風格に擬してゐる。

團水の序のうちに、「此俗つれ〴〵をなかきかたみにして松壽西鶴のかきりある今はの時、とりまきれたるさうしの中より、この比見さらえて書林何某にゆつる」と見える。また書林の序には、いにし年西鶴の作し置かれた一つの書を手にして、さておきかね、めでたき春のもてあそびにと、自分の好みのまゝに出版する。「俗つれ〴〵」の名もまた自分の命ずるところであるといつてゐる。

「俗つれ〴〵」は西鶴歿後二年の出版である。出版の事情は多分序にいふとほりであつたらう、しかし、なほその言葉のうへに多少の疑ひが起される。

書肆田中庄兵衞、八尾甚左衞門は、「西鶴置土産」の販元である。元祿六年冬月すなはち西鶴歿後二ケ月にして出版されたその書の奥附には、すでに、「西鶴俗つれ〴〵自作追付出來申候」と豫告してゐる。もし、販元が遺稿を手にして措く能はぬほどのものであるならば、何故に豫告後一年の久しきを隔てたのであらうか。殊に「追付」とさへいつてゐるのに、どうしてさう延引したのであらう。

また「置土産」の出版の時には、田中、八尾と共に販元であつた江戸の萬屋清兵衞の名の見えないのは何故であらう。そこから多少の理由が考へられもする。

「置土産」は先師西鶴の遺著として、また追善出版の書として、團水等が最も力を致した譯であるが、販元側から見た成績は、果して豫期した通りであつたらうか。もとより推測であるが、さまではなばなしくなかつた。少くとも、江戸に於ける賣行はさうまでよくなかつた、といふことは「彼岸櫻」の序に、「此一帖の名殘世に廣からぬ事をおもひ」とあるのでも明である。その賣行の不振は、何に基づくか。内容からいへば、生前のどの著作にもをさをさ劣るまじい傑作であらう。それなのに、かういふ結果を來した理由の一つに、

當時の西鶴關係者からは考へも及ばぬ、今日の讀者からは、とても想像の出來ない顧客心理によることであらう。江戸時代の出版界で決して稀有の事例ではないが、あまりに追善めくことが緣起でない「置土産」といふ名さへ忌はしいと思ふ者もあつたらう。さればこそ、再版も重ねもしたが、西鶴死歿の直後には、さういふ搦手もないではなかつたらう。時過ぎればこそ、江戸の志村孫七は、「置土産」の名を避けて、追善らしい、追善らしくない「彼岸櫻」の名を選んで改題したのであらう。改版に當つて、卷八末尾の「南無阿彌南無阿彌」を削つたのも、之れ等に對する用意からであつたらう。

それはともかく、江戸にはおしもおされもせぬ萬屋が販元の一人となつてゐる「置土産」を、改題はしたものゝ、同じ江戸の地で出版させた團水の意はいかに、田中、八尾の意はいかに。その人々に對する萬屋清兵衛の意はどうであつたらう。睨み合ひがつゞいた。その結果「俗つれ／＼」の出版は延び延びになつた。一年有餘を空しくした事情を、まづかうも推定する。

その頃の販元關係が、今日からははつきりと知られてゐないが、少くともこの場合の萬屋は、「置土産」の販元として、名義だけのものでないやうである。推定は、その事を基礎として立てたのである。

「彼岸櫻」の發兌以前、いな、その準備にとりかゝる以前に溯ることであるが、團水の扱ひで、大坂の雁金屋、京の上村と「西鶴織留」を共同出版することになつて妥協が成立した。その代りに、萬屋は田中、八尾とに斷つて、「俗つれ／＼」の出版には參與しないこととなつたのであらう。かうも推定する。

「俗つれ／＼」の出版にとりかゝつた田中、八尾の兩書肆の最先に顧慮するものは、「置土産」を不振ならしめた原因である。用意はそれを棄却せねばならない。不緣起なふしぶしを避けようとする。書いたもの

は、勿論團水であらうが、その用意の下に、書林署名の序文を載せた、と考へて、「日出度春のもてあそびにもと」とも「あらたまる春のなくさみにもと」とも繰りかへしていふ言葉を讀まうとする。

元祿六年「置土產」出版の當初に、團水が考へた「俗つれ〴〵」は、おそらく、今日見るところのそれでなかつた。彼はまづ誰が目にも西鶴の正筆と見られる原稿を、なほ「置土產」の場合の如く刻したのを最初に揭ゑる。以下書體を改め、行數を變へて、いかにも、書き殘したものをとり集めたといふ感じを、讀者のうへにも現はさう。その中間にまた眞蹟を挿むことに於いて、なほ一段の感を深くしよう、「置土產」でしたことをもつと頻繁に行はうと計畫したのであらう。

さうすることに於いて、おのれに兼好法師の書きつけた斷片を編次して、「徒然草」となしたといふあの今川了俊たり得るとも考へたのであらう。「俗つれ〴〵」の名は、書肆の好みでなくして、團水の命名であつたと思ふ。西鶴の歿後個に律儀を守る彼にとつては、さもあるべきことであらう。まして、西鶴の遺作が「徒然草」の影響をうけることの多きことからも、この題號は當を得たものであらう。

努めて、書きさしのものを集めたといふ形式の下に、編次するに當つて「序嵯峨の隱家好色庵」以下の三章をわざと卷頭に揭ゑなかつたほど、細心の注意を拂つたものゝ、さてかういふ装の書が、讀者の意に投ずるであらうか。書きかけた二部の書を一つに纏めた「西鶴織留」の評判はどうであつたかは知らないが、とにかくに、一篇完成のものに劣ることはいふまでもなかつたらう。團水は考へざるを得ない。すべてを「徒然草」でゆかうとする第一案を撤して、第二案を立てねばならない。その結果、今見るところとなつたのであらう。さうすると「俗つれ〴〵」の名がうまく當てはまらなくなる。そこで、その名は書肆の命ずるとこ

ろとして、それに新に別樣の意を寓することになつたのであらう。

　彼みづからのものとして書ける序文の結び、

　　かの月の下、雪の朝いとおもしろく愛あるものなれとかける盃のこゝろにや

の一句は、これ以外に解釋することが出來さうもない。すなはち、彼は「徒然草」の中に、酒のよいこと、惡いことに就いていふことあるのに附會して、かくいふのである。彼の第二案は、西鶴の文の中から、酒に關するものを拔いて、まづ第一卷に据ゑ、以下の卷々にも、これをやゝ組織立てゝ集めること、今讀むが如くであらう。

　こゝに一つの疑問は起る。さういふ記事が果して都合よく數多くあつたのだらうか。例の追善句集「心葉」のいふが如くば、西鶴は酒嫌ひだとのことであるが、さういふ西鶴を偲ばせるに足るほど、酒の害の方面を書いたものが少なからずあつたらうか。「二十不孝」にも酒に性根を腐した男のことは書いてあるが、その類ひが書さしのまゝ、あれ程多くあつたらうか。あつたとすればとにかく、さなくば團水みづからの筆も加はつてはゐなからうか。或は酒の文に限らず、「徒然草」めかすために、すでに幾多の補筆がありはしなかつたか。誰がないといひ得よう。また誰かこれこそ補筆と斷じ得よう。いふは易く、斷ずるは難い。今の自分としては、「俗つれ〳〵」のあるものは、西鶴の眞筆、あるものは團水の擬筆とのみいはうとする。筆致のうへだけでもさう疑つてよいものも少なからず見うけられる。

「俗徒然」巻二初頁

「俗徒然」巻二・七丁表

「俗徒然」巻四・六丁表

西鶴文反古

大本、五卷五冊。尤も中本仕立のものもある。卷一、三、各十八丁、卷二、四各十七丁、卷五、二十丁、丁附すべて實數と合す。本文の行數、十一行。句點はない章もあれば、ある章もある。あれば 。點である。

柱の文字は、「萬文」。

題簽には、「新板絵入西鶴文反古世話文章」とあり。たゞし、「文反古」の字は卷によつて平假名、變體假名で書きかへてある。內題は通じて「萬の文反古」とある。

序あり、西鶴と署名す、「松壽」の印あり。年月日を缺いて、其月其日とのみある。

元祿九年の刊行。奥附に「元祿九年子ノ正月吉日　江戸万屋清兵衛　大坂雁屋庄兵衛　京上村平左衛門板」とある。

再版本の奥附、「正德二壬辰歲九月吉旦　大坂眞齋橋筋吳服町　池田屋三良右衛門開板」とある。

さし繪の繪師は明でない。

西鶴の序によれば、當時流行の張貫の形女を紙細工をするとて、文反古を塵塚の如く集めた中に、世相人心を推するものを拔いて、この書をなすとのことである。假託であることはいふまでもない。

この書簡文體の短篇小說集は、卷一、五、各四通、卷二、三、四、各三通、すべて二十通の手紙を收載してゐる。

人と事とによる分類はさておいて、これを地理的に見れば、播州より大坂へ、江戸より大坂へ、京より大坂、大和より大坂へ、吉野より大坂へ、各一通、大坂中のもの一通、西國より京へ、飛驒より京へ、京より仙臺へ、京より越前、京より長崎、住吉より西國へ、松前より上方へ、江戸より和泉へ、また江戸うちのもの、各一通である。

かういふ形式には、すでに先蹤がある。江戸時代に入つてからも「薄雪物語」「錦木」など、おのづからなる一系統をなしてゐる。この書はその脉をうけて成つてゐる。しかし、こゝにまた作者の創意がある。從來のものの範圍は、どれも男女戀愛に限られてゐた、ところが、この書に收めたものは、もつと廣い人生の上にある。成程、中には遊女の客に贈れる戀文があるにしても、いふところはやさしい戀の心でなくして、金を背景とした手管、魂膽の文である。まして敵

正德二壬辰歳九月吉旦
大坂眞齋橋筋呉服町
池田屋三良右衛門開板

再版「文反古」奥附

討やら、大晦日のやりくりやらによつて、浮世の相、人の心のうつりを寫し出すものは、未だこれまでになかつた。遠い國と國を隔つるものもなかつた。おもふに、かゝる趣向を立てゝ、古い型を破り得るもの、西鶴ならではと思はれ、事の表裏に亙つて精細微妙の觀察をなすもの、西鶴ならではと考へられる。殊に西鶴署名の序文のある以上、もとよりさう信じてよい。

西鶴に、かゝる意圖のあつたことは、「好色一代男」によつても知られる。八歲の世之介が從姉におくる戀文の案はしばらくおくにしても、五十三歲の「諸分の日帳」の長手紙は、そのまゝにこの書に收めてもよい。大坂から坂田へ、大坂の遊女が馴染客へおくつたものと註すれば足りる。その手紙の主眼とするところは、もとより戀でない。新町の生活描寫である。形式のみが、たゞ候文の型を假りたといふだけのことである。もう、そこまで達したならば、他の武家物、町人物の分野にまで入り込むのは、ほんの一足である。あの趣向を、はじめて、晩年に於いて書いたのは、西鶴みづからにとつては、むしろ遲きに失するといはう。それほど、この書は西鶴の作として、極めて自然である。

しかし、それ等の手紙小說が一部の書籍としてあの體裁をとつたこと、殊に歿後三年の元祿九年に出版されたことに考へ及ぶと、この書の出版は甚だ不自然だといはれる。

西鶴遺稿の書の例として、必ず團水の極めがある、事實それ等の出版で、團水の關係しないものはなかつたらう。この書はそれを缺いてゐる。

また、この書は西鶴の眞蹟をそのまゝに版下にした感がある。「諸國はなし」「近代艶隱者」の如きは何等かの事情のもとにさういふ事もあつたらう。また遺稿にもその例があるが、それは一部分にとゞまる。然るに

かゝる完備したものが、生前出版されずに、死後三年にして出版されるには、餘程の事情がなければならない。たまたま遺稿が發見されたならば、團水は必ずそのよしを明にするであらう。それがない以上、事情は版元の方になければならない。

版元の三書肆は、どれも「織留」の版元である。もしも未完成の遺稿を出版されるぐらゐなら、まづこの書を先にしたのであらう。團水が、まだこの稿本を知らなかつたら、彼等は何をおいても團水の前にかねて預つておいたものを提出したのであらう。疑ひは漸く深からざるを得ない。

この疑問は「俗つれ〴〵」の出版事情を參照することによつて、少しく薄められるやうである。尤も「俗つれ〴〵」の出版事情といふのも、自分の推測に過ぎない。今、その推測の上に立つて、更に推測を試みようとするのである。夢中に夢を說くの類である。

西鶴の遺稿の斷片に、少しく自家の文を加へて補綴した「俗つれ〴〵」は、出版としては或は不成績でなかつたらうか。彼は、どうしても完備した形式でなければ、おぼつかないことを知つたのでなからうか。それとも、またあの書は團水の操作と見られたのであらうか。これは先師のため、また自家のために、彼の最も苦痛とするところであらう。彼は斷じて世の白眼を避けねばならない。かういふ事情の下に、西鶴の遺文を整理するとする。まづ編次して首尾一貫せるものとする。もし足らざるものがあれば、これを補ふもやむなきに出づるとする。しかも、その間の事情は決して外に示してはならない。示せば補綴即操作と解されもしよう。序跋に言を寄するのは最も危い。みづからの影をだに出さずに、たゞ西鶴をのみ表にする。西鶴の序跋、署名、印章も力がない。西鶴の眞蹟を標榜するのもなほ足りない。たゞ知る者をして眞蹟と認めさせればよい。

しか認められるほどに、巧みに摸し得たる版下を刻すれば、それでよい。

團水はかういふ考の下に、完備せる稿本を調へ、西鶴に近い筆蹟の版を成し、しかも自家の一語をだに添へなかつたであらう。

「置土產」―「俗徒然」の丁附のくるひは、その頃に幾多の例があるやうに、丁數の多いことを裝はうとする詐術である。「置土產」以前、西鶴本にはたゞ一例を見るだけであるのを、かの二書は頻りに之れを行つたのである。それをも「文反古」では破棄してゐる。事柄は小いものであるが、注意すべきであらう。

「文反古」の版下は西鶴らしくといふ點からいへばかなり巧みである。たゞ似せて、似せたあとを見せまい、眞蹟の筆法より弱くしまいとした結果は、無理な力を籠めて、やゝ線が太く、やゝ丸みを缺いてゐるやうである。

文字だけでなく、さし繪も西鶴の舊著中のものと構圖の類似するのが多い。この事は西鶴の舊著相互間にもある、いふ意味はその傾向が他のものより甚しいといふことである。

團水にして、「文反古」の全體を操作する場合には、これ等の條件はなほ更に守られるであらう。しかし、「文反古」のすべてが團水の筆とは思はれない。たしかに、西鶴のものも存在すると信ぜられる。

それなれば、いかにして二者を峻別すべきか、この場合は「俗つれ〲」よりも一段の困難がある。團水が必要上、師の文を操作するとする、その場合に、似せてゆくに甚だ便利のよい御手本が眼前にある。それは師の舊著の中からあるものを拔いて、少しく前後首尾を加除しながら、やゝ事をぬきさししながら、書簡體に書きかへればよいからである。一種の候文體の翻譯をすればよい。實際、この書ほど、西鶴自身の舊著

と交渉の多いものはない。それならば、「武家義理物語」「胸算用」「永代藏」のものと筋の似てゐるのがあるとすれば　みな團水のものかといふに、さういひきれないのは、西鶴また類想の多い文を書く人であるがためである。たゞ西鶴ならばよもやかういふことをしまいと思はれる一つは、手紙の一々に註解がましい言葉を添へたことである。それあるがために、いかに情趣を害つてゐるか、思ひ半ばに過ぎるものがあらう。多分西鶴の眞作にはそのものなく、出板に際して、すべて團水が補筆したものであらう。

さうなると、眞僞の別は内容の事件では明でない、たゞ文辭の上でたしかめねばならない。しかし、西鶴も事によつて、體を異にする、剛柔その折々がある。殘るところは語格の問題であらうか。この「西鶴名作集」が努めて原本をさながらに移した微意は、さういふ研究に資することもあるかと思つたからである。今自分の用意してゐるものは、まだ海のものとも、山のものともつかない、この疑問の解決には些の効力のないものである。

それはそれとして、西鶴その人が、何故に、舊著を書きかへ、また翻譯するやうな態度をとつたかは、この書に對して、依然として懷かねばならぬ疑問である。推測だけを「解説その二」に於いていはうとする。

「文反古」巻一初頁

「文反古」巻五・六丁目

西鶴名殘の友

大本、五卷五册。卷一、十二丁、卷二、十三丁、卷三、十五丁、卷四、十一丁、卷五、十丁、たゞし、丁附の數は實數より多く、卷一は十六に至り、卷三、十八丁、卷四、十六丁、卷五、二十一丁に至る。本文の行數、十一行。句點は。•を混用してゐる。柱の文字は「友」。

元祿十二年の刊行。奥附に「元祿十二己卯歲首夏吉辰　浪花書林開板」とある。書林の名はさだかでない。序あり、團水散文の名を署す「平元」の印がある。每卷に目錄なく、卷一のはじめに總目錄がある。そこに「自筆」としるしてあるのは、西鶴の自筆稿本であることを意味してゐる。卷三の各目次の上の番號は、總目錄のと一致しない、錯記である。

さし繪の繪師は明でない。

洛陽を去て七年、浪花西鶴が草庵を守る雨の夜、跡は消せぬかたみの反古のうちより一書を探り得たり、諸國の雜譚、例の狂言をしるせり、みつから筆を染ぬれば、故人にあふこゝろはせして函底に籠置、折ふしことゝ寢覺の友とす、これを傳聞書林某來て强て求めけるにまかせて梓に行ふと也

と、團水の序にいつてゐる。もし、この言葉をそのまゝに信ずべくは、この書は紛れもない西鶴の筆である。團水の補綴もないことになる。

元祿十二年といへば、西鶴の歿後すでに七年を經過してゐる。この書の出版はあまりに遲れてゐる。疑惑はまづそこにおかれる。尤も、原稿が後年になつて發見されたとも考へられるが、また「俗つれ〴〵」の場合

のやうな推測も寄せねばならぬ團水の言葉である、遽に信じかねる。西鶴の眞筆といふことは、他の筆蹟と照し合せて、ほゞ疑なきやうである。また、團水がこれを函底に籠置いたといふ意も必ずしも忖度されなくもない。旁、自分は團水の擬筆でなく、補筆もないものと思つてゐる。從つて、下がきらしいこの插繪を何と解釋すべきか、筆者の目當を誰におくべきか、西鶴かとも思つてゐる。

「名殘の友」は通じて二十七の小話から成る。みな俳人の逸事に關する。その中、おのづから西鶴みづからのうへをいふもの三四に及ぶ。傳へられてゐる俳士は、貞德、德元、正章、貞室、立圃、荏友、釣寂、吟夕、德庵、三千風、言水、清風、團水、其角、才麿、西吟、桃靑その他多くの數に及んでゐる。これ等有名の士と共に、必ずしも世にさまで聞えないものをも擧げてゐる。しかく、有名と無名を問はず、必ずしもその人のうへを語らず、藉りて他を語るものも多い。語られてゐる中には、いふところの諸國の奇談、すなはち「諸國はなし」などに入るべき筋もある。話の範圍は廣く、取舍は極めて自由である。

おもふに、西鶴には幾多の筆錄があつたらう。その中から、特に俳士に關するものを集錄して、この書を成したのであらう。西鶴に一部を立てる意圖のあつたことは、卷一のはじめに、「神風や伊勢の」と書き起したものを据ゑ、卷五のをはりに、「次第にいたりたる世のさま豐なる御時のためし也」を以て結んだことが、彼の編次の方程式めくものにおのづから合してゐることからも推せられる。どういふ譯か、團水の編次にはその方程式が忘れてゐる。

俳人の名には時に誤謬がある。極端な例は、和氣遠舟を和氣遠船に作るの類である。しかも船にしうと假名をふつてゐる。この書が團水の操作であるならば、彼はかういふ點には特に注意して誤なきを期したらう。

また芭蕉を桃青の號で書いてゐる。團水なら間えの易きをおもつて、よしそれが桃青時代のことでも、芭蕉と書いたのであらう。書中、また西鶴の「虎溪橋」に關していふことがある。西鶴を西鵬に作り、虎溪を琥溪に作る。その書は延寶六年の版、中の署名はもとより西鶴である。おそらく團水なら、西鵬署名でもなほ西鶴としたのであらう、まして虎溪の正しき名を傳へたのであらう。かういふ錯記誤記が却つて、西鶴その人の筆蹟を語るものでなからうか。それ等が西鶴のつねの癖と見られるからである。更にまたみづから西鵬としるしたことは、「名殘の友」の制作の時代を考へる參考にもならう。西鵬とは、ある期間に於いてのみ使用された別號であるからである。

「名殘の友」には、また「幽靈の足よは車」の如き、「小野の炭かしらも消時」の如き、殆ど實際にあり得ないはなしをも傳へてゐる。かゝるあそびの筆は、團水にたえてなくして、西鶴に常に存するところである。

團水の名の書中に見えたのは「小野の炭かしらも消時」だけである、しかも、ほんの端役として用ゐられるだけである。彼みづからが筆を執るとしたならば、決してそれでは濟まさなかつたらう。殊にあれほど親しい西吟を捉へて、「下帶斗の玉の段」に、「津の國櫻塚の里に落月庵西吟といへる俳諧師有」と書き起す白々しさは、西鶴にして、はじめて出來る藝當であらう。

「名殘の友」には主題ならぬ挿話の中に、西鶴の他の著作と幾多の交渉のあることが注意せられる。西鶴が同じ見聞を、異なる條件の下に、これには短く、粗く、あれにはよい程の長さに、精しさに書きわけたのであらう。これ等は彼の著作相互間に多く見られる事例である。殊に考へねばならないのは、「俗つれ／＼」との間の交渉である。たとへば、下戸の西鶴は酒樽をおくられて、酒好きの俳友どもに與へる、俳友どもは喜

んで蓋をあけると、中には餅が入つてゐたといふ「何ともしれぬ京の杉重」は、おくり來した酒樽の中に死骸が入つてゐたといふ「俗つれ〴〵」の「思はく違ひの酒樽」と深い關係が見られる。しかし、今の自分は、後者を團水の補筆と見る故に、「俗つれ〴〵」に卽して、さまでの問題とはしない。

要するに、この書を團水が私利のため操作したとしては、餘りにはなばなしくない書である。かうまで師に似せおほせたと見るにしては、餘りに槪はれさうもない書である。かたがた、團水の序を言葉通りに解してよいやうである。槪はれさうもない、賣行のよくなささうな書ゆゑに、或は版元側で躊躇して、西鶴歿後數年後の出版となつたのであらうか。卷末に豫告した自事物「筆蔵」の上梓された形跡のないのも、いづれは版元側の事情であつたらう。

「俗つれ〴〵」「文反古」出版當時の團水の師の遺稿に對する態度と、「名殘の友」の今の態度との間に、かなり變化があるやうである。師の舊廬を守る日も、その時から見れば、三年四年を加へてゐる。尤も、その間に、彼が老獪の度を加へたといふならば、「名殘の友」の見解もまた異ならう。今はさうは考へない。

附言

以上の解說中、再版三版をいふのは寓目し得た範圍内のことである。他に多くの版本があるべきであらう。またさし繪について、少しく思ふところもあるが、今はしばらく、水谷不倒氏の「西鶴本」の所說に據ることにした。

「文反古」巻五初頁

解説　その二

一

井原西鶴に就いてものいふのは易い、いうて正しきを得るのは難い。今までのところでは、西鶴その人に關する資料は、ほんのわづかしか見出されてゐない。資料の乏しさが、推測を自由にさせもし、また眞實から遠ざからせもする。

西鶴その人に關はる傳への中で、これだけは間違ひがないといはれるのは、死歿の日であらう。元祿六年八月十日、これは彼の墓碑銘によつて明である。碑は現に存して、大坂東區上本町四丁目誓願寺にある。享和の頃には、寺でさへも墓主の何人であるかを忘れてゐた、またその後、もとの位置から、今のところに移した形跡もある。しかし、今後は、文豪の墓として、永く保存されるであらう。石のおもてには、大く深く刻された「仙皓西鶴」左にやゝ淺く「元祿六年癸酉八月十日」右に「下山鶴平北條團水建」とある。

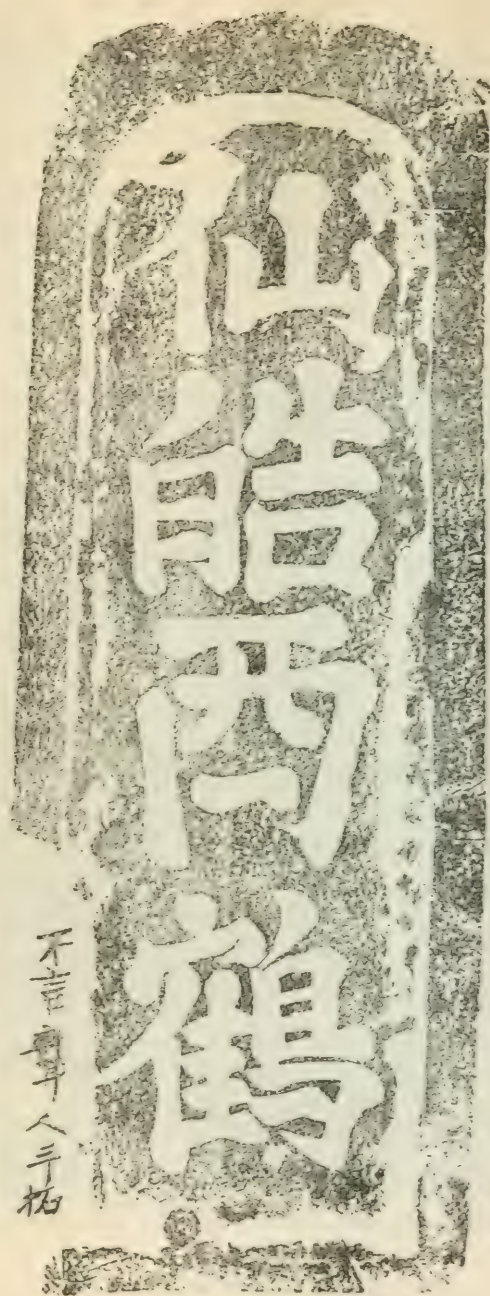
その年その月その日を傳へるものに、彼の遺著「西鶴置土産」「彼岸櫻」がある。二書はまた死歿の年の五十二歳であることをいひ、更に辭世を傳へてゐる。辭世はおのづから五十二歳の死を明にする。

人間五十年の究りそれさへ我にはあまりたるにましてや

浮世の月見過しにけり末二年

この五十二歳によつて、生れた年が算出される、寛永十九年に當る。生れた地の大坂であることは、彼み

仙皓西鶴

不言亭人手拓

高サ二尺八寸五分
幅一尺五分

西鶴墓碑拓本

墓碑、もと本堂西のうら手南向、三側目中ほどに在りきといふ。今は本堂の南隅に在り。

づからの筆と、他書にいふところとを合せて、また疑ふところがない。
寛永十七年の出生から數へれば、浮世草子の第一著天和二年版「好色一代男」は、彼の四十二歳の作であつた。今、それ以後の作、しばらく、この「西鶴名作集」に收載したものを限つて、年齒を以て序でゝみれば、次の如くになる。

四十一歳（天和二年）
「好色一代男」
四十二歳（天和三年）
四十三歳（貞享元年）
「諸艶大鑑」
四十四歳（同二年）
「西鶴諸國はなし」
四十五歳（同三年）
「近代艶隱者」「好色五人女」「好色一代女」「本朝二十不孝」

西鶴墓碑

「大坂伊歌仙」所藏

「置土產」所載

藏所「潁岸彷」

四十六歲（同四年）
「男色大鑑」「懷硯」
「武道傳來記」

四十七歲（元祿元年）
「日本永代藏」「武家義理物語」「新可笑記」

四十八歲（同二年）
「本朝櫻陰比事」「一目玉鉾」

四十九歲（同三年）

五十歲（同四年）

五十一歲（同五年）
「世間胸算用」

五十二歲（同六年）
「西鶴置土產」

歿後一年（同七年）
「西鶴織留」「後岸襪」

「鶴の跡」所載

歿後二年（同八年）
「俗つれ〴〵」
歿後三年（同九年）
「西鶴文反古」
歿後六年（同十二年）
「名殘の友」

表はあまりに遲く來つて、あまりに速く去つた浮世草子作者西鶴を示現する。來ることの遲いわけは、他の方面の西鶴と照してほゞ知られる。去ることの速き理由はつひに參考に資するものがない。殊に、四十五、六、七歲の三年にあれほどの盛を見せたのが、四十八歲以降、急に衰へたのは何故であらう。その衰への間にも書きかけた幾部はあつたらう。團水が整理して出版した四部にとゞ

「西鶴傳授車」所載

まらなかつたらう。それにしても、さうさせたのは身の病であつたらうか、心の病であつたか。臆測はなほいはれもするが、臆測を裏書すべき資料はなかなかに見出されない。

分野を異にしたその人の活動、すなはち、俳諧に於ける消息は、も少し明瞭である。潁原退藏氏の研究ほどこれを盡してゐる。雜誌「國語國文の研究」第十九號所載の「西鶴俳諧年譜」がそれである。今、天和二年以降の分に就いて、その要を抄出すれば次の如くである。

四十一歳（天和二年）

三月、師西山宗因歿す。三千風撰「松島眺望集」幾音撰「家土産」黒風撰「高名集」出句。

四十二歳（同三年）

宗因の一周忌を營む、追善集「精進膾」撰

四十三歳（貞享元年）

六月、住吉神前大矢數興行

四十四歳（同二年）

四十五歳（同三年）

西吟撰「庵櫻」出句

四十六歳（同四年）

四十七歳（元祿元年）

四十八歳（同二年）

四十九歲（同三年）
燈外撰「生駒堂」鬼貫撰「大悟物語」出句。團水撰「團袋」序及び團水との兩吟。（西鶴と號す）
五十歲（同四年）
律友撰「四國猿」順水撰「渡し船」賀子撰「蓮の實」江水撰「百人一句」出句。（「渡し船」「百人一句」西鶴號。）
「石車」撰。
五十一歲（同五年）
季範撰「如月集」助叟撰「釿始」沾德撰「誹林一字幽蘭集」遠舟撰「すがた哉」出句。春色撰「わたまし抄」出句及び跋。
前句附集「難波土產」評點。
五十二歲（同六年）
休計撰「浪花置火燵」南水、安之撰「熊野烏」遠舟撰「不知斧」出句
この表があつて、はじめて浮世草子の年表の意味の讀み得るものが少くない。浮世草子の消長はすべて俳諧の起伏と聯關してゐる。俳諧からまだ絕緣されない四十二、三歲あたりは、まだ浮世草子の數も少なかつた。俳諧と風馬牛の間柄となつて、はじめて、四十五歲から八歲にかけての大飛躍となつたのである。四十九歲、五十歲に於ける年表の空白は、俳諧年表の復活努力のあとによつて補はれてゐる。
しかし、新しい疑問も、この表から起つて來る。天和二年に於ける宗因の死と「一代男」刊行の間には、

何等かの關係があらうか。かねてから浮世草子に食指は動きながら、なほ師に憚つてゐたのが、こゝに解放されたためであらうか。「諸艶大鑑」を出して、浮世草子の熱の漸く嵩り來つた貞享元年、すなはち淨瑠璃「暦」などをも書いて、興は漸く俳諧を遠ざかつたと思はれる四十三歳の夏、突爾として住吉の神前に大矢數を興行したのは何故であらうか。

この日、六月五日、一日一夜の獨吟實に二萬三千五百句、つひに人間のなすところでなかつた。後の人、或はあまりの不思議に、その事を疑ひもする。けれど幾多の證左があり、殊に西鶴を貶する者もこれをいつてゐる、最も信ずるに足りる。彼はかつて、三十六歳の折、獨吟千六百句を興行した

「俳諧師手鑑序」

ことがある。三十九歳の折、獨吟四千句を興行したことがある。三度これを浮世草子に向はうとする折に行つたのである、その意は何であらうか。俳諧大矢數の流行は西鶴の四千句の記録を破るものをも出した、その記録をとりかへさうとするためであらうか。俳諧の未練ゆゑか。大矢數摸倣の徒にとゞめを刺しておいて、心おきなく浮世草子に精進するためか、いろいろの事が考へられる。

三十四歳の折に、初號鶴永を西鶴と改めてから、もう久しく用ゐ來つたその號を、四十九歳になつて西鵬と改めたのは何故であらうか。西鶴の鶴は鶴永の鶴、西は師宗因の姓西山の一字を戴くもの、すなはち彼に

あつては最も由緒がある。それを棄てたのは何故であらうか。初號鶴永をもたほ棄てかねて、そのまゝに浮世草子の印欵に用ゐる後であるのに、一體どうしたわけであらう。

西鵬の名は、すでに「新可笑記」の序に用ゐてゐる。元祿元年、四十歳の作である。それを三年の後の俳諧書「團袋」の序に西鵬の鵬に註記して、「鶴ノ字ノ改」と書いたのは何故であらうか。

「新可笑記」に西鵬としるしたのは、なほ一時の戯れであらう。しかも、「團袋」に特記した西鵬も、その

三十四

「大坂俳歌仙」所載

戯れを再びしたのであらうか。或は名を齊しうしながら實を異にして用ゐたのであらうか。異にした實とは、北冥の鯤の化して南冥に遷る鵬の本義に從ふものであらうか。浮世草子から俳壇に遷るの意を寓するのであらうか。「新可笑記」に西鵬號を用ゐてすでに三年、しかも、俳壇の人は必ずしも浮世草子の讀者でないことを思ふの用意が、「團袋」の序に、西鶴改め西鵬なることを斷らしめたのであらうか。後の俳壇の復歸は一庵

棲」に西鶴號の一句を殘したなり、全く交渉を絶つて、こゝに三年を經過してた後のことであつた。

書きかけては完成しない幾部を殘した浮世草子の末路はさびしかつた。鵬翼三千里を心に期するけはひはありながら、俳諧にもさまでの働きを見せなかつた。事皆非、然る所以は西鶴の身の病か、心の病か。「團袋」の序に見える萎れ姿は、そのまゝに彼の現實のものとして解すべきであらうか。こゝにせめて一篇の終焉記があつてくれたならばと思ふのは、自分一人だけでなからう。あの追善集「心葉」が、も少し、西鶴その人の身の上を語つてくれたならばと、撰者團水を怨みもする。個人としての西鶴を語る資料の乏しさは、これ等の疑問を疑問にをはらせがちである。わけて、來ることの遲くして、去ることの速さに過ぐる浮世草子作者としての彼に至つては、到底反魂の法をかりて、その人の口から身の上を聞くより外はないやらである。

「高名集」所載

二

西鶴の傳記資料も、實はさうまで乏しくないのかも知れない。たとへば、「見聞談叢」の例もある。この書、伊藤仁齋の第二子梅宇の筆錄に係る。傳寫してわづかに好事の間にのみ讀まれてゐた。それがたまたま昭和三年六月「日本藝林叢書」に收められてから、はじめて世に弘く讀まれるやうになつたのである。

貞享元祿の頃、攝津の大坂に、平山藤五といふ町人あり、有德なるものなれるか、妻もはやく死し、一女あれども盲目、それも死せり、名跡を手代にゆづりて、僧ともならす、世間を自由にくらし、行脚同事にて、頭陀をかけ、半年程諸方を巡りては宿へ歸り、甚俳諧をこのみ、一晶をしたひ、後には又流義も自己の流義になりたる、西鶴とあらため、永代藏又は西ノ海、又は世上四民雛形なといふ書を、作れるものなり、世間の吉凶悔吝患難予奪の氣味、よくあしらひ、人情にさとく生れつきたるもの也、又老莊ともみえす、別種のいき形とみゆ、黑田侯歸國の時、大坂の御屋敷へ、大坂にて召して、次にてはなし聞き給ひ、世上へ出し、使番聞番留守居の役に云付侍らは、かゆき所へ手のとゝくやうにあらん人からと稱し給ふよし云々。

この記事のうちにどうであらうかと首傾けられる節々も少くない。しかし、西鶴の著作を通じておもひ偲ぶ風貌を鮮にしてくれる點も多い。

西鶴の大坂生れであることは、傳ふる書が多い、しかし、町人の出であることは、その記事が初見のやうである。なほ彼の著作はまたこれを裏書する。彼は相應な產を有してゐたといふことも、著作から考へられなくはない。娘が盲目だといふことも、また推察されなくはない。著作中あまりなるまでに多く書かれてゐ

る聽耳のはなしは、それを裏から證するものであらう。行脚のことも、ある割引をさへおけば、著作中の土地土地の記事から容易に思ひ寄せられもする。

黑田侯が彼を召して話を聞くの一條、また信憑するに足りる。彼の著作中の教訓ぶりの如き、これを假名草子の餘風にのみ歸するのは當らなからう、その人にその好みがあり、日頃も隨分「浮世物語」の浮世房の如き「伊保物語」の伊菩保に類する口吻のあつたことは、もとより考へられる。

ほんの短い記事の、しかもなほ疑はしき節々のあるものでも、なほ西鶴の推定を確證に轉じさせ、その人と著作との關係を闡明するものがある。更に第二第三の「見聞談叢」が世に出たならばどうであらう。かくしてはじめて西鶴の全豹を知ることが出來る。

三

それ等の材料を廣く索めるのは勿論であるが、索めて得られる日をいつと待たう。その間を空しくゐるよりは、理、これを容すものでありさへすれば、彼の著作に存分の推測を加ふべきであらう。今日はそれより外に途はない。諸家の推定說、最も喜んで聽くべきであらう。

この頃、西鶴江戶居住の推定說が公にされた。眞山青果氏の「井原西鶴の江戶居住時代」、本年三月の「中央公論」所載のものこれである。その略にいふ。

西鶴の江戶に來ること生涯に四五回、そのうちほゞ年代の推測されるのが寬文の末年、延寶四五年の頃、及び貞享三年である。貞享三年の秋七月から九月の間に、江戶に下つたと思はれる西鶴は、そのまゝに滯留して元祿三年の春或は夏に至つた。すなはち「本朝二十不孝」から「一目玉鉾」「新吉原常々草」までの著

作は、すべて、この江戸居住の期間に成つたのである。西鶴の著作の大半は實にその期間に成つたのである。西鶴の著作をしばらく世説に隨つて好色物、武家物、雜筆小話、町人物の四類に別つとすれば、好色物町人物は上方の出版、武家物雜筆小話は江戸の出版である。換言すれば、西鶴が江戸移住前の著作は全部好色本の系統に屬し、江戸を去つて歸坂後の出版が大體町人物の種類に屬する。作品に現はれたこの變遷推移は地的環境の變化から來たといはれる。

この江戸居住説の據るところは多い。その一つは「男色大鑑」の卷一の冒頭に、「菟角は男世帶にして、住所を武藏の江府に極めて、淺草の片陰に借地をして、世の悲喜、人の治亂をも構はず、不斷に門を鎖ぢて朝飯まへに若道根元記の口談、見聞覺知の四つの年まで諸國を尋ね、一切衆道のありがたき事のこらず書集め、男女のわかちを沙汰する」とある本文の中から、西鶴その人を見出すことである。更にまた「新吉原常々草」を西鶴の眞作なりと認めて、その記事によつて前證を裏書することである。かくして、西鶴傳記のうちに、

貞享三年の頃江戸淺草の僑居に移住し、爾後三四年間、門を鎖して各種の著作に耽る

の數行を加へようとする。

據るところは、また西鶴著作の奥附による版元關係である。貞享三年十一月、「二十不孝」に於いてはじめて江戸の版元の署名を見、その後ひきつゞいて、江戸版元の單獨出版、或は京坂版元との聯合出版となつてゐることとである。更にまた、元祿四年の大坂出版の俳書「團袋」の序文に見える「西鶴鶴の字ヲ改」とある改名披露である。西鶴の名はすでに三年前の「新可笑記」に見えてゐる、それをまたこゝに特記したのは、江戸居住中の改名であるがために、未だ故郷大坂に知られないことを語るものと解されたのである。他にも

根據があるが、こゝには以上の重いものだけを擧げる。

眞山氏の說は氏みづからもいはれてゐるやうに、西鶴晩年の健康狀態、江戸移住の目的、歸坂事情の說を具してはじめて盡さるべきものであらう。その詳說を聽くの日のはやきを念とする。とにかく、自分もまた西鶴の江戸居住とまでゞなくとも、江戸來遊を信じ、また彼の著作と地的環境の關係を信ずるものである、たゞ氏が擧げた證左を證左としない。しかし、自分は氏の說に案内されて、なほ一度と、この問題を考へるであらう。それにつけても、深く知りたいのは、江戸の俳人と西鶴との交渉である。

其角と西鶴とはすでに面識がある筈だ。氣心も合ふらしい。西鶴が江戸に居住しながら、一度もこれを訪れないことはなからう。もしあつたなら、其角の集のいづれにかその影を宿すであらう。江戸には、また宗因を初祖と仰ぐ談林の徒も多い、西鶴がそれ等と卷いた歌仙はつひに見出されないのであらうか。寛政壬子の年、西鶴を談林二祖と仰ぐ人々は、うち集うて百年忌を催し、追善の集をも出してゐる。けれど、一人の江戸居住をいふもののないのは、時の隔たることとあまりに遠く、すでにその傳へを失つたためであらうか。

さうだとすると、その時から更に久しきを經た今日に、傳へを索め出すことは出來さうもない、それはまだしものこと、抑はじめから其ものがないとしたら、どう考へたらよからう。西鶴がさうまで江戸の俳人を避ける事情は何であらう。今から果してその檢討を期し得られようか。おぼつかない限りである。

ともあれ、西鶴を考へる以上、まづ彼の俳諧からはじめねばならないことは確である。ひとり、その人に就いていふだけでなく、彼の藝術、彼の浮世草子に就いても、さういはれる。

四

西鶴が俳諧を學びはじめたのが、明暦三年、十六歳の頃であること、點者となつたのが、寛文二年、二十一歳の頃であることは、諸書に證左あつて疑ふまでもないやうである。して見ると、天和二年、四十一歳で浮世草子に轉じようとしたのは、二十六年の俳諧生活から離れることになる。驚くべき急變であつた。時の人の呆れぶりも考へられる。

しかし、事は果して急變であつたらうか。西鶴の俳諧が晩年に於いて漸く帶び來つた閑寂に終始してゐたならば、なほ蕉風の標榜するところに類してゐたならば、或はさうもいへるが、西鶴の俳諧、また彼が屬する談材の俳諧の性質は、おのづから蕉風の閑寂と異なるものである。興は山野幽邃の境に寄せられずに、遊里絃歌の地に寓せられる。さながらに浮世草子の世界のものであつた。その俳諧がわづかに表現の様式をかへさへすれば、もうとうに浮世草子であり、好色本であつた。西鶴があれからこれへ遷るのに、何の不思議があらう。むしろ、その日が遲きに過ぎたことを怪まねばならない。

何にしても、西鶴が永い馴染の俳諧から離れるには、うしろ髪ひかれる思ひがあつたらう。心惑ひの折から師宗因は歿した。これを機縁として新しい途を拓いたのであらう。それはそれとして、二十六年はあまりに永かつた。彼の目も耳も心もすべて俳諧的になりきつた。新しい藝を浮世草子に托さうとしながらも、態度も手法も依然として昨の俳諧を脱しかぬるものがあつた。浮世草子の十年には、おのづから變遷があり、推移があるが、おしなべては俳諧的といふに歸する。

俳諧的な、あまりに俳諧的な筆、これが西鶴の浮世草子の長所であつて、また短所であらう。それならば短所を舍てゝ長所のみを取らうか、つひに西鶴の藝は殘骸にをはるであらう。

西鶴十年の浮世草子は好色物、武家物、町人物に區別されてゐる。それ等に屬するものを繫ぐ絲の細さをふたゝび吟味したならば、どこをそれと斷つよしもならう。しかも、劃然として區別されることも確實である、この現象をも、なほ俳諧的といへばいへないことはない。

俳諧の技、前句を承けて後句をつゞける、承けるに聯絡がなければならない、續けるに距離がなければならない。この用意を缺いた俳諧は、たゞ平淡の附句であつて、俳諧ではない。どこに轉の妙があらう。西鶴の發句がさまでのものでないことは世に定評があるけれど、俳諧においては、もとより談林の標準によることであるが、當時また、この人に比肩する一人もなかつた。

連俳は對手を要するものゝ、また一人でもなし得る、いはゆる獨吟である。この場合はおのれの前句を他人の句と見なければならない。さう見ることに於いて、はじめて聯句の關係を保ち得る。西鶴の著作の推移は、獨吟の變化と同樣である。「好色一代男」を書いて「二代男」に及ぶ、二者の間に聯絡がある。また距離がある。「二代男」を書いて「諸國ばなし」を書く、即くものがある、離れるものがある、その他、おのおのの作品は、この關係を保つて、これからそれへと移りゆく。移りゆくのに、自然の傾向がある。好色物、武家物、町人物といふのは、その傾向の大體についていふのである。後の人の立てた目であつて、西鶴その人の與り知らぬところである。

西鶴が浮世草子に筆を執りはじめた時、もう人生に對する考へ方は熟してゐた。四十一歲から五十二歲まで、その作の相は變るとも、貫くものに、さまでの變化がない。變化は、みづからの興を對象すると共に、また讀者の興を眼目とすることによつて起る。西鶴は「胸算用」に於いて、かういふ事實を指摘した。

伊勢より例年諸國に旦那廻りの祝義狀、大分の事なれば、能筆に手間賃にて書せけるに、一通一文づゝにて大晦日から大晦日まで書きくらして、同じ事に氣をつくし、年中に二百文取る日は一日もなし、

飽いてはならぬ口過ぎ業でもかうである、この外の「人心うつりゆくならひ」とは、西鶴の見聞である。後はこの心を以て、おのが著作の讀者を考へる。ある意味で讀者を代表するのは版元の注文である。西鶴は筆を執るはじめに、それをも考慮に容れなければならない。「男色大鑑」の場合に明に見られる。

「五人女」「一代女」とうちつゞいた女物から離れて、この衆道の書があるのは、西鶴として、極めて自然の變化である。從來の作、諸國に亘るの外は、多く京大坂を中心としてゐる。多少の變化は、諸國に及ぶと共に江戶を中心とするを要する、まして、武士の衆道ばなしを主題とするには、地を江戶に擇ぶことを要する。すなはち西鶴作者みづからの姿めかして、

菟角は男世帶にして、住所を武藏の江府に極めて、淺草のかた陰にかり地をして

と書いたのである。作者がこれまでの者に對する變化を心得ての趣向である。今の自分はかういふ解釋の下に、この句を讀んでゐる。

「男色大鑑」はおのづから前後の二部に分たれる。前四卷は江戶屋敷詰の武家の衆道沙汰、後四卷は京坂の歌舞伎子衆の衆道ばなし、地的環境と社會的階級に於いて峻別せられてゐる。歌舞伎子の常として、三都の間を往來する以上、江戶の舞臺にも傳ふべき事があらうに、一異例を除く外、依然として、京坂の出來事としたのは何故であらうか。或は、版元の注文によるものでなからうか。すなはち江戶に專であつたならば、上方の讀者が不滿であらう。そこで、武家ならぬ、江戶ならぬ話を一括して、後に据ゑたのでなからうか。

今の自分はかういふ解釋を以て、初版奥附を讀む。奥附には京坂二書肆の名がしるされてゐる。それならば、「本朝二十不孝」の場合はどうであるか。奥附には、江戸と大坂の版元、名が並んでゐる。さればこそ、上方にはじまつて江戸に收め、しかも、江戸のめでた話に筆をおいたのである。趣は異なるも、意は全く「男色大鑑」と同じである。自分はさういふ考を以て、西鶴の地的環境と作品の關係を見る。

かういふ解釋が果して正しいか、どうかを知らない。しかし、かういふ解釋を思はせるほどに、西鶴の著作は種々の相を有つ。わづか十年のうちに、いふところの三變が存在してゐる。

然らば、西鶴が四十歳にして易らない、物の觀方、考へ方と、變りゆく著作の相との關係はどうであらう。西鶴の不易と變化の關係は、どういふ意味を有つのであらう。

西鶴はなほ螺旋塔のやうなものであらうか。登る前に、眺める廣さは決してゐる。一段づゝ登るに從つて眺めはかはる。かはりかはつて、つひに高きに至る。西鶴はなほ七めぐりの井戸のやうなものであらうか。水を求むる心ははじめから決してゐる。一めぐり、一めぐり、水をめぐつて、さて清きを汲む。西鶴の人生に對する見解は、すべて「一代男」に決定してゐる。視野はすでに限定されて、後のものは、つぎつぎに視點をかへるに過ぎない。視點をかへることによつて、視野は廣まらないが、視る限は一事一物をのこさない。そこに彼の成長と變化があつた。

好色物から武家物を經て、町人物に至り、「置土產」の世界におさまる。「置土產」は好色物にして町人物を兼ねる。恰も連作一卷の氣分の象徵、西鶴著作總收の感をなす。けれど、さう見ることは、やゝ俳諧的な見方に囚はれ過ぎてゐよう。西鶴に何等かの事情がなかつたら、まだこゝに止らなかつたらう。「一代男」の底

に流れてゐるものが、自らそれを暗示してゐる。

西鶴の作と作とが、どんな卽離の關係に於いて俳諧的であるか、その一つがどんな扱ひに於いて、俳諧的であるか。いひかへれば俳諧の態度と手法とが、それ等の中にどう見出されるかに就いて、ほんのかいなでの言をなさうとする。

五

「好色一代男」が西吟の跋にいふ轉合書であることは、いろいろの意義によつてゝはれるが、中に最も重きをなすものは「源氏物語」の俳諧化であらう。世之介とは源氏君のやつし姿であつた。世之介が勘當されて諸國を流浪したはて、和泉の海で高潮の難にあふこと、難後直にゆるされて家に歸り、またゆるされて粹のあそびに耽るの始終は、一度須磨にわび住した源氏君がよびかへされて榮華を極める一部の構想をうつしたものであらう。この大綱を外にして、細部の翻案は每章に見られる。その中で「源氏物語」の本文と最も緊密な關係ある章を物色すれば、卷二の「はにふの寢道具」がある。十四歲の世之介が仁王堂の飛子宿を訪ふ章である。據るところは「夕顏」である。

聊おもふ事ありて初瀨にこゝろさしける、一人ふたり、召仕を伴ひ、雲井の舍りといふ坂を上りて、人はいさ心もしらずと、貫之が讀し梅も、靑葉なる山ふかく、起誓かけまくも、かたじけなき返事をとる事、いつ迄かとつぶやきけるを聞て、又此度もかなふまでの、戀をいのらるゝと、おもふ事ぞかし。かたじけなき返事をとる事いつ迄かとつぶやく者は世之介である、身分ある人に戀して、その返事をいつ

迄か待たねばならぬか、早く手に入るやうにと祈るのである。これを聞いて、復かなふまでの戀を祈つてゐると思ふ者は召仕である。召仕の言葉は、戀のはじめに熱し、戀を得て冷める世之介の性格を示してゐる。「一代男」の世之介はもとよりその人であらう。しかし、西鶴は召仕意中の言葉を、源氏君が六條御息所に對する態度を評した「夕顏」の言葉から得たのであらう。

六條わたりにも、とけがたかりし御けしきをおもむけ聞え給ひて後、ひきかへしなのめならむはいとほしかし、されど、よそなりし御心惑ひのやうにあながちなることはなきも、いかなる事にかと見えたり

これを惟光に當る召仕にいはせたところに、西鶴の工夫があつたらう。

世之介は長谷の歸るさを、暮方に、椋橋の山の麓にかゝる、かすかな草の屋の垣根に生ひさがつたなた豆をおもしろいと見た。そこには、今こそ今と思はれる脇あけが下人に風情をつくりもする。また髪結ふけしきもあやしい、紙ひもの編笠の懸つてゐるのも訝しい。人に尋ねると、こゝは仁王堂とて、京大坂の飛子宿とのことであつた。

これを「源氏」の本文に看る。源氏君は五條あたりの暮つ方、垣根にはひまつはる夕顏の花を見た。源氏君御ともの隨身はその花を折らうとする。その家から美しい少女が出て來て、花はこれへと扇をさし出したとある。

「はにふの寢道具」のなた豆はこの夕顏に據り、下人に風情をつくる脇あけは、この少女を據どころにしたのである。

源氏君は夕顏の花さく宿の簾越しに多くの女の透影を見た、女だちの立つ中二階は塀めくものに圍まれて

ゐるので、君には女の足のあり所がわからない、丈の高さが怪しまれる。——たちさまよふらん下つ方思ひやるに、あながちにたけ高き心地ぞする、いかなるもののつどへるならんとやうかはりて思ぼさる！——西鶴が「髪結ふけしき常ならず」といふのは、この女の透影を轉じていふのであつた。

源氏君はやがて、その宿の女夕顏のもとに通ふことになる。しかも、夕顏はつひに身の素性を語らない。西鶴が仁王宿の雜子をして、世之介にいはずともよい身の上を語らせたのは、この筋を逆に用ゐたのである。

西鶴はまた雜子のもの語りを謠曲「花月」に據つて書いた。それは、こゝには說明を要さない。

「はにふの寢道具」と「夕顏」との關係は、なほ數多く指摘することが出來る。「一代男」が「源氏」に據るといふのは、大方かういふ意義である。

六

「一代男」に好評を博した西鶴は、こゝに續篇を書いた。「好色二代男」の別名がある「諸艷大鑑」である。粹の禮讃と、粹の批判と、おのづから前篇後篇に於ける態度の相異はあるが、原據は同じ「源氏物語」であつた。「源氏」の中「宇治十帖」に限られてゐた。この書の主人公めく世傳とは源氏君の義子薫に當る。父世之介の女護嶋渡りにひきかへて、世傳が若くして太夫來迎の往生を遂げたことに書かれたのは、據るところの薫が佛道に精進する人だからである。

「諸艷大鑑」の各章は「宇治十帖」に交渉を有たないものはないと思ふが、こゝには、卷一の「心を入て釘付の枕」をとつて、「橋姫」の卷との關係を考へることにする。

吉原の太夫薄雲がその頃の揚屋入りの常とて、奴の角内に負はれてゆく。清らかな香が角内の袂から通ふ。不思議に思つた太夫は、彼の着てゐた布子をとり寄せて、くけ目を解く。垢なれぬ白小袖がくけ込んである。早速、角内を呼んで問ひたゞしてみると、小袖は京の太夫高橋のおくり物であつた。互に契りかはした仲を割かれ、勘當もされて、今こゝに奉公してゐるといふ。薄雲は親方をよしなに計らうて、角内まことは粋客佐渡屋の源を京に歸してやる。もの寂しい寢覺の折に、開けなされと一つ木枕を持たせてやる。源は途上の宿で、開けてみると、引出し二つ、上に高橋への手紙、下に金やら丸藥やらがあつた。

これが「心を入て釘付の枕」の大要である。

薫大將が薫の名をおほせられるのは、その身がいみじき異香を放つためである。この異香がこよなき魅力となつてゐる。宇治の八宮を訪れたことがある。夜の道を馬でいそぐ。身の香の風にしたがうて匂ふので、途すがら「主知らぬ香とおどろく寢覺の家々」があつたといふ。

宇治の八宮は山寺籠りして、二人の姫君のみが留守される。月の面白さに、琴と琵琶を合せてゐる。薫は垣間見ることしばし、やがて御簾越しに語らふ。霧深き夜を曉かけて緣にゐることとて、狩衣はいたく濡れた。あたりは「うたてこの世の外の匂ひにやとあやしきまで薫り」みちた。あくる朝、京から迎への車が來た。薫は直衣に着かへる。脱ぎすてた狩衣をその宮仕の男に與へる。貰つた男は貰ひはしたものゝ、うつり香に困つた。ふさはしからぬ薫を持ちあつかふ、洗つてなくさうと思ひながら、それも出來なかつた。

とのゐ人かのおん脱ぎすての艶にいみじき狩のおん衣ども、えならぬ白き綾のおん衣の、なよ〳〵といひ知らず匂へるをうつし着て、身をはたえかへぬものなれば、似つかはしからぬ袖の香を、人ごとに咎

められめでらるゝなむ、なかなか所せかりける。心にまかせて身をやすくも振舞はれず、いとむくつけきまで人の驚く匂を、失ひてばやと思へど、所せき人の御うつり香にて、えも濯ぎ捨てぬぞあまりなるや。

薫はその夜の垣間見に琵琶彈く大君を戀することになる。その戀のかなしさが「宇治十帖」の主題である。今いふが如きは、單なる挿話にとゞまる。西鶴はそこから獨立した一章を成し得たのである。薫の狩衣を高橋の小補とし、その香を焚きこめた伽羅とし、そのとのゐ人を奴に見立てたところに、西鶴の趣向がある。薄雲が贈つた木枕も亦據りどころがある。薫が京に歸つたあと、手紙を姫君におくるついで、とのゐ人その他に、數々の贈物をした。贈物が木枕に、手紙が高橋への文に轉用されたことはいふまでもない。

こゝに擧げた例は、「宇治十帖」との關係が少しはつきりし過ぎはせぬかと思はれるものである。多くの場合、「諸艶大鑑」の原據に對する態度は、努めて離れようとしてゐるやうである。「一代男」がまだ「源氏」の筋立に囚へられたやうなものでない。そこに二者の相異がある。一つの例を擧げる。

「源氏」の「幻」の巻で源氏の君は紫上の死を悼んで、その面影を夢幻の間に見ることとしきりであつた。西鶴はそのおもかけを緣として、長崎で京の太夫の姿人形を人々に見せることにした。「一代男」の女護嶋渡りの前一章「みやこの姿人形」がそれである。同じ「源氏」の宇治十帖の「夢浮橋」では、薫大將が浮舟の君の行方を尋ねあぐむ、漸く尋ね得ても、もう舊の戀にかへられなかつた。西鶴はそのたへ難き失望を、遊女を探してつひに探し得ぬ失望に轉用した。その小野山を、千嶋の離小嶋に轉用した。「諸艶大鑑」の色道往生の前一章「有まで美人執行」がそれである。

[illegible]

好色三代男巻五 大尾　書林壽詞堂

皇都三條通　西村市郎右衛門

貞享三暦

孟陽上澣日　同八幡町通　坂上勝兵衛

刊行

「好色三代男」巻五終丁

この二章の比較は、それみづからの筋立と、また原據に對する態度との相異を明にするであらう。

七

このやうに、「源氏物語」を中において聯絡させられる「一代男」と「諸艶大鑑」であるが、こゝに「諸艶大鑑」の別名「好色二代男」をうけつぐ「好色三代男」が問題になる。

この書は永く西鶴のものとして信ぜられてゐた。しかし、今は誰もさうは思つてはゐない。措辭、趣向の相異もさることながら、出版事情の方からも、操作であることが證明されるからである。その操作者は誰であるか、こゝには考へずともよい。しかし、誰にもせよ、「二代男」の續篇とするならば、更に「宇治十帖」の作者につぐとするならば、當時の古典常識から考へて、まづ「狹衣物語」の翻案を試みなければなるまい。さもないかぎり、西鶴の作の表面をのみうけて、その微意の聯絡を斷つことになるからである。「狹衣」の著者は大貳三位であらう、母の紫式部が「源氏物語」を書いたのであるから、源氏に似ること多きこの書は、その子が書いた筈だと信じてゐたのが、その頃の讀書生の常識であつた。しかし、自分の讀み足らぬためか、まだ「三代男」から「狹衣」との交渉を見出すことが出來ない。果して、交渉が絶無ならば、この點からも「三代男」の操作であることが證據立てられはしまいかと思はれる。

或はいふであらう、西鶴は「狹衣」を讀まなかつたらうと、さうは思はない。少くとも「狹衣」のあるくだりを知つてゐたことは慥である。「男色大鑑」卷七「女方も爲なる土佐日記」に證がある。

九月十日の朝備前の國唐琴の泊り、虫明の瀬戸越る折ふし、彼飛鳥姫の都戀しきと、書殘されし扇も半

彌が仕出しの古歌もやうかと思はれ。

飛鳥姫とは、「狭衣」の主人公狭衣大將のおもひ人であつた。姫は乳母の姦計にかゝり、要せられて筑紫に下る。かなしさに堪へかねて蟲明の瀬戸に投身する。死に臨んで大將の贈り物の扇に一首の歌を書く、

はやき瀬の底のもくづとなりにきと扇の風よ吹きも傳へよ

西鶴のいふのはこの事件であつた。歌は彼の誤記である。おそらく、西鶴がこの筆を執つた時、座右その書がなかつたらう、あつたにしても、新に檢出しなかつたらう。歌の誤謬はかへつて、彼の「狭衣」讀餘の記憶を證明しはせぬか。「大句數」の中、すでに姫の投身をいふの句もある。まして、西鶴の作中、時に「狭衣」の面影めくものの、見えることとも考へ合せねばならない。

八

「諸艶大鑑」から「西鶴諸國はなし」への推移は、「一代男」以來の諸國遊里ばなしが遊里を脇にして、奇談異聞を主としたためとも一應は考へられる。しかし、それだけではないやうである。

「諸艶大鑑」の中に怪談筋の多いこと、また目次の小見出の何々の事といふのが、「一代男」のより多くなつてゐること、殊に、發端また序と見るべき「親の良は見ぬ初夢」の趣向は、どうしても「宇治拾遺物語」を聯想させる。

二代男の世傳が嶋原の出口の茶屋に末社もろとも腰うちかけて、古遣手から諸國の色里の物語を聞いたといふのは、そのまゝに、宇治大納言隆國が宇治橋のほとりに住ひして、往來の旅人をすべて呼びとめて、諸

國の物語をさせた、その問書が「宇治拾遺物語」であるといふ傳へに據つたのであらう。しかも「諸艶大鑑」一の中、「宇治拾遺物語」の翻案が少なからず見出される。

おもふに、西鶴は「宇治十帖」に據ることを本意としながら、その宇治を緣として「宇治拾遺」をも合はせてとり入れたのであらう。例の戯ごゝろの所作であつたらう。その戯れ心が俳諧的な所以である。

「宇治拾遺物語」との關係を、わづかに一例を擧げて示さうとする。卷三「朱雀の狐福」がやゝ恰好であらう。「宇治十帖」と、この章との關係は、はじめの二三の卷に見える八宮の老侍女、もとの女三宮に仕へてゐた辨を嶋原通の老婆にしたことに於いて見られる。辨は薫の母女三宮と、薫の實父柏木との仲を精しく知つてゐた。薫は辨から事の終始を聞き、また二人のとりかはした古手紙をさへ貰ひうけた。それが老婆の嶋原女郎内幕の素破拔きに仕立かへられたのである。

その老婆が嶋原狐であるといふことが、「宇治拾遺」と交渉を有つ。「宇治拾遺」の一章、「利仁薯粥の事」には、利仁將軍のまだ若い時分、五位の官人に薯粥を馳走するとて、敦賀の家まで拉れてゆくことが書いてある。事は突然であつて供も一人しかゐない、もとより敦賀の家には、その旨を通じてなかつた。京から三津の濱にかゝる、一疋の狐が走り出た。利仁はよき使がゐたとて追ひかけて捕へる。利仁は狐に對つて、おのれ狐、今宵の中にわが家に參つて、俄に客人をつれ申す、明日の巳の時に、さるところまで、男ども迎へに馬を牽き來れと通ぜよ。通ぜずは容赦はないぞといひ聞す。放たれた狐は見かへり見かへりして前に走り行く。そのあくる朝、果して命じたところに迎の者どもが來た。牽き來つた馬に乗る、やがて家に到る。五位は薯粥のもてなしに飽き充ちた。歸りには數多の贈りものさへ貰つた。

さても、薯粥を食べてゐるほど、かの狐も姿を見せた。利仁は、それにも物を食はせた。「朱雀の狐福」では、嶋原へ通ふ男が、老女の野路の雨に困ずるを見かねて傘を貸す、また途中をおくつてやる。老女はうれしさのあまり、問はず語りに嶋原の女郎の秘密を語る。女郎の文の封目の由來も語る。それ聞きながらつれ立ちてゆくほどに、叢から斑な小狐が出て、老女を見て喜び顔である。老女は目の色かはつて「それとつれてむかふの穴に入て跡なし、さては傘て聞つる、嶋原狐なるべし」男は廓に行つて、今聞いた秘密をたしかめると、一つも違ふことはなかつた。

遊客が遊女の秘密を知るのは、五位が薯粥をもてなされるよりなほ嬉しかつたらう。狐福といはねばならない。西鶴はいひ傳への嶋原狐を利用して「宇治拾遺」の狐ばなしをとり込み、またかれの福をこれの福にかへ用ゐたのである。それならば、狐を一度捕へて放つたことをば、西鶴は切棄てたか。いな、はじめのあたりに、新隱れ里の一間に落度あつて縛られてゐる女小姓の繩目を解いてやつたことに書きかへてゐる。女小姓はお禮心に御內證間を案內し、お茶などもてなしたとある。これは利仁と五位とを一人のうへに作りかへたのである。

「宇治拾遺」を、このやうに利用した西鶴が、今度は、その書の形式を假りて「諸國ばなし」を書いたとは、極めて自然の推移といはねばならない。

九

「諸國はなし」はいふが如くにして生れたとするも、この書の輕く、乏しいことは「諸艶大鑑」と比すべ

くもない。疑ひは、今賣出しの新作者西鶴が、どうしてこれを公にしたかにかゝつて來る。

「諸國はなし」が「宇治拾遺」を母胎とするならば、どうしても題號は「大下馬」でなければならない。宇治大納言が旅人をとゞめて咄しを聞いたといふ「宇治拾遺」の序文の傳へをそのまゝに、大下馬札うつて旅人をとゞめる意に於いて命じた書名であるからである「近年諸國咄」の別號は註記めかしたのだからまだしも、題簽が本題を避けて「西鶴諸國はなし」といふのは何故であらうか。

この疑ひには二重の意義が籠る。一體、西鶴著作のうちで、生前西鶴と署名した何があらう。「近代艶隱者」の序文には別の理由があるからともかく、他には何一つない。これは理由のないことであらうか。鶴永とはいつた、松壽とはいつた、つひに西鶴とはいはないのは何故であらうか。西鶴とはいつた、しかも、それをまた俳諧にも用ゐた、それにも何か意味があらう。俳書では西鶴改め西鵬の斷りをいひながら、浮世草子で言及しないのは何か理由があらう。或は西鵬號の初出が「新可笑記」であつたればこそ俳號にも用ゐもしたものゝ、さなくば俳諧方面では、これを棄てたのであらうか。「新可笑記」の性質から忖度すれば、やゝ考へられるものはある。その考へは西鶴が必ずしも浮世草子を重く視てゐないといふ推定までに導かうとする。今はその推定を窮めることを避けておく。

とにかくに、西鶴の志怪の書を續つて三題のあることは疑ひである。特に題簽の書名も疑はれる。しばらく、それを、西鶴の本意ならぬ出版事情であるとする。一應の推測は立つ。推測はまた「諸國はなし」の貧弱に對する疑ひに及んで來る。

奥附によれば「諸艶大鑑」は貞享元年初夏の刊、「諸國はなし」は二年正月の刊である。貞享元年といへば

その六月に西鶴は俳壇未だかつて聞かざる、いな人間のあらゆる業蹟を通じて例なき、獨吟二萬三千五百句の大矢數をなしたのである。

天和二年の冬「一代男」を完成したあと、西鶴は直に「諸艶大鑑」の執筆にとりかゝつたらう。翌三年のうちには完成したのであらう。完成すると共に、今までも心を籠めてゐた大矢數の準備に專念したのであらう。思ふに、浮世草子の一部も出版しない三年こそ西鶴にとつてはたゞならぬ忙しさがあつたらう。四年改元貞享元年の春になると、ひたもの狂ひであつたらう。さて、六月にいよいよ大矢數に一世を驚破したのである。

貞享貳乙丑暦
正月上旬

神田新革屋町
西村半兵衛
京師三条通
西村市郎右衛門
同八幡町通
坂上勝兵衛
刊行

「宗祇諸國物語」終頁

これで俳壇には思ひのこすことがない、今は一途に浮世草子へと雄心は躍れど、疲勞には堪へない。しばらく休養しなければならない。しかし、浮世草子への心いそぎは、休養の間にも筆を執らせる。さすがに巨篇大作は思はずに、輕いものにとりかゝ

る。それが「大下馬」であつたらう。

「大下馬」の名は作者としては大に凝つた思ひつきであるが、惜しいことに内容を暗示しない。そこで「近年諸國咄」の別名を附ける。もとより「宇治拾遺」に對し、また近く「一休諸國物語」「一休關東咄」に對してのことであらう。しかし、別名はまだ顧客に對して魅力を缺く。版元はその前年の大矢數で、あれほど響いた雷名を利用しようとする。そこで、「西鶴諸國はなし」の題簽が出來た。かういふ推測はゆるされないのであらうか。或はまた西鶴みづからが、さうさせたと解する、そこには彼の自信が考へられる。けれど、他の西鶴著名を避けてゐるのを一致しない。今の自分はなほ前の考をつゞけてゐる。

諸國はなしの形式は、假名草子時代から、その頃にかけての流行であつた。現に「西鶴諸國はなし」と年を同じうして、「宗祇諸國物語」が出版されてゐる。「大下馬」の題簽は期するあつてか、期せずしてか、とにかく、古人宗祇と今人西鶴の對をさせたわけである。おそらく、西鶴はその書を手にしたらう、さて、自己の前著の缺陷を認めたのであらう。缺陷は諸國の見聞を錄したといひながら、見聞の主の現はれてゐない點にある。すなはちその書の體に倣つて、別に一部の奇談異聞の書を書いた、それが「懐硯」であつたらう。

また溯つて、貞享元年の秋から冬にかけての西鶴が休養の期間を考へる。

彼は筆を休めながら、頭は浮世草子の新計畫にいそがしい。おもふに、二萬三千五百句には、人間世界の萬事がいひ盡されてゐたらう。それ等の句をしばらく類によつて分てば、おのづから取材と趣向を異にする幾多の浮世草子の案を得ることは易い。西鶴はむしろ、いづれの案を先きにすべきかに迷つたのであらう。彼は焦慮を抑へ抑へて、翌貞享二年の執筆期間に全力を盡したのであらう。今は浮世草子の大矢數の準備とい

ふ考で、それからそれへと筆を進めたらう。書き終へる、すぐに版元へ渡したのもあらう。書き終へても、まだ後に廻したのもあらう。貞享三年、四年に亘つて出版された著作の順序は、必ずしも執筆完成の順序でなかつたらう。三年四年に執筆されたすべては、おそらく休養期間の腹案を實現したまでであらう。いな、彼の生涯の著作の立案は、その時に出來上つたのであらう、いな、その立案の全部を果さぬ中に、彼は浮世の月を見棄てたのであらう。

貞享元年の大矢數は、それ等の詠み句を緒上に顯はしたと「心葉」はいふ、緒は楮の誤であらうが、その楮上には草稿の意か、版本の意か、いづれにしても、傳來してゐることを聞かない。もし、それさへあつたならば、西鶴の全計畫を知らうものを、と遺憾に堪へない。

かういふ推測を中におかない限り、西鶴の著作推移の問題は、出版順のみでは解釋しかねるものがある。推移は出版事情を考慮しながら、遲速を決した西鶴の肚から、割出さねばならぬものが多いかと思はれる。

一〇

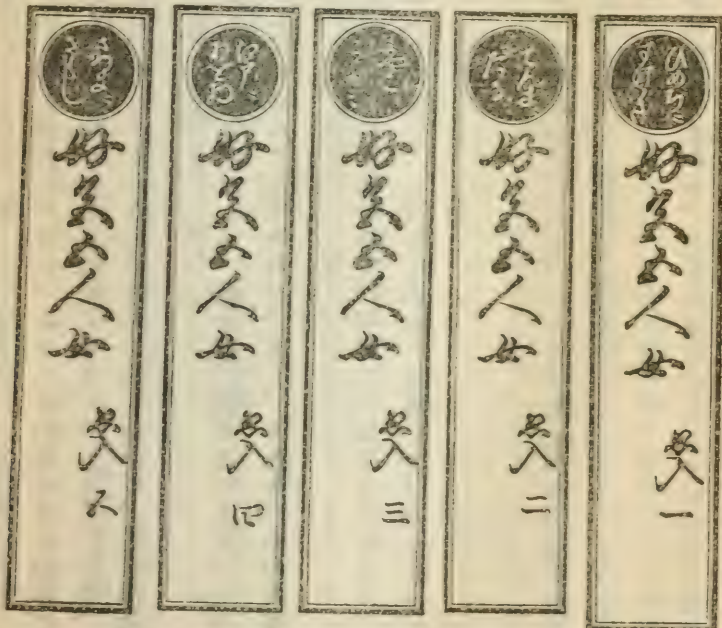
出版順序からいへば、「近代艶隱者」は「好色五人女」に先だつ。しかし、今の自分は「男色大鑑」の後の執筆と解してゐる。しばらく、「諸國はなし」に次ぐものとして、「好色五人女」を考へる。尤も、「五人女」と「一代女」の執筆前後については何等の推定を得ない。

「好色五人女」は事件發生の地理的關係から當然諸國ばなしである、尤も西鶴ははなしといふ語を避けて物語といつた。現に内題に於いてさういつてゐる、その何故かは、こゝの問題でなささうである。西鶴はまた

題簽の上にまで、その用意をおいたやうである。三ケ津を中に据ゑて、前後に姫路と薩摩を配したのも、讀者の第一印象を諸國に繋がせるための工夫であらう。

それはそれとして、まづ「好色五人女」の俳諧ぶりを考へねばならない。こゝにも據りどころがある、謠曲である。「五人女」が女をシテとした五番立の能の心であり、一巻五段の組織は、能の序破急五段のうつしであることは、「解説その一」でいつた、また繰りかへすまい。こゝには、いかやうに謠曲を扱つたかを、細部に入つて考へる。

それを考へる前に、さし當つて必要なのは「一代男」の謠曲の扱ひと、「諸艶大鑑」のそれとの相異である。もとより多くの説明の上でなければならないが、「一代男」はむしろ謠ひそのものに重きをおいたやうである。謠ひの調子を辭句の上に借りうつす場合が多い。勿論「はにふの寢道具」の「花月」の如く、趣向脚色に亙るものも少くない。すなはち花月と父

題簽「好色五人女」

との邂逅を、幼い世之介と、親ともいはゞいふほどの孫子の組合せに轉じたところに滑稽があり、俳諧があつた。しかし、それが必ずしも能であることを要さなかつた。「諸艶大鑑」になるときさうでない。その或ものは能の舞臺なしに考へかぬるものもある。巻二の「髪は鴫田の車僧」の如きがそれである。「諸艶大鑑」の例としての「宇治十帖」關係から見れば、これは「總角」に於ける薫と大君との意地くらべの翻案である。

また「宇治拾遺」との關係から見れば、「高階俊平が弟入道算術事」を採つたものであるが、能としては題名すでに明なやうに「車僧」に據ること勿論である。西鶴は三つのものを踏ひながら、何故にわざとらしくその一つを露はしたのであらう。いつもの癖である、俳諧ぶりを隱微のうちに弄する情手段である。讀者を弄び、作者みづからも戯れ遊ぶのである。二段の構へ、往々にして三段の構へ、そこに彼の俳諧ぶりが存する。今の場合もまさにそれである。

「車僧」はシテ愛宕の天狗とワキ車僧の行くらべである、天狗は車僧を魔道に誘はうとする、車僧はさうはさせじと爭ふ、天狗はつひに敗れて退散する。この行くらべを西鶴は笑はせる、笑ふまいを賭とした遊女と諸訓の力くらべに轉じたのである。

それだけだとすれば、なほ諸訓の文の上で事は足りる。それを能の舞臺といふのは、笑ふまい、笑はせるの趣向が、アヒ語りから脫化してゐるからである。この能のアヒ語りは特に「讃越天狗」の名に呼ばれてゐる。アヒの讃越天狗は、まづ「車僧」の筋立を述べる、ついで愛宕の天狗太郎坊の命令で車僧を笑はせ、その散心に乘じて魔道へ引入れようとすることを語る。語りをへて、車僧のそば近く寄る。

ならなう車僧車僧、

と呼びかける、車僧は答へない、

是はいかな事、彼奴は聾さうな、聾ならば最前の様に問答はせまい事じやが、何とぞしてちと笑はせて見よう

アヒにいろいろの所作がある。

車僧、車僧、車僧、車僧を笑はせう、車僧、車僧、お笑られ車僧。車僧の鼻の先を鼠が子を追うてあなたへはちよろ〳〵、此方へはちよろ〳〵〳〵や、ちよろ〳〵。お笑らや車僧車僧。

車僧はなほ笑はない、アヒは飛びつ、躍りつする、まだ笑はない、

鹿の角を蜂が螫いた程にもない、何とせうぞ、惣じて人間の身は刮るほどをかしい事はないと申す。是からちと刮て笑はせう。

アヒは車僧のそばへ寄る。

車僧を笑はせて、こそぐらふぞ車僧、くつ〳〵やくつ〳〵。はくつ〳〵やくつ〳〵。おわらやれ車僧。

車僧はくつ〳〵

アヒは手を車僧に當てる、ワキは扇で打つ、アヒは狼狽する、とても自分などの法力では及びもつかぬ、この旨を太郎坊に告げう、と語つて去る。

引くところは和泉流である、他流また大差はあるまい。以上は舞臺に於いてのみ行はれるものである。

この能の舞臺を原據とする傾向は、「五人女」に至つて窮つた。例としては巻一を擧げようが、これは「高砂」の舞臺なしには、解釋が出來さうもない。

第一段「戀は闇夜を甚の國」には、淸十郎と遊女皆川の關係が書かれてある。淸十郎の人となりを紹介するためである。淸十郎はこの曲ではワキである。「高砂」の神主に當る。

第二段「くけ帶よりあらはるゝ文」で、おなつが出場する。シテの出である。おなつは淸十郎と戀となる、思ひ思はれながら、人目の關に隔てられてゐる。西鶴は、これを「高砂」に於ける住江高砂の松に附會したのである。二つの松は相生の松によばれながら、播磨と攝津と國を隔てて、たゞ心ばかりを通はせてゐる。

第三段「太鼓による獅子舞」で、二人ははじめてうれしい契を結ぶ。春の野あそび、獅子舞のどさくさまぎれであつた。なほ「高砂」の春の日、高砂住江の相生の松の精が夫婦と現じ來つたことのやつしである。獅子舞は何か、謠曲の便宜によつて、後段の神の舞を移し來つたのであらう。

この段、西鶴は「高砂」の言葉をそのまゝに、またその言葉をあらぬさまに採ち用ゐてゐる。「高砂」利用の痕跡が露はに見える。冒頭の「尾上の櫻」また少し後ほどの「高砂曾禰の松も若綠立て砂濱の氣色又有まじき詠ぞかし」或は「海原靜に夕日紅」などである。

里の童子さらへ手毎に落葉かきのけ松露の春子を取など

といふ句が、シテの爵が手にするさらへを利かせ、「木の下蔭の落葉かくなるまで命ながらへて」を下にして、爵を童子とし、落葉かくことを松露の春子のためにすることにし、また姥を菫摘む女どもに見たてた俳諧の手法に至つては、心憎いかぎりといはねばならない。

第四段「状箱は宿に置て來た男」では、お夏淸十郎は大坂へと駈落する。便船に乘り合はせた飛脚の愚さゆゑに舟は戻され、二人は追手に捕へられる。しかも、淸十郎は無實の罪で刑死する。

舟の二人は、「高砂」に於いて、海人の小舟に乘つて住吉に行く尉と姥に當る。それならば飛脚には據りどころがなかつたか、その者がある。謠曲の文のおもてにはない、たゞ舞臺の上にある。間の狂言である。ワキの神主は尉姥のあとを追うて住吉へと志す、アヒに舟の便を賴む。アヒは奇特の義と稱讃する。さていふ。

折節某小船一艘作り立て持て候、未だのり初め仕らず候、かやうのめでたき神主殿をのせ申してこそ、舟路の行末も千秋万歳めでたからうずると存候間、神主殿を船玉と祝ひ申しおき、かんどりに乘り、住吉へ送り申さうずるにて候。

ワキは感謝する。アヒはまたいふ。

アレ御覧候へ、神慮の奇特にて、日本一の追手が吹來りて候、お舟にめされ候へ。

舟は追手の風をうけて住吉に着く。ワキはそこに神の出現にあひ、神の舞を見る。

このアヒを乘合舟の船頭にかへた西鶴は、「銘々の心祝なれば住吉さまへのお初尾」をといはせ、また「おのおのお仕合此風眞艫で御座る」といはせた。原のものと多少の聯絡を保つてゐる。西鶴はアヒを二度起用して飛脚とし、また逆用して、舟を戻させたのである。

更にまた西鶴は住吉の神の出現を、室の明神の夢枕に轉用したのである。

第五段「命のうちの七百兩のかね」では、おなつは狂亂する、やがて心靜つて比丘尼となる。「高砂」の祝言をこの悲哀に奪胎したところに、西鶴の人知れぬ誇りがあつたらう。

「一代男」「諸艶大鑑」と「好色五人女」とは、遊里と世間との事件の相異の外に、原據とするものに、大

きい相異が潜在してゐた。然らば、遊里から廣い世間に進出した女性を主人公とする「好色一代女」には、どんな原據の相異があるか。いひかへれば、どんな俳諧の態度と手法が見出されるか。

二

「解説その一」で、いつてゐるやうに、「一代女」の主人公の閲歴は上から下へと一定の方向を趨る、太夫の顯榮から惣嫁の墮落に至る、その至り極まるところに諦悟がある。比丘尼に姿をかへた彼女は、請はるゝまゝに、おのが身の上を告白する。いふまでもたく、その書は假名草子以來の比丘尼物の形式をとつてゐる。

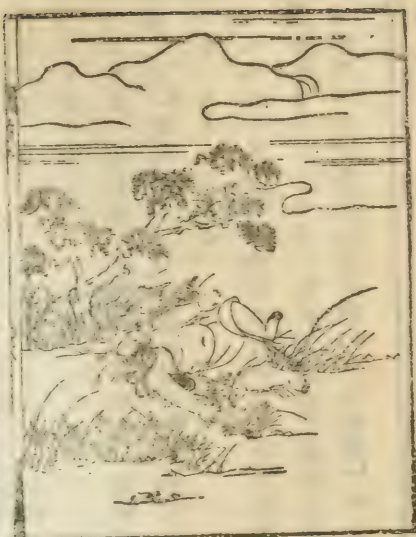
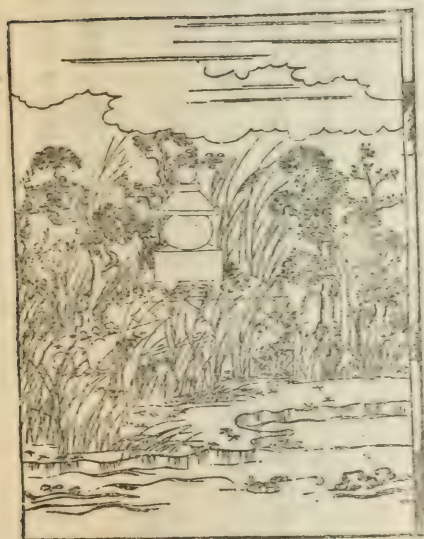
比丘尼物の形式を藉りて好色道を說く趣向は、西鶴の日にはすでに陳腐であつた。比丘尼の身で色の敎を說き、むかしの戀を語る、そのことに俳諧ありなどとは思つてゐなかつた。彼は比丘尼物を眞向に邀へて、これを擊ち、更にそれの基本とするものを破らうとした。正しい意味の比丘尼物には、とかく人の骸の日每にかはりゆく姿を見て、佛道に入ることがはじめに書かれてゐる。基づくところは「九相詩」にある。東坡の作といふ。新死相、肪脹相、血塗相、蓬亂相、噉食相、青瘀相、白骨連相、骨散相、古墳相、すなはち、息絕える、骸の腐る、骨が露れる、はなればなれになる、後に古墳となる、經過九段に分つて觀るところの相を諦つたものである。

別に九といふ數には拘はらないが、この變化の位相を一代女の閲歴の上に擬したのが「一代女」である。奇想驚くべきものがある。時に、彼はこの詩の辭をさながらに見せて、みづからの據るところをほのめかしたこともあつた。卷六「皆思謂の五百羅漢」に一つの例がある。

白骨連相

肪脹相

古墳相

散亂相

此時身の一大事を覺へて誠なるかな名は留つて良なし、骨は灰となる草澤邊

古墳相の原詩にいふ、

五蘊自元可皆空、緣底平生愛此躬、守塚幽魂飛夜月、失屍愚魄嘯秋風、名留無貌松丘下、骨化爲灰草澤中、石上碑文消不見、古人墳際涙生紅、

「一代女」の全篇の趣向は「九相詩」から出てゐる。しかし、發端に當る「老女のかくれ家」は他に據りどころがあつた。その何であるかは「一代女」の中に見える特殊な用語字例、すなはち浮世草子などに見馴れぬ漢字に、やゝ異やうな假名のつけられてゐるものに注意することに於いて、容易に推定される。わづかに四五の例を拾ふことにする。

一、何怜　うつくし。二、忍笑　ほゝゑみ。三、調謔　たはふれ。四、縄　いとすぢ。五、面子透迤　かほばせなよやか。

これほどのものは、たゞ發端だけではない、「一代女」の全篇に亙つて見出される。

例のすべては「遊仙窟」の中から索出される。版本のすべてがさらであるやうに、振假名は學生伊時が木嶋明神から授けられた訓法に從ふものである。さきの五例を原本の初出に合はすれば、次の如くである。

一、何怜(ウツクシケナル)ト嬌(コヒノ)裏ノ面(カホ)　二、忍笑(ホヽエミテ)ト嫫婪(ハシテラテ)ト返テ却テ廻ル　三、向來(イマシ)調謔(タハフレ)無ニシ處トシテ不ヤ佳(トイフヿヨカラ)

四、珠ノ縄(アミキヌ・イトスチ)絡(マツヒ・マツハン)ニ翠ノ衫(アセトリ)ニ(マツハンメ)　五、玉ノ體(スガタ)透迤(ナヨヤカニ)(トタチヤカニテ)　人間(ヨノナカニ)少(スクナシ)レ疋輝(テレル)輝(トテレルトキハ)　面子(カホツキ)ノ荏苒(ヘヽヤカニ)畏ルニ

ハシカハウケナンコト
彈穿
ツラソハウケナンコトヲ

からなると、更に進んで、「遊仙窟」と「一代女」の構想の關係に就いて考へねばならない。彼の俳諧手法の例を參照して考へればよい。少くとも發端はそれの翻案であらう。

張文成は青壁萬尋潭千仞の境に入る、古老の傳へて神仙の窟となすところであつた。崔女郎の舍といふに宿る。主の十娘は美しい、華の容婀娜に、玉の體透迤である、細やかな腰支は、勒ば斷えなんばかり。嫂と共に住ひしてゐる。二女の文成を遇することは厚い。金の盞、銀の盃、鶉の臛、桂の糝、辭に盡し難い。樂も奏する、舞うても見せる。文成と二女との間に唱和の詩が甚だ多い。その夜、文成と十娘と歡會がある。

嚮音煙霞子細。季曲見其皋后分明
官反。微細也。
實天上之靈奇、乃人間之妙絕。目所不
見。耳所不聞。日晩途遠、馬疲人乏。行至
一所。險峻非常。向上則有青壁萬尋、直
下則有碧潭千仞。古老相傳云。此是神
仙窟也。人跡罕及。漢武內傳曰。八方巨
海之中。有十洲。並是
人跡所希鳥路纔通。周王褒贈周處士
詩云。鳥道無蹊徑。
絕處也。
滿漢有
波瀾。每有香菓瓊枝。楚詞云。折瓊枝以繼佩也。天衣

慶安版「遊仙窟」

誰か知らん、あな憎くの病鵲の夜な夜なに人を驚す、薄媚狂鷄の三更曉を唱ふ。

文成は一度別れて二度逢ふよしもない。夢のやうな思出を亂腸の間に錄したのが、すなはち「遊仙窟」であつた。

この書は奈良朝の頃すでにわれに渡つて、平安朝貴紳に愛誦せられた。かへつて唐土には散佚されて見られないのに、江戸時代にはいちはやく開版せられた、西鶴坐右の書はおそらく慶安版本であらう。十娘五嫂の二女を一女とし、訪ふ男を二人とし、更に作者としての文成に擬した一人を設け、その若き女を老尼としたのが、「遊仙窟」の俳諧化であらう。好色庵の神仙窟なること、またいふまでもない。「老女のかくれ家」の本文になくして、さし繪にのみ見られるものに、琴と尺八の合奏がある。はしなくも、西鶴肚裏のものが、片鱗を示したのであらう。

文成と十娘と五嫂と興漸く酣であつた。座に箏を彈くものがある。

五嫂箏を詠じていはく、天素面をなして能く客を留めん、意を發き情つらなる、しかしながら渠に在り、怪しむことなかれ、向には頻戰なく、良に伴を得るによつて乍に心うららし。十娘が曰はく、五嫂は箏を詠す、わらはは尺八を詠ぜん、眼多にして本より渠をして愛せしむ、口少しきに元より每に侵さる、あぢきなく風聲のみして他の耳に徹ふらめ、人をして氣滿ちぬるときは自ら心に塡なん。

さし繪は西鶴が指定したらう、指定の據るところは、大方これであらう。

隱されたる「一代女」と「遊仙窟」の交渉は、次を以てまた隱されたる「男色大鑑」と「近代艶隱者」との交渉を考へさせる。

二

「遊仙窟」の用語例から見た「男色大鑑」は甚だ「一代女」に接近してゐる。西鶴の「遊仙窟」熱が一度冷めて、後また萌じたことがあるならばとにかく、さもない限りは、その例を見うけない「本朝二十四孝」より後の執筆でないかと思はれる。尤も、この推測は「遊仙窟」による以外の用語例からもいはれる。どうして「男色大鑑」の出版がおくれたか。事情は例の前四巻後四巻の内容に於ける距離から考へねばならない。前四巻は案外早く書かれてゐたらう、後四巻は後から添へ加へたらう。これも「遊仙窟」の辭句の使用の程度と、原調法をうつしとる正確の程度による推測である。

武家の衆道を書いた前四巻は、土地として江戸を中心とする故に、江戸住みの衆道好きを作者に託した。歌舞伎の衆道を書いた後四巻は、土地として殆ど京坂に限つたために、ほゞ西鶴を偲ばせるやうな人物を拉し來つた。前後相應ずる手段である。巻八の末にいふことあり、

其夜は紅葉見し櫻塚の落月庵にて物かたき俳諧の興行伊丹鴻の池酒のもてなし

西吟との關係は直に西鶴と聯想させる。しかし、その人は果して西鶴であらうか。西鶴が女色を無みして、衆道に精進した人であらうか、西鶴は伊丹鴻の池の酒のもてなしを喜んだであらうか。西鶴酒を好まずとはまづ斷じてよい。然らば衆道に對するものも疑つてよい。すなはち、作者はこゝにも託するところがあつたと考へられる。

「男色大鑑」の名は「諸艶大鑑」の題と相通ずるものがあるが、西鶴はそれとの聯絡を念としないで、直

に「好色一代男」に溯ることを思つたのであらう。「五人女」「一代女」は今の場合、問題でない。問題は「一代男」といかなる緊密を保つかにあつたらう。巻一の首章の末に、「なんぞ好色一代男とて、多くの金銀諸の女についやしぬ」といふのは、表に彼を疎んじて、裏に彼と結ぶものであらう。すなはち「男色大鑑」はある意味では、「好色一代男」の續篇と見られる。

「一代男」に男色に關する事項のないのではない。たゞ數に於いて少きに過ぐ。「男色大鑑」はその點からいへば「一代男」の補遺に當る。しかも、「一代男」の女色禮讃を逆することは、直に男色禮讃の聲を大にする所以である。西鶴はその安易に從つて趣向を設けたのである。男色の女色に優るものは意氣である、義理である。「一代男」の男色事項は、やゝそれに近い。その點からいへば、「男色大鑑」と「一代男」との間には、相應の聯絡が見られる。

義理と意氣を中心とした男色物には、背景として武家生活を擇ぶのが、最も書き易い。西鶴はまたその易きに從つた。武家生活そのものが目的でない。義理と意氣とを鮮さに見せる背景だけ、意氣でよいからである。もとより「一代男」以來つき纏はれる「諸國」であるがゆゑに、こゝにも諸國の事件とした。しかし、江戸が武家の都なるが故に、事件の多くを江戸のものとしたのである。なほ「一代男」で江戸を俠客の都と見るために、世之介を唐犬權兵衛のかゝり人としたのと異曲同工であらう。

男色が意氣と義理を中心とするために、武家の事件を擇んだものの、それでは餘りに華やかさを缺く。華やかさの要求は、ある程度に意氣と義理を伴ひさへすれば、歌舞伎の世界に轉じてよい。西鶴は地理的條件がなくとも、當然、後の四巻の添加を必要としたのであらう。

かくして、前後を通じて一部の若衆列傳を成すに至つた。女と男のちがひこそあれ、名妓と若衆との別こそあれ、「男色大鑑」は作意に於いて、「二代男」の後半と「諸艶大鑑」の全部との間に聯絡を保つてゐる。西鶴は「男色大鑑」の序及び首章に於いて、男色を神代の事に附會し、また少しく和漢の先例に就いて述べてゐる。殊更に男色を重くするためである、もとより貞意に出たのでなくして、貞意を裝ふものである。そこに滑稽の感が起る、談林の俳諧の慣用手段であつた。

かゝるものいひは西鶴に創つたのでない。先業の書に、すでに「よだれがけ」がある。卷五の「男色二倫書」の一節にいふ。

日域のむかしも二ばしらの神まではもはら陰陽の道もなく、たゞ男色のみにて、數千載は傳はりける。もとより砂土煮尊、大戸間邊尊、惶根尊いづれも陰神にておはしけれど、二ばしらの神よりぞ、みとのまぐはひははじまりけれ。

西鶴のいふところに、似進ふふしがある。或は西鶴はこれを模倣したのであらうか。尤も、この書の男色に對する、褒貶相半ばしてゐる。西鶴は貶を棄てて褒に專らにした。そこに一部の趣向であつたらう。「よだれがけ」には本朝漢土天笠の男色故事に就いていふことが多い。殊に、本朝の事蹟については別に一章を設けるほどである。

西鶴が「男色大鑑」の一名を「本朝若風俗」と命じたことは、それ等と多少の交渉がないわけでもない。もとより、西鶴のは、すべて現代の衆道物語である。なほ「大下馬」に別名「近年諸國はなし」がある例に倣へば、まさに「近年若風俗」といふべきであらう。

西鶴の日本紀よばはりも、所詮「よだれがけ」に倣ふものであるならば、何も「大かゞみ」めかして「大鑑」の名をよぶ要はない。たゞ若衆列傳の體を、藤氏列傳ともいはゞいふべき「大かゞみ」に結びつけるための命名でなからうか。多分さうであらう。然らば、從來の彼の作品の典據に對する態度が、やゝ動搖したものとして考ふべきであらう。

「男色大鑑」は直に「武道傳來記」「武家義理物語」と關係づけられる。しかし、こゝには「近代艶隱者」を中に挾んでいはうとする。

一三

何の關係もない「近代艶隱者」を「男色大鑑」につゞけて說く理由は、例の「遊仙窟」による用語に就いて考へるためである。

「艶隱者」の語句が「遊仙窟」中のものを用ゐることは、遙に「男色大鑑」の上にある、更に「一代女」の上にある。しかし、訓法の正しきを傳へるといふ點から考へれば、「艶隱者」はつひに二書に及ばない。過失がさうさせたのでない、故意に出づるやうである。やゝかれに倦んで新しきを求めたためかと思はれる。「艶隱者」の執筆期を、二書の後におく理由の一つはこれである。

「遊仙窟」の訓法をわざと更へたものを集めると、おのづから或る傾向が現はれてゐる。訓法以上の優雅を求めてゐる。たとへば香風の原訓カウハシキカゼをオヒカゼと改め、婿姑の原訓ウルハシ、またミヤヒヤカをユエヅクと改むるの類である。

香風とおひ風と、もとより義を同じうして、しかも、おひかぜが優雅の語感に於いて、稍まさるのは、「源氏物語」などに頻出するのも一因であらう。「若紫」にいふ「君のおんおひ風いと異なれば、うちの人々も心づかひすべかめり」の「おひ風」がそれである。ゆゑづくの語、また「源氏物語」になどに多い。「螢」の「手を今少しゆゑづけたらば」の「ゆゑづく」がそれである。

この態度はいはゞ西鶴の氣どりともいはうか。この氣どりが基調となつて西鶴異例の書を作らせたのである。同じ窟ではあるが、一つは好色庵に、一つは靈窟に翻された。好色庵は原義に通ひながら、世話にくだけてのをかしさを伴ひ、靈窟は原義に背きながら、辭のおもてに惹かれて、をかしさを覺えない。扱はうとする態度の相異である。

西鶴が、この書を通じて、氣どりを完しうする理由は、彼の生活に、さういふ半面が存するためであらう。かの追善句集「心葉」に見えてゐる西鶴の生活ぶりは、言葉のまゝに信ずべきであらう。

井原入道西鶴は風流の翁にて机の菊縣を這し釣舟に四季のものを咲せ哥行引曲をさとりて俳諧の通達ある事浦山の賤の子も乳房を離してこれを訪ふ、下戸なれは飲酒の苦をのかれて美食を貯へて人に喰せて樂む、おもへば一代男

氣どりはまた「列仙傳」「高士傳」を翻案させ、また老荘の口吻を弄させた。これ等は、また談林の俳諧に潜在する一勢力であつた。西鶴はそれを表面に扱つたとも見られる。奇矯を以て人を驚かさうとする心構へに至つては、勿論相通ずるものがある。西鶴は「艶隠者」の序は、よくみづからを語つてゐる。

世の中をおもふに何かめづらしからず、鳥に口ばしありはねあり、鳴も飛も心にまかすべし、人なから

人程替りたるものはなし。

しかも、人の中で隱者こそ樣かはつた者であつた。彼等の樂しみはまた世と異なるものがある。

何れか樂みを極め、世にうとからぬ人とは知られ侍る

西鶴は彼等の存在を珍しと見る。その樂しみを、世にまたかゝる異相のものありと見る。その尋常ならぬを感でて、傳を列ねたのである。序文の言葉は、このやうに解せられる。

序にまたいふ、

ひとりゝゝ名のなき人を尋ねしに皆世に傳へし人也、其身の取置に氣を付て見しにいはでそれとは隱れなし

言葉には矛盾がある。西鶴の書中に傳へるのは、跡を晦して名を知らさぬ、知られもせぬ人々である。さういふ人々の上をいひながら、こゝには、いはでそれとは隱れなしといふ、いふところは據るところの周知なものをさしていふのであらう。書中の人、必ずしも實在の人でないことを明にするのであらう。すなはち據るところを考へよの義であらう。

けだし、隱逸傳は西鶴以前から、また西鶴當時に於いても、なかなかの流行であつた。元政の作、「扶桑隱逸傳」の如きも、その流行をうけたものであらう。その頃に、いかに「列仙傳」「高士傳」が讀まれたか、それがいかに、多くの影響を讀書圏に與へたか。萬治版の「古今逸士傳」などは、それ等の書の綜合を期してゐたやうである。「艷隱者」の如き、或は直接はこれに據り、間接にのみ「列仙傳」「高士傳」に據つたのかも知れない。今は、たゞその書にいひ觸れてのみ止める。

「本朝二十不孝」の作、また常ならぬ者の義といふ點で、「覺隱者」と聯關して考へられる。珍しさから珍しさへ、物は運び、事は異なれど、同じ心で選擇される。選擇された人間世界の現象、作者の見聞覺知がつぎつぎに一部の書を成さしめる。

特に選んで不孝者列傳を編する意は、不孝が珍しいためでない、珍しい不孝の事件を集めようためであらう。作者の考へは、序文の陰にかすかに見えてゐる。

雪中の笋八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり、

この語、まづ人の熟耳を奪つて、いふところの二十四孝を否定する。二十四孝は奇行である、學ぶべきでない、よろしく常の人は常の行をなせといふ。

此常の人稀にして惡人多し。

この語、世の考へてゐるものを否定し、合はせて二十不孝を否定する。惡人が多く、不孝者の多い世に、二十不孝を選ぶことは無意味であらう。何の珍しさがあらう、讀む人をしてから思はせる。思はせておいて、不孝者に天の咎あることを說き、さて、

其例は諸國見聞するに不孝の輩眼前に其罪を顯はす、

この語、勸懲の意を明にすると共に、多い不孝者の中から特に選ばれた因果ばなしとして、漸くその選擇に期待させようとする。勸懲の實を知らうとよりは、その珍しさを追はうとする。讀者の心は作者の心である、いな、作者は讀者の心を豫想して、まづ珍奇の例を漁つて二十を得たのであらう。

一四

常人の世界に住して、隠者の生活を見れば珍しい、不孝者の行爲を見れば珍しい。この作者は、常人の讀者のために、その珍しいものを材料とする。町人の境涯にあつて武士の境涯を見れば、幾多の異相を見る。珍しさを求める町人の讀者のために、この作者はまたそれ等の材料を類聚する。いふところの西鶴の武士物はかゝる意味を以て成立したのでなからうか。男子の意氣と義理を探ねて、武家の世界に入つたのと違つて、世の耳目を驚かす敵討事件に出發した西鶴は、讀者に對する義理から、敵討の幾章を作り、章毎に敵討事件を書いてはゐるが、必ずしも章の中心、作の重心をそれにおかうとしない。興味は依然として町人と共通のものにとゞまる。いな、時に町人の讀者のために、武士を町人化することを避けない。かくある武士生活でなく、かくありたい武士生活でなくして、最も町人に解し易い武士生活が書かれがちになる。武道の型である。內容のない外殼である。その內容を最も易く充實するのは、「男色大鑑」に於いて、一度試みた衆道沙汰である。「武道傳來記」の刄傷事件に、敵討成立の原因に、衆道沙汰の纏はることの多きに、驚かされる。

西鶴のこの態度は、模倣の作「新武道傳來記」と參照することに於いて、一段と明であらう。本の體裁までも「傳來記」を模倣してはゐるが、一讀直にその相異に驚かれる。これには敵討のみが書かれてゐる。しかも、作者の眼は武士生活に徹しない。故に敵討の外輪のみに留る。武士ならぬものの興味にも充されないそれは、たゞ讀者の倦怠を誘ひがちである。

西鶴は讀者のためにのみ筆は執らない。作者意中のものを、何らかの形式で表現しないことはない。「傳來

記」に現はれた西鶴は、さまでに敵討を大事件と見てはゐなかつた。むしろ、敵討に到達する經路、また敵討後の態度を重じたやうである。討つ討たるゝのいづれにも、同情をも、反感をも懷かずに、討つ討たるゝ背後の力を凝視してゐたかと思はれる。例せば曾我兄弟の裾野の敵討そのものよりも、「義經記」ほどに、あの敵討を繞つて存在する敵討・因果關係をおもしろしと見るやうな態度である。敵を討ちをはつた武士が出家する事件は、彼が多大な感興を寄せたものであらう。

さう考へると、「二十不孝」に「新因果物語」といふ別名の與へられることも怪しむを要さない。おそらく彼は「因果物語」を二重の意味で讀んでゐたらう。因果に對する觀想と珍奇に對する興味とである。彼は實感を以て「因果物語」を讀む一事例を「胸算用」で見せてはゐる。しかし、趣向のために設けられたそれは、必ずしも彼みづからの讀法を示すまでに至らなかつた、遺憾である。

新武道傳來記　卷一

諸國敵討

目録

第一

第二

「新武道傳來記」目錄

「艶隱者」の背後に存在するものも、彼みづからと密接な關係なしとはいはれない。世を離れず卽かず靜に世の相を觀する隱者の態度をあらましと見る彼でなかつたか。或はすでにあり得る彼でなかつたか、さういふ事も思はれないではない。

西鶴の作品を讀んで、自分などの最も困難とするのは、題材では虛實のわかちであり、態度では作者みづからのと讀者へ對するものとの見わけである。

「傳來記」は敵討といふ限度の中にあるだけに、扱ひぶりにのみ作柄は決定される。そこへゆくと、同じ武家物ではあるが、「武家義理物語」になると、やゝ趣を異にする。

敵討といふ確定事實を限度としないで、義理といふ抽象觀念によつて類聚された、この作品である。武家生活に於ける取材方面は一段と廣くなる、まして、西鶴のいふ義理の觀念はやゝ空漠に過る。そこに材料選擇の自由がある。しかも扱ひぶりに變化を求めてゐる。西鶴の作品の各方面と交涉を有つ度合は、もとより「武道傳來記」と同一でない。

その交涉ある各篇各章を拔き來つて、「義理物語」のそれと比較したならばどうであらうか。事の類似と質の相異とが、西鶴の扱ひの推移を語るであらう。更に推移のあとを考察することに於いて、意識的に推移させたものと、無意識的に推移したものとの交錯を見るであらう。たとへば、卷五の「身がな二つ二人の男」に於ける遊女定家と、「好色一代男」卷六「全盛歌書羽織」の遊女野秋の比較は、たゞの一例でありながら、この間の消息を示すであらう。西鶴の武家物は、大方この意によつて解き得られるやうである。

如上の言は、同じ武家物の範疇に屬する「新可笑記」を讀むことによつて、なほ一層强くいひきることが出來さうである。

「新可笑記」の材料の範圍は更に廣くなつてゐる。どこかで武家生活に觸れさへすればよい、「義理物語」の義理をすら核心にしなくて濟む。隨分好色のはなしでも、武家の世界に持ち込みさへすればゆるされる材料の選擇である。「義理物語」よりもなほ、西鶴のあらゆる方面に交渉と聯絡を有つ。

「新可笑記」は題號がすでに示してゐるやうに、「可笑記」の作意を覘つてゐる。敎訓を眼目とする。名目上ではあるが、武家に關する事項に限つてゐるのも、敎訓の色合を濃く見せるに都合がよいためであらう。しかも、西鶴は敎訓の本筋よりも敎訓の例話を重く扱つた。どうも敎訓するなら、面白をかしさのみが頭に徹して、肝腎の敎訓が忘られるなら忘れてもよいといふほどの扱ひらしい。西鶴の序文の言葉は、言葉のままに解してよからう。

西鶴の作に敎訓分子は多い。そもそものはじめ、「好色一代男」から色濃く見られる。尤も、その場合には好色の敎訓そのものがすでに面白く、をかしく感ぜられよう。西鶴は讀者にそれらを强く感ぜしめるために、わざと聲を大にすることもあつたらう。今の「新可笑記」は、反對の立場にある。それならば、例話の一切を好色の世界にとらうか。敎訓の對象がちがふばかりか、こゝではどこまでも敎訓の體を保持する必要上、さうまで滑稽を露はにすべきでない。西鶴はまづ選擇の標準を決しなければならない。新奇すなはちこれ。

こゝにまた還つて、「諸國はなし」を考へ、「懐硯」をも參照することの必要がある。「新可笑記」は西鶴の作のどの方面とも交渉を有つてゐるが、殊に「懐硯」との間に少なからぬ交渉が見出される。たとへば、巻三の「女敵に身替り狐」と「懐硯」の巻一「案内知つてむかしの寢所」との二つを、單なる材料として交へておいたならば、誰が二書のいづれに屬するかを明にすることが出來よう。

また、「義理物語」の巻一「瘊子はむかしの面影」と、「懐硯」の巻一「人の花散疱瘡の山」とに對して、同じ處置をとつたならば、これもまた同じ結果を得られよう。「義理物語」すでに然り、「新可笑記」にその事が多いはいふまでもない。

「懐硯」も「諸國はなし」も新奇といふことを標準として集成したに過ぎない。他に條件を與へたとすれば、わづかに地理的のそれに過ぎない。「新可笑記」はその地理的條件を缺くことが多い、しかも敎訓の枯談を避けようとする。あの二書と、新奇といふ一點だけでも關係なくて濟まうか。「新可笑記」の成立はかくの如し、それを殊更に分類し、整理して、この書を成す西鶴の意は何であるか、またさうすることに於いて、西鶴の作の推移と成長がどうであるか。事は明であらう、多くいふを要すまい。

「新可笑記」をその表面に從つて、武家敎訓の書とするならば、「本朝櫻陰比事」はまた表面によつて政道敎訓の書とはいはねばならない。二者の關係は、その意味に於いて最も深く、二書の推移もまた極めて自然であらう。しかし、果してさうのみ考ふべきであらうか。

西鶴が「櫻陰比事」を書からといふ考は、隨分前からあつたらう。尤も書きたかつたのは、「櫻陰比事」そ

のものではない、その中に収めてゐるのと同じ種類のはなしである。例の新奇を索める心からである。ぼつぼつと書き出したのは、「櫻陰比事」出版の年から見ると、ずつと前のことである。すなはち「諸國はなし」にも見えてゐる。「懐硯」はいふまでもない。「武家義理物語」もとより幾つかを載せてゐる。その巻三の「發明は瓢箪より出る」を事件に即して分類すれば、武家物として見るのがよいか、少しく様子をかへて裁判物に仕立直して見るがよいか、疑問であらう。いな、すでに巻四の「大工が拾ふ明ぼのゝかね」の如き、裁判沙汰のものさへある。

西鶴は板倉裁判のはなしを喜び、また「櫻陰比事」の本據である「棠陰比事」などを好んで讀んでゐたらう。少し後のものではあるが、「世間胸算用」の巻二「尤も始末の異見」のうちに、

我内の心やすく夜食は冷食に湯どうふ干ざかな有あいに借家の親仁に板倉殿の瓢箪公事の咄をさせ

といひ、「新可笑記」の巻一「先例の命乞ひ」のうちに

朝暮分別して棠陰比事などを枕にし

といふのは、事の趣は違ふものゝ、何とはなしに、おのれを語つたのでなからうか。

さういふ興味が結晶して「櫻陰比事」となつたのは、「棠陰比事」そのものが急にある力となつて壓迫したのでなく、むしろ、武家物からの縁にひかれるものであつたらう。さう見ることによつて、「櫻陰比事」と「新可笑記」の關係は更に一段の緊術を加へるであらう。

一六

「櫻陰比事」は元祿二年の刊、「世間胸算用」は五年の刊、その間三年を隔ててゐる。しかも、二者の間必ずしも聯絡を缺くものでない。「胸算用」はもとより元祿元年刊の「日本永代藏」の後を承けたもの、二書相俟ちて、いはゆる西鶴町人物を確立してゐる。「胸算用」がすでに「櫻陰比事」と交渉を有つならば、「日本永代藏」もまた關係がある筈である。いな、かへつて「櫻陰比事」を導き來つたものに就いて考へねばならぬ筈である。いな、「櫻陰比事」を成立させる所以のものは、西鶴の全著作を通じてある。武家物といはず、町人物といはず、また好色にも亙つて存在してゐる。

敵の在所を探し出すきつかけも、遊女と遊客の手管も、町人のやりくりも、同じ心理の動きに歸する。西鶴の興味はその機の藏して動かぬものを捕捉するにある。この事がなかつたら、西鶴の全著作はいかに生彩を失つたであらう。遺るものはたゞ失屍に過ぎなからう。

町人生活の最も壓搾されたのは大晦日である。やりくりが漸くのどけき春を迎へさせる。西鶴がそのやりくりを表から裏から洞察したのが「胸算用」である。その洞察の眼が帳場に對するのと、白洲に對するとの相異が「胸算用」と「櫻陰比事」の二つの書を成させたとも考へられる。

町人のやりくり、これを才覺ともいふ。町人は仕合と才覺とを兼ね具することによつて富をなす。いかにして富をなすべきか、いかにして貧を防ぐべきかを說いた「永代藏」が才覺を說くことの多いのは當然である。こゝに名こそ異なれ、才覺の實を中において、「櫻陰比事」と「永代藏」とは同一線上に立つ。

「日本永代藏」は「長者教」に據る、少しくその旨を傳へて教訓の微意を寓するものがある。年を同じう

て公にされた「新可笑記」と横の聯絡を保つてゐる。すでに遊里には色道敎訓があつた、武家には武道敎訓があらう、町人また町人の敎訓を缺くべきでない。この二著ある所以である。

すでに名妓列傳があつた、巷謠に載つた女の列傳があつた、不孝者列傳、若衆列傳があつた、武道者列傳があつた。長者列傳がない筈がない。すなはち「日本永代藏」が書かれた。かくて西鶴の著作に於ける列傳體の書はをはつたのである。

「永代藏」にさきたつ一年の刊「武道傳來記」は、敵を討つ討たれる人々のうへを傳へてゐる。しかも、傳へる人は冷眼いづれにも與してゐなかつた。更にそれにさきたつ一年の刊「近代艷隱者」には死生を前につゆばかりに心を動かす人々に就いて語つてゐる。語る人もまた靜にものいふ。この態度は「日本永代藏」の根柢にも見られる。富める者をも、貧しい者をも同じ並みに列ねたのがこの書である 町人の興亡を何とはなしに眺めるのが、著者その人の態度である。

世の粋客のうへにも、同じ態度を以て臨まれる。「永代藏」と時を同じうして、「好色盛衰記」のあることもまた怪しむを要さない。書はこの集に收めてないが、西鶴の作として疑ひないものであらう。

西鶴の町家經濟の書が、この年に公にされたといふのは、むしろ遲きに過ぎる。粋禮讃の書は、一度その裏を考へれば金禮讃の書である。西鶴はその考へから一部の趣向を立ててもゐた。陰のものを陽に示して、粋と金との關係を明に說くものに「諸艷大鑑」があつた。もともと町人の出である西鶴である、好色の書の直後にいふところの町人物を書いてよい筈である。何故に後まはしとなつたのであらうか。

町人出の彼は最も多く町家の生活に通曉する、それだけ町家の盛衰興亡に就いて考へることは深い。人間

といふものは何だ、この問題にはまだ立ちいたらぬ彼も、今の經濟界の現象には、深く思ひ入るところがあつたらう。彼は單なる新奇を以てそれを見ようとしなかつたらう。殊に讀者のためにはかるに、それが果して新奇の種であらうかを疑つたであらう。町人の寄り、町人の遊び、それは讀者だちも欲してゐるものだけに、なほ新奇の興を迎へ得ようが、世帶向きの話が果して喜ばれるかどうかを惑つたであらう。

西鶴はおのが胸裏に重きをなすものにしばらく觸れることなく、讀者のためにまたさし當つたおのれの興味のために、新奇を他に求め、町人と異なる階級に求めたのであらう。求め求めて、眼前の事象にかへつた。方法よろしきを得れば、これこそ最も讀者を喜ばし得る新奇でないかに氣づいた。彼は直に他の新奇の中に、この新奇を割り込ませたのであらう。もとより、彼が眼前の經濟事象に對して懷抱するものを、そのまゝに說くことが讀者の興を繫ぐ所以でないことは知つてゐる、彼はその方法を考へた。いろいろの工夫を凝した。さて、ある不安のうちに、これを公にした。なほ、近松門左衞門が、世話淨瑠璃の初作を、勾欄にかける折の心惑ひほどのものはあつたらう。

今の讀者の心を以て、その頃の讀者の心を考へることは難い。今の讀者は西鶴を通じて當年の現實を知らうと努める。何ぞ知らん、その人はかへつて、眼前の事象を忘れ、西鶴の日と今の日の出來事が質を同じうするもののあることも、忘れがちである。同じ心理を以て、その頃の讀者は今から思ふほど、身に近い事件に興がらなかつたであらう。興は現在に過去を混じ、現實に非現實を配することによつて、はじめて繫がれたであらう。西鶴と近松の全著作を通じていへば、その混和配合の度合が近松に多いといふだけで、西鶴に缺けてゐるわけでない。

西鶴の作からその人を見ると、論理的頭腦の持主であると思はれる。その人が犀利の觀察の後に得た當代經濟觀に、條理整理たるものがあつたらう。それをそのまゝに「永代藏」から聽くことの出來ないのは、新奇を趣向の上に寄せねばならないためであらう。たとへば卷一の「初午は乘つ來る仕合」の如し。

水間寺觀音に借錢の奇習がある、當年一錢借りて來年二錢にして返し、百文借りて二百文にして返す、何せよ、觀音の錢のこととて必ず返納する。いづれ十錢ぐらゐしか借りないのを、江戸の者が一貫目を借りて歸つた。寺ではとても返納されると思はない、そこで以後は大分の貸金無用と評定した。江戸の男は舟問屋であつた、漁師の出船に譯を話して百文づゝ貸した、十三年の後には元金一貫が八千百九十二貫に嵩んだ。それを通し馬に附け送つて御寺に積み重ねた。寺僧は驚いた、記念のために寶塔を建立した。江戸の男とは、その身の才覺から稼ぎ出した網屋長者である。

話としては水間寺の借錢は面白い、長者の才覺は面白い。しかし、西鶴のいはんとするものはこれでない。話の底に流れてゐるものであらう。網屋ほどの才覺ある者は、努めて才覺を利用して富を成せ、才覺なき者は、たゞ消極的態度を以て儉約を守れ。また正直なれ、神佛に信を致せといふにあつたらう。また借銀の利息の怖しさを知れとの警告であつたらう。更にまた體を敎訓に藉りず、趣向の珍奇を片寄せて、彼の考へてゐるものは、當代經濟界に於ける資本主義の擡頭であらう。金が金を產み、利が利を產む財界の現象であらう。彼はたまたま網屋長者の話に、所懷の一端を示したのであらう。

かういふ見解は、その頃の經濟學者のいはゆる現代經濟觀の比でなかつたらう、多く支那の經濟思想に累はされた彼等の考は、現實の上に立脚しないこと、恰も西鶴の說く武士道の如きものがあつたらう。

しかし、西鶴としては、自家の所見をさながらに讀者に示すべきでなかつた。理を裏にして、興を表にする事件をのみ傳ふべきであつたらう。この表裏の關係は、なほ長者の事實を繞る虛實の關係と似てゐる。西鶴は見聞の正しきをそのまゝ傳へると共に、精しからぬ筋には虛を以て輔ふ、虛を實と見紛らす場合もあつた。虛を虛としてをかしさに資する場合もあつた。それがすべて俳諧の興趣である。

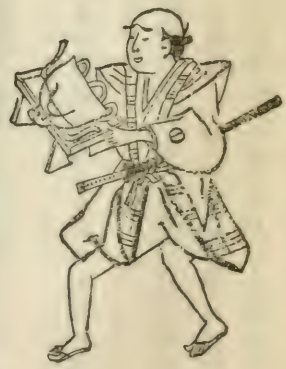
一七

西鶴の著作推移のあとを辿つて、漸く「置土產」に達したのである。町人物として「胸算用」の後をうけること、極めて自然である。また町人物と好色物の二類に亙るものとして、西鶴の絕筆にふさはしい。たゞ餘りのふさはしさが多少の疑を起させる。

疑ひは西鶴の死の眞相、死前の生活によつてのみ解決される。未だ正確の資料を索出されてゐない今は、しばらく推測を恣にするより外はない。あやしい空想の言葉を書きつける。

貞享元年、二萬三千五百句の大矢數を置土產として、俳壇を隱退して浮世草子の世界へ驀進した西鶴が、また俳諧に復活しようとしたのには、何か自分以外の問題があつたらう。可玖撰の「物見車」に對する反駁を圍水まかせにしておけずに、みづから筆を驅つて「石車」を書くほどに思ひ入つたものの、どうもむかしのやうな飛躍を、自分ながら期待し得なかつた。西鶴は寂寥にたへなかつた。今更に憔悴した自分がかへりみられる。浮世の月を眺めることももう幾夜さとはあるまい。自分の生涯の業績にしめ括りをしておきたい。俳諧は辭世の一句でよい。浮世草子はさうゆかない。書きかけては止め、書きさしては棄てて、とかくまゝなら

ぬこの二三年の中、「胸算用」だけは纏めたが、あれで終結を告げるのは面白くないと考へた。
　案外日常生活に几帳面な西鶴である、作の方でも、一度自分が樹てた型があるとすると、どこまでもその型を守りたい、型の内での傍若無人の振舞はなくてはならない、そこに藝がある、しかし、守るべきものは守らねばならないと心がけてゐる西鶴だ。浮世草子のしめ括りも、「胸算用」の苦しいしめ括りぐらゐの事はしておきたいと考へた。
　西鶴の作の型の一つには、最後の章を、必ずめでたい祝言めくもので結ふことがある。その祝言の樣式ははじめのうちはいろいろに變化してゐた。女護嶋渡りも、色道往生も、隠者の仕官も、その變化である。後には祝言の言葉を露はにするやうに

「石車」本文

目立つやうにするやうになつた。「胸算用」の最後の章は、「長久の江戸棚」である。大晦日のやりくり話の多い中に、これは江戸の繁昌、豊かな年迎へを書いた。西鶴の筆はぐんぐんと運んだ、江戸の富を書いた、上方と江戸との間を往來する金のことを書いた、さて

小判一兩もたずに江戸にも年をとるもの有

と書いた。一部の趣向からいへば、こゝから本題にかゝるべきである。その貧しい江戸者のやりくりを書き出さねばならない。しかし文の長さはよい程になつてゐる、もうしめ括りをつけなくてはならない。西鶴は「されは」と書いた。そしてそのまゝ書きつゞける、

されは歳暮の御使者とて太刀目錄御小袖樽さかな箱入のらうそく何を見ても萬代の春めきて町並の門松これぞちとせ山の山口なを常盤橋の朝日かげ豊かに靜に萬民の身に照そひくもらぬ春にあへり。

そして筆を擱いた。無意味な「されは」である、矛盾の「されは」である。その無意味をも、矛盾をも構はないのは、無理からにも型を守らうとするためであつた。この章はまたはるかに卷一の首章に應ずる、この照應も守らねばならぬ彼の型の一つであつた。

西鶴はせめて、「長久の江戸棚」ぐらゐのしめ括りでもと考へた。「一代男」のむかしに應ずべきものをと考へた。別に好色物とか、町人物とかの分類を意識してゐない彼は、その綜合による一篇をなどとは考へない。たゞ過き來し方の全著作の總收をなすものをと考へた。

今の心境から、十年のむかしの作を考へると、大分の距離を見出した西鶴である。殊に、今ならば、「諸艷大鑑」を色道往生でをはらせはしない。あの頃は、とかく古典の俳諧化といふことに累はされた、あの色道往生

もその結果であつた。それに、金のある中に遊びを止める、それがいけない、それが何の粋だ、金がなくなつてもなほ粋を忘れない心、遊びに徹する心、これが今の自分の考へてゐることだ、それを書きたいと考へた。

西鶴は「諸艶大鑑」以後の慌しさは何だ、矢つぎばやに、目さきをかへてとのみに囚へられた自分のあのざまは何だ、もつと靜に「諸艶大鑑」そのまゝの傾向を追ふべきでなかつたかと考へた。さうさせたのも、あの大矢數のつかれだ、と思ふにつけて、あの頃の元氣がなつかしくなる。また「諸艶大鑑」をわがものながらゆかしと見る。

今の心で、もう一度「諸艶大鑑」の世界を眺めたい、それを筆にしたいと考へた、案はいろいろと浮ぶ、書いてはみる、しかし、身のつかれは致し方がない、書きかけては止める、反古のみが堆い。反古の中には諸國に女なしといひきつた「諸艶大鑑」の後をうけて、美女ありの趣向を書きかけたものもあつた、後に團水によつて「俗つれ〳〵」の中に收められたのがそれであつた。

西鶴は新しい立案に筆を執ることを止めた、身の疲れをいとをひながら、その案を「諸艶大鑑」の書きかへの中に纏めるより外はなかつた。その幾章を書きかへた、それを中心として、いさゝかのものを新に書きそへた。「置土産」はかうして出來た。

「置土産」は彼の全著作のしめ括りとしては極めて當を得てゐる。しかし、「胸算用」からの推移のあとを他の推移のあとに照してみると、やゝ不自然である。また「諸艶大鑑」の書きかへも不自然である。何故の不自然なるかを考へて、その理由を得ない。つひにかういふ空想の戯言をなさねばならない。

空想は、また「一代男」その他の中から幾章を選び、やゝ趣向を變へて、手紙風に書きかへる西鶴を描き出

す。疲れはてた彼は、かねての立案を實現するために、この方法を選ぶ以外に策はない。すでに書きかへだけに、餘人でも眞似が出來ないことでもない、團水が操作やら補筆やらの出來榮えが、さうまで師のものとのけぢめをつけさせない理由であらうか。

一八

西鶴の著作を好色物、武家物、町人物とわけることとは、實はさまでの意味がないやうである。たゞ大體の傾向を示すものとして、そこにおくことも妨げない。しかし、それほどの分類ならば、俳諧の影響のうけ方の度合を標準としていつてみてもよい筈である。俳諧精神はもとより彼の全著作を貫いて根柢をなしてゐる。それに問題はない。たゞその表面に露はれるものを標準としてみると、彼のはじめの方の作には、俳諧の手法が存分に働き、をはりの方に近づくに從つてやゝ影を薄くしてゐる。すなはち俳諧生活に近い頃の作には、必ず典據を必要としてゐる。その典據を種々に弄ぶ、俳諧化する、その事がともすると中心となつてゐた。たとへば「一代男」の「源氏物語」に於ける類である。是は一篇の組織までを據りどころにしてゐる。その後にはやゝ趣をかて、たとへば「近代艶隱者」に於ける「列仙傳」「高士傳」「遊仙窟」の如きものがある。恰も「一代男」の「伊勢」「徒然草」に於ける關係のやうな部分的關係である。

後期のものになると、さういふ關係も段々と見られなくなる。典據を離れて現代の事象に專らになる。もとの典據の俳諧化のうちに現代の事象を籠めるのとは、全然趣を異にする。さうなると、西鶴は却つて實なき典據の名をその作におはせようとする。わづかの因緣を以て、その名を繫がうとする。「日本永代藏」一名「大

福長者教」に於ける「長者教」、また「新可笑記」の「可笑記」に於ける類である。

典據ある時期には、ひた隱しに隱し、ない時期には却つて附會しようとする、例の俳諧の戯れである。

典據のない頃の作は、典據の俳諧化がないだけに、俳諧から離れたわけであるが、根本精神以外、どうしても俳諧と絶緣しかねるものがある。「一代男」以來のものではあるが、章と章との間の相互關係、卷と卷との間の相互關係、いひかへればその配列に俳諧があることとである。すなはち俳諧の法式ともいふべきものが、こゝにも見出されることとである。

卷と卷との關係になるとやゝ複雜である、法式めく說明は、多くの例示を伴はねばならない。今はその時でない。こゝにはわづかに一二の特例をかりて、輕く觸れるといふ程度にとどめる。

特例の一つは、「諸國はなし」の目錄である。たとへば卷一を見る。

奈良、京、江戸、紀州、伏見、箱根、播州の名が見える。

卷一
大下馬 目録
一 公事は破らずに勝 奈良の寺中にありし事 知恵
二 見せぬ所は女大工 京の一條にありし事 不思議
三 大晦日はあはぬ算用 江戸の品川にありし事 義理
四 傘の御託宣 紀州のかけ作にありし事 慈悲
五 不思議のあし音 伏見の問屋町にありし事 音曲
六 雲中の腕押 箱根山熊谷にありし事 長生
七 狐四天王 播州姫路にありし事 恨

「西鶴諸國はなし」目錄

この配列には地理的聯絡がない、そこに意味がある、意味はむしろ變化にある。しかも標目の下に一々その內容を要約する言葉が見える。知惠、不思議、義理、慈悲、音曲、長生、恨、から讀みつゞけると、もとより連絡がない、連絡のないのは、變化を求めたためであらう。しかし、二度、三度讀みかへすと何となしに、聯想のありさうな氣がする。細い絲で繋ぎ合はしてゐるやうに思はれて來る。配列は變化のみでないことが考へられて來る。

離れもせぬ、卽きもせぬ關係によつて配列せられてゐる。卽離の關係を重くみること、俳諧の如きものはない。すなはち俳諧の型が形をかへて、こゝに現はれたものとして見てよい。

西鶴が意中のものを示したのは、たゞ「諸國はなし」だけである。けれど、格はそのまゝに諸作に亙つてゐる。

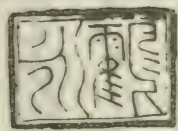
「永代藏」の配列は、また特例としてみられる。配列そのものが特例なのでない、江戸版の「永代藏」の配列との比較が、特例として考へさせる。

江戸版の「永代藏」が原版のそれとどう違ふかは、「永代藏」そのものの解說に於いて言及した。こゝにはくりかへさない。今、その江戸版が地理的統一の目的で配列を變更した結果がどうなつたか、こゝには例を擧げて說明する煩を避けたい。しかし、それがために、いかに興味索然となつたかをいはねばならない。理由は明である、俳諧的な配列を破棄したからである。

からまで俳諧的である西鶴は、その章その章に於いても俳諧的組織をとつた。それがために、いかに組織の統一が害はれてしまつたか。この俳諧的なことが、また長篇の制作にも累を及ぼしたことはいふまでもな

い。「一代男」はいふも更なり、能の組織に倣つた「五人女」にも、淨瑠璃の定型を追うた「曆」にも、病弊は明に見られる。

かくの如くして、俳人西鶴と浮世草子作者西鶴とはつひに分ち難き一身あつた。西鶴に就いてはなほ多くの事をいはねばなるまい。今はたゞこの一點にのみとゞめる。

それ人間の一心万人ともに替れる事なし。長釼させば武士。烏帽子をかづけば神主。黒衣を着すれば出家。鍬を握れば百姓。手斧つかひて職人十露盤をきて商人をあらはせり。其家業面〻一大事をしるべし。弓馬は侍の役目たり。自然のために。

知行をあたへ置れし主命を忘れ。時の喧嘩。口論自分の事に一命を捨るは。まとある武の道にはあらず。義理に身を果せるは。至極の所古今その物かたりを聞つたへて。其類を是に集る物ならし

鶴永
松壽

貞享五戊辰年
櫻月吉祥日

武家義理物語　巻一

目録

一　我物ゆへに裸川

　一文惜しの百しらずを

　落ればまかり川に

二　瘊子はむかしの面影

　嫁ぐさきより娘の縁組

　疱瘡の跡よろしくて

三　衆道の友よぶ鵆の香炉
誠と山中の寺の親仁
余所れて心の外の患者

四　神のとがめの榎木屋敷
つれなき人にはなき雁も
おもき親がいひそめつく

五　死なば同じ浪枕とや
大井川は命のわたり
一度に六人の縁切

(一) 我物ゆへに裸川

口の虎身を喰。舌の剱命を斷は。人の本情に非。憂るものは。富貴にして愁へ。樂む者は貧にして樂む。嵐は雲ふき晴て。名月院の詠。鎌倉山の秋の夕くれをいそぎ。青砥左衛門尉藤綱。駒をあゆませて滑川を渡りし時。聊用の事ありて。火打袋を明るに。十錢にたらざるを。川浪に取落し。向ひの岸根にあがり。里人をまねき。わづかの錢を。三貫文あたへて。是をたづねさせけるに。あまたの人足明松を手毎に。水は夜の錦と見へ。人の足手は。しがらみとなつて瀬々を立切さがしけるに。一錢も手にあたらずして。難義する事しばらくなり。たとへ地を割。龍宮までも是非にたづねて取出せと下知する時。ひとりの人足。仕合と。一度に三錢さがしあたり。其處を替ず。又は一錢二錢づゝ。十錢ばかり取出せば。青砥左衛門勘定あはせて。よろこぶ事かぎりなく。其男には外に褒美をとらせ。これ其まゝ捨置ば。國土の重寶朽なん事ほいなし。三貫文は。世にとゞまりて人のまはり持と下人に語て通ける。此斷聞ながら。一匁をしみの百しらずとぞ笑ひしは。智恵の淺瀬を渡る下々が心ぞかし。兎角は夜のまふけに。おもひよらざる事なれば。今宵の月に集錢酒呑んと。各いさみをなせり其中に。物の才覺らしき男のいへるは。いづれもに心よく酒事さすは。我に禮をいふべし。其子細は。青砥が落せし錢に。たづね當べき事は不定なり。時にそれがしが理発にて。此方の錢を手まはしして。左衛門程。世にかしこき者を。偽りすましけるといひければ。皆々横手をうつて。扨は其方がはたらきゆへ。樂遊びのおもしろやと。盃はじめけるに。又ひとりの男。興を覺して。これ更に青砥が心ざしにかなはず。汝が発明らしき皃つきして。人の鑑となれる。其心を曇せけるは。ならびなき曲者。天命もをそろし。我老母をはごくむたよりに。此錢嬉しかりしに。今の有増を聞。なんぞこれを取べし其上。母此事聞は。まことをもつて養とも中々常も滿足する事あらじと。其座を立て歸り。母に語るまでもなく。朝にとく起て。馬の沓を作りて。けふをなりあひに暮しぬ。此男は。いはねど自然と青砥左衛門聞て。其人足をとらへて。きびしく横目を付。身を丸裸にあらため。落せしまゝの錢にたづね當るまで。毎日過代をいひ

付けるに。秋より冬川になる迄。いかばかり難義して。世間もをのづから水かれて。やう／＼眞砂に成時。九十七日めに彼錢殘らす。さがし出し。あやうき命をたすかりぬ。是おのれが口ゆへ。非道をあらはしける。其後正道を申せし人足の事を。ひそかに尋られしに。千馬之介が筋目。歴ゝの武士にて千馬孫九郎といへる者なるが。子細あつて。二代まで身を隱し。民家にまぎれて住ける。石流侍のこゝろざしを深く感じて。青砥左衛門此事を。時頼公に言上申て。首尾よく。召出されて。二たび武家のほまれちとせをいはふ鶴が岡に住ぬ

（二）瘊子はむかしの面影

明智日向守の已前は。十兵衞といひて。丹州龜山の城主につかへて。やう／＼廣間の番組に入。外様のつとめをせしが。朝暮心ざし常の人には。各別替りて奉公にわたくしなき事。自然と天理に叶ひ。ほどなく弓大將に仰付られ。同心廿五人預り。武家の面目。此時具足金。拾兩有しに。はや一國の大名にも成ぬべき願ひ。生れつきての大氣。其身の德也。十兵衞今に妻のなき事を見

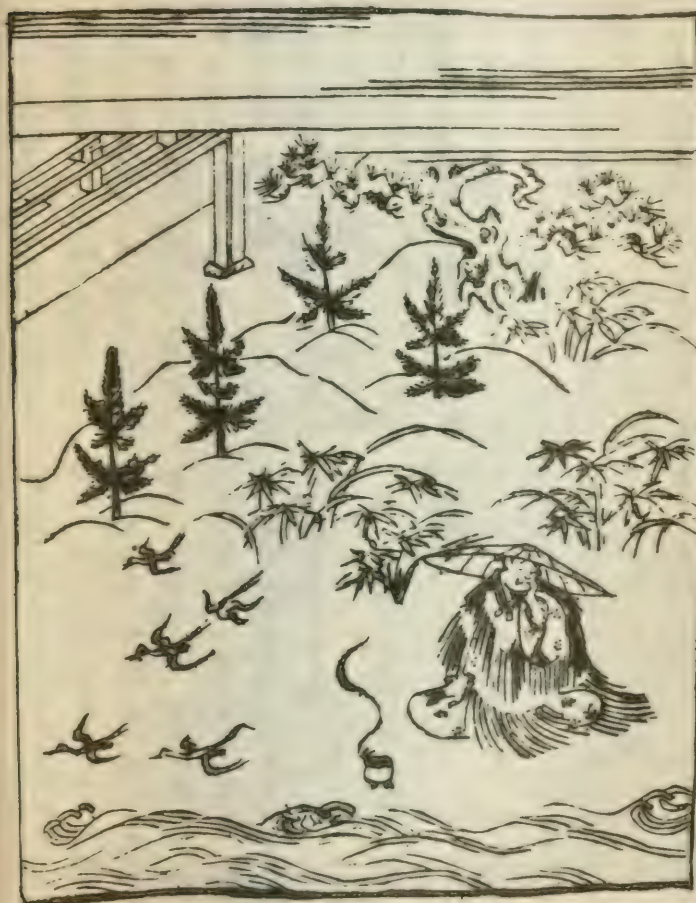
をよび。息女持たる人。乞聟の望み。彼是内證をいひ入けるに。妻は近江の國沢山。何がしに美なる娘の兄弟ありて。いづれか花紅葉色くらべのすぐれて。あねの見よげなれば。十一の年よりいひかはして。身躰極りて。是をむかへる約束。それよりは七とせあまりも過ぬれば。世の哀れ人の情もしるべき程なり。近〳〵に呼むかへんと妻女の親のもとへ状通いたせしに。世には移り替れる歎あり兄弟の娘。一度に疱瘡の山をあげしに。美なる姿の姉むすめ。良いやしげに。さりとはむかしと替りぬ。妹娘は。已前にすこしもかはらず。面影うつくしくそだちぬ。十兵衛に約束せし。姉が形の各別になれば。是を人中におくりて。醜き形を恥させ。我が娘と沙汰せらるゝもよしなしと。夫婦内談して。いまだ妹は何方へも契約なければ。何となく是をつかはし申を。堪忍すべき者あればとて。外に男べしと。此事を語れば。更に身の事をを持へき心底にあらず。妹は我等がむ歎かず。自此姿にて。十兵衛殿にまみかしに風俗もかはらず。よろづにかしゆる事は。思ひもよらず。まして此形こく。心さしもしほらしく。生れつき

ぬれば。何國に行ても二親の御名はくださし。是を十兵衛殿へおくらせ給へ。我等は兼て出家の願ひ。諸佛をかけて。僞なしと手馴し唐の鏡をうちくだきて。浮世を捨る誓文を立しを聞て。父も母も感涙袖にあまりて。しばらく思案せしが。角いひ出して。歸らぬ事ぞと妹に何の子細もなく。龜山におくる。縁付の事を申渡せば。何とも合点まいらず。姉君より先立て。道の違へる所なり。姉の御身かたづきて。後はともかくもと申あげける。尤至極。それは世間の順義ながら。姉はつね／＼出家の心ざし深く。思ひこめしゆへ。菟角は望みにまかせ。近／＼に南都の法花寺につかはしける。そのかたは龜山におくる也。女にうまれても。其身の仕合有。明智十兵衛といへる人はまづ武藝すぐれて。殊更理にくらからねば諸事に埒明にして。一生つれ添。夫妻の樂しみ深し。しかも次第に出世の侍なれば。我／＼老後のたよりとも成ぬべき人ぞと。さま／＼いひ聞せけるに女ごゝろに嬉しく。親達の仰にまかせ。吉祥日をゑらひ相應よりは美〻敷仕たて。龜山におくられける。十兵衛も縁のはじめを祝ひ。松竹の臺の物

を調へ數〳〵の盃事までも。振分髪に見し姉むすめとおもひしが。其後寢間のともし火ちかく。互に面を見合せし時。十兵衛むかしの脇皃に氣をつけて。其時は此女にとがむる程にはあらぬ。猴子ひとつありしがおとなしく成て。それもはぢて取うせけるかと。いはずして。耳のほとりをみしに。娘もはや心を付て是にほくろのましますは。わたくしの姉君なり。うるはしき御姿疱瘡にてかはらせ給ひ。さりとは女の身にしては。御いとほしき事なり。さし置て自の緣組は道なると斷申せど。二親の命をそむくなれば。是におくられけるも。心懸りのやむ事なし。今おもひあはせば。こなたさまの御約束は姉君にうたがひなし。いかにしても道のたゝざる事なれば何事もゆるし給はれ。わたくしはけふより出家と守刀にて黑髪切を留て。其方形をかへても。世間濟まじ。人しれず內證にて。それがしが分別あり五日に歸るまで待給へ。武士の息女の心底と深く感じて。それより二たび皃をも見ずに。隔て。里歸りの時。段〻狀通にしるし。右もらひしは姉なれば。難病は世に有ならひ。たとへむかしの形はなくとも。是非におくらせ給へ。一命にかけても夫妻願ひの所存。とに此たび妹の心入。女ながら道理につまりけると。心中の程いひやりしに。親里にも此事滿足して。十兵衛願ひにまかせ。また姉娘をつかはしけるに。うちとけて。ふびんをかけ此中長くもかなと祈ける。女はひとしほ男の情をわすれもやらず。萬心にしたがひぬ。此妻。美女ならば。心のひかるゝ所も有に義理ばかりの女房なれば。只武をはげむひとつに身をかためぬ。此女かたちに引かへて。こゝろたけく割なき中にも外を語らず。明暮軍の沙汰して。廣庭に眞砂を集め。城取せしが。自然と理にかなひて十兵衛が心の外なる事も有て。そも〳〵此女武道の油斷をさせずして。世に其名をあげしと也

㈢ 衆道の友よぶ鵆香炉

京都將軍ひがし山殿御時。世のもてあそひ事。はじめて取立させられ。萬人花車風流になりてゆたかに暮しぬ。中にも名香の煙を好せ給ひ諸國より集りて。六十種の名のみおもしろかりき。折ふし霜夜の更行まで。此木の御沙汰有しに。明がたの嵐につれて。聞も馴ざるかほりに。いづれも心をすまし給ひ御屋形のうちをたづねさせられしに。御門をはなれて外なれば。丹波守

利清に仰付られ。此ゆかりいかなる方ぞ。たづねまいれのよし手まはりの侍二人めしつれて。其匂ひにひかれて行に。柳原はるかに過て。賀茂の川原になれば。次第にかほりも深く。淺瀬をわたり越しに。十一月すゑの六日の夜。いつよりは闇く。物の色あひも見えず。星影のさゞれ水に移り。是をたよりにむかふの岸にあがれば。汀の岩の上に蓑笠着たる人の。香炉を袖口に持添。氣を靜にして座したる風情の心にくし。いかなる事有てかく独はおはしけるぞと問けるに。たゞ何となく千鳥の音をのみ聞とこたへぬ。さりとは替りたる境界。是各別の樂しみ。只人とはおもはれず。いかなる御方とたづねしに。僧にあらず。俗にあらず。三界無庵同前にて。六十三に成ける我。いまた足も立けるといひ捨て。岡野邊の並松わけて立歸る。扨も氣散しなる返答やと。なをしたひ。それがしが。たよるは其木のゆかしく。まいるなり。何といへる名香ぞと聞しに。むつかしや老人はしらず。すがりたれども聞分給へと。香わたして行方しらず成にき。利清立歸りてあらましを申あげしに。其身の取置うらやましく。覺しめ

されて。其人を色ふたづねられしに。更にしれざる事をほいなくおぼしめされ彼香炉を銜と銘をうたせられ。名物となりぬ。其比關東侍の一子とて。美形都の花にまさり櫻井五郎吉といへる人。今年十六にて。姿ゆへめし抱られ。近ふ御前を勤めけるが。銜の香炉見しより物おもふ氣色。人も見とがめける程に包かねしを。有人ひそかに問しに。はじめの程はいはざりしが。いつとなく次第よはりの身と成。死は言葉を形見と語りし。此香炉のぬしとは。兄弟の約束深く出合しに。我出世のためにならずと。古里を出て。都のかたにのぼられしを。わすれもやらず。いとしさに其跡をしたひ。此御家に仕事。もし其人にあふ事も有なんとおもふ折ふし。香炉は縁に見しりて。たつぬる事の成難き。病氣におかされしは。是非もなき我身と。袖に玉ちる泪川。しばしもかはく事なし。此哀れを問人は同じ小姓中間の樋口村之介といへる人なるが。つねにも情深く語りあひしが。自然の事もあらば。よき友ひとりうしなひけるをなげきぬ。かくて日數ふるうちに五郎吉頼みすくなく成て。息も絶〲の時にいたりて。又もなき

無心を申出しぬ。我相果ての後彼人にたづねあひ給ひて。其身それがしに替り。兄弟念比かへす〴〵も頼むといへり。此義は少ししんしやく成事ながら。何事も命かけてと。中かはせし義理にせめられ。此事請合ければ。嬉しけに笑て。是を見をさめの皃ばせかはりて。つゐに空しく成ぬ。生死は世のならひとて。なげく人も有。又身にかゝらぬ人は。そこ〳〵にかなしみて。鳥部山の夕煙となし。朝は白骨と消ぬ。世にこれほどはかなき事はなかりき。五郎吉がなき跡の事病家の反古までも取隠して。念比に仕廻それより村之介は。五郎吉が遺言にまかせ。千鳥を聞し隠者の事をたづねしに。今出川の籔垣のほとりに。わづか成隠家。組戸さし篭て。夢の心にすみなせるうちにも。東に別れける五郎吉が事ども。忘るゝ日もなく。けふは時雨て。ひとしほ淋しき折ふし村之介ひそかに入て。五郎吉最期の次第を語れば。随分おさめたる。身を取乱し。是ばかりは世の偽になれかしと。男泣の有さま。みるめもともになげかしく。しばしは物語すべき事もやみけるが。いはねば五郎吉が草のかげなる恨もうたてく。此隠者の俤を。つく〴〵と見しに。六十にあまれる人の形もいやしかるに。若念の契りを結ぶは何とやらはづかしき事にぞあれど。死人といひかはせければ。是非なく子細をかたり。五郎吉になりかはりて。今より兄弟分と覚しめして。かはゆがらせ給へといへば。此男なげきの中に驚き。是はおもひよらざる契約ゆるし給へと。中〳〵同心せざりき。村之介申出しての赤面。さては一分立難しと身を捨る覚悟に。菟角は五郎吉が申残せしにまかせ。又戀をとりむすび。世に長く語りなぐさまんと。言葉をかためて。其後は夜毎にしのびて通ひぬ。わけなき事を頼まれ。心にはそまざれども義理ばかりの念友。村之介が心底まと成哉と是を感じぬ

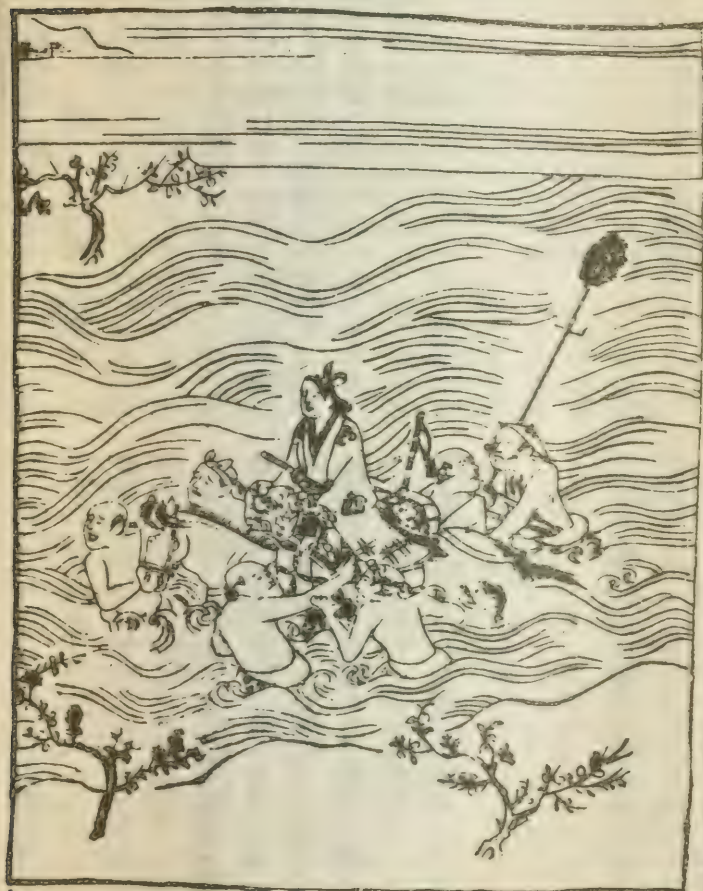
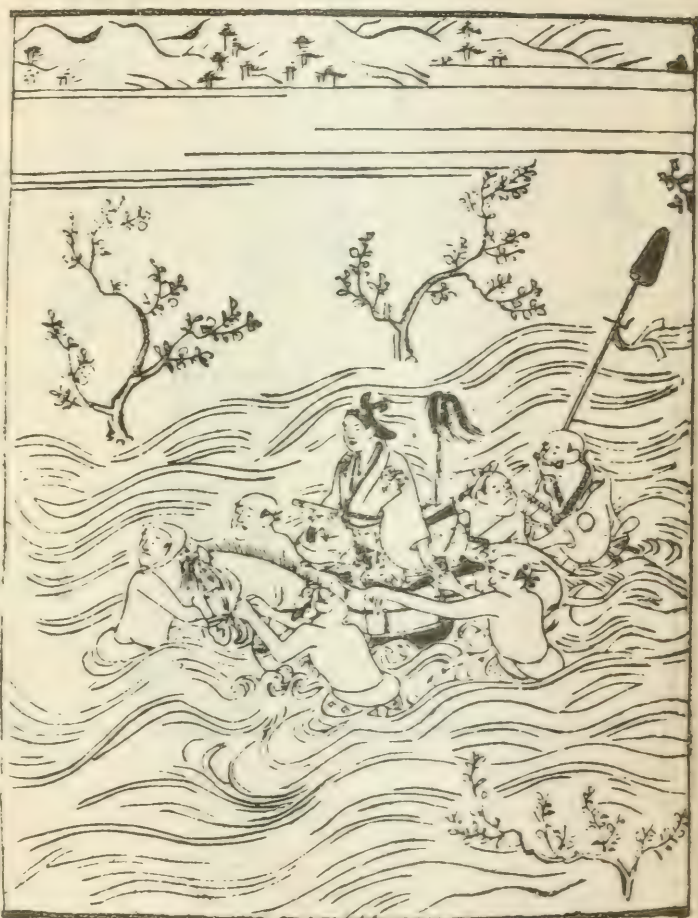
㊃ 神のとがめの榎木屋敷

江州浅井殿の時。屋形町のすへに。古代より枝葉のさかへたる榎の木あり。むかしは神やしろ立せけるといひ傳へて。石の玉垣のかたち残れり。所はんじやうなれば。人家立つゞきて。是も榎木屋敷とて。藏の奉行役諸尾勘大夫といへる人。申請て新作りいたせしに。神のとがめにや世間はしつかなる夜ふけて。腥き風吹かよひ。人の身にあたるといなや。むつける程に草臥つきて。

爰に住居の堪忍しかね。子細を御斷申あげ。此屋敷をさしあげける其後。是を望みて住しに。間もなく。病死又は惡風にたいくつして。幾たりか替りて今は明屋敷と成て。門は唐蔦閉て。みねども此内すさまじ。有時若手の武士ども寄合かたりける次手に。榎木屋敷にすむ人なきと咄しけるに。此座に長濱金藏といへる人の申されしは。いかに神やしろ跡なればとて人にたゝり給ふ子細なし。それは住る人の愚なるゆへなりと。世の人あさましく申ぬ。其座に以前此屋敷に住たる人の親類内緣の方も有て。金藏言葉を耳にかけいづれ。貴殿はあれに住ながらへ給はんとすこし氣をもたせければ。申出して是非に及ず。老中へ内意を申せば。望むを幸に早速給りける。金藏此屋形に移りて第一。此榎木曲物成と枝葉をもがせけるに。神のとがめもなかりき。是を思ふに惣じて。かやうの事は。あるじの氣のつよきにしたがひかならずやむ事と物になれたる人の語りぬ。有雨夜に金藏家來集りて世におそろしき物語にて明しぬ。此内のひとり雪隱に行をみかけて。才覺なる小坊主ふるき靭をさげ出。壁のくづれよりさし入。其ものゝ腰をなでけるに。此におどろき。にげ歸るをおかしく。其後たび〳〵おとしければ。誰がいふともなく。毛のはへたる手して。抓といひふらして。暮ては自由に行人絶て。是も又氣味の惡き事ぞかし。是をしらざる人外よりきたりて。かの雪隱へ行しに。くだんの靭片隅より踊出。生たる物のはたらき。その〳〵不思義を立。ためしみるに人さへ行ば。靭の狂ひ出るを。段々申あぐれば。金藏何ともをもはず。扨は是にて誰か。はじめの程腰を撫ける人のをぢぬる心たま。是に入て。かくは動きける。をのれは矢がらを入る役なるに無用のはたらき。其科今おもひしれと。燒捨けるに。煙の中にて最後わきまへ。狂ひぬ。物のあやかし。かやうの事ぞと皆人にあんどさせて。此屋敷にて八十余歳まで。堅固に勤めける。金藏人中の一言その義理たがへず。爰にすましけるは。天晴武士の一心とぞ。世の人ほめにき

㊄ 死ば同じ浪枕とや

人間定命の外。義理の死をする事。是弓馬の家のならひ。人みな魂にかはる事なく。只その時にいたりて覺悟極るに。見ぐるしからず。其比攝州伊丹の城主。荒木村重につかへて。神崎式部といへる人横目役を勤めて。年久し

く。「此御家をおさめられしは。筋目たゞしきゆへなり。有時主君の御次男。村丸東國夷が千嶌の風景御一覧の覺しめし立。式部も御供役仰付られしに一子の勝太郎も御供の願ひ叶ひて。父子ともに其用意して東路にくだりぬ。比は夘月のすへ日數かさねて。けふの旅泊は駿河なる嶋田の宿に兼て定しに。折ふしの雨ふりつゞき。殊に其日は佐夜の中〳〵をだやみなく。菊川わづかの道橋も白浪越かと見えて。しかも松吹嵐にすへ〴〵の者は袖羽合の裙かへされて。難義の山坂越て。金谷の宿に人數を揃へ。大井川の渡りをいそがせられしに式部は跡役あらため來て。川の氣色を見渡し。水かさ次第につのれば。けふは是に御一宿あれと。樣ざま留まいらしけれども。血氣さかんにましまして。是非をかんがへ給はず。御心のまゝに越よとの仰せいづれも大浪に分入。流て死骸の見えぬもあまたにて。渡りかゝらせての御難義。跡へかへらず。漸先の宿にあがらせ給ひぬ。式部は跡より越けるが。國元を出し時。同役の森岡丹後。一子に丹三郎十六歳成がはじめての旅立。諸事賴むとの一言。爰の事なりと我子の勝太郎を先に

たて。次に丹三郎を渡らせ。人馬ともに吟味して。其身は跡よりつゞきしに。程なく暮におよび。川越瀬を踏違て。丹三郎馬の鞍かへりて。よこ浪に掛られ。はるか流て沈み。是をなげくにはや行方しれず成にき。しかも岸根今すこしに成て。ことに歎深し。我子の勝三郎は子細なく。汀にあかりぬ。式部十方にくれて。暫く思案しすまして。一子の勝三郎をちかづけいひけるは。丹三郎義は。親より預り來り爰にて㝡期を見捨。汝世に殘しては丹後手前武士の一分立がたし。時刻うつさす相果よといさめければ。流石侍の心ね。すこしもたるむ所なく。引かへして。立浪に飛入。二たび其俤は見えずなりぬ。式部は暫く世を觀じ。まことに人間の義理程かなしき物はなし。故郷を出し時。人もおほきに我を賴むとの一言。其まゝには捨がたく。無事に大川を越たる一子を態と㝡期を見し事。さりとてはうらめしの世や。丹後は外にも男子をあまた持ぬれば。歎きの中にも忘るゝ事も有なん。某はひとりの勝三郎に別れ。次第による年のすへに何か願ひの樂みなし。殊に母がなげきも常ならず。時節外なる憂別おも

へばひとしほかなしく。此身も爰に果
なんと思ひしが。主命の道をそむくの
大事と。面に世間を立て。内意は無常
の只中を観念して。若殿御機嫌よく御
帰城を見届。何となく病氣にして取籠
り其後御暇を乞て。首尾よく伊丹を立
のき。幡州の清水に。山ふかくわけ入。
夫婦形をかへて。仏の道を願ひ。それ
までは子細を人もしらざりしが。勝三
郎最期の次第。丹後つたへ聞て。其心
ざしを感じ。是も俄に御隙乞請。妻子
も同じ黒衣。式部入道の跡をしたひて。
其山にたづね入憂世の夢を松風に覺
し。泪を子どもの手向水となし。ふし
ぎの縁にひかれて。ぼだいに入し山の
端の月。心の曇ぬかたらひ。たぐひな
き。後世の友。おこなひすまして年月
をおくりしに。其人ものこらず。今又
世に有人ものこらず

武家義理物語　巻二

目録

一　身躰破る風の傘

河陰の嶋に気が違ひ

うつゝ人衆生を見届の事

二　御堂の太鼓打つたり敵

東寺の法師がよく見届

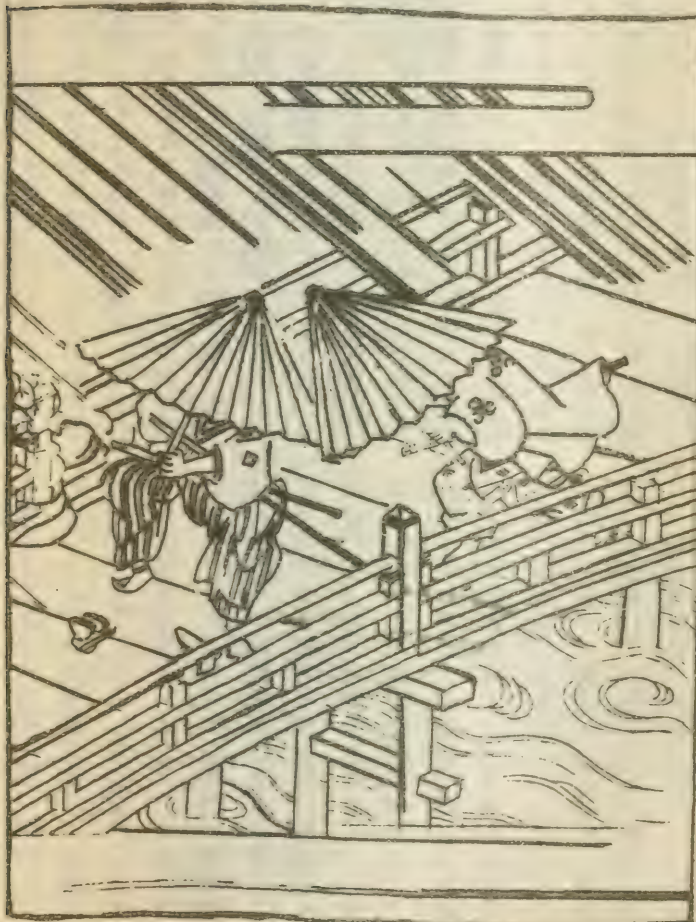
我は親が門にて命とる

三　松風ばかりや残るらん脇指

かゞの二月の松雪氷
炭竃もかよひものも跡絶て
ほ[illegible]もとうら捨て
野てよりまさるの文殊
分別かのかれし略継の手

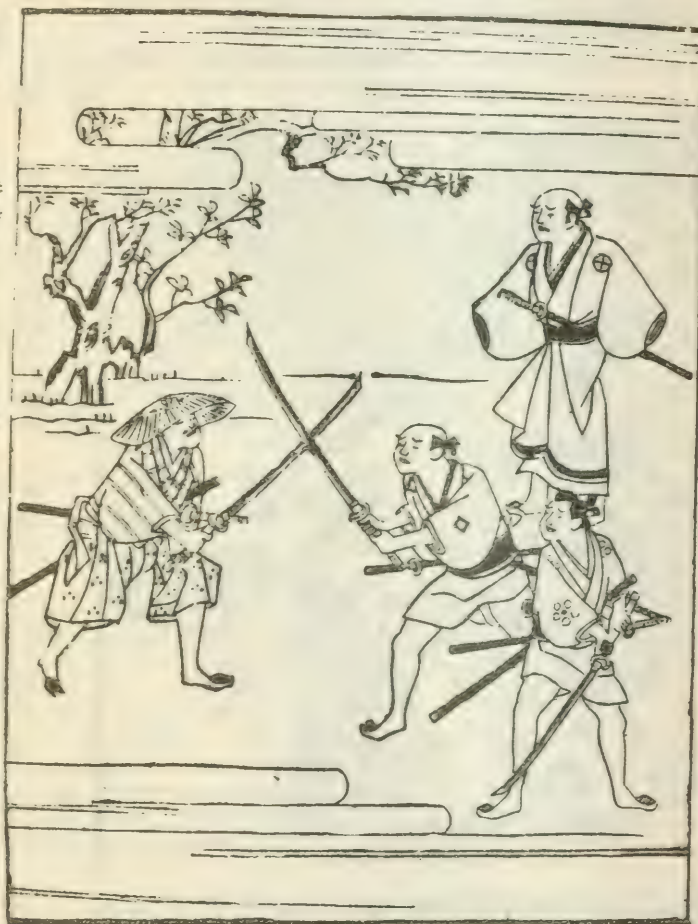
㊀ 身躰破る風の傘

幾春か身をいはゐ。若松の城主。加藤肥後守殿に勤て。本部兵右衛門とて。武の道けなげなる人なりしが。侍は住居定がたし。奉公さかりの花の時。俄に落花のごく。會津を惣並に立のき。浪人ほどかなしきはなし。妻子はかゝる節の難義。又身躰をかせぐうちに。兵右衛門病死をなげき。惣領はおもふ子細有て。一子兵右衛門と申せしを。三番めの弟。武州にて礒貝何がしの家を繼で。礒貝藤兵衛といへり。此かたへ養子につかはし。其身は高野に隠し。二尊院の門前に。幽なる草の庵。うき世の月を余所に見なし。いつとなく胸も晴て。廟前の杉むら。心の針のとがりをやめて。今は千本槇の露をはらひ観念の朝勤。夕は岩上にたゝずみ。後の世を願へるの外なし。さて名を岡本雲益とあらためける。雲益さしつぎの弟。本部喜介と申せしは。蜂須賀の家に有しが。眼病氣にて暇申請。阿州の片里に引籠。世を隙にして暮しぬ。一子は礒貝藤介といひて。是も牢人分なり。喜介弟は出家して。同國真言寺源久寺にすはりぬ。又源久寺弟は。本部実右衛門と申て。是も阿州に安留次左衛門といへるは。親兵右衛門と古傍輩なるゆへ。其よしみにて。是にかゝり人と成て。年月爰に暮しぬ。実右衛門有時。新橋をわたり行に。折ふし雨風はげしく。前後も見へざりし時に。むかふより嶋川太兵衛と申人。是もわたりかゝりぬ。両方ともに。さしがさかたぶけて。行違ひしに。橋の中ほどにて実右衛門 傘を。太兵衛さしかさに振あてしに。太兵衛。是は慮外とつきのけしに。実右衛門慮外といはれては。断りも申されず。其方何者にて。すいさんなる言葉といふ。すいさんとはいかに。みれは安留次左衛門が家来のぶんとして。詫て通るへき事本意なるに。かへつて雑言申段。爰は堪忍なりがたしと。ぬけばぬきあはせて。しばらく切結びし。実右衛門運命つきて。終にうたれける。其時節。礒貝兵右衛門。同名藤介此両人。太兵衛をねらひしに。又者分の御沙汰にきはまり。うつ事成がたく。是非におよばす。所を立のき武州にくだり同名藤兵衛方に居て。國元の様子。聞合せけるに。太兵衛事。すこし手を負御奉公成がたく御断申上弟惣八に家を継せ。其身は遠所の山里にひつそくして。名を本立と替て。かしらも散切に成。醫道を心が

け。むかしのごとく。榮花の望み絶て。世のまじはりをもやめられける。兵右衛門は江戸に罷有うちに。世間の事どもうち捨。たゞ一念に伯父の敵うちたき願ひばかりに。朝暮武藝はげみ。毎日兵法の師の許に相勤めけるが。何とぞ武運にかなひ。嶋川太兵衛にめぐりあひたき所願をかけ。しのび〳〵に阿州の内證を聞に。國を出ざれば。何ともせん方つきて。氣をなやみしに。其里の人。年ごろ別してかたり。殊更内縁のよしみ成けるが。長病にて。所の療治つきて。次第に。たいくつの身と成。上方の名醫にあひて相談有たき願ひ。一門同心して養生のため大坂にのぼれば。本立も是を見捨がたく氣づかひ絶ざる身なれども。常〳〵念比の義理をおもひて。病人はしんしやくすれども。船中の氣分心もとなしと付添大坂に着船して。南の御堂の前に借座敷をとゝのへ。あるじは四季折〳〵の草ばな商へる見せにして。これも心の慰みなれる所とて。萬に氣を付。本立も隨分ひそかに町ありきして。人しれず逗留いたせしに。右の子細をしる人は無用の沙汰しける

(二) 御堂の大鞁うつたり敵

悪事四十里をはしりふね。大坂の様子。阿波に聞へて。鳴戸の浪風もなく。礒貝藤介が方より人を仕立。東武にありし兵右衛門方へ文通せしに。此狀貞享四のとし。五月十四日につきて。兵右衛門内見して。其夜身ごしらへせしに。舟越九兵衛といへる浪人聞つけて。兼て語りしは。かゝる時の事なりと。助太刀の事たのもしく申を。色々じたひ申せど。是非同道といひかゝつて。ひかざれば。よろこび兩人のぼりしが。九兵衛存知入の有とて。脇指ひとつになつて。家來ぶんにて。道をいそぎ。廿四日に京都に入て。右の段を御郡代衆へ御斷申あげ。廿五日の朝大坂へくだり着。成ほどひそかにたづね見廻はり。六月朔日に藤介阿州を発足して。同二日に難波の舟着に。あがり兵右衛門藤介に出合。是はといさみをなし。兩人敵打の御帳に付て。首尾よく御屋敷罷立てはや其日より。もしも人立の所にあるべきかと。道頓堀の芝居の果を心がけ。壱人は嵐三右衛門が木戸につき。又壱人は大和屋甚兵衛が表に立。壱人は荒木與次兵衛が追出し大鞁の鳴

しまふまで。田舎らしき人に氣をつけ。あるひは笠のうちに心をくばり。出羽義大夫が淨るりのはてくち。又大夫が舞を間人竹田がからくりの見物。甫水が太平記をよめる所其外濱芝居の小見せ物。水茶屋の客までを吟味して。それより寺社の遊山所を見めぐり町筋の立横人家のすへ〳〵までも見わたしけるに。此津の廣き果しなく。いつあふべきも定がたくなを又濱邊〳〵をさがし。御堂の前を通りけるに。物には天理有。嶋川本立。其日國元にくだりふね。幸ひの日和。夕暮の風待人もありて。又舟よりあがり。同道三人に立かえりぬ。此ふね其まゝに出行。國里に歸り居ば。時節を待ともしれがたし。莵角は道理にせめられ立戻りしを。兵右衛門藤介ほのかに見付しがしかとはいまだ極めがたく。殊更つれたる人ゝの迷惑をかへり見。足場見合けるに。借宿の花屋がうちに入ぬ。いよ〳〵見定て付こみ。おどりあがりてよろこび。けふこそ恨みの晴し所なれ。すこしもせく事なかれ。爰は往來のしげし。外の人にあやまちなきやうにと申合出るを待に。ひさしければ。旅宿にふんごみうつべきといふ。是も病人をあはれみ。いましばらく待請大道にしてうつべきと。あなたこなたに立かくれ。とやかく内談をするを。近所の町人ふしぎ立るも有。さる小家に入て。我〳〵は待人あるよしいひて。水などもらひ。けふの暑さをしのぎ三人ともに立替り〳〵様子見せなる草花に心をよする風情して。敵はやがてしほるゝけしのごし。我等はさかりの菖蒲太刀。風に花をちらすべしと。おもふ心の色外に見えて。後には亭主もいな事とおもひ。目を付ぬれば。すこしまた南のかたへよげて。待に日影もにしにかたふき。お八ッのしらせ太皷うちぬれば。浮世をぬすみたる男かしらは夏の夜の霜をいたゞき。もじの肩衣かけて行も有。娵のいやがる祖母もひとつれに七八人づゝ。置綿手拭あふぎに珠數を持添。後世の場にも。座をあらそひ。我おくれじといそぐ足をとおかし。これらは皆行先ちかく仏を頼むも斷なり。若盛の男の隙ならば。あそび所も有に。無用の御堂まいり。子細らしくは見へてから。僞りのやうにおもはれける。世はさま〴〵と見しうちに。大勢の中にまぎれて本立もまいりける。三人氣をつけて。おさんだんなかばに。あまたの人を見わけしに。仏前のをそれもなく。栫の夏づきんをきたる。あたま。來迎柱のじゆんにちらり〳〵と見へけ

るを。北の椽がはにまはりて。能よく見とゞけしに。嶋川太兵衛にまきれなし。をのをのよろこび客殿にまはり。御寺あづかりの人に右の内通して。さはぎ給はぬ心得のためを申せば。神妙なる付届を感じける。さりながら御仏前にての事は御用捨と。たのまれければ其段は請合。然らば裏御門はさしかためられ。門ひとつの出入と申けるに。其段はまた請合て。はやうらの門はかためをかれぬ。三人は御門前の町に出。三方へ手分をせし。先兵右衛門はひかしへの道筋あれば。其かどにひかへたり。藤介は北のかたの門をかため九兵衛は南の門につきて。是ぞと待請し有さま。天をかける鳥も。のがるべきやうなし。さあ。今はつるとこゝろふべき物なり。あなかしこの。声きけば。惣立に人の山みゆる中に。本立あみ笠かぶり出るを。兵右衛門かけつけ。共方は嶋川太兵衛と見請たり。伯父のかたきやらぬぞと。言葉をかくれば。本立も聞もあへず。心得たりと。笠ぬぎかけ手ばしかく。刀抜あはせて。わたしあひぬ。本立身かるく。天晴はたらきけれども。兵右衛門利の劔もつてひらひて。切込兩方ともに。はや業手をつ

くしてたゝかふ。時に本立あみ笠の緒を。首筋にかゝりて。すこしははたらきの。じやまにもなりぬ。されども中を飛ごく。かひ〳〵しく切むすふ所へ藤介かけ寄。切つけ是に大かた利を得て。たゝみかけて切立ける。時に所の町人おどろき。商賣の見世。戸をさし。さはぐ九兵衛是に下知して。さはぎ給ふな。敵うち成ぞ。只今首尾よく。うちとめたるを。をの〳〵見物し給へと。扨も落付たる男なり。其内に太兵衛を切ふせ。心静に。とゞめをさし。其身をみれば。深手淺手二十一ヶ所さりとは是まではたらき。六月三日の入相の鐘に御堂のまへの花は散けると詠めし。兵右衛門は今年廿六才。血氣さかんの時を得たり。藤介は十八才前髮ざかりの美兒。薄手のちしほを自ぬぐひ。太刀を杖につきながら。腰掛にやすらひ三

人皃を見合。息をつぎて。礼義のべ。諸事のつめひらき見るさへ武士の本意といさめば。其身の嬉しさかぎりもなく。先は町に入て養生いたしぬ。藤介

一ヶ所。兵右衛門は五ヶ所の疵。平愈して當分何の子細もなく高野の方へ立ける

㈡ 松風ばかりや殘るらん脇差

人の心ざしほど各別。違ひ有物はなし。信長公の御時。すのまたの川屋敷とて。夏を棟とつくらせられ。風の松涼しく。御かよひ舟。御寢間のほとりまでさし入。御物好のおもしろく。絹もちの障子の中に。京女﨟のうつくしきを。あまたためしよせられ。折節の御遊興所にあそばしける。中にも月の夜。雪の夜とて。二人の女郎。美形によつて。ひとしほ御ふびんのかゝり。雨の御手に花紅葉の御てうあひ。春秋も是のへ。御樂しみ深かりき。是をおもふに。兩人姿をあらそひ。御奉公。仕がちの心も有べき事なるに。世間とは各別の事にして。中〳〵御機嫌のよろしきを。はぢあひ給ひ。殿たびかさなりて。御入ましませば。俄に作病して。雪の夜は。風そう〴〵しく申上れば。是をいたはり給ひ。月の夜に入せ給ひ。明暮御前よろしければ。身にさはりあるなどを申て。取籠りわざと御機嫌をそむき。兩人ともに同じやうに年をかさねて。御奉公をつかふまつる。女のかゝる事はためしもなき心底。前代未聞の名女なり。流石俗性いやしからず。雪の

夜は。西國の國守のむすめ。月の夜はさる貴人の息女なるが。二人ともに子細あつて。町人の子分に成て。御奉公には出られしとなり。是をみるに。筋目ほどはつかしきはなし。いやしき者の娘は。無用のりんきに我氣をなやまし人の身をいため。又の世のくるしみもかまはず。惡心胸に絶ず。これらは。なさけをかけても。うるさき所あり。又松風とて尾刕鳴海あたりの濱里に獵人のむすめなるが。浦そだちには。めいようるはしく。古代須广の蜑の松風の女にはをとるまじき風義なれば。いやしくも御前勤めを望み。是も川屋敷に有しが。ちかくはめされながら。つゐに御枕をなをさぬ事を恨み。菟角雪の夜。月の夜が。あしくも。申ての事ならんと。女心に思ひこみ此二人をねらひ。時節待うちに年めづらしき明ぼの御謠初。二日の夜。又川屋形に御成とて。嶋臺かざりて。御酒宴かさなり。女中もつねよりは。さゝ。すごして。前後しらざりき。松風今宵とおもひ定め。萩の戸のかげにて身をかため。うちかけ姿は人並に。國づくしの間に居ながれて。夜のふけゆく首尾うかゞひけるに。此女の立ふるまひ。ともし火の影に見させられ。局がしらの梅垣をひそかにめされ。あの菊なかしの衣裳の女。懐中に子細あり。とらへて僉義仕れとの上意を請て。松風といへる女を。ばた／＼と取まき。懐をさがしけるに。あんのごとく肌刀をさして有。是は曲者なり。いかなる存念あつて。かく御吟味の御前へ刃物はさし給ふぞ。是非いはせずしてはおかじ。身の難義にあひ給はぬさきにと。いろ／＼せめても。無念とばかりいひて。中／＼申さるゝ氣色はなし。是にはやうす有べしと。此女のつぼねをさがして見しに。みだれ箱にうち入て書置あり。次第をせんさくすれば。月の夜雪の夜。ふたりの女臈にうらみをふくみ。命をとるべきおもひ立。さりとはをそろしき女と沙汰極りて。みせしめのため。御仕置になりぬ。是我心からの惡事にて一命を捨ける。其後彼女の執心かよひて。人をなやませ女中は難病請て。是を歎きぬ。いづれの女臈にも額に。鹿の袋角のやうなる物生出。美形おかしげに成て。外科本道も傳へ聞たるためしもなく。此療治にあぐみぬ。表向の番組の役人はのこらす。取ころされて。其後はひさしく明屋敷にあそばされ置れしに。有時仰出されしは。此川屋敷のうちに。一夜を明して。見てまいれと。世にかくれなき。ぶへん者。

大平丹藏といへる男と。まぎれもなきおくびやう者。柳田久六此二人を同役に仰付られ。申合て一夜をつとめしに彼松風の女むかしの形は。皃ばかりにのこし身は三丈あまりの蛇躰となつて。二人にとりかゝれば。久六は前後忘して死入けるに。丹藏くみふせて。正しくとらへたりしが。其まゝ消てなかりき。其跡に松風が小脇さしありて。是をしるべに兩人立歸り。御前へ右のだん〳〵言上申せば。御機嫌よろしく。手柄せし丹藏に。千石の御加增。又死入たる久六に。千五百石御加增くだし給はれば。御年寄中此上意をがつてんつかまつらぬやうだい御覽あそばし。丹藏は是ほどの義。仕りかねまじき者なり。又久六は兼てしれたる億病男主命をおもんじ。一夜を勤め死すに歸る事。丹藏にはましたるぶへんものと仰せられけると也。其後は此御屋形子細なく女中の難病もつねの面に成ぬ

丹後のきれとの文珠に廿五日のあけぼのより。國中うつして參詣す。爰に大

㊃ 我子をうち替手

代傳三郎一子に傳之介十五歳に成しが。小者一人めしつれて詣でけるかゝ

る折ふし。同じ家中に新座者七尾久八郎といへる人の子に。八十郎と申せしは今年十三才なりしが。是も草履取一人つれて。此所はじめてなれば。浦めづらしく天の橋立の松の葉越に。月夕影うつるまで。あなたこなたを詠めめぐりて立歸る折ふし。傳之介に袖すれて。たがひに鞘とかめして。ぬき合せ。はなやかに切むすび。八十郎首尾よく傳之介をうちとめ。前後を見合せ。立のきける。兩方の小者は。あひうちしてむなしくなりぬ。傳之介親これを聞つけ。其所に行て。せんさくするに相手の行方しれず。小者も夜中なれば。見分がたく先傳之介死骸を取かくしける。八十郎は屋敷に歸り親にはじめを語れば。是まで歸る所にあらず。最期の覺悟仕れと書狀添て八十郎を乘物にて。傳三郎方へつかはし。此ものそれにて。何やうにも御こゝろまかせと申入。傳三郎請取先座敷に置ば。八十郎が敵とよろこび母親長刀をつとりかけ寄を傳三郎押へ。あれより見事につかはしけるを。むだ〳〵とうつべき子細なし。とに我子は十五歳。是は十三にて武道も各別にまされば申請て此家繼にすべし。是同心ならずば。其方離別といはれて。男にしたがふ女心傳三郎よろこび。段〳〵御願ひ申上れば。ためしなきしかた。大望にまかせ。八十郎を傳三郎にたまはり。親子のむすびをなせば母にも孝をつくしまことの親には二たび。おもてを見あはす事もなく。傳之介と名もあらためて。日毎に武の道に心ざし深く。成人の後傳三郎娘とあはせ。むかしの恨みなくて。母もこれにふびんをかけて。大代の家を繼て名をのこしぬ

武家義理物語　巻三

目録

一　発明は瓢箪より出る

今の世は沖の石か男は出家

高野から声をきく

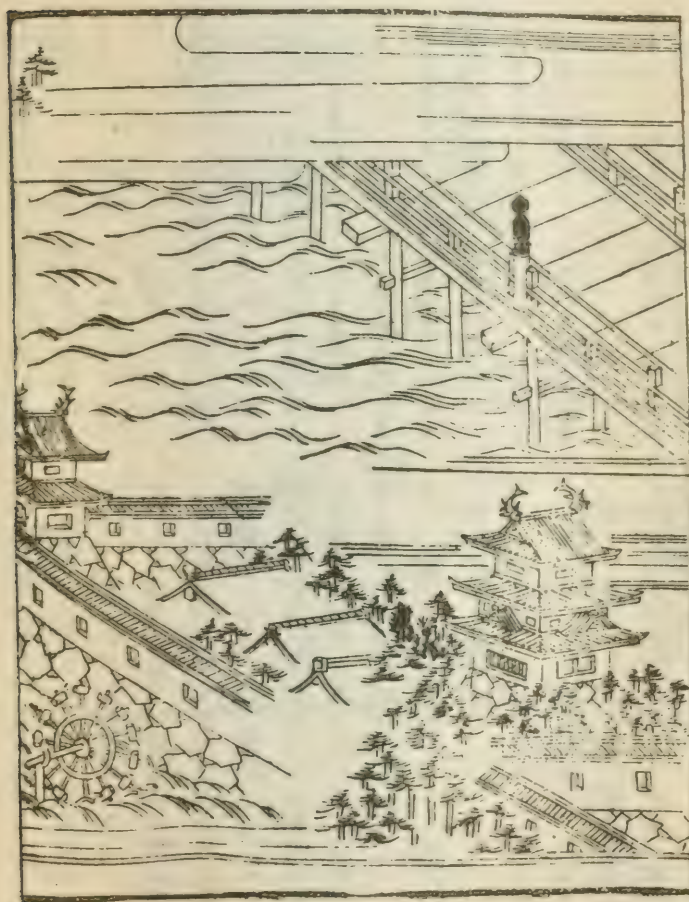
二　約束は雪の朝食

篠山乃作りけに隠居者を

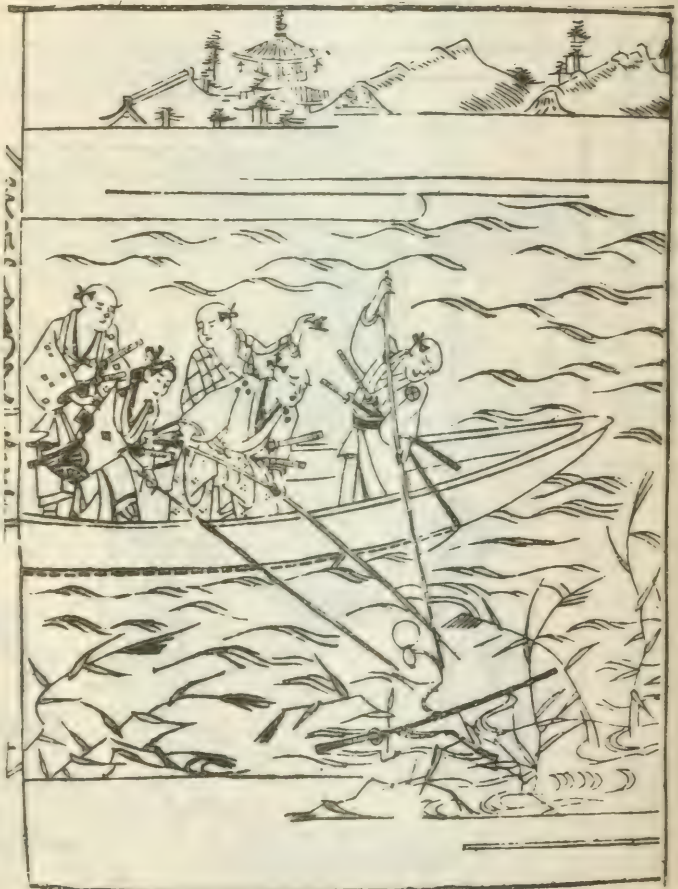
もろこしの夜の友を忘れぬ

㊀ 発明は瓢箪より出る

近代は武士の身持。心のおさめやう。各別に替れり。むかしは勇をもつはらにして。命をかろく。すこしの鞘とがめなどいひつのり。無用の喧嘩を取むすび。其場にて打はたし。或は相手を切ふせ。首尾よく立のくを。侍の本意のやうに沙汰せしが。是ひとつと道ならず。子細は。其主人。自然の役に立ぬべしために。其身相應の知行をあたへ置れしに。此恩は外になし自分の事に。身を捨るは。天理にそむく大悪人。いか程の手柄すればとて。是を高名とはいひがたし。御代靜なる江戸詰の西國大名の家中に。竹嶋氏の何がし。滝津氏の何がし。此兩人一所に御役。首尾よく勤て。生國に歸る。道中申合て。たがひに機嫌よく。日をかさね。參州岡崎の泊りの夕暮。水風呂をたかせ。二人ともに入仕舞。明衣を着ながら。折ふしの暑さ。しばし端居して涼み。滝津氏の人。鼻紙喰さきて。灸の蓋をこしらへ。慮外ながら。是ひとつ腰へと頼む。竹嶋氏其蓋をしてやる時。すこしの疵を見付。何心もなく是迯疵かといふ。いかに心やすくても武士はいふまじき事なり。滝津氏是を氣にかけて此疵は先年狩場のはたらきにて。かくは成けれども其證據なければ是非なし。菟角國元にくだり着。其時分療治いたさせし外科をよびて。一通り申。其うへにて打果せば濟事なりと。心中を極め。其色見せず。道を急ぐ。伏見の濱に着て。番所に斷申。五十石船を借きり。荷物あらためさせ。舟を出せといふ所へ。六十ばかりの侍。十二三の美児をつれて。此舟に乘たしといふ。船頭かし切といへば。殘念の皃つきして。彼子が手を引歸る有さま。いかにしても見かねて。迚も先の間は明て有なれば。乘てしんじませいといふ船頭酒手とよろこび。座をこしらへて乘けるに。又三十ばかりの旅僧ゆたん包を提て此舟見かけてはしりよるを。是も情にて乘ければ。出家侍二人ともに。數〱のお礼を申つくし廣き所に自由にかり枕をよろこぶ。やう〱淀の小橋を過。水車の夕浪おもしろく。是を肴にして吸筒取出し。二人さし請もせはしければ。後に乘たる兩人も呼ませて。酒事おかしく成ぬ。彼少人に小謡。出家も座興にはやりぶしの小哥ひとしほ慰みと成。其後深くともし火の影にして。なを扱かはし。いつとなく大盃になし滝津氏の人にまはれ

ば。いかな〳〵是ではならぬと立のかれしに。竹嶋氏袖をひかへ。又逃給ふかといはれければ。此言葉聞とがめ。宦前岡崎にて。にげ疵といひ。今又堪忍ならずと。刀ひつさげ立かゝる。竹嶋こゝろへたりと。そばに置し刀を取になかりき。滝津しばらく待て。刀見えぬとはふしぎなり。心静にたづね給へ。それまでは相待といふ。色〳〵僉義するに。いよ〳〵見えぬに極りければ。竹嶋覚悟して。是武運のつき。一分の立ぬ所なれば。相手取までもなしと。自害をまづさし留。後にのりたる侍の申せしは。此刀の有所。それがしのすいりやう大かたは違ふまじ。私の望みに申所聞入給はらば其刀出させ申べしといへば。竹嶋は元より滝津氏もお差図はもれじと。誓言にて申ける。其刀是なる出家が盗たるといへば。氣色をかへて。法師をあなどりていふやといかる。彼侍さはかず其方が酒なかばに。腰より長緒の付し。へうたんを取出し。山椒をつみける。其瓢箪ありや。ないにをいては。をのれと。せんぎつめられ。折なく川中に飛込をのれと自滅いたせり。既に其夜も明て。舟さしもどし。瀬〻見渡し行に。鵜野〻かれ芦の

中に。ちいさきひようたん浮て。流れもあえず。見えけるを是ぞと取あげしに。刀のうけに付て酒もり半に沈め置しと見えたり。人の氣のつかぬ所をさりとは名譽の勘者と。彼侍の事を感じける。彼さむらい㝡前刀出たらば頼むと申願ひは兩人の中事と首尾能して別れける

(二) 約束は雪の朝食

石川や老の浪立影ははづかしと讀捨。今の都もうき世と見なし。賀茂山に隱れし。丈山坊は。俗性歴〳〵のむかしを忘れ。詩歌に氣を移し。其德あらはるゝ道者なり。さるによつて。心にかなふ友もなし。有時小栗何がしといへる人。是もへつらふ世を見限。かたちを替て。京都にのぼり。東武にてしたしく語りしゆかしさに。この草庵にたづねて。すぎにし事ども。今の境界の氣散じなる身の程。心にかゝる山の端もなく梢は落葉して。冬氣色のあらは成。月を南おもての竹椽に。つゐ居詠ながら語りしが。此客何となく。風斗立て。我は備前の岡山に行事有といふ。今宵は是にと留もせず。勝手次第と別れさまに。又いつ比か京歸りと聞

ば命あらば。霜月のすへにといふ。然らば廿七日は我心ざしの日なれば。是にて一飯かならずと約束して。立行ぬ兩人ともに世を捨し。心のまゝなるは朝を待ぬ。旅衣。夜露を肩に結び。枯野枯葉の藤の森に成時。海道つゞきの人家寐しづまりて。伏見戻りの馬かたの聲絶て。竹田寺の半夜の鐘の鳴時。丈山其人の跡をしたひて。しる谷越にいそかれしに。神無月八日の夜の月かすかなる。松陰より人の足音せはしきに立とまりて。丈山かといへば。いかにもみをくりに是までといひけるに。都に友もあまたなれど。心ざしは其方ならではあらじと立ながら暇乞して別れぬ。其後備前に着し。たよりもなく。日数ふりて。十一月廿六日の夜降し大雪に。筧拔へき道もなければ。また人良の見えぬ曙に。丈山竹帚を手づからに。心はありて心なくも。白雪に跡を付て。踏石のみゆるまでとおもふ折ふし。外面の笹戸を音信し。嵐の松かなど聞耳立るに正しく人聲すれば。明わたる今小栗何がし。たづねきたるに其さま破紙子ひとつまへ門に入より編笠ぬぎて。たがひの無事を語りあひ。しばらくありて。此たびは寒空に何と

してのぼり給ふぞといへば。そなたはわすれ給ふか。霜月廿七日の一飯たべに。まかりし。それより／＼と俄に木葉焼付。柚味噌ばかりの膳を出せば。喰仕廻て。其箸も下に置あへず。又春までは備前に居て。西行が詠め残せし。瀬戸のあけぼの唐琴の夕暮。昼寐も京よりは心よしとて。取いそぎてくだりぬ。扨は此人日外かりそめに申かはせし言葉をたがへず。今朝の一飯喰ばかりに。はる／＼の備前より京までのぼられけるよと。むかしは武士の實有心底を感せられし

(三) 具足着て是みたか

武士は人をあなどる詞。かりにもいふまじき事ぞかし。有時嶋原の後陣を。西國の大名に仰付させられ。人数を揃へられしに。五十五歳より老人。十五以下の少人は。赦免有て。此外物忌。病人は各別。残らず出陣の御供觸有しに。爰に中小性。四人同じ部屋住ひして。勤めし。中に壱人長病にて。けふをうき世のかぎりと見へしが。いづれもいかめしく軍立の用意とて。いさむを聞て。たよりなき枕をあげて。我此節かく煩けるは。武運のつきし所なり。先祖具足は譲りをかるゝ。鑓一筋ひつさげて。天晴御馬のさきに立。御目通りにて。高名感状取べき。此たび扨も／＼口惜やと。此事いひもやまざれは。をの／＼耳かしましく思ひながら。一所に住ば是を聞ぬ良もなりがたく。今もしれぬ病人の無用の願ひいはれすとも。息のかよふうちに。念佛申。後世の一大事を心がけ給へ。具足は重き物なれば。是着て死出の山越御太義なり。かるき經帷子を着給へと。三人小話て笑へるを聞て。いよ／＼無念かさなり今一たびの命を。諸神に立願せしに。不思義に快氣して。手もはたらき足も立程になりぬ。時に日外の遺恨やめがたく。段／＼筆に殘し。具足甲を着ながら。鑓取まはして。相手は三人と名乗かけ鎧着ながら。死出の首途といへば。皆／＼是非なく。ぬき合とも。おもひ込たる一念の鑓先。嶋原に行ての働きみせんと。三人ともに突留。其死骸のうへに腰をかけて。いさぎよき自害。書置の子細。道理至極に沙汰して。此人を惜みぬ。さる程に三人は雑言ゆへに。あたら身をうしなひ。大事の前の用に立ずと是を笑ひける

(四) おもひもよらぬ首途の聟入

治る國の守の弓大將に。隼人といへる有。又鉄炮大將に外記といへる有。此

兩人當番同日にて語りあひ。をのづからしたしくなりぬ。ある時隼人煩て。代番頼み。引籠しに。外記はる〳〵の屋敷より病中の見舞たび〳〵なり。此心ざし嬉しくおもふ折ふし。又雨風はげしき夕暮に玄關に來て。けふの機嫌のほどをたづねられしに此事奥へ申通じけるに。幸氣分もすぐれ。はじめて枕をあげ。病居もあらため。友なつかしき時成に。外よりひとりも問ねば。ひとしほ淋しく。其御かた。御目にかゝりたき。斷申。內證迄通し。御見廻の一礼申のぶれば。氣色の樣子。念比に聞合。すへ〳〵養性の身もち迄申されければ。隼人よろこび。勝手口の杉戸あけさせ。妻女呼出し外記に面をあはさせ。親類のかたらひ。同前になりぬ。心の闇からぬ武家のつきあひ潔し。南をうけてあかり窓のもとに。藥鍋かけて。十四五と見へし娘其さま艶なるうちかけ小袖。ゆたかに顔形色づくるともなく。美女に生れつきたる。手づから火箸取まはし。せんじやうつねのどくかと。年寄たる女にたづねられし。物ごしのやさしく。あまた見へわたりて腰もとづかひも有に。是は大事と。孝をつくせし心ばせを見請。娘の

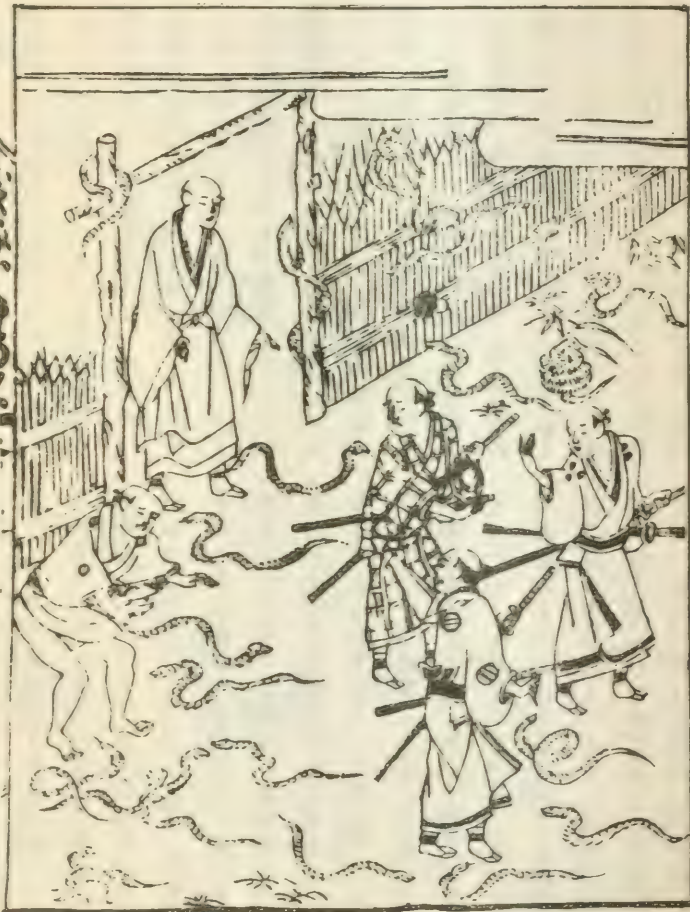
子も又ありたき物ぞ。病家のあつかひは是ぞと。殊勝に頼母しくおもはれ。又戸をさして。外には人なく只ふたり世の事ども病氣にさはらぬ咄しの次手に。外記は息女の事をうらやみ。私は男子ばかり三人まで持けるが。此内壱人娘ならば女房ともが言葉たよりにも成ぬべき物をといへば。隼人聞て。世はかならずおもふまゝならず。我等は只今の姉にして娘ばかり四人有。女の子御望みならば。奥の御茶のかよひに。やとはせ置べし琴を好。哥をよむなどいひて。京たよりに中院殿へつかはしける。雀小弓。名譽に一筋もはずさず。女のいらざる四書までも讀て此ほどは古文聞に。氣をつくしける。すこし娘自慢なれども。何かさて。こなたへならばといへは。外記淺からず。悦喜しからばわたくしの惣領龜之進。十九に罷なれば。向後御自分の子と。覺しめし。くだされと。外には聞人もなく。祝言いひかはして屋敷にかへりぬ。外記内證へは。いまだ是を語らず。

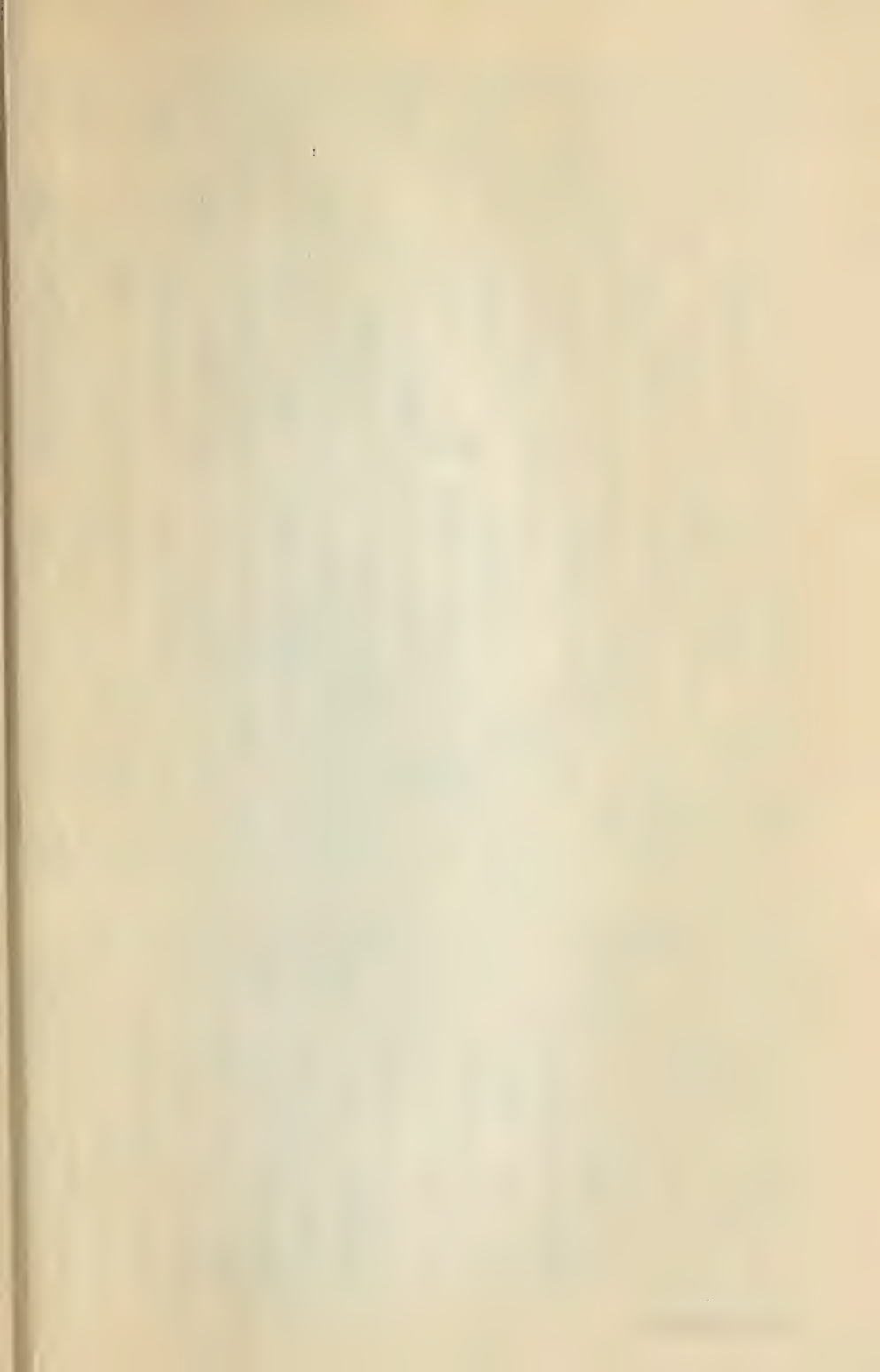
其明の日の夜半に。同役の方に宵よりはなし居て歸るを門の片陰に三四人立忍び。兩方より。まん中に取込。聲をもかけず。闇打。外記こゝろへて。ぬ

きあはせ。四人を相手にしばし切むすぶに。覺悟にあらねば。初太刀にいたみ。三人までに手は負せしが。終によはりてうたれぬ。供は小坊主なれば。屋形にはしりて。此事しらせける。龜之進。刀ひつ提追かけしに。はや行方しれず成にき。しかも道筋四つにわかれる辻の事なれば。さま〲にまよひて。先脇道の根笹を分て身をもみ。二十町あまりもたづねしに。人影もなくて。無念の胸をしづめて立歸り。此打手を貪義するに。外記軍法の弟子に。牢人有しがおのれがはけみうすく同學の者に極意ゆるされしを恨み。同じ惡人をかたらひ。師をうつてのく。天命何國にかのがるべしと。身をもだへて進めと。心にまかさぬ主命なれば。敵うちたき願ひ申あげしに。首尾よく御暇を下し給はり本意とけての節。先知相違なしと老中仰わたされ。上意有かたく。御前を罷立。屋形にかえらず。母の義は親類に頼み殘し。其身は達者なる家來一人めしつれ。外よりの助太刀をさし留。生國和州を立出る時隼人。病氣の用捨なく。かけつけ。いひわたする子細有とて。我屋敷へ龜之進を申入。其方はしり給ふまじ。御親父とけいやくしての乞聟なり。貴殿女房は。目出たふ歸宅有まて。此方にあづかり置と。娘よび出して。夫婦の盃事をさせて。關和泉守の刀。一腰金子百兩はなむけして。心よく暇乞して別れぬ。兼ての約束人はしらざりしに。此時にいたつて隼人の心底を感じける。龜之進は。諸國をしのびめぐりて。二とせ過ての弥生山。江州の浦里に身を隱して。ある夜是を付出し。名乘かけて切込。つね〲覺悟して浪人五六人有合。又すけ太刀すれば。龜之進あやうく請太刀に成て。武運のつきと口惜き時。相手ふしきや後髮ひかれて。殘らず打とめ。本人が首器物に入て。本國に歸りぬ。和州に有し隼人は。龜之進。首尾事明くれ。心もとなく夫婦いひ出し給ふ時娘嬉しげに笑て。先月廿九日の夜。敵うたれしにうたがひなし。其子細はみづから一心に諸神を祈しに此めくみにや。夢なから其場にゆきて。後結して殘所なく。うちとめさせ。よろこび歸るとみしが覺ての明の日。寢まきの小袖だん〲に切て血に染りしと。語りも果ず。それを二親に見せければ。心よく龜之進を待かねしに。程なく。立歸り。御前よろしく數〲の御褒美。先知に弐百石の御加增有て。隼人をめされ立出る時の段〻。至極におぼしめされ。緣組の事仰付られ。世

のほめ草をなびかせ。隼人が家風をふかせける。其後夢物がたりせしに。剋る時もたがはす。目に見ぬ助太刀おもひあたれる事ありと。其はたらきを語り慰み両家ともに繁昌してかたらひをなしけるとや

㊄ 家中に隠れなき蛇嫌ひ

人によつて。人喰狼にはをそれずして。何の事もなきひき蛙を嫌ふも有。是其生によるなり。江刕田上川の瀬にかはりて。古代稀なる洪水。岸根の松柳もほれて。田地荒野なれば。其比の國の守。これをあはれみ。百性をすくはせ給ひ。堤ぶしんも。里へは掛給はす。手まへの人足。数千人出て鋤鍬の音。湖水にひゞき渡りて。竜女もおどろくべき多勢なり。此奉行役人。家中の利発人さゝれて四人立合し中に。小林氏の何がし。武家かたきにうまれつきたる人にて。心のたけき事。世にすぐれたれども。常に蛇をおそれて。其咄しを聞さへ身をちゞめけるに。同し奉行。ちいさきくちなはをとらへて。是それへなぐるといへば。たちまち面の色へんじて。刀のそりうつて。弓矢八幡なげてみよ。壱寸もそこをのがせじとい

かれば。をの〳〵中に立ふさがり。兩方へ押分。當分。何の子細もなく。濟ぬ。其後いづれも蛇。うちかけんとせし人のもとに行て。今日の首尾。其方何の心もなき事ながら先あやまり給へ。日比をそるゝ人を存じられての座興よく〳〵思へばせまじき事なり。莬角此義は堪忍と。言葉をさげ。むかしのごく語り給へと內證申せば。此男流石侍にて。いかにも此方の卒爾千万至極の所なり。をの〳〵お詞はもれじ。何やうにも賴入と申せば。いづれも此一言を聞から。神妙のいたりなり。此上は其方の手をさげさす事にあらずと皆〳〵小林氏のかり屋に尋入。今日の義は。さぞ〳〵御腹立たるべしと。いひもはてぬに。されば。いやものを見せかけ。さりとはこまりたる所。あまりをそろしさに。刀のそりをうつて見せしが。それは何の心もなし。我等はあれほとすかぬ物なしと大笑ひにて此事濟ぬ。心中を色に出さず。つねの事にして其埒を明られける。是ぞ発明なる取さばきと。思案ある人は。感じぬ。其後小林氏。世の無常定がたく。一とせあまりのうちに。妻子殘らず。うしなひ何の願もたへて。御前よろしく御暇申請。長釼やめて。身を麻衣にかへて。かくれ家もあるに。人倫のかよひなき。海中のはなれ嶋。笹ぶねのたよりに身を越て。竹生嶋の北なる竹嶋といふ所に。草葺をむすひて爰を出ぬ事。三とせあまりになれり。すぎにし比。したしき人ゝさそひあはせ。一夜とまりに定め此嶋へたづねしに。むかしの形はなくて。をこなひすまして殊勝さかぎりなかりき。取ませてむかしの事ども今の身のうへをかたり。落葉かき集めて茶をせんじ。有合に米うち込て。もてなされ。其日も浦浪に影うすく。三井の晩鐘かすかに。鵆もいづち飛うせ。松に嵐のみ是より淋しさ。又何國にか有へし。けふは我人十二人つねは。菴住ひとりはよく暮されける。をのづから観念の南窓も闇く成て朽木其まゝのかゞりを燒ば。此火のうつりにはひあつまる蛇幾かぎりもなく。人をそるゝともなく。ひざ懐に入てうねくり。又は裾より入けるをはじめの程は取のけしが。中〳〵数千筋なれば。をの〳〵氣をなやみて。是はいかなる事ぞとたづねしに。元より此嶌蛇ある所と傳へ聞て。身をこらして佛心の大願と語られければをの〳〵横手をうつて年比は嫌はせ給ふに。今此中に住せ給ふはさとりの眞実あらはれけると。夜もすがら。うるさく明るを待か

ねをの〱城下にたち歸りて此事を語りぬ

武家義理物語　巻四

目録

三　恨の数読永楽通寳
是そ雨の日の暮掛り
幽霊の形を訴訟の

四　丸綿かづきて偽の世渡
宿かりつれは十分一気
武士の息女は偽しぬる

㊀ 成ぼとかるひ縁組

武士の身程定がたきはなし。生國備中の松山をはなれ。和州郡山に行て。むかしめしつかひし小者。今は町家に住ひして。世をこゝろやすく暮けると。其噂傳へ聞て。ひそかにたづねしに縁はつきず。めぐり逢ば。此男おどろき。是はいかなる御首尾にて。かく御壱人爰には御越あそばしけるぞと申。さればは是非もなき義理にて御暇申請。妻子は國方に預ケ置。身躰かせぐうちに。世無常のならひ。二とせのうちに妻子相果。今はながらへても甲斐なし。いづれの僧にてもたのみ。長劔をもやめて。山居の心ざしもをこりしが。浪人の時節。世を捨なば人の沙汰すべき事も口惜く。何とぞ先知に有付。其後は思案もすべし。すこし存寄子細もあれば。一兩年も此所に借宅をもして。世間を見合たき願ひなり。其才覺頼むといへば。だん〳〵聞に。泪をこぼし以前に替らせ給ふ御事。さりとは見るにさへいたまし。とかくは御こゝろまかせにと先笹の屋のせまき住ひを。お目にかけ。夫はたばこ切さし。徳利さげて酒屋に行ば。女は麻布織すて。茶の下焼付。心一はいもてなしけるに一夜を明して見しに。中〳〵氣遣たへねば。何とぞ我宿とさだめて。すこしのうちも暮したき願ひ申せば。幸ひ近所に。此程迄針立の住れし明家。南うけに菱垣の。きれいに詫人に似合たる宿なれば。是をかりつぎて。奈良團の細工をすゝめて。かつ〳〵成。渡世もあはれに。たらぬ所は合力して。半年あまりも過ゆけば。所の人もなじみて。住うき事もわするゝ程になりぬ。いつまで。ひとりは寐覺も淋しかるべしと。春日の里にかよひ。商人申出して。よき事あり。後家の娘廿二三なるが其形うつくしく。しかも利発者にて。母にも孝をつくせば。人皆夫妻の望あれども。浮世はあきはてしと。此事を取あへず。さては一たび男持けるかと聞に。さもなくて。花の盛をいたづらに振袖留て。人にみられたき風情なかりき。然れば。わけなき病氣もありやと。内證せんさくするにさもなく。あたら日数をふる程に。こなたの事を語り出して。當分は浪人衆成が。すへ〴〵頼みある御方といへば。母人よりは其娘聞届て其をちめなる侍衆ならば。のぞみなり。先様に御合点あらば。身をまかせ。お茶のかよひ。つかふまつり申べしと。したしく我にかたりける。手前よろし

き人の。いへるは取あへず。貧家を好み參べしとは緣なりと押付わざに取持。夫婦にかたらはせけるに。此女男の氣をとりて。何事もそむかざれば。今の身にして嬉しさ。限りなく小舛。横槌ならべ枕のちぎり。錦のしとねに增り。たのしみ。ふたりが中に。何か包む事なく。折ふし春雨しつかふふりて。外より尋ぬる人もなく。寐酒呑かはして。つまり肴に。塩鯛のかしらを。なたふりあげて打割。いさきよき㒵つきして。此ごくいつぞ見付出してと。つぶやかるゝを聞とがめ。何事ぞと女に問れて。今はかくさず親の敵此所に立のけば。それをうつべき大願とくはしくかたれば。扨は大事の御身と。なを〳〵念比につかへて。心中に春日へ立願して。やす〳〵とうち給ふ事を祈ぬ。それより廿日も過て亭主しのびて。南都のかたへ行とて。夜の明がたに宿を出しが。しばしあつて立歸り。件の相手をけふ見付出したり。是は天理にかなふ所と。踊あかり肌に着込。くさりの鉢巻。女は刀の目針をあらため。口に人參をかませ。盃事してうち笑ひ本望とげ給ひて。追付歸宅を待請ると。此時にいたりて常とは各別かは

りて。かひ〳〵しく亭主是に力を得て。いさみ〳〵て立出しが程なく立歸りて。首尾殘所なく。敵は是ぞと。其首手桶に入て。割蓋にて隱し。あたりの人此事をしらず。夫婦さしのぞけば。撫つけあたまの大男十面つくり。目を見ひらき。無念皃にふくませける。是門田番藏とて。日比は武の達者なるが。利剱にとめける。先祖藏人殿へ手向奉ると。血刀添て觀念するをみて。此女泪に袖をひたしぬ。亭主此有さま合点ゆかず。扨は此首によしみありと見えける。ありのまゝに語れと。男は俄に心置て。夫婦の間いな物に替りぬ。女はすこしも動轉せず。只何心もなし。手ばしかき御働きを嬉しさのあまりと不斷の機嫌になをせど。男一圓同心せず。その子細を是非に申せと聞かゝる。女迷惑して語ける。わたくしも親の敵を眼前に見ながら。女の身のかなしさは此度かく。無念の年月をおくりぬ。おぬしさまと。かたらひをなしけるも。御心底を見定。嬉しや此事を頼み討てもらはんとおもひ入し。折ふし。敵ありとの御物語。それにさし合せては申かねしに。けふ御首尾よくうたせ給へば。我かたきも。あのごくに。うた

取たきよと。心底外にあらはれ。お目にあまれるなみだの袖。かゝる目出たき折ふし。万事は御ゆるし給はれといふ。男も聞もあへず。今は我ためにも親なれば。其まゝに置へきやと。此はじめをつど〲に語らせて聞届け。其者は今ほど西の京といへる所にまぎれ。白坂外記といへる名をかへ。天原流波とよびて。面むきは。手習の指南して。今も武藝をこたらぬよし語れば。亭主様子をのみ込。茶漬食をくひて。つゐ宿を出て行しが。其日の七つさがりに此首もうちて歸り。女にみすれば。是ぞこれよ。ひだりのかたの額に切疵。むかしにかはらぬ良ばせ。悪やと死首ながら。守り刀を切つけ。又此恩わすれ難しとよろこび。今は眞言泪にくれぬ。一日に敵二人までうち取事。前代ためしなきはたらきなり。此親類のとがめも有べしと。跡の事は宜前のたばこ切にまかせ。奈良にまします母をも。一所に引越。其夜のうちに所を立退。本國にくだりぬ

㈡ せめては振袖着て成とも

伏見の城山は。桃林に牛馬の捨置とはなりぬ。むかし此所のはんじやう。諸國の大名屋しき。たちつゞきし時。和州の内の城主にめしつかはれし室田猪之介といへるは。その比の美兒にして形よは〲として。心ざしつよく。さながら女かとうたがはれ。秀吉公の御女﨟の花か。おちよぼか。此二人の艶なる風俗にも見まがふ程なり。主人も一入ふびんかゝりて。外の前髪よりは。御寐間ちかふめされ。出頭時を得て。人もうらやむ仕合なるにいかなる者か是をそねみて。戀によせての落書猪之介身のうへの事。あらはにしるし。御目通りに張付置しを。横目の役人見付。善悪事包ます。申あぐべき神文なれば。此段言上申せば。御僉義もとげられず。一筋に御腹立あそばし猪之介には何の子細も仰渡されず。御國元へつかはされ。母親に御預ケあそばされ。屋敷は閉門申付べしと。岡沢三之進といへる。留守居役人に急度仰付れ。御意の通りに。門を閉きびしく番を付。親類かきつて。出入かたく改ける。猪之介親子何とも。お科の程。わきまへがたく。切腹すべきやうもなく。是非もなき仕合にて。取籠しが。下〲はわたり奉公の者なればかゝる時節を見捨身の大事を思ひやりて。ひとりも残らず立のきぬれば。世のうき時にひとしほ。かなしく朝夕の煙も絶〲に。母は子の事いたましく。手なれぬ米を

かしき給へば。猪之介はみるもかなしく。せめては井の水を釣あげ。摺鉢の音さへしのびて。せつなきけふを暮し。明日の事をも命あるゆへ。なさけなく。日をかさね。夜をかぞへ月も覺えず。年もわすれ。軒端の梅を暦に。さては春にも成けるかとおどろき。只現に動き。夢に物いふこゝちして過しぬ。今はたくはへもつきて。をのづから。かぎりの身とせまるを覺悟して。親子最期のいとまごひ。これらは武運のつきぞかし。我は女の身自害の見くるしきも。死後にても。人もゆるすべし。汝は後悔ある身なれば。母より先に死皃を見べし。さあ。今ぞおもひのこすなと。いさめられしに。猪之介御意にしたがひ。そゝけし鬢を撫つけて。随分ゆたかにかしこまり。諸肌ぬぎて。小脇ざしの鞘ぬきはなつ所へ。人の手飼と見へて。まだら犬に。むらさきの首玉入て。紙袋ふたつ。左右へわけて。むすび付られ。物いはぬばかり。尾をふりて。ちかく寄けるほどに。ふしきに思ひ母これを明て見られしにひとつの袋には白米入て。命はかるしと書付。又ひとつには種〻の菓子を入。義は重しと書しるして。主はたれともしらず。おくられける。是に親子の人。思案して。此心ざしに相果べきは。いつとても成事なり。是は定めて諸親類の。誰があはれみとしられたり。此犬は見しりもなきと。背筋を撫さすれば。嬉しげに立歸る。其行衛をみるに。藪疊の破れよりくゞりぬ。其後はあけぼの夕暮に人の氣を付ぬ折ふし。萬の食物をはこぶ事。はや二とせにもあまりぬ。光陰矢のごとし。弓馬の家すたりて。五とせに今すこしの程こそたゝね。なが〳〵の閉門。たいくつして病氣もさしをこり。やみ〳〵と此まゝに果なん事をなげきしに。諸神御めぐみにや。殿御心ざしの有時。猪之介事おぼしめし出され御とがめ御しやめんあそばされしに。有難次第とお請を申上。次手ながら御訴詔申上る。迚もの御事に。只今迄閉門仰付られしお科の段〻仰渡され。御ゆるしに預り申たき願ひ。大殿此義至極に覺しめされ。最前の落書ひそかにつかはされしに。しばらく思案をめぐらし兼てふあいの中間。豊浦浪之丞そねみにて有べき事をせんぎ仕出し。則筆者は町家に身を隱し。兵法の指南をせし浪人。岩坂金八に極まつて。兩人ともに切腹うち首に仰付れ猪之介。長〳〵の難義ふびんに覺しめされ。げんぶく仰付られ。弐百石の御加増あつて。御判役承出頭むか

しよりは今そかし。世の聞へ。面目すゝきて二たび國元に歸宅して。一門殘らす。參會の上にて。犬をかよはせられし。こゝろばせの方をたづねける。此人更にしれがたし。何とも合点ゆかず。さま／＼氣をつくしぬ。有時屋形町の末／＼まで見めぐりしに。日比かよひし犬の。いねふりて。さる屋敷の門前に見えける。是はと嬉しく立寄。いかなる御かたの宅ぞとたづねけるに岡崎四平といへる大番組の人なり。おもへば此人は我に執心かけられし事。御前を勤めしうちにも。すこしは忘れもやらず。殊更此たびの心づかひ。一命にかへても。此恩は報じがたし。今でも此人の身の上大事の出來ば。神以我ひかじと心底に僞りなし。其夜ひそかに。人つかはし四平を手前に申請。親子ともに泪をむすび嬉しき數／＼の禮義をのべ。母は勝手に入らせ給へば其跡はしめやかに語り。まづもつて犬のかよひの事をたづねけるに。殿御國入の時分はこなたにあこがれ。夜／＼屋形のうらまで立しのび。かなはぬ胸を晴してかへるに。いつとなく其犬宿よりつきて。戀の道をわきまへけるとかたれば。猪之介赤面して是非もなや。

姿の花の枝を折られ。今の古木見せけるも口惜けれど。もは歸らぬむかしなり。心は替らぬ我なれば。いふも耻かしけれど。見捨させ給ふなと常の居間に入て。着ぶるしたる脇明小袖に身を替。枕ひとつに弐人の夢をむすびぬ。其年は猪之介二十二才成に。たはふれのあまりに。廿一才と年のほど。ひとつかくされしは。武士にはなき事ながら。戀路なれば。惡まれず。これぞ衆道のまこと成心ざしぞかし

(三) 恨の数讀永樂通寶

とらの年にはかならず洪水と語り傳へり。むかし駿河の國。安部川のわたり絶て。十日の雨やどりして。旅人の難義せし事有。其比は諸國の大名屋形たちつゞきて商賣人は抓取ありて。其時代小判とぼしからず。渡世をなしける爰に北國の城主の中屋敷はるか府中をはなれ。はるか西のかたの野末にありしが。是には一年替りの國衆の。長屋住ひ。千塚太郎右衛門といへるかたへ雲馬茂介といふ人。降つゞく五月雨の淋しさに。たよりて世の咄しもかさなる。雲間の入日の影。わづかに。こがらしの森移ひ。けふこそ氣も晴けると遠山。ひさしぶりにて詠め。傘ほせ。庭の溜り水かへ出せなど。小者に申付しに。此水竹椽の下にほそく流れ込。千丈の堤。蟻穴より崩がごく。見しうちにめいりて。柱もゆがみ壁もこぼれ是はふしきの事ぞと。此土中こゝろもとなく鋤鍬はやめ上土のけれは死人形もくつれず。見へける弐人念比に見届け。是は年ふりたる死骨にあらずをよそ四五年の埋ものなり。いかさま子細有べしと先兩人心をあはせ内談して。とかく御役人衆迄申入べし。折ふし參りあはされ。見へわたりたる通り證人と申せば。茂介聞届け。いかにも一所に上屋敷へまいるべし。私宅に歸れば時節うつれば。いざ是より同道申べしと。つれ立御門に出れば。役人錠しめける。兩人斷を申。私の用ならず。老中まて申上る事ぞといへば。何事にもいたせ。今晩御門は明がたし。各ははじめて此御屋敷入とに。此程御國より御越なれば。かやうにきびしく仕る子細も御存知あるまし。去去年の十二月廿三日に錢賣御門は入しが。其後出ざれば。色〳〵御僉義あそばしけるに。其有所。しれがたし。親類是を御歎き申上。世の取沙汰もよろしからず。ふびんや立嶋の布子着て毎日其男をみしに。金商人ゆへ。ころされけるや。其以後かく改め申と語れば。い

かにも〳〵其義ならば。明日の事にと又兩人。長屋に立歸り。彼死人をみるに。立嶋の着物是うたがひなし。扨其年此長屋に住ける人を。せんさくすれば。谷淵長六とて。家中廣きほうばいにも。別して兩人語り合。殊更太郎右衞門とは。緣類なれば。此事ひとしほ迷惑して一思案の貞色茂介見屆此段は御自分と。拙者が心にて濟事と申せは。太郎右衞門滿足して。然らば隱密に仕と。下〳〵の口を閉茂介は夜更て我宿に歸りぬ。其夜も明て五つ時分に。御上屋鋪より橫目衆まいられ。此前しれざりし錢賣の御せんさく有べき御事と。ひそかに沙汰有しを。太郎右衞門聞付。其まゝ茂介宅にかけ入。夜前申合せし甲斐もなく。さりとはひけう成心底。かく有べき事にはあらず。まつたくそこを立せじといふ。茂介さはがず。此段にいひわけにはあらず。神以それがし他言申せしにはあらずされど時刻うつさじと。茂介廿七才。太郎右衞門二十三。たがひに聲かけて。相うちにして。首尾殘所なく。浮世のかぎりをみせける。此事また下〳〵に御も外より申べき人なし是程分別にあたはざる事なし。是非もなき仕合。いざ

僉義有。右の次第委細にしれける。此段茂介申せしにはあらず。御上屋敷の小玄關へ男壱人あらはれ。わたくし事去〻年しめごろしにあへる錢屋成しが。今宵からだを堀出されて。嬉しや十三兩の小判を御取歸してといふかと聞しが。たちまち見へず成にき。是よりの御せんぎなり。さては其錢賣が。ぼうれいなるべしと。此沙汰になりぬ。此事國元に聞へ。谷淵長六が下/\の仕業には極れども。太郎右衞門茂介兩人が心底を聞て。其身ものがれず。今年廿五才の夏の夜の夢物語とは成ける

(四) 丸綿かづきて僞りの世渡り

房付枕も定めず。きのふ夢。けふは又思ひ川の瀬に替りゆく流れとて。いとしからぬ男に身をこらし。まんざら僞りの泪。待も別もそれからそれまで。いつれの女か勤めそめて。うき年おくるさへくるしきに。此程の遊女は。むかしのどく。かふき者にはあらずまづしき親の渡世のたよりに身を賣れて。身を賣女郎とは成ぬ。惣て。いやしき女にもあらず。是に定る筋目にもなく。時節にしたがひかくこそなれ。過にし關ケ原陣に高名其隱れなき何の守とかやの孫娘。父浪人の身と成今の都北の山里。物のわびしき住ひ。煙の種に拾ひあつめし。落葉の宿。名も埋木の風にいたみ。程なく病死あそばしての後母のいたはりにて。十二の春の花にたとへて。小櫻と名によばれ。里のあげまきにむすびし金水引も。今の風義の髮形になれば。ひなびたれども都の人も見かへる程になれり。有時諸國へ人きもいりの口鼻たづね來り。此息女つねならねば。あたら美形を。かくいたづらになし給もよしなし。幸ひ難波の大名の御母義さまよりうるはしき。御そばづかひ御尋にて。きのふもさるかたより。烏帽子裝束を着させ給ふ人の息女さへ。行末おぼしめしてつかはされける。此お子もいかなる武家の御前にか。ならせ給ふもしれまじと。物馴が言葉にとをふくませて。いひければ。母人同心まし/\て。娘が後の身のためとや。それをこそ願ひなれ。万事はおぬしさま賴むよし。こつちへまかせ給へと。其明の日はやく乘物さしむけ御供申と物事おもくいひなし。是は當座の御心付と小袖に金判十兩。母に渡して憐家の野夫をまねき。代筆に證文か〻せ。別れは親子の泪なるをやがての正月には家父入とて。あはせらる〻も程なしと。息女を引取すぐに伏見の川舟に移し。岸根つ〻きの里め

つらしく浪の流れの身と成事は浮鳥かたらず。口鼻もたまりて。大坂の色町佐渡嶋屋の何がしの宿に是をわたして。其女房は京に歸りぬ小櫻は何の差別もなく。遊女禿の大勢見へわたりて。しやれたる姿を嬉しく勤め。かへりの氣晴しに貝合。哥がるた取に花車のまじはりよろずにかしこく。然も心ざし悪まれず。菟角此子は松に極めて。なるべき者と。すへたのもしくおもひ。身の欲ながら外より大事に掛しに。それまでは遊女に成ともおもはさりしに。小林といへる禿を。松山さまといはせて天職に仕たて明日より水あげに出すといふより。我身の事と覺悟して。遊女に成べき事口惜く。それより作病おこし。あたゆる藥をのまずまして。食物を斷て親かたの歎きをかへり見ず。無言になつて。人見る事もうるさく。眼をふさぎ。夘月のすへより床にふして五月闇のころ。まことに心も闇くなりぬ。人〱是をかなしく。其身流にはなさじ。無事の姿を見立。親里におくりまいらせんといへと。今更それをも聞入ずして。我も武士の子成ものと。これを名残の一言にして太夫に成子を惜しやさて

㈠ 大工が拾ふ明ぼの丶かね

石田治部少輔。世ざかりに。花薗といへる艶女を都よりまねきよせ。寢間の友と定て。ふびんをかけさせられしうちに。籠城ちかづきぬれば。身の果べき事をいたはらせ給ひ。何となく京の親元へをくりかへさせ給へり。其後主君討死あそばしけると。世の沙汰を聞ながら。元町人の娘なれば。お跡をしたひて。命を捨もやらず。身を墨ごろもになして。其御方吊ふべき。心ざしを極めしに。是も母の親なげきて。無理に世を立させける。父の仕馴し商賣。わずかなる米屋を。一条堀川のほとりにて。親子もろともに。けふを暮し。すゑ〲はいかなる人にても。入縁を取べき願ひなるに。世間のさがなく。此宿を治部米屋といひけるほどに。家主聞をはゞかりて。此宿をかへさせける。其さきも又聞傳へて追出し。ひろき都に身をせばめて。はや二十五所かはりて。さりとは難義にあひぬ。せんかたなく伏見の片陰に草葺を才覺して。其所を又人にしらるゝうたてく。京海道を。朝とく諸道具をはこばせけるに。高家に有し時。くだし給はりし。金銀大分たくはへしを。荷物の數〲にわけ入置しに。銀三貫目寢道具のうちへ人しれず置けるに。やとひ人肩を揃て。道をいそぎしに。松原通因幡やくしの前にて。暫く休しが。此銀夜着の袖よりぬけ落て。堀のはたにあるともしらず。皆〲伏見にゆきける。其朝大宮の九左衛門とて家大工有しが。この男むかしは筑後にて歴〻の武士成けるが。義理につまりて。牢人して。思ひの外成。職人と身はならはしにて。渡世はかしこく。今朝の初霜いとはず。上京長者町へ毎日かよひしに。自然と此銀を拾ひ。ひそかに宿に歸り。我女房にはじめをかたり。是仕合の天理なり。親類かぎつて此沙汰する事なかれと。能〻いひふくめて。其身はつねにかはらず。細工所にゆきぬ。其跡にて。女つれあひをうたがひ出し。大分の銀。をとし有べき子細なし。いかなる難儀にあふべきも定がたし。我身の外。一門の迷惑と。女心のはかなく。此事を家主に内證かたれば。其女のいふ事なれば。をどろく斷ぞかし。宿老に通じて一町の沙汰と成。九左衛門隱し置所。曲もの也とかく我〲の愚智にはをよびがたし。近道に御公義へ申上るに極め。九左衛門に僉義をするに。幾たびもかはらず。拾ふたるよし申せ

ば。いよ〳〵後日をおそれ此段言上申せば。七口に高札立させられ。此落し手出ぬ時は。九左衛門にせんぎ有。それまでは。一町へ御預ヶなされける。其二三日過て。治部米屋の親子。御訴詔に罷出。おとしたる袋の中の品ゝを申上此銀主出ざれば。拾ひて迷惑いたさるゝのよし此難助たき願ひに申上る。其銀は一たび落し物なれば。ひろはれたる人にとらせ申たき望み。前代なき事と。女氣に欲のはなれ。かんせさせられ。はじめをたんだへさせ給ひ。流石石田の家にめしつかはれし程こそあれと。御褒美あそばし。其後かの九左衛門めしよせられ。まづ銀主出て其方が仕合なり。もし又しれざる時は。思ひよらざる難にあふべし。もと此あやうき事は其方が女房身のうへばかり思ひ。夫婦よしみかつてなく。このうへにも以前のごとく。つれそふかと御たつね有し時。九左衛門此御意有がたく泪にくれて。かゝる無心中の女。何とてすへ〳〵頼みがたし御前よりすぐに。いとまとらすよし申上る。さもこそ有べけれ。夫の身の上をなげかざる悪人に極る者なり。又治部米屋の母親に仰出れしは。其方ども女ばかりにて流牢をするなれば。あの九左衛門を聟として。是に万事を頼むべし拾ひし三貫目は。則敷銀なるべしと。御意親子ともにお請を申せば一町の衆中。是を取持大工は米屋にかはつた入聟。たがひにむかしを語れば。女は武士の家そだち。男は武士にまぎれなくさもしき心ざしなくて。此母に孝をつくし家榮へて住けるとなり

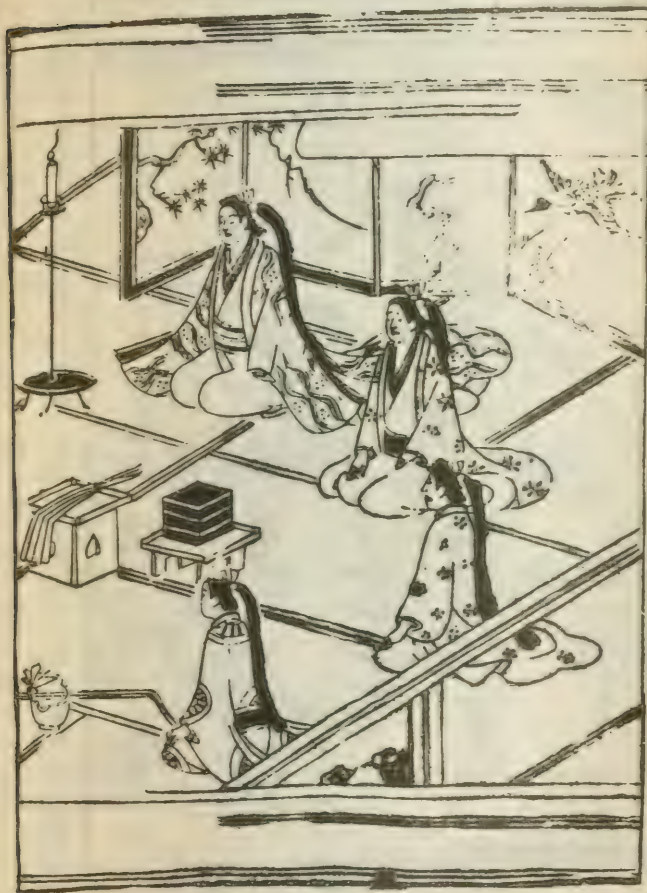
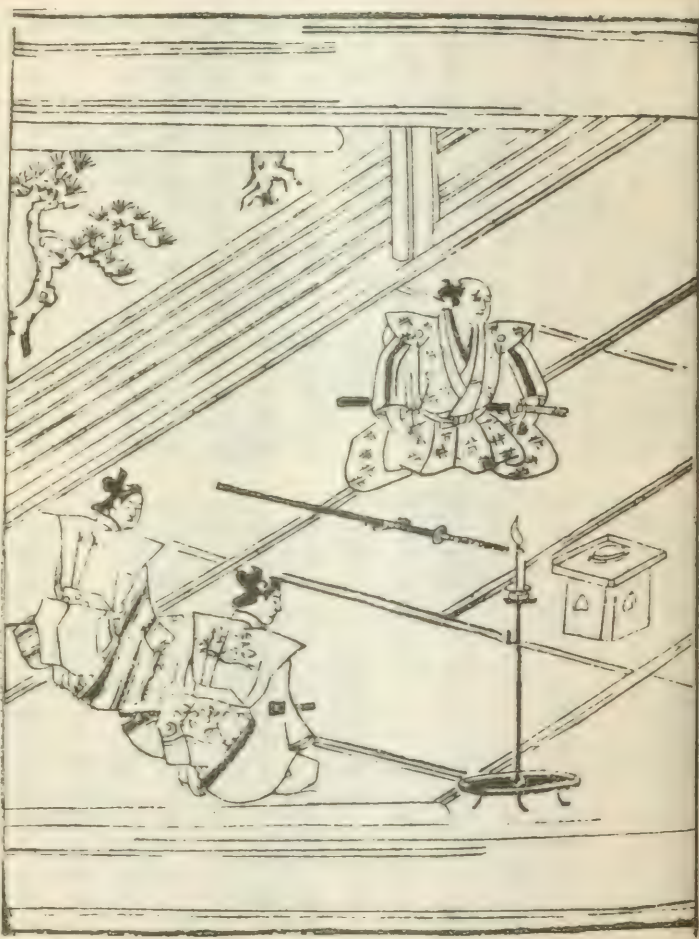
(二) 同じ子ながら捨たり抱たり

江州姉川合戦。永祿十二年六月廿九日に敵味方暫く。矢留をして。つかれをはらす時。陳小屋の片陰より。夕日の移に見る人の目を忍び落行。俤。遠見の役人。木田丹後旗下より是を見付て。笹しげれる野道を横手に追かけ。其ほどちかくなれば。たくましき女のひとつ刀をさして。七つばかりの男子をあゆませ。又ひとりはいまだ乳房をくはへし子を。ふところに抱て。はしり行しが。若者急に見へし時。抱たる乳のみ子を。用捨もなくなげやりて。あゆむ子を肩にひつかけ。弐町あまりも逃のびし。捨られし子の泣を此中にもあはれみ。取あげて見しに。うつくしき娘なり。此子を抱ものあれば。先を追かくるも有て。けはしく成時。柳の葉かくれに彼子をおろし。刄物ぬきかざし。男まさりの勢さりとては。氣な

げなり。されども大勢かけあはせければ。のがるへきやうなし。中にも物に馴たる人の下知して。其女の命を取事なかれと声かくる。いづれもすこしの手は負ながら。終に生どり。何さま子細有べき女と。あらくあたらず。主人の陳所に引出し。段〻はじめを申上れば。丹後此女にむかひ。いかなる者の子なるぞ。有のまゝに申せと。ひそかにたづね給へども。只口惜やとばかりいひて。さしうつふきて。泪をこぼし。兎角の事を申さねば。いよ〳〵不思議に存。もし大將の子息の事もと。しばしためしてみるうちに。七ツばかりの子が。母の袖にすがりて。とゝさまの所へいにたひといふにぞ。扨は末〳〵の子とはしれける。汝何ものゝ妻なるぞ。こゝろざしにやさしき所あれば。了簡して。一命を助くべし。殊更二人の子を。捨やうに聞事有。ふびんは。いづれか替らざる物なるに。乳をのめるを捨て。あゆめるをいたはりしは。頓て用にも立身のためおもふゆへかと問給へば。時に此女。皃さしあげ。心に有のまゝを語りける。我夫は竹橋甚九郎とて。昔は少知もとれる者なりしが。浪人して後。此里の野父なり。以

前の乗馬を牛に引かへ鑓は鍬の柄となして。ものつくりせしに。此度御下の百姓迄もかりこまれしが。夜前夫のいひ聞せけるは。此軍迚も勝手に成がたし。我は寂期を爰に極む。汝一所に命を捨て。何のせんなし。急き立のき。我とおもひかへて。二人の子を随分成人致させ。名跡をつがせよと。さいさん頼まれけるに。是非もなき別れて。かくとりことは成ける又妹を捨て兄を助る子細は。二人ともに夫婦の中の子にはあらず。年月かさねても。子孫のなきを。物侘しく親類のうちより養ひ得たり。兄は夫の甥なり。妹はわれらが姪なれば。相果し跡にても。身をおもふ取沙汰にあへるは。女ながら口惜きと。義理つまれる心底を。深く感じ。人しれず脇道より下人におくらせ命を助給へり

㊂ 人の言葉の末みたがよい

物には類の集る道理あり。むかし讃州の城主につかへて。細田梅丸とて。南枝若衆の美花。物ごしは初音鳥も奪れ。ちうの声も出ず。まとに梅の風大袖にもれて。行違へるさへ。人に魂なかりき。さるによつて。主君殊更の御寵

愛ふかく。春にはあへど此梅の匂ひ聞事もならず。見る事猶たえたり。されども人に盛のかぎりあつて。片手の指を四たび折れる年の名殘に。元服仰付れ前髪の跡をみしに。美男京細工の。物いはざる業平に同じ。又岡尾新六といへる人の娘に。小吟とて十四歳になれり。いかなる生れがはりにや。かくも又美形なる女の世に有事ぞかし。いにしへの美人揃は見ぬ世の傳へ。よもや是ほど有へからずひとつ〳〵いふにたらず。いづれか身のうちに。毛頭ふそくはなかりき。此男女を牛若丸。淨瑠利御前のごとく。世上よりいひなして。夫婦のかたらひせしと取沙汰いたしぬ。娘の年も緣付ごろなればあなたこなたよりいひいれけるは。うるはしき姿なる德ぞかし。此息女見もせぬ梅丸思ひこがれ。男をもたば。此人ぞと一筋に極めて。外への緣組中〳〵親たる人の心をそむき。何とも是にあぐみて此事うち捨おかれね。また梅丸も。小吟をみぬ戀して。外よりの緣は取あへず。年月過しを或人聞付。これは似合たる事と取持。娘の親。岡尾新六に內證申せば。早速同心すべき事成に。存寄子細あれば。かさねて此方より御

返事申上べしと合点せざる様子に見へければ。私あいさつ仕うへは御前も首尾よく申上。世間ともによろしくすべし。聟にあそばしても。くるしかるまじき侍と申せば。私の聟には過ものなり。じたひ申はよの義にあらず。梅丸事は大殿御恩ふかき人なれば。今にも御死去あれば。御供申さるゝ心底兼ての覺悟と見請たり。然ればいつと定めず。又ひとり身と成事を親のふびんにて。愚に行すへの事を案じけると。武士の心にはすこし手ぬるき申分とは思ひながら。人の親の身と成ては。世のそしりをかまはず。まよふも斷ぞかし。其事は無常の世なれば。無事の身にも愁は有なり。此縁是非にとすゝめければ。其人にまかせ約束して。姫をおくらせけるに。たかひにこがれし中なれば。ふかく契をこめしうちに。大殿御病氣にならせられ。次第に賴みすくなく見へさせ給へば。今更おどろく事もなく。追腹の覺悟して。妻にも此事かたりて。道理をつめ今生の暇乞しけるに。ふかく歎きぬべき事を思ひやりて。ひとしほふびんなりしに。すこしも其氣色なく人間一生は夢のごし。殊に武の家にうまれさせ給ひ。主君のために。一命をしませ給ふ御事にあらず。女の申はおろかなれども御宦期いさぎよくあそばされ。名をすへの世に殘させ給へと。常よりは物靜に。こん／＼の盃事して。梅丸に滿足いたさせて後。わたくし事は女心の定めがたし。御宦期の跡にては又緣にまかせ後夫を求る心ざしといへば。梅丸聞て思ひの外なる心底。女ほどつれなきものはなしと。すこしは恨みふくみ。眼色かはりて其座を立時。御氣色俄にせまり。只今と告きたれば。御城内にかけつけ。物靜に拜顏して御言葉をかはし。かぎりの別れをかなしみ。御からを御墓におくりて。一時の煙となし奉り。物の見事に切腹の首尾のこる所はなかりき。流石日比の身の取置世をみちかふみしに。迚もの事に女房もたれずは。能事なるに。殘りし女のおもひふかかるべしと。この沙汰せしに。梅丸首尾よく切腹の事聞といなや。腹かき切夫の供をいたしぬ。書置段〻見し人感涙して。宦前名殘の時。つれなき言葉に夫氣をもつて。妻の事をおもひ切するためならんと。彼是此人の心事をかんじける

㈣ 申合せし事も空き刀

惡心は眼前に其身にむくふ事有。むかし丹後の國主。長岡幽齋藤孝の家中に。

市崎猪六郎とて大酒を好み。作病をかまへ。武士の道をそむきて金銀をたくはへ五十余歳まで。妻子ももたず。世を我まゝに暮しぬ。下人用捨も常にかはりてつかひければ。此家をみかぎり。大かたは欠落して。朝暮人に事をかゞれし。手ぢかふつかへる者に。勝之介。番之介とて若年なるが。此二人何事をも堪忍して勤めけるうちに。毎日主人恨みかさなり。暇を乞ど出しもせす。それより殊にきびしくつかひ給へば。菟角は身のつゞかざる道理につまり。兩人内談極め。主人を今宵のうちにうつて立のくに成。勝之介いへるは。二人ながら立のかずとも。此壱人は何となく跡にのこりて。のきたる者の科にすへし。それがしうつたる分に極め。僉義をはつて後。其方は何となく年内は爰に暮し。正月十八日に都の清水の子安堂にて出合。同道して西國にくだり。名を替。奉公を勤むべしと。堅ゝ申合て。其夜半に子細なく主人を打て。勝之介は立退ける其明がたに番之介さはぎて追かけしが。はや行かたしれずいよ〳〵勝之介か仕業に極る所にて。方〳〵御改あそばしけるにしれがたし。つね〳〵惡人なれば吟味の役人も大かたにして事濟。後日の御沙汰に成ぬ。此猪六郎家に持つたへて。平家侍越中次郎兵衛かさしたる。こがねづくりの名劔有しが。番之介是を取隠し。はき庭の木陰に埋み置ぬ。御吟味の時不斷勝之介が預り居たるよし申あぐれは。扨は是ゆへ主人をうちけるよと。はつと此沙汰有ける。番之介が心入には兩人浪人のうちのたよりにも成ぬべき物と。出來分別成しが。此事勝之介傳聞て。さりとは無念盗人の名を取事末代のちじよくなり。爰はのがれぬ所とおもひさだめ。京都より二たび歸りて。番之介が親のもとに昼忍び入て。名乘かけて切ふせ其身も卽座に相果しが書置のこして。段ゝはじめの所存顯れけると也

(五) 身かな二つ二人の男に

うかれめの身は定めがたく。つながぬ舟にたとへて浪の枕を千人にかはし。紅舌万客になめさせ。ひとつの心を其日の男好るに持なし。笑ふ時有泣折有。さま〳〵替つた浮世の物語り。聞流せる年月を。なげきながらの哥のふしにおくりて。下の關の勤めも今一とせにたらずなりて。生國筑前の芦屋なる親里に歸るを樂しみに思ふ折節牢人らしき男の。言葉は關東の人めきて。世をしのぶなりふりして。いつの比よりか。

かりそめにあひなれ。いとしさ又もなく。戀をかさねしうちに。此男今は。心底のこさず語りけるは。我本國は出羽の庄内の者。荒嶋小助といひしが。子細あつて。ほうばいの億仕源太兵衛うちて。首尾よく所を立のき。今爰にしるべの町人を頼み忍びけるは。一子源十郎我をねらひ諸國をめぐると聞かく身隱し遊山所もはゞかるなりと。段〳〵物語して。天理にて源十郎にうたれても有時はぼだいをとひ給はれと。春日の御作の守り觀音給はりければ。かぎりのやうにおもはれてかなしく。泪にしづみて別れしが。その後は日ゞにうとく成て。たづね給はぬは世にうき浪人ゆへかとおもひやられ。いとゝ口惜く。日毎に狀通して。たまさかにあふ時は。枕もさだめす泪にして。一日を暮しぬ。其後又旅人の雨やどりの浮晴しに酒の友と成けるに。此男も又此定家にふかくなづみて。長崎までくだれる舟よりあがり。主なしの身の樂は。是ぞと爰に日をおくり。夜をこめて女郎のためによき事ばかりつのりて定家も又をのづからに氣を移して。小助事は忘れし。是不心中にはあらず。つねの女さへ時にしたかふならひなれ

ば。まして流の身として。定家はきどくの女ぞかし。小助尾羽をからして。あふべきたよりなきを。女郎のかたより揚屋の首尾をとゝのへしが今は了簡つきて。親かた吟味つよく。しのびて逢事も絶たり。又源十郎も此所の遊興に路金つきて。跡へも先へも行がたし。諸神に大願かけて。敵打身のふかくぞかし。是も契をかさねてから。子細をかたりて聞ば。小助身のうへの事にうたがひなし。定家身にふるひ出て。それも又此人もいとしさ替る事なし。何ともさしあたつてのめいわく。大かたならぬ因果なれば。先此事小助殿に通じて。此所を立のき給へる文したゝめし時。源十郎小者。小助有家を見出し。はしり來て。けはしくやうすかたり。女郎とおもひ何の遠慮もなく内談せしは。其家野はなれこそ幸なれ。松の茂みに木隠て。人家を出して。名乗かけ願ひのまゝにうつべきと。着込鉢巻して刀の目釘をあらため。けふぞおもひの晴し所。女郎も此身をいはふてたべ。敵をうつ縁と成。此程爰に足をとめたる仕合ぞかし。追付めでたふ御げんに入べし。首途盃さし給へといふ。是非なく常より機嫌なる㒵にして。三献の酒も心を付て大事の前なればとひかへて。祝儀をふくみて暇乞していさみ〳〵て揚屋を出て行。程なふ町はつれの木陰にしのび。小助がやうすを見合けるに時節と借家を出て。何心もなふ松原にさしかゝりしを。源十郎進み出て。小助見わすれはせまじ億住源太兵衛が一子源十郎親の敵うつ太刀成と。飛かゝれば。小助しさつて秡合暫く切むすぶうちに。女のあゆみにはかひ〳〵しく。定家此中に飛込ば。兩人目と目を見合ける。定家は心のほどを書残して。二人の勝負つかざるうちに。すみやかに自害して果ける。たがひに大事の中にも。是はふびんと泪ぐみしが。其死骸を脇にみて。入乱て手を負。兩人ともに相うちにして。命をはりぬ。小助がはたらき。源十郎が残念定家が心ざしわけて三所に面影残り見し人是を世語りのなみた

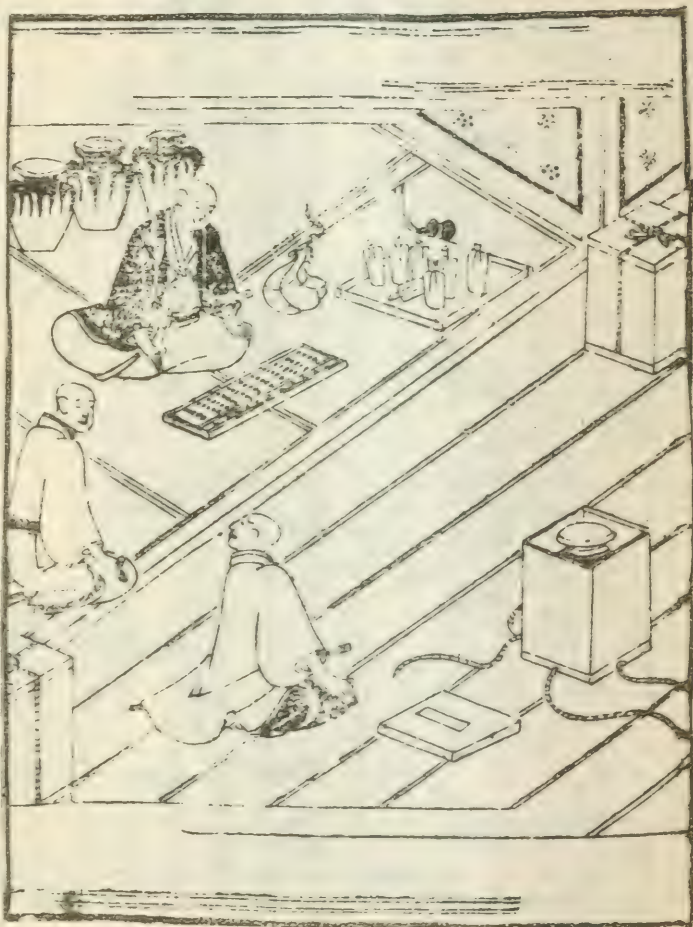
三　後にぞ恵比須の蔵
しのびし親の敵うつ事
あり夫の為ある六角のり

四　形の花とは前髪の時
万仁義居ぶとて一命の程
なのりし侍の娘の事

㊀ 筋目をつくり髭の男

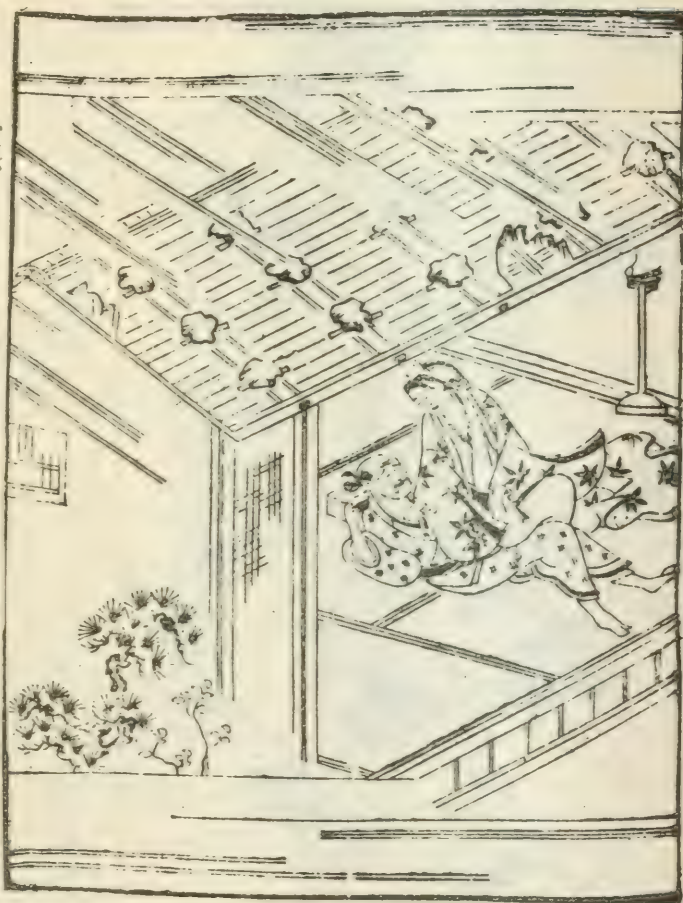
山城の宇治の里に。身を隱して住る浪人あり。當分の世わたりに。壺の入日記など書てあなたこなたの氣に入。年月爰にかさねけるに。むかしはいかなる人ぞとゆかしかりき。ひさしく先祖の事を語らざりしが。有時所の人の集て。紫野の一休は名僧成けると。咄しのついでに。蜷川新右衛門は文武の人と聞傳へて譽ぬれば。彼浪人すこし哥學有て。其身花車にそだちければ風與出來心にて。筋なき事を申出し。それがしは蜷川新九郎とて。新右衛門が孫なるとかたりぬ。兼て新九郎と名をよべば。自然の道理に叶ひ。おの〳〵うたかひはれて。扨は蜷川の流ほど有て。万事しほらしく見えけると。それより後は世間に此人をおろかにせずして。新右衛門孫といひふらしければ。いよ〳〵新九郎子細を作りて。蜷川代々の系圖をこしらへ見せける。此事世に沙汰して。岐阜中納言秀信公に身躰すみて。武藝は外になし。歌道もつはらに心がけしが。是もまとすくなく。蜷川のすゑといへる。名聞ばかりに。面むきをみせかけ。內證は色にまよひ。もとより惡心の侍なり。其比蜷川次郎丸とて新右衛門筋目にまぎれなき人。わがみひとつを浮世と捨て。十八歳より出家して。津の國金竜寺の山陰。古曾部村といふ所に。南を見晴し草菴をむすび。笹の細道わけかねて。木末の夏と成にけり。能因法師の詠殘されし。生駒の山も雲の峯。かさなつて。北は櫻の盛かと。氣色をうたがふ入相のかね。凉しき風に無常を觀じ。あながち仏のみちも願はず。朝暮和歌に心をよせ。折ふしは笙の音をたのしみ。無我にして山居のおこなひ。殊勝さ此人の心ぞかし。其比都白河のほとりに。是も身を歡樂に取置。明日の事をしらず。けふまで暮されける星合主膳といふ人。入道して。星薄坊と申せしが此法師の男ざかりに。我若道のむすび。世にあるよりふかかりき。其よしみとて。今もわすれず。爰にたづねて。過にし事をかたりなぐさみ。落葉は烟の種と成。釣釜に素湯沸して。咽のかはきをやめて。貧家の氣散じ。是ぞと宵の間もなく明かたに別れ。京都に歸りさまに。宇治に住たる浪人の噂。蜷川氏の筋なき事をいひ立にして。岐阜秀信公につかへて。高知をくだし給はり。我世と心にまかすよしを語り。いかにしても惡き仕方といひ聞せける

に。次郎丸入道何となくうち笑ひて。世の中にはかゝるまぎれ物おほし。我等の先祖の名をかりて。武家を立るも口惜き所存なれどもその者が身をたすかるたよりにならば。あらたむる事なかれと。大やうにいひ捨。其通りに濟ける。其後彼新九郎身を作りものなれば。諸事に。武家の作法ちがひて。一家中是をうとむ折から。天命つきて大寄合の座を惣立の時。岩田外記之進。刀とさしかへて屋形に歸ぬ。外記之進は跡役にて。心靜に立出。刀かけをみしに。我刀にはあらず。是は誰の腰の物ぞと。茶の番の坊主にたづね給ひしに。革柄に蟹の目貫。無地の鉄鍔に。くり色の刻み鞘。ふだん是を見馴て。たしかに蜷川新九郎殿の刀といふ。然らば汝ひそかに行て。其斷を申。替へてまいれといひ付られ。既に新九郎屋敷に立越。此有増を通じけるに。あやまつて何の子細もなき事を。此刀さしあたつての無分別。それがしが腰の物にあらず。近頃卒爾成事を申けると。存知の外成返事に。使の坊主迷惑して。此段外記之進に申せば堪忍ならず。吟味役人にいひ届て。僉義に成ぬ然も外記之進刀は來國光が作なり。新九郎刀

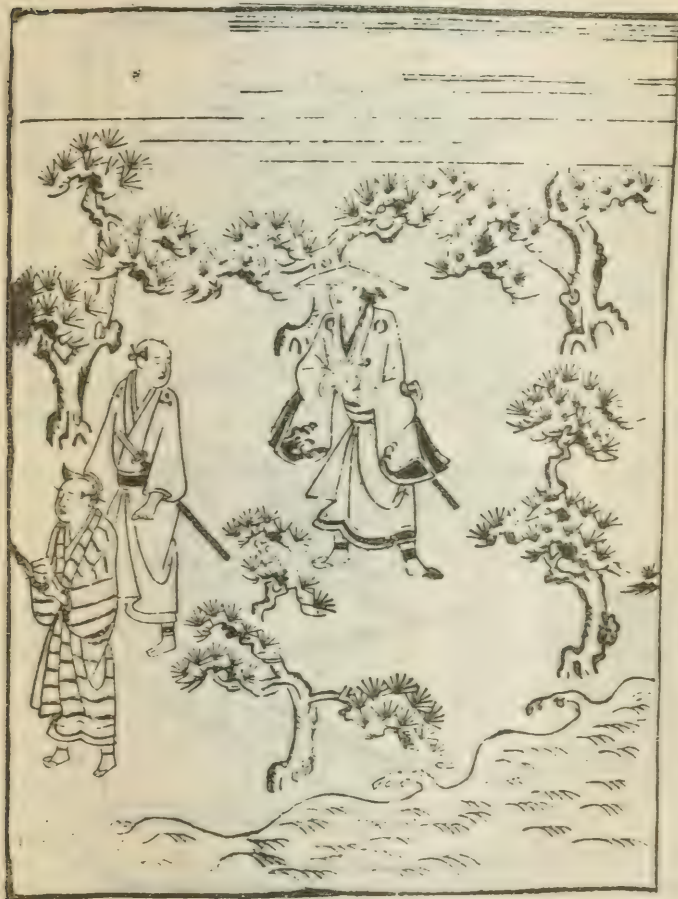
は平安城義國と銘は有ながら正しから
ず。彼此不首尾に極まり。新九郎義切腹仰せ付られ。皆指をさし。籠乗物に押入らるゝ面影を笑ひぬ。かゝる時此のり物のむかふより。出家一人かけつけけるをの〳〵あやしく思ひ。中〳〵命乞は叶はざる事なるに。無用の法師の出所と。先をはらへば。案の外なる訴詔人。わたくしは蜷川新右衛門が子孫次郎丸といへる者の入道なり。然るに此新九郎。筋目跡かたもなき事を申上。御家に濟事心外ながら此身なればゆるし置處に。此たびの惡事先祖の名をくだす事。末代家のちじよくなれば堪忍ならず。是ぞ我家の系圖と。新右衛門自宅の物をさしあぐれば。また此義御せんさくあるに。是も新九郎惡名にまぎれなく。御仕置替つて。うち首にあひけると也

(二) 表むきは夫婦の中垣

文錄の比。都のにし東寺のほとりに。常にかはりてふしぎなる夫婦の人あり。緣ほどおかしき物はなし。其男は七十余にして。かしらに黒き筋なく。浦嶋がいにしへを。今みる親仁なるに其女は。二八にまたしき春の山。花の

口びるより物いふかとあやまたる程の艶女すこし物ごしにこなまりあつて。四國そだちとはしれける。京の女ならば形慢じて男にくみをすべきに。田舎人の律義さみぐるしき人に添て月日をおくられけると。是をかんずる人はなく。其美形をせめてみる事をなげきしに。此男年はよれとも。行義に暫時も油斷せず。鮫鞘の中脇指。常住反かへして目にかどを入。命をなんとも思はぬ有さま。人おのづからおそれて。其内にたよるものなかりき。朝夕のいとなみ。何するとも見えず。米をかしき釜の下焼までも。其女の手にはかけず。男の業には。にあはざる事をもして。女をいたはりける。そも／＼此夫婦と見えし人の生國は。豫州の武士成しが。金子合戰。天正のみだれに。此息女の父。柳井右近うち死し給ひ。御妻子流浪あそばしけるを。我腰ぬけ役の留守番頼ませ給へば。せめての動に人ゝ隱國いたさせ。世しづまつてのち播州人丸の里にしるべ有て。一とせを暮しけるうちに。此母。御病死。うき世とは存じながら是ほどかなしき事。身をおもふ日影者の何くへも道せまく。此姫子をつれて。老の浪のよるべ定めず。廻國して。やう／＼今の都に來て。うき住ひ。世間は夫婦分にいたせしもをそれなれども。姿すぐれさせ給へば。諸人の執心うたてく。戀をやめさせんがために。かく夫婦とは申ならはしける。昼は女房どもといへば。息女もかしこくて。旦那／＼といひなし給へり。此心やすきより姫いつとなく。まとの妻のごくおもひなして。うちとけさせ給ふも此男身をかため。武士の心底を立。ゆめ／＼それに氣をうつさず。さりとはむつかしきあひ住の年をふりぬ。折ふし夏の雨しきりに。宵より鳴神ひゞきわたりて。つねさへあばらや殊更にこぼれて。軒の雫もいたくふり込。南風はげしく板戸もかけかねはづれて。外のひかりのおそろしく。内のともし火影消て。女心にはひとしは物がなしく。頼む人とて親仁なれば。ゆたかにふしたる懐にかけ入せ給ひ。こはやとしがみつかせ給ひ。やさなき御肌の身にさはれば。觀音經をどくじゆして。隨分心を移さざりしが。神鳴も落かたしれず。おさまり。雨もをだやみて壁下地のしのべ竹に。白玉の取添も。物あはれにやさしく見えて。むかし男の女をだまし鬼一口に。かみころされたしと思ひ入たる。闇の夜も正しくこんな面かげならめと。親仁老をおこして。人のしる事にはあらず。

りちぎも物によれとひだりの足をうちもたせけるが。弓や八まんあやまつたり。いかにしても道をそむけり。扨をあさましき心底かなと。我と悪心ひるがへしてそれよりむく起にして立さり。観念のあかり窓のもとにして。其夜を過し。其後はいよ〳〵をそれて。此御息女を見立まつりしに其比高家のかたより美女御たづねあそばされしに。都の事なれば。美君有べき物成しに。いづれもすこしづゝのさはり有てみやづかひの望み絶ける。然るに彼息女御たづねの年の程なれば。よそほひづくろふまでもなく。御目に掛しに是につゞきて又有へからずと。僉義極まりての後。筋目をたゞし給ふに。父母ともに歴〳〵の武士なれば。是に子細はなかりき。されども此親仁夫婦のかたらひなしけるとの取沙汰。第一のさはりと成此首尾かはりて。彼息女を帰させ給ふに相見えし時。此親仁所存身にあやまりのなき事は。後日にあひしるゝ御事あり。此たび官女にそなはらざりしは縁つくなれども。下人の不作法とは。世の聞へめいわく至極の所のだん〳〵言上申せど。是ぞ縁者の證人と誰か取あけ給ふ御方もなかりし。

なり。是非に今一たび御取持頼みたてまつる。わたくしなき誓み成とひだりのかいなを自うちをとして。泪に沉みぬ此心ざしをかんせさせ給ひ。御うたがひ晴させられ此美女御てうあひの御枕のあした。なを〳〵身の曇をさつて月の都の只中に住給ひぬ

㊂後にそしるゝ戀の闇打

何事もさし當ての分別はかならず後悔。或人のいへり。けふを明日の沙汰に延。其道理至極の時是非をたゝすを。まとの武士といへり。それもことによるべし。其比加賀の國。大正寺の城主山口玄番頭。家來に千塚藤五郎といへる男。十六歳の時。父藤五左衛門を闇うちにあひて。其時分いろ〳〵御せんさくあそばしけるに。相手しれがたく其通りに此沙汰をはつて後。藤五郎に仰渡されしは。隨分思案をめぐらし。父をうつたる者。相しるゝ節。此本望をたつすへし。汝が身にしても是非なき仕合なり。すこしもひけたる所なし敵住居見さだめ次第に。暇をとらすべし。先それまでは藤五左衛門名跡相違なく。大番組に入て相勤申せとの上意。有がたく其通りに人もゆるして若年に

して大役つとめかぬ。武士にあらず流石千塚の家を継べき心ざし見へけると各すへたのもしく思ひぬ。程なく六七ヶ年すぎて血氣さかんになつて。親うちたる者の行衛を朝暮心がゝりに過し。是をうたでは武士の一ぶん立ざる所と。諸神に宿願をかけて。此事ばかりを祈て。今にさだまる妻子も極めず。現にも夢心にも。親の面影をみる事千たびなり。ある時思ひもよらぬ事に。闇うちの相手しれける。我母人相果られし後。父藤五左衛門いまだ流年さかんなれば。後婦はもとめずして。美形の妾者を置て老樂の寢屋の友として。おもしろ酒も折ふしは乱におよび。日ごろは武道の男なれども。女にはよはき心ざしをみられ。いづれ智愚のわかちもなく。色道にまどはぬはなかりき。そも〳〵此女は京そだち成しが丹波の笹山に縁組して尾瀬傳七といへる浪人とかたらひしに。次第に尾羽うちからして。渡世成難此女の手道具まで代なして。今は了簡つきてむごき仕かたは。暇乞なしに爲書捨て。其身はいづくに行しもしれずなりにき。女心にかなしく是をなげくに甲斐もなし。道を立てひとりくらせば。かつめい

におよび。身を墨染になす事も。一心より発らぬ出家もいやなれば。世渡りのたよりばかりに。又奉公勤めける。傳七二たび丹州にかへり女の成行物語を聞てなを執心やむ事なく。何とぞ主人の手前を出てかへり。縁はつきせねば。此事はやくとたよりをもとめ。忍びてみつかはしけるに。此女見るまでもなく。かひやりて年比のうらみ。殊更別れさまの難義。思ひ出すさへ身ぶるひして。さりとは其男うらめしやと。むねをいためけるも道理につまれり。さるによつて返事せざる事をうらみ。扨は今勤めける主人。てうあひのあまり外をせきて。其身を自由させぬと見えたりと。一筋に思ひ極め。段〻有家たつね。加州に立越。おもひもよらざる藤五左衛門恨て。うつてのきけるか。此女主人是非も浮世の別れに其

なげきやむ事なく。年月の御厚恩わすれず。せめては御ぼたいとはんため。都の下賀茂に。柴の戸をさしこめ。姿のかざりを切て捨。後の世を願ひしに。傳七又爰にたづね入て。かく佛の形の衣をけがし。むかしを今もつてなげく。思ひよらずやと。あらくいへるを取て押へさしころし。其まゝ草菴出て行。此女の弟大藏といへる者前髪ざかりの小草履取。東山南禪寺の末寺に奉公せしが。是を聞付。深くなげきぬ。しばらく思案して。此程牢人の傳七。此所に無理入せしと。姉の語られけるが。正しく此者の仕業うたがひなし。扨は藤五左衛門殿うちけるも。傳七に極まれり。命を取事小腕に叶はざれば。是より行て。藤五郎殿に申合て。敵をうつべしと。加賀の國にたつね行はしめの子細をかたり尾瀬傳七生國は。播州

竜野の者なれは。かならす國元に住居さだまつたる事なれば。いそぎ播磨に御下向あそはし。傳七うち取。御本望達し給へ其男たとへ身に墨をぬれはゝとて。それがし日比に目しるし有と。いさめければ。藤五郎よろこびかぎりもなく。今宵のうちに用意して明日は御暇ねがひ罷下るべし。旅用意仕れと。ひそかに跡の義申付る所へ。家老中御用ありとの御使早速登城仕れば。備中の福山へ御使者に仰せ付れ。はじめての役目有難仕合と。お請を申うちにも。敵の事を飛立ほどに思ひ入ふかし。主命なれは。是非もなく。先此たび相勤て。後日の沙汰と。彼大藏も同道して。備中にくだりしが。津の國西の宮の宿に付ば。所の人立かさなり。落馬して旅人のあやうかりとて。氣つけよ。水よといふ声さはぎぬ。大藏是をみて。

あれはかたきの傳七なりと身をふるはして申上る。藤五郎も是はと。さしあたつて分別し。主命の御用の時。たとへ無事の身成とも。うつへき所にあらず。殊更かゝる難病なをもつてと。六藏に義理をいひ聞せ。所の人に妙藥をおしへ。此うち身には。鹿の袋角を紺屋の糊にて摺ませて付と。其まゝいたみさる物と念比に病人の事をいたはり。正氣付に子細はあらじ。其時分是をみせよと頼み。文書殘し難病はうたずに。命を助置と。右の段〻うち付書にいひ置れける。其後病人驗氣の時。彼文をあいわたしければ傳七此心底を感じ。まこと有武は各別なり。世界にながらへてせんなし。もと某が惡心身に覺て。加賀に立越。其身の惡事。西の宮の首尾さりとは有がたし。それゆへ御親父様をうつたる所にまかりて。自害仕るなり。とゞめをさして給はれと。心中の通り札に書しるしておもひ切たる最期。藤五郎がうたざるは。うつにまさりし武道と理をせめて。天晴神妙成心入と國中に是を譽ける

㊃形の花とは前髪の時

人もひと盛は花。木村長門守めしつかひに。松尾小膳とて。形を奉公の種として。衆道時めく十六歳より此家に勤めける。生國は。石州濱田にて杉山市左衛門といへる人と。念友のかたらひをなしけるが。出世なれば。別れを惜き戀路を見をくりて。市左衛門すゝめて上かたにのぼしける其心ざしたのもし。山海万里はへだてつれども忽にて契をこめて。朝夕其人の事を忘れずして。ひとりは目もあはず。過にしたはふれ枕ゆかしき折ふし。鴫野宇右衛門といへる侍。執心をかけて狀付られしに。情心はなれて存る子細あつて外への念比おもひもよらず。かさねては此義御無用御返事も仕るましきと。いひやれば。宇右衛門せきて首尾見合。小膳がへやにたづね入。是非を極めて身のさはりを。無理に吟味をする。小膳すこしも驚く氣色なく。我おぼしめしての御事。あだには聞ず。然れども國元にていひかはせし人有て誓紙も。是見させ給へ。いかにしても此義理立ける。そも〳〵の事ども内證ともに語りて。今より其方さまを頼入。衆道のとてもかなひがたし。誠の兄弟ぶんにおぼしめされ。御引廻しに預り度と理をつくして申せば。宇右衛門是を聞分。それよりしては如在なく小膳うしろみを各別なる心づかひをいたせり。又玉水茂兵衛といふ侍。これも狀を付てな

げくうちに。宇右衛門したしく語るを見出し。以前より執心かくる我等事は捨置給ひ。後に申せし人と。御念比あそばす事。いかにしても心外なり。何ほどいひわけ有ても堪忍成がたしとかふいふにをよばす。うちはたすべしと。思ひ切て見へし時。小膳も今は了簡なく。さやうに仰せらるゝとても。此方には毛頭くもりなき事也。然れども命を惜むにあらず。いかにもお相手に成べし。しかし小腕なれば。其方の御太刀下に罷成ほしれたる事。跡の義は見ぐるしからぬやうに頼みたてまつる扨出合は。いつ比と申せば。茂兵衛いよ／＼すゝみて。十九日の夜こそ宵闇なれ。初夜より前に玉造の芝原に参り合。死出の旅路の二人づれ。浮世の月をみるも。ひとへ二日なれば。身の取置心静にあそばせと。たがひに礼義をのべて立別れぬ。程なく約束せし。十九日の夜に入て小膳人をもつれず身ごしらへして。申合せし野邊に行てしばし相待ぬれど。人かげも見えねば。すぐに茂兵へ長屋に行て。此せんぎせんと忍びく／＼に行けるに。跡に人の足をすれば。竹垣に身添爱を大事と隠れける。其人を誰ぞとおもへば。念比せし宇右

衛門成が。目のはやき侍にて小膳と見付。其まゝ立寄是は何とも合点まいらず只ひとり忍び給ふは。茂兵衛に情かたらひと見へたり。さもあれば。此男中〳〵一分立がたし。其うへは茂兵衛其方兩人を相手成とすこし腹立道理なり。小膳さはぐ風情なく。是は入組し子細ありと。はじめの段〻かたれば。いよ〳〵うらみ有。念比とはかゝる時の事なり。後づめには此宇右衛門たのもしき山ありとおぼしめし。茂兵へうち給へと小膳に力をそへて。屋形に案内させて。門に立聞すれば。茂兵へ分別かはりて。いまだ書置に取まぎれ。延引申なり。爰にまた相談有。宇右衛門と御念比あそばさねば。此方に何のうらみもなしそれにうち果し所にもあらず。此方にはすこしも申分なひといふ。こなたにいひぶんなきと仰せらるゝうへは。此方も其どをりと。何のせんもなき茂兵衛がしかたなり。それより宇右衛門と大笑ひして立歸り。なをたのもしき侍。外よりおもふには各別。義理一ぺんのかたらひ。小膳がすがたの若衆ちとせの春をかさね。する〳〵武の家さかへ太刀ぬかずしてをさまる時津國久しき

貞享五戊辰歳

二月吉祥日

京寺町通松原上ル丁
山岡市兵衛

江戸日本橋万町角
万屋清兵衛

大坂心斎橋筋南[illegible]町西へ入丁
安井加兵衛

日本永代蔵　一

日本永代蔵

目録

巻一

初午ハ乗てくる仕合
江戸にかくれなき俄分限
泉州水間寺利生の銭

二代目に破る扇の風
京にかくれなき始末男
壱歩拾ふて家乱す悴子

網屋

あみや

や

一

二

松屋
まつや

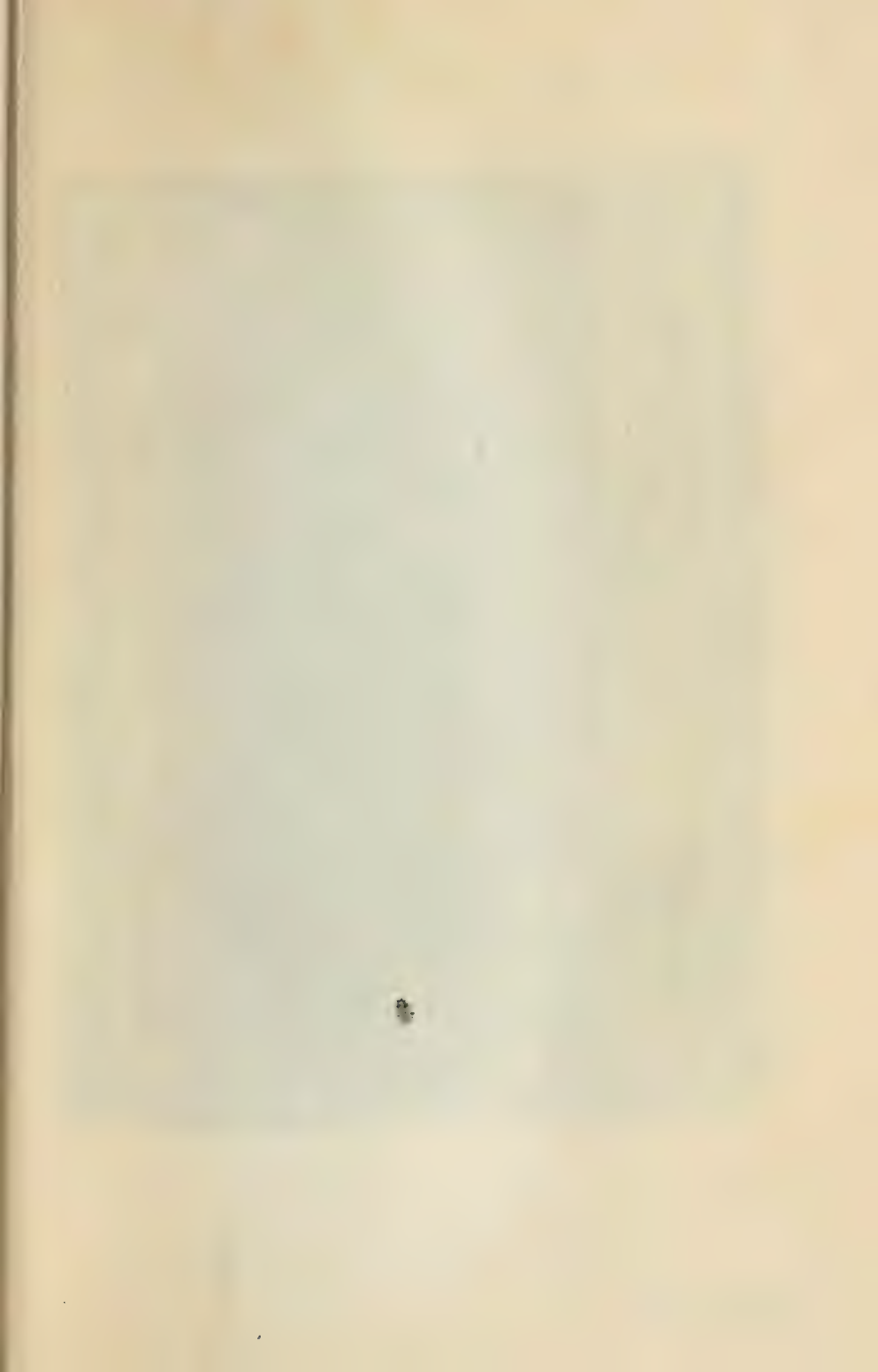
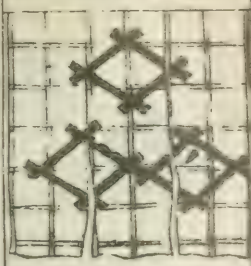
からかねや

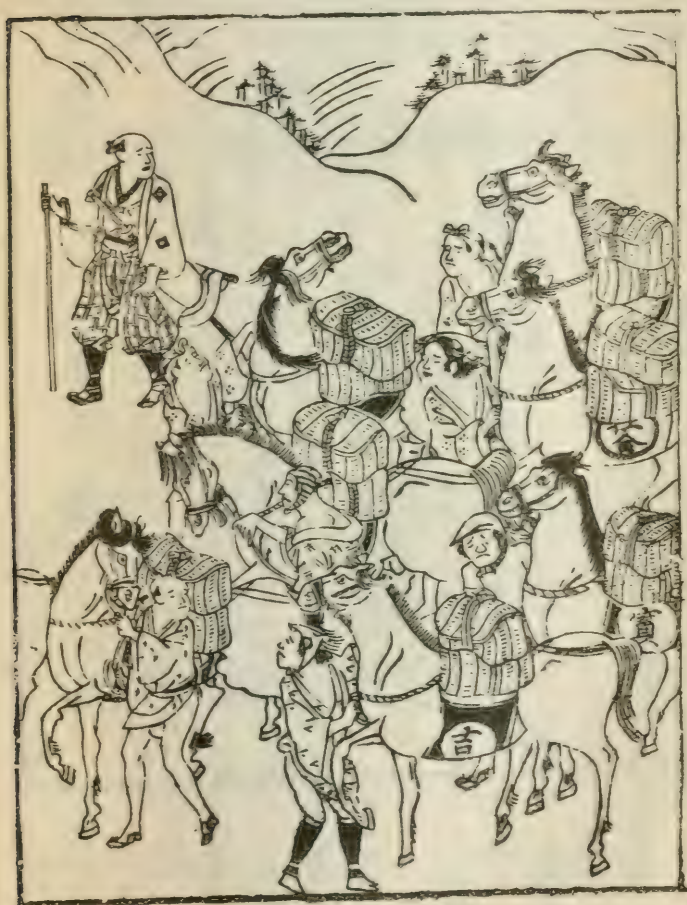
浪風静に神通丸
和泉にかくれなき商人
北浜に箒の神をまつる女

昔は掛算今は当座銀
江戸にかくれなき出見世
さすが宮方色[illegible]の[illegible]

世は欲の入札に仕合
南都にかくれなき松屋の後家
後家は女の鑑となる扇

本朝永代藏卷之一

初午は乘てくる仕合

天道言ずして國土に惠みふかし。人は実あつて僞りおほし。其心は本虚にして物に應じて跡なし。是善惡の中に立てすぐなる今の御代を。ゆたかにわたるは人の人たるがゆへに常の人にはあらず。一生一大事身を過るの業士農工商の外出家神職にかぎらず。始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜べし。是二親の外に命の親なり。人間長くみれば朝をしらず短くおもへば夕におどろく。されば天地は万物の逆旅。光陰は百代の過客浮世は夢幻といふ。時の間の煙死すれば何ぞ金銀瓦石にはおとれり。黄泉の用には立がたし。然りといへども殘して子孫のためとはなりぬ。ひそかに思ふに世に有程の願ひ何によらず銀徳にて叶はざる事天が下に五つ有。それより外はなかりき。是にましたる寶船の有べきや。見ぬ嶋の鬼の持し隱れ笠かくれ簑も暴雨の役に立ねば。手遠きねがひを捨て近道にそれ〱の家職をはげむべし。福徳は其身の堅固に有。朝夕油斷する事なかれ。殊更世の仁義を本として神仏をまつるべし。是和國の風俗なり。折ふしは春の山二月初午の日。泉州に立せ給ふ水間寺の觀音に貴賤男女參詣ける。皆信心にはあらず。欲の道づれはるかなる苔路姬萩荻の燒原を踏分。いまだ花もなき片里に來て此佛に祈誓かけしは。其分際程に富るを與へり。此御本尊の身にしても。獨り〱に返言し給ふもつきず。今此娑婆に摑どりはなし。我頼むまでもなく。土民は汝にそなはる夫は田打て婦は機織て朝暮其いとなみすべし。一切の人此ごとくと戸帳ごしにあらたなる御告なれ共。諸人の耳に入ざる事の淺まし。それ世の中に借銀の利足程おそろしき物はなし。此御寺にて万人かり錢する事あり。當年壱錢あづかりて來年弐錢にして返し。百錢請取弐百錢にて相濟しぬ。是觀音の錢なれば。いづれも失墜なく返納したてまつる。それ〱五錢三錢十錢より内をかりけるに。爰に年のころ廿三四の男生付ふとくたくましく。風俗律義にあたまつき跡あがりに。信長時代の仕立着物袖下せはしく裾まはり短く。うへした共に紬のふとりを無紋の

花色染にして。同じ切の半襟をかけて。上田嶋の羽織に襟うらをつけて。中脇指に柄袋をはめて。世間かまはず尻からげして。爰に参りし印の山椿の枝に野老入し髭籠取そへて下向と見えしが。御寶前に立寄て借錢壱貫と云けるに。寺役の法師貫ざしながら相渡して其國其名をたづねもやらず。彼男行がたしれずなりにき。寺僧あつまりて當山開闢より此かた。終に壱貫の錢かしたる例なし。借人是がはじめなり。此錢濟べき事共思はれず自今は大分にかす事無用とさたし侍る。其人の住所は武藏江戸にして小網町のすゑに。浦人の着し舟問屋して次第に家榮へしをよろこびて。掛硯に仕合丸と書付水間寺の錢を入置。獵師の出船に子細を語りて百文づゝかしけるに。かりし人自然の福有けると遠浦に聞傳へて。せんぐりに毎年集りて一年一倍の筭用につもり十三年目になりて元壱貫のせに八千百九拾弐貫にかさみ。東海道を通し馬につけ送りて御寺につみかさねければ。僧中横手打てそのゝちせんぎあつて。すゑの世のかたり句になすべし

と都よりあまたの番匠をまねきて。寶塔を建立有難き御利生なり。此商人内藏には常燈のひかり。其名は網屋とて武藏にかくれなし。惣じて親のゆづりをうけず其身才覺にしてかせぎ出し。銀五百貫目よりして是を分限といへり。千貫目のうへを長者とは云なり。此銀の息よりは幾千萬歳樂と祝へり

二代目に破る扇の風

人の家に有たきは梅櫻松楓それより は金銀米錢ぞかし。庭山にまさりて庭藏の詠め四季折〳〵の買置是ぞ喜見城の樂と思ひ極て。今の都に住ながら四条の橋をひがしへわたらず。大宮通りより丹波口の西へゆかず。諸山の出家をよせず。諸牢人に近付ず。すこしの風氣虫腹には自藥を用ひて。昼は家職を大事につとめ。夜は内を出ずして若ひ時ならひ置し小謠を。それも兩隣をはゞかりて地聲にして我ひとりの慰にきなしける。灯をうけて本見るにはあらず。覺たとをり世の費ひとつもせざりき。此おとこ一生のうち草履の鼻緒を踏きらず。釘のかしらに袖をかけて破

す。万に氣を付て其身一代に弐千貫目しこためて。行年八十八歳世の人あやかり物とて升掻をきらせける。さればかぎり有命此親仁其年の時雨ふる比。憂の雲立こころをまたず頓死の枕に殘る。男子一人して此跡を丸どりにして廿一歳より生れ付たる長者なり。此世悴親にまさりて始末を第一にして。あまたの親類に所務わけとて箸かたし散さず。七日の仕舞八日目より蔀門口を明て。世をわたる業を大事にかけて。腹のへるをかなしみて。火事の見舞にもはやくは歩ます。しはひせんさくにとしくれて。明れば去年のけふぞ親仁の祥月とて旦那寺に参りて。下向になをむかしをおもひ出して泪は袖にあまれる。此手紬の碁盤嶋は命しらずとて親仁の着られしが。おもへはおしき命今廿二年生給はゞ長百なり。若死かそばして大ぶん損かなと是にまで欲先立て歸るに。紫野の邊り御藥苑の竹垣のもとにして。めしつれたる年切女齋米入し明袋持し片手に。封じ文一通拾ひあげしを取てみれば。花川さままいる二三よりとうらかきそくゐ付ながら念を入て印判おしたるうへに。五大力ぼさつとそめ〳〵と筆をうごかせける。是は聞もおよばぬ御公家衆の御名なりと。それより宿にかへり人にたづねければ。是は嶋原の局上郎のかたへやるなるべしと讀すてけるを。是も杉原反故一枚のとく。損のゆかぬ事とて物しづかにとき見しに。壱歩ひとつころりと出しに。是はと驚き先付石にてあらため其後秤の上目にて壱匁弐分りんとある事をよろこび。胸のおどりをしづめ思ひよらざる仕合は是ぞかし。世間へさたする事なかれと。下々の口を閉て。扨彼ふみを讀けるに戀も情もはなれて。かしらからひとつ書にして。時分からの御無心なれ共。身にかへてもいとほしさのまゝ霜切米を借越つかはし參らせ候此内弐匁はいつぞやの請分その殘りは皆合力。年々つもりし借錢を濟し申さるべし。惣して人には其分限相應のおもはく有。大坂屋の野風殿に西國の大臣菊の節句仕舞にとて。一歩三百をくられしも。我らが一角も心入は同じ事ぞかし。あらば何か惜かるべしと。哀ふくみての文章。讀程ふびんかさなり。いかにしても此金子をひろふてはゐられじ。此存念もおそろし。其閑にかへさんとすれは住所をしらず。先のしれたる嶋原に行て花川をたづね渡さんと。すこしは鬢のそゝけを作りて宿を立出し後此一歩只かへすも思へばおしき心ざし出て。五七度も

分別かへけるが。程なく色里の門口につきてすくには入かね。しばらく立やすみ。揚屋より酒取に行男に立寄。此御門は断なしに通りましてもくるしう御ざりませぬかといひければ。彼男返事もせずおとがひにてをしへける。さてはと編笠ぬぎて手に提。中腰にかゞめてやう／＼に出口の茶屋の前を行過て女郎町に入。一文字屋の今唐土出掛姿に近寄。花川さまと申御かたはと尋ねけるに。太夫やり手のかたへ皃を移して私はぞんじませぬと斗。やり手青暖簾のかゝるかたに指さして。どこぞ其あたりで聞給へといへば。跡なる六尺目に角を立て其女郎つれておじやれ見てやらふと申せば。つれ參る程なれば御まへさまに御尋ねは申ませぬと。跡へさがりてあなたこなたにたづねあたり様子を聞ば弐匁どりのはしけいせいなるが。此二三日氣色あしくて引籠り居らるゝよしそこ／＼にかたり出ければ。彼文届ずかへりさまに思ひの外なる浮氣おこりて。元此金子我物にもあらず。一生の思ひ出に。此金子切に。けふ一日の遊興して老ての咄の種

にもと思ひ極め。揚屋の町は思ひもよらず。茶屋にとひ寄藤屋彦右衛門といへる二階にあがり。昼のうち九匁の御かたを呼てもらひ。呑つけぬ酒にうかれて。これより手習ふはじめ。情の取やりして次第のぼりに太夫残らず買出し。時なる哉都の末社四天王。願西神樂あふむ乱酒にそだてられ。まんまと此道にかしこくなつて。後には色作る男の仕出しも是がまねして。扇屋の戀風様といはれて吹揚人はしれぬ物かな。見及びて四五年此かたに。弐千貫目塵も灰もなく火吹力もなく。家名の古扇残りて一度は榮へ一度は衰ると。身の程を謡うたひて一日暮しにせしを。見る時聞時今時はまふけにくひ銀をと身を持かためし鎌田やの何がし子共に是をかたりぬ

浪風静に神通丸

諸大名にはいかなる種を前生に蒔給へる事にそ有ける。万事の自由を見し時は。目前の佛といふて又外になし。さればとよ世に大名の御知行。百弐拾万石を五百石どり釈迦如來御入滅此かた今に永〻勘定したて見るに。これを取つくさじといへり。大人小人の違ひ各別世界は廣し。近代泉州に唐かね屋とて金銀に有徳なる人出來ぬ。世わたる大船をつくり其名を神通丸とて三千七百石つみても足かろく。北國の海を自在に乗て難波の入湊に八木の商賣をして次第に家榮へけるは。諸事につきて其身調義のよきゆへぞかし。惣して北濱の米市は日本第一の津なればこそ一刻の間に五万貫目のたてり商も有事なり。その米は藏〻にやまをかさね夕の嵐朝の雨日和を見合雲の立所をかんがへ。夜のうちの思ひ入にて賣人有買人有。壱分弐分をあらそひ。人の山をなし互に面を見しりたる人には。千石万石の米をも賣買せしに。兩人手打て後は少も是に相違なかりき。世上に金銀の取やりには預り手形に請判慥に何時なりとも御用次第と相定し事さへ。其約束をのばし出入になる事なりしに。空さだめなき雲を印の契約をたがへず。其日切に損徳をかまはす賣買せしは扶桑第一の大商人の心も大腹中にして。それ程の世をわたるなる。難波橋より西見渡しの百景。数千軒の問丸。甍をならへ白土雪の曙をうばふ。杉ばへの俵物山もさなから動きて。人馬に付おくれば大道轟き地雷のごとし。上荷茶船かぎりもなく川浪に浮ひしは。秋の柳にことならず。米さしの

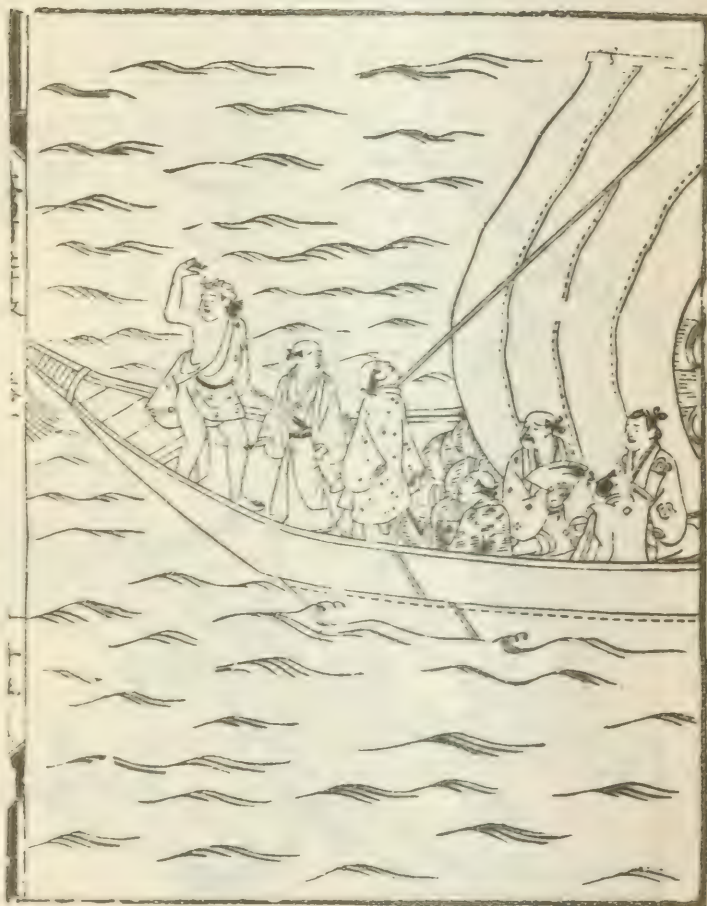
先をあらそひ若ひ者の勢虎臥竹の林と見へ。大帳雲を飜し十露盤丸雪をはしらせ。天秤二六時中の鐘にひゞきまさつて。其家の風暖簾吹かへしぬ。商人あまた有が中の嶋に岡肥前屋木屋深江屋肥後屋塩屋大塚屋桑名屋鴻池屋紙屋備前屋宇和嶋屋塚口屋淀屋など此所久しき分限にして商賣やめて多く人を過しぬ。昔こゝかしこのわたりにて纔なる人などもその時にあふて旦那様とよばれて置頭巾鐘木杖替草履取るも是皆大和河内津の國和泉近在の物つくりせし人の子共。惣領残してすゑ／＼をでつち奉公に遣し。置。鼻垂て手足の土氣おちざるうちは。豆腐花柚の小買物につかはれしが。お仕着二つ三つ年をかさねけるに。定紋をあらため。髮の結振を吟味仕出し風俗も人のやうになるにしたがひ。供はやし能舟遊びに

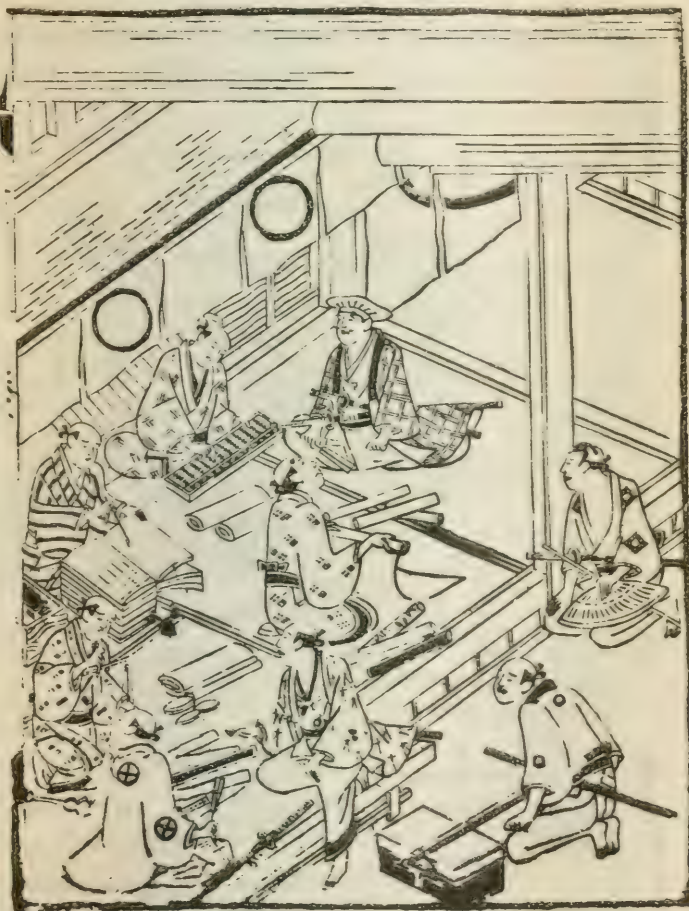
もめしつれられ。行水に数／＼砂手習地筭も子守の片手に置習ひ。いつとなく角前髮より銀取の袋をかたげ。次第おくりの手代ぶんになつて。見るを見まねに自分商を仕掛。利徳はだまりて損は親方にかづけ。肝心の身を持時親請人に難義をかけ。遣ひ捨し金銀の出所なく其なりけりに内證曖濟て。荷ひ商の身の行すゑ幾人かかぎりなし。おのれが性根によつて長者にもなる事ぞかし。惣じて大坂の手前よろしき人代々つゞきしにはあらず。大かたは吉藏三助がなりあがり。銀持になり。其時をえて詩哥鞠楊弓。琴笛鼓香會茶の湯も。おのづからに覺えてよき人付會むかしの片言もうさりぬ。菟角に人はならはせ。公家のおとし子作り花して賣まじき物にもあらず。是を思ふに奉公は主取が第一の仕合なり。子

細は繁昌の所にはよらず。北濱過書町のほとりにすみけるさし物細工人有しに。此職人にもちいさき弟子二人ありしが。新屋天王寺屋などの十貫目入の銀箱。不斷手に懸て寸法は覺えて其銀はつゐに手に取たる事なし。此弟子おとなしくなりて一分見世を出しけるに。親方にかはらず鍋蓋火燧箱の仕置。是より外をしらず。此者も同じ所から大所につかはれなば。それ／＼の商人になるべき物をと見及びふびんなり。すぎはひは草ばふきの種なるべし。此濱に西國米水揚の折ふし。こぼれすたれる筒落米をはき集て。其日を暮せる老女有けるが。形ふつゝかなれば廿三より後家となりしに後夫となるべき人もなく。ひとり有世悴を行すゑの樂みにかなしき年をふりしに。いつの比か諸國改免の世の中すぐれて八木

大分此浦に入舟昼夜に揚かね。かり藏せまりて置へきかたもなく。沢山に取なをし捨れる米を塵塚まじりにはき集めけるに。朝夕にくひあまして壱斗四五升たまりけるに。是より欲心出來て始末をしけるに。はや年中に七石五斗のばしてひそかに賣。明のとしなをまたのばしける程に。毎年かさみて二十餘年に胞くり金拾弐貫五百目になしぬ。其後世忰にも九歳の時よりあそばせずして。小口俵のすたるをひろひ集て。錢ざしをなはせて兩替屋問屋に賣せけるに。人の思ひよらざる錢まふけして。我手よりかせぎ出し後には慥成かたへ日借の小判當座かしのはした銀。是より思ひ付て今橋の片陰に錢見せ出しけるに。田舎人立寄にひまなく。明がたより暮がたまでわづかの銀子とりひろげて。丁銀こまかねかへ。小判を大豆板に替。秤にひまなくかけ出し。毎日〳〵つもりて十年たゝぬうちに。中間商のうはもりになつて諸方に借帳。我かたへはかる事なく銀替の手代これに腰をかゞめ機嫌をとる程になりぬ。小判市も此男買出せば俄に

あがり賣出せば忽ちさかり口になれり。自此男の口を親みな〳〵手をさげて旦那〳〵と申ぬ。中にも先祖をさがしてなんぞあれめに隨ひ世をわたるも口惜きと我を立ける人。物の急なる時にさしあたつて迷惑し。是も又御無心申さるゝ。金銀の威勢ぞかし。後は大名衆の掛屋あなたこなたの御出入もつはらにしければ。昔の事はいひ出す人もなく。歴々の聟となつて家藏数をつくりて母親の持れし筒落掃藁箒子讃團扇は貧乏まねくといへ共此家の寶物とて乾の隅におさめをかれし。諸國をめぐりけるに今もまだかせいで見るべき所は大坂北濱流れありく銀もありといへり

昔は掛算今は當座銀

古代にかはつて人の風俗次第奢になつて。諸事其分際よりは花麗を好み殊に妻子の衣服。また上もなき事共身の程しらず。冥加をそろしき高家貴人の御衣さへ。京織羽二重の外はなかりき。殊さら黒き物に定まつての五所紋。大名よりすゑ〳〵の万人に此似合

ざると云事なし。近年小ざかしき都人の仕出し。男女の衣類品々の美をつくし。雛形に色をうつし浮世小紋の模様。御所の百色染解捨の洗鹿子。物好各別世界にいたりせんさく。女の身持娘の縁組より内證うすくなりて。家業の障となる人数しらず。婚姻の平生きよらを見するは渡世のためなり。万民の美婦は春の花見秋の紅葉見。婚禮振舞の外は。目立衣裳を着重ず共すむ事なり。有時室町のかた脇に仕立物屋の軒かほりて。橘の暖簾掛りて。當世着物の縫出しすぐれて都の手利ありて。絹綿爰に持つとひてさながら衣掛山を我宿に見し事ぞかし。仕付の糸火熨あつるを待兼しほとゝぎす。初空夘月一日は衣かへとて色よき袷を縫かけしをみるに。白き紋羅のひつかへしに。緋縮綿を中に入て三枚かさねの袷。兩袖襟に引綿むかしはなかりし事なり。此うへは万の唐織を常住着となすべし。此時節の衣裳法度諸國諸人の身のため。今思ひあたりて有がたくおぼえぬ。商人のよき絹きたるも見ぐるし。紬はおのれにそなはりて見よげなり。

武士は綺羅を本としてつとむる身なれば。たとへ無僕のさふらひまでも。風義常にしておもはしからず。近代江戸靜にして松はかはらず常盤ばし。本町吳服所京の出見世紋付鑑にあらはし。棚もり手代それ〳〵に得意の御屋敷出入ともかせぎに勵あひ。商賣に油斷なく弁舌手だれ智惠才覺。筭用たけてわる銀をつかまず。利德に生牛の目をもくじり。虎の御門の夜をこめ。千里にゆくも奉公。朝には星をかづき秤竿に心玉をなして。明暮御機嫌とれ共。以前とちがひ今ははん昌の武藏野なれ共。隅から角まで手入して。更に甽取もなかりき。御祝言又は衣配の折からは其役人小納戸かたの好みにて一商して取けるに。今時は諸方の入札すこしの利潤を見掛て喰ひ詰になりて。內證かなしく外聞斗の御用等調へ。剰へ大分の賣かゝり数年不埒になりて。京銀の利まはしにもあはす。かはし銀につまりて。難儀俄に取ひろげたる棚も仕舞かたく自小前になりぬ。兎角はあはぬ筭用江戸棚殘て何百貫目の損。足もとのあかいうちに本紅の色かへてと。銘〻分別する時。又商の道は有物。三井九郎右衛門といふ男手金の光むかし小判の駿河町と云所に。面九間に四十間に棟高く長屋作りして。新棚を出し。萬現銀賣にかけねなしと相定め。四十余人利發手代を追まはし。一人一色の役目。たとへば金欄類一人。日野郡內絹類壱人。羽二重一人沙綾類一人。紅類一人麻袴類一人毛織類一人。此ごとく手わけをして天鵞兎一寸四方。段子毛貫袋になる程。緋繻子鑓印長。龍門の袖覆輪かた〳〵にても物の自由に賣渡しぬ。殊更俄か目見の熨斗目いそぎの羽織などは其使をまたせ数十人の手前細工人立ならび。卽座に仕立これを渡しぬ。さによつて家榮へ毎日金子百五十兩つゝならしに商賣しけるとなり。世の重寶是ぞかし。此亭主を見るに。目鼻手足あつて外の人にかはつた所もなく家職にかはつてかしこし。大商人の手本なるべし。いろは付の引出しに。唐國和朝の絹布をたゝみこみ品〻の時代絹。中將姬の手織の蚊屋人丸の明石縮阿弥陀の涎かけ朝比奈が舞鶴の切。達磨大師の敷蒲團林和靖か括頭巾三条小鍛冶が刀袋何によらすないといふ物なし萬有帳めでたし

世は欲の入札に仕合

用心し給へ國に賊家に鼠後家に入聟いそくましき事なり。今時の仲人頼もしづくにはあらず。其敷銀に應じて。

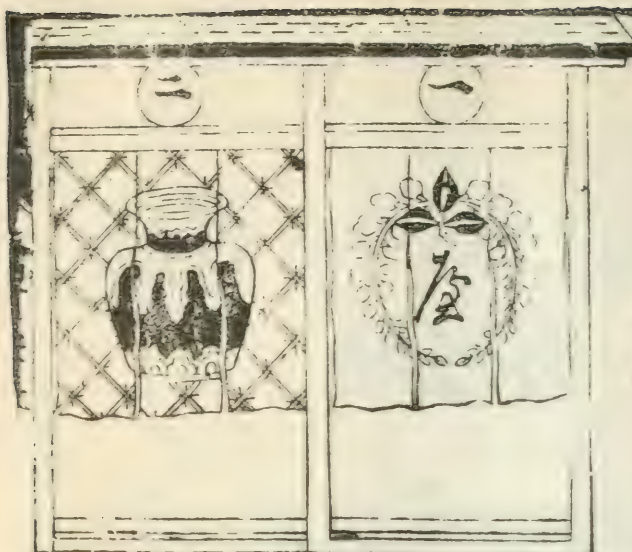
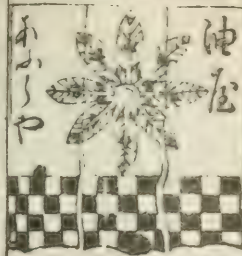
たとへば五十貫目つけば五貫目取事といへり。此ごとく十分一銀出して娌呼かたへ遣しけるは内證心もとなし。一代に一度の商事此損取かへしのならぬ事よく／＼念を入べし世の風義をみるに手前よき人表むきかるう見せるは稀なり。分際より万事を花麗にするを近年の人心よろしからず。娌取時分のむす子ある人はまだしき屋普請部屋づくりして。諸道具の拵下人下女を置添て富貴に見せかけ。娌の敷銀を望み商の手だてにする事心根の恥しき世の外聞ばかりにをくりむかひの駕籠。一門縁者の奢くらべ無用の物入かさなりて。程なく穴のあく屋ねをも葺ず家の破滅とはなれり。或は又娘持たる親はおのれが分限より過分に先の家を好み。身袋の外聟の生れ付諸藝ありて人の目立程なるを聞合けるに。小鼓うてば博奕うち若ひ者ぶりすれば傾城くるひ止ず一座の公儀ふりよき人と人の畳れは野郎あそびに金銀をつゐやしぬ。

是を思ふに男よくて身過にかしこく。世間にうとからず親に孝ありて人ににくまれず。世のためになる人聟に取

たきとて尋ても有べきや。よい事過てかへつて難義ある物ぞかし。上つかたにさへ不祥はある物ましてや下つかたの人。十に五つは見ゆるし小男なり共はげあたまなり共。商口利て親のゆづり銀をへらさぬ人ならば縁組すべし。あれは何屋の誰殿の聟ぞと。五節供に袴肩衣ためつけ。紋付の小袖に金拵の小脇指。跡より小者若ひ者挿箱持つれたる當世男見よげにして。娘の母親よろこぶ事なり。それも分散にあへば衣類刄物も皆人手にわたりてあしき男の紬を花色小紋に染て着あるひはまたうら付の木綿袴きたるよりはおとれり。娘も高人の家は各別民家の女は琴のかはりに眞綿を引。伽羅の煙よりは薪の燃しさるをはさしくべたるがよし。それ／＼に似合たる身持するこそ見よけれ。世間躰ばかり皆いつはりの世中に

時雨降行奈良坂や。春日の里に曝布の買間屋して。有德人松屋の何がしとてありしが。むかしは今の秋田や榑屋にまさりて。世盛の八重櫻爰の都に花をやつて春をゆたかに暮され所酒のから口鱶のさしみを好み。其身榮花に明

し。此家次第におとろへ。天命をしる年になりて。平生の不養生にて頓死をせられける。妻子に大分の借錢を殘しこれを譲られける。人の身袋死ねばしれぬ物ぞかし。此後家今年三十八にして小作りなる女。殊更きめごまかにして色白く。うち見には二十七八。人の好める當流女房。跡を忘れて又の縁にもつきかねざる風俗なりしに。若年の子共をあはれみ。人のうたがはぬ程に髪切て。白粉絶て紅花の口びる色さめ。男模様の着物帯も細きを好み才覺男にまされど。女の鍬もつかはれず。柱の根つぎも手細工には及がたく。いつとなく軒もる雨にしのぶ草しげりて。野を内に見る鹿の聲。不斷聞よりはかなしく。戀慕の外につれあひの事ゆかしく。女ばかりも世を立かたき事今ぞ身に覺えける。今時の後家立るは其死跡に過分の金銀家督ありて。欲より女の親類異見していまだ若盛の女に。無理やりに髪をきらせ。心にもそまぬ仏の道をすゝめ。命日を弔はせける　かならずうき名立て家久しき若ひ者を旦那にする事。所〻に是を見及びける。かくあらんよりは外への縁組人の笑ふ事にはあらず。彼松屋後家こそ世の人の鑑なれ。いろ〳〵の渡世して心まかせにかなはず。むかしの借銀濟べき調法もならず。次第にまづ敷なる時一生一大事の分別出し。住宅を借かたの衆中に渡すべきと申せば。人皆あはれみて今取べきと云者一人もなし。借銀五貫目此いゑ賣ば三貫目より內なり。後家町中に歎き此家をたのもしの入札にして賣ける。壱人に銀四匁つゝ取て突當りたる方へ家を渡すなればてんほにして銀四匁と札を入ける。程に三千牧入て銀拾弐貫目請取五貫目の借銀はらひ七貫目殘りて。後家二度是より分限に成ぬ。人に召つかはれし下女札に突當て四匁にて家持となれり

日本永代蔵

目録

巻二

一 世界の借屋大将
京にかくれなき工夫者
餅搗もさたなしの宿

二 怪我の冬神鳴
大津にかくれなき醤油屋
何としても世を渡る奉公

笠大黒屋
かさだいこくや

油屋
あぶらや

鍋屋
なべや

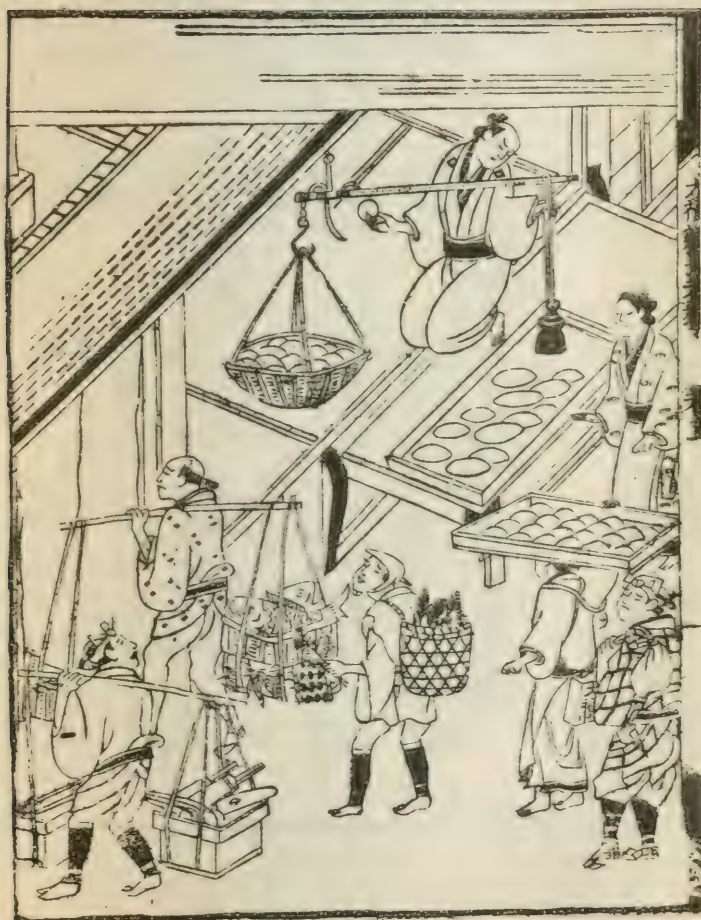
文覚と笠に居大黒
江戸にかくれなき小倉清
男もこれ乃古びし木の黒檀

天狗ハ家名の風車
紀伊国に隠れなき綿屋
摂津国の小舟の出入

五人ゐかゝ鍋屋乃庭
坂田におくれ所見草豆振
出れば妻もの長物の蓋

世界の借屋大將

借屋請狀之事室町菱屋長左衞門殿借屋に居申されし藤市と申人慥に千貫目御座候。廣き世界にならびなき分限我なりと自慢申せし。子細は二間口の棚借にて千貫目持都のさたになりしに。烏丸通に三十八貫目の家質を取しが利銀つもりておのづから流れ始て家持となり是を悔みぬ。今迄は借屋に居ての分限といはれしに。向後家有からは京の歴〻の内藏の塵埃ぞかし。此藤市利發にして一代のうちにかく手まへ富貴になりぬ。第一人間堅固なるが身を過る元なり。此男家業の外に反故の帳をくゝり置て見世をはなれず。一日筆を握り兩替の手代通れば錢小判の相場を付置。米問屋の賣買を聞合せ。木藥屋呉服屋の若ひ者に長崎の樣子を尋ね。操綿塩酒は江戸棚の狀日を見合せ。毎日万事を記し置ば紛し事は爰に尋ね洛中の重寶になりける。不斷の身持肌に單襦袢大布子綿三百目入てひとつより外に着事なし。袖覆輪といふ事此人取はじめて當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪踏をはきて終に大道をはしりありきし事なし。一生のうちに絹物とては紬の花色。ひとつは海松茶染にせし事若ひ時の無分別と廿年も是を悔しく思ひぬ。紋所を定めず丸の内に三つ引又は壹寸八分の巴を付て土用干にも疊の上に直には置ず。麻袴に鬼縣の肩衣幾年か折目正しく取置れける。町並に出る葬禮には是非なく鳥部山におくりて人より跡に歸りさまに。六波羅の野道にて奴僕もろ共苦參を引て是を陰干にしてはら藥なるぞと。只は通らず。躓く所で燧石を拾て袂に入ける。朝夕の煙を立る世帶持はよろづか樣に氣を付ずしてはあるべからず。此男生れ付て悋きにあらず。万事の取まはし人の鑑にもなりぬべきねがひ。かほどの身袋まで年とる宿に餅搗ず。閙敷時の人遣ひ諸道具の取置もやかましきとて。是も利勘にて大佛の前へあつらへ壹貫目に付何程と極めける。十二月廿八日の曙いそぎて荷ひつれ藤屋見世にならべうけ取給へといふ。餅は搗たての好もしく春めきて見えける。旦那はきかぬ貞して十露盤置しに。餅屋は時分柄にひまを惜み幾度か斷て。才覺らしき若ひ者杠斤の目りんと請取てかへしぬ。一時はかり過て今の餅請取たかといへははや渡して歸りぬ。此家に奉公する程にもなき者ぞ温もりのさめぬを請取し事よと又目を

懸しに。思ひの外に滅のたつ事手代我を折て喰もせぬ餅に口をあきける。其年明て夏になり東寺あたりの里人茄子の初生を目籠に入て賣來るを七十五日の齢是たのしみのひとつは弐匁。二つは三匁に直段を定め。何れか二つとらぬ仁はなし。藤市はひとつを二匁に買ていへるは。今一匁で盛なる時は大きなるが有と心を付る程の事あしからす。屋敷の空地に柳柊楪葉桃の木はな菖蒲薏苡仁など取まぜて植置しは。ひとり有娘がためぞかし。よし垣に自然と朝良のはへかゝりしを。同じ詠めにははかなき物とて刀豆に植かへける。何より我子をみる程面白きはなし。娘おとなしく成て頓て娌入屛風を拵とらせけるに洛中盡を見たらば見ぬ所を歩行たがるべし。源氏伊勢物語は心のいたづらになりぬべき物なりと。多田の銀山出盛し有様書せける。此心からはいろは哥を作りて誦せ女寺へも遣ずして筆の道を教ゑひもせす京のかしこ娘となしぬ親の世智なる事を見習ひ八才より墨に袂をよごさず。節句の雛遊びをやめ盆に踊らず。毎日

髪かしらも自梳て丸曲に結て身の取廻し人手にかゝらす。引ならひの眞綿も着丈竪横を出かしぬ。いづれ女の子は遊ばすまじき物なり。折ふしは正月七日の夜近所の男子を藤市かたへ長者に成やうの指南を頼むとて遣しける。座敷に燈かゝやかせ娘を付置露路の戸の鳴時しらせと申置しに。此娘しほらしくかしこまり。灯心を一筋にして嘐の聲する時元のごとくにして勝手に入ける。三人の客座に着時臺所に擂鉢の音ひゞきわたれば。客耳をよろこばせ是を推して皮鯨の吸物といへば。いや／＼はじめてなれば雑煮なるべしといふ。又ひとりはよく考て煮麪とおち付ける。必ずいふ事にしておかし。藤市出て三人に世渡りの大事を物がたりして聞せける。一人申せしは今日の七草といふ謂はいかなる事ぞと尋ねける。あれは神代の始末はじめ増水と云事を知せ給ふ。又壹人掛鯛を六月迄荒神前に置けるはと尋ぬ。あれは朝夕に肴を喰ずに是をみて喰た心せよと云事也。又太箸をとる由來を問ける。あれは穢し時白げて一膳にて一年

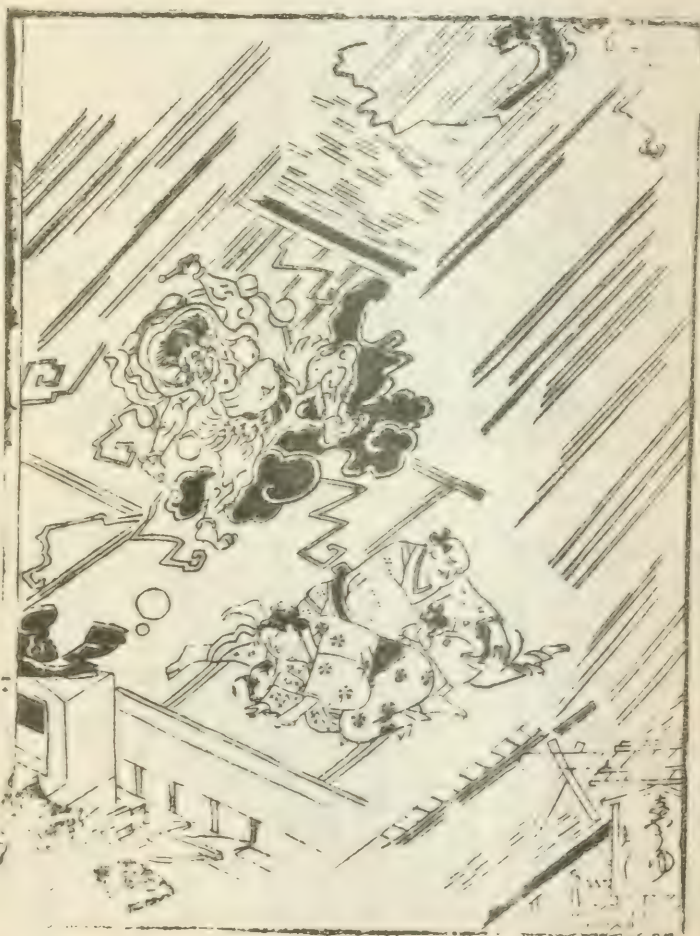
中あるそうに。是も神代の二柱を表すなり。よく／＼万事に氣を付給へ扱宵から今まで斧咄し給へは㝡早夜食の出べき所なり。出さぬが長者に成心なり。㝡前の擂鉢の音は大福帳の上紙に引糊を擂したといはれし

怪我の冬神鳴

細波や近江の湖に沈めても一升入壺は其通り也。大津の町に醤油屋の喜平次といふ者有ける。此所は北國の舟着殊更東海道の繁昌馬次かへ駕籠車を轟し人足の働き。蛇の鮓鬼の角細工何をしたればとて賣まじき事にあらず。近年問屋町長者のごとく屋造り昔にかはり。二階に撥音やさしく。柴屋町より白女よび寄客の遊興昼夜のかぎりもなく。天秤のひゞきわたり金銀も有所には丸石のごとし。身袋程高下の

有物はなしと喜平次荷桶おろして無常觀じける。我商に廻れるさき／＼にも世は愁喜貧福のわかち有てさりとは思ふまゝならず。かしこき人は素紙子きて愚なる人はよき絹を身に累ねし。莵角一仕合は分別の外ぞかし。然れ共其身袒ずして錢が一匁天から降ず地から涌ず正直にかまへた分にも埒は明ず。身に應じたる商賣をおろそかにせじと一日暮しを樂しみける。關寺のほとりに森山玄好といへる人かたいごく藥師は上手殊に老功なれ共寂の山風程の事にもかつて藥まはらず。門に嗲の聲絶て。内に神農の掛繪も身ぶるひして万の紙袋の書付はこりに埋れ冬も羽二重のひとへ羽織せんにやうつねにかはらぬ衣類つき醫師も傾城の身に同じ呼ぬ所へはゆかれず。宿に居れは外聞おしく毎日朝脉の時分より京出

て。四の宮の繪馬をながめ。又は高觀音の舞臺に行て近江八景もあさゆふ見てはおもしろからず。身すぎはかけて隙の有程氣の毒なる物はなし。人には繪馬醫者といはれて口おしかりし。有人取立碁會の宿して一番に三錢づゝ茶の代とりて漸ゝ死ぬを德にして世をおくる人も有。また馬屋町といふ所に坂本屋仁兵衛殿とて以前は大商人なりしが大分の銀をなくなし殘る物とて家藏賣て弐拾八貫目ありしを取て退。其後三十四五度も商賣かへられしうちに今は殘らず喰込て何をすべきたよりもなく。むかしの厚鬢もうすく仁躰おかしげなれはひとつも埒のあかぬ男。貧乏神の社人になれとて一門中是を見かぬる。され共母親の隱居銀拾貫目あるをひとりの子なればふびんにおもはれせめてはこれをとらせ世にすむ種とも

なれかし。然れ共仁兵衛に渡しては一年もあるまじ。姉聟にあづけて月に八拾目づゝ利銀わたし。此有切に五人口を過よといはれし。先夫婦子が壱人弟に仁三郎とて背僂病。ひとりは乳のませし姥が足たゝずして外に頼む嶋もなく爰にかゝり舟。日和を見てもとれを壱人出て行といふものもなし。さりとては拾貫目の利銀にて八拾目取。五人口は過がたし此銀朔日に請取五匁の屋賃をのけて置。白米のよきに味噌塩薪をとゝのへ常住香の物薬。此外にはいかな〳〵三月の鯛を壱枚松茸壱斤弐分する時も目に見るばかり。咽がかはけば白湯に焦穀油火も眞中にひとつともしてこれを寝さまに消て鼠のあるゝをかまはず。盆正月の着物もせず年中始末に身をかため。慰には觀世紙縷をして明暮不自由なる世や。あきなひの道しるとて百目にたらぬかねにて七八人楽く〳〵と年こすもあり。又松本の町に後家有。独りの娘に黄唐茶のふり袖に菅笠を着せて言葉すこしなまりならひ。ぬけ參りの者に御合力と御伊勢様を賣て此十二三年も同し僞にて世を過る女も

あり。又池の川の針屋ほそき事なれ共娘を京への縁組を聞立。銀弐千牧付るとて仲人かゝがとびまはり。しいたら百貫目は付てやらるべしと私語し。人の內證はしれぬ物此大津のうちにもさま〳〵ありと。醬油賣まはるさき〳〵にて見聞。喜平次が宿にかへりて語りける此女房ずいぶんかしこく子共も奇麗にそだて。人の物をもおはず年とり物をも師走のはじめ比より調へ節季に帳かたげた男の㒵を見ぬを嬉しやとて万事を仕舞けるに。此幾年か錢とりあつめて七匁五分か八匁。七匁六分八匁八九分か殘り。つゐに拾匁ともちて年越たる事なく。板木でをしたるやうな此家の若ゑびすといはひけるに。瓦落〳〵と空さだめなや。冬神鳴十二月廿九日の夜の明かたにおちかゝりて。一跡に一つの鍋釜微塵粉灰にくだかれ。是を歎くにかひなく片時もなければはならず買もとめしに。其としの暮にそれ程たらずして九匁廿四五所に買かゝりやかましき事を聞ぬ。是をおもふに當所のかならず違ふものは世の中。我も神鳴の落ぬまでは世にこはき物はなかりしにと悔みぬ

才覺を笠に着る大黒

一に俵二階造り三階藏を見わたせば。都に大黒屋といへる分限者有ける。冨貴に世をわたる事を祈り五條の橋切石に掛かはる時西づめより三枚目の板をもとめ。是を大黒に刻ませ信心に徳あり次第に榮へ。家名を大黒屋新兵衛としらぬ人はなかりき。男子三人無事に撫育いづれもかしこく。親仁よろこひ老後の樂を極め追つけ隱居の支度をせしに。惣領の新六俄に金銀を費し筭用なしの色あそび。半年立ぬに百七拾貫目入帳の內見へざりしに。迚も埒の明さる僉儀なれば手代ひとつに心をあはせ。買置の有物に勘定仕立七月前を漸〳〵に濟し。向後奢を止たまへと異見さま〳〵申せしに更に聞入ずして。其年の暮に又弐百三十貫目たらず今は內證に尾が見えて稲荷の宮の前にしるへの人ありて身を隱しぬ。律義なる親仁腹立せられしを色〳〵詫ても機嫌なをらず。町衆に袴きせて旧里を切て子をひとり捨ける。されば親の身として是程まてうとまるゝ事大かたならぬ惡心なり。新六是非もなき仕合はや當分の借屋にも居られぬ首尾になりて。爰を立退東のかたへ行道の草鞋錢とてもなく。かなしさは我身ひとりとなげくに甲斐もなし。比は十二月廿八日の夜水風呂に入しを。それ親仁様といふ聲お

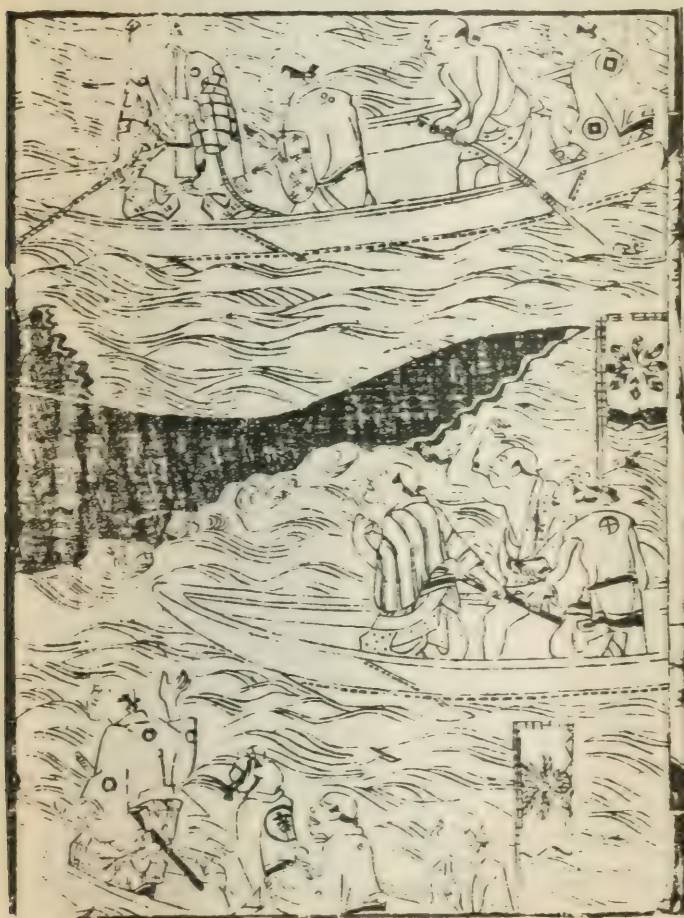
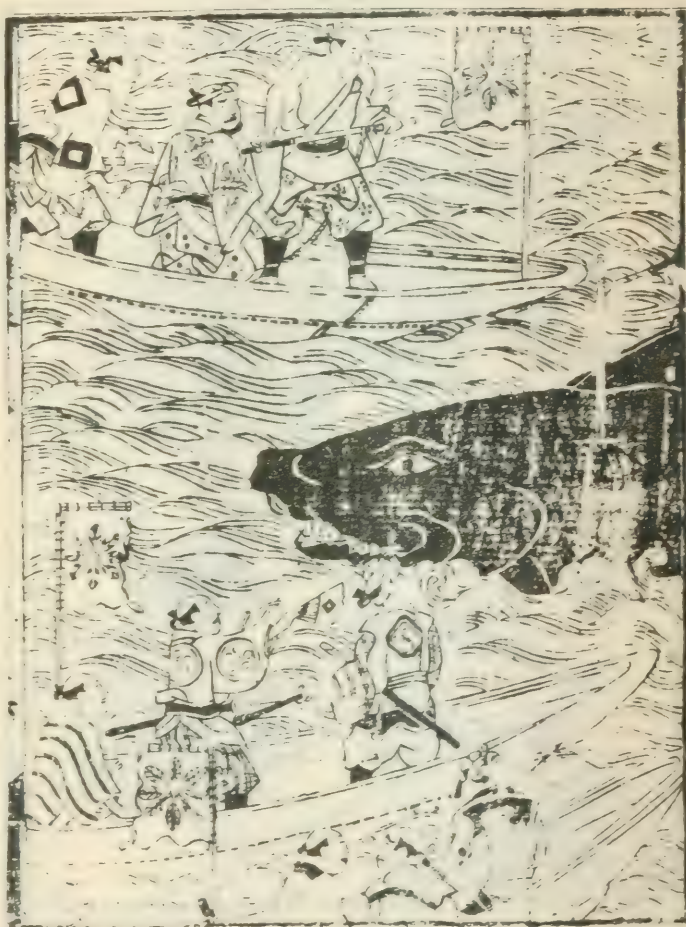
そろしく。濕身に綿入ひとつ肩にかけ。左に帶を提て下帶には氣をつけずして迯のび。けふ旅立にも尻からげきのどく廿九日の空さだめなく。たまりもやらぬ白雪の藤の森の松にふりしこりて。菅笠なしの首筋に入相の鐘も胸にひゞきて大龜谷勸修寺の茶屋の奇麗に湯釜の沸をこのもしく。たへかたき寒さをしのぐ物よと思ひながら一錢もなければ腰かけを見あはせ大津伏見駕籠の立つゞき大勢のどさくさまぎれに咽のかはきを止。立さまに人の脱捨し豐嶋莚をはづし。はじめて盗心になつて行に小野と云里につきぬ。落葉して梢さびしき柹の木の陰に童子友達の集りて。惜や弁慶が死けると悔むを聞ば。特牛程なる黑犬なるを立寄て是を貰彼莚につゝみ音羽山の麓に行て。野に鍬つかふ夫を招き。これは疳の妙藥になる犬なり。三年あまり種々の藥をあたへ今黑燒になすといへば。さては諸人の爲ぞとあたりの柴枯笹をあつめ。火打袋を取出し煙の種となし里人にも。わづかにとらせ殘るを肩に置て。山家の作りとはになりて狼の黑燒はと聲の可笑げに賣て行も歸るもの關越てしるもしらぬもにつき付商ひ。隨分道中の人になれたる心の針屋筆やかたられて追分より八丁までに五百八十が物代なして。先は才覺男此取廻しが京にて出れば遠い江戸迄は行ずに濟事をと。心ながら泣つ笑つ勢田の長橋するに賴みをかけて草津の人宿にて年を取。姥が餅をむかしの鏡山に見なし。頓て心の花も咲出る櫻山色も香も有若さかり。かせぐに追着貧乏神は足よはき老曾の森の注連餝もおのづからに春めきて秋見る月もたのもしく。不破の關戸の明暮。美濃路尾張を過て東海道の在々廻り都をいでゝ六十二日めに品川に着ぬ。是迄の口をすぎ錢弐貫三百延し。賣殘せし黑燒を礒浪に沈めてそれより江戸入を急ぎしに暮て行當所もなければ。東海寺門前に一夜を明しけるに。其かた陰に薦かぶりて非人あまた臥けるが。春も浦風あらく浪枕のさはがしく。目のあはぬ夜半まで身の上の事共物がたりするを聞に。皆筋なき乞食老人は大和の竜田の里の者。すこしの酒造りて六七人の世を樂々とおくりしに。次第にたまりし金銀取あつめて百兩になる時。所の商まだるく。万事うち捨爰にくたるを。一門殘らずしたしき友の色々申てとめける。我無分別さかんにまかせ。呉服町の肴棚かりて。上上吉諸白の軒ならびには出しけれ共。濁の池伊丹池田南都根づよき大木

の杉やかほりに及びがたく酒元手を皆水になして。四斗樽の薦を身に被りて古郷の竜田へもみぢの錦は着ず共せめて新しき木綿布子なればかへるにと男泣して是に付ても仕付たる事を止まじき物ぞといふ程よろしからずよい智恵の出時もはやおそし。又壱人は泉州堺の者なりしが万にかしこ過て藝自慢してこゝにくだりぬ。手は平野仲庵に筆道をゆるされ。茶の湯は金森宗和の流れを汲詩文は深草の元政に學び連誹は西山宗因の門下と成。能は小畠の扇を請鞁は生田與右衛門の手筋。朝に伊藤源吉に道を聞。ゆふべに飛鳥井殿の御鞠の色を見昼は玄齋の碁會にまじはり。夜は八橋撿校に彈ならひ一節切は宗三に弟子となりて息つかひ。浄るりは宇治嘉太夫節おどりは大和屋の甚兵衛に立ならび。女郎狂ひは嶋原の太夫高橋にもまれ野郎遊びは鈴木平八をこなし。噪ぎは兩色里の太鼓に本透になされ。人間のする程の事其道の名人に尋ね覚え何をしたればとて人の中には住べきものをと腕たのみせしが。かゝる琢り穿鑿當分身業の用には立がたく。

十露盤をおかす秤目しらぬ事を悔しかりぬ。武士つとめは勝手をしらず。町人奉公もおろかなりとて追出され。今此身になりて思ひあたり諸藝のかはりに身を過る種をおしへをかれぬ親達をうらみける。今壱人は親から江戸の地生にて通り町に大屋敷を持て。一年に六百兩づゝさだまつての棚賃を取ながら。始末の二字をわきまへなく。其家迄賣はたし身の置所なく心の燃る火宅を出て。車善七が中間はづれの物もらひとなりぬ。思ひ／＼の身の上物語さりとては同じ思ひに哀ふかく。新六枕に立より我らも京の者なるが旧里斷れてお江戸を賴に下りけるが。各咄しを聞に心ぼそしと恥をつゝます申せば。三人共に口を揃て侘言の手便はあらすや姨様もないか何とぞ下り給はぬがよい物をと云。はや跡へ歸らぬむかし今から先の思案なり。扨面〻の利發にてかく淺ましく成給ふは不思儀なり。何事を見立給ひても有べきといへは。いかな／＼此廣き御城下なれ共日本のかしこき人の寄會錢三匁あだにはもうけさせず。只銀がかねをためる世の中といへり。久敷見及び給ふ内に。商の仕出しはなきかと尋しに。されば大分にすたり行貝がらを拾ひて靈岸嶋にして石灰を燒か物毎闕しき所なれば刻昆布花鰹かきて計賣か。つゞき操を買て手拭の切賣か。か様の事ならではかるい商賣有まじと云にぞ智恵付。よの明かたに立別れけるが。三人に三百の置錢悦事限りなく。御仕合みへて富士山程の金持に今の事ぞと申ける。それより傳馬町の太物棚にしるべ有て尋行此度の子細をかたれば哀れをかけ男の働べき所は爰なり。ひとかせぎと云にぞ力をえて思ひ入の襌を調へきり賣の手拭。然も三月廿五日はじめて下谷の天神に行て手水鉢のもとにて賣出しけるに。參詣の人買ての幸と一日に利を得て。毎日是より仕出して十ケ年立ぬ内に五千兩の分限にさゝれ。一人の才覺者といはれ。新六か指圖をうけて所の人の寶とは成ける。暖簾に菅笠きたる大黒を染ければ笠大黒屋といへり。八つ屋敷かたに出入九つ小判の買置卜で丁と治りたる御代に住る事の目出たし

天狗は家な風車

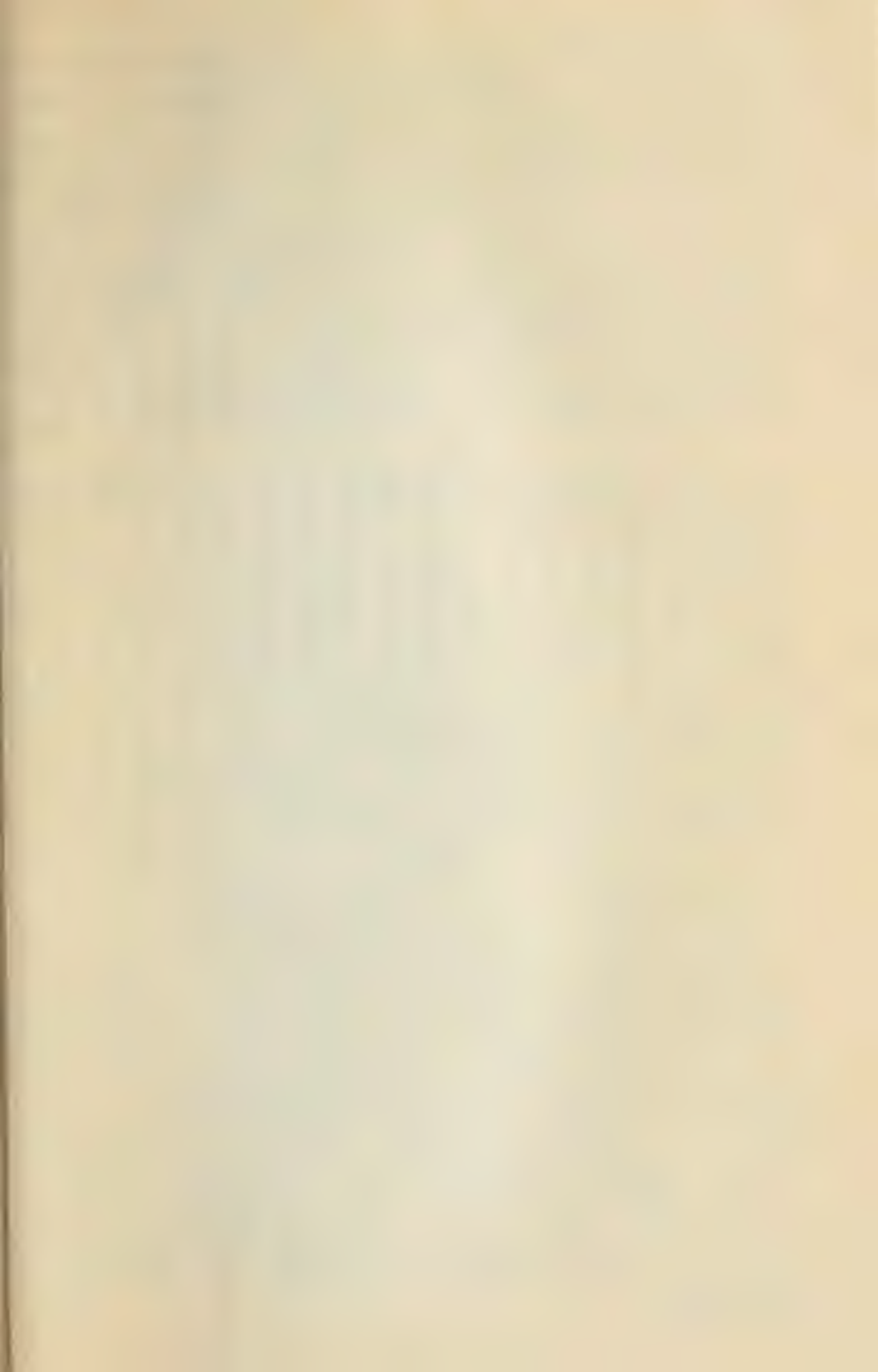
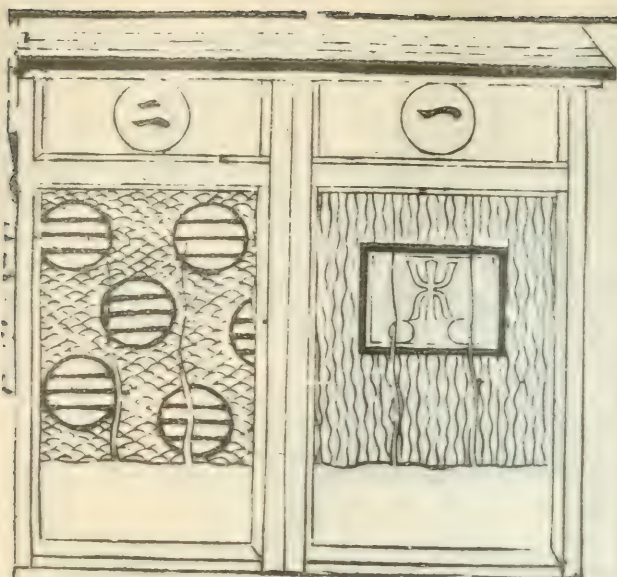
智恵の海廣く日本の人の働をみて身過にうとき唐樂天が逃て歸りし事のおかし。詩をうたふは耳遠く横手ぶしといへる小哥の出所を尋ねけるに紀

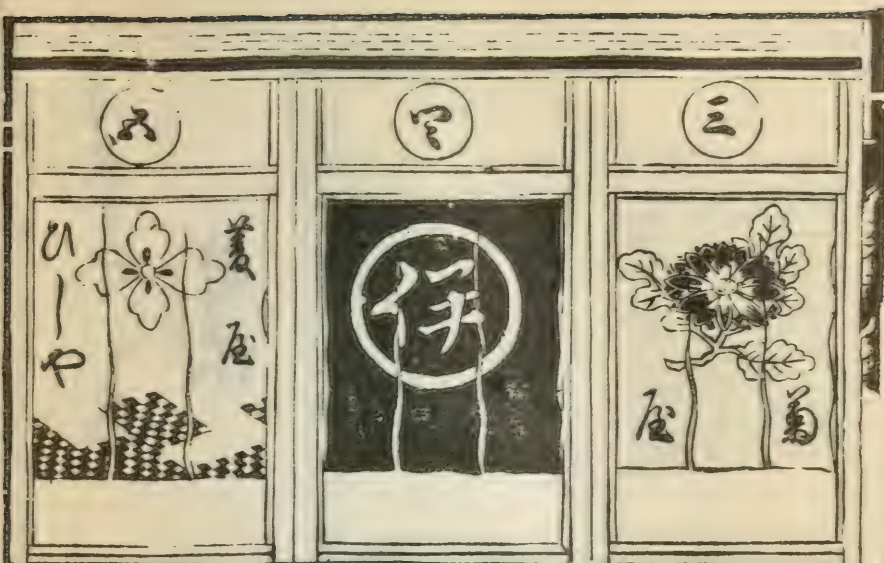
路大湊泰地といふ里の妻子のうたへり。此所は繁昌にして若松村立ける中に鯨恵比須の宮をいはひ。鳥井に其魚の胴骨立しに高さ三丈ばかりも有ぬべし。目なれずして是にけう覺て浦人に尋ねければ。此濱に鯨突の羽指の上手に天狗源内といへる人。毎年仕合男とてむかし此人をやとひて舟を仕立けるに。有時沖に一むら夕立雲のごとく塩吹けるを目がけ一の鑓を突て風車の驗をあげしに。又天狗とはしりぬ。諸人浪の聲をそろへ笛太鼓鉦の拍子をとつて大綱つけて轆轤にまきて礒に引あげけるに其たけ三十三尋弐尺六寸千味といへる大鯨前代の見はじめ七郷の賑ひ竈の煙立つゞき。油をしぼりて千樽のかぎりもなく。其身其皮ひれまで捨る所なく長者に成は是なり。切かさねし有様は山なき浦に珍しく雪の冨士紅葉の高雄爰にうつしぬ。いつとても捨置骨を源内もらひ置て是をはたかせ。又油をとりけるに思ひの外成徳より分限に成。する〲の人のため大分の事なるを今まで氣のつかぬこそおろかなれ。近年工夫をして鯨網を拵へ見付次

第に取損ずる事なく今浦〻に是を仕出しぬ。昔日は濱びさしの住ゐせしが。檜木造りの長屋弐百余人の獵師をかゝへ舟ばかりも八十艘何事しても頭に乗て今は金銀うめきて。遣へど跡はへらず根へ入ての內證吉是を楠木分限といへり。信あれは德ありと仏につかへ神を祭る事おろかならず。中にも西の宮を有がたく例年正月十日には人よりはやく參詣けるに。一年帳縫の酒に前後をわすれ。漸〻明かたより手船の弐十挺立を押きらせ行に。いつの年よりおそき事を何とやら心がゝりに思ひしに。年男の福太夫といふ家來子細らしき貞つきして申出せしは。二十年此來朝ゐびすに參り給ふに當年は日の入旦那の身袋も挑灯程な火がふらふと。思ひもよらぬあだ口いよ〳〵氣をそむきて脇指に手は掛しが爰が思案とおさめて。春の夜の闇を挑灯なしにはあるかれじと足を延し胸をさすりて苦笑ひの中に。早船廣田の濱に付て心靜に參詣せしに。松原淋しく御灯の光り幽かに皆下向ばかりにて。參るは我より外になく心をせきて神前になれは。お神樂と

いへど社人は車座にゐて錢つなきかゝり。誰の彼のと粂ひあひ舞姬の跡にて鼓ばかり打てそこ／＼に埒明鈴も遠ひからいたゝかせて仕舞れける。神の事ながら少腹立て大かたに廻りて又舟に取乘。袴も脱ず浪枕していつとなく寢入けるに。跡よりゑびす殿ゑぼしのぬげるもかまはず。玉襷して袖まくり片足あげて岩の鼻から船に乘移らせ給ひ。あらた成御聲にてやれ／＼よい事を思ひ出してゐてから忘れたは。此福を何れの獵師成共機嫌に任せ語り與ふと思ふに今の世の人心せはしく。我云事計いふてざら／＼と立行ば何を云て聞す間もなし。おそく參て汝が仕合と耳たぶによらせられ小語給ふは。魚嶋時に限らず生船の鯛を何國迄も無事に着やう有。弱し鯛の腹に針の立所尾さきより三寸程前をとがりし竹にて突といなや生て働く鯛の療治新敷事ではたいかと語給ふと夢覺て。是は世の例ぞと御告に任せけるに。案のごとく鯛を殺さず。是に又利を得て仕合のよい時津風眞帆に舟を乘ける

舟人馬かた鐙屋の庭

北國の雪竿毎年壱丈三尺降ぬと云事なし。神無月の初めより山道を埋み人馬の通ひ絶て明の年の涅槃の比迄はおのづからの精進して。塩鯖賣の聲をも聞ず莖桶の用意。焼火をたのしみ。隣むかひも音信不通になりて半年は何もせずに明暮煎じ茶にしておくりぬ。諸事を兼ゝたくはへ置し故に渇命に及ばざりき。かゝる浦山へ馬の背ばかりにて荷物をとらば万高直にして迷惑すべし。世に船程重寶なる物はなし。爰に坂田の町に。鐙屋といへる大問屋住けるが。昔は纔なる人宿せしに。其身才覺にて近年次第に家榮へ諸國の客を引請。北の國一番の米の買入。惣左衞門といふ名をしらざるはなし。表口卅間裏行六十五間を家藏に立つゞけ。臺所の有様目を覺しける。米味噌出し入の役人焼木の請取肴奉行料理人椀家具の部屋を預り菓子の捌き莨菪の役。茶の間の役湯殿役又は使番の者も極め商手代内證手代金銀の渡し役。入帳の付手。諸事壱人に壱役つゝ渡して物

の自由を調へける。亭主年中袴を着てすこしも腰をのさず。内儀はかるひ衣裳をして居間をはなれず。朝から晩まで笑ひ良して巾／＼上方の問屋とは各別。人の機嫌をとり身過を大事に掛ける。座敷數かぎりもなく客壱人に壱間づゝ渡しける。都にて蓮葉女といふを所詞にて杓といへる女三十六七人。下に絹物上に木綿の立嶋。を着て大かた今織の後帯是にも女かしら有て指圖をして客に壱人つゝ寢道具あげおろしのために付置ける十人よれは十國の客難波津の人あれば播州網干の人もあり。山城の伏見衆京大津仙臺江戸の人入まじり。ての世間咄し。いづれを聞ても皆かしこく共一分を捌き兼つるは独りもなし。年寄たる手代は我ためになる事をしておく。若ひ手代は惡所つかひ仕過しとかく親かたに徳をつはず。是をおもふに遠國へ商につかひぬる手代は律義なる者はよろしからず。何事をもうちばにかまへて人の跡につきて利を得る事かたし。又大氣にして主人に損かけぬる程の者はよき商賣をもして取過しの引負をも埋る事はやし。此問屋に數年あまた商人形氣を見及びけるにはじめての馬おりより葛籠をあけで都染の定紋付に道中着物を脱かへ。雪踏皮取すて新しき足袋草履鬢撫つけて咳楊枝誰にか見すへき釆躰をつくろひ。此あたりの名所見に行とて用を勤めし手代を案内につれける人。今迄幾人かして出られしためしなし。親かたかゝりの程なく親がたになる人は氣の付所各別なり。爰に着といなや面若ひ者に近寄いよ／＼跡月中比の書狀の通りと相場かはりたる事はないか。所〻で氣色はかはる物にて日和見さだめがたく。あの山の雲たちは二百日をまたすに風とは御らんなされぬか。當年の紅の花の出來は青苧は何程と入事ばかりを尋ね。干鮭のぬけ目のない男間なく上がたの旦那殿より身袋よしとなられける。いづれ物には仕やうの有事ぞかし。此鐙屋も武藏野のごく廣ふ取しめもなく。問屋長者に似て何國に内證あぶなかりしは。さだまりし貢錢とるをまだるく手前の商をして大かたは仕損じ損をかけぬる物ぞかし。問屋一片にして客の賣物買物大事にかくれば何の氣づかひもなし。惣して問丸の内證脇よりの見立と違ひ思ひの外諸事物の入事なり。それを実躰なる所帯になせはかならす衰微して家久しからず。年中の足餘り元日の五つ前ならではしれず。常には算用のならぬ事なり。鐙屋も仕合の有時來年中の臺所物前年の極

月に調へ置それより年中取込金銀を長持におとし空を明て是にうち入。十二月十一日さだまつて勘定を仕たてける。たしかなる買問屋銀をあつけても夜の寝らるゝ宿なり

日本永代蔵　目録

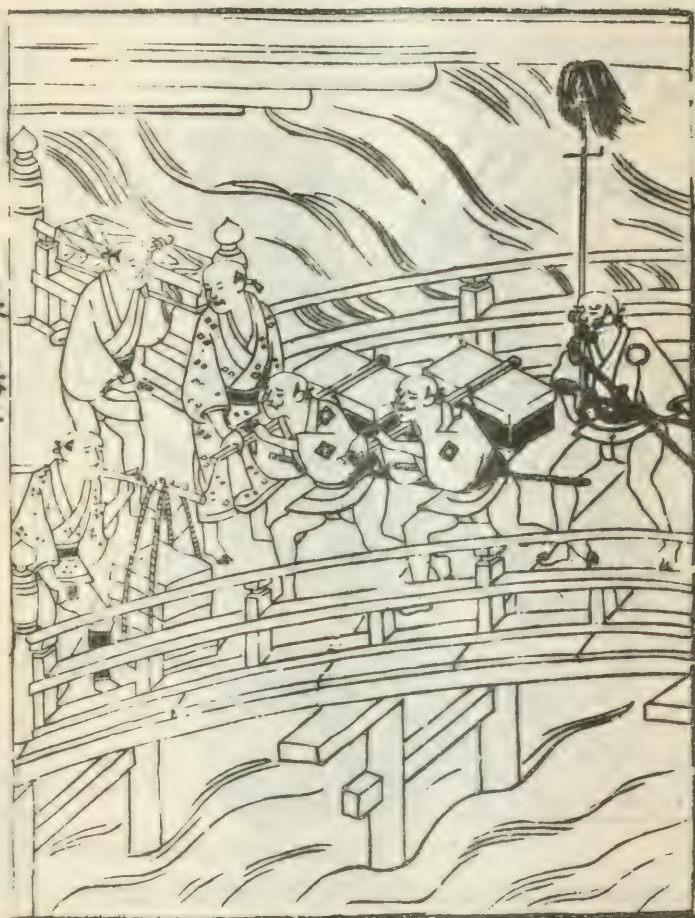
巻三

煎じやう常とはかはる問薬

四百四病は世に名醫ありて驗氣をえたる事かならずなり。人は智恵才覺にもよらず貧病のくるしみ是をなをせる療治のありやと家有徳なるかたに尋ねければ。今迄それをしらす養生さかりを四十の陰まで。うか／＼暮されし事よ少し見立おそけれ共いまだよい所あるは革足袋に雪踏を常住帶るゝ心からは分限にもなり給はん長者丸といへる妙藥の方組傳へ申べし△朝起五兩△家職弐十兩△夜詰八兩△始末拾兩△達者七兩此五十兩を細にして胸筭用秤目の違ひなきやうに手合念を入。是を朝夕呑込からは長者にならざるといふ事なし。然れ共是に大事は毒斷あり○美食淫乱絹物を不斷着○内義を乘物埊盛娘に琴哥かるた○男子に万の打囃○鞠楊弓香會連俳○座敷普請茶の湯数奇○花見舟遊び日風呂入○夜歩行博奕碁雙六○町人の居合兵法○物參詣後生心○諸事の扱請判○新田の訴詔事金山の中間入○食酒莨若好心當なしの京のぼり○勸進相撲の銀本奉加帳の肝入○家業の外の小細工金の放目貫○役者に見しられ揚屋に近付○八より高借銀先此通りを斑猫比霜石より怖敷口にていふも扨置心に思ふ事もなかれと少き耳に小語給へば是皆金言と悦び彼福者の教に任せ朝暮油斷なく所は御江戸なれは何をしたればとて商の相手はあり。珍敷見立もがなと日本橋の南詰に曙より一日立つくしけるに流石諸國の人の集り。山も更にうごくかごとく京の祇園會大坂の天滿祭にかはらず。每日の繁昌此御時君が代の道廣く通り町十二間の大道所せきなく此橋の上に馬乘一人出家壱人鑓壱筋朝から晩迄絶る事なく。され共人の大事にかくる物はおとさず錢を壱みいかな／＼目に角立ても拾ひがたし。是を思ふに佩につかふべき物にはあらず。兎角商賣に一精出し見んと心は働きながら手振てかゝる事は今の世の中に取手の師匠か取揚婆ゝより外に銀に成物なし種蒔ずして小判も壱歩もはへる例なし何とぞ只取事をと氣を付心を碎中に屋形／＼に行て殿作り仕舞大工屋根葺おのがひとつれに弐百三百人辰巳あがりなる高咄し逆髪にして天窓つきおかしく衣裏の汚着物袖口のきれたる羽織のうへに帶して間棹杖に突も有。大かたは懐手腰の屈みし後付共職人とは看板なしにしれける。跡より番匠童ゝ鉋木屑をかづかせけるに可惜檜の木の切ゝをちて捨る

をかまはず。是らまで大樣なる事天下の御城下なればこそと思はれ。是に氣を付てひとつ〳〵拾ひ行に。駿河町の辻より神田の筋違橋迄に一荷にあまる程取集め其まゝ是を賣けるに弐百五十匁手取して足もとにかゝる事を今迄しらぬ事の殘念と其後は日每に暮を急ぎ大工衆の歸りを見合其道筋に有程拾ひけるに五荷よりすくなき事なし。雨の降日は此木屑より箸を削て。須田町瀨戸物町の靑物屋におろし賣。箸屋甚兵衛と鎌倉河岸にかくれなく次第分限となりて。後は此木切大木となりて材木町に大屋敷を求め。手代ばかりを三十余人抱へ河村柏木伏見屋にも劣まじき木山をうけ。心の海廣く身躰眞艫の風帆柱の買置に。願ひのまゝなる利を得て幾程なく四十年のうちに拾万兩の內證金是ぞ若い時呑込し長者丸の驗なり。今は七十余歲なればすこしの不養生もくるしからじとはじめて上下共に飛驒紬に着替。芝肴もそれ〳〵に喰覺へ築地の門跡に日參して。下向に木引町の芝居を見物夜は碁友達をあつめ。雪のうちには壺の口を切水仙の初咲なげ

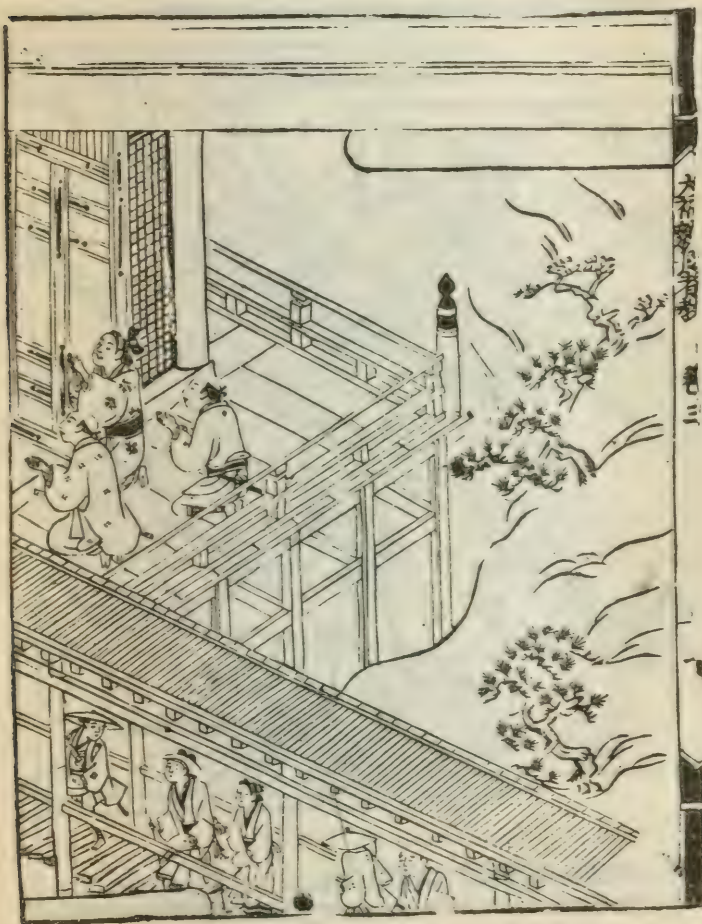
入花のしほらしき事共。いつならひ初られしも見えざりしが銀さへあれば何事もなる事ぞかし。此人前後にかはらず一生慥くは。富士を白銀にして持たればとて武藏のゝ土羽芝の煙となる身を知て老の入前かしこく取置。世に有程のたのしみ暮し八十八の時。聞傳へ舛掻をきらせ子共の名付親に賴。人のもちひ世のさたに飽て此人死光さながら仏にもならるゝ心ちせり。後の世も惡からしと万人是を羨みける。人若時貯して年寄ての施肝要也。迚も向へは持て行ずなふてならぬ物は銀の世中

國に移して風呂釜の大臣

國中の醫師見放既に末期の水今ぞ生死の海蛤貝にて入けるに是さへ咽を通りかね。いづれも手足を握り是〳〵西方極樂へ只一道に。とこへも寄ずに參る事を忘給ふな親仁様と進めければ。又中眼に見ひらき我は行年六十三定命さし引なしに浮世の帳面さらりと消て閻魔の筆に付かゆるに胸算用を極めければ。何をか思ひ残す事なし汝等過賄の種を忘れなと。云おかるゝも外の事

なく往生いたされしを各〻歎きを止て取置ける。扨も死では何も入ぬぞ帷子ひとつと錢六文を四十九日の長旅のつかひ地獄の馬に乗給ふも成まじきと終に行道をおもひやりける。其後親の家督を取てむかしにかはらず豐後の府内に住て萬屋三弥とて名高し万事掟を守り三年か程は軒端の破損も其まゝに愁を心根にふくみ命日を吊ひ慈悲善根をなし。独りの母に孝を盡せば何事も願ひに叶仕合なり。親仁遺言にすきはひの種を大事と申置れしが。菜種は油のしぼり草此種の事なるべしと。一筋に思入いつぞは此買置するか又は是を作らせて。分限になる事を明暮工夫めぐらしける。有時里をはなれし廣野荒て古代より眇〻と薄原を通りけるが。かゝる所を狼の臥戸にするも國土の費とおもひ付。竊に菜種を蒔散して心見けるに。其時節に花咲実がのりておのづからさへ是なれば新田に申請て十年は無年貢爰を切平して。所〻に幾村か人家を立つゝけ鋤鍬とらせ耕作させけるに。毎年徳を得て人しらぬ金銀溜りそれより上方への船商ひあまた手代にさ

ばかせ。西國にならびなき次第長者となりて何の不足もなし。其後母親同道して京の春に逢り。何國も花の色香に違ひはなくて。花みる人に違ひ有。おもしろの女薗の都や山も川もちらぬ花の歩行をみて。かなしやいかなる因果にて田舎には生れけるぞと我國元の事を忘れて毎日の遊興に氣を乱しける。され共限り有て歸るさに色よき妾者十二人抱て豊後に下り居宅を京作りの普請美を盡して軒の瓦に金紋の三の字を付ならべ四方に三階の寶藏廣間につゞきて大書院。六十間の廊下東西に築山南に湖を堀せ岩組西湖を移し。玉の砌石唐木かけ橋亭に雪舟の巻龍銀骨の瑠璃燈をひらかせ。瑪瑙の釘隠し青貝の椽鼻。眞綿入の疊に天鵞兎の縁を付其外の結構記し難し雪の朝を詠夏の夕涼み。玄宗の花軍をやつし。扇軍とて数多の美女を左右に分て其身は眞中に座して汗しらぬ姿を兩方より金地の風に。扇ぎ立られ風つよきかたの女になびきまげたる方の扇は。振取て池にうかめ扇ながしを慰の一景。むかしの眞野の長者も此奢には何としてかは及ぶま

じ内證は人しらねばとて天の咎も有べし。一家是を悔めど更に止事なし。年久敷手代棍帳を〆錢藏銀藏は渡して。三間に五間の小判藏ひとつ主人のまゝにもさせざるうちは其家たじろく事は思ひもよらざりしに。世は無常なり此男五十八の冬のはじめ霜の朝風といふばかりにむなしくなりぬ。其後は鑰ども請取て心まかせの奢を極め。我住國の水の重きを改め兎角都の水に增たるはあらじと。音羽の瀧のながれを毎日汲せ。先ぐりに幾樽か遙なる舟路を取よせ。手前に湯屋風呂屋を拵へ日毎に燒せける。むかし千賀の浦を六条に移され塩釜の大臣あり。是は都の水を桶に移されければ。風呂釜の大臣とぞ申ならはし。追付朝夕の煙絶にし事を待みしに案のごとく一年の暮に惣勘定せしに五千貫目余のさし引に壱匁三分本銀に不足出來そめ。夫より次第に穴明て千丈の堤も蟻穴よりもれる水に滅するごとく其身に惡事かさなり一命迄ほろび世に殘れる物は人の寶とぞなれり

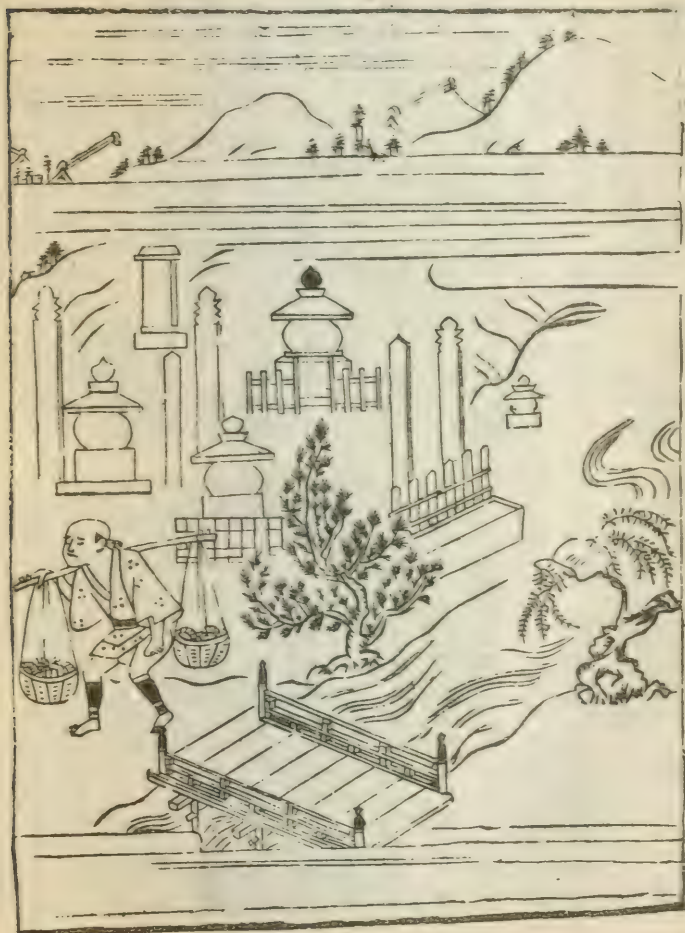
世はぬき取の觀音の眼

哥念佛の日暮しと云はむかし伏見の御上代の時諸大名の御成門軒をならべてかゝやき。金銀珠玉を鏤め何れの工匠か珊瑚を削なして。紅梅の枝に春を移し五色の浮雲をしづかに。龍はさながらに動き。虎はそのまゝかける勢ひ見ぬ唐士の二十四孝を越前の殿の御門に。あり〳〵と美形を彫物に此淸らなる事言葉にも伸がたし五十五万石三年の物成是に入けるとなり。彼京の鉦たゝき盂蘭盆の比勸進にまはりしが。朝日影御成門にうつろひしに是に氣をとられて詠めけるに。先大舜の耕作の所斑牛のいかな事作り物とは思はれず。淀鳥羽に歸る車をとゞめ己が友かと道づれをこひける。又老萊子が舞振足にはたらきて音曲の有やうに思はれ。手にふれし風車にあたりの草木もなびくがごとし。郭巨が堀出し金の大釜あれにて食も焼れまじ茶沸す事も勿躰なし。ほしや小判に碎き一生樂ふと世をわたるものと。それに心をとられ是に目をよろこばし実秋の日のならひにてはや暮ておどろき。願以此功德空袋かたげて都に歸るを見て人申ならはして日

暮坊と共する〳〵今に名たかし其時の繁昌にかはり屋形の跡は芋畠となり。みるに寂しき桃林にはな咲春は人も住かと思はれける。つねは昼も蝙蝠飛で螢も出べき風情なり。京海道は昔残りて見世の付たる家もあり。片脇は崩次第に人倫絶て一町に三所ばかりかすかなる朝夕の煙蚊屋なしの夏の夜蒲團もたずの冬を漸〳〵に送りぬ。葛籠吹矢の細工人はまだしも賤〳〵なり。取箒の屋根の輪屑の要刻み灸箸を削り荷繩なひ賣したればとて細長ひ命はつながれまじうき世に住に哀れ多し。町はづれに菊屋の善藏といへる質屋有しが。内藏さへもたず車のかゝりし長持ひとつ物置にも藏にも是を頼みにして此道をしるとて弐百目にたらぬ元銀にて。先繰に利を得て八人口を大かたにして渡世しける。此家に質置さりとてはかなしき事かず〳〵なり。降かゝる雨にぬれて古傘一本六分かりて行ば。朝食焼捨し跡まだ洗ひもやらぬ羽釜さげきて錢百匁かり行も有。八月にも帷子着たる女房がうす汚たる二幅ひとつに三分かりて身の見へすくをもかまはず行。また八十ばかりの腰かゞみ婆〳〵能生てから今年もしれぬ身をして。一日もかなしく兩手のない佛一躰さかな鉢ひとつ持てきて四十八匁かりの世やまた十二三のむすめ六つ七つの小坊主と昇階子ながきを跡向漸〳〵に舁てきて錢三十匁かりてすぐにかた見世にある黒米五合手束木買て歸る。扨もいそかしき内證しばし見るさへ身に應て泪出しに亭主は中〳〵心よはくてはならぬ商賣是程いやな事はなし。これにも請人印判吟味かはる事なく掟の通り大事に掛ける。千貫目かるにも判ひとつとわづかなる事に念入を思はれける。利といふ物つもれば大分なり此菊屋四五年に銀弐貫目あまり仕出し。なをひすらく人に情をしらず。足もとなる高泉和尚の寺にまいらず。祭にも五香の宮に參詣せず神仏の願ひいかな〳〵思ひ出しもせさる男。遠ひ初瀬の觀音を信心し俄にあゆみをはこぶを人の氣もありとくかはる物かと世間にて是さたぞかし。此寺の御開帳七日を古代より判金一枚づゝに極めおかれしを。菊屋弐貫目の身袋にて三度まで開帳すれば本願坊をはじめ一山に名を聞傳へまたもなき後生ねがひ古今に三度迄壱人しての開帳なき事申侍る。有時心をつけて戸帳を見しにかけまくも長竿にして一端つゞきの十端ならびを用捨もなくあげおろしに半ヾの外毀見ぐるしかりき。菊や申せしは我たび〳〵開帳せしに戸帳

かくきれ損じけるを寄進に新しく掛かへんといふ。僧中これをよろこひ都より金襴とりよせあらためける。そのゝち菊屋申は此ふるき戸帳を申うけ京の三十三所の觀音へかけたきといへば。安き事とてつかはしけるを殘らず取てかへる此唐織申もおろか時代わたりの柿地の小釣淺黃地の花兎紺地の雲鳳其外も模樣かはりぬ是みな大事の茶入の袋表具切に賣ける程に。大分の金銀とりて家榮へ五百貫目と脇から指圖違ひなし。觀音信仰にはあらず是をすべき手だてさてもすかぬ男。一たびはおもふまゝなりしが元來すぢなき分限むかしより淺ましくほろびて後には京橋に出てくだり舟にたより請賣の燒酎諸白あまひも辛ひも人は醉されぬ世や

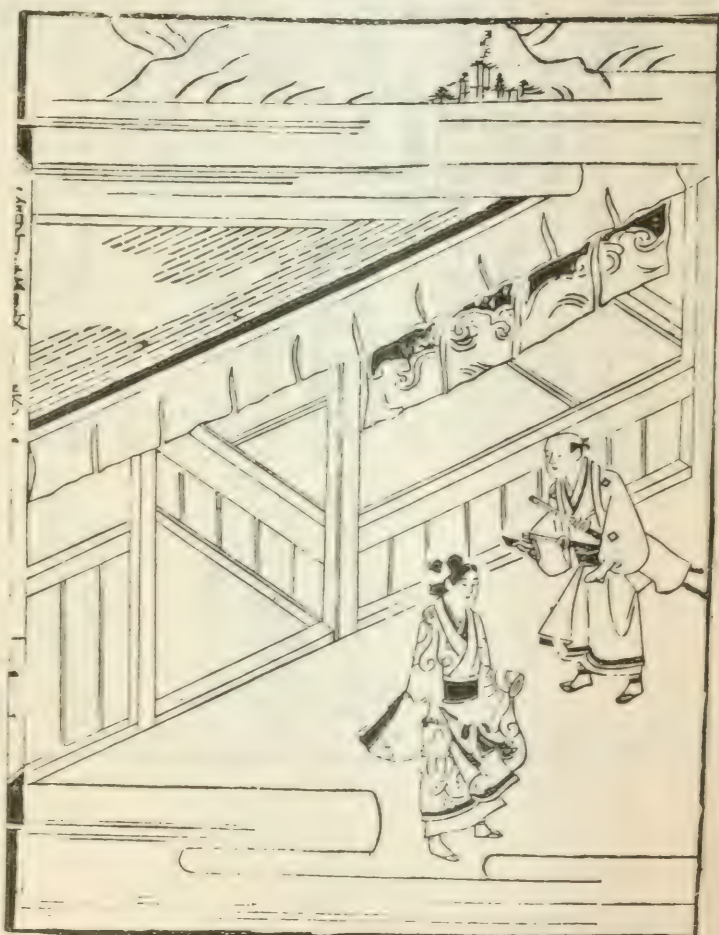
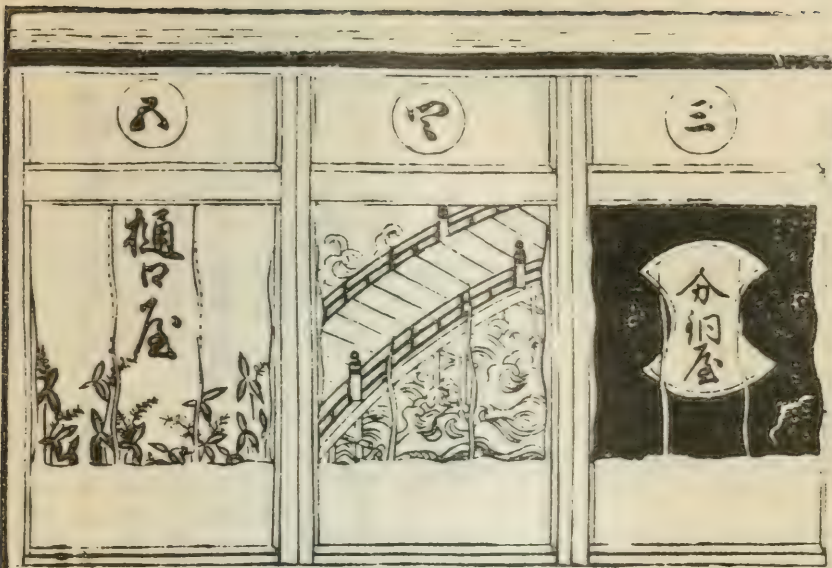
高野山借錢塚の施主

物には時節花の咲散人間の生死なげくべき事にあらず。然れ共命は養生の一大事なるに。毒魚と知ながら鰒汁是に風味かはらずして藻魚といふもの何の氣遣なかりき。女房は緣組のはじめより祖母になるまで手池にせしを無分別に水をへらしぬ。此貧取かへす事なく一生損にたつなれば人たしなむべきは是長命は其心にありと。堅作りの親仁わかひものともに異見を申せし。むかし難波の今橋筋にしはき名をとりて分限なる人其身一代独り暮して始末からの食養生殘る所なし。此人も男ざかりにうき世を何の面白ひ事もなく果られ其跡の金銀御寺へのあがり物四十八夜を申てから役に立ぬ事なり。され共年久敷內藏に隱れ世間見なんだ銀が人手にまはりて九軒の二日払ひの用にも立道頓堀の座拂ひのたより共なる。寶といふ字の消る程今は世のすれ者となりけると大笑ひせし。此しはき人は五十七癸の辰にてありしが。又癸辰の年辰の日の辰の刻に相果られしといへば是もふしぎの宏才なる人有て三世相命鑑を操けるに此男先生は鎌倉の將軍頼朝公より西行法師に給はりし銀の猫。値遇の緣にひかれてたま〳〵人界に生を受。その身は金ながらつかふ事もならず。人の子の物に成ける此はづなり。其金猫は西行しばし手にふれて里の童子にとらせける其猫ほしやと見もせぬむかしの物語にも先搔つき欲をまろめて今の世の人間とはなりぬ。分限は才覺に仕合手傳では成がたし。隨分かしこき人の貧なるに愚なる人の富貴此有無の二つは三面の大黑殿のまゝにもならず。鞍馬の多門天のをしへに任せ百足のごとく身を働て其上に身袋の

ならぬ是非もなし。天も憐み有諸人も不便をかくるなり。おのれがかせぎは疎畧して居宅を奇麗に作り朝夕酒宴美食を好み衣類腰の物を拵へ分際に過たる人附會。傾城狂ひ冶郎遊び尻も結ばぬ糸のごとく針を藏に積ても溜らぬ内證人の物を見せかけにて借込是を濟すべき分別なし。是は我と覺ての仕業手を出して昼盗人より悪し。末〻一度は倒るゝつもりに五七年も前より覺悟して。弟を別家に仕分て分散に是を遁れさし。京の者は伏見に名代を替ては屋敷をもとめ置。大坂の者は在郷の親類に田畠を買せ置ぬ。身の置所を先へ跡の虛殼を借錢のかたへ渡して古帳を枕にして横に寢てかゝるこそうたてけれ。町衆扱ひにかゝり年分に其家を立んといへばかへつて是を迷惑がりて外聞は灰まで渡し住家を立のき三月の節句を心やすく桃の酒を祝り。有時十壱貫目の分散にある物弐貫五百目課せ方八十六人毎日勘定に出合。中間事に始末する人なく遣日記に溫飩蕎麦切酒肴さま〴〵の菓子を好み半年あまり隙を費し取物はみなになして埒の明所は壱

人手前より四分五リンつゝ出してつくばひ。町内へ禮いふてまはるもおかしかりき。むかし大津にて千貫目借錢おひければ世になき事と申せしに。近年京大坂に三千貫目弐千五百貫目の分散いづれ遠國のちいさき所にはなひ事ぞかし。ならびなき大湊なればこそ借人もあれかるも是程迄は商人也手柄にも百貫目迄はかられぬ物といへり。むかし難波江の小嶋に伊豆屋といへる手前者自然と倒れ。正直の首をさげて詫言して財宝渡して六分半あり。殘る三分半はいつとても仕合次第に濟すべしと結構つくにたち退て生國伊豆の大嶋に行て親類を頼み日夜に世をかせぎ一たび元のごくにと思ひこみし所存より大分まふけて二たび大坂にのぼり。あつて過たる分散の殘り銀をゝく濟しぬ。それよりは十七年すぎぬれは國遠してしれぬ人もあり。此分の銀は太神宮へ御初尾にあげ。又六七人も死うせて子孫のなき人の銀は高野山に石塔を切て借錢塚と名付其跡をとふらひけるかゝる人前代ためしなき事なり

紙子身袋の破れ時

商賣ひだり前なる吳服屋忠助とてむかしは駿河の本町に軒ならべし中にも。花菱の大紋に家名をしらせ住國はおろかなく。東國北國にあまたの手代出見世をかざらせ次第に人まし内の賑ひ大釜に富士の煙の絶ず水瓶に湖水を湛へ。朱椀龍田のもみぢを散し。白箸むさし野に立霜柱のごとく。朝の繁昌夕に消てかくも又なりはつる世の習ひ其時節とはいひながら。亭主の心かけ惡敷か故なり此人親代にはわづかの身袋なりしか安部川紙子に縮緬を仕出し又はさま〱の小紋を付此所の名物となり諸國に賣ひろめ。はじめは壱人なれは卅余年に千貫目といはれける。其子には利發生れおとりて忠助家をしつて三十年あまり勘定なしの無帳無分別十露盤の玉にもぬけて春の柳の風に手前乱れて日當りの氷のごとくむかしの水に歸り。湯を呑べき薪もなくかやうにおとろへる事世にためしすくなし。惣じて金銀もうくるは成がたくてへる事はやし。忠助財寶みなになして今とな

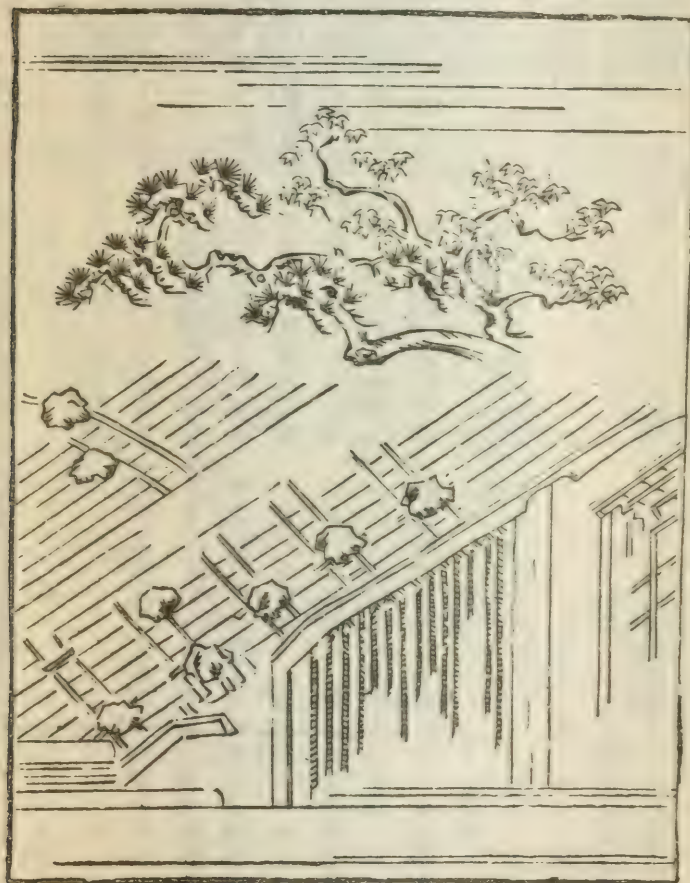
つて合点の行事おそし。是非なく淺間の宮の前なる町はづれにかりの世のかり屋すまゐもうたてく。人の情も家繁昌の時にて親類縁者の遠ざかればましてや他人は見ぬ貞も恨かたし。是程まで主をたをしたる手代共家名をかへて音信不通に見捨盆のさし鯖正月の鏡餅も見た事なくて。かなしき月日をおくり世上はいそがはしき師走にも隙にして。兩隣あつまり暮ちかき年せんさく。をの〳〵忠助をさしてこなたもわかひやうに見えてから。貞にふるめきたる所あり殊更成人の子共達。大かた中つもりにも違ふまじ四十八九か。忠助機嫌かはりて歷〻のお目違ひ私事當年三十九に罷成といふ。いづれも合点せずいかにしても三十九四十にしては請取かたし物はありやうに語り給へと皆く問つめられ。年は四十七なれ共三十九がまことゝいふ。其子細を聞ば元日に雜煮も祝はす初着物もせず。松かざりは思ひもよらずえ方が東やら南に梅が咲やら。暦さへもたずして年をとらぬ年が八年有によつて四十七ながら三十九しやと大笑ひして暮ける。我も遠

江の新坂あたりまでの路銀あれば忽に分限になる覺へ有と慥に申せは小家住ゐの人〻にはやさしく錢壱貫弐百つなき集め合力せしをよろこび。其座よりすぐに旅たちさだめてよろしき新類ありて歎きをいふか。又はむかしの賣がけに斷り申分別かどの道にも年とり物には成へしといつれも推量して待ける。忠助が心さし人の思はく違ひ。瀬にかはる大井川をわたりて佐夜の中山に立せ給ふ峯の觀音に參り。後世はともあれ現世を祈りていつの世には埋みし無間の鐘の有所を尋て。骨髓挫て我一代今一たびは長者になし給へ子共か代には乞食になる共只今たすけ給へと。心入ならく迄も通じて突にける。此鐘を突て分限にならは今の世の人末の世にには蛇になる事もかまふべきか。増て蛭の地獄なと恐しからず。愚なる忠助無用の路錢をつかひて爰に來にけり先さし當て是程の損になりぬ駿河に歸りて語れは聞人毎に其心からあれと指をさしける。此所は桑の木のさし物竹細工名人あり。忠助是を見ならひ鬢水入花籠をつくりて十三になる娘に府中の通り筋へ賣に出し其日をなりわひにをくりけるに。この娘親に孝なる事國中にかくれなし。然も其形うるはしく氣を留て見る程美女なり有時江戸の福人伊勢參宮の下向に是を見そめ。親もと尋ね貰ひ独り有子の娵になし其後忠助夫婦一家殘らす東武へ引こし子にかゝる時を得て一生樂〻とをくりぬ。美目は果報のひとつと是を聞つたへて隨分女子を大事に生育けれ共安倍川の遊女はしらすつゐに好女見た事なし。兎角美形はないものに極れり。是をおもふに唐土龐居士か娘の靈照女は悪女なるべし美形ならはよもや籠は賣せてはおかし

仕合の種を蒔銭
江戸にかくれなき天秤[illegible]
そなはりし人の身の程

茶の十徳も一度に皆
越前にかくれなき市立
身は燃杭の小釜の下

伊勢海老の高買
堺にかくれなき樋の口屋
絵は積物かつて見ぬくらして

祈るしるしの神の折敷

大繪馬掛奉る御寶前洛陽清水寺に。呉服所の何某銀百貫目を祈り其願成就して是に名をしるして懸られしと語りぬ。今其家の繁昌を見競〻一代に金銀もたまる物ぞと室町の是さたなり。人皆欲の世なれば若惠比須大黒殿毘沙門弁才天に頼みをかけ鉦の緒に取付元手をねかひしに。世けんかしこき時代になりて此事かなひがたし。爰に桔梗やとて纔なる染物屋の夫婦渡世を大事に正直の頭をわらして暫時も只居せずかせげ共。毎年餅搗おそく肴掛に鰤もなくて春を待事を悔みぬ。宝船を敷寝にして節分大豆をも福は内にと隨分うつかひもなく。貧より分別かはりて世はみな富貴の神仏を祭る事人のならはせなり。我は又人の嫌へる貧乏神をまつらんとおかしげなる藁人形を作りなして身に澁帷子を着せ頭に紙子頓を被せ手に破れ團をもたせ見ぐるしき有様を松餝りの中になをして元日より七種迄。心に有程のもてなし此神うれしき餘に其夜枕元にゆるぎ出。我年月貧家をめぐる役にて身を隱し様〻かなしき宿の借錢の中に埋れ。惡さする子共を詈るに貧乏神めとあて言をいはれながら。分限なる家に不斷丁銀かける音耳にひゞき積の虫がおこれり。朝夕の鴨鱠杉燒のいたり料理が胸につかへて迷惑。我は元來其家の内儀に付てまはる神なれば。奥の寢間に入てかさね蒲團釣夜着はんやの括り枕に身がこそばく。白むくの寢卷に留らるゝかほりに鼻ふさぎ花見芝居行に天鵞絨窓の乘物にゆられて目舞心に成もいやなり。夜は蠟燭の光り金の間にうつりてうたてかりき。貧なる内の灯十年も張かへぬ行燈のうそくらきこそよけれ。夜半油をきらして女房の髮の油を事かきにさすなどかゝる不自由なる事を見るをすきにて年〻を暮しぬ誰とふ者もなくなげやりにせられ我は貧よりおこり。なを〳〵衰微させけるに此春其方心にかけて。貧乏神を祭られ折敷に居て物喰事前代是がはしめなり。此恩賞忘れがたし。此家につたはりし貧錢を二代長者の奢り人にゆつり。忽ちに繁昌さすべし。それ身過は色〻あり。柳はみどり花は紅井と。二三度四五度繰返しあらたなる御靈夢覺ても是を忘れず。有難く思ひ込。我染物細工なるにくれな井との御告は正しく紅染の事なるべし然れ共是は小紅屋といふ人大分仕込して世の自由をたしぬ。それのみ近年

砂糖染の仕出し重ひ智恵者の京なれば大方の事にて利を得る事思ひも寄ずと。明暮工夫を仕出し蘇枋木の下染其上を酢にてむしかへし。本紅の色にかはらぬ事を思ひ付是を秘察して染込自ら歩行荷物して江戸に下り本町の呉服棚に賣ては登商に奥筋の絹綿とゝのへさす手引手に油断なく鋸商にして十年たゝぬうちに千貫目余の分限とはなりぬ。此人数多の手代を置て諸事さばかせ其身は楽を極めわかひ時の辛勞を取かへしぬ。是ぞ人間の身のもちやうなりたとへは万貫目持たればとて老後迄其身をつかひ氣をこらして世を渡る人一生は夢の世とはしらず何か益あらじ。されは家業の事武士も大名はそれ／＼國につたはりてねがひなし末〻の侍親の位牌知行を取樂〻と其通りに世を送る事本意にあらす。自分に奉公を勤め官祿に進めるこそ出世なれ。町人も親にまふけためさせ讓状にて家督請取仕にせおかれし商賣又は棚賃借銀の利つもりしてあたら世をうか／＼とおくり二十の前後より無用の竹杖置頭巾長柄の傘さしかけさせ世

上かまはず潜上男いかにおのれが金銀つかふてすればとて。天命をしらす人は十三才迄はわきまへなくそれより廿四五までは親のさしつをうけ其後は我と世をかせぎ四十五迄に一生の家をかため遊樂する事に極まれり。なんぞ若隱居とて男ざかりの勤をやめ。大勢の家來に暇を出し外なる主取をさせする を賴みしかひなく難義にあはしぬ。町人の出世は下〻を取合其家をあまたに仕分るこそ親方の道なれ。惣して三人口迄を身過とはいはぬなり。五人より世をわたるとはいふ事なり。下人壹人もつかはぬ人は世帶持とは申さぬなり。旦那といふものもなく朝夕も通ひ盆なしに手から手にとりて女房もり手くふなどいかに腹ふくるればとて口をしき事ぞかし　同し世すぎ各別の違ひあり。これを思はゞ暫時も油斷する事なかれ金銀はまはり持念力にまかせたまるまじき物にはあらず。我夫婦よりはたらき出し今七十五人の竈將軍大屋敷ねがひのまゝに七つの内藏九の間の座敷万木千草の外銀の生る名木はびこりて所はしかも長者町にすめり

心を畳込古筆屏風

時津風静に日和見乗覚て。西國の壱尺八寸といへる雲行も三日前より心えて今程舟路の慥成事にぞ。世に舟あればこそ一日に百里を越。十日に千里の沖をはしり万物の自由を叶へり。されば大商人の心を渡海の舟にたとへ我宿の細き溝川を一足飛に寶の嶋へわたりて見すは打出の小槌に天秤の音きく事有べからず。一生秤の皿の中をまはり廣き世界をしらぬ人こそ口惜けれ。和國は捉置て唐へなげかねの大氣先は見えぬ事ながら唐土人は律義に云約束のたがはず。絹物に奥口せず薬種にまぎれ物せず木は木銀は銀に幾年かかはる事なし。只ひすらこきは日本次第に針をみぢかく摺。織布の幅をちゞめ傘にも油をひかす錢安きを本として賣渡すと跡をかまはず身にかゝらぬ大雨に親でもはだしになし只は通さずむかし對馬行の莨菪とてちいさき箱入にしてかぎりもなく時花大坂にて其職人に刻ませけるに。當分しれぬ事とて下つみ手ぬきして然も水にしたし遣はしける

（この挿畫は「前篇」に入るべきもの）

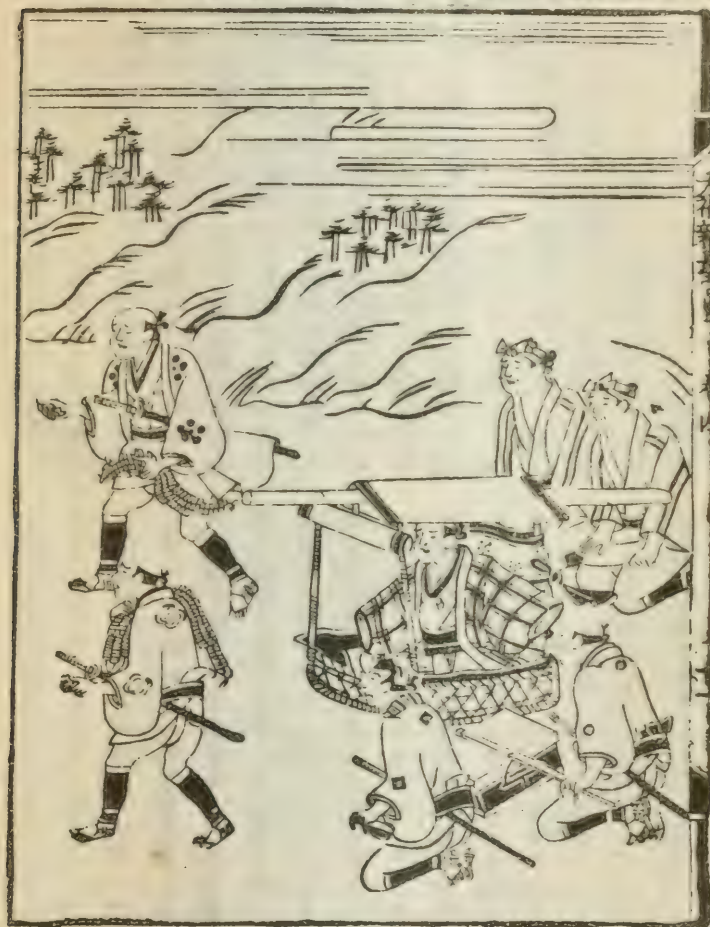
に。舟わたりのうちにかたまり煙の種とはならざりき唐人是をふかく恨み其次の年なを又過つる年の十倍もわつらへければ。欲に目のあかぬ人我おそしと取急下しけるに大分湊に積せ置て去年たばこは水にしめされ思はしからす。當年は湯か塩につけて見給へと皆〻つき返され自らに朽て礒の土とは成ぬ。是を思ふに人をぬく事は跡つゝかす。正直なれば神明も頭に宿り貞廉なれば仏陁も心を照す。兎角は天に任て長崎商ひせし人筑前の國博多に住なして金やとかやいへる人海上の不仕合一年に三度迄の大風。年〻の元手打込て殘る物とて家藏ばかり軒の松風淋しく。めしつかひの者も暇出して妻子も一日暮しのかなしき餓に何に取付嶋もなくなみの音さへ恐しく。孫子に傳て舟には乗まじきと住吉大明神を心誓言に立ある夕暮に端居して涼風を願ひ四方山を詠めしに雲の峯に立かさなり龍ものぼるべき風情定めなきは人の身躰我貧家となれば庭も茂みの落葉に埋れいつとなく雁の宿にして萬の夏虫野を内になし諸蟲の哀れなり。見越の

大竹より杉の梢に蜘の糸筋はへて。是をわたれば嵐に切れて中程より其身落て命もあやうかりしに又も糸かけて傳へばきれ。三度迄難義にあひしに終に四度めにわたりおゝせて間もなく蜘の家を作りて飛蚊の是にかゝるをおのか食物にして猶ゝ糸くりかへすを見てあれさへ心なかく。巣をかけおゝせて樂しむなればいはんや人間の氣短に物每打捨る事なかれと。是より思ひ付て居宅賣拂其時を見合せ少しの荷物を仕入。むかしにかはりて手代もなく我と長崎に下り人の寶の市にまじはり唐織藥種鮫諸道具見しに買はあがりを受るをしりながら。金銀に餘慶なく京堺の者によい事させて智惠才覺には天晴人にはおとらね共。是非なき革袋に取集て五十兩。爰の商人の數にはいらず。はかどらぬ筭用捨てわざくれ心になりて丸山の遊女町に行て全盛の時に身なし大夫を今宵ばかりを一生のおさめと以前の便を求め。花鳥といへるに逢初しよりあさからず常よりしめやかなる枕屛風を見しに兩面の惣金にして古筆明所もなく押けるがいづれかあだなるはなかりし。中にも定家の小倉色紙名物記に入たる外六枚見程時代紙正筆に疑ひなし。いかなる人か此太夫には送られしと欲心發りて遊興は脇になりぬ。それより明暮通ひなれて上手を仕掛しにいつとなく女﨟惱て我黑髮も惜からず切程の首尾になりて彼屛風貰かけしに子細もなくくれける。取あへず暇乞なしに上方にのぼり。手筋を賴み大名衆へあげて大分の金子申請て又むかしにかはらぬ大商人と成て眷屬あまた召つかひ。其後長崎に行て花鳥を請出し願ひの男豐前の浦里に有なれば其元へ金銀諸道具何に不足もなく拵へ緣に付れば花鳥限りもなく悅びこの御恩は忘れじと申ぬ。一たび傾城をたらすにといへど是らは惡からぬ仕かた其目利ぬからぬ男と世間皆是をほめける

仕合の種を蒔錢

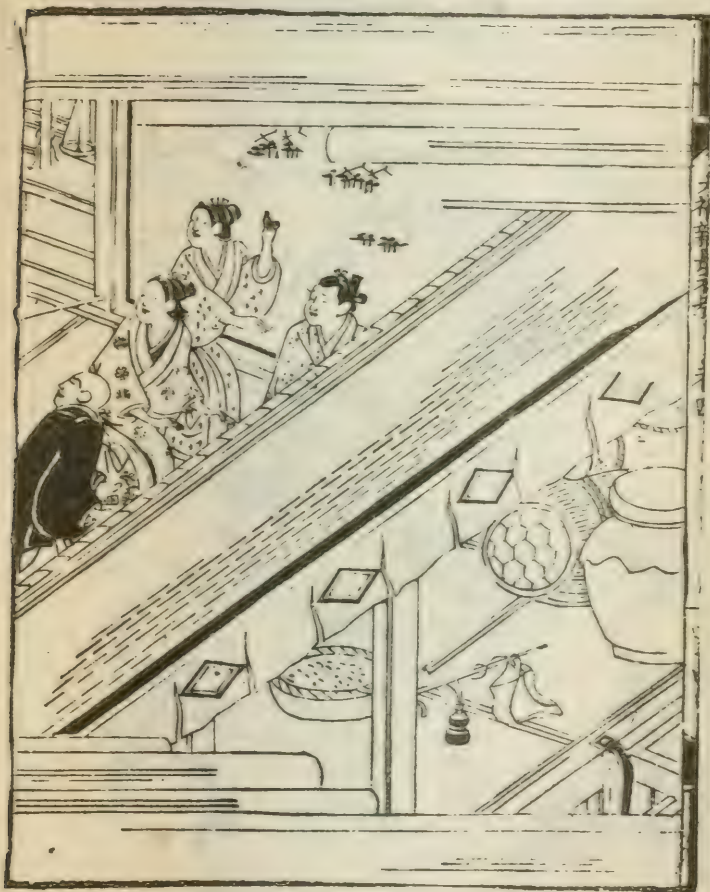
人は正直を本とする事是神國のならはせなり。伊勢の社のかろ〳〵敷百二十末社紙表具の神躰思へば淺猿なる事なれ共。何の僞りなき心を鏡に懸て人も曇らず殊勝に有がたく此秋津洲に住者歩をはこびぬ。さればいづれの世よりと云おかしげなる鉛錢百といふて六十つなぎにして扨もせちがしこき人心豐昌申もおろかなり。大ゝ神樂の寶の山なる福の神是を笑ひ給ふべし。爰の繁諸願成就十弐貫目此御初尾の絕る間も

なく。笙の笛貝杓子して世渡る海の若和布に眞砂の數をしらず其外末〻御師手前右筆のなき人は諸國檀那まはりのお定りの狀ひとつ錢壹匁つゝにして是を書て年中妻子はごくむ人何百人か共かぎりしられず。口過さま／＼に有所そかし人の氣をくみて商の上手は此國なり相の山の袖乞迄も心ながく道者の機嫌をとりてうへず寒からず。身に綃布をかざり連引の三味線に乘て淺ましや心ひとつといふ一節いつ聞ても替らず。此一里の間殊更に慰にもなれり。世に錢程面白き物はなし。あまたの講參りはあれ共終に此乞食のたんのする程錢とらせし人なかりき。思へは纔の事なるによろこばせたき物なり。嶋原正月買の庭錢はすれと京の人すぐれてしはしとお白石まく親仁もいへり。有時江戸の町人參宮せしに乘掛さのみかざらず。駕籠ぶとんも紫の目に立ずして供二三人召つれ。太夫殿の案內者に任せ山田を出し時新錢弐百貫調へから尻馬に付て間の山五十町のうち蒔散しければ。大道は土も見へず野も山もみな錢掛松かと思はれ立かゝりて拾へは松原踊の袖にあまり味噌漉よりこぼれてしばしは小哥撥音の鳴をやめて。いかなる長者に有やらんと其名を尋しに。武州攬町の邊りに分銅屋の何某とて人のしらぬ銀持なり世間には唐大名の見せかけ商賣おほし此人は內證のつよき事闇に鬼をつなぐがごとく。年越每に仕合かさなり廿一より三十五才迄卅四年に我とかせぎ出し金七千兩を一子にゆづりぬ。抑商のはじめは都傳內といふ芝居の近所に九尺間の棚借て錢見せを出し諸見物の札錢を賣けるに銀壹匁三匁のうちにて五厘壹分の掛込を見て少しの事ながらつもれば大分の利を取。次第に兩替屋となりて是楠分限根のゆるぐ事なし共隣にすぐれて利發なる男ありて烏を鷺の見せ物を拵へ一年は閻魔鳥とて作り物珍ら敷一日に五十貫つゝも取込又ある年は。形のおかしげなるを便乱坊と名付。毎日錢の山をなして俄に家藏求へき人はさもなく。今に奥山入海に心をなし自然淺黃色なる猿もがな。もしも手足の付たる鯛の有事もと水の池の世わたり消る事安し。惣じて役者子共の重銀は當座の化花ぞかし主川千之丞女がたして河內通ひの狂言一番を一日小判壹兩に定め一年三百六十兩づゝ取ぬるも伊勢へ引込死る時は昔の舞臺衣裳も殘らず。其時の榮花を樂しめる外なし。金銀溜て商人になるべき心掛しるにもあらず。其道〻をしる

事人の肝心なり。過にし酉の年諸道具迄も煙となし皆ゝ丸裸になりしが程なく以前のごとく酒屋は杉をしるしの門はかはらず。本町の呉服棚それ／＼の錦を餝り傳馬町の絹屋綿屋も同じ棚つき佐久間の面は萬の紙賣。舟町の魚市米柯棧の賣買尼棚の塗物問屋通り町の繁昌此御時なるへし風絕て雲靜に降照町は下踏雪踏の細工人白銀町の槌の音昔見し人其家職かはらず。此前日用取は其姿山伏は其良腫物切疵の膏藥賣は今も同じ聲。独りも身過をかへたるは見えず。貧者ひんにて分限は分限に成ける。是程ふしぎなる事なしと彼分銅屋見廻り置て語りぬ。廣き町筋に只壱人其時分銀拾ひてや手馴し珠数屋をやめて中橋に刀脇指の棚出して一度は榮て見えしが程なく今の鈍 昔の菜刀とさびて又もとの珠数屋を後生大事として命の珠をつながれ人にしつけたる道を一筋に覺てよしとぞ

茶の十徳も一度に皆

越前の國敦賀の湊は毎日の入舟判金壹

牧ならしの上米ありといへり。淀の川舟の運上にかはらず。萬事の問丸繁昌の所なり。殊更秋は立つゝく市の借屋目前の京の町男ましりの女尋常に其形氣北國の都ぞかし。旅芝ゐも爰を心かけ巾着切も集れば今時の人かしこく印籠ははじめからさげず。鼻紙袋も内懐に入しは手のとゞく事に非ず。此中にても錢を壱匁只はとられず盗人巾間もむつかしの世や兎角正直の頭をさげて當座の旦那あひしらひに。物買をまねき商上手の者は世をわたりかねず町はづれに小橋の利助とて妻子も持ず口ひとつを其日過にして才覺男荷ひ茶屋しほらしく拵へ其身は玉だすきをあげてくゝり袴利根に烏帽子おかしけに被き人よりはやく市町に出ゑびすの朝茶といへは商人の移り氣咄のかはかぬ人迄も此茶を呑て大かた十二文づゝなげ入られ日毎の仕合程なく元手出來して葉茶見せを手廣く其後はあまたの手代をかゝへ大問屋となれり。是迄は我はたらきにて分限に成人のほめ草なびき。暦ゝの乞聟にも願ひしに。壱万兩よりうちにて女房をよばす四十迄はお

そからすと當分の物入を算用して。銀の溜るを慰に淋しく年月を送りぬ。それより道ならぬ悪心發りて越中越後に若ひ者をつかはし。捨り行茶の煮辛を買集め京の染物に入事と申なし呑茶にに是を入ませて。人しれずこれを商賣しければ一度は利を得て家榮へしに天是をとがめ給ふにや。此利助俄に乱人となりて我と身の事を國中に觸まはり茶殻〳〵と口をたゝけば扨はあの分限さもしき心底よりと人の附會絶て藥師をよべと行人なくおのづから次第よはりに湯水のかよひ絶て既に末期におもむき。我今生のおもひ晴しに茶を一口と涙を漏す。目に見せても咽に因果の關居て。息も引入時内藏の金子取出させて跡や枕にならべ。我死だらば此金銀誰物にかなるべし思へは惜やかなしやとしがみ付かみ付涙に紅ひの筋引て皃つきはさながら角なき青鬼のごとし。面影屋内を飛めぐりて落入を押付れはよみがへりして銀を尋る事三十四五度に及べり。後には下ゞも愛想つきて物すごく病家にゆく人もなくやう〳〵臺所に大勢集り棒乳切木を手毎に持

て身用心をして二三日も音のせぬ時あまた立かさなりて見しに。金銀に取付眼を開し有様人皆魂なかりき其まゝ乗物にをし込。野墓に送りける折ふし春の日の長閑なるに。俄に黒雲立まよひ車軸平地に川を流し風枯木の枝折て。天火ひかり落て利助がなきからを煙になさぬ先に取てや行けん。明乗物ばかり殘りて眼前に火宅のくるしみ。をの〳〵にげ歸りて皆菩提心にぞ成にける。其後利介が跡に遠き親類をまねき是を渡すに聞傳へて身をふるはかし箸をかたし取人なし。下人共に配分してとれといへと更に望なしとて此家にて仕着の布子迄置て出れば。欲でかためし人もおろかなる物ぞかしせんかたなくて諸事賣払殘らず檀那寺にあげしに。思ひの外の仕合是を佛事にはつかはずして京都にのぼり野郎あそびに打込又はひがし山の茶屋のよろこびとぞなれり。利介相はてて後所〻の問屋をめぐり年〻の賣掛を取こそふしぎなれ。死失しとは知ながらむかしの形におそれてかるめなしに掛て濟しける。此事さたして利介が住る家居を化物屋

敷とて人只ももらはず崩るゝまゝに荒ける是らを見るに付たとへば利を得るにして工て置捨の質物万の似物。語りに合て敷銀の付女房をよび寺〻の祠堂銀をかり集め分散にて濟し。博奕中間山賣人参のつき付筒もたせ犬釣乳吞子を養てほし殺し川流れの髮の落取なといかに身過なればとて人外なる手業する事適〻生を受て世を送れるかひはなし。其身にそまりてはいかなる悪事も見えぬものなり。いと口おしき事なれば世間にかはらぬ世をわたるこそ人間なれ。是を思ふに夢にして五十年の内外何して暮せはとて成ましき事には非ず

伊勢ゑびの高買

生あれば食あり世に住からは何事も案したるがそんなり毎年世間がつまり我人迷惑するといへどそれ〳〵の正月仕舞餅突ぬ宿もなく数子買ぬ人もなし。肴掛に丹後鰤雉子をならべ。薪棚につみ重ね庭に米俵三月比迄の用意。払ひは廿日切に取かた計にして置し手まはし内證のよろしき所見えたり。又筭用

はあひながら賣掛を取集めて買掛を済す程せはしき物はなし。下〻の雪踏も足袋も大晦日の夜半過に調へけるは浮世の義理にさしつまりての事ぞかし。年切の下女でつちの仕着に買嶋の綿入に白裏付てとらせし親方は手前のならぬ節季のしるし春見ゆる事ぞかし。惣じて人の始末は正月の事なり。また堪忍のなる道具を改め内ぶしん疊の表替竈の上塗万事わつさりと氣を付一つ〳〵目にも立ずして物入年中の損なり。かしこき人は大方の事は春夏日の永き時する社よし。一年伊勢海老代〻きれて江戸瀬戸物町須田町麹町をさがして諸大名の御祝義なれば海老一疋を小判五兩代〻一つを三兩づゝに賣ける。其年は上方も稀にして大坂などにても伊勢ゑび弐匁五分代〻七八分づゝせしに春の物とて是非調て蓬萊を飾りける。江戸はゝきて町の人心ふてきなる所後日の分別せぬぞかし爰に攝泉境大小路の邊りに樋口屋といふ人世わたりに油断なく一生物の費になる事せざり。されば蓬萊は神代此かたのならはしなればとて高直なる物を買調て是

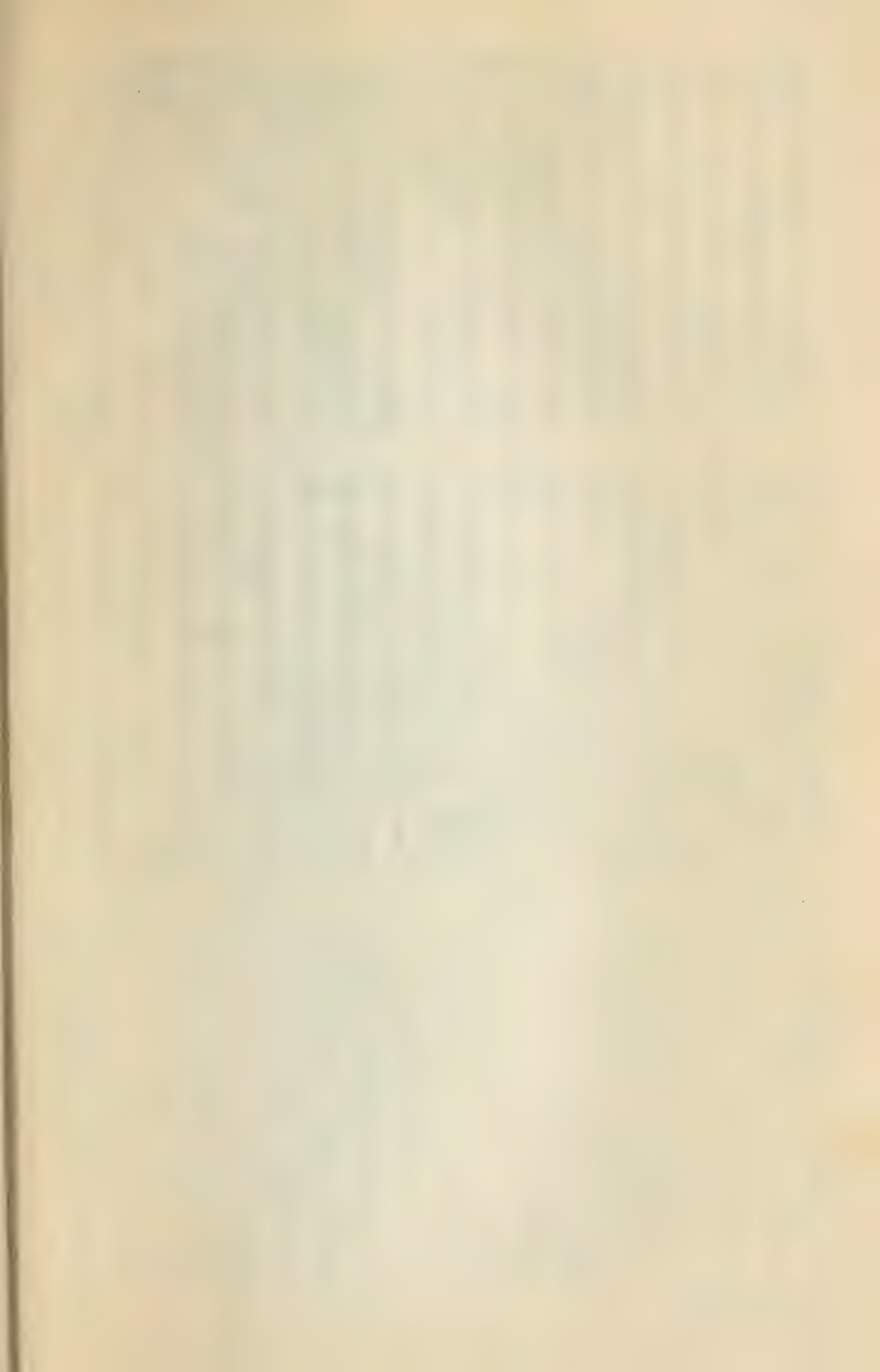
をかざる事何の益なし。天照太神もとがめさせ給ふまじと伊勢ゑびの代に車ゑび代〻の替に九年母をつみて同じ心の春の色才覺男の仕出しと其年は境中に伊勢ゑび代〻ひとつ買ずに濟しぬ。人の身持しとやかにして十露盤現にも忘れず内證細かに見かけ奇麗に住なし物毎義理を立て随分花車なる所なり。然れ共年のよる所にて外より行て住家は成がたし元日より大年迄を一度にもり付て其外は壱錢も化につかはす諸事の物年〻拵て慥成世帶なり。男は紬嶋の羽織ひとつ卅四五年も洗濯せず平骨の扇は幾夏か風に合ける女は又娌入着物共まゝ娘に讓り孫子迄も傳て折めも違ず有ける。三里違て大坂は各別けふを暮してあすをかまはず。當座〱の榮花と極め思ひ出なる人心是を思ふにほらなる金銀まうくる故なり。女は猶

大氣にして盆正月衣替の外臨時に衣裝を拵へ用捨なく着ぶるし程なく針箱のつぎ切となりて捨りし。境は始末て立大坂ははつとして世を送り所〻の人の風俗おかし。それもよき人は何國にてもよし。いかに利發皃しても手前のならぬ人の云事は聞者なし。愚にても福人のする事よきに立なれば闇からぬ人の身を過かぬる口惜き事ぞかし若時心をくだき身を働き老の樂みはやく知べしとうそつかぬ大黑殿の御託宣なり。去ながら今程能事をさせぬ事はなし。金銀昔に增り次第に沢山に成けるをどこへ取て置て見せぬ事ぞ合点のゆかぬ事也。是程人の出しかねる金銀を分もなき事には少しも遣ふ事なかれ。溜るはとけしなくへるははやし。有時夜更て樋口屋の門をたゝきて酢を買にくる人あり。中戸を奥へは幽に聞えける。

下男目を覺し何程がのと云六借ながら壱匁がのと云空寢入して其のち返事もせねばぜひなく歸りぬ夜明て亭主は彼男よび付て何の用もなきに門口三尺ほれと云。御意に任せ久三郎諸肌ぬぎて鍬を取堅地に氣をつくし身汗水なしてやう〳〵掘ける。其深さ三尺と云時錢が有はづいまだ出ぬかと云小石貝殼より外に何も見えませぬと申。それ程にしても錢が壱匁ない事よく心得て。かさねては壱匁商ひも大事にすべし。むかし連歌師の宗祇法師の此所にまし〳〵。哥道のはやりし時貧しき木薬屋に好る人有て各〻を招き二階座敷にて興行せられしに。其あるじの句前の時胡椒を買にくる人有。座中に斷を申て壱兩懸て三匁請取心靜に一句を思案して付けるを。去とはやさしき心ざしと宗祇殊外にほめ給ふとなり。人

はみな此どくの勤め誡ぞかし。我そも〳〵は少しの物にて一代にかく分限になる事内證の手廻しひとつなり。是を聞覺てまねなばあしかるまじ。たとへば借屋住の人は毎日其割にして家賃を外にのけ置べし借銀も此どく利を一ケ月も重ぬやうにまはせばいづれには勝手の商ひする物なり。借錢の濟しやうはもうけの有時其半分のけおき壱貫目の内へ百目つゝにてもあぐれば十年には濟事也算用なし打込置て帳〆にて合る人は手前うすくなる物ぞかし我物ながら小遣帳を付べし。買物は買ながら違ひ有物なり。商事せぬ日は少しにても鑓銀出す事なかれ。万事を通ひにて取事なかれ當座に目に見えねばいつとなくかさなり払ひの時分書出しに驚く事なり。又家質置程の身躰にならば外聞かまはず賣捨べし。迚も請歸した

る例なく利にたゝまれて只とらるゝやうになる物なり。まだも時所を去て分別かゆれば戸棚の一つも残る。なりわひの渡世は送る物なり境といふ所に俄分限者稀なり。親より二代三代つゞきて古代の買置物今に賣ずして時節を待は根つよき所なり。朱座落着鉄炮屋は御用人藥屋中間は慥に長崎へ取やり銀余所より借事なし。世間うちばにかまへ又有時はならぬ事をもする也。南宗寺の本堂庫裏に至る迄壱人しての建立殊勝なる事なり。心はともあれ風俗は都めきたり。此前京の北野七本松にて觀世太夫一世一代の勸進能有しに。金子壱枚宛の棧敷を京大坂に續ては堺へ取ける至穿鑿も是にてしれぬる。奈良大津伏見も人は持らねと此棧敷一軒も取ず申せば安き事ながら町人心は判金一枚にてかりさじき論じて所せきなく

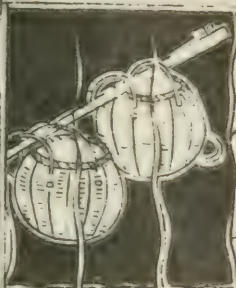
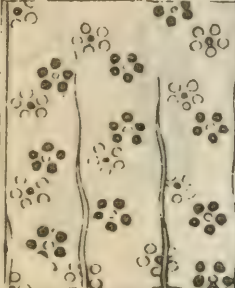
見物する事千秋万歳の御代にぞ住ける

日本永代蔵目録

巻五

一 御菓子所

廻り遠きは時計細工
長崎にかくれなき思案者
火を喰鳥も身をしりぬ

二

世渡りは淀鯉のはたらき
山崎にちらち出る小橋
大車は仕合を待や

第一　廻り遠きは時計細工

唐土人は心靜にして世の翔もいそかす。琴棊詩酒に暮して秋は月見る浦に出。春は海棠の咲山をなかめ三月の節句前共しらぬは身過かまはぬ唐人の風俗中／＼和朝にて此まねする人愚なり。年中工夫にかゝり晝夜の枕にひゞく時計の細工。仕掛置しに其子大かたに仕継其跡孫の手にわたりてやう／＼三代目に成就して今世界の重寶とはなれり。去ながら口過にはあはぬ筭用ぞかし。こまかに心を付てみしに是も南京より渡せし菓子。金餅糖の仕掛色〻せんさくすれ共終に成がたく。唐目壹斤銀五匁つゝにして調へけるに。近年下直なる事長崎にて女の手業に仕出し。今は上方にも是をならひて弘りける初の程は都の菓子屋さま／＼心を碎きしに。胡麻壹粒を種として此ごとくなれる事をしらざりき。是をそも／＼智恵付しは長崎に纔なる町人。二年あまり心をつくし唐人に尋しに更に覺えたる人あらずして氣をなやませける。律義なる他國にもよき事は深く秘すとみへたり。胡椒粒にも沸湯を懸て渡しければ其木つき見た人もなく何程か蒔てもはへ出る事なし。有時高野山にて何院とかやに一度に三石蒔れしに。此内より二本根ざし蔓て今世上に多し。此金餅糖も種のなきにや胡麻より砂糖をかけて。次第にまろめければ第一胡麻の仕掛に大事あらんと思案しすましまづ胡麻を砂糖にて煎じ幾日もほし乾て後煑鍋へ蒔てぬくもりのゆくにしたかひごまより砂糖を吹出し自から金餅糖となりぬ胡麻壹升を種にして金餅糖貳百斤になりける。壹斤四分にて出來し物五匁に賣ける程に年もかさねぬ内に是にて貳百貫目仕出しぬ。後には是を見習ひ家毎に女の仕事となせば。此男菓子をばやめて小間物見せを出しなを才覺の花をかざり商賣に身をなし。其一代に千貫目持とはなりぬ。日本富貴の寶の津秋舟入ての有さま糸巻物藥物鮫伽羅諸道具の入札年〻大分の物なるに是をあまさず。たとへば神鳴の犢鼻褌鬼の角細工何にても買取世界の廣き事思ひしられぬ。國〻の商人爰に集る中に京大坂江戸堺の利發者共萬を中くゝりにして雲をしるしの異國船になげかねも拾らずそれ／＼の道にかしこく。目利をしるにたがはず金銀すぐれてもうくる手代は筭用は合てつかふ事にかしこく律義に構て始末過たる若ひ者は利を得る事にうとし。兎角よい事

ふたつはない物ぞかし。長崎に丸山といふ所なくば。上がたの金銀無事に歸宅すべし。爰通ひの商ひ海上の氣遣ひの外何時をしらぬ戀風おそろし。雨ふりて物淋しき夕暮に人の手代あまた寄會銘〻の親方分限のなりたてを語りけるに。其種なくて長者になれるは独りもなかりき。先江戸手代の咄しけるは。我らか主人は傳馬町にて纔なる身躰なりしが。さる大名の御厄落しの金子四百三十兩拾ひしより段〻大銀持になられしとかや。又京の手代の語りけるは私の親方は少しの人なるが世渡かしこく世間にせぬ事ならではと葬礼のかし色ゑぼし白小袖紋なしの袴駕籠も拵て俄の用を調へ。此損料銀積て程なく東山に樂隱居を構へ人の目に三千貫目との差圖さのみ違ふまじ。扨大坂の手代云けるは拙者が旦那は人に替り定る女房家主なし。是内證の物入をかんがへ持給はぬかと思へばそれには非ず。一代後家をせんさくして。彼是年ふるうちに形は醜きをかまはず。むかし長持ひとつの思ひ入案のごとく臍くり銀三十貫目是より商賣替てちいさ

き紙屋も生薬屋になりやすく。今弐千貫目のふり廻し其時の家の風たかうふかすも出世の町人しがられず。何れを聞ても大分限の始常にては及ひがたし。皆一子細つゝ各別の替り有。此所唐物の買置勝て安き相場物の年累ても損せぬ物買置て利を得ぬ事なし。有人龍の子の弐尺餘り成を金子廿両に求めはや十年も過て少逞なりて氣遣絶す。又火喰鳥の卵一つ判金壱枚に買て是を復させ炭を喰事疑なし。いかに珍敷とて此買置國土の費なり

【第二】世渡りには淀鯉のはたらき

人の稼は早川の水車のごとく夜昼の流れも七十五里につもり有て。年波のせはしき世の事筭者も是をつもれり。大節季の闇事は秋の比の月夜よりしれたる事を人皆さし當りて是を驚きぬ。前廉より商人は氣を働らかせ職人はそれ〳〵の細工を取いそげ共必す日數延て當所の違ふ物ぞかし。又賣掛もたとへは十貫目の物みつ壱ぶんにして三貫目と請払ひすれば世間に尾を見せず狐よりは化すまして世をわたる事人の才覺

也。商ひ功者なる人のいへり。掛銀は取よきから集る事なり。いつにても手の物にして残し置。思ひの外の隙入あるひは留守とてたび〳〵足をはこびぬ。惣して掛乞の無常を観ずる事なかれ。入相の鐘袋に心玉を籠て言葉つき奇麗に顔愧しく作りて。廣敷の中程に腰掛てたばこ吸ず茶呑ず。內義笑顏して咄し仕懸るにも聞ぬふりして。肴掛の鰤雉子に目を付て當年のお仕舞は、庭に三石地米と見えました。いつもよりはやき餅つき鍋の蓋迄も新敷なりお娘子の正月小袖紫の飛鹿子に紅裏是でこそ春なれ私らは盃のごとく胸が踊りて松原越て門餝りの山草一葉数子ひとつ今に調もせす忰子が去年の手織嶋の袷にせめて木綿入てと思ふさへ成がたきに。こなたを見る時は長者といふて外になし。此やうなる御仕舞江戸にはしらず京にも有まじと家の宜しき事ばかり申て六かしうかゝれば。外をさし置それから濟す物ぞかし。折ふしの寒きとて掛乞宿にて酒を呑湯漬飯をくふ事必ずせぬ事といへり。又借錢の渕をわたり付て幾度か年の瀬越をしたる人のいへり。世の習ひにて買掛する事互に合点づくなり。たとへば新米壱石六拾目の相場の時も六十五匁にしてしかも下米をわたしぬ。油も壱升弐匁の折から弐匁三分に仕掛られ此外味噌酒薪萬をかくのごとくなれば。年中人奉公して勝手迷惑するにつもりぬ。払ひ方はすこしの物から濟し大分の所を明置物なり。手前に銀子のたまり有共大年の夜に入て渡すべし大かた退屈して松の內と云断りを聞届。錢の仕かけ銀のかる目もかまはず。拾ふた物の心ちして手に握ながら門にはしり出。扨もうたてや此家へ重て商いたさじと心誓み立ても。商賣のならひとて年明れは又忘れた昔になりぬ。是本意にはあらず內證のならぬより思ひの外なる悪心もおこりし。爰に山城の淀の里に山崎屋とて身業の種は親代からの油屋なりしが。家職の槌の音を嫌ひ。無用の奇麗好此家の福の神は塵にまじはり給ひしに。竹箒に恐て出させ給ふにや。次第に淋しくなりて毎年銀高へりて自ら槌碓の音も聞ぬやうにいつとなくともし油も絶ぬ。俄に昔の寳寺を祈る甲斐なく。手と身になりての思案何共埒の明ぬ世渡り。小橋の下に魚はあれど網なふて渕を覗き弥陀次郎か跡たれて發心もならざれば。菟角身を捨てかせがば遲牛も淀車の廻り合せよくは二度家の榮へ行事もと商の道替て鯉鮒荷ふて京通ひ淀の川魚名物とて。殊更に

賣払ひ人も面を見しりて。淀の釈迦次郎と異名を呼て用ある方には此者をまつ程になりてから。淀の里より手振て行て丹波近江より都にはこぶ鯉鮒請て一日にかぎりもなく賣ける程に風味各別といひなして同じ鯉鮒を外の者のは買ざりき。商人は只しにせが大事ぞかし。其後さしみを作りて盛賣に五分三分にても自由調へければ京は臺所の事せちかしこく人振舞にも是にて埒を明。次第に時花は其程なく分限になりて。金銀蒔ちらして兩替の見せを出しあまたの手代を抱へ此家繁昌の時は昔の鯉賣の事はいひ出する人もなく。風俗も自から都めきて新在家衆の衣裳をうつし。油屋絹の諸織をけんぼう染の紋付袖口薄綿にしてみつ重ね小妻高からず裙長く。同じ羽織ゆたかに見えて歴々とはいはでしれける。たとへば公家のおとし子大名の筋目あればとて昔の劔の賣喰運は天に具足は質屋に有ては時の役には立がたし。只智恵才覚といふも世わたりの外はなし。一年の暮程世上の極とて愧しき物はなし。それを油断して十二月中比過よりの分別は

をそし。何となき宮寺さへ御祈念の守ふだ年玉扇の用意するなど。まして工商の家に十三月なる皃つきかまへ貧乏花盛待は今の事成べし。大かた成年を越てこそ春になりての心もよけれ。藥代は覺えながらやらずに小者が布子に手染の薄色仕立て着る程せはしき內證我世なればとて面白からず京の町も様〳〵の年の暮初春の哥案じけるなど石流王城の風俗なれ共。かく豐なる人は稀にして悲しき渡世の人數多なり。鯉やが手代自分商に少しの米見せ出して纔五貫日の元銀大豆粉にくだきたるやうに方〻に賣懸是を取集けるに小家がちなる世帶をみれば無常の發りぬ。はや極月も廿八日然も小の晦日なるにけふと明日との物前さもいそがはしき片手に下機に擔一端是を織颪して正月仕舞の百品にも心當。又有家に行ば古鉄買を呼入鏡臺の金物 銅 網の鼠取禁中熊手壱本爪をれの五德ひとつ取集めてから錢百三十に直段付捨て行。夫婦人の聞共しらず借錢の分は始から濟する心入にあらず。錢五百天から降がなゆるりと取年男と哀やいたいけ比の娘今いくつねてから正月じやと云を米の有時が正月よと白眼形のおそろしく門口より掛も乞ずに立歸り。又有家に入ば公事たくみなる女うすき脣を動し。こなたから米の銀さい〳〵の御使。かるも世の習ひなるに扨もむごひ言葉つかひ。首引ぬいても今取といはれしを聞れましてから。亭主は震つかれまして今に枕あがりませぬ。四匁五分で首をぬかるゝは口惜き事と大聲あげて啼ば。とやかく論もむつかしければ隨分養生めされ命があらば春のせんさくと云捨にして歸り又さる家に行ば。淺黃の上を千種に色あげて袖下につぎのあたりし布子に御三寸進じて悅び。是はかみのかたき着物かな。此十七八年も冬中は人の藏に有て爰へもどりて正月をする事めでたいと云所へ行かゝりて筭用しませうといへば。拾八匁二分の書出しに壱匁六分數ひとつと書付して然もつきの惡き銀をこなたへ懸て置ましたいやならいやになされと猫の蚤見てあしらひもせねば。是もぜひなくとらぬがそんと歸る。それより又有方に行に。男は宿を出て十人並なる女髮かしら常よりは見よげに帶も不斷を仕替薄雪伊勢物語の草紙取廣げ掛乞あまたと打まじり。春はどの芝居はやるべしと。扨もゆるりとしたる有様是の主は何かたへと問ば年寄女房が氣にいらぬとて置去にしてゆかれましたと別して笑ひかゝる。暇とらしやれ請取手は我

の人のとじやれて懸帳は心に消て歸る。人程賢て愚なる者はなし。借錢の宿にも樣々の仕掛者有。油斷する事なかれたとへは萬の賣掛する共其人と次第に念比にならぬやうに常住の心入商人のひみつ也。親敷成て能事もあれとそれは稀なり。敷銀にして物を賣共前より殘銀かさむ時は見切て是を捨べし。それにひかれて後は大分の損をする事みな人先の見えぬ欲からなり。此米屋も當座銀にして俵なしにはかり賣の四五年は仕合のかさなりけるに。有時西陣の絹織屋へ俵米賣初置替の約束も年々かさみて筭用はあひなからその銀ふさかりて手まはしなりかたく。後は碓の音たえて釣掛升のみ殘れり。掛商ひには分別有へし

【第三】大豆一粒の光り堂

鑛の土割手づからに畑うち女は麻布を織延。足引の大和機を立東あかりの朝日の里に川ばたの九介とて小百性ありしが。牛さへ持ずして角屋作りの淺ましく住なし幾秋か壱石二斗の御年貢をはかり五十餘迄同じ皃にて年越の夜に入てちいさき窓も世間並に鰯の首柊をさして。目に見えぬ鬼に恐れて心祝ひの豆うちはやしける。夜明て是を拾ひ集め。其中の一粒を野に埋てもし煎豆に花の咲事もやと待しに物は諍ふまじき事ぞかし。其夏あを／＼と枝茂りて秋は自から実入て。手一合にあまるを溝川に蒔捨毎年かり時を忘れず次第にかさみて。十年も過て八十八石になりぬ是にて大きなる灯籠を作らせ初瀬海道の闇を照し今に豆灯籠とて光りを殘せり。諸事の物つもれは大願も成就する也。此九助此心から次第に家榮へ田畠を買求め。程なく大百性となれり折ふしの作り物に肥汁を仕掛間の草取水を搔けれは自から稻に実のりの房振よく木綿に蝶の數見えて人より德を取事是天性にはあらず。朝暮油斷なく鋤鍬の禿程はたらくが故ぞかし。萬に工夫のふかき男にて世の重寶を仕出しける鉄の爪をならべ細攫といふ物を拵へ土をくだくに是程人のたすけになる物はなし。此外唐箕千石通し麥こく手業もとけしなかりしに。鉾竹をならべ是を後家倒と名付。古代は二人して穗先を扱けるに力も入ずしてしかも一人して手廻りよく是をはじめける。其後女の綿仕事まだるく殊更打綿の弓やう／＼一日に五斤ならては粉馴ぬ事を思ひめくらし。もろこし人の仕業を尋ね唐弓といふ物はじめて作出し。世の人に秘して横槌にして打ける程に。

一日に三貫目づゝ雪山のごとく繰綿を買込あまたの人を抱へ打綿幾丸か江戸に廻し四五年のうちに大分限になりて大和に隠れなき綿商人と成平野村大坂の京橋富田屋錢や天王寺屋何れも綿問屋に毎日何百貫目と云限りもなく攝河兩國の木綿買取秋冬少しの間に毎年利を得て三十年餘りに千貫目の書置して其身一代は樂と云事もなく子孫の爲によき事をして八十八にて空しくなりぬ。死光りのして折しも十月十五日淨土は願ひのまゝに野邊の煙になして。それ百ケ日も過行ば遺言の通りに有原寺の法師を證據に御非時の上にてゆつり狀の箱を開て見しに。有銀一千七百貫目一子九之助に相渡しなを家屋敷諸道具の義は書載に及ばす。扨親類のかたへそれ〳〵の所務分の書付讀しに三輪の里の姨の方へ手織の算くつしの木綿袷ひとつ紬地の首卷桑の木の鐘木杖壱本吉野の下市に住し弟の方へ三星小紋の布子にもしの肩衣是を送るべし。岡寺の妹に花色の布子に黒き半襟のかゝりしを一つ。生平の帷子添てとらすべし同姪に病中下に敷たる立嶋

の蒲團中柑子の革足袋一足。是は縫ちゞめてはくべし。唐竹の煙管筒日野絹の頭巾此二色は薬師の中林道伯老へ形見なり。柹染の夏羽織袖の鼠喰を見えぬやうに継を當。寺同行の仁左衛門殿へ進ずべし。家久敷手代二人有けるに壱人には置ふるびし十露盤壱丁とらせける。又壱人にはつかひなれし秤壱丁譲りける。書置見ぬうちは頼もしく何れも開くを待兼しに。いかな／＼金銀の事は壱匁書付なくてをの／＼飽果手前のよき親類も錢銀の便りにはならぬ物と今迄洒せし涙をやめて此家を見限り我里／＼に歸りぬ千七百貫目の銀は一代の始末にて舒しければ一門はしがれはとて沢山にやる筈もなし。此九助一生絹物肌に着ざる印は此度の改めにてしれぬ。四十二の厄年に絹の下帯一筋はじめて買れしが。少しも汚れめつかず其まゝに有ける。親仁の身の廻りとては右の通りの外なく藤巻柄に胡桃の目貫の相口一腰熟革横ひだの巾着に。鹿の角の根付長門練の無地の印籠是ならでは世間道具ひとつもなかりし。九之助是を淺ましく思ひ。はや遺

言狀を背き親類手代迄もそれ〳〵に銀子を分とらせけるを親とは各別の心ざしと人皆悦び出入申。むかしに替らず商賣するうちに有時多武峯の麓里二王堂と云所に。京大坂の飛子の隱家をしるべの人にそゝのかされ。爰にかよふ事つのりて戀の二道をかけ奈良木辻狂ひも程なくいやになりて今の都の和國もろこし迄も引舟まかせに買つめやむ事なきを母親の歎きて。十市の里より色よき娘よびむかへしに。分里の美形を見なれたる目なれば中〳〵是にてとまらぬ事を思ひとなり。母人も終に果られし後。異見云人もなくて萬事を捨て年久敷さはぎぬ。其後は下〳〵迄も見かぎりて。奉公外になしける。され共夫婦の中にいつ共なふ男子三人有て。家継は氣遣ひなかりしに。いよ〳〵九之助酒婬のふたつに身をせめ八九年のうちに賴みすくなき身となつて。三十四の年に頓死驚くに甲斐なく無常野に送りける九之助も身の程は覺悟して兼て書置したゝめ置しを。手代共あつまり若年の人〳〵なれば跡の事共心もとなし金銀はいづれもの中へ預りかた〳〵御成長の時分相渡し申べしと心底殘らぬ內談石流むかしのよしみと所の人〳〵是を感じ先〳〵書置開て見しに。皆〳〵橫手をうちける社道理なれ。有銀千七百貫目はつかひくづし。是は借銀の書置興を覺しける。京井筒屋吉三郎殿小判弐百五十兩かり有。是は惡所にて金子の入事俄なれば。借用して恥をすゝぎければ。義理のかり金なり。是は惣領九太郎成人の後隨分かせぎ出し濟すべし大坂の道頓堀にての遊興の分の立ぬ事一つ書にしてあるなれば。是は九二郎濟すべし此外所〳〵買かゝり纔三十貫目ばかりなれは。是は九三郎寄〳〵に濟べし。家屋敷諸道具は所のさし引に分散して相渡すべし跡の吊ひは後家にさすべし書置仍而如件

【第四】朝の塩籠夕の油桶

是やこなたへ御免なりましよ鹿嶋大明神さまの御宣託に人の身袋は動ともよもやぬけじの要石商神のあらんかぎりはとの御詠哥の心は惣じて產業の道朔ぐに追付貧乏なしと言觸がいふてまはりしに正直の耳にはさみて壹匁の錢をもあだにする事なかれ。むかし靑砥左衞門が松炬にて鎌倉川をさがせしも世の重寶の朽捨る事を惜ての思案ふかし。それは西明寺の御時にて松櫻梅を切て薪やをしても抓取のある世なり。今は銀がかねを設る時節なれば中〳〵油斷して渡世はなりがたし。爰に

常陸の國に其身一代のうちの分限十万兩の鏐が原と云所に日暮の何がしとて棟高く屋作りして人馬あまた抱へ田はた百町にあまり家榮て不足なし。すゑ〴〵の里人を憐慈悲ふかく此人所の寶と村の草木もなびきける。始は纔なる笹葺に住て夕の煙細く朝の米櫃もなく。着類も春夏のわかちなく只律義千萬に身をはたらき夫婦諸共にうき時を過しぬ朝は酢醤油を賣。昼は。塩籠を荷ひ夕ぐれは油の桶に替り夜は沓を作りて馬かたに商ひ。若き時より一刻も徒居をせず。毎年内證よろしくなりて五十余迄に錢三十七貫延しける。此男商賣に取付て此かた一錢も損をしたる例なく年〴〵に利得を求めたれ共元すこしの事なれば金子百兩になる事中〴〵むつかしく漸百兩に積てそれより次第に東長者となりぬ。然も男子ばかり四人ありて何に不足もなし。此所は江戸より程ちかければ此人の頼もしき事を聞及び。長浪人の身を隠しかね。筋目有かたより狀を添られ鏐の里に行てひたすら頼みけるに此男心ざし深く葉葺の庵を渡して扶持を分置け

るに。後は七八人も有て物かしましけれど。牢人うれかたき世なればいづれも是非なく里の月日をかさねぬ。此中に森嶋權六といふ男すこしこびたる者にて學力あれば。道を忘れずかくやつかいになれる恩賞にせめてはと思ひ。四人の子共に四書の素讀をさせけるは殊勝なり。又木塚新左衛門といふ男は中むす子を進め三野色道をおしへ大分の金銀をつかはせける。宮口半内と云男は小刀細工きゝければ卯木の耳搔鼠の作り物仕出して明暮油斷なく情に入。江戸の通り町に遣はし五六年に銀子ためけるは此時にいたりての才覺人なり。又大浦甚八といふ者は小哥小舞に氣を移し。後には自から拍子きゝて人の爲程の事習ひ得ずといふ事なし。又岩根番左衛門と云人は其さますぐれて大男髭生て眼すさまじく。使役にしても三百石が物は見えたり。然れ共此人形に似せぬ心入。佛の道にかしこく身をせゝる蚤を殺さず足下の蟻を踏ず正直の頭ばかりは恐ろし。又[illegible]左衛門と云男は此身に成ても鉄炮を殘し置。無用の盜鳥野山の狼を殺し鞘

（との挿畫「第五」

谷武勇遂。年中我まゝをふるまひける。それ〳〵の人心かく替り有こそ浮世なれとかくまへ置し主は此善惡をたゞさず置しに世の牢人改めに皆〻所を迯りける其後つら〳〵世上を見るに色〳〵に成行さまこそおかしけれ書物好の權六は神田の筋違橋にて太平記の勸進讀。好色の新左衞門は十面新吉と名をよばれて田町に茶屋して日比きいたる口三味線太鼓持となれり。細工利の半内は芝の神明の前にて澁紙敷ての小間物賣。今に編笠おかし。音曲好の甚八は又九郎が芝居に入てやう〳〵口の世で抱へられ朝から晩まで尤役につかはれ身をそれになしける。武士顏をやめざる宇左衞門は心のごとく乘馬に十匁字をもたせ先知五百石の時におひぬ。又後生ねがひの番左衞門はいつしか黒染の袖となりおいが妻も大佛のあたりにて我と心をせめ念仏申ても〳〵口惜き身の行する皆知行も取し者の死れぬ命なればかくはなりさがりける。

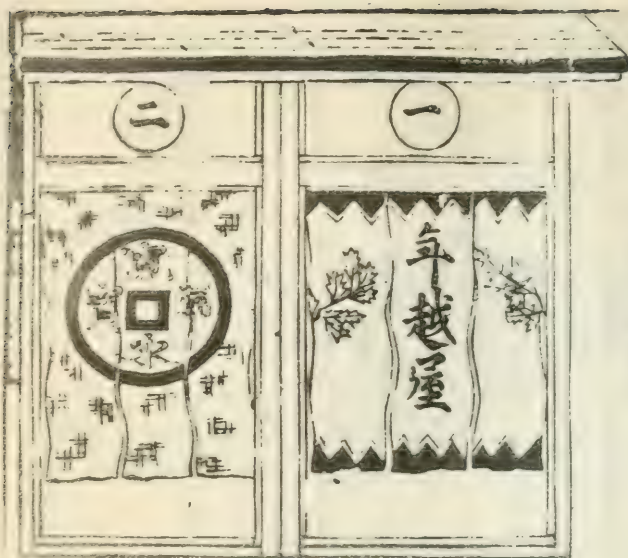
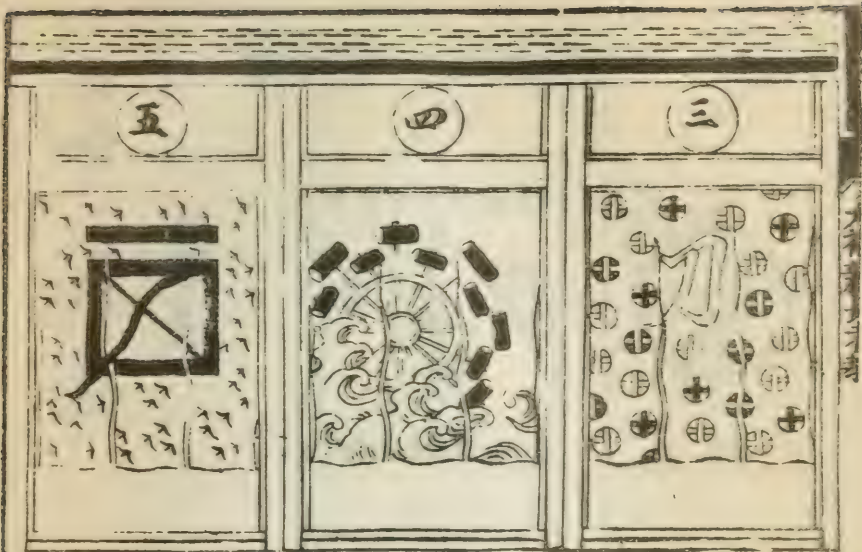
是を思ふに銘〻家業を外になして諸藝ふかく好める事なかれ。是らも常〻思ふ所の身とはなりぬ。かならず人に

に人るべきもの（

すぐれて器用といはるゝは其身の怨なり。公家は敷嶋の道武士は弓馬。町人は筭用こまかに針口の違はぬやうに手まめに當座帳付べし。と。金の有徳人のあまたの子どもに申わたされける

【第五】三匁五分曙のかね

万年暦のあふもふしぎあはぬもおかし。近代の縁組は相生形にもかまはず。付ておこす金性の娘を好む事世の習ひとはなりぬ。さるに依て今時の仲人先敷銀の穿鑿して跡にて其娘子は片輪ではないかと尋ねけるむかしとは各別欲ゆへ人のねがひも替れり渕瀬に流るゝ戀の川上に久米の更山さら世帯より。年月次第に長者となり美作にかくれもなき藏合に立つゞきて人のしらぬ大分限萬屋と云者有。一代にのばしたる銀の山夜は此精うめき渡れど貧者の耳に入事に非ず然も奢をやめて棟も世間並に元日にも聟入の時仕立たる麻袴にして四十年此かた禮義を勤めける。世は何染何嶋が時花共かまはず。淺黄の七つ星小紋に黒餅着物は花色より外は紅葉も藤色もしらず。幾春をか送りぬ。藏合といへる家は藏の數九つ持て冨貴なれば是又國のかざりぞかし。萬屋はひそかなる手前者独り子に吉太郎とて有しが。十三才の時鼻紙に小杉入しを見て勘當切幡州の網干に姨有しが。此許に遣はし置那波屋殿と云分限を見ならへと我子は捨て其後妹が一子を見立。二十五六迄も手代並にはたらかせけるに。其始末すたれる草履迄も拾ひ集め。瓜種の用に里へ送るを見て氣に入。是を子分にして家を渡し相應の娵を尋ねけるに。世間と替り成程悋氣つよき女房ならば我娵にとりたきとの願ひ。世は廣し。思ふまゝなる娘有て縁組をすまし。夫婦は隱居をかまへ殘らず渡されけるに。此跡取金銀有に任て少し取出手掛者を聞立。旅子狂ひを心ざしけるに彼娌約束のごとく悋氣仕出し。小鼻山立れば。世間憚かり自から色遊びやめて酒呑で宵から寢より外はなし。亭主内を出ねばまして手代共灯の影に座を卜て慰みに帳面をくり小者は地筭置ならひ家の調事ばかりなり。始の程笑ひし御内義の悋氣のよき事皆〻思ひあたれり惣じて親の子にゆるかせなるは家を乱すのもとひなり。隨分嚴敷仕かけても大かたは母親ひとつになりてぬけ道をこしらへ其身に過る程の惡遣ひする事ぞかし烈しきは其子がため溫きは怨なり。此萬屋の夫婦相果られし後。娌伊勢參宮して下向に京大坂の遊山人のしやれたる風俗

をみならひ姿を移せば心もそれになりて悋氣いふ事初心とたしなみければ。亭主此時と騒ぎ出作病をかまへ所の養生思はしからずと上がたにのぼり若女の二道にそまりて日毎に蒔ける程にいつとなく戀にほころび針を藏に積てもたまらず。久敷此家に住なれし金銀に憎まれ。內藏の福の神お留主なりし時やう〳〵夢覺て驚き。商賣大躰に代て兩替屋に見せ付廣く。人の金銀かぎりもなく預り。あなたこなたと手まはしして二度昔の身袋に取續くべき年の暮。人の內證は張物大晦日の挑灯おそろ敷。請拂も今宵一夜を越ば。明日よりは自由なりと一錢も殘らず濟帳付て筭用仕舞は七つの鐘の鳴時いかな〳〵ちやんが一匁なくて。若ゑびす賣呼込たれ共ゑぼしきぬ夷ならば買とて戻ける。それより間もなく門を扣て兵庫屋といへる人革袋持せきて。小判千五百兩有。來年預たしと取出し先程の利銀の內。三匁五分の豆板惡銀と出しける。此替なくて身代顯ける

日本永代蔵

目録

巻六

一　銀のなる木は門口の柳
越前にかくれなき年越屋

二　見立て養子が利発
武州にかくれなき一[illegible]屋

第一　銀のなる木は門口の柊

唐土文王の囿は七十里四方あるとやいへり其内の千草万木の詠めも一間四方の畾地に柊壱本植て見るも。我屋敷と思へは楽む心のかはる事なし。爰に越前の國敦賀の大湊に年越屋の何がしとて。有徳人所に久敷住なれて味噌醤油をつくりばじめはわづかなる商人なるが次第に家榮ける。世の万にかしこく。分限に成そも〳〵は。山家へ毎日賣ぬる味噌をいづれにても小桶俵を拵へ此費かぎりなし。時に此親仁工夫仕出して七月玉祭の棚をくづして。桃柹瀬〻を流るゝ川岸に行て捨れる蓮の葉を拾ひ集め。一年中の小賣味噌を包めり。この利發世上に見習ひ。是につゝまぬ國もなし。程なく大屋敷を買もとめ其庭木にも花咲実をながめ。生垣も枸杞五加木を茂らせ萩は根びきに風車は十八さゝげに植替おなじ蔓にも取得の有物を好めり。海月桶のすたるにも蓼穂を値目にかゝる程の事ひとつも愚なる仕業なし。むかし植たる柊後には大木となつて。其家の目しるしとなる。年越屋をしらぬ人なし節分の夜も鬼の目つこは是を用ひ。一錢づゝの事も一代をかんがへ壱万三千兩持まで取葺やねの軒のひくきに住しが惣領に幸の娌ありて。約束するに中立の人すゝめて内義とうなづきあひて京より今風の衣裳巻物を調へ。世間に笑はぬ程の頼み樽二十五人肩を揃ておくりける。親仁には角樽一荷に塩鯛一掛銀壱枚。云入の祝義おくると見せけるに。大義なる㒵つきして銀壱枚よりは。かさだかにして見よきに錢三貫と申されし。是程に世間をしらね共只正直にしていま六十余歳まで暮されける。此家より頼を奢のはじめとして此たび表屋づくりの普請を望めど子共のいふ事中〳〵親仁合点せざるを。念比なる町衆を頼み又は二世までの同行衆寺の長老様まで頼みまはり。やう〳〵願ひ叶ひ作事に取つき所にては天晴棟高くおもひのまゝに作り立。以前に各別かはりて毎日洗ひ琢きにひかりわたり。近在山家の柴賣百姓の出入絶て商賣俄にやみて。作り込し味噌のすて所なく。醤油ながす川もなく。手前よりあまたの賣手をこしらへむかしかはらぬ風味を出せど。人みな悪敷いひなし是も賣とまればおから商賣かへて仕つけぬ事はあやうく。年〳〵大分金銀へらして。買置すればさかりを請。金山のそん銀ほどなくいゑばかりになりぬ此

家屋敷やう〳〵三十五貫目に人の物にする事親仁なげき給へは。悴子いふやうは時節のよきおりから家普請をして置たればこそ此たび賣に仕合と是に無用の自慢なり親仁躬いたして四十年の分限男子六年にみなになしぬ。されば金銀はもふけがたくてへりやすし。朝夕十露盤に油斷する事なかれ。惣じて見せ付のよしあし。鮫書物香具絹布かやうの花車商ひは。かざりの手廣きがよし。質屋のかまへ喰物の商賣はちいさき内の自墮落なるがよしといへり。久しく仕なれ人の出入仕つけたる商人の家普請する事なかれと徳ある長者のとばなり。かの味噌屋敦賀にてよびむかへし女房はさりて濱手にすこしの見せを出し。是にも世帶人なくてはと其所より女ばうよびしに。吉日を見て頼みをつかはしける時。角樽一荷鯛二枚錢壱貫匁是をおくる。世に有とき親仁に見せける頼みの事今思ひあはせり。人〻心得の有べき世わたりぞかし

第二 見立て養子が利發

和國の商ひ口とて利徳をとらぬと空誓

文をたつれば是に氣をゆるし。何によらず買求むる世のならはしなり。神田の明神の前に俗性歴〻の浪人身を隠して年も家に杖つく比なれば。さのみ主とりの望みもなく。小者一人つかふて一代のたくはへ有て世をなりはひにくらし徒居を外よりのとがめをうたてく。瀬戸物見せかけばかり出し置。ねだんとふものあれば百の物を百とありのまゝにいひければ。是をねぎれどまけず。そも〳〵より摺鉢九つさかな鉢十三。皿四十五枚天目二十。徳利七つ油さし二つ。三年あまりにひとつも賣す。是を思ふに商ひ上手はあるべき事也年中の誓文を十月廿日のゑびすかうにさらりとしまふ事あり。其日は諸商人万事をやめて我分限におうしいろ〳〵魚鳥を調へ。一家あつまりて酒くみかはし亭主作りきげんに下〻いさみて小哥浄るり江戸中の寺社芝居其外遊山所のはんじやうなり。上がたとちがひし事は白銀は見えず。壱歩の花をふらせける。秤いらすに是程よき物はなし人みな大腹中にして諸事買物大名風にやつて見事なる事あり。けふのゑび

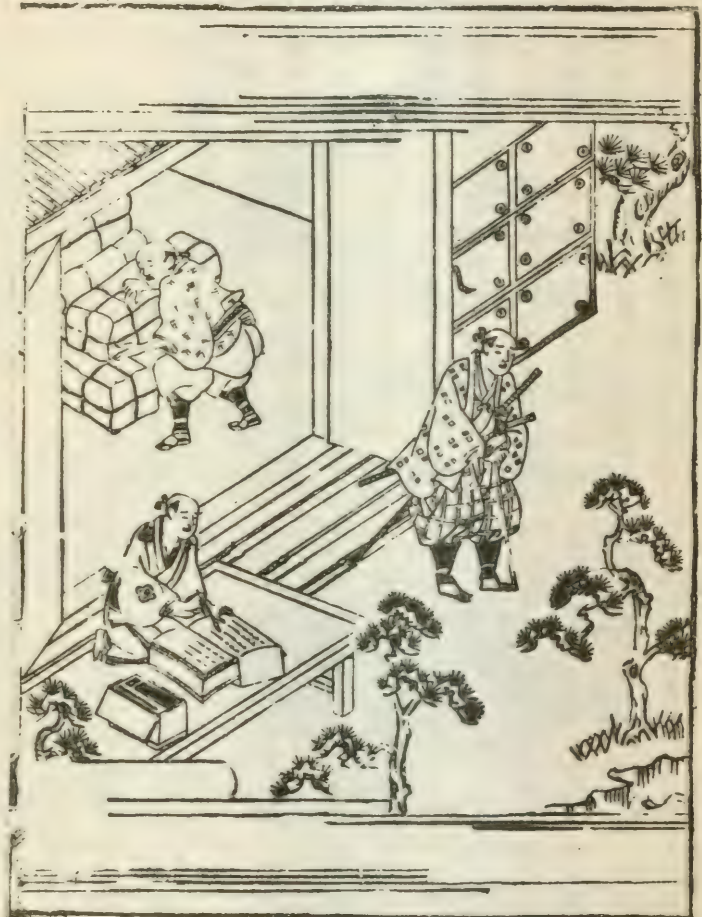
す講は万人肴を買はやらかし自然と海も荒て常より生物をきらし。殊に鯛の事壹牧の代金壹兩弐歩づゝ。しかも尾かしらにて壱尺二三寸の中鯛なり。是を町人のぶんとして內證りやうりにつかふ事今お江戸にすむ商人なればこそ喰はすれ京の室町にて鯛壹牧を弐匁四五分にて買取五つにわけて杜秤にかけて取など是に見合都の事おかし。爰に通町中橋の邊に錢見せ出して若いものあまたつかへる人有。日來はし末第一の人なれど一兩弐歩の鯛を調てゐひすの祝義をわたしけるに。いづれも何心もなふ夕飯を祝ひぬ大勢のわかい者の中に。此程伊勢の山田のものとて十年切て抱へたる十四になる小者すはりし膳を二三度いたゞき。食くはぬ先に十露盤置て御江戸へ來りて奉公をいたせばこそかゝる活計にあふ事よとひとりつぶやきて是をよろこぶ風情主人の目にかゝりて子細をたづねられしに。されば今日の鯛の焼物壹兩弐歩にて脊切十一なれば。ひときれのあたい七匁九分八りんづゝにあたるなり小判は五十八匁五分の相場に仕る。算用してか

らは銀ををかむやうなる物なり塩鯛干鯛もむかしは生なればいはふ心は同じ事けふのはらも常にかはらぬ事と申せば亭主横手をうつてさりとは利發もの分別さかりの手代ともさへ何のわきまへもなく。箸は右の手にもつ物とはかり心えて主の恩をもしらざるにいまだ若年にして物の道理をしる事天理にかなふべきものなりと親類中をよびよせ段〻物がたりして。此者を養子ぶんにして我家をゆづるべしと一筋に夫婦共に思ひ入て伊勢の親もとへ相談の人つかはしける時。小者其中へまかり出いまだおなじみもなきうちに御心入の程はかたじけなし。然れども國もとへの御つかひは御無用なり。首尾せぬ時はそれほどの費なり殊に御内證の事世ははり物なれば。手まはしばかりにて大分の借金の有もぞんせすよく〱見とゞけ申さぬうちに養子のけいやくは成がたしと申せば。なを此いひぶんをかんじ其方が心もとなき事尤なり。さりながら一錢も人の物をからずと毎年の勘定帳を見せければ有金弐千八百兩としらせ。此外金子百兩女はう後〻寺參り金に此五年前にのけて置けると包みながら封じ目に年号月日書付置ぬ小者是をみてさても〱商ひ下手なり。包み置たる金子は壱兩もおほくはなるまじ利發なる小判を長櫃の底に入置年久敷世間を見せ給はぬは商人の形氣にあらず。此心から大分限になり給はず。かしらのはけるまで此御江戸に居ながら。やう〱三千兩の身躰是を大きなる貞つきあそはしける。わたくし養子になさるゝからは四五年のうちに江戸三番ぎりの兩替になる事長生して見給へ。まづ夫婦衆はけふより毎日談義ある寺參りし給ひ。其下向に納所坊主にちかより散錢有程買給へ。世帯仏法ふたつのとくあり。供のてつちは道の開の外聞なれは。浮世山椒を受て小袋に入行。法談はしまらぬさきに諸人のねふりさましに是を賣べし。さてまた供つれぬ參り衆の笠杖ざうりを談義はつるまで壱錢づゝにて預かれといひつかはしけるに。毎日錢まうけして主人の供もつとめける。かくのごとく万事に氣を付後には思ひのほかなる智恵を出して舟つきの自由させる行水舟をこしらへ刻昆布して目にかけて賣出し。ちやんぬりの油かはらけしほかみのたばこ入外の人のせぬ事に十五年たゝぬうちに。三万兩の分限になつて靈巖嶋に隱居してふたりの養親に孝をつくしける。いかにはんじやうの所なれはとて常のはたらきにて長者には成がたし三

文字屋といへる人むかし懐中合羽を仕出し。それより馬道具の仕込次第にさかへて本朝の織絹から物を調へ毛類は猩〻緋の百間つゞき虎の皮千牧にても黄らしや紫羅沙都にもないものをもちまる長者とさたせられ。中橋に九つ藏とてかくれなし。これらは各別の一代分限。親よりゆづりなくてはすぐれてふうきにはなりがたし。京の室町れき〳〵人の男子何も商賣なしに善五郎などを頼み大分の銀がしして世をわたり此利銀毎日弐百三十五匁づゝのつもりに入けるに何やうにかつかひ果しける十五年がうちに此財寳みなになし江戸へかせきにくだりける。此男の器ようさ。謠は三百五十番覺え。棊二つと申鞠はむらさき腰をゆるされ。楊弓は金書くらひ小哥は本手の名人。淨るりは山本角太夫とかたりくらべ。茶の湯は利休がながれをくみ。[illegible]作には神樂の行かたを覺え。香を利事京にもなら顧齋もはだしてにげ枕がへしなどはいひなし人中にて長口上もいひかねす。にしへ傳内に横手をうたせ連誹も當流目安も自筆に書かねす何にひとつくら

からねど身過の大事をしらす當所もなく江戸にくだりて奉公するに銀見るか筭用かといへは。さしあたつて口おしく諸藝此時の用に立ず二たび京都にのぼりてとかくすみなれし所よしと年月したしみの友をたのみて諷歎の指南してやう〱身ひとつくらし。不斷の不自由を松はやしの時質うけて又おく事やすし。此ふんにて通るべきや人間の身はわづらひある物と老さきの事あんじける。もつ共六十年はおくりて六日の事くらしがたし。是を思ふにそれ〱の家業油斷する事なかれとさる長者のかたりぬ

第三　買置は世の心やすい時

毎年元日に書置して四十以後死をわきまへ正直に世わたりするに自然と分限になつて泉州堺に小刀屋とて長崎商人有。此津は長者のかくれ里根のしれぬ大金持共數をしらず殊更名物の諸道具から物唐織先祖より五代このかた買置して内藏におさめ置人も有。又寛永年中より年〻取込金銀今に一度も出さぬ人も有。又内義十四の娌入して敷銀五

十貫目其時の箱入封のまゝかさね置其娘縁に付時是をもたせておくりける人も有。外よりはこまかにして内證手廣き所ならひ此歴ゝに立ならぶ分限にはあらねど。そも〳〵の書置は三貫五百目なりしが二十五年がうちに。ひとりの利發にして仕出し。年ゝ書置かさみて既にかぎりの時八百五拾貫目の有銀一子にわたしける。此人世間によく思はれ分限になるはじめは其比唐船かす〳〵入て糸綿下直になりて上ゝ吉の緋りんず一巻拾八匁五分づゝにあたれり前後かやうの事は又有まじきと思ひ入。念比なる友に商ひの望みを語りて壱人より銀五貫目づゝ十人より五拾貫目借て此りんすを買置けるに。その明の年大分の利を得て三十五貫目もうけよろこびの折ふし。只ひとりの男子万事かぎりにわづらひける。身躰にかへて養生するにげんきなくさま〳〵心をつくしなげくうちに。人のかたりけるは歩行醫者ながら療治よくせらるゝとて引あはされ。あぶなき病人を十の物七つばかりも仕立此上はか〳〵しからぬとて一門の相談にて名醫に替てみしに。めた〳〵と惡敷なり死病に極る時。夫婦宜前の藥師を念に思ひ。あひさつせし人に面目かへり見ず頼み。今は世にない物にして又藥をあたへ半年あまりに鬼のごく達者になし給ひ此手柄かくれなし。親の身にして嬉しさのあまりに彼醫者取次のかたへ行今日吉日なれば藥代をみやうがのためにつかはしたし。こなたより頼むとあれば取次せし夫婦此事をさたして是から遣はせとは一廉の亂銀五枚とさしづすれば。内義のいはくそれは何として銀三枚と論するのちに先銀百枚眞綿二十把斗樽壱荷に箱肴思ひの外なる藥代。くすしも再三のしんしやく取次の人も力を添銀百枚借て此醫者に家屋敷をもとめさせ。次第に時花出程なく乗物にのられける。申せばわづかの事ながら四十貫目にたらぬ身躰にて銀百枚の藥代せしは堺はじまつて町人にはない事なり。此氣大分仕出し家さかへしとなり

〔第四〕身躰かたまる淀川のうるし

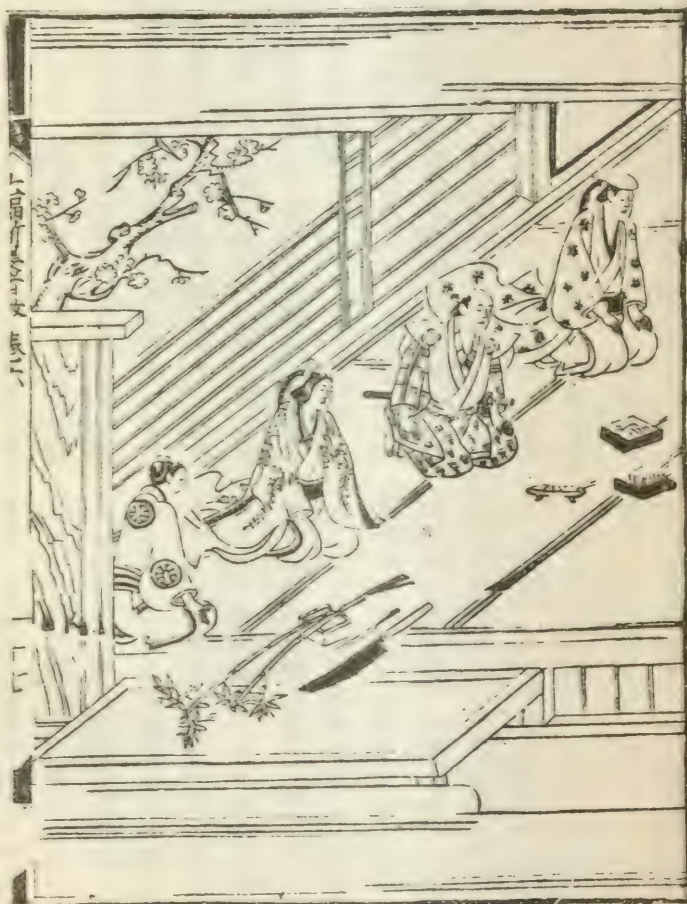
人の翔は早川の水車のごく常住油斷する事なかれ。瀬ゝの流れも昼夜七十五里につもり。水の行末さへかぎりあるなれば人間一生長うおもふて短かしほどなく老の浪立淀の里に與三右衛門といへる人。はじめはわづかの家業なりしが自然の仕合見えしは。有時ふりつゞきたる五月雨の比長堤も高浪越て里人太鞁をひびかせ人足を集め。此水

をふせぐに小橋はつねさへ淵なるにけ
ふのけしきのすさまじく阿波の鳴門を
目前に渦のさかまく其中より。小山程
なるくろき物ぴつとうき出。行水につ
れてながれしを。見る人鳥羽の車牛な
らんと指さしけるに牛には大きすぎた
るに心を付是を跡よりしたひ行に。渚
の岸根なる松にかゝりて留りけるを立
より見れば。とし／＼四十八川の谷ゝ
より流れかたまりし漆なり。是天のあ
たへとよろこびくだきて上荷舟にて取
よせ。ひそかに賣ける程に此ひとつの
かたまり千貫目にあまり。此里の長者
とは成ぬ。これらは才覺の分限にはあ
らずてんせいの仕合なりおのづと金が
かねまうけして其名を世上にふれけ
る。或は親よりのゆづりをうけ又は博
奕業にて勝を得たり。似せ物商ひ後家
を見立て入聟高野山の銀をまはし人し

らねはとてえたむらへこしをかゞめ。
はきを笑ふ事は非なり。それは面ゝの
手前のよろしきは嬉しからず。常にて
覺悟に有事なり手を出して物はとらね
分限になる人こそまことなれ。人のし
ど其心に達はざる非道の人世にまぎ

れて住あり。たとへは借銀かさみ次第にふりにつまりさまざま調義をするにならがたく。自然と其家をつぶし毛頭内證に僞りなく委細に勘定を立。其上の分さんはそん銀するに惡まず今時の商人おのれが身躰に應せざる奢を皆人の物にて晝夜を明し大年の暮におどろき工みてたふるゝ拵へして世間の見せかけよく隣を買添軒をつゞけ町の衆を舟あそびにさそひ琴引女をよびよせ女ばう一門をいため松茸大和柹のはじめをねだんにかまはす見せのはしにて買取茶の湯は出さねど口切前に露路をつくり久七に明暮たゝき土をさせて奥深に金屏をひからし。外よりこのもしからせ頓て貢家なるに千年もすむやうにおもはせ内井戸石の井筒に取かへ。人の物からるゝ程は取こみ。ひそかに田地を買置一生の身業を拵らへ。其外子どもを仕付銀まで取て置惣高筆用して三分半にまはる程に仕かけ債せかたにわたしけるに。のちは我人たいくつしておのづからに濟し其當座はかなしき貌つきして木綿きる物にて通りしが。はや此さむさわすれて風をいとはぬか

（この挿畫「第五」）

さね小袖雨ふつて地かたまると長柄のさしかけ傘に竹つえのもつたいらしく。むらさきのづきんして小判は賣しゆんかと相場聞などさながらのけがねのやうに思はれける。さてもおそろしの世やうかとかし銀ならず仲人まかせに娘もやられず。念を入てさへそん銀おほし。むかし大津にて千貫目のさし引を世界になき事とさたせしに。近年京大坂に三千五百貫目四千貫目の分筭もさのみ大分といふ人なく。其時代にて物と手廣くなりぬ。以前にかはり世間に金銀おほくなつてもうけもつよしそんも有。商のおもしろきは今なり隨分世わたりにそりやくをする事なかれ。有長者の詞にほしき物をかはすおしき物を賣とぞ此心のごくかせぎて奢をやむればよきに極る事なりされば商の心ざしは根をおさめてふとくもつ事かんようなり。此淀の人都の榮花客をまつやらくる〳〵と。椀家具の香を見ならひ大川を泉水に仕かけ京より伏見までひゞき。濱燒のかほり橋本葛あまたのたくみをよび寄不斷の水車葉にかよひ。茶はうぢに人はしをかけ

に入るべきもの)

酒のしたゞり松の尾まで流れ此繁昌いつかつくる世あらじと見しに。有時石清水八幡宮を申おろしてあんごのとうを執行れ目出度事山ゝなりしに。此行事はその亭主の心持大事なり。万の義をおしきと思へは忽ちむそくする事成しに。此家破滅御告にや大釜の下より大束の葭もへしさりしに。あまた人庭に有ながら是をさしくべる人もなくてあるし心にかけしより幾程なく此家絶て其名は踊哥に殘り

〔第五〕智恵をはかる八十八の升搔

世界のひろき事今思ひ當れり。万の商事がないとて我人年〳〵くやむ事およそ四十五年なり世のつまりたるといふうちに丸裸にて取付歷ゝに仕出しける人あまた有。米壱石を拾四匁五分の時も乞食はあるぞかし。つら〳〵人の内證をみるに其家それ〳〵に諸道具を次第にこしらへむかしよりはおしなべて物ごと十分になりぬ。尤家をやぶる人もあれど。家とゝのへる人まされり共ためしは京にかぎらず江戸大坂のはし〳〵明地野原まですこしの明所もなく人家に立つゝき何して世をわたる共見えねど。五人三人の子共に正月きるもの綿入て。盆は踊ゆかたも拵へはしかの子の後帶ひとしほ見よげなり亭主は日用とり或は釣瓶繩屋又は童子すかしの猿松の風車をするなどやう〳〵一日に丸とりにしてから三十七八文四十五六匁五十迄の仕事するかせぬうちにて。四五人口を過ていづれも身のさむからぬは是みな母のはたらきなり。同じ五人口にて一日に三匁五分づゝ入も有又は六匁つゝ入もあり。世帶の仕かた程各別に違ふ物はなし。人の渡世はさま〳〵に替れり。やう〳〵ふうふの友すきしかねるもあれば壱人のはたらきにて大勢をすごすは町人にても大かたならぬ出世其身の發明なる德なり。一切の人間目有鼻あり手あしもかはらず生れ付て貴人高人よろづの藝者は各別常の町人金銀の有德ゆへ世上に名をしらるゝ事是を思へは若き時よりかせぎて分限の其名を世に殘さぬは口をし。俗姓筋目にもかまはず只金銀が町人の氏系圖になるぞかしたとへば。大しよくはんの系あるにしてから町屋住ゐの身は貧なれば猿まはしの身にはおとりなりとかく大福をねがひ。長者となる事肝要なり。其心山のごとくにして。分限はよき手代有事第一なり難波の津にも江戸酒つくりはじめて一門さかゆるも有。又銅山にかゝりて俄ぶけんになるも有。よし野うるし屋して

人のしらぬ埋み金有人もあれは。小早作り出して舟問屋に名をとるも有。家質の銀借して冨貴になるも有鉄山の請山して次第分限の人も有。これらは近代の出來商人三十年此かたの仕出しなり。人のすみかも三ケの津に極まれり遠國に分限あまたあれど其さたせざる人多しもつ共都の長者は金銀の外世の寳と成諸道ぐを待傳へたり竈屋といへる家の茶入ひとつを銀三百貫目に糸屋へもらふ事有。弐拾万兩のさし引を年歩にて濟す兩替屋も有。とかく都のさたは外にて成がたし。むかしの長者絶れは新長者の見えわたり。はんじやうは次第まさりなり。人は堅固にて其ぶんざいさうおうに世をわたるは大福長者にもなをまさりぬ。家さかへても屋継なく又は夫妻にはなれあひ。物とふそくなる事は世のならひなり。爰に京の北山の里かくれもなき三夫婦とて人のうらやむ人あり。そも〳〵祖父祖母無事にしてその子に娌をとり又此孫成人して娌をよひ同じ家に夫婦三組しかもおさな馴身にてかたらひをなしける事ためしもなき仕合なり。此親仁八十八。其つれあひ八十一。男子五十七其女ばう四十九。此子二十六女は十八。一生すこしのわづらひなく殊更いづれもあひさつよく其上身躰も百姓の願ひのまゝに田畠牛馬男女のめしつかひ者棟をならべ作り取同前の世の中萬を心にまかせ神をまつり佛を信しんふかくおのづから其徳そなはりて八十八歳の年のはじめに誰かいひ出して升掻をきらせけるに。すなほなる竹のはやしも切絶るばかり京都の諸商人是をのぞみけるに商賈に仕合あつていよ〳〵もてはやして三夫婦の升かきとて俵物はかるにこぼれさいわひあり上京の長者此升かきにて白銀をはかりわけて三人の子ともにわたしけるとなり。金銀有所にはある物かたり聞傳へて日本大福帳にしるしすゑ久しく是を見る人のためにも成ぬべしと永代藏におさまる時津御國靜なり

大福新長者教 巻六

此節ヨリ

人ハ一代名ハ末代

甚忠記

全部八冊

仁之部

義之部

礼之部

智之部

信之部

板行仕候

二条通鉄屋町

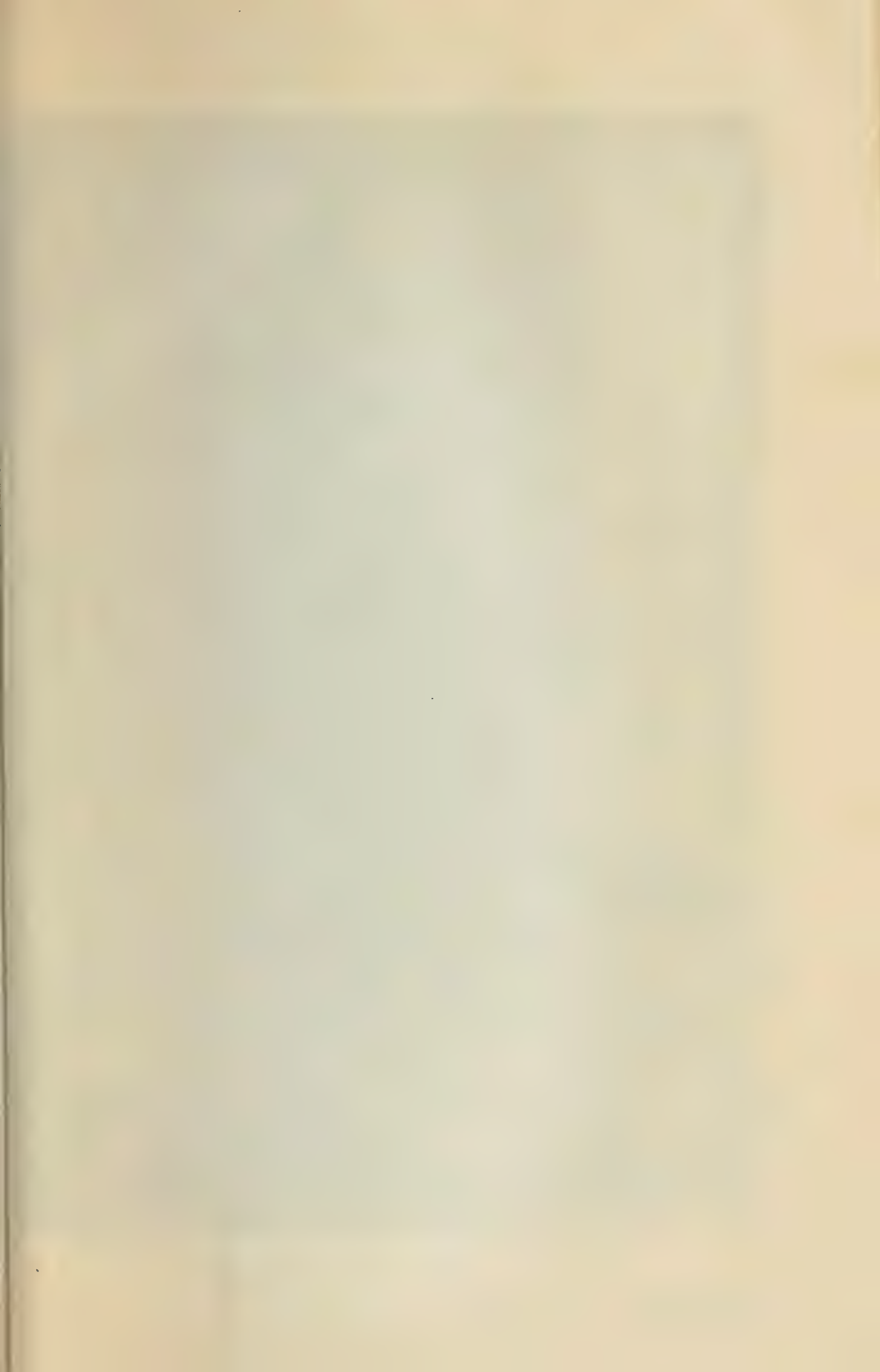
金屋長兵衛

京 書林

貞享五戊辰年正月吉日

大坂 書肆

北御堂前

森田庄太郎刊板

笑ふにふたつ有
人は虚實の入物
明くれ世間の慰
み草を集めて詠
めし中にむかし
淀の川水を硯に
移して人の見る
ために道理を書
つゞけ是を可笑
記として残され
し誰かわらふへ

き物にはあらす
此題号をかりて
新たに笑わるゝ
合点我から腹を
かゝへて智恵袋
のちいさき事う
まれつきて是非
なし

難波俳林

西鵬印

三 猶よわく擬の抛心
武士の不覚悟なり

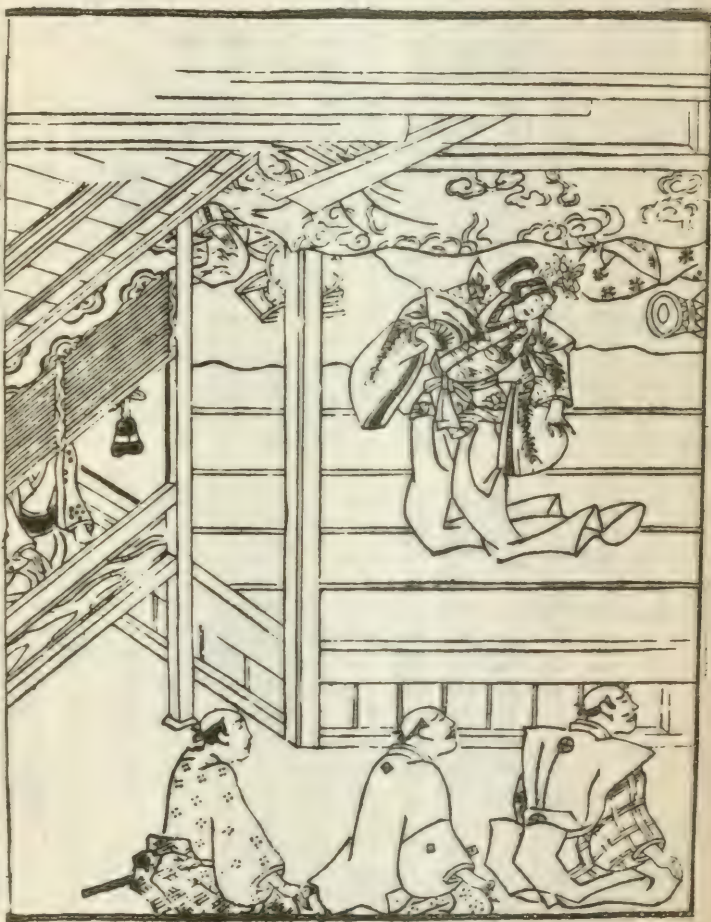
四 生行ハ面目なし
武士の命の捨所なり

五 先例の合せ
武士の道にて候ものなり

【一】緋桃の今勝負

古代徳ある人のいへり。天のなせる孽は遠べし。自からなせる罪は遠べからすとなり。時に九州の國主武の政事たゞしく。民百姓をすくはせられ。自然と天運にかなひ給ひ。領地の万木千草までも。國のさかひをかぎつて常にまされるの葉色。千秋の世の中月も清よき時津風しづかなり。其比南都春日の里より舞曲の美童。手貝の胡蝶元興寺の菊若此二人同年にして音聲そろひ。さながらはらからの艶形かと見し人思ふ程に似たり時勢粧をよくうたふに。都とをき目にこがれて花もみちはいづくも山更にかはらず。これは見なれぬ哥舞の曲なり諸人聞傳へて一詠一樂わたくしにはをよばざる事をねがひぬ。國のかみ是をあはれみ　城内に舞臺をしつらはせ。左は男棧敷右のかたは女中とさだめ土座はすゑ〳〵の万人自由に見るためと仰せ出されしは。有がたき世にあへる時しも秋のはじめ。七夕の半天しめやかに。烏鵲のはしかゝり雲龍の水引冷風にひるがへし。蜀江のにしきの掛幕ひかりうつりて銀燭ほしのはやしのごとく。役者も羞明。さしきの松の風おさまつて後。露はらひのおどり太鼓それより打つゞきて。小てふ菊若ふたりの美兒粧のはかまこしだかに紋羅のかたぎぬ。まくり手の紫紐玉牡丹のかんざし。しら綾のかづら帯紅粉は白皮をいろどり。細眉は雲まの月僅に出るにことならず。脣は丹花を欺き。惣じて面子妖娃く。金の團扇をたづさへ足とりに六つの拍子をそなへ諸藝を宵よりつ〳〵て曉におかすも。明行名殘をおしみぬ　傾城女棧敷は闌帳ちぐ簾を心の外にうちあげ。國女﨟おつぼね表づかひの女までおのが善惡の面を恥ず。青眼すはつて覺えず笑ひを催せり。女はさもこそあるべけれ男も邂逅に見るなれば。番所を相役とかはり。後は書院玄關も明て。透見だりかはしきも。不斷の事ならねは横目の衆も其通りに見ゆるしける。爰に御納戸の奉行四人して相勤しか別して今宵は御用しげく。物の音もはるかに聞て心は空になりぬ。やう〳〵曙ちかくなりて役義仕舞。次第にひとり〳〵見る事をいそぎ壱人もなかりき。其折ふし御前ちかき人御納戸に入て役者にくだされもいゝ金子御用のよしにて役人尋ね給ふに。壱人もなく勤め所明らるゝ事疎略とさたせらるゝ所へおの〳〵立歸り御金箱開く時心覺えの五百兩包みひとつ紛失していろ〳〵僉儀をとげ

てもいよ〳〵ないに極まり。役人迷惑その身ぶさたよりおこりぬ。其夜は明て七月八日に老中御前に披露あつてまづ若殿の御耳に立ける。四人御さし圖うくるまでもなく。閉門して。いづれも申あはせて切腹の覺悟かゝる事に身を捨るは口おしき御意をまちけるに先奉行に何の子細もなく納戸に末のゆく所にあらず。しかれば此金の盗人侍ぶんの者に極まれり。武家は前代未聞の惡人天をわけ地を割此科人せんさくをとげ。永代の仕置におこなふべしと御腹立至極の所なり。城下の道すじ人馬の往來をとゞめ。一國のわづらひとなりぬ。内談評定さま〳〵なれ共何をかもとに僉儀の役人たいくつして。せんずる所四人の納戸切腹に極まりぬ。其比宇士の長濱といふ所に。神道の行者浮橋宮内卿橘の正連といへる人。平生眞言の行りきをもつて人相見る事天眼通を得たり。今度國中の難義をおもんじ。此金子の取手は御家中をのかれず。殘らず面を見せ給はゞ人相の秘事をもつて共ものをえらび出し。万人の難義をたすくべしと世にためしなき御訴詔なり。諸役人僉儀に案鮑し折からなれば。正連に見分いたせとの仰せ

を蒙り。明徳門の額をかけ。矢藏にあがり。神力此時と觀念の眼をさへぎり。諸人の登城まちけるに。老人より次第に立ならび。つねはあかずの穴門を壱人つゝ通されしは身に罪なくても心ちよからず。家中殘らず。御門を過して後。宮内ひそかに御目付役まで申せしは。百卅七人めの茶小紋の上下着したる人ぞと正しく申せば老中おどろき。それは何の何かしとてれき〳〵の侍なり。心得がたき大事と思案せらるゝ時。たとへ何人にもせよ。金子の取手にきはめ。たしかにさしづをせし事はや其隱れなし。此上は了見に及はず寄會所へ其侍めしよせられ。右の段〻仰せ渡されし。是非もなき仕合なり。人も多きに惡名にさゝるゝ事。これ武運のつきその宮内に對談のねがひ。尤善惡のせんぎ有べし。大法なれば二腰は預り。正連に出合。理非明らかなる所なり。それ人相をもつて善惡をしる事唐の袁天綱。我朝の清明ときさへ偶中といふ事もあり。いはんや其方の凡慮にて人相の家職は價をうばふの賊なり。我に何の見所有て罪に落すや。尤なり世〻の人相者も天理の常をもつて勘へは何の中さる事か是あらん。寔に

古語にも人恒の産なければ恒の心なしと。貴方の明德門のゐ字の見やうは諸人の眼色とは事かはり面躰は仰き見ん共。瞳子にては地を見る事。是第一の目付なり。されば眼は神明の宅にして明鏡のごとし。胸中に邪あれは瞳子正しからず。心爰にあらざれば見れ共みへざるにはあらずや。貴方の悪を掩といふ共其罪いづくに遁れんやと。道理をせめ付骨髓にこたへ魂ゐ割るばかり落し付て申せば。侍赤面して此上はそれがしを拷問あそばし。其理明か成時は宮内が五躰八割になして世の掟を正し給へとはなれきつて申せば。宮内はひるむ所なく。汝此罪をのがるべきや忽ち顯し國土のみせしめになし給へと。兩方命惜む所なし。其まゝには済がたく是非なや此侍其役人の手にわたり。引立られて行風情我敷嶋の道ならでと讀し哥に其罪のがれしが。今のうきよの武士かゝる手ぬるき哀をしらず。いろ／＼品かへて責つれ共此事しらぬに實定して次第に息も絶／＼になる。今ぞと見えし時宮内をよび寄相手は只今絶命にうたがひなし。責ころして後其身の難義と申せば。さりとては武士の心根つよし是程まで申さぬ事の頼もし。され共金はあの者盗なれば。なをつよく責て命を取給へ。其後は宮内が覺悟と申せば此一言にかの侍夢のごとくなる眼を幽にひらき。ひだりの手をさしのべいひたき事のありげに見ゆれば。しばらく心をやすめさせ。役人近くよれば此男正念に起なをり世にはかゝるふしぎもあり。人相を見て大事をしる。宮内當國の重寶此御家なを治まるべき瑞相なり。其金盗人我なり。心の外なる事にさしつまり。傍輩の難義をかへり見ずして是を盗ぬ無用の大賊不仁の凶徒に劣れり。今破責のくるしみによつて白状申にはあらず。それがし此まゝ命終るにおひては世の寶なる宮内が命の程の惜まれ最後にいたつてかくはいひ殘し侍る。其五百兩の金子はや百五十兩自分の要用につかひ。殘三百五十兩は我住し屋敷の泉水の北のかたなる岩組の根にあり／＼と申渡し其詞の下より眠るがごとく命はかなくなりぬ。此ものが屋かたに行て池をあらためけるに。申せし所たがはず金子のありしを證據に始終を言上申せば尤大悪心なれ共大事に人の命を思ふ事武士の心底此上ながらかんじ給へり。又宮内事はまとに天眼通を得たる人相見末世にも有べからず。人の鑑とそなへ置れしがそれより人の心質直になりて道をまもりけるとなり

二　も〻川乃巻物争ひ

古代賢き人のいへるは義を重んじて命を輕くするは義士の好める所なり。國を治めて風枝に音なき松永霜臺和州信貴の城主なりしが筋めたゞしく諸浪人をめしかゝへられしに望む所の侍先祖の感狀其身の武藝いひ立此家をかせぎぬ。同國の南山鶯の關ちかき里より。此御家中にしるべあつて身躰取組しに此牢人楠正成が末葉なりとて菊水作りの太刀に添て千劔にて軍中の連哥咲かけて勝いろ見する山櫻と自筆の詠草をさしあげしに。又河州國分の里に身を隱せし浪人右の太刀詠草毛頭相違なきを持參いたされしにいづれも思案におよばず。又此道具をもあづかり置御耳に立しに老中立合僉儀になりぬ。御家中の古筆見刄物の目利せし人めしよせられ。二人吟味遂られしに一方は詠草正筆にして太刀は後こしらへに實定。一方は太刀楠が名劔にまぎれなく連哥懷紙は移し物に極りぬ。兩方共に取次せし人御前の首尾迷惑いたされしに。家老職の人おどつて評判いたされしは。双方共に越度なし。子細は太刀も詠草うたがはしくは不吟味共いふべし。誰か是を見しらず。其鍛鍊の人此さたせられてこそ明らかなれ。此たびの披露武士はまとなりと別条なかりき。其後御前より仰せ出されしは。當家を望む浪人親類書におよばず。其器量によつて小知堪忍せば兩人共にめしかゝへよとの上意取次の衆中有がたく。既に御目見へすみて明屋敷くだし給はり。何の役組も定めなく先御廣間へ相詰ける。家老の何がし大横目の三人內證有しは。大殿御憐愍にて兩人めしかゝへられしが。かへつて其身のためならずとかく二人義理を立相果へき事追付なり。何とぞ末〳〵御奉公勤めさせたき願ひ。子細は右の太刀古筆の事隨分さたのやむやうに大役から共心えと仰られしが。何とも合点まいらず。その通りに十日はかり過て。一人の浪人今一人のかたへ狀を付けるに。其𛀁章はすこし御內談申つかはしけるに。兩人良を身を改め死裝束にて來りぬ。兩人良を見あはせ。何の愛拶もなく。泪をうかめ扨此たび兩人共に相濟是よりしたしく語らんとたのしみを殘せしに正成つたはり道具親より相わたすによつて。さしあぐる所に同し二色二人につたはりて然も違はざるのまきれ物。そのさた後日に聞とゝけ。かへらぬ事ながら口おしき武運のつき。取次せられし人內證申されぬも恨むべからず。是非もな

き身躰相すみ兩人ともに一分立がたし。是も先世の縁ぞかし又の世ながく語るべしと。いはぬさきより同じ心ざし。然らは一通殘すへきと。書置刀の鍔下に見せて。二人さしちがへてをはりぬ此筆跡御前にして開きぬ我〻素出二卑賤一而家業亦疎也然而先祖武威不レ常故媒二筆刀一而雖レ蒙二於過分之祿一筆刀亦不二分明一嗚呼語則先祖汗レ屍不言則買二士之罪一難レ遁將就二死地遠一恥辱而已國主はじめ諸家中此筆跡をかんじ。其二人をおしみ給ひぬ。其後かの家老の申されしは。兩人相果へきと申せし所爰なり。まことに武士の意氣道理いさぎよし。察する所兩人共に楠が子孫に有まじきと思へり。此道具兩方に持つたへし子細は今時世をわたる業とて工おそろしき商人。元來は正筆正銘なるを。一方へは正銘の太刀に筆の物をうつし是を代なし。又一方へは正筆に刄物を後こしらへにして賣わたしたるにはうたがひなし。彼者共先祖に心にくき所ありとさたし給へり是をつたへて金剛山の麓里水分といへる所の地侍の何がし。代〻楠か連書家に傳へし武道具の目錄持參して彼二色の道具わたくしの親修覆のために

奈良に遣はしけるに。其職人取にげ仕り行かたのしれざる事をなげきしに。今また御家中にまはり合は由重代の道具なれば御僉儀のうへくだし給はゞ。有がたくぞんじ奉るのねがひ聞しめしわけられ。其ものにくだし給はりけるとなり。國主に有たきはよき家老ぞかし

【三】末に取つく猿の執心

古代老たる人のいへるは。他の愁ふる時はその心に愁ふるを正道とぞ。爰に信州の大名國腹の子息兩人もち給ひしが。諸太夫の官位を願はせられ京都への使者男。家中廣きといへ共高家衆とて二人大内の事よく鍛錬いたせしを。不斷は無役にして。かゝる大事の御用のとき御兄弟の御名代として。兩人京着いたされ願ひの參内首尾よく御綸旨くだり頂戴して七条に殿の御屋敷ありて是にたち歸り。京の留主居にも勅宣をおがませまきおさむる時庭山の木隱れより年へし大猿飛來て御惣領のかたの御綸旨をつかんてうせける。いつれも動轉して大勢かけつけ梢をさがし根をかへし僉儀をするに。はやゆきかたのしれざりき。是ぞんじもよらぬ惡難。御名代の何がし是非もなき仕合。前生の因果とあきらめ。切腹の覺悟してよろづをまかせたる家來にあらましを申ふくめ。國なる妻子立のく事なかれ。此たび武運のつきとおもひさだめ。御とがめ次第になり行へし。ふみは歎きに殘る種なれば此とばうつしをかたるべし。母には病死となり共。それほとの僞は天もゆるし給へ扨最後御屋敷にては遠慮なれば洛外の寺伏見にてもくるしからず。願はくは眞言宗なれは殊更なり。菟角時節うつらざるうちに先行水といさぎよく申されしを。聞人泪もたしなみかたくて。座中しばしはしつまり大身は世のきゝをはゞかり。小身はぞんしなからさし圖なりがたし。時に屋敷守愚案の一通り申されしは是わたくしならず。御家の滅亡すべきはじめなり。まつたく御自分のあやまりなし。ひそかに御國へくだり給ひ。御さたの上に安否を極めらるへし是忠義のふたつなり。京都の切腹御ためならす主命なれば此節あひ延る事かつて其身の卑氣ならず。主君の御名代は重し自分の命は輕し。道理は是を至極に教訓つくせば。京役の連座同音に此義御尤とあれば。いづれもの相談にまかせ無念を胸に沈められしを萬におしき侍なりといはずして是を感じき。同役人大かたに挨拶して人の身の上とさ

のみなげかず。銘〻の役目大事といはぬばかりのけしき俄に綸旨の置所を工夫して新しき白小袖の衣裏にくけこみ。其身をはなたす持れし身勝に見えて見ぐるしく。武士はかく有まじき所なり。義を思はゞ何とぞ分別有べき事ぞかし。又兩人同道して都ををんみつに旅立北こく海道はる〳〵とくれて。旅泊の曙は夢のうきはしわたり行心ちして。おもへは國もともちかづき命世のさだめなき事を胸におとしつけて行に。けふの夕べはしなのなるけふり立山の麓里につきぬ。旅のかりねもこよひばかりの名殘。所は山水の清きながれのいさぎよく。竈風呂たかせて入相ごろの事なるに。くだんの猿のあらはれいで。挿箱のうへにぬぎおきし。小袖の褄をつかみ割綸旨をとりてはじめの綸旨を殘しぬ。相むらの内に入かと見へしが。一聲さけびて失ぬ。是まよらざる人は果られ死覺悟の人は別条た希代なりそれより歎きかはりて最前なく歸國して。始終を申あぐれば御不よりの事ども。此時不首尾になつて。審はれぬ所へ。孤猿さけんで顯はれ國思案までもなく。其まゝ自害して思ひの目じるしの大木永代松のはずゑより

勅宣なげかへして失ける。是にて御官位子細なく喜悦の御いはひかさなり御家中いさみをなしける。其後此事御穿鑿あそばしけるに。自滅せられし人の一子。都の留主をねがひ。知行の山の猿狩して。無用の殺生かぎりもなく。子猿の命を取しが。是にて思ひあたりぬ。そうじてものゝ命をとる事なかれ。世の人あやまちあれどかざる心よりおのづから非義をなし。いよ／＼錯をあらためざるものおほし。爰を以て孔子も可ニ以レ人而不レ如レ鳥乎といへり。

〔四〕生肝は妙薬のよし

古代東路の淺香山の麓里に忠ある武士孝ある娘の事を語りつたへり。此所は芦眞蒲の生しげりてあれたる野はらなりしに。ものつくりする一むらに取立。次第に人家も軒をならへぬ。其草むすびより久敷里人に弥藤太と呼つゞけて四代まて田畠人馬共にあまた抱へ。此家さかへける。五代目の弥藤太不作にあひて鋤鍬までも賣はらひ家まづしくなりて。五十余歳の時相果しが跡には後家かなしく十一になる娘をうきよのたよりとしてけふを暮してあすのたくはへもなく。所に纔なれし狹の細布を

手業にしてみぢかき煙を立ける。四十にあまる女貌今もむかしの形のこりて髮はすきくし絶ておかしげにみだれしが是にもいやしからねば心なき野夫の袖妻うるさく。夕暮はやく戸をさしこめとかくは人のましはりせず。松火の移り幽に夜もすがらの世わたりに暇なかりき。紙窓破りて寒風をいとはぬは。隱す事なく身をかためしは世の女の鑑にもなすべき人なり。此娘なればなをまた心ざしおとなしく。振分髮のころより遠くあそばすまして此程は母の手をたすけて沢ゆく水を手桶にはこび。氷をくだき霜をふみ枯野の落穗など拾ひおさな心に孝をつくし。母をいさめて月日をかさね。年もはや十三の春は面影そなはりての美形つくらぬ色のうるはしく。是に思ひをかけざるはなし。され共人木石にもあらず。母につかへるありさまをかんじ戀慕愛執の心をさつて。人みな是をあはれみ。苅柴をわけて肩をたすけ浦人は焼塩をみつぎ荒たる軒端を一村として蓆かへ。こぼれし壁をしつらひ嵐をよけ。雨をしのぐは是孝の徳なり。母も行するゐたのもしくいか成人にもめあはせ浮よを隙になす事もがなと。思ひは是のみ夫の忌日

（この挿畫は「三」に入るべきもの）

わすれず香花はさゝげしがさる人は日ゝにうとし。娘が事にまぎれて無常は世の業にかはりぬ。其年も秋山の物あはれに。妻鹿の鳴ねは野をうちにきく心となる。むかしをしのぶ袖の露時雨に下葉色こく。あれがな絹になして娘に着て姿の見まほしく。わけて此夕くれの心ぼそき折ふし。旅僧袖かざして八重雨玉を散してやむ事なく。我軒したに屋どりて。空さためなき身の行すゑ。いそぐにあらずとまるにあらず。三界無庵の草まくらしばしの夢をかし給へと。垣根にほしすてし胡麻からを一つかね引よせ。近山の晩鐘つげわたるにもおどろかず法師の身程おもひ出なるものはなし。雨さへすさましきに虫入ころの鳴神いなびかりの移ひ夜のにしきを見る事有。母つく／＼と僧の風情をかなしく。男のあらん宿ならば

暫時の苦労をたすくる事後世にもなりぬへきに人のとがめもうたてく。思ひなからねまに入れば。娘はやさしく宰前の僧の事思ひやりて。内さへ秋のそう／＼しく外面は山風のはげしからん一夜はいかにあかし給はん。せめて涌湯あたへ給へ。いまた降もやまざれば。其まゝにましますべし。旅のつれなき事さぞ／＼といふにぞ。母は悦びよくもとひける人ぞと。釣鍋の下に萩の枯柴を折くべ茶具を改ため枕にはこべは彼僧心ざしを有がたく其後ゆだん包を明て金糸の組帯を取出し。是は子安地藏の腹帯なるが。女の大願とかぬといふためしなし。見れは艶なる息女あり。平産まします身のためと。是をおくれば人の親のならひにして。此うれしさかぎりもなく其夜も更て世けんもしづまる時なれば。出家といひ雨夜といひ。

人の情はかゝる折と戸ざしを明てまねき入。何か饗應たよりもなく。御宿まいらすを心にて。出家ははしちかく親子の人はひとつにならび遠慮たかひの物がたり。旅草臥に僧はまどろみ。母は心をゆるさす。娘は一間なる奥にねさせ夜すから松割ての焼火皆いつとなくふして。東明の空烏のつれ鳴にさめて旅たつ法師を人もしらざるうちに。此宿を出さんと見しに。はや爰を出て行せ給ふは流石出家の境界かろし。わかれに言葉かはさぬは。かりそめながら心がゝり。娘起して此事を語らんと枕に近よりしに。かなしやさしころされて是はと歎くにかひなし。扨は出家か仕業より外はなし。何とて聲は立ずしてかくは成けるぞ。親ちかく有ながら是をしらざるは大かたならぬ因果なり。まだ其年も差別なきにしかも出家

のよこしまなる事に人の命をとりける。我子ながら生れ付たる形に身をうしなひけるよ。無用の情に宿かす事のくやしさよと。泣さけぶに。隣家おどろき人あつまれば。はじめを語りぬ。里人すゝみて其法師何ほどいそぐとも。三里には過まじ。それよこれよと手わけして山道にさしかゝり。柴人に出家の事を尋ねしに野はづれの宮の森より旅駕籠出しより外はと語りぬ。此森から乗物の出し事はふしきと立帰りて行かたしれぬになりて死骸は野邊におくれとて老たる人共手をかけしに。此殺しやう常ならす。腹かき切て生肝を取て歸りぬ。枕に金子百兩包み。是を殘し置ば。何共わきまへがたし。其中に物なれたる老女の有ていひけるは。扨こそ思ひ當る事こそあれ。此女子は五月五日に生れて然も美女なり。此肝は難病の妙藥になるとかや。もしはさも有べきかといふにぞいづれも掌を抛て一しほ物の哀に涙は袖をひたしぬ。此母それよりは髪をおろし是を菩提の種に先立人を弔らひしは。世上に有ならひとはかはりてなげきし。此金にて娘が像をきざませ。草庵を建立して。朝暮の勤行暇なかりき。かくて

三年も過行ば一夏に入て山邊の躑躅卯の花をつんで娘がためと思ふに。我より先にほとゝぎすも鳴出しぬ。冥途の山にみづからもつれ行とぞ歎きし。其曙も暮になりて。爰は海道の外なるに。旅出たちの侍引馬供鑓つゞきて人あまたにて通られしが。細みちの熊笹わけて此庵室に立より娘が御影にむかひ念比に拜をして感涙しばらくする〳〵の者迄も皆うちしほれて見えける。思ひよらざる參詣の人やと心もとなき時。かの侍ひざを立それがしをさためて見わすれ給ふべし。三年跡の秋の夜一宿申せし出家なり誠はかゝる姿なるを身は墨ぞめかしらは隱し。心は悪鬼となり。そなたの息女を殺せし事。今思へは身にこたへてかなし。さぞ其時は我をうらみ給はん。是わたくしならず。主君難病世にまれなる御なやみ醫術つくして叶ひがたし。時に京それぞとしらせ來れば是をもとむる内の典藥ひそかにつげて。五月五日生れ誠家中に入も有しに。新座者のそれがめいまた嫁せざる少女の生肝妙藥に入しを人がましく思し召れてや。和理ななれば國々にたづねしに彼息女の事。く御たのみあそばされければ。是もひ

とつの忠とぞんじ。情なき命を取て大人の御難病快氣あそばして後。過分に御褒美請てなをするのたのみも有しに。是戰場の高名ならず。かゝるはたらきにて家さかゆる事天の道にあらず物悖て入は又悖て出るならひなれ。是以て本意にあらず殊に息女の寂後の事。思へば／＼さだめなき世なり。俄かに主君へ御暇こひすて。出家のねがひ誠なりとさしそへぬきて髻をはらひ。流轉三界中恩愛不能斷棄恩入無爲眞實報恩者と唱へて殊勝なる身の程。母もむかしの恨みをひるがへし。なを佛道に入ぬ。扨下〻のものはちり／＼の別れ其身はそれより奥の海松嶋に隱れて。道心堅固に老の浪立眞如の月七十餘歳の秋のはじめ世を見果給へり。

一　先例乃命拾ひ

古代愚なる人にいへり。我身の外世の事にかまはねば。何か氣に勞する事なく。おのづから命を延るの德あり。其比近江國淺井の何がし所の仕置として。古き籠屋をあらため其作事成就して番匠の作法にていかなる科人なり共一人は乞請一命を助くるとなり。折ふし志賀の町人喧嘩をせし相手は堅田の者。所は淺妻の遊女座敷の酒に乱れてぬきあはせいづれの太刀先あたりてやら。うかれめにつかはれし鬢切少女壱人。老たる女壱人共座をさらず相果ぬ。互ひに深手なれば。兩方の親に御預けなされ。養生無事になりての御詮義。切れし者は當座に果。外なる者は身をおもふがゆへに立のき。此首尾見とゞけたる人なく。二人があやまり同罪に極り。二年あまりの籠住ゐ形もむかしにかはりぬ。二人の内しがの何がしは大工にゆかりありて此者の命を乞けるに。古例に任せ願ひの通りくだし給はり。役人籠屋に行て御助の段〻申渡せば。大工御訴詔申あげられ此たびの赦免有がたし。されども私存寄の一通り二人同し科にて迷惑仕るの處に。内緣あつて一人命をたすかり。相手の所存ふびんなれば此難のがれて嬉しからずと身をかへり見ず出ざりき。此段かさねて言上申せば。町人には心ざしを感じ給ひ。二人共にゆるされ己が里〻に歸りぬ。此大工先例をもつて助けし命を自分の發明にしてかくはなせると。それよりはいらぬ所へ分別出し。公事裁許口論あるひは夫婦いさかひの事までも曖ひにかゝり。言葉ならぶるを人のかしこきは是と思ひ。物にかゝるを次第におもしろく。一筆かくを幸に。無用の目安に氣をつくし。天理をそむき

形も悪事をたくみ。非を利につくりなせばとて。奉行の知眼にあらはれざる事あるべきか。諸人に難義をかけて。國土の費をなして。虎落といふ悪名をとり。何の德かあらん。今時の人間相應の利發なき者はあらず。人の智をかる事は大むかしになりぬ。胸當して乳房喰ゆる子が翫遊びも。合点せねば取がたし。まして横に車を共みちゆく事一足も絶たり。いづれ人程各別相違なるはなし利德をすてゝ公事さたきらふもあるに。身のためならぬ事を物好なる公儀だて。とかく世の中につきぬもの悪人ぞかしかの大工身にそなはりし家職墨かね角水の見やうはおろそかにして。朝暮分別して棠陰比事など枕にし夢にも是をわすれず目安つくりといふ名利にかゝはりける。ある時さる屋かたの奥座敷の內普請仰せ付られ。さし圖つかふまつりに御內證へ通りしに。御前様の御居間と思しき所は羅綾かゝりて紅井の引綱玉の鈴音なし。廣庭にははなち飼の唐鳥局〱の入口に其女の名のみおもしろく幾世川。紅葉のはし關路の夢琴の助などいふすゑの人までも見ぬに思ひやられ。それより御意にまかせ常は男のまいらざる所迄

めしよせられ。職人は心のまゝなるは腰かゞめたばかりにし恐れず御前に出しに殿樣ひそかに仰せられしは。惣じて此座敷切に万事をさたする事なかれと。世間へ遠慮あそばしける。其後は御心をゆるさせ給ひ角からすみまで見ぬ所なし。御學文所の片陰に今十四五なる美女の命も頼みすくなき程いましめられ。下髪に中程すぎまて焼のぼりて哀れに物かなしく。いか樣子細有べき科人とはおもひながら。大工御前を憚りなく。あの女郎の御とがめ。程はぞんせね共それ人間命を断事天また其身をとがめ給へり。それがし命をこひうけ共まゝ出家となし。うき世すてさせ南都法花寺にをくらんと。長口上段〲申あげしに殊の外御立腹番匠ならばおのれが手業の錐鋸の事こそ役なれ。誰たのむもなき訴詔かは。さつするところ此ものめは。かゝる内證の事其外への取さたよしなには申さじ。とかく曲ものなるぞ宿にかへすなと。白洲に引出され是非もなき命をとられける。此大工分別なくは長命たるべきものをとこれをなげきぬ

二

新可笑記　巻二

目録

四　兵法の奥は宮城野

武士ハ其家の道を心がけ[illegible]

五　賤の腕は山吹の花

武士ハ主君の恩をわすれざる事

六　遊びハ八百の鐘

武士ハ無事も道を忘れけるなり

〔二〕炭焼も火宅乃合点

古代より欲心に身をほろぼす事は常なり。播州飾磨の市立さかりたる野屋つくり。都を爰に見る錦のあけぼの。むらさきのゆふべよき絹きたる商人あれば又割織の藤衣。春の花見ぬ山賤も。梢をしるしの宿にいり。一盃のたのしみ晋の劉伯倫が鋤鍬にかへても是はと松林に牛をつなぎ捨。所〻の篝立のぼりて。天もゑゝり。又室君をまねぎて秋のはじめのかりまくら。是を假令て楓橋の夜泊かと思はれ。心はそらに鳥鳴て。明かたのわかれをおしむも有。かぶき踊かけ的武士民も入みだれて自然の鞘あて。手つよくとがめて所の商賣人を切すてにしてまぎれ行を。大勢とりまきつゐにとらへて國里を問ど更にこたへず。いか様曲者とさたして市の奉行に斷り。まづ籠者いたせしはおのれが覺悟の所なり。此者の親里は津の國有馬郡なるが金銀十分の有徳にしてそのうへの仕合男子弐人すゑは娘なりしが。此中男子市の喧嘩を仕出し。思はざる外のなげき。母一しほ此事にふしなやめど。父は前世のさだまり事と察らめ人をうらみず。我子をおしますたゞ常にかはらず。此人むかしは池田山のおくにて。白炭焼てわづかの煙たてしが。正直の頭をよごし。身をけんこにはたらき。世わたりにわたくしなく。是天性の分限。一國壱人と名をさゝれて。なを徳に入道をまもり。貧者をすくひ病者は湯治をいたさせ。野夫には稀なる人ぞかし。妻はおろかにしてのがれぬ子の命をなげきぬ。さもあらば今の世の人心。欲でかためし時なれば。金にて命買る事もあらん。年〳〵つもりし金銀は。かゝる時の爲なりと。弐千金二はこに入。十四になる娘に申ふくめ。是にて兄が命を乞請よと人しれず内談するに惣領の何がし聞付腹立して。我有ながらふかひなく妹をつかはされしは。世間の取さたにあふといひ。弟がいふ所も口をし。此事には是非共それがしをつかはし給へとねがふ。母は尤とおもひ入いろ〳〵すゝめ申されければ。無用とは思ひながら然らば妹もつれてまいれと。道をいそがせける。飾磨につきて奉行の屋かたにしのび行かの弐千金さしあげ。父がをしへにまかせ迚もかへらぬ命なれば。切れし人の親類へ香はなのために此金をつかはされ。何とぞ御心入をもつて。籠者を御赦免をねがひ。兄弟の事なれば替るへき心ざし女の面にあらはれ。奉行ふびん發りて千金にては

となげきを申せば弐千金共に返して。我をうたがふ所心外なりと。すでに籠者の出し時。此うち有馬郡の何がしは。人の命を取しもの。是を御たすけあり

ては。世の掟立がたし。神のあはれ見給ふもさのみ科なき人の事なり。かさねて其道理を申あぐれは御僉義極りて其もの一人は首うちて。かの兄弟にわた

それか跡を弔らはせ。又千金は娘にとらせ兄が命をたすけんと。しばらく工夫をめぐらし。先弐千金を請とり。共ものゝ命の事我にまかせよ。此事かならず外へもらすなと。みつ／＼に約束して既に其日の暮待て奉行は城下にかけ行。世にはふしぎ有。われ高砂の明神とあらたに御聲して。市町は國家繁昌のためなるに。わづかのとがめに籠舎の難義あまたなり。此所衰微のはじめ是なりと礒松風あらく浪さはがしき御つげなりと慈悲の心から此いつはりを言上申せば。人をたすくる天理にかなひ。科人残らず御赦免の上意蒙り此通り申わたせば。万人のよろこぶ所なり。彼惣領俄に欲心發り。弐千金は過分なり。千金にても濟べしと。然も籠ばらひ極まれば此訴詔子細あらじと又奉行の許に行て千金はわれ／＼渡世の種

せば。妹がなげき兄が後悔かれこれつもる言ばの数。いふにかひなき戻りみち。いなの小笹を涙にそみ。やう／＼古里の母にかたれば。身もこがるゝばかりこがれぬ。父は更に歎きなく。はじめより此筈をまつにたがはず。さるによつて妹ばかりと申せしに。いはれざる兄をつかはしかくなる事と。無常を合点せらるゝ心の程いづれもふしぎして是をたづねけるに。兄は我貧賤なる時生じて一銭も世になき物と惜ぬ妹は長者になつての子なれは万両も瓦石と思ひ。欲をはなるゝより命をたすくる所ありと。此断りにをの／＼道理をかんじける。人をころして命をとらるゝは職也とそれより万事をうちすて。うき世の望み絶て尼が崎うらの初しまに身をかくれ。汀に釣をたれて其日喰ほどのいとなみ次第に老の浪かせ立やみし時あし火のけふりとなつて此世をみなになしける

〔三〕宮女は人のしらぬ[illegible]

古代武烈王の御宇に。天より火を雨にふらせ万人のなげきやむ事なく。石室を築き難をのがれぬ。是御政事たゞしからざりし故也。共比御寵愛の宮女に

曉の少納言といへるは。古今の艶容秋津洲の外にも又つゞきて有べからず。此后に御たはふれ輕からずして。白駒の穴隙を過るも惜み給はず。近山美花もあだにちりて。御輿は燕の巣に埋れ榮花はかぎりなく命は定めあり。此美君兼て心痛のなやみもつての外に氣ざし。忽ち世をさり給ぬ帝王永離の愁に沈せられ。なき跡の面かげを自ら御筆にうつさせ給ひ。洛陽の北山に木眼こじといへる仏師の名人に。彼きさきの像を刻ませられしに。勅命なれば三日三夜につくりたて彩色地紋に心をつくし。眉墨をかける時。筆とりおとして胸のほとりにすこしの墨の付しを十二ひとへの襟したにかくれさのみ目たゝぬ所なれば。其まゝにしてさしあげける。是を叡覧有てむかしを今また御衣の御袂につながぬ玉の御涙ひる事もなく。此木像をつど／＼に見させられ。かの落筆の付墨に御心をうつさせ給ひ俄に玉眼御氣色かはりて。此灸穴はむねのいたみをやすめんため。自しるしを付てふたりよりほかにしる事なし。此仏師曉が肌の事迄わきまへたりし事はと無理にふしぎをかけさせ給ひ。いかなる内通してかゝる事しれる

はいづれ曲者と御うたがひの晴がたし。太公が詞に罪の疑しきは是を輕し功の疑しきは則是を賞す何かうたがはせ給はず共有たき事を。時の關白にもせんじなく下官の者ひそかに彼仏師をいましめ繋く番の役人も此とがめをしらず。まして其身に覺えはなく。是非をしらさるうきめにあひぬ。それより御歎きはやみて。木像をくだかせ給ひ。御惡しみ深かりし爰に曉の少納言の御妹夕日の太夫といへるも御后にはたゝせ給へ共。つゐに玉座に緣なくておはせしが姉君の御事ゆへ仏師の難義を思ひやらせ給ひ。諸神に祈誓の七夜まちをけだいなく天子にまみゆる事を願はせ給ひぬ。是身の程を思へる愛着の道にあらず。佛師が科を奏聞のたよりばかりの念願。まとは仏神の加護にや。其夜の夢心に玉座に入と見しより。淺からぬ御枕のはじめゆづのつまぐしなげて御心にしたがふと見て夢はさめての明かたに。まとはなくてふしぎあるは腰くれなひの衣裝寝容のどく有のまゝにおかせられ。宮女のうちを御あらためありしに。夕日の太夫の肌衣に極り。やかてめされて此事御たづねあそばしけるに。はじめよりの願

ひ事共御物がたり申せしに。是にあはれみをかけさせ給ひ。夕日がくもらぬ心のまゝに。仏師木眼をしやめんあつて。木像のむねなる墨の事御尋ねありしに。何となく繪筆をとせし事を奏聞す。天皇是をおどろかせ給ひ。御心ね自恥させ給ひし。其後御こゝろうちさせられ姉曉のわかれを妹の夕日に思ひをはらさせ給ひ。ちかふめされて宮つかひの身とはなりぬ。是本心なれば天も道理をてらさせ夕日の太夫と世に名を残しぬ。かゝるためしは唐土にも呉道子といへる昼師の官女のうつし繪に。こぼれ墨其まゝに瘯子とうたがはれしも仏師木眼の身のうへにおなじ

〔四〕胸をすへし褒貶乃衣

古代戰場に師なる武士の傳へられしは。鎧さしものは人の目立ぬこしらへよし。いろどりはなはだしきはかける時いさぎよく。引ときすぐれて見ぐるし。敵もこれを目當にして何の益なき事ぞかし。一家中此秘傳同心して一切の武具を用意せしとなり。其中に何がしとかや蔦をでかしだてに一人ぬきんで。紅井の小旗おどし過たる具足何事も世間に惡うかはりて。人みな是を指さしける。其ころ關がはらの陣立に兼て武藝をはげみ。軍法を脩練して。此家中残らず手柄比類もなし。歩行達の者までも相應のはたらきそなへ外よりびゞしかりき。時に長柄もちの中より小男鑓をさげて。壱人すゝみてむかふを。首尾よく六七人突とめ健氣なる事ぞと軍中に是をほめける。かゝる時六十有餘と見えてかしらは雪をみだし。陣笠の淺きをかぶり。素肌の出立其身かろく鎌鑓取のべかけよりしに。鑓あはせずにげかへる。宬前の勢とは各別におくれ。殊更老人といひ。あれしきに何とておくれけるぞとたづねしに。あれは若年の時筆道の師匠なるといへり。その〳〵手を拍て一戰のせはしき時節に眼の正しき事を感じける。彼色よき鎧武者は進む時もしりぞき引時も一番のり。軍者の名言のごとく是を見かけ遠矢を射かけぬれば。紅影ゆへあやうき事たび〳〵にして。おのづから心をくれ敵に出合事なければ高名すべき行もなく人の感状をうらやみ。長柄の者が突捨し中に。乱れ髪に伽羅かほりて。歯を染たる首をひろひて。人しれず軍帳に留置。かさねて其名しるゝべしと御前よろしく手柄に披露申せし長柄のもの此くびを見て。是は昨日の合戰にそれがしが鑓さきにあはせ

四人めに突とめし御人。ちゞみかしらの赤眼其出立今もわすれずと。何心もなく其人のためにと題目をとなへける。拾ひくひせし人時の権威にまかせ卒尓も大方の事こそあれ。此武者おのれらが手の下におよぶべき物か。證據もなき虚言其上赤眼も白眼も眠れる死人の目をあくべきか。段〻不屈千萬と諸役人ひとつになり。理はくらく非は明らかに。御前は願ひのまゝに申なし。後代の掟と長柄の者はぜひもなき首うたれしを。みな〳〵ふびんにぞんじながら其人の威勢におそれて此取さた子細もなくしづまりぬ。此事若手の武者中間に惡み出し。何とぞ此非義大殿へ通し惡人切腹させ彼者が孝養になすべしかゝる手柄を諸人眼前にしてすゑの役人なれば。名を埋むさへ残念なるにまして御僉義うとく高名を人の物として。あまつさへ一命とらるゝ事さぞ口をしかるべし。此義はいよ〳〵惣中御訴詔申あぐべし。いづれも存る處内談はかたりしが流石一方の家老職にも成ぬへき出頭時を得たれば親類ひろき後日の事を此上ながら思ひやりて。連判の發端になる事われ人遠慮と見えし時智ある人のいへるは訴

詔の名書前後しれざる仕立ありとまづ一通をしたゝめける。

夫勇士及二一戦一立二一心一則得二勝利一速也祿不レ可レ依二多少所一以レ輕二一命一雖レ爲二士卒一守レ義而戦以レ功勝者是非二武勇之道一乎予爰有逆士莅二戦場一而徒不レ勞乎竊奪二衆之功一瞢二將之眼一於二陣所一截二着頭一其諍乎紛然欲レ決二之者還而陷二功士於非義罪一令二誅戮一事蓋有奸曲之同士一故也冀糺二佞士之實否一者當家之掟後代之警者也。

時訴詔の連判三十八人一命捨ての願ひ一大事此たびの僉義老中諸役人集りさま〳〵しづめ給へ共中〳〵御歸陣迄此事またぬに至極是非の御吟味あそばしけるにひろいくびに治定して卽座に切腹口をしき心底武のの名をくだしける。家中親類あまた堪忍なりかたくて。皆御暇乞捨にして出けり。あんのごく此くはたての申出し手。ふかく恨むにしれがたし。誰を相手にすべき人なし。有人此連判に氣をつけしに。其名書念の入たるをそも〳〵といへば墨かすりを見て書おさめと工夫せり又いへるは。中にも墨うすきを見とりて發端とさたしける。子細は一人すぐれてうすく見ゆるは墨の程しれず。書かゝりて薄き時あらためて書と見えたり。墨の濃は二番筆といへり。いつれも道理おもしろく慰みの僉義終りぬ

[五] 兵法乃奥ハ[illegible]

古代武藝にほまれ有人のいへり。人生れながらにして知れる物にあらず諸事の諺其道にいり師といふ者なくては叶ひがたし聞て覺え學びてしるは常といへど。我と工夫して事をはじむは何によらずうとし。世〻のかしこき人指南つたへて心の寄所をならひ得る事安し。今の世の人さかし過て。一を見付て十に取付。百ながらしつた貟もおかし。唐國も末世になり。いにしへの高名にまねたるもなかりき。釈迦孔子老子これらは儒釈道の精髓。軍者には諸葛孔明。勇者に北宮黝詩人に杜子美。本朝にも名僧弘法哥人に定家軍は楠かゝるまれ人の名をいひつたへ聞

ふれて殘れり。今時の人もすぐれたる人はすゑの世にかくいふなるべし。惣して考みるに親より其子万事におとり其孫をろかに親にまされるはまれなり。第一人間以前とは氣根おとりて諸事の藝者も極意まで習ひ得る事かたし。醫學も一年にたらずして俄剃の天窓をふり長羽織に小脇指藥箱丁寧に拵へ。我を見しらぬ他國の大場に住居して名字仰山なる張札門柱にあらはし。化粧作りの玄関構押出しての療治するなど。人の命は大切なる物なるに此生死のさかひ。ふたつひとつの大事藥師人を殺すとは是なるべし。又茶の湯は和朝の風俗人のまじはり心の花車になるのひとつなり。是に入ての德は常住万事に氣の付所各別なり。武士も我役の一腰は其まゝ此付合も手ぬきとはいひがたし。今の町人茶事は榮耀と心得。諸道具に金銀をつゐやし數寄屋長露路に商ひはんじやうの地をせはめ美食を好み衣服をあらため。よろづにきよらをつくし。此耆に家をうしなふ人。さはいかしこき京都にもあまたなり。さはいへと此事わきまへなきは。人間ふつゝかにして口をしき事のみ。あるひは欠茶碗にしても其心ざしひとつなり。元是作意なれば一通り手をひかれ。其上の道理さへつまらば何事にてもくるしからず。世のたのしみなるに。皆人心つくせし振舞にあひながら其座を立ば。花の生やう炭の形をそしりぬ。是ならひえて茶入の名を付て見る程には。おつ取て十年のけいこなくては成がたし。惣して連誹立花ひとり狂言。かやうの類は銘〻の自慢。さしあたつて善悪のさたもならざる事なり。手跡鞠音曲なとは忽にしれて人に目有耳あり。殊更兵法は勝負立所をさらず。一命至極の大事。武士の患に執行するなど故なし其比仙臺に一流の達人ありしが我身ながら末理に開き所を考へ。宮城野に行て萩の枝折の道ふさぎ。請太刀ためなる家來二人の外は親類にも對面絶て十八年のはけみ。今はかうと世間を恐れず。又城下に歸宅して。右の外流長鍊の段〻言上申せば。是家の重寶なり工夫極意の所。一家中に傳受して自然の時はいづれにても一分のはたらきをいたせる程に。其指南申べし敵にかならず勝利の事一人の爲になす事はいなしと此上意を請て執心のかたへは心底殘さず望まぬ方へも是をすゝめて。昼夜骨をくだきてをしゆるといへ共。極意からは目に見えず。心に遠くなをまた手づまも叶はず。元からたゞせば退屈して中絶する人あまた

なり。其比又出頭の何がし取持此御家を望む兵法の名人風俗すぐれて唐作りの大男黄石公か生れかはりといはぬはかりの皃つき。家に有たき物とて少知をくだし給はり是も當流を指南新座古座ふたつにわかり。武藝論じ。是より事つのつて師匠の兩人御慰に立合いたさるべしとわか老中の大望なり新座の人すゝみて。兼て願ふ所と御請を申されし。古座がたにはしんしやくして先老足と申。殊に十勝流と立られし高名の方に仕相の義御免と再三の断り。其通り濟てそれより一家中新座に思ひ付て。古座の門流是を見かぎり。殘らずかたつきそれ〳〵の手うへあり。此人に印可とれとて前後をあらそひける。程なく三年過行家中此一流を習うけ。道理大かたに合点し。眼力あきらかなる時いたり。古座の師匠立合の御訴詔申あげ廣庭にして御上覧なされしに。新座の兵師一刀あがらずして皆請になつて負色三度に及びて興も覺ける程なり。此時埋れし名をあげ國主の御機嫌淺からず。家老中次手に尋ねられしは。何とて最前は立合遠慮ありしぞ。廣き御家中なれば殘らず相手になり指南もなりがたくけいこの足代と

申あぐれは此事感じ給ひぬ。其後大事をいづれにも傳へて新座者に立合けるに一人も打かたずといふ事なし。兵法の極意より何にても見えぬといふ事なく。德有奥義物かたりせし折ふし。參州より名譽の錬磨して御慰みになる者來りて。座敷に市の棚かざらせ其賣物盗むに脇から大勢眼を付しにこれを取事見出す人のなかりき。彼兵法の師罷出て目をふさぎても取時をしるべしと申されければ是も一興と目なしとちして立出。くだんの術者を先に立大書院を過る時。それとつたと聲を懸られしに。隨分はやい所を何として見付給ふと巻物を取いだせば。をの〳〵横手をうちける。彼人申されしは。取所はしらね共そも〳〵左の足をふみ出すより。それに揃て行しに。俄に足とりはやく拍子のちゞまる時。それと詞をかけけると氣のつく所を語られし

五　死出乃旅も約束の馬

古代より祈り傳へて江州多賀の社は壽命神と諸人あがめ奉りしに諸願かなはさると云事なし毎日神前にそなへし御寸御供ともに。其うつは物ばかりになりぬ。あまたの宮人立會是を奇瑞

と神に威をましてさたせり。年ふりたる許宜つら／＼此事を思ふに。正法に何かふしぎなし。をの／＼御番の油断と申せしに。それより氣を付神垣をまもりしに。夕ぐれのさびしき松の陰より老人夫婦まふで來て彼かはらけ鈴などを手毎に手づさへて。南のかたの階のもとにして心よく酌かはして立歸るを。大勢立かゝり是をとらゆるに。此二人さらに動ぜす。いかなる者にてかく神前をけがしぬる。其罪ふかし。奉行の役人にわたして末代の掟にといふ。老人笑てかたじけなくも當社は命を守らせ給ふ神ならずや。此兩人は家貧しく世をわたるべき舟もなく。老の浪立恥をすつる身に何の病もなくて命のおはるかなしさに。しばしの程もおしまれ。きのふもくらしけふもまた御供に命をつなぐと語れば。智ある宮奴是を聞わけ。むかし唐土にもかゝるためし有。天子不死の藥酒を仙人の傳へにまかせ。自ら是を製らせられ又もなき名酒なれは御重寶の第一瑠璃をのべたる壺中につめさせられ。寶藏のいぬゐに深く埋み此酒隱して呑る輩は卽時に命を斷べきとの御添札宮中是におそれをなしけるに。東方朔勅封を切て心のまゝに酌しを。是を預る官人見とかめて忽ちにいましめられ綸言出て歸らぬ我宿の別れ旣に其場に成し時東方朔がいはく。我まつたく一命惜きにあらず。此酒の科に此身を害し給はゞ。不死の名酒の德絕て。命の今終る事はといへり。此詞をかんかへさせ給ひ。其難をゆるし給ふとなり。今又此兩人が命をとらば。壽命を守らせ給ふ。大明神の威力うすし。子細なく老翁老女をかへしける。此夫婦の人。もとは遠江の城主に仕へて國民ゆたかに政道正しく文武兼たる侍諸人の惜む身を隱し。今此湖水の東の礒に濱びさしわづかにして。住とは人のじらまじ。何となくけふ迄は夢のごとくに暮されし。其おりふし昔の友とせし人爰に有事聞傳へ。京都の使者をうれしく。尾張の宮より道替てやう／＼此浦に尋ねよりて。過にし事を語るに身の程いはす。人をとはず命あれは又あふ事もありや。我は隙其身は勤め。爰にとゞまる人ならず。いざ行給へと。あるじの方より別れをいそぐ。せめて此人の妻にあひて渡世のたよりの物を送りたくしばし心を付しに。是も以前の奥住ゐわすれず。人にあふ事を恥て村雀の中に行隱れてつゐに出ざりけり。さのみ暇乞までもなく立行とき何にても我に望みなきかと尋ねしに。此馬は國にて見

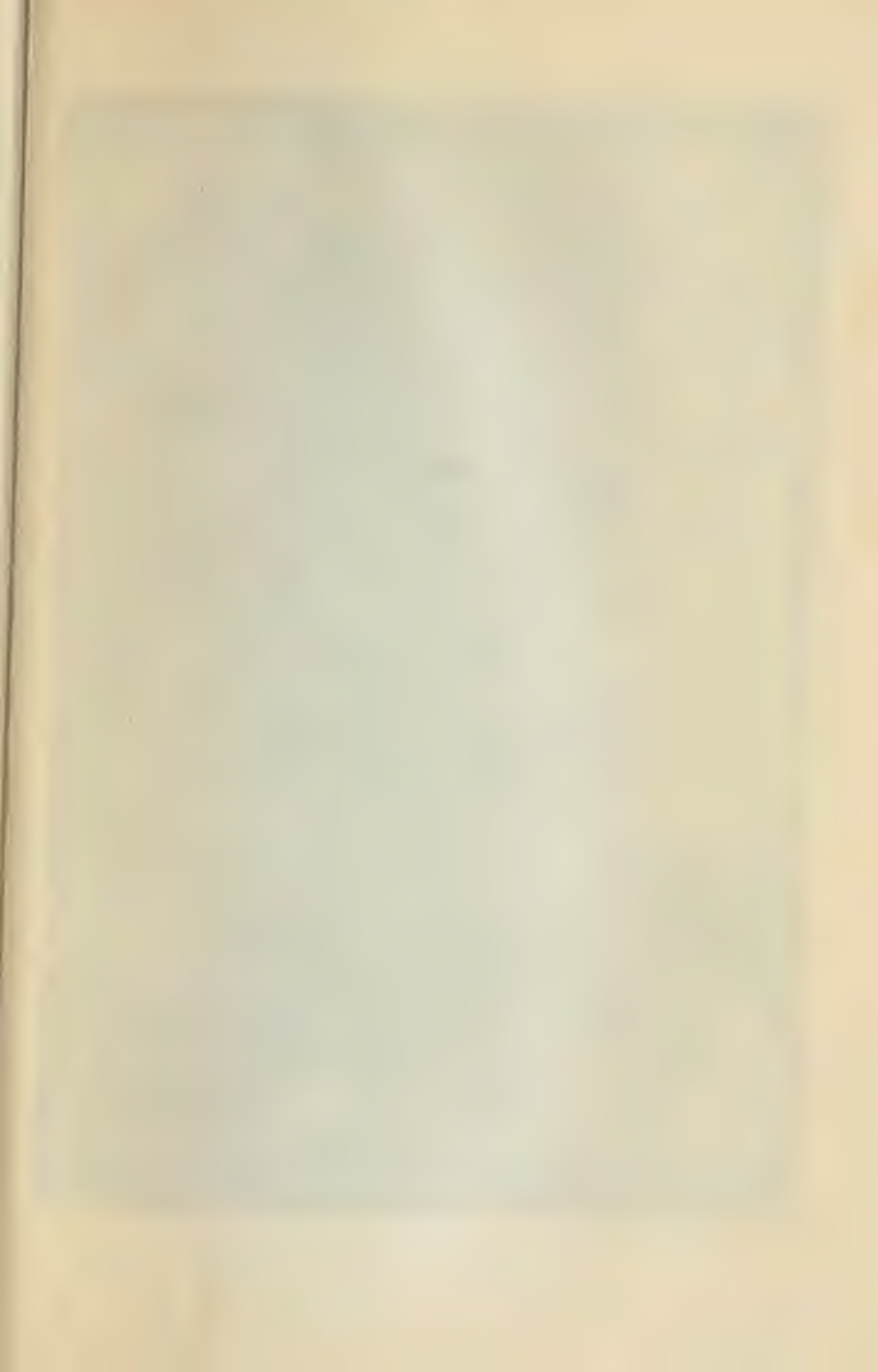
しより今なをほしき物といふ。それ社やすき事なれ。此たひ乗替引せねば京を勤めてかへさに残し置べしと。假初に約束していそぎ都に立こへ。十日にたゝぬ道を歸り。かの老人を問寄しに。其ひとつ庵は野となし麦の種まく里人に尋しに。其夫婦先後四日の中に相果られ。それなる山陰に人の哀れをかさね。ふたつの塚に一つの桑を植置しこそ老人のしるしなれとこまかに語りおはれは。聞に魂も消るばかり夢とはしる世のかなしやと。彼塚にふして愁歎に日もくれける。是は契約の馬なるぞと塚木に是をつなぎ捨今は死人の馬なれば黄泉の旅の助に追付と主人有みの日数なく本國に立歸る。誠に武士の義理なりと。心なき野夫感て木陰に草葺拵て二年餘り飼殺しけるその鞍鐙ありのまゝに露霜に朽行共誰か取ける人もなく末の世の土とは成ぬ

六

古代無常迅速の理りをさとりての詞に。人の命は朝露夕電のごとし。鳥部山富士の烟の立替りても同じ。其比駿河の府に京絹の商賣人何がしとかや。町

人ながら先祖は高名の武家なり。身袋有徳にして住なせる所につゞきて軒をならふるはなし。然も屋継の一子廿に一とせたらぬ身の。利發千人にすぐれて世わたりをしれば。家財をわたし親たる二人は樂しみを極めぬ。妻女は武家かたより縁組申かはして近き比によびむかへる吉日も定まり此一子朝暮物毎に工夫をめぐらし大〻將棊をさし得て。是を我宿の亭にしかけ。心の駒立うごきて魂ゐ盤にのりうつりぬ。是は唐土人さへ相手をさだめず。辻堂に搆へ置初手をさし出し置ば往來の好人立入一手さし捨て通れは共跡こなたよりさしかけ。あなたから取捨。王手さしつめ置ば。にげ所を思案し。一番に半としもかゝれば隨分氣のながい國の人さへ。是には退屈して。かぎりをしてはさゝざりき。まして和朝の短慮なる人の慰みには用捨すべし。彼一子明くれ是にさしかゝり。外をわすれ大かた正躰はなく。有時友をあつめて駒をならべて。其まゝ眼色もかはらず皃常にしてひざもうごかず頓死する事いづれもおどろき。醫師針立をよびて生藥をあたへけるに。かつて咽をとをらず。はりさすにしるしなく。灸も土にすゆるがごとし。二親なげきかなしむ事世の常ならず。かゝる死人は三日まつべき語りつたへといふにぞ頼みをかけぬ。頓作なる人のしらせて。先占を見給へとて。富士の根大宮といふ所に。安部の清明が的傳およそ三千世界を見とをしめいよの陰陽師をまねき。是をうらなはせしに是までの定命非業ならねば。神力かなはざるといへば。更にまた泣出し。せめて寂後にことばをかはしての上なれば思ひ切べきうき世となげきのやむ時なし。占の人見るに哀れのふかく。母親の心をしづめ佛神のひかへにして二たびよみがへりのあるまじき事にもあらず。むかし吉備大臣入唐して歸朝の時。天にこゑあつて其人は日本第一の智者生命十八歳とよばゝる。其時の帝王是をあはれみ給ひ大唐の權者たちをあつめて生活續命の法を修せられしに。地よりも聲をあげて吉備大臣は日本第一の智者生命八十歳と呼ければ。無事に歸朝して長命たり。是十八をかへして八十と轉じたるゆへなり。されば唐土の魂呼とてむなしきからだを呼生たるその例おほし。今は末世なれば一たび正氣付ても又百日めにかならず絶命とかたれば。かさねての別れは覺悟なり。よみかへりの面影を見る事ならば何か思ひ殘さじと陰陽師に頼めば有無ふたつの道理

をせめ。心中に祈念して此家のけんそくあまた屋の棟にあがらせ傘をさゝせ。其死人の名を三時二刻ばかり呼つゞけしに。ふしぎは左右の手を耳に當し。是にをの〳〵力を得。其手をはなち天井板を引破りてよび立しに。諸息次第につのつて左の豚有しむかしに替らず。正氣になりぬ。是はといづれもよろこび。かなしき事はわすれぬ。されども百日の立事安し。長命を祈らんと國中の諸神に願状をこめられ。此事一子に語りかねしが。其身の心得にもなりぬべきと。とかくはいひ聞せけるに。此一子覺悟して。それ天地は万物の逆旅光陰は百代の過客。爰のかりねの枕の夢。なをまた我夢の覺ぎは定つて百日也世の思ひ出に樂みを極め一日一年にあそび。春の花を秋見る事の細工に咲せ淫酒美食に昼夜をあかし。ひんしやをあはれみ。寺社を建立し此うへ何か思ひ殘さじと。次第に日を折て天命を待しに。宿前縁の契約せし日限もちかづけば。此息女をよび入。各別に氣をかへなば。命のながらふる事もやと。是を取いそぐに。又娘の親のかたには迚も餘命なき人に取くみ。ほどなく後家とならん我子のふびんなりとて中〳〵おくるさたをやめけるは。是母親の愚癡なるゆへぞかし娘は各別の心ざし。いひかはさせられし夫なれば。たとへ一日のわかれも千とせの枕にかはらじ。是非にまいりて其人の宿後見とゞけ。其後はともかくもといひきるにぞ。此道理にせめられ娘が心入にまかせ。其吉日をまつぐれになりて。夫のかたよりいまだ添ざる女に。暇の狀をつかはしける。幸とよろこびしに。娘は泪にしづみ。扨も心ざしかくある人にまみへぬ事。我一生の因果。すゑはしれざる事ながら。死後にいたりて自からなげくべき事をおしはかりて。いとまとて此みのうらめしやと。それよりは取こもりて。かりにも人にあはざりき。彼陰陽師が申せし。其百日に當れば。氣を轉ずるためとて安倍川に舟をかざり鳴物の藝者揃て。いづれ酒にみだれてわざと前後をわすれ。夕日宇津の山邊に影入。けふの暮るをうれしきに。船中いひあはせしやうにしばしうちはやししづまる時。凩の森のうちより。木たまのかよひ其人の名をよぶ事正しく耳にいれば。本人はなを心ぼそくなる時。隨分氣力を付て舟をいそぎしに。次第にむらからすのごとくよびかけ。其かたへたとりゆく心になりて。魂もうときおりふしをの〳〵よびかへせど。こくうのよび聲ま

さりてつゐに息たへにけり。かゝるためしも有物かとなきあとの歎きやむ事なし。是を聞つたへてかのむすめ後夫をもとむる心底なく。黒髪みづから切て其人のぼだいをとひ給へりまことに武士の子なりけるとぞ

りのかれ　三

新可笑記　　巻三

目録

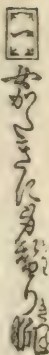
一　世の勇気は力の鍔の柄
　　武士は遠慮を勘する事

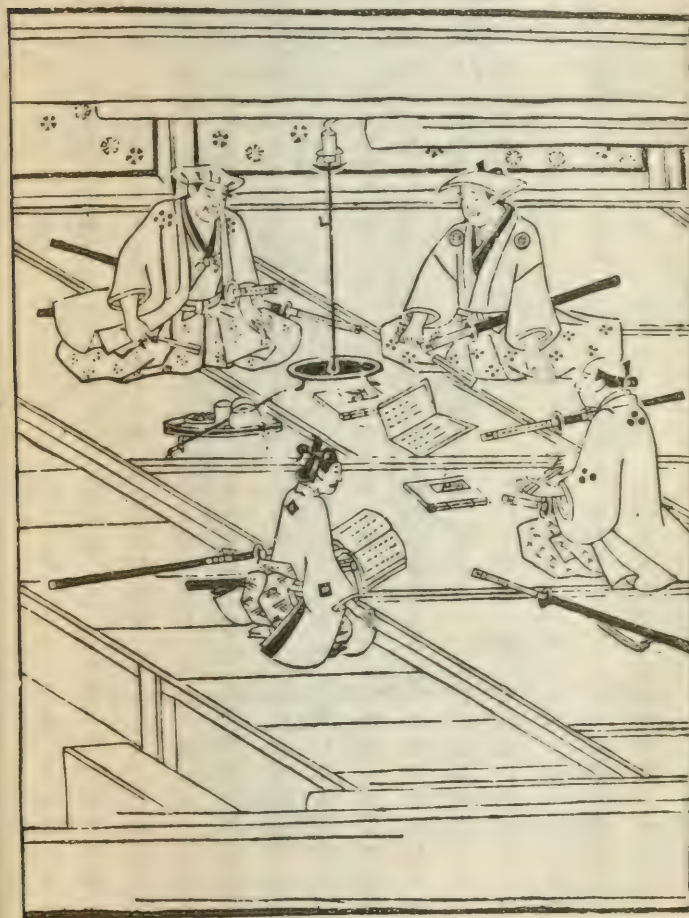
二　国の掟は知恵の海山
　　武士は斎筵より悪人あらはす

三　わきざしのつまみ所ある偽
　武士の面目沙汰いたしき事

四　才は海のごとし儀身の事
　武士は重の仰ききとしく不審て候事

五　気やうなしよき天下惣段
　義理は善悪の二道できり

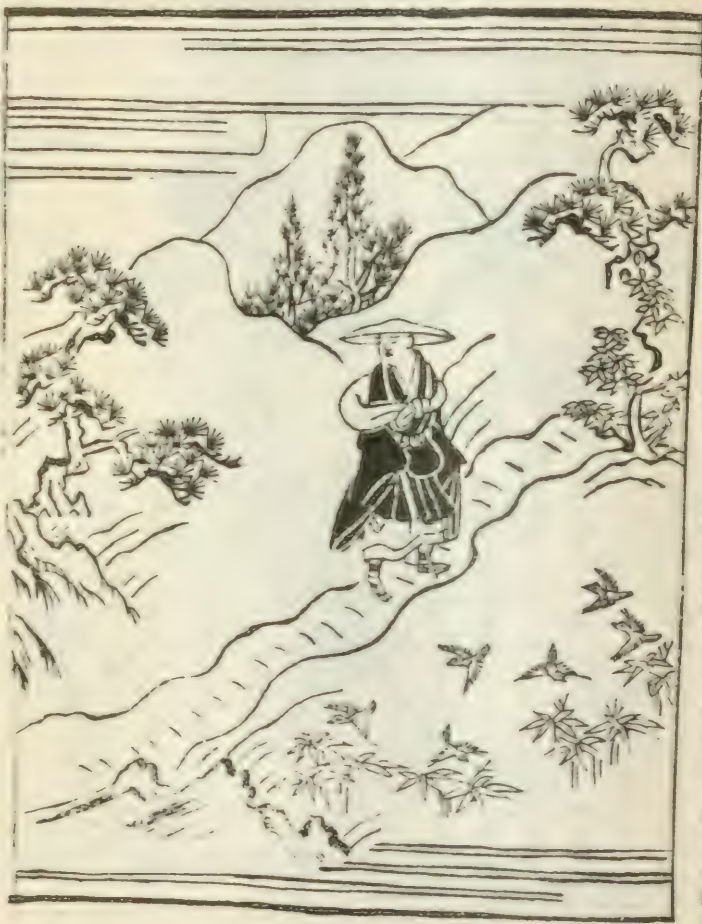
【一】女がこゝろに男念ひ切

古代河内の國守に仕へて其家の仕置者となり。万人此下知を請るは正道自然とあらはれ人の中の人有。家に杖つく年まで堅固に勤一子に家督を讓りそれより身を隱し世の善惡聞もむつかしく。城下をはなれ。片山里の花月を友とし。秋も淋しからず。春も面しろからず菀ゝ然として一生夢に物いふども有時母衣大將の何がし此離庵に尋ねいり過にし物語のつゐでに家中子細なく治る事御子息御自分に增りて掟正しきと褒美仕ふまつるに。それがしが悴子ながら。女敵うつ程にはあらずとばかり座興は一言におはつて其人は私宅に歸りぬ。かしこき人のいへるは假初も金言と是を感じける。此人初妻病死の後は年久敷獨り暮されけるが。世に有ならひ家とゝのふるためとて。一門取持て他國より幸の緣にひかれ。後妻をもとめられしに最前に增花年わかく美形なればこしかたの思ひ晴しにも成ぬべきと人ゝ悦び婚禮の酒くみかはして。千秋樂を謠ひ納めぬ。此息女器用形氣にして琴哥道までに携はり然も心ざしやさしく。夫につかふる事をろかなかりき男女の中心のまゝならぬは是惡緣にや。諸事順熟せず。され共疎み果古里へ送る程にもあらず二年三とせ過行ども若無にあひしらひ給へば。すゑ／＼女房共に奥ゐといはれたるぶんにて。心かゝりの月日をおくられける。一切の女其夫の心ざしひとつをたのみにして。國里万里をへだてゝもありつく物ぞかし。其男につらく當られなば。女の身にしては世にかなしき事是より外はあらじ。此内方にかぎらず。男情なき時はかならず惡心さしはさみ一命おはる事をいとはぬ族は女ごゝろなり。あるひは子の有中は是にひかれ。親のなき人は入まへ案じ是非なき堪忍是ぞ女たしなみといへり。また夫婦あひ別義なきを姑よしなき事に暇いだす天のとがめも有べき科なり。又妻をもとめて兩親に不孝になる。我さたに及ばぬひが事。世に人といはれて住るは内外ともにむつかし。惣じて武家の内證かたへは從弟までの出入尤の掟なり。とかくは他の心やすきより不義も發る事なり。此人賴もしき浪人四五人も出入させ。身上取持給へりいづれも御厚恩にあづかり奥迄も出入年月町家すまひにて送りぬ。此中に何の何がしとかやいへる浪人。色好み過て是より身の難義をせしに。それにもこりずして作り

眼してめしつかひの女などに言葉やさしくかけて。細工の疊紙など出しけるは侍のみだりがはしき仕業なり。かやうの事より内義の心ねおかしげになり。日ごろ夫を恨みさし出脇へ心かよひぬ。彼浪人此色をみて思ひかけそめ隠しふみ遣しけるに。我もはしり書はすれ共外なる人に賴て。こま／＼と書したゝめ。いかにしてかかよはせ。其後は忍ぶ事たび重なれば。人もさたして奥へかよふ男ありと大事をかまはず下〻よりいひ出すにや。奉公人の出かはり時より名の立ける亭主心もとなく人しれずせんさくするに。件のふみかよひ見出し。口惜き事むねにすへかねしかさいせんかしこき人の女敵うつ程の者にはあらずとの御一言。爰なりと落付て思案を廻らし。譜代の侍一人つれて心ざす日なれば。二上が嶽に參詣と朝とく屋かたを出て。生駒山ふかく分入て里人を招き。年へし狐の入事ありとて金をあたへければ。もとより狩人の手馴し業しばしのうちに取殺してこなたへわたしぬそれをすなはち鷹づゝみにして下人に持せ。夜に入て私宅へ歸り。今宵は霜よのさびしきとて日比うたひの友とせし人あまた集

め夜半の鐘を下人と相圖して廊下にて彼狐を斬ふせ。何か忍びし曲者切けるぞ。やれともしび〳〵羽織くろし丸頭巾かづきしぞと聲かくるに。座敷をの〳〵うたひさしてかけ付さて手燭ふりあげみるに。背のはげたる狐の脇ばらより切さげられ。是より外にはなかりき。いかさま人にも化へき有様皆くゝおそろしく。其まゝ捨て何の子細もなし。扨は此ほと申せし事此狐の障礙ならんとさたして。心のとく世上しづまりて後。一年過て女はさとに送り返し。いよ〳〵其身は別条なく役義を相勤め諸事の首尾よく御加増まで下し給はりぬ。其後分別するに。此密夫此まゝに置事も無念なり。然れ共いづれを思ひあたるもなし。なをまた筆は見しらず氣をこらす程工夫をめぐらしけるに。紫の女清少なごんが作れる草紙の詞ども書まじへて文章のけたかき事をかぞふるに其手跡は残らず見しり大かたならぬこび者の心をはこびし。ぬ。此一兩年京都のものとて御城下是をおもふに哥學なき人のなるべき事の町はづれにかり宿して哥書の講釈すにあらす此家中にて其道執心の人ゝるもの有のよし是のみおもひつけて

其もとに尋ね行。自筆の物など事によせて見あはせけるにうたがひなく最前の同筆なれば。あたりの人をはらひ密〳〵にかの状を取出し。是そなたへ頼みしかたをひそかにしらせ給へ。さもなきにおひては其方一命極る所なりと。一すじに責かけ眼色かへてとはれしに。此人おどろき陳するまでもなく其名をさしてわりなく頼まれける程に。何の心もなく書つるとはじめを委細にかたれば其身に科はなかりき。しかれば此事此のち他言せらるゝ事なかれ。外にもれなは其方命のおはりと起請して。彼浪人よひ寄ならの都の八重櫻見に同道して存分に打て捨。此事世間にはかつてしらす其家なかく榮へし

〔二〕國の掟ハちえ乃海山

古代大隅の國司に仕置者あり。最明寺御修行のごとく。虚病をかまへ親類にも對談せす。まして外人不通になりて。御役義當分我にまされる功者に預け其身は廻國の道者にまぎれて。一とせあまり城下はなれて國のすゑ〳〵を廻りしに。申せば一國なれどこまかに見る事果しなく君が代の日のもとの海山。おもひしられける。拵てさへ旅のかまどはおもしろし。実のある修行いかばかりとぞおもふ。津に入ての舟商人。里に行は稲臼の音のみ己がさま〳〵の世わたり隨縁眞如の浪立ぬ時なく。毎日人の面を見かへ山の形も松相柏おなじからす。岨つたひの一むらにも一大事の寺を立。林の中に小社あり。藥師らしきの法師の手習の指南又疊を敷たる家居もありて老後の思ひ出に二三人ふしこそあはね。曲舞うたふなど野のすゑ山のおく迄も人の心のむかしとは各別になりぬ。又分別此の男とも高聲にさたしけるは。仕置者の知謀をいひ出し理非はしれる事爰は慈悲の有べき所。是はあまり手ぬるしなどとて。濟たる裁許を評判して石流其役人とて。兩方言句を絕して尤至極に濟されけると褒美をするを下ゝの口からは慮外とも思はざりき。惣じてかゝる扱の理非の二つは明白にして。其所の者ならて子細をしらざる事あり。遠國の出入を都にて聞届け然も非は聞をよく。理は正直を頼みに物ごうとく。弁舌ありゐ者有。とかくは疎略にする事にあらずと。野夫がそしりに得道して是ぞ修行徳とよろこぶは。其身正道發明なるがゆへなり。それよりゆきくれて民家の所に一宿せしに。戸にかけ金なく。都にくるゝもせす心やすき

境界は用心の事尋ねしに殿の御仕置よろしく盜賊海賊絶て戸さゝぬ御代は今そと語りぬ。明て又の日は時雨に道もはかどらす。やう／＼三里あまり行て旅泊の夢も結びしにあるしあらけなく門をとぢて灯火消すも有に。燧筥取まはし山刀枕ちかく置て旅人も夜さとうましませ是程念を入たるうへに其油單包み盜まれ給はゞこなたの御損と氣を付けるいかなる事ぞと尋ねけるに御仕置あしくおし入強盜かりにも油斷はならずもろこしの盜跖と相すみ同前と申夜前と三里へだてゝ各別なる世のさまなり。跡の宿の豊なる事をかたれは亭主笑て嘸有べし。其宿には金銀衣類物財あるもの一人もなし。誰に何とらるべき物もあらずその日ぐらしの所なり。此所はいづれも富貴にして子孫に讓る財寶を持て世を心やすくわたれば。外より目かけ夜は騒じきとかたりぬ。此二宿の思はく天地の相違あり一國一同におさめずは有べからずとなを山〻浦〻をめぐりけるに。上方へ渡海する大湊に着て日和待の船けしきみしに。幸なる風に出船の留られ食義に迷惑するを聞ば。けふの明ほのゝ事とや京にかよひて

染衣商賣せし人金弐千兩の用意して一番船に乗合の友あれば。下人もつれす小判は身につけ近所へ暇こひして出しに。帆柱立て風をいそぎけるに舟に今一人おそくて時刻うつると聲〻にいふにぞ舟中皆〻腹立して爰にまします三人は其人の同道なれは疾さそひ給へといふにぞ一人殘して二人は陸にあがり彼絹屋が許に行御內義御亭主は出船に見えぬかと。門口よりさそひけるに。女は立出朝とく立て行れしが。今まで舟に乗れぬ事是ふしぎなりとあまた人頼みして尋ねさせけるに舟場に行近邊の眞砂路はるかに茱萸の木はらの片陰に切ふせ肌なる金子なかりし。扨海賊の仕業と先船どめして穿鑿すれともしれがたく此浦役の奉行も思案に及ばす城下へまかりて此僉義とげんと大勢めしつれての難義是また諸人の煩ひなれば修行者姿を顯はし浦奉行に對面あれば驚きいかなるゆへにか〻る御事ぞと尋ねしに。今はかくさず仕置のための廻國と語り。扨此度の穿鑿城下までは万人の迷惑をおもひはかりて是にて惡人を僉義すべし正敷是は其三人の同道人の仕業吟味有べしと內談極め彼三人めし寄ら

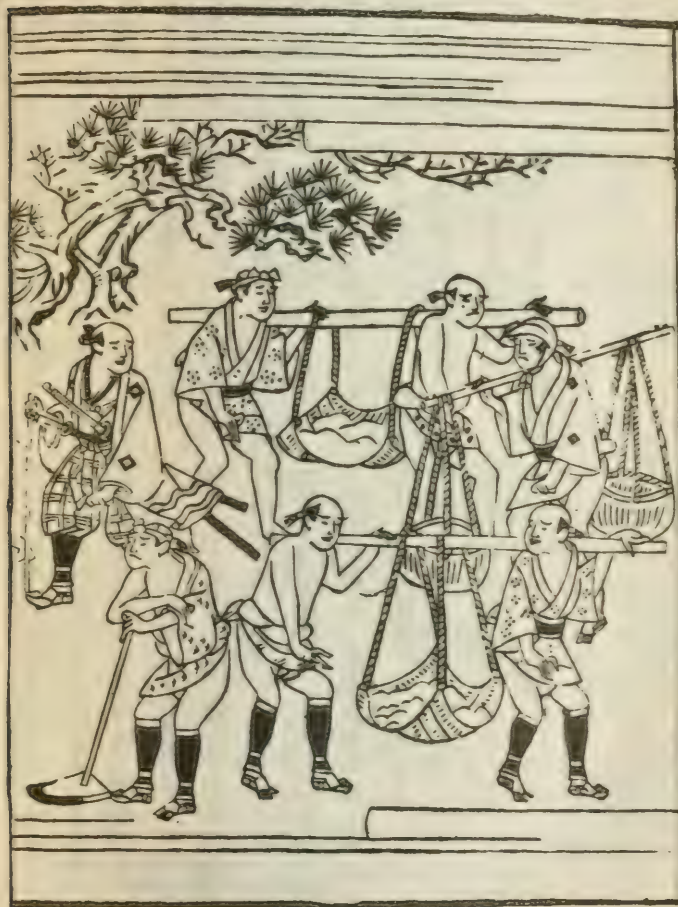
れさま／＼僉義に其科あらはれ大法のおきめにあひぬ。其後浦奉行仕置者にむかひ。早速其同道人御疑ひの發明いかなる思しめし入よりぞと尋ねけるに。彼二人舟よりあがり御内義御亭はおそひと申せしとや。常ならば亭主の名を呼べきに事をしるが故に自然とお内義亭主はと申。此一言より是を僉義のもととかたられしに。此才智感じぬ。する／＼此心からの一國の仕置。事なく納りけるとなり

三　ひとつもかけぬ佛石

古代越後の大將智をもとゝして國を治められしに。万民其心のごく隨へるはこれ天性なり。よろづの事にひとつもわたくしなかりき。莊子には吉日良辰に爪をきり耳の垢を除くといへり。此殿毎年正月六日にはじめて手づから爪を切るゝ事吉例なり。刄物は鞘におさまり。御爪は扇をひろげさせ給ひてこれを置せられ。御近所使をめしてすてよとの仰せなれば立寄しに。先其まゝと外の御用を仰られしに。幾人か御前に立かはりぬ共後何の何がしとかやいまだ若年なりしが扇の上なる御爪をかぞへて。ふしぎがましき皃つきして其まゝは捨に立ざりし。いかにして捨ざらんと仰せければ御爪の切かた九つ有。今ひとつ不足をあらためける時。是にありとて御膝の影より出し給ひぬ。此一つは態と隱しおかせられ人の心み給ふに。誰か数よむ程の氣をつけざりし。惣じて大名の御前へをろかなる人は出し置べきにあらず。是程發明なる大守なれ共世の費をしらせ給はぬは此家に生れさせ給ひ何事も御心にかなふゆへぞかし。爰に諸役御免あそばされ行年五十を過。善悪のさかひをもわきまへず。只正直を本とする男一生無我なるを譽させられ。御咄の衆中にうちまじはり朝夕相勤めしが御機嫌にまかせ世のふしんなる事共御物がたり有しに。彼男いひ出しけるは。當國かしは崎の町中に自然石の地藏六躰まで立せ給ふ。此石金輪際より生ぬけたりと古人の傳へと申あぐる。しからは堀せて見るべし。里人役にかゝつて鋤鍬の齒音をそろへ鉱の土車とゞろかし。十日にあまり堀けれ共。かぎりしれす後には眞砂は山ならで捨所なく。民家をつぶし往來たへて民百姓の難義となりぬ。数万の人足日数ふりて七丈あまりほり入ば。次第に此岩ひろく成ていよ／＼國土の費なれ共。此御一言かへしがたくてありける。大將夕ぐれに此奉行の中に弐人身ふるひし

て口はしり。そも／＼此石は天長地久神代二はしら此かた。神秘奇妙の靈佛なるに。今此時士民けがれたる手して堀せる事故なし。七日七夜の大風車軸のゝち海中泥波を立。四海くつかへりて一國人種おかしとあらたにのゝしれば。万民下よりかけあがり政道掟もかまはず一命にはかへかたしと刹那のうちに迯去ぬ。驚く事大方ならず。此事言上申。諸山の尊僧をあつめ地祭り執行もとのごとくに治めぬ。國守にありたきは永ゝ筋目たゞしきよき家老なり。其後此事密に聞に万人の煩ひ世の費おもひはかりて奉行に申含めて。かくはおさめられしとなり。有時また彼正直男御前に出て男猫に三毛と申事世になき物と申あぐる是も御意にて國中尋ねけるに彼もの申せしごとく女猫はあれと男はなかりき。大名の仰なれば民家さと／＼さがしける。何のようにも立ざる事に一國の費つもりなき事ぞかし終にないに極まり共通りにしてやみける家の執權評定して菟角この男貴人の御前に出すべきものにあらずとそれより後世をねがはせよのまじはりをやめける。いづれ三毛の男猫ない物かと思へば。何程となくつれ來

りて御目にかけしとなり

四 中にぶらりと戯気物

古代人の女の人を見かぎり又其人に見かぎらるゝ事を語り残せし播州の一城久敷なりて修理くはへらるゝ時番匠左官瓦葺諸職人の棟梁の手わけ迄してすでに普請かたに功者の奉行に仰られ。大かたの義は足代もなく万事のやうやすう然もはかどり。物には思案をすべき事といへり。物廣く石垣数丈にして此上の高塀北のかた殊にしぶきつよく白土所々こそねに是をつくろふ迄に人のかよひを工夫を仕出して小判なりなる籠をくませ。四つ綱を付てもたりふり左官を是にのせてあげおろし自由の調ふ手まはし此たくみなる事を人みなかんじぬされ共是に乗は地ごくの上の一足とひ命がけのはたらきなれば随分心つよき人も魂は浮世になかりき。其中に岡國高砂の左官年わかなる男なりしが。すぐれて愛をおそれ組籠に足いるゝより忽ち夢中になつて只今最後と観念して両手をすくめ身をふるはせひたいに波をよせ鬢さき雪をかづき。半時に一生の老をあらはしぬ。是ぞ唐土の何の願をうたた

るにおひ同じそれより此左官正氣つかざれば。高砂のさとに歸されしに我宿ながらほうせんと人は見ながら。誰を覺えずありしにかはらぬものは此里を出てゆく時の着物しかまのかちん染に。つねの紋所を目しるしに。此外かたちにむかしの殘ところなく妻女見かはしかなしき事は外になりて。しばらく興は覺ける。此左官にひとりの父親有ける。是を見舞來て居ならびしに。中〳〵老父はそれか子のやうに見えける。此妻そひかねて家出しけるはたのもしからず。惣しての女。世にある時は其夫が心にしたかひしうとめにもおそれて孝をつくし。ながく緣ある事をいのり。萬の始末も心から大事にかけ。人にもよきといはれたきたしなみしもべにあしくあたらず。世の業に油斷もさせず。朝とく起て髪ゆふかたちを見せず。夜の行水くらきをおそれ。夫のうたがひをやすめぬ。女かく身をもつからは自然とも家をとゝのひける。身躰うすくなりては男に賤もつけず世のかせぎをやめて下女とあらそひ長寝のために病をつくり。五節句にも髪かしらをみだし。揃へる皿を九枚になし諸道具を手あらく。大黒ばしらには

ぐろふきかけ、鴫居におしあて灸はしを削じ、腰はりまくつて糸屑をつゝみ継木の初咲を用捨なく手折書院の軒端は洗濯物の竿もたせとなし。迚も人の物となる借家と住あらし。肴掛のするめも煎じ茶の菓子に引さき。何もなければその通りに朔日廿八日も精進して佛棚も書出しの置所となし内證より其家をつぶしぬ左官女房も今の病者を見すてきのみ形も恥ぬうちに後夫をもとめて世を渡られは淺ましき心入ぞかし。左官は病氣おもりて哀や寂後まで妻女の名をよびて枕に有ぬる心ちして終にむなしくなりぬ。三十五日も立やらざるに男さかりの者と縁をむすびぬ左官が親是をにくみて。女不届の書付國の御法度所へ言上申せば其者共めし寄られ。先今そふ男に何とて夫の有女を夫妻にはいたしけるぞと御せんぎの時前の男は病死仕るの以後にむかへたる段々申上る。其男以前の名こそかはれ今に世にあり。それがしがぞんじたりと左官位牌を取よせられ。是が自筆の隠狀を出すべし。さもなきにおゐては其もの世になくても存生のうちに家を立のくからは密夫にとすべしと仰出さるれ共。前夫の暇のしるしなく女の越度に極る男はまへの子細はぞんぜず親の手前よりもらひ請るのよし身ぬけを申あぐる。断り一とをりは聞えぬ。然らば此取むすびの中立のもの御尋ね有しにおのればかりのあひたいなり。仲人なきうへは其科両人のがれざる者なれ共。死人孝養に命をたすくるかはりに。女は髪を剃べし。男は國遠女の親はところをはらはれけるまとに御慈悲のときなるかな

古代万民の商賣うすく里人はたを田畊しておのづと道をそむき。人の心虚になつて実をうしなひ。都さへ偽佞公事の外はなく。うとくなるは世をわにり。貧者は渇命に及べり。さるによつて夜盗も白日のさたになりぬ。京都の奉行政道にあぐみ給ひ。此旨奏聞あれば。もろ共にせんぎ有ての後古例にまかせ天下德政になして借免の時。改めて掟をたゝせとの勅命。其日不安壇八つ口に東西南北早馬にし。德政の世とふれわたしぬ。八月下旬なるに大年の心ちになり律義に諸はらひするも有大帳を焼も有手形取みだして男なきのやどもあり。かたじけなき世とていはひ酒飲人もあり。是程各別なる世の有さま。分限は人の爲となり。まづしき

もりは人の物を主になりて大かた金銀入わたり。萬の事も當分は鳴をやめける。なかんづく伊勢講の錢箱女のさり荷物かへさぬ程もつたいなくおかしきはなしと。そのころ三条に蒔繪細工せし何がしとや。女不緣にてきのふの暮かた隙狀そへて親里にかへしぬ。此女房たゞならず。しかも產月なりけるが。子細なく男子を平產していまだ乳ぶさにもつかざるを。仲立せし人の許につかはし。此子は母親の腹をかしものなり。德政のとをり此方に損をして父の物にといひける。夫のかたへ此事を申せば。父親の種こそかし物なれ此かたのそんにして女の物にと申。いろ〳〵曖へとも兩方いぢを立是を更に聞入ず。迷惑するは仲人にて此段奉行所へ御訴詔申せば兩方親類までめし寄られ。此度德政の世となり。わが物とらでなげく事世間にあまねくなりしに。汝らは我物を人の物にして損をかへり見ぬ所おとなしき仕業なり。男女の申ぶん何れにせひを付がたし。其子十五歳になるまで仲人にあづけをくなり。自分のちゑ付て父の種をかし物といふや。母のはらをかしものと申や。それがとばを證跡に申付べし。かなら

ず十五になるまでは子を仲人にあづけ。はごくみは兩方よりつゞけて。男も女も朝暮その子がそばをはなれず是をもりそだつべし。自然病死は所のものの吟味のうへ子細なし。万一けがさせるにおゐては曲事たるべしと仰せわたさるゝを承はり。公儀はいはいならず難義ながら毎日毎夜仲人の許に行て是をそだてけるに。世上見る所もうるさく女は悲しく。夫は渡世かけて次第に迷惑していつとなく夫婦和談して。むかしのごく二人が中の子に仕度旨。仲人を頼み。かさねて願ひ申あぐれば。其通りに濟てはじめにかはり夫婦のかたらひしたしく。其子仁となり世わたりにかしこく金銀まふけ。二親に孝をつくしけるが。有時祇園祭りの山のわたれる中に。月鉾のとをりたる跡にかまほり山とて二十四孝のうちなる郭巨がわが子を埋ぬる鍬の勢ひ京のいづれの細工が作りなしていきてはたらく風情有。人是にさたしていかに親の孝なればとて我子を埋む事や有。こがねの釜が出ぬ時は其命をうしなふなり。是なる人も天下德政の時父母ふあひにて父の子にあらず母の子にてなし。いまだいとけなきをろんじ既に命あやうかりしが天人をころさす。いませい人してかへつて二親に孝ある人やとむかしを語り聞せぬ。此一子是より父母に恨みおこりてたくはへし金銀とつていづくへか身をかくしぬ

勝八

飢而死

に

新可笑記　巻四

目録

一　舟路の難儀

武士ハ心の底に油断なき事

二　歌の姿の美女

武士ハ諫言よみなる節の句

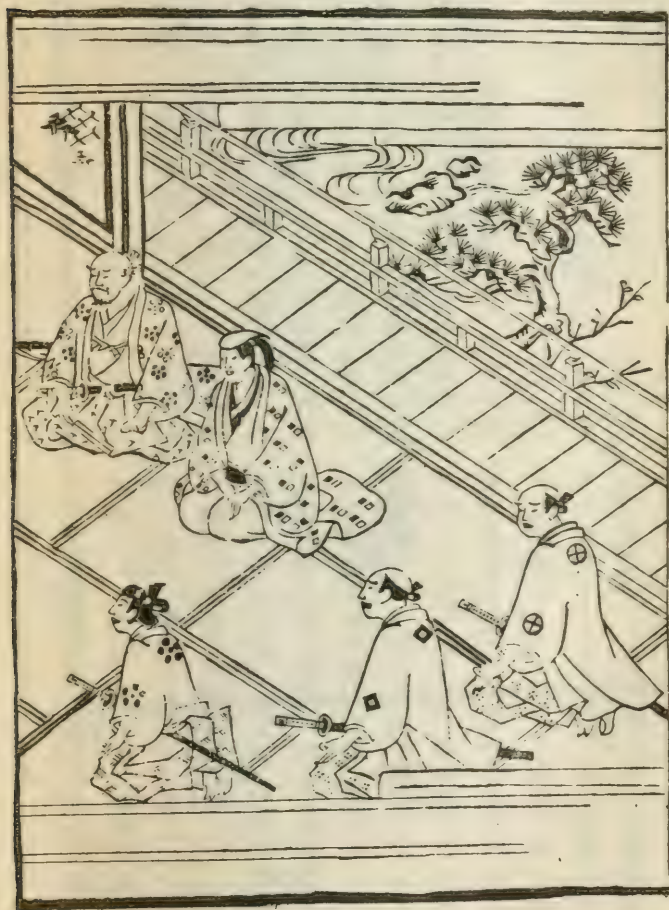
三 市に出る事
武夫は所望の軽く自由にすべし

四 書籍の事
武夫は日々書籍を見るべし

六 勤事に仕ふ
武夫は誠実なる志の事也

【一】無躰乃難義

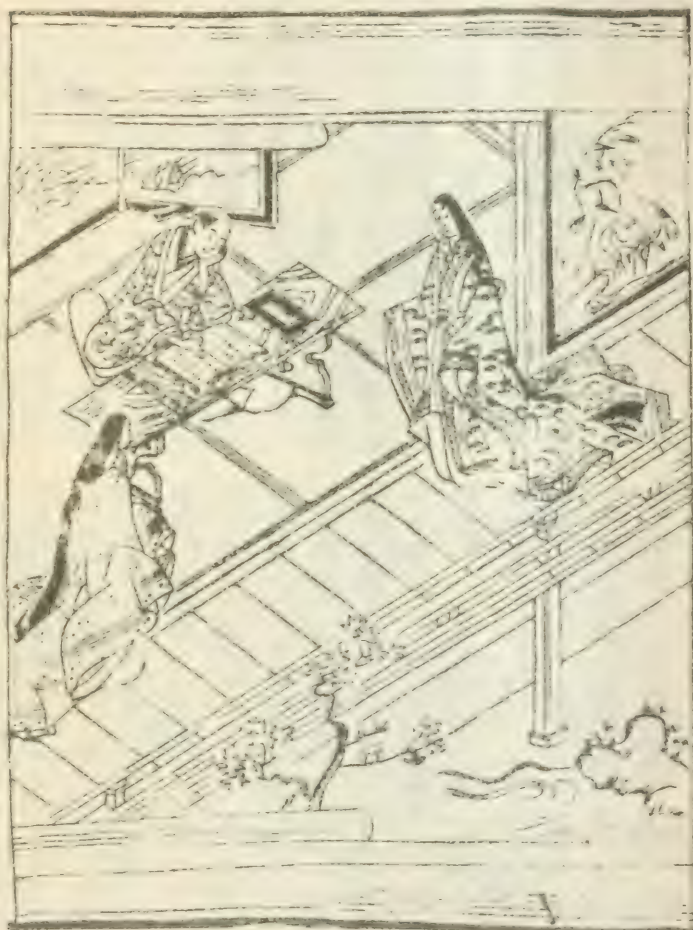
古代攝津國伊丹の城主につかへて。江方の支配して何かしとて勘定に發明なる人ありける。殿にも御ためよく百姓にもいたまざる納めかた世中はかく有たき物ぞかし。かならず此役人私よくの出來は。皆さと人のなす事也。子細は思ざる外の音物人しれずもちはこび無用の出入をしかけ。其村の庄屋年寄の良を見しられける。是自分の物にもあらず。一里の石懸りに割付又は軒役に集めし小百姓迷惑する事かさなり。庄屋の不届見いだし公事訴詔のたねとはなりぬ。手つからつくれる八木は其國主にさゝげ。其食物は雜穀にして渡世する事なれは。憐みをかくべきなり。ゆるせば又方量もなく我まゝをして。所の宮地をせばめ。海道のしるべなる一里塚も松ばかり殘しぬ。物にはよいかげんといふ考有べし。世中の秋にはつよくとり。不作の年にはそれ／＼の毛見の大事是なり。定免の取かた用捨有へし。渾て十分の稻葉も田をさからふて毛勝風の有事なり。古へもよい事に物くるゝ人とは書つれ共それは物によるべし。只欲をはなれ一人の心にて万人たすけの道理あり。知行を下しおかれあるひは扶持切米給はり此ほかなる事に願ひして其身を奢らば正しく天是をとがめ給ふべし。惣じて武士は惣應より内證つかひの女過る物なり。これ榮花のあまり世間にしれぬ費ありてけつく表むきの若黨中間に不足ありて肝心の武役をかく事横道なり。此代官諸事に共難ひとつもなく。正直をもつて大役をおさめられしが。美女のもてあそびやむ事なく。すゑはこれにて身のはつべきはじめなり。其比神崎の里に遊君を集め中町の長者といへるは。高倉院の御時齋藤瀧口に相馴し横笛が母なり。此女は大かた無双の能者なれば建禮門院のはした者に召あけられし。世に情の深き事盛衰記にみへたり此ゆかりにて今も遊女の波枕契りは一夜川の水の心になし。岸の柳はいつなりと人の戀風の吹ときなびくもおもしろし。春の雨の玉にもぬけ道をこしらへ。夜毎に此人かよはれしを妻なる人ふかくそねみ。夫に身をはなれずうらみをなせば。遊女はかりなる者にして夢に酒くみ現に歌舞を聞のみ。更に誠はなくて氣を晴す間のたはぶれ。そなたもいざといさめてそれよりは夫婦ひとつの川舟に竿さゝせて引ては歸るあだ波の。身は浮草の花にたとへ咲てしぼるゝかぎりと螢を石

火の明かたに見なし。名殘の座敷も妻女一所に別れ。かりにも枕は見さりき是程執心ふかき女は世に女も有にすくれての因果なり。有時又かよひ船に夫妻とり乘行しに闇をこのめる五月のすゑ。川音閑に瀨ゝさしくだし行けるに。此妻俄に身をなやみ心を取みだし。子を取あぐる婆母よといひけるに驚きぬ折ふし舟には女はなく皆男なれはゝ此時の用には立ずして介杓すべきやうもなく。いそばたにさしよすれ共。里とをくいづれも十方にくれける。此男の身にして一しほかなしく。あたる月ならば何とて語り給はざりしぞ。常にかはりて大事の身なれば其家を出べき事にあらず。恥ならぬ事をふかく秘し給ひてかゝる難義を見る事ぞとゝやかくなけくうちに。其時節來て平產して娘のはつ聲せはしく是はかたよせ其母氣しきりに眠るがごとく世をはやうなりぬ。是非なき仕合沙汰せず屋かたに歸り。宿にてかくなりゆく首尾にもてなし。かなしき無常を見しに。此子は命有てなをまた歎き弥增なり。これを思ふに此妻はいやしくも嫉妬より其身をうしなひける。女の胎前に住家を出る事かりにもなかれ。是ふかくの第一

なり此娘乳姥にあづけそだてさせけるに。十四の年こへて世けんすぐれておとなしく。しかも生れつき不足なかりき。同じ家中の何がしのかたへ緣の事契約して此年のくれにはかならずをくるとて京にて道具を調へ置ぬ此息女それ迄は母は病死とばかり覺えしに。女は口かましく舟にて難産の最後つど〳〵に姥が語ればこれより狂乱して母の事ざんじもいひやまず。世の聞えも見ぐるしく。いろ〳〵の養生するに其かひなし父も是に氣をこらし。程なく相果外に男子もなくして此家絶て自然とその名のすたる事遊興にこのみ入武士のわたくしありし故なり。既に下〻こゝを見すて。氣みだれたる娘斗になりぬ。最前申かはせし聟のかたより是を引とり。此身になるを嫁にまぎれなしとて心よく看病いたされしは是また武士の本意なり其後祈禱さま〳〵なれ共。母にしうたん日〻につのりをの〳〵あぐみて内談とり〳〵の折ふし物ごとにくふうふかき人のいへり。此病性醫術にはかなはし某がし存ずるむねありとてかの息女にいてあひ其みだれたる心に我もみたれけるにおのつから此人のいへる言ばを聞入し

時。それ程母のなつかしくは難波の大寺の神子を呼よせて冥途の事共口よせて聞給へといへは。大かたならずよろこび。有がたきをしへぞと是をねがひける時に。神子をまねき亂人の様子を内證にていひふくめ梓にかけて呼出す。見ぬよの母にあふ心ちして袖は涙に耳をすませば。此神子わめき出し〳〵。実や人の子の習ひにて親の恩愛思ふには夫の心にしたがひ不斷は世を大事に思ひ。命日には精進香花つみて弔ふべきを。朝暮なげく涙の熱湯の玉ふりて身にかゝりての苦みたま〳〵佛果を得て九品の蓮臺に座してうき世を忘れしに。汝なげきてさはりとなり。今よりは子にあらず親にてなし。人間生死は一たびはのがれず愚なる心ざし淺ましいかなとたゝみかけての立腹座中も興をさましぬ。此時娘母を恨み心になり共たましゐ入かはり。正氣になりて此事おはり其後常にかはらねば。祝義を取いそぎいよ〳〵此家繁昌となれり。かゝるためしもろこしにも長明子が養生の才智に見えたり

二 [illegible]の[illegible]二人

古代八重垣の哥の種雲州大社の神主何がしとかや。俗性は武家の末子なりしが。世はさま〳〵の家業神職の名跡を継れし。常に哥學を好み入。二十一代集を残らずそらんずる程になりぬ。神書考へる程はなけれど。哥道は神主に似合たる心かけとて人皆これを譽ける。過にし世ゝの哥人に魂入かはり。世上の事業はかつて知ざりき。中にも伊勢小町の哥のさま思ひ付。むかしは女さへかゝる心のたけたかく。婀娜しき人も有けるよと是のみ平生思ひやり伊勢か心は哥の讀かたにて大かたかく有べし。小町が心は哥の風情にしられけるが。伊勢はいかなる美形ならん。今のうつし繪もいにしへを見つたへて八重櫻の陰に入日くれなひの袴に。十二ひとへの紋からのうつくしみ。又身を浮草の根ざし心ざしさそふ水あらばと打まかせたる面かげに檜あふぎをかざしたるは。すがた繪さへ眞向に顏の見えざる事のうらめし。其時節に生れあはせたる世の人の仕合なり。今も此二人の美君むかしの形のかはらず。佛の國におはしますへし我もつたへなき哥道の縁にひかれて伊勢小町を見る事ならば只今息たへて往生すべしと塵の世に命をおしますまぼろしのごとく成ぬ。日数ふるに一年も花の咲時春ぞかし。早に冬かと思ふはかり忙然として十九歳。

其後は居間をはなれ。山屋敷の月のためなる所に。独り住て浮よの人にあふもむつかし。朝夕も養母の心つきて。自ら運ばせらるゝ外は何の願ひもなし。有時召つかひの女に枝ながらの楊梅を賜られせめて汝は言ばをかけかはし。御使にまかりて程なく立歸り。ふしぎを顔にあらはし。あなたには目なれざる都上﨟の二人まで御入ましますと云にぞ此事心に任せず。其女とつれて立行。しげりたるあやすぎの垣間みしに女のいふにたがひてつねなれば何か心に遮りけるぞとあらけなく叱て歸る時。庭に咲たる夏菊を愛して上﨟二人おはしける。母おどろきをんな心のせしく此事あるじにつけて病氣もかゝるかくはし女を一人ならす。京より呼よせ是をしのばとてあらはれぬ事や有と。世の聞をかまひ給はねばそれも見にまかり。是も歎きしく古への伊勢小町か佛にたがはず世の取さたもよろしからずと神職の家なから心のたけき人をひそかに招き。是はと内談せしにかの人をつ取ていへるにたゝしく見るもあり。みぬも有。又いつれか実ならんと行て見しに。正し

は。是誠の女にあらずその子細は纔に此家の餘慶にして都よりしかる美女二人まで爰によびくだす事思ひもよらず。察する所狐狸のわざならんといへば。座中是ぞと一すじに同心して。氣しよくも是よりつのれは。此まゝには置れじと勇ある神主是を請とり。木陰に立かくれ。半弓引かけ放ちけるに形ちにあたると見えしが。消て草花のみ殘れり。つまり／＼迄大勢わけ入尋ねしに何とがむる者もなく。只無分別に手柄と覺えつたふる其後まどろみし氣病の人を起せしに。其まゝに相果はやときれて各なげくより外なく。寄妙なる事世の咄になりてやみぬ。是を思ふに唐土にも學文に入。精氣盡て己が魂ゐ煩ひ青赤の鬼の形あらはれ。得道して後忽ち失にし例有。是離魂といふ病の類ならん甲州信玄公の家臣何がしとかやの妻女。勞する氣のつもつていつとなく其形ちふたつになりて。物いへば同音立居も一度に動き。何れか前後と見分がたく。二人共に藥をあたへて世にかゝる事聞は傳へてはじめなりと。武家一道の捨る斗に是を歎きぬ。各僉義するに濟がたし信玄公此二人の女を召れ。御見分あそばしけるに。しばらく落着せずして御思案めぐらし給ふに。左のかたの女本身にあらずと御差圖に任せ役人立かはり改るに驗なく。爰はふたつ物がけ也と。各あやふめける時。狸の嫌へる身の責はなきかと重て上意あれは青はの松折くべて。煙らせけるに正躰あらはし迯さりぬ。跡には何の子細なかりき。信玄の御眼力誠に以て名大將なりと万人是のみならずかんじける

〔三〕市に隱す隱武士

古代石州の高角山に。浮世の月を見果し人丸塚の程ちかく松年ふりて不斷闇なる所有。爰を見立て寂寞の苔の扉を閉。人倫絶て身を隱し。年月おのづから忘れて息引取れるまで翫に横笛の外はなし。さながら仙家の境界かくなる社心からの心なれ。是に樂しみ極る時は悲しみあり。此身もけふを暮すべき糧につくれば馬の沓を作りて海邊の市にたつも是非なし。此もの見しれる者ありていへるは。むかしは筑後の國守に仕へし人なるが。今の有樣ふしぎなりと假寢の穂屋に招き心ある人の尋ねけるに。常に無言なりしが。意味ふかき市人とや思ひつらん。珍らしくも物語りしける。されば武士の身は何國を住家と定めかたし自分の外人の

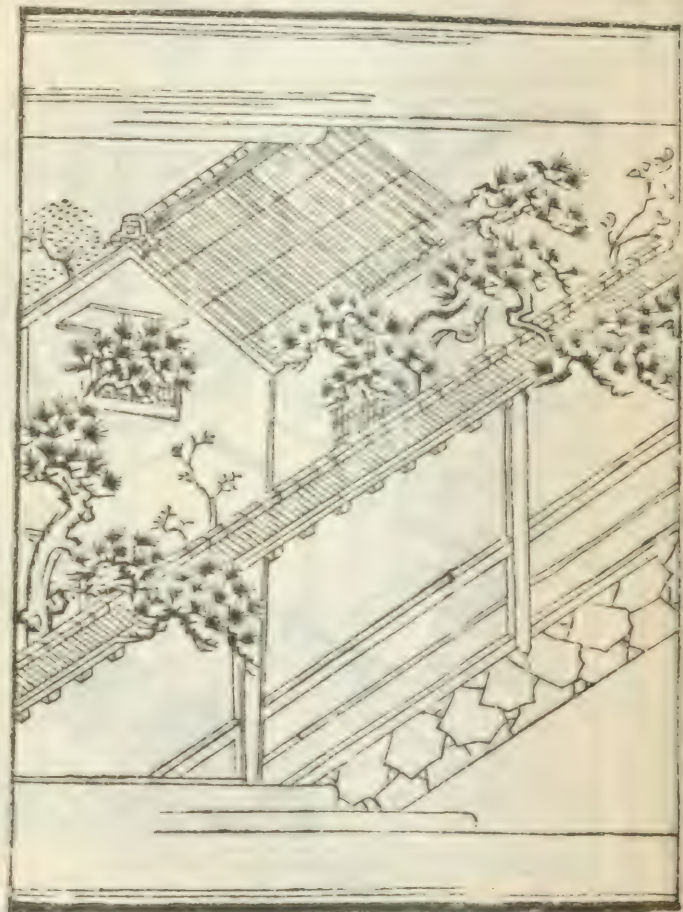
事にも義理の一命を捨るも習ひぞかし。主人の御役にたち武家至極の事に命の果るは毛頭くやむにあらず。或は親類の禍、相役又は傍輩の中にせひもなき一味。すこしの事に身を捨るなどさりとは口惜き仕合。一分の理り立かたく。其家を失ひける。其身分際相應の所領に預り私の事に命を果すは木石同事の心底なり。其働き勝れ相手大勢を打て何の高名には成がたし。誠は自分の意趣堪忍して主命の時進むを侍の本意といへり。是を考へ身の用心すへしとかしこき人此道を示されし。今時の武士身を脩るとて小者に髮月代までいたさせ髭は氣づかひして自身にそり。又は内義に打任せたるあり樣此用心愚なる故なり。子細は家來に氣遣ひする程の身ならば。自然の時も此下々逃さり。何の役にか立べき。不斷に憐愍をくはへをく。大事に及て主人の命にかはり。己れと勇は常を忘れぬ所なり。されは用心の事譬は山賊海賊ありといへは人数を催ほし。夜道は無刀にしてそこをとをらず。身の難を遁れ安し。常住怖しきは疊の上なりと莊子が達生篇にも用心の事をかけり。人間の生死遁れぬ所も舟にはよく楫取日和有て風波万里も渡海す。住家はなれぬ人も不養生にて病死。思へば用心わきまへなき故なり士農工商共に此心得肝要なり。殊更其家業疎にすべからず。其家に入指南得るからは心ざし各別の違ひあり。是を改めて習へる事第一の道理。孟子の曰矢人は函人より不仁哉と。おなし武道具の細工なれ共。矢をはぐ人は通して命を取惡心あり鎧を威する人は弓矢を遁れ身を助くる善心あり。念は通ずる大事。今此身に覺えたり。我國の守に仕へし時は役義勤て外は安樂に暮せしに。武藝は疎略にしてすゑは閑居を願ひ。横笛の音をたぐひもなく好み入しにおのづから此身になりて世を送れり。其とき小刀細工をえて朝暮慰みながら。要事を達するも重寶なり。此人の心根浪人の節はこれを渡世にもと思はれし案のごとく國をのく首尾出來て。隱れ家を津の國住よしの里にして松のはのちりうせぬちゝりを拾ひあつめ。雉子に見立の作り物。是は童子のもてあそびしてその日を過ぬ。又こざかしき人有て咳氣くすりなどは手前に合せ。後には他の病氣迄も密に療治する程になりけるが。是も御暇出されてのち奥州松山のかた里に立こへ醫者のまねして年月を送りける。其外廣き家中なれは銘々こゝろ／＼の人々。武士は表にたて

内々は末々のかくまへせられしかた残らず其恩はくになりぬ。侍は當分の奉公を大節に始末たくはへはせざるこそ本意なれ。古傍輩の中にすぐれて武藝をはげむ二人ありしが。終にそれとても役には立ず慣ひえたりといふばかりに過ぬ。然れば番組勤むる人なみに何か替る事なし。有時中小姓三人不断心のあふ友として外をかまはず見くるしき程念比にかたりしが。かゝる心ざしより家の掟をそむき若道を好みしたがひに取もち家中を騒す事横目役より改めしに。是を遺恨に三人として討すて。其屋かたの内藏に取こもりぬ。大殿御立腹あつて三人共に搦捕手だてと御出され。樋に利を得る器量を穿鑿せしに。右の兩人ならでさしづすべきかたなし。此二人として相手は三人こもりしを子細なく生捕にせよと上意を蒙り二人此時と申あはせ彼内倉にかけこみ。三人のうち壱人は御赦免とのかけ声。死覚悟の者とも此ことばに命おしまれ面々に憤をやめてしりぞくを。二人とりふせければ残る壱人安堵して抜身鞘におさめし所を異義なく取て捕めぬ。此手がらたぐひなしとて當座に兩人共に御加増くだし給はり。武士にか

原本にてはこの挿絵〕

ぎらす此心ざしは市に立をの〳〵とても此道をよくはげみ給ひてし。算勘日記をしばらくも懈り給ふなとかたり聞せて終りぬ

四　家宝の思案箱

古代下野の守護に仕へて武家随一の人あり流年盛の時もすぎ黒髪山も霜をけづれる齢となるまで其役義を勤め一生身楽にわたくしなし。去程に老病此たびのかぎりとなつておしませ給ふ事大かたならす。此家継べき男子三人名跡はたゞしくいづれにても心まかせにいまだ存命の内に目見え請べしと是より願ひ奉る事を有がたき御意なり。存る子細これあり。某かし病死の後書置のとをりに御せ付させられてくだし給はれと三家老中をもつて言上申、此者常ならねばいかなる所存もしれず兎角は願ひの通りと御前首尾よく相済もとより心にかゝる夢もなく思へはかりの枕錦の褥を職れ共夕の煙ぞ形みなる室の八嶋の土にかへる一世の栄花多生輪廻のもとひなりと。臨終正念に日比の覚道を願はし何の二念もなく終られける。それより百日過て諸役人親類立合遺言の状箱封をきり内見せし

左右入れ違ひ

むるに書殘されし筆跡もなく三人の子の名を付札の鎰のみ殘れり此外しるべもなかりき又內證をあらためけるに桐さしの枕箱三つあり是に合せて錠前明るにまづ惣領には大房付の珠數一れん黃金百牧[illegible]二男には丸頭巾にそへて黃金百牧三男には脇さし是も黃金百牧何とも家督の實定仕かたく此通り御訴詔申あぐるだん〱聞し召分られやう。まづ惣領は出家になるべし。二男はかねて病者といへば向後樂人となるべし。三男親が所存の通り右の役義相違なく仰せ付られ有かたき仕合なり。二男長劔をやめて置頭巾を人もとがめず惣領は思ひよらざる出家して無學無分別の身麻の衣になりて都にのぼり北山の近里に永代寺頭の付し所を敷金をもつて後住となりぬ。今時の上人法印學力よりいるは稀なる事なりあるひは六根ふぐの輩又は高家大名の末子かたつけ所なきを是非なく出家となせば。世の人をすゝめる事思ひもよらず。其身の取置さへ覺つかなし。沙門になれる見せしめには。衣着して精進つとむるぶんなり。むかし少年見立發明なるを出家になすが故に名僧も出來て衆生を利益有し

か。今は末世になりぬ。道心は大石のごし發しかたくてすてやすし。學徳あらずとも其一心まとある時は是仏躰なり。調達が六万藏の經を誦せしも奈落をまぬかれず慈童か一念の悲願を發して都卒に生れき。只ねがふへきは後世の一大事と觀念の窓に閉こもり所有三千世界の書籍を見ひらき尊僧となり給へり是もまた諸人歸依をなす事のむつかしくて爰をのがれいる日の岡の山ふかく閑居の徳を身におほえり。男女のさかひなければ愛欲の心なし。雜言なければ鬪諍のおそれなし。是非の友なければ讃毀のあやまりなし。人の失を見ざれは他のあやまちを談ぜず人に對面せされは礼義のわづらひなし。是程きざんしなる山のふかきをしらず淺き麓の世けん寺常樂我淨今の身なり。父死去のみぎり惣領なるに出家のさし圖すこしは口惜かりしが。かゝる時有がたく此恩忘れず手づから樗の実を拾ひ山原に蒔せおかれ是大木と成をえて。一宇を建立と宣ひしに。若僧共おかしく今もしれぬ命に。いつの世の爲ならんといふ。程なく年〳〵ふりて願のごく大堂立させられ栴檀堂と申せしもむかしになりぬ

〔五〕 [illegible]

古代神路山の奉行發明天の理にかなひ善惡二人の穿鑿落着せし事あり。其ころ古市と云所に歴〻の浪人身隱してあまたすみける中に。同じ心の友三人他事なくかたりあひて。身躰の事まで内證をつゝまずいづれにても主とり濟ば合力して取立申べしと互ひに武士はたのもし。其日くらしの渡世も心はくちす時節待しに。壱人丹州に親類有て其人取もち身上すみて。むかしに歸るはるの鴈。よき友二人への名殘おしくたがひの心は書狀の取かはしかならずわすれなどいひかはし。明日たつ旅の夜すがら乘かけ葛籠を拵へ隙の身の手業に觀世ごよりも此たびの用にたつとて笑ひきげんに酒くみかはし。明かたに爰をたつといへば。其時ぶんに來て門をくりせんと二人は私宅〳〵に歸りぬ。俄やとひの中間草履とりもそれ〳〵に旅の別れ迚そ立歸りぬ。跡にはかの侍ひとり夜のあくるも今の事ぞと戸ざし引たてともし火かゝげ丹後迄の道すじの書付天のはし立松もこのたび見る事よと。心よくまどろみ跡付枕にに夢もむすばぬ程過て。宵前のやとひ男二人來て戸に音信明かたとても程はあらし御用意と聲〳〵に申せど。内にこたへ給はぬをふしぎに思ひ入し

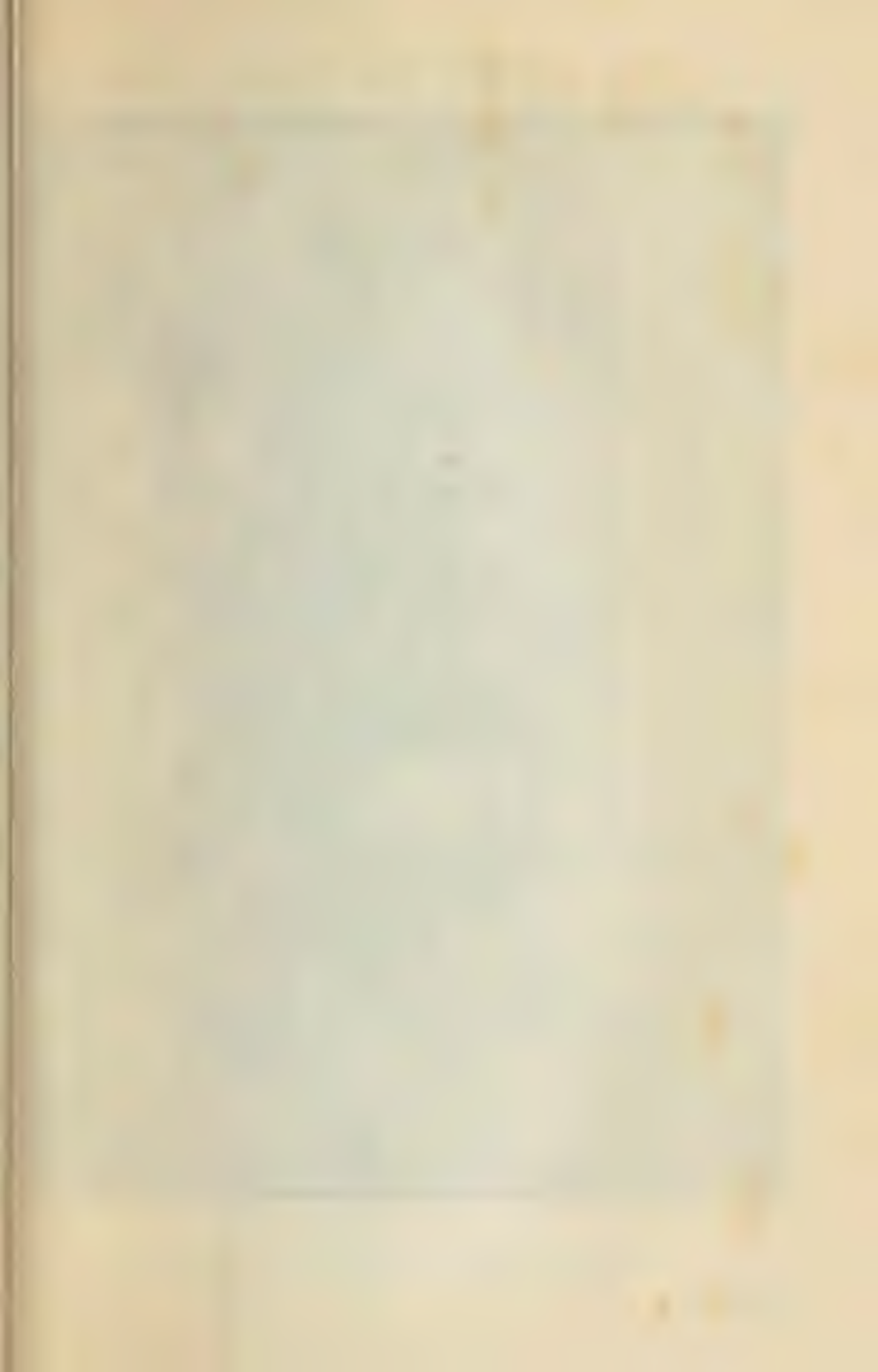
に。檀那と頼みし人は寝すがた共まゝ切ふせ。其身はぬきもおはせず鞘に手をかけたるばかりに淺ましく果給ひぬ。是はと驚き近所をたゝき立人殺しよとさはぐに長袖まじりの町人しばしはおそれて出合ざりし折ふし二人の浪人來て是は思ひもよらず。段〻樣子を見るに内證しらざるものゝ仕業にあらず。國もとよりつかはされし路金宵に見し物はなんぢらと二人のやとひ中間小者ゝ二人僉義なしに搦めそれより此さたわたくしには濟ずしてをの〳〵奉行所に出ける。いか樣やとひ男もうさんもかゝる當座の繩笈にも宿をさだめず東國の道中にくらし。無分別なる眼ざし。人みなこれをにくみかゝりにも頼みし主殺しやかて御仕置にあゝふべき者と人こぞりて是を見明むる。其後御僉義有てたび用意の物共殘らず改められしに。路金も有のまゝに諸道具ひとつも分失せず殊に近所へ告しらすも男共なれは彼是もつて別条なし。其繩御ゆるされ御落着までは其宿にあづけおかれし二人の男御意のとをり有がたく扱ゝわれ〳〵に理不盡に繩かけられし兩人年月したしく語られしよし。其うちいかなる意趣遺恨もぞ

んせす疑ひは此浪人衆より外はなし討れしかたは假そめなれ共主人なれば此貧義遂させられ敵捕たき願ひ申上るの處神妙なり。彼ものとも所存の通り此討手四人をのがれず。一たび二人を誡むるの過怠に先兩人を一人つゝ引わけざしき籠に入置。其まゝに何の子細もなく捨おかれし程に次第に退屈おこれる折から。御思案をあそはし御口まねも申されし役人をつかはされ。今度の闇打せんする所兩人に極まれる證據あり。其段は直に申わたさるべし。されども二人一所に申あはせてうたれし事や。又壹人してかくはせられし事や。有無のせんさく今日に極まれり假令尋ねたればとて石流歷々の兩人よもや白狀は。然れば神文にて討給はぬ心さし申わけし給へと。硯料紙をわたし。二人共に書せ給ふに。上意にまかせあやまりなき心底こゝろ〳〵に書したゝめ是をさしあげける竊に内見あそばしけるに。何れも文者能書にしてさりとては書つらねし兩方おろかはなかりし。なかんつく一人か書けるはすこしも畾紙をおかす十八枚に筆をうこかせ。今壹人が書るより六枚まして然も日本の諸神諸佛。さる程に思ひ出て此事し

らざる心中まさに文勢にあらはれ。讀人だに身をふるはせ神罰おそろしくなつて。肝に銘じける。奉行も是をかんがみ給ひ。文法はたらき書つゞけたるにあらず。正直あるゆへに自然と天のしらするの道理是なり。今壱人のなせる科には極れり然れ共侍たるものを拷問はなりがたし喰物に塩過たる物をあたへ湯水を断べしおのづと正氣みだれ現のごとくなる事なり。時に様子聞べし仰にしたがひ其とをりにしかけ見るに。五十四五日過て次第に痩れ大かた乱人形義になつて人のとばは耳にうとく其身のがれぬところにかくなが〳〵の難義。侍の覺悟の違ふゆへなり。此遺恨うたではならざる首尾の段〻申残し潔よく切腹有べき所なりと書つけてこれを見するに。尤と思ひ込。其身の恥をかへり見ず。此者討たる次第に夢に語りぬかのものなが〳〵のくらしにさしつまり。其家久しき重寶三浦代〻軍書の十二巻當分の質物に賴みしに。勝手よきにまかせ後日かまはず賣はらふ事是武士の道にあらず。評判に及ばぬところなりしかれば此たび身躰すむなれば。追つけ金子調ひ請申べき時何とも申分立がたく非道を存じながら彼者を討事天命のつきなりと今はつゝますかたりてたちまち舌くひきりて果けるとなり

新可笑記

人

一　[illegible]

古代関東のうちに高名の家あり。子孫の末に傳へて武の道はげみ給ひしに。忍び調練の侍十人申合せ。此家に御奉公を望みぬ是は軍中に入事有とて近習の衆中取もち此段御耳に立しに。然らは其者しのばせ書院に甲をかざり置。取事をえたりや是をためして見るべし。首尾よく仕るにおひては殘らす召抱らるべき御意にて既に其夜陰に定め不斷の番組は勿論一家中若さふらひ殘らず相詰て所々つまり／＼御番をつかふまつり外は閉て追手の御門ひとつをひらき置左右に目付役同心明所もなく立ならび大篝焼立挑燈のうつり昼のごとく高塀のねぎには壱間はざみに足輕をそなへ玄関廣間長廊下所々の諸役人衆を大事と相詰。おりふし互月闇風まつ夕ながら互ひにたしなみ扇つかひもやめてひそかに申合せ。しろき帷子に黒き衣裳をかけ皆この衣裳は御内ぞと隨内氣をつけ大書院の長床に甲立をかざり大納戸衆八人居ならび大横目兩人中程に逆座して書院の入口を改め其一間ぎりに出入をやめて此御番を勤めしに夜の明がたに自然といづれ眼は常にして心の眠りきざしぬ。やう／＼人負も見えし時甲立ばかり殘りて各おどろき通力なればとて是程の諸役人の眼前にてかゝるふしぎを見する事自然の時の御用にたち。いかなる事も是にて利を得る重寳と此評判のとをり言上申處へ。はや忍びの者未明にかの甲をさしあげける。是によつて十人一所に抱へらるゝ時家老の何かし先夜は持病に痛み登城仕らざりしが。翌日あかりて此義きゝとゞけ。其しのびの者をよびて白昼にはなるまじき事かと尋ねられしに。我々が所業是神力の秘術にして夜の事と申上る然らば今宵拙者一人奥座敷に罷りあるの所へ。何れも忍び入て。見えわたりたる武道具何にても取て見給へと所望。其意を得て退出す。家老はなる程靜に不斷の勤所にともし火をかゝげて。毛貫を手ふれて中眼に見廻し。四つ半時の時計を聞に。鼠三疋友つれてくらがりまぎれにはしりゆくそれにはかまはず勝手にたち逸物の猫を氣をつけ見られしに鼠もうごかずゆたかにふしける。いそぎ本座に立歸りしばし心をすますに宵前のねすみ又かけいでしを。あとよりしたひゆくに次第其かたち大になりて犬に見ます程の時。とびかゝつて我猫の性なりといへるに此一言かたちに應して位をとられ。さすがのし

のび男あらはれける。此事諸人かんじける。其後申あげられしは當家代々御手柄世にかくれなし。先君親殿にもおくれさせ給へる御器量共ぞんじ奉らず。此以後軍法の方便武士の正道にて勝事得るとも。御内に忍びのものありて世とは各別の表裏と此さたせられては高名の御家わづかの事にすたるなれば。この者とも殘らず御いとまと申上らるゝだん。道理至極におぼしめし其人の願ひの通りに濟ける。莵角武は智勇のふたつなりと軍策を指南し給へり

［二］[illegible]

古代播州赤松の家に執權兩人して。武家百姓の事まで仕置致されけるに。知仁勇のそなはり此掟をまもり。五日の風枝をならさず十日の雨にもうごかざる土の車の兩輪のごく。すぐなる道をおこなはれしを主人も悦喜ありて家の重寶此弐人なりと。官位も知行も屋形ゟ大手の兩角をくだし給はり萬の事を双方ともにすこしも甲乙なきやうに殿よりあそばしければ。なをまた一家中兩家老に思ひつき。礼義をなし諸事音物迄もかはらぬ色を遣はしける。同じ家中に代〳〵三百石より立身もせず。

「一」は畫挿のこ）

役目の馬一疋はつながせて終に御用に立ず。とし月御廣間を二十人して四番につとめ。此外は隙にして主人の皃も五節供の外は目見えもなく外ざま役にて暮しけるが。天性よき侍なり武士の作法ひとつとしてしらざる事なしされ共出過て御奉公勤め達もならず共役目の末座にさがり。いまだ元服の月額青く鈎髮の跡見し人仕置者とてをろか成言葉のするに。分別はけのかしらをさげて何事も御尤といはねばならぬ世上。是非なく子ともかために此家をはなれがたし。此人のいへるは惣じて其家の執權はすくれて其德そなはりしを壱人それつらき。知勇の人だん〳〵有て其家治る。牛角の家老立ならぶ時はかならす其家亂る。子細は其身は道をまもれどおのづから寄子といふもの譜代たかれかたの色を立。愚ざるに外よりゐせいをつけ。いつとなく不愛となり。主人の御ためよろしからず。家老に大名ぶんにひかへ。仕置しやは如有て大やうなるを立。郡代鍛錬ふかくて十露盤にうとからぬがよしといへり。かしこき人の言葉はたがはず。家老の兩人邪義をさしはさみ。此家治りがたし。時に男子の有かたへ女子をも

に入るべきもの）

らはせ。緣者になし給ひて後相續せり。其後壱人は一子若年なれども家督をゆづり。病氣ふんになり隱居の願ひ相かなひたのしみを極めぬ。其後は壱人の心まかせにおさめ。相手は聟なれば萬に如在なし。諸事上に好ませらるゝ事をはげみ。よろづの事に奢とはなりぬ是程かしこき家老さへ無念ありて後悔かへらぬ一言なり。豐後よりさりがたき人に賴まれ望み尤の浪人請とり。いつその首尾に申出すべしとかくまへ置れしが。此者正道にしてはなし。相手にも心よく朝夕一座にえん慮なく罷ありしに。此浪人すこし道具目利傳受して大方なるは見極める。有時貞宗の刀銘かゝへて中心たゞしく。鎺もとに纔なる地荒ありしが。一寸五分あげて弐尺二寸の刀。さしぞへに是ぞと下直にとゝのへ。我はたらきになせる名劔手に入事と武士の悦へる所へ。家中一番の目利しや何の何がし見まひに來るに幸と。此刀を見せて正銘ならば調へんと自慢にて見せ給へば鞘より四五寸ぬきかけ。心をとめて見るまでもなく正銘にあらず。御無用と申。其座に彼浪人ありあはせける家老其まゝ引あはせ。終にこなたへ御近付ならず。

是は豐後の牢人衆。自今は別して御かたり給はれと挨拶扨は此牢人が肝煎にて此刀もとめられし。思ひながら是非なし。牢人其座を立行は爰はのがれぬ所と覺悟して玄関をたち門外に出るを浪人切つけしに。心えたれはぬきあはせ肩さきにわつかのかすりをひて何の子細もなく打とめぬ。此首尾殘る所なし。旨趣を言上申に浪人無用の意恨をさしはさむ所。すこしもこなたには越度なきに相すまし。其通りに相つとめ。十年も過て此御家御暇申請加增大分の仕合にて大和の國に有付しに。それまで用心ゆだんはせざりし。敵のすゑとても知れかたく身を安樂にくらしぬ其城下より當年九つと申小坊主をかゝへ茶はこびにしてつかはれしに。取まはし利發なれは不便くはへおかれしに。ある夕ぐれにはしゐしてうしろより閨の風をあてさせ心のまゝねふられしか髏はかり殘りて此首なき事をおどろきさま／＼せんさくするに。かの小坊主見えぬ事をふしぎと。是を尋ねそれか親もとは此町わら屋のひとり住の女なるそと。爰にかけつけしに此女とも行がたしれずなりにき

三 乞食あと萊に此男

古代心ざし実なる武士あり。年久しく南部の城下にすめり。去事ありて同役三人一度に浪人せし事。侍のならひとはいひながら。身の行すゑ定めがたし。妻子引つれ南部の屋かたを出し時。いづくいかなる所にすめりとも三人の入魂はやめじと申かはせし內。松井の何がしといふ人信州松本に立こへしが。ほどなく病死と告來れり。日比のよしみに其跡を遠山氏の何がし。是は武州に立のき親類のよしみをもつて時めく御家に身躰すみて先知五百石むかしにかはらぬ弓大將武運はつきすと悅びを重ねぬ今一人の古傍輩田川氏の何がし上方にのぼるのよし。妻子なき身の心安さは今に廻國仕るなり。其後は文通たえて一入其人床しく住る所のしれなはわが身躰の事を告しらせて悅こばする事もと明くれ是を忘れざる折ふし。近衛の御所へ改る春の大亂代仰せ付られ。年のうちより身拵へして月代も春の色めく三保が崎はをのつと松立て飾る風情ふじの煙の絕ずも大福よろこびなど立つゞく民家を過て年へぬる身もわかやぐと云正月ことばに面影鏡山にうつし勢田の道はし君が代の永ゝとわたり枩本といへる宮の森陰に都の春を夢となし軒は湖水ひゞき三井の晩鐘を鼻にきかせて入日を

獸かす明ほのを喜こはす。なければ喰ぬ迄の二つ五器をたのしむ物は燧箱に松かせの音時に編笠ふきまくり。面影をみれば正しく田川の何がし左の方の額にむかふきづをしるし。是はと馬よりとびおり驚きしさいを問に。田川恒なる顔つきして牢人の時はかゝる身すきも何の恥なるへし。唐國にも伍子胥といへる者あり主君を養育のため形をかへ昼はふして夜半に出簫をふき腹鼓をうつ音をなし。万民をなぐさめて食をこひ。後には天運をひらけり。此身は昼を遠慮のしさいあり。我身は昼夜の世間を怖れすと古へにかはらぬ十面顔さりとは氣を凝さぬ侍やと不便は外になりて暫し立物かたり過て跡付あけて路銀のうち十兩當分入用につかひ給へと渡せば。田川すこしも悦ぶけしきなく。世の重寶今の我身の何の益にもたちかたし。人疑へば是をくだきてつかふへき才覺なし。是よりはたゝ鳥目百文といへり。田川が心まかせにして。都の歸さまに東の離れを又爰にてと約諾して遠山の何がし都の使者をおひ勤め。彼松本に行。田川とかず〲の物かたり暇こひ。只今頼みし主人自然めし抱へられば先知に

て堪忍し給ふべきかといへば。そなたと又傍輩の願ひあれば。住へきといふをよろこび。急き東武にくだり。御返事をさしあげて彼老中諸役人のつきあひにて。田川心底流石の侍とよしなに物がたりせし事。誰が申よるとはなく大殿の御耳に立て其者の心ざし床し。若此家に濟ば右の三百石にてつれ來れと。上意有かたく遠山ふたゝび松もとにのぼり。田川に此事聞せければ。此義は偏に貴殿の取持と心から勇をなし。此身になりても一腰は捨じと。三条室町呉服所菱屋の何かしに預け置し具足一領鑓一筋大小など取に遣し同道して東に下るに。遠山挿笥をあけて當分は是なりともと。小袖を遣しけるに田川一圓請ず。存る。子細もあれば某は此まゝとさまぐの了簡をうけずやぶれ薦を身に纒ひ。江戸にくだりぬ。直に御目見への用意。遠山が屋形にて髭月代も改めんといへば。田川苦ゝしき皃つきして。某が事御前へ非人の境界を申あげられずや。然らば此まゝにて御前へと申。遠山興覺て色々諫言するに更に是を用ひず。是非なく此義言上申せば。其者が願ひの通り目見え請べしと。仰出され非人を有しまゝに廣

庭にまかり出首尾残る所なく御目見え相済てのち身をあらため御奉公を相勤めけるに。流石一利屈ある武士にて勤次第に疎からず其御家の重寶となりにける

〔四〕賊うしれ世遊別

古代の人のいへり物には同氣相もとむる事善にあり。悪に殊更なり。其比は東の奥道奉行の仕置を用ひす。追剝夜盗のさたやむ事なかりしに。今君が代の道すじ廣く捨置ても取あげざるこがね花咲海山まで。松に風たえ浪に音せず人に邪なかりしに後奈良院大永二年の春。陸奥にかくれなき盗賊の名取川瀬越の何がしとて往來の人をあやめて金銀荷物押領して。世の外なる分限と成身の程しらぬ奢を極め都を見るはしめとて人あまたにてのぼりけるが。遊興のあまりに美女を見出し。是戀わひける其人はむかしに衰へる人の息女なるか邪なる人共しらす渡世の心やすきは都より東も住よかるべし。女に定る家なしとて其盗賊に給はれは馬乗物をいそがせ古里に立歸り。彼美女を愛して世は世さかりとくらしぬ。此息女何となくくだりて次第

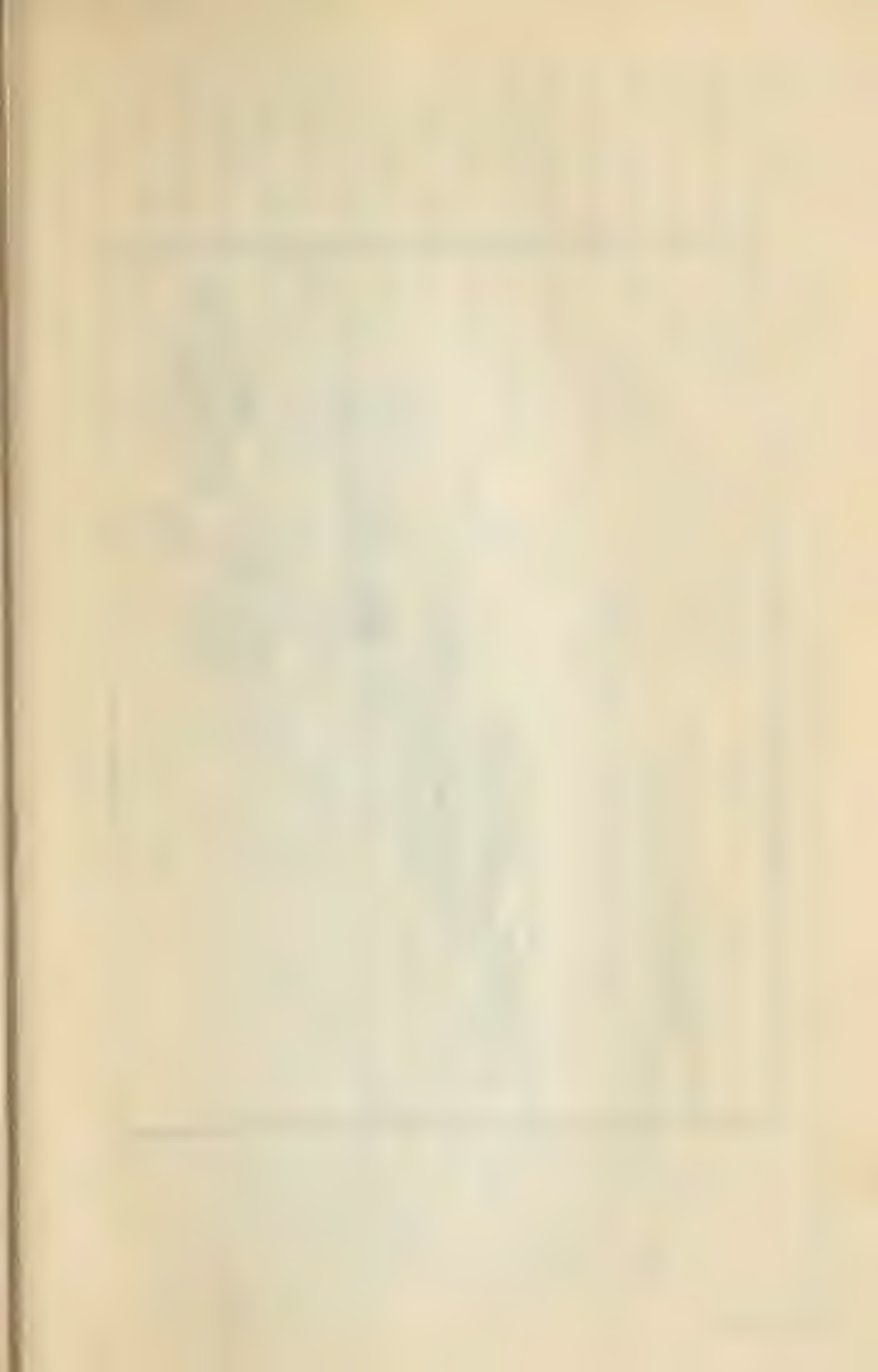
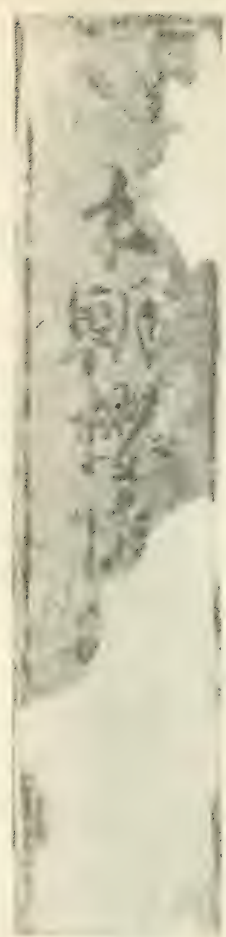
によしなき世わたりを見て淺ましくかなしく女かへる道もしるべなく菟角は身捨是までと極めし日数もふりて。なしめは其血にそまり。剝とる小袖の今宵は仕合といふをうれしく。むごき物がたりも心よく切刄を付し山刀も怖しからす。自から夫の惡心に同じ。それより年經て娘をふたり儲て行するよろこひし。此夫病死してたよりなき後家となりて又東に住もうるさし。家に有つる諸道具を夫の同類なる人取貪て。殘る物とて鑓長刀すぐなる心を今はゆがめてけふをくらせる便りもなくて。男のすなる夜のかたち海道に出て手にあふ旅人の物をうばひとり一日を送りぬ。二人の娘もおとなしくなれるに。里ちかき今日の細布織ならはせる業はなくて夫の惡事を是にまで傳へて怖しく拵て武士はよけて町人里人をおとして何にはよらずとりて參れと勸めける。かたち婀娜ければ情の道も知へき娘共姓はもとをあらはし父の心にかはらず毎夜ちまたにて母を羽護込ける有夕暮に野沢のひとつ道ゆくに。誰かは爰に置わすれぬ。續きの絹の十疋有しを天のあたへと悦び。兄弟の中なれ共いろのよき絹をあらそひ。五疋つゝ引わけて。花見る春もちかづけば。紅梅藤色にもそめ。夏はひとへを夘の花衣にたち縫して。女風情つくる事を姉も妹もたがひに欲心出來て今宵は姉をともなはずは。自から独りの物なるに。かへさの廣野にならば。姉を殺し絹を丸めんと思ひし。姉もまた分たる絹をおしみ。妹の命をとりて殘らすわが物にと。二人の惡心同しくして機嫌よく道を急ぐに野墓の燒るを見て姉無常を觀じ。扨も口惜き所存や。思へは纔絹五疋に現在の妹を命を取べき心入。去迚は世に有べきさたならずと。心中に觀念して。とかくは是ゆへにさもしきと彼絹を人燒煙の中へ投込ば。妹も一度に打くべ同じ灰にぞなしける姉ふしぎに思ひ。何とて絹は捨けるぞと尋ねしに。妹涙ぐみ今更申も恥かし。無用の物を拾てそれより心の外の欲心發り。そなたの命とりて母には旅人の働きにて是非なく殺されたると語り。其歎きかへり見ず五疋の絹ゆへ淺ましき心ざし申せば。姉も横手を打て我が思ひ入それに同じ。永からぬ世に生れ殊に女の身としてかゝる惡逆後世の程恐ろし人を威せし刄物を燒捨て是より菩提に入母にも勸めて佛の道うとからず。心にくき三人びくにと成ぬ。誠に無明無躰盃依法性とやらん聖のいへる氷消ては淸

き水となるためしぞかし

五 んの切ゝ彦小刀屛風

古代家下に神變有事を語り傳へり。菊酒は加賀の名物にして重陽の御祝ひの水。久しき代ゝのためしぞかし。大書院は仙人盡のすみ給。くれなゐの雪の洞に。四季をわかたず花咲実のなる桃の立枝のこのもしき風情。いづれか大名の御物ずきこせらぬ事をこそ豊なる詠めなれ殊更近年小刀屛風とて世に有程の正銘をあつめ。小柄のつくり物美をつくされしに。其いさぎよき事此うへ何かあらじ。惣じて人は移り氣なれば。諸家中共にきよらなる小刀箱を拵へ其相應にたしなまれしは。武士に似あはざる事にはあらさりき。其比家老職の家にして秘藏の小柄兩度まで見えざる事有。ひそかに詮義し給ひけれ共。其ありかしれず行ぬ。又有時御月待執行あそばされし夜半に御指領の小柄紛失せし事度かさなつて御腹立。此たびはつど／＼に御詮義遂られしに。宿り番組の小性衆の寢道具茶堂坊主の役にして。葛籠にたゝみこむ紫ぶとんの下より御たづねの小柄あらはれ出。此事つゝます横目衆に披露いたせ

し。此小姓の身に覺えはなくて武士一分の立がたく。是非もなき覺悟におよべる時。召つかひの小者團八と申せしが供部屋より直に欠落せし事其かくれなく御前の御耳に立ける。諸役人のおもはくにも扨は此者が仕業なるべしと極めての御さた有て主人は當分遠慮して御奉公をひかれける。其上方〳〵へ追手をかけられしにいまだ國中をはなれず。小松といふ所の片里にてからめ來り早速註進申あぐれば。其者吟味役人に仰付られ樣子段々尋ねられしに。團八すこしもどうせず。私の心から小柄を忍びて盜とりしと一すじに申あぐれば。幾度の詮義も是に極まり。團八を成敗の庭に引出す。時に大横目の何がし。團八最後をあひ延所存一とをり申されし子細は先下人として御腰の物かゝりし御居間まで參るべき故なし。又主人は大分の祿をくだし給はれば何か金銀の小柄なればとて乏しくは存ぜざる所なり。しかれば團八みづからぬすみとるといふ其其まゝに成敗なりがたし。是をさつする所主人の面目すくはんため其科を我身に引うけ。一命に立かはる事下人にはやさしき心底なりと。かいとつて其道理を申され

ければ。皆もつ共と評定あつて此事御前へ申あげ團八が命をこひうけ。かさねて心中を開給ふに。各の推量すこしもたがはず。末々には奇特なるものと世上に其名をふれける。されば悪事千里をはしる。虎林といへる掃除坊主前後の小柄をぬすみとる事自然とあらはれ世の掟とはなりける。かの團八年久しく武士のつとめを退屈して大正寺の門前なる民家に身をかくし門はしるしの杉をなびかしわづかなる酒商賣をせしに。正直をもつて世をわたる事行水に數かくかよひ樽もつどひ來て十年あまりに富貴の家とはなりぬ。つれたる妻に獨りの娘ありて今は三歳の春もすぎ。卯月のはじめ比より團八大病を引うけ。次第に枕あがらず生薬をあたへつれどもさらに。驗氣のなき事をかなしく。夫婦のよしみ此時なれば共こゝろにまかせ昼夜の取あつかひ殘る所もなかりき。今は世のかぎりと見えし程に。自然なき跡にても此家のたへず娘がための書をきとさま／＼にすゝめけるに。日比はかしこき團八も浮世の欲といふ物大分の金銀に心を殘し。浮雲命の内にも書置はせざりき。妻たる人此心中をうらみながら。身をくだき看病つくしけるに。いまだ時節の來らんや。二たび驗氣得てむかしの團八になりぬ。よろこび日をかさねて後。親類縁者酒事をしてよび集め髭月代をあらため。其座敷におひて猶五百八十までと長命を祝ひ。千秋樂をうたひてのち内義立出て。右の段々うらみの旨をいひ破て是非のいとまをこひけるに。各をどろきいろ／＼なだめけれ共。最後まで妻にをしまるゝも夫婦のかたらひせしかひこそなけれ我一生のいとまとふり切て出て行ける。團八立腹してやがて思ひしるべき女心とほどなく後妻をもとめかたらひをなしけるに。三年ばかりすぎて又大病におかされ今をかぎりのとき過にし妻の事思ひ出して。しるべ有人に尋ねけるに。それよりは髪を切て世をひとりあだに暮せしとかたりければ。團八かんるいをながし後妻にそれ／＼の所務分して。財寶のこらずむかしの妻に是をゆづり。する／＼さかへておかた酒屋とてさゝの小さゝを國中になひかしける

元禄元戊辰稔

十一月吉日

江戸日本橋南壱丁目

万屋清兵衛

大坂高麗橋筋呉服町角

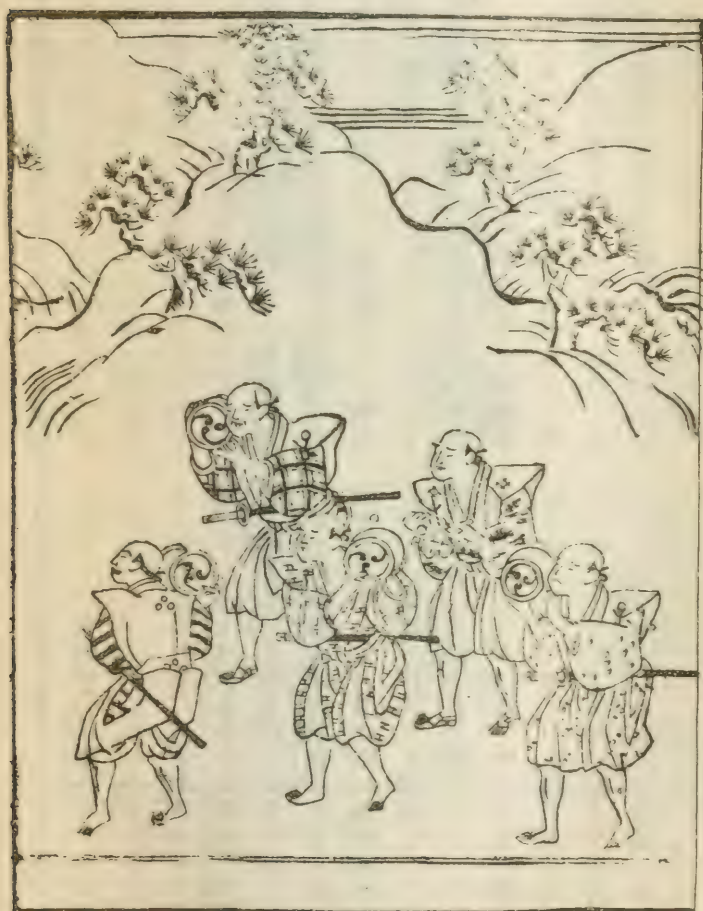
岡田三郎右衛門板行

本朝櫻陰比事　巻一

目録

一　春の初の松葉山

夫大唐の花は甘棠の陰に召伯遊んで詩をうたへり。和朝の花は櫻の木かげゆたかに歌を吟じ。此時なるかな御代の山も動す。四つの海原不斷の小細浪靜に。王城の水きよく流のすゑの久しきひとりの翁あつて。百余歳になるまで家に杖突事もなく。善惡ふたつの耳かしこく聞傳へたる物語り。今の世の慰さみ草ともなりて心の風に亂れたる萩も薄も。まつすぐに分れる道の道筋の廣き事。筆のはそしにも中〳〵書つきすして殘しぬ。むかし都の町に高家の御吉例を勤むる年男あつて。毎年十二月廿一日に定めて丹波堺なる里の山入して。御かざりの松をきりける。此山の東の麓に里有西のふもとにも里有。此兩所の入組の山にして年〳〵庄屋出合山さかいのあらそひやむ事なし。爰をかざり山とて古代より切所に極まる記録を持傳へ。此山は我しはいの所といふ。又一方の庄屋も卷物を出しけるに。双方一字一点違ひなくなを此事すみ難し。扨又高根の景地に大同年中の建立といひ傳へて。楠木作りに一間四面の觀音堂あつて。ないじんの戶ひらは昔日より釘付にして。本尊拜たるためしなし。つゐに灯明の影もせず參詣の人もなく。柴男の休み所となつて御佛前は木の葉に埋もれおはしける。此堂の事第一あらそひ訴狀さしあげ山公事に取むすびぬ時に兩里の庄屋を京都にめされ。同し記録を持つたへし事子細あるべし。此卷物に觀音堂事は何ともしるし置ざり。記録は大同より後の年号也。秘佛といへは誰か拜せし者もあるまじ。然とも我〳〵どもは樣子をしるべし。何觀音の尊躰なるぞ兩方より申出べし。云當しかたの堂に申付べきとの御意なれば。爰ぞ思案大事の所也。一方よりは淸水寺の御同体千手觀音と申上る。又壹人はしばらく傾つかえして分別極め如意琳觀音と申上る。兩方極めさせての後丹波に御役人をつかはされ彼堂の戶ひらを引明しに。各別なる事にておの〳〵横手をうちける。すさましき神鳴の形を八方へ鐵の鎖を掛ていましめ。目を留て見るも身のふるへる事也。京都に歸りて此ありさまを言上申に。さりとは不思義にもおぼしめされず洛中の佛師を殘らずめしよせられ。もし此神鳴の躰を刻みたる事を聞傳へたる細工人はなきかと御たづねの時。其比五条の大佛師法橋民部といふ者。六代の先祖是を作りたる家

業のまき物さしあげしに。後小松院應永元年霜月十八日の夜大雪ふつて。雷なり出し其数しらす落かゝつて。諸木をくだき里の屋を破り人の命をとる事男女に弐十四人。万民のなげきなる時北國がたより眞言の旅僧きたつて。是をふうじ篭られし後此山里に虫出しの神鳴さへ音なく。是をよろこび其像を作りて此所ひさしかれと祝ひ篭。雨里より是をあがめ雨乞の願ひをせしに叶はざるといふ事なし。其事里人するになつてとめこし候とそんじたてまつり候私先祖是をつくり申候證據には則岩座のうちに。書付残し候と此巻物に見え申候段言上申せば。臺座を改めさせ御らんありしにひとつの折紙あつて。佛師が申せし通りすこしもたがはず。願主は雨里の庄屋なり。其比は聟舅の中なる事しれきたれり。扨は記録一方より書移して遣はしけると見えたり。昔日縁者なれば今もつて外の義にあらず。自今以後は申介て。此堂をかぎつて東西の山を守るべし。松は先例にまかせ一方の山にて十弐本づゝきつて。十二門の松をたてまつるべしと仰

せ付させられ。永代かはらぬ松葉山ちよに八千代と祝ひおさめける也

二　曇は晴る影法師

むかし都の町に夏を棟として。軒に木曾山を引請し材木の問屋有。二葉より家業にかしこく松はちとせ藏とて。鳥の孫曾孫まで居喰にしても此たくはひつくる世あらじ。亭主は八十歳余まて一子に財寶もわたさず。大暮の勘定をよろこび。かしらは霜を抓り額に不断の浪立腰は反橋のごとく。わたりかねざる世界をさりとは無用の勤め。今にも死れたらば火車のつかみ物と。人の取沙汰やう〳〵耳に入てお八つの太皷におどろき。俄の御堂まいりの暮て後世をいそかるゝと人皆又笑ひけるが。あしき事にあらねばいつとなく佛心発りて其後は常精進になつて以前に替る事天地也。乾坤の箱入にして千貫目置の窓蓋。明れば諸山を見わたし老後萬事男子に渡して。樂隱居を岡崎に見の思ひ出爰に極め。とく捨ぬ世を今は立。作事は手の物の嵯峨丸太かるひ取殘念なり。然もつれあいは二十ケ年前

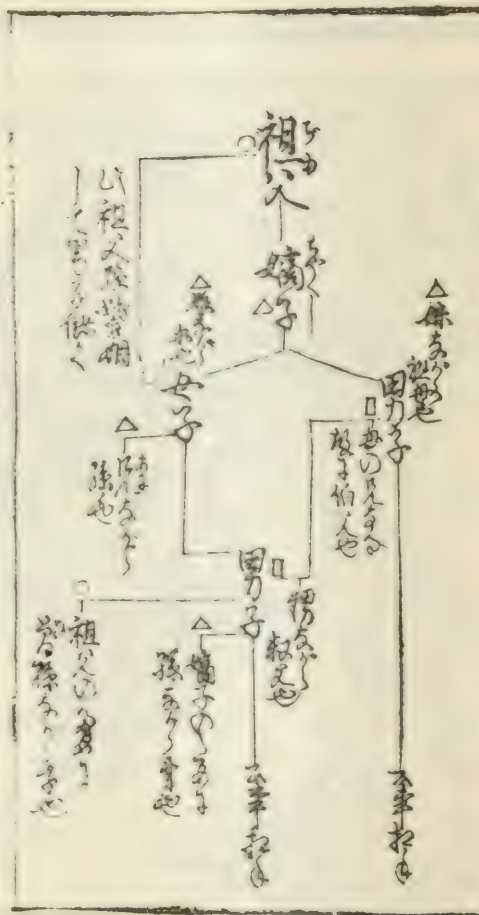
にはなれ。ひとり法師になつても心かゝりはなかりき。男子は有徳なれば自由に孝をつくし。毎日世の初物をはこばせ。殊更お茶のかよひのためにやさかたなる女四五人付置しに。寝間のあげおろしも人の手にはかけ給はず。墨衣をきぬはかりの出家形氣になり給へば。めしつかひの者どももおのづから信心のおこし年ふるうちに。下女の中にも其さま見くるしき。庭はたらきの女腹形おかしけになれるを。人〳〵とがめて笑ひけるに旦那のお名を立けるは。大かたならぬいたづら者と是を悪みて。此事親仁さまに申せば夢にも覺のなき事とて。下女は此内を追出され小宿にて産をいたせしに然も男の子也。随分大事にかけて守そだて。親子の忌明て此男子を親かたの許へわたしける。是を取あへる人もなく是非におよばずかなしさのあまり。子を抱ながら御前にはしり込右の段申あぐれば。親仁をめし出され色〳〵御僉義あそばしけるに。すこしも身の上に覺へなきよし申あぐる。然らば明十四日の朝両方ともに出べきとの御意。いづれも早天より相つめける。時に仰せ出されしは唐土にもかゝるためし有。八十余歳に成ける人の子は日影にうつして其影なし。面影うつらば親仁が子にまぎれなしと仰られ。白洲立せて朝日に移しけるに。此子か影法師見えざり。今は親仁ちんじ難く私世間を恥入包み申は得とも成程拙者の悴子覺へ御座はと申あぐる。時に母親すゑ〳〵願ひ申上れば。其子かならず百日は生ざるもの也。もし長命ならばかさねて申出べしとの御意を請いづれも御前を立ける。その後親仁も此子にふびんをかけ。昼夜大事にやういくいたせしに。次第によはりて仰せ出されしにたがはず九十七日目に相果けると也

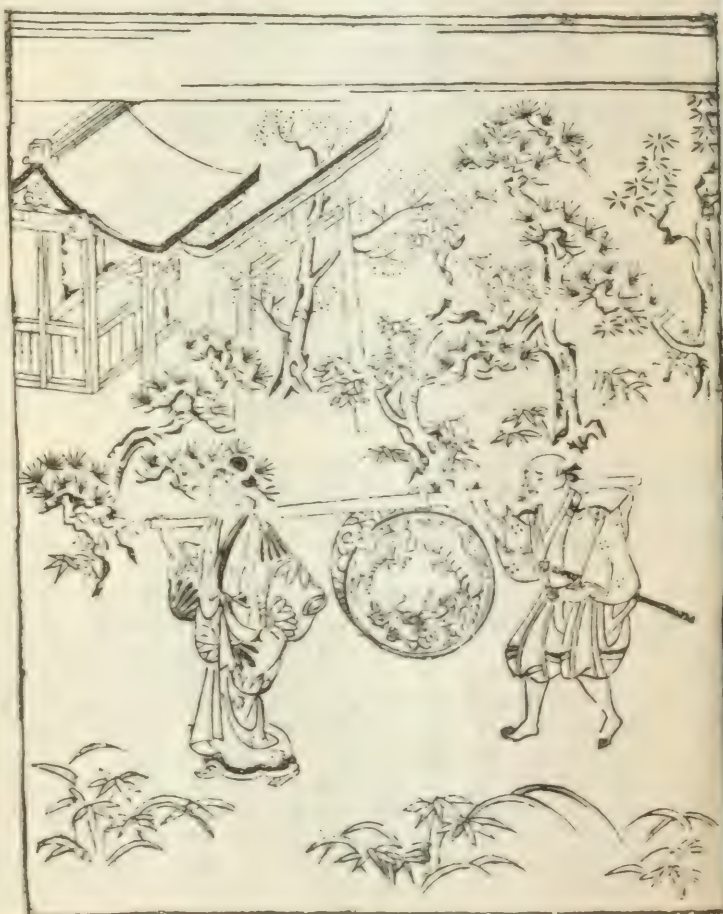
三　御耳に立は同じ言葉

むかし都の町に西の岡屋といへる葉茶商賣の者有。古里出て十三ヶ年あまり町屋住ひをせしが。先祖より手馴たる鋤鍬うしをつかひし野道と。商ひの道とは各別に違ひて年〳〵質をへらし。身体継きかねて今一たびふりを替る相談極めしに。金銀の才覺京にて成難く。親のゆずられし田畠一門に預ヶ置て作らせしが。これを代なす胸算用して。里の親類に子細を語れば。欲の事に目の者どもひとつになつて。田地は買取あづからぬといふ。然らば其證文があるかといへば。其方にあづけ置たる證文があるかと横を申かゝられ。さりと

は盗人といふ者也。皆のかれぬ中なれば手形も取ずして。今後悔なれど甲斐なし。是は内證にては堪忍なりがたく。段〳〵書付をもつて御訴詔申上。相手の百性めし出され既に裁許におよべり。里人声かしましく我まゝいふうちに。伯父人手形もない事申されなといふ。京の者腹立して伯父ない事が御前へ申あげらるゝ物かと。両方より伯父といへることば御前の御耳にとまりて。先公事は外に成ておのれら畜生同前なり。先祖の祖父目世にあらば急度申つくへき曲者也。此出入かさねて聞事にあらず内證にて和談すべし。世間の法を背けば。おのれらがつり書して其町の者どもに是を見すべしと仰せ付られしを。いづれも合点まいらす色〳〵思案いたしても落着せざりしを。御前には良座にきこしめし分させらるゝ事諸人かんじける

四　太鞁の中はしらぬが因果

むかし都の町西陣に織絹屋門をならべ。是を渡世としてけふを暮せる中に。家職人にすぐれながら内證さしつまり。年久しく住なれし所を立のくに夫婦相談を極め。諸道具しのび〳〵に賣拂ふを聞つけ。兼て念比せし職人中間十人申合せ。此亭主は身すぎに油断なく萬事りちぎにかまへ。然も佛神を信心深くひとつとして悪事なく。人のためにもなれる男にていつれも是を惜

み。是非に今一たび身体取持べしと内證きけば。わづか四貫目にたらざる借錢。是にて數年のしにせをやむる事あるべきか人の身の上にはかゝる事のあるならひ也。我／＼万事請合上は春の事ども調へ。嬉しがる子どもに餅花を見せ下／＼の仕着は紋なしの淺黄にして今からもなる事也。お内義こんな時お大事也。髮かしらも取あげおちめを人に見せぬが女房のたしなみ。餝は三本まで手前にあれば是を一本越べし。我人いそがはしき十二月廿六日の夜に入。申かはせし十人壹人に金子拾兩づゝ持參して。賴母子と名付合力にいたし一升桝にひとり／＼なげ入。合て百兩の小判近年のうちに千兩になるべしと。中にも分別らしき男是をゑびす棚にあけ置。隣の大黑殿も來年からは小槌のつゞく程はうち出し給へ。さもなくば紙屋川へ流しますと大笑ひして。其後は酒になしていづれも機嫌なれば亭主もよろこび。是はめつらしきとしわすれとひとつ呑人皆目の下戸までも。我を覺へぬ程の醉のまぎれに順の舞の藝づくし。何をいふにも前後しら

す千秋樂に草履はきかへ。羽織を殘し扇をおとし禮義なしに立歸る時は。七つの鐘突鷄も鳴て亭主は宵よりの氣あつかひ。皿箱枕にしてふしければ女房戸ざしをしめて。常よりも用心して下〳〵を寐せて。心嬉しさのあまり男を起し。大かたに拂ひ筭用をして見給へと。大帳十露盤をあてがへばあるじ目覺して。此節季には借錢乞ども目を秤でつらくはすべし。殊に米屋の八右衛門は緣者のはしなるに。外よりせはしく乞立し。さらりと濟して年取物から限銀にて脇で買と。諸事胸さん用して棚より桝をおろせば中に小判はなかりき。夫婦是はと長き裸金なればよもや鼠は引まじ。もしは神隱しかとゑびす棚を幾たびか見るに。いよ〳〵ないに極まり中〳〵はじめ今のかなしさ増り。菟角は我等が因果なるべし。盗し人も恨むまじとおもひきれども口惜く。なまなか合力請て結句身の難義となれり。世間の取沙汰もいかゞなればながらへて何のせんなし。いざ子どもをさしころし果んといへば。女房も取乱さすいかにも生たる甲斐はなし。死

妻は人の見るぞとたしなみひとつある白小袖に身をなし。扨鏡に向ひ不断よりは髪かしらうるはしく。男の鬢撫付てまことに十九年のなじみ此明ほのゝ夢かと泪に目もくらみ。持佛堂に灯あげて。二人の子どもをしづかに引起せばけふは餅花をする日かといへば。又弟は破魔弓の事現にもわすれもやらず。さりとはふびんにおもわれし時。久しくめしつかひの女この首尾を聞付て起あはせ。子細も聞ず泣出して御夫婦はともあれ。いまだわきまへもなき子達の命をとらせ給ふは。いかなる事ぞとなげきて何とぞ御分別のあるべき所。此おふたりはわたくしの手に掛てそだてますと。大声あぐるにぞ皆〳〵起さはぎて。とかういふまに夜もあけておのづから自害もとまりぬ。此事宸前二三人聞付衆中へしらせて又十人寄合僉儀するに。何とも合点のゆかぬ事是なり。合力する程のいづれもなれば是を取べき事にあらず。といふてから此盗人は外になし。面〳〵の身晴に神文鉄火といふ人有中にも一分別ある人其分にては済難し。菟角は御前へ言上申御沙汰次第と相談極め。右の段〳〵書付を以御訴詔きこしめしわけさせられ。年内余日もなく皆〳〵渡世のさはりなるべし。正月廿五日にせんさくすべし。其内壱人も他国仕るなと仰せわたされ罷帰りぬ。春になりて右十人の者ども妻めしつれて御前に出べし。もし女のなき者は姉妹にかぎらず。あるひ姪娣にても女を壱人同道申て出べきとの上意。迷惑ながら御白洲に罷出れば。一二の鬮取あつて番付を書付。大き成唐太皷に棒を通し。夫婦づゝにさし荷はせ御屋形をはなれはるか西にあたつて宮の松原をまはらせ。是を諸見物ちかくよる事かたく御法度也。頼母子の金子見えざる過怠とて。一日に一組づゝ十日が間に此事おはりぬ。洛中の万人見聞して是は各別なる御過怠どいづれも不思議を立ける。されば此太皷のうちに発明なる小坊主を入置れし事。誰か存知たる者なし。毎日事御たづねありしに。いづれも女はなげく中に。八日目にかたげまはりし女房すぐれて我男をうらみ。金子合力しながら諸人に面を瀑させ。かゝる迷惑是は何の因果ぞといふ時。弓小語で是はすこしのうちの難義。生金百両只取事がとき御僉義にあらはれ。右の小判を取替され彼者にくだされ有難仕合也其後仰せ出されしは盗人ながら一たん合力の衆中なれば。命は助て都のうちを則

これより拂へとの御意にて夫婦を東西に追うしないけると也

五 人の名をよふ妙薬

むかし都の町に佐渡の嶌國よりわたりて住京五条塩竈丁に定め。物さびしきを態と好みて然も借宅して。古里よりめしつれたるおとこ壱人是に臺所をあづけ。年中只居して銀八百目にて萬事を仕廻るゝ身体。是程かるひうき世の樂人我也。今年五十にあまれば長生してから今二十年。こゝろにかゝる親もなく行すゑおもふ一子もなく。木から落たるさる程に賴みすくなし。佐渡より金子弐千五百兩持參せしが。今の算用なれば二百年のたくはへ有。俄に榮花仕やうもしらねば。明暮札錢出して芝居見るより外はなく。いまだ遊山の同道もなく半としあまりも暮して。京とてもさのみおもしろからぬやうに思ひぬ。其相借屋に是もひとり住して日をおくれる男有。何商賣とも定めなく。洛中の分限なる人の男子達の機嫌を取。世を夢のごとく渡りて。夜を昼になし世界の圖はづれなる者。都なればこそ人も是を見ゆるしける。我竈は稀にも燒たる事なく。火の用心ばかりは氣づかひなし其外は何とも見えぬ男也。いつの比か隣に金子の有事を見出し。さま〳〵にして取入心をゆるさせ念比になる時。六条の遊女町にさそひ行て歷〳〵衆に引合せ。太夫まじりの遊興の後此田舍人大分金持と語り聞せけるに。利銀は月七割にても先借たがる若ひ者五人內談して無心を申かゝれば。此男良座に合点して手前に有あはすこそ幸ひなれ。利銀におよばず御壱人に五百兩づゝ五人に弐千五百兩。有切出し預ヶ手形を請取共上に申渡しけるは。此金子は我一代の渡世のためなれば。一とせの入用程五人のかたよりまはり番にして歸し給へ。其内にあい果たらば誰にゆづるかたもなければ。跡の義吊ひ給はれとすこしも殘らぬ心底。天から降たやうなる金の借手。おの〳〵當座のよろこひ末に濟すましき覺語のひとりもなかりき。田舍人も宿に置ての氣遣ひ絕て其後はいづれもと參會して先に一夜を明せし事も有。折ふしは霜月中比殊更さへわたりぬる夜あそびに。かの相借屋の機嫌取男共一座にありしか。兼て惡心をたくみ此田舍者さへころせば。預り金はいづれもの德になれば。五人の手前より大分取へしと無用の欲心発りて。其人に毒酒を痛へ醉のまぎれに一盃呑せける。其座は何の事もなく私宅に歸りてなやみ

ぬ。惣身動ずして口篭り目ばかりうろ〳〵と見まはしければ。下人おとろきいまだ息の通ふうちに罷出段〳〵言上申。五人の手形を御前へさしあげ夜前の一座も此衆中と申上る。其五人外の同座せし者までも残らずめし出され御僉義さま〳〵なれども。本人夢中なればいづれをさして御吟味成難し。しばらく御思案あそばされ御手前醫者仰せ付られ。かゝる時申傳へし妙薬を世のためしに呑せ見よとの御意にて俄に拵へける。ふるき鞁の破れ革を黒焼にして。彼病人にあたへ給へば腹中に入と。毒を呑せし相手の名をおのづからによぶといふ事。唐土の醫書にあるゆへ今此不思議を見る也。大事の聞物ぞと仰せ出されし時。是はと畏く者有叉何をかとうたがふ者も有。銘〳〵心〳〵に耳をすましけるに。しばらくあつて病人口ひるに動き有て咽うちにてそれが名をさして太鞁の茂六〳〵といふ事あり〳〵と聞へ。何も奇の思ひをなしける。此者をからめて御せんさくに悪事あらはれ御仕置にあいけると也

六 孖は他人のはじまり

むかし都の町に一子相傳の妙薬。神教萬病圓と看板出して賣薬有。是洛中の外近在迄廣まりて此家四条通りに隠れなし。此人五十余歳まで屋継のなき事を悔みしに。本妻懐体をよろこびしに。此亭主相果られ三十五日のなげきのうちに平産いたせしに。是つねに替りて孖然も二人ともに男子也。父のなければひとしほふびんにおもはれ。面〳〵に乳母とりて此子ともをそだてさせ。名も梅松竹松と呼て十三に成ける夏の比叉此母親頓死いたされ。定めなき世とことにかなしきは跡を見立る一門もなく。只ふたりの乳母ども銘〳〵に抱守いたせし子に此あとしきを望み。惣領末子の論をする事やみ難く。町中の異見をも聞入ずして兩方より同じ願ひ訴詔をあげける。時に此家ひさしき手代外に書付を言上申は。此家ふたつに罷成候へば一子相傳の名方のわかる事。家財よりはなげかはしく存たてまつり候と御願ひを申上るは。いづれにても壱人に家を継せ。壱人は相應の敷銀を付他家へ遣はし申度所存。尤にきこしめしわけられ。京都に名高きちゞみかしといふとりあげ祖母をめされ。ふた子の事前後出生の中にいづれか惣領に立けるぞと御たつねなされしに。古例にて跡より延生仕るを惣領に立て申候。此子細は胎内にて母に取付縁のふかきゆへなり。先に生れ候は其子が

後に乳房もそのあまりを吸がゆへに。五体もすこしは大小御座候とつまびらかに申上る。此祖母が申通り後生れの竹松を惣領と仰せ出されしに。梅松が乳母合点いたしかね母親心ありて名をば梅松とは呼申候。是花の兄には極り申候。菟角は此身体ふたつに甲乙なく仰せわけられくだし給はゞ。ありがたく存じたてまつるの願ひ言上申。御前には手代が申分至極におぼしめせとも。是の愚知と御ゆるしあそばし。然らば諸事まふたつに分とらすべし。先宗門を御たづねあそばされしに。此家代〳〵日蓮宗にてめしつかはれの下〳〵までも同じ宗旨のよし申上る。然らば持佛堂をひらき高祖の御影とつてまいれとの御意にまかせ佛を御前にさしあげし時。諸道具を二つに分るはじめに。兩人の乳母ともが手に掛て此佛をまふたつに割て。かさねて罷出べしと公事を殘して御歸しあそばされしに。いかにしても後世を賴みし佛をくだく事はと兩人ともに身ぶるひし。町の人のいへる事を一圓聞入ざりし女どもおのづからじゆんじゆくして。無用のあ

らそひを悔み。いづれもを頼み手代が
願ひの竹松に家を継せ。梅松は弟に定
め歴々に仕分る內談を極め。此段御
訴詔申あぐれば御心入通りなれば。其
通りに仰せ付させられ無事相濟けると
也

七 命は九分目の酒

むかし都の寺町通りに。十分盃を和朝
にてはじめて工夫の細工人有。唐土の
偃師が繰にもおとるまじきものとい
へり。朝暮此うつはは物をつもる每に大
酒におぼれ。是より長病に成て相果し
跡に。男子二人十八十五になりぬ。百
ケ日の精進あかりて後町中立合見るに
書置迚もなし。金銀諸道具有物を改め
大かた世間の法に沙汰して。兄に六分
弟に四分といひわたし母親の義兩人と
して。考をつくし給へといへば。弟い

づれものさし圖承引いたさず。家屋敷嘆へども弟聞入ずして既に御前の裁許
にかきらず萬事を半分とるべしといになりぬ。段々御聞届けあそばさ
ふ。それでは兄の甲斐なし迚さま〴〵れ。町の者がさし圖尤に存する也。其

（この挿畫は「入」

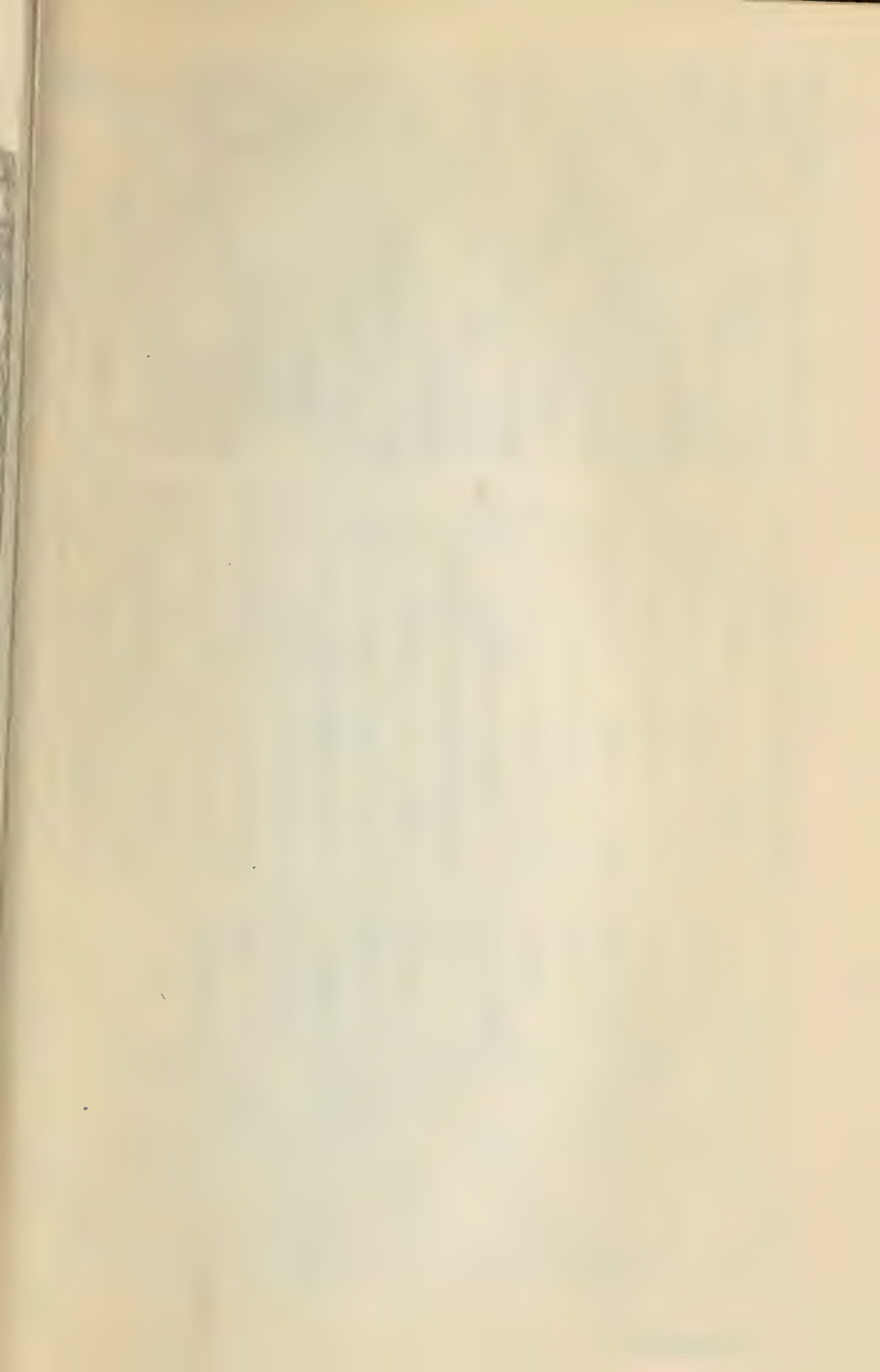
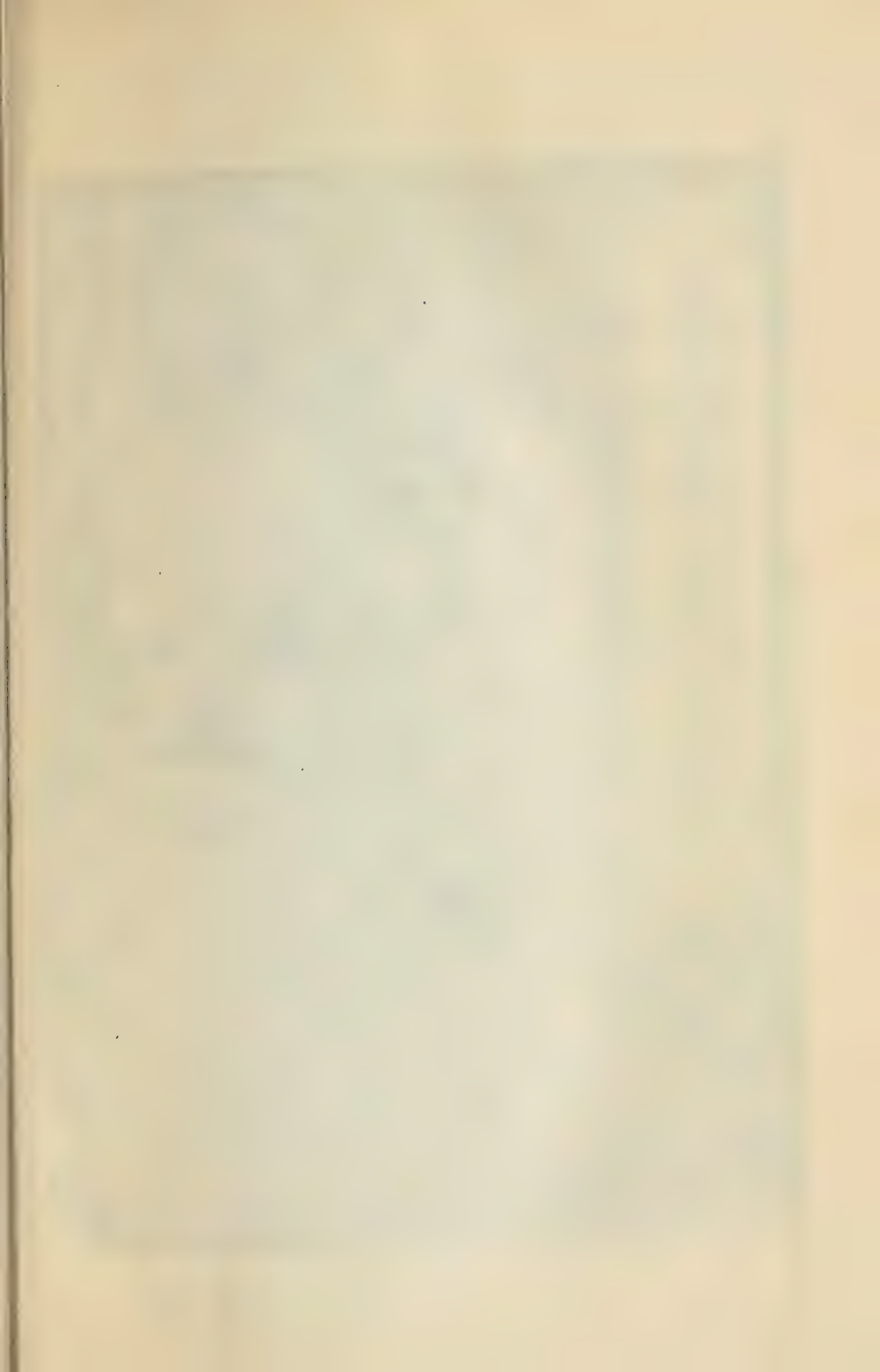
方當分に取べき子細あらば申せと仰せられし時。私事末子ながら惣領なるべき義は。お恥かしながら是なる母親は。元父のめしつかひの者成しが懐体して兄をよろこびしより。諸親類取持本妻になをされて後。わたくしを平産いたされ候事まぎれなく候。然ば末子ながら筋目各別ぞんじたてまつり候。跡をも継申べき事御座候。かやうの義お武家にも先例の多き御事と申上る。あの者申所も一通りは聞へし也。其屋敷は此母下女の時より持傳へたるか。又近年に求めけるかと御たづねなされし。成程下女の時分よりの家屋敷と町中口を揃へ申上る。然らば弟が願ひの諸色ふたつにして渡し。家の義は惣領に名跡を継せ。母は此家にて養ひ申せと仰せける

八　形見の作り小袖

むかし都の町に和漢の織物の商賣して其身利発にて一代の分限弐千貫目をたくはへ。家の榮へる世ざかりに此亭主四十二にして相果ける。今年二歳の娘

に入るべきもの（

に財寶残らず是をゆずりぬ。此母親三十三にて後家を立髪を切捨うき世を恐るゝ形と成。ひとり子の成人を願ひ後夫を求むる望み絶て佛道に立入。其後家職をやめて諸事親類のさしづにまかせ。金銀は兩替にあづけ置世帯は人ずくなにして。男女七人めしつかひ何のふそくもなかりき。有時東山の花談義に一家残らず參詣すれば。門の戸外よりしめて留守なしに出てゆき。其暮かたに歸りしに奥座敷に人影見へければ。皆〳〵長き昼盗人よと声〳〵に取まはし片隅に追込とらへ見しに。南隣の一子いまだ十七になる角前髪の若者也。出合し町衆も手首尾わるく何とぞ沙汰なしにと談合すれば。此男子各別に進て我妻にしのふ事後家合点といへば。扨はとおの〳〵うたがひかゝりて此義何とも言葉なし。後家泪を洒してさりとは〳〵毛頭覺へもなき難義を申掛られて口惜自が子といふても耻かしからず。我不義いたさば世間にしらせず相手有。此事におゐては身を八割にあいても其義とげずには置まじ。女も女によるべしと一筋に胸を定め。人の異見も更に聞いれずして御前へかけ込。右の段〳〵御訴詔申せば其男をめされて。後家と蜜通ならば文通の證據を出べし。女の筆跡なきにおゐては盗人の沙汰のかるゝ所なしと仰せられければ。たがひに忍ふ事に御座候へば。其たび〳〵に火中いたし候よし申上る。其分にては科をのがれし其外何のしるしもなきかと重て御たづねありし時。男しばし思案して肌着の淺黄小袖に三つ蝶の紋所付しを。恐ながらぬぎかけて御目にかけ。是はあの後家の下着にて御座候が。風の吹夜の別れにきせて歸し候。是より外にはさし櫛香包みなどくれられ候。かやうの事なるに盗人の沙汰は是非もなき仕合と泪眼になつて申上る。其風俗見させらるゝに衣裳の様子定紋まで替る所なし。あの小袖は後家がとらしたかと仰せられし時。此女房すこしのうち物を申さゞりしが。世の外聞おもわれ随分つゝみ候へども。かくあらはるゝは大かたならぬ因果と存候。いかにもあの若年者と蜜通仕候と申上る。然れば何の子細もなし。後家無用の云分にあまたに難義をかくる曲者なれども。是女心也罷立と御意ありし時。此男首さげ今すこし言上申度御事。後家蜜通と申上らるゝに付。まつたく蜜通にて御座なく候。皆わたくしが悪事をたくみ申候。此義はわかげにてよしなきことに親の金銀大分につかひ捨申候を。此程吟味いたし

勘當つかまつられしを。やう／＼一門中詫言にて相濟。それより內證きびしくいたされ。次第に不自由に罷成。隣の有德なるを兼てぞんじふと出來こゝろにて盗に入し。此小袖も手前にて拵へ置自然せんさくの時。身をのがるゝいひわけのためばかりに。是程迄たくみ私惡人に相極り申しと心底ありのまゝに申上る。此段御前にきこしめし分られ。先後家がこゝろざし我身を捨世の聞の恥をかまはず。蜜通にして人の命をたすくる事。都廣けれども又あるまじき女と此慈悲しんをふかく感じさせ給ひ。これらは女のかゝみなればすこしも曇らぬ心入。自今はいよ／＼諸親類うしろ見を仕るべし。又男の段は惡事かさなり此たび仕置者なれども。後家がこゝろざしを恥て助かる命を捨。艮座に相手の難を申わけいたせし事。若年ものには神妙におぼしめされ。是によつて極命の所御しやめんなしくだされ。京都を御拂ひあそばされけると也

本朝櫻陰比事　目録　巻二

一　十夜の半弓
　黒谷の念佛におゐて見えし死人は生てある事

二　惣平が外の鏡色
　利口なる者どもは卯月松の月にきはまる事

三　佛の夢は五十日
　寺の庵室へ施主秋に命を助けし事

四　恨み手の遊びに沙汰付
　贈物で悔しきは他の心の毒にあふ時の事

五　餓大工六煮乃費
源氏をぞうられて女房別
うり物汁のあらいの煮事

六　鯛鮹すぐき物目安
今時の世間を見る事乃銭
数入長羽織を吟味事

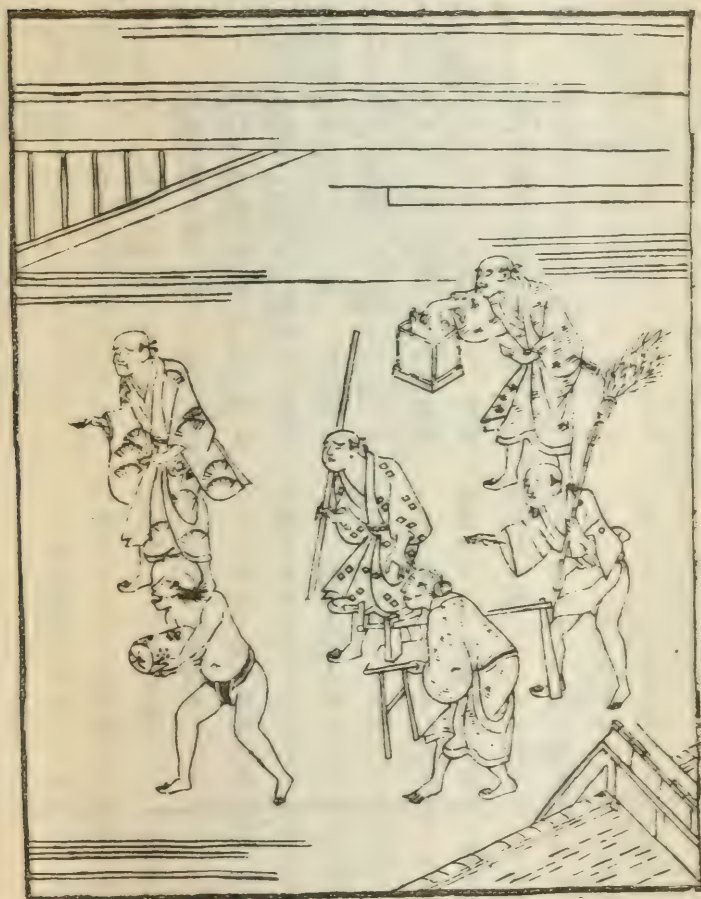
七　銀算も家ハ池大雅
親の志ハわきまへぬ子
抱いまかいし備をこらす事

八　死人ハ目前の釣瓶
板をとらへや構を造れ出し
吾物ハふり袖を包む事

九　京に隠れなき女去
恋をさし浮世に成事
女の利發ハまたちる事

一 十夜の半弓

むかし都の町に時花念佛。嵯峨の安樂坊とて声細長ふ節を付て。つねとは各別世界の人心後生の昼となりぬ。折ふし十夜なれば僧俗ともに扣鉦あけかたまでひゞきわたり。目にも見えぬ極樂を願ひ無用のねんぶつ講をむすび其曉の雲ひかし山に晴て松原通りの門並にみせ戸を明れば。年の比四十二三の男ひだりの手に淨土珠数をかけながら。胴骨矢の根を通をされ死良見しる人あつて。是は大佛のまへなる煙管屋といふにぞ。いそぎ其許へ人遣はしけるに。女房おどろきかけきたつてなげく事淺からず。夜前は宵に宿を立出因幡やくしのほとりへ念佛講にまいられしが。是はいかなる因果ぞと彼同行衆へゆきて此事を語りけるに。講中のおの〳〵皆老人といひ殊更後世の緣をむすばれし人なれば。此男の若死を惜み其人に我〳〵が跡の義を賴しにと。俄にみあかしをあげて香花を取給へば。此人〳〵をうたがふ事なく。奉行所に罷出御訴詔を申あげしに。樣〳〵御僉儀あそばされ日比心掛りなる者はなきかと御たづねありし時。女房思ひ付以前別して念比なるかた二人御座候が。此四五年不間に罷成候人の名をさしける。其二人御前にめし出され此參會仕らぬ子細をきかせられしに。一人は鞠の友にて互ひに藝をはげみ。あいもおとらぬ程につかふまつるうちに。私はお家に立入紫腰を御免くだされしを。彼男是をそねみ其後鞠を蹴とまりおのづから出合も絶候と申あぐる。又一人は六条の㳺女町にて花月と申女良を二人してこれを買論つかまつり申候が。當座の事にてすこしも意根にそんぜず年月罷過候。今にその女勤めいたし罷有候。是を召寄られ御聞あそばされくださるべしと申あぐる。此兩人命を取べき程の事にもあらずときこしめしわけさせられ。彼男と語りあいし中なればかゝる身の果を我〳〵も外のやうにはおもふまじ兼てのよしみに弔ひ料として銀壱貫めづゝ。女房に合力仕れと仰せ出されける時。一人はお請申又一人は難成よし申あぐる。其子細を御たづねなされしに。私は內證かつ〳〵にて手前の暮しさへ迷惑仕るのよし言上申。今一人は早速合力仕るべきと申所を御うたがひあつて。此義御せんさくありしに私は身体よろしく。銀借を渡世に仕る事町內洛中にも隱れ御座なく候。銀一貫目など香奠に仕りてもくるしから

ぬ御事。御意なればお請申せしと申あぐる。兩方の云分段〳〵道理至極にきこしめしわけさせられ。別条なく相濟是等は宿に歸りぬ。其後女房に仰せわたされしは此上に何とも僉義なりがたし。莵角は時節の最後とあきらめ。死骸は鳥部野におくり夫の敵は其矢なれば死人とひとつの壺に入て埋むべし。後家は子もなき者ならば百ヶ日過て勝手次第に後夫を求むべしと仰せつけられ。いづれも御前を罷立其通りに其年もすぎぬ。明る春になつて世間も闇き夜中過に。彼男射ころされし松原通りの其町に女の声せはしく人の門〳〵を扣起し。やれ物取よかなしや出合〳〵といふにおどろき。手毎に棒乳切木をひらめかして立出る中に。半弓取持いかつがましくかけ出る者ありしを軒陰より隠し役人とりまき此男に繩をかけ。子細は奉行所へまいれと引立られ町中残らずあいつめける。時に仰せ出されしは夜前の女は去年汝等が町にてころされし男の妻なるが。存する思案あつてわざと是より夜中にはつかはしける。然る所におのれ町人に似合ざる

飛道具持出る事ゆへなし。此いひわけありやと仰せ出されしに。此男すこしもどうてんいたさず此半弓は親代より家にあるにまかせ。枕もとちかく掛置申候所に盗人よといふ声寝耳に入。何の心も御座なく持出候と申あぐる。申せばさもあるべし然らば最前の矢に此矢をくらべ見るべしとの御意まかせ。土葬の壺を堀出し見あはせけるに。右の矢に違ふ所なし。いかなる意根あつてかくはころしけるぞと御たつねありし時。此男のがるべき所なく。私近年弓のけいこを仕り。當りこまかに罷成狐猫などを射留申候事たび／＼にて御座候。是によつて人間を射て見申度出來にて。何の事もなく夜更て通り申候者を幸ひに射かけ申候と段ゝはじめを申あぐる。町人無用の武道具を持あつかい然も人の一命を斷事。貴き都に又あるまじき曲者と御沙汰極まりて。其弓矢を高札にかけて御仕置にあいけると也

二 兪平の諷過

むかし都の町に沙汰しけるは。勝公事

になるべきを無用の言葉質をとられて。艮座に肩に成ける。江州志賀の浦ひとつ松の陰にちいさき宮の立せ給ふ是山王の末社とて。古代より叡山のさばきなりしが。近年は祭の外に參詣ありて。散錢箱の重きより人皆欲にまよふ世の中。滋賀の里人内談して所にありける神社を。比叡法師の自由にいたさせるゆへなし。自今は此里の物になすべしと俄に虎落を賴み。此事京都の奉行所の御判定となりぬ。何とて先年より叡山持の宮所を。今度改めての申分其子細はと仰られし時。里人に口かしこき者罷出。世〳〵の本哥にも志賀から崎のひとつ松とこそ讀殘されしに。叡山のひとつ參といふ事傳へも聞ず候。此松陰にいわゐはじめし社なれば志賀唐崎の宮居に極り申候と言上。是も一通り聞えて諸法師のかたには古例の正しきをもつて。此返答を申うちに里人の何がしなを〳〵進みて。其外兼平の諷にもさゝ浪や志賀からさきのひとつ松とうたい候と申あぐる時。當話のよき法師罷出。あの者は隱れもなき音曲の藝者に御座候。只今の謳のすゑを是非に御所望あそばされくだされいへと申あぐる。御奉行はやくも御合点あそばされ小鼓をめされ。爰はそれがしが一挺皷にて此公事を聞べし。今の先をうたへとの御意いやがならずして。御白洲にかしこまり小細浪や志賀からさきの一つ松七社の神輿の御幸の梢なるべしとうたへば。鼓をうち捨させられ。然らば山王の影向の參なりと同じうたひにて叡山の勝に成。山法師声を揃へて今の謠の拍子いや〳〵と御前を譽て立ける

三 佛の夢は五十日

むかし都の町に不思議の夢を見し人有。世わたりは時計の細工人此鐘の音に浮世の眠りをさまし。明暮後の世を一大事と願へば。異名を釈迦右衛門といへり。自然と綿頭にて其形殊勝なり。年ひさしく烏丸の下に借宅して住ぬ。其家主は一向宗にて隱れもなき精進嫌ひ。霜月廿八日もかまはず杉焼のまはり振舞して町衆四五人參會の折ふし借屋の釈迦右衛門腰をかゞめ。わたくしめいよの夢を夜前まで五十日つゞけて見えさせ給ふ。御つげあり〳〵とさながら夢とはおもはれず候。御長九寸ばかりの金佛。こなたの御寐間の下なる土中に埋れまします。是弘法大師の御作なるか。我等が枕もとに金色のひかりをさし給ひ。汝ぶつゑんのふかき物

なれば後世のために堀出すべし。然らば衆生すくひ諸〳〵の難病を助けんの御事。是万人の慈悲なり。番匠人足の入用は此方より仕るべし。今日堀せてたまはれと申せば。此家主佛とも法ともまきまへなく。手を拍て笑ひ世の中の夢といふ物があへる事ならば。其夢を判金千枚ばかりにして堀たき物といふ。此座に分別良なる人ありて。是をきゝながら其まゝ置事心よろしからず。あのかたより入目をせらるゝならば堀せても見給へといふ。時に亭主も同心して俄に諸道具を取なをし。板敷をうちはづし鋤鍬をならし。其日の暮かたまでに五尺だらず堀ぬれども。佛らしき物は見へずして口欠の茶壺又は消炭螺がらより外は何もなかりき。興覺て元のごとくに埋ける。はじめからかくあるべき事成と。亭主は腹立借屋の者は何とも言葉なくて歸りぬ。又明の日家主へいひけるは夜前又正しくまほろしにおがまれさせ給ひ。今二三寸下の辰巳角にありけるを。今すこしの事に出現せさるは念なし。是非に堀出せとの御願ひなれば。迚もの事に御堀せ給

はれとのぞみ。今一たびほりて見しに。御つげにたがはず佛像あらはれ給へば。各／＼有難拜し先水にそゝぎて見しに底びかりのして。いかさまにも古佛と見へさせ給へば。家主欲心発りて此本尊我等が物といふ。借屋の者は此事合点せず万事入用を此方から拂ひぬる上はわたくしの佛といふ。いかにも堀たき大願なれば其段は此方も同心也。然れども佛を其方の物する約束はいたさずと云分つのつて。既に御前の沙汰に成はじめは聞せられ。其佛に兩人の封判をいたさせ三日預り給ひ。洛中の佛具師をめしよせられ。此金佛年数何程か埋もれし物ぞと御たづねあそばされしに。いづれも吟味の上に申あぐるは。およそ五七年も土中にありし物と申上る。其後彼者どもをめされて其町の者に仰せられしは。此家普請は何程になるやと御たづねありしに。四十年余に罷成はよしを申上る。時に釈迦右衛門をめされおのれ世間へは後生願ひと見せかけ。心中は淺ましき曲者なり。此事兼てたくみ前日堀時本尊を埋み置。明の日それをあらはし京都の風聞いたさせ。いづれの僧賣とか馴合て。散銭取込べき仕掛うたがひなし。ありのまゝに白状申べし此時僞るにおゐては。さま／＼僉義の仕やう有と仰出されし時。釈迦右衛門幼き貧より惡事をたくみ申よし心底殘さず申上る。おのれ世の費男殊に佛の眼をぬく事彼是もつて惡人なり。急度仕置に申付べき者なれども。いまだ外の者をたぶらかさゞれば。命は助置也此過怠に其佛を鍬の柄につけてかたげさせ。右の次第を札にしるし洛中三日が間まはらせて。後生盗人の良を諸人に見しらせ。其後京都を追拂ふべし。又家主の義は無用のあらそひ仕る事是惡人ちかし。是によつて袴かたきぬを着し高札を持て。釈迦右衛門同事にまはるべきと仰せ付られけると也

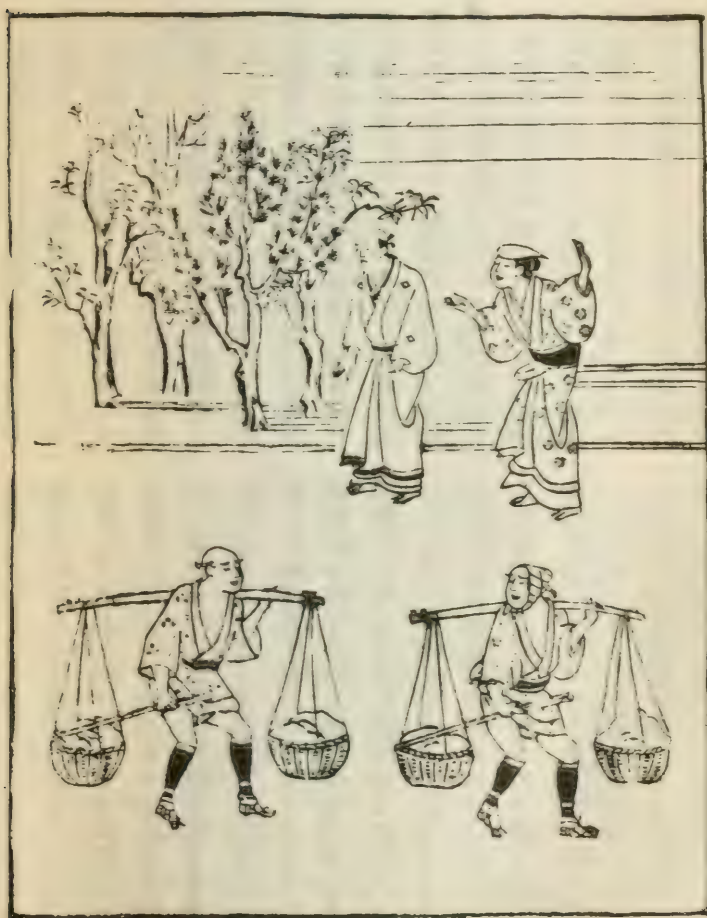
【四】恨み千万近所へ縁付

むかし都の町に鹿子屋女の名取。大宮の小林とてさながら六条の太夫めきて。出立姿に戀れ泣をさせけるが。此女情心ははなれて欲に目の見えぬ牢人を男に持ける。子細は此人其以前歴／＼にて一生の暮し程はたくはへあつて。樂しみを京住ひと思ひ定めて東寺の片陰に借座敷。心まかせに月日をかさねしうちに。有人の物語りに彼女のうるはしき事を傳へ聞て。金銀にてなる事ならばと頼みしに小林合点して夫婦の契をなしぬ。五三年は萬あるにまかせ

て美食衣類をかさりしが。此女日夜の奢ゆへ程なく內證うすくなつて。目の淺ましき男につらく當りて。暇とるべきしかけの折ふし。近所に若ざかりの牢人の友ありけるが。然も手前よろしく暮しける。女此男に心を移し忍び〳〵緣の約束して。其後は作病発して暇の狀をさいそくして。代筆に書せて其身を自由にしていまだ十日も立ぬうちに。彼男のかたへ仲人なしに行て世間をはゞかる事もなし。外の見てさへ此女を惡めば增てやはじめの男の身にしては堪忍のならぬ所。うちはたす程にも思ひ立しが暇やりての事なれば。死後にも世の沙汰に成ゆく事を口惜く其成けりに濟しぬ。是さへ無念の折から有夜門の戶に張紙して。此牢人此町におかるゝにおゐてはいつによらず町中を切立。一人も命の種あるべからずと書しるせり。時に此牢人申せしは我事は身にかゝる事難義もくるしからず。いかなる意根とも覺へは御座なく候へども。各〳〵に氣づかひかくるも迷惑なれば兎角は爰を立のけば濟事といふ。いづれも此牢人をあはれみ。此義は沙汰なしに談合して今までの通りに。そのまゝ所に居るゝやうに申渡せば。御心入の段は身にあまつてかたじけなし。然れとも侍ひの心にかゝる事此まゝには置れじ。何とぞ町中に別条なきやうにとそんじ。右の段〳〵御前へ申あげしに。其方何にてもおもひあたる者はなきかと御たづねのありし時。外には心かゞりも御座なく候。わたくし此程までの妻女兼てはぞんじもよらさる病氣と申出し。俄にいとまを乞かゝり申候是までの緣とそんじ願ひの通りにとらせ申候處に。それより九日目に近所へ緣に付申候。此男右より別してかたり申候が。其後はまいりかね申候。是より外は何にても御座なく候段申上る。樣子きこしめされ其夫婦めしよせられ。此義は蜜通に極まる女は大惡人也。又男も日比語りあいし中。此たびの緣組たとへ子細なくとも世の義理おもはゞ取結ましき道也。男の手に罷ある時よりなれあいたるにはまぎれなし。ありのまゝ申さぬにおゐては拷問と女に仰せ出されし時。これなる人に狀文付られかく罷成候と申上る。おのれ世の仕置ものなれども一たん暇の狀を取ての上なれば命はゆるして女は鼻をそぎ男は髻を拂ひ。京都に置まじと仰せ付させられ。其後此牢人をちかふめされ。此たびの張紙はせんぎの種に其方が立しと見へたり。かふならではならぬ處と御ほうび有難く。御見

通しの御眼力を感じけると也

五　俄大工は都の費

むかし都の町を清水の西門より見れば。民家たちつゞきてはてもなく。諸木茂りて三階藏の白壁夕日移ろひ。皆內證はともあれ藏は長者の花といへり。次第に下京まてもはんじやうして野末も今は人家かと成ぬ。其比七条通りに米商賣して萬事に手廣く。近年に分限其町のひとり也。面屋は以前のまゝにして裏に屋敷を何程か建出し。後には明地もなく隣町の堺目に。火用心のために三間に五間の二階藏を普請して。窓にはあかかねの火蓋針かねの網を張軒に金樋までも掛て物の見事に仕舞しに。隣町の家主より急度使を立けるは。此方の地のうちへ藏弐尺四五寸も出過しやうに相見へし。自由御普請と付届に畏き。町並と見合ば三尺ばかりたて出すにまぎれなし。いづれも寄合沙汰するに今の亭主が横道にはあらず。是親仁の欲心と死れし人をそしりぬ其比までは此あたりの裏は野畠にして堺目の吟味もなく。生垣を人の地迄仕出さ

れし也。此たび改めずして藏をたつる事町中までも越度成と。隣町おの〳〵を頼み詫言いたしけるは。あの藏しゆりの時分に罷成れば改め引込すべし。其内地入用の義出來れば何時によらず相渡させ申べし。こなたにも當分は畠にいたし置るゝ事なれば。一年に銀五拾目づゝ地賃出させ申べしとさま〳〵噯ひけれども。中〳〵堪忍いたさず永〳〵の地盗人此たび世の見せしめになすべしと。有徳なる身体を見かけ大分金銀取べき覺悟にてむつかしくかゝれば。いよ〳〵難義に思ひ銀弐貫目に色〳〵詫ても聞ざれば。是非なくうち捨置しに云かゝりてやめがたく。右の段〳〵繪圖につくりて御前へ申上れば。兩方めし出され作事仕るかたを曲者と仰され。仕置にも申付べき者なれども。親が仕業用ひ何心もなく。普請仕るよし。先町人の不念も有。たとへ地尻田畠にても其屋敷ばかり町並はづれて出べき子細なし。今日の中に高繩引て其藏を切入べし。相手の申所道理成ほこりの義は是非なし。あの者がつくりものすこしもそこねざるやうに仕つれと

仰付られ。俄に大工日用を数百人やとひ二時斗にうちこぼち軒端を世間よりうちばに切入。さりとは物哀れに亭主が惜むべき心底思ひやられ。是を見る人泪を洒し堪忍せざる相手をふかく悪みぬ。其後藏引こましたる段〳〵御前へ申上れば。此たび萬事入用を勘定を仕立まいれとの仰せ。帳面つくつて銀高八百七十四匁弐分と申上る。時に此入目只今請取藏切たる者に相渡すべし御意。さしあたつて迷惑仕る段申あくれば。おのれ都の費といふ悪人也子細は此ふしん地筑石垣の時も見えわたる事を。から木だて時もいはずして。屋ねを葺上ぬりまでもしまはせ。間もなく是をこぼたす事まだあるまじき曲者なり。手前に銀子用意なくば家屋敷賣拂へと仰せ出され。其日入札にして壱貫弐百目に賣立。此内八百七拾四匁弐分相渡し。残る三百余も町内の借銀に引とられ。やう〳〵残る銀七匁三分数四つ女房が珠数袋に入て。ひさしくすみなれし町内を立のきけると也

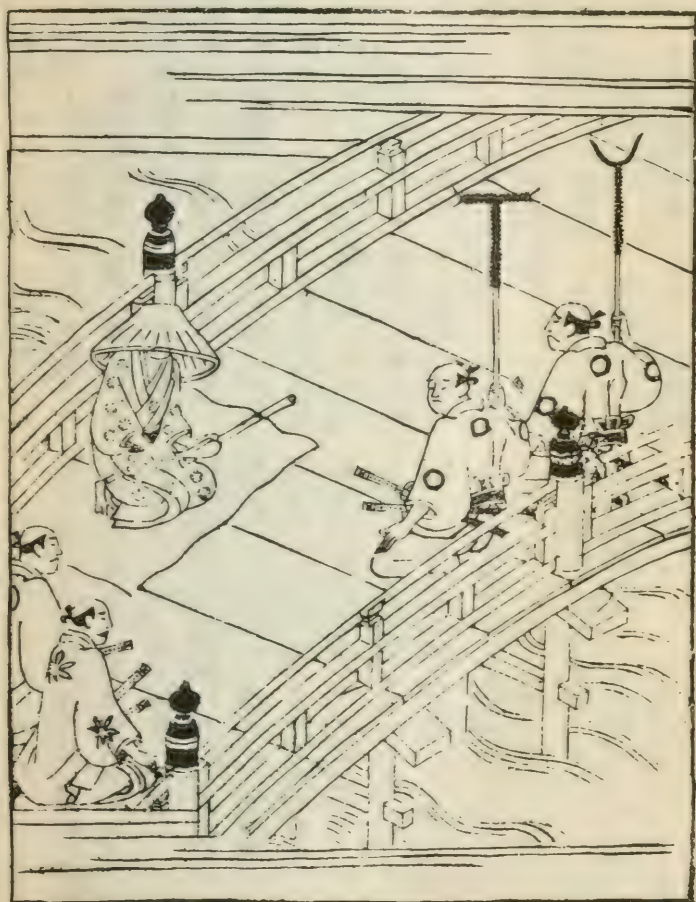
六 鯛鮹すゞき釣日安

むかし都の町を春は櫻鯛秋は紅葉鮒とて。魚賣の利発者にしきの棚に住けるが。近年の賣掛かさなり身体つゞかざる事を迷惑して。釣日安を調へて銀高ばかり書付。相手の名もなく三十八所として。御番所の御門に張付置しに。役人衆是をとつて御前へ此段申上れば。表書之通相違なきにおゐては相済し申さるべしと御裏判出され。又門柱に張付おかれしに。則其夜に取てかへり。それより十日斗過てから御威光をもつて。賣掛残らず請取ありかたく存じたてまつりぬと添書して御判を返進申あげける。諸役人是を不思義にぞんじられ。御機嫌の時分御たづね申上れば。此目安は寺〳〵への賣掛なり今時の世間寺皆腥き坊主と御笑ひあそばされけると也

七 聾も爰は聞所

むかし都の町はづれ北野の片陰に。質酒兩見せの商賣して俄分限の者有。家榮ゆるにしたがひめしつかひもあまた有中に。物縫に置し女風俗花車にそだちしが。いつの比よりか青梅を好み次第に懐体うたがひなし。内義吟味仕出して男はいかなるぞと。さま〴〵に問給へども色深く隠して申さぬ事を悪み。菟角家の不作法者也。其まゝ暇出して親の許へ歸されける。それより半年あまりも過て此亭主。目まい心になつてうちふしけるを。皆〳〵声立て呼

どはや息絶てせんなし。いまだ一子もなくて跡に残れ内義別してなげきふかし。然も此人は生國出羽の人にて京には親類もなかりき。やう〳〵女房衆の一門集りて野邊に送る用意する時。彼物縫の女乳呑子を抱てはしりきたり。此あと取は此男なり旦那の御手掛られて。平産せし事まぎれなし。此首尾手代かしらの何がしもよく存じられしと。無常の中ともいはずわめく時。手代罷出て此方はゆめにもしらぬ事と申せば。此程も旦那殿より此子の養ひ銀を持てまいらぬかといふ。我等は其方が親許さへしらすといへば。此女手代にしがみ付いかに東西わきまへなき子なれども。おのれが親かた筋なるに内證しりながら今又しらぬとは。天のとがめもあるべし眼色替て泣かゝれば。白衣はぬげて烏帽子は落てそうれい出立の男をつがみさがし。死人押へての難義なげきの中の訴詔事。右の段〳〵御前へ申あげしに。手代をめされあの悴子は主人が子にてあるか僞りなく申せと御僉儀の時。旦那の義ながら内證の事はぞんせす候。あの女の親許藤の森へ親かた申付られ。毎月晦日に銀子五十目程づゝ持てまいり候より外の子細はぞんじたてまつらす候と申上る。何の義もなく毎月銀子遣はすゆへなし。本妻せんさくの時主人の義なれば名を隱して。我ばかりの科成て里に歸るといふも一通り聞へたり。是は死人が子にして其名跡を繼せ。それが母は乳母分になつ我子ながら主あしらいして是を守そだつべし。後家は其子が母になつて勝手次第にすゑ〳〵樂隱居仕るべし。金銀財寶は一門町中として毎年勘定聞とらせ。手代に商賣の義相さばかせ十五歳に罷成時。是を相わたすべし萬事は後家が心まかせに仕るべし。其日あのせがれに付うたがはしき親など相しるゝにおゐては。何時にても後家申出べしいそぎ死人を取をけと仰付させられ。其子跡取の禮義にして野邊のおくりを仕舞ける。つれあいの別れかなしき中にも後家は下女が子の事うたがひけるは、年月ふたりが中に子のなき事をなげき。夫婦合点づくにて幾人か色よき妾女をおかれしに。これらにもつゐに願ひの叶はざりし。幸ひかく有事を隱し給ふゆへなしと。是よりいよ〳〵心とけずしていつとなく作り聾になつて。浮世を隙になして佛棚の勤めばかりに月日をかさね。隨分人の氣のつかざるやうにしかけて。程なく其年も暮て明れば春の彼岸にあたり。なき人の祥月迄一家殘らず旦那寺

へまいり。香花を手向石塔に立寄。皆〳〵拜したてまつる時後家はひとしほむかしを思ひ出て。袖行水はしばしひがたく彼子が手をとりて。我阿爺さまは此石にならせ給ふ也。よく〳〵水まいらせよとありし時。子が母親心おかしく本のとゝさまは鼻の先に立嶋の羽織着て。いまだ此世に達者で御座るに。かな聾に何をいふぞといへと手代と皃を見あはせける。後家是を聞すまして宿に歸り。明の日はやく御前へ罷出私財寶にさら〳〵望み御座なく候へども。筋なき者を屋継に仕候事草葉のかげなるつれあいの所存。かれこれ口惜くぞんじたてまつる段〻申あぐれば。悴子が母手代をめして既に裁許になつて。それなる女何とて手代を共親とは申けるぞ。今日石塔の前にて慥に聞届けての申分と御たづねなされし時。手代も女も口を揃へ是は何をか聞れて跡形もなきいつはりを申あげられ候。是は一門中の内談にてわたくしに難義申かけ。親類より跡継を立金銀自由いたすべき願ひとぞんじられ候。其子細は後家事去年四五月の比よりふつうに耳

聞へず。幾薬かあたへ因幡と鮹薬師へ土器の千枚も掛奉つる甲斐もなく。諸事筆談申事家内町中にも共隠れ御座なくれ。耳が俄に聞えれか御貪義と申上る。時に後家打笑ひいかにしても兩人が心底合点まいらず。よしなき罪をつくり聾仕ると去年よりの事どもひとつ／＼申あぐれば。手代も女も赤面してとかふの返答もなかり。いよ／＼手代が悴子にまぎれなき御せんぎとけられ。二人ともに御仕置に仰出されし時。後家夫のきやうやうに命の義は願ひたてまつる。手代が義は御免ならず女は御助くだされ。五条の橋にてかしらに擂鉢を被かせ。兩の手に火吹竹しやくしを持せ下女にまぎれなき形をいたさせ。主人筋なき事を申掛し科人三日瀑れし。其悴子は女の親にくだされすゑ／＼出家になすべしと仰せわたされけると也

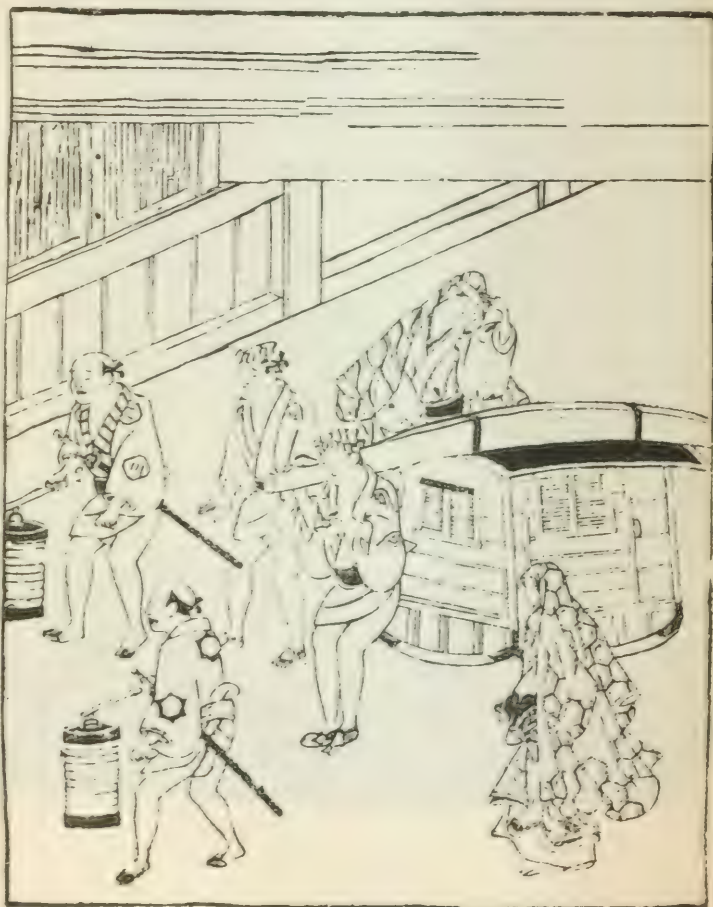
八 死人は目前の剱の山

むかし都の町に其身一代後世の事をわすれ。金銀の溜るをよろこび家榮へる時。此人欲心より銀子借たる人に無理を申掛しに。相手もみぢかき者にてひとつふたつ云分の上に切ふせ我も卽座に相果ける日比の心入をしかりて天命のつきとて。沐浴するまでもなく其形のまゝ棺桶に取置。千本の三つ鐘を聞ば心ぼそく煙になして歸りぬ。其子は親と各別佛の道を願ひ殊更此たひの別れ浮世と思ひ定め。すゑ／＼は出家にもなりぬべき心ざし。此母親は當座に髪おろし毎日香花をとつてなげきに沉み四十九日にあたる時。三十ばかりの旅僧きたつて其家名をたづね。ひそかに内に入越中の立山より物をことずてられしと。死人の事をあり／＼と語り此脇指をしるべに我を弔ふべし。年月たくはへし金銀後の世のさはりとなれば。殘らず是をほどこすべし今のかなしさ以前の欲心後悔也。何とぞ佛縁の願ひ成とさま／＼哀れなる物語りに。いづれも魂消るばかりの思ひをなし。菟角御出家さまを爰に引留都の菴を取立。なき人のために万日を申べし死人願ひのごとく金銀此たび殘さじと。親子の人思ひ定め旅僧色／＼頼めば。爰にとゞまる事大かたに合点して。けふは先黒谷へ參詣と出てゆきし跡にて。此事町衆聞付其脇指は亭主最後の時。御前へ御目に掛て棺に入ておくりし物二たび歸るは不思議なり。是を此まゝは置れしと此段御前へ申あぐれは御聞とゝけあそばされ。亭主相果し後下人下女によらず暇とらせし者はなきかと

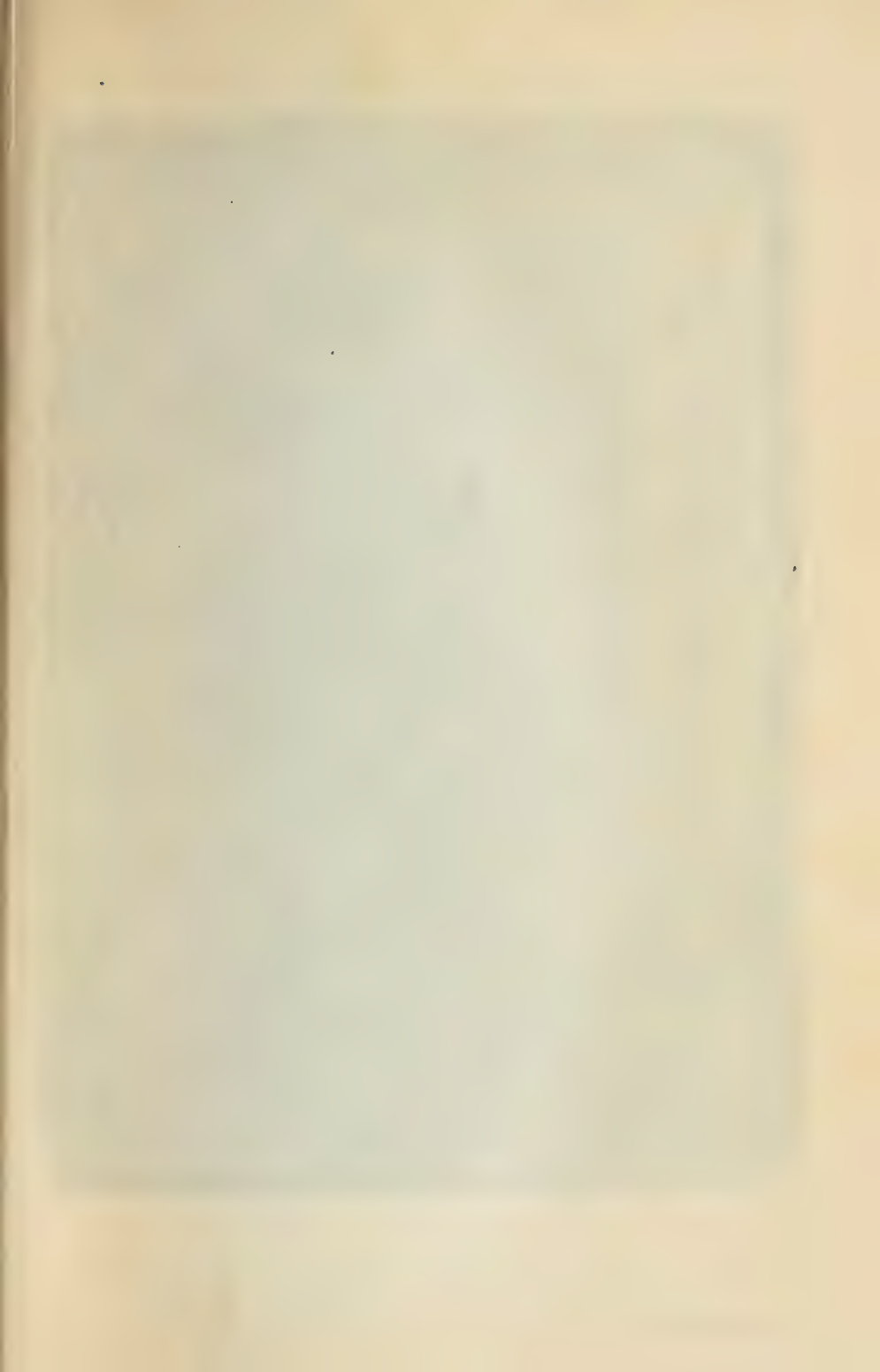
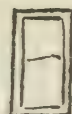
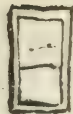
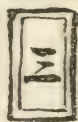
御たづねあそばしける。三十五日過て幸ひ世間の出替り時に罷成。勝手も人すくなに仕るべき覺悟。六尺壹人腰元づかひの女壹人隙を出し申候。六尺は奉公をとまり則同町借宅仕り罷有候。又下女は親里澁谷の者にて是へ歸し候と申上れば。町の者に仰せ付られ其坊主大かた此女の許にあるべし。是よりすぐに立越吟味いたせと仰けれはあんないしる人をさきに立其宿にゆけば。くだんの法師衣ぬぎ捨て近江鮒の燒がしらせし所を。女とともにとらへて御前に出しける。時に此女をめされおのれ此脇ざしは早桶に入しを。人の氣のつかざる時盗隱し其後あの坊主となれあい。妻子がなけぐをよくしりてかくはたくみて金銀大分取べき心根。主人に惡名をあたへる曲者と御僉義あそばすにすこしもたがはす。二人ともに御仕置にあいけると也

九　京に隠れもなき女房去

むかし都の町小川通りに車うち迹名とりの糸屋有。此見せは女をひとつはかざりなれば姿の花車を好む中に。此あ

るじ別して色ふかく一代に女房さる事二十八九人までは。世間の人も数へて笑ひ是程悪敷事も後はいひやみて。なを又十日も尻をためず追出と京の廣きゆへ此男をしらず。娌入して來る女はつきせざりき。されども淫酒のふたつにせめ付られ。あたら身を無分別に持くづして此事をなをやめず。一夜のうちに去荷出せばおくり荷はこび後には仲人なしに祝義を濟しぬ。是もつくる時節あつて次第に身いらのごとく成。つゐに眠れるやうに命おはりぬ。此時の女房は宵に縁組して明の日後家なりぬ。此死人に一子もなく弟にかしこからぬ者同じ家に有けるが。町中是にふびんを掛後家とひとつにして跡を継する内談せしに。後家が虎落者にて中〳〵人のさし圖を合点せず。財寳すこし分て追出す思案して。萬事は後家にゆづるなり我最期の時にかくなるこそせば既に御前沙汰になりぬ。弟に家を縁ふかきといふものなれと。くれ〳〵継せ後家には相應の心付しておくるべの云置と死人を證據にして我まゝを申し。何か後家の家をつぐべき子細なし

と仰ければ。此女口かしこくごけとは後の家と書申候へばしるましき物にも御座候と申上る。文字せんさく迄女には利発者也。いまだ若盛によもや後家立かね申べきと其方が身のために。又縁付の心得を申事ぞ大かたの身持にて女の跡はたて難し。よく／＼分別極めかさねて出べしと仰わたされ。又裁許に出し時後家は黒染の衣を着て殊勝貞に見えける。是は殘り多ひ事何のためにかくは成けるぞ。後夫求める覺悟に御座なく。つれあいのぼだい吊ひ申たく姿を替たる段／＼申上る。出家とは家を出ると書ば其家を追出せと仰せけると也

絵入

三

本朝櫻陰比事　目録　巻之三

一　惡事見へすく揃へ帷子

むかし都の町に身体かろき者生れ付能娘を持ば。諸事風流にそだて姿盛になる時。大名がたの國女薦につかはしまたは高家のみや遣ひをいたさせける。爰に姉が小路の針屋のひとり子にならびもなき美女あつて。さる御かたへ御奉公に出るより月にも花にも詠めかへさせ給ひ。名を鶯とめされて初春の色深く御氣に入事大かたならず。世間のおもわくもかへり見たまはず。御前樣と言葉をなをさせ女は氏なふて乘物。其後は此面影を見る事も成難し。有時夕御膳居まいらせて。あまた通ひ女扈下を畏かし行につねよりは心よくめしあげられて後。にわかに御胸先いたみて御眼色うとく惣身むらさき立て。御手あしすくみ息も絶〳〵に湯水雫も通りかね。露といふ命其まゝしぼめる朝貞のごとく。是はと惜み泣に女中取乱して。醫師にはじめを語りけるに。何をかあがりけるぞ喰あはせにはうたがなし。先氣付あたへしに更に其甲斐なく。二時あまりなやませ給ひ。うき世のかぎりとなり給へば主人の御なげき淺からず。死骸かたつけ置て。食物の御吟味ありしに不斷の湯取めし。汁は鱸の白煮鱠にきすご。燒物に一夜塩の鯛ねりみそに竹輪の蒲鉾。五香木のしたし物扨は當座漬の香の物。此分にさし合はなかり。いづれ不思議とひとつ〳〵改められしに。みその色の薄青き事を心もとなく。手飼の猫にこれをあたへさせて見させらるゝに。しはじのうちに狂ひ出四足立すくみて死にける。扨は毒薬の入にまきれなしと。臺所を御僉儀あつての後うたかはしきは女房ともと。思案めぐらし給へどもいづれをさして沙汰も成難く。発明なる御かたに此せんさくを御頼みあそばされしに。皆〳〵女中の義なればきびしくもならず。殊更罪なき者を難儀にあはせる事もいかゞなり。爰は外のいたまざる事に惡人あらはるゝ分別ありと。俄に絹のかたびらを女数程こしらへて。ひとり〳〵に是をきせ以上十六人同じ座敷追込。此たびの科人此内にあれば明日殘らす拷問すると申渡し。ともし火消て戸には外より錠をおろし。折ふし夏の夜の呉竹まどより飛入蚊の声。身をさゝるゝくるしみ拂ふへき團もなく。かなしげなる声して是はいかなる因果ぞと泣も有。題目となへ觀音經よむも有。ふる里の事ともいひ出してなけくも有。浮をかまはす小

哥つとふもあれば。化物のまねして人を懼此なかにても大膽なる女房も有。世の人心程さま／＼に替れる物はなし。既に夜も明て僉義の役人立合て。つぼねかしらの柳にたづねて年かさより女中の女を呼出しにして姿を見るに。いづれも寢みたれ髪けうとき中に。絹帷子にすこしも皺のよらさる女一人有。それぞととらへておそろしき御せんぎあれば。女心のあさましくつゐ白狀して。是は此以前御家にありし御妾女いかなるそねみや此事を賴まれ。人の御命を取ける段／＼申上れば極めて此同類御仕置にあそばされ共後女の曲事しれたる子細御たづねあそばされけるに。身に覺なきはおのづから樂寐仕り衣裳付自墮落になりぬ。又おのれが身に氣遣ひあるがゆへ夜もすがら心やすからず。すこしも寐ざればすぐれて壱人帷子に皺のよらざるを吟味の種に仕はと申あげられけるとなり

二　手形は消て正直か立

むかし都の町に北國の買問屋して。六

（この挿畫は「一」）

角通に手前よろしき有。親代より念比せしかたへ銀子五貫目借て預り手形取置。それ年〳〵断りにまかせて八年相侍。其大節季に入用とて人遣はしけるに。手形もたせて御越あるべし銀子返進と申せば右のてがた箱を明て内見するに是白紙となつて不思議晴がたし。あまたの證文吟味いたせしに外の別条なし。何とも思案におよばすひそかに此段をかしたるかたへ申せしに。いづれ其銀子は濟したやうに覺へたり。何分にしても手形なくては不埒と。其後はいよ〳〵相濟したに極めて結句かしかたの人悪敷沙汰せられて。世上に外聞うしない爰は堪忍成かたく。銀子のそんは各別せめて我正直を世にしらせたき願ひ。ありのまゝに書付申あぐれば。両方めし出され先町の者に両人が身体の程を御たづねにあそはしける。

財寶かけて八百貫目とさして相違御座なく候申上る。又借り申かたは三拾貫目ばかりも身およびの程ありていに申あぐる。然れば此銀子は借つたにはまぎれなし。たとへ手形は白紙に成とも銀は急度相濟べし。おのれおそろしき

（に入るべきもの

所存世の仕置者なれども相わたせば子細なしと仰せ出されし時。何とも御返答難成銀子相立申御請合申上る。其後借かたの者をちかふめされ定めて此手形はあの者が宿より書調へ持参いたしたかと御意のありしに仰せの通り私宅よりしたゝめまいり申し。印判は見覚へ別条なく存じ請取置し段〳〵申上る。かさねては眼前にて書せ商賣の事まで念を入べし。都にもあのごとく成悪人有此たびの手形は兼て拵へたる物なり。烏賊の黒みに粉糊を摺ませて書る物は。三年過れば白紙になるといふ事本草に見へたり。正しく是なるべしと仰せけると也

三 井戸は則末期の水

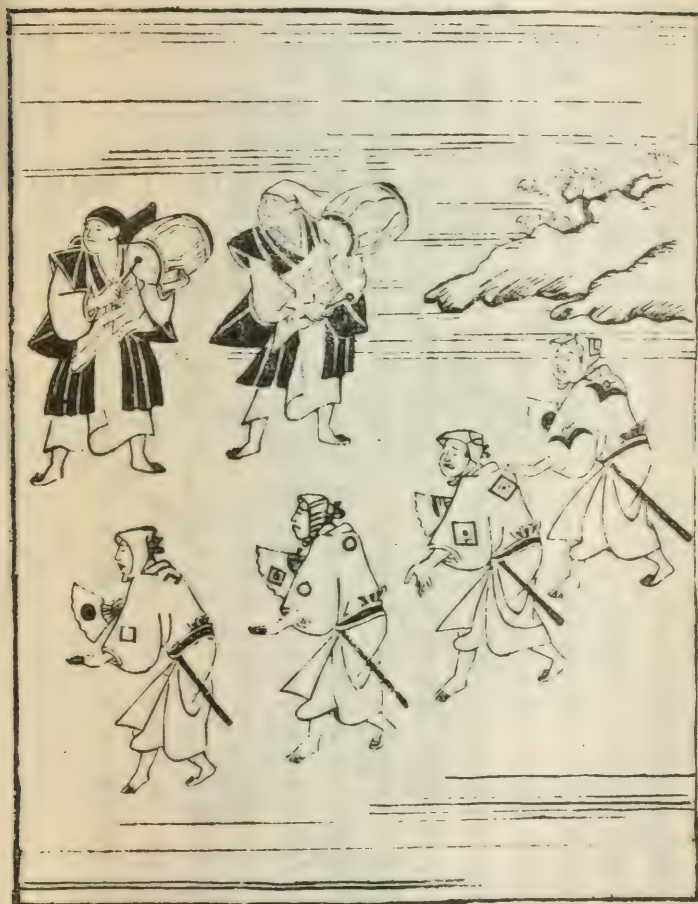
むかし都の町一条通りの西に人家淋しき所有。老て世をわたり兼たる夫婦。子も持ざればゆく末物かなしく。今もしらぬ年になつて毎日伏見に通ひ竹箒を買求めて洛中賣〻はりてけふを暮しけるが。是も次第におしよは車の身をうしと思ひしに。世は案じまじき事なり此住所のうらに年ひさしき埋れ井あり

しが。咲ば岩檜葉といへる草のしげり。筑山好める人是を所望して其次手に。浮藻かきのけ年〱の泥をあぐれば。俄に水涌あがりきよげに冷こく夏をしのぐためには是ぞと。京中より聞ふれ扱に遣はし祖父が清水といひならはし。後には水代にて世を樂〱とわたりける。其西隣の家主是を見あはせ水筋に井戸を堀けるに。是又清水涌出れば宜前井は水絶て。老人夫婦の渡世のさはりとなつて。明暮これをなげく事大かたならず。隣のあるじをうらみしに何とすべきやうもなく日をかさねけるに。隣の水を錢になせばなを〱やしんに思ひ。せめて此水人の扱ぬやうになすべしと惡心発りて。赤熊をかづき鬼のおもてを當。むら竹の中よりほのかにあらはれ。あけぼのに水扱人におどしかくれば。是を見し人語り傳へてその後は水買人絶たり。あるじ不思義して定めて狐狸の業ならんと。親類をかたらひ物陰に立かくれやうすを見とゞけしに。くだんの面影又出ければとかふなしにたゝきころし。おの〱てがら達にて夜明て是を見るに。正しく隣の親仁にて後悔すれど歸らず。妻は是をなげき敵とりたき願ひを申上れば。段〱御聞届けあそばされ。是はつねに替りたる形をして。然も夜中に人の屋敷へゆく事彼是もつて越度。是はころされぞんたるべし。一方の家主も世間をおはぬ大欲人。老たる者のかてをうばふ事我屋敷ながら手を出さぬ盗人是也。老人水ゆへ命をとられければ其者の墓所を。隣屋敷のうちに筑込則その井戸を水向にして跡吊らへと仰せ付られ。御意の通りに死人を取置ぬればおのづから此井戸も捨りけると也

四　落し手有拾ひ手有

むかし都の町はづれより賀茂川の岸傳ひに。北山へ歸る老人有。折ふし十二月廿八日の夕暮。世間は春の事ども取いそぎ心せはしきけふも。御堂下向の道芝に紙包見えけるを拾ひあぐれば。小判三兩と書付有いかなる人の節季をしまふ心當にもやと。跡先見しに往來もなく。はるかの松陰に柴賣と見へし人の立休むに追付そなたは是を落し給はぬかといへば。いかにも我等おとしたれども其方の手に入からはそなたの物といふ。是は近比めいわくなる申され分なり。たとへ此ぬしのなき迚取ては歸らじ。まして主ある金子をとりて歸るへきかと。其者に渡せばひろひし者に歸しぬ。なげやればほほりつけしばらく此論やむ事なし。後には黒木賣

牛つかひ立とゞまりて。今の世の中にはためしなき事ぞと兩人の心ざしを感しける。いよ／＼互ひに道を立此小判おさまり所なく、兎角此論下にて濟難く兩人御前へ罷出右の段／＼申あくれば。當番の役人衆聞給ひて前代になき事是は都の今聖人なるべしと。此段御取次申あげらるゝ折ふし御前には御氣色惡敷。前後に京中の醫者衆相つめられける。時に御名代の家老職をめされ。智惠ためしに此さばきを仰せ付られしに。爰を大事と思案して其拾ひし三兩の小判を出させ。御前の小判三兩合て六兩を取ませ三所に置て。先おとしたる者に弐兩渡して壱兩のそん也。又ひろふたる者弐兩とれば是も壱兩のそん也。御前の金も壱兩御失墜也。兩方ともに罷立と申付られけるをいづれも発明なるさばきなりと是を感じ。此段御耳に立るに中／＼御同心なく其方どもが氣のつけ所相違也。此弐人内談にてかく取むすびし作り物也。其子細は拾ひし者共ぬしと論におよばず捨やうはさま／＼ありしに。爰に出ける所第一の聞也。正直ものと都に㒵を見しらせす

（この挿畫は「五」

爲〳〵人をかたりのたくみせしには違ふまじ。共二人呼かへせと又御前にめし出され右の段〳〵仰せわたされ。有のまゝに白狀申さぬにおゐては拷問ときびしく御せん義かゝれば。山家の者長きあの者に頼まれ。何心もなくいひふくめは通りに拾ひ手に罷成あらそひはと申上る。然ればあくじは落し手目が工み成。見分家に杖突年をして無用の心根仕置にもすべきなれとも。おのれが身の上ばかり外にさはらぬ事なれば。洛外までも拂ふべし。又たのまれし者目は久しく住所の鞍馬にちかき麓里を追拂ひ給ひけると也

五 念佛賣てかねの声

むかし都の町に余宗ませずに一町殘らず。法花の宿札を出して朝暮題目を唱ふ音。耳かしましき中に淨土宗只壱人ありしが。大鉦うち鳴して掛念佛申を法花のかたより是を嫌ひさま〳〵進めて。ありがたき事ども聞せけるに中〳〵思ひ付心ざしもなく。各〳〵腹立して町内に是ばかり置事家持なれば是非もなし。借家ならば置まじきものを

に入るべきもの）

と。自由になりがたき事を悔みいづれも内談して。此者まづしければ銀子とらせて同じ宗旨にせんと。ひそかに此段を聞せければ欲にて同心いたせり。講中よろこび銀子三十枚集めて是を遣はしければ。いよ〳〵珠数を切て町並に成ける。折ふし七月十三日此祝ひに題目踊をはじめて。其者の門に人の山更也。其後は夫婦ながら御影講にも寺まいりして。ひと〳〵の法義よろこびしが明年の春に成て。彼岸の入より又念佛を申扣き鉦におどろき。町中立合是はいかなる事ぞといへば。亭主十面つくつてもはや題目いやになつて。以前の念佛申弥陀を頼むといふ。扨も我まゝなる申分。菟角右の銀子を戻せといへば歸すべき子細なし。法花にならば銀子合力申との事なれば。約束の通り一たびは成けれども。にわかに嫌ひに成浄土願ふ也。死るまでの手形はいたさずそれがしが心のまゝと。なを責念佛を申所惡し迚此義御前申あくれば。兩方めし出され御聞あそばされ。無用の法花にすゝめ事とおぼしめされ。此銀子は歸すべし請取べし。然ども親代より今に浄土を法花になしければ。其間の勤めおこたるべし。右の念佛を勘定して町中より申て歸へし。其後銀子請取申べしと仰せ付られ罷立て宿に歸り。色〳〵内談いたせども町中念佛申事を迷惑いたし。銀子そんにして濟しけると也

六 待ば筭用もあいよる中

むかし都の町にうなづき祖母とて仲人口のよき者有。年中是を身過にして首尾させぬといふ事なし。爰に三十五に成男の年を隠して。十五に成むすめと縁組取持頼みの祝義おくらせ相濟しける。其後娘の親聟の年ふけたるを聞出し。身体はふそくなけれどもいかにしても二十の違ひなれば。中〳〵娘をやるましきといふ。又男のかたにはよばねば堪忍いたさず。仲人迷惑して此段御前へ申上れば兩方めし出され。男の義各別なる惡事あらば申べし。年の違ひの分にては約束のしるし取ての上。急度娘をおくるべしと仰せ出されし時。此義は中立の者あまりなる僞りを申。むすめは十五に罷成候に三十五の男は年二十の違ひ御座候。せめて半分の違ひなれば娘をおくり申候。此義はきこしめしわけさせられ。似合ざる縁組たのみを歸したき御願ひを申上る。時に仰られけるは其方が望みの通り今五年過て娘をおくるべし。聟もそれまで相待べし四十になれば女は廿。年半

分違ひ時ありと仰せ付られけると也

七　銀遣へとは各別の書置

むかし都の町衣の棚に利発なる商人有。内證よしと世間の見立違はずゆるりと世を渡りけるか。持病に筋骨をいためしが。年にしたがひ氣力おとろへて死覺悟を極め書置を殘しぬ。當年十五に成男子より外に子といふ者はなし。此子が母親は九年跡に相果。其後よびむかへし妻にば一子もなく継母ながらひとりの跡取をかはゆがりて。万事のしかたに如在なく自子にすこしも替る所なし。親仁もこれを滿足して世に思ひ殘す事もなく。有銀弐百貫目は一子にゆづり。銀弐拾貫目後家一代の遣ひ銀に。扨又手代兩人に銀拾貫目つゝ甲乙なしにとらするなり。今迄の通りに此家を見立申べし。此外すゑ〲の親類中に所務わけ旦那寺へのあげ銀。殘る所もなく書しるしていまた息のかよふうちに此銀ともを相渡すべしと。埒の明たる取置して次第に命のせまる時。一門手代を呼集め我等㝡期はけふに極まる心覺有。此時只一言いひ

殘す事有。悴子事當年十五歳なれば今より二十五に成迄十年のうちは。何やうの義にても異見する事無用なり。殊に女若の遊興たとへ何程の事にてもかならず留る事なかれ。心まかせに金銀を遣ひすてさすべし。扨二十五歳を過て一錢にても遣ふ物ならば御前へ申上此家を追出すべし。云置は是ぞと段／＼申渡し其後相果ける。銀遣へといいひげん前代になき事也。日比は利発なる人なりしが死前に何をか申けるぞと。京中に取沙汰して是を笑ひぬ今時の若ひ者吟味するさへやまざるに。此悴子十八より銀遣ひ出せしに誰か異見も成難く。自然にいふ人あれば御ぞんじの通り親仁の云置なりと。世間かまはず奢て六七年のうちに、右弐百貫目の銀百七十貫目勘定たらず。いづれも恐惑して內證にて色／＼申せと是を聞ざれば弐人手代思案におよばす身体つゞかざるを見極め。右段／＼申上向後金銀遣ひやみ申御願ひを申上れば。御聞とゞけあそばされ親がいひけん今二三年なれば其通りに随分遣はせと仰せ出されし時。今すこしの所にて此家立ざる事を御なげき申上る。其段は慥に家の継く事あるべし。手代とも氣つかひなく商賣手廣くいたすべし。悴子も二十五の以後云置そむくにおゐて申來るべし其家を追拂ふへし。第一母親に考をつくせと仰せ出されし。兩人の手代何とも此御意承りかねたる皃つき御覧あそばされ。其方ども合点ゆかぬと見へたり。所の沙汰にあへる程の我／＼が主人是程まで無分別は申さぬ義也。早速宿に歸り親るい町中立合內藏ゑんりよなしに吟味いたして見るへしと仰出され。いづれも罷歸り藏／＼相改めけるに。人の氣のつかぬ片隅にむかし長持ひとつ有て。其蓋に書付おかれしは是我等が御影の金佛也。是を十三年忌に明て弔ふへしと有。錠まへうちはなちて見るに又ひとつの筥有。此中に壱万兩包篭皆／＼是を見とゞけ又御前へ申あぐれば。其まゝに念を入二十五の年相渡すへしと仰せ付られ。御推量のたがはざる所を感じける。其後金子を請取しが御前へしれての事なれば二十五の以後は一錢もゑつかはず此家立けると也

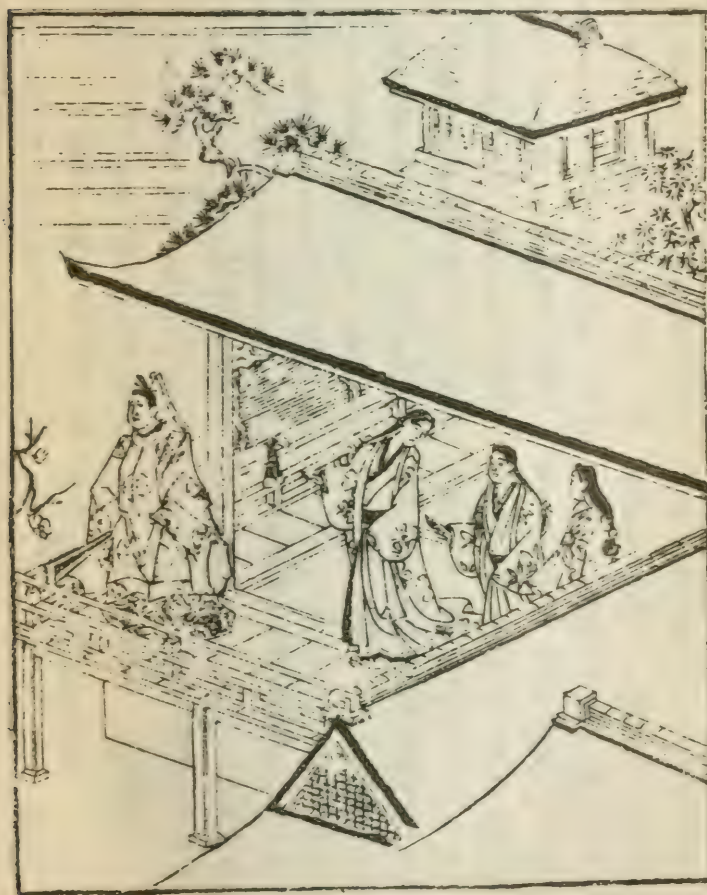
八　壺堀て欲の入物

むかし都の町西の洞院のすゑに。三間口の賣家有同じ町內に借屋住ひして年ひさしき。衣裝のうわ繪を書る人此家屋望みしが。然れとも壱人しては調い難く同職の人をかたらひ。一間半つゝ

買取其家に二人ともに移りて勝手の諸道具をなをすに。今すこしせまき事を悔み殊更井戸の有所兩方の氣に入されは。兩人申合して三間の堺目に堀へしと所を見立水筋を吟味して。宵より鵜の羽を蒔ちらし置。其はねに朝露ふかくふくむ所をかならず清水成と。古人の傳へにまかせて所を改めすまして堀掛。上七四尺はかりもあくる時鋤鍬の羽にさはる物有。何ぞと見ればふるき壺の口を油石灰につめて。木札に印判すり〳〵と見へて年号は消けるが。辰の十月二日に是を埋むとはかり見えたり。井戸堀是はといさみて金子をほり出しました。我等も大分お祝ひ給はれこんな事にはむかしの例御座ると。堀あけもせぬ先より身勝手申せは。一方の亭主立院き壺の有所我等がかたの地なれば。かたつけて取べしといふ一方には此家我等か申出して買けれは。此方へとるべき物と此論やむ事なし。はや世間に沙汰して金堀出しけると見物あつまり。町の者ども立合中〳〵下には濟し難しと。右の次第を繪圖につくりて井戸にはあまた番を付置。町中御前へ罷出段〳〵申上れば。御直にきこしめし其家屋敷賣てのきし者は。茶の湯者ではなかつたかと御たつね有し時。年寄罷出御意通り隱れもなき茶の湯好にて御座いが。是は十四年以前に頓死いたし此跡一人の孫請取。此たび賣渡し東國へくだりしと申上る。其壺別の事あるまし前の地主埋み置て。新しきをふるべるためか又は油けをぬく事なるべし。此壺兩人にとらす也隨分大事に堀出し汝等が欲の入物にせよと仰せくだされ。皆〳〵罷歸りて是を明て見るに中にも何もなかりけると也

九　妻に泣する梢の鶯

むかし都の町千本通りに俗性歷〳〵の浪人ありしが。武藝の外音曲の名人是ゆへ高家がたに立入。人の御機嫌取て日を暮しぬ。有時さる御所に宵は松はやしあつてすぐに泊り。明ぼのに大書院の梅垣を見渡しけるに。例年より花も春めきて咲初鶯殊更に囀る中に。三光あり〳〵と声のあやぎれしたる鳥の。柳の枝に留高ふとまつて日毎に爰をさる事なし。此鶯を飼鳥にあそばしたきよしの御望みなれば。幸ひなる御物語り申あげしは。私別して仕るゑさしの上手西の京あたりに住よし申あぐれば。それよと仰せられしに浪人ゑさしの許に行て。同道して御屋形にまいり木末の鶯をさし留させあげしに。早業の手づま御褒美数〳〵給りて私宅歸

りぬ。其次日彼浪人ゑさしの宿へきのふの首尾よろしき一礼にまいりしに。女房牢人に抓付我夫はいづかたへつれゆかせ給ひ今に歸し給はぬ事ぞとなげきぬ。此義何とも合点ゆかず成程昨日の暮かたに戻られしといへど。中〳〵此斷りを聞入ずして亭主の有所はそなたならでしる人なし。是非に歸し給へと大声あげてなげく時。隣近所の人大勢立合おつとつて先浪人をうたがひ。蒐角宿を御同道なされ御出候事まぎれなく。それより今に歸へられねば内義こなたへたづねられしも尤に存候と。いづれも道理をせめて申せば。牢人も此いひはけにめいわくして。是非なくきのふめしよせられし御かたまていひ聞しても女房一圓合点せず。既に御前へ申あげしに浪人をめし出され。色〳〵御僉義あつて扨昨日同道いたしたるかたを御たづねあそばしけるに。大事節武士形氣を出し私宅にて一日語り申候と別の事もなき事に先様の御名を包みける。宿前又町の者に申せし御かたはと御たづねあそばしけるに。何とも先の義は申さぬよし是に御うたがひ

かゝり。段〳〵其方に越度有まつすぐに申さぬにおゐては其方拷問して聞がと仰せられし時。牢人眼色かはつて扨も是非なし私のころしまして御座ると申上る時。此一言に女房は身を燃し扨も〳〵情なや。日比別して語られし中を意根にもせよ欲にもせよ。さりとてはうらめしき牢人殿となげく時。先女をしづめさせられ。其死人は何方に有けるぞと御たつねありしに。牢人畏く氣色なくそこはぞんせぬと申上る。然らばころしたといふはいかに。いはねば拷問との御事武士のせめられては末代までも口惜く存じ候と申上る。扨は此者はつかまつらんときこしめしわけさせられ。先牢人は其所へ御預けなされ大小まで御渡しあそはし別条なく御歸しあつて後。其ゐさしの行衞たづねかさねて罷出べしと仰られ。おの〳〵宿に歸り手分をしてたづね出し。そんじの外なる竹田道に切られて死骸御座候と申上る。扨は追はぎの仕業なるべし早く是を取置べし。さて又女はなしみの事なればひとしほなげく所至極せり。さりながら何ともせんさく成難し。

此上はおもひを晴し夫のなき跡を弔ふべし。子もなきものといへばひとしほふびんにぞんする也。所の者もいよ／＼目をかつめいにおよばぬやうに仕まつりとらせと。御慈悲なる仰付られ本人其外も泪を洒し有難ぞんじたてまつりぬ。扨明後十九日は我等心ざしの命日なれば。其男の弔ひ料としてすこしの金子をとらすべし。其女房の一門又は別して者を玄關まで取につかはすべしと仰られなをまたかたじけなき次第と皆／＼御前を罷立ける。扨十九日の早天に年の比二十四五の男金子頂戴に罷出ける。此段申あぐれば其者をめされ女のために何程の親類成ぞと御たづねあそばされしに。只亭主と念比いたし候よしみに頼まれ申候よし申上ればば。おのれ其分にて今日の使は物好成と。是より段／＼御僉儀つのり。女と蜜通あらはれかの男を内談にて切ころさせし悪事極りて御仕置にあいけると也

本朝櫻陰比事　目録　巻四

一 利発女の口まね

むかし都の町誓願寺の前に。大珠数屋の内義迚自然と艶女にうまれつき。洛中の是沙汰目のこへたる人さへ幾度か同じ皃ばせを見る事ぞかし。ましてや田舎人は聞傳へて京都にのぼれば。宿の亭主を同道して先祇薗清水のつぎには此女房を見にくる程の姿。僧俗見せに絶ずおのづから商ひをして次第分限になりぬ。世には仕合の折ふし夫にはなれ二十五のとしより後家立すましで風俗はありしに替らず心はむかしに入かはりて。後の世を願ひ人のおもはくとは各別に身をおさめ。ことし髪置したる一子に頼みをかけて。此成人待て外には何の願ひもなく。あなたこなたより入縁の望みありて取持けるに一圓合点せず。女ばかりにして埒の明ぬる家職なれば。夫婦ありし時にすこしも替らずなを又内證よろしくなつて金銀溜るもひとりある子がためとおもひ暮しぬ。其近所にわずかなる借宅して生國は駿河牢人ありけるが。諸事に利発なれば所に置ての重寶。間談合のため迚おの〳〵取立謠屋にして。小者一人つかひかすかなる後世に年月かさねしうちに。おのづから町人形氣になつて人皆心をゆるし。勝手までも出入するに何か見かぎらるゝ事もなし。殊更珠数屋の亭主とは外より念比にして。二度のかならず賣掛の書出しをも頓筆ゆへたのまける。其後も以前のごとく物まへには見舞て書事を手緒ける。折ふし七月七日星見るまで爰に居て。若ひ者まじりに筭用して。大かたの仕合ど盆の請拂ひの帳面仕舞て。心祝ひとて酒出されいつよりはすごして。世間咄しもおもしろくなつて御家つねなき大笑ひして。彼牢人を嬲こなたも歴〳〵の男皃ながら年に一度あふかたもなく。織女殿にはおとり給ふと又笑ひになりぬ。此男それまでは道を立けるが。座興の一言より俄に心をかけそめて。此宿を立歸る姿には見せて門を出さまに立忍び。板敷の下に隠れて家内しづまつて後。身をちゞめて奥に入。後家が寐間に立よれば蚊屋越の面影世に是沙汰の女。昼見る皃よりはうるはしく戀もひとしほまさりける。すこし高枕して帯紐とかすに手ちかへ刀を取まはし。用心深く夢も油断はせざる風情。牢人も此女にはおそれしが是まで乗かゝつたるふねと思ひ。づか〳〵と近寄ば後家おどろき起あがり。されども声は立ずしていかなる御心入にてしのび

たまふぞ。人きけばよろしからず首尾のよき時はやくお帰りと申せば。かく思ひ入ての上は命をかけての執心とわりなく申さるゝ時。後家是非におよばぬ分別極めて。かならず後悔したまふなと刀をとつてひざを立。中／＼牢人の心にしたがはず色々道理をつめ言葉をつくせども。此男聞わけずしてつめひらきあしくなる時。下／＼起あはして何者なるぞと立さはぐに。牢人灯火消てにげゆくを大勢取まはして是をとらへ。さりとは悪きしかた也年／＼万事を人かましくぞんじて頼みけるに。女の寐間といひ金銀の有所をしりて夜中の忍び入。主人は各別此家の手代ども一分立難し。此義は我／＼堪忍ならずといづれも噯ひをも聞入ずして既に御前に申あがれば。両方めされて子細を御たづねあそばされけるに。牢人すこしもさわぐ様子もなく。此義はあの者亭主相果申後私も妻子なき身にて御座候へば。たがひに申かはし内証にて念比仕申候うちに。後家外に又男を拵へ申候と相見え候は。日比よしみの私にかゝる悪事をたくみ迷惑いたさせ候

は。流石女こゝろの浅ましや此子細にて念比切とひそかに申せば済事なるに。手代などゝ談合にて盗人の沙汰になす事さりとは／＼恨み。おそろしき女と口上つゞけて申せば。後家は各別腹立して跡形もなき難義を申人也。女も女によるべしとたがひに證據のなき論になつて。しばしは埒の明ざる時。後家泪を洒し申上るも近比御恥しき事ながら。わたくしにおゐて不義つかまつらん子細御座ゝ。若ひ時より身に開茸と申難病を請申ゝ。是は縁づきいたし二三年後わづらい出し。夫婦の中さへめいわくに存ゝ。なじみの事にて御座ゝへば情にて世間包まれ。かたらひをなして心がゝりの年月をおくる處につれあい病死の以後は。ふつ／＼と浮世の事ども思ひ切申ゝに。此たびの義に是非もなき身の難を申あげゝは大かたならぬ因果とそんじたてまつりゝとの手にかけて過し年の寒中養生まてし泪を洒す。時に牢人罷出あの女の申上てとらせゝと申上る。其時後家大笑ひゝ通り身の難病もたがひに語りあい私して我等の身に開茸と申わづらい御座

候。随分人並に生れ付ひだりの肩さきにちいさき瘤ひとつ相見え申候。此外に毛頭子細御座なく候。此上は何様にも御吟味と申上れば牢人赤面してかさねて言葉はなかりし。さりとは曲もの也然れども盗人の沙汰にあらず。夫なき女を悪しいぶよりの悪事なれば命は助て本国駿河におくるべし。然れば人の難義を申かけたるくわたいに片小鬢剃て追拂ふべし。扨又後家は其座の利発感じ入せ給ふと也

二 善悪ふたつの取物

むかし都の町に車の香玉鉾の道筋をせばめて。祇薗まつりのまねして童子集り山の形をつくりなせるに。守りもない子に無用の刄物を持せける。其中に七歳の童子あそび所をあらそひ。九才になる子を大小刀にして口を突割立所をさらず相果ける。死せたるかたの親のなげき。ころせし方の親の迷惑。一町の僉儀にもいまだ智恵なき者の仕業莵角は堪忍した給へとさま〳〵曖ひしに。中〳〵合点いたさず是非に敵をとるへしと。人のいふ事聞入ず殊に母親わきまへなく御前へかけ出るを引とゞめ。神主出家衆を頼み一代坊主にいたし。其子の跡をとはすべしと二親を詫ても取あへずつゐに御前に出ける。いまだ七歳ならば何のしやべつも有まじきと仰ければ。人をころす程の存立つね〳〵も外の忰子とは各別と申上る。時にからくり細工の人形金子一両御出しあそばされ。此二色を明日共童子とらして見る也。金子をとれば心あるによつて命をとる也。人形をとれば命を助る也。悪と善との大事爰に極むる也いよ〳〵明日つれて罷出べしと仰付られ。いづれも罷立宿に歸り。一門念比の衆中集まりて御前で見たに替らぬ人形を調へ。是を小判とならべ置金子をとれば命の果るとおどし。夜中同じ事を百たびもおしへて又其朝もいひ聞せて兩方御白洲に出ける。時にくだんの二色を御出しあそばされ。人形とればたすくる小判取と命をとるぞと御意ある時。此童子立行小判をとればころされし方の親類進てかやうのふてき者と申上る。又一方の一家は只かなしくて覺べす声を立てなげく。仰出されしは扨は智恵なきなき忰子に極まる也。命を取といふにかまはず小判をとる所僞りなし。命の外大せつの物ありや爰をもつて助置と仰せ出されけると也

三 見て氣遣は夢の契

むかし都の町猪熊通りより染帯を拵へ

て。丹波の山家にかよふ商人有。此者の妻元は御所かたのすゑの女﨟役してありしが。流石風義は花の香今に殘りて人皆目に掛ける。身体かるき者なればひとりの留守を氣づかひながら渡世は是非なし。殊更此男りんき深く旅立折ふしは女のしらざるやうに。宮守の血をとつてひだりの肱に付置ぬ。是を虫しるし迚其女男にま見へぬうちは何程洗ふても落ざるためし有。昔日いかなる好色人か是を工夫仕出れける。此商人の同町にうき世男ありて此女を目にて忍び。物はいはずして戀れけるに女も自然と此男を思ひ入しに。有夜枕ならべし夢を見しに。男も又其夜忍び入てちぎりを篭し夢見る事。たがひに不思議なる緣とおもひける折から。若ひ者大勢語りぬる中にて何のゑんりよもなく。此事を夢咄しの種として大笑ひ扨も世間はさま〴〵也。其後彼夫丹波より歸り心ためしの虫しるしを見るに。消て跡なき事をうたかひ出し。我女房の自由はさま〴〵無理にかゝつてつよく僉義すれば。罪なき身にもかなしく留守中事はすこしも包まじと諸神を

せいもんに立。彼夢の事までも語り聞せければ。それは隱なき美男にていよ／＼氣をまはし。世上を聞あはすに彼男の夢物語り。あなたこなたに沙汰あれば扨は二人が不義外にしられて其口とめにかくはいひけると聞へたり。是は吟味すべき所と分別して。たとへ夢物語にもせよ男のある女の事を。身に添たるとの風聞堪忍ならず。女も夢に出合しといへり此分にては不思義晴す。是蜜通にまぎれなしと此事御前へ申上。兩方めし出され御聞届けあそばされ。是は不義のしやうせきなし。然ども夫のある女の事たはふれし取沙汰する事越度也。又女も夢なれば迚無用の申事也。愚なる男のうたがふもことはり也。蜜通か夢の契か此ふたつをためし。そのうへにて申付べしと銀の盞二つ御出しあそばされ。女のゆびの血を兩方へしぼりこませ。本夫の指の血一つにしぼり入させ。又蜜夫のゆびの血をしぼり入させ。しばし置て御覽なされけるに。本夫の血は女の血とひとつにかたまりぬ。又蜜夫の血は女の血と筋立てわかりぬ。是まことの契を籠ざる證據見せたまひ。各別なる御僉義に男胸を晴し。此女に子細なく添けると也

四 人の刄物を出しおくれ

むかし都の町へ大原の里より柴賣男有。其日は三条馬町の酒屋へ幾度かはこびて歸る時。手馴し鎌を置わすれしに山家者の言葉つきおかしく是をたづねさすも一興ならんと。取隱し置に柴賣立戻りて彼鎌をせんさくする。爰にはなかつたといへば大声あげて昼中に鎌盗人。たゞ出さぬにおゐては申あげて迷惑さすぞといふ。おのれが鎌の番はせずといひつのつて。既に出しおくれてあらそひになりける。柴賣何の思案もなく御前にはしり込右の段／＼御なげき申あぐれは。其酒屋めしよせられ鎌の事御たづねあそばされしにかつてぞんせぬよし申上る。時に酒屋亭主がかたきぬ御取なされ是にて吟味する事有。しばらく御門前に御またせあつて。其内に御勝手より早使にて酒屋が内へ。先程の隱せし鎌を此人に越べし。割封のため此かたきぬつかはすとこれをわたせば。内義此男は見しらねど亭主のかたきぬ三星小紋の花色に釼菱の定紋まぎれなければ。内藏より彼鎌を取出して其男にわたせば請取屋敷へ歸りぬ。其後又兩方を御前にめされて鎌を五本御出しあそばされ。此内に其方が鎌があるかと御見せなされしに。柴

賣手にもとらず是にて御座ると申上る。然ば取て歸るべしかさねて念を入渡世にいたす道具なれば。武士の刀脇指とおもふへし若又取わすれ申出るにおゐては曲事に申付べし。又酒屋は此鎌を一興に隠し出しおくれと見えたり。それゆへ町内へも難義をかけ其身も迷惑せし事。無用の心ざしにてあまたの隙を費すなり。惣じてかやうの事世上にさま／＼有。下／＼の者までもいたざるやうに申付べしと仰せられけると也

五 何れも京の妾女四人

むかし都の町に榮花の時得たる町人有。本妻相果後筋目よきたの然も美形なるよびむかへ。是は中屋敷に置て折／＼通ひ。本宅には前腹の男子十四歳なるに後見を付。萬事は手代うちまかせ其身は下屋敷をあまたこしらへ。東山の花見屋敷に葉山といへる手かけ有。嵯峨は月見るための屋敷に秋野といへる手かけあり。賀茂川ちかき涼み屋敷に夕暮といふ手かけを置。北山の雪見屋敷に松崎といへる手かけを置。四季の心を一日の夢に見るかんたんの枕定めず。さきから先へのり物まはさせ世に有程の遊興。殊更無理酒にたはふれ年中醉の覺る時なく。男盛に大病を引請相果しに。跡の義は隨分念を入たる書置箱あり。いづれも立合是を開き見るに各別相違いたせり。先本妻には子もなき事なれば。する／＼隠居のために拵へ置し長者町の屋敷へ移し。上下拾人の暮し緩／＼と成程本宅より相継。遣ひ銀此たび千枚相渡すべし。扨四人の手かけ腹に皆一人づゝ娘の子有。姉十二に成に銀百貫目に所よき家屋敷。二番目の娘十一に成に銀八拾貫目是にも角屋敷。三番目の娘十に成に銀五拾貫目家屋敷。四番目娘當年八歳に成に。財寶殘らず釜の下の灰廣庭の落葉までも是にゆづる也。扨惣領には室町の家屋敷に銀弐百貫目相添てとらすべし。又一通に諸親類方下／＼への書置自筆に印判まぎれなし。此通りにして請取べしと妹娘の親類さし出れど。中／＼手代ども合点せず相わたす事思ひもよらず。町中にも惣領に男子ありながら非道の云置と沙汰し。世間にもよろしからぬひやうばんいたせば。一門手代内談して右の段／＼御前へ申あげしに。書置の衆中其外町人殘らずめされ。菟角此親慮氣の沙汰なり。證文の反古に成とは此事也。此義は町中親類手代どもにいたるまで立合。其外洛中の案者をあつめ廿日が間に相談

して。すこしも贔屓の沙汰なく是を扮きて出べしと仰付られ。御請申て罷歸り明暮寄合評に談合かため書付をもつて申上るは。惣領義本腹と申男子と申いまだ十四歳に罷成候へば。親の氣をそむき申事御座なく候。御前御意の通りつねに大酒を好み申され候。定めて其上の事とそんじたてまつり候。諸事あとしきの義は惣領に仰付させられくたされ。後家事は同し屋敷に置て後見いたさせたく存じたてまつり候。三人の娘には書置の通りに相渡し。惣領にゆづりおかれ候財寶つかはし申度存候。妹娘には過分儀そんじ候へども万事名跡までゆづる程にふびんぞんじ候處御座候へばかやうに仕度御願ひ申上る。時に御前にも御扮きの御書付兼て御したゝめあそばされ。是を讀合けるにいづれもが願ひにすこしも違なく。皆〳〵此義を感じたてまつりぬ。いよ〳〵右之通りに仕り其家の立申やうに仕まつれと仰せ渡されけると也

「五」は賞揮のこ）

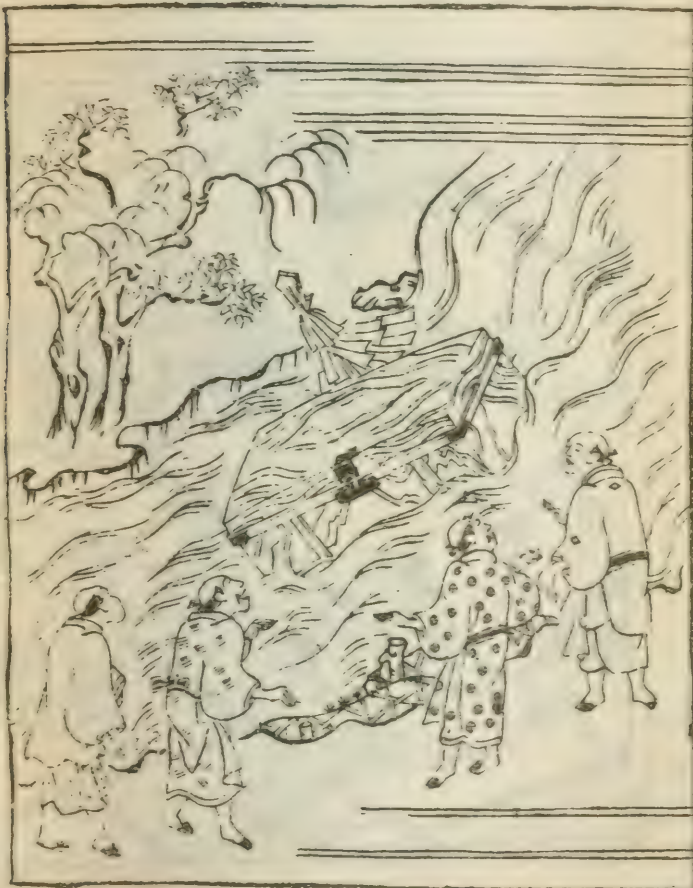
六　參詣は枯木に花の都人

むかし都の町より萬人信心して松の尾

の奥山へ参詣する事有。旅僧爰に菴をむすび諸病を一七日の内にへいゆういたさせけるとの取沙汰。次第に籠り堂立つゞきてなを奇瑞をあらはし。膝行は立て歸る瘂は又物をいひ聾は人の言葉を通じさせ。是を薬師如來のごとく申立。昼夜人の山谷はきれ草履にして埋ぬ。其此錢の相場のあがりしは毎日此所に散錢とまるゆへぞと。兩替屋中間に心を付る程なり。有時此法師のいへるは我諸天に大願有是皆衆生のため也。心さし成就するにおゐては當山の諸木立枯して。明の春又元の葉色をあらはすべしと語りぬ。此言葉にたがはず見えわたりたる梢おのづから枯木となれば。随分かしこき人も是にうたがひ晴てあがめければ。愚かなる人はなをかんるいを流しける。此坊主貴僧にて最前の病人も中間の拵へものにて散錢取込よい程に立のく用意する時。山里はかまはざりしに麓の里人申けるは。此山の木にて海道筋の橋を。先年よりかけきたる所に諸木立枯ては。すゑ／＼の事心元なし御法力にてもとのごとくなし給へと。百性大勢さいそく

に入るべきもの（

せられ俄に立のく事も散錢の仕舞かたなく。とやかく思案するうちに申あげられ。御前の沙汰に成て出家里人をめされ。右の次第を御聞とゞけあそはされ。それ草木も心ありて萬花の色をあらはし木末はびこれば自然と國土のためなるに。なんぞ若木を枯すゆへなし。汝其以前は藥師の賣僧になれる成べし。子細は肉桂を立木の皮の中へ籠らせ置ば。何によらず其木の枯るゝといふ事をたんれんして。人の氣を取事無用の工み世の費なる曲者也。世の仕置物なれとも一たび出家の形をいたせし身なれば一命は助置也。是よりすくに丸裸になして五幾内を拂ふべし。散錢はすこしも相違なく勘定を仕立。是を九村としてあつかり置。永〳〵道はしをかけわたすべしと仰せ付られける。彼法師御目かねにたがはず身を長羽織になして伊勢國山田にて朝厩にまはりけると也

七　仕掛物は水になす桂川

むかし都の町靜にしてめつらしき取沙

汰絶て。何かなと聞耳たつる折ふし五月雨のにごり水に。桂川の瀬〳〵を不思義なる物の流れきたれり。新しき長櫃に錠をおろして其上に白幣をさして置ぬ。里人の何がし是を見付て　おの〳〵呼に來りて。是は何とも合点しかねて菟角此まゝにはおかれじ。先神職の物と見ゆれば吉田萩原の御家へたづね見んといふ。近道に御前へと內談極めて持參いたし。ことがましく子細をこめて申上る時に仰せ出されしは先錠前を明させて御覧なされけるに年ひさしき瀑首五つ女の黑髮入乱れし。いづれも長き是はいかなる事ぞといよ〳〵不思義の皃付せし時。何の御貪義もなく此長櫃はそも〳〵壱人して見付し事か。又は大勢して見し事かと御たづねあそばされし時。是に罷有は何がし一人して見付し段申上る。おのれ無用の物を見つけ其一里の者どもに難義を掛たる過怠に。これよりすぐに四条川原に行て。今度桂川を流し長持の噂を。淨瑠利狂言に取組仕る事かたく曲事のよし芝居中へ急度觸わたすべしと仰せ付られ子細なく相濟けると也。是は役者ども狂言の種に拵へ。かつら川に流しけるか彼里人たのまれしを。はやく御氣を付させられ外へさはらぬ御仕置。長持は野寺へあけいかなるむかしのしれぬ瀑首おもひもよらぬ御吊ひ請けるとなり

八　仕もせぬ事を隠しそこなひ

むかし都の町に紙見せ出して。いまだ女房も持ず男一人つかひて。世わたりをかせぎ。次第に手前よろしくなりぬ。內義のないを幸ひに一町の若ひ者のあそび所にして淨瑠利こうた絶る事なし。折ふし極月廿日過の事成にひとりの下人は用の事あつて昼より大津へ遣はし。おそく歸るを待かね時の鐘を讀けるに。九つの過に成て世間も寐しづまつて後。門の戸の鳴音それかと立出て明れば。同じ町ならびの分限なる人の一子二十二三になる美男。うち草臥たる風情して先爰に一休みして宿へ歸らんと。當座帳を枕にして正氣のつかぬ程酒機嫌なれば。又今宵も彼里歸りかもはや宿へ歸り給へといへど物いはず。しばしあつて起あがりさても〳〵口惜や。小判を弐百両とられながらさりとは世間への外聞よろしからず。扱も惡きしかたといふかと思へば目を見つめ手足ぴり〳〵とふるひ其まゝ脉あがりぬ。是はと氣付をあたへけれども歯を喰しめて水も通はず。とやかくせしうちに時節移りて近所を起しかね。

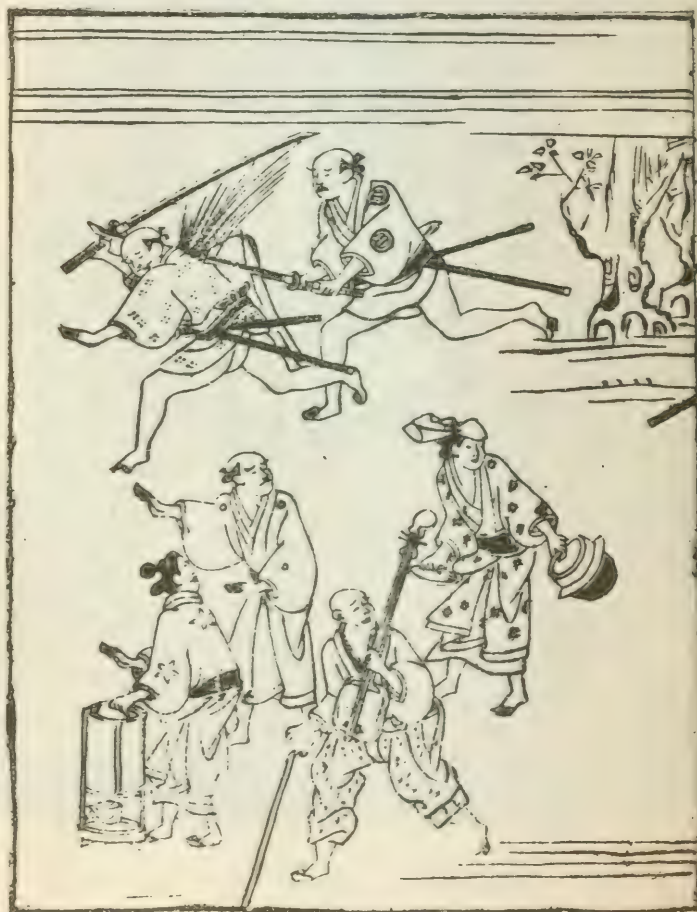
亭主ひとり身の難義しばらくあきれ果。無分別から沙汰なしにして下人の歸るを待兼しに。やう／＼戻るをよろこびはじめの首尾を語り聞せ。今此次第をいふとも中／＼我をうたかふべし。然れば其いひわけもむつかし。人のしる事にはあらず此まゝに死骸を捨てくれよと賴めば。下人同心して是は一段の御分別と其親の門へすてける。其夜も明れば二親のなげき町中寄合吟味をするに。夜前にかぎつて行所もしれず。そんじもよらぬ人の命と。いづれも是を惜み右段／＼御前へ申上れど。此者にかぎり一代物いひぶんいたしたる事も御座なく。意根ある人も夢／＼そんじ寄これなく候。もし金子懷中仕るを見すまし自然物取が仕候や。其身にすこしにても刄物疵は申におよばず打疵も御座なく候。親ども何の子細もなく申上れば。我人年のするにて一日も迷惑にそんすべし。先死骸は取置べし仰付られ其後／＼御僉義あれどもしれかたく。紙屋も人とうちまじりさりとはしれぬ浮世と。七十五日までもいはずして死ぞんに成ける。其後彼紙屋は次第に身体よく下人下女あまたつかひける。中にも右よりめしつかひ男いつとなく我になつて。旦那同前に自由を申せば昨今の者ども思ふは。定めて親類にてあのごとくいふかと思へばそれにもあらず。世間の人もあまりなる人遣ひと是を笑へど。親かたはくたんの事を賴みしより是非もなく諸事堪忍すればなをかつにのつて。旦那の命の親はそれがしといふたびごとに胸をひやしける。しらぬ者は只ひとり男の時奉公せしを今もつてまいるはかり思ひぬ。此紙屋借宅を居成に買求めけるに。彼男此時を見合我等も是程の家屋敷望みのよし申せば。さしあたつて迷惑いたし内證にて銀弐百貫目迄出して詫るに中／＼合点せず此家くれられぬにおゐては。以前の惡事申出るといへば此事おそろしく。やう／＼此程買求めし家屋敷を俄に彼男にゆづりとらせる斷り申せは。中／＼町中に同心せずもつとも我物を人にくれらるゝ事子細なき事ながら。買手を吟味して其方に賣すさへしんしやくなるに。ましてきのふけふまで下男せし者と同座にはならび難し。殊更そんじもよらぬゆつり所其段は心入次第町の參會思ひもよらすと。一町ひとつにかたまつての申分尤至極そんじ。男に色／＼異見申せと聞入ずして。主人がらゆづり請させぬ先例ありやと腹立して既に御前沙汰にいたしぬ。町中申通り主人うつけ者にも

あらす殊に死期にもならすして。大分の家屋敷下人ゆづる子細。又下男のふんとして此屋敷を是非にもらい取べきいはれ。兩人のありのまゝに申べし是に付存する所もありと仰せ出され。町との出入は外になつて是御不思義の御僉義つよく。樣子を申上げねば拷問に極まり。自然の道理につまり下人身ぬけの斷り申あくれば。主人は其時の死人手に掛てころさぬ申分段／＼御耳に立ければ。いよ／＼此二人命はとらぬに御僉義つまりて後。其義當座に申出す死骸を捨たる科いかにしてものがれ難しと。則高札にころさぬ所を段／＼御書しるしあそばされ御仕置にあいけると也

九　大事を聞出す琵琶の音

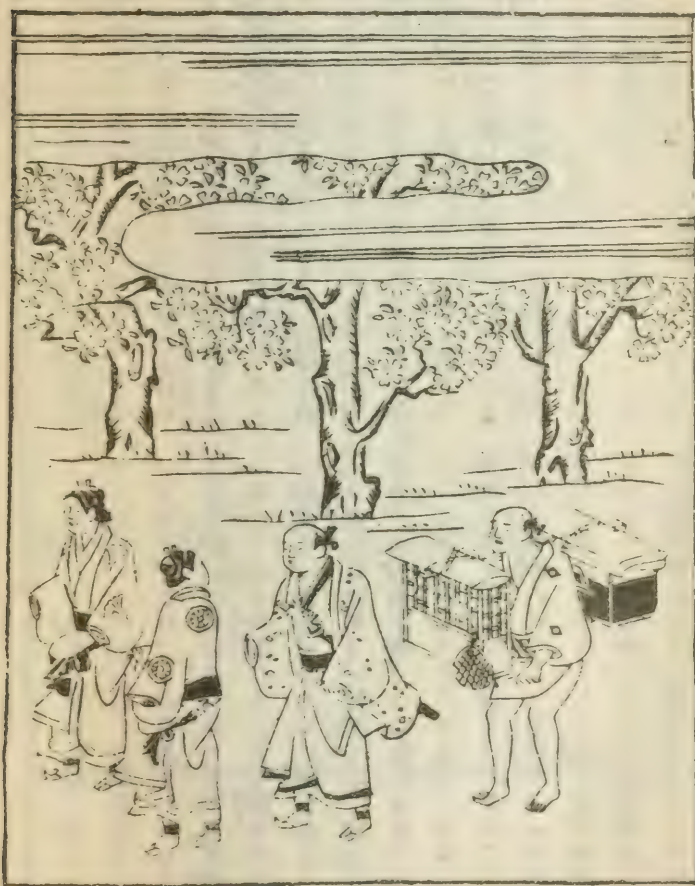
むかし都の町例年の夏より暑さまさりて。我も人も暮をいそき川原の凉み床に出昼の肝を水になして川音聞もおもしろし。思ひ／＼の音曲あるひは女中ましりの酒事。又山法師の兒人つれて幾万人の付合なれどもすこしの言葉とがめもなく。いづれ京都の人心と是を感じける折ふし。北國の侍ひ衆の手あらく關東衆の勢ひつよく。それ喧嘩といふより岸根に血刀ひらめきて。すこし立さはぐうちに一方は上下三人ともにうたれ。相手はたしか五六人と見えしが殘らず手を負てのきけるが。その時節かまびなき町人あまたに切先を當。立のくあしもと酒醉のごとくと。汀に出し茶屋どもおのつからに見届けて語りぬ。夜明て旅宿の亭主申出うたれし方の樣子は御聞届けあそばされしが。打手の方を色／＼御せんさくあそばしけれどもしれがたし。其内に北國の兄弟ども主人に御暇申請京着して。敵うちたき願ひ御訴詔を申上る。此二人十九十六になる若者心はいさめと。敵の面もかつてまして名字もしらず。無念に存じたてまつりぬ。御慈悲をもつて有家を御せんさくなさせられくだされなば。本望をたつしたく御願ひを申あぐれは。心底ふびんにきこしめしわけさせられ。御僉義のそも／＼に洛中に有程の外科に御觸なされしは。六月十一日より此かた金瘡のりやうぢ仕りたるを。今日中に書付罷出べし。隱し置後日に相しるゝにおゐては曲事たるべしと仰せ出されけるに。其比一条の革堂のほとりに柳田氏の見山とて。名譽の外科の上手ありしが。此觸聞といなや御前に罷出申あくるは。先月十二日の夜いまだ四つ前に。百性のめしつかひ者らしきもの花車の紋灯

挑をともして私宅へ嘐を乞。壬生の庄屋よりの使と申。いまだ御近付には御座なくㇾへども。にはかに腫物いたみ出難義仕申ㇾ。自由成御無心ながら此者と御見舞頼むのよし申越ㇾ程に。藥師の役と存じ藥入を懐中して野道に罷出ㇾ處に。松陰に乗物來り是にめしてすこしもはやく御越と申程に。老足の助とぞんじ乗移れば。茂りの篠原より大勢かけ出外より細引掛て。東へ行かと思へば南のやうの時も有。さま〳〵千鳥がけに道筋覺ぬやうに。只夢のごとくなつて都をはなれおよそ三里はかりも行かとおもふ時。皆々あしもと靜になつて門をひらく音あつて。それより奥座敷はるかゆきて駕籠の戸を明て出しけるに。金屛風のひかりはかり目に移り魂ひは消る心して。しばし前後に覺へなく現に物を聞やうなる時。すさまじき髭男罷出こなたへ御療治を頼むは。すこし世間をしのぶ御かたなればかく仕る事なり。かならず氣遣ひなされなとふすまを引明れば。手負六人あなたこなたにもたれかゝり。取乱したる風情也。いやとは申されぬ首尾に

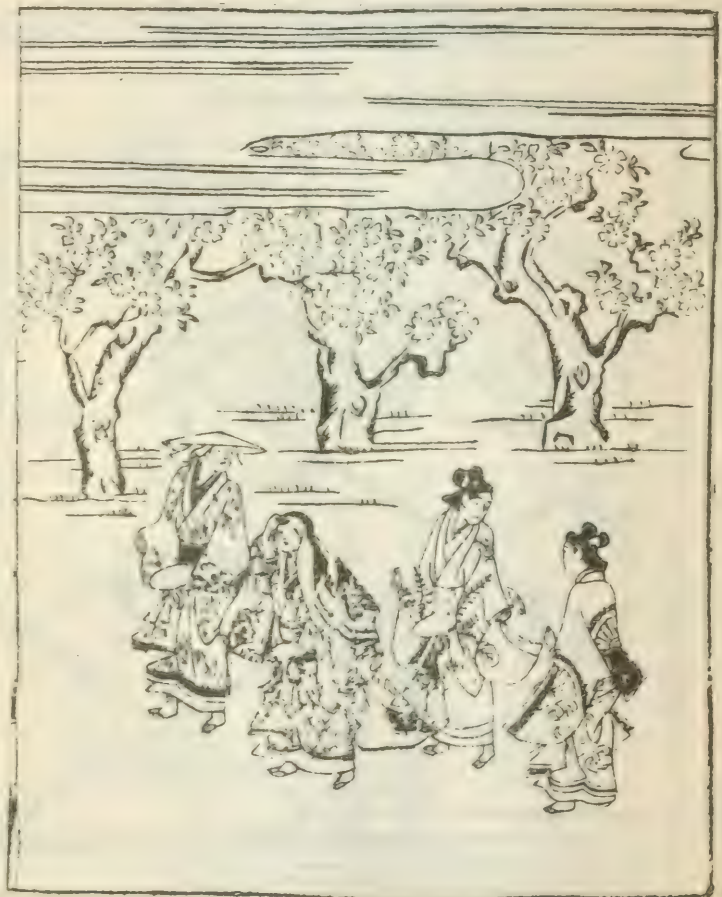
なつて養生のうち廿日ばかり。昼夜のともし火私にも日影は見せずまして家内のやうすもしらせず候。大かたに仕立申候時是は當分の礼銀とて拾枚くれられ。此事沙汰いたさるゝにおゐては後日に命を申渡さるゝをおそろしく。無事で歸るを諸天に大願かけ申候。又はじめの乘物に入て元野原に捨歸り申候。それ氣をこらし相わづらいとく申上べき御事延引申上候段〳〵御耳に立申せば。其所は山家のやうにおもはざるか。御意の通り町家ははなれ候子細は諸鳥の声かしましく。人倫絶たる住家のやうに覺へ候は。あかり窓よりかすかに高山見え候をあれはいかなる山とたづね申せば朝日山と申候。それは宇治にてはあるまじ定めて北山のうちなるべし。其外思ひよりはなきか。南のかたと思はれ月の影さす隣のかたに。都にも聞なれざる琵琶の音の聞え申候。私も一手仕申候ゆへ上手を聞覺へ申候。又私宅を十二日に罷出日をかぞへ見しに廿三日の夜を篭て。彼山にくんじゆの声仕候是より外は何事も心を付申候事は御座なく候と申上る。扨は

嵯峨の内なるべし廿四日の明ぼのに人声は是愛宕の参詣なるべしと。先外科坊は宿に御歸しあそばされ此事隠蜜仕れと。其後京中の琵琶法師をめされ。此中嵯峨のかたに行て琵琶の會いたさぬかと御たづねありし時。菊崎と申座頭罷出て申あげしは。私折／＼嵯峨の御牢人衆のかたへまねかれ。びわを引申ば此あるじ七十余の老後のなぐさみとてあそばされけるが。さりとは承り事なり。其隣も浪人衆此程は病中のよし是をゑんりよあそばし。ひさしく鳴物を御やめなさればと申上る。すこしたづねる事有かならず沙汰いたすなと仰せ付られ。又ひそかに嵯峨の里人をめされやうすを御たづねあそばしけるに。歴／＼の御浪人衆と相見え五月のはじめより。かり座敷したまひ毎日の御遊興と見えしが。六月中比より御病氣とさたしてめしつかひの侍ひ衆も出申されずばよし申上れば。扨は是に極る所と北國の兄弟の者に御しらせあそばし。此上いよ／＼吟味して打べきよし仰られしを。あり難く御前よりすぐに西嵯峨に行て。しのび／＼にあいたづねしに。六月十一日の夜川原のけんくは相手にまぎれなく。百日にあたる日兄弟心中を定め。めしつれし者以上五人旅宿に乱れ入。名乗かけて切むすび首尾残る所もなく打取て。かさねて御前へ御斷り申あげ。二尊院にて父の御弔ひをなして。古里のみやけに彼首どもをうつは物に入。武士の道をいそぎて北國に歸りけるとなり

一　桜に被る御所染

むかし都の町に俄分限有。商賣してさへ利を得がたき世の中に。是は女房の才覺にて家名をば仲人屋とよばれて。年中洛中を聞立まはりしが。後には縁付比の息女は母親此宿につれ來て。年の比其姿を見せ置敷銀仕立のあらましをも此夫婦に語りぬ。又男身体相應の望みを頼み置しに。兩方ともに聞あはせあぢまやかに取持。跡にてふそくいはぬやうに埒を明ぬれば。京中の町人の婚礼は大かた是にうちまかせてめいよなる事渡世と成ぬ。此礼銀は銀のかたより敷銀の高につもりて十分一を取ける。折ふしは秋のすゑ通天の紅葉見の歸さに。大振袖の當世娘さりとは御所かうきの着ぶり。十人並といふ其上物なるを先に立。おふくろらしき人にあまた下女も付添。彼仲人屋へ近付ならねどたづね寄。此娘の事を頼み歷〳〵のかたへ仕付ます事はおよびなし。やう〳〵銀弐百枚みやげを付ます。先様に銀が入ませすば皆衣裝に成とも。それは勝手次第かやうに內證申置からは万事御さしづにまかすべし。扨娘事ふつゝかに生れつき中〳〵人の御息女のごとく利発になく。迚も商人のかたへは成難し。近年田舍よりのぼられ親類のない醫者か。又は物にかまはぬ道陽坊へか。菟角は人あしらいせぬ所へ頼みますといふ。さておとしは何と問。今年十八に成ます。さてもりちぎなかみさまかな。今時は年を七つ八つばかりは隱しますに。せめて十六にして置ましよといへば。後生こそ願ひませすともいかな〳〵さやうの僞はいやで御座る。まつすぐに十八にして頼みます先にも相生を見る物也。長ふもない浮世にもつたいない事只有やうにいふてくだされ。あの娘見えわたりましたる所には卯の毛で突たる程も子細はなし。左の肩先にちいさき痣子が二つ御座る。此外は身うちに何の事もなしと裸にしたやうに物語りして歸られける。夫婦是を聞て今の世にもあのやうなる娘の親もありけるよと。此事を捨置す然も同行中に似合の事ありて。取いそぎ云入けるまづ女房がよふて銀か付は諸仕合是なりと。既に吉日を定め男のかたへ乗物かき入。待女﨟立むかひ奥座敷になをし扱らうそくのひかりにすかして見れば。正しく娌君は片目成と通ひ女のいへるにおどろき。仲人かゝ綿帽子の下より覗けば。最前見たる娘とは替り年も二つばかりふけた

り。扨は妹を見せて姉をかづけたり。我数年此事にかゝり一度も手をとらざりしに。是は油断して面目なし爰は何とぞ無分別あるべしと。ひとり身を燃して腹立するを。聟の親すこしもさはがず。あの方から人をたはけに仕掛ぬれば。此方にも幸ひ事有惣領は難病にて啞なれば。世間をやめさせ置しが是を出して祝言さすべし。あの方からの片目此方からの啞たがひに申分なき縁組と三三九度のさかづき事して済しける。此娌五日帰りして男の様子を語れば二親横手拍て。我かたに悪事の覚へあれば沙汰なしに世上を見あはせ娘を戻さす。右の荷物を取帰すに聟のかたには帰へさず。此事云分になりて見ぐるし。時に仲人かゝ娘の親ともを悪み此段〳〵御訴詔申上る。子細を御聞届けあそはされ両方をめされ。此義は娘の親の悪心よりこと発れり。男のかたにはかたは成者の有事たがひの仕合也迚も縁者になるうへは。右に見せたる妹娘と又聟もまんそくなる弟男子と。今一組祝言いたさせ申べし是又仲人つかまつれとの御意。ありがたくお請を

中龍立中立殊によろこひ冣前の姉御の祝言夜中ゆへ相違あれば。此たひ妹御の縁組は闇かりの請取無用と白昼の娌入京都の大笑ひに成けると也

二 四つ五器かさねての御意

むかし都の町に餅突すゝはき師走のそら物すこく春の事とも取いそぐに丹波の奥山家より。常器の椀賣に來りしがいまだ京の通りも不案内にして。先祇薗の社に一荷をおろし火ともしの繪馬なと詠めしうちに。又里人らしき出立にして此ありさまを見すまし。彼荷物を盗みかたけのきぬ。椀賣おどろき南の御門より雲をしるしに追かけゆくにやう／＼八坂の塔の前にてとらへ昼中に人の物を取にけと声をかくれば。盗人も同音にわめけば所の人大勢あつまりなからいつれをぬしとも沙汰しがたし両人ともの云分にたしかに證據もなし。盗人は二人のうちにありとにかさす取まはし御前へ罷出し。両方同じ申分なればあらまし御聞届あそばされ。一荷の椀を御白洲に蒔散させ。両人一度に立かゝつて手ばしかく是を重ねよ

との御意。声をかけて立合壱人はやう〳〵四五せんかさねける間に。壱人は手に入かさね仕舞ば。是より盗人あらはれ其身丸裸にあそばし洛外に追拂はせ給ひ。此着類は椀賞にくだされけると也

三 白浪のうつ脉取坊

むかし都の町に北國むきの傘を仕込職人有。大勢弟子を抱へ次第に勝手よく。壺屋いへる家名を世生に廣めける。日和の悪敷は此家の仕合。有時五月雨の降つゞきたる宵にあまたの弟子を休ませ。此程の骨折とて宇治川といふ名酒を取よせ。こゝろまかせに吞せて亭主もひとつなる機嫌。しらぬ小哥をうたへば弟子ともも浄瑠利を語り。夜半過より枕も定めずふしける。内義は常に替らず萬に氣を付て門の戸ざしを吟味するに。今宵は他人入なと暮かたより鎰を掛置しを見届け。皆〳〵寐入ていつもよりは明ゆく朝もおそく起ぬ。亭主目覺て見るに昨晩は問屋より請取たる。弐貫めの丁銀戸棚の前に置しが。是見えぬに極まりさま〳〵僉儀をする

にしれ難し。此事町内へ沙汰して相談するに。此盗人外より入たるにあらず門はしめて裏道なし。菟角とりては十弐人の弟子のうちなりと内證せんぎも是に極めて。此段／＼御訴詔申上れば一家残らずめしよせられ御見分あそばされしに。弟子ども御前をおそれてひとり／＼の口上跡先になつて。此うちに三人までうたかはしき者有。いよ／＼御僉儀つのれば身をふるはせ又は赤面して。たづぬる事の返事も仕りかね。此分にてもせんぎつみがたし。惣して人間は其生れつきによつてすこしの事にもおとろく者有。又身の大事を引請てもかつてどうせぬ者有。罪なき拷問する事道理ならずと。此是非さま／＼思案めぐらし役人衆内談ある時御前より御僉儀の品を替させられ仰せ出されしは。日比其家に出入醫者をめしよせられ。此弟子どもが地脉と取合不斷と様子の替る者あらば。いつわりなく申さるべしと一間なる所に隠し置。扨十二人の弟子ならへ置銀の盗人此内なれば。只今拷問して其科をあらはすなり。兄弟子より次第／＼に一人づゝ奥へまはせば身に覺なきも是をおとろき正氣はなかり。されども脉は常に替る事なし。その隨分落付て口上も不斷にかはらぬ者有。此脉形氣より各別にうちさはぎしんぼうおさまらぬ所を見付て。此段を申上られしに其者つよく御僉義の上銀の有所まで白状申恙惑におよぶ時。亭主御訴詔申あげしは。此者は弟子の中にも先妻娚にて外とは替り悴子同前に仕り置。する／＼は覺語によつて私の名跡をも継し申程にそんじたてまつり候。おのれが物を盗申候同前に御座候へば。御慈悲に此科を御しやめんなしくだされ候は。其まゝ出家に仕度御願ひ言上申せば。願ひの通り命の義は御免くだされ。あまたの者に難義かけたる惡人なれば。いよ／＼坊主になしおのれが手細工の傘一本にて宿を追拂へと仰せつけられけると也

四 両方よらねば埒の明ぬ藏

むかし都の町に目貫小柄の買問屋有。難波の里より縁組して此妻十一年なじみ。男子一人七歳になる時此父親相果しが。其節女房も後家立る心底を聞定めて。財寶残らず親子に書置して男子十八に成までは。見せは手代に預け毎年の勘状は父方母方の親類中立合と念比に頼み置ぬ。商賣仕込の外に金子五千兩ありしを。父かたの親類よりは此子十八になるまでは預り置べしといふ。又母かたの親類より此方へと申て

たがひにうたがひ。此論下にて濟かたく兩方御前に罷出右の段〳〵言上申せば。兩方申所尤至極にきこしめし分させられ。扨仰せ出されしは其金子の義親類町中吟味いたし相違なきにおゐては。念を入内藏におさめ置。板戸の錠前に父かたの一門として封印を付。又土戸の封印は母かたの一門として付置。板戸のかぎは母かたに預り土戸のかぎは父かたに預り。一子十八に罷成時是を相渡すべし。用心の義は手代に預け置へしと。兩方うたがひなき仰わたされありがたし。此内藏兩方立合すしては戸前の明さる事を深く藏じけると也

五　あぶなき物は筆の命毛

むかし都の町に親は武士なりしが大分金銀たくはへて。奉公をやめてすゑ〳〵まで町人の覺悟して。岩神のほとりに住けるが一子すぐれて美男にして。世の人の手業ひといろにても學び殘せる事なし。中にも能筆にて指南人のためともなれり。親果られて後身を我まゝに持なし晝夜遊女くるひにみだれ有程は遣ひ捨諸道具までも賣果し。それにも此道をやめず。初中後ひとりの太夫を七年か間買つゞけ間夫のごとくなじみ。遊女も年月の情をわすれず淺間敷なつても心を通はせける。有時いひ合此所を盗出さるゝ身の取置。折ふし五月闇然も雨ふりて鼻つまむも見えぬ夜に。惡事にやとはるゝ友達四五人かたらひ。女良忍ひ出るを早桶に抱入て白帷子うちかけてまだ宵ながら荷ひ出るを大門の番者是を見ながら。誰身のうへも皆あれじやいかなる人の祖母やらんと無常を觀じける。其夜に太夫が見えぬと僉儀して門番に相たづねしに。今宵にかきつて始末なる揚屋に酒切らして取にはしると。野おくりがひとつ出たよりは鼠も出ませぬといふ。扨はとくるは中を吟味するに此葬禮の出所なし。此仕掛にて盗出しに極ると。つき〴〵の女どもせんさくしてもしれ難し。文ども改めけるに兼て其心得して隨分取まはしけるに。因果は疊の下に名書のなき文ひとつ有。其中に盗出べき內證ども書つゞけたり。是を見あはするに彼牢人か筆跡にうたがひなし。是を證據に名をさして御訴詔申上れば。其牢人をめされ此文其方が筆かと御たづね有しに。私の手にはあらずと申上る。然らは此文の通りに書べしとの御意にまかせ。筆拍子得たれは各別手筋を違て書上る。時に仰せ出されしは此文にちがひたる所は斷り立なり。前〳〵取やりいたせし其方名の

ある文と只今書たる文と相違ふにおゐては手を自由に書ゆへなりと。まへかた違はしたる文ども取よせられ御一覧あそばしけるに。三品に手ふり違ひければ右の書移したる文を又仰せ付られ。此たひは文章ばかり御讀せあそばされ。書せて御覧あるに筆ゆきは違へて書付上れども。文字の移り墨継すこしもたがはず。是よりいよ／＼御吟味にあらはれ此牢人曲事に極る時。是に組したる友達とも申上けるは此男此女良一人に七千兩の金子をうしなひ身体つぶしたる段／＼言上仕り。右に此女良を弐千兩にて請出す約束此男仕申は得は。此金子いづれも合力仕り親かた手前をもらひ請たき御願ひを申上。女良屋へ金子を立相濟けると也

六 小指は高くゝりの覺

むかし都の兩替町に小判の買置錢の相場。日に幾たびか商ひ事有。中間はいひあはせて萬事を自由に仕掛。すこしの當座借は手形までもなく。覺帳にしるしてたがひに取やりいたしぬ。有時人の手代小判拾兩かりて。四五日も歸へさぬうちに借方の若ひ者。帳面さえぬをせんさく仕出し。拾兩取に遣はしけるに手前の帳を消置。其明の日慥にかへしたるよし申せば。其日より後の勘定を仕立けるに。いよ／＼拾兩ふそくして。請とらぬに極めさま／＼吟味仕あふに是非しれ難く。金子はわつかの事なれども金商賣の義なれば。自今以後のため迚借手借手の若ひ者兩方の親かた是をめしつれ。段／＼書付をもつて御前に罷出ける。兩方の申分御聞屆あそばされ。借かたの手代おのれ大事の金銀の取さばきに。物覺へうとくして成難しわすれし事を思ひ出するためとて。左右の手の小ゆびをこよりにてくゝりあはせ。是に封判して御歸しあそはしける。又借たるかたの若ひ者油斷よりの出入なれは。此事の相濟までは立居にも門ありくにも。片手に二十五けんの十露盤を持べしとかるひ過怠を仰せ付させられ宿に歸りぬ。小指くゝられしかたの手代はじめより惡心あつて。かゝる御僉儀にあいて其身の外人にも迷惑を掛。此方不念にて拾兩の金子を歸さぬ事をおもひ出したる段。御訴詔申あぐれば只今合点ゆきて金子戻す上は子細なしと御免有けると也

七 煙に移り氣の人

むかし都の町人世わたり有德にして。三条の繩手に下屋敷をこしらへ折ふし

のあそび所なり。久しくめしつかたる手代隱者形氣にて市中にまじわる事を此間ざれば。此屋敷を是にあづけ心まかせに暮させけるかねては惣領そだてし乳姥とひとつにして。商賣のもとでをとらすべしと此內證を兩方へ聞せしに。乳母は合点して菟角は奥さまの御意次第の我身と申ける。手代一圓同心せず色／＼異見すれども此事いやに極める。外の事に違ひ一生の緣組なれば押付業にも成難く。其通りに濟て手代は今の覺悟に身をおさめ。あれも增成と人皆是を浦山ぬ。乳母は女心に夫婦とならぬ事をうらみつね／＼手代が身の難をたくめども此男建義者にて。親の日寺まいりの外は夜は門へも出ず。何ともせんかたつきて。小家すまひの野等者をひそかにかたらひ。ある時奥さまの供乘物にておした屋敷行て。いつよりもおもしろふ仕掛て夜に入ま.でのお慰み。御機嫌にてお歸りのどさくさまぎれに。川ばたの妻戶のかぎをはづし道を付置。物置の藏の鎰を盜みて何となく立歸る跡にて手代隨分の念者なれば諸道具を取置かゝれど亂れ屋敷の跡なれば。中／＼今宵のうちにはかたづけがたく。あらましに取置夜半にふしける。乳母はくだんの鎰を野等者どもに渡し。其夜に忍び入せ掛物かざり物寐道具まで盜とらせ。それらには金子をとらせ。其諸道具は手代の親里へ遣はし。樣子はそんせずこなたの御子息京より是をおくられける。四五日のうちに爰へ御歸りいと合点行やうに申せば。手代が親何心もなく是をあづかり置ぬ。其明の日手代おとろき盜人の入たるよし親かた申來れば。主人思案して是は勝手をしらぬ者のいたせし事にあらずと。いつれも內證僉儀するに。其比天狗坊とて山伏のおそろしきもの有。是もまた乳母が仕組置奥さまよりいひ通じて。此坊主をよばせて樣子を語り聞せ先うらかたを見せしに。此盜人は一家の者と見通しのごとく申せば。ていしゆの思ひ入に叶ひ此上いよ／＼賴み入なり其者をあらはして給はれといへば。山伏請合然らば此家內は申におよばす。外に住し御家來まで其名を給へと以上に三十一人。段／＼名をしるし是を渡せば。一夜のうちに其まゝ證據を見すべしと進み。明日此衆中連座あるへし其中にてゑり出し申と。其日は私宅に歸りて次の日午の刻に此家に行て。大勢の中へ申渡しけるは只今此名書を煙に移して。あやまり有人は其名に不動のくはゑん移るべしと。則けふりにかけて見るに忽きど

くをあらはし。手代が名書を取まはし不動の後光移りぬ扨はと是に極め親かたうたがひ心になれば。手代は覺なき事に迷惑いたし是非此事は。一吟味いたすべしとおもふうちに手代の親許江刕の草津へひそかに人遣はし見るに。其盗み物あづかり置をせんさく仕出し。なを又まきれなしと山伏の御法力に横手拍ける。日比りちきといひしに人はしれぬものと取沙汰せられて。此手代堪忍なりがたく。山伏を相手にして御訴詔を申あげしに。一家一人も殘さず御前にめし出され。諸道具親が許に預け置ぬと御聞なされ扨は手代はいたさぬ事と御思案あつて。彼山伏をめされ此度の行力たんてきなる所殊勝千万にそんずると。かつ〳〵御ほうびの上此方にも幸ひさやうのせんさく者有最前のごとくゑらみ出せと。十人名書して此內に盗人有と仰せられしに。山伏迷惑して先お請を申宿に歸り。右のごとく仕掛かさねて御前へ罷出。是を煙に移せば其中に一人あり〳〵としるしあらはれける。御前に大笑ひなされせめて此內にないと申せばきどくな

り。おのれ書付は何の子細もなき事を。一人けふりにあらはすは曲者成と此義は御吟味仰せ付られ。乳母が頼みし悪事あらはれ右の野等者どもも同罪に仰せつけられけると也。此山伏寂期の時がうりきに小語て申置しは。此たびあらはるゝは百年目煙に移し文字のすはる大事は。橙のしぼり汁にて書しるし火に掛ると。其まゝ移りぬ淺ひ事ながら是で大分お初尾取ける。是を形見に傳受といふを聞人働みつくつて笑ひけると也

八　名は聞えて見ぬ人の㒵

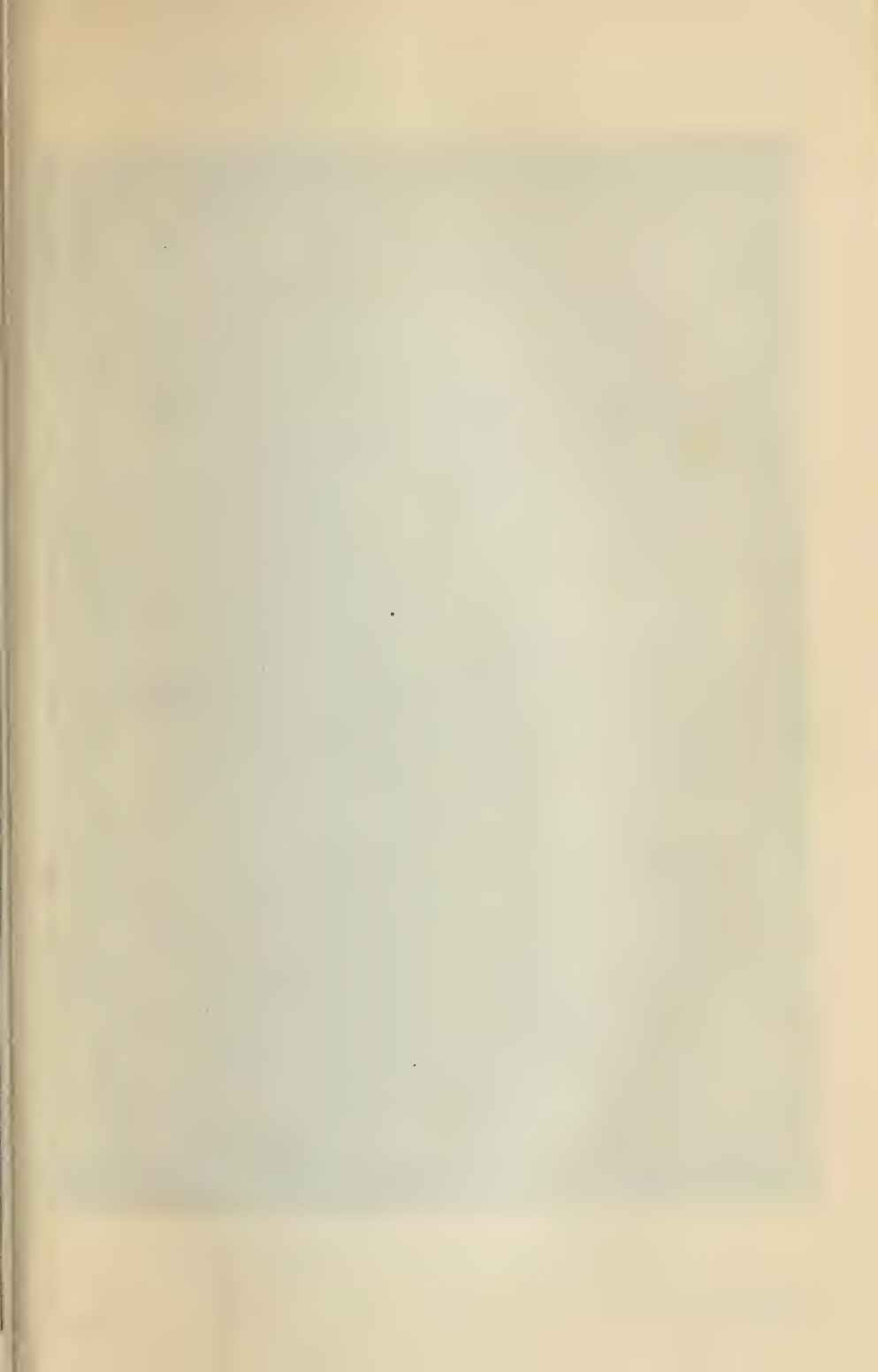
むかし都町に人の異見をも聞ず。親のゆつりし財寳残らず賣拂ひ。昼夜の浮世くるひに身をやつし。後にはわけもなく悪事をたくむ中間にましはりぬ。人生れながらにしてかしこからず又悪人もなし。此者も世に有時は正直過て百いふ事ひとつも違はず今は千いふ事三つも眞言はなし迚千三といふ男有。以前の形残りて紙子の袖ながら京都にまたもなき美男なり。中間として此男をかくまへ置人の通ひなきうら借屋に

置て家名も其名も京の歴〱の名を付置近所へも其名をひろめける。有時此男を彼大銀持の男子殿に仕立。然も衣類の定紋まて其人とかはらず拵へ。大勢の太鞁供の者分別はげのあたまつきなる手代まて付て。忍び〱に東川原の子ども宿にて遊興。亭主に大ぶんよろこばせもし太夫本の望みあらば。金銀は何程成とも旦那御取替と申せば。わたくしも兼〱其心かけ也此まゝは果ぬといふて三度首をさげてかたじけなき良つき追て庭はくといふ御地走ふるし。新しき御機嫌取の咄しに夜を明し。此事隨分世間へ隠すうちにはや芝居の末社とも聞出し。此宿につけ込無理に御一座を取持。一度〱にくだされ物ばつと此沙汰あつて。皆〱取込事を願ひ此大臣は女里の御色好みと聞傳へしに。爰へのお越めづらし是は川原のはんじやうの隨相なり。此旦那〱と各〱思ひ付時を見合。醫者らしき人太鞁持に小語しは親仁様東國へ來春年頭に御下向なさるゝが。それまで御金の入事有きも入申せとあれば。我も人も請合口入をせりあい壱万兩て

もやすき御用迚。此名代を申て悪所銀を借人に申ければ。其方へは五千兩まてはおやくに立申べしと世間並の利銀に定め。大臣の一判にて弐千兩借人有。金子は東山の眞言寺に持參し。大臣の自筆の手形印判を見とゞけて歸りぬ。其後切になつても不埒なれば其家に付届けすれば。そんじもよらぬ事と不首尾成返事に畏き。口入の者どもをよびよせ其人をたづねけるに片陰の借屋住ひして。家内ひつからげて身体百目が物はなかり。是はかたり中間とせんさくすれば此男すこしも動せず。からぬと申にそ成程我等は借主。家名と名が分限者の子にゐるとや。拙者も作り名にはあらず其段は町所にてたづね給へ。家請狀にも相違なしとかつて取あへず。廣き都なれば同し家名に同し名のある事さのみ不思議にもあらず。其時分ぞんずるにもわづかの者に大分金子を借給ふ事かな。口入のよきゆへなるべしとそんじました。私借主ながら其小判は手にもとらねば其行所もしらず。今さいそくあそばしてから何も御座らぬは祇薗殿も見通し也。世帯道具もかり座敷なれば我等の物は一色もなし。わたくしの物とては矢のたらぬ楊弓諸禮の書本青貝置の鼻ねぢ。相重のから二つ女郎野良の文反古。身をはなれし物は是ばかり也。千も万も論は無用ひとつある是を切給へ。つね／＼我等が物とはぞんせぬと首さしのべて申せば。金主興を覺して罷歸り此段御前へ御訴詔申あぐれば。こまかにきこしめされ菟角は其方どもが無念なり。殊更世上に替りて七分半にまはれる利銀を取込ゆへと仰せられけると也

九　傳受の能太夫

むかし都の町に伏見太夫とて。能の指南して世を渡り白川橋のほとりに住て。昊仙丸山の座敷能を大かた此太夫勤めける。其折ふし古里伏見に西行寺迚蕉跡有。此寺前に月見の池とて心よく水さへすみわたりたる名池也。秋は哥道心ざしふかき人あまた爰にあつまりて。月を見るに庭の荻原露しげく。諸人たゝずみ所のせまき事住僧心に掛。此ほとりにかり屋だてを數年の望みありしが。此願ひ成就せすして過ぬ。此事能太夫傳へ聞三日の觀進能して是を建立せんと是をおもひ立折から。老人なれば俄に足をいたみ時節の相延る事を悔み。あまた弟子ある中に山太夫川太夫とて。二人は兩の手のごとくおもへば是を名代に遣はし。相勤めさす内

談せしに翁をわたす事をあらそひ。師匠のまゝにもならず命を掛て此論やむ事なく。はやしかた地謡より色／＼曖ひ。鬮取にして一日替りと申せどなを開ずして。大願首尾せぬ事をなげき。此上は是非なし莵角御前の御沙汰次第と。無用の論を仕出し皆／＼御前に罷出ける。諸藝はあらそふ元にして我を立る事悪心にもあらず。されば其家継すはぎやうのすぐれたる者にひでんをわたすが本意なり。是にて兩の弟子太夫につれ舞を申付べし。いづれにても舞のうちよろしきかたを此たひの太夫分にいたすべし。扨觀進能の有所西行寺なれば只今は江口を仕れと仰せし時。幸ひはやしかたも相勤め申せ、は御前より笛藏を申おろし。既に兩太夫御白洲にて一度に立出首尾よく舞おさめし後。御見物あそばし御意なさるゝは。能の善悪はしらねども川太夫に山太夫まさりて心のきいたる所有。子細は白雲にうち乗てうとふ所を。足拍子踏ぬは心入おもしろし。此山太夫に大事を傳へて翁をわたさせよとの上意ありがたく。天下泰平國土安穏今日の御扮とうとふて御前を立けると也

久かたの日本雲は平治る江東の山風は穏なり關西の海今君が代の道すぢ廣く十廻の松條に音なく千聲丹島の舞謳歌抑成務天皇五年に諸國の境をわかちそれより行基はしを掛堤を築給ひ末の世の民まで土の車を引哥にして東路の名所舊跡を改め夷が千嶋の干鮭の日も見ぬ事は人にかたるへき種なし忍ぶ摺の石を

燧筥には入がたし松島塩竈の煙に莨菪は眠の覺もの白川夜ふねと聞しに山に有關を越て武藏の丶月の赤ひも富士の雪のおもしろいも詠めてこそ三保崎の鳫も田子の浦の鰹魚も喰ねばしれぬ泊〳〵宇津の山邊の蔦かづらは尋ねずして十團子を都への傳もかなと思ふも替る世の中の人心赤坂に遊女あり岡崎に長橋有

鈴鹿の鬼も僞りの時雨に近江貫笠是やこの相坂山の戻り馬も暮て伏見の川舟難波の梅の包ひ風に舟路の浦ミ嶋ミ鳴門の浪風ゆたかに日の出の濱より西泊の海迄長旅の枕詞に一目玉鉾と名付見へわたりたる道しるべぞかし

維時元祿二年
巳正月吉辰
難波俳林

松壽　鶴

東の沖浪しつかに毎朝くれな井の影ゆ
たかに久かた日の本爰也

○日の出の濱

我國は天照神の末なれは日の本としも云にそ有ける
天津空替らす照す日の本の國靜なる御代そかしこき

○夷千嶌

こさ吹て曇もやせん陸奥の夷には見へし秋のよの月

此嶋長サ百三十里横十五里是より北高麗へ十八里あり〱見へし夷の大將を遮牟紗院といへり妻を女軟腰といふなり

○蠟狐嶋

嶌山里〱つゞきて廣し夷より此所へ海上百里有といへり荒浪にしてわたり難義也

○常盤嶋

是は夷より五十里嶋崎の切戸見えわたりて毎年八月十五日より初鴈の渡りくる嶋國是也

白雲に翅しほれし鴈金のおりゐる礒も浪や隙なき

是につゞきて岩組あらく渡海なりかたし寒中は氷の橋かゝれり

○氷浮橋

嶋濱みな〳〵猟師の住家竹の柱笹葺にして形も人論はなれし者也

○離小嶋

千嶋の美景諸木諸鳥の毛色入江の曝岩玉敷礒の氣色かゝる所を都の人の見残して古哥さへ稀也海邊に臼善光寺とて一堂有本尊は信劦と同体也突臼臺座にして有ける

○松前　　松前志广守殿城下

上の國餌指といへる大所有此嶋より出る名物

蠟狐の皮　熊の皮　豹鹿膚

あさらし　鷹　おつとせい

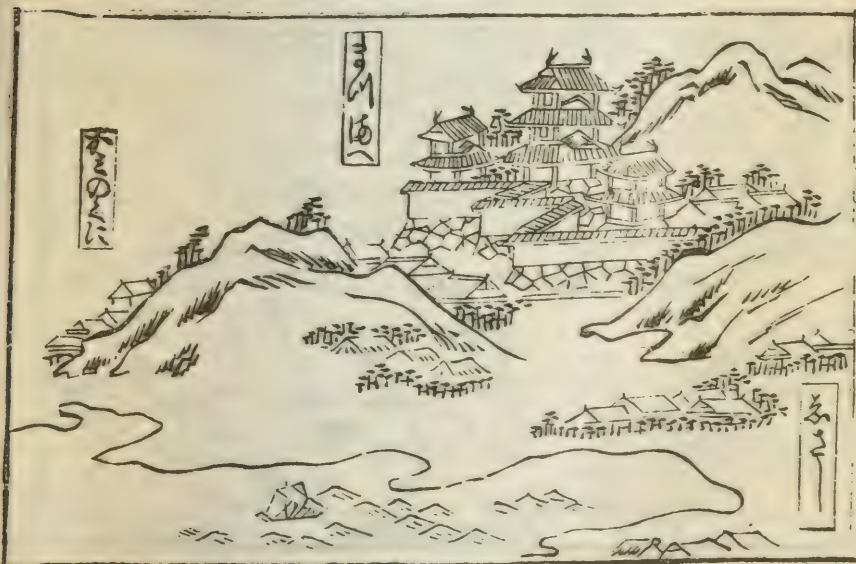
鹿　三好こかね　とゞ

鯡　干鮭　昆布

鶴　白鳥　鴈

諸國の商賣人爰に渡り萬上方のごとく繁昌の大湊也浦〱の末〱は昆布にて葺し軒端の人家も見へわたりぬ是より嶋國へは番所ありて人の通ひ絶たり

○津輕　　津輕土佐守殿城下

岩城山とて高山有是につゝきて比賀崎といふ大蝦夷の松前へ荒海十里也

此所より出し名物
うとふ　やすかた　がつぽう　鷹

○外の濱

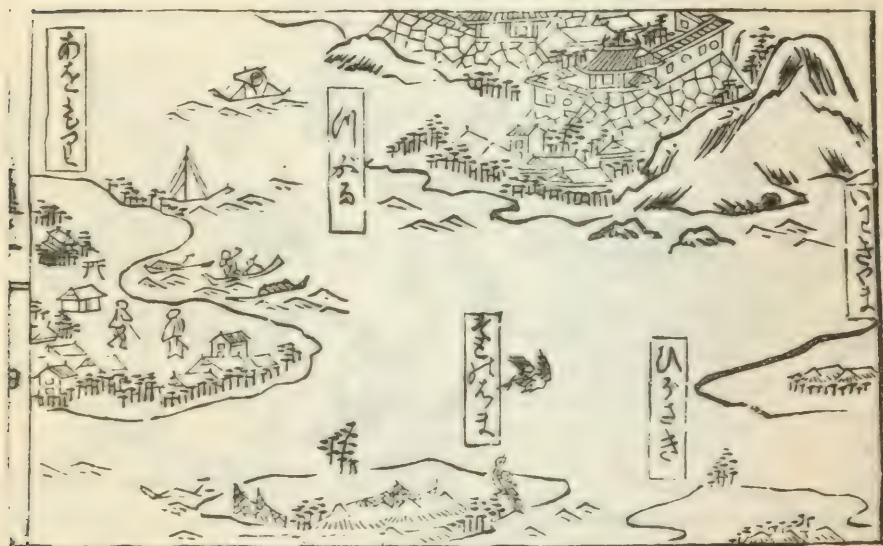
此所今に殺生人獵師の世をわたる業とて幽に住あれて物淋しき浦也

紅井の泪の雨にぬれし迚簑を着て取うとふやすかた
陸奥の外の濱なるうとふ鳥子はやすかたの音をのみそ鳴
子を思ふ泪の雨のみのゝ上にかゝるもつらしやすかたの鳥

○青森

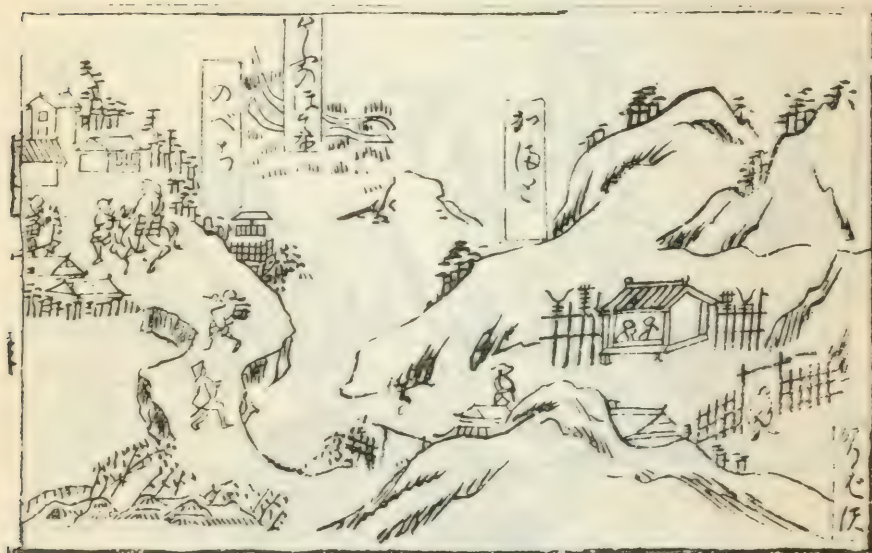
此浦は舟着にて津輕松前の荷物是より積也諸國の廻船も此湊まで通ふなれば上がたを聞ならひ言葉やさしく女の姿も當世にちかし難波津の問屋に見へし蓮葉女といへる有かれに萬をうつすな

○野内

○安佐虫

此所に温泉有諸病によしといへり小湊里ならひに濱子なを山つゞきに五の戸七の戸といふ所あり

○錦塚

世に語り傳へしにしき木の里爰なりいにしへ此里の美なる女を戀て此木を門に立けると也所のならはしにてなびけば取入かたらひをなし思ひつかざる男は其まゝに捨置れ千束まで立つくし戀死せしを塚に埋み名斗殘れり此里の女今に細機織て世をわたる業となせり

○狩場沢
○竈
此所まて津輕土佐守殿領内也うしろに
松山高ふして番所有爰にて往來を改め
奥に通しける
○述路
是より南部の領分なり
○狹の里
陸奥のけふの細布程せはみ胸のあいかたき戀もする哉
卯花の咲る垣ねは乙女子か誰ためさらすけふの細布
此里にせばき細布を織出せし也又無名
抄に鳥の毛織ともかけり是ゟ里つゝき
に
○喜多井　○三の戸　○福岡
○子津那木　○野間久　○奈部
○枯杉

○盛岡　南部山城守殿城下

此所に奥の冨士とて駿河なる山の形にかはる事なし

○磐提山

むかしは關所也岡つゞきに里あり今も木深き森見へわたりぬ

口なしの一入染のうす紅葉いはての山はさぞ時雨らん

思へともいはての山に年をへて朽や果なん谷の埋木

○岡山

此宿東路には人の情もふかし旅人をとまれと小手まねきの女姿もさのみいやしからず髪も兵庫まげに物かたく白粉は雪の曙をあさむき口紅は夕日に移りてさりとてはおかし後ろ帯見よき所からの風俗是も一慰みとてかり枕おもしろし

○花牧
爰も旅人のために遊女を定め置ぬ其役目とて三味線引て小哥も所からにはよしや此右の方の廣野にむかし駒有

○大治牧
陸奥の大治の駒も野かふには荒こそまきれなつく物かは

○鬼柳
此所も番所有

○人首

○阿以左里
是より松平陸奥守殿領分也

○金崎　○水沢　○前沢
○哥無鳴　○沢邊　○荒家
○古川　○大崎浪　○三本木
いづれも海邊の里つゞき風景也

○喜多賀美川

○逆柴山　○一の關　○高舘城

文治五年源義經合戰の場なり

○光堂　寺領千石

此久藏寺は秀平建立の靈屋也七寳莊嚴の卷柱にしてひかりわたれり此所今に櫻の谷也

○櫻谷　○衣川

此川の中の瀬といふに弁慶㝡後の跡

きのふたちけふきて見れは衣川すその綻さけのほるらん

○衣の關

櫻色に四方の春風落てけり衣の關の春の明ほの

諸共にたゝまし物を陸奥の衣の關を余所に聞哉

○平和泉

泉三郎忠平城の跡有

○蟻賀邊　○宮野　○月立

○吉岡

○七つ森

松の梢むら立同し山の形七つありしに此名を付し

○高木

是より松嶋につゝき嶋浦の風景何國はあれど爰の詠めにあかぬ所也

○小野　○磯崎　○蛇崎

○冨の山

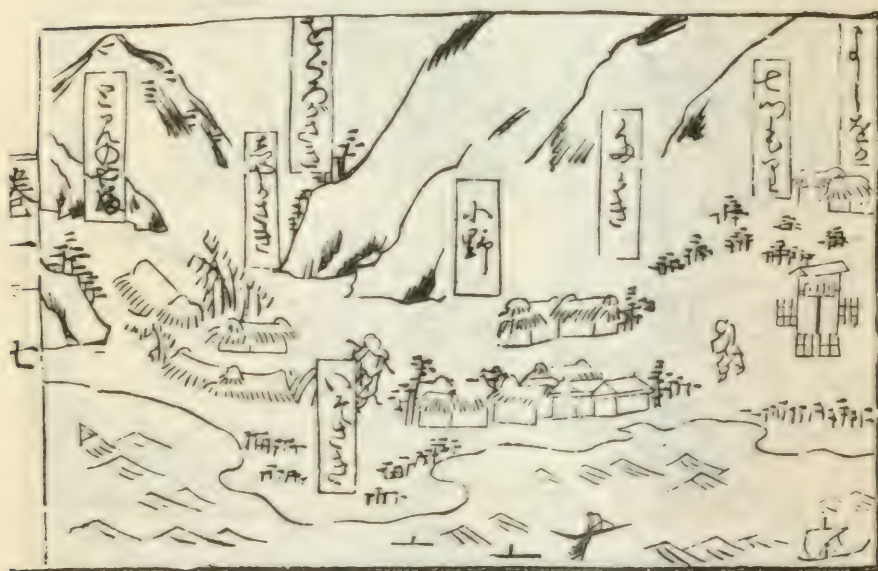
○小黒崎

をくろ崎三つの小嶋の人ならは都のつとにいさといはまし

○美豆小嶋

人ならぬ岩木も更にかなしきはみつの小嶋の秋の夕くれ

○月見崎

浪間の月同し影ながら爰は殊更に

○五大堂

此嶋に名水涌出る井有

○瑞岩園

福禅寺は開山法心和尚

右に天麟院圓通院左に陽徳院正宗忠宗

兩國主の御影有

○松嶋

松嶋や汐扱蜑の秋の袖月は物思ふならひのみかは

立歸又もきて見ん松嶋やをしまの笘や浪にあらすな

○竹の浦

此小嶋に座禅堂有道橋浪靜なり民部卿

忠教朝臣藤浪かゝる松嶌の橋と讀れし

も爰也

○長老坂

爰に西行戻の松有月見の借屋とて美景

也

○高清水　○礒二子嶋　○沖二子嶋
○朝日山　○福浦　○燧嶌
○沖の井
○金花山

皇の御代榮んと東なる陸奥山にこかね花咲

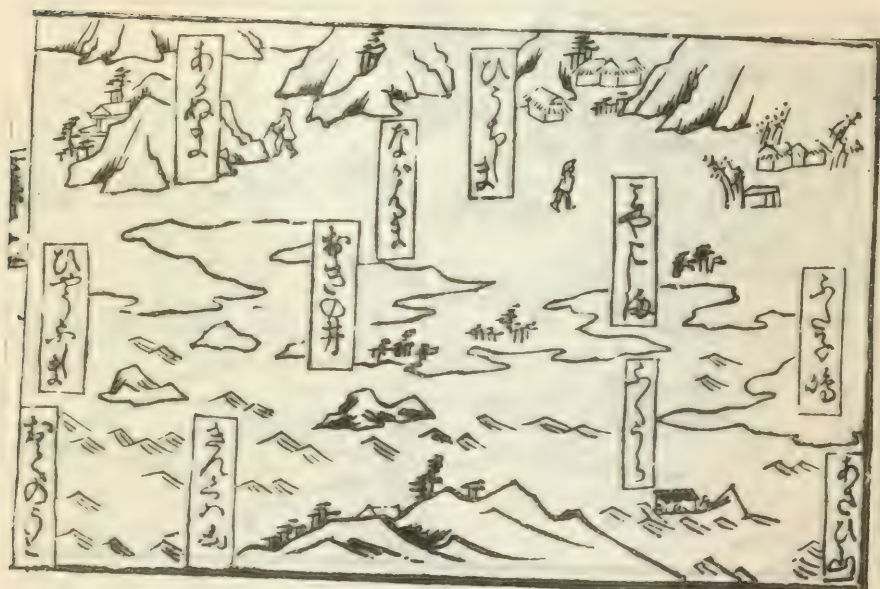
此嶋山の礒邊に砂金有金子とてなまこの名物出ける

○長濱　○浮浪
○奥の海

尋ね見るつらき心の奥の海よ汐干の方にいふかひもなし

たつねても他し心の奥の海の荒き礒邊は寄舟もなし

○赤沼　○輕嶋　○翁嶋
○毘沙門嶌　○鎧嶌
○洲ケ崎　○屏風嶋　○鬘嶋
○甲嶌　○橋掛嶋
○肘が崎　○遠名野嶋

○雄嶋

心あるをしまの蜑の袂かな月やとれとは濡ぬ物から

秋の夜のをしまの天の原明かたちかき沖の釣ふね

○釜の口　○青海原　○蚫嶋

○千賀浦　○塩竈

此六社明神は一条院の御時中將藤原の實方奥刕に流人となり和哥名所を集め歌枕と名付阿古野松をたづね給ひし古哥に

陸奥のあこやの松に木隠て出へき月の出もやらぬか

此松今は出羽の國に有と翁のおしへ給へり是塩竈の明しん也

秋霧の籬の嶋のへたてゆへそこと見へぬちかの塩かま

同しくは越や見まし白川の關のあなたの塩かまのうら

此所にさし渡壹丈の大釜四つ有

○鐘掛嶋　○大澤　○裸嶋

○鴈金山　○富嶋　○高垣

○都嶋

沖のゐて身を焼よりも悲しきは都嶋への別成けり

別路は身をやく沖の数そへて都嶋へにとふ螢哉

○末の松山　○中の松山　○元の松山

此山の尾崎沖につゝきてかけ浪越かと見しに岩に玉ちる氣色替らず

浦近く降くる雪は白浪の末の松山越かとそ見る

春の行すへの松山吹風に霞ぬ浪も花やちるらん

○沖の石

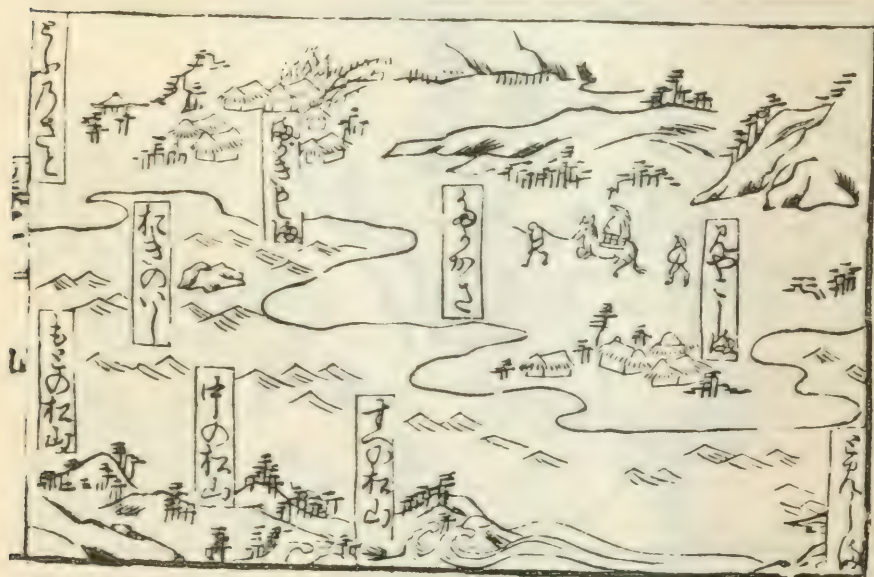
我袖は汐干に見ゆる沖の石人社しらねかわくまもなし

○籬嶋

明暮はまかきか嶋を詠つゝ都淋しく音をのみそ鳴

いさり舟笆か嶋の篝火に色見へまかふ常夏の花

○十符里

陸奥の十符菅薦七ふには君をねさせて三ふに我ねん

○壺石文

此石高サ六尺横三尺厚一尺五寸面向に立抑〻多賀城は神龜元年甲子按察使鎭守府將軍大野朝臣東人所築也其後天平宝字六年十二月東海道節度使兼鎭守府將軍藤原惠美朝臣此城内に立置て此碑といへり

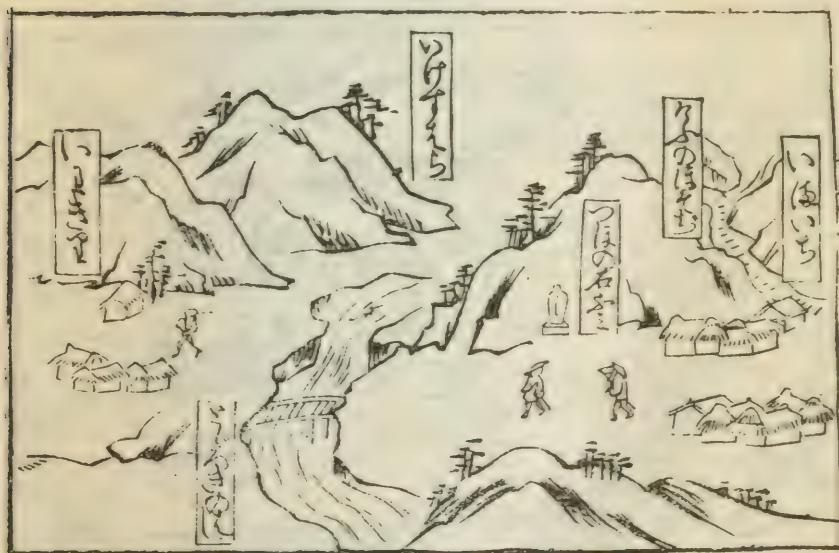
田村將軍鉾を持て此碑のうちに爰を日本の中央のよし傳へり又壺といふ所の名にはあらず前栽に立られしゆへなり

陸奥のいはて忍ふをゑそしらぬ書盡てよ壺の石文

みちのくの奥ゆかしくもおもほゆるつほの石文外のはま風

○奥細路　○生巣原

○轟の橋　○岩切

○緒絶橋

白玉のをたへのはしの名もつらし乱て落る袖の涙に
人心をたへの橋に立歸り木葉ふりしく秋の通路

○躑躅岡

此所の山陰花の盛には皆紅井のごとし
天神の社立せ給ふ

○薬師寺

是に運慶の作の十二神有

○横野　○玉田

○宮城野

此野の糸萩花房も余の所にかはりてむかしは爰に錦を乱し都人の目にもめづらしく爲仲手折せて長櫃に入てかへられし其跡もかたちも今は一本も見へず廣野に小松ばかりありて秋をしらず此

花の種元は枯て世に殘り仙臺の人の庭
に咲せし

宮城の本原の小萩露をもみ風を待毎君社まて
哀なる宮城か原の旅ね哉片敷袖に鶉なく也
みさむらひ御笠とまうせ宮城のゝ木下露は雨に増れり

○木下野　○權現堂

○國分寺

當寺は聖武天皇天平年中に日本國中に
一國一ケ寺を御建立をありしによつて
國分寺といふなり其一寺也

○白山權現

○小鶴の沼　○袋原

此沢にさま〲の鶴ふだん羽をたれて
人をもおそれず見へし

○比丘尼坂　○化粧坂

○原町
材木藏有舟町といふ所に遊女有

○國見坂　○竜の口

○仙臺

○青葉山　松平龜千代殿城下
民家京の町に替らぬ繁昌の大所なり屋形町かきりもなく甍立つゝき久しき城下のしるし諸木枝を垂風に葉音なく靜なる國也

○戀路山
千本杉とて大木有此中に愛岩大權現立せ給ふ惣して當國は杉の木多き所也

○廣瀬川
仙臺の町はつれに流れたる大河也

○琵琶首

○芭蕉が辻　○六道辻

宿の出はづれに人家の軒端に古代より植つゞきて其根さし今に廣葉をあらはし此所は名のたかき札の辻也

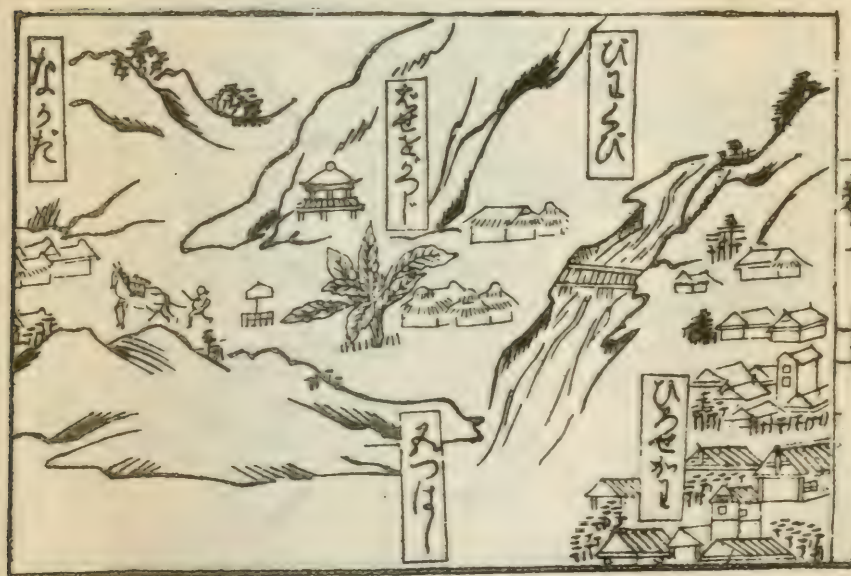
○五つ橋　○清水小路

入組し川の面に橋を五つわたされし水きよくかゝる風景おもしろし參差に八橋名斗殘れり難波に四つ橋是さへ稀に詠めしに是は又何國にか有へし

○中田

此里のすこし西にあたつて生出の森有裾野は玉笹みだれ細川より埋木ながれ出香炭に燒也

○熊野山權現

○名取川

むかし名取の老女住ける所とて今に語り傳へし片里有

陸奥に有といふなる名取川なき名取てはくるしかりけり

名取川音に名立そ陸奥の忍ぶが原は露あまるとも

○佐溜川

爰に赤坂明神立せ給ふ

○增田

植松寺空淵の灵寶多し當寺は夕日上人の開山の灵地也諸木しげりて風法音のとなへ殊勝に見へわたりぬ

○小松岡

いにしへは野邊なりしか今は里〳〵村〳〵つゞきし

○糠塚

此所錦戸合戰の時源頼朝公改め給ひ米塚になし給ふと也

○實方塚

さねかた中將は小一条定時の子也長德四年十一月十二日に此所にて死す

○岩浪　○石地藏

此所より相馬海道あり

○武隈明神

○二木の松

昔日橋ノ季通みきとこたへん聞し二木の松も藤原元善任國の時舘の前に植初しより数多生出其後孝義又任國の時情をくれたる人の爲とて是を伐て橋に掛し跡は杉村の中に寺のみ殘れり

○槻の木

宿はづれに大木有文治五年に源頼朝奥州合戰の時此槻の木の下にてかぶら矢二つ權現にこめられし事有

○憚關

知らめや身さへ人めを憚の關に泪はとまらさりけり

やすらはて思ひ立にし東路に有ける物を憚の關

○舟廻

○油掛地藏

此所にむかしより石佛まし〳〵て大師の作といひ傳へり其里に住ける油賣毎日灯明とてかはらけもあらねばかしらから一杓つゝ掛しに次第に富る家と也それより此堂をたけるといへり

○大河原

此宿のひたりのかたに柴田か城跡山中
に石垣の崩残れり

○薤髪山

此山の頂人のかしらのごとくなるによ
つて此名をいひなしける其陑野へに照
井太郎が塚有

○金瀬

○苅田宮

此山下に白鳥大明神立せ給ふ是は日本
武の尊の垂迹なり崩給ひて後白鳥成大
和の國に飛給ひまた讃岐にも飛せ給ふ
景行天皇の御宇也今爰に勸請して御社
おがまれ給ふ

○子捨川

此里へむかし白川院の御時ゆへある宮女の東に行し夫の発心を尋て爰にくたり世を思ひ切子を捨置其身は此川に沈みしと也それより浅瀬のかはり早川となれり此流れの末に

○眞野萱原

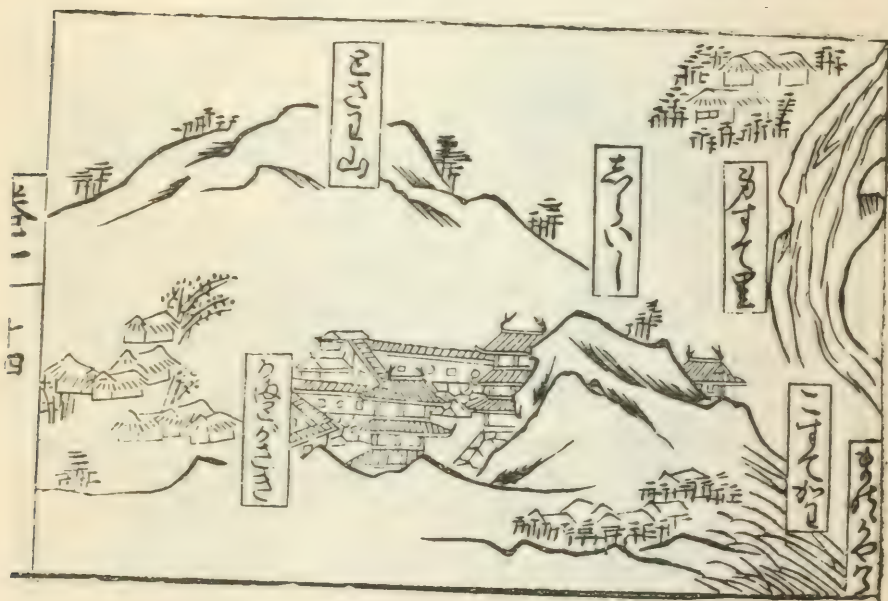
分詫て何國里とも白菅のまの丶萱原霧篭てけり
露分て秋の朝は遠からて都やいつのまの丶萱原

○白石　片倉小十郎居城

此所より名物の紙絹紙子出る

○竈崎

津の國有馬のことく入湯有諸病によし
ひだりのかたに高山見ゆる

○戸沢山

○佐伊川

鞍割坂といふ有是は錦戸合戦の時此岩谷にて人馬をそこなひしよりかくは名付し

○甲冑堂

是は佐藤庄司が二人の子次信忠信が女の御影鎧を着しむかしを今に其姿を木像に移し置ぬ

○牛馬の沼

此ぬまにむかしよりおのづからのうし馬生じ今に絶る事なし

○越川

此所に仙臺福嶋兩院の石佛有

○國見山

此高根より近國見へわたるによつて名付し山也

○賀以田

むかし弁慶東くだり時爰に休みし所とて腰掛松さもあるべき大木の枝を垂れて残れり

○伊達大木戸

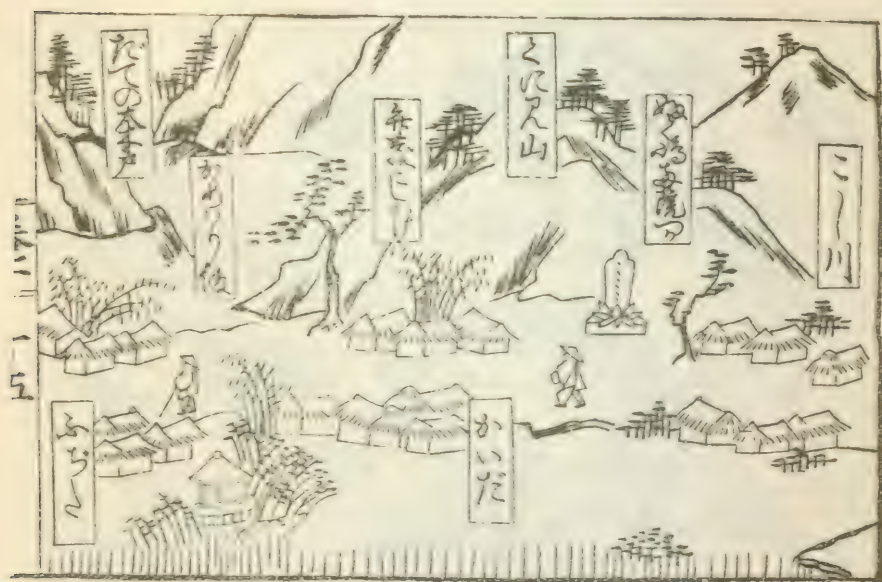
亀割坂も此所也錦戸太良泰衡御鳥猻院文治五年九月三日に此城にて討死す家人河田次郎是を討

○下紐關

東路のはるけき道を行めぐりいつかとくへき下紐の關

現とも夢ともみへぬ程斗通はゆるせした紐の關

○藤田

此宿に明の薬師とて立せ給ふ諸病の中にも眼病を祈れば七日のうちに驗氣を得ざる事なし

○桑折

是より最上の海道有

○瀬の上

此所に鶴上川とて清き流れ有見渡しに丸山是は佐藤庄司古城の跡也御鳥羽院文治五年十月二日に厚免の蒙り爰に住す

○忍摺石

此山あひの野に薄紫の石に苔むし今に共名は埋れずむかしは此石に草の葉を絹などにすり付けるといへり

陸奥の忍ふもち摺誰ゆへに乱れそめにし我ならなくに

○鞠川

山川白浪岩にくだけて早水也

○松川

○福嶋

名物の絹嶋出る遊女有町作もよろしき所也是より羽黒見ゆる

○羽黒山

此權現は椎古天皇元年に出現出羽の國に立せ給ふ稲倉魂神也

○須川

此宿の出はづれにむかしより絶ず温泉有伏拜みとて坂に鳥居ありて山道也

○信夫峯

紅葉村〳〵とありし山を所の人かくは申せし信夫山にはあらす

○弥津子町

里近くに漉通とて奇麗なる清水あり

○八町の目
是より二本松の堺也遊女ありて物のおかしき所なり

○二本柳
宿の入口に古木のしだり柳二本しげりて見へける

○舟引山

○安達原
黒塚とて草村の中に柏の木の村立て残れり今もおそろし

陸奥のあたちか原の黒塚におに籠れりと聞は誠か
分詫ぬ露のみ深きあたち野を独かはかぬ袖しほりつゝ

○二本松　丹羽左京殿城下
町並よろしき所也此山に出湯有

○椙田
温石此所より出る

武隈の松は二木を都人いかゝと問はみきとこたへん
男鹿嶋あたちか原は紅葉して色も替らぬ武隈の悉

○本宮（もとみや）

此所より會津（あいづ）海道有宿（しゆく）も賑しく旅人さだまつて泊所（とまる）なり遊女有ておもしろし

○高倉（たかくら）

此宿はづれに歩行（かち）渡りの川有

○日和田（ひわだ）

むかし爰に永代淵とて青竜（せいりう）の住て人をなやましける弘法（こうぼう）大師戒め（いまし）給ひ其後にて觀音を作り給ふ

○福原（ふくはら）

是より三春（みはる）内藤（ないとう）豊前（ぶぜん）守殿城（しろ）見ゆる

○小田原（をだはら）

此宿に田村明神の宮あり

○篠川　○須ケ川

是ゟ白河の領分諏訪の宮立給ふ

○淺香山

淺ましや淺香の山の櫻花霞こめては見へすも有哉

時待て落る時雨の雨そゝき淺香の山は移ろひぬらん

○同沼

みちのくの淺香の沼の花かつみかつ見る人に戀や渡らん

あやめ草引手もたゆく長きねのいかて淺かの沼に生けん

○山の井

淺香山影さへ見ゆる山の井の淺くは人を思ふ物かは

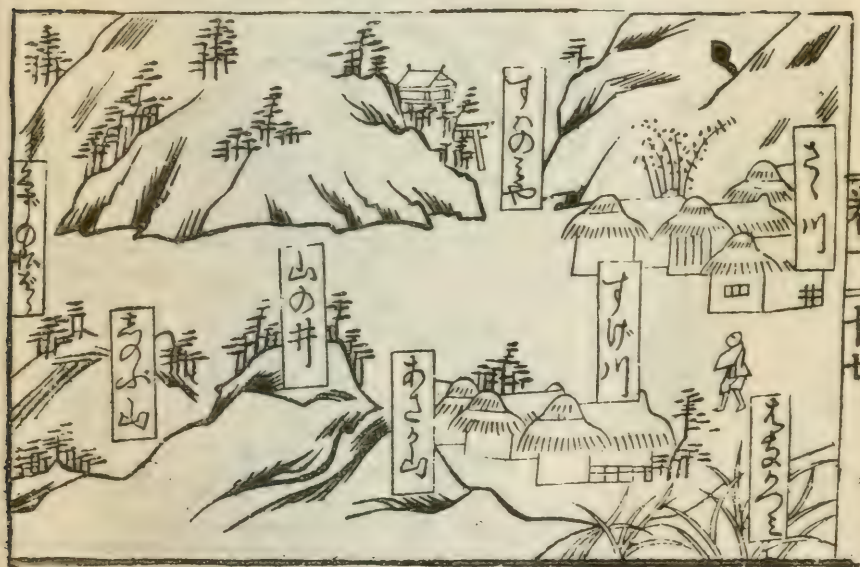
○信夫山

人しれすくるしき物は忍ふ山下はふ葛の根成けり

何事を忍ふの岡の女良花思ひしほれて露けかるらん

○葛松原

世の中の人にはくすの松原とよはるゝ名こそ嬉かりけれ

○笠石

此里の入口に其まゝ人の笠を着たる姿の石有

○影沼

うき藻もなく水の絶さるぬまなりしがむかしより月の影移る事なく月なしの沼といへり

○久來石

爰は石川の何かし住残せし山城の跡松村立下草もはへず見えし

○矢吹

○新田

此所に岩切の觀音立せ給ふ人のなやめる瘧たちまち落ける是大師の御作なり

○大和田

○太田川

○夫婦坂

むかし此里人業平高安に通ふごとく夜〱忍びしにたびかさなりて後には顯れ渡り二人ともに身を捨しより爰を戀死坂ともいへり

○化地藏

此石地藏夜毎に御身より火焔の燃出て人皆是におそれて往來をとめける有時刻付の飛脚通り合せ袈裟がけに切て其後は何の事もなかりき今に形を殘しまします

○小田川

○根白

宿はづれに清水有

○白川　　本多能登守殿城下

此山城の麓あぶくま川末に袖の渡し

○阿武隈川

行末にあふくま川のなかりせはいかにかせましけふの別を

君か代にあふくま川の埋木も氷の下に春をこそまて

○袖の渡

みちのくの袖の渡の泪川心のうちに流てそすむ

○白川關

山をむかひあはせ領堺より番所有変を二所の關といへり斯々孝徳二年に諸國の關を定め給ふ關初なり

便あらはいかに都へ告やらんけふ白川の關はこへぬと

都をは霞とゝもに出しかと秋風そ吹白川の關

○革篭

二条院の比吉次信高といふ者金商人此所にて死す是其塚也

○堺明神
是より陸奥下野の堺なり
○白坂
此所に茶屋ありて名物の餅を賣赤前だれに小手まねき口ばやにまいれ〳〵といふ声聞なれずしてひとしほおかしき事也
○道野邊清水
ひだりのかたにいさきよく清水今に流れし爰につゞきて大木の柳に玉垣してむかしの根ざし也
○遊行柳
道のへに清水流るゝ柳陰しはし迚こそ立とまりつれ
○芦野
爰に那須の七騎堂あり
○那須野

此里より那須紙出るびやう〳〵とした
る篠はらつゞきし

武士の矢なみつくろふこ手の上に丸雪たはしる那須のしの原

○殺生石

刀根川の上に有仁皇七十六代近衛院の
宮女也玉藻の前が亡魂此石になれり又
久壽二年に三浦上野此雨介此野の狐を
狩ける

○鍋掛の里　○大田原

此山つゞきに室の八嶋ちかし

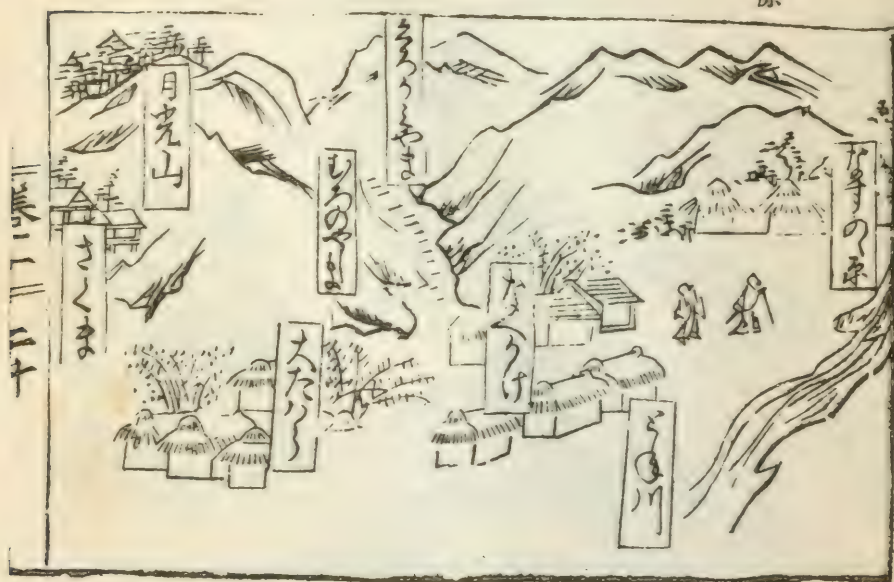
○室の八嶋

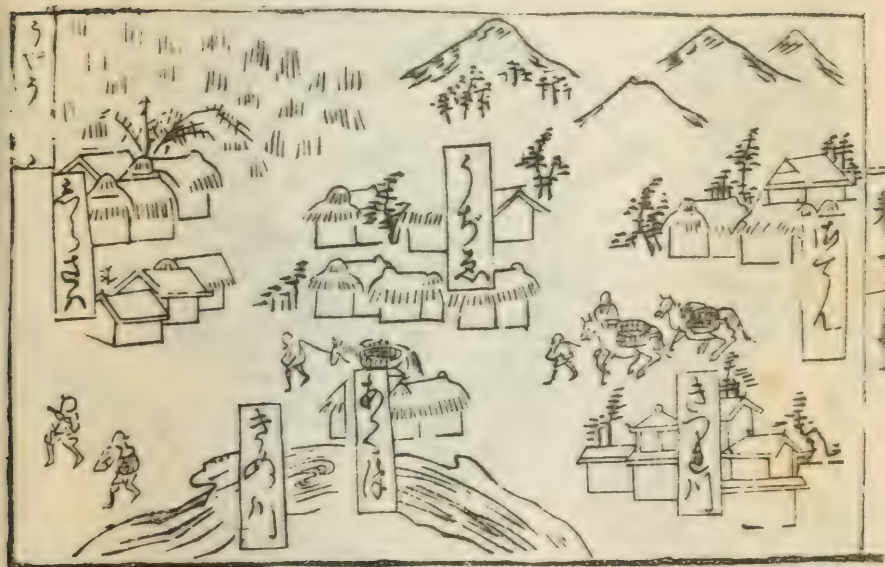
立のほる煙も雲と成にけりむろのやしまの五月雨の比

いかにせむ室の八嶋に宿も哉戀の煙を空にまかへん

○黒髮山

詠つゝ散なん事を君も思へくろ髮山に花咲にけり

旅人のますけの笠や朽ぬらん黒髮山の五月雨の比

是日光山也称徳天皇景雲元年に開基勝
道上人建立の伽藍也
○佐久山
○喜連川
此所御殿あり
○氏家
是より宇都の宮の領堺なり安久津川舟
ありて江戸までも乗行所也衣川といふ
流れに名物の鮎有水上は日光川なり
○白沢
此廣野をうつの宮ばらとてむかしより
千種もかじけてそだちかね土色黒ふし
ておかしき氣色なり

○宇津宮

日光山の御成道有ひだりのかたに山城の跡有是宇津宮の弥三郎旧跡也此所の町並都の風俗にすこしもかはらず男女ともにしとやかなり東に稀なる大所物の自由も爰也名物の縮布出る

○宇津明神

山陰に立せ給ふ松村立て年をふりし宮居也

○雀の宮

里はづれに小笹のしげる中にちいさき宮の立給ふ何の子細もなし村雀のねぐらなるがゆへにかくは書付し

○石橋

此宿に御殿有

○大平権現

松杉のしげれる山陰に立せ給ふ海道の
みぎのかたなり

○小金井

○新田

此里よりひだりのかたに筑波山見ゆる
水無能川も此麓也霞の山もはるかに高
し

○筑波山

つくはねのみねより落る皆野川戀そ積て淵と成ける
櫻花咲やしぬらんつくは山このもかのもにあまる白雲

○霞山

ほのかにもしらせてし哉東なる霞の浦の蜑のもしほ火
今は早心筑波の山見れは梢よりこそ色かはりけれ

○小山

此所に山城の跡有むかし建仁二年に城の長茂京都にて謀反小山朝政是を討て後此國に住城の所也

○三棟明神

山陰に立せ給ふ此麓に日光の還御道筋なりひがしの方に鹿嶋見ゆる櫻川磯邊寺も此方也

○鹿嶋宮

當社春日明神志賀明神と一体分身也告の明神も近し

常陸なるかしまの宮の宮柱なを万代を君か爲とか

丸雪ふるかしまの崎の浪高み過てや行ん戀しき物を

○眞間田

曇なき影も替らす昔見しまゝの入江の秋の夜の月

○野木

卷二 二十二

○古賀

○栗橋渡

御關所はこねのごとく手形御改の所也
舟わたし有

○中田

是より東はるかに高き山陰有國府臺といへり昔北条氏綱里見義弘と戰し所也景行天皇の御時日本尊東夷征伐の爲に關東に御下向ありて御歸陣の時此市川の淺深をしりたまはず猶豫したまふ所に鵠鳥一飛きたりて瀬ふみして此國府臺に上り尊に向ひける尊御感ありて汝に此山をとらすべし永代此所の主とな[illegible]より鵠臺とあらたむ

○幸手

○榾戸

是よりひかし南のかたにあたり勝鹿の浦も見へわたりぬ

○勝鹿浦

かつしかのうらまの浪の打つけに見そめし人の戀しきやなぞ

勝鹿や昔のまゝの継はしを忘れてわたる春霞哉

○賀須か部

是よりひかしに野原ありしが曠〳〵して里もなく森もなく川もなく月の入べき山もなく爰に毛色さま〴〵の野馬あり南のかたの浦邊を

○庐崎

たのめてもこぬみの濱の沖津風何いほ崎の松にふくらん

○越賀部

此所に御殿有

○草賀

是よりにしのかたに里ありてすこしの宮井有爰をしのぶの森といへり同し野つゞきに萩はらのいとかすかに咲殘れり

○忍ぶの岡

涼しさをなしの葉風に先立て忍ふの森に秋やきぬらん

○千手

○待乳山

待ち山おろす嵐や寒からん角田川原に千鳥鳴なり

誰にかもやどりをとはん待乳山夕越行はあふ人もなし

爰につゞきて岡野邊に見へわたる

○金龍山

○小塚原　○淺茅原　○鏡が池

○隅田川

梅若丸の塚印柳櫻を今に寺の前に殘し
ぬむかし男の讀し都鳥此流今に
名にしをはゝいざ事とはん都鳥我思ふ人は有やなしやと
水莖の跡かき流す角田川言傳やらん人もとひこす

○三野

遊女の住める里也名所の野三つ有とて
此名のおもしろき爰の太夫のゆかり花
紫高尾此色に迷ひ身は煙のはしば日本
堤衣紋坂大門口まで見へ渡る

○駒形堂

爰の氣色唐人もほめし所也

○東叡山

寛永寺と号す天台宗也黒門の前より並
木櫻江戸の花見爰也

○下谷
天神のやしろ立せ給ふ此あたりを

○向の岡
武蔵野の向の岡の草なれは根をたつねても哀とそ思ふ

○淺草寺
當寺は仁皇三十四代推古天皇の御宇に
建立本尊は聖觀音關東に冣初の伽藍也

○千壽橋

○三十三間堂
稽古矢数の爲に都を爰に移す

○本願寺

○御米藏

○鳥越橋
是よりひたりかたの川向ひ本庄人家立
つゞき安楽寺の天神立給ふ

むさし野に堀かね井も有物を嬉しく水の近付にける

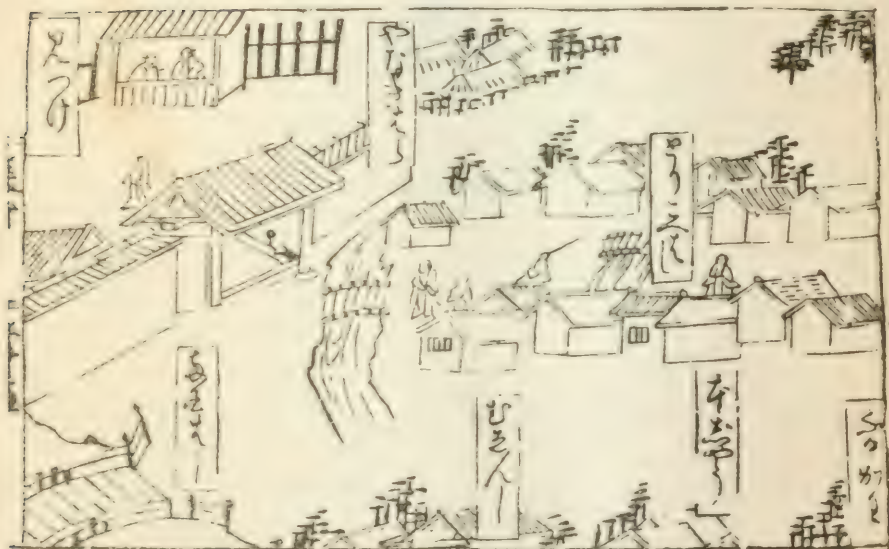
○本庄　○深川　○永代嶋

○兩國橋

武藏下總の堺川といへり此所の進興舟九間一丸川武丸金銀ちりはめし借ふね有浪靜に笛たいこ水鳥もおどろかぬ此御時なり夏は凉み秋は紅葉に花火夜のよし野の詠め爰ぞかし

○柳原

○淺草見付

是より江戸の町筋萬人の通り町の繁昌馬のり物車は道に引もかぎらす

一目玉鉾巻二

○江戸

ちとせの松風枝をならさす紅葉山に千秋の色まさりて久かたの日影にしの丸雲しつかに諸大名の屋形は雪の曙のごとし月むさし野に廣く淸なれ春は花の朝げしきかはらぬ常盤ばし大下馬の出仕傘是も袋に治まれる時津國

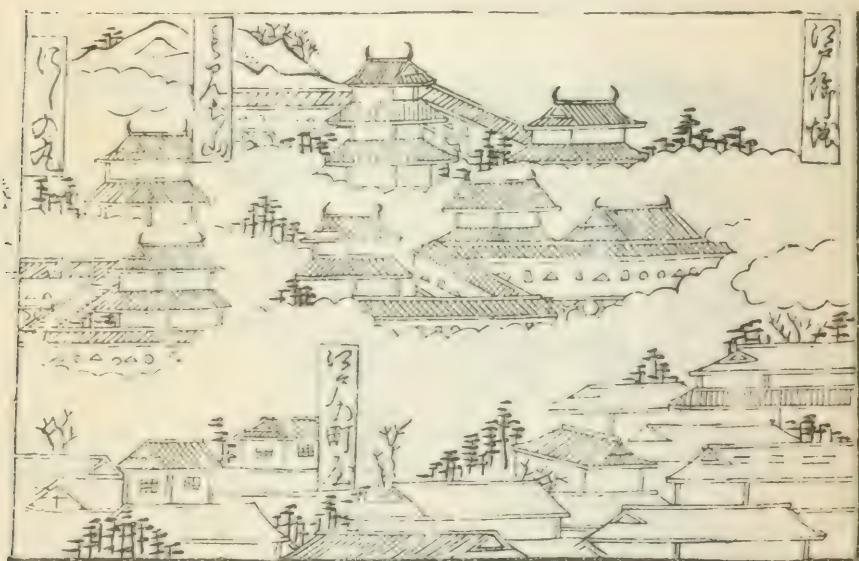
○御本丸

○西の丸

○紅葉山

むさしの國玉川といへるは水道のきよき流れの多波川の上となん

○玉川

多摩川のさらす細布さら〳〵に昔の人の戀しきやなそ

日本橋ときめき渡り櫻田の中松平右衛
門佐殿松平安藝守殿屋敷のほとりを

○霞ノ關

春くるゝ行衛何國しらねとも空に霞の關やすえへし

○山王の宮　社領六百石

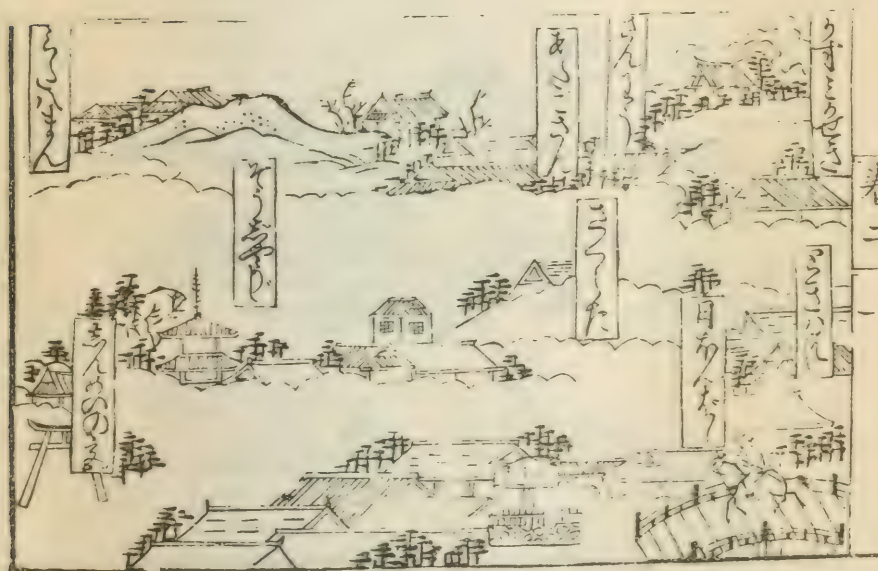
○愛宕山

○增上寺　寺領五千石

當時は酉譽上人草創三緣山廣度院とい
へり酉譽は應永二十四年七月十八日に
迁化

○神明宮

是よりにしのかたに名所かず〳〵爰に
しるがたし西の久保といふ所に

○三田八幡

金椙といふ所をすぎて芝の町はづれに
札の辻此ひかしの濱邊に獵人の住めり
芝肴とて磯物是より出ける西に牛つか
ふ車宿

○大佛　長一丈の立像也

是は大原の端元の弟子端性と申歸命山
の木食沙門のつくり給ふ石像の二王門
あり

○琰魔堂

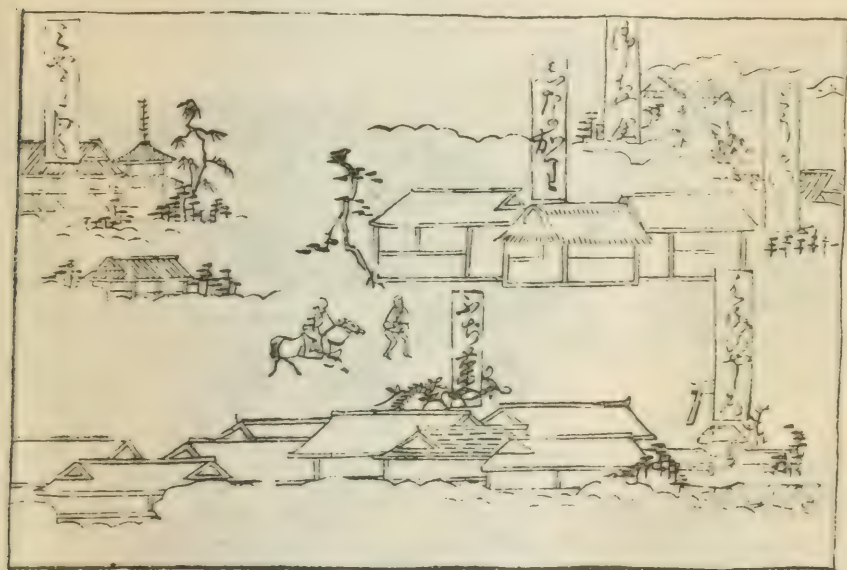
太子堂庚申堂立給ふ是より左のかたは
海ばた石垣つゞきて右の岡野邊松しけ
り所を高繩といへりなを岡山越てにし
南のかたに高岡立給ふ

○目黒不動　寺領三十石

○東海寺
むかし宅庵和尚のすみ給ひし寺なりしが迁化の後紫野大徳寺の内より輪番持也

○御茶屋

○妙國寺
當時は法花宗也駿河大納言殿のに立られし御成御門を爰にひかれ金銀の彫物ひかりかゝやきしが是もむかしになりぬ濱のかたに藤の茶屋とて軒端に花を咲せてかけ作り殊に夏は爰に寄なん

○品川
此浦より名物の苔出けるちかき比までは一夜妻の色作りなして人を留ける今其小哥の声も絶し濱つたひに行てにし

のかたに荒川といふ里あり爰を武蔵野
とて果しもなき野原也

○秩父山

行末は空もひとつのむさし野に草の原より出る月影

○鈴の森

むかし欽明天皇の御宇に始て宇佐の宮
にて鈴の御前有是より日本に神人用ひ
ける當社もその祝へり又鈴石とて形丸
うしてころばかせばおのづから鈴の音
をなす

○六郷里

爰に大橋かゝれり長サ百弐十間右のか
たに池上の道筋あり左のかたに猪田村
とて鍛師の住ける所也此川に名物の鮎
あり

それより右の野すゑをはるかに行ば流れしつかなる細川有岸添に原田の里

○入間川

さりともとたのむの鴈を頼にて入間の里にけふそ入ぬる

○三好野

我方によるとなくなるみよしのゝ田面の鴈をいつか忘れん

○川崎

ひだりのかたに大師川原といへる里ありむかし弘法だいし入唐したまひみつから御影を作り流沙川にながし給ふに年ふりて後此浦に流れ獵師引あげぬ木像に牡蛎のから取つき今におがまれ給ふ

○鶴見橋

海道の右のかたの見渡しに本木といへる里ありつゝきて市場の町はづれより法花宗の本山三所のうち池上右に見へける

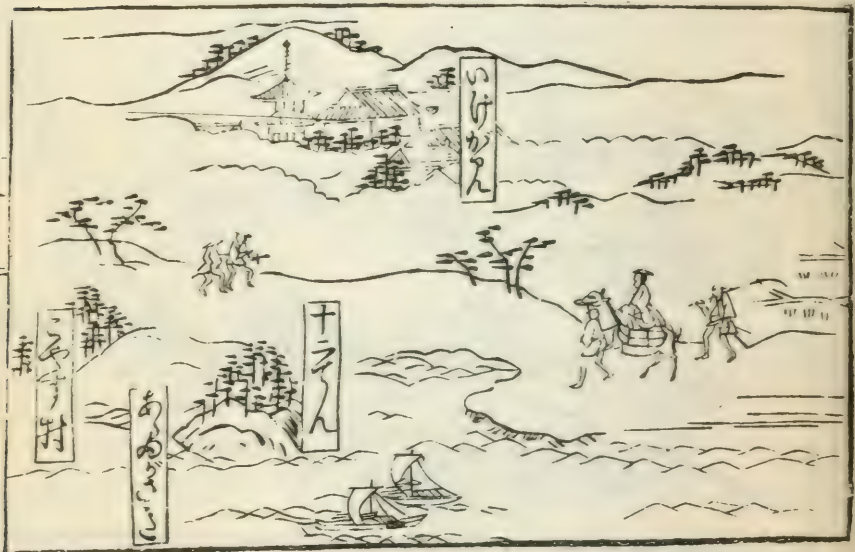
○池上　寺領百石

本門寺は後小松院御宇に日輪上人の開基の地なり延文四年四月四日に迁化し給ふ

○十二天

是より濱邊にこやすなどいひて浦〳〵嶋〳〵見えわたりて氣色おもしろき所なり此礒ばたに花貝わすれ貝さま〳〵の玉拾ふも目にめづらしき

○荒藺崎

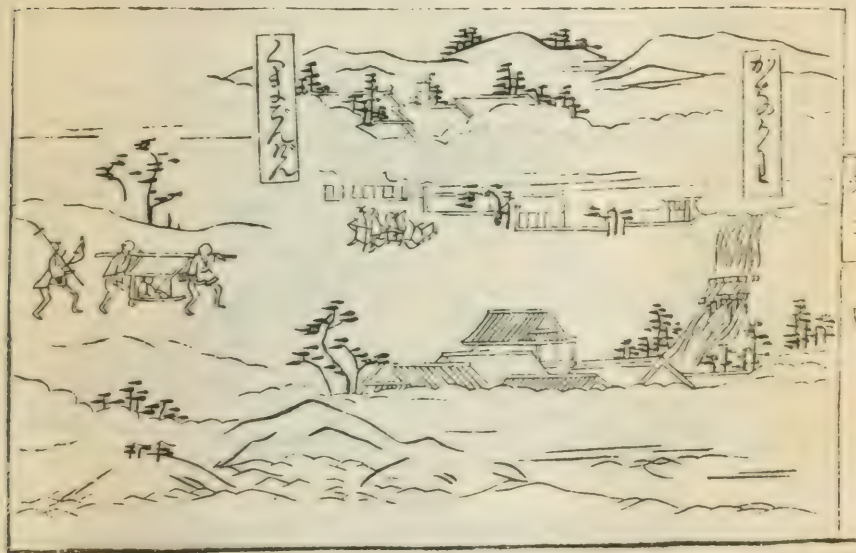
白波のあらゐの崎の礒馴松替らぬ色の人そつれなき

金川

此宿にもむかしは風流女ありてたはふれのかり枕に旅のくたふれをたすけし所也右のかたの岡に

○熊野權現

それより横道筋の右のかたに餅屋の軒の下に富士の人穴なりといひ傳へし岩穴ふたつあり

○富士人穴

是はむかし建仁三年六月に大將源頼家公仁田四郎忠常をめして此岩穴のかきりを見てまいれとの仰によつて忠常入て地獄をめくりて淺間の權現にあいたてまつりし事東鑑に詳かなり此權現は

木花開姫と申奉りしが皇孫のみことに嫁して彦火火出見の尊火酢芹の尊兄弟の御神を一同に産給ひしと也國府の淺間宮は延喜年中に信濃の國あさまを移し給ふ此ゆへに山中の神を本宮とあがめ府中宮を新宮と申奉る

○嵐坂

此所は浦風のかよひきて諸木の枝なりやむ事なし里の名もひとしほ耳に涼しき南請の茶屋あり是よりひだりのかた細道鎌倉へのかよひ也右はるに

○狭山

秋風になひく狭山の葛かつらくるしや心うらみ乗つゝ

○新町

此所むかしは帷子といへる宿つゞきなりしをひとつにしてほとかやとあらたまりける町はづれ右のかたに武藏相模の堺目あり

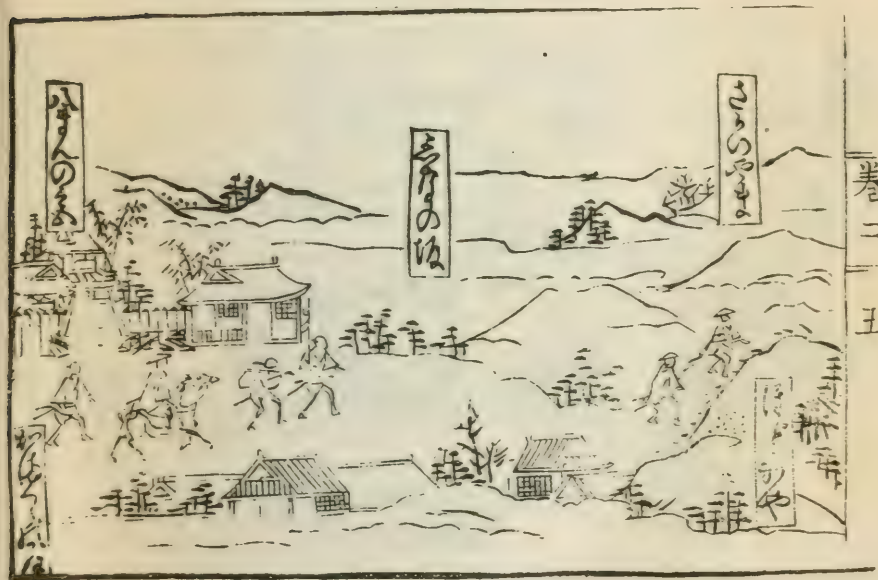
○堺山

是よりひたりのかたの浦邊に松しげり岡野ありよろきの濱ともいへり

○古世路木森

思事待に月日はこよろぎの礒にや出てけふは恨みん

○信濃坂

吉田町はづれに橋あり左の田の中に鶴が岡への道すじあり山陰に初瀬の觀音おがまれ給ふ

○戸塚

右のかたに八幡宮の立せ給ふ松山の中
に時宗寺あり

○原宿町

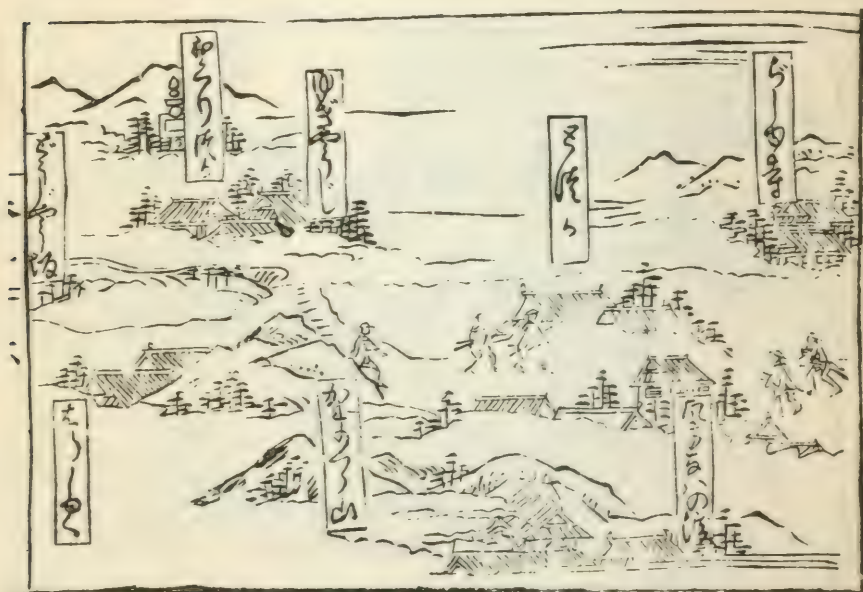
此里はかし馬のをゝき所也是より左の
山越に玉繩の城見わたしに若宮山ちか
し

○鎌倉山

宮柱ふとしく立て萬代に今そ榮んかまくらの山

並松の山中をこして道場坂の右のかた
はやし中に

○遊行寺

開山一遍上人は伊豫國河野通信の弟也
後宇多院建治元年に熊野神勅をうけて
爰に時宗寺を立給ふ正應二年八月十日
に迁化

此寺に小栗判官の塚あり其奥に横山の
塚とてむかしを殘しける

○藤沢

是より左のかたの海に

○江嶋

昔北条四郎時政は桓武天皇十三代平時方の男也此弁天に七日籠りて子孫を祈るに七代天下の執權に立んと夢の告に弐丈斗の大蛇うろこ三牧殘せりそれより鱗形の紋也建保四年正月に神詫あり

江の嶋やさして汐路に跡たるゝ神はちかひの深き成へし

叟につゞきて高砂姥が嶋あはひの名物なり右のかたに白籏といふ山里有

○大山　寺領三百石

當時は眞言也後花園院永享四年に建立

ありし所也別當を八大坊といへり

○馬入

舟わたしの所也御上洛の時は橋を掛しとなり是より南のかたの濱つゞきを浪の瀬川といへる

○手本浦

流て越手本の浦のかひあらは千鳥の跡を絶すとはなん

町はづれ右のかたの山陰に松のむら立て白瀬といへる里有是は源義經同弁慶二人の首高館より鎌倉に上せけるに夜中に此浦に流きたりて龜のせなかにならび声を出して笑ひしを里人此所に埋みし武藏坊が塚には今に松の風のみ残りて物淋し

○平塚

宿はつれに權現の立せ給ふ

○高麗寺 寺領百石

此寺は天台宗なり是より山水の清き流れ川

○花水橋

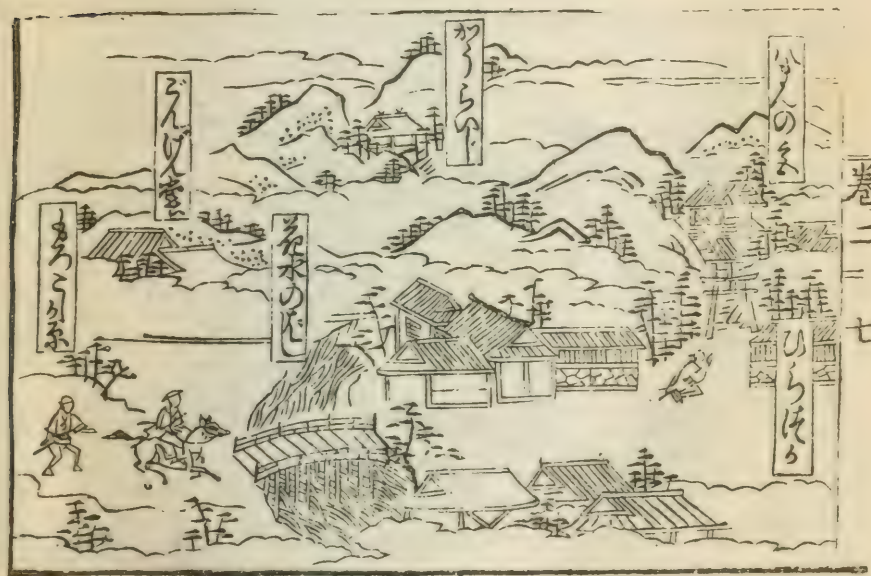
右に山〳〵ひだりに濱邊氣色もひとしほおもしろき眞砂地かけ浪おのづからの瀑石玉にすらせる大礒石爰の事也

○唐土原

名にしおはゝ虎やふすらん東路に在といふなる唐土か原

十間坂を越て山の陰に權現の堂あり曾我祐成うたれて後虎御ぜん出家せし寺とて名のみ今に殘りし

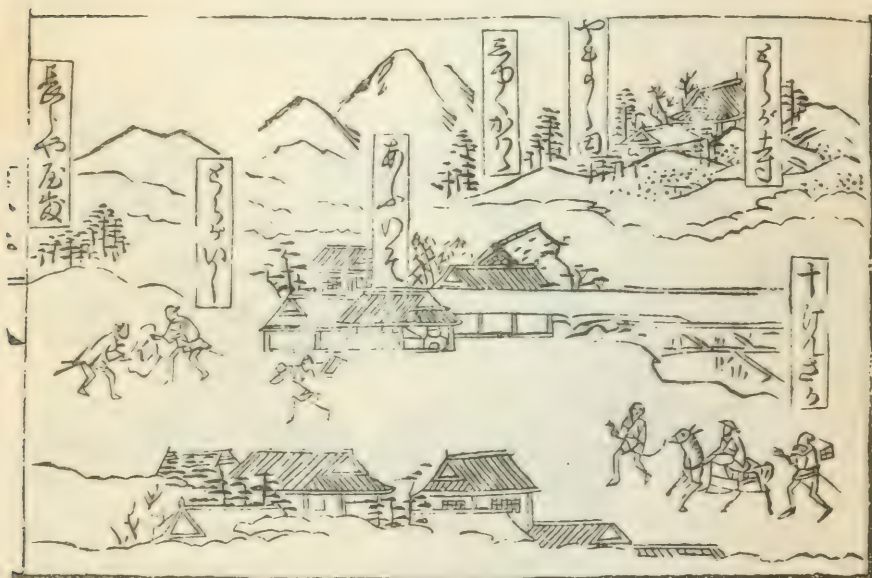
○山下田　○宿川原

○大礒

長者屋しきとてむかしを石居に残せり此町はづれ虎がいしとて紫たちてなめらかなるが旅人くたふれし片手に力持をしけるに大かたの人はあげがたし是より並松つゞきて詠めにあかぬ里の屋ひだりのかたに岸根水絶〳〵に浮藻の花もかれ〳〵になりて物のあはれ見えし

松の木立浪越岩のけしき迄けに見所は大礒のはま

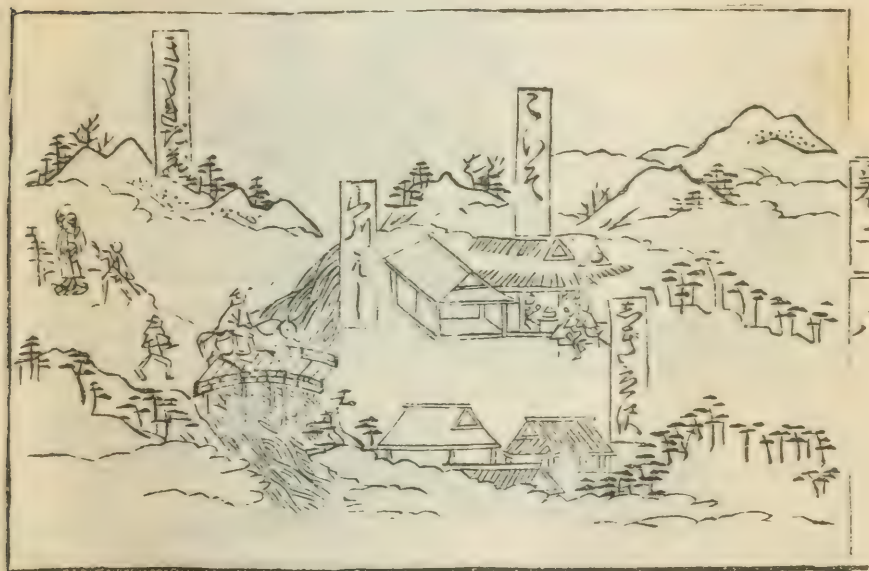
○鴫立沢

心なき身にも哀はしられけり鴫立沢の秋の夕暮

すこし松原の石道をすぎ行ばまばらに里の見へし所を

○小磯

此町はづれに山川橋をわたりて切通し石地藏の立給ふ是はむかし夜道を飛脚の通りしが此形をおそれて切けるとて今に袈裟がけにつぎあはせり

○府中

是は相模の國の府也此里町をすこし出はなれて右のかたに岡山六社の立せ給ふそれより右の山本にかうしんの堂あり又右の畠中に年ふりし並木の松の兩方にうはりし是を白影の馬場とて小栗判官の鬼鹿毛をせめ給ひし跡也又藏王の堂も立給ふ

○梅沢

此里岡松のかけに左のかたは海を見おろし茶屋あり筋鰹といへる魚あり町の入口に

○東大明神

それより關本といふ所に山の下道に寺見へける

○宗勝寺

是より海道右のかたにひさしき里〳〵見えつゞきし爰を曾我の祐成時宗がふる里とて今に其名を殘してゆかりのものも住ける

○曾我里　○山野内　○中村

道筋は磯馴松のはやしひたりのかたに浦浪うちつゝてゆくに片里をすぎて

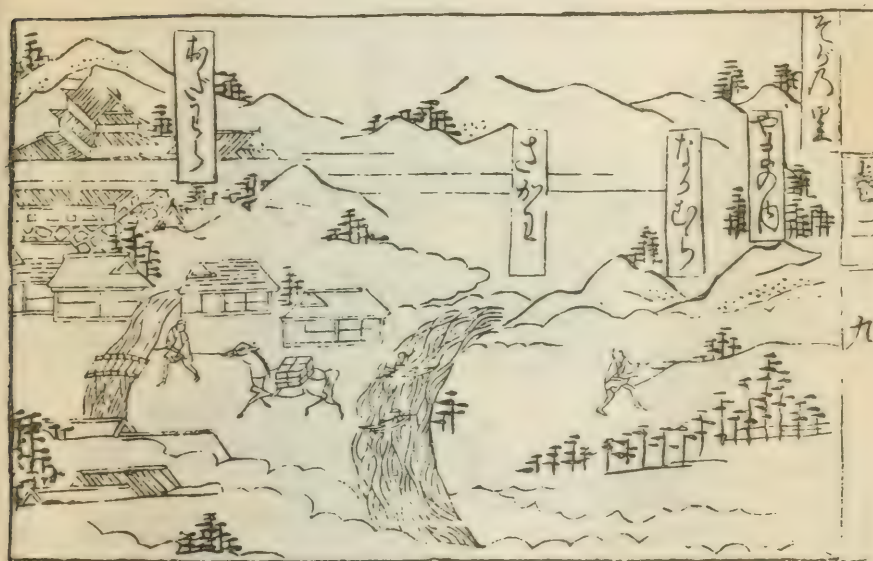
○早川

右は山水ひたりは海にちかし歩行わたりして程なく一色の里を過て

○小田原　　大久保加賀守殿城下

此宿の右のかたに小田陳の時の戦場残れり町の中に筋違橋を越て名物の外郎屋甲かね樫木の足駄夢想枕青石鰒さま〲の物出ける町はづれ心見の坂に地藏堂あり笠松ひだりのかたに椙山ふかし

○石垣山

是は太閤秀吉公氏直むかひ陳を取給ひし所也

玉笹を分のぼれば山川音なして右のかたの里を湯沢とて諸病人の入所也

○湯本

此里にむかし連歌師宗祇の塚迚岩の陰道に苔の下露残れり地蔵堂有すゞも沢の茶屋大沢を越て

○二子山

形其まゝ名を見せける畑茶屋過てさいかち坂樫木坂左右岩組けはしき難所也白水坂本箱根

○権現堂　社領弐百石

此東福寺は孝謙天皇天平寳字年中に満月上人開基也實物さまく有友切丸弐尺五寸蔦唐草の拵へ長闌の太刀三尺三

寸祐成十番切の鍛也赤木のさすが有時
宗筆跡有

○箱根山

こね山薄紫の壺すみれ二しほ三しほ誰か染けん

○湖水

元明天皇和銅七年に此湖はじめて見出す尉が鵜につゞきて磯邊に際の川原ありて物かなし相模伊豆の堺有

○山中

此里はづれに矢立の椙有右のかたに一柳殿の石塔有ひたりのかたに赤沢山見ゆる右の山越に小久井森ちかし長坂大しぐれ塚わら三津屋しだひにくだり坂也枯木坂石はら坂も難所なり

由留木の橋などいへる名所右のかたの
沢山なり坂下に岩屋あり

○初音原

此野にして鶯なきそめけるとなり左の
海越に大嶋小嶋見ゆる

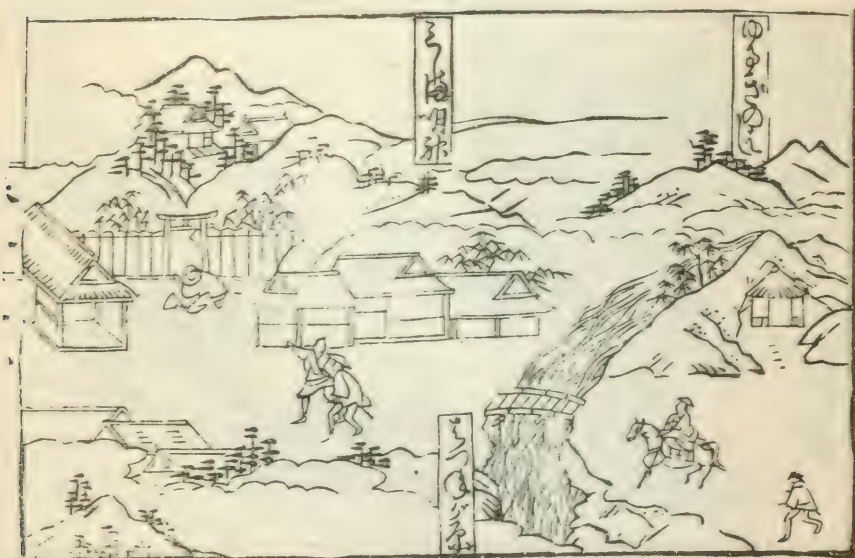
○伊豆高根

千早振いつのお山の玉椿八百万代も色はかわらし

○三嶋

右のかたに明神の社あり大山祇の神是
也崇神天皇十七年に鎮座したまふ治承
四年十月廿一日に頼朝参詣あつて社内
を奇進したまふ御池に鰻有左のかたの
浦邊に温泉あり此所を

○走湯

是は仁明天皇延暦弐年に始て宿はつれ

ひたりのかたに御殿あり右の岸に

○千貫樋

是は伊豆駿河兩國の堺目なり此水日照にも絶る事なし

○黄瀬川

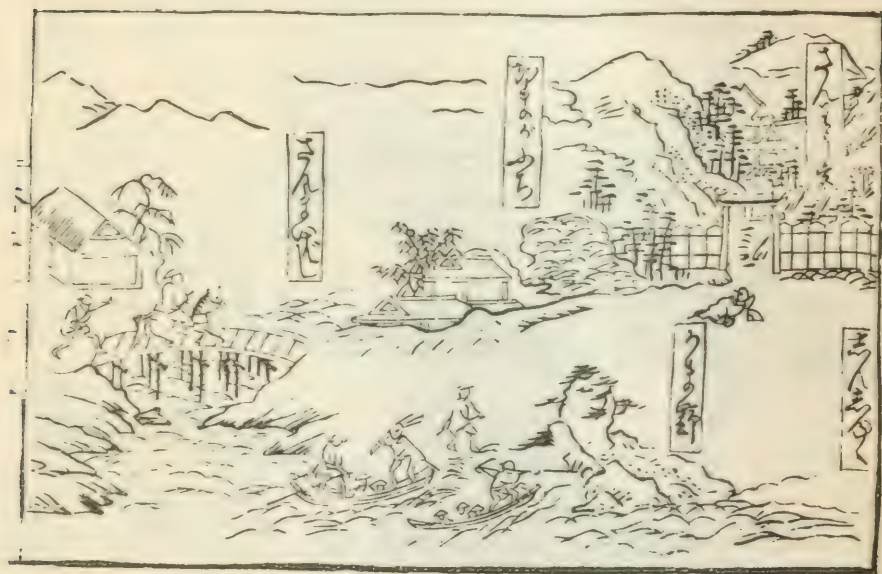
むかし頼朝富士の御狩の時此里の長が娘に龜鶴とて時勢をうたへる遊女なりしが御酒宴に出ける世にかくれもなき美形なりと申傳へり

○車返里

是より樋口といへる里を過て新宿を越て釜野といふ所に御狩の時のかまとてありしか萬かはりて野は池となり釜が淵といふ

○山王宮
此林のうちにも頼朝かりばの大釜今に有ひたりの濱邊也是より江尻への横渡し七里也むつかしき所なり乘まじき海上といへり

○三牧橋
古代は此所浅き沢にして板なげわたして其名を今は大橋となれり宿中に有

○沼津
此宿舟つきなればはんしやうの所なりむかし名取の遊女も旅人のうきを晴させけるわかさ若松といへり是兄弟の美女と見し人語り聞傳へし

町の出はなれに右のかたにしげり木の
はやしを

○千本松原

是よりひだりの野中に六代御前の石
塔あり此六代は平家の何がし維盛の御
子なりしが北条四良時政にとらはれ鎌
倉に引かれしを高雄の文學にたすけら
れしが其後又此所にしてうたれ給ひし
古塚也

竈町すわまち松長町をすぎて竈が原と
て名物の糀焼あり

○原

此右のかた田の中に小嶋ありて若松む
ら立てその邊皆沼なり高水にも此嶋わ
すかなれどもしすまずして浮けり

○浮嶋原

白砂のふしの高根に月寒て氷をしける浮嶋か原

東路や枯野の薄風分て袖に浪越浮嶋か原

○對面松原

うき嶋のつゝき也是平家退治の時義經奥刕より治承三年十一月に此所にして頼朝公にためんありしといへり

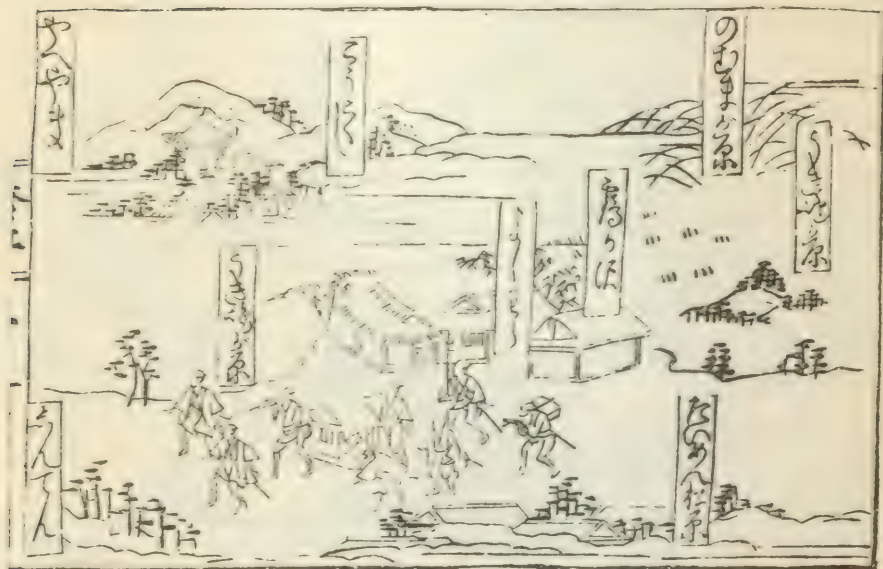
ひだりのかた山の根本に見へける

○江國寺

○鶴が沢

此沼にふだん丹鳥舞あそびし是は頼朝はなちおかれし

○八重山

更に今都も戀し足柄の關の八重山猶へたても

本吉原を過て足柄の明神立せ給ふ左に
高根見へし

○足柄山

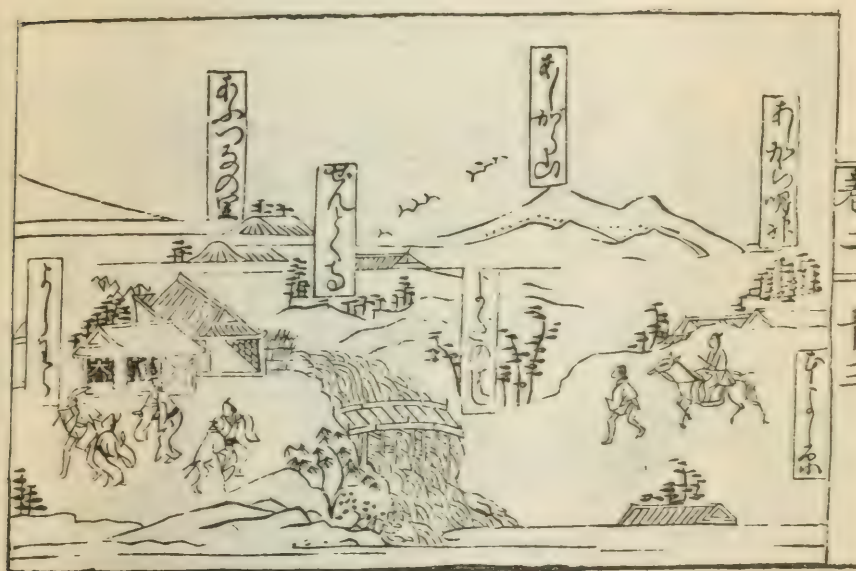
行人の心留すは足柄の關守神もかひやなからん

与田の橋を渡りて善徳寺の御殿への道
有名物の酢あり

○大縄里

爰にむかし竹取の翁すまれし跡也ひと
りの娘ありかくや姫といへり此事たけ
とり物語にしるせり桓武天皇延暦年中
の事なり

○富士山

孝靈天皇五年に始て駿河の國にあらは
る山の上の社は平城天皇大同元年に建
立あつて本宮となし給へり徐福といへ

るもの不老不死の藥をもとめて此山にとゞまり是蓬萊山の詠め嶽は八葉に分て芙蓉を削がごとし三國無双の美山也

時しらぬ山ふしの根いつとてか鹿子またらに雪のふるらん

目に掛て幾日成ぬ東路や三國をさかふふしの芝山

朝日さす高根のみゆき空晴て立もおよばぬふしの川音

○鳴沢

煙立思ひも下や氷るらん冨士の鳴沢音むせふ也

飛蛍思ひはふしと鳴沢に移る影こそもへはもゆらめ

麓に太五といへる里有山の根に祐成時宗を荒人神と建久年中に頼朝勧請したまふ

○兄弟宮

○鵜飼川

是より河田の郷市場といふ里をすぎて

山川不断に高浪して岩に玉水をくだき
柵なし舟に竿さすもせはしき渡し也

○富士川

流てと思ひし物を富士川のいかさまにしてすます成けり

是よりひたりのかたの濱ちかくこいし
はら氣色おもしろき所を

○吹上濱

六本松とてむかし牛若丸あづまくたり
の時旅つかれにて休らひたまふ所なり
右のかた山陰に松のはやしのうちに御
殿あり

○神原

右のかた山ひたりは海邊里〳〵は獵師
のすめる所なり此浦に矢骸といへる魚
あかる也

○由井

町はづれ右に別明神立せ給ふ是よりひ
かしは大海にし峯つゞなり塩濱有

○田子浦

五月雨のふる江のむらの苫屋形軒迄かゝる田子の浦なみ
田篭の蟹の宿迄埋む富士の根の雪も一に冬はきにけり

○薩埵山

観應二年七月に足利尊氏直義兄弟合戦
ありし所也
親しらず子しらずとて浪うちきわの岩
組をむかしは旅人の難義

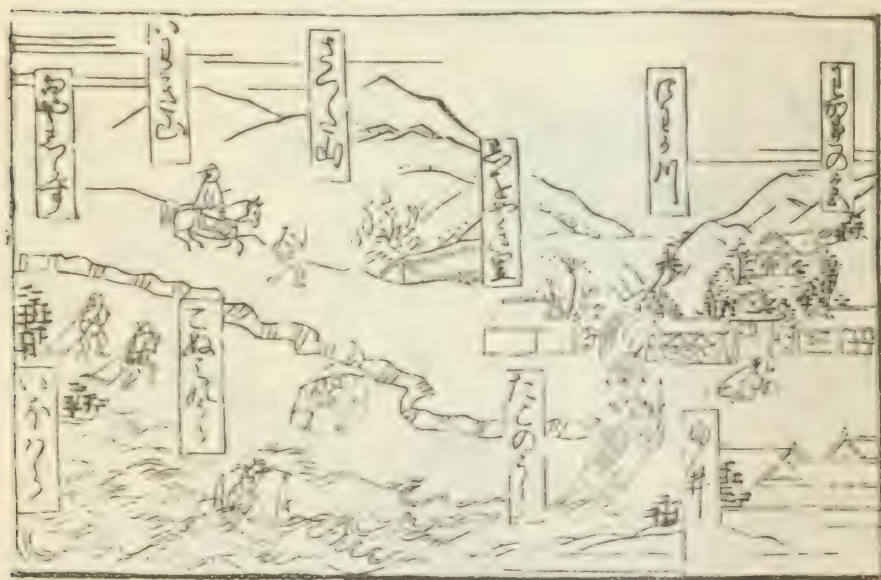
○磐城山

駒なつむいはきの山を越兼て人もこぬみの濱にかもねん

○廬原

清見潟関より外もいほはらの松こそ浦のへたて成けれ

○清見關

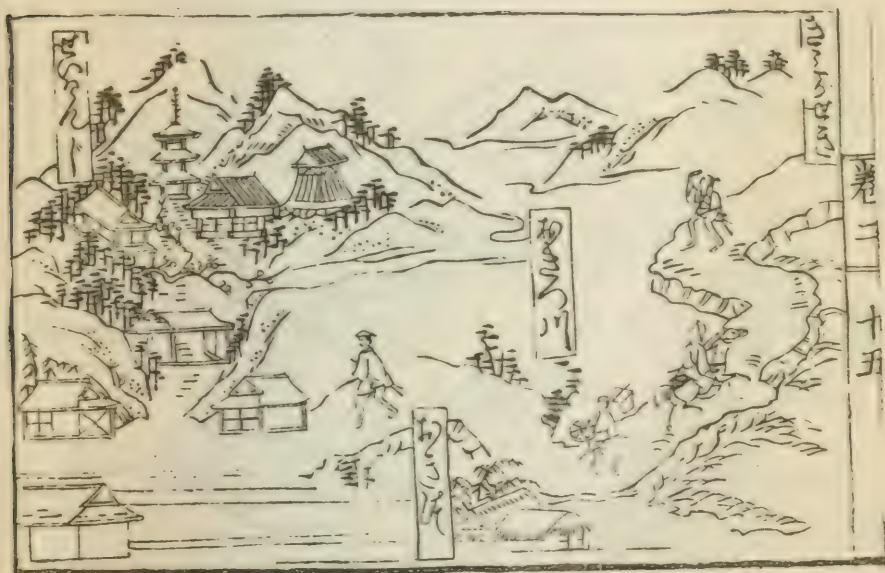
見し人の面影とめよ清見潟袖に關もる涙の通じ

清見潟關に留らて行舟は嵐のさそふ木葉成けり

古代は此峠に關ありしが桓武八年に絶けりくだれば岩のかげ道せはしく奥津川是より右のかたの山陰安部高丸謀反の時坂上田村丸の陳場といへり

○奥津

此所に藤の丸かうやく屋軒をならべて見へける萬によし

○清見寺

惠日山東福寺の爾長老聖一國師の弟子開聖といふ法師此寺をひらきはじめり巨鰲山清見寺といへり世にひゞき渡れる鐘の声寺前より美景見へわたる舟路

又あるまじ客殿方丈のこらず雪舟筆を
殘しぬ名木の梅是殊につねより色香ふ
かし

○伊原川

右の山下に伊原左衛門が城跡殘れりひ
たりのかた濱邊に小松有し

○有度濱

うとの濱に天の羽衣むかしきてふりけん袖やけふの祝
いつとなく駿河なるうと濱のうとくも人の成增る哉

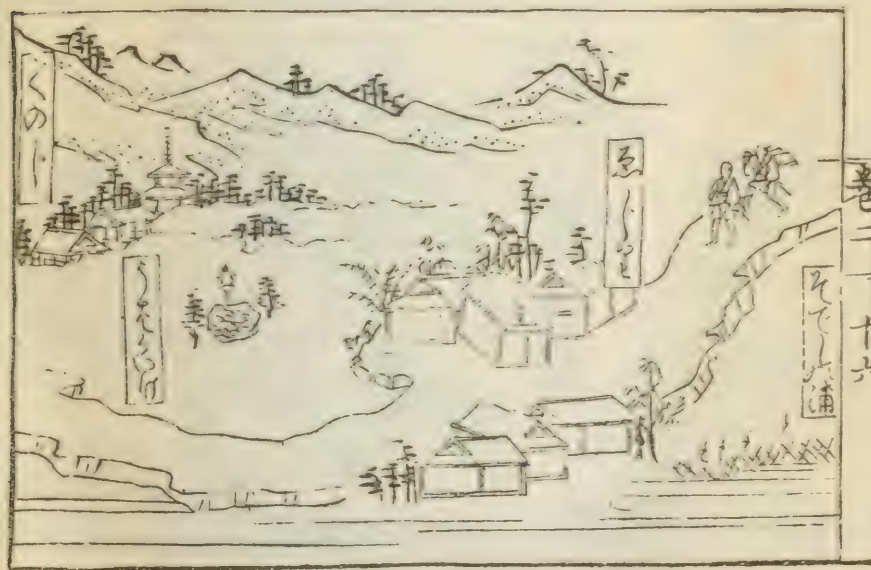
鱸嶋につゞきて天津おとめのはころも
掛の松とて年ふりし

○三保松原

淸見潟礒山本は暮初て入日殘れる三穗の松原
風はやみ三保の浦はをこく舟の舟人さはく浪立らしも
忘すよ淸見か關の波間より霞て見へし三保の松原

○袖師浦
から衣袖師の浦のうつせ貝むなしき戀に年のへぬらん
同し名所出雲にも見へけり

○江尻
此宿舟つきにしてよしむかし爰に若狭若松といへる兄弟の遊女有右の野中に姥が池とて人のなかろ戸につきて泡立ておそろしをのかたにかう入いふへし

○久能山
此知滿寺は聖武天皇の御宇に行基山に入て千手觀音の像を作り給ふ爰を補陁落山ともいへり當寺堯弁法師は天台の學者也聖一國師はしめの師也後に聖一は東福寺に開山となり給ふ唐土より渡

せし瑪瑙の羯鼓を此寺におくられける
又源伊豫守頼義薄墨といふ笛を寄進し
給ふ

○狐崎

野つゞきて岡松のくろみし所なり是よ
り右の方田の上といふ山寺に梶原景時
の影有よし田長沼まがりかねといふ里
〳〵を過て

○府中

町の右のかたに御城有屋形つゞきて山
〳〵に寺社多しにしの山陰に

○淺間宮

此社は孝靈天皇の御宇に出現是富士大
權現也此所に移させ給ひ駿河國一の宮
なり
桑竹細工人紙子さま〳〵名物也

安部川の上に松のしげりたるすこしの
山の見へける凩の森是也

○木枯森

消えぬ移ふ人の秋の色に身を凩の森の下露

右のかたの峯くろみたる所はしづはた
山なり見渡し

○志豆機山

今朝みれは霞の衣織掛てしつはた山は春はきにけり

誰ためこしつはた山の永日に声のあやをる春の鶯

○手越里

むかし重衡鎌倉に取われし時頼朝公あ
はれみ給ひ千寿をつかはされし其親の
里手越の長者の跡とて酒屋して有

○鞠子

○小笹山

連歌師宗祇の住給ひし跡とて有此山川

より盆山の黒石出けるそれより岩根道
を行に笹の屋立つゞきて賤の仕業には
やさしくも十團子を賣声もおかし

○釘無堂

是はむかし飛彈の工が作れり地藏立給
ふけはしき谷陰を行に

○宇津山

旅ねする夢路はゆるせうつの山關とは關す守人もなし
茂りあふ蔦も紅葉も紅葉して木陰秋なる宇津の山こへ
駿河なる宇津山への現にも夢にも人にあはぬ成けり

いつれ蔦の細道ひとしほ淋しき所也業
平都おもはれし事も旅ごとに思ひ出さ
るゝ山路也
又坂のおりくちにも地藏堂あり今は馬
さへ自由の道となれり

息つぎの清水有

○岡部

此宿の右のかたに松はやし物ふりて社
を立置ぬ是は昔日岡部六弥太を祝ひ篭
しといへりそれより右の野中に茂り丸
山殊勝にそのめぐりは池にておく深に
おがまれ給ふ

○八幡宮

かり宿町白子町を越てひだりのかたに
見へける

○田中城

是より並木の松原をすきて程なく

○藤枝

此所は海邊ちかし魚いきてはたらく所

也町出はなれに砂川をわたりて右のかたに

○烏帽子山

そのまゝ山の形立ゑぼしのことし是より小松いはらを右のかたはるかに嶋田が淵とて丸池有むかし執心ふかき女の人をうらみ身をなげしよりいひならはせり此女姿を作り髪の結振目立てそれより世に嶋田曲といへり

○瀬戸

此里に染飯とてくちなしにて黄色になし家ことに是を賣けるはじめわすかなる事なりしにいつとなく所の名物とはなりける

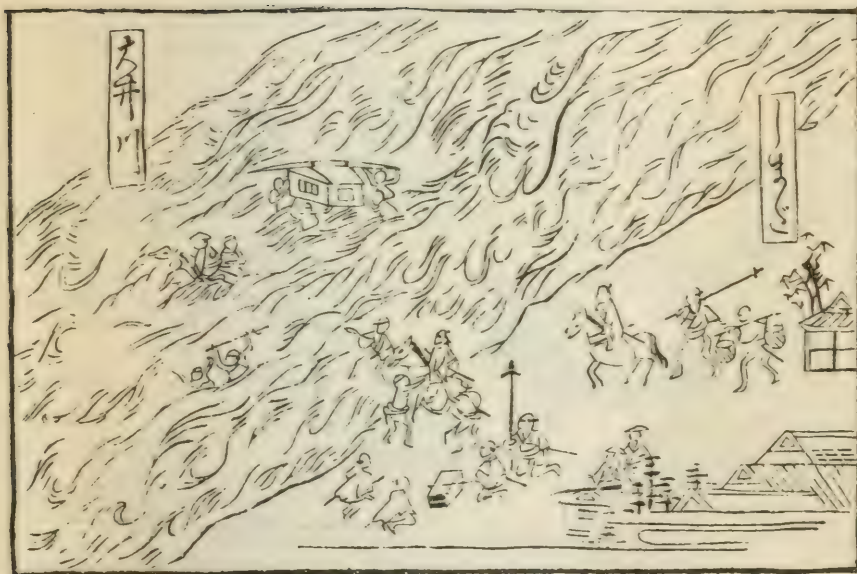
○嶋田

此宿の中より石道あらし川原茱萸の木しげれり

○大井川

そも〳〵此川日本第一の流れ北の諸山よりひとつに落合不斷に濁りて浪あらく底は栗石こけやむ事なし南に海近し高水にわたるべき所にあらず常にも川越なくては及がたし東海道ひとつの難所也

思ひ出る都のことは大井河幾せの石の数も及はし

巻二　十九

一目玉鉾巻三

大堰川は駿河遠江の國境也是より山道
けはし

○金谷

此南のかたに山たひらにしてこまつ村
立萩の折ふしに咲ける廣き原有

○引馬野

もろ人の衣にすらん梓弓引まの野への秋萩の花
ひくま野やかやか下なる思草又二心なしとしらすや
姫小松ひくまの野へに子日して手毎に千世をかさしつる哉
岩の陰道十六丁の坂をのぼれば里の屋
の淋しく立つゞきし所

○諏訪原町

此所より北はるに白雲に埋みて峯かさ
なりて見へし甲斐の白根なり

○雪見山

此麓里に北南に流れし川有

○菊川

わすれめや軒の萱まに雨もりて袖引かぬる菊川の宿

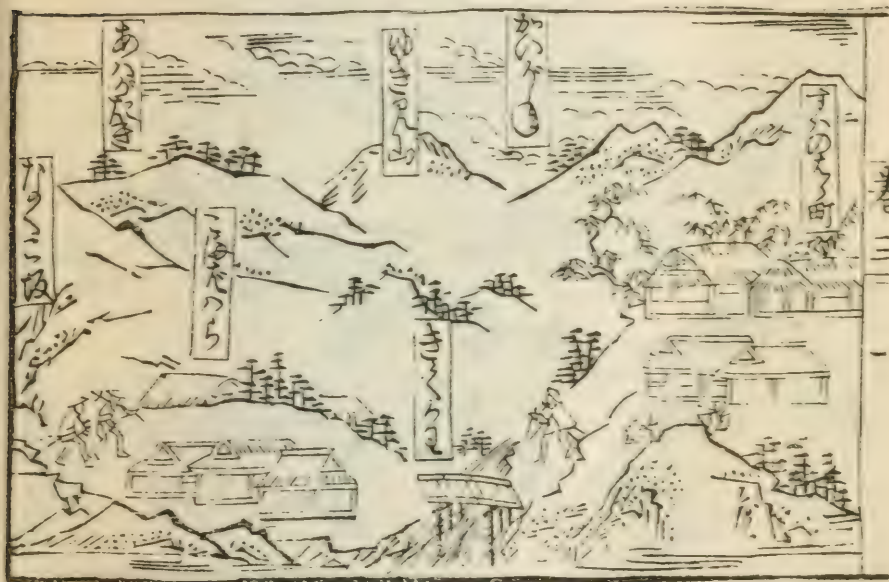
此所に矢の根鍛冶の名人有また切飴の名物有

○駒場原　○粟滝

○泣子坂

むかし此里の棧の女金谷の宿につまありて夜道を通ひしに山盗是をうちけるに此腹より男子の出生して後母のかたきをうちて其身は出家せしと語り傳へり

○燧坂

右のかたに御殿有並松としふりて物靜なる所也

○佐夜中山

待明すさよの中山中〳〵に一声つらき時鳥かな

旅衣夕霜さむき案のはのさやの中山嵐吹也

鳥のねを禁の里に聞捨て夜深く越る佐夜の中山

古代には此岑に蹊の戸ありし

○夜泣松

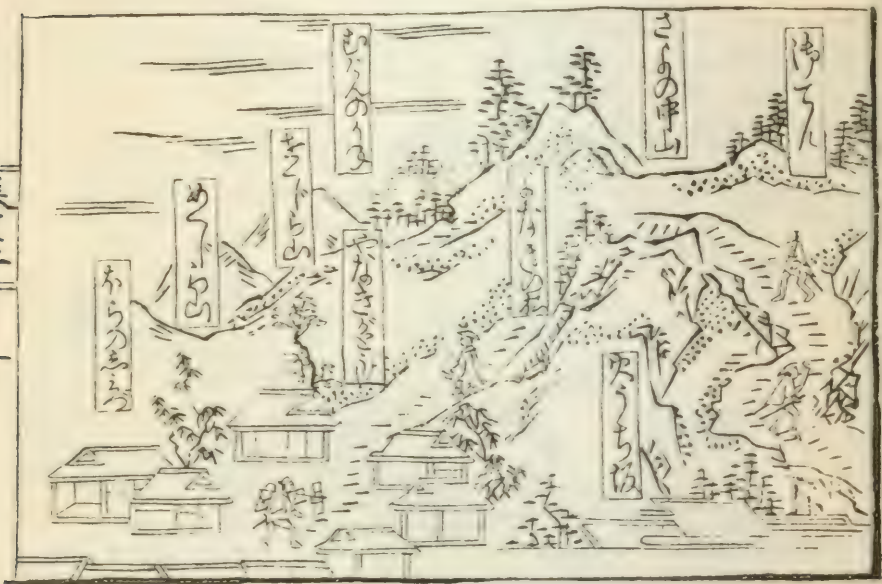
人の語り残せしは夜泣する子に此松を灯て見するにかならずやみぬるためし有て旅人切絶て今は蕪のみ残れり右のかたの山に

○観音寺

是に無間の鐘有毎年二月の初午に諸人参詣ける

○柳が峠　○男鯨山　○女鯢山

此山より碁石出る右かたに洞の清水とて潮汐のさし引有

○西坂

此麓に篭の屋軒をならべて賤の手業に蕨餅をせしが今は世にしれたる名物とはなりぬ

○八幡宮

此神前に銀杏の大木あり其むかしは姫が田といふ所といへり又ひだりのかたに鞍骨の池見ゆる影森といふ里近し

○長橋　○曽根川

○掛川　伊井伯耆守殿城下

此所より葛布出るひたりのかたに久能の城見ゆる里つゞき小松の長縄手平地也

○小池町　○鯖田村

○猿井田　○原川

○淺間宮

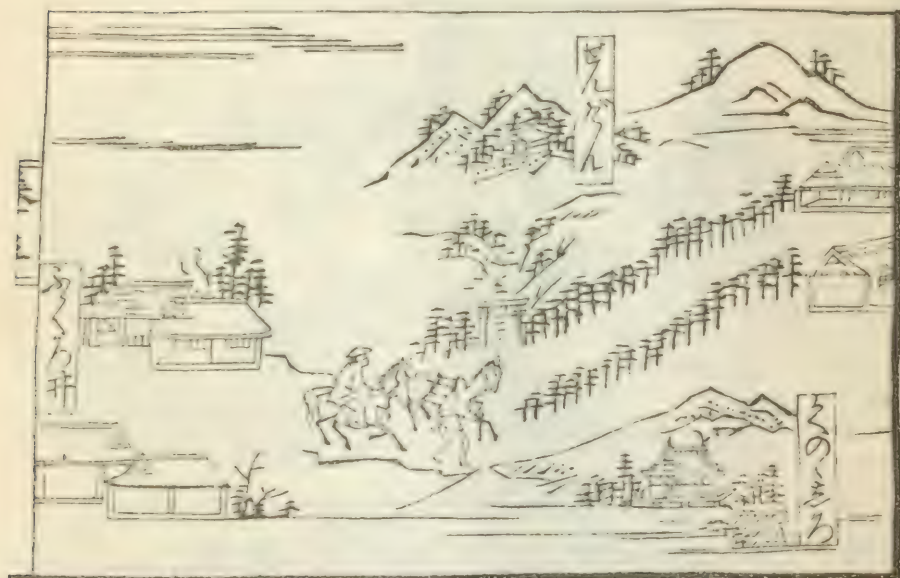
右の山陰に立せ給ふ大鳥居は海道に有

○不瀬川　○沓部村

此間何の名所もなく北のかたに松山つゞきて南のかた田畠里〳〵見へわたりぬ道ばたの家毎に小荷駄の馬道具の細工人あり又わらの中ぬきにして上草履のうつくしげなるを作り出せし

○袋井

此町の出はなれに土橋かゝれり松原をすこしすぎて熊野の權現の社有のかたに立せ給ふ

○木原里

○藤嶌町　○三上の坂

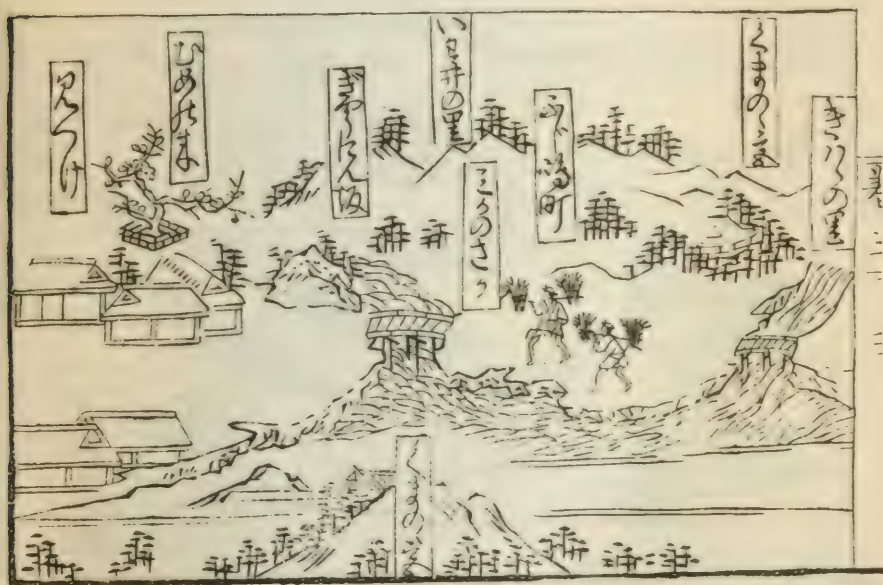
○祝の里

此野に源頼朝公鶴をはなち給ふとなん後代見し印にとて黄金の札を付られし其鳥今に住ける冨野にも此沙汰有

○行人坂

爰に月侍日侍の山伏觀進せしゆへにかくはいへり坂の上に温飩屋見せをならへて山家女の色つくりて往來の人を口ばやに小手まねきひとしほおかしさもましぬひだりのかたの森の中に熊野のごんげんまします

○見付

宿の軒端に春をかさねし梅有町の出は

なれに右のかたに三本松有鷺去のはし
長さ十二間有町の中右の松陰に

○惣社大明神　社領四十二石

左のかたに今野浦といふ溜池有同松林のに石の鳥居立

○八幡宮

宮のまへ饅頭の名物也左のかたに

○櫻池

昔日比叡山に肥後の阿闍梨源光法師手に一滴の水に身の影移し生なから大蛇と成此池に入給ふ

○中市場

此里に御殿有町中より左のかたへ横須賀に行道筋有町の出口に坂有是より松

陰の海道ゆけばそうか山の宮一色の里
大森村を過て堤つたひに

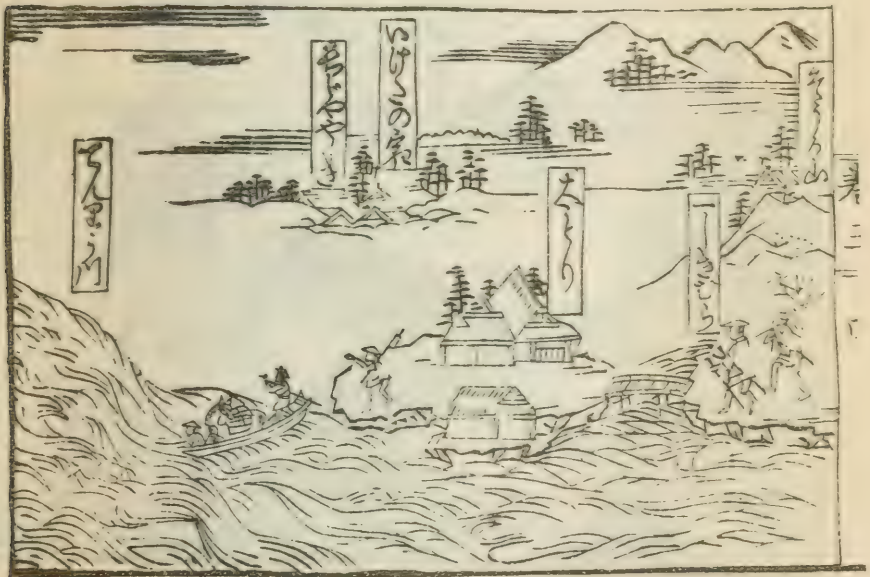
○池田の宿

むかし此里に遊君あまた集め旅人を留し長者有此娘に湯谷といへるは美形なりしに平の宗盛都にまねき給ひ花見の友ともなし給ふ

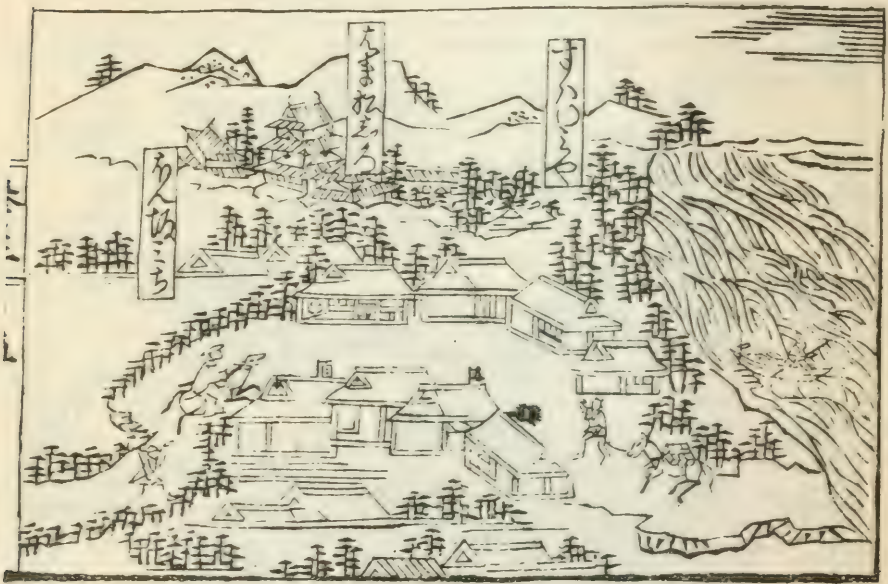
○天竜川　○小天龍

舟渡しの早川也水上は信濃國諏防海よりの流れといへり新田左中將義貞と足利尊うぢと合戰ありし所也川の西の畔の中に

○子易森

中の町をすぎてあんまはし十二間有右

のかたに沼ありて薬師堂立給ふ鳥居松
とて一木ある申ならはしぬ柏葉村みか
たの原などいふ所有右のかたに天王の
社立給ふ植松村の橋三十二間有

○濱松　　太田備中守殿城下

町筋長くはんじやうの宿なり右のかた
町中に陬防大明神の社有此宿の出女の
手業にさし足袋名物なり右のかたに本
坂越の道ありひだりかたはかぎりなく
大海波あらし爰を遠江灘といふ也是よ
り松原の砂道つゞきて物淋しき所なり
若林の郷赤塚篠はら新田すぎて右のか

たに入海はるかに山きわに大沢などいへる所あり左のかたに蓮の咲る長沼有壺井村といへる所有松はやし中に里〳〵有春秋は松露をほりて童子賣ける名物也かし馬のたくさんなる海道なり

○舞坂

是より舟渡し暮におよべば此宿にとまりてよし南はあら海にして風吹には高波うちかけ難義なり洲崎のかはる事たび〳〵有是を汐越嶌といへり燒蛤爰の名物なり

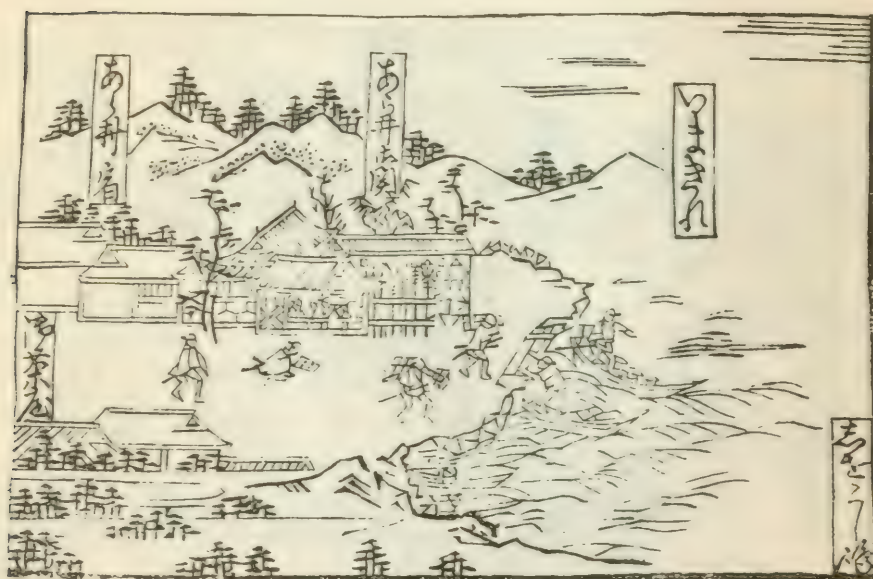
○今切入海

此所後土御門院明應八年六月十日の夜大地震して北の大山崩て二十三丁の舟渡しとなりぬ七つさかれば舟留也

○御關所　御奉行 石川又四良殿

鉄炮女手形御改め也脇より北への入江ふかし

○荒井

右のかたの浦邊に御茶屋有家毎に鰹のたゝき賣ける此所の名物也町はづれ獵師のすみし片濱にしてわすれ貝子安貝うつせ櫻貝さま〴〵目なれぬ貝づくし浦の童の賣ける

○千年山

むかし螺の貝飛出し跡とて右のかたに
谷崩て見へし此下に白洲有爰ぞ橋は絶
ても

○濱名橋

風わたる濱なのはしの夕汐にさゝれて上る蜑のすて舟
是迄も人に馴ぬる契かな濱名の浦の袖の汐風

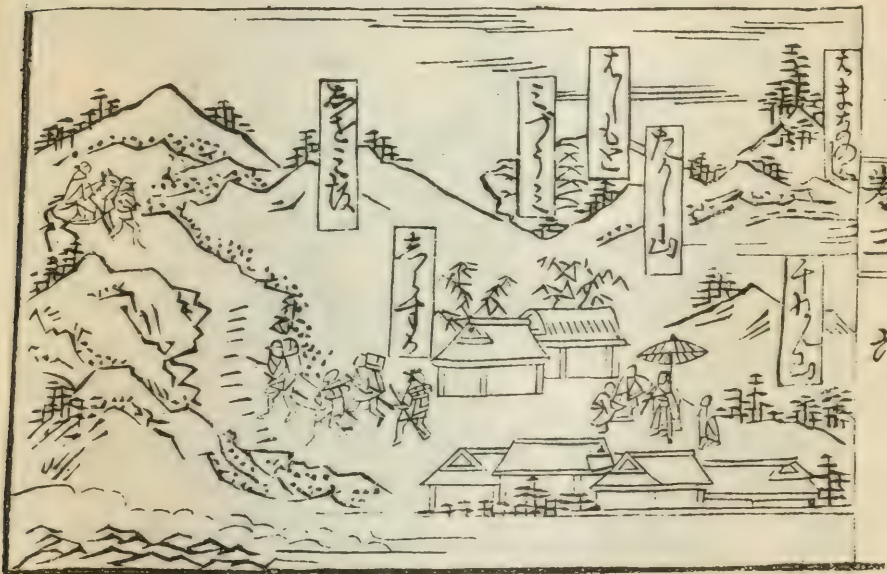
橋本といふも名斗残りていまは荒たる
野邊となりぬ右の方の山中に湖あり

○高師山

高し山花たに宿をおしますは只越残せけふの夕暮
白浪の高師の山の梺より眞砂吹まき浦風そふく

○白須賀

○白菅湊

松陰の入海掛て白すけの湊吹越秋のしほ風

吹送る風のたよりも白菅の湊別ていつる舟人

○汐見坂

此所北は山つゞき南のかたは海にし氣色おもしろし冨士見へわたれば冨士見坂ともいへり浦つたひに勢刕の鳥羽への舟わたり有

○猿馬場

此山里に柏餅とて木の葉につゝみて旅人に賣ける

○境橋

是は遠江三河のさかい川なり仁皇四十一代持統天皇参河國行幸ありしとしるせる史書に菅野の眞道が炙をしるせり又右の山陰に高さはかりかたき岩有

○二川

柄沢といふ所を過て松原の中にひだりのかたへ道有て岩穴の陰に観音を切付て弘法大師御作と申傳へし殊勝なる所也

○大岩村　○小岩村

右の山つゞきに燧坂といへる所有此谷陰よりひうちいし出ける同し高根ならびに風景おもしろく詠めにあかぬ所有

○石蒔山　○山中橋

此松の陰ひたりのかた町近年の茶屋饂飩そば切の上手なるところなり

○吉田　小笠原市正殿城下

右のかたの山城町屋舟つきなれば諸商人入込し所なり

○長橋
百二十五間有是より伊勢の白子にかよふ舟つきなり右のかたの遠山に花は絶ても名は

○花園山　○荒野崎　○然菅渡
行人も立にわづらふ然菅の渡や旅の泊成らん

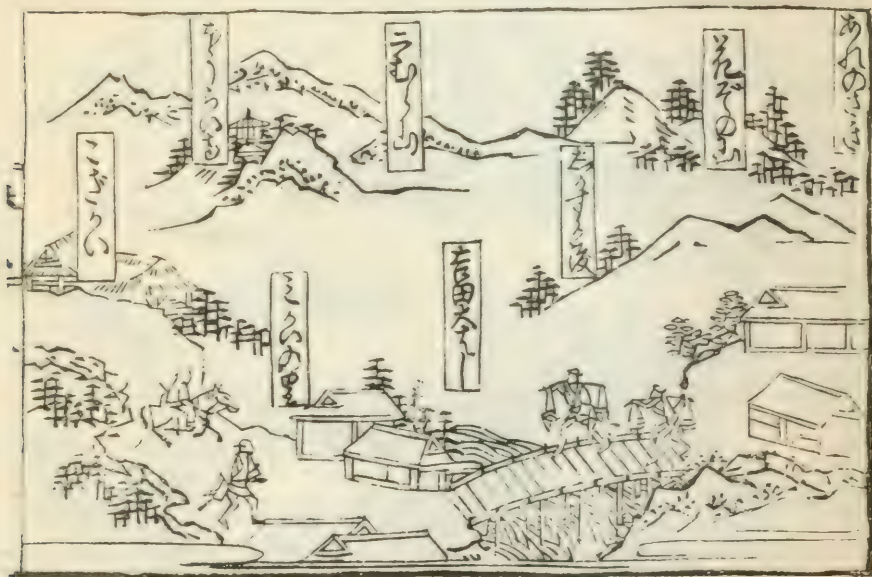
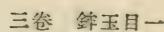
○二村山
ともして今宵も明ぬ玉匣二村山の峯の横雲
五月闇二村山の時鳥みねつゞき鳴声を聞哉
三日井の郷小坂井の里より東の山は笹谷といへる所有

○鳳來寺　寺領七百四十石
此煙岸山は昔日理修仙人の住家なりしか藥師如來の立せ給ひ今佛法のれいちとなれり此梺里はんじやうなる所也

石田の里をすきて左右村〳〵と並松年ふりし海道を行にひかしの山陰に祇薗のやしろ立せ給ふ本生寺といへるも此峯つゝきなりそれよりすこし北の山添に大雲寺といふ有

○御油

此宿はむかしの名残とて風流人留女見へけるまへ〳〵は夕暮の出立姿都の時花袖をうつし紅うらを継風に吹かへしてかゝる所にはやさしく三筋の糸に色ふくまて引掛〳〵旅人の夢をさまさせし又右のかたに松の並木ありて外道見ゆる

○本坂道

ひたりのかたに松二本すぐれて見へしはへ山有爰は竹庄とてふる城のあとなり

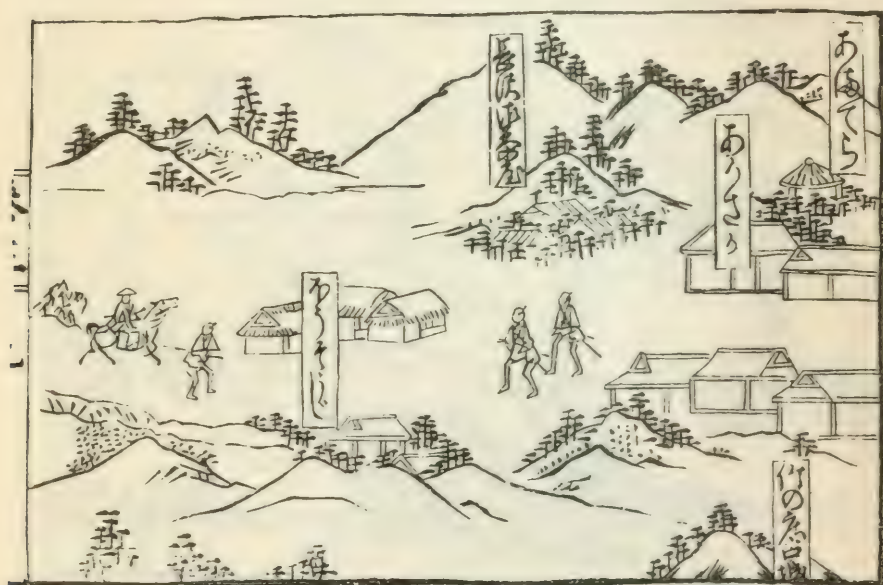
○赤坂

此宿は東海道第一の遊興の所たはふれ女の数〳〵ありしが今はむかしの形もなく淋しくなりぬ此里に一夜酒名物也左右の山のすがた女参それ〳〵に枝ふりて詠めつゞけておもしろき所〳〵

○長沢

爰に御茶有是より松陰をすぎてひたりのかたに

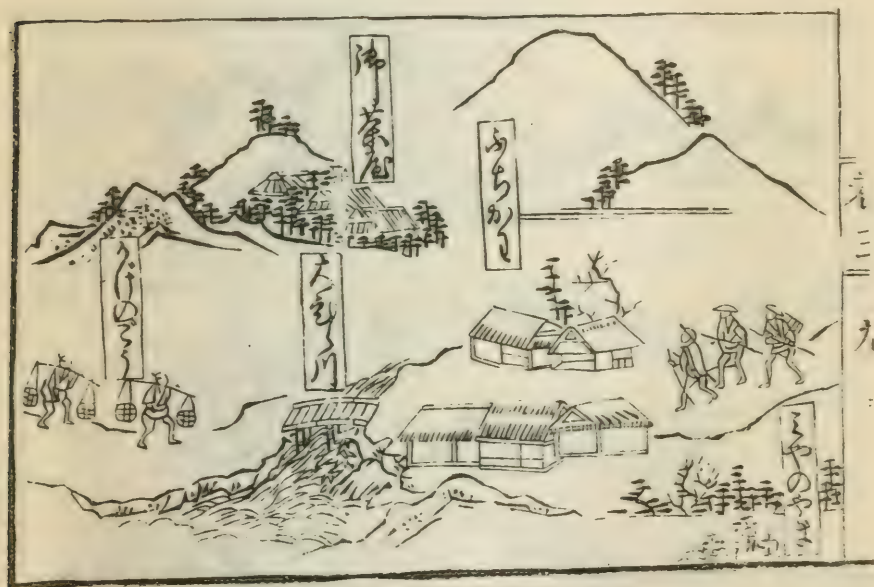
○法蔵寺　寺領八十三石

東照権現いとけなくおはしましける御時御手習あそばしけると也此浄土寺の

門前の里にわらんじの名をとれり飛脚のもの五日路はくといへり里〳〵すきてひだりのかたに茂りたる山の中に天王のやしろ立せ給ふ

○藤川

是より岡の郷佐宇田の郷を過て左のかたに西尾の城下への道有右のかたに御茶屋あり此道筋の里〳〵に苧細工の早縄貫ざしの上手ありし

○大平川

浅瀬なれども落水はやし橋は四十二間にしてわたしける陰の郷こして小川有是よりも西のかた岡崎の領分也

ひたりのかたの濱邊に星野といふ所有
昔日三河の水を都にあげて帝の御髪水
といふ說有右の方に

○宮地山

君かあたり雲井に見つゝ宮地山打越行ん道もしらなくに

○岡崎　水野右衛門殿城下

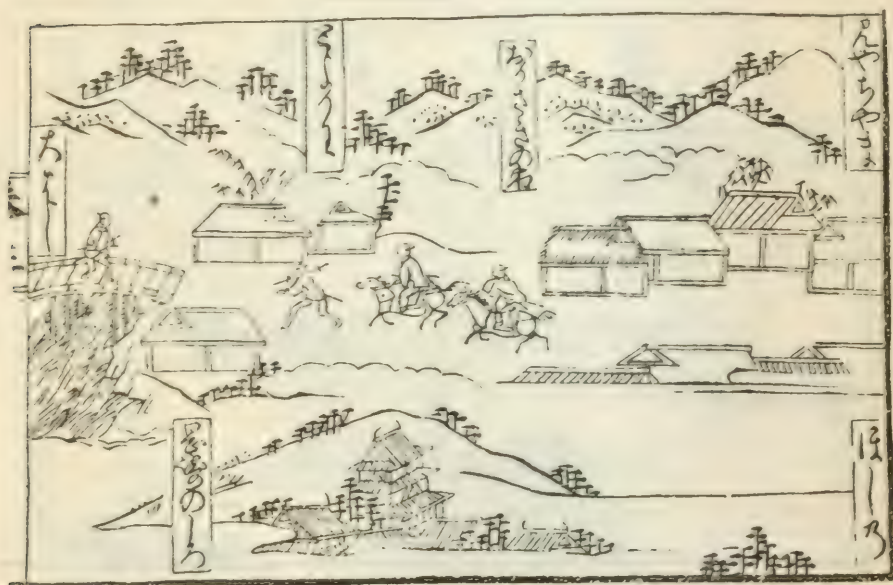
城は左のかたに有町作り都めきて萬の
商人爰に集るむかしは此宿に遊女あつ
て師子踊の岡崎ふしを爰ゟうたひ初め
し町はづれ松葉川此上に

○豐河

狩人の矢はきに今宵泊なは明日や渡らん豐川の浪

○矢矧里

長居せそ心していよ梓弓やはきの川の鷺一むら

弐百八間の長橋有抑〳〵矢はぎと名付

る事日本武の尊東夷をほろほし給ふ時爰にて矢をつくらせ給ふと也又建武年中に足利尊氏合戰ありし所あり右のかたむら藪の中に長者屋敷淨瑠璃御前のむかしを今に殘しぬ

○御影堂

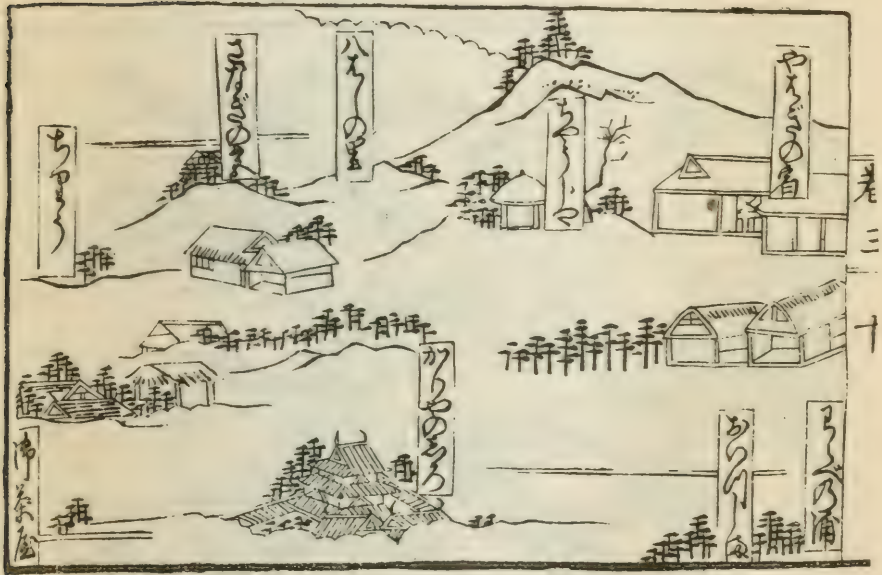
是よりうとふ坂尾崎今村の茶屋西田を過て左の方の浦邊に老津嶋童子の浦有右の細道行ば

○八橋の里

五月雨は原野の沢に水越ていつれ三川の沼の八橋

駒留てしはしはゆかし八橋の蜘手に白きけさのあは雪

八橋山無量寺の觀音は淸和天皇年中に在原の業平の作といへり杜若の沢にて唐衣の哥讀しも爰也

○池鯉鮒

宿中に御茶有左のかたに刈屋稲垣信濃守殿城下有右の山下に狭奈岐大明神の社有毎年四月に馬市立て芝居もの傾城爰に集る芦の屋の里を過右のかたの岡山つゞきに

○衣の里

夕暮は梢の風の音つれて衣の里に秋をしる哉

○芋川

此所はかくれもなき髭男饂飩そばきりの上手なる里也

○今岡里

此所三河尾張の境はしとてまん中より木と土にてわたせり天竜の宮穴生村六月朔日新米有

○鳴海

此所に鶴重氏家小刀剃刀の上手也

鳴海かた塩せの波にいそくらし浦の濱路に掛る旅人
古里にかはらさりけり鈴虫のなるみの野べの夕暮の声

○夜寒里

袖かはす人もなき身をいかにせん夜さむの里に嵐吹也

○松風の里

参風の里にむれゐるまな鶴の千年かさぬる心地社すれ

仙人塚星崎を濱邊に見て

○喚継濱

鳴海かた夕浪千鳥立歸り友よひつきの濱に鳴也

○笠寺

轉輪山竜福寺の観音は八釼の神作立像にして笠をめして拝まれ給ふ三十三年目に開帳有

○中嶋橋　○田畠橋　○刀部村

○山崎はし

是より右に名古屋の城見ゆる

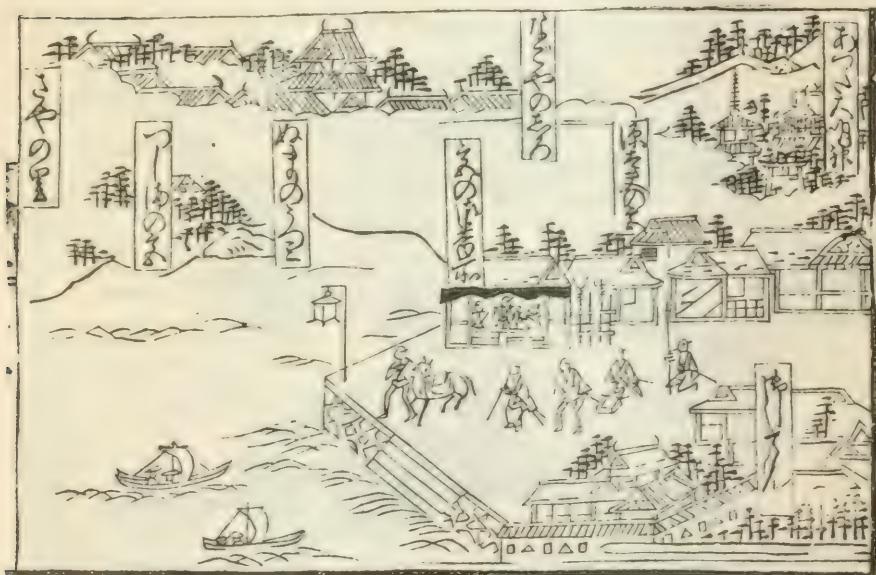
○宮

町の入口左のかたに三途川の姥有濱邊迄民家つゞきて御茶有町中に玄太輔の宮北の大森の中に

○熱田社

此御神は村雲の劔を納め景行天皇四十九年に勸請是日本武の尊の御垂跡也西の御門の脇に蓬來山有龜の形に松村立たり又宮中にひとつの石塔有其長弐尺あまり是楊貴妃の驗となん

○船番所

七つかぎりに舟留日和次第に佐屋の里へまはる也津嶋の祇園見沼の内海ちかし七里の横わたしたは大海右新田鍋田越

○桑名　松平越中守殿城下

左のかたの海を請て城有右に舟番所是よりつゝき樫木挽物出る此浦の蛤蛎しろ魚名物也

昔日清見原の天皇御位につき給ふに大作の王子むほんに吉野ゟ此所に御幸あつて爰にて軍兵もやうし美濃國不破の関の合戦に御運のひらかせ給ふと也共後聖武天皇の御時藤原の廣繼むほんに是も此桑名の浦に御幸ありし舊跡也ひかしは皆伊勢の海北のかたはみのゝ山〳〵見へけるひたりのかたの浦邊はるかに長嶋見ゆる松平佐土守殿住所なり

宿はづれより若松の長縄手をすぎて矢
田のかた町大福村やなか村をこして

○町屋川

小橋有大橋は百六十間の土はし也縄生
村あふせ村かき村を行て濱邊はるに玉
垣の里有久しき名所也

○日永の里

町つゞきの海道なり右のかたに高田の
門徒寺有

○星川　○朝氣の里

桑名よりくはて來れは星川の朝氣は日永成けり

是より里〱をすぎて右のかたに美濃
の大垣の城見ゆる程ちかし

○冨田の里

町作の所を越てひだりのかたにもちふくの村ばつの里此所に八幡のやしろ立せ給ふはづ川土橋五十九間有見立川是もはしかゝれり

○四日市

此所より桑名に乗行舟ありしけたる日和にのるまじき海也右のかたに御殿有此町不断人立のしげき物かしましき宿出はなれて濱田の里赤堀村をゆきて右のかたの松はやしのうちに天照太神宮やしろ立せ給ふひなの村是にも宮所ありける

○追分

是よりひだりに伊勢道あり右かた本海道也尾古曾むらをすぎてうねめ町に砂川ありて五十間の橋を掛し

○杖突の里

此町はづれにすこしなれどもけはしきのぼり道有馬も難義の所旅人も杖なしには草臥とて杖つきの坂といへり饅頭の名とりし氣色よく休所也

○小谷村　○大谷村

是も茶屋あり山中なる程平道にして松陰より右左を見晴し何となくおもしろき所ながら名所はなし

○鞠が原

ひだりかた松林のうちに御茶屋有是より里〳〵を越て

○藥師

宿の左の森のうちに御殿あり右のかた坂の下に藥師堂有如來は昔日越の大德泰澄法師諸國修行の時いまだ此所は山中にて民家もなかりき杳なる洞に光明のかゝやきしをたづね行て見給ふに菊面石也そのめくりに十二の守護神立せ給ふ爰ぞ佛の住所なりと則此石を刻み藥師如來となし給へりそれより一里出來て石やくしとはいひならはせり

らなき町砂川をわたり過て

○庄野

此宿の名物にやき米の俵をうつくしげにわらをすぐりて青き苧にして細に編けるそのなりはりうごのごとし童子のもてあそびになる物也

○泉の里

大川有七十間のかけはし此里の左のかたへ道筋白子若松に行小田村すきて林の中に

○開善寺

爰につゞきて川合村十三間の道橋有和田の村行て松原に新町右のかた家つゞきにしてきれいなる茶屋有

○龜山　板倉隱岐守殿城下

町のかたに城有右に野尻見ゆる左の方は關の入口迄岸根つゞきの砂川の流れ淸し落葉里むら緒の町村を過て右のかたの岩山に出羽の國にありしを爰に移ぬ

○羽黒山

是より里もなく右は高根つゞき不斷に嵐はげしき所爰を大東風縄手といへり近江路の山見へし

○伊吹山

あふ事はいつといふきの岑におふるさしも絕せぬ思成けり

玉かつら伊吹の山の秋の露誰面影を松むしの鳴

關のひかしのかたに追分有是ゟ南のかた伊勢海道なり

○關

此宿火縄名物也町のひだりのかたに地藏堂有

○宝藏寺

此寺は傳教大師の草創也文應年中に炎上して文永四年に小堂立ける其後紫野一休和尚爰に來て狂哥など讀給ふ事も有是よりやま／＼を詠め行に左の方に伊賀の海道あり又古城の跡迚松も年ふりし山有右のかたに

○岩振山

爰の山の形都ちかくなき事を見し人毎に是を惜みぬ岩つゝしひとしほ也里人の申つたへて筆捨山ともいへり

それより一の瀬の里をすぎて山川の細き流れひだりのかたにわたり右に替り行あるひは又棚橋を越てさまぐ〳〵に道有

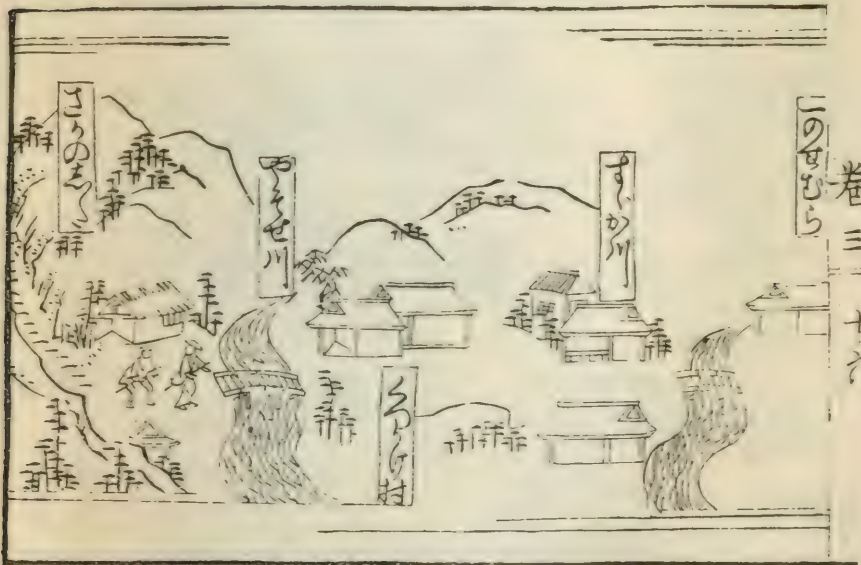
○鈴鹿川

すゝか川八十瀬の浪を分過て片敷物はいせの濱荻
鈴鹿川明かた近き天の戸をふり出て鳴時鳥哉

○沓掛村　○新茶屋

此所は四季にかきらず日請の山の野老ありし

○坂下

此宿むかしは坂の上に有けるか大雨に崩て後爰に替りぬ町の中に橋ふたつ有山水音高し是より次第あがりにして岩の陰道おそろしき高山也

○鈴鹿山

えそ過ぬ是やすゝかの關ならんふり捨かたき花の蔭哉

長世のためしにひかんすゝか川越ていつきのわたらへのしめ

○同宮

當社は天武天皇大伴の王子におびやかされ吉野より伊勢に移り給ひしに鈴鹿の翁天皇を太神宮へおくり奉つり策ことをめくらし軍に勝せ給ふ其翁の社といへり

○梧の枵橋

鈴鹿山きりの古木の丸木橋是もや琴のねにかよふらん

峠にむかしは關有光仁天皇三月十六日此關の太鼓おのづからに鳴事有

醍醐天皇延喜六年に此山の盗人十六人うたせ給ふ事有伊勢近江の境野左に三つ子有湯の鼻の里

○沢江　○木下　○蟹坂

むかし此谷に五尺あまり蟹住て人をなやましけるを會解僧是をむなしくなして塚をつきしるしに松二木植置し名物の丸飴有山道すぎて石川の淺瀬をわたる

○田村宮

右のかたの森ふかく大明神立せたもふ是より石道つゞきて

○白川橋　○生野

此所に茶屋あり爰を過て宿の入口に櫛屋あまた見へける是を土山くしと世間にもてはやしぬ旅人に賣にもかけねなし又うどんそば切の上手也

○土山

外の白川はしを渡りて右の田村明神の
やしろ爰にも有それより里〳〵つゞき
ぬ

○松尾村　○舞野村　○岩室村
○市場村　○徳原村　○大野村
○今宿村　○伊奈川　○さと村
○新庄村

右のかたに清水有丸山とて松しげりし
是は城あとゝいへり

○水口　　加藤孫太良殿居住

宿のひかしを作坂といふ也此所に柳の
篭裏つゝら笠萬の藤細工人有櫻屋煙管
有旅籠屋に不斷輪汁有町筋二つにわか
り右のかたに観音堂有

○大岡寺

是は甲賀三郎をつくり籠しといへり町はづれ右かたに八幡宮有馬場崎小脇村泉村をすぎて

○横田川

是より左のかたはるに高根有

○信楽山

都たに雪降ぬれはしからきの眞木の杣山跡絶ぬらん

鳴神の音も杳に信楽や外山をめくる夕立の空

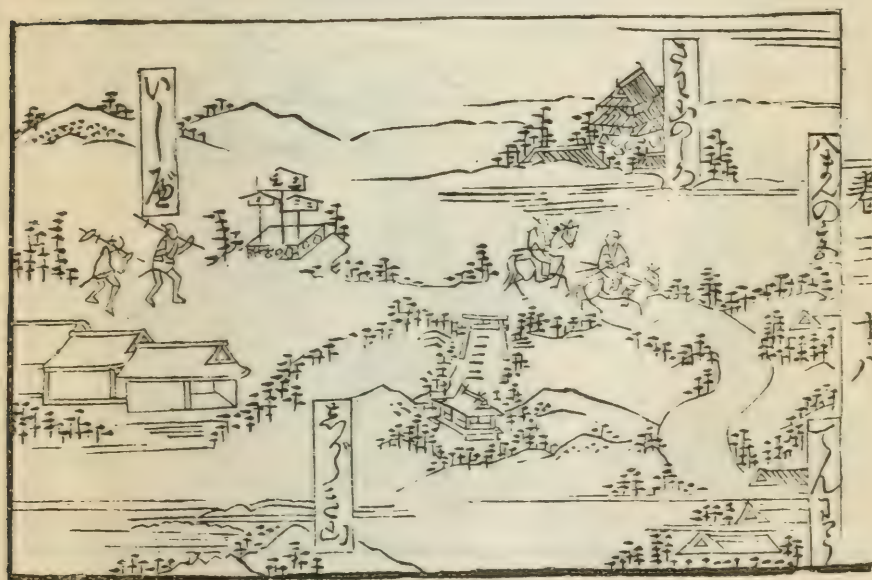
田川といへる茶屋を過て三雲村よし中村なづみ村はり村平松村糀袋をすぎて左のかた西に沢山の城有

○石部

町を出て手孕の里左のかた笠松の陰に稲荷の社有勾の里川瀬の里木の村の出はなれに川づらの池有しが今は沼となりぬ

○梅の木

此所に和中さんとて賣薬有右の杳に名所の山つゞき也

○鳥篭山

つまこふる鹿そ鳴なる独ねの床の山風身にや入らん

あたにちる露の枕にふし詫て鶉鳴也床の山かぜ

○櫻山

櫻咲さくらの山の櫻花さく櫻あれはちる櫻あり

三上なる櫻の山の花盛散といふことは嵐とそ思ふ

○三上山

杳なる三上の山を目に懸て幾瀬渡りぬやすの川波

ちはやふるみかみの山の榊葉は榮そ増る万代までに

三上の明神は元正天皇養老年年に天くだり給ふ是日本第二の忌火也本袋村めかは村岡村新屋敷を過て

○草津

辻より右のかた美濃海道なり

○守山

鳴蟬の泪しられてもる山の茂みに落る木〳〵の夕露

青つゝらしけき人目をもる山の下に通はぬ道そくるしき

是より北につゞきて見えし

○鏡山

かゝみ山曇らぬ秋の月なれば光をみかくしかの浦波

花の色を移しとゝめよ鏡山春より後も影や見ゆると

草津川宿の右に明神有此里に道中馬の道具鞭蠅拂ひ有

○矢蔵

爰に餅屋有是を姥が餅とて名物也山田やばしの渡しへの追分なり左のかたに芦浦の観音寺右のかた野路篠原を越ぬ田の中に月の輪の池といふ有湖を右のかたに詠め行

○勢田橋

湖や霞てくるゝ春の日に渡るも遠しせたの長橋

御調物絶す備ふる東路に勢田の長はし音もとゞろよ

　此橋九十六間後宇多院弘安年中に忍牲律師是を造る沖杳に竹生嶋白髭の神山おかまれ給ふ浦つゞきに

○眞野入江

唐崎や長柄の山にあらねともをさゝ波まのまのゝ秋風

○堅田浦

心引かひこそなけれあふ事はかた田の浦の網の浮縄

　此浮御堂は惠心僧都の御作千体佛也

○比良山

櫻ちるひらの山風吹まゝに花に成行しかの浦波

○志賀浦

見せはやなしかの唐崎梺なる長柄山の春のけしきを

○比叡山　寺領五千石

あきらけく後の佛の御世までも光傳へよ法の灯

此延暦寺は桓武天皇七年御草創一乗止観院と名付傳教大師開山

○日吉社

我頼む日よしの影は奥山の柴の戸までもさらさらめやは

勢田の橋に竜神の宮有小橋を渡り

○石山寺　寺領五百七十九石

都にも人や侍らん石山の峯に籠れる秋の夜の月

當寺は孝謙天皇勝寶六年に御草創其後聖武帝の御字に良弁上人丈六の観世音の像を作りて籠給ふ又上東門院の御時紫式部此寺に籠名月の湖に移るを見て水想観を成就し自然智を得て物語を作れり今に源氏の間とてむかしを残せり此女の御影も有し

螢の洞とて此邊の岸にあつまるは余所よりひかり増て大き也鳥井川村過て松原の田の中に今井四良兼平が塚有

○膳所　本田下総守殿城下

右ニ八幡宮有新羅明神の社有是は三井寺の鎭守也中庄村田畑の宮有

○粟津原

闘越てあはすの森のあはつとも淸水に見へし影な忘そ

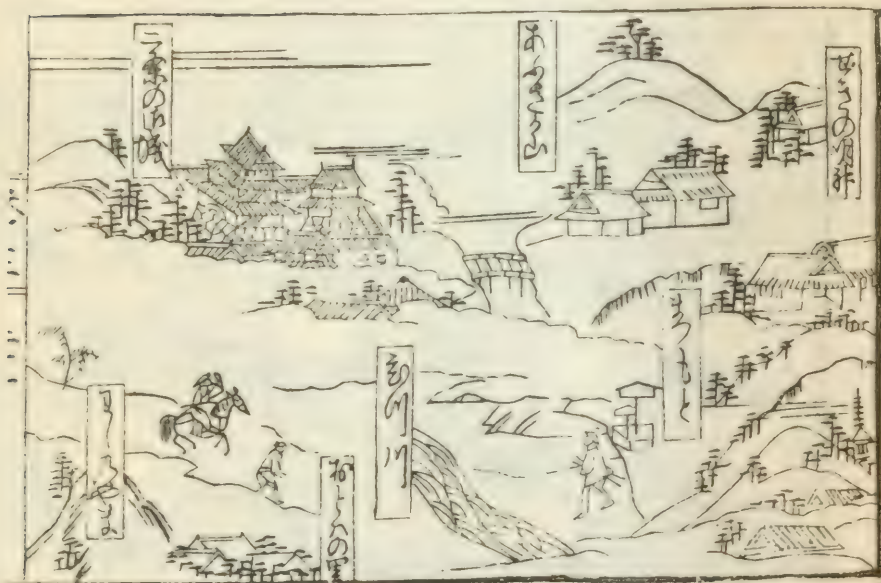
番馬村もろこ川を渡り左の家のうらに木曾義仲の塚印に柹の木を植し松本につき獵師町を過て

○大津

音羽山深き霞を分入れは大津の宮に春の花園

船名物萬の商物第一の津也

○三井寺　寺領四千八百石

詠むれは心の底に濟まところ三井のし水にうつる月かけ

此園城寺は天智天武持統三帝の御願寺
にして教待和尚の建立也

○相坂山

君か代にあふ坂山の岩淸水木かくれたりと思ひける哉

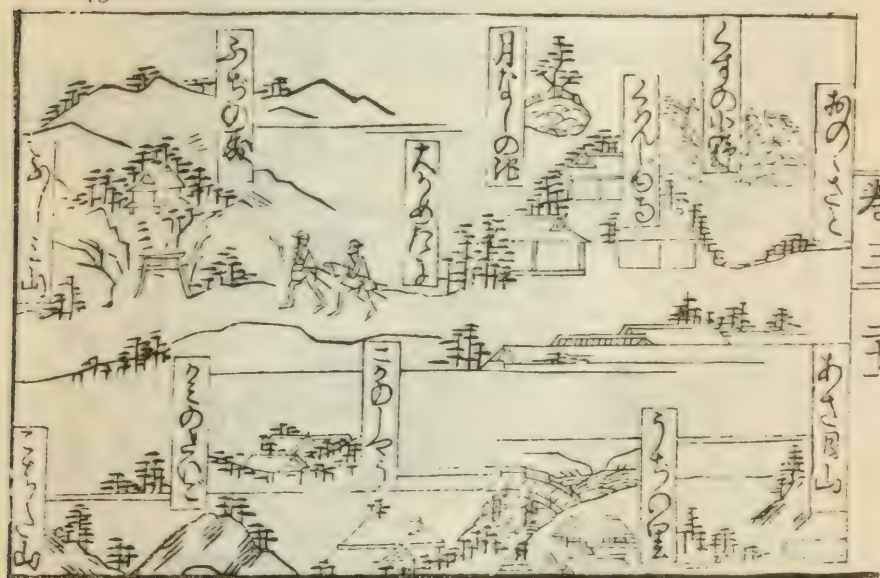
此關は文德天皇天安元年四月に始る明
神は蟬丸をいはへり醍醐天皇延喜五年
に又小野小町は仁明天皇承和の比爰に
死す大谷に針屋浮世繪書有京伏見追分

○勸修寺　寺領五百石

醍醐天皇御願所開山濟高大僧正此所に
茶屋軒をならべ淸水を改めて都近くの
しるし也左に月なしの池もちかし

○栗栖小野

くるす野の氷室の氷いつまてかむすほゝれつゝとけしとすらん

大龜谷とて山道のおそろしき所也

○藤の森　社領貳百石

深草は名のみ成けり藤の森春を掛てそ花は咲ける

此社は稱徳天皇神護景雲造宮是早良親王の垂跡也是より右は京海道深草稲荷山見へわたる

夕されは野邊の秋風身にしみて鶉鳴なる深草の里

いなり山杉立ならふ下晴て卯花月よ道もさやけし

竹田の里も右に見へし鐘木町遊女の住家左の方宇治への道杳に見ゆる

○木幡山

遠からぬ伏見の里の關守は木幡の峯に君そすへける

○大和田里

黄檗山万福寺は新院明暦元年に建立隱山隠元寺領四百五十石

○宇治里

朝戸明て伏見の里に詠むれは霞にむせふうちの川波

○醍醐山　寺領四千石

醍醐朱雀村上三代の御願寺也開山聖寶僧正延長四年十月十九日に供養

○御香宮　社領三百石

當社は神功皇后の御廟也

○伏見里

夢通ふ道さへ絶ぬくれ竹の伏見の里の下をれ

此里は舟つきにして旅人絶ぬ所也葛籠吹矢茶筅竹箒桃名物又川中の葭嶋舟路の右を淀堤といへり

○楊枝嶋

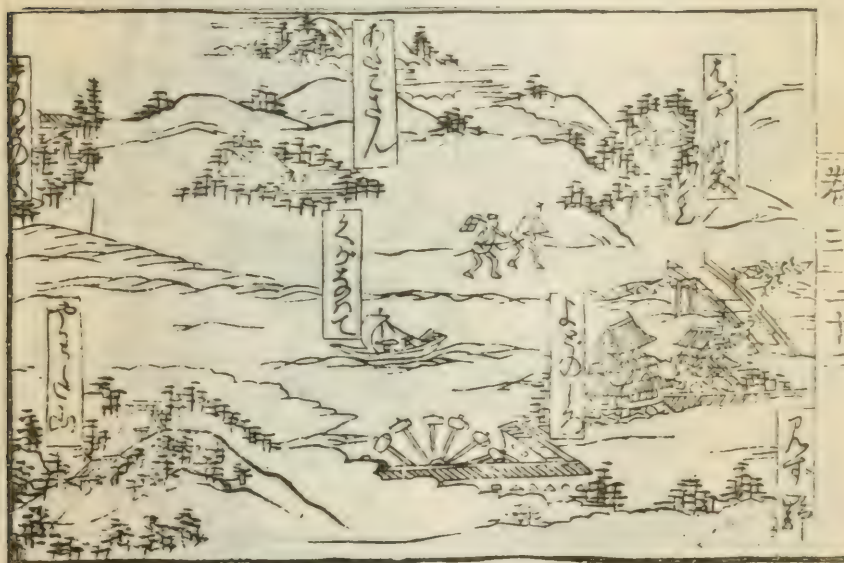
淀野なるやうしか嶋の夕千鳥己か翅をせゝり鳴也

○淀　石川主殿殿城下

五月雨に岸の柳の枝ひちて梢をわたる淀の川舟

○羽束師森

家風吹ぬ物ゆへはづかしの森の言の葉散しはてつる

小橋のむかひ水垂の明神の森をいふ爰
に水の落合名物の淀鯉水車有川岸の舟
入詠めつゞけて左に大橋掛し

○美豆野

雲雀立みつの上野を詠むれは霞なかるゝ淀の川なみ

○八幡山　社領六千七百五十七石

やはた山松陰涼し岩清水夏をせきてや跡をたれけん

應神天皇也仲哀天皇第四の御子御母は
神功皇后也欽明天皇三十一年始て豊前
の國宇佐に鎮座清和天皇貞觀元年八月
廿三日に此所へ移し奉る

○橋本　○狐川　○金川

爰山城河内の國境也北に愛宕山見へし

○山崎　○關戸院　○財寺

聖武天皇の御願寺也山陰に一夜菴とて
宗鑑法師の住し跡有利休茶湯せらし寺

有木食の寺あり此里ともし油の名物也

○水無瀬宮　寺領五百石

春の色をいく万代かみなせ川霞の洞の苔の通路

惟高親王御所也土御門院明應年に御建
立此里に水無瀬殿居住有是は川筋の北
也南に葛葉の里茶や有松はやしの中に
道心の屋敷跡有

○渚森

世の中に絶て櫻のなかりせは春の心はのとけからまし

○禁野　○交野

又や見んかたの〻御野の櫻狩花の雪ちる春の曙

桓武天皇延暦二年に御狩有

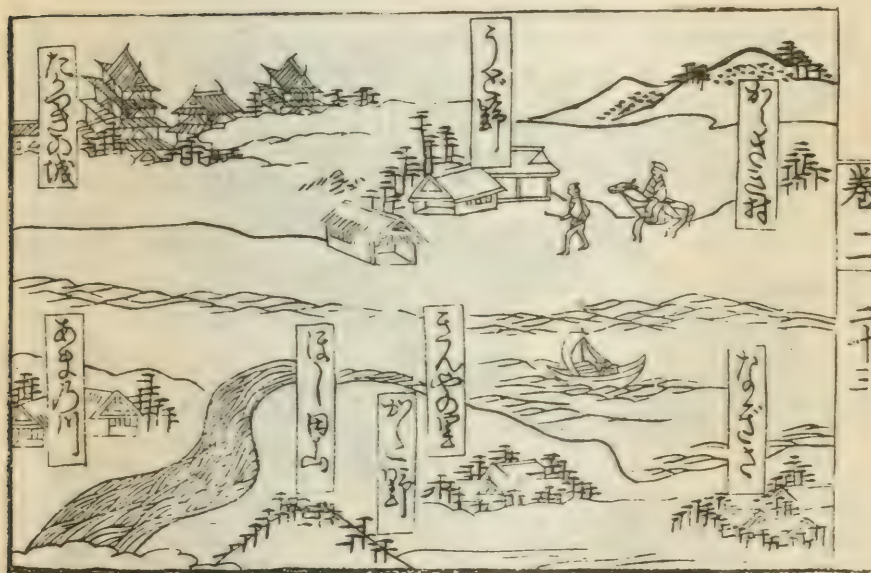
○天野川　○星田山

是や此空にはあらぬ銀川かた野行は渡る舟橋

○牧方

此所舟改の番所山に御茶屋有北に

永井近江守殿城下

○高槻

○芥川

花も又散ぬるはてはあくた川かへらぬ波に春そ暮ぬる

爰につゝきて伊勢寺是は哥人いせか出し所也古曾部は能因法師の住ける所

○金竜寺　寺領三十石

山寺の春の夕暮きて見れは入相の鐘に花そ散ける

村上天皇應和二年に三井千観上人開山

○三嶌江

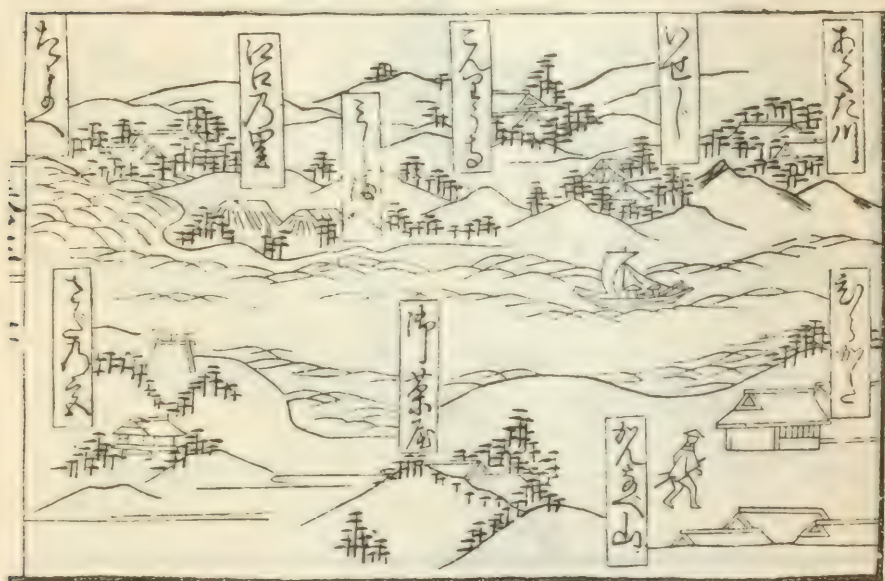
此濱も昔は遊女有爰につゝきて江口の里

みしまへの芦のかりねの短夜にきくも程なき時鳥哉

○玉江

玉江にやけふのあやめを引つらん見かける宿のつまと見ゆるは

○佐太宮

左のかたに天神立給ふ芍藥名花有

堤つゝきに森口の里此所に大根の細漬
名物也今市村並木の梅檀有

○平田村

舟番所有北香に勝尾寺箕面山池田の呉
服の高松見ゆる瀑の里賤の手業に布ほ
すは雪のごとし

○長柄川

難渡なるなからの橋もつくる也今は我身を何にたとへん

此橋嵯峨天皇の弘仁三年六月に造川の
南に沢上の里此所に鵺塚有是は近衛院
仁平三年四月に源三位頼政射落し淀川
に流れ爰に留まる源八の舟渡し網嶋網
を打名人有

○天満豊崎

松村立し森有是は孝徳天皇大化元年に
都此所に移しぬ古跡也

一月玉鉾巻四

○大坂　御城代松平因幡守殿

東に松の木間の朝日の影もしづかに移ひ津都山の尾につゞきしゆへに尾崎ともいへりなを君か世はさゞれ石山の御城とも申侍る

○玉造　栗岡山といへる名所也

○大江岸　今八軒屋といふ舟つきの上なり

渡邊やあふ江のきしに泊りして雲ゐに見ゆる伊駒山哉

○渡邊橋

今は橋絶て名のみ残れり太平記二十五巻住吉合戦に楠正行が山名伊豆守を天神の森まで追つめしと見へたり

○天満天神

仁王六十二代村上天皇の御宇天暦の年中に遷宮ありし所也

○久保津宮　今の天神橋の濱に立せ給ふ熊野一の王子也楼の岸も爰也

○難波橋　釈の行基是をかけ初られしと元亨釈書に見へたり

○田蓑嶋　今の北濱といふ所なり

難波かた汐滿くらしあま衣たみのゝ嶋に田鶴鳴渡る

○大融寺森　仁王五十二代嵯峨の天皇弘仁十二年に建立の地也

○堂嶌　人王百四代後土御門文明七年に此堂事合運圖日本土記見へし

○福嶋　雀鮓名物　○野田　白藤名木

元暦二年二月十一日大將判官梶原逆櫓論

○野里川　嶋村蟹名物　○縄かけ橋

○傳法舟寺　今の西念寺也昔高楼に灯を挑て入船の目しるしになすと也

ふる寺にのりうかふ也夜もすから芦帆に上てよみすます

○高津宮　仁王十七代仁徳天王難波の三
津の内也都の事もむかしに成ぬ
荒にける高津の宮の時鳥誰に難波の事をかたらん

○生玉の森　社領三百石　赤土名物
御土御門院明應五年に社地と成

○天王寺　○新清水　○茶臼山
仁王三拾二代用明天皇の御子聖徳太子
の御建立　寺領千三百石
世を照すちかひの海の入日こそ難波の三津の寺と成けり

○川口御番所　御舟奉行小濱民部殿

○兎原住吉　○三軒屋　むかしは遊女有

○一の洲　○上人川　○難波嶋
傳法二の水串の内何風にも掛所よし一
の水串木の内北南風には根浪つよし
風荒き湊の沖の一のすにちかふ小舟ははや入にけり

○住吉　○勝間浦　○天下茶屋

人王十五代神功皇后三韓御たいじの時
あらはれ出給ふ御神也　社領

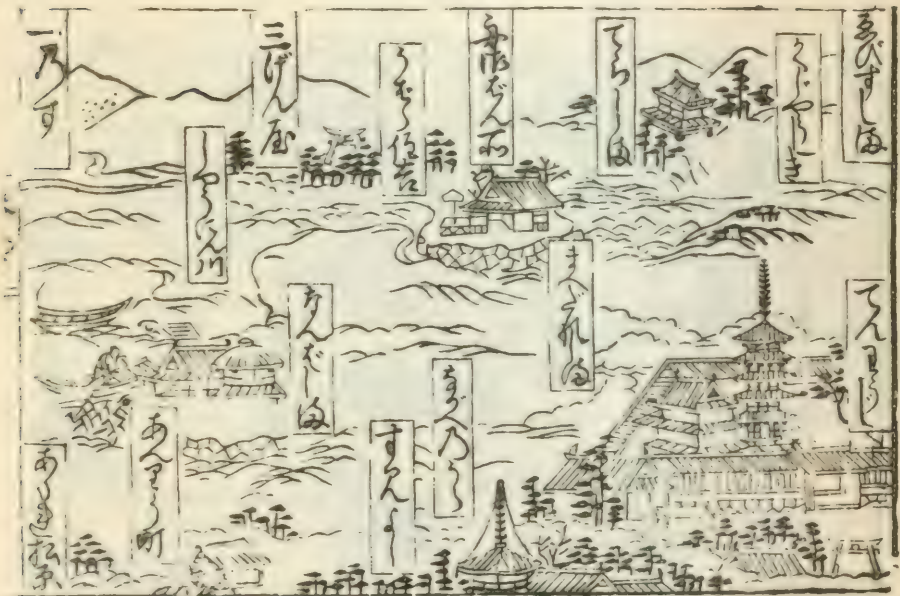
昔にのみ聞渡りつる住吉の松のちとせをけふ見つる哉

○敷津　○太刀造江　○細江
○朴津　○佐比江　皆此浦つゞき也
○あられ松原○安立町　○七胴の濱

さ夜更てあられ叅松住吉の浦吹風に千鳥鳴也

○堺の浦

おもひきやさかいの浦の櫻鯛あかぬかたみにけふや引らん

○尼が崎　青山幡摩守殿城下
○大物の浦　○淀の継橋　○浦の初嶋
○須佐入江　○甲山　○打出の濱
此浦つゞき地方あさく舟掛り悪し
○有馬山　○武庫山　○芦屋の里
○鳴尾崎　北風に汐掛りよし共外は悪し

けふこそは都のかたの山のはも見へすなるをの沖に出けれ

○武庫山　○芦屋の里

霧晴て猪名野を行はむこの海月をそみつる宿はなくして

○西の宮　○廣田社　○御前の沖

二柱の神の御子蛭兒と申せし今戎とぞあがめける北西穴師風に汐掛りよし前の魚といふは此濱の鯛也

○御影森　○雀の松原　○脇の濱

世にあらは又歸りこん津の國のみかけの松よおもかはりすな

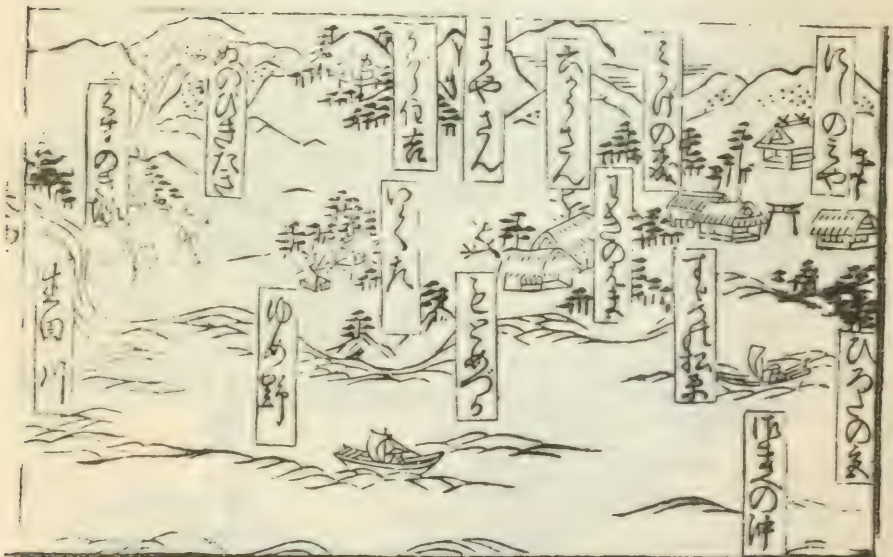
○六甲山　冨士より五番の高山也

○生田　神功皇后の御時勸請津の國の一の宮といへり社領二百石又梶原二度のかけのゑびらの梅殘れり

○求塚　二人の男の塚も此邊にあり

○莬野　淡路にかよふ鹿の子細有

○布引　○湊川　楠が塚あり

天川堤や流れの末ならん空より落る布引の滝

○川邊村　○二つ茶屋　○湊川

湊山とことはに吹汐風に繪嶋の松に浪やかゝらん

○角松原　○須佐の入江　○淀の繼橋

五月雨に淀のつき橋中絶て浪の立ゐに君思ふ哉

○生丹の山田○栗花落の宮　今に有

○兵庫の津　○輪田の御崎

車舟わたのみ崎をかいめぐりうしまとかけて汐や引らん

○筑嶋　○福原の京

平家の大將清盛入道此嶌をつかれし時人柱に入し松保氏小傳が御影此濱の寺に今ニ有

○清盛の石塔　濱の松陰に有

此津は民家たちつゞきて物の自由なる所也湯屋風呂屋もありむかしは遊女あつて舟かゞりの旅人浪枕をかりし也

是より難波の一の洲まで十里の海上也
名物萬の礒魚風味各別也此浦の眞砂作
り庭の蒔ものによし豆腐
南に阿波の眉山はるかに見ゆる
まゆのこと雲ゐにみゆる阿波山を掛てこく舟泊知すも

○鉄枴の峯　兵庫よりすこし西のかたに高
山有

○苅藻川
里人の夕〳〵にかるも川螢のやどり替り行らん

○蓮の池　○駒が林　○まのゝ池
すこし山よせのかたなる野原の松陰に

○薩摩守忠度石塔　有

○鐘掛松　○一の谷　○二三の谷

○ひよとり越逆落し

源よしつね一戰の跡今にあり

○平家內裏屋敷有

○須广の浦

須广のあまの塩焼煙風をいたみ思はぬかたに棚引にけり

白波は立と衣にかさならす明石も須广も己か浦〳〵

○須磨寺　眞言寺領十石

若木櫻　青葉の笛　あつもり御影有

○松風村雨の石塔　有　○行平松

○塩屋

すまの浦に焼塩かまの煙こそ春にしられぬ霞成皃

○烏崎　○印南野

女良花我に宿かせいなみの〻いなといふとも爰を過めや

いなみのや山もと遠くみわたせは尾花にましる松の村立

○岩屋大明神○盛俊が塚 ○ゑいが嶌

○大藏谷

旅人のわけ行かたの八重霞大倉谷の春の夜の月

○人丸の社　社領四十石 神主月照院

ほの〳〵と明石の浦の朝霧に嶋かくれゆく舟おしぞ思ふ

○朝良寺

秋風に波や越らん夜もすから明石の岡の月のあさかほ

○赤松石塔　有

○明石城主　松平若狭守殿

大坂より是まて十五里の所なり此浦の
名物飯蛸縮布
是より南に岩屋ゑじまがいそ須本由良
見えわたる

田良の戸を渡る舟人かちをたへ行衛もしらぬ戀の道哉

爰につゞきて西行法師が詠めし蟻崎の
松今に有

○里の蜑

浦風になひきけりな里のあまの焼藻の煙心よはさに

○大鳴戸　○小鳴戸　○飛嶋

淡路かたせとの追風吹そひてやかて鳴門にかゝる舟人

世の中を渡りくらへて今そしる阿波の鳴門は浪風もなし

○高砂の里　相生の松　明神有

いたつらに世にふる物と高砂の松も我をや友と見るらん

○尾上寺　○道盛の塚　此海邊に有

○ほこ川　○石地藏　○宇佐崎

○鞍掛嶋　○上嶋　○たんかの大嶋

いづれも此南の沖に見ゆる

○曾根の天神　名木の松有

○穴師の里　○沖のなげ石

○姫路の城主　本田中務太輔殿

大坂より二十五里有此所より刀の新身

うち出す也是播磨身也

○餝摩　此所にかちん染有

戀をのみしかまの市に立民の絶ぬ思ひに身をやかへけん

○淸水寺　○野中の淸水　も此近也

古への野中の淸水ぬるけれと本の心をしる人そしる

○夢前川

朝嵐夢さき川の浪枕あかぬ別れの袖は濡つゝ

○書寫山　天台円教寺領五百石

一条院永延弐年に性空上人の建立

○繪嶋　此沖に見ゆる

はりまかた須广の月よみ空さへてゑしまか崎に雪ふりにけり

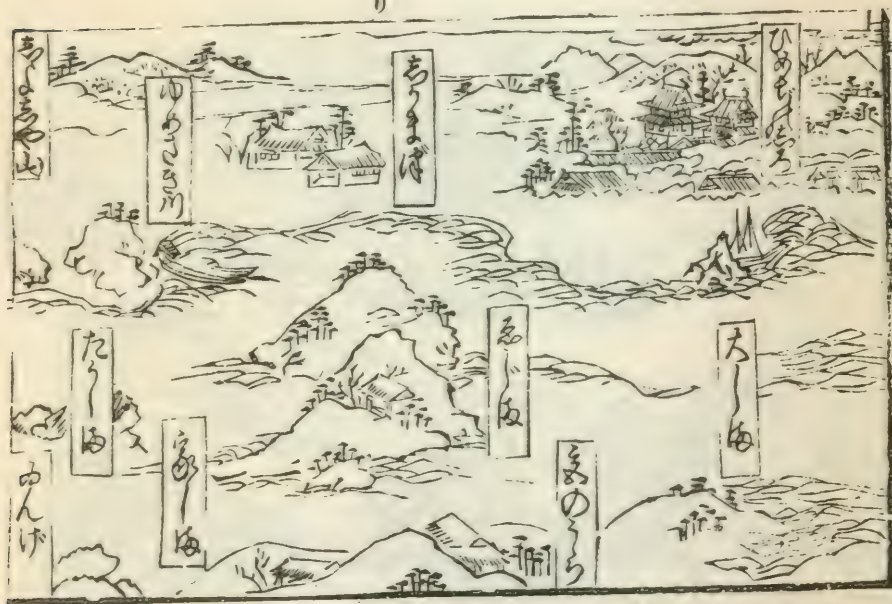
○宮浦　○眞浦　○家嶋

○高嶋　○ゐんげ嶋

此嶋〳〵繪嶌につゞきたる所也

○網干　民家の立つゞきたる津也此南の

沖に見ゆる　○たち花の浦

○今田　○岡部　○小豆嶌

○室津 大湊也

友さそふ室の泊の秋風に芦を帆にあけて出る舟人

○室の明神　○毛宇利の鼻○中の唐子

○沖の唐子　○冷邊　○かつら嶋

○きしま

此室の入海は西國第一の舟かゝり湯風呂あまた有遊女町さかりて風義のよき所也名物になめしの革細工人有

○那波　○さごし　○鍋嶋

○沉み石　大坂より三十里有

是より南の海上はるに讃岐のやしまの浦〳〵見ゆる

○津田の里　○志渡の嶋　○珠数嶋

○やくり寺　○古高松　○新珠嶋

房崎の浦といふも爰也

○次信か石塔有　○八しま

○那須与市馬立石有

是より又北の海邊也

○赤穂の御崎

移ひてあこの御崎の夕虹に山下近く五月雨のころ

○高山嶋（かうせん）　○中村　○取あげ嶌

○赤穂城主　浅野内匠頭殿

大坂より是まで三十一里行

○塩屋　焼塩の名物也

是より南の海邊に

○高松の城主　松平讃岐守殿

大坂ゟ舟路四十八里の所也

○泊（とまり）の礒　○松か浦

松か浦のとまりの礒と聞物を名にもさはらす歸る浪哉

○女木嶋　○男木嶋　○ちぶり嶋

○絃打山　○あや川

○牛窓(うしまど)　○木蓮寺　○前嶋

○小嶌　○くろしま

波より見ゆる小嶋の嶋かくれ行浦もなし君に別て

○虫明(むしあけ)の瀬戸

風あらき虫明のせとの夕闇に友呼かはす夜半の舟人

○岡山の城主　松平伊豫守殿

大坂より是迄四十五里なり此所の名物

海月(くらげ)白魚紫藻(しらも)あみさこ底鯢(そこにべ)焼物

○備前川　○金岡　○神崎

○つくえ　○片岡　○小串(をぐし)

○なけいし　○京の女良　○犬嶋

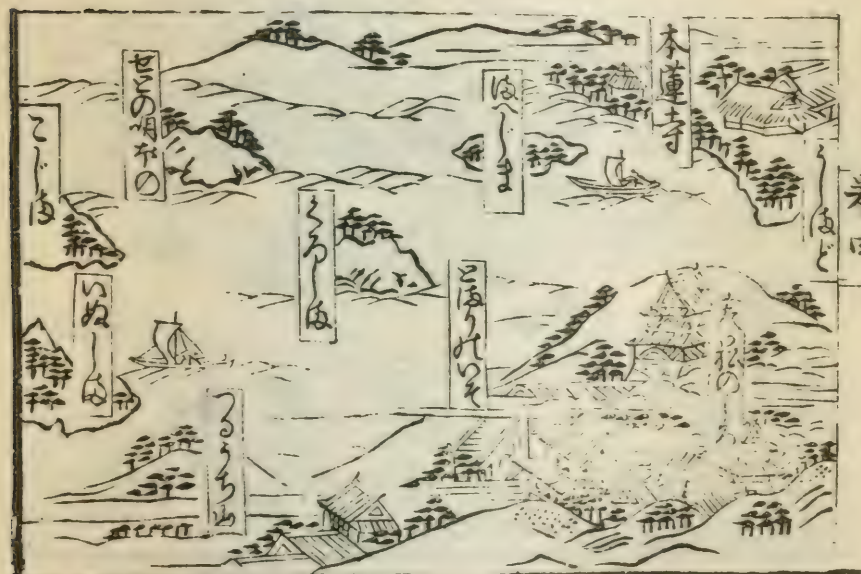
○唐琴(からこと)の泊

波の音の今朝からことに聞ゆるは春のしらへやあらたまるらん

都までひゝき通へるから琴は浪のをすけて風そ引ける

此沖のかたに名所の嶋〳〵有

○向ひ嶋　○寺嶋　○直嶋(なを)

○塩俵　○大藺頴(あふそゐ)　○柏嶌(かしは)

○蛇嶌(じや)　○包しま(つゝみ)　○竹の子嶋

○高田　人家あつて舟かゝりの所也北の
海邊備前の領內

○藤戸　○下津井
佐々木三良盛綱先陣わたせし入海也
○藤戸寺有　名物苔(のり)

○矢柄　○西の浦　○龜が嶋

○浮洲の岩　弁才天女立せ給ふ

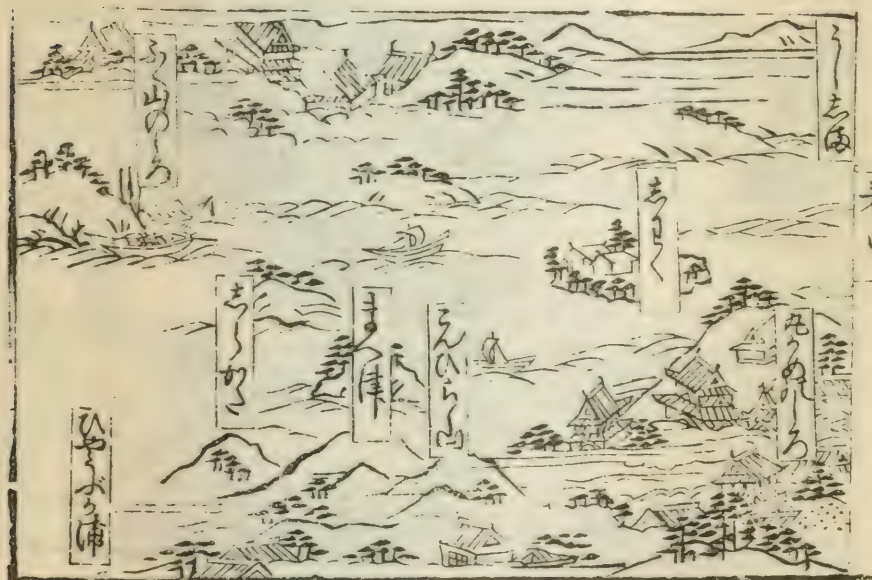
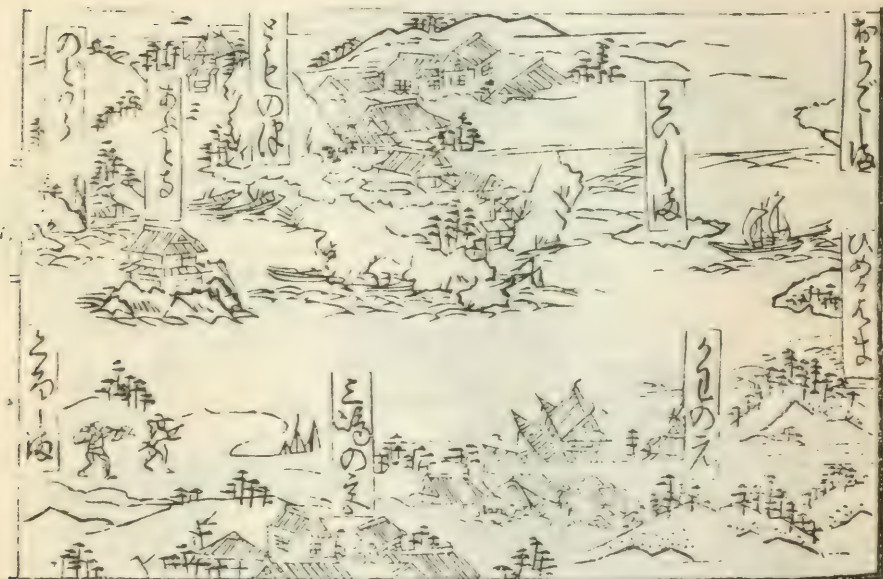
○呼松　○引網の浦　○赤崎
南の海中に

○白峯　○大槌嶌　○小槌嶌

○丸龜の城主　京極備中守殿

○牛嶌　○塩屋　○多戸津

○前津　○金比良山(こんひら)

社領三百二十石別當金光院
○塩飽 人家あつて舟かゝりの所也
名物石海鼠 ○弁才天嶋
○出嶋 ○小出嶋 ○廣嶋
○白潟 ○三角屋敷
弘法大師御誕生の所也
○いや谷 ○屛風か浦
○箱の御崎 ○觀音寺
是より北備後の海邊つゝき
○宮浦 ○帆面嶋 ○無口嶌
○水嶌 ○ひしやく嶋 ○眞鍋嶋
○布殘嶋 ○白石しま
○福山の城主 水野美作守殿
大坂より五十里也名物眞若素麵
○みのしま ○全盛嶋 ○はしり嶋

○姫が濱　讃岐伊豫の堺也
沖津浪に沈もやらす戀嶋のはるかにへたつ姫か濱哉
○ちこが嶋　○戀嶌
○川の江の城跡
　○三嶋の社
○をび嶌　○はかま　○うし嶋
○黒嶌　○氷見
　北の海邊は備後路也
○鞆の津
○室野の浦　昔日はたはれ女有し所
旅ねして月斗こそ鞆の浦礒の室野に明ぬ此夜は
○蜜語の橋　礒邊の里はづれに有
熊野なる音なし川に渡さはやさゝやきの橋忍ひ〳〵に
○風早の浦　風早の濱伊豫に有
礒の松寐覚の秋をつけ越てよの所より風早のうら
○あぶとの觀音　海中に立せ給ふ

○野戸原　○草深　○和布苅瀬戸

是より又南の海邊伊豫路

○西条の城　松平左京太夫殿

○國分山　○拜仕

○今治の城主　松平駿河守殿

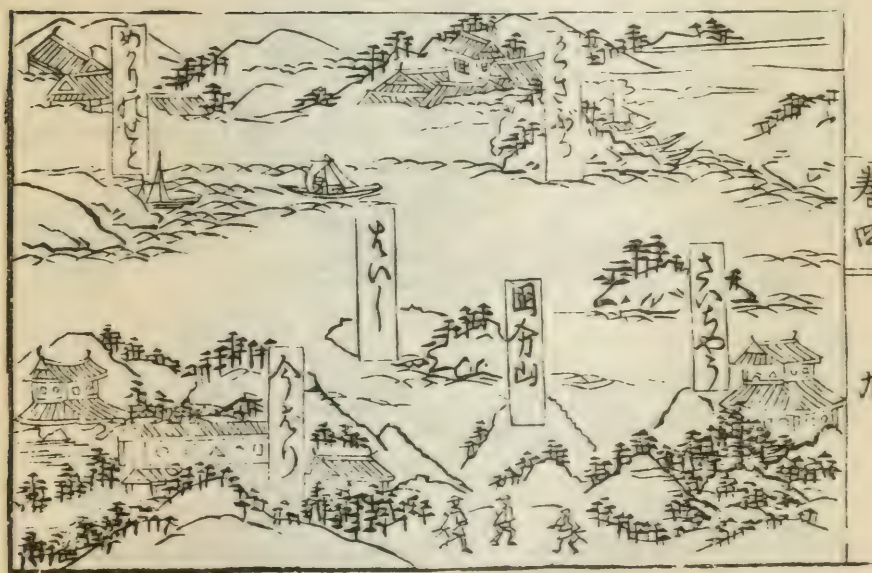
○むじま　○くるしま

○宮崎　○新町

○菊間　○濱村　○原

○淺海

○有明濱

世の中に明有のはまも有物を人の心の闇となしける

○いと崎　○庭嶋　○瀬渡田

○山伏の瀬戸　○岩本

○犬が瀬　○大ば嶌　○湯下

○三原の城　松平安藝守殿領

名物酒

○尾の道　名物焼物

○三嶋の社　○鼻ぐりの瀬渡

此わたり汐のさし引はやく難所なり

○十八女嶋　○形見の瀬渡

○岡村　○土井嶋のせと

○かしは嶌　○唐舟嶋　○大浦

○向ひ浦　○向ひかまがり

○宮森　○田戸

○淺黄の瀬渡

ふる雪に嵐も白く詠めしが淺黄に替るせとの夕浪

○かまがりの瀬渡

五月雨に礒の屋遠く拾小舟苅て栲なん蒲のうき草

○三瀬　○下嶋

○蒲苅(かまがり)嶌　○宮が崎　○北条

○風早の濱

うき雲の晴て行衛は風はやの濱の夕月さへ渡る哉

○柳原　○堀江

○松山の城主　松平隠岐守殿

名物平素麵(さうめん)　釣簾(すだれ)

○湯桁(ゆげた)

伊与の湯のゆけたの数は左八つ右は九つ中は十六

○高濱　○三津

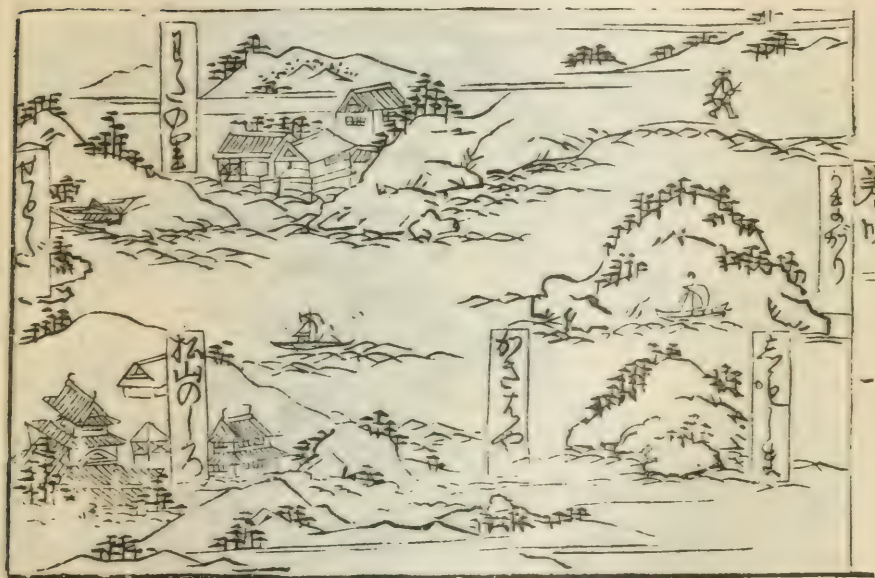
○伊与の高根

雲間なるいよの高ねの時鳥月より外に聞人もなし

是より北の海邊也

○和田の里　○野うじ　○瀬戸田

○横嶌　○觀音　○大嶋

○鐙しま　○上の瀨戸　○岡崎嶌

是より南の海伊豫路也

○はま村　○長濱

○大洲の城主　加藤遠江守殿

○由浦嶌　○羽崎

是より北の海ばた安藝の内

○吉松　○二瀨嶋

○横崎　○かしは嶌

○猫嶌　○三つ瀨

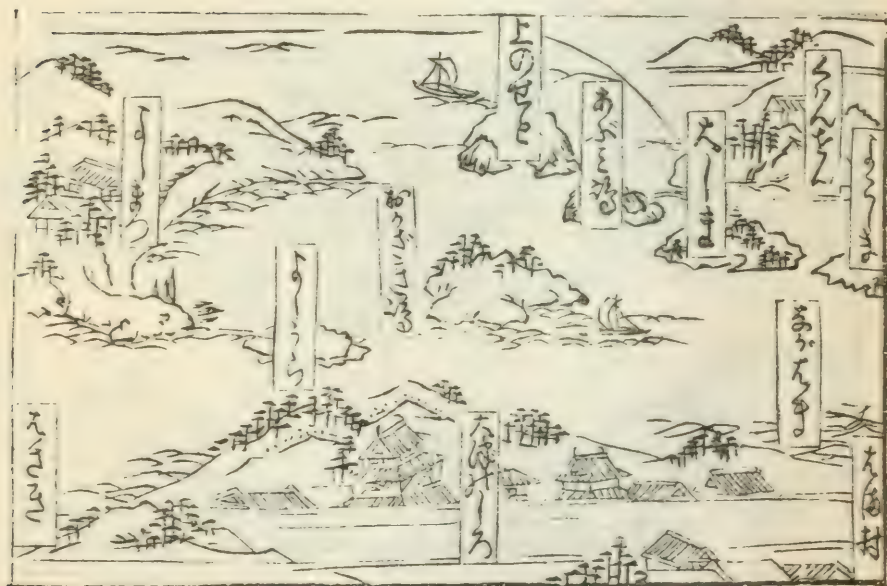
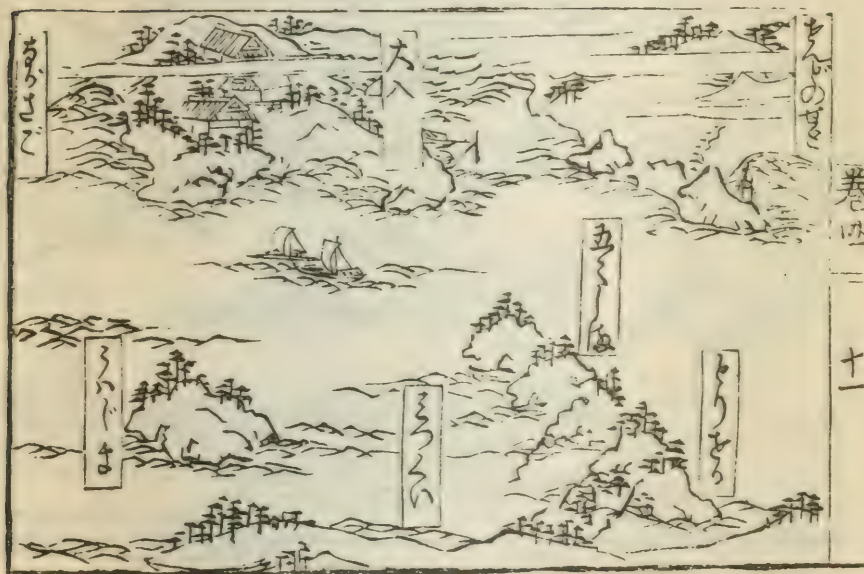
○ひろ　○せび　○かうら崎

○鳥のひら　○まちだ

○あかの里　○大入　○なかさこ

○いつきじま○上くろ嶋　○下くろ嶋

○大なげ嶋　○こなげ嶋

○龜が首　○くらはし嶌

○おんどの瀬戸　○宮原
○大入　○長佐古(ながさこ)　○吉浦
○大屋　○白濱　○江田嶋
○東能美　○西能美　○江波嶋
○片山嶋
○廣嶋城主　松平安藝守殿
○草津　○井の口
○高洲嶌　○五日市　○廿日市
○巖嶋(いつくしま)明神　推古(すいこ)天皇(てんわう)三十二年にはしめて御殿(でん)建立(こんりう)
此嶋大竜の形風景ならひなき所也人家立つゞき六月の市芝居の色〳〵爰に集(あつま)る　○遊女町有
是より又南のかたの海邊也
○鳥岡　○五五嶋　○三杭
○うはしま　○道嶋　○二桝

○佐田の御崎

是より北の海邊也

○地の御前　○大野　○黒川

○小方　○由見　○大竹

○甲嶋　是は安藝周防の堺也

是より周防のうち也

○和木の浦　○裝束濱

○室木　○今津　○車村

○柳井

丸雪ふる今朝の嵐の吹落て柳井の底にくたく玉水

○菴田　○由宇　○八代嶌

○禿　○大万の鼻

○すはな　○伊保の庄　○池野

○千把かたげ　○になひ

○あいの浦

○上の關　舟かゝりの濱也

○長嶋　○よこしま

○をへふり　○いわうが嶋

○尾國　○小部　○佐賀

○曾根　○大渡の入口

○草紙嶌　○高嶌　○室仕

○大野　○ゐにく濱　○麻江の嶋

○勝間浦　○大しま

○祝ひ嶋

詠ふる汀の㕝の風もなく君が千とせをいわふなか嶋

○可良浦　○竈戸

是より南のかたの海邊豊後

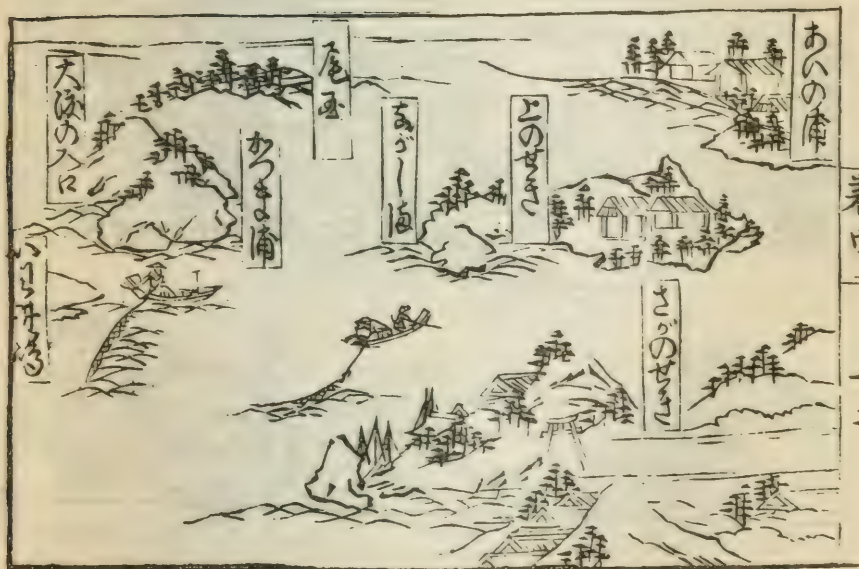
○佐賀の關　舟かゝりの湊也

關の權現立せ給ふ

○鶴崎　○野津

是より北のかたの海邊周防

○室積

むろすみや竈を過る舟なれは物を思ふることかれても行

○つげん　○光井

○嶋田　○淺江村　○水無瀬嶋

○東市　○宮の洲

○くた松　大煎海鼠の名物有

○おし嶋山　○とをし

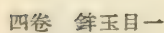
○相嶌　○がきど嶋

○かさど　○若浦　○火ふりが鼻

○みとり嶌　○はうすい

○すどしま　○たる嶋　○泉水山

○浮野　○むし

○徳山　毛利日向守殿

是より南の海邊豐後也

○苻内(ふない)の城主　松平對馬守殿

○牛嶌　○ひぢ

○姫嶌

波枕おのつからなる姫嶋やつまなし御何うらみなく

○北浦邊　○湯(ゆ)の嶽(たけ)

ゆのたけや今も吹風袖さへて雪打拂ふ谷の卯の花

○とむく

是より北の海邊周防の内

○三田尻　松平長門守殿舟手屋敷

○天神の社　○田嶌

○小泊　○鯖(さば)嶌　○中野

○右田　○花田　○岩屋

○小部津　○丸屋の鼻　○あちづ

○きわ村　○床浪村　○こえ嶋

是より南の海邊豊後路也

○竹田の城主　中川佐渡守殿

名物大豆

○おび村　○松久

是より北の海邊長門の內

○宇部　○かりや　○山本の鼻

○藤まがりの村　○道が鼻

○汐見村　○干珠嶌

○滿珠嶋

此ふたつの嶋は神軍の時海中になけさせ給ひ汐の滿干(みちひ)のありける所也沖のかたにまんじゆ嶋汀にちかきは干珠嶌也

是より南の海邊豐後

○竹嶋

○木附の城主　松平市正殿

○高田

○宇佐八幡宮　豐前の一宮也

世の中のうさには神もなき物を何祈るらん心つくしに

○中津の城主　小笠原信濃守殿

○白山　○白根　○田の浦

○早戸茂明神　○門司村

毎年十二月卅日の夜半に社人海中はるかに入て和布を苅是を和布苅の神事といへり

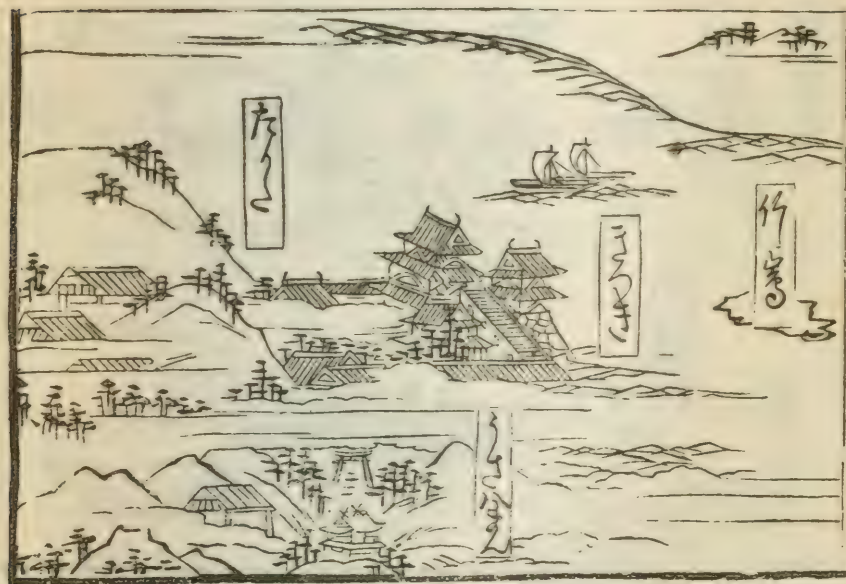
○內裏　平家此所を取立る

○柳が浦　左中將清經最期の所

見わたせは柳か浦の櫻花爰も都の跡ふりにけり

○赤坂　○長嶌　○高濱

是よりや天の川原につゝくらん星かと見ゆる菊の高濱

○蓑嶌

とよ國のみのしま山の時鳥かしらや雨にぬれて鳴らん

○柴津山　○笠結嶋

しはつ山打出て見れはかさゆいの嶋漕歸る棚無小舟

○小倉の城主　小笠原遠江守殿

此所の名物　権帯　同柄糸

さんぐはん飴　ちゝみ布

○彦山　豊前豊後筑前此三ケ國に根さし有

大山也此所に七不思義大木有根元は杉

にして末はさまざまやとり木七色也

刀鍛冶行平か父源正坊定秀此山住僧也

是より北の海邊長門の内

○長府の城主　毛利甲斐守殿

○八幡宮　○あみだ石　○濱の八幡

○門司關　○赤間が關とも

旅人の心つくしの道なれや往來ゆるさぬ門司の關守

書絶てへだつる中と成にけり見し玉つさのもしのせき守

硯切まへの細道ほのくれて薄く書なすもしの玉つさ

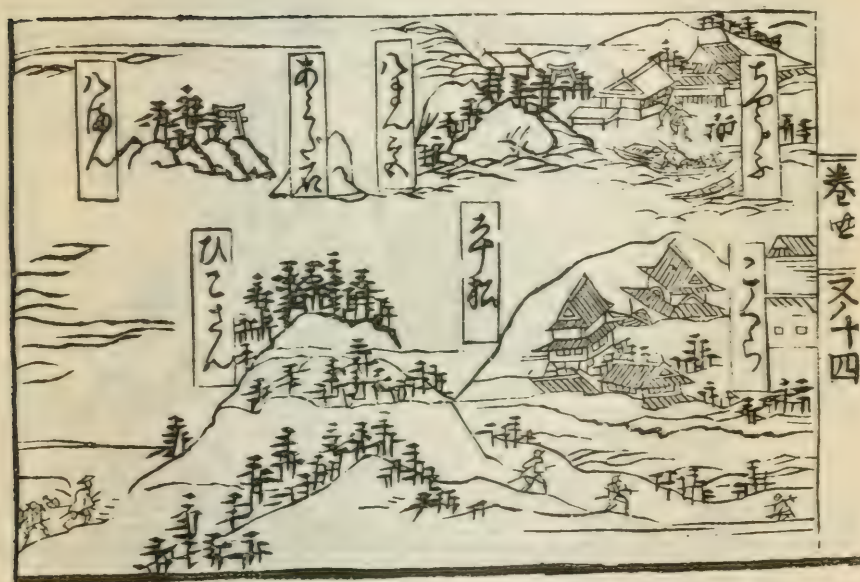
此所硯石の名物也

此關今の下の關なり舟かゞりのよき大
湊也遊女ある所をばいなり町といへり

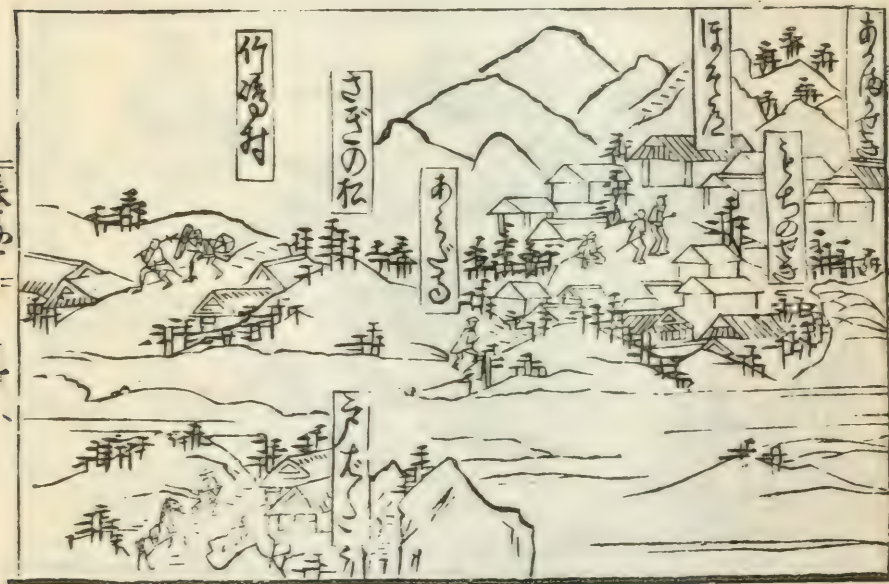
○阿弥陀寺　清盛の御影あり

此外平家の一門殘らす有

○鷲の松

左中將清經詠めしと也

○竹嶋村　○干珠嶌
○ひしま　○びく嶋
○小通り嶌　○今浦
○いかき　○沖のもつれ
○地のもつれ　○ひんちの鼻
○間の嶋　○小友　○西間の嶋
是は長門の國の分
又南の海ばた筑前の内也
○戸畑　○黒崎　石を焼所也
○若松町　○小石　○脇田
○岩屋　○御崎　○山家鹿
○小熊　○泉地　○當蓮寺
○芦屋　此所の名物釜
○岡の湊
みつくきの岡の湊の浪の上に数書捨て歸る雁金
○内浦の濱　○宗像

○秋月の城主　黒田甲斐守殿

○白濱　○桂潟

神代に異國をしたかへ給ひてかつら嶽といふ所にのぼりかつ浦とのたまふより勝浦といへり

○身のうき濱　○宰府の天神

此安樂寺は醍醐天皇延喜十九年に建立

○西の都　○木丸取

○朝倉山　○思ひ川　○染川

黒川絶す流るゝ水のあはのうたかた人にあはて消めや

染川をわたらん人のいかてかは色になるてふ事のなからん

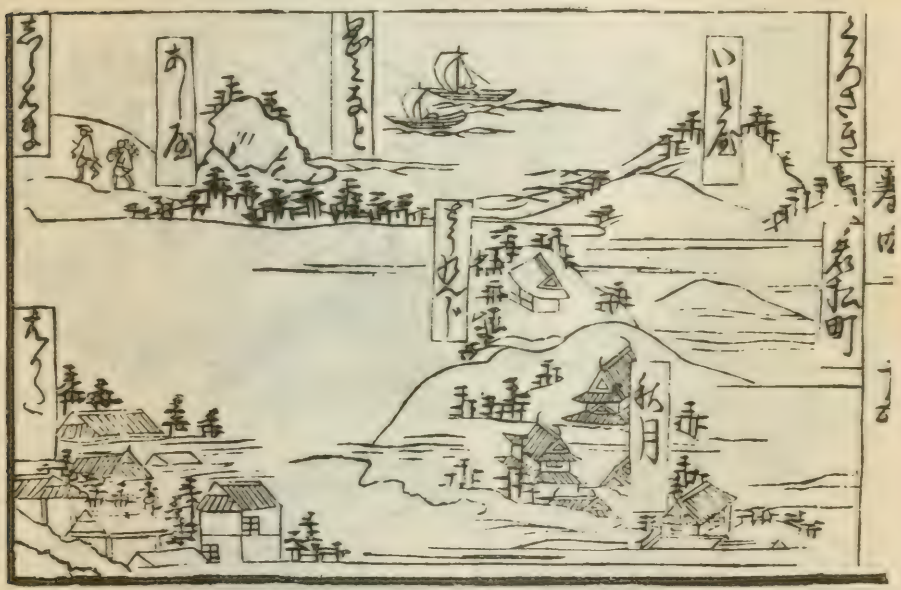
○幸の橋　○三笠山　芦城山

○博多　名物　ねり酒　遊女柳町ニ有

○福岡の城主　松平右衛門佐殿

○鐘が崎　南都大佛の鐘此所の沖に沈む

海次良といふかね也

○志嘉の嶌　　○海の中道

しかのあまの釣にともせるいさり火のほのかに妹をみるよしも哉

秋風に汐干の月のかつらかた山にもつゝく海の中道

○野古の嶋　○唐泊（からとまり）　○袖の湊

から泊りこの浦浪立ぬ日はあれとも君を戀ぬ日はなし

○箱崎　八幡宮立せ給ふ

幾世にか語り傳へん箱崎の枩のちとせの一つならねは

此所に戒定恵（かいぢやうゑ）の箱を埋ませ給ふしるしの松有此國の一の宮也

○生（いき）の松原

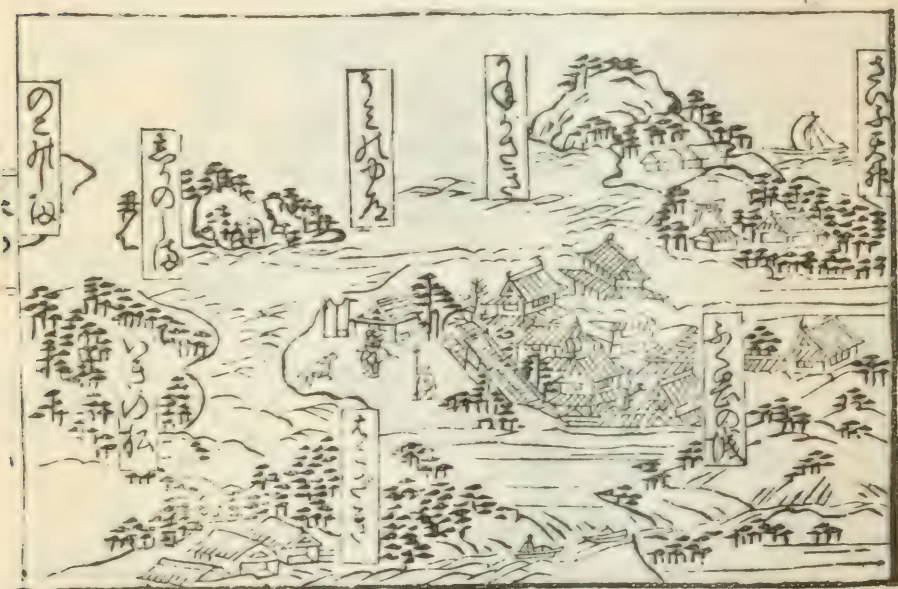
祈りつゝ千代かけたる藤浪に生の松こそ思ひやらるれ

涼しさは生の枩原増るともそふる扇の風な忘れそ

○香椎（かしい）潟

ちはやふるかしゐの宮の杉のはを二たひかさす我君そきみ

○三笠山

やさしくも我濡きぬをきつる哉三笠の山を人にかられて

○大嶋　○鰹嶋　○鼻黒
○しんくうじ○そがはな
○あの嶋　○銘の濱　○今津
○西の浦　○玄界か嶋　大灘也
○竈山
春はもへ秋はこかるもかまと山霞も霧も煙とそ成る
○中の御崎　○吉井
是より南西のかた筑後
○久留米の城主　有馬中務太輔殿
○ぬれせぬ山　○高良山　○一夜川
共まゝに後の世もしらす一夜川渡や何の夢路なるらん
○柳川の城主　立花飛彈守殿
此所の名物　海竹　女冠者　あげまき
是礒貝也
○三池　立花和泉守殿
此所の名物　賀留多

○住吉の宮　○榎の木津
有馬中務殿領內也此所より久留米に行
船入
○寺井　是より肥前の領內也
此所より長崎へ乗舟有四十八里又南の
かたはるかに肥後
○熊本の城主　細川越中守殿
名物うねもめん　すいせんしのり
○鬼風山　○阿蘇の嶽　○裸嶌
肥後の國うとの內成裸嶋きれたる浪や衣なるらん
○宇土の長濱　はゝかの御調此所ゟ
○八代城有　越中守殿持
此所の名物蜜柑

是より肥前の内

○蓮の池　明神の社有

○竜藏寺の城主　鍋嶋加賀守殿

○姫嶌　○羽嶋　○濱前

○高嶋　○かしは嶋　○神集嶋

○玉嶋川

梅か香や先移らんかけ淸き玉嶋川の水のかゝみに

玉嶋や落くる鮎の川柳下葉より散秋風そ吹

たま嶋や川せの浪の音はして霞に浮む春の月影

○川上

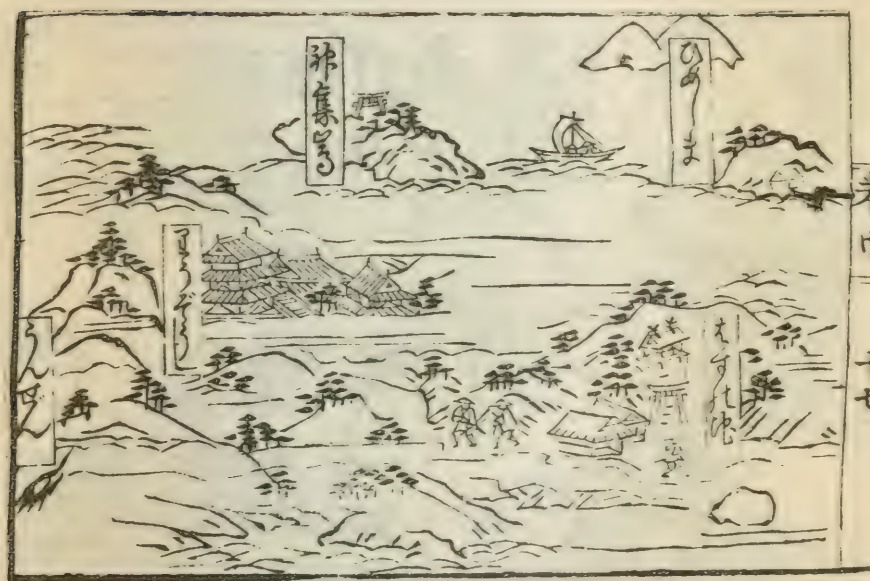
柴舟の波の花かとしら玉の椿手折て誰に見すらん

川上や谷陰深く見わたせは椿も同し水の白玉

○雲仙が嶽　此所より硫黄出る

出湯有

○嶋原の城主　松平主殿頭殿

天草名物鑓の柄樫砥石出る

○伊佐葉井　　松平丹後守殿持

○唐津の城主　　松平和泉守殿

○今万利　此所より染付の焼物出る

○そこはへ嶋○間家　○妙見浦

○呼子の浦

夕くれて呼子の浦によふ衛我声なから我も覚へす

○あま町　○友高嶋

○名古屋　大湊也つしまへも是より乗

○わへさきの鼻

○かり屋　大湊也　○まんかう嶌

○二神嶋　○かつき嶋　○くろしま

○大嶋・　○飯盛嶋　○九十九嶌

○松浦潟　名物いはし

木のまよりひれふる袖を余所に見ていかゝはすへき松らさよ姫

小夜更て堀江こく我松浦舟かち音高し身をはやみかも

あい見んと思ふ心は松浦成鏡の神や空にしるらん

是まで肥前の北海也

○長崎　大湊也

此所は唐舟の入津にして薬種端物糸鮫伽羅萬の唐物商賣人家つゞきて竈数九千弐百九十三軒の所也

○丸山　遊女町風俗よき所也

○出嶋　阿蘭人を置せらるゝ所也

○舟入左右番所

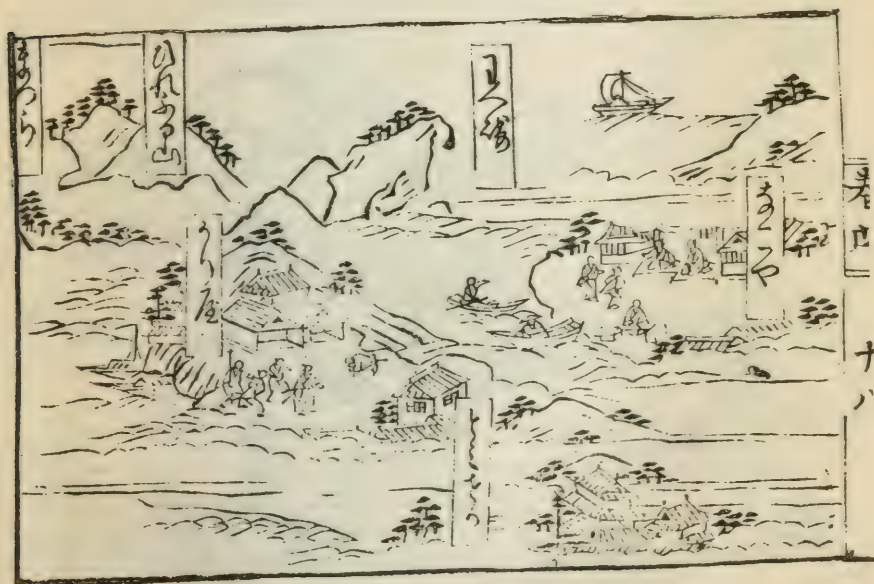
松平右衛門佐殿

松平丹後守殿

是より唐國への海上

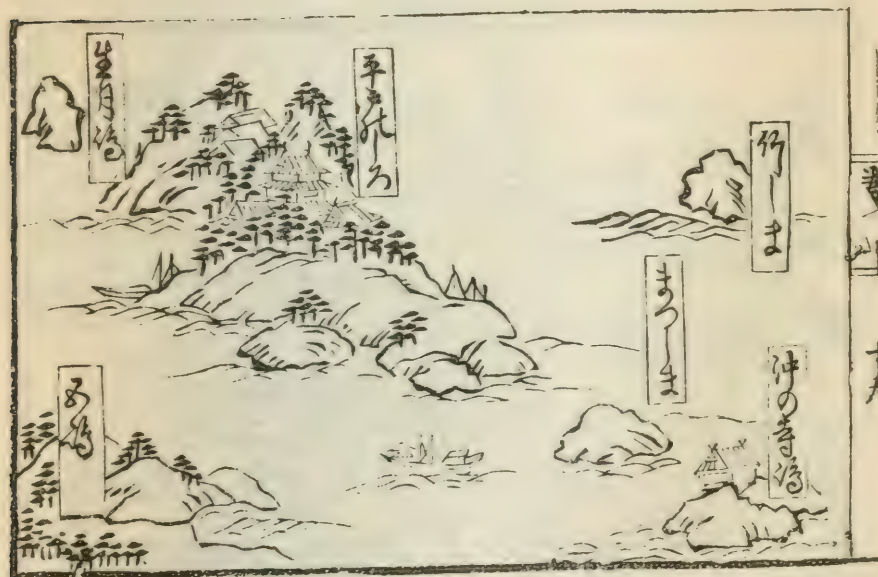
○高麗迄百四十四里

○南京迄三百十五里　○琉玖迄五百里

○高砂迄五百四十里　○福州迄五百四十里

○ちやぐちう迄五百四十里
○ひよう迄六百四十里　○天川迄七百二十里
○河内迄九百里　○ばろしなん迄千里
○ろはん迄千八十里　○東京迄千四百二十里
○ちやんはん迄千六百六拾里
○まろふか迄千六百九十里
○かぼうちや迄千七百弐拾里
○しやむ迄弐萬百五拾里　○はんたん迄弐千十里
○咬𠺕吧迄弐千百六拾里
○まかさる迄四千百十里
○ゐんでいや迄四千百四十里
○こは迄四千百十里
○さんろれんば迄五千弐百五拾里
○いすはんや迄一万千七百三十里
○いげれす迄一万弐千六百七十五里
○おらんだ迄一万三千弐百里

○らうま迄一万三千弐百三十里
右は日本道の積り也
○大村の城主　大村因幡守殿
此所の名物鯨也
○牛かしら　○蛤の瀬渡　○寺嶋
○小嶋　○かきふ嶋　○こだて嶋
○大だて嶌　○松嶋　○大瀬戸
○七つが瀬　○手くま　○きはん
○上の嶋　○ちごしま　○高鉾
○沖の寺嶋　○大崎　○竹嶋
此嶋〳〵長崎の西海也
○平戸の城主　松浦肥前守殿
○さきだ　○かつをしま○黒嶋
○うすが　○河内浦　○ごくつん嶋
○高瀬嶋　○唐崎
○生月嶋　○たての濱　○いちぶ

○五嶋　五嶋淡路守殿

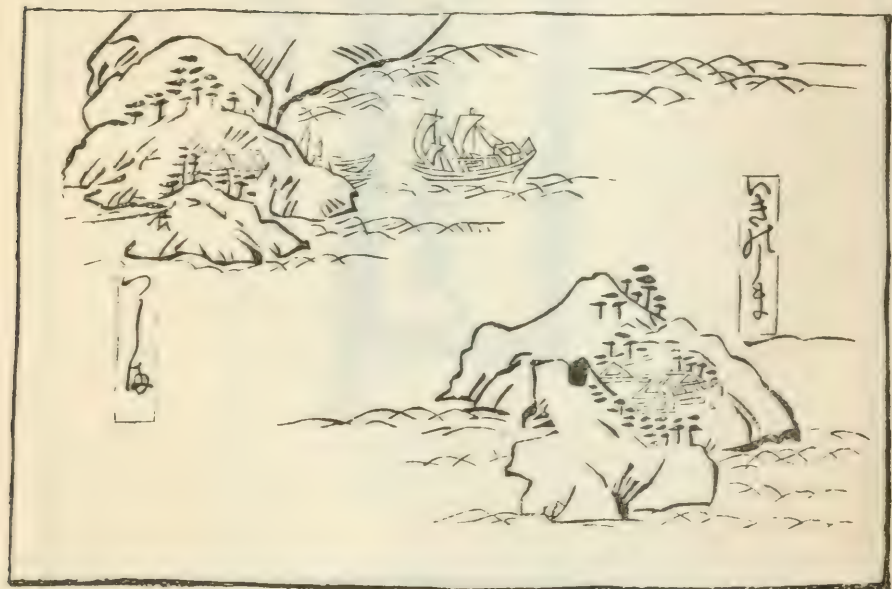
此所の名物錫(すゞ)

○壱岐　人家有筑前ゟ四十八里

長崎よりも四十八里　又

是よりつしまへ四十八里

○對馬(つしま)の城主　宗對馬守殿

鷹人參竜門　朝鮮國ゟ渡ル

久かたの入日の海まて浪風ゆたかに舟
よくわたりて浦〳〵嶋〳〵の名所是に
書つゝけて眞砂はつきぬ今の御代の廣
き道の道を見るためにもなりぬへし

元禄弐年己巳正月吉日

大坂高麗橋心斎橋筋南入

雁金屋庄兵衛

世間胸算用

大晦日ハ一日千金　一

松の風靜に初
曙の若ゑひす
〳〵諸商人買
ての幸ひ賣て
の仕合扨帳閉
棚おろし納め
銀の藏ひらき
春のはしめの
天秤大黑の打
出の小槌何成
ともほしき物

それ〳〵の智
恵袋より取出
す事そ元日よ
り胸算用油断
なく一日千金
の大晦日をし
るへし

元禄五中歳
初春

難波
西鶴 [枩壽]

胸算用 大晦日ハ一日千金 巻一

目録

三

伊勢海老ハ見なれ模
状の書簡一通一銭
大御目に源厳乃大覚

四

藝胤まん三文づし
蔵風呂の中の香露
大御かに獲ききな宿

問屋の寛濶女

世の定めとて大晦日は闇なる事天の岩戸の神代このかたしれたる事なるに人みな常に渡世を油斷して毎年ひとつの胸算用ちがひ節季を仕廻かね迷惑するは面〳〵覺悟あしき故なり一日千金に替がたし錢銀なくては越れざる冬と春との峠是借錢の山高ふしてのぼり兼たるほだしそれ〳〵に子といふものに身躰相應の費さし當つて目には見えねど年中につもりてはきだめの中へすたり行はま弓手まりの糸屑此外雛の摺鉢われて菖蒲刀の箔の色替り踊たいこをうちやぶり八朔の雀は珠数玉につなぎ捨られ中の玄猪を祝ふ餅の米氏神のおはらい團子弟子朔日厄拂ひの包錢夢違ひの御札を買など寶舟にも車にも積餘るほどの物入ぞに近年はいづかたも女房家ぬし奢りて衣類に事もかゝぬ身の其ときの浮世模やうの正月小袖をたくみ羽二重半疋四十五匁の地絹よりは千種の細染百色かはりの染賃は高く金子一兩宛出して是さのみ人の目たゝぬ事にあたら金銀を捨ける帶とてもむかしわたりの本繻子一幅に一丈二尺一筋につき銀二枚が物を腰にまとひ小判二兩のさし櫛今の直段の米にしては本俵三石あたまにいたゞき襠も本紅の二枚がさね白ぬめの足袋はくなどむかしは大名の御前がたにもあそばさぬ事おもへば町人の女房の分として冥加おそろしき事ぞかしせめて金銀我ものに持あまりてすればなり降ても照ても昼夜油斷のならざる利を出す銀かる人の身躰にてかゝる女の寛活能〻分別しては我と我心の恥かしき義なり明日分散にあふても女の諸道具は遁るゝによつて打つぶして又取つき世帯の物種にするかと思はれける惣して女は鼻のさきにして身躰たゝきるゝ宵迄乘ものにふたつ灯挑月夜に無用の外聞闇に錦のうは着湯わかして水へ入たるごとく何の役にも立さる身の程死れたる親仁持佛堂の隅から見てうき世の雲を隔ければ悔みても異見は成かたし今の商賣の仕かけ世の僞りの問屋なり十貫目が物を買て八貫目に賣て銀まはしする才覺つまる所は内證のよはり來年の暮には此門の戸に賣家十八間口内に藏三ヶ所戸立具共まゝ疊上中二百四十疊外に江戸船一艘五人乘の御座ふね通ひ舟付て賣申は來ル正月十九日に此町の會所にて札をひらくと沙汰せられ皆人のものになれば佛の目には見えすきて悲しく定めて仏具も人手に渡るべし中にも

唐かねの三ッ具足代〻持傳えて惜ければ行先の七月霊祭りの送り火の時蓮の葉に包みて極樂へ取て歸るべし迚も此家來年ばかり汝が心根もそれゆへ丹波に大分田地買置引込所拵らへけるは中〳〵無分別なり我賢こければ我に銀借ほどの人も又利発にてひとつ〳〵吟味仕出し皆人の物になる事なりよしなき惡事をたくまんよりは何とぞ今一たび商賣仕返せ死でも子はかはゆさのまゝに枕神に立て此事をしらすぞと見し姿あり〳〵との夢は覺て明ければ十二月廿九日の朝寐所よりも大笑ひしてさても〳〵けふと明日とのいそかしき中に死んだ親仁の欲の夢見あの三ッ具足お寺へあげよ後の世迄も欲が止ぬ事ぞと親をそしるうちに諸方の借錢乞山のごとし何とか埒を明る事ぞと思ひしに近年銀なしの商人共手前に金銀有ときは利なしに兩替屋へ預け又入時は借る爲にしてこざかしきもの振手形といふ事を仕出して手廻しのたがひによき事なり此亭主も其心得にして霜月の末より銀弐拾五貫目念比なる兩替屋へ預け置大拂の時米屋も呉服屋も味噌屋紙屋も肴屋も觀音講の出し前も揚屋の銀も乞にくるほどの者に其兩

替屋で請とれと振手形一枚づゝ渡して萬仕廻ふたとて年籠りの住吉参胸には波のたゝぬ間もなしこんな人の初尾はうけ給ふてから氣づかひ仕給ふべしさればその振手形は弐拾五貫目に八十貫目あまりの手形持かくる程に兩替には筭用指引して後に渡そふ振手形大分有とさま／＼詮議するうちに又掛乞も其手形を先へ渡し又先からさきへ渡し後にはどさくさと入みだれ埒の明ぬ振手形を銀の替りに握りて年を取ける一夜明れば豊かなる春とぞ成ける

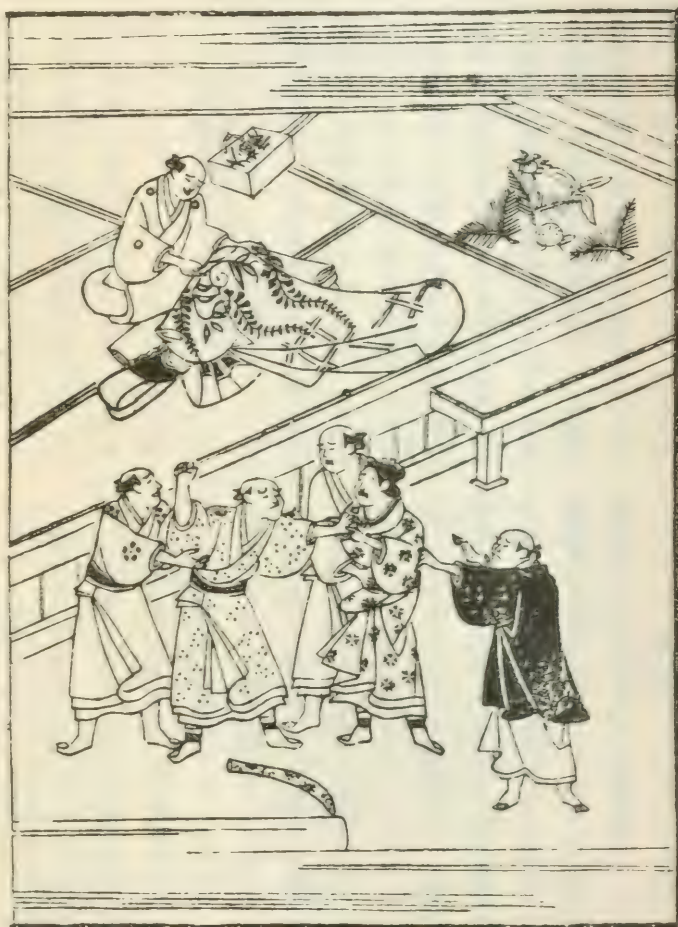
長刀はむかしの鞘

元朝に日蝕六十九年以前に有て又元禄五年みづのえさる程に此曙めづらし暦は持統天皇四年に儀凰暦より改りて日月の蝕をこよみの證據に世の人是を疑ふ事なし口より見盡して末一段の

大晦日になりて淨瑠り小うたの声も出ずけふ一日の暮せはしくと更小家がちなる所は喧嘩と洗濯と壁下地つゞくると何もかも一度に取ませて春の用意と

ていかな事餅ひとつ小鰯一疋もなし世に有人と見くらべて淺間敷哀れなり此相借屋六七軒何として年を取事ぞと思ひしにみな質だねの心當あればすこし

も世をなげく風情なし常住身の取置屋賃其晦日切にすます其外に萬の世帯道具あるひは米味噌焼木酢醤油塩あぶら迄も借人なければ万事當座買にして朝夕を送れば節季〳〵に帳さげて案内なしにうちへ入るものひとりもなく誰におそれて詫言をするかたもなく樂みは貧賤に有と古人の詞反古にならず書出し請て濟さぬは世にまぎれて住ける昼盗人に同し是を思ふに人みな年中の高ぐゝりばかりして毎月の胸筭用せぬによつてつばめのあはぬ事ぞかし其日過の身は知たる世帯なれば小づかひ帳ひとつ付る迄もない事也さる程に大晦日の暮方まで不斷の躰にて正月の事ども何として埒明る事ぞと思ひしにそれ〳〵に質を置ける覺悟有て身仕廻するこそ哀れなれ一軒からは古き傘一本に綿繰ひとつ茶釜ひとつかれこれ三色にて銀一匁借て事すましける又其隣にはかゝが不斷帯くはんせこよりに仕かへて一すじ男の綿頭巾ひとつ蓋なしの小重箱一組七ッ半の筬一丁五合升壱合升二ッ湊焼の石皿五枚釣御前に仏の道具添て取集て二十三色にて壱匁六分借て年を取ける其ひがし隣には舞〳〵住けるが元日より大黒舞に商賣を替ければ五匁の面張貫の槌ひとつにて正月中は口過すれば此烏帽子ひたゝれ大口はいらぬ物とて弐匁七分の質に置てゆるりと年を越ける其隣はむつかしき紙子牢人武具馬具年久しく賣喰にして小刀細工に馬の尾にてしかけたる鯛鈎もはやりやめば今といふ今小尻さしつまりて一夜を越べき才覺なく似せ梨地の長刀の鞘をひとつ質屋へもたしてつかはしけるにこんなものが何の役に立べしと手にしばしももたずなげ戻しければ牢人の女房其儘氣色を替人の大事の道具を何とてなげてそこなひけるぞ質にいやならばいやですむ事なり其うへ何の役にたゝぬとは爰が聞所じやそれはわれらが親石田治部少輔乱にならびなき手がらあそばしたる長刀なれとも男子なき故にわたくしに譲り給はり世に有時の嫁入に對の挟箱のさきへもたせたるに役にたゝぬものとは先祖の恥女にこそ生れたれ命はをしまぬ相手は亭主と取付て泣出せばあるじ迷惑してさま〳〵詫てもきかず其うちに近所の者集りてあのつれあひ牢人はねだりものなれば聞つけ來ぬうちに是をあつかへといづれも亭主にさゝやき錢三百と黒米三升にてやう〳〵にすましける扨も時世かな此女もむかしは千二百石取たる人の息女萬を花車にてくらせし身なれ共今の貧につれて無理なる事に

人をねだるとは身に覺て口おし是を見るにも貧にては死れぬものぞかしすでに曖ひ濟て三百三升請取此黑米取て歸りて明日の用にたゝぬといへば幸ひこれに碓有とてかしてふまして歸しける是ぞ世にいふさはり三百なるべし又牢人の隣に年ごろ三十七八ばかりの女親類とてもかゝるべき子もなくひとり身なりしが五六年跡に男にはなれたるよしにて髮を切紋なしのものは着ども身のたしなみは目たゝぬやうにして昔を捨ずしかもすかたもさもしからず常住は奈良苧を挑みのやうにひねりて日をくらせしがはや極月初に万事を手廻しよく仕廻て割木も二三月迄のたくはへ肴かけには二番の鰤一本小鯛五枚鱈二本かんばしぬりばし紀伊國五器鍋ふた迄さらりと新しく仕替て家主殿へ目くろ一本娘御に絹緒の小雪踏お內義へうね足袋一足七軒の相借屋へ餅に牛房一抱つゝ添て礼義正しくとしを取ける人のしらぬ渡世何をかして內證の事はしらす其奥の相住に二人の女有しか一人は年も若く耳も目鼻も世の人に替る事なくて一生ひとり過して悲しく鏡見るたびに我ながらよこ手うつて是では人も合点せぬ筈と身の程を觀じける

又一人は東海道關の地藏に近き旅籠屋の出女せし時木賃泊りのぬけ參りにつらくあたり米など盗みし科にや同し世に報ひて米の乏しき鉢ひらき坊主となりて顔を殊勝らしく作り心の外の空念佛思へば心の鬼狼に衣ぞかし精進の事は忘れて鰯の頭も信心からとて墨染の麻衣を着ゆへに此十四五年も佛のお影にて毎朝修行に出しに一町にて二ところ宛の手の中二十所を集めて漸一合有五十丁懸廻らねば米五合はなし道心も堅固になくては勤めかたし過にし夏くはくらんをわつらひてせんかたなく衣を壱匁八分の質に置けるかそのゝち請る事成かたく渡世の種のつきける人の後世信心に替る事はなきに衣を着たる朝は米五合ももらはれ衣なしには弐合も勸進なし殊に極月坊主とて此月はいそがしきに取まぎれ親の命日もわすれくれねば是非もなく錢八匁にて年をこしけるまことに世の中の哀れを見る事貧家の邊りの小質屋心よはくてはならぬ事なり脇から見るさへ悲しきことの數〳〵なる年のくれにぞ有ける

三　伊勢海老は春の栬

神の松山草むかしより毎年かざり付たる蓬莱にいせゑびなくては有つけたるもの一色にて春の心ならす共年によりて各別ねだんの高き事有て貧家又は始末なる宿には是を買ずに祝儀をすましぬ此前も代〻の年ぎれしてひとつを四五分つゝの賣買なれば此替りに九年母にて埒を明ける是は大かた色かたちも似たりよつたりの物成しが伊せゑびの名代に車ゑびいかにしてもかり着のことくない袖ふる人は是非もなし世間をはつて棟のたかき内にはそれほどの風かあたつて北雨吹の壁に莚こもも成かたし湛墨の色付板包むなどこれらは奢にあらす分際相應に人間衣食住の三つの樂の外なし家業は何にても親の仕似せたる事を替て利を得たるは稀なり兎角老たる人のさしづをもるゝ事なかれ何ほと利発才覺にしても若き人には三五の十八ばらりと違ふ事數〳〵なりさまほどに大坂の大節季よろづ寳の市ぞかし商ひ事がない〳〵といふは六十年此かた何が賣あまりて捨たる物なしひとつ求れは其身一代子孫までも讓り傳へる挽碓さへ日〳〵年〳〵に御影山も切つくすべしまして蓮の葉物五月の甲正月の祝ひ道具はわづか朔日二日三日坊主寺から里への乱扇これらは明ずに捨りて世のつゐへかまはず人の氣江戸につゞひて寛活なる所なり

たとへ千貫すればとて伊勢ゑびなしに蓬萊を飾りがたしと家〱に調ければ極月廿七八日より所〱の魚の棚に買あげて唐物のごとく次第にむつかしくはや大晦日には髭もちりもなかりけり浦の苫屋の紅葉をたつね伊勢ゑびないか〱といふ声ばかり備後町の中ほとに永來といへる肴屋に只ひとつ有しを壱匁五分より付出し四匁八分迄にのそめとも中〱當年のきれ物とて賣ざれば使かはからひにも成がたくいそき宿に歸りて海老の高き事を申せば親父十面つくりてわれ一代のうちに高ひもの買たる事なし薪は六月綿は八月米は新酒作らぬ前奈ら晒は毎年盆過て買置年中限銀にして勝手のよき事計此以前父親の相はてられし時棺桶ひとつ樽屋まかせに買かづきて今に心かゝりなり伊勢ゑびがなふて年のとられぬといふ事有まじひとつ三匁する年ふたつ買ふて算用を合すべしないもの喰ふと云年徳の神は御座らいでもくるしうない事四匁が四分にてもゑびは沙たのない事と機嫌わるしされ共内義男子とひとつになつて世間はともあれ聟が初めて亂にわせて伊勢ゑびなしの蓬萊が出さるゝものか何ほどにてもそれを買と重て人をつかはしければはや今橋筋の問屋の若ひもの買取て尤五匁八分にねだんは定めたれども正月のいはゐの物はしたがねは心にかゝると錢五百やりて海老取て歸る其跡にて色〱穿鑿すれ共繪にかこふもなかりき是に付ても此津のひろき事思ひあたりし宿に歸りて此事を語れば内義は後悔らしき皃つきおやぢは是を笑ふて其問屋心もとなし追付分散にあふべきもの也内證しらずしてきやうの問屋銀をかしかけたる人の夢見悪かるべし蓬萊に海老がなふて叶はずは跡の捨らぬ分別有とて細工人にあつらへて物の見事に紅ぎぬにて張ぬきにして弐匁五分にて出來けり正月の祝義仕廻ふて後子共がもてあそびにもなるぞかし人の智恵はこんな事ぞ四匁八分を弐匁五分で埒をあけしかも跡の用に立事とおやぢ長談義をとかれしにいづれも道理につまり是程に身躰持かためたる人の才覺は各別と耳をすまして聞所へ此親仁の母親裏に隠居して當年九十二なれ共目がよく足立て面屋へきたりきけば伊勢ゑびの高ひせんさく今日までそれを買ずに置事去とては氣のつかぬ者共よそんな事で此世帯がもたるゝものかいつとても年越の春あるときは海老が高ひと心得よ其子細は伊勢の宮〱御師の宿〱あるひは町中在〱所〱迄も此一國は神國なれば

日本の諸神を家〳〵に祭るによつて海老何百万と云かぎりもなふ入事也毎年京大坂へくるは此神〳〵に備へたる跡の祭り也此祖母はそれを考 此月の中比に髭もつがずに生ながらのを四匁づゝにて弐つ買て置たと出されしに皆〳〵横手を打御隠居にはひとつですみます物を二つは奢つた事と申せばこちに當所のない事はいたさぬ定まつて畑午房五抱ふとければ三抱くるゝ人があるそれほどの物を返すそこへ此ゑびにて壱匁が午房四匁がものですます合点じや今に歳暮ものもてこぬが爰の仕合去ながらいかに親子の中でもたがひの算用あひは急度したがよい海老がほしくは五抱もたして取におこしやどの道にも午房に替る伊勢ゑびいづれ祝ひの物に是がなふてもよいはといふてはおかれぬものじや欲心ていふではなけれ共惣して五節句の取やり先から來た物を能〻ねうちしてそれ程に見えて少づゝ徳のいくやうにして返す物じや毎年太夫殿から御祓箱に鰹節一連はらや一箱折本のこよみ正眞の青苔五抱かれこれこまかにねだん付て弐匁八分がもの申請て銀三匁御初尾上れば高で弐分あまりてお伊勢様も損のゆかぬやうに

此家三十年仕來つたにそちに世をわたしてから銀壱枚づゝ上らるゝ事いかに神の信心なればとていはれざる事也太神宮にも算用なしに物つかふ人うれしくは思しめさずそのためしには散錢さへ壱貫といふを六百の鳩の目を拵らへ置宮めぐりにも随分物のいらぬやうにあそばしけるさる程に欲の世の中百二十末社の中にも錢の多きは恵美酒大黒多賀は命神住よしの船玉出雲は仲人の神鏡の宮は娘の顔をうつくしうなさるゝ神山王は二十一人下〳〵をつかはさしやる神いなり殿は身躰の尾が見えぬやうに守らしやる神と宮すゞめ声〳〵に商ひ口をたゝく皆是さし當つて耳よりなる神なればこれらにはお初尾上て其外の神のまへは殊勝にてさびしき神さへ錢もうけ只はならぬ世なればまして人間油斷する事なかれ伊勢より例年諸國へ旦那廻りの祝義狀大分の事なれば能筆に手間賃にて書せけるに一通一匁づゝにて大晦日から大晦日迄書くらして同し事に氣をつくし年中に弐百匁取日は一日もなし神前長久民安全御祈念のため口過のため也

四　鼠のみづかひ

毎年煤掃は極月十三日に定めて旦那寺の笹竹を祝ひ物とて月の數十二本もらひて煤を払ての跡を取葺屋ねの押へ竹につかひ枝は箒に結せて塵もほこりもすてぬ随分こまかなる人有ける過し年は十三日にいそがしく大晦日に煤はきて年に一度の水風呂を焼れしに五月の粽のから盆の蓮の葉迄も段〳〵にため置湯のわくに違ひはなしとてこまかな事に氣をつけて世のつゐへせんさく人に過て利発がほする男有同し屋敷の裏に隠居たてゝ母親の住れしが此男うまれたる母なれば共しはき事かぎりなしぬり下駄片足なるを水風呂の下へ焼時つく〳〵むかしを思ひ出しまことに此木履はわれ十八の時此家に娌入せし時雑長持に入て來てそれから雨にも雪にもはきて羽のちひたるはかり五十三年になりぬ我一代は一足にて埓を明んとおもひしに惜や片足は野ら犬めに喰へられはしたになりて是非もなくけふ煙になす事よと四五度もくりことをいひて其後釜の中へなげ捨られ今ひとつ何やら物思ひの風情して泪をはら〳〵とこほし世に月日のたつは夢じや明日は其むかはりになるが惜い事をしましたとしばしなげきのやみがたし折ふし近所の醫者水風呂にいられしが先以目出たき年のくれなれば御なげきをやめさせ給へしてそれは元日にどなたの御死去なされたと尋られしにいかに愚智なればとて人の生死を是程になげく事では御座らぬわたくしの惜むは去年の元日に堺の妹が祝に參つて年玉銀一包くれしを何ほどかうれしく元方棚へあげ置しに其夜盗まれましたそもや勝手しらぬ者の取事では御座らぬ其後色〳〵の願を諸神にかけますれ共其甲斐もなし又山伏に祈を頼みましたれば此銀七日のうちに出ますればだんの上なる御幣がうごき御灯が次第に消ますが大願の成就せしるしといひけるあんのごとく祈り最中に御幣ゆるぎ出ともし火かすかになりて消ける是は神仏の事末世ならず有がたき御事と思ひお初尾百弐十上て七日待ども此銀は出すさる人に語りければそれは盗人においといふ物なり今時は仕かけ山伏とてさま〳〵ごまの檀にからくりいたし白紙人形に土佐踊さすなど此まへ松田といふ放下しがしたる事なれ共皆人賢過て結句近き事にはまりぬ共御幣のうごき出るは立置たる岩座に壺有て其中に鰌を生置ける珠数さら〳〵と押揉で東方に西方にととつかう釈杖にて佛檀をあらけなくうてば鰌が是におどろき上を下へとさはぎ幣串にあたればしばらく動きてしらぬ

目からはおそろし又灯明は臺に砂時計を仕くはし油をぬき取事ぞと此物がたりを聞からいよ／＼損のうへの損をいたした我今年まで銭一匁落さずくらせしに今年の大晦日は此銀の見えぬゆへ胸算用ちがひて心がゝりの正月をいたせばよろづの事おもしろからずと世の外聞もかまはず大声あげて泣ければ家内の者ども興をさまし我ゝ疑るゝ事の迷惑と心／＼に諸神にきせいをかけける大かた煤もはき仕廻て屋ねうらまであらためける時棟木の間より杉はら紙の一包をさがし出しよく／＼見れば隠居の尋ねらるゝ年玉銀にまぎれなし人の盗まぬものは出まするぞさるほとに悪ひ鼠目といへばお祖母中／＼合点せられず是ほど遠ありきいたす鼠を見た事なしあたまの黒ひねづみの業是からは油断のならぬ事と疊たゝきてわめかれければ藥師水風呂よりあがりかゝる事には古代にもためし有仁王三十七代孝徳天皇の御時大化元年十二月晦日に大和の國岡本の都を難波長柄の豊崎に移させ給へば和州の鼠もつれて宿替しけるにそれ／＼の世帯道具をばはこぶこそおかしけれ穴をくろめし古綿蔦にかくるゝ紙ふすま猫の見付

ぬ守り袋鼬の道切とかり杭桝おとしのかいづめ油火を消板ぎれ鰹節引てこまくら共外娌入の時の熨斗ごまめのかしら熊野參りの小米つと迄二日路ある所をくはへてはこひければまして隱居と面屋わづかの所引まじき事にあらずと年代記を引て申せと中〳〵同心いたされず口かしこくは仰せらるれ共目前に見ぬ事はまことにならぬと申されければ何ともせんかたなくやう〳〵案じ出し長崎水右衛門がしいれたる鼠つかひの藤兵衛をやとひにつかはし只今あの鼠が人のいふ事を聞入てさま〳〵の藝づくし若ひ衆にたのまれ慰の文づかひといへば封したる文くはへて跡先を見廻し人の袖口より文を入ける又錢壱文なげて是で餅かふてこいといへば錢を置て餅くはへて戻る何と〳〵我を折給へといへば是を見れば鼠も包がねを

引まじきものにあらずさてはうたがひはれました去ながらかゝる盗み心のある鼠を宿しられたるふしやうにまん丸一年此銀をあそばして置たる利銀を急度おもやからすまし給へといひかゝり一割半の筭用にして十二月晦日の夜請取本の正月をするとて此祖母ひとり寐をせられける

絵入

世間胸算用

大晦日ハ一日千金

二

鋼門義風　大鑑八百八金　巻二

目録

一　銀さへ見れば縁中

○喜所につゞく嫁入荷物

○大晦日の証文箱一つ

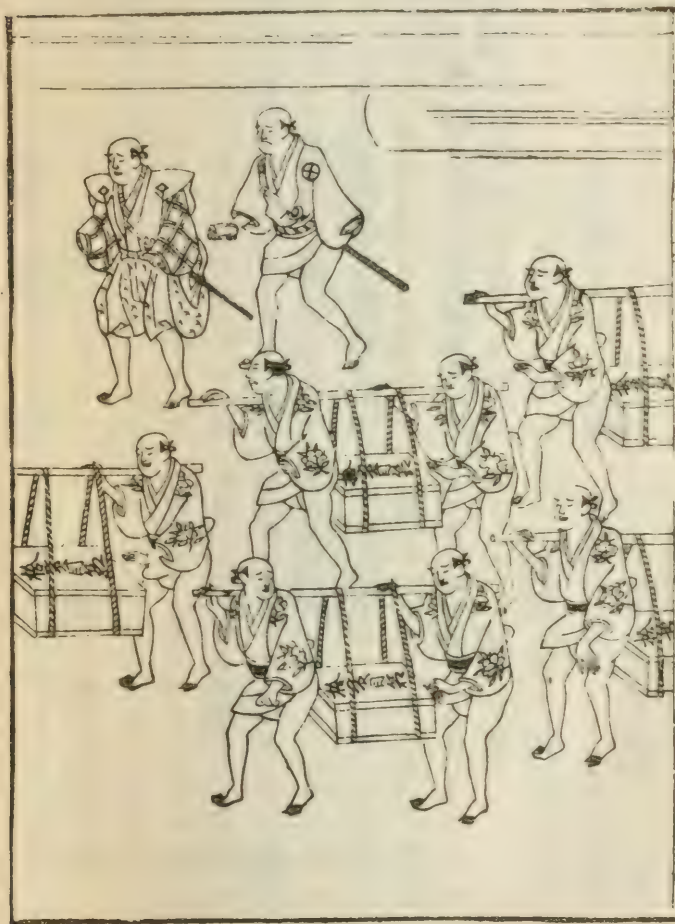
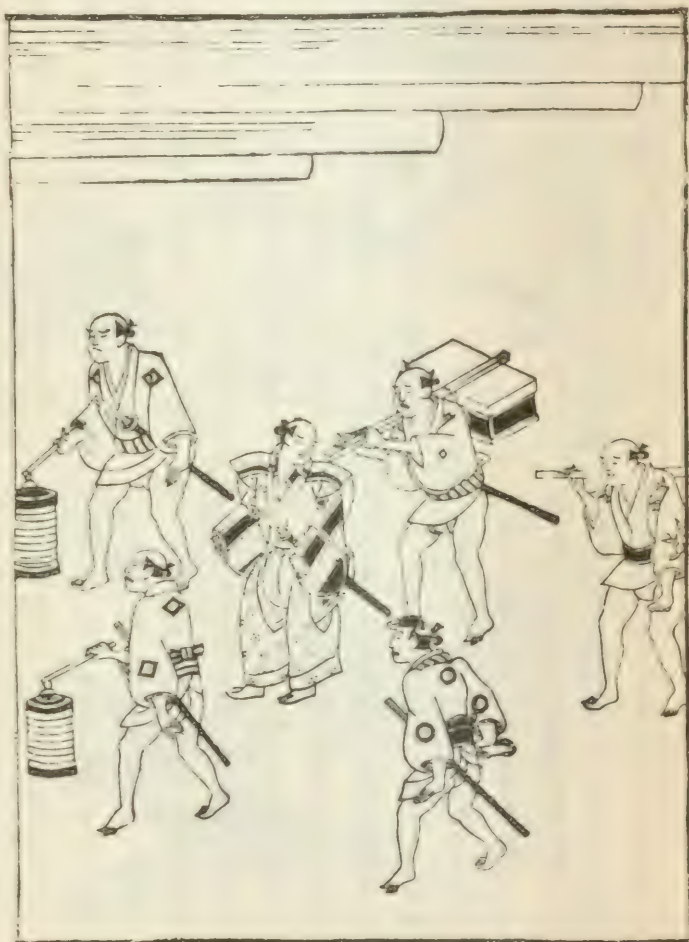
二　虚言も只はさせぬ宿

○行の作法ありてわけ銀

○大晦日のおげづしようこん所

一　銀壱匁の講中

人の分限になる事仕合といふは言葉まことは面〳〵の智恵才覚を以てかせぎ出し其家榮ゆる事ぞかし是福の神のゑびす殿のまゝにもならぬ事也大黒講をむすび當地の手前よろしき者共集り諸國の大名衆への御用銀の借入の内談を酒宴遊興よりは増たる世の慰みとおもひ定めて寄合座敷も色ちかき所をさつて生玉下寺町の客庵を借りて毎月身躰詮議にくれて命の入日かたふく老躰ども後世の事はわすれて只利銀のかさなり冨貴になる事を樂しみける世に金銀の餘慶有ほど萬に付て目出たき事外になけれ共それは二十五の若盛より油斷なく三十五の男盛りにかせぎ五十の分別ざかりに家を納め惣領に万事をわたし六十の前年より樂隠居して寺道場へまいり下向して世間むきのよき時分なるに佛とも法ともわきまへず欲の世の中に住り死ば万貫目持てもかたびら一つより皆うき世に殘るぞかし此寄合の親仁共弐千貫目より内の分限壱人もなし又近年我〳〵がはたらきにてわづかなる身躰の者共金銀を仕出し弐百貫目三百貫目あるひは五百貫目までの銀持二十八人かたらひ壱匁講といふ事をむすび毎月宿も定めず一匁の仕出し食をあつらへ下戸も上戸も酒なしにあそび事にも始末第一氣のつまるせんさく也朝から日のくるゝまでよの事なしに身過の沙汰中にも借銀の慥かなる借手を吟味して一日も銀をあそばさぬ思案をめぐらしける此者共が手前よろしく成けるはじめ利銀取込ての分限なれば今の世の商賣に銀かし屋より外によき事はなし然れども今程は見せかけのよき内證の不埒なる商人大分かりこみこしらへてたふれければ思ひもよらぬ損をする事たび〳〵也されども人を氣づかひして金銀借ずにも置れず隨分内證を聞合せ此中間はたがひに様子をしらせ向後は借入をいたすべしいづれもかく云合すからは出しぬきにあはし給ふなさあらば各　心得のために當地で定まつて銀かる人をひとり〳〵書出しこまかに詮議して見るべしこれ尤なり先北濱で何屋の誰財寳諸色かけて七百貫目の身躰といひ出れば其見立は各別八百五十貫目の借銀といふ此有なしの相違に一座の衆中肝をつぶし爰が大事のせんさく兩方のおぼしめし入とくと承はり人〳〵の心得のためとぞ聞ける先分限と見たる所は去〻年の霜月に娘を堺へ縁組せしに諸道具今宮

から長町の藤の丸のかうやく屋の門までつゞきし跡から拾貫目入五つ青竹にて揃への大男にさし荷はせ其まゝ御祓の渡るごとし外にもあまたの男子あれば餘慶なくて娘に五十貫目は付まいと思ひましていやといふものを無理に此三月過に弐拾貫目預けましたといはるゝ扱ゝお笑止や其二十貫目が壹貫六百目ばかりて戻るで御座ろといへば此親仁顏色かはつて箸もちながら集め汁喉を通らず今日の寄合に口おしき事を聞けると樣子をきかぬ內から泪をこぼされけるとてもの事に其內證が聞たしされば其聟どのかたもよく／＼せはしければこそ芝居並の利銀にて何程でも借らるゝなり此利をかきて芝居の外何商賣して胸筭用があふとおぼしめすぞ十貫目箱壹つはかなものまでうつて三匁五分づゝ拾七匁五分で箱五つ中には世間にたくさんなる石瓦人の心ほどおそろしきものは御座らぬ兩方の外聞見せかけばかりに內談と存ずるわれらは其箱を明て正眞の丁銀にしてからまことにはいたさぬあの身躰の敷銀は弐百枚も過ものこしらへなしに五貫目何と各われらが沙汰する所が違ふたか先あれには一兩年二貫目ばかり預けて見

てそれに別の事なくば又四貫目程五六年もかして慥かなる事を見とゞけての二十貫目といへば一座是尤と同音に申段〻利につまつて此親仁歸りには足腰立ずしてなげき我此年まで人の身躰見違へし事のなきに此たびはふかくなる事をいたしましたと男泣にして何とぞ御分別はないか／＼とあれば時に㝡前のせちがしこき人のいふは千日千夜御思案なされても此銀子無事に取かへす工夫は只ひとりより外になし此傳授上〻の紬一疋ならば慥かに取かへして進上申といへばそれは／＼中わたまで添まして御礼申さう何とぞ頼むといふ然らば只今迄より念比に仕かけ天滿の舟祭りが見ゆるこそ幸はひなれ濱にかけたる棧敷へ女房どもをおこして見せたしと廿五日にお内義をやりてさきのかゝとしみ／＼と內證をかたらせ一日あそぶうちに男子どもが馳走に出るはしれた事じや時に二番目のむすこが生れつきをほめ出しかしこそふなる眼ざしこなたの御子息にしてはお心に掛さしやるな鳶が孔雀を産んだとは此子の事玉のやうなる美人ちかごろ押付たる所望なれどもわたくしもらひまして聟にいたします酒ひとつ過しましてい

ふでは御座らぬわれらが子ながらこれ娘も十人並に其うへ親仁のひとり子なれば五十貫目付てやるとはつね〳〵の覺悟又われらがわたくしがね三百五十兩長堀の角屋敷捨うりにしても弐拾五貫目がもの仕てから袖も通さぬ衣裳六十五ひとりの娘より外にやるものが御座らぬ是がこちの聟殿と思ひ入たる皃つきして是を言葉のはじめにして其後折ふしすこしづゝ物をやればかへしを請是以損のいかぬ事それよりよいほどを見合せやとひにつかはし銀掛るそばに置て数をよませこくゐんをうたせ内藏へはこばせなどして一日つかふて歸し其のちさきの身になる人を見たてひそかによびにつかはし其人の二番目の子を女房どもが何と思ひ入ましたやら是非にと望みますいそがぬ事ながら次而もあらば此方の娘を嚾ふてもくださるかたづねてくだされこなたへ取つくろふて申事も御座らぬ銀千枚はいづかたへやりますとても其心得と云わたし先へ通じたと思ふ時分に内々の預け銀入用と申つかはせば緻から才覺して濟す事手にとつたやうなり此仕かけの外有まじといひおしへてわかれける其年の大晦日にかの親仁門口より笑ひ込御影〳〵御かげにて右の銀子元利ともに二三日前に請取ましたこなたのやうなる智惠袋は銀かし中間の重寶〳〵とあたまをたゝき扨其時は紬一疋とは申せしが是にて御堪忍あれと白石の紙子二たんさし出して中わたは春の事といひ捨て歸りける

二　訛言も只はきかぬ宿

萬人ともに月額剃て髮結ふて衣裳着替て出た所は皆正月の氣色ぞかし人こそしらね年のとりやうこそさま〴〵なれ内證の迚も埒の明ざる人は買がゝり万事一軒へも拂はぬ胸算用を極め大晦日の朝めし過るといなや羽織脇ざしさしてきげんのわるひ内義に物には堪忍といふ事があるすこし手前取直したらば駕籠にのせる時節もまたあるものぞ夕べの鴨の殘りを酒いりにして喰やれ掛どもをあつめて來たらば先そなたの寶引錢一貫のけて置て有次第に拂ふてない所はまゝにして掛乞の皃を見ぬやうにこちらむきて寐ていやれと口ばやにいひ捨て出行商人何として身躰つゞく。べし一日〳〵物のたらぬこしらへ。おのれも合点ながら俄かに分別も成がたしこんな者の女房になる事世の因果にて子をもたぬうちに年をよらしける一錢も大事の日鼻紙入に壱歩二つ三つ豆板三十目ばかりも入てかゝりのない

茶屋に行て爰にはまだ得しまはぬかして取みだしたる書出し千束のごとし是皆ひとつにしてから高で二貫目か三貫目人の家にはそれ〳〵の物入われらか所は呉服屋へばかり六貫五百目物好過たる奥方に迷惑いたすさらりと隙あけて此入目を女郎ぐるひにいたすで御座る去ながらさられぬ事は三月からお中にありて日もあるに今朝からけがつきてけふ生るゝとてうまれぬさきの襁さだめ乳母をつれてくるやら三人四人の取あけ祖母旦那山伏か來て變生男子の行ひ千代の腹帯子安貝だりの手に握るといふ海馬をさいかくするやら不斷醫者は次の間に鍋を仕かけはやめ薬の用意何に入事しやゝら松茸の石づき迄取よせて 姑か來てせはをやくさても〳〵やかましい事かなされともこなたは内に御座らぬものといふを幸はひにふら〳〵と爰へ御見廻申たわれらか身躰しらぬ人はもし借錢こはれて出違ふかとおもふもあれは氣味がわるひ此嶋中に一錢も指引なしの男ことに現銀にて子のできるまでの宿をかし給ふか爰のさかなかけの錢がちいさくてわれら氣にいらぬ早ゝ買給へと一かくなけ出せは是はうれしや亭主に隠しましして

ほしき帯よ〳〵と笑ひ此年のくれには心よきお客の御出來年中の仕合はしれた事さて臺所はあまりしやれ過ましたちと奥へと申馳走も常に替りてすき合点かといふ樽の酒のかんするもおかし其のちかゝは鼎占おきて三度までいたして同し事御男子さまに極まりましたとかゝか推量と客の跡かたもなきうそとひとつに成けるあそひ所の氣さんじは大晦日の色三絃誰はゞからぬなけふしなけきなからも月日を送りけふ一日になかひ事心にものおもふゆへなり常はくるゝを惜みしに各別の事そかし女は勤とて心を春のことくにしておかしうないを笑ひかほしてひとつ〳〵行年のかなしや此まへは正月のくるをはねつく事にうれしかりしにはや十九になりける追付脇ふたきてかゝといはるへしふり袖の名殘もことしはかりといふ此客わるひ事には覺えつよく汝此まへ花屋に居し時は丸袖にてつとめ京て十九といふた事大かた二十年にあまるせんさくすれば三十九のふりそてうき世に何か名殘あるへし小作りにうまれ付たる德とあたまおさへてむかしをかたれば此女ゆるし給へと手を合せ氣のつまる年せんさくやめてうちとけて夢むすふうちに此女の母親らしきものゝ來てひそかによひ出しひとつふたつ物いひしが何の事はない是が皃の見おさめ十四五夕の事に身をなけるといふ此女泪ぐみて今まてうへに着たるぐんない嶋の小袖をふろしきつゝみに手まはしはやくして親にわたすありさまいかにしても見かねて又一かくとらせて戻し心おもしろう声高に物いふを聞付若衆のぞうり取めきたる者二人つけこみて旦那これに御座ります御宿へけさから四五度もまいれと御留守は是非なし御目にかゝるこそ幸とひと何やらつゝめひらきしてのち銀有次第羽織わきざしきるものひとつ預かり跡は正月五日までにといひ捨て歸る此おきやくしゆびあしく人にいひかけられて合力せねはならずとかく節季に出ありくかわるひとこれにも分別かほしして夜の明かたに爰を歸るたはけといふはすこし脈がある人の事と笑ふて果しける

三　尤始末の異見

所務わけのたいほうはたとへば千貫目の身躰なれば惣領に四百貫目居宅に付て渡し二男に三百貫目外に家屋敷を調へゆづり三男は百貫目付他家へ養子につかはしもし又娘あれば三拾貫目の敷銀に弐拾貫目の諸道具こしらへて我相應よりかるき縁組よしむかしは四十貫

目が仕入して拾貫目の敷銀せしが當代は銀をよぶ人心なればぬり長持に丁銀雜長持に錢を入て送るべしすこし娘子はらうそくの火にては見せにくい貝にても三十貫目が花に咲て花よめさまともてはやし何が手前者の子にてちいさい時からうまいものばかりでそだてられ頰さきの握り出したる丸がほも見よし又額のひよつと出たもかづきの着ぶりがよいものなり鼻の穴のひろきは息づかひのせはしき事なし髮のすくなきは夏涼しく腰のふときはうちかけ小袖を不斷めせは是もよし爪はづれのたくましきはとりあけはゝが首すしへ取つくためによしと十難をひとつ〳〵よしなにいひなし爰が大事の胸筭用三十貫目の銀を慥かに六にして預けて毎月百八拾目づゝおさまれば是て四人の口過はゆるり内義に腰元中居女物師を添て我もの喰なから人の機嫌を取嫁子みちせいそれは〳〵おもしろふて起別るゝんも心に如在も欲もなきお留守人うつと七拾壱匁のかね声是は〳〵おもしろくしきが見たくは其色里にそれにばかからずつら〳〵おもんみるに揚屋の酒りこしらへて夜ても夜中ても御座りま小さかつきに一盃四分づゝにつもり若

衆宿のならちや一盃八分づゝにあたるといへり是を氣を付て見れば各別髙ひものながら是土鍋の一盃とて何のやうなし義理もかきて戀もやめて喰にげ大じんにあふ事多しさながらそれとて乞がたく共客死分にしてさらりと帳を消し置ておのれ後の世に餓鬼と成料理ごのみして喰ふた煑鳥も杉燒もくはつ/＼と燃あがりて目におそろしく食代すまさぬ事思ひしるへしと亭主は火箸にて火鉢たゝきてうらみけるありさま飛彈嶋の羽織ちらふた時の貞つきに引かえておそろし惣して遊興もよいほとにやむべし仕舞の見事なるは稀なり是をおもへはおもしろからすとも堪忍をして我内の心やすく夜食は冷食に湯どうふ干ざかな有あいに借屋の親仁に板倉殿の瓢簞公事の咄しをさせことはりなしに髙枕して腰元に足のゆびをひかせ茶は寐ながら内義にもたせ置て手も出さずに飲けれども面/＼の竈將軍此内につゞく兵ものなければたれか外よりとがむる人なく樂みは是て済事なり旦那うちにゐらるゝとて表の若ひ者ともゝ八坂へ出かくる無分別をやめ又御池あたりの奉公人宿へ忍びの約束もおのづからとまりて只はゐられす江戸狀どもをさらへ失念したる事ともを見出し主人の德のゆく事有捨る反古こよりにひねるてつちは又内かたへきこゆる程手本よみて手ならひするは其身の德なり宵寐の久七も鰤つゝみたる菰をほどきて錢さしをなへはたけは朝手まはしあしきとて蕪菜そろへけるお物師は日野ぎぬのふしを一日仕事程取ける猫さへ眼三寸まないたを見ぬきさかなかけごとりとしても声を出して守りける旦那一人宿にゐらるゝ德一夜にさへ何程かまして年中につもりては大分の事ぞかしすこしお内義氣にいらぬ所あろふともそこを了簡し給ひてわけ里は皆うそとさへおもへばやむもの爰見付る若世のおさまる所と京都物になれたる仲人口にて節季の果に長物がたり耳の役に聞てもあしからぬ事なり

さるほどに今時の女見るを見まねによき色姿に風俗をうつしける都の呉服棚の奥さまといはるゝ程の人皆遊女に取違へる仕出しなり又手代あがりの内義はおしなへて風呂屋ものに生移しそれより横町の仕たて物屋縫はく屋の女房は其まゝ茶屋者の風義にてそれ/＼に身躰ほどの色を作りておかしせんぎして見るに傾城と地女に別に替つた事もなけれとも第一氣がどんで物がくどふていやしひ所があつてみの書やうが違ふて酒の呑ぶりが下手て哥うたふ事が

ならひで衣裳つきが取ひろげて立居があぶなふて道中が腰がふら〳〵として床で味噌塩の事をいひ出して始末で鼻紙一枚づゝつかふて伽羅は飲ぐすりと覺へて萬に氣のつまるばかり髮かしらは大かた似たものといへば同し事にいふも愚かなり女郎ぐるひする程のものにうときはひとりもなし其かしこきやつか此もうけにくひ金銀を乞つめらるゝ借銀目安付られし預かり銀のかたへは濟さずして大分物入の正月を請あひ万事の入用をはや極月十三日にことはじめとてつかはしけるよく〳〵おもしろければこそなれ爰は分別の外ぞかし烏丸通り歴〳〵兄弟に有銀五百貫目づゝ讓りわたされけるに弟は次第に仕出し程なく弐千貫目と一門のうちからさす程なるに兄は讓うけて四年目の大晦日に天道は人を殺し給はず今宵月夜ならはむかしを思ひ出して是が賣にあるかるゝものか闇で手くだがなる事と紙子頭巾ふか〳〵とかぶり山椒の粉こせうの粉を賣まはりてかなしき年を取心うか〳〵と丹波口まで行うちに夜は明がたになりぬ世にある時の朝ごみ思ひ出してぞ歸りし

四　門柱も皆かりの世

惣して物に馴てはもの畏をせぬものぞかし都のあそび所嶋ばらの入口を小うたにうとふ朱雀の細道といふ野辺なり秋の田のみのる折ふし諸鳥をおどすために案山子をこしらへふるきあみ笠を着せ竹杖をつかせ置しに鳶烏も不斷燒印の大あみ笠を見付てこれも供なしの大じんと思ひすこしもおどろかずのちは笠の上にもとまり案山子を師ごかしにあはせけるされば世の中に借錢乞に出あふほどおそろしきものはまたもなきに数年屓つけたるものは大晦日にも出違はずむかしが今に借錢にて首切られたるためしもなし有ものやらで置ではなしやりたけれ共ないものはなしおもふまゝなら今の間に銀のなる木をほしやさてもまかぬ種ははへぬものかなと庭木の片隅の日のあたる所に古むしろを敷包丁まなばしの切刄を摩付てせつ〳〵澁おとしてから小鰯一疋切事にはあらねども人の氣はしれぬもの今にも俄に腹のたつ事が出來て自害する用にも立事も有べし我年つもつて五十六命のおしき事はなきに中京の分限者の腹はれ共が因果と若死しけるにわれら買がゝりさらりと濟してくれるならば氏神稲荷大明神も照覧あれ僞なしに腹かき切て身がはりに立とそのまゝ狐つきの眼して包丁取まはす所へ

唐丸觜ならして來る己れ死出のかどでにと細首うちおとせば是を見て掛乞ども肝をつぶし無分別ものに言葉質とられてはむつかしとひとり〲歸りさまに茶釜のさきに立ながらあんな氣の短かひ男に添しやるお内義が緣とは申ながらいとしい事じやとおの〲いひ捨て歸りける是ある手ながら手のわるひ節季仕廻なり何の詫言もせずにさらりと埒を明ける共かけこひの中にほり川の材木屋の小者いまだ十八九の角前かみしかもよは〲として女のやうなる生れ付にて心のつよき所有若ひ者なりしが亭主がおどし仕かけのうちはかまはず竹椽に腰かけて袂より珠数取出して一粒づゝくりて口の中にて稱名となへて居しが人もなく事しづまりて後さて狂言は果たそふに御座るわたくしかたの請取て歸りましよと申せば男盛りの者共さへ了簡して歸るにおのれ一人跡に殘り物を子細らしく人のする事を狂言とは此いそがしき中に無用の死てんごうと存た其詮議いらぬ事とかくとらねば歸らぬ何を銀子を何ものがとる何もの取が我等か得ものの傍輩あまたの中に人の手にあまつてとりにくいかけ計を二十七軒わたくし請取此

帳面見給へ二十六軒取済して爰ばかりとらでは歸らぬ所此銀濟ぬうちは內普請なされた材木はこちのものさらば取て歸らんと門口の柱から大槌にて打はづせば亭主かけ出堪忍ならぬといふ是〳〵そなたの虎落今時は古し當流が合点まいらぬそふな此柱はづして取が當世のかけの乞やうとすこしもおどろくけしきなければ亭主何ともならず詫言して殘らす代銀濟しぬ銀子請取て申分はなけれどもいかにしてもこなたの横に出やうがふるひ隨分物にかゝりしやがそれでは御座らぬお內義によく〳〵いひふくめて大晦日の昼時分から夫婦いさかひ仕出し御內義は着ものを着かへ此家を出て行まいでは御座らぬ出て行からは人死が二三人もあるが合点か大事じやぞそこな人是非いねかいなすにいんで見しよといはるゝとき何とぞ借錢もなして跡〳〵にて人にも云出さるゝやうに人は一代名は末代是非もない事今月今日百年目さて〳〵口おしい事かなと何でもいらぬ反古を大事のものゝやうな貞つきして一枚〳〵引さゐて捨るを見てはいかなる掛乞もしばしは居ぬもので御座るといへば今まで此手は出しませなんだおかげによつ

て來年の大晦日は女房ども是で濟す事じやさても〳〵こなたは若ひが思案は一越こした年のくれたがひの身祝ひなればとて㝡前の鷄の毛を引てこれを吸ものにして酒もりてかへして後來年の事までもなし毎年夜ふけてからむつかしい掛乞ども來るぞとて俄かにいさかひをこしらへ置よろづの事をすましける誰いふともなく後には大宮通りの喧嘩屋とぞいへり

絵入

世間胸算用

大晦日ハ一日千金

三

胸算用　大晦日ハ一日千金　巻三

一　都の顔見せ芝居

○それ〳〵の仕着せ揃へ

○大晦日の編笠ハかづき物

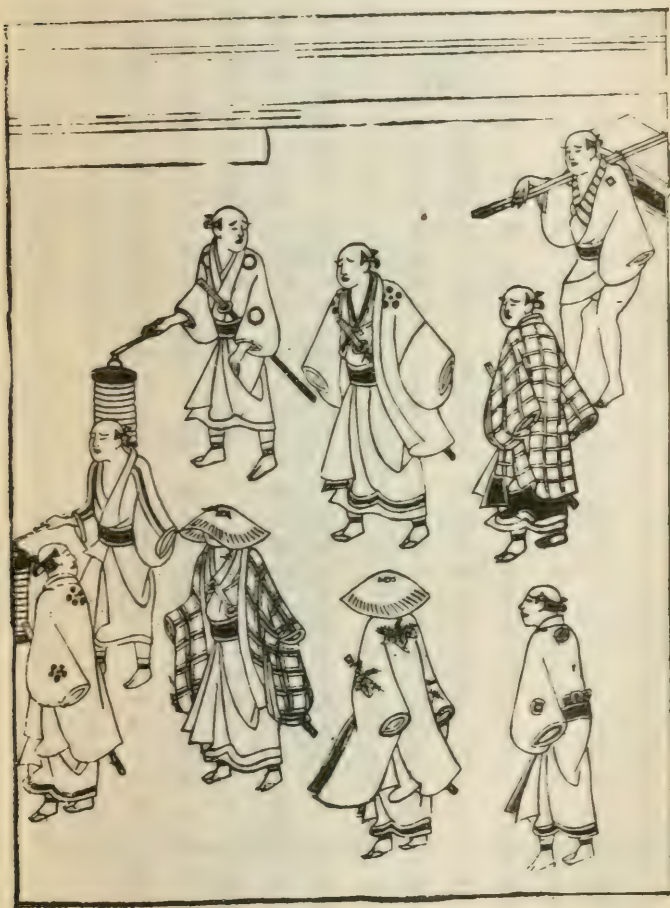
二　餅ばなハ年の内の詠め

○掛乞上手の五郎左衛門

○大晦日に無用の仕形舞

一　都の皃見せ芝居

今日の三番三所繁昌と舞おさめ天下の町人なれば京の人心何ぞといふ時は大氣なる事是まことなりこれ常に胸算用して随分始末のよき故ぞかし過し秋京都に於て加賀の金春勧進能を仕りけるに四日の桟敷一軒を銀拾枚づゝと定めしに皆借切て明所なくしかも能より前に銀子渡しける此度大事ある關寺小町するといへば是一番の見物と諸人勇みて鼻笛を吹けるに鼓に障る事有て關寺の能組かはりぬそれさへ木戸口は夜のうちに見る人山のごとし中にも江戸の者われひとり見るために銀十枚の桟敷を二軒とりて猩々皮の敷もの道具置の棚をつらせ腰屏風枕箱其後ろに科理の間さま〴〵の魚鳥髭籠に折ふしの水菓子次の桟敷に風炉釜を仕かけ割蓋の杉手桶に宇治橋音羽川と書付してならべ醫者ごふくや儒者唐物屋連歌師など入まじり其うしろの方には嶋ばらの揚屋四条の子共宿都にしれたる末社按摩取兵法つかひの牢人迄ひかへたり桟敷の下は供駕籠かり湯殿かり雪隠何にても不自由なる事ひとつもなきやうに拵らへ榮花なる見物此心は何となく豊かなり此人大名の子にもあらず只金銀にてかく成事なれば何に付ても銀もうけして心任せの慰みすべしかゝる人は跡のへらぬ分別しての楽しみふかし身躰さもなき人霜さきの金銀あだにつかふ事なかれ九月の節句過より大ぐれまでは遠ひ事のやうに思ひ万人渡世に油断をする事ぞかし十月はじめより日和定めがたく時雨凩のはげしく人の氣も是につれておのづからそう〳〵敷諸事を春の事とてのばし當分のまかなひばかりにくれければ花車商ひ諸職人の細工も思案替りてやめける次第に朝霜夕風人皆冬籠りの火燵に宵寐してそれ〴〵の家業外に成行さしつまりて迷惑する事也其後法華寺の御影供淨土宗の十夜談義東福寺の開山忌参り一向宗のおとりこし又は玄猪の祝義に夜のあそび稲荷のお火焼の比河原の役者入替りて皃みせ芝居の時分は同し人また珍らしく見る人もまたうき立けふは其座本明日は此太夫本其次は誰が座に大坂の若衆がたが出るなど沙汰して水茶屋ゟかねて桟敷とらせ内證より近付の藝者に花をとらせ旦那お出といはるゝまでの外聞に無用の氣をはりける提重酒がとりのぼして我宿へはすぐに帰らず石垣町の二階座敷に切狂言の踊をうつし王城の辰巳あがりなる声してえい山

へも響きわたる程のさはぎ京に人も見しる程の者にしてあればたれ様の御ふく所どなたの掛屋などいふさへ惡所のさはぎは奢りらしく見えけるましてやはした銀の商賣人たとへ氣延しに芝居見るともとなりに莨菪のまぬ所を見すまし圓座かりて見て役者わか衆の名覺ぬ物か與次兵衛が皃みせの初日にひだりかたの二軒目の棧敷に勘當切らるゝ事などかまはぬ皃つきの若ひもの五六人も風俗作り藝子に目をつかはせ下なる見物にけなりがらせける此若ひ者ども見しれる人ありて評判するを聞ば内證しらぬ事皆川西のやつらなり中京の衆と同し事に大きな皃がおかしい知らぬ人は歴ゝかと思ふべし黒ひ羽織の男は米屋へ入縁して欲ゆへの老女房年の十四五も違ふべし母親には二升入の碓をふませ弟にはそら豆賣にあるかせ白柄の脇指がおいてもらいたい其次の玉むし色の羽織は牛涎屋をどこの牛の骨やらしらいで人のかぶる衣裝つき家は質に入て借銀に目安付られ東隣へは無理いひかゝつてさい目論もすまぬに遊山に出るは氣ちがひの沙汰也三番めのぎんすゝたけの羽織きたる男は利をかく銀を五貫目かりてそれを敷

銀にして家具ぬしの所へ養子に行て後家親をあなづり養父の死れ三十五日もたゝぬに芝ゐ見る事作法にはづれたる男目米薪は其日〳〵に當座買の身上して酒の相手に色子ともかはいや神ならぬ身のあさましさは銀成客とおもふべしいかな〳〵此四五年買がゝり濟したる事なしあの中に染嶋の羽織着たる男ちいさき錢見せ出して居けるが兄に三井寺の出家を持けるが是から合力請てそこ〳〵にも行先の年を越べきか其外にひとりも京の正月するものは有まじと指さして笑らへばうら山しがるかと思ひかい敷の椿水仙花にきんかん二つ三つ延紙に包みてなげ越ける明て見て又笑ひて本客ならば此きんかんひとつが銀拂ひ時弐分宛にもなるべきに皆喰れ損になるはしれた事といひ捨て芝居は果て立歸りける其のち毎日の河原通ひに同し着物に色もかはらぬ羽織に色茶屋氣を付て銀の事申せど分も立す道切てこざりければさいそくするにかひなく程なふ大晦日になりて独は夜ぬけふるしとて昼ぬけにして行方しれず又ひとりは狂人分にして座敷籠又ひとりは自害しそこなひてせんさくなかば嵗前引合したる大鼓もちは盗人の請に

立けるとて町へきびしき斷茶屋は取つく嶋もなく夢見のわるひ寶舟尻に帆かけてにげ歸り兼ての筭用には十五兩の心あて預置れしあみ笠三がいのこりて大晦日のかづき物とぞ成ける

二　年の内の餅ばなは詠め

善はいそげと大晦日の掛乞手ばしこくまはらせけるけふの一日鉄のわらんじを破り世界をいだてんのかけ廻るごとく商人は勢ひひとつの物ぞかし数年功者のいへり惣して掛は取よい所より集めて埒明ず屋としれたる家へ仕廻にねだり込言葉質とられて迷惑せぬやうに先〻腹の立やうに持てくるときなを物靜かに義理づめに外のはなしをせず居間あがり口にゆるりと腰かけて袋持に灯挑けさせて何の因果に掛商人には生れきました月額剃て正月した事なく女房共は銀親の人質になして手代に機嫌をとらせ身過は外にも有へき事と科もなき氏神をうらむ御内證は存ぜねとも是の御内義〻は佛〳〵天井うらにさしたる餅ばなに春の心して地鳥の鴨いりこ串貝いづれ人の内は先さかなかけが目につく物じやお小袖もなされましたで御座りましよ今は世間に皆紋所を葉付のぼたんと四つ銀杏の丸女中がたのはやり物其時〳〵にならばして着たい女房に衣裳おまつお仕きせは定めて柳すゝたけにみだれ桐の中がたで御座ろ同し奉公でもこんなお家に居合すが其身の仕合かたわきには今に天人からくさ目にしむなどゝ内義にものをいはすやうに仕かけて隙を入ければ外の借錢乞のない間を見合此くれには何方へも払ひいたさね共こなたは段〳〵ことはりに至極いたした來春女ほう共が參宮いたすつかひ銀なれども此とをりは進ずる殘りは又三月前には帳を消して笑らひ㒵を見ますぞと百目のうちへ六十目はわたすものなゝむかしは賣かけ百目あれば八十目すまし此二十年ばかり以前は半分たしかに濟しけるに十年此かたは四分払になり近年は百目に三十目わたすにも是非惡銀二粒はませてわたしける人の心次第にさもしく物かりながら迷惑はいたせど商ひやめる外なく又節季わすれて掛帳に付置けるよろづ時世に替るもおかし前〳〵はならぬことはりを聞とゞけて大晦日の夜半かぎりに仕廻中比は又夜明方迄まはりて掛乞といへば喧嘩をせざる家一軒もなし此一兩年は更行まであるきはすれどたがひに声をたてずひそかにしまふ事に氣をつけて見るにないといふとないに極まり内證の事が兩隣へきこえる

事もかまはす借錢は大名も負せらるゝ浮世千貫目に首きられたるためしなしあつてやらずにおかるゝものか此大釜に一歩一はいほしや根こそげにすます事じや金銀ほど片行のするものはない何としてか銀ににくまれました一たびは榮へとうたひて木枕皷にして横に寐る男には何とも取て付所なし義理外聞を思はぬからは埒のあかぬ事見定め古掛は捨て當分のさし引それをたがひに了簡して腹たてずにしまふ事人みなかしこき世とぞ成けるつら／＼世間を思ふに隨分身になる手代よりは愚かなる我子がましなり子細は自然とまことあらはれ銀集まれば皆わがものとおもふからそこ／＼にさいそくせず身の働に私なし扨また召つかひの若ひ者よく／＼親かた大事に思ひ身の上を覺悟して天理を知ルは各別大かたは主の爲になるものは稀なり一日千金の色所にあそび十分請取銀あれは其内に不足こしらへあるひは小判のしかけ又は銀子請取掛を内へは錢つかふて歸るなど親かたのたしかにしらぬ賣がけは死帳に付捨さま／＼にわたくしする事いかに氣のつく主にてもそれ程にはならぬものぞかし又小商人の小者までもいそがし

き中にかけあらましにして布袋屋のかるた一めん買て道ありき〳〵八九どうに心覺へするもの親かたに德は付ぬ事也掛乞にも色〻の心ざしよきものすくなし人は盜人火は焼木の始末と朝夕氣を付るか胸算用のかんもんなり爰に請取普請の日用かしらにふるなの忠六といふ男常にかる口たゝき町の藝者といはれて月待日まちに物まねして人の氣に入ける此大晦日しまひかねさる方へ銀五百目申上ればやすい事と請合給へば夜に入御見まひ申あゝらたのしや今宵琴の音をきけば年のよらぬ仙家のこゝち當地ひろしと申せども此御内かたならでは外になし金銀まん〳〵として四方に寶藏かくれみのにかくれ笠うち出の小槌は針口の音福〳〵旦那とひろ敷にかしこまるやうありそふなる忠六此事かと五百目包なげ出せばかたじけなしといはふて三度おしいたゞき御影でとしを鷄がなくおいとま申てさらばとて門口まで出けるがちよこ〳〵と立歸り奥〻へ有がたがりましたとよろしくたのみ奉る腰元衆といふ時仲居のきちが何と忠六どのよろこびの折なればといふ一まひ舞ましよと目出たいづくしを長〳〵といふうちに北國より重手代歸りて只今弐百貫目御くら屋しきへわたすぞ米は追付のぼると仕合かねよ〳〵けふ奥にも琴の小うたの所かさあ銀のせんさくせよといふとき忠六あがり口に置たる五百目包をとりあげて是はたくさんなる銀子何のために捨置事ぞ高は弐百貫目入ぞそれほど手前に有かないかなくば手わけして才覺せよかねよ〳〵と氣をいらちければ忠六不首尾せんかたもなく長居はおそれありといふて手ぶりで歸りける

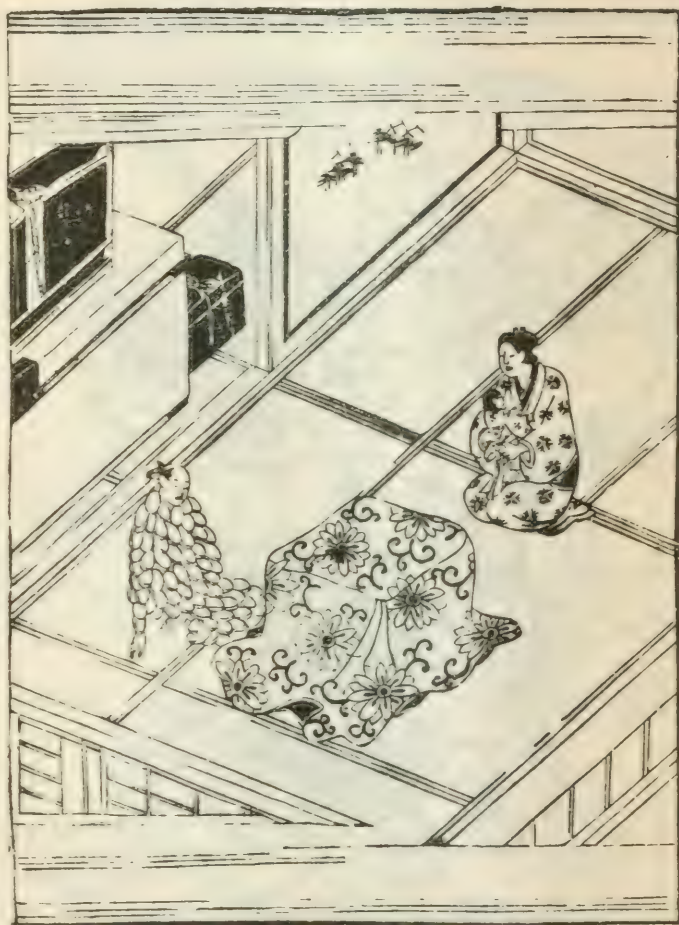
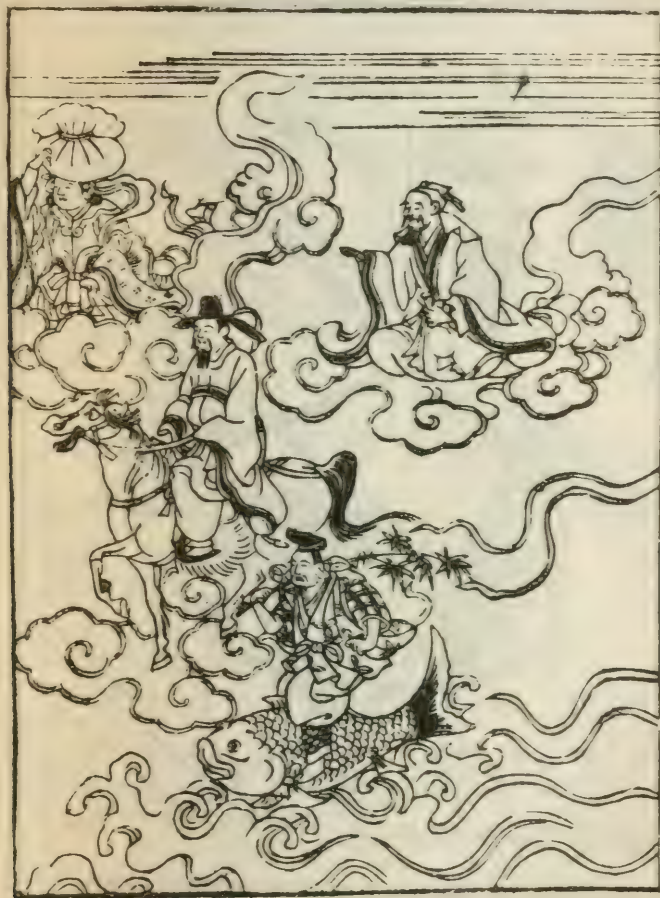
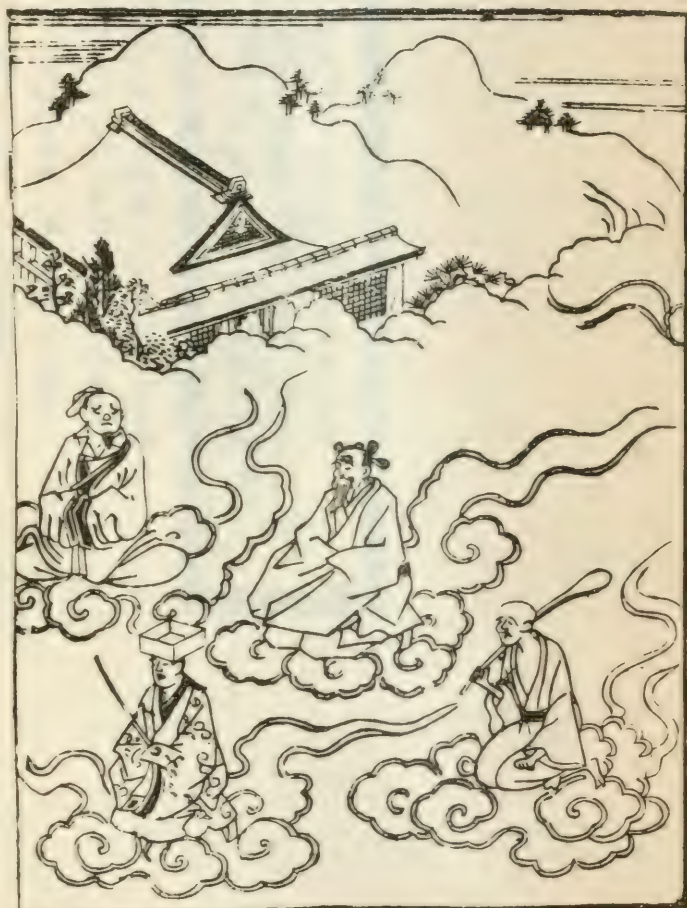
三　小判は寐姿の夢

夢にも身過の事をわするなと是長者の言葉也思ふ事をかならず夢に見るにうれしき事有悲しき時ありさま〳〵の中に銀拾ふ夢はさもしき所有今の世に落する人はなしそれ〳〵に命とおもふて大事に懸る事ぞかしいかな〳〵万日廻向の果たる場にも天滿祭りの明る日も錢が壱文落てなし兔角我はたらきならでは出る事なしさる貧者世のかせぎは外になし一足とびに分限に成事を思ひ此まへ江戸に有し時駿河町見せに裸銀山のごとくなるを見し事今にわすれすあはれことしのくれに其銀のかたまりほしや敷革の上に新小判が我等が寐姿程有しと一心によの事なしに紙ぶすまのうへに臥ける比は十二月晦日の明ほのに女ぼうはひとり目覺てけふ

の日いかにたてかたしと身躰の取置を
案じ窓より東あかりのさすかた見れば
何かはしらす小判一かたまり是はした
り〳〵天のあたへとうれしくこちの人
〳〵と呼起しければ何ぞといふ声の下
より小判は消てなかりき扨も惜やと悔
み男に此事を語れば我江戸で見し金子
ほしや〳〵と思ひ込し一念しばし小判
顯はれしぞ今の悲しさならばたとへ後
世は取はづしならくへ沈むとも佐夜の
中山にありし無間のかねをつきてなり
とも先此世をたすかりたし目前に福人
は極樂貧者は地ごく釜の下へ焼ものさ
へあらず扨も悲しき年のくれやと我と
惡心発れば魂入替りすこしまどろむ
うちに黒白の鬼車をとゞろかしあの世
この世の堺を見せける女房此有さまを
猶なげき我男に教訓して世に誰か百ま
で生る人なし然ればよしなき願ひする
事愚かなりたがひの心替らずは行末に
目出たく年も取へしわが手前を思しめ
してさぞ口おしかるべしされども此ま
ゝありては三人ともに渇命におよべば
ひとりある躮が後〳〵のためにもよし
奉公の口あるこそ幸はひなれ何とぞあ
れを手にかけてそだて給はゞ末のたの
しみ捨るはむごい事なればひとへに頼
みますと泪をこぼせば男の身にしては
悲しくとかふのことはもなく目をふさ
ぎ女房皃を見ぬ所へ墨染あたりに居る
人置のかゝが六十あまりの祖母さまを
つれだち來てきのふも申通りこなたは
乳ふくろもよいによつてからりに八拾
五匁四度御仕着せまでかたしけない事
とおもはしやれ雲つくやうな食たきが
布迄織まして半季が三拾弐匁何事も乳
のかげじやと思はしやれ又こなたがい
やなれば京町の上にも見立て置ました
けふの事なればまたといふ事はなら
ぬと云内義きげんよく何をいたします
も身をたすかるためて御ざります大事
の若子さまを預りましても何と御座り
ましよ私はなる程御奉公の望といへ
ば男には物をいはずすこしもはやくあ
なたへとゝなりの硯かつて來て一年の
手形を極め殘らす銀渡して彼かゝ手は
しかく後といふも同し事是は世界が此
通りの御定と八拾五匁數三十七と書付
のある内八匁五分りんと取てさあお
うばどの身ごしらへまでない事とつれ
行時男も泪女は赤面しておまんさらば
よかゝは旦那さまへ行て正月に來てあ
ふぞよといひ捨て何やら兩隣へ頼みて
又泣ける人置は心つよく親はなけれと
子はそだつうちころしても死ぬものは
死ませぬぞ御亭さまさらばとばかり
に出て行此かみゐ世を觀じ我孫のふ

びんなも人の子の乳はなれしはかはゆやと見歸り給へばそれは銀がかたきあの娘は死次第と共母おやがきくもかまはずつれ行ける程なふ大晦日の暮かたに此男無常発り我大分のゆづり物を取なから胸算用のあしきゆへ江戸を立のき伏見の里に住けるも女房共が情ゆへぞかし大ぶくはかりいわふて成ともあら玉の春にふたりあふこそ樂しみなれ心ざしのあはれやかんばし二せん買置しか棚のはしに見えけるを取て一せんはいらぬ正月よとへし折て鍋の下へぞ燒ける夜ふけて此子泣やまねばとなりのかゝたちといよりて摺粉にぢわうせん入て燒かへし竹の管にて飮す事をおしへはや一日の間に思ひなしかおとがいがやせたといふ此男扨も是非なしと心腹立て手に持たる火はしを庭へなげけるお亭さまはいとしやお內義ゐは果報さきの旦那殿がきれいなる女房をつかふ事がすきじやことに此中おはてなされた奥ゐに似た所がある本にうしろつきのしほらしき所が共まゝといへは此男聞もあへず宦前の銀は共まゝありそれをきいてからはたとへ命がはて次第とかけ出し行て女ほう取返して泪で年を取ける

四　神さへ御目違ひ

諸國の神〳〵毎年十月出雲の大社に集り給ひて民安全の相談あそばし國〳〵の年徳の神極め春の事ともを取いそぎ給ふに京江戸大坂三ケの津へのとし神は中にも徳のそなはりしをゑらみ出し奈良堺へも老功の神達又長崎大津伏見それ〳〵に神役わけてさて一國一城の所あるひは船着山市はんじやうの里〳〵を見たて其外都にはるかに嶋住ひさしのひとつ屋までも餅つきて松たつる門に春のいたらんといふ事なししかし年徳も上方へは面〳〵に望み田舎の正月は嫌い給ふぞかしいづれふたつ取には萬につけて都の事は各別也世の月日の暮るゝ事流るゝ水のどし程なく年波打よせて極月の末にぞ成けるされば泉州の堺は朝夕身の上大事にかけ胸算用にゆだんなく万事の商賣うちばにかまへ表向は格子作りにしまふた屋と見せて內證を奥ふかふ年中入帳の銀高つもりて世帯まかなふ事也たとへば娘の子持ては疱瘡して後形を見極め十人並に人がましう當世女房に生れ付と思へばはや三歳五歳より毎年に娵入衣裝をこしらへける又形おもはしからぬ

娘はおとこ只は請とらぬ事を分別して敷銀を心當にりかし商ひ事外にいたし置縁付の時分さのみ大義になきやうに覺悟よろしき仕かたなり是によつて棟に棟次第にたちつゞきこけら葺の屋ねもそこねぬうちにさし枋したり柱も朽ぬ時より石で根つぎをして軒の銅樋数年心がけて徳を見すましていたせし手紬の不斷着立居せはしからねば是きるゝ事なく風俗しとやかに見へて身の勝手よし諸道具代々持傳えければ年わすれの茶の湯振舞世間へは花車に聞えてさのみ物の入るにもあらず年〳〵世渡りをかしこうしつけたる所なりよきくらしの人さへかくあればまして身体かるき家〳〵はそろばん枕に寐た間ものびちゞみの大節季を忘るゝ事もなく臺碓の赤米を艶の秋と詠め目のまへの櫻鯛は見たかる京の者に見せよと毎夜魚荷にのぼし客なしには江鮒も土くさいとて買ぬ所ぞかし山ばかりの京には眞鰹も喰海近き爰には礒ものにて埒を明ける惣しての事燈臺元くらし大晦日の夜のけしき大かたに見せ付のよき商人の宿へ年徳の神の役なれば案内なしに正月仕にはいつて見れば元方棚は鈞ながらともし火もあげず何と

やら物さびしく氣味のあしき內なれども爰と見立て入ければ又外の家に行て相宿もうれしからず何といわゐけるぞとしばらくやうすを見しに門の戸のなるたびに女房びく／＼してまだ歸られませぬさい／＼足をひかせましてかなしう御座るといづれにも同しことはりいひて歸しける程なく夜半も過明ぼのになれば掛乞ども爰に集まり亭主はまたか／＼とおそろしき声を立る所へでつち大息つぎて歸り旦那殿はすけ松の中程にて大男が四五人して松の中へ引込命が惜くばといふ声を聞捨にして迯て歸りましたといふ內義おどろきおのれ主のころさるゝに男と生れて淺間しやと泣出せばかけ乞ひとり／＼出て行夜はしらりと明ける此女房人歸りし跡にてさのみなげくけしきなし時にでつちふところより袋なげ出し在郷もつきまりましてやう／＼と銀三十五匁銭六百取てまいつたといふまことに手だてする家につかはれければ內のものまでも街同前になりける亭主は納戸のすみに隠れゐて因果物かたりの書物くり返し／＼讀つゞけて美濃の國不破の宿にて貧なる浪人の年を取かね妻子さし殺したる所ことに哀れに悲しくいづれ死も

しさうなるものと我身につまされ人しれず泣けるが掛乞はみな了簡していにましたといふこゑにすこし心定まりてふるひ／＼立出さて／＼けふ一日に年をよらせしと悔みて歸らぬ事をなげき余所には雑煮をいはふ時分に米買燒木とゝのへ元日も常の食たきてやう／＼二日の朝雑煮して佛にも神へも進し此家の嘉例にてもはや十年ばかりも元日を二日に祝ひます神の折敷が古くとも堪忍をなされとて夕めしなしにすましける神の目にも是程の貧家とはしらず三ケ日の立事を待かね四日に此家を立出て今宮の惠美酒殿へ尋入さても／＼見かけによらぬ悲しき宿の正月をいたしたとうき物語あそばしければこなたも年こしをしてこしめす程にもない事哉人のうちの見たてめしあはせの戸の白からず内義が下女のきげん取て

疊のへりのきれたる家には年をとらぬもので御ざる廣ひ堺中でかゝる貧者は四五人の所へ不仕合の神棚われは世界の商人が心さしの酒と掛鯛にて口を直して出雲の國へ歸らせ給へと馳走して留させられしを十日ゑびすの朝とく參詣したる人内陣のおものがたりを聞て歸りける神にさへ此ごとく貧福のさかいあれば況人間の身の上定めがたきうき世なれば定まりし家職に油斷なく一とせに一度の年神に不自由を見せぬやうにかせぐへし

絵入

世間胸算用

大晦日ハ一日千金

四

胸算用　大晦日ハ一日千金　巻四

目録

一　闇の夜の悪口

世にある人の衣くばり

地車に引隠居銀

二　奈良の庭竈

萬ろの入四月掛ひとよし

山路を越る数の子

三　亭主の入替り

かしこき女の色分(?)

紺(?)しらぬ船中の機嫌

四　長崎の柱餅

礼扇子八所の売(?)物(?)

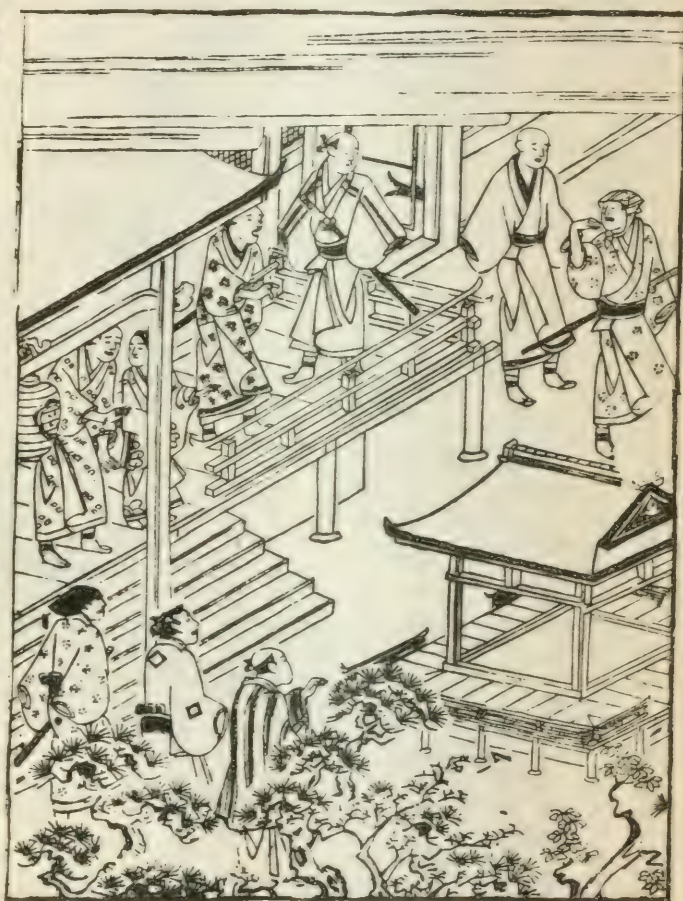
ゆんとしのハしれぬ孔雀

一　闇の夜のわる口

所のならはしとて關東に定め置て大晦日に祭り有津の國西の宮の居籠り豊前の國はやともの和布刈又丹波のおく山家に緣付をする里有むかしは年のくれに靈祭りしていそがしき片手に香はなをとゝのへ神の折敷と麻がらの箸と取ませてのせはしさに共ころのかしこき人極樂へことはりなしに七月十四日に替ける今の智惠ならは春秋の彼岸のうちに祭るべし末／＼の世まで何ほど德の行事もしれがたし大坂生玉のまつり九月九日に定め置れ幸はひ家／＼に膾燒ものもする日なり我人の祝義なれば客人とてもあらず年／＼に此德つもりて大分の事ぞかし氏子の毛をかんがへ神も胸算用にてかくはあそばし置れし

又都の祇園殿に大年の夜けつりかけの神事とて諸人詣てける神前のともし火くらふしてたがひに人㒵の見えぬとき參りの老若男女左右にたちわかれ惡口さま／＼云がちにそれは／＼腹かゝへる事也おのれはな三ケ日の內に餅が喉につまつて烏部野へ葬禮するわいやいおどれは又人賣の請でな同罪に粟田口へ馬にのつて行わいやいおのれが女房はな元日に氣がちがふて子を井戶へはめおるぞおのれはな火の車でつれにきてな鬼のかうのものになりをるわいおのれが父は町の番太をしたやつじやおのれがかゝは寺の大こくのはてじやおのれが弟はな衒云の挾箱もちじやおのれが伯母は子おろし屋をしをるわいおのれが姉は襦せずに味噌買に行とて道でころびをるわいやいづれ口がましう何やかや取ませていふ事つきず中にも廿七八なる若ひ男人にすぐれて口拍子よく何人出ても云すくめられ後には相手になるものなし時にひだりの方の松の木の陰よりそこなおとこよ正月布子したものとおなじやうに口をきくな見れば此寒きに綿入着ずに何を申ぞとすいりように云けるに自然と此男が肝にこたへて返す言葉もなくて大勢の中へかくれて一度にどつと笑はれける是をおもふに人の身のうへにまことほど耻かしきものはなしとかく大晦日の闇を足もとの赤ひうちから合点してかせぐに追付貧方なしさても花の都ながら此金銀はどこへ行たる事ぞ年／＼節分の鬼が取て歸るもので御座ろことに我等は近年銀と中たがひして箱に入たるかほを見ませぬと世のすぼりたる物がたりして三条通りを歸れば山がたに三星の紋ちやうちん六つとぼして車三輛

に銀箱をつみ手代らしきもの二人跡につきて咄して行をきけば世界にない〳〵といへど有ものは金銀じや此銀子は隠居の祖母への寺参り銀とて親旦那が分置れ明暦元年の四月に藏入して又取出すは今晩此銀箱が世間を久しぶりにて見て氣のつきを晴すべしおもへば此銀はうつくしき娘をうまれ〳〵出家にしたやうなものじやは一生人手にわたりてよい事にもあはず後は寺のものになる程にと大笑ひしてけふ此銀を出す次而に向ひ屋敷の内ぐらを見れば寛永年中の書付の箱ばかりも山のごとし一代にあのごとくたまるものかよ惣して世上の分限第一しはき名を取て何ぞいちもつなふては富貴には成がたきに我等が旦那は万事大名風にして一代榮花にくらし其上の此仕合そなはりし福人されば今迄は惣領どのに隠居したまへども二男の家をもたれければ又氣を替てそこへの隠居の望み何事も御心まかせにとて霜月はじめころより萬の道具をはこびけふ此銀がうちどめなり面屋よりわかりて隠居付の女十一人猫も七ひき乗物にのりて人並に越れし此廿一日に例年の衣くばりとて一門中下人どもかれこれ集めて男小袖四十八女小

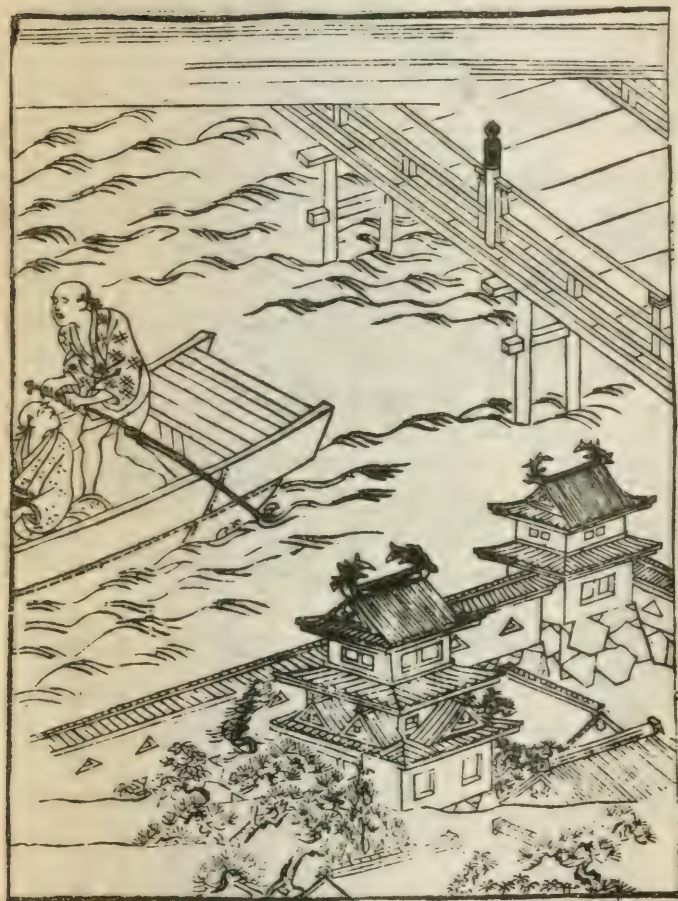
袖五十一小だち中だちの小袖廿七合して百弐十六笹屋にて調のへそれ〳〵に給はりける此小袖代をもてば商ひの元手があるぞ又若旦那よりはきのふも初芝居がならぬといふてさる太夫が機嫌を見合なげきしに金子五百兩かし下さるゝ京の廣ひ事をしらぬゆへ掛乞が百錢をよみける我〳〵が見て此かた旦那兄弟金銀手にもたれたる事なしまして我分限の高をしられず九人の手代まかせなりと語りつゝけて大きなる屋作りに入て御隱居樣のお銀がまいりましたと內ぐらに納めける此家の年男神〳〵へ灯火あげて後お銀ぐらへも灯明と申せば旦那指さして笑ひさても初心な年男どの藏に灯明などゝいふは纔か千貫目の事也二十五六も灯明とぼすかと申されしさても大分有銀と此家をうらやましく見るうちに方〳〵より大分の銀箱廣庭につみかさね兩替の手代らしきものとも手をつかへ此家のおも手代にさま〳〵きげんをとり何とぞ此銀子ども御くらへおさめ申たきといへば例年申渡し御ぞんじのごとく大晦日の七つさがりいへば銀子いづかたから參りてもうけとり申さぬとかね〳〵申わたし置しに夜に入て此はした銀事やかましと

いひてうけとらぬを色〳〵わびこと追匠いひて三口合して六百七拾貫目渡して請とり手形おしいたゞきて立歸るもはや御藏はしめけるとて大がまのうしろにかさね置ける此銀は庭にて年をとりけるまことに石かはらのごとし

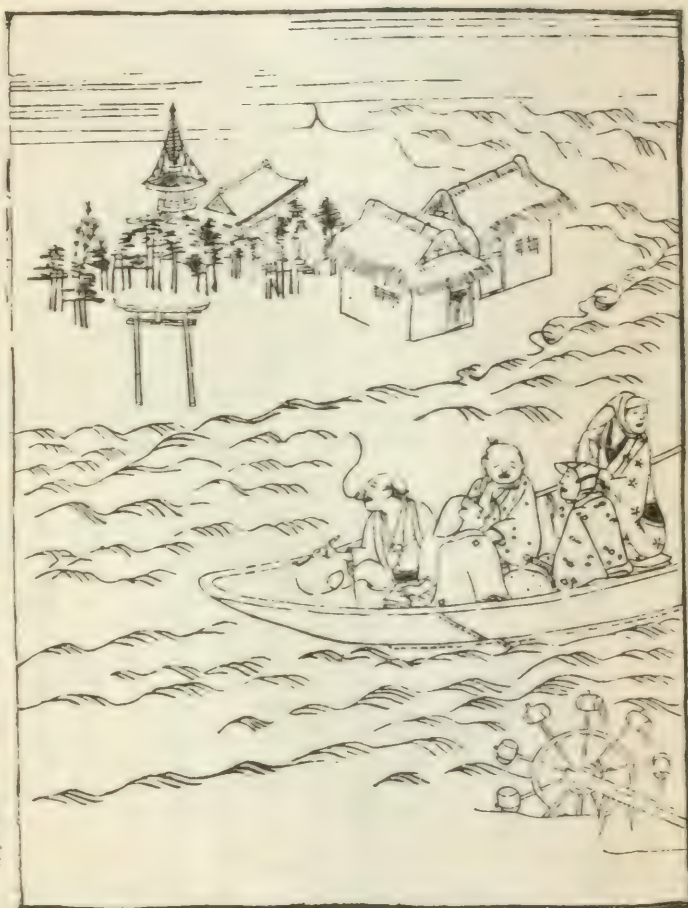
二 奈良の庭竈

むかしから今に同し顏を見るこそおかしき世の中此二十四五年も奈良がよひする肴屋有けるが行たびに只一色にきわめて鮹より外に賣事なし後には人も鮹賣の八助とて見しらぬ人もなくそれ〳〵に商ひの道付てゆるりと三人口を過けるされども大晦日に錢五百もつて終に年を取たる事なし口喰て一盃の雜煮いはふた分なり此男つね〳〵世わたりに油斷せずひとりある母親のたのまれて火桶買ふて來るにもはや間錢取て只は通さずまして他人の事にはとりあげ祖母呼で來てやるけはしき時も茶づけ食を喰ずにはゆかぬものなりいかに欲の世にすめばとて念佛講中間の布に利をとるなどはまことに死がな目くじろの男なり是程にしてもあのざまなれば天のとがめの道理ぞかしそも〳〵奈らにかよふ時より今に鮹の足は日本國が八本に極まりたるものを一本づゝ切て足七本にしてうれども誰か是に氣のつかぬ事にて賣ける其あしばかりを松ばらの煮うり屋にさだまつて買もの有さりとはおそろしの人こゝろぞかし物には七十五度とてかならずあらはるゝ時節あり過つる年のくれにあし二本づゝ切て六本にしていそがしまぎれに賣けるにこれもせんさくする人なく賣て通りけるに手貝の町の中ほどに表にひし垣したる内より呼込鮹二盃うつて出る時法躰したる親仁ちろりと見て碁を打さして立出何とやらすそのかれたる鮹とあしのたらぬを吟味仕出し是はどこの海よりあがる鮹ぞ足六本づゝは神代此かた何の書にも見えずふびんや今まで奈ら中のものが一盃くうたであらふ魚屋顔見しつたといへばこなたのやうなる大晦日に碁をうつてゐる所ではうらぬといひぶんしてぞ歸りける其のち誰が沙汰するともなく世間にしれてさるほどにせまい所は角からすみまで足きり八すけといひふらして一生の身過のとまる事これおのれがこゝろからなりされば大としの夜の有さまも京大坂よりは各別しづかにしてよろつの買がゝりも有ほどは隨分すまし此節季にはならぬとことはりいへば掛とり聞とゞけて二たび來る事なくさし引四つ切に奈良中が仕舞てはや正月の心い

ゑ／＼に庭いろりとて釜かけて焼火して庭に敷ものしてその家内旦那も下人もひとつに樂居して不断の居間は明置て所ならはしとて輪に入たる丸餅を庭火にて焼喰もいやしからずふくさなりさてまた都の外の宿の者といふ男ども大乗院御門跡の家來因幡といへる人の許にて例にまかせて祝ひはじめ富／＼富／＼といひて町中をかけ廻れば家ごとに餅に銭そへてとらせける是を思ふに大坂などにて厄はらひに同し漸／＼夜も明かたの元日にたはらむかへ／＼と賣けるは板にをしたる大こくどのなり二日の明ほのに惠美酒むかへとて賣ける三日の明かたにびしやもんむかへとうりける毎朝三日が間福の神をうるぞかしさて元日の礼儀世間の事はさし置て先春日大明神へ參詣いたすに一家一門するゑ／＼の親類までも引つれてざゞめきける此とき一門のひろきほど外聞に見えける何國にても富貴人こそうらやましけれ商賣のさらし布は年中京都の呉服屋にかけうりて代銀は毎年大ぐれに取あつめて京を大晦日の夜半から我先に仕舞次第にたいまつとぼしつれて南都に入こむさらしの銀何千貫目といふ限りもなしすでに奈良へ歸れ

ば皆／＼夜あけになれは金銀くらにうちこみ置正月五日よりたがひにとりやりのさし引する事例年なり此銀荷を心がけて大和の片里にしのびてすみける素浪人ども年とりかぬる事のかなしさにいのちを捨て四人内談して追剝に出しにみな三十貫目又は五拾貫目の大分にてのぞみほどのはした銀なければそれかこれかと見合すれども終に酒手と云かねて此道かへてくらがり峠に出て大坂よりの歸りをまちふせし所に小おとこのかたげたる菰づゝみを心にくしおもきものをかるう見せたるは隱し銀にきわまる所とておさへて取てにげされば此男こゑを立て明日の御用にはとても立まい／＼と申す時に四人してあけて見ればかずのこなり是は／＼

三　亭主の入替り

年の波伏見の濱にうちよせて水の音さへせはしき十二月廿九日の夜の下り船旅人つねよりいそぐ心に乘合てやれ出せ／＼と声／＼にわめけば船頭も春しりがほにてわれも人もけふとあすとの日なれば何がさて如在は御座らぬと頓て纜ときて京橋をさげける不斷の下り船には世間の色ばなし小うた淨瑠り

はや物がたり話に舞に役者のまねひとりも口たゝかぬはなかりしに今宵にかぎりてものしづかに折〳〵思ひ出し念佛又は長ふもないうき世正月〳〵と待てから死ぬるを待ばかりと世をうらみたる云分其ほかの人〳〵は寐入もせすみなはらたちそふなる顔つきなるに人の手代らしき男がおやま茶屋でうたひならひしなげぶしを息の根のつゞくほどはりあげてあいの手を口三味線の無拍子に頭をふり廻してつらにくし程なふ淀の小ばしになれば大間の行燈目あてに船を艫より逆下しにせし時分別らしき人目をさましてあれ〳〵あれを見たがよい人みなあの水車のごく昼夜年中油断なくかせぎければ大節季の胸算用違ふ事なきに不断は手をあそばして足もとから鳥のたつやうにばたくさとはたらきてから何の甲斐なしと我ひとり智恵有顔にいひける船中の人〳〵耳をすまして是尤と聞ける中に兵庫の旅籠屋町の者乗合けるが只今のお言葉にてわれらが身の上の事に思ひあたりました浦住居の徳には生肴のつかみとりの商賣して世わたり樂〳〵としてから毎年の仕舞には少つゝたらず此十四五年も迷惑して大津に母方の姨有

けるがわづか七拾目か八拾目か百目より内の御無心申せしに年〳〵の事にて姨もたいくついたされて當くれの合力はならぬといひ切られ置たものを取て來るやうなる心あて違へば里に歸りてから年の取やうなしとかたる又ひとりの男はさしわたして弟をつれて此たび四条の役者に近付ありて是をたのみにして藝子に出して前銀かりて此節季を仕舞ふ心かけにてのぼりけるにおもひの外なる事は我弟ながらかたちも人にすくれて太夫子にもなるへきものと思ひしに耳すこしちゐさくて本子には仕たてかたしとうけとらねば是非なくつれて歸るさて〳〵世間に人もあるものかな十一二三の若衆下地の子どもの隨分〳〵色品よきを毎日二十人三十人つれきたりて人置がさゝやくをきけば牢人の子もあり醫者の子も有さのみ筋目もいやしからぬ人なれどもことしのくれを仕舞かね奉公に出せしに十年切て錢壱貫から三十目までにて好なる子共取ける色の白き事かしこき事上方者にはとても及ひがたしつかひ銀を損して歸ると語りける又ひとりの男は親の代より持傳へし日蓮上人自筆の曼荼羅をかね〳〵宇治に望みの人ありて金銀何程成ともと申されしに其ときは賣おしく當くれ手前さしつまりはる〳〵うりはらひに參りしに此人いかなるゆへにや分別替りて淨土宗になられければ此名号手にもとられず思ひ入ちかひまして迷惑いたすなり外に當所もなければ宿へ歸りてから借錢乞にせかまれ其相手になる事もむつかしければ大坂よりすぐに高野參りの心ざしを見通しの弘法大師さぞおかしかるべし又ひとりの男は春のべの米を京の織物屋中間へ毎年のくれに借入の肝煎して此間銀を取定まつて緩〳〵と節季を仕舞けるが壱石につき四十五匁の相場の米を三月晦日切にして五十八匁に定め年〳〵借けるに諸職人内談して壱石に十三匁の利銀三ケ月に出す事はいかにしてもむごき仕かけ年は何やうにもとられ次第此米借など言合せ折角鳥羽までつみのぼしたる米を其まゝに預けて歸るといふ船中の身のうへ物かたりいづれを聞てもおもひのなきはひとりもなし此舟の人〳〵我家ありながら大晦日に内にゐらるゝは有まじ常とはかはり我人いそがしき中なれば人の所へもたづねかたし昼のうちは寺社の繪馬も見てくらしけるが夜に入て行所なし是によつて大分の借錢屓たる人は五節季の隠れ家に心やすき妾をかくまへ置けるといふそれは手前もふりまはしもなる人の事

貧者のならぬ事ぞかし宵から小うたきげんの人定めて內證ゆるりと仕舞おかれしやうら山しやとたづねければ此おとこ大笑ひして皆〳〵は大晦日に我人のためになり內にゐる仕出しをいまだ御ぞんじなさそふな此二三年入替りといふ事を分別してこれにてらちをあけけるたかひにねんごろなる亭主入替りて留守をいたし借錢乞のくるときを見合お內義わたくしの銀は外に買かゝりとは違ひました亭主の腹はたをくり出してらちをあくるといへば外のかけこひどもは中〳〵すまぬ事と思ひみなかえりける是を大つごもりの入かはり男とて近年の仕出しなりいまだはし〳〵にはしらぬ事にて一盃くはせける

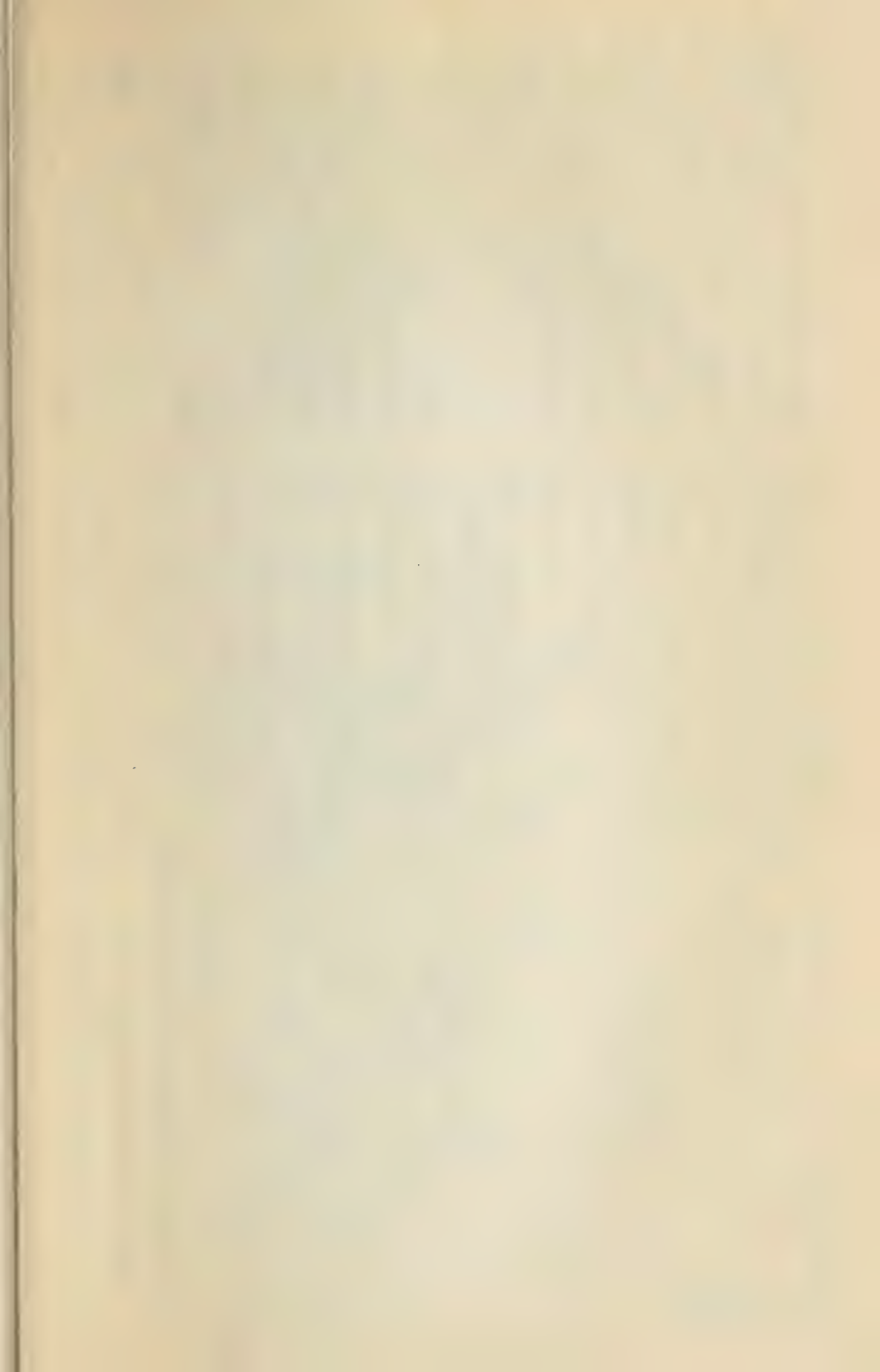
四　長崎の餅柱

霜月晦日切に唐人船殘らず湊を出て行ば長崎も次第に物さびしくなりぬしかし此所の家業はよろづからもの商なひの時分銀もふけして年中のたくはへ一度に仕舞置貧福の人相應に緩〳〵とくらし万事こまかに胸算用をせぬところなり大かたの買物は當座ばらひにして物まへの取やりもやかましき事なし正月の近づくころも酒常住のたのしみ此津は身過の心やすき所なり師走になりても人の足音いそがしからず上方のごとく節季ぞろもこねば只伊勢ごよみを見て春のちかづくをわきまへ古代の掟をまもり極月十三日に定まつて煤をはき其竹を棟木にからげ又の年のすゝはきまで置事ぞかし餅は其家〳〵の嘉例にまかせてつきけることにおかしきは柱もちとて仕舞一うすを大こく柱にうちつけ置正月十五日の左義長のときこれをあぶりて祝ひける萬につけて所ならはしのおかしく庭に幸はひ木とて横わたしにして鰤いりこ串貝鴈鴨雉子あるひは塩鯛赤いわし昆布たら鰹牛房大こん三ヶ日につかふほどの料理のもの此木につりさげて竈をにぎあはせすでに大晦日の夜に入れば物もらひども貝あかくして土で作りしゑびす大こく又荒塩臺にのせ當年の衣方の海より潮が參つたと家〳〵をいはゐまはりけるは船着第一の所ゆへぞかし惣じてとし玉は何國にてもかるひ事に極まりて男は壹匁に五拾本づゝの數あふぎ女はせんじ茶を少づゝ紙につゝみてけいはくらしき事こゝの惣並なればおかしからず兎角住なれしところ都の心ぞかしされば諸國の商人手まはしはやくしてわが古さとの正月にあふ事を世のたのしみとせしに京の細もとでなる糸商賣の人此二十年も長崎くだりして万事人に

すぐれてかしこく京都を出たち喰て旅用意歩行路舟路にて中〳〵錢壱もんも外なる事につかはず長崎に逗留の内終に丸山の遊女町のぞかず金山が居すがたのりこんなやら花鳥が首すしの白ひやら夢にも見ずして枕に筭盤手日記をはなたず何とぞして唐人のおろかなるをたらしよきあきなひ事もがなとあけくれこゝろにかくれども今ほどの唐人は日本のことばをつかひおぼえ持あます銀かあるとも家賃より外に借す事なし又は歩にあふ家かふておくをよい事と合点しければ各別な事は唐さへなしまして日本の知恵ふくろは世俗にかしこくよい事ばかりはさせぬなり利発にて分限にならば此男なれ共ときの運きたらず仕合がてつだはねば是非なしおなじころより長崎にくだり同じ糸商賣する京の人大分の手前者となり今は手代をくだして其身は都に安樂にしてしかも物見花見女郎狂ひも相應にして分限なる人数しらずこれはいかなる事にてかくは成けるぞとたづねしにそれはみな商人心といふものなり子細は世間を見合來年はかならずあがるへきものを考ふんごんて買置の思ひ入あふ事より拍子よく金銀かさむ事ぞかしこゝ

のふたつものがけせずしては一生替る事なし此男は長崎の買もの京うりの算用してすこしも違ひなく跡先ふまへてたしかなる事ばかりにかゝれば算用の外の利を得たる事一とせもなくて皆銀の利にかきあげ人奉公して氣をこらしける毎年大晦日を橋本旅籠屋に定宿こしらへ置爰にて年をとるが我等が家の嘉例といふは大挑の借錢すましかねるゆへなり同しくは吉例やめて京の我宿にて年とるやうにいたしたきものぞかし此男つら／＼世を見合尤こまへに怪我はなけれども皆人沙汰せらるゝ通り利を得る事なし當年は何によらず我商ひの外なる事に一思案して銀もうけせずばあるべからすと心中極めて長崎にくだりさま／＼分別せしに銀でかねもふくる事ばかりにて只とるやうな事はひとつもなしとかく來春の小芝居

何ぞ替つた見せものもがな京大坂の細工人も手をつくして色／＼仕出し何かめづらしからねばからものにもしも有べしとせんさくして大かたの物にては錢は取がたしと吟味するに定まつてよいものは今まで見せぬ蝄竜の子又火喰鳥などいまだ見せた事なしこれは長崎にも稀なれば自由に手に入がたしひそかに唐人をかたらひ何と異國にかはりたるものはないかといへば鳳凰も雷公も聞たばかりにて見た事なしとかく伽羅も人蔘も日本に稀なるものは唐にもすくなしことに銀たいせつにおもへばこそ百千万里の風波をしのぎ命と銀と替る商ひにのぼりけるにて世に銀ほど人のほしきものはないと合点いたされよとかたりけるこれ尤とおもひ身のかせぎに油斷なく色／＼のわたり鳥調へて都にのぼりしにみな見せて仕

舞し跡なればひとつも錢に成がたく人の見付たる孔雀はまだもすたらず漸本銀取返しぬ是を思ふにしれた事がよしとぞ

胸算用　大晦日ハ一日千金　巻五

目録

三　平太郎殺

つゆしの世柳母を殺せ

一夜にさ白くの世の嘆

四　長久の江戸棚

これめの時がありうし

春のとめくし幾歳の松

つまりての夜市

萬事の商なひなふて世間がつまつたといふは毎年の事なりたとへば十匁に相場極まりて賣買いたせし物を九匁八分にうれば時の間に千貫目か物も買手有又十匁に買ば艮座に弐千貫目がものも賣手有是をおもふに大場にすめる商人の心だま各別に廣し賣も買もみな人〳〵の胸ざんようぞかし世になきものは銀といふはよき所を見ぬゆへなり世にあるものは銀なり其子細は諸國ともに三十年此かた世界のはんじやう日に見えてしれたり昔わら葺の所は板びさしと成月もるといへば不破の關屋も今はかはら葺にしら土の軒も見え内ぐら庭藏大座敷のふすまにも砂粉はひかりを嫌ひ泥引にして墨繪の物ずき都にかはる所なし又灘の塩やきはつげの小ぐしもさゝでと誦しにかゝる浦人も今は小袖ごのみして上方にはやるといふ程の事を聞あはせ見おぼえ千本松いすゞ形もふるし當年の仕出しは夕日笹のもよふとぞといまだ京大坂にもはし〳〵はしらずして中がたのしのぶ小桐の衣裳きるうちにはやいなかに京ぞめはしやれたりむかしもようの肩さきから染込の郭公の二字又はぶどう・だなの所〳〵につるはを赤ねの染入おかし見し時は各別ぞかし何國に居ても金銀さへもちければ自由のならぬといふ事なしことさら貧者の大節季何と分別しても濟がたしないといふてから錢が壱匁おかぬ棚をまぶりてから出所なしこれを思へば年中始末をすべし日に壱匁づゝ貰若にてのばしければ壱年に三百六十匁十年に三貫六百なり此心から算用すれば茶焼木味噌塩万事に何ほどの貧家にても一年に三十六匁の違ひ有十年に三百六十目是に利をもりかけて見るときは三十年につもれば八貫目餘の銀高なり惣してすこしの事とて不斷常住の事には氣をつけて見るべしことにむかしより食酒を呑ものはびんぼうの花ざかりといふ事有爰に火ふくちからもなき其日過の釘鍛冶お火焼に稻荷どのへ進ぜたるお神酒徳利のちいさきに八匁づゝがはした酒日に三度づゝ買ぬといふ事なく四十五年此かた呑くらしける此酒の高毎日小半づゝにして四十石五斗なり毎日二十四匁の錢つもり〳〵十二匁錢にして銀に直し四貫八百六十目なり此男下戸ならば是ほどに貧はせまじきものと笑ふ人あれば此鍛冶我家おさめたる皃つきして世中に下戸のたてたる藏もなしとうたひてまた酒をぞ呑

ける旣に其年の大晦日にあらましに正月の用意をしてほうらいは餝りながら酒小半もとむる錢なくてことのたらさる宿さびしく四十五年此かた一日も酒のまぬ事のなきに日もこそあれ元日に酒なくては年をこしたる甲斐はなしなと夫婦さま／＼內談するに酒手の借ところなく質種もなくやう／＼思案めくらして過つるあつさをしのぎしあみ笠いまた青／＼として そこねもやらすありけるをこれ來年の夏までは久しき事なりたからは身のさしあはせこれをうりて當座の用にたつるより外なしとすてに立さかりたる古道具の夜市にまきれて世間のやうすを見るに大かた行所なき借錢負の身つきぞかし宿の亭主は賣口錢一割のきほひにかゝつてふり出しけるこよひになつてうるほとのものよく／＼さしつまつて皆あはれなり

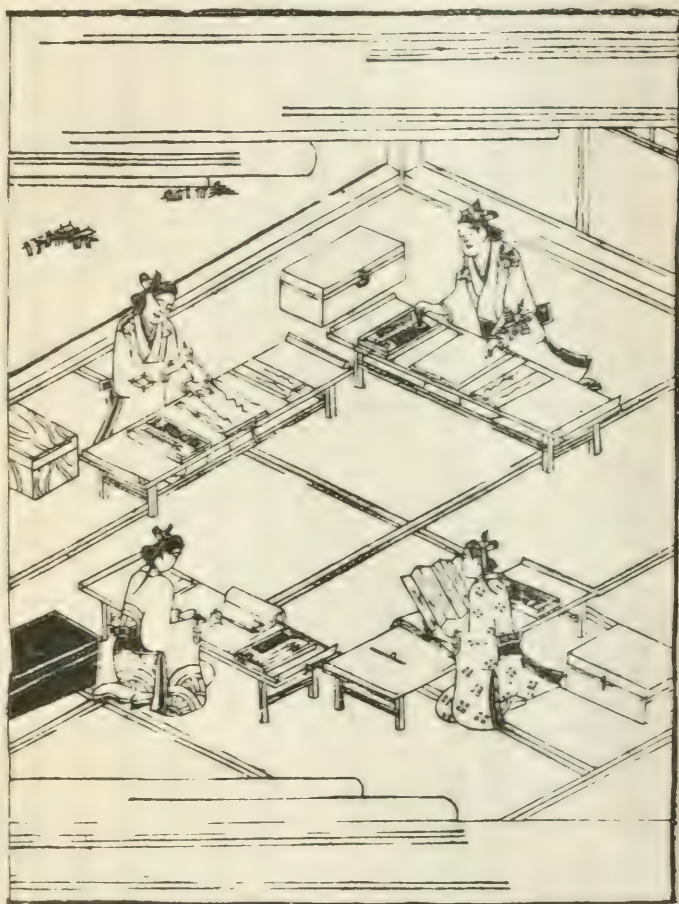
十二三なる娘の子の正月布子と見えてもえぎ色に染かのこの洲崎うらはうすに紅にして中綿もおします入ていまた袖口もくけすしてこれを望はないか／＼とせりければ六匁三分五リンづゝに落けるよもや裏ばかりも出來まじ其次に丹後の細口の鰤を片身賣に出しけるこれもあまらす二匁二分五リンにう

れける其跡から二疊釣の蚊屋出して八匁より二十三匁五分までせりのほしけるにうらすして置ける是は商ひならぬはつなり蚊屋大晦日迄質におかす持たる身躰なれはたのもしき所ありと笑らひける其のち十枚つきの蠟地の紙に御免筆の名印までしるしたるを賣けるに一分からやう／＼五分までねたん付けれはそれはいつれもあまりなる事紙はかりか三匁か物か御座るといへはいかにも／＼何もかゝすにあれは三匁か紙なり無用の手本書て五分にも高したとへいかなる人の筆にもせよ是をふんとしといふ手しやといふそれはいかなる事そといへは今の世に男と生れ是程かゝぬものはないによつてこれをふんとし下とを笑ひける扨又これはわれもの／＼と大事にかけて出しけるは南京のさしみ皿十枚其へたてに入たる京大坂の名ある女郎の文からなりこれはといそかしきによみて見るに皆十二月の文ともはいとしかはひのおもひをさつて近ころ申かねけれへともと無心の文はかりなり戀も無常も銀なくては成かたし此皿のぬしも定めて大しんといはれて此ふみひとつが銀一枚つゝにもあたるへし然れは皿よりは此反古に大分の

ねうちありとておの／＼大わらひしける共跡に不動一躰とつこ花さられい錫杖ごまの檀の仕廻ものさて／＼此不動も我身上の富貴は祈られぬ物よと沙汰しける時にくだんのあみ笠出せは其座に賣ぬしの居るもかまはずあはれや／＼此笠幾夏かきるためとてふるきこかみにて紙ふくろして入てさても始末なやつがうり物そと三匁からふり出して十四匁に賣て此錢うけとる時これは此五月に三十六匁に買て何／＼のせいもん庚申參りに只一度かつきし共まゝといひけるも其身の恥のおかし其夜の仕舞に歳暮の祝扇の箱二十五たはこの入し箱ひとつて二匁七分に買て歸りしにたはこ箱の下に小判三兩入置しは思ひもよらぬ仕合也

二 才覺のぢくすだれ

宵の年のせつなき事をわすれがたく來年からは三ケ日過たらは四日より商賣に油斷せす万事を當座ばらひにして錢のないときは肴も買ぬがよし諸事を五節供切と胸算用を極め借錢乞のこはひ心をすくに正月に成けることしは今までの嘉例をいはゐ替るとて十日の帳とぢを二日に取こし五日にせし棚おろしを三日にして俄かに身の取まはしかしこくとかく宿を出るからに思ひよらぬ銀をもつかひ物見もの參りにさそはれ大事の日をむなしうくらす事無分別とおもひ定めて商賣の事より外には人とものをもいはす毎日心算用して諸事に付て利を得る事のすくなき世なれは内證に物のいらさるしあん第一と心得て三月の出替りより食たきを置す女房にまへたれさせて我も昼は旦那といはれて見世にゐて夜は門の戸をしめ置てでつちかふみ碓を助てとらせ足も大かたは汲たての水て洗ふほとに氣を付けれ共これかやあをちひんぼうといふなるへし又それほとにあきない事なくていよ／＼日なたに氷のことし何としても一升入柄杓へは一升よりはいらすとむかしの人の申傳えしされは熊野ひくにか身の一大事の地こく極樂の繪圖を拜ませ又は息の根のつゞくほとはやりうたをうたひ勸進をすれとも腰にさしたる一升ひしやくに一盃はもらひかねけるさる程に同し後世にも諸人の心さし大きに違ひ有事哉冬とし南都大佛建立のためとて龍松院たち出給ひ勸進修行にめくらせられ信心なき人は進め給はす無言にてまはり給ひ我心さしあるはかりを請たまふも一升ひしやくなるに一歩に壱貫十步に十貫あるひは金銀をなけ入釈迦も錢ほど光らせ給ふ

今佛法の昼そかし是は各別の奇進とて八宗ともに奉伽の心ざし殊勝さ限りなかりきすてに町はつれの小家かちなる所までも長者の万貫貧者の壱匁これもつもれば一本拾二貫目の丸柱ともなる事ぞかし是おもふに世はそれ〴〵に氣を付てすこしの事にてもたくはへをすべし分限に成けるものは共生れつき各別なりある人のむすこ九歳より十二のとしのくれまで手習につかはしけるに共間の筆のぢくをあつめ共外人のすてたるをも取ためて程なく十三の春我手細工にして軸すだれをこしらへ壱つを一匁五分づゝの三つまで賣拂ひはじめて銀四匁五分もうけし事我子ながら只ものにあらずと親の身にしては嬉しさのあまりに手習の師匠に語りければ師の坊此事をよしとは譽給はず我此年まで数百人子共を預かりて指南いたして見およびしに共方の一子のごとく氣のはたらき過たる子共の末に分限に世をくらしたるためしなし又乞食するほどの身躰にもならぬもの中分より下の渡世をするもの也かゝる事にはさま〴〵の子細ある事なりそなたの子計をかしこきやうにおぼしめすなそれよりは手まはしのかしこき子共有我當番の

日はいふにおよばず人の番の日もはうきとり〳〵座敷はきてあまたの子共が毎日つかひ捨たる反古のまろめたるを一枚〳〵しはのばして日毎に屏風屋へうりて歸るもあり是は筆の軸をすだれのおもひつきよりは當分の用に立事ながらこれもよろしからず又ある子は紙の餘慶持來りて紙つかひすごして不自由なる子共に一日一倍ましの利にてこれをかし年中につもりての德何ほどゝいふ限りもなしこれらはみなそれ〳〵の親のせちかしこき氣を見ならひ自然と出るおのれ〳〵が智惠にはあらずその中にもひとりの子は父母の朝夕仰せられしは外の事なく手習を情に入よ成人しての其身のためになる事との言葉反古には成がたしと明くれ讀書に油斷なく後には兄弟子どもすぐれて能書に成ぬ此心からは行末分限になる所見えたり其子細は一筋に家業かせぐ故なり惣して親より仕つゞきたる家職の外に商賣を替て仕つゞきたるは稀也手習子どもゝおのれが役目の手を書事は外になし若年の時よりすゝどく無用の欲心なりそれゆへ第一の手はかゝざることのあさましその子なれどもさやうの心入よき事とはいひがたしとかく少年の時は花をむしり紙鳥をのぼし智惠付時に身をもちかためたるこそ道の常なれ七十になるものゝ申せし事ゆくすゑを見給へといひ置れし師の坊の言葉にたがはず此者共我世をわたる時節になつてさま〳〵にかせぐほどなりさがりて軸すだれせしものは冬日和の道のために草履のうらに木をつけてはく事仕出しけれどもこれもつゞきて世にはやらずまた紙くずあつめしものはちやんぬりのかはらけ仕出して世にうれども大晦日にもともし火ひとつの身だいなり又手ならひばかりに勢をいれたるものは物ごとうとく見ゑけるが自然と大氣に生れつき江戸まはしのあぶら寒中にもこほらぬ事を分別仕出し樽に胡椒一粒づゝ入る事にて大分利を得て年をとりけるにおなしおもひつきにて油がはらけと油樽と人の智惠ほどちがふたる物はなかりし

三　平太郎殿

古人も世帶佛法と申されし事今以て其通り也毎年節分の夜は門徒寺に定まつて平太郎殿の事讃談せらるゝなり聞たびに替らぬ事ながら殊勝なる義なれば老若男女ともに參詣多し一とせ大晦日に節分ありて掛乞厄はらひ天秤のひゞき大豆うつ音まことにくらがりに鬼つなぐとは今宵なるべしおそろしさて道

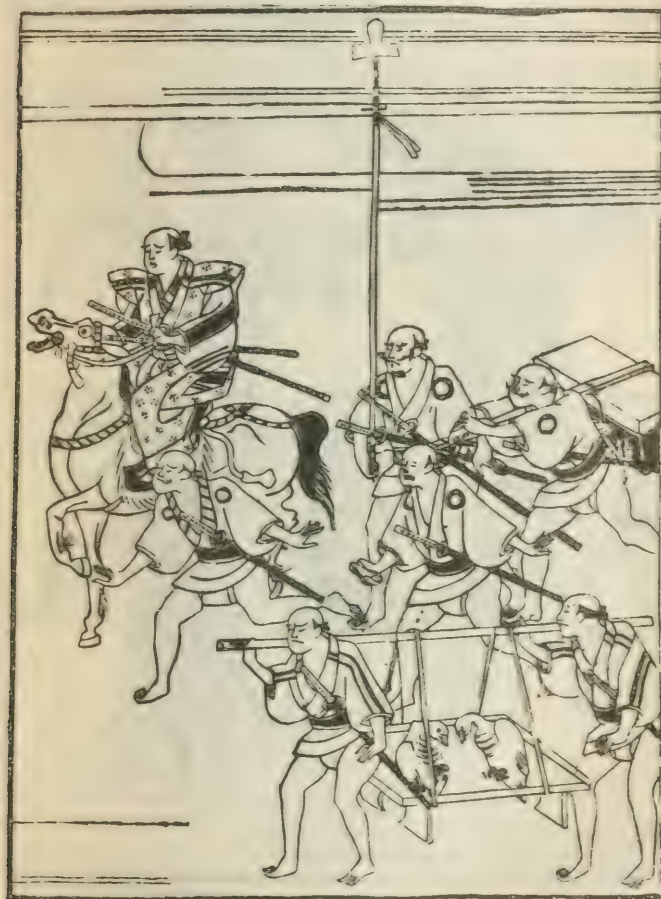
場には太鼓おとづれて佛前に御あかしあげて參りの同行を見合けるに初夜の鐘をつくまでにやう／＼參詣三人ならではなかりし亭坊つとめ過てしばらく世間の事どもをかんがへされば今晩一年中のさだめなるゆへそれ／＼にいとまなく參りの衆もないと見ゑました然れども子孫に世を渡し隙の明たるお祖母たちはけふとても何の用あるまじ佛のおむかひ船が來たらばそれにのるまいといふ事はいはれまじおろかなる人こゝろふびんやなあさましやなさりながら只三人にきかせましてさんだんするも益なしいかに佛の事にても爰が胸算用で御座る中／＼灯明の油錢も御耗なり面／＼に散錢取返して下向して給はれ皆世わたりの事共にからまされ參詣もなき所に各さどく千万爰を以信心如來もいそかしき中に足をはこび給ふをそんにはせさせ給はぬ也金の大帳に付おかせられて未來にて急度算用し給ふなればかならず／＼捨たるとおぼしめすな佛は慈悲第一すこしもいつはりは御座らぬたのもしうおぼしめせ時にひとりの祖母泪をこぼし只今の有かたひ事をうけたまはりまして扨も／＼我心底の恥かしう御座ります今夜の事信心にて參りましたでは御座らぬひとりおるせがれめがつね／＼身過に油斷いたしまして借錢に乞たてられまして節季／＼にさま／＼作り事申てのがれましたが此節季の身ぬけ何とも分別あたはす私には道場へまいれ其跡にて見ゑぬとなげき出し近所の衆をたのみ太鼓かねをたゝきたづねこれにて夜をあかして濟すべしふるひ事ながら大晦日の夜のお祖母を返せは我等が仕出しと思案して世のふしようなればとてあたりの衆におもはぬやつかいかくる事是大きなる罪とそなげきける又一人は生國は伊勢のものなるが人の縁ほどしれぬものはなし爰許に親類とてもなきに大坂旦那廻りの太夫どのにやとはれ荷持をいたせし時此所の繁昌見まして何をしたればとてふたり三人の口を喰事心やすき所ぞと見たて幸はひ大和がよひして小間物商ふ人の死跡にふたつになる男の子あつてかゝも色じろにたくましければとも過にして世をわたり行末は其子めにかゝる事をたのもしくおもひ入聟していまた半年もたゝぬにみなになし極月はしめごろより何かなと渡世しあんするうちに女は子を愛して我も耳があるほとに人のいふ事をよくきけ小男でも本のとゝさまは利発に

あつたとおもへ女の手わざの食までたきて女房は宵からねさせ置て我は夜明がたまでわらんじをつくりわれは着ずに女ぼう子どもには正月布子をこしらへ此黄がらちやのきるものも其時の名ごりじやそ何に付てもなじみほとよきものはなしもとのとゝさまこひしやとなけ〳〵といふときはさりとては入聟口おしく堪忍ならぬ所なれども是非なく日をかさね我ふるさとにすこし借置たる銀子もあればこれを取あつめて此節季仕舞とはる〳〵くだりける甲斐もなく其ものどもはみな所をされば又手ぶりにてやう〳〵けふの夕食前に宿へ帰りしに何とか才覚いたしける餅もつき薪も買神のおしきに山ぐさの色めきければ世はなげくまじ又引あぐる神も有て留守のうちに手廻しよく内證仕舞置けるとうれしく無事で帰りたるといへば女房もいつよりは機嫌よくして先足の湯を取もあへず鰯膾を片皿に赤いはしの焼ものにて心よく膳をすへける程に箸とつて喰かゝる時伊勢の銀どもは取て御座つたかといふ不仕合いふを聞もあへずそなたは手ぶりでようも〳〵戻られた事じや此米は壱斗を二月の晦日切に約束してわれらが身を手

形に書入て九拾五匁の筭用にして借ましたよ世間は四拾目の米喰とき九十五匁の米を喰事そなたのどんなるゆへにかゝる仕合持て御座つたものはふんどし一筋何もそんのまいらぬ事夜に入ば闇ふなります足もとのあかひうちに出て御座れと喰かゝつた膳をとつて追出す時近所のもの共あつまりて是は御亭さまのめいわくながら入聟のふしやうに出ていなしやるが男の本意じや又よい所も御座ろと口〳〵に追出しければあまりかなしくて泣れもせず明日は國元に歸る分別いたしましたが今夜一夜のあかし所なく我らは法花宗なれ共是へ參りましたと身のさんげする事哀れにも又おかし又ひとりの男は大わらひして我身の事はとかふ申がたし宿にいますれば方〳〵よりいけておかぬ身なりどなたへ申て錢十もんかり所はなし酒は呑たし身はさむし色〳〵無分別を盗み取て酒の代にせんと心がけしに年を越べき才覚なし近ころあさましきこゝにかぎらずいづかたの道場にも人おもひつきながらこよひは道場に平太ぎれなくほとけの目をぬく事も成がた郎殿の讃談參り群集すべし共草履雪踏しと身のうへをかたりて泪をこぼしけ

る亭坊も横手をうつてさても／＼身の貧からはさま／＼悪心もおこるものぞかし各もみな佛躰なれども是非もなきうき世ぞとつら／＼人界を觀じ給ふうちに女けはしくはしり來て娌御さま只今安／＼と御平産あそばしました御しらせ申ますといふ程なく其跡より箱屋の九藏今のさきに掛こひと云分いたされまして首しめて死れまして御ざる夜半過に葬礼いたします御くろうながら野墓へ御出たのみますといふて來る取まぜてかしましき中に仕たてもの屋より縫に下されました白小袖をちよろりと盗まれましたせんさくいたしまして出ませずは銀子たてまして御そんはかけますまいとことはり申に來る東隣から御無心なれども今晩俄かに井戸がつぶれました正月五ケ日 水がもらいましたいと申きたる其跡から一旦那のひとり子金銀をつかひすごし首尾さん／＼にて所を立のくを母親の才覺にて御坊さまへ正月四日まで預けにつかはしける是もいやとはいはれずうき世に住から師走坊主も隙のない事ぞかし

四　長久の江戸棚

天下泰平國土萬人江戸商ひを心がけ其

道〳〵の棚出して諸國より荷物船路聞付の馬かた毎日数万駄の問屋づきこゝを見れば世界は金銀たくさんなるものなるにこれをもうくる才覺のならぬは諸商人に生れて口おしき事ぞかしさるほどに十二月十五日より通り町のはんじやう世に寶の市とは爰の事なるべし常のうりもの棚は捨置て正月のけしき京羽子板玉ぶり〳〵細工に金銀をちりばめはま弓一挺を小判二兩などにも買人有けるは諸大名の子息にかぎらず町人までも萬に大氣なるゆへぞかし町すじに中棚を出して商ひにいとまなく錢は水のごとくながれ白かねは雪のごとし富士の山かげゆたかに日本橋の人足百千万の車のとゞろくに聞なしたり船町の魚市毎朝の賣帳四方の海ながら浦〳〵に鱗のたねも有事よと沙汰し侍る神田須田町の八百屋もの毎日の大根里馬に付つゞきて数万駄見えけるはとかく畠のありくかごとし半切にうつしならべたる唐がらしは秋ふかき竜田山をむさし野に見るに似たり瀬戸物町椥町の鴈鳧さながら雲の黒きを地にはへたるがごとし本町の呉服もの五色の京染屋しき模やうのちらしがた四季一度にながめすがたのはなの色香ぞかし

傳馬町のつみ綿みよしのゝ雪のあけぼのの山〳〵夕へにはちやうちんつらなり道明らかう大晦日の夜に入て一夜千金家〳〵の大商ひ殊に足袋雪踏は諸職人万事買物のおさめにして夜の明がたに調へに來たり一とせ江戸中の棚にせきだか一足たびか片足ない事有幾万人はけばとてかゝる事は日本第一人のあつまり所なれば也宵のほどは一足七八分のせきだ夜半過には壱匁二三分となり夜明がたには一そく弐匁五分になれ共買人ばかりにしてうるものなし一とせ掛小鯛二枚十八匁宛せし事も有代ゝひとつ金子弐歩づゝせしに高ふて買ぬといふ事なし京大坂にては相場ちがひのものはたとへ祝儀のものにしてから中〳〵調ふへき人心にはあらす爰を以て大名氣とはいへり京大坂に住なれて心のちいさきものも共氣になつて錢をよむといふ事なし小判をりんだめにてかける事なしかるきをとれば又共まゝにさきへわたし世は廻り持のたからなれはひとりとして吟味する事にはあらず十七八日までに上方へ銀飛脚の宿を見しに大分の金銀色もかはらず上りてはくだり一とせに道中を幾たびか金銀ほど世に辛勞いたすものは外になし是ほと世界に多きものなれとも小判一兩もたずに江戸にも年をとるもの有されは歳暮の御使者とて太刀目錄御小袖樽さかな箱入のらうそく何を見ても萬代の春めきて町並の門松これぞちとせ山の山口なを常盤橋の朝日かげ豊かに靜かに万民の身に照そひくもらぬ春にあへり

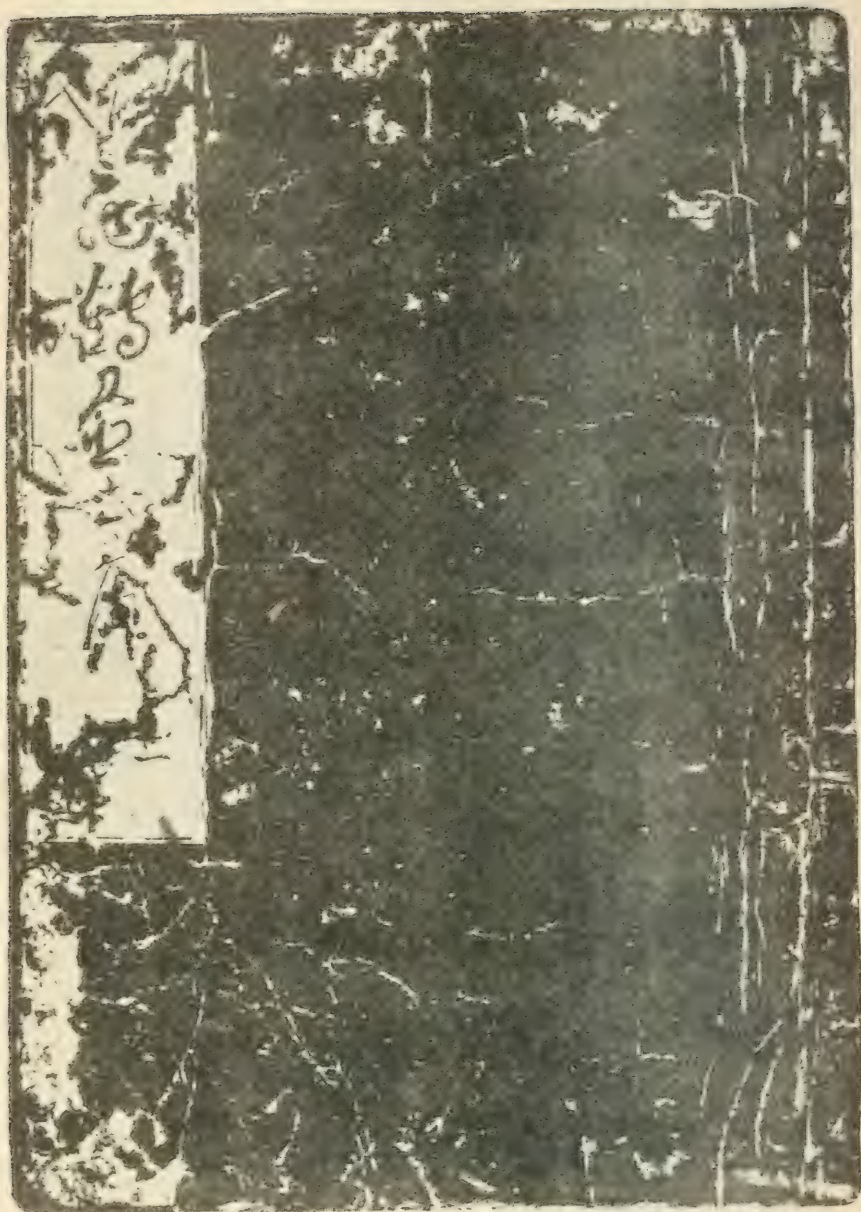
元禄五壬申年初陽吉日

京二条通堺町
上村平左衛門

江戸青物町
萬屋清兵衛

大坂梶木町
伊丹屋太郎右衛門

書肆

板行

難波俳林

松壽軒西鶴

辭世人間五十年の究り
それさへ
我にはあまりたる
にましてや
浮世の月見過しにけり
末二年

元祿六年八月十日五
十二才

追善発句

月に盡ぬ世かたりや二
万三千句　如貞

念仏きく常さへ秋はあ
はれ也　幸方

秋の日の道の記作れ死
出の旅　万海

世の露や筆の命の置所
信徳

残いたか見はつる月を
筆の隈　言水

前書略

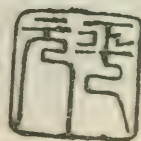
泣や此櫟は折れす秋の
風　才麿

力なや松をはなるゝ蔦
かつら　團水

此全ア五冊の書は先師
の書捨置れける反故の
中より出たるを書林何
かしせちに乞てなかき
かたみにもやといへる
に跡はきえせぬとよめ
るもあはれにおもひや
られてかれにあたふる
ものなり

元祿六酉冬の日　［杢諺］［平元］

難波俳林西鶴菴

團水

世界の偽かたまつてひとつの美遊となれり。是をおもふに眞言をかたり揚屋に一日は暮がたし。女郎はなひ事をいへるを商賣男は金銀を費ながら氣のつきぬるかさりこと。太鼓はつくりたはけ。やりてはこはい㒵。禿は眠らぬふりゝ宿のかゝは無理笑ひ。かみする女は間ぬけの返事。祖母は腰ぬけ役に酒の横目。亭主は客の

内證を見立けるが第一それ／＼に世を渡る業おかし。去程に女郎買。さんごじゆの緒じめさげながら此里やめたるは独もなし。手が見えて是非なく身を隠せる人其かぎりなき中にも凡万人のし連る色道のうはもりなれる行末あつめて此外になし是を大全とす

難波

西鶴

西之りくちと記みやげ巻之一

大全
目録

ゆきふ傘借しの雨

情ハふかゞ侍女

水ハ袖しか涙

大谷のみき儀し

古今扇子寝覚たびまくら

夏ハ明月

四十九日の堪忍

悲しさは諸物

偽もいひ過し

笑ての鏡餅

世界ハ借錢おもつらぬ

こそあまりたる人

節の秋がおもしろき

たいこ持律義

やこ形宗流人

かもに流先人へ

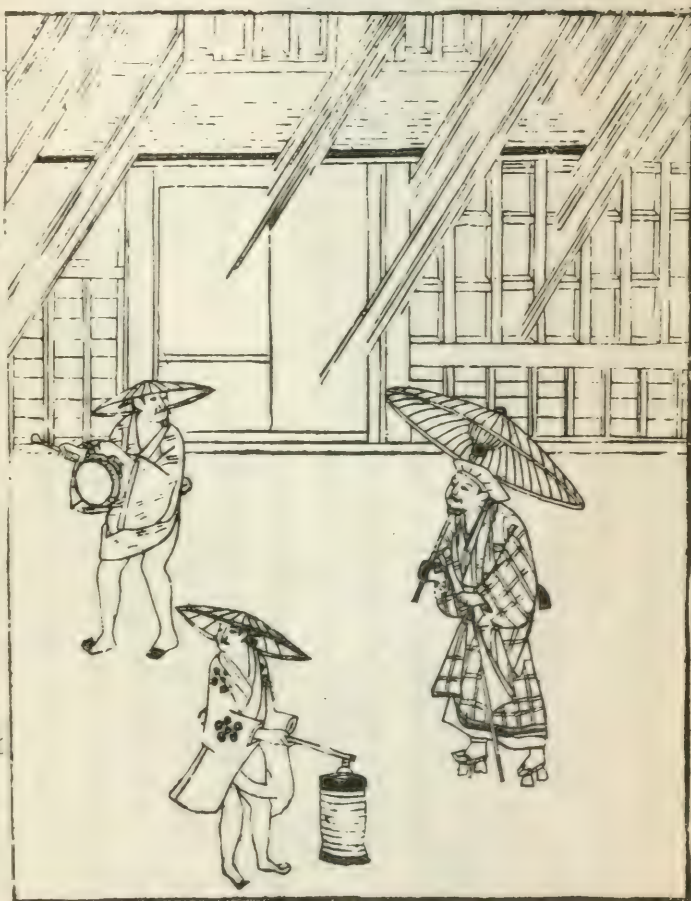
偽くらも退り歳

今年史が志りけ

いつまでこそのみ

やよく志れぬハ命

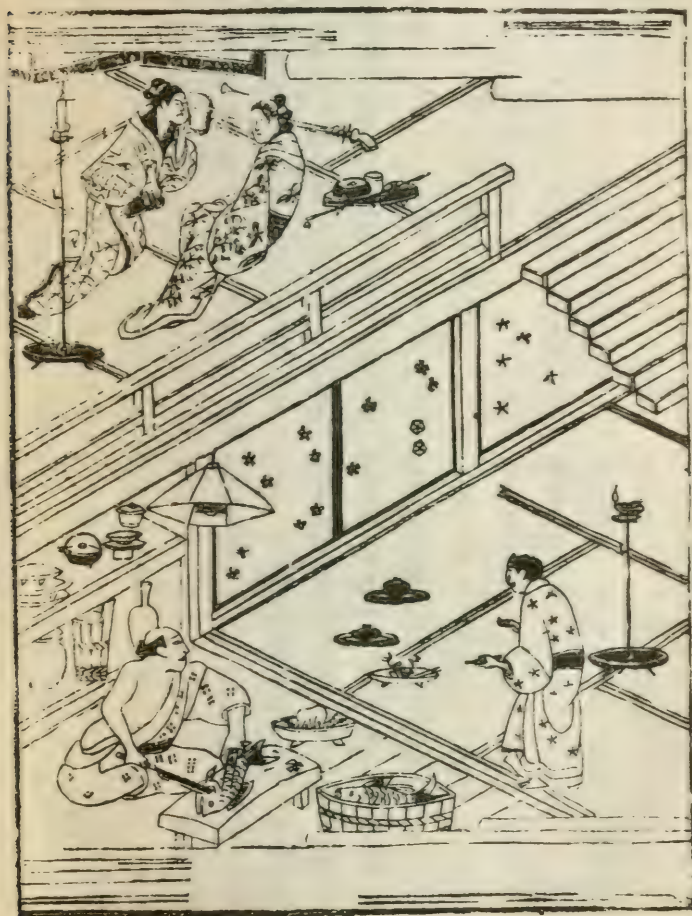
しておもてのぶんは七分莚の算用にして。壱ヶ月に百九拾目づゝおさまれは。是そよき隱居やしきと。賣もせぬ先に人の家のさし圖をするは無念ながら是非もなし聞ほど堪忍ならねど。家質の連判賴みをけば世上ほど自由にならぬ物なしと。男泣すれど。萬事は歸らぬむかしとおもふに。筋むかへの兩替屋の親仁のいへるは。親の庭好して植をかれし。蘇鉄は今に有かといへば。それはいつの事。迚も賣家の覺悟して。岩組まで。ひとつも以前の形はなし。あんな仕果世にまたと有べきか。既にありさまの聟に成筈を。首尾せいでお仕合。わたくしの西隣にも親ニ懸り。若ひ子どもの風うへに置事もいやと。鼻に。しはよせて。物惡そふにいへり。おのれ後から。ふみたふしてもとおもへと。扨も世間は思案する程むつかしく。ひそかに戸をたゝけば。五十あまりの下女罷出。よひほどにてお歸りあれかし。八つの鐘聞てからも。しばしの事と。いふ声ばかりして闇かりなり。火が消たかといへば油がなひといふ。それ程の才覚がならぬかと。火うち箱さがして。茶の下へ燒付。そのひかりのうちに二階へあが

り。ふるき長持をこぼちて。夜もすがら是を焼火して。ひとり文などよみながら。宵の袖をあぶるうちに。門を遠慮もなくたゝけば。寐た貞も成がたく。誰といへば。色友達四五人。むりやりに。はしり入。さむき夜の庭火。亭主が物好。どふもいへぬと。これらも傘なしの濡身をほして。何も馳走はいらぬぞ。酒はひとつのませといふ。つね〳〵ぜいを申て何時なりとも御出あそはせ。内にさし合はなし。のぞみ次第の食悦さすべしと。其言葉も是非にさけを呑する所と。徳利手樽をさかせとも。いかな〳〵一滴もなかりし。小半買べき錢もなく。此才覺昼さへならぬに。夜るの事なれは。ましてや分別出さりしが。大庭に十七ならべて只ひとつ賣殘せし大釜引ぬき。幸ひ横町に古金屋のあるこそ仕合なれ。たゝきをこして錢の俄に入子細をかたり。つぶしの直にして四匁にまけてやれは。錢わたしさまに。夜中に釜は何とも合点はゆかねとも。よもや是ばかりを盗ではござるまいといふ。神ぞ口をしけれども斷申て錢を請取。やう〳〵外聞を酒につゝみて。此酔のあまりに明日は。こよひの憂晴しに道頓堀に出。中

の大夫本にして是の亭主振舞といふ。かたしけなしと約束かためて別れ。その明の日いよ〳〵御出の使。追付お跡よりと。物のいらぬ事なれば男つくりすまして。夜前着物しはのばして。糀染の平帯。長柄のひとつさし。かどたをさぬ大鶴屋が扇。見た所は今も大臣なりけふ一日のやとひ草履取に奥嶋の風呂敷かたげさせしが。此うちへ其名染込のふれんたゝみ入。人目には替着物とみるらんと我心のはづかしく。眞齋橋筋に歩を南へいそげば。芝居のはての人立に。小間物屋の男がうち水にゆきかゝり。腰から下へ。ひとしぼりに成て。着替なき身のかなしく。心腹立て眼色かはれば。あるじはしり出。段〳〵御尤千万に存たてまつる。此男め大和より二三日跡に。爰許へまいり。つちけのはなれぬ者なれば。ぜひに。御勘忍と亭主けつかう成一言に。ねだるべき力なく。侍衆にかけぬやうにしやれと。いひ捨て通れば。是へ御腰をかけられ。御着物めしかへらるべし。さあ〳〵座敷へといふ程。きのどく。くるしからぬとて。濡ながら三津寺八まんのまへに行。此あたりに旅役者の宿ふきに。伊勢の吉太郎といふもの折ふしは。子どもの一座によびて。二三度も物とらせたる事有。是より外の茶屋役者皆〳〵分あしく立寄事はおもひもよらず。うら借屋住の吉太郎にたづね寄ば。丸裸にて立出お久しや旦那。かゝるはにふの小屋へのお立寄かたじけ有といふ物じやと。俄にたはこ盆の塵ははらへど裸で飛まはるをみて。是は氣根つよしといへば。只今大酒いたしましたとはいへど。上氣をして。旦那も此お小袖の濡はとふしぎを立る。はじめをかたりて。是を日當へほせといふ。大臣も丸はだかになつて。いづれけふはあたゝかな日じやと。椽がは立ならび歯をくひしめて語り。我等はけふにかぎつて着替もたせてまいらなんだ。其方がいつぞやのぐんない嶌の着物すこしの程借といへば。我はだか何をかくしましよ。只ひとつの郡内。裏ばかり洗はせまして。となりへくけにまいりし内。此仕合とかたる。大臣横手を打て扨もことのかげたる内證かな。近日着物はをり拙者はづむてごさる。けふは宿に首尾あしければ取にもやられずと。ふたり裸で待うちの身振さま〳〵おかしく。やう〳〵西日になつて。ほしたる着物。ひあがりて大臣これをめせば。吉太郎仕立着物も出來て二人ともに常の姿となつて踊出て。待兼る振廻のかたにゆけば。膳はしま

ふて。酒のおもしろき所へ立出。いやといはれぬ人に留られて。いづれもの手前迷惑千万といふ。今迄のお隙入。御食はまいつたかといはれて。いかにもたべましたといへば。其通りに濟て。すき腹の乱酒。さかなの中にも生貝なと喰つくして夜食までの待遠く。吸物の出るたび。もし温飩かとみれば。切かけ烏賊の。しかもかすかにこれらに腹もふくれず。笛吹の吉太郎は氣をつくして立て歸る。一座は衆道の色に前後忘るゝ醉心。我を覺えず。是はさむひといへば。お着物の入たる風呂敷取てまいつて。大勢の中にて。是を明れば紺染の暖簾に丸のうちに。仁の字付たるを取出せば。此座興さめて。をの〳〵みぬ㒵するも。なをおかし。隨分氣づよき物ながら。酒さめて。うき世の人を耻て。是より無用の色道とおもひ切て。家財しまひて其身ひとりの草菴。むかしの友にあふ事絶て。髭をのづからにのばし。手足終にあらはず渡世に江戸髻の賃びねりして。一日暮しに難波の堀づめに身を隱し。大寺の櫻はちかきに五とせあまり春を夢となし。蝶の定紋も付ずもめんを淺黄にやつて世はかろく暮して埒をあけぬ

二　四十九日の堪忍

長者に二代なし。女郎買に三代なしと。京の利發ものが名言なり。洛中廣きに。歌仙分限とさゝれて。三十六人の中にも。ひだり座の第一。二文字屋の何がしとて。親より家藏諸道具の外に十五百貫目書置せし時。連判のをの〳〵是を改て。跡取に相渡しゆ事實正明白也是を請取四十九日の朝は旦那坊主よびて。夕食に精進あげて。箸をしたに置と宿をかけ出。嶋原に行て丸屋の亭主かつてんか。おやぢが所務分。見たか〳〵と小判を逆手にもつて。まきちらし此家内はんじやうと。よろこばせける。これより心にまかせ。大夫の石州をあげづめにして。いかな〳〵脇の男には。ひぢりめんの戶帳おかませず。此女郎を秘佛の大夫と名高。その比の太皷。しやくしの德入といふ針立。此秘仏さまを預り。昼夜まもりて。後生大事に目付する。是戀に心ざしなく。情に望なし。只妻子のため何も身過と療治を捨て。一年壱貫弐百目の御合力に定め。我宿有ながら。年越の夜も内に寐ず。目に正月させて。こきみのよき首尾聞ながら妻なし千鳥と。とびありく。引舟女郎の帯とき髮の。そこぬるもかまはず。木枕が見えずは。よき物

有と。明重箱を横にして。誰に遠慮もなく。足手をのばし。後のすけを呑まひ物と。現のやうに。いひ寐入に。此おもかげ燈に移り。あらはに見えけるに。すへの女郎ながら。白むくの肌着に。首筋うるはしく。すこし中びくにこそあれ。薄皮にして。ちいさき口もと。此中でみればなり。大津などの天職よりは見よし。毎夜十八夕が物を。國土の費と無常を觀ずる所へ。頓て出前の禿。我身を人の物にして。しとげなく腰まですそのまくるゝもかまはず。酒にいたみて。朝た雨がふつて。四つ時迄ねたひぞと。おほえずいふもおかしき。こいつも。わけをしらぬさまにもみへず。只置もむねんと。又次の間をみれは太鞁女郎ふたりまで。九夕が所へひき草臥て三味線の筒を枕に足もたしあふて。さんけばなしを立聞するに。かる藻といふ女郎。しかも好そふなるにそれにこしらへて置身も。自由に我まゝもならぬ事は。氏神稲荷さまをせいもんに入て。去年の九月の十四日に肥後の衆と床へいつたまゝといふ。我等は年あけて二三度も分の立客にあふたと語る。扨もふびんや。此女郎どもを買捨にして置は。喰ぬ殺生つ

みにも成べし。けいせいの男めづらしかる事。よもや世間にしるまじ。又臺所を見わたせは。柳眞那板取まはして。色めきたる下女ども。男まじりにうちふしけれど。誰かこれらに目をやる人もなかり。是をおもふによし野の麓に花の盛をみずに暮し山崎の入郭公に耳ふさぐに同じ。爰もそのごく女房見あきて。なんともおもはぬと見えたり。こんな所へきて。たゞ居るは。うかとした事ながら。つね〳〵律義におぼしめして。大事の御番を。おたのみなされしに。みぢんもじだらくする事にあらずと。かた隅に取のき。小分別有げに眉をひそめ。まる寐して随分さむいめを堪忍して。夜あけを待兼る時。大臣起あはせ給ひ。徳入がねすがたを見給ひ。いつもそのごくひとり寐するか。さいわひの手あきがあるに。さりとは無用のしんしやく。さても殘らぬたはけ者爰で戀をせぬは風呂へ入てあかをおとさぬに同じ。ひへ物御免。どのふところへ成とも入と。お言葉かゝりて後。ぶんざい相應の遊興是皆お影〳〵太鼓持ほど。有がたき世渡り又もあらしと覺ける此大臣一代の奢。行年七十四迄要の骨のつゞく程は色さ

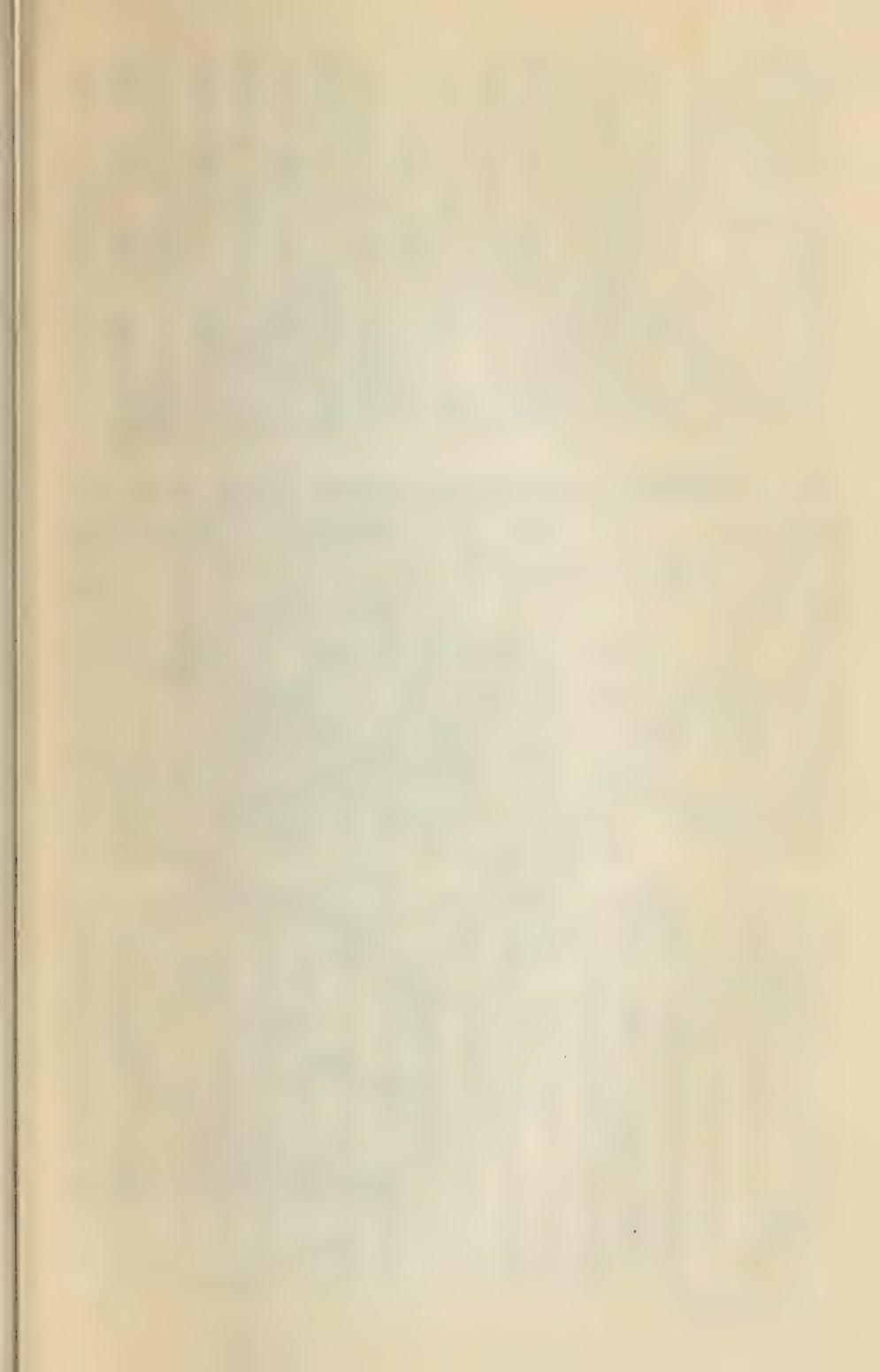
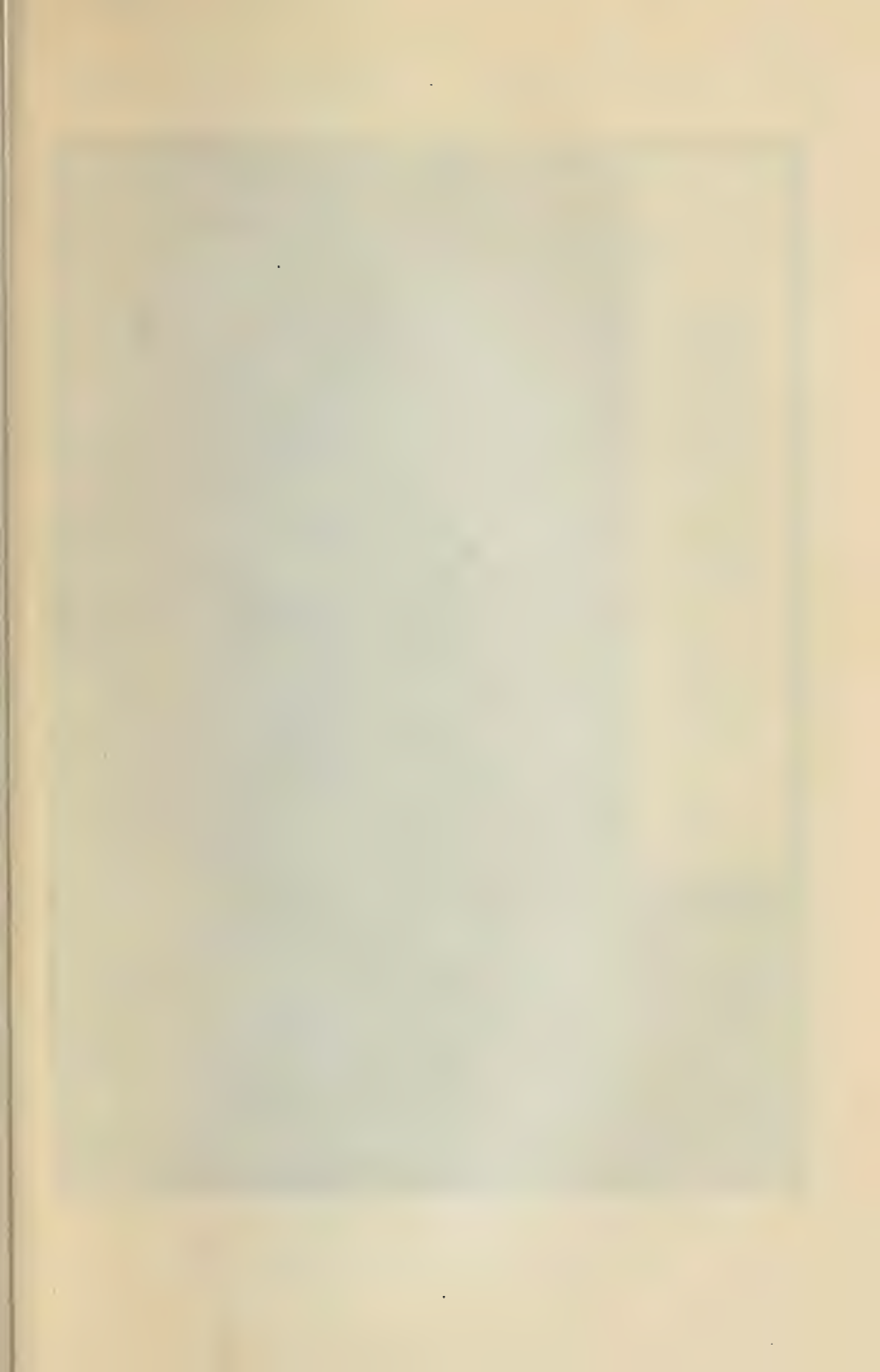
はぎ其子なを又中比の野秋にはつと出て。見事な。さはいしすこし。是も智恵すぎてやむるにはあらず。自然とおもしろさやみて。七十九の夏ころより此道をとまりける。二代ともに名を流し三代目は二清といはれて。かほる大臣なるか。ほとなくかよひ灯挑の立消して。次第わろくやめにける二代目に分散に極りたる身躰なりしが。しうとのゆづり銀。弐百貫目のひらき天秤にかけ出し今迄はつゞきぬ。二清身に當ては。三十四五貫目つかひしにわるひ所を。請取あたら身躰此男が皆になしたるやうに沙汰せられ。聟にも養子にも談合の相手なく。なんにも殘らぬ身ひとつげふを暮しかねて。やう／＼長者町によろしき姨の許へにじりこむを。ゆかりなれば見捨がたく四五人ゆる／＼と世をわたる。金銀とらせは是も又半年立ぬうちに。かの里へはこひける菟角俗をはなれさせよと。わうじやうずくめに坊主になせども。なを此道をやめず。此うへは。やしなひころせと。座敷籠に押入置に。是も忍び出。氣色をみるばかりにかよへば。いかなる事もや仕出しけんと。賢き人に相談するに。をのづから。やめさする遠嶋あり。こなたへまかし給へと。嶋原の揚屋町の横手に。ちいさき借屋をかりて。二清に渡し家賃の外に。壱ケ月の合力銀三十目何成とも勝手次第にくるひ給へといひ捨ける。爰にて名譽惡心かはりて。人にあふも迷惑して。後には。はやり咄しのうけ賣して女郎さまより物もらひて口惜からず暮しぬ

三　僞もいひすこして

万事しやれて。女郎ぐるひい今ほどおもしろき事はなし。香車の久米が十四五手づゝ先をみすかし此大臣は九月の節句過より大年までは長ひうちに。さのみ物入のなひ時をかんがへよい事をしてとり。正月買。さしづめになり。にけ道に伊勢へ年籠に親仁の代參りすると。師走廿日比にいひ出して太夫さまからはなむけに。弐百目程入。肌小袖をとつて。置みやげに小判しんぜて四十末社の者どもには。すこし子細有てやめぶんなり。内證聞てから鳩の目一匁のたよりにならぬ事。うちやつてをけと。何事ぞ有こふに。おもはせ。女在なき女郎に。帥中間から讃を付さすはしれた事。そんな前かた成仕かけ。四も五もくはぬ事十月の始いのこに。こなたから。いやといはせぬ男。きのふと暮てつゐ冬のはじめの朔日になりぬ。大勢の付相見すまし。京屋のある

じに。やりてのくめが。なにか大臣さまへをそれながら御訴訟事と申せば。其時殿さまは。置頭巾して書院毛貫をもち。一歩ほしき訴訟かといふ。いかにもそれに。にました御事なり。いのこのおかちんの米と申も。さもしき事ながらと申せば。いや／＼世間にする事は。したがよい。して。何ほど入ぞ。此時いふてとらひではと。正月の餅米迄さん用して。六石五斗と申せば。女郎屋には大分いのこをいはふじやなと。不思義がましき貞つきして。紙入をなげ出す。小判の次手に十夜の盛物代。霜月はおさめのかうしん待。わたくし小宿の水風呂の釜を仕かへの御合力。何やかや。取あつめて春までの勤めども残らず御無心申。そのうへに正月の事いまた間のある義なれども。外に申方なければと。さゝやけば。此男にげる分別かはつて。いかにも拙者請合と。たしかに宿へ申わたせば。亭主是は珍重。さても見事なあそばされやう。おそらく十月朔日に正月の極まりし女郎。新町廣しと申せども。此大夫さまの外にあらば。いふてござれ。この首水もたまらずやるは。こんな大臣のお宿には今時分から仕着物が仕廻て有物じやと。むしやうにのぼされ。前後かまはず。一座は横にやつて立けるか風のなびきにかはるは大臣のこゝろ。てつきりと大夫さまへ難儀をもつてござる所なり。時にこなたから先にいひ出し給へと。その段々をしへ置しに。案のごとく大臣。むりをもつて。さそふなる貞つきの時。しみ／＼とふかふしかけて。けふ御出を待かねましたすこし御内談いたしたき事は。此ほど兩度扇屋であひまする田舎の大臣が。此方いやなほとのほりつめ。指を切たらば。根引にして國へつれて歸ると無分別にすゝめば。いづれも爰はきり所じや。女郎の指は盆正月勤る男にさへ切もあり。いふても是は小指一つに千兩あまり入用出して。借錢まで濟して一生の苦患のがるゝ事じや。よには親かたの爲是程のと又いつの世にか有べし。是非にきれと。やり手の久米が薄刄あてがへど。氣にいらぬ男につれられて。しかもしらぬ國へ行て大勢供つれて乘物にのる事。いやじやといへば。さりとては。そのこんじやうて。よふしや。ことによつて死ぬるもあるに。もし／＼大夫とはよばれさんす。あさまこなたには何事があつても勤めの指はきらせぬ程に身に疵つけずに。女郎がなる物かてがらに淋しうないやうあそばせ。大夫から二疊敷のすまひ今ま

で幾たりかみた事。唐嵜のもやうは立田川が目にたつ物じや。仁介さまにたはこすい付て。ちと上へござりませいと。直にいやる皃をみるやうなと。扨もむごい事をやりての久米がいひまする。わたくしも新屋の金大夫といはれしもの。すいた男ならは。命がなんの惜かろと。もたれかゝつて泣出せば。大臣聞届て是はあちらこちらのせんさく成ける。けふは口舌をしかけ。是非指をきらす心底にて來りしに。おもひよらぬ事をきくは。何の口じやぞ。我をたよりに語りかゝるこそ因果なれ爰は見捨がたしと。まんまと一はいくふて。数ならねど拙者が居るぞ。けにくひ客をまきちらせとかしらから大きに出て。我ひとりして万事をつとめけるは是大分のおはまりなり。此男も北濱に源といはれて。諸分。ちうろくてんにくゝり。あまりさきぐりを仕掛しに。又女郎はそれを。しよさにする帥こかしにあはされ。扨ももろき身躰取あつめて弐百貫。やりての久米がおひ立ける若ひ女郎に付たきものはふるきやり手なり。町家若代に家久しき手代あると同じ。此大臣にもよき手代あらば是ほどまてには成まじきを。出入の者も

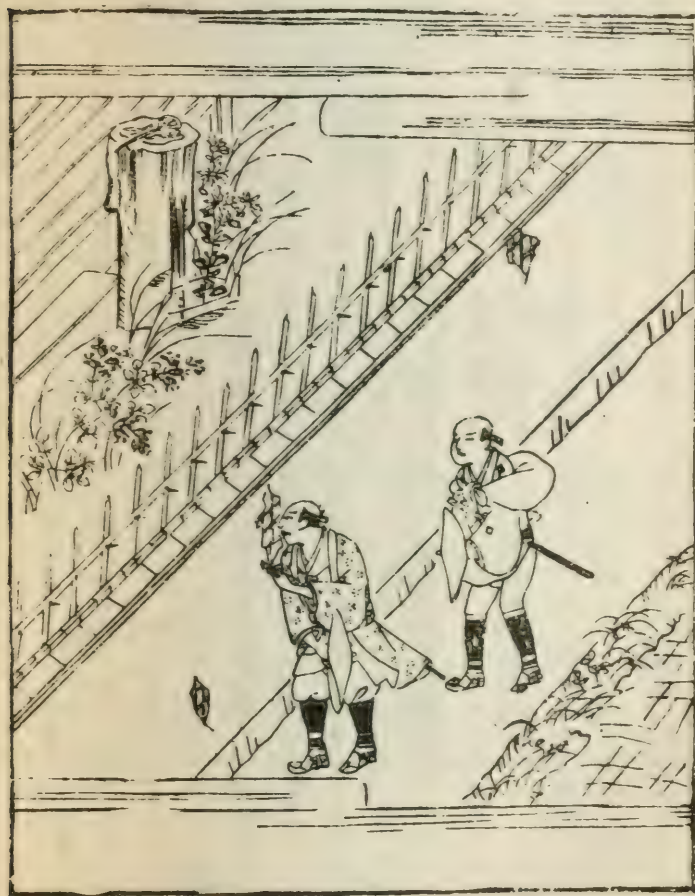
皆惡所にして鷄めしをふるまはれて。羽織かり取にして歸るも有。家請を賴みながら。疊の無心を申も有。喧𠵅するひてん書を預て金子十兩無理がりにするやら。よる所。さはる所にて取ひしがれ。財寶ざらりと埒明てむかしの風俗四五年にかはりて。今は小谷といへる。びくに寺のほとりに裏屋住ひして。いかな〳〵硯箱がひとつあらばこそ。ちんからりにかけ釜かけて。汁なしの食をたき。有時は餠に日を暮しなひ時は帶しめて。三月大こんも腹ふくるゝたよりとをのづから常精進の身となれり。この北隣には觀音さまを負て。くはんじん坊主住しが。烏賊つくりて。わけぎ膾のかほり。ふだん塩魚きらすといふ事なし。南となりは三途川のお姥さまの勸進にありく男。ふるぬのこあまたこしらへ置一夜を六ゑづゝにて。貧家の嵐を凌ぐために借て。朝たはかたはしから。はぎてまはりて目前にあの世をみせける。かゝる所にも住なれて其氣になれるは惣じて人間のならひぞかし。今は人置中間のつかひして。手かけ奉公人の着替をもつて供するも口惜からず。錢さへとれば。おろしたる胞までも捨に行。人の果こそあさましきものはなし。中〳〵いきては何か甲斐のなき事ながら。其身に成てはしなれぬものと見へたり。されどもむかし殘りてさもしき心にて紙一枚。ちよろまかすといふ事なし。ある夕暮にさかりをおしむ藤見かへりに今橋の限銀といふ大臣わづかの春雨にあひて。軒づたひして行に。彼男やぶれ笠さして。我を見かけ。此傘を御用に立といふ。心ざしやさしく。其まゝかりてみれば。越後町京屋五十本之内と書付おかしく。其おとこかへる入口をのぞけば。ひがし窓の反古張みな〳〵奉書のかなふみ。心をとめてみるに。うたかひもなく。新屋の金大夫が書翰。さま〳〵もたれたるぶんから。お定りのをくの手。われら命はしばし。きさまよりかり物とかく事。誰にても嬉しがる行方なり。何とやらおかしく。押かけてたづね入。内のやうすを腰ばりもみな大夫が筆なればいかなるゆかりぞとむかしをきけば。なんの用捨もなく金大夫ゆへに。此仕合に成けると。かたりぬ。金大夫に我等わけあつてあひけるに此君がゑどもかくさらし置はよしなしとゑ反古のこらず所望して金子三兩とらせて立かへりける。此大臣も此男のとくに追付なるべき心ざしなり金大夫が文やら鬼の手形やらしらぬうら借や成にと笑ひぬ

西鶴たきつけ　二

人にハ棒振虫
同前に思ハれ

うきハ餅屋
つきハ雁を

金魚ハ狂言も悔し
江戸薩摩の芝居咲
男子むつかしき御ざれ
和国の貴賤たく有
御前の月参の夢之
移所の見せてばめ
錦状のたいまてよ
諸末の男のく
荘良頭ハ悪まへる
紋所ハむかしのこれ

あたご颪の袖さむし

京は山〳〵ちかく。松の風もかよひて。冬空の氣色時雨まもなく。雪もおもしろ過るほどふりぬ。黒木うる声もつねよりはせはしく。いまから日の暮るゝ事は夢じや。寶ぶねのうち出の小槌も何も持ぬものが。うつては。いかな〳〵茶屋ぐるひするほどの銀も出ぬ世の中。なふてならぬ物なればつかひ捨ぬうちに。分別せよと身にこりたる人の。異見も耳にいらず。皆になして合点のゆく人。それはおそし。昔より女郎買のよいほどをしらば。此躰迄は成果じ。有時泉州。堺の嶋長といへる大臣。はじめは野良にあそび。毎日にしのび御座舟に。みねのこざらしを乗せて。ゑびす嶋の遊興。世の人のするほどの事しつくして。いつの比よりか都の嶋原にかよひ。大坂屋の野風に吹たてられ次第にくだり舟。のぼりづめの。男色此二色に身をなし。財寶皆になし。さすが名高き大臣の。幽なる身と成て。四季小紋のかさね小袖も大かはりして。千種色のもめんぬのこの。身せばにして。借屋住居のあはれに。やう〳〵手代どもがなさけ。上下三人の命をつなぐ。上荷舟のかしちんを。壱ケ月に四十五匁づゝあてがはれて。是にて酢も味噌も茶も薪も万事の朝夕を埓明ける。あはれや世にある時。惡所へつかはしたる。文飛脚の通ひにしるせし。その賃銀も壱月には百目あまり出しけるに。生ながら。かやうに成果るは我ひとりのやうにおもはれて口惜。それも時世なれば。此浦にて引網の礒藻まじりの小鯛。一かごわずか五もん六文をねぎりて。けふはいはふ八朔なりと。手づから鱠にして。腹ふくるゝをたのしむは。住る甲斐なく。おもへど。其身になつて舌もくひ切がたし。科極りて。首はねらるゝ者も。その日の朝食箸もつてくふは。人の命ほどおしき物はなし。此隱者も何祈るらん正五九月とて。廿四日におもひ立。あたご參詣と。ひとへ二日の旅用意。小者に風呂敷づゝみ。其身もわらんずはけば。下女はつく〴〵此風俗をみて。あの鼻の高さにて何の願ひか有。天狗も旦那殿には恥ぬべし。又火の用心も財寶おる人こそ。この地藏をたのみてよけれ。留守あづかるとて。から長持一ツ自然の時は。女のはたらきにても。のくる身躰貧者無用の物まいりと。おもひながらも。主命なれば。機嫌よく門おくりして立別れぬ。此大臣むかしは。か

りそめの京のぼりにも。堺より六枚がたの夜駕籠。壱人七匁に定まつて。四十弐匁出せば。中を飛して。まだ夜ふかきに淀の小橋のつめなる。僞の仁兵衛が所まで。嶋原よりのむかひ灯挑を出させ。水車のどくまはらせし事もと。うち詠て。それが門をばすこし足はやに編笠。さきさがりにかづき。鳥羽の馬うしをよけるも。よほどせはにて。程なく東寺より千本通にわかれ。くるはの塀越にあげ屋町のうらをゆくに。どふいふても都ほど有て。物日の出かけすがた。柏屋丸屋の二階に。衣裳は。菟角あかきがひとしほ目立物ぞかし。小哥聞えて撥のをと。是は何ともならぬ。いま一たび千両切にしつかふせず。爰の氣色をみたしと。八文字屋のうらなる。壁のこぼれより。のぞきぬれば。名もしらぬ女郎が。座敷はなれて涼み所にこしらへし置床に。枕もなくねころび。今時分女郎の手にはめづらしき本の小判を五両づゝ。四所にならべ置嬉しそふにながめて。しれてある算用を幾度も數よむこそおかしけれ。是は京の客の金やり時にあらず。九月廿日過に時づけ届の小判。さては田舎の素ひ人なるべし。何にしても此里は。あ

れをやらひではならぬ所と。おもふうちに。宿のかゝが。ひねり文に五兩斗持添わたくしの方へも。半九さまより。御しよかんに預りました。御返事によろしく。お禮申てやらしやりませいやりてのまかせに金にかまはぬはむかしの事いまの廿兩は上代の弐千兩にもかけあひますとに北國衆は文を國のひけらかし物に。人丸。貫之の筆より。をの〳〵さまの書捨を。大事にかけ。紙のそんずるをうたてく。裏うちして巻物にし給ふとや。また地の衆の文は皆までもよみ給はず。小宿にかいやり捨給ひ。挽碓の敷紙になりて。大夫さまのお名を。小麥の粉によごすもよしなし。それと又今の京の大臣くらいばかりとつて勝手になりませぬ。迚も勤めのお身なれば。殿ぶりの御物好やめにして。たとへ物いひあしく。一座初心にござりませうとも。こんな御狀まいれど。無分別につかひ捨。揚屋の手前る方が大臣なり。惣じてすいが女郎さもあぢわろくまはつて通るは。その心まがたの役に立ぬもの。隨分しやれたからのたはけ者。女郎くるひばかりにる男自慢の人。京大坂堺にもあまたあかたづけは。すへながふあそばれしを。

また野良に戀をまたげ。あたら身躰をつぶし。若盛にあてがひ世帶。うご〳〵と生て居て。なにかおもしろい事あると。我を見付て。かく當言をいふやうに。是天性なりと。身ぶるひして立のきあの内義がいふ所。ひとつも違ひなし。橋本のわたし越て。松の尾にかゝり。まことの道筋をあたこへまいれば。かゝるうき事も。さかざりし物を。此里よそながらもみたくて。いはれざる京にまはり。身にこたへたる人の言葉を合点して。都もおもしろからず。嵯峨にゆけば。はや夕暮になつて。人とむる女の袖にたよれば。一夜は爰にさだめしに。筆屋といひて。廣座敷なり。折ふしの燒松茸に酒さま〳〵もてなしける。女もふつゝかに見えず。機嫌とりて。立ふるまひもどこやら。お町めきたる所有。しかも其女は年まへなるが。廊下はしりやう。只者とはおもはれず。くどき寄てむかしをかたれば。申さぬ事か嶋原の座持女郎。土佐といへる流れなり。いづれ移り香。つねならず。物まいりの精進をうちやぶりて。もめん寐道具に侘ながら。太夫にあふこゝ地して。又下向にもたはふれ。お初尾のこりを有切にとらせ。山崎よりの舟ちんなくてひろひわらちの歩行路。中食なしにかえりぬ是ほど。こりて此身になつても。やまぬものは好色とあふ人どにかたりし

二　人には棒振むし同前におもはれ

うへ野の櫻かへり咲して折ふしの淋しきに。是は春の心して。見にゆく人袖の寒風をいとはず。何ぞといへば。人の山靜なるお江戸の時めきける。黒門より池のはたをあゆむに　しんちう屋の市右衛門とてかくれもなき。金魚。銀魚を賣ものあり。庭には生舟七八十もならべて。溜水淸く。浮藻をくれなゐくゞりて。三つ尾はたらき詠なり。中にも尺にあまりて鱗の照たるを金子五兩。七兩に買もとめてゆくをみて。また遠國にない事なり是なん大名の若子樣の御なぐさひに成ぞかし。なに事も見た事なくては。咄にも成がたし莵角人のこゝろも武藏野なれば。廣しと沙汰する所へ。田夫なる男の。ちいさき手玉のすくひ網に小桶を持添。此宿にきたりぬ。何ぞとみれば棒ふり虫。是金魚のゑばみなるか。一日仕事に取あつめて。やう〳〵錢二十五もんに賣て。又明日もつてまいるべしと下男どもに。けいはくいひて歸る。またこれをみれば。爰もかなしく。世をおくれる人有

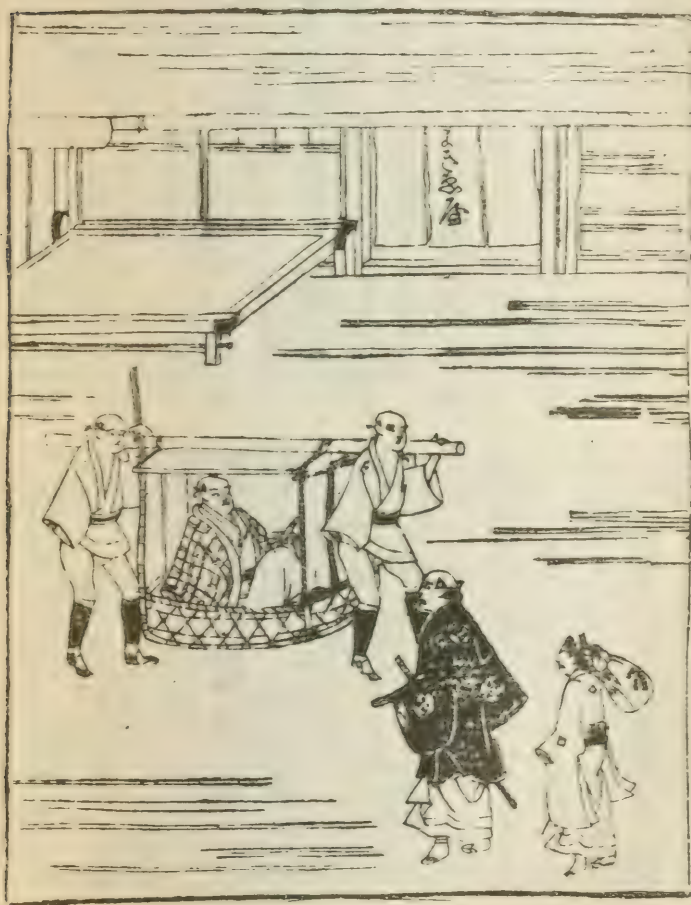
と物あはれげに其者をみれば。是は〳〵伊勢町の月夜の利左門といへる大臣。我家を立のき。何國に暮せしもしらざりしに。さりとては。みにくいすがたにはなりぬ。いづれもむかし語りし友達中間に汝をしとふ事。大かたならず。しらぬ事とて。それよりの年月かく淺ましく。暮させし事は是非なし。此後は我〻請取。貧樂に世をわたらずべしといひけるに。まだ此身になりても過にし。ぜいやまずして。女郎買の行すへ。かくなれるならひなれは。さのみ恥かしき事にもあらず。いかな〳〵をの〳〵の御合力はうけまじ。利左ほどの者なれども。其時にしたがひて。惡所の友のよしみに。けふをおくるといはれしも口惜。面〳〵の心ざしは千盃なり。久しぶりにあふ事。又かさねて出合事も有まじ。一盃の茶碗酒。しばしの樂みなるべしと先立て出。茶屋に腰をかけて。これ切と。彼廿五文をなげ出しぬ。しかも此錢は宿なる妻子のゆふべをいそぎ。鍋あらふて待けるに。すこしもひけぬ心根。皆〻泪に袖口をひたし時雨もしれぬ空なれば。いざそなたの侘すまひに行て萬をかたりながら。酒を存ならばひとしほ慰にも

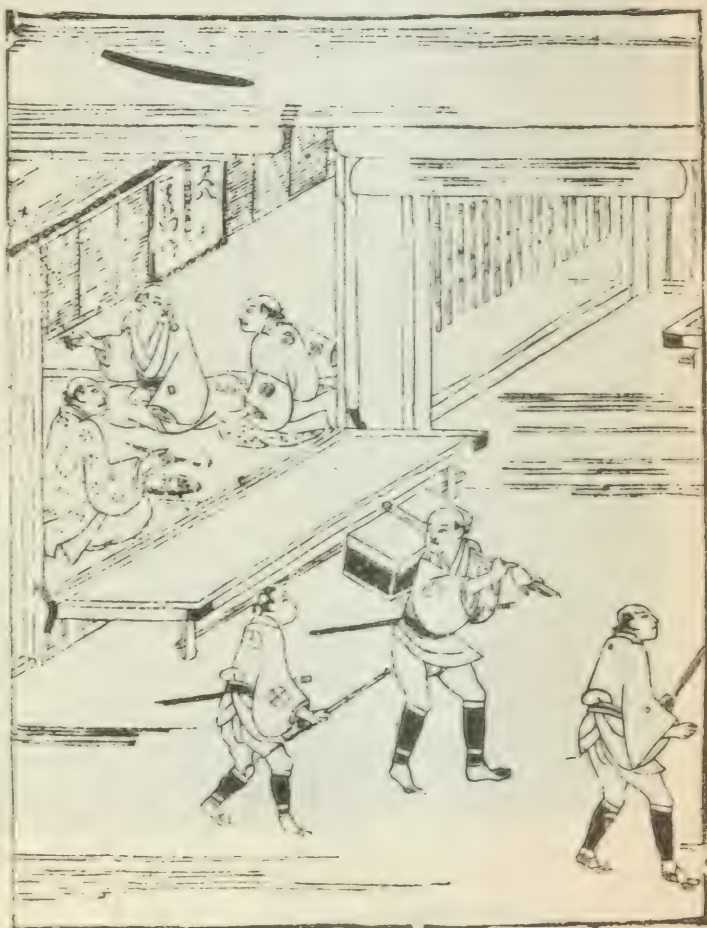
成ぬべし。今の内義はさだめて吉州とよい中かといへば。此女郎ゆへにこそ。かくはなりぬ。けいせいもまとの有時あらはれて。四年あとより男子をもふけ。とゝさまかゝさまといふをたよりに。けふまでは暮しけると。夢のごく語を。現のやうに聞て。谷中の入相比に。くれ行の。ざはつき。とまり雀の命も。あしたをしらぬゑさし町の。ひがしのはづれにつきぬ。此うらにかすか成すまひ三人ながらはいり給はゝ。中〳〵腰のかけ所も有まじ。それもよし〳〵何かつゝむべしと。案内してゆくに。よし垣に秋をすぎたる朝㒵の。すへ葉も枯〳〵になりける。つるをさがし。七十あまりのばゞの。その實をひとつ〳〵取て。又來年の詠をしたひける。されば人間は露の命ともいふに。此老人はと。㒵がなかめられて。ばゞさま爰を通りますと有躰の礼義をのべて。埋れ井のはた。越るもあぶなく。影ぼしのたばこの。引はへたる細繩のしたゆく程に。窓より。親のおもかげをみて。とゝさまの錢もつて。もどらしやつたと。いふ声もふびんなり内義はむかしの目かしこく。同道せし人々を見しより。お三人の中にも。伊豆屋吉郎兵衛様是へいらせ給ふまじ。のこる御兩人はくるしからずといふ。あるじをはしめ。をの〳〵ふしぎを立。いかにして。あればかりをとがめ給へるぞといへば。是非なきは勤めの身。あなたには只一度かりなる枕物がたりせし事。いまもつて心にかゝりぬ。あるしにかくす事もよしなしと。玉なる泪をこぼしぬ。聞に理をせめていたはしく。亭主もまとなるを滿足して。女郎の身は。そのはづの物なるに。是はやさしきとはりと。時に胸を晴し。是はわれらが客なりと。三人ともに内へまねき。先御茶といふに薪なく。釣佛棚の戶びら。はづれて有けるを幸に菜刀にてうち割。間をあはせけるもかしこし。扨御ひそうの男子はといへば。十四五色もつぎあつめたる。ふとんにまきて。裸身の肩をすくめて嵐をいとふ風情をみて。殊更に哀なり。さむひに是はといへば。内義うちわらひて着物は捨て。あのごく。かゝと。無理なる口說といひもはてぬに。大溝へ。はまつたれば。はだかになされてさむい。着物が。ひあがつたらば。着たひと泣ける。あるじも女も隨分心づよかりしが今は前後を覺えずなみだに成ぬ。いづれもしばしは物もいはれず。扨はあの子がひとつ着物かはりもなくてや。親の身として子をかなしまざるはなかり

しに。よく〳〵不自由なればこそ。かゝる憂めをみするなれ。何かたるべきも。なげきさき立をの〳〵かへる時。三人ながら小話て持合たる少金を取あつめて一歩三十八。こまがね七十目ばかり立さまに。天目に入て。是とは理なしに。出せしが。亭主もおくりて出しが。さらば〳〵と夕暮ふかき道を急しに。又跡より彼金銀を持て追かけ。是はとぶしたしかた。神ぞ〳〵筋なき金をもらふべき子細なしと人のとはりもきかずなげ捨て立帰りぬ。是非なく。とつて戻り。それより二三日過て。色品かへて。内義のかたへもたせつかはしけるに。はや其人は在郷へ立のき。明家となりぬ。色〳〵せんさくすれども。其行方しれず。三人ともに是をなげき。おもへば女郎ぐるひもまよひの種と。いひ合せてやめける。世は定めなし。いな事がさはりと成て其比のうす雲若山。一學。三人の女郎の大分そんといひおはりぬ

三 うきは餅屋つらきは碓ふみ

諸色も其道に入ざれは。善悪のわかちをしらず。河州高安の山本ちかき里人に。親の代より木綿買ける。銀子をためて。かためてみば一番牛の寐たほどゆづり渡しぬ。何やうにつかへばとて。一代にはへる事有まじ。しかも深入をせず。上町者の手かけぐるひ。三十日に米壱斗五升。六疊敷弐匁の屋ちんしてやる分にて。是よりはと浮世をたのしみける。有時京より西國に屋形奉公つとめて親もとへ帰る。其時の人置大坂に来て。藏屋敷より請取けるを。庄屋宿より聞出し。一年。銀五枚に極めて白髪町観音堂のほとりに。借座敷して。としかまへなる。ばゝひとりつけて不斷は露路の戸をしめて。おもてに貧なる塗師さいくせし人に。折〳〵心付して。此妾の横目をたのみ。外より男の出入はかたく吟味して。京より見廻にくだられし親仁も。食はふるまひて。夜は脇宿をとらせ。淋しなぐさみに飼ける。三毛も。男猫を見付。是さへ余所へもらかしける。さりとは。りんきふかき。山のねきの大臣。所の物がしらもすれば。すこしは小百姓のおもふ所をしのび。または公用を昼はつとめて夕かたより。四里ある所を早駕籠にて。毎夜新町。ひがしの門より西へゆきぬけかよひ。中〳〵夜みせのともし火も目にくらく。明暮三とせあまり。身をはこびしを。露路口の塗師屋が此事人にかたりて。遠ひ所を通ひくる隙あらば。女

蹴ぐるひをせぬもおかし。しかも新町筋を越て。手かけに大分の金銀をいれけるたはけもありと。一節切の指南する長崎勘十郎といへる。あそび宿へ。大勢若きもの集て此はなしに。大笑ひしてその金持の百性めを。何とぞ本色町へはめたし。我〻はなければこそ。おもしろからぬ茶屋。風呂屋。おもふやうにならぬ世の中。またことしもよき綿秋なれば。その庄屋が取こむ銀ほしや。いかな〳〵身にはつけじ。木村屋の小大夫を。せめて三十日天神のやまとを付て。買たしといふ。此物好あしからずと。其座に八木屋霧山にあへる木半といへる大じんすゝみ出て。さりとは其男は。女郎のゆたかなるたのしみしらず。長門の萩の塩道といへる法師は。哥仙を請出して宿の花にながめ。若衆は。松嶋半彌が色ざかりにあそびける。

白子町の播磨は。大夫のせ山を。我物にして。是一生の榮花。又尼崎町の塩といへる大臣は。銀にて淵を埋るがとく有程は捨て其後はうきよの隙となつて。佛もなき天滿の堂島に身を隱れ。をのづから淋しく。鞁うたの拍子を敎へ。やう〳〵恭倉にけふを暮し。ひとつのたのしみにせし。大夫の金吾

も此男に戀があまりて。出家に成ぬ。
むかしのつとめをおもへば。今各別に
引かへて。是は殊勝なる。をさまりな
り。惣じて女郎ほど義理を面にして情
を心底にふくみ。是ほどおもしろき物
はなきに。おしきはあたら銀にて。礒
ぐるひ何とぞ。その庄屋にすゝめて沖
を、をよがせといへ。ぬしや。あたまふ
つて。それは何ほど申ても。うごくも
のでは。ござらぬと。物がたふ申せし
が。物には時節のある物なり。其七月
のすへより揚屋〳〵の座敷踊をはじ
め。町より人の娘子も。しのび〳〵に
見物に行しに。彼妾ものも是を見たし
との願中〳〵合点せざりき。しきりに
とはり申。けふで仕廻の扇屋の大よ
せとや。是非にみせたまへといへば。
此庄屋心にはそまざれども。たび〳〵
の所望なれば。耳かしましく。西口の
香具屋の新九郎といへる。此ほど取出
の太鼓をたのみ。ぬしやのかゝまじり
に。その〳〵引つれ見物に出しに其比
はまづ佐渡嶋屋に。太夫揃。たかま。
奥州。あげまき。かづらき。あづま
むらさき。吉田もふり袖の時。あたら
し屋の金太夫小女房でも大夫めき丹波
屋のこぎつまがすらりとしたも見

く。井筒只うつくしく。小琴がにがりのはしりたるも。ひと子細有てよし。明石屋のもろこし。よし野。住吉屋の瀬川が鼻のさきも。わるうは高からず。堺屋の君川が。ぬるきもつねの女良の賢さにまさり。又七が初瀬も大和の大じんがをごらせ。廿四人の大夫十九人まで。ひとつにあつまり。此ほか天神かこい。見せのこゑある女郎ならべて百三十弐人皆むらさきのぼうし。そろふたりや手拍子腰つきに氣をとられ。けかへし。はねづま引足のうるはしく。中のこしかけには役者末社うはき大臣これおもしろき事。天ぢくにも有べきか。日のくれゆくを惜む折ふし。伏見屋のはしつぼねに勝之丞とて壱匁取の女郎が踊装束して人のうしろよりきて。大勢の中をおしわけ〳〵入て彼庄屋がひだりの手を。何心もなくしめてそこを明て。中へ通し給へと。ひた〳〵と身添ける。此男玉しゐなく。力にまかせ。あたりをつきのけ。此女郎おどらせけるが。是ぞ戀のはじめとなつて。石だゝみのゆかたわすれず。わが前まはる。たび〳〵ほめて。踊はつれば。手かけはさきへ歸し。太皷の新九郎をたのみ。俄になづみ出し是を女郎の買はじめ。此いきぢ。とくしらざるは無念と。手かけは其まゝ隙出して。借屋は三十日切のおもひ出。釜の下の塵も。炭もなひやうに仕廻て。毎日にさはぎて。いつの比よりか。大夫の越前に大飛して。霧山にあへる木半にも一座して遊興。是でこそと。たがひにいひ合て。二とせあまりにすつきりと。ないかゞじやうなり。世はさま〳〵に替かな。其霧山は。請られずして。ゆく衞しれず。越前は病死して。此ふたりの大夫昔のやうに成て。木半といふ大臣は。次第に見にくふ成て。世わたり色〳〵にかはりて後は茶碗やき出す高原といふ所に。猿まはしと相住して其身はわたざねの油屋にかよひ。金からうすを踏て。あし手のだるき身にも。扇屋。ながつと口話をせし高咄し。いまは無用のいたりなり。又河内の庄屋大臣は。持つたへたる野山竹木まで賣て。おのが里住ひも成がたく。一家ちり〳〵に立わかれ。在郷の道筋はわすれず。玉造のすへなる中道といふ橋のつめにて。すこしの餅屋をせしが。見世にかけたるのふれんの紋に。梅鉢を付しは。越前が定紋ざてもしやらくさし

西鶴

三

子ろ親の勘当

侍ろ女川流おぐ

茶屋ハきらめくの紋

女郎ハ男ぶ箔ね

あ川ひハ千五百匁

もけが関西のかんき

江戸に鯉のさしを賣

南部ハろく路し

美食にハうし弥の鰭

止めた当ハ灯り

勤労してかんまハ

一年ハ三百貫目つひや

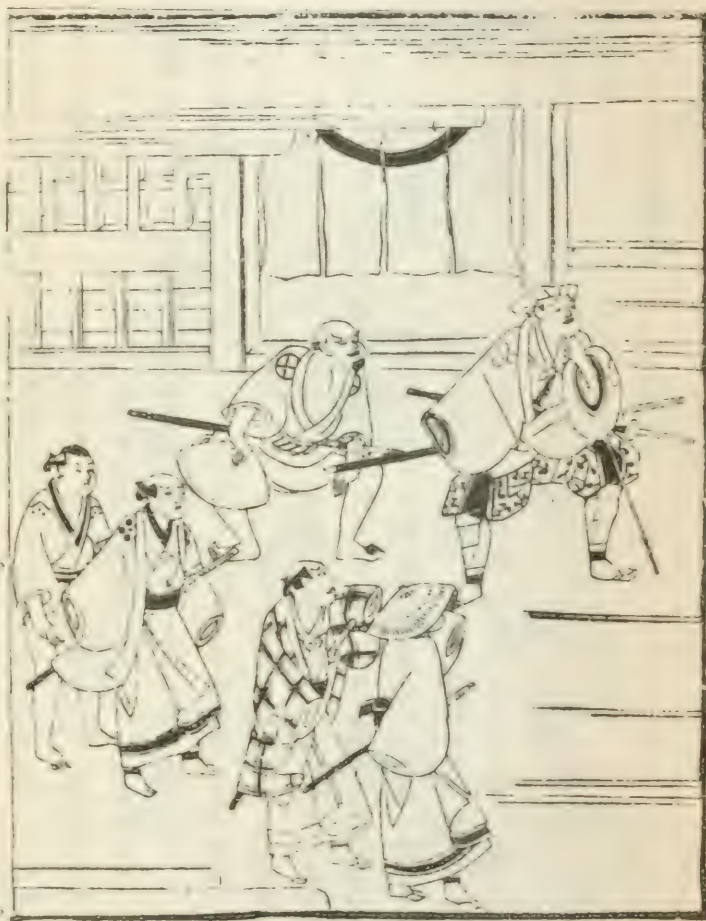
高直くの奥高登盛

明律も訪に知恵の家へ入

一　おもはせ姿今は土人形

御異見たび〳〵尻に聞せて。野良くるひのやむ事なく。明暮四条かはらにかよひけるに。道橋のさい〳〵くづれけるは。此大臣のめしつれられし血氣榮ん末社役者。あらけなくわたりぬるゆへなりと。爰うけたまはりの菱屋六左衛門がせんさく仕出しぬ。今の都の奢男然も風俗すぐれて。見ぬ世の中將中古の三左當代の四六と是をしらぬもなく。毎日の道中なるを。石垣のおやまどおまゝ喰さしてはしり出此面影を見れば。水茶屋の娘とも天目手からおとして我商賣をわすれし。ひが山の櫻も日ゝには見られぬじやが。たとへばあの男いきた如來さまにもせよ。やうも〳〵眼がつゞく事じや　追付目病の地藏へ七日まいりをするであらふ。なんの錢一もんにもならぬ大じん。あれよりは芝居見の出家衆に氣を取。札一枚讀こみても三文德がある。むつかしひ事ではなし笑ふて見せても物になる事と。銘ゝの母親または主人のしかるを聞ば斷りぞかし。是等はよき所にすみなれて諸人の色ある男を見るさへ戀をふくみぬ。まして地女房は一幅帶の腰をぬかしける。たま〳〵男とうまれ出て是はそなはつてのくわほう也。殊更親は後家にて銀持で寺まいり好にて世界は我まゝといふ大じん也。人に借ずにあるにまかせて。此川原にゐて水の流るゝことくよき物とらされければ。惣しての太夫本木戸の者。あまかへるの芝居成こみせ物の猿までもお皃を見しつてゑぼしをぬぎぬ。此所を是程迄しこなしけるは一とせに千兩とはつもられける。是違ひあるまじ一日に金子百兩まきちらしても。誰かおどろくものなく。お伊勢さまへ十二灯あげたるやうな所さのみ嬉しがる者もなし。此大じんさりとは女嫌ひつゐに嶌原けしき遠目にも見ざりけりされども物には時節有野良ぐるひの異見しつめられて。是非なく〳〵やめぶんの誓紙をかけば。諸神の手前を恥て其後はしばゐを疎きもせざりき。扨は年が藥とおの〳〵よろこびけるに。又女良くるひに身をなし明くれ今の唐土に出かけて是をとめどはなかりし。人また無用と身のためを申せば。我等此里へかよひまじとの誓紙はいたさずと。わるかしこき事にりくつをいへば。後には誰かとがめる人なくて心のまゝにさはぎて。此町もおもしろからず名に聞し武藏野の色ふかきこむらさきを見にくたりけるに江

戸にもきかぬ氣の男。三木とやらが根から引ぬきて其ゆく衞しれざりき。今すこしおそく此よねを見ざる事の口惜。せめて其むらさきに面影のにたるもかな。はる〴〵爰にくだりし甲斐にとせんさくするに。是そといふ女良もなく見ぬ戀するといふはむかし。今の世にはなき事なるに。人の物になりけるときけば殊にゆかしく夢にも其姿を見て京の物語りにもと。人賴みしてたづねけるにさりとはしれざりけり。有時淺草の寺町の横筋をゆくに。內の見えすくよしすだれ住あれたる宿の棚に。こむらさき形屋と看板出して土人形の細工する男を見れば。京にて立役勤めし嵐三郎四良が白むくの上にやれ紙子身をやつし藝に出しよりはなをにくからず。いかさま子細者めと立寄。御亭主此人形はこむらさきならば。先遊女にしては帯がせまし殊にうしろのとりなりまんさら人のおかためきたるといへば。いる氣ならば取て御座れ。壱匁に壱つづゝ賣物を無理なる御吟味。それは七十四匁に買時のせんぎと笑ひける。何とやらゆかしくされば此女良を其ねだんに年の明迄買つゞけに。京よりくだりたる男といへば。扨はよい物

は都までもしるゝ事かな。我等も此女良におもひをかけ此三とせあまりもこがれしに。勤め女の事なれば状文になげくもおろかなれば。兎角かねためて只ひとつ買て。年月の思ひを晴さんと此ほそきうちより毎日三もんづゝかけ銭をして。二年あまりにやう／＼七拾四匁になして。ひとへ二日のうちにたよりを求め。かり着も人の情揚屋定めてもやうしけるうちに。つゐ請出されて扨も無念／＼と男泣にして語る。戀は是なるべしと哀れさに扨其こむらさきがゆく衛はといへば。さらば京の人に今の様子を見せんと立行かたは。唐物町の横町に棚も目に立ぬ程のうちに。むかしの殘りたる女の見しが。あれが三浦のこむらさきとや。今は其名も替てお梅とよびける。人の女房なつて何か戀のあるべし。やれ思ひきれ外にも戀はあるものと男を友として。物の／＼一角も殘らずつかひあげて。又彼見事に三野にかよひ。今の高尾藤雲に男と相住してせめては女良が踏たる土手をそろへて。髭の長兵衛が座敷を我を身過の種と。揚屋町の眞砂を金龍山物にして京より持參の三千兩いかなのまつちにませて。今は又うす雲たか

をか姿をつくりて。土にんきやうの水あそび次第にさびしくなつて。大かたは火を燒ぬ日も見えしが。是にも腹の用捨なくつれぶしのかはり加賀。つみもなく銀もなく世の人におそれもなく。外の事なく外ませずよねくるひの意氣知をかたりて。埒の明たるふたりが仕舞。いまだ三十より内にして一代の榮花。是からさきの老の入まへ何とかなるべし。此四六大じん京都の大分の跡は母にさへ見かぎられて他人物になしけるとや

二 子が親の勘當逆川をおよぐ

替た事を聞ました。莵角宿に居がわるひ爰に出かけたればこそおかしけれ。揚屋町の入口の茶屋に桔梗屋といへるかたの女房は。分別のまんとて太夫八橋夕霧につきしやり手の開山成が。時節あれば我世をへておかさまといはる事もたのじみなり。此内に腰かけながらよね達の道中を見るに。いやとおもふはひとりもなし是そ又うごきがとれぬとなづむ程成もなし。今の世の女良心はしやれて位ひなし。むかしのちとせ唐崎は。禿やりての外に沓とて鬢切したる男草履取をつれける。是をおもふに全盛の時なるかなや。孔子くさひ人までも朝に道をきいて夕に通ひなれ。何の古文しんほうされば人間死ぬるといふ道具おとし。是に勝男達もなしすこしのうちも浮世の隙さへあらば。此美君を詠めまいらせ長命丸といふ薬なり。仙家の不老不死の妙薬取にやるまでもなし。近道に是程よい事をしらさるや。扨最前のかはつた事の咄しのすゑはいかに。されば世に子が親にもてあまし。迚も悪所くるひの異見きゝ給はねば勘當を切とは。前代ためしなき事其親仁殿は。伊勢町の大盃といへる大じん。酒より乱れて猩〳〵のぬき手切て。足もとのよろつく掛物をよろこび。揚屋の物好は和泉屋半四郎が二階座敷よしと。山本長左衛門がかゝえの小主人にふかくあいなれて。内藏のさびしくなる事此二とせあまりなり。もまた六十に過て髪付たしなみ。女良と打死と極めて銀つかひけるを。其子は二十八になるまでつゐにあげ屋の疊を踏し事もなく。七歳の時かき初に絹のふんどし買て中橋の姨よりおくり給はりしを。今に其一筋にて埒を明。世わたりの事のみ大事にかけわずかなる請酒。今では江戸にならびなき酒棚と成しは。此一子がはたらきなるに親に大ぶんつかひはてられ。内證のつゞ

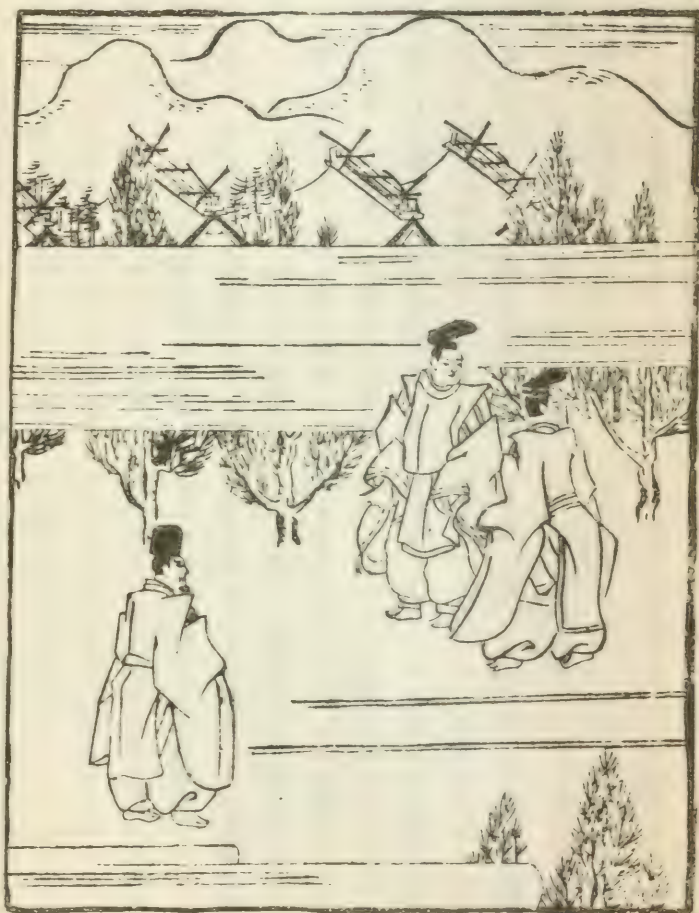
かぬ所をなげき。駒込の旦那寺念佛講中をたのみ。男子がいふ所ひとつとして道理なり。世には不孝の子ども親の死一倍といふ銀かる事は聞しが。親の身として子を追出し一倍といふ銀を借給ふは。ためしなきしかた向後色町やめ給へと。さま〳〵の御異見きかずいかな〳〵此道とまり難し兩方おぼしめしての御あつかひならば。只今金子千五百兩悴子が手前よりもらふて給はれ。あの家を罷出一生親子ふつうの手形とのぞめばねがひの通りにあつかひすまし小判わたして親仁を追出しける。これらは廣き世界に又もあるまじきたはけなり。是をおもふに大傳馬町の綿棚に。色すける亭主ありしに然も此内義美女なるに。外に又妾をこしらへしを内義情にて。男のかよへるも氣つくしと我宿によび入られしに。後には本妻をりんきしていろ〳〵に迷惑がらせ。程なくさらせける。扨もめつらしきあちらこちらの世の中や。其大盃といふ大じんのおさまりはとたづねしに。千五百兩を手の物にしてすみ町のまんぢ屋こさつま買しか。跡先の思案なしにいかな〳〵金子一兩も殘さす。是程見事にすりきる事たぐひなし。今

見れば麹町の六丁目の横町にあはれなる借棚して。鯉のさし身をつくりて盛賣にまはりぬ。因果は皿のふちと人の笑ふもかまはず。色里の文どもを包丁のつゝみ紙にして見せけるも。此身にもぜいをやめざる親仁いまだ心殘りは三浦の花むらさきにあはてはつべき事の口惜。是非此おもひ入一生のうちにあだにはなさじ我等は此無事なればまだ三十年などは。たとへ不養生をしても長生を覺有。倅子は追付女房を持と三年五年のうちに。命勝負見えすきたり。子の物は親の物なれば此あとを丸どりにして。二たび花むらさきの願ひなり。迚もの事に一日もはやく男子目に。たくましき娌をさずけ給はれと。無理にむすぶの神をいのるおかし。此諸願成就の時もあるべきか

三　算用して見れば一年弐百貫目づかひ

商賣の見せつきよきは酒質をとりて。

南都東大寺門前に住て。仙人坊と異名よびてかくれもなき大じん。我里の木辻鳴川にはまりて。世を夢より夢に暮しいつ夜の明るもしらず。算用なしに

つかひけるに。此所は女良の高下もなく十五匁に極め置しは。申せばかるひ事ながら。是にも奢ればはかのゆく物ぞかし。此男嶌ばらも新町も見ずして所あそびの五とせあまり何か勘定になる事もなく。宵に酒呑て夜更て女良と同じ枕に寝て。はりあいもつめひらきも敵にうれしがらする事もなく。銀に賣身なれば是非もなき勤めと。いづれの女良にもうとまれ。おかしからぬ遊興に土佛の水あそび。いつとなく身をくづして高十五匁の女良に。有銀七百貫目つかへばつかふ物かなと。内證しつた人あつて我をおりける。毎日此里のよねを殘らず買あげてから。十五女良十八人やう／＼弐百七十目。見せの女良壱匁から弐分まで九十七人。惣高合銀五百目にて一日買ば。一年中を百八拾貫目にてしまはるゝ事なるに。此大じんの銀つもり一年に弐百貫目余づつかな色里に銀の捨るは其算用は各別ゝは何としてつかひけるぞと。團屋權の違ひあり。惣じての人の世帯にはん七といふ太鞁持が何のやくにも立ぬ不まいよりはこづかひの入に同じ。女良思義。是に身をそむる帥程にもないやくるひも揚銭よりは外の物入かず／＼

なり。靈地の佛前に石燈籠を立。神前に水体を切居て名をしるし置はすゑ〳〵まで殘る世語り。けいせいくるひに金銀入ても名の殘しやうなければ。壱万貫目つかへばとて人のしる事にはあらず。此仙人坊も世のせはしからぬ時を得て。奈良よりしのび駕籠をつゞけて。女良一度に十人ばかりもつれて京にのぼる事。いくたびといふかぎりもなく。世問にしれぬ大さはぎひと道中にも百兩にてはとまりがたし。同じ春日の里にも黒米のうち込茶を呑。病中のねがひに鱶のさしみを喰て死たひとおもふ心。または大坂の觀進能にやとはれて。地謠の歸りさまに塩買て行など。こんなこみちなる所を見ては一日も中〳〵暮さるゝ所とはおもはれず。奈良も又ならによるべし。かゝる大じんもあればいづれいにしへの都の人心ぞかし。仙人坊次第に有程は皆になして。財寳も殘らずむかしの名殘には。請出してうあいせし小野嶌といふ女良壱人ならではめしつかひの者もなく。其後は元興寺のひかし町に身を隱し。けふを暮すためとて灯心を引て。ほそき世をおくりしに小野嶋も是を見捨ず。むかしの形をやめて繼おびの助に。古風呂しきをまへだれになをし。下子の手業いつからも成物ぞかし。琴三味線を引し指に碓の挽木もつゐてまはり。さりとてはかなしき世わたり折ふしは煙を立ぬ日も有ける。是をすこしもなげかず男をたいせつにして。其心をそむかず今に此男日に三度の酒をのまぬといふ事ならず。其時〳〵にかけ德利をさげ一度に六匁づゝが酒。此女良買にゆくを見し人そしりをやめて泪をこぼさぬはなかりき。かく月日をかさねしうちにこのまぬ戀種とまりて。産月ちかづきしにいかにとしても其用意もならず。さあ今ぞとしきりはくれども取あげ祖母の約束もなく。腰を抱たり湯わかしたり。まんまとひとりして万事の埒をあけて見るに。初声のあげやうからかしこそふなる男子なれば。夫婦よろこぶ事かぎりなくすゑの賴みをかけける。人の仕合は定め難し此子一兩年あとに生れ出なは。抱守つき〳〵をきれいに小袖のにしきをひるかへし。宮參りなどいかめかしくあるべきを。今の身となる宿にうまれきて。あらためての産着はおもひもよらず。肌には紙子切〳〵なるを繼集めうへには神祭にこしらへし子ども細工の具足をきせ。いまだ忌もあかぬによろひの着初おかし。今は世上をはづる事もなく其子を肩車にのせて。春日

のやしろにまいりける。明神もかれが全盛の時を御ぞんじなればさぞ〱ふびんにおぼしめすらんと皃見しる八百八禰宜。是は〱と手をうつもかまはず。おもわく女良が胎内より出し若君と。具足のくさずりをあげておの〱に指似を見せて男子をしらせて歸る。なを又小野しま此男を見捨ずして。請出されし恩の程をわすれざる名女。万人あはれみかけて後は二人ともに發心して秋志野の里の片陰に住り

於 八

西鶴御記談許

四

むかしつき当座に剣
にりし高今生
大乗の布ら袖ね
座敷の床の戸
ませはいまさる
是世し志のび駕籠

年越の伊勢ゑびは
いつの琴

無凡は是のわか
つる○ばさかる枕

三日め月和尚し
枕へゆひし人
楊貴妃かつら
大盡もうけ世や

一　江戸の小主人と京の唐土と

關東の奥に今でも米壱石に付拾八匁する所あり。そこにも朝夕おくりかねての乞食も有。御江戸に住ても身の一代に小判といふ物手にもつた事のない者有。又一日に五兩づゝ惡所づかひして命を六十五歳につもり。我から二十八代はことをかゝずと御町を我内にして。親の目ばかり宿にもどる人も有。無用の身体自慢算用違ひになつて。追付摺切にならるゝ事うたがひなし。むかしと替り人皆せちかしこくなつて。今程銀のもうけにくひ事はなし。近き比金龍山の茶屋に。壱人五分づゝの奈良茶を仕出しけるに。うつは物のきれいさ色〱調へ。さりとはすへ〲の者の勝手のよき事となり。中〱上かたにもかゝる自由はなかりき。まだ是よりは清水町のかくしよね。百で酒肴もてなしさま〲なるもおかし。又深川八まんの茶屋者は本所筑地よりは各別見よげに。京の祇薗町のしかけ程ありて。鳥居のうちは二人壱歩外は三人壱歩と極め置しも物がたし。江戸には女のすくなき所かとおもへば。行先〱に名所有。三野はむつかしき女良ばかりかとおもへば。新町がしのかきのふれんの分は。銀ては壱匁錢でやれば百に定めける。是も女良の意氣知は更にかはる事なし。内衣も絹物してはし切の鼻紙。くちすぼめてやうじ喰へたる風情。するゝ〱にてもお町の仕出しは各別なり。有時揚屋町に行て髭の長兵衛がはしゐして。ひさしぶりにて爰を見しにお内義又うつくしうなられた。亭主の身は養生が大事と惡口の跡は大笑ひになして。酒のむうちにこもんどさまが見えましたを幸わひに。何やかや取ませての情咄し。我等が男は上がたにて無事かゑ。成程〱そく才なるが所〱で戀をやめぬやつ。京では一文字屋の今もろこし大坂では扇屋の荻野あへり。追付歸らばせんさくなされ。すこし身のいたひ程つめ〱して置給へといへば。其唐土荻野さまはわれらのさし圖して合点あはせます太夫さまなり。こんな日も傳馬町の淸様より。もろこしさまの文をわれかたへおとゝけなされまして。めづらしくはいしまいらせけるに。すこしのうち大事の殿さまをあづかりまして。たんといとしくおもふにゆ。此程あだぼれあそばし是非に誓紙書とて。まことらしくいぢられすこしはこづらにくう。そのかたさまへいひやるといへば。もん

どは相果けるとつくり改名書てさまざまごと見せ給ふを。あまり腹立てさもあらばせめて三十五日はお精進なさるべしと。同じ床にて肌をゆるさねばいかひ御詫おかし。そなたさま御あつかひのしよかんまいるまでは。いかな〳〵帯とく事にあらず候。いかにしても捨られぬ男年をかさねての御念比うらやましくおもふに候。さて又本町の井筒屋の二六さまにはや六七度も御あいあそばし候よし。是は我等のふかふおもひし男なれば。其元にとふりうのうちは首尾あしからぬやうにたのみまいらせ候。まことに山川百里をへだて候も。勤めの身は肌にある瘊子までしれて恥かしき物ぞかし。京の事も爰に居ながらしるは蛇の道を上戸と。口添酒のつねよりはうまし〳〵。莵角しやれたる物語り聞さへおもしろし。いづれ女良も勤めにこしらへ物ながら折ふしはわすれぬ程の男もあれば。又たのもしき事もあり何に付てもなじみがほんなり。我もすみ町の青木屋の小藤に。春ふかくおもひ入て請出す談合もせしが。さる事あつてのび〳〵になりしうちに。小市といふ男にだしぬかれ。今一たび町のおかさま姿を見たしとおもへど。行かたのしれぬ事よとなげきぬ。時にいつも正月の道安といへる按摩取。いまだそれを御ぞんしなきはおそ蒔なり。其戀種のゆかりたづねて存たり。其君こひしくば柳原のそのそこにとしま屋とかたる。其時余所ながら見に行けるに。今は世帯持とてむかしは手にふれざるを。塩買て錢わたすなどおかしかり。此亭主が身にして今のたのしみふかかるべし。自然あの男がいつぞ持あきてさる事あらば。其時は此方へ取たしと無理りうくはんを淺草の觀音にかくれども。さらに其しるしもなかりき。有人これを是を聞てさりとてはたはけたる願ひ。いはれざる太夫格子の望みなり。ならぬ時はならぬやうに。散茶もしばらくの慰み異見すれば。さかぬ氣の大じんなれども銀つまり程口惜き事はなく。其後はしのび〳〵にゆきかよひ。むかしは中橋のかくれ笠といはれし諸分しりなれども。いつもある物のやうに遣ひ捨。さし引殘らぬ揚屋町も此体にて通りかね。やう〳〵こまがねのいきほひ。行人を笑ひし本町がしのわるよねにかゝり。又其時の氣になつて俄雨のかへさには。草履を紙につゝみて腰にさし足袋ぬぎてふところに入て。柄もりのからかさかすもせめては君が情なりと。土手の闇がりを歸るに。揚屋の男を三人につ

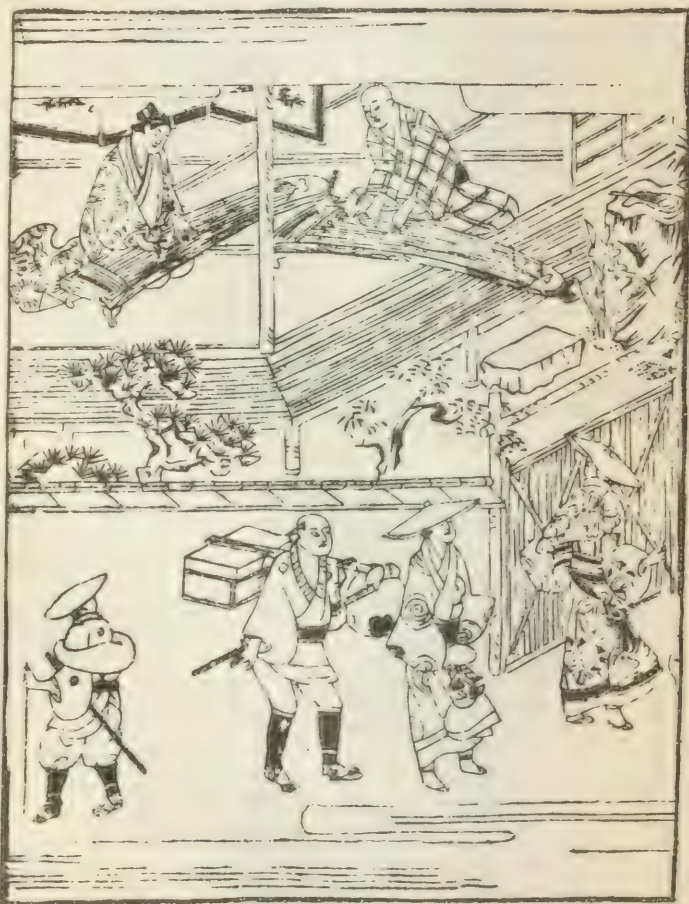
れて花菱のふたつちやうちん。さしかけかさに大袖の翕ゆたかに。うらやましくも行男をひかりにすかして見れば。親仁つかはれし喜平次といへる手代なりしが。我等氣に入ぬとて追出せしが仕合となつて。太夫にあふ程のぜんせい男ぶりも今ぞかし。是非もなき世の中扨もいきては甲斐もなかり。此かなしさに此道のやまぬは大かたならぬ因果ぞとよく〳〵得道して。もは今晩切とせいもん立しが明れば又身をつかみたつるやうにおもはれて。人目も恥ずかよひけるに。吉之丞といへる壱匁のよねも。いぜんの太夫ぐるひよりはしみ〳〵とたがひに見すてがたきうちに。無事に年も明て礼奉公も一年つとめて。身は自由なれども久しき買かかり。四十六七匁にさしつまりてとやかく物おもふを。爰はと取もつて不思義に殘る寢覺提重を賣拂ひて。吉之丞が万事をしまはせけふよりはわたくしの女房どもと。手前にひつとり横山町のうら棚に。夫婦といふをたのしみに。紙のたばこ入をぬいならひて。かすかなる煙を立て夏は蚊屋なし冬は綿入なしに。月日をおくり年をかさねしうちに。三つ違に四人まで娘の子をもう

けしは。是程ならぬ世帯の中にさりとてはなさけなし。遊女は子のないものと聞しに何事も僞りの世やと。其後は子の事をうたてく。同し枕をならべながら人はしらぬ事。もはや十一年何の事もせざりき。婦夫といふたばかりに世にすむたのしみのひとつかけたり

三巻よりも遊為為正覚し

二 大晦日の伊勢参わら屋の琴

女郎請出すといふも。すこしのはりあひなり。ちかき比。京の三木といへる男。嶋原にかよひての。もの好に。一もんじ屋の唐土よりはと上林の金太夫にあひぬ。いやともあふともいはれぬほとうつくしき者なり。二三座首尾して後。乱酒のうへにて。一歩ひとつ大事そふに取出し。女郎におくれば。是はと嬉しき良つきにて。ひそかにいたゞきけるを何が都のしやれもの。ちらりと見て。さも有まじき事なれど。此大夫のすたるほど さもしく見へける。それより四五日も過て。熊谷の大ぶりなる金の盃と。さんごじゆの盃とかさねて。太夫にとらせければ。更によろこぶ氣色もなく。金盃は庭はく男に

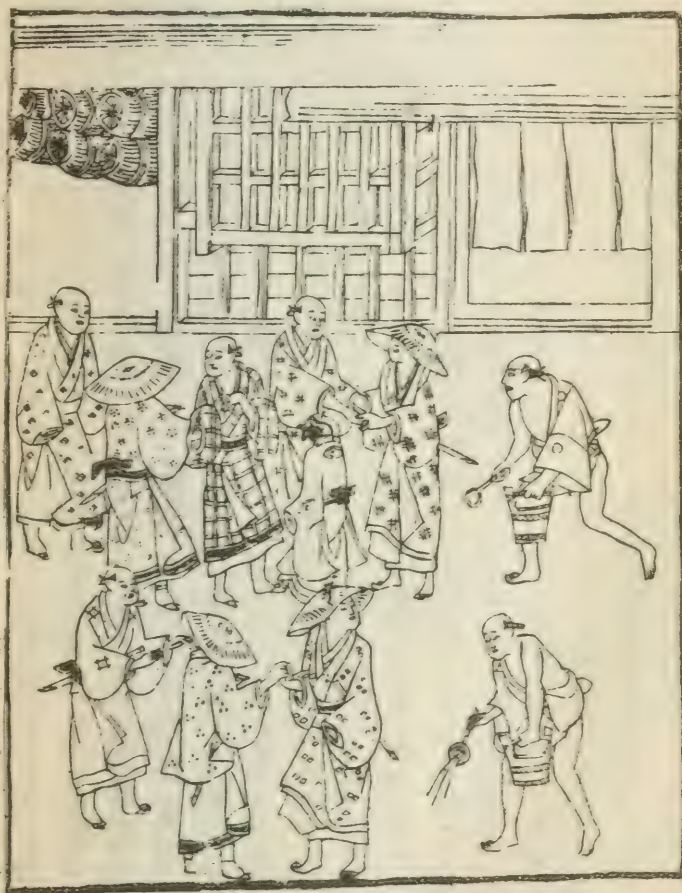
とらせ。玉のさかづきは双六盤の下に敷て。みぢんにくだき捨ける。罪も欲もなき此心をかんじ。是ばかりのおもひ入何の子細もなく請出しける。此大じんは大夫の五人七人我物にしてすこしもいたまぬ身躰なり。此まへ長崎の鹿といふ大臣は。さのみ手前のよろしきにもあらずして此さきのよし野にあひなれ。そも／＼月いひかはして追付根引して。我本妻にせんとおもひ込し。女郎の仕合なり。此男三条の唐人屋といふ兩替に銀三百貫目あづけ置。都にてよき所を見立。家屋敷を求め。一生の身すぎ。是にてなるやうにと。おもひし銀子取かへし。吉野を千三百兩に請出し。萬事のつけ届をしまへば。三百貫目も殘つて。七貫目有けるとなり。此内證にて請けるは。好色第一の男なり。されば此大夫はかつて遊女の風俗なくて。さのみ物いふにもあらず。よんとおもひし男。其數をしらず。人のは／＼と見へてつよく。しかもなさけ物にして後。是をなげきて。嶋原がよひふかく。たま／＼にあへる男も心を殘をとまるも有又はさわぎかへて。此里さぬはなし。首尾見合せて。根引にせおもしろからずと。色河原の野良にの

りかゆるもあり。よし野。くるわを出し後。京中の戀をなやませける。其後此太夫を地女房にすがたをつくり。難波の梅の比。天王寺の花の昼。谷町の藤のたそかれに。御所かづきの内ふかく。隨分身のふりやめて。男はおそろしき風情して。黒はぶたへの紋なしの小袖に。龍門の帯も目に立ぬ仕出しなれど。數千人の形。自慢の女中もよし野がしのび出立にけをされて。いづれの細工人の。かくはつくりけると。外を見る人はなかりき。さては世の中の人も。目利はかしこし。纔五尺にたらぬ身を。小判でのへたる上作物をみわけ侍る。それより生國長崎へ舟路にてつれくだりしに。讃州泊の礒といふ所にて。夏の夜。月平砂にかゝやきて龍女も浪間よりあらはれ出京のよし野みんといふ声。虚空に聞えし美形。是にて見ぬ人はおもひ合せ給へ。たとへ分限なれはとて七厘釜にて。せんそくをわかしざし鯖を霜月比にくふ人の目からは。たはけのやうにおもふべけれと。既に人間とうまれ。日本きれなる女郎を。ていけにするより外に。何樂み有べし此大臣ののがれぬ人も。大夫の野風を請て。伏見の里にしやれて住ける。よし野はひかし山の片陰。粟田口のほとりの草屋。すこし都をはなれての住居。男ざかりに法躰して。月にも花にもよし野を詠め。あした。夕べの樂しみに。太夫が手づからのせんじ茶をくませ。よろづに他の人をまぜず。碁相手。楊弓の友。暮には女鞠も色あり。風待すゝみ床に名の木をかほらせは初雪のあしたは哥に心をなし。世にある。きやしやあそびをつくし。雨の折ふしはほとゝきすもなけかし。ほたるも數見る夜のなぐさみ。又ある時は夫婦水菜などこしらへて。寐酒の種となす事ひとしほ醉もおもしろかるべし。ある年のくれに。五条の市といふ大臣。左門といふ女郎を請て。其花ざかりより。いまにちぎりをかさね。隨分世を樂じまんして。此よねをつれて。年籠の伊勢まいり。何の信心にはあらず。ゑようはかりの旅出立。世間のいそかしきをりなるに。おそらく京都に我ひとりと粟田口を行に。小家がちなる所にて。正月の事ども。やかましき廿九日の宿にゆたかなる琴の音。唐弓の弦音かとうたがはれ。笹戸をのぞけば。よし野がうつくしさ。むかしよりまされば。面影を見忘ていかなる公家の身をかくしては住給ふぞと。東となりの。火繩して賣ものに問よれば。長崎の大じん。よし野が。つれびきと。あらましをかたるに。五条の市

も。我をおりて此ゆるりとしたる世の暮し。我等はいまだせはしき所ありと。伊勢へまいらず。粟田口よりかへりて。大晦日に。女のかぶきものを揃へて踊らせける。人の氣に移しこゝろもをかし

三　戀風は米のあかり。
つぼねにさがり有

朝はしれぬ世の中。善はいそげとむかし誰やらがいひけるが。ひとつも是にはづれす。めつた的の徳兵衞。ぼんの長兵衞などいふ。色里駕籠の者ども。浮世小路に。さりとては隙なり。牧方へ弐匁五分取て。はかのゆく事にはあらず。つら／＼野に出て。唐きびの根ざしをみしに。今年は風のふかぬとしなれば。米商ひ隙なり。大坂の色さはぎ。天職より十五まで買あげ。陰子のはやるは。北濱の若ひ者のいきほひばかりなり。雲にしるが出來て。雨のふりしこるあとは風と見定め。てんほに手をうち。おもひ入の米買一時あまりに立つとき。日ふるあひたに弐匁あがれば。後はしれねども利を胸ざんやうにして。昼から駕籠のはやる事三百挺あまり。惡所へのりこめば。俄にもらひにありき。または不斷隙なる女良の仕合と成。楊屋次第にやかましく。いよ／＼雨の宮。風の神をいのりけるが。其夜に入て。そらはれて。青雲しづかに月出れば。いづれもいひ合せたるやうに。こうた三味線もやめける。心を付て俄大臣の皃つきども見る程おかし。こんな客にあふ女良の身に成もうるさし。同し北濱ながら奥州身請の大臣。あづまを山本に根引せしなど。名の立けるも。女良の出世なり。椀久なとを其比はすこし愚かなるを。お敵のふそくの皃つき見へしが。是は我物をつかひて。太皷其外にもうれしかる物をやりける。今しやれぶんに成て。太夫にあへる客の末社をもつれず。時の風俗とて。もめんの仕立きる物で。出かけぬる人有此氣からは。神ぞ。けいせいかふはつなし。下帯のふるきにも遠慮なく。面々の女房で埒のあく事そかし。女良ぐるひといふは。男も衣裳ごのみして色つくるこそ其甲斐あれ。同じ米を突ずにくふやうに思ひ。賣物ながら女良もいやがる事いふまでもなし。女良の着物にゑりをかけけるさへ能目からは。よほど氣づまりなり。さるほとに今時の仕かけ。かなしき買手ともあまた見えたり。わづかの身躰にて親よりしにせの商ひ又は職人も其一家。弟子などの大勢を朝夕引まはして。

寄合過と算用を立、米も加賀の大ひね或はりうまい又は赤米、百五拾入の小あぢ。壱匁菜よりうちにあたるを吟味して薪も。舟大工のこけらを德と氣を付。鯨あぶらのひかりがよいと爪に火をともすやうにしまつしても。取ぶきやねのざゞぬけするを。此四年も葺かへる事のなりかぬる人の色道は分別の外ぞかし。茶屋ぐるひゝせぬ筈の者が。男つくりて天神買なと。この三拾目の銀は家うちがはたらきても。ゑいやつと。五日程にもふけ出す銀にて。女良くるひはする事なり。つれそふ女房の夜着。蚊屋迄。質に置。二日拂ひのまを合せ。年中二つぶんつゝ。せんぐりにかゝりて。さいわひの隙なれば。この名月ひとつ出やうとすゝめど。先下地のが濟ましてからの事と。揚屋からさしづしられて。是非もなくやめて。立歸りさまに思案して。ならふ事ならば、何とぞあはしてくだされ。此ひと

ませうか。木を吟味してひとつ拵へてをこそふといへば。わたくしのかたはつぶんの銀は。此廿七八日に心當が。たしかにござる。こなたにも銀戸棚か入錢箱で埒が明ますと。余所見して居て返答するも。聞てなんと親仁殿どこも

家の直があがりましたの。こちの町でも。此ほど弐貫目屋敷に賣ましたと語る。亭主うなづきて。こなたのお家にも何ほどからしやりました。さのみ賣へぎもござるまいといへば。外に借錢はなし。こなたへは損はかけますまい。月見は我等のあふやうにと賴む。扨もふびんなる大臣や。あれから首尾をたのむに。これから言葉をさけて。さりとては無念なる男。かやうのわけにて女良ぐるひ。何のおもしろき事ぞと皆大笑ひすれば。此揚屋。古女めきたる皃つきしていふかいはぬか。只今の大臣さまがた。何の子細もなく銀に氣骨をおらず。心よく此里へかよはせらるゝ大臣は廣ひ大坂に。物が五人までは見へませぬ跡は火に成事もかまはず。おそろしき口入に書付を出し。かたり半分のかり銀。或は手をよく呉服物を買がゝり。是を賣ぞんして。爰許の付届をしたり。又は切ののびる藥種を買請。其藏なから質に置。虎の子わたしにはし給へども。一度は蛇の口をのがれず。今程惡所宿の迷惑なる事はなし是はよき客とおもへば。人の嫌ひ手をかつき。物にならぬ事幾たりか。揚錢夜食。御所柿まで喰れぞん。むかしは女良に戀のつめひらきばかり。談合せしに。近年は內證の事を聞せば。きのどくがりて。紋日勤めてもらひながら。其わけの立までは。物おもひける。かりのちぎりなれども。男はあしくおもはぬ事ながら。揚屋の不首尾うたてさに。其客の。しがを見出し。裏つぎのある肌着。龍門の羽織に木綿入るからは。何とも合点かゆきませぬと。女良と宿屋とひとつに成世とはなりぬ。是をおもふに。それ／＼の分限より。色も奢過たるゆへなり。とかく本大臣のきれ目なり。昔日刀友が。妻川に。一度に衣裳三十揃へてとらせ。布平が。小大夫に金の櫛箱やる事又出來まじき事ぞかし。其時は笑ひしが。とまが四十五貫目に下屋敷賣し銀を。すぐに役者に荷はせ。吉田十郎兵衞が所にて。ばら／＼つかひしも。玉市かきわだ染の小袖に。紅うらのすそをからげて。雜木の割賣するも。泉平が千之介を請て。壱匁つゝが。酢。醬油の見世つきも。女男のむかし殘りてあはれや世や

西くわく置土産巻五

女郎がよいといふ

野郎がよいといふ

大全目録

樒木ハ宿での事

うげ昌藍でしらし

九軒もの男ハ捨小舟

世渡つきハところてんの草

石塔の施主まかせん

先ハ班女がこゝろ入

言の葉ハ勧学の硯やまねかしらじ

月ハ見ぬ無常の鐘し

寄河はゞの男め

死ぬとの折ゞ見ん

きはゝ人より無頼あり

素人が藪見ん大ゆどの流

後世きらひあり

宇治ゞの本ふま三郎子

大八八鄰のかゝく

咄成無の魔宮を

都もさひし

無腹の歎そ五

一 女郎がよいといふ野良がよいといふ

南江のいたり茶屋にあそんで。つら〱鉄眼、建立の唐づくり詠て。あの銀の入目あれば。南西兩所の色あそひ。亭主もうれしがる程に。さばかれけるに。無用の後世の昼。夜みせのありがたきをしらずやと。何心もなく酒のみて。すこしのうちのさびしさ。銀壱枚の堪忍所と始末するうちに鐃鉢。鉦の音して火屋のけふり立のぼるをみて分別かはり。何なりとも隙なる子どもをよびて。あそべと。油太といへる大臣すゝみて。あるじと相談すれば。今日はわたくしの物好。藝子さらりとやめて。京からの旅子。おの〱さまを見しらぬを七八人取よせて。ざつと踊じまひにして。其あとはそば切。次に御行水。扨暮かたより夜見せでなければ。夜があけぬと。野良お影に世をわたりながら。無用の女色をすゝめ身の上しらずめと大笑ひして。その京ども。のこらず見る事なれば。一慰み女郎のどくかる事のならぬが氣のどくと。大臣のはづみ只あそぶ太皷らが。吟味するもをかし。時に亭主が。いづれもをよび立。ひとり〱見るまでもなし。好〱に埒の明事がござると。内證の納戸の口をみせけるに。よろづのはり紙有。まづ今宮の十日ゑびす日待山ぶしのお札。やみ目の妙薬。はしら暦。その次に地芝居子どもの品さだめ。それより陰子の事を。かやうの宿々へ。それに付たる若ひ者が書付をつかはし置。かゝる折ふし物好に。よばすためとておかし

一 花山藤之介。年十四。色白にして。目付よく。嘉太夫ぶしかたり申候

一 岩瀧猪三郎年十六踊上手なげぶしうたひ申候 風義其まゝ女のやうにやはらかにうまれつき申候

一 夢川大六。年十五酒ぶり幾たりさまのお相手にも成申候。文作の三味線よくひき申候。旅子のうちでは。衣裳あつはれきせ申候

一 松風琴之丞。年十七影人形よくつかひ申候此外口から水を吹出し壁に文字を移し申候品玉。塩長次郎まさりに候。

一 深草勘九郎年十七。物いひ此己前の鈴木平八 いきうつしに候何も藝はなく候へども床達者に候

一 雪山松之介年十九野良也。座に付たる所。本子に取違へる程に候扱も才覚なる書付なり。いつれも同じねだんなれば。中にもむらさき帽子が取徳じやといへば。まづはかさにかゝる男かな。あの方から十九と書付出せし者。三十九か。四十で有べし。汝は廿一歳にして太皷

持。親仁とひとつ蚊屋にねたこゝろなるべし。縁の遠き娘の年かくすは。二つか三つか。五つか。はたちすぎてふり袖着るを。我町をはなるゝまでは。足はやに人のおもわくをはぢけるやさしさに。藝子年つゝむからは。十違ひなり京は大坂にくだり。大坂は江戸へ行て。生れ日のしれぬゆへぞかし。何の善悪の沙汰。鼻の高ひ子どもを揃へて。是ぞ天狗たのもし突當次第の遊興と。十一人よびならべみたる所。何もひとつにみればおもしろし。野にさく菜種もわつさりと花は皆にて弐両三分が物。さてもやすい事かな。過し秋の比。南都に大臣のお供して。木辻町の女郎残さずよびて拾六人。小判四両で花やりしが。其所〳〵のさはぎはおかし。兎角やす物は錢うしなひ。是もおかしからずと。すこしもはやく落よと。

十一人立ならびて踊る最中にばらりと歸り給ふまで。お買なさると。男を立て。新町筋をひかしの門より鳴込て。たてる太こもち。九人前後取まはし。今の世の銀持大臣。御氣に入たる女郎おさきへ。おてきより紋付の弐つぢやあれば勤め十年をめでたふ。親の内へうちん揚屋から人橋かけて盛砂せねば

かり。追付是へ御成と九軒の井筒屋にさゞめきて。こゝも〳〵是は阿波の鳴渡に身は捨舟といふ大臣。我國にて銀も瓦も同じ事。大ぶん持ながらつゐに揚屋の手にも渡さず。世間を見せぬ事を口惜く。年に三度つゝ銀捨にばかりのぼれば。何事も大たばに出て。すゑ〳〵までもよろこばせと。先女郎へ長徳寺弐百。宿のかゝに金子拾兩。庭につかはるゝ男女にも。小判の花をさかせ。是をいかめかしう。今の世の大臣と。その鼻の高い事。大坂のまはりに。天狗の住る山がなければこそと。おの〳〵物もらひながらそしりて。此奢是はとひとりもおどろく人なし。しかも耳こすりに。女郎町は金銀つかふ所に揃へ置ば。小判めづらしからず。此まへ松本といふ大臣の。くしろにて玉の井さまに。いまだなじみもなひうちに。桃の節句の祝儀とて。何心もなふ金子百兩おくられけるを我も人も見し事なり。此ほど世上に金子の見へぬ折ふしなればこそ。壱兩の小判も二度三度いだゝきけると。客あしらひの女房立ならびて是を笑ひける。いづれ女良ぐるひの極る所は銀ながら。ひとつは又仕かけも有物ぞかし。さのみ物もつかは

ぬ男にまはりておもしろがるに。かくまたばつとした事にて沙汰になるは。此大臣のさばきあしきに極ると。いづれもの太皷付添ながら。行すへたのもしからず。案のごとく。三とせたゝぬに。國元の首尾そこねて。手と身になつて。また大坂にのぼりて。所も廣きに長堀の北がはに。我國かたの者。借錢の海をぬけ舟に越て。爰のうら屋をかりて。身過にところてんの草をほしてけふの日を暮しぬ。やう／＼是にたよりて。迷惑がる宿をせばめて。ないうちを喰つぶして。無用の腹をふくらかし。しかもうらはよし原の揚屋町。鹿ばかりの寄所。引うたひのなげも勤めとて昼まへより夜中過迄。かいなと聲のつゞく程は。一日拾七匁のあたるほどわめきける。むかしはあれぐらいの女良に笑ひかけらるゝもうたてかりりしに。いまのめにかゝりて。二階ざしきのすだれをまかせ。こいねふりして。女良に髭ぬかせてのたのしみさりとは／＼うらやましく。我世ざかりに七夕の日のうちに六十兩。露にうちしも。あの男か。廿匁にたらぬけふのさばきも。けいせいぐるひにこゝろのかはる事なし。十五ぐるひをすれば。三代にもつきせぬ寶を太夫にかゝれば。おもひの外。はかの行事をいまといふ今。合点して。何の役にも立ぬ事ぞかし小家の窓の明くれ。是に心をうつしけるが。後には渡世かなしく。夜毎に。蜘まひの人形拵へて朝に賣て。此いとの細き事にて。命をつなぎけるひん程人の心をかゆる物はなし。其後は小うた三味線かしましく。高塀ひとへの色里の事を忘れて。なにとぞ雑煮をくふて年をとりたき願ひ。三とせあまり。不自由に暮し。三十七の極月九日に空しくなりぬ。哀やかたびらもきぬ死出の旅縄からげの棺桶。道頓堀の野におくられてよその亡者の跡さして。やう／＼煙とはなしぬ。今みれば竹林寺に山嵐風雪と切付て。銀弐枚ばかりにて。出來そふなる石塔。施主は越後町まんとしるせり。いかなる女良か立られける。心さしの程やさし。此入替に。思ひがけなき銀もらひ給ふべし

二　しれぬ物は子の親

至りぜんさくにして。素人の珍重がらぬ物。本手のこうたぞかし。番町に。さる御かたの隠し藝に。八筋掛を忍び駒にて引せられしが。又もなき音曲是を役者の九兵衛が御指南うけてまねびしに。それも作彌むかしに成て。花橘

も袖の香も。さる物は日〳〵にうとし。浮世をみぢかふいふ人。さりとは無分別極樂にゆきて精進鱠くふて。物かたひ佛つきあひより。筋鰹のさしみに。夜を明して。落し咄しの大笑ひ御機嫌取の城俊。めには見ねども彼噂こまかしく分をおしる事かな。われら今かはゆかる太夫が久しく引込勤めざる子細をしつたか。成ほど〳〵此御腹に若君一人おはしますといふ。誰がしらせたぞ弓矢八幡深川の助六が子に極めけるとや。それは生れぬさきのむつき定め。此子が娘ならば十露盤もつて。男子ならば反古閉の帳をもつて生るべし。扨は町屋の大臣かときけば。なんの事はござりませぬ兩替屋のこまかなるやつが子なり。おまへさまもあひ聟なれば。すこしはお身にかゝりたる事ぞといふ。いづれも笑ひをもやらし其大臣奉加につかざるや。座中も耳にかゝる折ふし。いざ此坊主を勾當になせと大分はづませ給へは。是は夢かや宇津の山を越て。都の人にあふも嬉しく旅の日數をかさね。けふは相坂の宮もわらやもむかしの人。我身のつらさに。ひとしほおもひ出て。みへざる眼の泪をおのづから。手向ともなりぬべし。今はその撥をとも絶て琵琶の海も跡になして。日高に京入して三条の何がしとかやいふ人の宿かりて。官位の大願其日からを見合せけるうちに。都の大臣。よし野にあへる一興に。いざあゆめとすゝめられて。其人の引導にまかせ。東じややら。北の方やら。むしやうにゆけば。西嶋の細道名殘おしさはとうたへる。朱雀の野邊誰じや。上林のかほる。お茶は初むかしか。迚もの事に此日をあけてみせ給へ。物ごしに罪をつくりて。丸やの七左門が座敷に入て。おかみけなる戀づくしいやとおあふとも。いはせぬ情。江戸に替りて物やさしくたはふれのみだれ酒に城俊が手前にまはりいたむと見へし時。はんじやうといへる女郎見かねて。これをもすけられしを。とふもならぬほどうれしくて。それからすぐに。ほれ出して。よく〳〵なればこそ笳の吸物。喉を通らず今宵の明て歸るを待兼。人をたのみてくどきかけ。やう〳〵ふしぎの首尾して。しのひ〳〵にかよひけるほどに。合力の小判包紙も殘らす。いまは官位の望も絶て。あづまに歸るもをよばなく。身の置所せまけれども。さらに後悔するにあらず。女郎にあはれぬ身のうへをなげき。世に住からのつらさなり。菟角は佛の國へと覺悟極めてゆく水の。伏見の里の暮にまよひ。六のち

またの地藏を過。豊後橋の半わたりて最期を爰に極め。かたみの扇に風は無常の夕ざれ。はんじやうが床のおもはく、いつの世にかは忘れじ。水もなさけあらば。今なくる身をうづに沈め。形を二たび人にさらすなと。あしを揃へて飛入折ふし笹屋の何がしわたり合せ。しかもみしれる法師なれば。是はと引とゝめ。橋づめのわびしき茶屋につれて。是非にやうすを語せ聞て。此人も男泣して。命有ゆへの戀なれば。暫く京都に身を隱し。人の氣を取。つとめ居ば。ふたつの望もかなふべしと。智恵自慢の異見して世上は何のさたなく。かくまへける。誰かこの事をつげわたる。鴈金屋の利右門など。よしなきはんじやうにつたへければ。常の人とはかはりて。此落ぶれしを。かなしく。わたくしの衣裳諸道具の花車なるを代なし。ひそかにたよりを求め。官位をすゝめしに。おもひもよらぬ心づかひ。何とて請べき子細なしと。京も俄にむつかしく淀舟に飛乘。難波の北濱にあがりて杖さへもたぬ座頭の坊。身は薄衣に露霜置て。秋の哀を人もしるにや。藝は身をたすけて。糸による戀の哥。三味線ひく手になびけとは。目くら神

の道びき給ふか。いまはゆかまぬ心から色事は捨ける

三　都も淋し朝腹の献立

身に相應の遊山は。天もとかめ給はすむかしより聞つたへ見をよびしに。宇甚といへる大臣。一生あらひ小袖を肌に付ざりしが、いま波れ紙子に風をひかず。紙帳といへる大臣さりとては後生嫌ひなりしが。戀よりをこさねばならずして。夫婦目かけ女まで。墨の衣とはなりぬ。京にても花崎、法師の世はやかましとて。じゆらくあたりへ引込けるも。女郎ぐるひに。たいくつするにはあらず。かしこく立まはつて。色もやめ時しると見えたり。是ばかりはかぎりなき物なり。中といふ過書町の大じん男ざかりに世をのがれ。是ほど樂しみあるを。今までしらぬは。さりとはおそき覺悟と楊弓の矢しりこまに。一年を三貫目にもりつめての世帯むかしおもひ出して。何かおもしろかるべし。大屋敷賣ぬさきなれば。智惠あるともおもふべし次郎といへる大じんの長町の下屋敷。不思議に殘りて。角内忠兵衛。髭の牛右衛門などゝ。おもしろく咄しくれて。尺八の手をよく。うき世を空ふく風のやうにみなしけるが。おなじくは女の爲なるさし楠。ひぢりめんのふたをして。すこししたるき野郎をまねき。色付の柱にもたれて。おもふ人におもてをそむき。かんばつたる声にて。よし野の山をうたひしを。ゆきつき次第に。竹にのせたるこそ色もありて聞よけれ。塚口が。天わうじに身を隠れしも。太子のごとく。子孫嫌ふにはあらず。人のこゝろほどさま〳〵の取置各別にかはれる物はなし。役者の藤十郎が內證をかまはず。銀十枚出して大津の大鳥買て。つね呑酒の吸物にする事も米がしの。さがみ屋大臣。西の久保に身をかくれながら。惠心の御作を賣て。すぐに大夫のちとせを買たも殊勝なり。吉彌といふふり袖が。野田藤兒がへりに。福嶋の里に。身をのがれし人の許へ尋しに。侘ずまひなれば。さしあたつて。やるべき物もなしとて。小判五百兩。ほしき物をかへとて。花車道具に事をかゝねば。家ほどよき物はなしたとへ隱者なればとて　雨露には。ぬれがたきに何とて備利國といへる人は。宿も定めず暮しけるぞ。其こころは京都の歷〳〵朝夕の友とすれば。東山智恩院の門前町に居ながら。谷峯見晴す所をかりて。樂〳〵と勝手をつゞけ給ふに菟角是もむつかしければ。

毎日をの〳〵まはり番にして。銀弐匁壱分づゝたまはれ。是より外に望みなしといひける。それはいかなる事と問は祇薗町の弁當やへあつらへ。それかし壱匁三分。小者八分にさだめ。朝夕の椀洗ふ事もなく。是程埒の明たる事なしと。願ひの通りにして。草庵には小釜ひとつ。素湯わかして。かうせんより人をもてなす物はなかりき。有時森五郎。鍔三郎などいへる者。早咲の花にのぼりて。大和橋のほとりに。しるべの茶屋にあそび。洛中に是沙汰の。菱屋の吉まさりのすがたを取よせ。挽せてうたはせけれども。中〳〵西嶋のあけぼのには似もせず。朝とく起わかれて。手水むすび捨。壺うちのやうじに歯をみがきながら。ふと思ひ出して。彼法師が許にたづねしに。是はと朝戸明て。難波の事ども。京の噂とりまぜての物語。四方山の咄にひときて高笑ひ程なく日影立のぼれば。あるじ氣を付て。是にて朝めしを喰といふ。無用といへと。是非にとめける程に。然らば酒数一種といふ。あるじ硯を取出し。せめて京で成とも食悦さすべし。何成とも。さあ〳〵望の献立。まづ亭主が好にまかせて。汁はよめ菜たゝきて

雲雀。さて燒物は勢田うなぎの各別なるをくふてみ給へ。さて子もち鮒の煮びたし。是では川魚。過たによつて鯛を皮引にして。あしらいなしの鱠さてわすれた事。堀川牛房ふとに。是でよいか。何ぞ引肴見合にと書付。客內證のあたま數讀て。此六人まへ。すこしもはやくと。不斷の茶屋へ持てゆけと小者にわたせど。聞ぬ皃して火箸ひだりの手に持て。香の圖のやうなる物を書て居る。さては此てつちもお藥師さまへ。かはらけをかくるかといへば。聞てはをりますけれども。つね〳〵屆が埒あかねば。二人の膳さへ。前〳〵の銀もつてこひと申ました物が。かやうの振廻申てまいりましてから。ねんもない事。いたします事ではござらぬとおのが旦那をにらみつけていひける。此首尾大わらひしてまぎらかし。

いざ我〳〵が宿へと誘ひきて。取あへずの朝食四つ過になりぬ。彼法師美食好み。酢の塩のと舌うちして。大坂で喰たる鯖とはむしても燒ても新しさ違ふた物じやと。世に有時を。今もわすれざりと。夢のやうなるこゝろざし。さりとては〳〵萬事捨坊主にはよしと。此腹のへるほどわらひける。これもむかしは藤屋大夫織と。大坂に名高き朝妻に九數つゞきの誓紙も。火うち箱のほくちとや成ぬらん。まことに闇がりから牛を引出すごくに。樂寐をおこせど目を覺さず。昼皃の花のさかりをたま〳〵に見しとや。是もこれにて死んだ時は白帷子きせて。取おかれしと京の人がかたり侍る南無阿彌〳〵

右置土産五卷の書は浪花の俳林二万翁の作せる者也呼ゝ先生滑稽に遊ては住の江の杢に千年の名を殘す二万三千句を吐出し書を偏綱するにおよんでは又ならぶ者なし惜哉や千年の鳥名はくちずして其身は五十二とせを期として終に仲の秋十日の月と西の空にたちぬこゝ

に此書は病中の手ずさひにとりし筆の迹見るにゆかしく又我にひとしき人もあらんとあづさにちりはめひろむるになんとには三の巻より四の巻にかゝりて自筆をよろこひ則取直さす出する者也誠に九皐の鶴の聲天に聞ゆとは此人をやとみだりに筆を取ならし

書林

京洛寺町五条上ル町　田中庄兵衛
武江青物町　萬屋清兵衛
浪花堺筋備後町　八尾甚九衛門

元禄六癸酉載冬月吉日

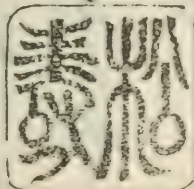
西鶴俗つれ〴〵

自作[illegible]
書中以

序

風はかたちなふして松にひゞき花はいろあつて物いはずまなこにさへぎるとは心にうかひおもふ事いはねば腹がふくるゝといふはむかしやつかれがちいさき腹してつたなき口をあけて世間のよしなしごを筆につゞけて是を世

の人心と名づけ難波の
くれは鳥織留る物なら
し

難波
西鶴 松壽

元祿其月其日 杰壽

西鶴生涯のうち。述作する所の假名草子。棟に充。牛に汗して世にはひこる中に。日本永代蔵。本朝町人鑑。世の人心。これを三部の書と名つく尤商 職人の閲するに日用世をわたるたつきにこゝろを得へき龜鑑たるへきものにして永代蔵は其功なりて後。町人鑑世の人心半書遺して過し西の葉月に此世を去ぬ。されは兩ァの名のみにしてむなしく三部の闕たらんには。ぬしの本望

もかなはず。かつは巻て紙虫の家ともならば。珠を淤泥にかくすにひとしからんと書林の某の歎きに應して兩部の書殘されし。半兒を。とり合せて一部となし。かれにあたふるついて予に序を乞此書の功のおはらさるにわかれしを思ひ出て涙を墨にして筆を添侍りぬ

元祿七年
戌卯月上旬
難波俳林
團水誌　滑稽堂主

西鶴織留本朝町人鑑

目録　一

一　津の國のかくれ里

四千七百貫目を聞耳におどろく

上々吉諸白大明神

二　品玉とる種の松茸

縁のうけ賣人店屋が才覚

塵をつもりて山となる小判

（二）津の國のかくれ里

神武此かた世の人艶女に戯れ。無明の眠の中に其家の乱るゝ事数をしらず。近年町人身体たゝみ分散にあへるは。色好買置此二つなり。損銀化銀年〱相積りて才覺の花もちり紅葉の錦紙子と成。四季轉變の乞食に筋なし。是をおもふにそれ〱の家業に油斷する事なかれ。爰に津の國伊丹諸白を作りはじめて家久しく。毎年の勘定銀五貫目延もちゞみせずうまれつきたる小男の仕合と。月日をおくるうちに子とも成人をして然も惣領よろづにかしこく親の古風とは替り。當世仕出しの衣服に身をかざり是より女良くるひにそまり我里より忍び駕籠をいそがせ都の嶋原通ひつのれば。すこしの望姓殘りすくなく成て身上あぶなく二親なげきて異見するにとまらず。有時約束して丸屋の七左衛門かたに太夫の吉野を揚置。つねよりけわしく六枚肩にてのぼりけるに。丹波口にて夜半の鐘とかふするまに八つ門明て。宵より夢見し客名殘惜さは朱雀の細道うたひ連て歸る。我は今來て太夫が待兼皃見るも戀にふかき所の籠れり先お行水より白粥よ。柚味噌酒麩の跡から岩花のお吸物出して。鴨の板焼は火鉢をすぐにお座敷へ出すぞと勝手は煙立つゞき。亭主は置炉達を仕掛女房は濃茶立てお氣晴しにとあげける。引舟女良に髮撫付させ禿に足のうらをさすらせ。吉野に手の指をひとつ〱引せ。余所のながぶしをこちの肴にして呑かけ。此榮花大名もならぬ事願くは我声聞と。京中八十二人の末社出口十七軒の茶屋までも霜夜に裸で起て旦那の御上京なされたと嬉しかる程物とらせたし。兎角ほしきは金銀ぞかし筭用なしに遣ひ捨ば此遊興のおもしろさかぎりあらじ。目前の極樂とは爰の事寢間は佛と。三つかさねのふとんの上に樂枕して吉野とひとつふたつ物いふうちに。門の戸けわしく明てお宿より御状がまいりましたと。隣の床の客へとゞけるに何事かといふ声して。是は目出たや金銀抓取の内證江戸の手代より申越した關東筋大風ふきて八木俄あがりなれば。是より大坂にくだりて西國米大分買込あがり請たらば。太夫を根引にして我等が奥様にする事ぞと。此たびの仕合を祈れ夜が明次第に爰を立ぞと。今すこしの別れ惜み床をはなれかねける。時に伊丹の人此事を聞耳立ていまだ帶もとかぬに起別れ。おもしろき家中をお

もひ捨我里に失念したる事ありとて。首尾かまはず立歸り早駕籠いそがせ伏見より飛脚舟かりて。其日の四つ前に大坂の北濱へつきて問屋をひそかにかたらひ。米大分買こみけるにはや昼よりあがりて。只一時のうちに三拾八貫目丁銀にてもうけ込。此思ひ入に油買込又四拾四貫目あがりを請て機嫌よく伊丹に歸り。親仁に小判の山を見すれば世間に金のめづらしき時分なれば是長者の心なり。さるほどにたま／＼あひにのぼりし女良を捨て。身過大事にして利を得たる所分限に成べきはしめ也其後は江戸酒借銀田畠を求め棟高ふ作りて住なし心よき春をかさね元日の嘉例とて父親は胸前垂して蓬莱を丸盆に組付代々伊勢海老なしにいわゐける。母親は芋大こんばかり雜煮を盛ならべ餅の入のを忘れたる年より仕合よしとて今に其通りなり。扨親仁の書初に毎年さだまつて遺言狀をしたゝめ箱入にして封印付。持仏堂の下へおさめをかれしがそも／＼は有銀五百七拾目也。年毎に書増て四十二の春より八十三歳にて相果られしに。五十日に一門

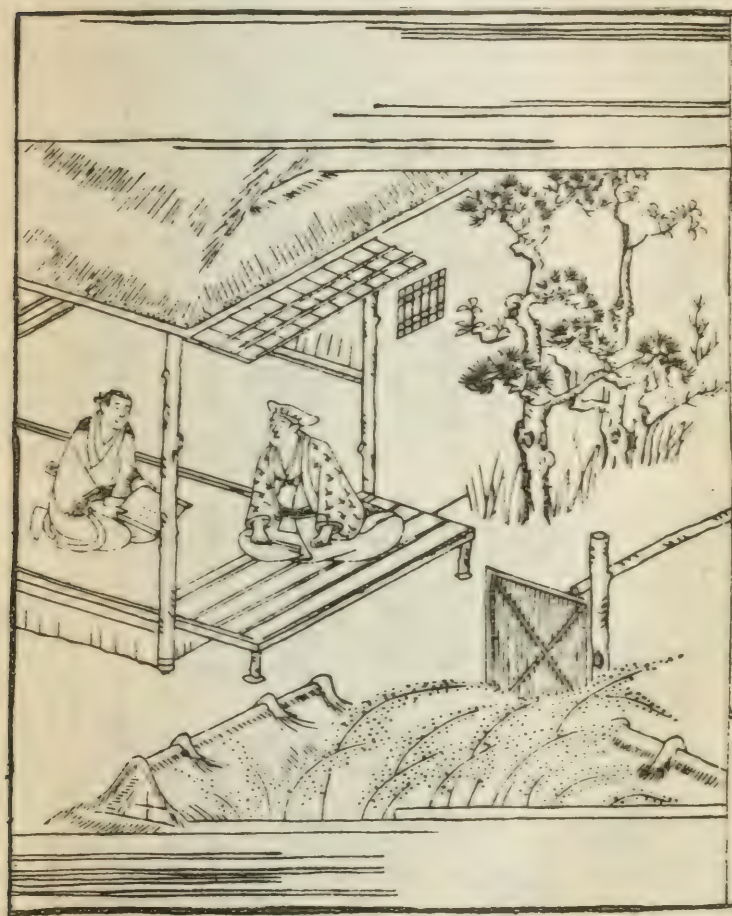
集り書置狀を開き見るに財寶の外に。四千七百拾九貫目內藏三所に入置れ。此銀子の大分に成事一とせ惣領が米油の買入よりの分限なれば。殘らす兄に渡して弟ども是次第に身体をまかすべし。殊に末子は町人の家業成天秤のかけひき帳面見る物にはあらず。其子細は一生美食を好ず世に時花うたをうたはず。鬢付も髮結次第にかまはず夜ありきをする事もなく。人の無情を觀じ長ふもない世界に善心なくては人間と甲斐はなしと常住の身の取置うつけ者のやうに見えて又かしこき所あれば。よき娘ありて旦那の多き御一家の御堂を開立。銀三百貫目付て養子にやるべし。又中男子が義親の目にも見とゞけぬ者なり。さしあたり利發万事を人の跡に付事にあらず。惣して音曲鳴物四座の直傳をならひ請。連歌は新座池へ立入俳諧は難波の梅翁を里にむかへ。宇津宮に道を聞。碁所に二ツまで打なし楊弓は一中かゝりに大金貝の看板。立花は池の坊に相生迄習ひ鞠は紫腰をゆるされ。茶の湯は金森の一傳物讀は十炷香は山口圓休に聞覺へ有職の道者

にしたひ。此外琵琶琴は葉山小哥は岩井嘉大夫ふし。弥七が文作あふむが物まねおかし中間のする事までも口拍子にまかせ。かゝる器用人の有事此所の外聞と皆人もてはやせば。其身渡世の事をかつてしらず殊に肝大氣に生れつき。當座に思案なく金銀手にもたせ置ば。おそろしき虎落どもにかたられ。新田金山芝居の銀本博奕の筒にかゝり。何ほどあつても手を拂ふものなり。既に七歳の春の比はじめて小判壱兩盗て紙鳶の糸を買。はや九歳のときちいさき前巾着の中に一歩廿三入てさげける。子どもの時より錢も白銀もぬすみ大膽ものなれば。莵角商賣さす事無用なり。住所京大坂のうちに物好に座敷を作り。妾女一人小性ひとり男女ともにめしつかひ七人我ともに八人。一生擬ひ世帶にして毎月六百めづゝ晦日に相渡し。此上に奢は一錢にてもかまふまじ。我相果て命日なれば迚精進にてもするものにあらず。此たび病中にも世間のおもわくばかりに跡や枕に夢程の間もあくびして。次の間にてうき世咄し。もまた親仁もよい年なれば。尊い所へまいられたがましで御座る。長いきにひとつも徳のない事。目がかすめば花がさくやら。耳が遠ければ郭公もきかず。歯がぬけたれば肴に味なく足がよはれば座敷に杖突。娌子にあかるゝ身と成一日もしやばふさぎ。藥代のつゐへぬうちに此世の埒が明がなと四五度いふ事聞ける是惡人に極れども。親の因果は是さへふびんに身の行すゑの事共を書置にのせけると。さりとは跡恥かしき親の心入是人間と形を見へる甲斐なし。されば世上にかゝる心さしの悴子多し。天命つきずしてあるべきや。親分限なれば不孝者も隠れてしれず。貧福の親の違ひそんとくの二ッ也。冨貴の家にうまれ出るは前生の種也。莵角人は善根をして家業大事にかくべし。池田伊丹の賣酒水より改め米の吟味稀を惜ます。さはりある女は藏に入ず男も草履はきて出し入すれば。軒をならべて今のはんじやう舛屋丸屋油屋山本屋。酢屋大部屋大和屋満願寺や賀茂屋清水屋。此外次第に榮て上〻吉諸白松尾大明神のまもり給へば千本の椙葉枝をならさぬ時津の國の隠里かくれなし

〔二〕品玉とる種の松茸

神國の日月まとを照し給へば。世に萬人の心すぐなる道に入て正直の頂をさげ。恐るゝ人には礼儀をたゞし順ふ

ものにはあはれみをかけ。我物喰ば竈將軍といへど。京も田舍も住なせる町人其所〳〵の作法ひとつも漏る事なかれ。むかしの人間はかしこき人はすぐれ又愚なるはあらはれて。鈍智のふたつ各別の相違ありしに。今時の人は相應の知德をもつて產れ。習はずして其道〳〵をしれる皃つき見た所のうときはひとりもなかりき。此時に出ける賣僧かたり陰陽師のたぐひ。大かたの文作事にては合点せぬ時世になりぬ。只白化にほうかしまでも品玉とる種の行所をさきへ見せ。辻談義も佛のまねの口をあきつまる所は喰ねばひだるい〳〵といふにぞ。ありのまゝなる法師とて人皆勸進をとらせける。萬事に僞りなき御代の掟をまもりけるためしには。よろづの賣掛あるひは當座借の金銀。手形なしの事なれば借請ぬといふとてもむつかしき出入なるに。心覺の帳面ばかりにて請拂を濟しぬ。此以前舟着の問屋に世間並にすぐれて銀拂ひの惡き人有。大節季の夜に入さもいそがしき中にて。人の手代に銀八百目渡しけるに請取帳に名判をしるし其銀子を袋にいれずに歸る。跡にて亭主取隱し後日の沙汰にもいよ〳〵渡したといひきれば。此手代身のせつなさのあまりに湯玉のごくなる泪を插し。諸佛諸神をせいもんに入不念を詫言すれど中〳〵聞いれざれば。手代是非なく賴みし淨土寺にまいり親かたへのいひわけに。銀ゆへの自害扨はとらぬに極めて。世上よりいひ立次第に商賣うすく成。內義幾人か平産せしに手のなき形をあらはせ。一とせ道頓堀にて見せ物にせし德利子の万太郎は其人の子にて世に恥をさらし。つゐには此家目前に絕たり。無理なる欲はかならずせましき事ぞかし。ならねばなるやうに世わたりはさま〳〵有。然ども望姓持ぬ商人は隨分才覺に取廻しても。利銀にかきあげ皆人奉公になりぬ。よき銀親の有人はおのづから自由にして何時にても見立の買置利得る事多し。唐秬の根の南の方へ高ふはへあらはるゝ年は二百十日の風碓をも吹ちらすと東方朔が傳書にも見合今年は俵物買とし思ひ入はありながらない物は銀にて。さる程にせはしの世や。節季〳〵は六十日の立事夢のごとし正月の掛鯛の山草すこしかるゝとおもへばはや蓬賣声軒の花菖蒲今も所〳〵に見ながら。灯籠出す暮に胸も踊て蓮の葉の食ぬくもりもさめぬに又菊の酒屋の書出し見ればおもひもよらぬ醉の出るもおかし世に住付届とてぬり臺に小鮹魚一連又は干鮓二十居て取遣する

は。今年は栗が高いと見えて筭用づくの人心さもし。九月を過て大暮までは百日にあまれば。すこし爰にて息をするとおもへば常の物前と違ふて。大分の拂ひかた心當ほと商ひしてからたらぬ所見えて。日比言葉て目を掛らるゝ門徒寺の手前よしに。此行先の師走には銀子五百目御借給はれと機嫌のよき時女房どもに云出せければ。何と三百目にては仕舞れぬか。其内分別してお取越の寄銀次第御用に立事もと。盃持ながら呑もきらずかみもきらぬ返事を無理に旦那のお影といひかけ。それより毎日のけいはく茶のたばこのど馳走して。五日に一度づゝかるひ遣ひ物してはいつくばい初松茸壱斤四匁五分する時調て嵯峨の親類どもよりまいりたるよし。霜前に土くれ鳩を態とつとにして山家からくれましたと申遣し。孫子の亥を祝ひおふくろさまの御法躰け付。餅舂にも夫婦まいりてかゝは大に丸頭巾を進上申。自身番の夜半替り釜の下を焼ば。男は水風呂に水を汲込を勤め棚から落て猫けがしたまでにか一代にした事ない骨をおり。十二月廿

日比より御無心申かけし銀子の事を頼み奉りやう〳〵大晦日の夜四つの鐘の鳴時。利足は一分半の手形を極め何時成共御用の時分すましかねれはゝひとりある娘を遊女町へ賣て相濟し申べしとの約束。人が聞ねばこそ無念なから此度の御恩わすれ難しと。内のものどもにまで禮を申そこ〳〵に年をとりて。明る春の四日に棚おろしの勘定をして見しに。わづか五百目の銀子借ふとて目に見えぬ費はのけて置て八十四匁六分五リンが物をつかひける。まことに貧者の手づまる事かゝる物入のありけるゆへぞかし。其年より夫婦内談して菟角銀がかねをもふくる世なれば。せつかくかせぎて皆人のためぞかし。外聞を捨て身のたのしみこそ老先のたのみなれと。奈良草履屋を二足三匁に仕舞て大坂を離れ。女房の在所住吉の南遠里小野に身を隠し。夕暮よりは油を賣すこし手を書を種として所の手習子とも預り。我まゝそだちの草を苅野飼の牛の角文字よりおしへけるに。謡しらねば迷惑して日毎に大坂へ通ひ。むかしの友にならひて又里の子におしへけ

るに。やう／＼兼平一番覺へしに小原御幸の源太夫のと外百番をこのめば師匠のしらぬとはいひ難く。是さへ一日のはしになに成とも望次第にうとふて聞せうといふうちに。節用集に見えわたらぬ難字を庄屋殿より度〻たづね給ふに一度にても埒をあけねば何とやら首尾あしく。はじめは麦秋綿時新米の初尾とてくれければ。商ひしたよりまし成と思ひしにひとり／＼寺をあぐれば又かなしく成て。明暮渡世を分別するに錢三十つゝもうくる事の何にてもなかりし。有時宵に焼たる鍋の下に其朝まで火の殘りし事。是は不思議と焼草に氣を付て見しに茄子の木犬蓼の灰ゆへに火の消ん事をためして。是は人のしらぬ重寶と思ひ付手振で江戸へくたり。銅細工する人をかたらひはじめて懐炉といふ物を仕出し。霜月比より賣ける程に是は老人樂人の養生夜づめの侍衆の爲と成次第／＼はやれは後には御火鉢御火入の長持灰とて看板出し。大分うりて程なく分限に成通り町に兩替店出して。何万兩とも藏入の奥をしれる人なく。林勘兵衛といふ名はひそかにしてのたのし屋也。むかしよりいひつたへし駿河町の三谷をはじめ其外の兩替どもこかねの山を見せるに中／＼あひもおとらず諸大名の御用何ほどにても事をかゝず。家榮へて今妻子は下／＼の見る事もなく上野の花見駕籠隅田川の舟あそび柳櫻をこきませて。都の心になりて一生の安樂する事も。うき世帶の時男によくつかへて堪忍をせし身の上。天是をあはれみ給ふなり天下の御めぐみなをありがたし。わづかの灰より分限になりて富士の煙の絶る時なくたしか成福人也

三　古帳よりは十八人口

冨貴は悪をかくし貧は恥をあらはすなり。身体時めく人のいへる事は横に車ものいて通し。世を暮しかぬるものゝいふ事は人のためになりても是をよしとは聞ず。何に付ても金銀なくては世にすめる甲斐なき事は今更いふまでもなし。諸町人其合点はして居ながら身の一大事をわすれ。いつも月夜に釜をぬかれ借錢乞と無理の口論。大節季の闇とは元日よりはやしれけるそかし。今の世に商ひ事なきと人毎にいへり。是は大きに筭用違ひむかしとは各別諸商賣多し其ためしには大坂の堺筋に椀折敷重箱よろづぬり物屋ありしが。親の代寛永年中の古帳出して見るに。壱年の賣物七貫にたらず。此利あいにて上下六人口を過て。それ／＼の正月きる物

餅も世間並につきて萬の請拂ひも極月廿五日より廿八日までにしまひ。晦日には年わすれとて隙なる年寄友達をよひあつめ。小鴨の汁に鰤の燒物にて振舞。酒のうへの大笑ひすこしも心にかゝる事もなく内證しまはれけるに。今我代になりて親仁の時よりは商大分にしましで。毎年四拾貫目余の賣帳。人も其時とはまして十八人口になれば以前より世に商事のないとはいはれざりしに。年〳〵手づまり兩替屋より日借の小判二日切の手形銀二割の利銀をかまはず先請込て當座拂ひに埒をあけ。門は礼者の通るまで天秤をならし。やう〳〵仕舞て嬉しやと革袋枕に殘る物とて惡銀ばかり十八匁戸棚掛硯には錠もおろさず錢さしの塵もはかず。掛乞の呑捨たるたばこ盆しだらくに。ともし火はかはらけの中に燃入我身を覺ず鼾をかき。夜の明がたまで目のあくものはなかり。母親隱居の戸をあけて下女をおこし。大豆からにて鍋の下へ燒付膳たてするも貞ふくらかし久七に若水汲といへばお家ひさしき人にくませよ。半季居は御作法しらず餅が煮たら身いわゐに喰ふといふ。手代も主の事をかまはず久七に足をもたせひとり目の明まで我を起すな。向ひ殿の若い者は我等よりは三年おそう奉公して。はやとし日野絹のおしきせ脇指までもらひしに。いかにしても筭くつしの布子て立ならぶもはづかし。昼の內は門へは出ぬそといふ。小者めまでも同じやうに口をたゝき。ことしはゑびす殿ににくまれたかして塩鯛なしに雜煮すはるといふ。その外の下人とも絹帶を綿帶のふそく。又は雪踏のかはりに皮草履少の事に機嫌わるく。用いふ事も余所に聞せ大勢の人をつかへる甲斐はなし。是親かたのすべき事せざるゆへと母の親元日そう〳〵泪をこぼしすぎゆかれしつれあひの事思ひ出して持仏堂に香花を取。長生しての後悔と大声あけてなけかるゝにいづれも目覺しておどろきける。是不孝第一なり母のかなしみ其身の事にはあらず。我子を人にあなどらせ世間の外聞かた〴〵口惜きとはかり思ひつめられしは女心には道理千万なり。親の時より次第にしにせたる見せにて今大分の商ひ事ありながら。何とて節季〳〵に手つまり迷惑する事ぞといへば。母親爰はいひ所と男のよくひざを立て疊をたゝき。我等が世帯の時は雀のなかぬうちに鐵漿を付て髮を結下女が水汲うちに茶の下へ燒付。米釋間に寢床をあげ。でつちに行燈掃除させて其油紙にて煙管を琢せ其跡にて敷

居の溝をぬくはせ。捨る所は塵篭角〳〵までも氣を付。芝居近くへの使には朝食より前にやり。遊女町の近所へやる時は用事俄にいひ付て。帶も仕替させず鼻紙入を取まはすまもなく庭よりすぐにつかはし。ひとつ釜の加賀米にはしらかし汁。鰯菜も同しやうに居りて主下人のへだてなければ。朔日廿八日膾せぬ事もあらためず精進日には香の物にて。朝夕お主のお影と箸箱をいたゞき。風の吹日さむからぬも新しき綿入の布子ゆへと。衣裏のよごるゝをもいとひ万事おろかにせざり。我等もふだんは花色染のもめんきる物に紬の帶一筋にて姿を作り。娌取振舞の時も淺黄にちらし菊の絹の物。しゆちんの帶に紫革足袋にて花をやりしに。今是のおかたの常住の風俗を見るに。肌着に白小袖をはなさず中には鹿子上には黒羽二重のひつかへしに。藤車の紋ぬほとまとひ。すき通りの瑇瑁のさし櫛を銀弐枚であつらへ。銀の笄に金紋を居させさんごじゆの前髮押へ針か所を碓程にして付て役者のきそふなる袖口。百品染の白じゆすの帶を腰の見え

ね入の匕髻を掛て。素貝でさへ白きに御所白粉を寒の水にてときて二百へんも揩付。手足に柚の水を付てたしなみ。灯達にむらさきふとんをかけ茶繻子の引敷。延の鼻紙に壺打のやうし取添。たばこの火に伽羅を焼かけ。せんじ茶を臺天目にてはこばせ。手もとに源氏物語いたづらに氣を移す事を年中の仕事にして。花見紅葉見の駕籠芝居の替り〳〵に棧敷をとらせ。中居腰元お物師つれて針を藏につみたればとてたまる事にはあらず。諸事に付て內證の奢より身体をつぶしぬ。おかたは我男ひとりに見する姿を遊女のごとく作り。男は又一代連そふ女にない物もある貝して萬隠しうちの肌着に不断ひざやの下帯かく事人のしらぬ費なり傾城ぐるひするには我も人も全盛所なれば風俗作るもとわり也是さへ今時はかしこくつねの衣類にて通へど揚錢の濟事をよろこびける。されば人の花娌といふは親にかゝりの隔屋住のうち。又はよぶと其まゝに世帯請とるも。わづか一とせのほどはたがひに堪忍しあいて。男の氣を取御隠居におそれ下人下女か身のうへもよしなにいひなし。もしさられては大事と只心ひとつに此家の榮へ行末を祈りしに。程なく惣領產れて尤手前よろしき人は乳母を取てそだてさせけれとも。はや女の身もちおのづから自墮落に成て。俄にふるめきむかしの形見覺して戀も余所に成ければ女房は殊にりん氣つのり。はたちにたらぬ口から言葉荒して親里よりつれたる女をあいてにして我身は果報のすくないものじや。伏見町のごふく屋からもいふてくる。天滿の酒屋からも人を賴み是非よびたいといふたに。仕合のあるが中にこんなぬり物やへかたられて。跡からはける事を念佛講の同行平野屋の久齋様にだまされた。是程氣がつきては頓て死ぬるに間はない金入の鳳凰の小袖は打敷花車の縫の袷は天蓋幡にして。お寺へあげて手道具は燒て捨て。うき世に塵も灰も殘らねば何か氣にかゝる事なし。ひとりある子も疱瘡せねば命も定めなし。あれが事さへふびんにおもはずと。其後は鼠の喰物も取をかず麻袴の皺の寄次第。亭主の留守には夜食好みして大かた是のたはけが歸る時分じやと。油火の灯心をほそめ御所柿の皮をしれぬ所へ捨させ。なんの事もない座敷を家鳴がするといひ出し人の心をなやませ此家の衰微をよろこぶ。女の心其時〳〵に移り替りおそろしき物ぞかし。其男の身にしては寢覺うるさく。後にはする程の事目にあき

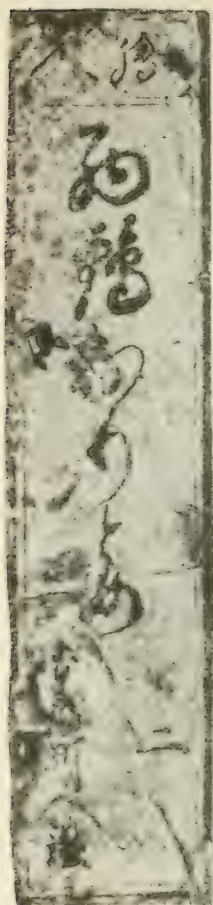
て暇書て埒を明ける。世に女房さるほど身体のさはりに事なし。女も又二たびの緣付かならずはじめにはおとるぞかし。菟角世間の外聞かまはず聟は目下成を取てよし。娌も又我よりかるきかたよりむかへてよし。挑灯に釣鐘かけあはぬ事すれば內證の火の消るにほどちかし。此椀屋もよい舅に万事まねて身上をたふれける

〔四〕所は近江蚊屋女才覺

娌入道具の品ゝ世間にすぐれて念を入ければ。かぎりもなくむつかしう國土の費になる事多し。上京中長者町の仕立物屋の弟子手間とり針筋を揃て薄絹の蚊屋を縫けるに都は目廣き所ながら。立とまりて是を見る人次第に押もわけられず。黒木賣くる女の難儀爰通りかぬるのみしれたる姿を笑はれける。摺の二布糊こはゞ〳〵としてやう〳〵我身を隠すもあるに。此蚊帳を見れば四角に赤地の唐織を菊の花形に切あはせ。紅ゐの大房に匂ひ玉をむすびさげ。るりさんごじゆの錺り銀の鐶金の輪。小緣ひとま〳〵に鈴の音なし乳毎に五色の房

を付る裙におし鳥のたわふれをさま〳〵に縫せ。岸の柳に雪をもたせ冬川の氣色見てさへ涼しきにあの中に寢ば夏をわするべしと浦山敷。爰は内裏ちかくなれはいかなる高家の御物好。皆人極樂と聞およびし佛様の寢所も何としてこんな事あるへし。扨も是はとおどろきける。時に亭主此中へ入手枕してゆるし給へしばしかりねの夢。是に浮世御座長枕聟に成人の果報は前の世によき種蒔て。今はへ出る戀草のはしめ町人にもかゝる嫁入蚊屋。公家も大名も大かたの衆は成まじ此一釣に弐貫六百目入ける。いかに分限なればとて是は奢の沙汰といへり。面〳〵の身しのぐためなれば近江布の蚊屋に赤根染の乳縁付しを釣ても。無理に蚊がはいりもせずとちいさい氣からいへば一疊づり程になりて身の置所なし。そも〳〵近江蚊屋の出所は八幡の町より仕出して是諸國に廣まれり。中にも扇子屋といふ人むかしはすこしの酒片見せに米商賣しけるか。内義才覺にて手づから釣かけ桝を持て。米酒にかきらずわづか一升買する程の貧者には利徳かまはず斗よくし

て。手ひろふ見せけるほとなく一國によき事いひふらして。在〳〵所〻山家のすゑまでも此町の市に立人歸さに此家の兩口よりくんじゆして。萬を調へて歸れば一日に錢の山白銀の洞も出來分限。後には大かたの咳氣には藥の代に爰の諸白にて直しぬ。其家富貴に成時は諸事吹付るやうに心涼しく扇に家の風ぞかし。其後は江州の布高宮買とりて國〳〵に出みせ。殊更京都四条東の洞院の店には毎年嶋布ばかり千駄づゝ賣拂ひける。疊の表は大坂に見せ出し次第に大商人と成ぬ。是より年〳〵仕出しの蚊屋何程といふつもりなきに世界の廣き事おもひやられける。毎日蚊屋縫女八十人余乳縁付る女五十人。大廣敷にならびたるはさながら是によごの嶋のごし。されども是程の中に都めきたる娘はひとりもなかりき。玉に疵すぎに出尻たけが口の廣さ。朝夕の食事とて飯櫃にくるましかけて。六尺三人引てまはり手盛の杓子百足のあしのごし。鞍馬比沙門もかゝる臺所をまもり給ふべし。年中の事なるにそれ〳〵の人つかふ智惠もあるものかな。二度の仕着もひとり〳〵の願ひ染色紋所まで付てとらせける。此外手代あまたなればはや八月より正月物をこしらへし萬事は手まはし次第なり。是迚もやう〳〵旦那といはれて親子四五人の口を過る外なし。しかじ一人のはたらきにして數百人をはごくむ事大かたならぬ慈悲ぞかし。此心の德ゆへ下〳〵も草木もなびきて。むかしより住なれたる庭に枝ものぶりたる松有。北野の千貫松淡路の万貫松にもおとらず。是ちとせの詠めなり。されば人の渡世ほどさま〳〵なる物わなし。片田舍にさへかゝる人もありけるに。萬屋甚平とて出生京の寺町通三条にてそだちければ。腹の內より都の水を呑諸人のかしこき事を聞なれ。身過は何にしても五人三人は世をわたるべき事なるに。やう〳〵女夫の口をすぎかねしは口惜き事ぞかし。然も此男手は帳の上書する程なり。算用はむつかしき割物も埒をあけ。銀は兩替より折節は見せに來る事有。何にても一分別させて事のすまぬといふ事なし。長口上あざやかにすこし料理も心がけ。うたひも人の跡にはつかず。碁將棊も人の相手になりかねず。我一分の外人の役にも立ける。されとも勝手あしく所にて商賣成がたく。春は慰み本夏は扇子秋は踊道具冬は紙子。其時〳〵の物を仕込此廿年ばかりも江刕にかよひ商ひ。宿には一とせを廿日ばかりも女房共の皃を見る事

ぞかし。京にはやる咄し小哥を習ひ覺へ。商ひする御機嫌取に夜昼あそびものに成て。つまる所は夫婦の口を喰て通るぶんなり。幾年か弐百目の質のびもちゞみもせず年を越けるに。千本通に母かたの姨ひとり過して暮されしが。いとしや頓死いたされしに。我ならで跡弔ものなければ。此時の物入に銀三十目あまりつかひしが。随分始末しても四五年此銀もふけかねて。何とぞむかしの弐百目に成事を願ひしに旅宿の亭主に頼まれ在所へ養子をきも入て。思ひの外なる銀六拾目礼をとりて。一代の仕合此たびとよろこび。極月廿五日に江州八幡を立て京都に。幸の道づれ爰の問屋より拂ひかね持てのぼる人是程慥成事なし。道中いそぎけるに草津の宿の矢倉といふ所は姥か餅の名物。勢田矢橋の追分なり近付の茶屋にしばし休みて氣色を見るに。鏡山の曇晴て松に風絶海に浪の音なくけふこそ渡し舟の乗日和といへば甚平中〳〵合点せず。おの〳〵は御勝手次第我等は歩行路へまはり行。其子細は人の命に替なし殊に金銀の荷物を定めなき舟につむ事なし。兎角大事の身なれば渡しはいやに極めける。問屋若い者腹立してはる〳〵道づれ爰までまいりて。此日和に何の氣遣かあるべし我等は小判千三百兩持て此渡しに乗ける。此身共方の身とて何程の替りあるべし。大分の銀持身を大事にかけ給へといひ捨て矢橋のかたへ行ける。茶屋甚平に申せしはいつも舟にのる人が何とて此天氣に用心し給ふといへば。此たびは仕合よく五六拾目も銀子のばしければ。身か大事におもはれていかにしても船に乗れぬと。胸おちつけて勢田にまはる。大津のもどり馬はあれと是にものらず行程に。石山の晩鐘聞比粟津野を行に。松原より牢人らしき男弐人出て。近比無心ながら今時分の事なればよく〳〵さしつまりたる事とおぼしめせ。年取物を申請ると荷物に手をかけしに。色〳〵詫ても聞いれねば。是非なく肌に付たる銀取出し。弐人に八拾目ばかりとられて扨も物うきひとり旅。身の程うらむより外はなし我一生何程かせぎても。銀三百目より内の身体に極る所を覺悟して世を渡りぬ

西鶴織留本朝町人鑑

目録　二

（ニ）

今が世の楠の木分限

無用の奢り川原乞食

（ホ）

堀らの出の楽と思ひ

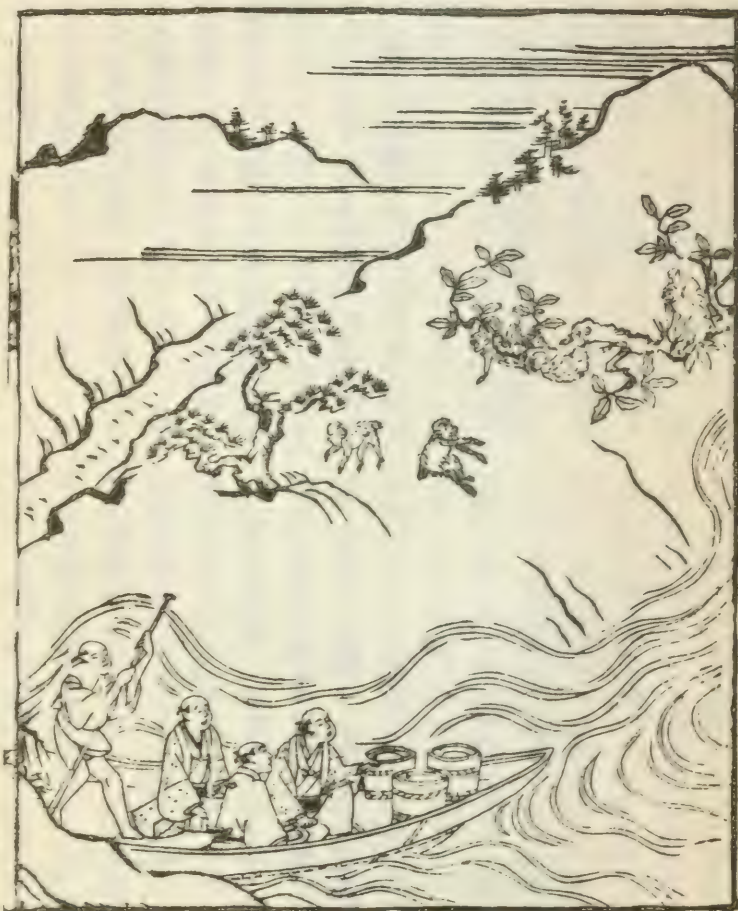
（ヘ）

菊瀬の元の始

〔二〕保津川のながれ山崎の長者

本朝は天照太神元年より今元祿二年の初春まで二百卅三万六千二百八十三年。此國豊に續てなを君が代の松はひさしきためし。冨士を常住の蓬萊山。不老門のひがしに武藏野の滿月外天のひかりに同じからず。御紅葉山の木すゑ千秌の色をまし。万歳の海龜さゞ浪靜にすめる。江戸は天下の町人北村奈良屋樽屋をはじめ。諸國の惣年寄金座銀座朱座此外過書の舟持世上に名をふれて。是皆町人の中の町人鑑といへり。時に都の嵯峨の角倉は其家榮て長者のごとし。然も二十余人の子寳いわゐの水の高瀬川にすぐなる道橋のわたり初して。此流れに一棚舟をかよはせ俵物薪をのぼし。洛中のたすけと成竈の煙にぎはへり。又保津川のながれは丹波の龜山につゞきて。嵯峨まで二里あまりの所近代切ぬきの早川。是を自然と乘覺て船人ちからも入ずして。岩角よけて滝をおとし。ひだりは愛宕右は老の坂此山間の詠め松嶋をちかふして見るぞかし。有時山崎寶寺のほとりに油のうけ賣して山家かよひの商人。此舟に乘てくだりしに猿飛といふけはしき所を。むらざる數かぎりもなく渡りしに。二疋つれたるこけさるが栗の梢を傳ひ此川をわたりかねたる風情見えしに。折ふし狩人のまはり來て鉄炮にねらひよれば。先に立たる猿の身をもだへて鳴さけび。跡なる猿に指をさしておしへければ。狩人笑つていかにおのれが身をたすけむやと火蓋を切ば。あはれや二疋ともに落けるを立寄て見しに。一疋は玉に當り又一疋は身に子細なくて手に一尺あまりの木のきれを持ける。是を不思議と見るにふびんや目くら猿なるか。泪を洒しころされし猿の事をなげくありさま。是がためには子猿と見へける。親に心をつくし年ひさしくはごくみけるとおもはれ。早船をさしとめ各是をかなしみしに。狩人は彼目くら猿も即座にたゝきころすを。山崎の商人錢二百匁に買とり我里につれ歸りて。二とせあまりも飼置隨分いたはりける。その年のくれになりて此油賣わづかの事に仕舞かねて。借錢のかたへ有物をわたして身体たゝむ談合を夫婦ひそかに極めて。朝は所を立のく十二月廿七日の夜ふけて。猿にも人間にいふごとく浮世とて我かく成行ば。独ある子をさへすつる時節なれば。汝は此家に殘し置自を恨む事なかれとせめて春までの喰物あるにまかせて。

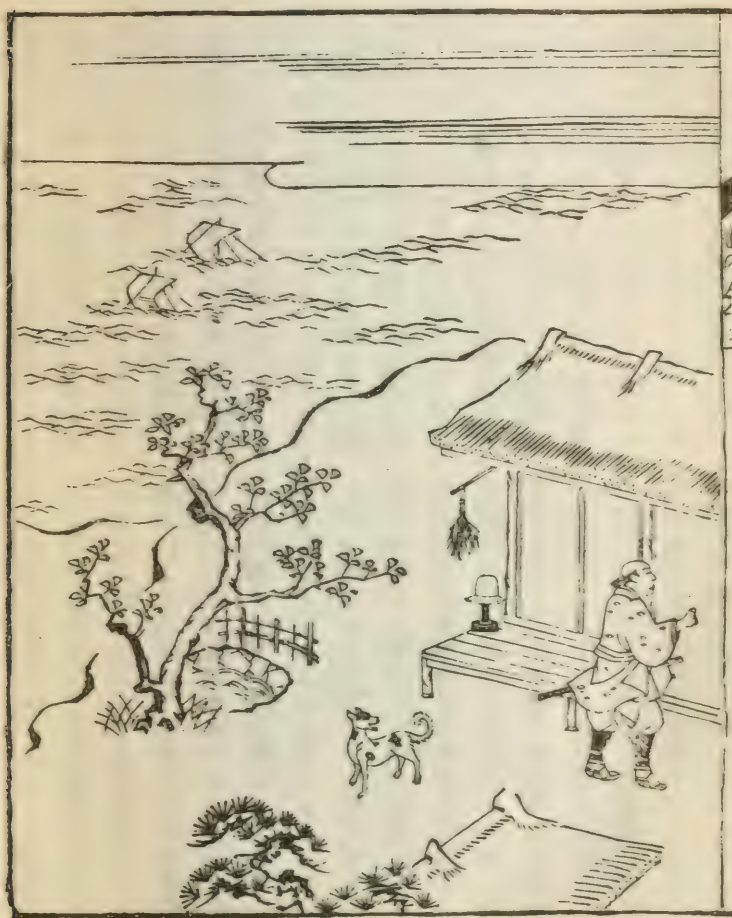
節分の煎大豆のあまりに黒米すこし手もとに置て。夜の中に爰を出て行用意して。火炉のあげに子を入片荷に小鍋ひとつ継〳〵の袋に粉麦小豆など取ませ。女は持佛堂を明て珠数取出して手にかけ。辻のぬけたる葛笠を被き。住なれたる我宿の名残誰かは爰に世帯せん。おもへば惜き香の物桶かくなるべきはしらず。此夏の瓜茄子塩の辛い物を喰ふとて無用の水の呑置。菟角に欲過たる事はせまじき物と。をかぬ棚までまぶりて鐵漿壺をうち洒し。見る程萬こゝろにかゝればすこしもはやく家を出給へと。泣出せば。男も泪くみさりとは無念成世間や。聞ば此ほども京には町人分として。壱万八千貫目の借銀十年切の年賦にして利なしに濟すも有此家の年中の豆腐の通ひに〆八百三拾丁。此代七貫七百六十弐文の拂ひ。家に應じて諸事の物入大分なり。我等は此豆腐の錢を持ばゆるりと年を取けるに。扨も是非なき仕合とひそかに立出るを。最前の目くら猿女房の裾にすがりてなげく風情。人に別るゝこゝちに皃を見かへれば。此猿口のうちより

虎のかたし目貫を取出し。内義に手わたしいたしぬ。男是を見れば金目三匁あまりのむかし目貫なり。是はやさしき心ざしの嬉しや。昔日舞大夫の幸若越前より都にのぼる時。山中にてむら猿舞を望みて後。太刀を一ふりほうびに出しける是猿太刀とて幸若の家に傳へり。今又是を我にあたへしは天の道にかなへり。是にて節季の仕舞はなる事ぞと又分別替りて。夜ぬけの事は沙汰なしにして彼目貫を兩がへして。買掛のかたへすこしづゝ渡して世をかざり松もゆがみなりに年を越て。明の年は商賣に油斷なくそれより次第に家榮て。後には手前にてしめさせけるにおのづから正直の首に付る髮の油もよく。関の明神へ灯明あぐれば和光の影清く十四五年のうちに山崎の長者となり内藏にはよろづの寶寺うち出の小槌は目前の油槌と心得て。楠の木分限といふ物にちく〳〵延て朽る事なく。ひとりの男子も十六になりぬ。渡世の知惠付に年玉の扇箱をのせたる片一枚に錢壱文添て。是をわたし。汝が工夫にて商ひの元手にせよといひ聞せける。

一子しばらく思案して一錢にて紙調へ一錢にて糊を買。くだんの片を張立黒星を書付て鉄炮的の角に仕立見せけるに。親仁中〳〵同心せずおもひつきはよき細工なれども是は賣の遠き物也。是を二ッに割て袴の腰板二枚にせよとのをしへにまかせ。京の羽織やのみせにたよりはじめて錢六匁に賣て歸り。それより我と才覺して富貴になりぬ。親の讓りの金銀にて身を過けるは武士の位牌知行取て暮すに同し。されば人出生してより毎日錢壱文づゝ溜て。百より一割の利を掛て六十歳の時は六拾貫目になりぬ。是をおもへば万事に始末をすべし。銀子を借て利銀のかさなるをおもへば是よりよき事はなしと思案して。銀壱貫目有時山崎の親の跡を捨置京にのぼり。大名借の銀親へ頼みて是を預け置しに元壱貫目の銀を一分の利にして三十年其まゝにかし置けるに。元利合て弍拾九貫九百五拾九匁八分四厘一毛になりぬ。此丁銀箱入にして請取是より次第に借掛て。程なく千貫目持と成それより一代のうちに七千貫目慥に有銀。廣き都に三十六人の歌仙分限の內に入ぬ。そも〳〵親の手前より片壱枚二匁もらひしをかく長者になる事町人の鑑也洛陽分限袖鑑の第二十八番目に。山崎屋と見えしは此人の事なり。子孫つゞきて棟をならべ門の松を飾り目出たき春をぞかさねける

〔二〕五日歸りにおふくろの異見

六分にまはれば大屋敷買ふて借屋賃取程慥成事はなし。火難ひとつの氣遣それは百年目。十四年には本銀取返し地は永代の寳ぞかし。近年分限成者ども我名代にして家を求めても借屋の出入をむつかしく。たとへば百貫目にても其高に應じて帳切銀さへ才覺すれば。何程にても銀子取替家の主となし。年寄五人組の連判にて賣券狀の上に。利銀は家賃分にして是たしか成借物なり。又借人の心せはしく然も內證にて濟事にあらねば。町所へ外聞を包にもあらず何が勝手に成事ぞといへば。西國を引請て新問屋する人又は請判に立人。あるひは在鄕より敷銀の付養子又は娌をよび入る思案にて。先居宅見せかけにして自然とよい事をしすましたる者も有。今時の緣付仲人十分一取によつて大かたはかたり半分なり。娘の親のかたには僞りいふにしてから。二十二三までも振袖着て置て。十七の八のと年を隱す分にて別の事なし。男のかたに僞いふからは頼み云入の絹巻物

包銀も當座借にして。婚礼調ひ敷銀を請取といなや乞つめらるゝ手形銀を濟し。はや五日歸りより物毎に品あしく仲居お物師もけふまでの約束と祝義のすくなきにふそくいひて。娌御の乘物より先に立て歸る。里へのみやげ物に菓子屋へ椙重取に遣しければ。前〳〵の銀子大分なれば又其上には掛商ひならぬといふ。肴屋からはある鯛をないとておこさず。やう〳〵紙屋を文作り何にも角にも杉原を進上物に娌をおくれば。貝添お乳は歸り〳〵不首尾ひとつ〳〵おふくろにつけて。まだもあしもとあかいうちに御分別をあそばし。荷物取返しにといふ女の身のかなしさは爰也。はや自由ならぬ事ぞ世の聞えもよろしからねば何事も沙汰なしにして歸しさまに敷銀の事は是非もなし。衣裝手道具を借といゐて質に置れては取返しなし。何事も母人に問ねばなりませぬと小袖一ッも借事なかれ。もし姑がつらく當らば此方へ見舞にくるたびごとに。二ッ三ッ鹿子の物をしれぬやうに風呂敷に包ませ幾度にも長持を明からにして縁を切合点に身を取まはしたがよいぞ。とかふするうちに身持になればむつかし子ない時に余の男を持替たがよい。男に飽るゝ仕掛は朝寢して髮結ず。氣がつきて立ぐらみかするとて昼も高枕して物いはず。朔日廿八日にも無理に貟つきをして見せ。鱠焼物も口にあはぬとてせゝり箸して。いそがしき中に汁粥を好み。一門つきあひにも阿類形氣に見られ。三日に一度づゝかゝさま見舞といふて歸れば。後にはいか成男も退屈して物云する時。御氣に入ぬ女房を一日も見て御座るが惡い。さらりと埒の明事じやに世界に女旱はせずお物好成當世娘が何程にても御座る。わたくしが横ぶとりて風俗の惡いは拾貫目の敷銀と。今でも阿爺様のお果なされましたれば。新地十間口の家然も濱にて裏に借藏迄建つゞきしを所務わけに取ます。此家と銀とで見てもらひますと我まゝに云つのり。まとのつまりには此方から埒明て。せかすとも黑髮の先すこし切てなげ付。近所へひゞきわたるほど泣出し人集めして其まゝ立歸れ。親の身として世帯を大事にかけよといふべき物を。男惡みして戻れと惡事をいひふくめけるは。よく〳〵聟のしかたのよろしからざる故也。女の大事爰ぞ母が言葉をひとつも忘れなといへば。娘も是を至極して其心に成て男のかたに歸るに。一日づゝ夜をかさねなつかしげなる心たかひに通ひ。いかに親の御意なればとて又男を持替るも人

の本意にはあらずと。母の手前を背て內證の勘當かまはす男とひとつになつて。身の裸になる事は扨置後には手せんじする事世にあるならひぞかし。昔の名殘に有程の小袖ひとつ〱質に置あげ。人の帷子時にふる袷を身にかけ世上に綿入着時。ときあけ物に風をしのぎ世に有時の形はなかりし。物每後には合点の行事あり。貧者になつて當座のがれに質を置請返すといふ時節なければ。當銀に賣捨て渡世をすべしと年久しき小世帶人の語りぬ。菟角年〱つもりておそろしきものは質屋の利銀ぞかし。生平の着ふるしひとつ加賀の茶小紋の夏羽織此二色をそも〱は元銀七匁五分借て。秋より明る年の夏まで預ヶ元利揃て每年請出し。置たり取たり十九年に拾七匁一分の利をすまし。近年は次第に元銀さげてやう〱五匁五分づゝ借て今にあづけける。又家質の事もよき商ひを見掛手まはしのために借人は各別。親代ゟ共宿賃にて世を暮せし人。子の代に成て無用のつゞくり普請。又はおのれに過たる萬事の奢より內證さしつまりて。同じ軒をなら

べて我物喰ば何か恐るゝ事もなきに。加判してもらへば五人組年寄に口をたれ。はや町中の思ひ入替りて町代も外程には腰かゞめず。髪結もおそくまはり心掛りの事どもいと口惜。物見花見にも友はかはらずさそへど何とやらかた身すぼりて。覺たる世間咄しさへひかへておのづから人のまじはりうとし。此家質置時より何して濟すべき分別なしに借ければ。程なく利銀ひとつ書込手形仕替て年をかさねしうちに。賣出しも殘らぬ程に成て其切を過れば借主より催促せられ。埒のあかぬ事に幾度か町内へやかましき事を聞すれば。宿前はいとしやと悔みし年比別して語りし人も。後にはうとみて借かたのせりたつるやうに內證いひて。是非なく家を渡せば老母ひとしほなげきて。此町に井戸のひとつもない時より此屋敷を求めて。二代も手のかゝらぬやうにとてみさまとて腰をかゞめさせ。茶事の座ふしなしの六寸角此年まで此大黒柱に敷へも三番とさがらずつれあいの影にもたれかゝつて水もらひにくる者にかて人にもてはやされしに。ひとりもひ

とりからと忰子が一心わかきゆへ。今となつて穴のはたを眈かゝり。葬礼は此家から花をふらしてうき世のかどで。中戸の上の高いは玉の輿の自由に出るやうにと。こんな事まで氣を付てをかれし所を別るゝ事のかなしやと。明藏を詠めしやくし掛を引はなち。庭に豊後梅の花落比なるに。是もうらめしそふに毎年五月には三斗四五升も取けるに。思へば惜やと枝／＼をたゝきおとし此木我なみだ枯いかしと。無理なるしかた女心には道理千万といへり。さぞ離れがたき心底思ひやられし一子覺悟のあしさにかゝるうきめを見せける。しかし人の身体智恵才覺にもよらず其まはりあはせにて。其家たゝむ時は他國して二たびかせぎ出し。古里に歸り妻にも錦をかざらせてこそ本望なり。女房に心ひかれ其所にて指をさゝれ幽なる住ゐするは人間にはあらず。其比大坂の西濱にて商賣せし人数年おろかなく。渡世大事にせしにさま／＼ふりかへてもおもはしからず。いまだ此身無事のうち遠國に立越。身過なるべき所を見立老の樂しみは金銀成と思ひ極めて行に。中國路は上かたにちかければ諸事都に替る事なし。四國のうちもおもはしからず九ヶ國のうちを殘らず廻りて薩摩の國の城下につきしが。長／＼の路錢につきて旅寢の宿を借べきたよりもなく。和泉屋町大小路といふ所は船着に近く。何時によらず米味噌塩を賣ために。ともしび家家にいまだ寢ぬ宿も有。せめて餅屋をたづね門の戸をたゝき餅買といふ。夫婦ながら今ねたと聞えて鼠のあるゝを追まはしけるが。かゝが聞付て餅はいくらがのといふ。五文がの賣てくだされといふ。亭主が聲して寢からは五文や十ゑがのは賣ぬとて其跡は返事もせず。扨も此所かせぎて見たき湊也。五文が餅を賣ぬからは商事のありあまると見へたりと。身上爰に極めて一日暮しに年をかさね。わづかの油賣より質仕出して次第に家榮へ。是と申も佛神の御めぐみ成と信心ふかく。田の浦といふ所に祇園の立せ給ふ是に日參して祈ぬ。此濱の氣色諸木岩組常に替りて古代より仙家有と云傳へり。ある夕暮に參詣けるに十四五成艶女の近寄懐よりふるき絹一卷取出し。母を養ふたよりにいたせば是何程に成共求て給はれと云。心ざしふびんにそれまでもなしと折節有合の銀廿匁あまり渡せば。只は申請じと是非絹を置て歸る。然れば取て戻り見る人に見せければ是小蔓といふ唐織世に稀と云。其後彼女の許を

尋ね返しに行どしれ難し。扨は祇園女御のあたへ給ひし果報とて。都の人に黄金八十枚に代なしてより。次第に分限と成子四人それ／＼に棟を並べ。世渡りは雫も洒ぬ油屋と家名共隠なし。財寶の外隠居分とて有銀三千貫目。大坂より爰に來ての住家人皆見および其身一代のはたらき。是町人の鑑ぞかし殊更正直を本としてする／＼目出度はそなはりし仕合なり。是を思へば商の道をしれる人のうか／＼と身を持くづし。びんぼう神とあい住して世を果る事人の本意にはあらず合点して見給へ

三 いまが世のくすの木分限

吉田の兼好がひかし隣に同じ北面の侍ひ。榎木原信道といへる人屋形ならべて住ける。いかに禁裏の役人なればとて五十余歳まで錢に文字ある裏表をも見しらず。然れば短尺の上下をも覺えす。公家にも俗にもならず男。明暮碁に打入て三百六十日の立事をわすれ。大年の晦日には借錢に乞たてられ。其時代も覺悟わるき人の迷惑今の世に替る事なし。留守つかふて戸をたゝかれたるあり様。松など灯連て夜の明るまで酒屋で御座るといふ声せはしき人の心を書殘せり。又武藏坊弁慶が馬大豆八斗の借状尼崎にあり。伊勢三郎義盛が嵯峨の百性に五百貫の借手形もあり。これらは義經につかへて然も弁慶は祿重けれども無用の七道具をこしらへて身躰ならず。義盛は始末して手前のよろしきといへり。世に貧福の二ッは是非なし。昔日京に吉文字屋といふ家ひさしき手代二人。数年親かたのためにわたくしなく内外ともに勤めければ。主人にそなはる仕合とはいひながら。此二人がはたらきゆへ。有銀壱万貫目と惣勘定を仕立正月初帳に移し見せける。親かたも兼ての願ひ一万貫目に叶へば此うへに望みなしと。身のよろこびをなしてけふより諸事をつぎの手代にわたさせ。先兩人は別家を持せ一日替りに出入奉公と定め。よき所家屋敷普請までして銀弐百貫目づゝとらせ。兩方ともに兩替見せを出しける。元より道をしりたる事なれば借人の取まはし。小判の買込錢の賣置一りんもそんずるといふ事なく。年／＼分限になる事共身才覺ばかりにあらず。是皆旦那より望姓もらひしゆへなり。一人はいまだ十ヶ年の立ぬ内にはや五百貫の身体になりぬ。又壱人は親かたに渡されし弐百貫目今に延ず。やう／＼渡世をして暮しぬ。此兩人の内證を聞合せ同じ銀子を請取ても手まはしによつて

あのよく成物ぞと。指ざしせぬばかり手代中間にて沙汰しける。親かた此事を聞付て何か愚智のおのれら身すぎにかしこき者の事を評判いたしけるぞ。あれなればこそ今に本銀へらさす世をわたりぬ。其子細は我世になつて此かた仕合つゞきて一ッもさはる事なし。又壱人は世帯持て其としより人の氣つかぬ物入相つゞき迷惑しける。何のかんがへもなく人の身上を沙汰いたす事。おのれらが了簡のおよふ所にあらず。此もの女房の頼みをやりける宵よりあら氣のどくや。宜早いかほどかせぎたり共銀も延まじと高ぐゝりにおもひし也。なんぢらも知るごとく舅は八百貫目と世間にさしたる分限者也。娘は年わかくしかも町でも沙汰する程の器量よし。われしらずの物入有とはあたまからしれたり。舅は年中壱分の利相にしても八拾貫目の男なり。聟は漸弐拾貫目たとへば大勢の敵を。小勢にてふせぐに勝理を得る事はなし。つゐにはおひたをさるべき事なれど。楠にもおとるまじき商ひの軍法者なればこそ。いまだ本銀にて城槨を堅めけるはよ

き大將ならずやといはれけり。手代どもも聞て寔一生に一万貫目の身体となられける。天晴よき大將智有仁有勇有と。みな／＼たのもしく奉公を勤めける

〔四〕塩うりの樂すけ

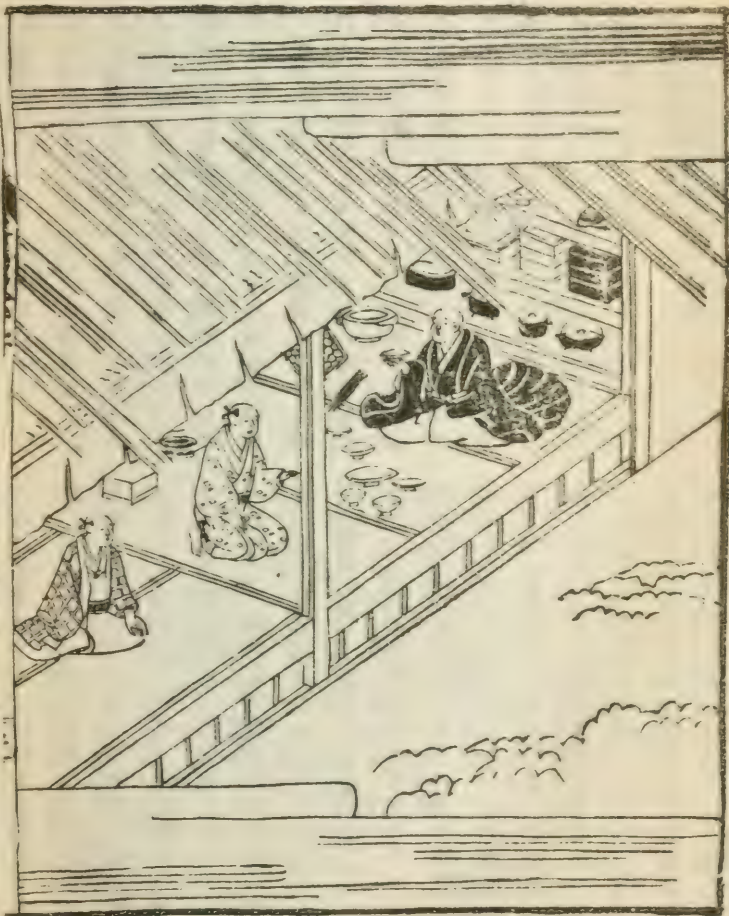
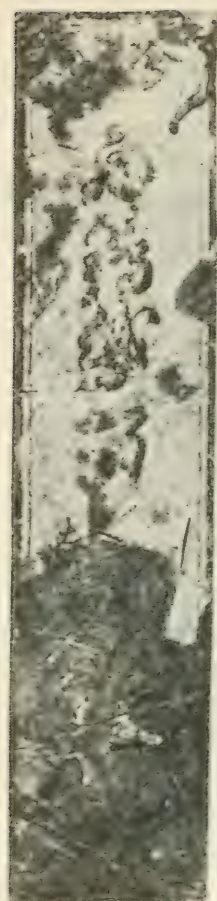
粟田口神明の宮のほとりに。軒端に手のとゞく笹齋の庵をむすび。夫婦すみ侘て六十余歳まで子のなきものゝゆくするのかなしさは。女房は男の手業の沓を作りて窓のくれ竹に結添。大津にかよふ馬かたに賣て渡世のたよりとなしぬ。男は毎日京に行て計塩を商賣してやう／＼けふを暮し明日の身のうへをかまはず。宿に歸れば栗栖野小野の萩柴を折くべて。山科の里芋に勸修寺のせんし茶して。樂しみ是に極めて世にある人の榮花もうらやむ事なく。只年中を夢のごとく正月に餅もつかず盆に鯖もすはらず九月の節句もかつけども栗菊酒の用意もせず。取集ある掛銀もなく人に済する借錢もあらず。扨もかろき身体外より見てのくるしみ内證の樂介各別ぞかし。折ふしは九月八日我

人物前とて足音つねとは替り。被きたる御所染すがたの京女蔦も。とりなりかまはず道いそがしき世間はゞかりなく。中立賣の中程にいづれの御服所とはしらず。表口拾五六立つゞきたる家普請けふ棟あげの祝義とて。幕うちまはして金屏毛氈色をあらそひ。庭には樽肴持つどひて帳付隙もなく臺所の役人それ／＼にうけたまはり。一門の女中花をかざり面客は松竹の嶋臺まはして酒宴はじまり。さま／＼の藝づくしいづれも七盃機嫌の大笑ひやむ事なし。番匠は烏帽子裝束をあらためて。白幣をかざし鬼門よける弓矢をそなへ。拍子をそろへて棟の槌をうちそめ万歳樂と言葉をかさね。五百八十の餅を蒔ば是を拾ふ人大道もせばかりき。立とゞまりて見る人どにかゝる作事をして世をわたるこそ長者なれ。あのごくして子孫に渡したき願ひなきは一人もなし。財寶に望みなき人は何となくうち詠めて通りぬ。立とまる程の人は皆人のたからをかぞへて。殊更内藏に目を付けるは何の用にも立ぬ欲なり。此あるじも二十年以前までは挑灯のはりがへして。火ふくちからもなかりしが何から分限にならぬといふ事なし。すこしの事に氣をつけて澁油にきらを引て。雨夜のちやうちんといふをはじめて今七千貫目持と世間のさしづに違ひなし。おさかきたごの手せし人にもあらねば。都にもむかしは大かたに吟味して歴々の緣組せし事いふもくとけとも菟角世は銀のひかりぞかし。彼塩賣ばかりは家作りの望みもなく。よき声して小哥にひやうし踊をおもしろくしばらく眈て。見物皆／＼立のきける時奥嶋のさいふを拾ひあげて。是おとしたるぬしはなきかといへば。年の比五十あまりの法師の人我おとしけるにもらかし給へといふ。成程返し申べししかしうたがふにはあらねど中には何か入けるぞといふ。こまがね百目ばかりありといふ。塩賣大きに眼色かへて年にこそよれ扨もさもしき心底なり。中は金子なれば其方の物にはあらず。是おとしたる人我宿にたつね給へとまぎれなく所をふれて歸りぬ。その夜室町通西行櫻の町菱屋といふ絹屋の手代たづねて。小判百弐拾兩西國問屋より請取。主人の手前迷惑仕る段々とはり申せば。百弐拾兩との書付に相違なしとて何のおしげもなふくれける。手代泪を流しよろこぶ事のかぎりもなく。外の手にわたらばよもや我には歸るまじ。すぐに欠落の身を二たび京都に歸る祝義とてそのうち小判五兩礼物に置けれ

ば。塩賣中〳〵是を請ず是は其方の金子にあらず。主人の物を我にわけらるゝゆへなし。申請る事思ひもよらずとたび〳〵返せば是非なく取て京に歸りぬ。此手代其恩をわすれずしてそれより後は。雨風雪の日の難義塩賣京に出かねる日は人を頼み置。定まつて塩を二斗づゝ買につかはしければ。塩屋は天のあたへとよろこび彼手代がはたらきとはしらずしてすぎぬ。厚恩をわすれぬ心から手代も其後は我世の仕合継きて。近年書繪小袖を仕出し俄分限となりぬ。其比又上京に隱もなき名醫の有けるが。名人はかならず氣ずいにして御所方への御出入をむつかしと。是も粟田口に引込靜なる片原町に物好の生垣奥ぶかに住なし。爰も東海道なれば諸大名の下上りにも王城の忝さは高腰かけて鼻哥うたへど誰とがむる事もなし。此法師有時夕立しての後。下駄はきながら我門に立て遠見せられしが。彼塩賣夕ぐれに京より歸るをみて。内ににげ入給ふをおの〳〵不思義を立。あの塩賣などに何としておそれ給ふぞと尋ければ。あれは今の世の聖人なり聖人にあしだはきながら對面するもおそれあり。又ちかづきならねば下駄ぬぐまでもなし。とかく御目にかゝらぬがよいと申さるゝ程に。あのものを聖人とはいかなる事ぞといへば。それをしらずや今の世金子を拾ふてかへす事がそもや〳〵廣い洛中洛外にも又あるまじ。是程の聖人唐土も見ぬ事と仰られける程に。いづれも尤と合点して此塩うりにおそれ侍るとなり

五 當流のものずき

名利の千金は頂を摩るよりもやすく。善根の半銭は爪を離すよりも難し。されば今の世の萬人身過の家業是さかんの時。諸事をうちばにかまへ利欲を捨心に成けるは。近年世間に佛道を聞入自然と氣力うさつて。只當分の暮しをたのしみする〳〵の事までの願ひはなかりき。此心底からは富貴になるべき子細なし。福徳祈る商人の家に世の無常を觀じ人のなげきにかまふ事なかれ。商賣に付ての僞りは言葉をかざり。跡からはげる塗物店江戸に軒をつゞけ門をならべし中に。大森小川此兩見せはすぐれて諸道具念を入る事聞傳へて。其家名次第に榮へける。そも〳〵小川屋のあるじ正直を本としてわづかの世わたりなりしにはんじやうに成けるはじめは。正月に閏のある年元日に大雪降て。通り筋人馬のかよひ絶るほどのあけぼのに。大釜に湯を沸して我

門の字を削して。慈悲の道をすこしの間なれども付置けるに。往来の人愛におのづから立とまりて。年玉の遣ひ物火箸燗鍋までに餅あぶり網など。買よる人蓬莱の山をなして一日五十兩あまりが常座賣まとに天下の入込なれば近付の外人間も貞にならず。其夕暮に五十ばかりの法師麻の衣の袖まくり手して。竹箒を内行椽きに雪打はらひ彼店下に立寄。盃ひとつ望みのよしいひける程に色々取出して見せける。此御坊酒好と見えてさかづきちいさきをなげき。我常住のたのしみに是を呑より外はなし。むかし上戸のみつくさぬとて名を付し武蔵野といふ大盃はないかといふ二合入につもりたる盃を見せけるに。いづれを見ても蒔繪に菊水立田川又は伊勢ゑび是らは目にしみてふるし。新しき仕出しもあるに當流の物好なるを見せよといふ。手代あぐみて　の盃なしといはれんも口惜さに。切子の灯籠上に釣下に節季は爰をせんと舞扨もしれたる御坊かな。漸盃一枚賣とていかい手間入なれと。此見せに望所を高蒔繪にしたるを見せければ。法

師うなづきて機嫌なり。法師のいはく
それがしは唐土潯陽の江に住猩々也今
此朝に化身せり。わがたよる所は必
家さかへ繁昌するぞかしと云捨て立帰
るを。手代まことしからずおもひて忍び
てしたひみれば。築地の邊りにわづか
成庵をむすびおこなひすましたる道心
者也。先猩々の事は僞にしてから此坊
主の言葉少しもたがはぬは。亭主正直
なるを天のめぐみ給へると見へたり

西鶴織留世の人心

目録　三

〔三〕色も当座の無分別

三条借しおる貴月志てぞ

かれは河内のこりぬ

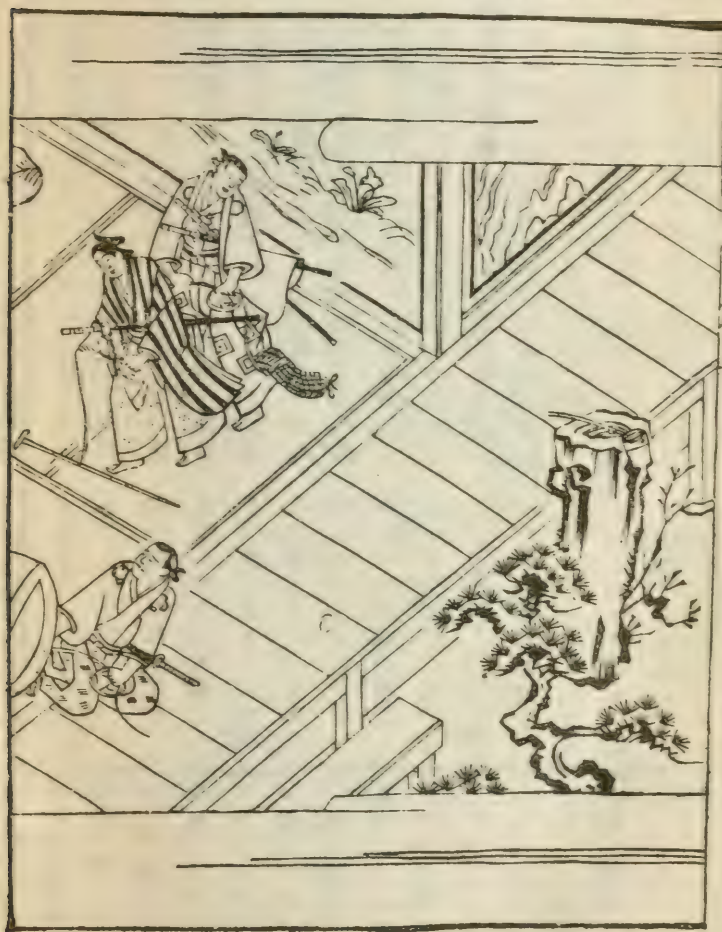
〔四〕何となく色知恵に振舞

無年流れのさうこた男

猫の飯たもくぐり

（一）引手になびく狸祖母

御代ちとせ山松は古今不易の名木。春の風しづかにして四つの海に立波もなく。今本朝の風俗しだゆづり葉を賣山賤。ほだはら數の子を賣海人までも。其心ざし皆和哥になつて八百日行濱の眞砂はつきぬ道廣く。かゝるゆたかなる時世に住める萬人仕合ぞかし。されば近年人のありさまを見るにいづれか愚かなるはひとりもなし。むかしは十人寄れば皆物毎にうとく。我身の上の事斗も埒明る者稀なり。ましてや人の事請取出入の噯ひ又は內談などに。言葉ならへて物よくいふ人もなし。殊更公事だくみして筋なき事を書求め。相手に迷惑いたさせ我利欲にする事思ひもよらず。自然と義理につまれる云分にも一ッ〳〵ありのまゝに書付る筆者は五町七丁のうちにもなき事なりしに。今時は物かゝぬといふ男はなく何事にても外の知惠をからす面〳〵に諸事を濟さぬといふ事なし。是ゆへ惡心も思ひ付人の難義をかへり見ず。商賣あるひは借銀の事までも我非分とはわきまへながら。云事の種をこしらへ油斷のならぬ人ごゝろや。以前は借請たる金銀などにとかふの出入する事なし。子細はそれ〳〵の家業に付一商ひすればかならず利德を得る事を見極め。此質のために其分際相應に借て。思ひ入の商賣の後其まゝ元利そろへ濟しける。此程の人は何の分別もせずはじめから相濟する合点なく。奢の心より遊興所へつかひ捨る銀にかりければ此かねの出所なし。然れば借かたに難儀をかけ云事の種を作りぬ。此善惡明白に御掟あればこそおそれて我まゝいふ事なし。たとへばいかなる惡知惠をもつてとやかくいへるにして。借たる物一たびは取ずにをく事なし。是をおもふに元日の祝義しまひ袴ぬぐといなや。又くるとしの大晦日も月日の立は今の事としばしもわするゝ事なかれ。世に何がこはいぞといふに酒の醉も道をよければ別の事なし。氣ちがひのぬきたる脇指にてあやまちをせぬ物なり。夜道ありかねば追はぎにもあはず。おもひの外なる欲をはなれければかたりにもあはぬものなり。皆人ゝの覺悟にある事の中にも。第一身体を持崩して借錢こはるゝほどおそろしくかなしき物此外に又なし。さても〳〵うたての世や身過に仕合ありて屋造も人がましくせし人のいへることはすいぶんと愚なる事にても人皆耳をすまして聞屆

け。又手前淺間敷なりくだりたる人の一言に。利のせまりたる事を申にも誰か聞入ける人なく。萬につけて口惜き事のみ心にもなき事にうたがはれぬ。世を富貴に暮せし人は人の金銀取乱せしほとりへも何心なく居ながれ。又貧者は我と身を引てわづか成乱錢のそばへも寄かね心にやるせなかりし。何程りちぎに生れ付てもまづしき人には先より油斷せずして。手元に有合ける小道具なども目に見えて取直しけるこの下心のはづかし。申ても〳〵貧にしてうき世に住める甲斐なし。いかなる前生の約束にて貧福のふたつ有。福者はまねかずして德來り貧者は願ふにそんかさなり。さりとてはまゝならぬ世上沙汰見るに付聞に付うとまし。其身仕合は町人にかぎらず武家にありける事そかし。さる大名がたに御吉例とて正月三日の夜。大書院にて家久しき者ばかりめしよせられ寳引を仰付られける。ふすま障子の内より五色の長緒を数百筋なげ出して。手毎に一筋づゝ引取此緒のすゑに付置れし物をくだされける。小庭引出す繩に桑の木の鐘木

杖おかし。家老職の人引出す繩に銀錢一貫文。あるひは唐織の巻物を引出すも有。又は御物こしらへの脇ざしかたはしには春臼のふるきに取あたるも有。提重箱なぎなた印籠きんちやく日傘。純子の夜着ふとんふりしやくしを取も有。知行取は黄金に引當。茶道坊主はからざけ壱本のぬしに成。よこめ役の人に自然と目がねのあたるもおかし。ひとり〳〵の果報を見るに。かろき者の重き物に取合けるは一人もなかりき。爰に嘉例の年男とて八十六歳になれる人手をひかれてとぶきを勤めけるが。我も物の數とて人まかせに取てくれたる繩を引出しけるに。奥上﨟の中にも梅垣どのと申て都より吟味をあそはしおかせられたる。大ふり袖をくだされ是は〳〵と興をさましける。又男盛の出頭人然も色を好みけるが。人の手の繩より取にしてさま〳〵觀念して引たぐりければ。大殿様の時さへ古狸と名に呼し百三ッになる祖母を引出せば。一度に春のはしめの大笑ひ有て御機嫌の上嶋臺の酒事万歳樂とぞうたひける

二 藝者は人をそしりの種

諸藝を鍛練する事それ〴〵の家業の外は。ふかう其道に入る事なかれと古人の言葉ひとつもたがふ事なし。唐土の鄒燕といふ人篳篥に五十年來の心をつくし。七十余歳にして妙を得たり。六月に冬の調子をふきて庭前に霜をふらし。萬人此音律に目をよろこばしける。かくのごとく學び得て程なう世をさりしに。身の一大事の覺悟もなく子孫に傳へ難くわづかの遊樂何の益なし。此外左慈道人我朝の果心居士これらが伎術の法は乱のもとひ。年月しゆれんして何か世のたすけ身のためにもならず。人間の第一は筆道執行の後學文の外なし。今の世の人心分限相應より高うとまり。鞠場の柳陰に日を暮し九損一徳に早足がきけばとて別の事なし。闇き夜は挑灯もたせて靜に行ば溝へはまらぬ物也。殊更楊弓宮女の業なり。いかにしても大男の慰み事にはぬるし。なをまた諸職人の鎚鋸を持たる手には似合ず。よし又百筋ながら當りあるひは大金書の看板に付てから何。此矢自然の時の用に立せめて盗人を射とめるにもあらず。肴引猫にあてゝも更におとろく事なし。十炷香はいよ〳〵福徳そなはれる隙人の花車あそび。是聞分る鼻にて食のこげるを聞出し。釜の下の薪をひかすれば始末の種にも成そかし。茶の湯は道具にたよれは中〳〵貧者の成がたし。万事あるにまかせて侘たるをよしといひ傳へり。是利休の言葉にもせよ貧家にてはおもしろからず。そのたりたる宿にして物好をさびたるかまへにいたせる事そかし。しかじ世に住めるからは功者の中程に居て人並に呑ほどの事は知るべし。又能はやし乱道成寺まで傳受して。其身太夫に望みなく素人藝には用なし。耳ちかきこうたひ覺えて近所の祝言ぶるまひの間にあはすれば濟事なり。地狂言は子とも時也髭のはへたる口から罷出たる者は大いうつけの沙汰して見る人汗をかきけるに。此男の母親はかり譽ける。立花は宮御門跡がたの御手業なり。野邊遠き四季の草花品〳〵を見給はぬ人のために。深山木の松柏しば人の手にかゝるを集めてあそばされしに。近年いつれも奢る心よりもときを引切。灵地の荷葉を折せ神山の椙をとりよせ。我まゝのふるまひ草木心なきにしもあらず。花のうらみも深かるへし是只一日の詠め世の費なり。扨又小商人の碁將棊侍の三味線

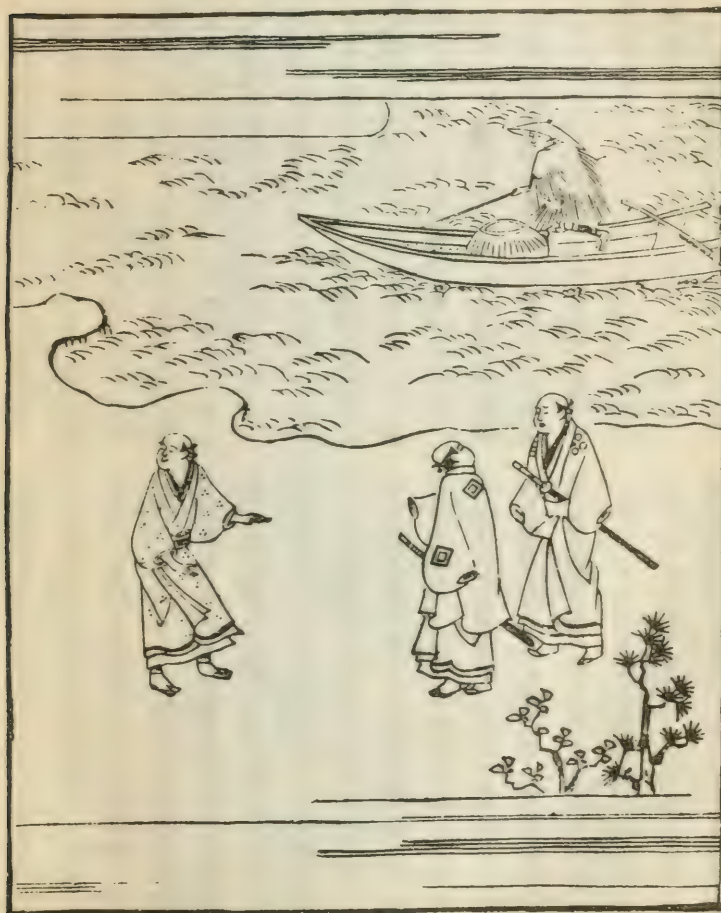
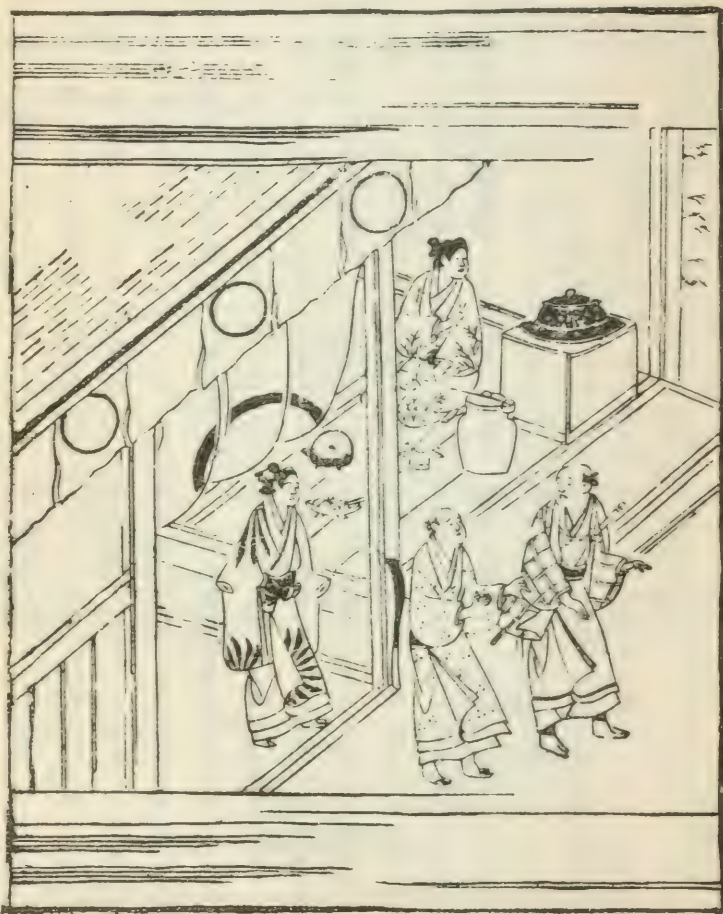
町人の兵法。出家の浄留利百性の諸礼がた。是皆よしなし世間に此類あまた有。されば和歌は和朝の風俗にしてうくひす蛙までも其声其すがたなり。いはんや生ある人の此心ざしなくて有へからす。時に連歌の掟をゆるかせにして俳諧といふもこれ哥道の一躰なり。むかしは世を隙になす人あるひは神主又は武士のもてあそびにして有けるを。ちかき年世上にはやり過人のめしつかひの小者下女までもいたさぬといふ事なし。惣して藝事するへ〱の手に渡りて捨れるためし有。昔日の俳諧師は哥書を大かたに見わたり。道しる人に礼式を習ひ貴人法体の下座に付。諸事宗匠の下知にまかせて心にまとあれは自然と神慮に叶ひぬ。いつれの連衆にてもよろしき付句をいたされし時は。座中肝にめいじ我をおぼえす同音に誉て。持扇のはしに書付好る人に是を聞せける。また点取の巻してつかはしけるに。其比の点者は百韵一句〱聞かたを脇書にして明白也。又作者も俳道のわきまへあつて。すこしのさし合同字見おとしの吟味をとげて。たが

ひの執行になしぬ。今時の点者といふをみればきのふまて馬は生類になりまする。牛は闇に二句嫌ふかとたつね。はなひ草口から四枚も覺へぬ者が。菓子袋に押やう成印判をこしらへ軒号にびくりさせ。一句一錢の点取に讀ぬ所は評書なしに付墨し。鹿のうちこし紅葉鳥をしらず。有馬の湯は水邊に成事も。鵙は俳諧やら烏は連歌やら。何をひとつも聞分る事なし。作者唐人なればこそ其まゝに濟事なれ。此点者に成て諸國に名をしらるゝ程の人は先廿年をへて八百八品のさし合を中に覺へ。是より見合文臺に當座の了簡かぎりなき物ぞかし。かりそめながら此程の宗匠達せめて席振成とも見習ひ給へ。此僞りの心からは住吉へ參詣し給ふとも。神は見通しないぢんからまことなき俳諧師がまいつたと御皃をふらせ給ひて請たまふまじ。此時の一座見るにたとへよき句をいたしても氣に入らぬ皃つきして居はをのれがよろしからぬ句をいたせる時のためなり。扨下座より宗匠をさしをき平連衆よりさし合の吟味是法になき事なりつら〱おもふに点者愚にして德のなきゆへなり。作者の貧福にかまはずまことをさばくをまことの宗匠なり。まことに和哥のはしくれなる俳諧さへかくすたりゆけば。ましてや外の諸藝の師匠も是になぞらへてしるべし。さりとてはかしこ過て今うたての人心にはなれり

三　色は當座の無分別

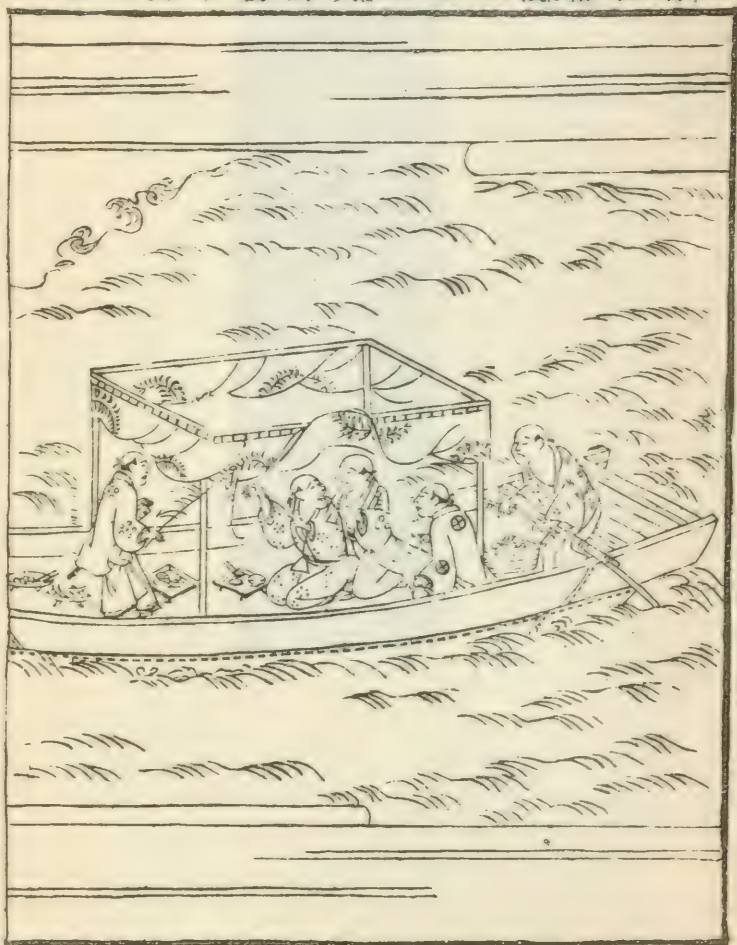
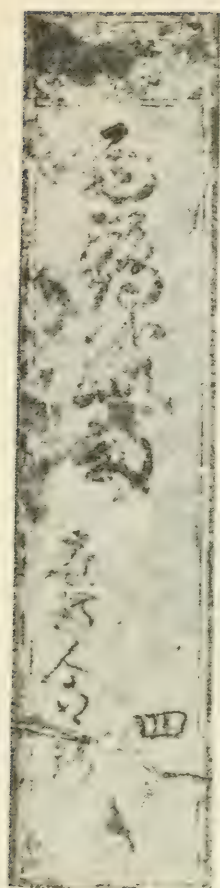
人間一日の遊樂あけぼのに生じ夕に死すおもへば夢のかり枕よろづに心を移す中にも。遊君のたはふれは和漢に古今やむ事なし。楓橋の夜泊に客絶えず琵琶かきならして唐人哥をきけば。和朝の色里都の嶋原にうたふなげふしに同じ。死なざやむまいと聞しがいづれ生て息の通ふうちは。中〱人の異見我分別にても留り難し。諸國其所〱の遊女にほだされ身体をつぶしさま〱の難義にあへるを。眼前に見およぶ事其数限りもなし。かゝる事皆人の身の上のやうに覺へて。一日暮しに遊びて有程はからりちんとなし。からるゝ程は借集めてつかひ捨。跡へも先へもうごかぬ時石車を銀にしてほしやと願ふに思ひばかゆかずして。自然ととまらねばならぬ首尾になつて彼里がよひをやめける。其時は男の魂ゐといふ脇指一腰もなくて。物の見事に身を丸腰にておさめけるもおかし。されば人間一生のうちに一たびは傾城くるひに取乱さぬといふ事ひとりなし。何とぞ

おもしろき中程にて神佛の御ひかへあつて。この遊興をやめさせ給へば居宅も賣殘し。商賣物も小缽にして渡世に取つゞき身を捨てはたらきければ。町內世間の人親類のすゑぐ\までも今迄は若氣と了簡してゆるしぬ。人としてつゝしむべきは此道今更いふまでもなし。むかしかしこき親仁達が諸書に此事を殘しぬ。其比難波の津に二代つゞきて隱れなき人銀が銀をもうけし兩替見せを出して。ひとつも替つたる事にかゝらず仕付たる家業ばかりして段々に分限に成て所のよき大屋敷とも求めて。此宿賃ばかり三十貫目一年に取て。大和のうちに慥成田地を買置此さくとく壹年に八十石おさめ。財寶有銀三千貫目惣領に相渡し。すゑぐ\の兄弟は世間に笑はぬ程に身体をわけとらせよと。書置は一枚にして此親仁は相果られたり。此跡取親の心ざしにまさりて萬にしはき生れ付。五歳の春着初の袴を我手にかけて皺延しておもふまゝに疊置。玉ふりぐ\の箔のはぐるを惜み紙に包てこしける。是より親もあんどして一生身を持そこなふ者にあらずと。手代どもにすゑぐ\たのもしくいひ渡されしに。いよぐ\十七八の比世の人に替りて菟角外へまじはる事なく。義理をかきてこまかなる算用ばかりして暮せば。大勢のめしつかふ者も一日物見遊山に出る事もなりがたく。晝夜商賣の事のみ油斷なく此家の長くおさまる事をよろこびける。されば世の人心何時となく替り行定め難し。此跡取二十一の年までつゐに色の道をしらず只一日の慰みには金箱の数を內藏に入てよみあそびしに有時草履取あがりの若い者折ぐ\の氣のばしに蜆川にあそび巾着銀をつかふと聞て。其茶屋にたづねゆき吟味仕出してきぐ\しく異見して。當座に暇出すといへば此若い者面目うしないてにげて歸りし跡に。此旦那を引とゞめお首尾はともあれ酒代をかずに御ざりましたこなたさまより申請るといふにぞ迷惑して。此座敷其まゝは立難くなりて。迚も銀出すからは只歸るは一代のそんと分別極めて此男。はじめて分ある女の手におもしろき物といふ事覺へ。是より毎日かよふ程に出合がしらに貧なる太皷が付て。風呂屋者をすゝめ是もさもしき所ありとて。をし出して十五女良を買初又格別とおもふ時。禿のもめん布子目にしみ又はゑりあかの付たる衣裳も。後には氣の付折ふし天職のゆたかなる道中を見て。又是に心を移し次第に奢つきて。人も名をしる程の買手になればは

や天神などまだるくなつて。太夫職になしみて此道にしやれるほど揚屋の下〳〵までも。かゆき所へ手の行やうにぐはらり〳〵と嬉しがらせ。太夫を手に入自慢して外の男をせきて金銀の費をかまはず。無理なる口舌を仕出しても一度もまくるといふ事なし。世界廣しと申せども我にはりあふ買手あらばおそらくはいせゐくらべ。今日から十万日にても慥に請取此大じん。今の世の御の字の客其子細は。若ふて無事で銀を持て親がなふて其身利發でしわふなふて。情がふかふて酒のまいで一年中隙で何がひとつふそくなし。揚銭は先銀わたして買ますする。女良さまは斷りなしに毎日なりとも御出なさるゝ。御內證の御用は何程にても是の內義に申付ておきまする。外の太夫達は師走の廿四五日比まて正月の男のない事をかなしみ。迚も物にならぬ男のかたへまで讀ば泪のこぼるゝ程の文やられしに。そんな事はひとつもくにせず。皆我に打まかせいそがぬ事を冬から來年の盆の踊ゆかたを染させ。菊の節句の袷のもやうまで御申付なさるゝを御好

みの通り京都へ申つかはしける。是程たしかなる客には眠たくと目を明て別れ惜む良をなされたがよし。かゝも酒の吟味してのまされてとがにはならぬ事。亭主もすこしは氣をつけて寒のうちに鰌の焼物是は八九月の比はしりを喰て世にふるし。しやくしであてがはるゝ客とは違ふべし。追付分散と見えすきたる人の紋日に出ようといふを宿屋御無用と留て。酒吸物を喰れそんにして歸し給ふ人と同じ口には迷惑なり。又女良も家質置て借たる銀で節季拂ひを仕てもらひ給ふも心のようはない事。隨分たらして取給へ誰におそれず此里の銀を千貫目にても。我宿で拂ふ大じんは我等が外には御座るまいと。おもふまゝなる事をいふにも銀がかたきの世わたり。皆御尤にしてうけたまはりしに。此道に奢ればはかのゆく物かな。十四五年見およぶうちにい笑ひしが今身の上は長町にかげかくかな／＼百錢も殘らず。是程まではよし。花火せんかうして朝夕の煙ほそくうも／＼つかひ捨ける。むかしは人をひとりの母に手なれぬ賃綿をくらし妹

はわけもなき所へ奉公に出し。取替銀をうれしくしのび／＼にはし女良ぐるひして。夜見せ過て霜月の比よし原町の五分女に。居之介といふつぼねに火鉢移りに人の見しるもかまはず。我もむかしは日に一筋づゝ下帯かきかへたる男。今古妻もめんもはづかしからず人はしれぬものよ。あなづり給ふなとたはふれける。ひとつの心から女良買のなれの果此男ばかりにはかぎらず

四　何にても知恵の振賣

大海の底に尾閭といふ穴あり。諸川の水日々夜々に入れども彼穴のうちにて失するがゆへに増事さらになし。人間にひとつの口あり此尾閭のごとし。一生のうち朝夕喰物かぎりもなし。身過は八百八品それ／＼にそなはりし家職に油断する事なかれ。今時は正直をもつて其身の骨をくたけば。天理に叶ひそれ／＼の渡世いたさぬといふ事なし。惣じて諸國の城下又は入舟の湊などは人の足手かげにて。さま／＼すぎわひの種もあるぞかし。されば山城の伏見の里は七八十年も見およびしに。通り筋の脇／＼はむかしはんじやうの時の町並殘りて。次第／＼に物の淋しくなりて何商賣するともしれず。年月をおくるもの其数しれず。是をおもふに千軒あれば友過ぞかし。近年は人の心さかしうなつて大かたのはたらきにては中／＼身過に成難し。すぎし年の師走に竈の上塗を仕にまはるを。手まはしのよき事と思ひしに。又としの暮には達者なる男が釜みがきにありきける。大釜五匁其外は大小によらず弐文づゝ也。又餅米あらひ賃壱斗弐文にて埒の明事。手前に人をもたぬ者は勝手よし。また表具屋の隙なる細工人と見えて。定木竹べらはけ糊迄を持て。お座敷の腰張一間を壱匁。あかり障子一枚二匁何行灯にても壱匁にてさうぢまでいたしける。年徳棚を買ければ釣木釘まで持きたりて。ゑ方をあらため釣て歸りぬ。何にても自由なる世時になりける。是等は世帯の事にて中より下の人のためにもなりぬ。又五十ばかりの男風呂敷をかたにかけて。猫の蚤を取ましよと聲立てまはりける。隱居がたの手白三毛をかはゆがるゝ人取れとて頼まれけるに。一疋三匁づゝに極め名譽に取ける。先猫に湯をかけて洗ひぬれ身を其まゝ狼の皮につゝみてしばし抱きけるうちに。蚤どもぬれたる所をうたてがり。皆おふかみの皮に移りけるを大道へふるひ捨ける。是程の事にもそも／＼何としてか分別仕出し

身過の種とはなりぬ。今程諸人かしこく物云ずして合点する世の中に。年かまへなる男子細らしく小脇指に大巾着さげて皮立付を着て。何にはよらず世間に合点のゆかぬ事あらば問て見給へ。随分人の身上にむつかしき事の談合相手に成べしと口廣くいひまはりぬ。心有人は耳にも聞いれず大かたの人は肝つぶしていかなる虎落大明神のおとし子にてもあるらんとつら／＼良を詠めける。すぎにし秋の比三軒屋川口へ砂魚釣舟に出し人。酒に乱れて後釣たるはせを丸焼にして。数喰事を手がらにおの／＼あばれける中にも。殊更一疋一口にせし人俄に咽をくるしめける。是はいかにと見るに此砂魚の腹に二寸ばかりの糸付て釣針あるを咽に立さま／＼してもぬける事なく。此難義すべきやうなく船中轍三味線も鳴をやめて。つれ／＼に書残せし法師のあしかなへのごとく迷惑して。命もあぶなく宿に帰り醫師に見せてもはかどらず。とやかく内談する折ふし彼工夫者の通りける程に。此事をかたりければ是は即座にぬく事ぞとこまかなる珠数の玉

をときてかの糸へひとつ〱通しかけて。其後糸をしめてしづかにしやくりける程に何の子細もなくぬきける。いづれも此才覺をかんじける。其座に物云堪忍せぬ男の有けるが我等もすこし御無心有。近年商賣ひたりまへにて立所居所にてそん銀かさなり。此樣子大かた世間にも見および聞傳へて万事賣掛せねば。次第に手づまり此行先の節季何と分別いたしても。さし引筭用して弐拾貫目余もたらぬに極まりける。爰の談合相手に頼みたきといへば。女房衆の親もと分限か又は銀持の出家に弟はないかといふ。それはもちませぬといへば。此談合は埒が明ぬと申て歸りける

西鶴織留世の人心

目録 巳

一

家主殿の鼻柱

なにかの役の宿替

別まかなひげくせれの噂

二

命に掛の乞所

人を討る絵馬いしや坊

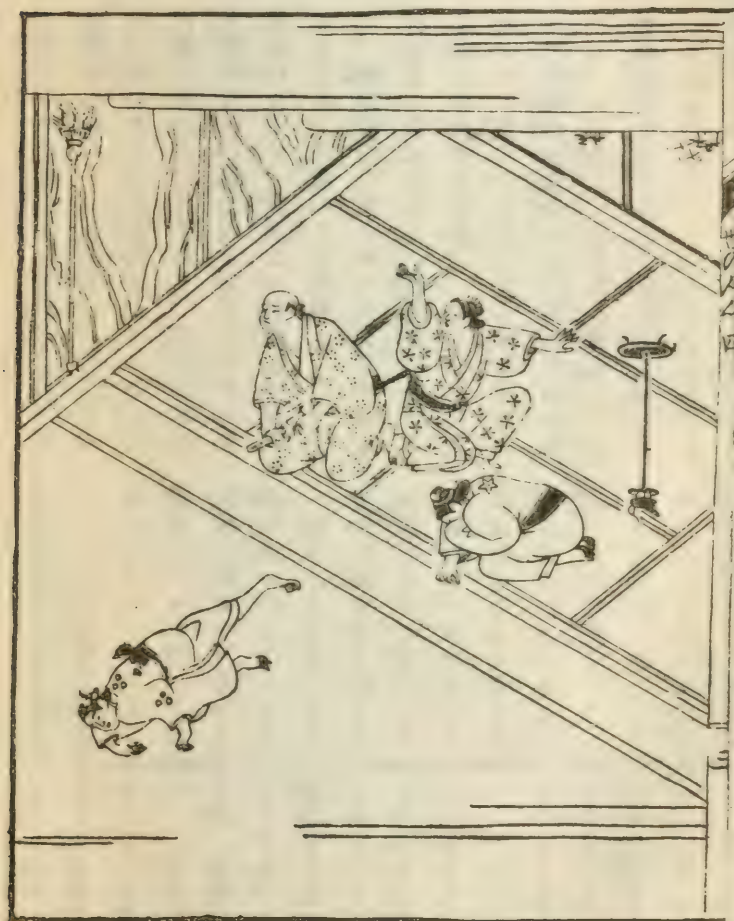
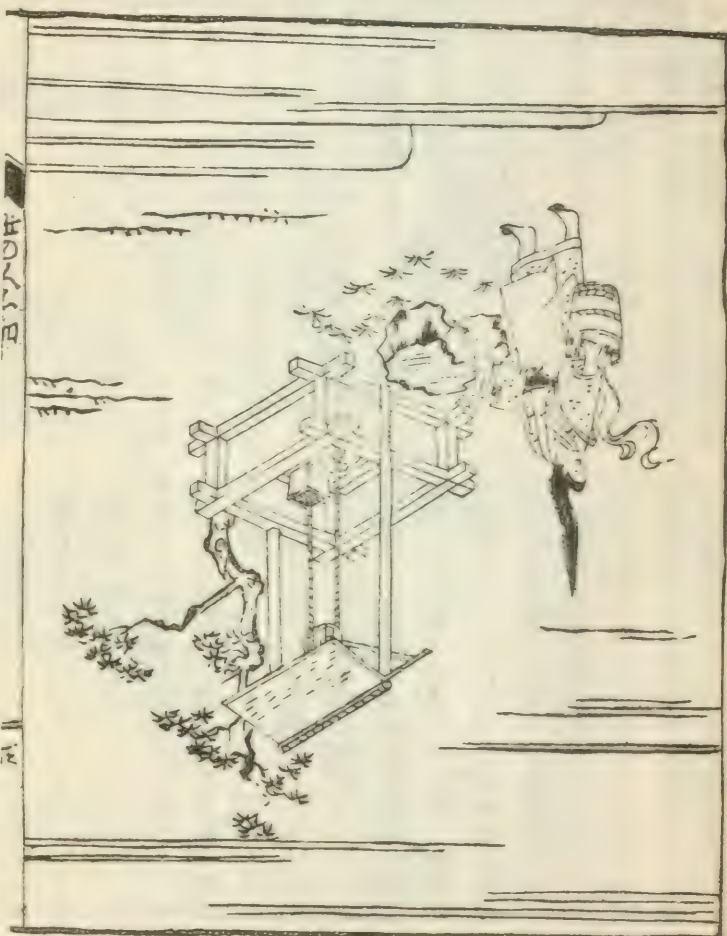
銭も人も子に業の無分別

三

諸国の人を見知る伊勢
あふ人まふ人此絡繹織
まさがりたる古跡の旅

[二] 家主殿の鼻ばしら

商人職人によらず住なれたる所を替る事なかれ石の上にも三年と俗言に傳へし。世帯道具の鍋釜ぬくもりもさめぬに。又宿替の荷物程見ぐるしき事なし。惣して類をもつて集り商賣見せも。二条通りに鮫木藥書物屋ありと諸國の人も見およひ。烏丸に烏帽子折は年ふりたる事にて伊勢神樂のくわんしん祢宜鹿嶋のことふれあたまにゑぼし被ほどの者はしらぬといふ事なく。ありきやうがり舞まひまでも入用の時は爰に行て是をとゝのへければ。聲なうて人をよびよせ居ながら渡世の種とぞ成ける。下京七条通りに小家をかりて春夏は女房に扇子を折せ秋のすゑより冬中は男手もみの紙子をこしらへ商ひけるに。六条まいりの道者國みやげに買調へ手前次第に榮へすこしの質を仕出しける時。隣あたりの茶呑物がたりに家主の内義の鼻は人にすぐれて。阿太子山の天狗の媒鳥に見立たと扇子やのかゝが笑われけると。其座より追従につげ口する人あつて屋ぬしの内義わめき出し。親の産付て置しやつた鼻なればおれがまゝにはならぬ。借屋中のかゝさま達にまかせます程に。何とぞいたまぬやうに皃のとりあひよく賴ますわたくしの鼻柱を遊女のごとく賣物にはいたさず。一代養ふて置男さへ堪忍して十九年添てゐますれば。外に別の事はないとおもふたに。どうした事に皆さまの御やつかいにはなりますぞ。菟角けふのうちによい程にとねたられけるに。いつれも是にめいわくして一日もお家のはしに居ますからはお主同前。お口が廣いといふも舌長な事。お足のひらたいもお着物を長ふめせば誰見付る事はなきに。日比口がすぎて〳〵と皆扇屋のかゝにゆづりければ。いよ〳〵内義は腹立して是あふきや殿。我等が鼻が高いによつてこなたのさげおだれへかまひまして。出入に難儀をしまする程に家を早〳〵明てくだされといふ。女房けら〳〵笑ひして是お内儀京は廣ふ御座る。家賃さへ月〳〵に濟しますれば雨ももらず鼻もたいていの所へ宿替ますといふ。是おかたむかしも鼻の高い人に末摘といふての后さまがあつたそなたかいやしい人で源氏物語を見やらぬによつて物の合点がゆかぬといふわたくしも内裏様の娘に生れましたれば御所車にも乘ますといふ。是輿車にのりつけぬ者は腰がおれます程に。そなたは桶屋の娘なれば親仁殿の手細工

の棺桶にのりやれといふ。いやありさまに人の先祖あらためてくだされいといふか。こなたも出雲の神主の頭のひとり子といはしやるが。何として貧な所へ縁はむすばしやつた。日本國の事さへ相應に取合給ふに神も意知のわるい事じや。世間にはようにたものが御座る此前嵯峨の筆屋といふ旅籠屋に天狗のこまんといふ人たらし女があつたか。どこやらの家持のお内義に生移しと見しらぬものはないが今は京のどこにか御座るぞと同し事ばかりいへば。内義上氣して此方の家さへあけてくださるれば云分する事も御座らぬと裏の戸はつしてかへられける。扇屋の男迷惑してをのれが口ゆへ住なれたる所を立のく事身体の沒落なり。爰は家主殿へ侘言しよといへば。女は氣色かへて思ひもよらぬ事といふ。男のこと葉をもどくからは暇をとらす程に裸で出てゆけといふ。いかにも出てゆくべし。我追出さるゝからはそなたの姉御の頓死なされた時の首尾を世間へ沙汰しておいとま申と身ごしらへすれば。男手をさげて我女房と宿替る程の事がおもひ

かへらるゝ物か。内ゝ大屋の女の勿躰に見あいた。此次手に爰を替んと五条通醒井町へ屋とを替しに。南どなりの女房年月乱氣して時ならず刄物ぬきて。近所かけまはるにおどろき。爰をも又かへて。六角堂の前に住けるに。此家むかしから逆ばしらのわざといひて。夜〳〵虹梁の崩るゝごとく寝耳にひゞきて寛ゐをうしなひ。ければ。爰にも又居かねて千本通りに越て物閑成所とよろこびしに。西風のたび〳〵に野墓のけふりかよひ。夫婦ともに嫌ふむしあつてわづらひ出せば此所にも住憂。また新町の上へ引越けるに家新しく然も一軒屋にて。北どなりは椀屋の御隱居とて表は格子作りにして物にかまひ給はず。南のかたは酒屋椙屋歷ゝの御かた。今といふ今おもふまゝなる所へまいつたと心いわゐせしに。其夜から御隱居に專修派の長念佛申出され。明かたまで枕にひゞき物いふ事も聞えず。又かうじ屋から蟬の大きさしたる油虫ども數千疋わたりきて。五器箱をかぶり茶の水に飛入。衣類を喰割米だはらに穴をあけ屛風扇をばら〳〵にな

し。肴かけを荒し將油の德利にはいり塩竈にむさき事どもして人のしらぬ世の費也古人も是をしらば家に油むし國に酒の酔と書べし。さても〳〵一夏を暮しかね爰も程なく立のきし。二とせにもたらぬうちに九の所住替すこしためたる金銀殘りすくなく。其後は松原通り新玉津嶋のやしろ立せ給ふほとりに。女房のために腹かはりの弟が住けるが。此ものがさし圖にまかせ其町へ替ける。此家鬼門角なる事を氣にかけ殊更當年の金神にあたるといへば此末世に何の方たゝりこつちへまかせ給へと無理に移らせしに萬心にまかさず日夜におとろへ身上は紙子四十八まいばら〳〵となつて。それからは面〳〵かせぎ男は奥州の白石といふ所へ紙子屋が下人と成。女は扇折る事を身過のたねとして平戸の嶋國へつれゆきける。東西へいきわかれする事も此女の無用の口のすぎたるゆへぞかし。惣して女たしなむべきは言葉なり。夫婦のわかれをしばらく惜みて泪に袖をあらひ。又いつかめぐりあふべしさらは〳〵といふ時此女分別しかへて。是男何をいひかはしたればとて數百里へだてゝ益なし。心にかゝぬ暇の狀と乞つめて共跡はいさかひ仕舞に。をのれもひとりは何として堪忍しておるまい。をのれも女もたずにおろふか姉の銀盗人目とわめき別れぬ。まことにのけば他人さてもおそろしの人こゝろや

〔二〕命に掛の乞所

世間に繪馬醫者といふ事子細をたづねけるに。歩行いしやの田舎より大坂住居を望みすこしのたくはへして身体かためざるうちは妻をも持ず。借宅の軒に竹の菱垣ゆひまはして。名苗字を筆ふとに張札はしらにあらはし。近所に急病あれかし一手柄して見せんと。明くれ時節待どもよびにくる人なければ是非もなく。宿にばかりも居られずして難波の寺社をまはりて日を暮し。有時町内の自身番夜咄しによばれて今宵けしからぬ風は。霜月朔日なれば諸國の神歸りのあれなるべし。天おそろしや化物の出そふなる黒雲といひける次手に。何と天滿天神に掛たてまつりし大森彦七が繪馬。山本文右衛門が筆勢大きに出來物と沙汰しければ。彼醫者十面作りていつれもはお氣が付ますまい。あの彦七にひとつのあやまり有。掛烏帽子の緒を書落したりといふ。皆ゝ手を拍てさりとはこまかに見とがめられし事ぞと此評判やむ事なく。其後さる大醫にたづねしに畫師も物をしら

ねばならざる事かな。彦七が時代までは髪にしのびの緒を付て留ける。かけゑほうしに緒を付初しは百年此かたと物語いたされしに。是は〳〵と各〻又手をうちける。惣じて繪馬は万人の目にかゝればかりそめながら大事の物なり。都の清水に長谷川長藏か筆にて五郎朝比奈か力くらべを書り。此袴のまちのひだ折たる上に心もなく舞鶴の紋がら書たる所。猪熊の染物屋の下女が見出して洛中是沙汰になり。長藏一生是をわづらひけるとなり。又祇園の屋しろに火ともしの大男雨の夜麥わらの笠着てかよふを。化物といひふらせしを平忠盛くみとめ給ふありさま。別所權右衛門が書ける。大男の手より取落したる土器の割とも取集めたらば四五枚ほどもあるべし是はあやまりと稲荷の前なる土鈴の細工人が見出して是も沙汰せし時。物に心得有人のいへり　紋鶴とは各別の僉義なり其火ともしの男かはらけ五枚持たる事もあるべし。むかしの事を今其男に問れもせずと大笑ひして果しける。宿前のくすしも病人をこまかに見立る事は成がたし。年

中隙なるまゝに何の用にも立ざる事ども。合法が辻の石のゑんまわうの肩のすぼつた。新地の中の町に公家の弟らしき人を見立置たなど。ひとつも役に立ぬ事ぞかし此隙に見わたらぬ醫書を才覺して寫し本にする程のじやうこんなくては。此道の出世は成難し。醫は聖人のまねながら今の世は自然の道理をもつて我名をよびくる時もあるべしとはまはり遠し。爰は方便なくては萬人思ひ付べからず。むかし入殘の目藥屋の根元わづか成事なりしに。此人才覺にて夏蛤の一升を三文づゝの時毎日一斗買て。近所へ是をつかはし身を養てまいりて辛は此方へといひける程に。さても／＼此目ぐすり大分に賣けると所よりいひはやらかし。それ世に廣まり分限に成けるを見て今何軒か出來ける。又あるくすしは年玉に坪のあかぬねりやくをこしらへ。金徳丹と銘を打諸病によしと書ちらし。十徳の借着して正月二日の夜のうちから。近付のかたは申におよばす伏見のくだり船で咄ししたる人。あるひは旦那寺で參り逢たる人。又は舞の芝居で同じ莚に居たる人。風呂屋へひとつに入たる人までも所をたつね置。一目じる人殘らず年玉を唐へのなげ銀とおもひて。二三年も勤めければ。此礼請たるきのどくに思ひながら。後には心にかゝり下人の風引込程の事にはよびにつかはし。いつとなく時花出花色ちりめんの長羽織を武士の具足と思ひて拵へ。草履取の外に男を置てすこし勿躰を付れば人のおもひ入もよろし。其内に浪人の娘などの仕付所のなくすこし敷銀あるをよび入。此勢ひにちいさき駕籠こしらへ壱人は手前の男又一人は毎日八分づゝのやとひ轆扐。かたもそろはず舁れて息杖は見ぐるしながら先乘出してかけ廻れば世の人のり物の棒を呑て。養生ぐすりの一服弐分當にせしもはや五分づゝの筭用してお礼申ける。隨分爰を大事と神農を祈るべし。又むかしのごく歩行にてまはり。乘物では療治の手まはし惡敷下たとは云分もむつかし。そも／＼駕籠に乘時一代の思案所なり歩行の時は繪馬見ても日を暮せしが。のり物にのり出て行所のないは迷惑して座敷楊弓の見物。又は治部輔乱の長ばなし病人もなき所の茶を呑あらしぬ。然れども世間ありさまを見るに四五年目にはかならずはやり病有事なり。此時老醫上手の直しかけたる跡を請取心の外の仕合めぐりて。是より名をあげ三人まはしに乘つゞくる事ぞかし。まとに藥師のうたてき事はいますこしの

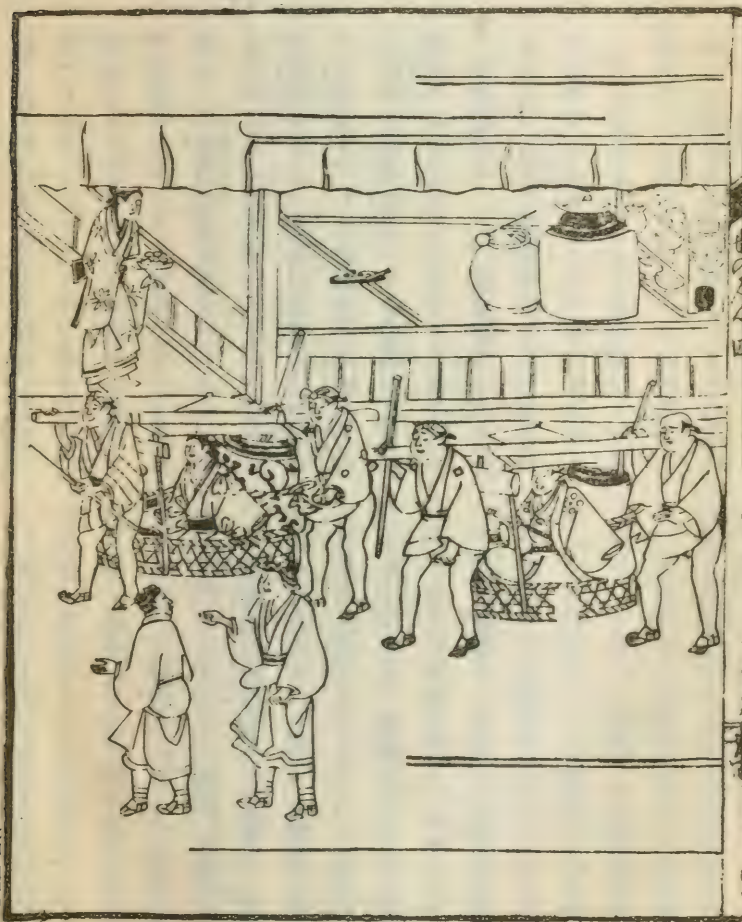
所に退屈して病人を取れける。又取事もあればたがひ事と思ふべし。只醫者の氣をこらし年をよらする事は。宵に藥出し置。朝豚に見まへば。きのふのお藥たべさせますと腹にもやつきが出來まして。目まい心に足がひへまして菟角物を申ませぬといふ。又そこへ見まへばいよ〳〵くだりも留りませず大ねつがさしまして佛樣の所へまゝ喰にゆかふ〳〵と上言を申まして。夜の明ますを待兼ましたと母親なみだぐみてかたる。又爰へ見まへば胸がいたみ出まして口中がはれまして。もはや寢かへる事も成ませず是程俄によはりましよとはぞんじませなんだといふ。是さへきのどく成に勝手に親類あつまりて。今時は藥が人をころすはじめから無用といふたに。ぶら〳〵と掛て置て寺へ人をやるばかりといふ聲骨身にこたへ。やう〳〵爰をにげのき何の因果に此身には成たるぞ。渡世は八百八品といふに醫者は其中のより屑なるべし。殊更むつかしき病生あてがはれすいりやうの療治をするも心おそろしき事なり。されば大坂の廣き事は名譽の病人あまたあれども。いづれの手にかけても直らぬはなをらぬなり。中の嶋に年十七に成ひとり娘生ながらに白髮あたま形美女にしてさりとては惜し。又玉造に十六に成むすめ四年此かた大べんおりずして喰物はつねのどし。又長堀に十九に成娘あり誕生日に取立しての此かた。昼夜横寢をしたる事なく我家を年中ありきて斗暮しぬ。唐の書物にはかゝる事もある事にや。此親皆分限なれば恥を隱してなげきぬ。此内ひとりなをせば銀五百枚は取事なれ共無念なり。あはれ藥師の御夢想にて此なをる妙藥もがなと願ひぬ。藥代程高下のある物はなし八十ふくもりて銀五匁取に。三服にて銀五牧に樽肴を取人も有。世の寶は醫者智者福者といへり。中にも醫者のなき里には住事なかれふたつなき命を賴む事ぞかし。一切の人間無事堅固になくて世に住る甲斐はなし。常〻灸をたへさず鰒汁大酒をやめて身をはたらかし氣をなぐさめ養生はつねの事なり。されば世の人の付合日比のよしみは病中の時しるゝといへり。兼ては賴みにいたし置てもそれ〳〵の家業のさはりなれば。はじめの程こそ日夜に行見舞もすれ。月をかさねてのわづらひになればいつとなく他人のあらはれける。身をわけたる親子の中さへかんびやうにあぐみて。たがひにあいそをつかしさもしき心の見へすきける。身を賴みたる男の病中女程

大事にかくるもの外になく。自然の事あらば死人と一所と思ひ込しも。後には心さし替りてかさねて持男は此人のごくよは〳〵としたるにうんじはてたと。いまた息も引とらぬうちから後の事を分別して。我手道具の外に男の物までも取集め。其後は湯水もそこ〳〵に取あつかひ埒の明のを待ける。男も又女の長病にはあぐみて一日もはやく宿期願ひける。死さまにかんびやうおろかにいたさぬは。あとしきの望みゆへなり。親でも子でも欲に極る世の中なれば。死跡に金銀を残すべし是を死光りといふ。死別るゝ中にも親より妻はかなしく妻よりは又子は各別にふびんのます物なり。一子などころせし時は世にながらへては居られざる程におもふ物なりしが。ふたりも三人も死せて後は心鬼のごく成て中〳〵なげきもうすく人の愁も心にかゝらず。火宅の門を横に車と出ける。さる程に子のわづらふ程世に物うき事はなし。人〳〵もたねばしらぬなり。有人五十過てたま〳〵男子をもふけしに然も生つき百人にすぐれ。是を見る程の人かゝる貧家にてそだつる子にはあらずといふ。はや三歳にて習はずして花鳥風月の大文字書ば。大師の二たびと是をおろかにせざりしに。其春より虫を発して幾薬かあたへけれども更に甲斐なく。けふをかぎりと目を見つめとやかくなげく所へ。年中買ぬる此中の銀子を今濟してくだされいとせはしく使を立る。亭主腹立して此なかへどんなといふて帰へしける。此使又來てそなたの子が死ば銀取まいと約束はせぬとわめくうちに。此子おち入ければ皆〳〵泣出す中に。亭主は彼米屋をさしころして置我も果ける

〔三〕諸國の人を見しるは伊勢

神風や伊勢の宮ほどありがたきは又もなし。諸國より山海万里を越て貴賤男女心さし有程の人願ひのごく御參宮せぬといふ事なし。殊更春は人の山なして花をかざりし乗掛馬の引つゞきて。在〻所〻の講まいり一村の道行も弐百三百人の出立。同し御師へ落着ける程に東國西國の十ヶ國も入乱れて。道者の千五百二千三千いづれの太夫殿にても定りのもてなし。勝手いかなる才覺にて此ごく成ける事ぞ。本膳ばかりか二の膳の品〳〵居られける。臺所に人の弐百もはたらく者のなくては。二千三千のまかなひなる事とおもへば。わづか弐十人ばかりにての手まはしなり。先椀折敷に箸までうつて皿小道具

までを三人の請取にて出せば。食は煮湯に篭をしかけ何の隙も入ぬ事。汁の魚をまなばしまな板なしに大鍋へすくに切込切目とかふいふ事なし。中にも鱠はむつかしき物なるに。年の寄たる男ども袴を着て手毎薄刄一枚づゝ布きれにつゝみて。鱠のちん刻にまはりけるが壱斗を弐分づゝに極めて。壱人して一日に壱石づゝきざみける其見事さはやさ。づねの庖丁人十五人斗しても是程は出來まじ。扨是をあへる事大半切に入鍬にて此手はしき事見て居るうち也これらはかくなるべき事なりしが。肴は何によらず二千人の焼物然もやき立を出す事あまり不思議なり。火鉢五十も有か又は廣庭に二十間も溝を堀て焼叓かと思ひしに。是も三人して鼻うたにて埒をあけける。壁ぬる小手のやうなる物を十枚ばかり火鉢にて焼置。扨大釜に湯をたゝせ四角なる篭に肴二十枚づゝ入て。ざつとゆであげて長板の上にならべ置。宮前の小手にて片身ばかりざら／＼と撫て其まゝ出しける。伊勢の焼物を両方やくといふ事なし。よろづ此手まはしさりとは／＼世間各別なり。此所は太神宮のお影にて年中さま／＼の身過有。諸國へ初尾くばりの狀大椙原一束を銀壱匁八分の書賃。中すぎはらのざつとしたる狀は一束壱匁三分にて。隙成醫者浪人の是を書ぬ。惣じて神職のかたはいふにおよはず萬の商人までも。伊勢は人にかしこき所を見せずして皆利発なり。是ほどの人心にて何者かいつの代にはじめて。鳩の目の蒔銭百といふを六十つなぎ壱貫に付てやう／＼壱匁四五分つゝに賣て。宮めぐりに是をまかせける。雨の宮より風の宮へぬけ。又是はむすぶの神すなはち是が腰抱ものなしに子安の宮。是はしうとめと中をよく守り給ふ神と口をたゝき。若い男を見かけては是成が久離切られさしやる時。親達の堪忍なさるやうに後神に立給ふ宮と。其道者の風俗良つきを見合。宮雀壱人して小宮五ッも六つも請取。壱匁に千貫の入替よきをくはつとなげ給へとよくばりける。新錢をなぐる人は稀にして年／＼伊勢中のそんつもり難し。是ぞ智恵ない神參に無用の智恵を付ける。近年は鳩の目法度になりぬ。又間の山の乞食むかしは遊女のごとく小袖の色をつくして。味噌こし提たるもおかし其すがたには似ざりき。中にもおたまおすぎとてふたりの美女あつて。身の色を作り三味線を引ならし。あさましや女のするゑと伊勢ぶしをうたひける。毎日の參詣おだぼれをして爰に立

とまり。前なる眞紅の網の目より㒵のうちをねらひすまして錢なげ付けるに。一度も當たる人なし自然と顔をよける事を得たり。有時江戸より參りたる人百錢をなげつけしに。お玉が㒵にあたり額にすこしの疵を付てよしなし。諸國より隨分大氣成人參りけれども錢百文なげ付しは是がはじめなり。大かた世の人の心さのみかはらぬ物ぞかし。又明野が原明星が茶屋こそおかしけれ。いつとても振袖の女赤根染のうら付たる綿着物を。黒茶にちらし形付ぬはひとりもなし。扨日本に爰の女程白粉を付る所又もなし。同し出茶屋の女の風俗住吉とは是各別の事也。所によりて伊勢難波の替りあり。爰に心を留るにもあらす旅のしばしの慰みぞかし。此廣野錢掛松のほとりに三十四五年此かた道者に取つきて世をわたりたる哥びくに二人ありける。所の人異名をつけて取付虫の壽林ふる狸の清春といひて。通し馬の馬士駕籠までも見しらぬはなし。哥もうたはず立寄て是伊豫の松山の衆様。是播广の書寫の御出家さま。これ備前岡山の女中さまと。

人を見立て國所の違ふ事千度に一度なり。有人隙にまかせて遊山参りなれば此ひくにども茶屋によびて。いかに此道になれたればとてあまりに名譽なり。我等は何國の者とおもふぞ何かして世わたるぞいふて見よといへば。こなたは唐人に見せても見る事長崎の人といふ。此男びくりして何とした目じるしありや物いひ聞てかといへば。お言葉は其まゝ出雲のとばなれども内衆二人ながら長崎なり。こなたの年の程五十五六にも見えて肌着に白りんず。殊紋びろうどのゑりをかけ金拵の大脇ざし。我まゝに見ゆる所長崎でないかといへば。いよ〳〵興覺て我若年の時雲州へ養子に行しが。歸る首尾あつて此仕合さりとては〳〵。扨商賣を迚の事にいへといふ。それはいひかねまする子細ありといふ。是非にいへといへば。卒尓ながら傾城町の人では御座らぬか。事戀にはあらずといふ。此人様子を聞さきほどよりこなたの目づかひを見るて肝をつぶしさても〳〵はづかしき見に十五より内の美女しみ〳〵と氣の付立かな。天照太神を何〳〵せいもん我

女良屋にはあらず。よき娘の子に目の付事は我只一人娘を持けるに。いかなる前世の因果にや當年十三に成けるが今に足立ずして然も亀腹とか申て見ぐるしくその上両眼見えねば。緣に付べき沙汰絶て明暮是をなげき。同じ年程の娘を見ては我子のあれならばと思ふからなりと。泪をこぼして語られけるさもあるべし。其折ふし京女と見へし廿二三の風俗人の目だつ程なり。たて駕籠ならべて男さかりの若い者乘ちらして通りける。二人のびくにはしりつき是都の大じんさま。此春中にあんなお姿は見ませぬといへば。此男目を細ふして世界もせまいなどいひさま。ちいさき白銀を一粒づゝとらせて通りける。あれは何者ぞと問ければ。あれは其まゝ祇園八坂ものと見えて人のむすめなり。今の若い者が參宮をよせ事にいたづら參りといふ所へ。三十六七のかゝが此茶屋までやう〳〵あゆみて腰かけて。さきへ通りし駕籠の事をたづねて人の問ひもせぬに。あのばちあたりとも目が大事の神參りに宿〳〵で夜のあくるまで物語をしをつて。おばたとやらから駕籠の者ばかりを代まいりをさせてをのれらふたりは參らぬ談合。男のある女房をぬけ參りをすゝめ。親かたへ聞えたらば追出さるゝはしれた事。ひよつとやとはれて足のいたむに三ぼう荒神に乘ともいひおらずに先へと。にくげにしかつて行ける。又三人つれてひとり〳〵風呂敷包みをかたにかけて通る。またびくに一錢くだされといへば。下向にとらしようといふ。此道へは歸らぬ衆といふ。それは何と見立ていふぞ。そなたたちは次手に參宮して江戸へかせぎに行るゝ職人衆じやといふ。三人一度に立とまり是は子細を聞たしといふ。出來心の闕からの參りなればこそ先下の帶ふるし。其上三人ながら本海道の道中扇子持給ふからは江戸への初くだりといふ。皆〳〵あきれはてゝ跡をも見ずして行ける。其跡から手のよき一連あれはいこ衆といふ。あれは奈良からの參り皆〳〵に見えてから。それは〳〵始末なる參りなり。何程口乞にしてもあの中間から一文よりはもらはれぬといふあんのごく跡から錢拂の男貫ざしよりぬきて。ふたりが中へ一錢とらせてそのまゝ腰より矢立の筆染て明星が茶屋のびくに七八丁もつきてさま〳〵口をたゝき。ひかれぬ首尾になつて中でも薄き錢を一文とらせましたと小づかひ帳に付ける。是は氣のつまりたるせんさくなり。又角前髪の若い者同じ心の飛あがりども

四人。揃へ明衣の染こみに氣をつくし道筋を我物にして參りける。あれはどこものぞ大津の濱辺の者どもといひもあへず。勸進を乞けるに無理に所望して哥をうたはせ。此あたりの名所を語らせすましてびくにも我ゝか良をよく見しつて置て。石山寺へ參りやつたら寄りやと云捨てひとり〱にげて行。是申〱と呼かへせば。御緣御座らばかさねてといふてはや其人影はなし。びくに大笑ひして寶鏡おとした程によびかへせば。觀進壱文に替て行ける。太神宮の卽座に息盗どもに罸を當させたまふと。宣前の長崎の男と長物語して別れける。何もわすくはせぬかわすれな〱

西鶴織留世の人心

目録　五

㊀

一　只はみせぬ佛の箱

丹後の國切戸乃文殊は繪馬

世わたりまて参るハ人の貧縁

㊁

一　一日暮しの中宿

世の隙を見よとて三月五日九月五日

猫え倒る世間しらぬ奉公人

三

具足甲も質種

武蔵おしつの伏見の里

人の分に商売人代萬徳

［二］只は見せぬ佛の箱

丹後の國切戸の文珠堂に金童子といへる脇立あり。是を開帳する事錢百文に極め置て諸人に拝ませける。此童子知惠の箱といふ物を抱きて立せ給ふ。愚なる參詣の人〻拝めば佛のちゑをもらふてくるやうにおもひぬ。其身生れ付ての無分別は文珠のまゝにもならぬ事ぞかし。智惠の箱と名付て見せさせ給ふは諸商人共家〳〵の帳箱なり。年中請拂ひをゆだんなく心に掛よとの見せしめなり。萬の事に付て帳面そこ〳〵にして算用こまかにせぬ人。身を過るといふ事ひとりもなし。かならずじだらくもの〻くせに人間百年の榮花なし。わづかにしれたる此世界子孫の事まで案じ置するは是愚智なる人心なり。其身に仕合そなはれば十分成世を渡るなり。たとへ親より財寶請取ても貧者となれる事當座さばきにけふを暮して。かゝる不覺悟の親相應の借錢わたすと。又子の代に家普請に手のかゝらぬやうにとて。石井筒に鉄釣瓶あるひは軒口に銅樋諸道具も一度の大願に末代物にして封付の銀箱わたす。此ふたりの親心各別違ぞかし。其比泉州の堺より分限にて樂隱居せし年寄友達二人。天のはし立の松見物にくだりし次手に此もんじゆ堂にまいり。かいちやうの事分別して其智惠の箱百もんにて見る事。さしあたつて百匁入るなり是を出さぬ所が第一の智惠とて。是を拝ますに歸りぬ。惣じて始末より身体よろしく成ける親仁どもすこしの事もぬけめはなかりし。此人の子ども江州の多賀大明神へ長命いのるためとてまいりけるを。此親ども參詣する事無用と色〳〵異見申せし。神を頼むまでもなし人の命をながう望みならば婬酒の二ッをひかへ相焼のある世の中に鰒汁をやめて。ぶんに過たる人づきあいせず。世間並に夜をふかさず人よりはやく朝起して。其家の商賣をゆだんなく。たとへつかみ取ありとも家業の外の買置物をする事なかれ。只朝夕のもてあそびには十露盤置て見て。節季〳〵請拂ひ大事にすべし。人の物を借込さいそく請る程人間壽命の毒はなし共。證據には我等寺同行の人十六十四に成娘二人もたれしが。世盛のこしらへ何にひとつふそくもなく。美をつくしたる衣裳敷銀千枚づゝ付て聟は願ひのまゝの所へ仕付られしに。姉むこ次第に家榮へければ世につれて姿も若やぎ。三十にあまる年も娵入時のすがたの今に

殘りて。人皆女仙と名付是はあやかり物といへり。此女不老丸も呑ず人魚も喰ねど。鰤のはしりを十月比より喰。正月の事とも霜月中に仕まはせ。當年も又五拾貫目はのびたる白銀の花を見て。目出たき事ばかり耳に聞し嬉しき事を目にみて暮せば。どこで年のより所なし。又妹は三十にもたらずして姉には年の七ツもふけて。哀れむかしの形はなかり。風俗心ざしともに姉よりは見ましけるに。內證せはしき世につれておのづから物每いやしげになりぬ。白うを飯鮹もやう／＼三月のすゑにくふ事になり。年／＼たらぬ世帶に氣をつかし。男の心ざしもむかしに替りかりぞめの事も無理なる腹を立るを。そふからはかゝる落めの時こそ人の大事なれと。さま／＼に機嫌を取すゑ／＼の女の手業の絹張までも手つだい。物見花見に出るにも駕籠といふ人づかひのきのどくさに。何の心もなきに作病を発し。おのづから一門の付合にもかた身すぼりて。物いふ事も人よりあとに付てふだんの身だしなみも自然とそこ／＼にして。いつとなく小袖

のうちかけをやめ帯もほそきをして。心から年をよらす事のかなし。惣じての女房いゑぬし身体の仕合にひかれて姿は作りものといへり。此姉より妹のわかうなるといふも命を長ふ持も。皆是其家はんじやうの心のいさみよりなれは。只世をかせぐ事をもつはらにしてまはり遠い神佛をいのる事あらずと年ふるき人のしらせける。いづれの醫者の手にさへ叶はざる人間かぎりある一命を何れの神に頼みかけたればとて。それは〳〵一日もいきのぶにはあるまじ。人は四十より内にて世をかせぎ五十から樂しみ世を隙になす程壽命くすりは外になし。何程にお多賀大明神を祈りはる〳〵の江州に歩行をはこべはとて。此次手の道寄に京の嶋原へ心ざしければ。目にみへての貧報神なり。命も身体も宿に居ながら祈れと。万事にひとつもすかさぬ人のいへり。近年世間に後生を願ふ良つきすれどまことの信心まれなり。皆名利にかゝはり旦那寺の塀瓦の寄進にも定紋を付。法の道を作れる石橋の名を切付菟角願主の世にしるゝを第一にいたせり。本心の

後生のためならば貧僧に齋米をほどこし。奉加帳に町所をあらはさずとも心ざしすべし。今時の人心ひとつも佛の道に叶ふ事にはあらず。諸〱の寺法師世わたりの人あしらい在家に替る事なし知行寺の外はかく旦那の機嫌とらるゝ事出家に似合ざるとも申難し。外に身過の種なし。酒宴の中程に立て踊精進腹では酒か呑ぬとしらばけのかる口。さりとは氣のさへたる長老と是は世の人好り。不斷珠数をつまぐりて參詣のともがらに十念の外は無言にして殊勝千万なる御坊のかたへはいかな〱晙者もなかりし。殊更此程の道心のむすびし新庵氣を付て見るに皆おかし。東高津に毎日薄おしろいをする出家あり塩町に常住ひりんすの內衣して居る尼有。長町に魚釣針して賣坊守あり。道頓堀にしのびがへしうつたる草庵あり。玉造りに年中仲人をして身過する法師有。天王寺に鉢坊主に衣の日借をとせいにする出家あり。又藤の棚近くに十日切の借銀して明暮十露盤に心をつくす坊主も有。あたまを剃墨衣着て形は出家になれども。中〱內心は皆鬼にころもなり。鉦たゝきて念佛申てそればかりにてすむ世の中にはあらず。今寺〱の次第にきよらをつくしひかりかゝやき。はんじやうする事。佛のまねき給ふ人寄にはあらず住持世間のかしこきゆへぞかし

二　一日暮しの中宿

飛鳥川流れてはやき月日の立事夢そかし。此春寢道具入て半櫃を持せ行しが程なく九月五日になりて。出替りせし男女の奉公人宿こそさま〲におかしけれ。むかしいかなるかしこき人の半季とは定め置けるぞ。親かたの氣に入ざるも半年の事とおもへば大かたの事は堪忍して。うつくしう出替りまでつかふて暇出さるゝは其家の內義の利発なり。又無心なる主を取あはすとも半季の事なれば一日暮しにしてお定まりの五日の朝食くふてから手まはしはやく身拵らへして。機嫌よく笑ひを作り何かたにおりましよとも。今までの通りにおぼしめしてくださりませい。お乳母どの今朝の松茸の燒ましたが網手の砵に入れまして膳棚の中のだんに置ました。見へませなんだかたしのまなばしも廣敷の疊の間よりたづね出しまして。包丁箱に入て置ました。梅花の油やがまはりましたらば此卅弐文おむつかしながら濟してくださりませい。又瀑かゝがついぞやあつらへましたもめんぎれさらしてまいりましたらば。

請取て置てくださりませいどうでも四五日のうちにはお見まいを申あげましよ。皆お若い衆今迄の通りに道であいましたとも見ぬ㒵してくだされますな。久三此あたりで雨にあふたらば傘借てたも。替りに風のよい女良衆を置て見せ給へと。すこし述懐心をふくみて出て行ける。菟角俗生いやしきものなれば追出すまても何の子細なく。一門衆から年切置けとあれば。いやなれどもまゝにならぬ事なれば心をしつて惜い人を出すといへば下女も氣にいらぬ心を合点して御勝手づくになされましたがよう御座りますと。立烏あとを濁さず壺洗ふて水まで汲入て歸る。又内義はしたなく氣に入ざるすこしの所を見かねて。母親むすめを相手にして此夏季は食焼が流れありき。まへだれかづきの雨に泪こぼすを見るやうな。播广路の世の中が悪うてつかひ盛這出が。口の世で置いてくだされませいと侘言いふべし。布織て碓ふんで子守して木を割て是程徳成ものはなし。大坂中の水呑ふではりしすりがらしの右の手にしやくしの柄の跡の付たる女。置人なふてひとつもある着物を賣喰にしをつて。後には夜るうたをうたふてありくいたづら女に成ぞと。にくげに當言をいへば下女も又聞ては居ずして。灰猫が耳を火箸でせゝり我も耳の役にいやながら聞よ。食喰して年中あそばしておかしやるも鼠とらするためぞ。鰹節の盗み喰さへせねば世界に何のこわい事はないぞ。爰の釜の下ばかりが我が寢所にはかぎらぬぞ。お氣に入らいでなげうちしられたらば。北濱か中の嶋か大かまへ成内かたへかけ込。毎日お客があつて鴈の胴辛鯉のわた捨所のないお家があるぞ。我は生れ付て仕着はきず口ばかりにて御奉公申に肴とては八十入の干鯵焼匂ひより外に聞ず。たがいひつぎて爰へは來ぞよい内かたの万軒もあるに我が仕合がわるいと當言いひかへし。其後は日毎にすれあひ内義は腹立して主と病ひにはかたれまい程に。ふしやうながら宵から眠らずとも大釜も琢いて置たり干菜もこまかに切て置たり。下子仕事なりよい物じや蚊屋の破れもつぎ當て置きやといへば。一日も是に居ますうちは鼻に手を當て見てつかはしやりませいはたらきさへいたせばお氣に入事ぞと出尻あらしたる跡にて見れば大鍋にひゞきを入。十枚の挽盃を一枚もそのまゝは置す。酢徳利は口折て重箱はふちはなちて。日傘は椽の下になけ入雪踏は湯殿のやねに捨置。此外目に

見えぬ事に大分親かたへそんをかけける。下／＼はいやしき物に定めて上手につかひなすが奥がたの利発なり。世のつまりたるためしには當年の春の出替り程女奉公人のあまりたる事なし。一番女房の大所の勝手にあふ者きう銀四十五匁から五十目に極めて置しに。としは四十目をかしらにして次第にさがりて中の上卅匁又は廿七八匁廿五匁までにしてそれよりは廿二三匁十八匁すこし小作りなる女は機まで織て。十五匁から錢一貫近江嶋の帷子ひとつで濟ける。半としの紅白粉あるひは草履錢こつちから貸かきて奉公いたすになりぬ。小宿に居れば一日に一升は降ても照ても口に付てまはり。日数ふる程後には布子はがれ有付ば前銀にて万事を筭用しられ。拾匁て壱匁の口錢をとられ着のまゝで出て行けるが。一人も裸て奉公せしものもなし。たとへ主取なくて牢人すれとも侍の大小と同じ。時花染の袷ひとつ大幅の絹帯一筋もめん足袋に置綿さし櫛は。三日喰いでころりと死ども身をはなたず。是程せつなくて居つゞけの奉公あるにも小宿ば

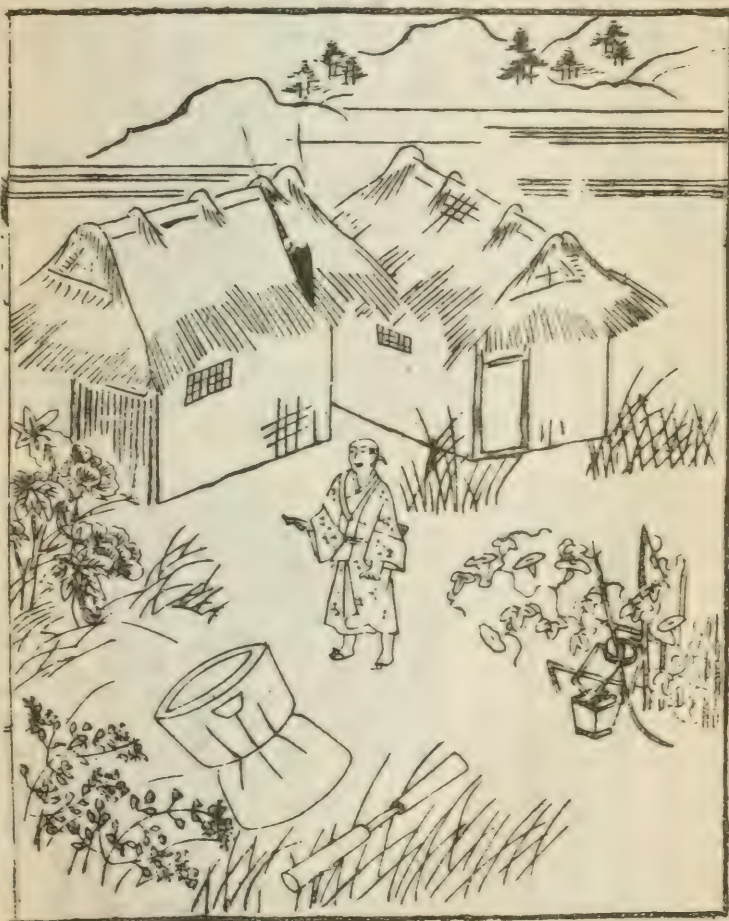
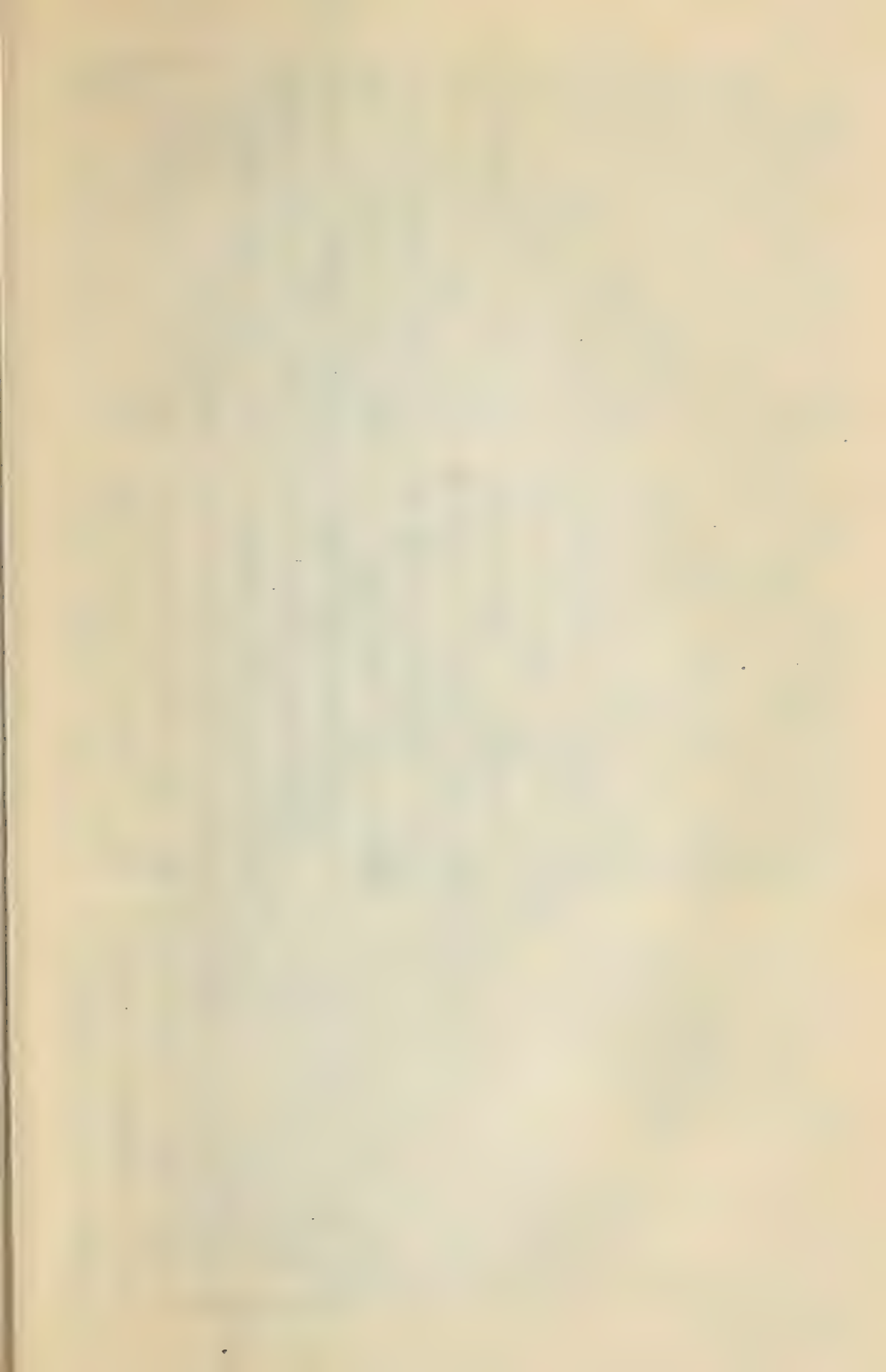
いりする益をたづねけるに。さりとては何の事もなし。さのみいたづらぐるひを我まゝにするといふ樂みばかりにはあらず。よき風成美女の當世仕出しを常に浦山敷髮かしらの目立程に中ひく成良を無理に鼻つまみあけて一度の大願にやうきひの匂ひ粉をぬりくり寒紅も此時の用に立。腰居てのぬき足いかに公義の大道なれはとて我物にして身をひねる事。よほど人の目も恥しき儀なれどもまゝよさて。さる程に寺の下男諸職人の弟子叉はひとり過の棒手振。あるひは田舎船のかことも風俗國に替れは尻に窓の明程見送りける是をうき世の慰みと覺て。よもや悪敷ものを人のあのごく見るはづはなき事ぞと日〳〵に町ありきしてげり。されども誰中宿に付込あれをと戀わたる人もなくて後には我と我身に不思義立て世には目くら多し。おそらく我等か身振けふ横に見たり取直したり笑ふて見たりひの彼岸參りの中三人ともさからぬと思とり。狂言せしうちによく〳〵みればひしにとこか悪うて思ひつかぬぞと鏡我足なから男足袋さへちいさき事にあ

いそつきて。若二ッ三ッの時御祓串や踏けん。仁王のお札や踏けん。物に三寸の見直しとはいへとたいていに四寸程幅の廣き足なれば。人の興も覺ぬへし女はひとつ思ひ所ありてもかなしやさひしやと。ある夕暮にとのかけたる男にゑりのよごれたる袖にもたれて。洗ひたがる人のあらうに此まゝにめすはわるいお物好といへば心のつきたる女がほしやといふ。御堪忍がならばやりたいといふ。是を種として今宵はお隙かといへば。此男しばし分別して酒買て振舞てかたひねつてくださるゝならはといふ。口惜ながら是非なく思ひそめましたが因果お望み次第といへば。此男立歸りてはしめからいはぬには聞えぬ。もしもの事があらは取あげはゝのさはいはそちからなさるゝかと小語ける。いつれ此女もよく／＼むすぶの神の見限り給ふとしれたり。すこししふりかわのとれたる女には宿拂ひ請合やら。又小遣銀持てきてやるやら抓取の世中に扨も違ひの有事そかし算用して合点のゆかぬ女。半季五拾目に給銀極めてつれ來る風俗を見るに。成程京羽二重の白むく肌に着て。本くんないのごばん嶋に大森の幅の紅うらを付て帶はむかしからちやの繻子の一幅物。氣を付て見るに飛さやの內衣をすそ長に。べつかうの惣すかしのさし櫛虹染の抱へ帶。其外小道具はさし置ちつと中づもりに銀弐百七十ばかりが物の出立。五十目の內からあれは何としていたす事ぞと物かたい手代の親仁がうたがひける。今の女房が申は御緣が御ざつておりましよは。月に六日の夜るのお隙は定まりて。外に二日づゝ昼お隙くだされ其上六度のかうしん參り。八月十二日宵やくし天神へは願か御ざりまして月まいりいたし。ますくれかたから初夜までのお暇と云此神佛參りの信心からあのごく成衣裳か出來ますといへば。親仁何とか合点して南無阿弥／＼ととなへて此女をはるかに拜まれける

四　具足甲も質種

都につゞく伏見の里通り筋の外今の淋しさ。殊更秋は物あはれに垣根に咲たる朝皃の茶の湯の沙汰も絕て。手鈎瓶の繩をたぐり捨てかけたり。萩は見る人もなき昼のにしき。玉芙蓉の枝に泣子の襁褓など干けるむかしの春は日暮しの御門と詠めし所も問引菜の畠と成。兩替町といひし所も今は錢が百ありそふなる家もなく。三匁が油壱匁づゝが塩賣あかいわしさへ年越に見るはかり

京へ一里の道なれは女の足にても夕食過より行帰る所を。貧にからまれ大かたの妻子は大佛の貞を見ぬ人はがりなり。東に城跡の山ふかく初茸狩せし人も皆遊興にはあらず二条の八百屋よりたつねさせける。よろづの虫を取て賣なと身過は草のたねぞかし。此数千軒何をかして世をわたるとも見えざりしに。朝夕の煙立けるはせめても大川の舟着にて。艫から舳へ身体の梶を取て手ぐらまぐらと年浪をわたりける。貧家によらず人の内證さしつまりたる時は質種也。昔日立花の家より鳶尾の前置を金子百兩の質に入られける。又連歌の花の本より露といふ一字を黄金弐十枚に置れける。まとに都の人心請人なしに其一人の手形にて切も定めす借ける。菟角質にあるうちは花さしに鳶尾をつかはせず。連歌師に露といふ事をいたさせねば此約束を迷惑して請られけるとなり又貧ぼう公家あつて質物にことをかゝれ。柿本人麿より此かたは我なりと自慢せられし髭を。銀壱貫目に置れけるに是は半年づゝのけいやく。切が延ると剃刀持て請取に來ばこれも才覺して元利算用仕立請られけるとなり。又鐘木町の遊女手づまりし時誓紙を質に置こそおかしけれ。是は銀借者が分別して客の手前よりもらひ銀のたまるうち。利を高ふして取替ける。此誓紙戀にはあらず。女良の身のうへすたる所をその方さまに見付られ。然も内證にて年〳〵御合力うけ申はその御恩に。世間の目をしのび念比いたしは此心ざしかはり申においては。諸神の御ばちにて五分取の女良におろされ申べしと。ひとつも根のない事を書せ血判までおさせて。天神から十五女良までに金子弐歩づゝ借ける是は此里へかよふ髪の油賣が思案して人のしらぬ徳を取ける。濟さぬ時は其女良と我等間夫をいたすと。くだんの誓紙人に見せられては身のすたる事を合点して。約束のごとく埓を明ればひとりにもそんをしたる事なし。質屋稼世のうき目見る物はなし。氣のよはき人の中〳〵成まじき家業なり。ことに此所はけふを暮して明日を定めぬ哀れさま〴〵の人の多し。何國も質屋は昼隙にして夜の取やりぞかし。ある夕暮に時雨して風横ふきにさむかりしに。四十あまりの男かさの代に圓座を被き身にひとつ着たる古布子をぬぎて。やう〳〵壱匁七分借て。其錢細き帯に持添丸はだかに成下帯ばかりにて歸る。又七十あまりの祖母つえにすがり庭ににじりこみ。ふところより東山時代の蚊屋のつり手二筋

さし出しける。是にも札書事のむつかしやといひさま錢十六匁かしければ。せめて二十と手合して斷りいへどならぬ事と合点せねば。是非も御座らぬとその錢持ながらわぢ〳〵と身ぶるひしてそこへこけたが最期也。貧者の質とるからこんな事やなどふびんともおもはず。又船のくだる時たゝき牛房賣に出ける男。関がはら陣いひ立してむかしおどしの具足甲を置にきたれば。亭主中〳〵同心せず其方に似あはぬ物なり取事ならぬといふ。是は人にたのまれましてといへどその吟味までもなし相應の物を持ておじやれといふ。時に門の戸明て四方髪の男。にが〳〵しき良さし出して。是亭主それは身どもが物じやが。いかにしても侍ひの手から具足は質に置れぬ。慥に請人取からはたとへば女が置に來るとも埒あけたがよい。殊に其甲は大江山にて正八幡宮の頼光にくだされたる物世の寶なりといふ。それならばなをむつかしや寺へ靈寶によき借物といふ。扨も口惜や質種にはもめん布子にはおとりけると悔みて持て歸りける。此浪人の

町屋住居の身の取まはし愚か成に付て物語せしは。惣じて世に落ぶれし人の質を置事無分別なり。百目かりて此百目に元利そろへて請返す銀の出所なし。兎角當座に賣拂ふものなり。我等も質置事五十度にあまれり。是を一色請たる事なし。其後分別して七色を札七枚にいたし置ければ。自然また請出す事も有。夜着蚊屋の夏冬置かへのせはしさ。定まつて五節句に入はかまかたぎぬを置て度〳〵に請る事のやるせなし。いかに小家の日をおくればとて男とあるべき者は。時々の着物に相應の羽織あさの上下中脇指一腰は。町人の面道具なればたとへ片食は喰すとも身をはなつ事なし。いやといはれぬ祝言振舞町役の野おくりには出ぬ事成難し。內證の事は女の取まはしにて連添男の世間むきをよくするこそ本意なれ。此所の問屋町より當世こしらへの衣裝こよる小ぶとん手道具まで。此程の娌入荷物を質に置銀七貫目借て行様子をきけばすいりやうにたがはず宇治より緣組して。ざゞんざうたひしはいまだ廿日も立ぬに。其女の衣類かりてはや質屋の藏へ入る事。世の中のかたりにて女房もちけるぞかし。女は淺間敷一生をたのむ男次第に成けるものなればなり。おもへば恥かしき身体人皆奢より此仕合なりける。此質屋も分限に成て身のむかしをわすれ。いつとなく絹紬を不斷着にして。取葺やねの軒のひくきを作事して。瓦ぶきに白壁京格子を付ければ。あれたる伏見には又もなく目に立て。貧者をのづから恥て質置に來人もなく次第に質をへらし。後は油屋米屋に商賣替てつゐに此家賣て置ける。此身過をする人は住ふるびたる家を普請する事なかれ。女家主小袖を着事なかれ。內藏火相よく念を入。つらがまへのかしこき男猫一疋飼べし十露盤をひとり子と思ひて是を抱て寢べし

西鶴織留世の人心

目録　六

一　官女の移り氣

世はつまらぬ代筆の人の鏡

若葉を落して男狩人

二　時花笠の被物

世のうしろさきよみ事くらう人有

それにつれあひ晴明家の占判

三 子をもつ親に

世の人を知るは作事第一

乳母のよく我まゝ三代相続

四 千貫目持の何の得とて

世にて見かけは収算用して日々よ

始ハ家の繁昌で備べき事なり

一 官女のうつり氣

世にある物のならひとて闇がりの鼠昼盗人絶ず。兼て用心せよと世間氣のかしこき人の云しらせける。かくのごとく万事に氣つかひをせば。小家に火を燒まじや渡海の舟に乘まじや。一切の人間運は天に有神鳴落てつかまれけるも。死は前生よりの定まり事といへり。されども用心して身をのがるゝ事にはのがれ。長命の後病死をするは是人の常なり。されば大名公家がたには地震神鳴の間とて番匠にたくませ。赤銅瓦の三階作り一重〳〵に天井幕を張て四方に賀茂の葵つらせて純張に名香を燒掛。いなびかりの影移るより奥さま是に入らせ給へば。前後はお局女藹たち相つめて観音經を讀給ふにぞ此難は幾度か子細なし高人にしきの裀をかさねても夕の煙はのがれず。佛の御迎ひふれには乘ましきといふ事ならず。思へば時刻の息引取には何とも用心成がたし。惣じての人間愛の大事をわすれ身の樂みに年月を暮しぬ。殊更高家にめしつかはれし女中は其筋目もいやしからぬ人の息女にして。若年より世のせはしき事をしらず。其身のためばかりに官女の立ふるまひを見習ひ。朝夕のもてあそびとて玉琴和哥に心をなし。花の明ぼの雪の夕月紅葉に身をそめ。願ひは戀種の外なく。一生淫酒のふたつの中にひとつのすがたを色作りて。夢うつゝのごとく何罪もなく望もなく。流れをくみてみなもとをしれる道理。さもしき地下人にあい見えねば今時のせちなる事は。女のきやはんはくなどの始末心かりにもなかりしに。さる御所にちかふめされし鶯の局と申せし人。梅咲初作の廿四日に上より御願ひ事ありて。北野の神へ御代參申されての下向に町筋の有さま目にめづらしく。駕籠の窓より小家がちなる西陣のほとりを通られしに。つき〳〵の男神樂錢の外に上べき初尾をわすれて今おもひ出し負付うろたへて是にしばらくと云捨て又神社に行ぬ。今織のはた音せし門に乘物たてゝ軒下に休みぬ。此内に摺砕のおときこえて下女ことりまはしにはたらきければ。いまだ年若なる内義がつゐ腰掛ながらうつくしき手して。若菜をそろへ鏡餅の名殘を雜煮して。我夫をもてなす風情あるじは中敷居枕にして心よげに足を延て。過にし節季はゆるりとしまふ我宿のおもひ出。公家もあたまにかづき裝束がむつかし。大名も腰にさして袴かたぎぬいやな

り。町人ほど心やすき物はなし。君がため春の野に出わか菜摘と讀給ふを。阿爺がためかゝに若菜をそろへさせしやくし果報の我身といふを。鶯のつぼね聞耳立て世の樂しみあれぞと一筋にうらやましく。屋形に歸りてもなをわすれず病氣に云立無理においとま申うけ。其後は我物好にて町屋へ縁組せしに。いかにしても堪忍ならぬは米が食になる事をおかしがり。油でも火がとぼる物かと不思議を立る。是になぞらへて萬の事ひとつも世上の埒明されば。形のうつくしきばかりにても濟ぬ事にして幾所かさられ戻りて。後には四条通の白粉屋の見せに置看板ばかりによびけるが。是も商ひ口をたゝかねば又追出されて。さま〴〵の恥ともかさなりて世にはづかしき所を覺へず。東川原の機嫌とる太鞁持を男にして。はじめの程はひとり女もつかひしが後には貧家の物淋しく。人の手よりもらふ物を心當にせし身過なれば。違ふ事ばかりにて年中買かゝり濟す事なく。この男五節句ともに宿にていたしたる事なし。今は鶯のつぼねも音を入てむか

しの形替りて淺黄の古袷の右の片袖紙子縫つぎたるを霜月比の風をしのぎ。觀世こよりの帶して髪はならずまげにも結ず。廿日もゆあみせねば其身毛虫のごくなりて爪きらすかねつけず。こはつきも舌ばやにうらがれかくもいやしく成物かな。是につれて心ざしもおそろしくさもしく。夜道をありく事をいとはずしらぬ男のさらば渡世の種にねだる氣に成。借錢こひの言葉質を取まんまと友虎落と名に立。人の賃仕事にさし足袋ひねり髱。あるひは手間ぬひのたばこ入又はくみ帶線香の上包み。何にても請取て歸へすといふ事なく賣喰にして。年の八九年も世をわたりぬ。そこの女に物を賴むなといひふらせしが。都の廣さは此よこしまにても年を暮しぬ。此女のかくなりぬべきとは氏神もしり給はぬ事ぞ。其時〳〵の人心世に有時には定め難し。是をおもふにかたじけなき宮づかひを捨て。よしなき民家の住ゐをうらやみしゆへなり。世界の男女ともに其家風をわきまへたる主人の外に。かならず〳〵望む事なかれと此鶯のつぼねの本末をよくしれる人

の語りぬ

【二】 時花笠の被物

中通り女とて出合がしらにふたり一度に連て來りけるが。きう銀はいづれにても六拾目が世間の極りとて置人も是はねぎらず勝手のよきものを見合ける。さて中居の役は第一に奧様のお駕籠に小袖きてお供申と。御祝義事の御使勤めければ長口上よく申て。女中のお客の折ふしはすこしのりやうりもして。不斷はお膳の取さばき廣敷より內のはきそうぢ。屋敷がたにてお茶の間といふに同じ。壹人は何やかやにつかふためになふてはならぬ女なり。㝡前の一人の女は風義もおもはしからず。良つきも百人並にて然も出齒にしていやし。又壹人の女は比ようていづれにひとつ難のいひ所なくて。人の家にありたきお內室にもはづかしからず。是を見くらべて同しねだんにてはふたつどりにあれよ〳〵と定めて。先二人ともに一夜づゝ置て見しに惡女は作法の役の外に物を書事女右筆ともいふ程なり。琴もお慰みになる程は仕ります。絹紬のあげおろしも大かたには織付ますと申て。よろづ聞程心入よく置て德成ものなり。又壹人の美女はひだりのかたの耳うとく。相手になつて哥がるた取事さへならず。角だらい見て是は何に成物と人にたづぬ程いやし。なを吟味するほど三十日に二度三度発るてんかん病におどろき。人はしれぬもの追出しければ人置のかゝ小語は。あれがまんぞくに御座れば茶屋へやつて一年に壹貫四五百めは取ますといふ。尤世の中によい事そろへてはないはづと大笑ひして暮ける

人は心しらぬは惡敷とてむかしは十三子の比にさもしからぬ形を見定て腰本につかはれけるに。近年町人のせちかしこく廿にあまるもの置て。十色もひとりして埒のあくやうにつかひなしける。是は心やすく世はわたれども相應の所へよろしく仕付事のならぬ者五年程切て四度の絹仕着にて銀百目ばかり借てするたのみに御奉公させて。手代などとひとつにあそばし身体のかたまる事を願ひける。又同し姿にて各別の仕掛ものあり。しやれたる女を成程手またく作りて物とりの腰本。是はじめの程人のふところ子のやうに見せて。惡事を云含め先奧の氣に入置て。なじむと旦那へ近寄たように私は髮脈もいたしますと申せばそれはとのかくる時幸ひの事とて髭など剃とある時けがの拍子にせなかへ寄添。剃髮を拾

ふときお首筋から手をさしこめそこ爰さはりて後。云付もなきに袖口から手を入そろ〳〵お腰をひねり。旦那に心を移させ我も心の移りたる風情して脇腹をいたく抓ば。あまりつよふ當るとて内から手をとらるゝ時。外へは聞えぬ程にあれ〳〵奥さまといへば。だまれうつくしい子目とたはふれのはじめとして。首尾に二三度の御意にもれず程なく青梅をと好で。只の事の腹心にはあらず莢角内かた樣へしれませぬうちに御分別と。旦那へゆすりかけて折〳〵うちなやむありさま見せてたんと氣のどくがらし。扨親もとへ此事いひつかはし内證から旦那殿へ通じ。沙汰なしの合力金を五兩七兩あるひは身体相應に十兩もやりて。それとはなくに暇出して埒を明ける。又ひとつには此身になりまして奥樣の手まへはうばい衆のそしり。親が聞ましたらば迚もいけて置氣の人にあらず。世にながらへまして益なし淵川へ身をなげますと旦那をおどし取手も有。親娘と内談にて年中ねだりて金取あり。形よろしければ男腰本に出すべき女を。分限を聞立旦那好色成をしりて其家へ仕着ばかりにて御奉公に出すはくせものなり。されば一生連添よしみ妻女の心入のうらみ。世間の人のおもはく彼是もつて心有べき人は。かりにもめしつかひの者に心かけまじき事と。物にこりたる人の後よく合点して道理をせめて云置れし

いきとせ生るもの子に迷はざるは一人もなし。何ほど愚に生れ付たる子息にても惡敷といふ事かならずなかれ。惡事かさなりて異見の杖を振あぐるうちにも。脇から取あつかふ人のおそきをうらむる事なり。殊更七歳より内の沙汰はたとへばひだりの手して箸を持。鉄鎚にて茶釜たゝき割とも氣のつよき所男はそれじやぞ。箸も後には我と右にもつ物と云流し。かりにも余所の子のかしこき事を咄しにもいたさぬ事ぞ。人の子の五歳にて大學よむは耳に入ず。我子の十一に成て竹箒にて鑓持のまねするを。手の振やうがよきとて客の有たびいたさせける。是等は人の事にて笑へど其身に成てはうつけたる子する事ごとに利発に見えける。すゑ〴〵の者子のをのづから我まゝに鈍成事。母の親のふところにてそこ〳〵にそだてけるうちに。はや三歳の比より惡知惠付て是八十までもなをらず。民百性の子にても付置てそだてさせたきものは乳母なり。諸事物入に是非なく中分の下の身体までは置かねけるも斷り

也。きう銀八拾目四季着て上下の帶ふところ紙手足の入用まで算用するに隨分かなしき家の乳母にても壹人一年に。銀三百四十五匁程は定まつて入物なり。是によつて女房の乳を呑せける。中ぐらいなる人の內義十七八より緣に付。其一とせ二とせのほどは櫻に藤に物見姿を作りて。我男にもあれなれば堪忍比と見られ。跡のしれる盛形の菜は喰もせざりしに。ひとり子をもうけて我手に掛てしめしやうの物を干て匂ひをのづからに移り。此子は身の行すゑの樂とは思はず何の因果に今やなどゝ無理成事の口惜く。それからは身を捨芝居行天王寺參詣もやめける。扨身体を子のためとてかせぐにはあらず。ひとり下子に子を抱せて袋提させてありく事をうらみける。今の世の女の心奢につれていなものにぞなりける

定なきは無常懷胎より身をなやみ。一子を形見に殘して世を去し妻女其身はひと道なりしが。此男の身になりてのかなしさ世に又是より外に何かあるべし。されども渡世しかねざる人は相應の付銀して子のなき方へ養子につかは

し。又は乳を聞立一時もそまつにせざりし。貧家のかなしさは其子が泣度魂ひも消入。母が死皃を思ひ出してうたてや其子を我じやとおもふて捨て給るなと息引取まで申せし。いまだ三日も立ぬに此つらさにも人手には渡さじまして道橋にも捨難し。身のつゞく程は人間の数にと思ふは今慈悲の世の人の心ぞかし。いまだ摺粉にても埒あかねばもらひ乳の不自由さ。昼こそ人も世のふしやうにてくれける夜はねよとの鐘鳴て次第にふけ行程に戸を扣くも迷惑ながらもはや御やすみなされましたかといふては念仏を申。はやぎよしん成ましたかといふては念佛を申。とても我が命のあるべき事にあらねは夫が抱て難波橋の上からとんとはまつて死るかと。身のせつなさにさま〳〵なげくを内から聞て。今迄玉綿を操つて覚ずうたゝねしましたといふ。何とも御無心なれども又一口と子さし出せば。今夜は油を買かねましてといふうちに。ともし火消て闇となれば。いかに年寄なればとて男の留守の女房何とやら心にかゝりて。霜夜に門立して是はお隙取ますと色〳〵輕薄云て。宿へ油さしを取に行て先火をともし。庭にくりさしたる綿をしばし操て女のする事心からはづかし。連て歸りて又泣ば乳もらひ所替て夜もすがら寢もせで明し。次の日は干肴調てつかはしさま〳〵の心になりぬ。貧にて乳のなき子をそだてけるは世に思ひの種ぞかし

〔三〕 子をおもふ親仁

町人にても世盛の家に出生する子は前生の定まり事各別世界の縁ふかし。本乳母抱嫗とて二人まで氏すじやうまでを吟味して。家久しき年寄を畢に付てかりにも小宿ばいりをさせず。かうがいさし櫛をさゝせず肌にやはらか成物を着て。食物も朝は白粥に飛魚さごしの外は毎日改め。夜は枕に寢ぬ役人を付襁褓のぬるゝ数を吟味し。昼夜に三度の五香を用ひ手醫者間もなく見まはれ。榮花成事つど〳〵にいふまでもなし。心だての悪敷ものを馬追船頭お乳の人と申せど。分限なる家には萬を願ひなき程にして。すこしても奉公にわたくしあれば明日待す追出さるゝにおそれ。かりにもすね事をいはす若子様を大事にかけまいらする事ぞかし此程乳母に出る奉公人を見るに大かたは世帯破り。又は下子共男定めすたはれてやう〳〵其子を中宿に產捨。乳いあるにまかせて子のとりさばきもうい〳〵しく口次のかゝに身まかせてお子

五ツまでの作法の乳母には出けれども。五月の節句に甲正月に破魔弓進じて祝義取事も。お髪置より袴着兩年は絹物の仕着を取事やら。何のわきまへもなく勤めける乳母の奉公になれざるものぞかし

置かゝつて難儀なる物乳母に年かさねし仕掛ものゝこゝろ入。二三日も溜乳して人の赤子を借て抱行。いまだ忌も明ませぬと貞つきおもく素人らしく見せ掛。胸あけてかみさまに乳をいらはれ四五日はあの子が夫に云分いたし。お食もたへぬ程氣をなやみましてと鼻も動さず僞いへば。心をしづめて食なと喰れたらば乳もはるべし。ありさまの子は娘か此方の子は男なればあふたり叶ふたりと。仕掛て來るはしらず手形極めてきう銀殘らず借取。人の大事の子に夜もすがらたらぬ乳をなめさせ。是は合点がゆかぬと吟味すれば。莵角お子様に御縁が御座らぬは瀧のごく乳のたりませぬからはお媼どのを置替てくださりませい。お取替の銀は男が暇の狀をくれます礼にやりましとあちらこちら成事を申て。さま／＼に難儀させ何十軒か此手を仕掛ける此人置の相取去迚は悪しまと成世帯やぶりの女是非なく男とあいたいにて乳母に出ける。是程世に物哀れなるものなし。夫婦は随分中あしく年／＼一ツ／＼あくる事ありて暇やるさへ。すこしは心にかゝる事いづれの男に聞も同じ。貧にも此かたらひをたのしみにして月日をおくりけるに。たま／＼子をもうけて嬉しき事は外に成て子ゆへに世の立ぬ事となり果。幾度か子をさしころして後二人ともに手くみ井戸へ逆さまに入て。死ぬべき內談一日づゝ延て其子が我と手を口へはこび。笑ひ貞せしとて隣のかゝたちがあせらかして。くはほうなる耳付仕合のそなはりし目の中とひとつ／＼ほめそやせば。ふたりは死んでも此子が命よさて。けふは神の折敷割て素湯わかして暮しければ。子はけしからず泣やまぬに近所のものども問寄內證聞ておどろき。それを今まで隱さるゝ事やあるそれ程の乳なればよき所へ勤め。其銀付て養なかして夫婦の人の心さへかはらずは。たがひに身のくろみて後又ひとつの寄相成事と申にぞ。然らば賴むといへば中にもかい／＼敷祖母かけまはりて。奉公の口も子のやしなはし所も聞立二時あまりに埒を明ける。さりとは大坂の廣く物の自由成事ぞしられける。さる程に此男今朝まではあひ見し女房。ふびんにおもふ子にも別れ夕／＼の物かなしく。

やう／＼子に付てやりし銀のあまり銭にして三百七十を質として。葉たばこ刻も煙の種とぞ成ける。惣じて夫婦のむすびなすより子にそれ／＼の物入あるは算用のうちなり。何ほどかなしき一日暮しのうら屋住ゐせし人の平産にも。米一斗と銭八百は入物にして置しに。此男其覚悟なきゆへにさしあたつてかゝるひとり身とはなりぬ

〔四〕千貫目の時心得た

年／＼根つよき商人を楠の木分限といへり。されば正成が一戦のさし物旗に。非理法権天此五字を書しるして。義を重く死をかろく。非は理をもつてうち。理は法をもつてうち。法は権をもつてうち。権はまた天運にまかせ。数度のたゝかひに理を得ざるといふ事なし。惣じて人間其家にうまれて道にかしこき事士農工商にかぎらず。腹の中よりそれにそなはりし家業をおろかにせまじき事なり。然れども今の世の人心を見るに親よりゆづりあたへし小米屋は。ほこり碓の音を嫌ひて紙見せに仕替。紙屋は又呉服屋を望み次第に見付のよき事を好みて元其家をうしなひける。諸商賣は何によらず其道を覚えて渡世しけるは商人のつねなり。されども古代に替り銀が銀もうけする世と成て。利発才覚ものよりは常体の者の質を持たる人の利徳を得る時代にぞ成ける。今の都室町通に軒をならべて家名のあるじ。いづれか世わたりにうときはひとりもなかりき。又此所の手代若きものまでも中京に住なれて世間沙汰もはやく聞付。人の善悪を見及び誰指南するとはなくに自然とよろづの道を覚へぬ。是をおもふに人からも兎角住所によるなり。同じ京にありても姉が小路の針屋の弟子と成身は。舞錐のせはしく耳穴のあけくれ分切の仕事に年中いとまなく。御室の櫻通天の紅葉春秋もしらず。七日の祇園の山鉾の有様つゐに見たる事もなく。素麪揉瓜なますを祭はありがたき物とばかりたのしむ事の外なし。同し年の比の若い者よき所に主取せしは。けふは十四日の祇園女良の物日とて揚屋極めて呼置。又は茶屋に一日あそびを約束し。あるひは風呂屋素人をしのび連て。一疊一歩の借棧敷して山の渡るを見せける。いまだ年季の小者あがりどこでこがね釜を堀出して来て大分につかふ事にぞありける。同し奉公せしうちに紙入に金銀を絶さず。とても貳百目や三百目私あきなひにてもうけたれば迚。我代の時のたりにもならずとつかひ捨ける心と

又。針屋の弟子がお内義の親里へ五節句の祝義をはこび。包銭の十文づゝを溜て壱匁八分に成事もがな。一生の願ひに細布の赤ふんどし一筋ほしやと思ふばかりの心。各別世界の人ほど違ひのありけるものはなし。近年分限になる人の子細を聞に其家によき手代ありて。是等がはたらきゆへなり。又家榮へたる人の俄におとろへるを聞ば。是又其家の手代どもが仕かたゆへなり。むかしは若い者のはたらきに利を得たる有。此比はたしぬるばかりなり。是をおもふに主人の覺悟あしき故大分の金銀を皆人の物になしぬ。聞べき時の筭用を捨置物見遊興舟あそび。年浪のけはしくうちくるをもしらす。銀手形の詮義もなしに手代が云分を慥に。印判押といへば。夢のごとくに前巾着あけて。世に手廣ふして置たる徳には我印判ひとつで千貫目の事も埒が明ほどにと。呼いれて間のなき女房に無用のしまんなり。其家の親かたにそなはりし人は其身ばかりの世わたりにはあらず。壱人の心さしを以て家内の外何人か身をすぐるよろこび是にましたるせんごん

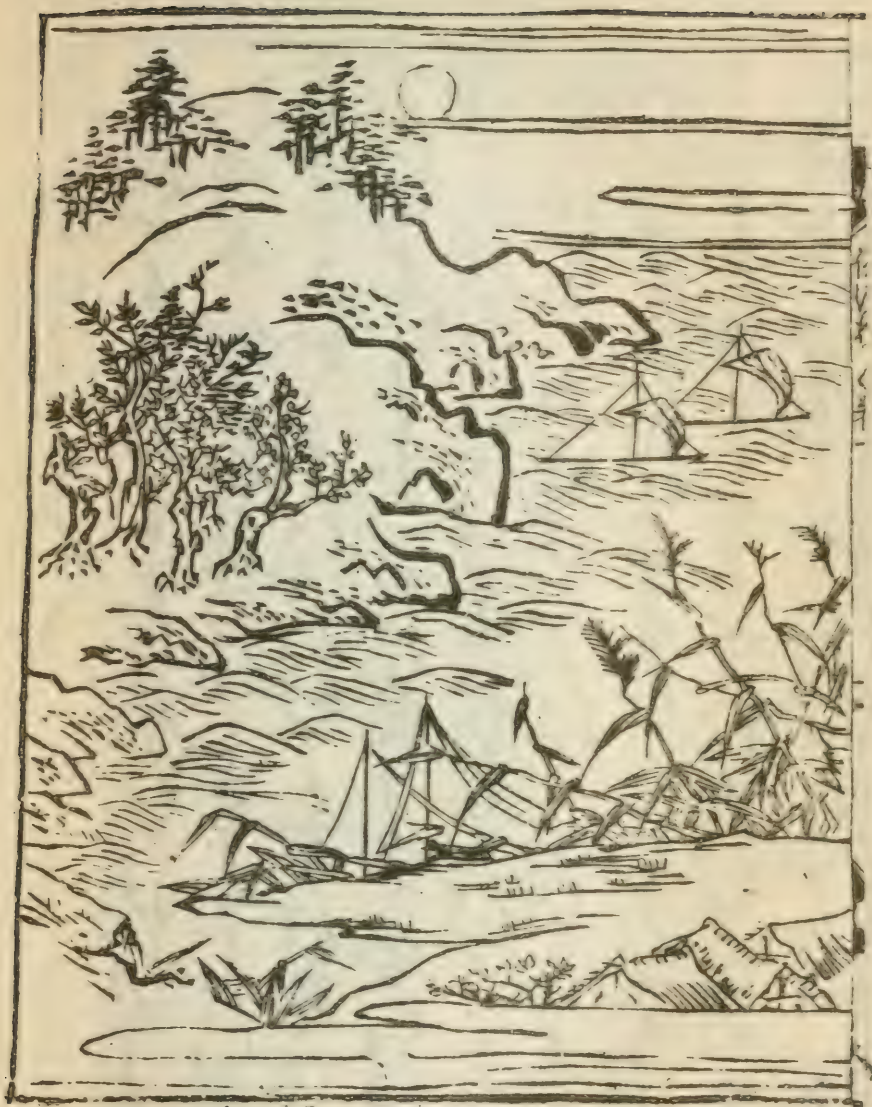
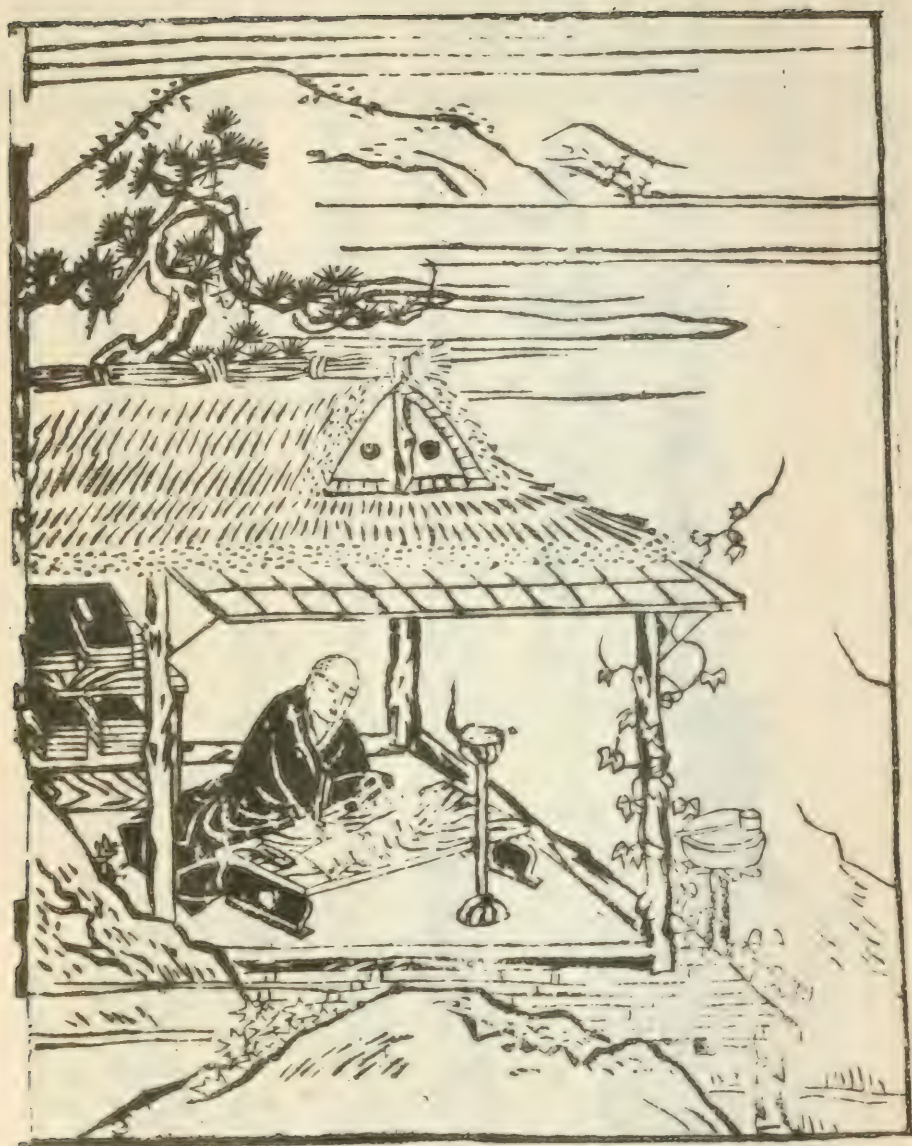
なし。以前は盆正月二度の勘定濟たる事成とも。油斷なく爰を改めて毎月晦日に筭用あいを聞ば。物毎せはしきゆへに手くらまぐらの銀まはしもならず。尤わたくし商ひの仕掛のいとまなくをのづから親かたの商賣ばかりにうちかゝりて。ひとつも越度なく其身のためにも成事なり。預け銀の先〳〵へも自身の付届して慥に借所をしる事今時の大事なり。惣じて世上のありさまを見るに。其親かた次第に福人に成時はめしつかひの者どもも我おとらじと勤め。利徳を得る事に油斷せず。主人内證もつれし時爰はひとつはたらきてとおもふ手代はなくて。迚もつゞかぬ家なればとそれ〳〵に奢分散しまひに成事程なし。兎角下〻は其あるじのつかひなしとぞいへり。有人商賣おもふまゝに道を付銀子千貫目のおよぶ時。其年五十三にて大病を請死期の近付時。一子十九歳になれり我相果ての跡にて何によらず商ひ事やむべし。此銀なく成事十ヶ年はたもつまじ。十貫目より上の家質より外に何方へも借す事なかれと。手代どもにそれ〳〵の銀子とらせ

家はんじやうの宦中にかくしまふて渡されける。此家惜みけれどもわづかの取付千貫目にする程の人心。よろしき極め成べしと沙汰してすゑを見しに。子の代に金銀の置所なきたのし屋とぞ成ける

元禄七甲戌年
三月吉日

江戸 万屋清兵衛
大坂 雁金屋庄兵衛
京 上村平左衛門板

西鶴俗つれ〴〵

筆をとれは物かゝれ盃をとれは酒を思ふ爰にいにし年俳林西鶴の作し置れし一つの書有とるに捨る事を得す部せん事を思ひまだ咲ぬ櫻木にと薬の花の盛なると心の月の隈なきを雨にむかひてこふの思ひをなしたれこめしつれ〴〵につゝりをかれし心をはかりて梓にちりばめ目出度春のもてあそひにもと下官がすけるにまかせて

世にひろむるになん誠に鶴が心の海廣く筆の林世にしげき事を思ふに彼法師の心におさ〳〵おとるまじと予が好む方にまかせてよしや難波のあしかるとも俗は下官がせばき心におふせてあらたまる春のなくさみにもと彼吉田の題号をかすめとりて俗つれ〳〵くさと名つくるになん有ける

元祿八乙亥年
初春吉辰
書林印

叙

花の春もみちの秋去て。さためなき時雨月のはしめ此俗つれ〳〵をなかきかたみにして松壽西鶴のかきりある今はの時とりまきれたるさうしの中よりこの比見さらえて屛林何某にゆつる

題号はかの月の
下雲の朝いとお
もしろく愛ある
ものなれとかけ
る盃のこゝろに
や

元祿八亥竜集

松寿　元平

正月のはし
め筆を
浪花俳諧堂
西鶴菴

圓水撮

西鶴俗つれ〴〵巻之一　目録

（一）過にし親の異見あまき酒

門ふきん酒の礼
道修は心ありし
大いこしき袖袋
謎酒とせず和
濃の酒盛ふり人備

（二）上戸丸裸こゝろ付

今の世の悪の縁
志しんたいかく
まき汁あかの中ち
思ひよらぬ御物いさき
不動と釈迦の堂

三

地獄(ぢごく)の釜(かま)へけう様し

盃ハ花によて
むさしのびさかな
おつかん京きり編
わきざや水ちや葉を
おはなきの茎叟

四

すゑなく遣(ちや)ひ者

酒樽

上戸地戸の三段
てうけが酒をまけ
まりとハ不可思議
界かよくわかる流涙
あわくる正路の涙

（二）過て克は親の異見悪敷は酒

新春の御吉慶何方も御同前の中。是越の正月が仕納めの親仁にも若ふならしやりましたと定つた口上をたがひに云捨て通る。旁〻の御盃飲ぬやうなれど目出度申納る所て押へられ。かさね〲いはゝれ日比なるものはと云さへはやわけも聞えす肩衣が背にかゝるやら。袴の腰がゆがむやら。扇はどこで落したか雪踏を踏かへ溝に踏かぶり礼に往ひでも苦しからぬ所へ行て二三年以前の御力落しをとふらひ。よからぬ事のみ盡して今朝の七つに出て夕のたそかれまでたどり歩行。跣足なる方に草履はきて鼻紙迄失ひ。逆髪になり博奕に打老たる躰して如鷺猩とかへり。正月早〻から酔覚の機嫌あしく。冷水四五盃息せはしく飲とあたりあひの枕引よせ。大鼾して一日の酔狂夢にやみるらん。然るに此親仁たる人は各別の思ひ入常〻子共に云含めらるゝは。我無常時いたりて臨終の時節急なる時にはいふ事もかたからん。別の子細なし。唯酒をやめて月忌命日の齋非時にも。かたく酒塩の入たる料理する事なく家の内には壺平皿の蓋も盃に似たる物を置ず。門に禁酒の札を石に彫て立べし此云置。〻外なし昨日も日暮し小太夫が説経を聞ばあれ程力もつよく利發なる小栗殿も横山に盛殺され給ふ何を見ても聞てもおれが云事に違ふ事は有まじ。され共衆好とやらいふものが若き者の諺に下戸ならぬ祉といな事を書て云ならはせぬ。まだ生て居らば公事をしてなり共貝はおかじと思へど。今はなき跡の形みの草子きくさへ疎まし。此比近所に酒癖が有やら頭痛がしてとしかめらるゝ良つき。寂合點がいたかと思ふしり眼つかひ身の毛よだちていやながら聴たるが今金言となりてよく聞入れたる印に二番めに生れながら慥成親の跡を踏へ。俵の数藏に積て。金袋をかたげさせ。いふ事に槌いきくも十釜頭巾を被て。異見たらたらいはれし。親仁の御影過分至極なり。兄に生れたる者は世間からも親の眼鏡に放れし者と心ある人は鼻であひしらはれ交りうとくなり行ば。類をもつてあつまる男。酒一杯飲ば其日の榮耀これに過ずと面〻のつとむべき事懈るのみならず。其心からの慰事一つもよからぬたくみ。手を懐に入て世を渡る才覺さま〲こはき事共現世後生ともにとりうしなひたつた今の事見るやうな

【二】 上戸丸はだかみだれ髪

上ゝ吉諸白有江戸呉服町を見渡せば。掛看板に名をしるし鴻ノ池伊丹池田。山本清水小濱南都諸方の名酒爰に出棚のかほり。上戸は門通りても千代を經ぬべし。菰きせの四斗樽かぎりもなく飲明ぬれど。終に酒の醉の馬鹿にあはず。是をおもふに武藏野のうちばに呑と見えたり。義理つめ意趣の外は鞘とがめなかりき。よしや組も若ざかりの事大小の神祇組も天の岩戸の靜なる此御時。伊勢守の御膳酒。其御滴に民草の末葉の菊まで重陽の祝義かはらず。永代堀のほとりに。町人の若ひ者集り夜まで間鍋絶す。町さかづきの後みな〳〵氣つよくなりて。男達の咄しにつよい所をよりぬきて我おとらじと語りぬ。力躬墓て云出しけるは。此中に胴骨すはりし人あらば只今より目黒原へ行て印に此さかづき立て歸る人やある。是かけろくにして子細なく歸らば其人一代三年酒をつゞくべし。もし約束せしにゆかずば。其はうより此中間へ鳫三羽出し給へと云。いづれも思案するに

（この挿繪は「一」）

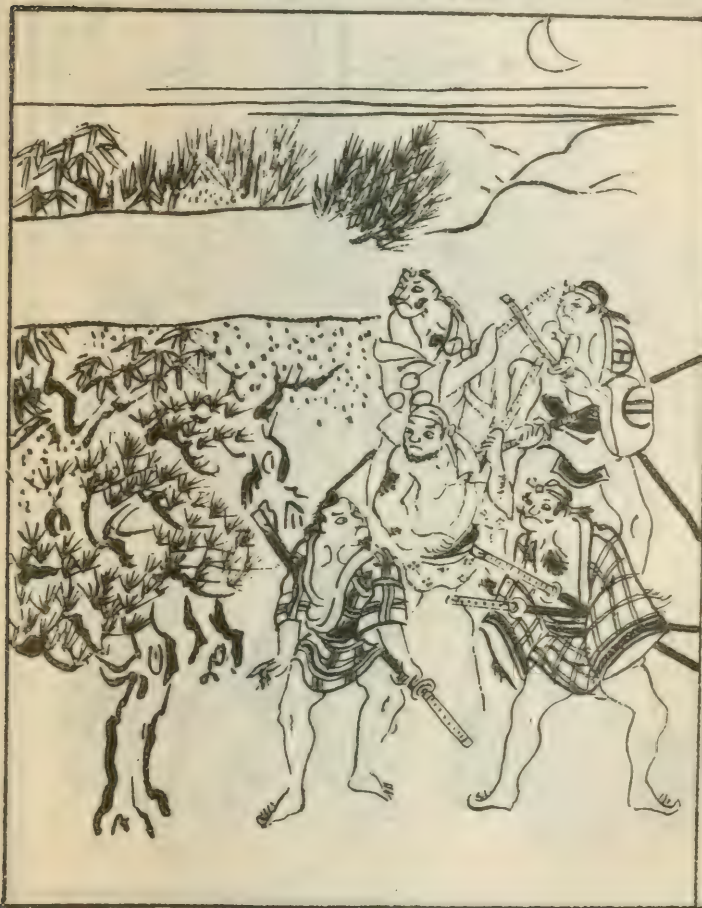
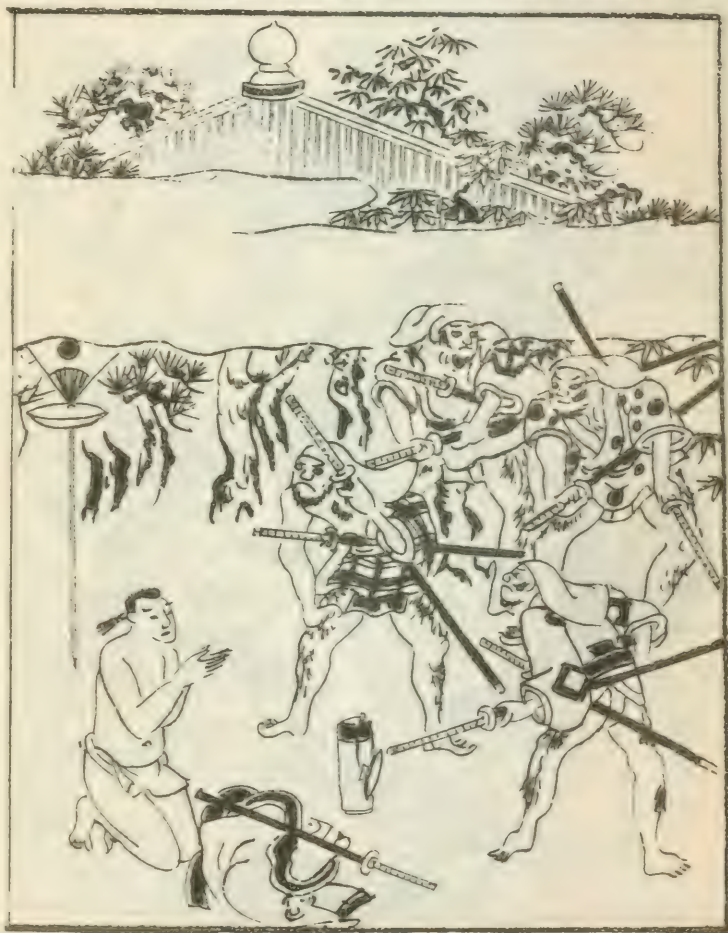
燒石の九太夫といへる男。我行べしと無分別に請合。件のしるしをもつて術を出る此氣力に座中氣を呑れて今の世の間鍋の綱と面〻口を虚けるが此まゝにやりて。かけろくに負べきも口おし。いざ先へ廻り九太夫を怖すべしと。飛あがりの弥吉筆用なしの藤介身緩の茂左衛門火せゝりの德兵衛此四人作り髭になげ頭巾奴子出立のすさましく万事をすてゝ急ぎいまだ驗も見えねば榎の木の蔭にかくれしに。九太夫は吸筒を道の友として寒ひこはひも忘れ。夢になつてぞ來り。され共本性をたがへず。彼の盃を立置時。弥吉闇より出て詞をかけ。おのれ爰をしらすやかたじけなくも不動明王の灵地にて。飲酒戒をたもつ所へ其吸筒は何事ぞ下におけといへば九太夫ふるひ出しかさねては取あけもいたしますまい眞ひら御ゆるしと詫ける。それならばたすくる程に着物も羽織も脱置て裸になつて歸れ。脱ねば是と刀をぬく。成程〳〵御意次第と上下ともに脱ば。おのれは常に横鈹の革巾着に細金入て居るがそれは有か。いかにも是に壱歩七つと銀三十

にも入るべきもの)

目ばかりも御ざりますそれへ抛てしんせます。よう巾着の事御存知して御ざりますといひ捨て逃て行こそおかしけれ。其跡にて吸筒をあけて又醉出し。野を内にして草枕やく躰もなき折ふし。宵不仕合の追剝共爰に來り。酒手おこせとかたはしから丸裸にして一色ものこさず立退ける。四人ながら裸になされ是非なく立歸ればいつとなく醉さめて夜は明。芝にて九太夫に追付段〻因果をかたり。これ皆大酒よりおこれる難義なり。さしあたつて耻かきけるは五人共に犢鼻褌ばかり。白晝に通り町を此姿にてはといへば。九太夫才覺出しみな〳〵捌き髮になつて。立ならびて同音に目黒の不動へ裸參。御緣日ならねど有難き夢のつげにまかせて信心の友五人ながら興も覺て宿に歸りぬ

「三」地獄の釜へ酒おとし

北野觀音寺の晩景一會の事先約あるよし申來候。龜屋も姦敷候へば。糺の森の下涼み申合候。其元の衆中明日御出心事貴面に以上七月十九日武藏樣水右衛

(この挿繪は「二」

門より。あくれば賀茂川にさそひつれ。世を萍の根をたちてのたのしみ罪のない所一休和尚も跣。瓜や茄子を其まゝにと讀給へるも此夕暮ぞかし。水上は山陰の片里より流れたる聖灵棚片器のかけ一蓮託生の蓮の葉苧麻の箸もつもれば比叡を隣に眺めすて。御手洗に慮外ながら足さし浸し。殘る暑さはどこに有やら覺えず殊更雲井に當社の神躰轟給ひで名殘の夕立を凌ぎて此松影にたよる僧有。酒ひとつと進めぬれば禁盃とて取あげず。是は大きなる分別違ひせひにといへば未來のおそろしければ宥し給はれと云捨て歸るを。子細聞べしと各とゝめて酒飲の後生はいかに御僧。答て曰くはしくは大論唯識等にあれ共あら〳〵語べし。抑〳〵灌口地獄と云は。さし渡し五十由旬の煖鍋あり。それに湯玉立揚る程に煖をして銅の武藏野潰膽丸といへるに打とついで。温なる肉を肴にはさみ。牛頭馬頭立累り腕をとり。何も興はなけれど宛ひとつとすゝむ。誣ひられて飲ばこ五躰蕩て断末魔の苦みより堪かたく絕入すれば活〳〵と云て正氣になし。それ

に入えべきもの（

は娑婆にて名を取し呑手共覺えず。銚子の次目今一つとすすむ。いやとはいはせぬ相手また飲で絶入。此ごとく責らるゝ事一日に幾度といふ数をしらず。其とき鬼共詞を揃へ。かならず我〻を恨む事なかれ。汝が好る酒の一滴は廾七十粒より出るを瀝捨呑で不善の業を作る。皆よ所より來らずと云にぞ酔狂思ひ當りて千万悔むにかひなしと語りけるに。まだ足ぬ程の男はそれはそうかと思ふも有。いや〳〵見て來た者なし。樽次底深も今に歸りて語ねば合点參らず。よし〳〵その温燗が好物也。後の世には酒はないかと思ふたればと興がりければ僧は歸る夕の空。皃は入日の朱をうばふ紫野の寺〻の鐘撞て万景見えずくらぶ山。みぞろ池の大蛇と飲くらべてもまけぬ中間もよはき方よりかた付られ。初夜の比ほひ上下入みだれて歸り足衝して御池筋迄歸りてみれば。水右衛門見えず。手毎に續松立て來れる道筋尋れば。其夜のあけぼの紫竹村の堀の流れに。げにも姿は水右衛門轉び落て。腰より下は蛭取附て黒血にあへられけるを。戸板に載て歸り

ぬ。見ぬ後の世はない物にしてから目前に蛭の地獄はこれか

四　おもはくちがひの酒樽

夢を覺せる鐘が崎筑前の湊に舟着て。酒樽一つさし荷ひにして。博多にかくれもなき練屋の木工左衛門樣は是かと。彼樽を庭におろして送狀は跡よりと。いひ捨て船人共は歸りぬ。亭主これを見て大坂の問屋より進物なるべし。北濱にては利發者にして備前屋の何がしといはれ諸國の客を請込。万事のさばきする程にもなき男なり。何程の酒にもせよ。某も名酒を造る宿へ。酒樽の音信さりとて不才覺。此樽へ天滿宮のまへの大根の細漬をしておくりければ名物にて珍しき物をと此心入を大笑ひする所へ。備前屋が手代門口より袴肩衣を着て。愁を顏に顯はし。居間へあがりて手を下げ。口上いはぬ先に涙ぐみ世は定なし加樣に申 私から只今もしれぬは人の身。御歎なされてからかへらぬ昔なり。こなたの御子息木工之介樣事六月七日の晝前に頓死あそばし。何れも驚き先氣付藥針立灸

などさま〴〵に。療治残る所もなし。兎角は是迄の御命御死骸を共まゝ是へをくるの折ふし。世間もぬくみ立ぬれば酒塩漬にしておくりけると。申もはてぬに各立かゝり蓋をあくればさのみ形も替らず。月代をすりすまして跡さがりのあたまつき。死でも人の目に立身には紋羅に紅裏付て。女郎と若衆との二つ紋に鹿子の紫帯此美男そもや上方にも有べきや。いまだ廿一にして親を残し先立かと。母殊更に悔み。なじみなき妻も若後家となし。思ひもよらぬ無常を見る事よと。今是なき涙に沈みぬ。せめて末期水事過てなり共と申されしに。乳進らせて育あげたる姥が常住御好にて有しに水より酒をと良にそゝぎける其後大坂へ付てのぼしたる小者に㝡期の有増を尋ねけるに。徳蔵泪をながし。木工之介様の事今又申もおろかなり。お國よりは各別御酒あがり。寝酒よりすぐに朝酒に呑つゞけられ其御機嫌にて芝居へ毎日御出。狂言のはじまる迄は太左衛門橋筋の茶屋者と遊て藝はそこ〳〵に見てそれより舞臺子を呼酒に乱て暮かたより新町の

九軒に行て。宵から仕舞太皷までの長酒。それより駕籠にて上町の借座敷に色よき妾が玉子酒して待が面白ひとて。夜明方に浮世小路に仕出しの後家有て是に定て味噌酒をあがりて明はなれて宿に歸り給ひ。向ひ酒とて又參り。蓮葉女に御あしさすらせ給ひて夢も結ばず又南へ御越二月四日より六月六日迄一日もかはらず此通りと申せは。何れも興さめて鐵にて丸めし男も是ではたまらしと悲しき事外に成ける

西鶴俗つれ〲　巻二　目録

一

只は取ぬ物は沢山（さいまつ）書使
銀より見る物は傾城（けいせい）

銭なしに五貫の水
当町人の下屋敷
当世座敷の当座帳
損を承知の色商ひ
御合力の焼くもの

二

竹の七賢ハ
竹の中にたち住て

茶漬け一ぜんい小判千両
あいの盃あり色ふかく
又あらひなきさかな
酒女十人あつ人酒徳
二階かハ酒盛さかん

三

かしのめやハ
ほかなるし

まし絵屏風錦の中
酒肴に心をつくされ共
男まへハ不器量
今の世の中ねぼけ
無常にも見ず人の哀

〔一〕只取ものは沢桔梗銀で 取物はけいせい

くばり札をもらい又太夫が舞を聞果て。皆六十にあまれる親仁三人。濱茶屋に腰かけて足もやすめず。さりとはむかし作りのかたひせんさく。味噌塩焼木または利銀のおさまる噺して。けふの暑をあふさかの清水にてしのがんと行程に。久兵衛が西請の座敷入日はさはりなれど。風のためには折ふしの昼寝所と人〳〵の心うらやましかりけるに。いかな〳〵人のうちへははいりもせず。玉垣より外なる捨石どもに休みて。浮藻かきのけ岸には牛の足がたもかまはず。是ぞ日本に七所の名水と手してむすびあげ。腹ふくるゝばかり呑て。野にはたらく男の火縄きせるをかりて。然もかへるさに佛の花に是よと。共まゝしほれる沢桔梗を手ごとに折て。長町のうら道を詠め。今の難波のいたり下屋敷に。中二階のすだれまきあげ京から取よせたる大名行の妾もの。又は舞臺子のしやれて紫の手ほそとり捨男成けるもおもしろし。髮切すがたは加賀笠のこせんとや隠れもなき者のあるよし。あるひは男にくみのころもびくに。世はさま〳〵の遊興所。琴の遠音ひとへぎり名の木かほりに。葉のけふりも立消するなり。ひさしく見ぬうちに是は〳〵此ひかしかわの二三丁目にて。二百目屋敷の時買て置ば今三貫目やしきに賣て。よき商ひ事をする物をと何に付ても筭用をいひゆくに。笹垣のほのかに小倉ちゞみの帷子に段染の畳帯して。ひちりめん内衣龍田に紅葉ながら女にはいやといはれぬよきもの也。黒髪なんのやうすもなくひとつに集めて。半紙の引割にてつゐ取あげて。かつて色作りたる風情はなく。淺黄緒の京草履にかたしは糸竹の男形はきませて。四十あまりの食焼らしき女とならびて。葉にんじんのこまかなるに松菜などいふ物を揃へて。醤ゆがけにしてよ茶は我等が焼ぞと。火うち石に男らしき音なして。あがり口に片尻かけてきる物のすそ乱れて。くれな井のうちより雪をのべたるあしくびよりすこし上まで見えける。三人の親仁夢のやうに成て今一たびうつくしき皃が見たひ事の。最前のありさまは。君がため春の野に出若菜摘とよみし。むかし公家の娘も是にはとなづみて。竹垣立さらねば人もとがめける。竹の子ぬくにはあらずあの上﨟はいかなる御かたと問ば。あれは冨士屋の吉田殿子細あつての隠れ家と小語ける。さてはけ

たかきもことはりよ諸〳〵の神さへしたがへ給ふよし旦殿と。是ありがたくおもひ込其中にもひとり親仁。あの女良が心まかせになる事ならば五匁や三匁の銀は惜からじと。おもひきつたる事をいへば扨も太氣なる事をと二人笑ふてまことにせされば。此男すこしせきて前巾着をさがしてこまがね五粒にて四匁七八分もあるべきを手の上に居て。後とは申さぬげん銀にかくのごとくといきるうちに。壱匁たらずのまめいたひとつ大溝に取おとし。是はといふ声ひゝきわたり。身のよごるゝをかまはずさがしても見へざりければ。二人も見かねて二時あまりたづねしにつゐに行かたしれずなりぬ。此親仁大かたは狂乱して惜や今の銀のゆくゑ。我一代のしそんじと世間かまはすなみだをこぼす。兩人しやうしにはおもひながらいかにしても銀づくなれば。合力ともいはれず菟角はこなたのそんと。足の立ぬを無理に手を引さかい筋より過書町に帰り。なを此銀をなげき鉢巻してうめき出し。惣領枕ちかくによびてはじめの次第をかたり。銀おとし

たる所をこまかにしらせて是非に若ひ目にて見出してまいれといひ付られ。男にちやうちんもたせ夜道の用意までして。親の氣をそむかず其所に行てせいもんのために溝をのぞきて。いざ歸れといふ時彼吉田をちらりと見て。かねく我等が根びきにせんとおもひしに。はや人の物にして爰は堪忍のならぬ所。井筒か小太夫かを抓んでかゝる下屋敷ものにしておかでは一分立ぬと。それよりすぐに色町に立越。かしらからばつと出て太夫請出す談合に夜をふかし。いよく二人のうち壱人さのみなじみもなけれど。せんしやうばかりに請るといひふれて。女良もそれ程に滿足がらぬ事に六百五拾兩の內證やくそく。亭主落付ためとて紙入にありあはせたる小判三拾兩。わたして二たびかへらぬ金子殘りは四五日に才覺して。お内義長町の家見に何をもつて御出と。笑ひ立にして立歸り親仁の手前へやうくさがし出しだと。それ程のまめいた一粒久七と口をあはせて出しけるに。是はとよろこびあんどうちかくよせて。目かねをかけて此銀をのぞ

き。いかな〳〵我等か心覺への銀にあらず。弐分あるまめいたまで三星の極印をうち置ぬ。此銀は吉の字極印親からゆづりのとつて置銀。是は不思義と内藏に入てせんさくするに。共戸棚はかるく大分ゆきかたしれず。此親仁目をまはして是ぞ因果の百年めと。何かなしにたゝき出されわづかの事より惡所あらはれ。あはれや身の置所もなかりき。是程しはき親の子にかゝる者もあるなれば世のさま程おかしきはなし。今はせんかたなくて玉造出はなれに草の屋かりて。埒もない女を定め渡世の種もなければ。深編笠に大わきざし日比ぬきあげたるひたい口。今似せ牢人のためと成家〳〵に入て。舌をなやして作りなまり是は御合力買とて。壱もんづゝか灯心のつきつけ賣さてもはかどらぬ世わたり。戀の中の〳〵中宿よりかくし衣裳の物好。山のはそめになゝこ織の道服着て。北さまといはれし事も去年の五月まで

【二】作り七賢は竹の一よにみたれ

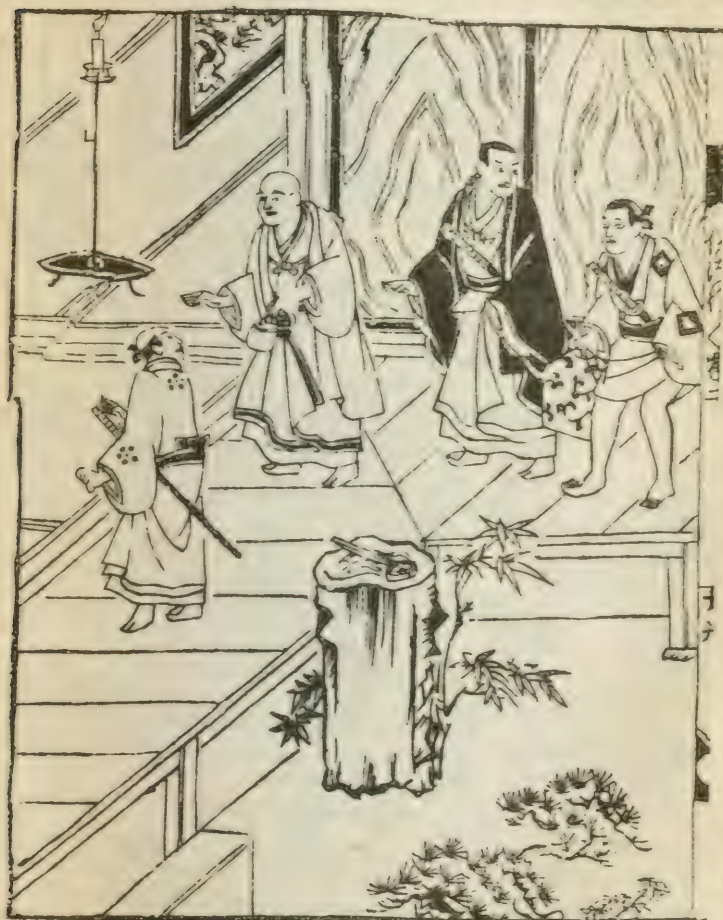
見ぬ國の親仁ども。竹の林に遊んでうき世をみかぎりて樂しみけるを。和朝の難波津や八間屋といふ所に。家榮へたる樂坊主。同じ心の友二人住ける。其身世にあるほどの事にかしこく。しかも哥道に心ざしふかく。人の鑑ともなれり。とに渡世の業は。よろしく勤ける手代にまかせ置。何に付ても殘る所なき身仕廻。諸人これをうらやみける。明くれ川岸に竹の腰かけをなをさせて。無藝の座頭。はやらぬ針立坊主。かれ是心まかせの目下なる友を集め。いつとても七人唐やうにかまへて。あたまは中がりにして。髭剃ず。朱骨の扇子に風をまねき。しゆろ竹の杖つきて。居士衣の紐を高くむすび。茶瓶に。面〳〵天目を手にふれ。言葉に子細をこめて。古文めきたる皃つきして法躰の後十四五年も暮されしに。世の人この心ざしを恥入て。芝居遊興のはなしさへ深く遠慮して。是ぞ和朝の七賢組とて。物がたくみへしに。川舟にむらさきのぼうしかけたる野良あまた乘て。大和屋座のはやしかたども。大かた二階にあがり。四でう三味線を引かけ。一のやの十郎べぶしを声そろへてうたひ。京歸りの辻といへる大臣を。夜もすがら。佐太宮までおくるなといひて。萬は南江の座敷屋。砂の加兵衛うけたまはり臺所舟に四五十人まへの膳ぐみ。髭篭もりのさしみ。ひとつで出すと見へて。才覺らしき男が。箸をうつてま

はる。又すこし跡より小御座に幕をおろして。人をしのび良に女中の声のみして。十二三の少女。かしらはつねの嶋田に取あげしか。いかにしても身ぶりのりこんなるは只ものとはおもはれず。つき／＼の女までもぬるき風俗なくて。世間に幅廣の帯のはやる折ふし。中幅の前むすびは悪し。弥七庄左衛門都の末社まじりに。大夫さまより禿やり手を見をくりける。西南の二色あそび。榮花是よりうへの有べしや。嶋原よりは三文字屋の男がつきて大夫左門さまのやり手が御機嫌のほど見舞にくだり。京へつれまして歸るを嬉しそふなる良つきなり。此法師の人間にかはる所はなきに町人ながら。銀もちたる威勢にて。かゝる浮世のおもしろい事にあひぬ。前の生でよき種をまき置て。今女郎にぬかすり髭とは生出けりひとり目のあくまでひざ枕して公用の外は銀まふけの事にも起ず。我一代にせめて。一藏明たしと。随分物の見事にさばけれども。銀もつかふつもり有物ぞかし。ついに此大臣。一歩を人にやる事をしらず。日外茨木屋の茶づけめし勝手のいそくにや。すくし茶のぬるきやうにおもはれて。今一はいといふ時。其盆に小判十両入て內證へおくられしも。此道の帥めきておかしやう／＼此舟。八軒屋の濱につけて。砂の加兵衛かけあがり。此あたりの荒物屋をさがし。今二三本たらぬ。しやくしを買求めて。供舟に飛のればよき次手とあがりて。垣ねに立ながら小便するもあり。夕風南のかたをよけよと。まんまくをしほれば。物いふ花どもあらはれ。中にも三瀨八十郎が手にふれし。盃をその中で。おあいたのみますとなくれば。吹田といへる法師の前に落とゞまりてとかふいふ間に其舟はさしのぼして。思ひの外なる形見とはなりける。是はひとつ呑所と。その／＼ひとつ心になつて。間鍋でかよふ事とけしなく。後は七りん取よせ五升樽も大かたにかたふく。六月廿日あまり月の。須广の山の端に今すこしと見し迄色咄しに乱れ。身をかためし事も。浮雲の中をくゞりて。誰が人魂か。ひつかりと筋引て消けるいづれもつね成しに。伊丹といへる法師の是をみてさとり。今もしれぬは人の身。分別する程。わけもなし。明日はとうから／＼狂言づくしみんと。同じ心の。二人法師。けふは移りかはりて。野良にあそび。なをまた戀につのりて。丹波屋の小琴。こざつまにあひなれ有時は頭巾なしに。格子に立よりおこと／＼と七声よへばと人の聞をかまは

す。目のうへまで情にはまり。おそらくをよく〳〵。へうたん町に身は捨小舟。引ふねつけて一万日成とも。この君達の。年のあく日が。ゑかうじや。此坊主ども。二挺かね。たゝきあぐる合点じやと。外にかはりての物好揚屋うつは物では。茶も酒ものまねば諸事物入に仕かけ。老木の花はよろこぶほどやりて。つまる所の算用が。一年に百貫目づゝと極て。大晦日をおどろかぬ内證。中〳〵女男のふたつもおもわくの外しすごし。人のゆびさす所を思ひはかりてやひとりの法師。家はかはらずつゞきしに。世がおもしろからずと時節ならぬ無理死。さてもおもひ切ける身や。人のをしみしは。人にあしからぬゆへなり。またひとりの法師を此友にはなれて。何か甲斐なしとおもひさだめ。其後は世上をやめて人にもあはず只ぼうせんとして。月日を過し。とかく此世に我心にかなふ人もなければ。片時もはやく夢路をいそぎ。彼法師ならでは。夜が明ずと。ともしびのもとに無常を観じ。せひを極めて。心にかゝる反古さらへて。既に最期の時。一子七

歳に成けるが。人なみよりはうまれつきて。道しる書物のはしくれも。はや讀ならはせて。すへ〴〵たのしみ成けるをおもひの外なる。親の所存。ちかふよびよせて。いひ聞せけるは。我子細有て自害する事なり。しかれば汝あとにのこして。人〻に沙汰せられ。㒵ながめさす事も口惜。人みな夢なれば。父とひとつに死すべしそれも世にながらへたきと思はゞ。ともかくもと。いひければ。しばしおどろきたる氣色にて。泪をこぼしけるが。其座はたゝず。さしうつむき。わたくしはひとりは死かねければ。慮外ながら。さし殺して給はれと。胸を明て。座をくめば男はそれよといひながらも。さし通す手もふるひ。目くれて前後心の闇なるが。死骸のちしほをあらひ流し。ゆたかに枕させて。其身はたしかに。ふへかき切。何か殘る所もなし。是さら〳〵乱氣にあらず。覺悟の事とはいへど。思へば我子に。うきめを見せしは。もと是色道の乱よりは。かくはなりぬ。人のうちの人形の人さへこれは增て愚なる人の慎べきひとつぞ

一二　まとのあやは後にしるゝ

三途八難の苦は女人を根本と。南山大師の法語也。まことに女程あさましきはなし。外面は菩薩に見えて内心は夜叉のごとし。されども世を立る人の男女なくては成がたし。今時の風俗いかなるいなかそだちも風俗各別になりぬ。嵐もつらきとながめし櫻がえだを焼木になせる山人も。花のかゞみとなる水に鬢くしをひたし。汐扱あまもうねたびはきて浦山敷時世にあへり。備前の國は夕浪しづかに瀬戸のあけぼのゝ美景は。西行ほうしが是はと横手をうてる所ぞかし。爰につゞきて牛窓の嶌崎は人家ありて。然も諸人のこゝろざしやさしく次第にはんじやうの津となれり。此所に森村氏の何がしはじめは世わたりのために獵船手づからにさし引かしこく。年浪をかさねて後分限此里にのきをならふる屋作なく棟たかふして住ぬ。杉をしるしに小嶋酒といふ名物の商賣するに。正直のかうべに松の尾大明神もやどらせ給ひ。下戸も上戸も此家にかよひ樽の道せまく。福徳の

五十年一代のうちに此濱の人の鑑と成ぬ。夫婦貧家の時よりたがひにかせぎ出して。今老樂に節季の寐覺も氣遣ひなしに明ゆく春をいわゐぬ殊更ひとりのむすめ美形にして其名を錦といへる事。浦人の子にはやさかたに聞え傳る。母親の才覺にて京より御所がたの作法心得たる女の諸禮者をよびくだして。にしき十一歳の比より是を付置萬事都を移しけるに。すこしもひなびたる事さつて見し人思ひの種と成。彼是のしのび文ひとつふたつも千束と成。東路のにしき木もかくあるべきとおもひあはせり。ゐいじあげまきの程過て當流のなげ嶋田。女は髮かしらといひ傳へしごとく此息女十五の秋に見れば。山の甲斐なく木〳〵の錦は此娘に詠めかえてふるされける。あまた縁のいひ入ありしにひとりのむすめなれば。よろしき人を聟にもがなと世間聞おはせける極めて吉日におくりける。七月七日の夜星のはやしもかゝやき。妻むかひさに。我すめる里にはなくて阿波の城下徳嶋の町に。おもふまゝ成事ありて約束ゝめきて丸に花菱の紋ちやうちん鳴門

の浪に移ひ天も酔るがごとし。是ぞいにしへ奈都の都よりもろこしへの嫁入もかくありぬべしとおもひあはせり。既に舟着より駕籠つゞきて仲人鼻たかふして聟の許に入て。引合のさかづき事かづ〳〵の祝義すぎて。匂ひの玉を大房にかざりつけたる蚊帳の釣手長枕を取乱す時。人をよびいくる声〳〵せはしかりき。氣付よ水よ灸針もかなはぬとて泣声とめ難く娌君の事は外になしける。こゝろもとなくてたづねしに。聟殿頓死といへば女の身にしてはなじみある人よりはかなしさひとしほ増りて。人の取沙汰を歸り見ず勝手口よりかけ出死骸にとりつきなげきぬ。是程はかなきうきめにあふ前世の因果なるべしと。我身のうへを悔み二たび里には歸らじ。姿をかえて夫のための後世ぼたいの道に入べしと。一筋におもひ定めてさげ髪の中程を思ひ切かゝる所を。おの〳〵取つきやう〳〵きやうくんして四十九日目にいかにもならせ給へ。めしつれらし女房ともみな〳〵御發心御ともつかふまつるべし。迚も道心の御願ひ何か世のおもわくを恥させ給ふぞ。お里になげきかけ給ふは是不孝の第一といさめて七日のしあげ過て。なみだの海を是非なく歸る浪の是ぞ火宅の車舟うしまどにあがり。一間の奥に取籠外なく念佛慕しぬ。それ日數ふりて親達またも縁付の內談ありしに。はなれきつての出家ののぞみいろ〳〵とめても聞入されば。後には異見の品をかえてなんじ孝行の心ざし僞りなくば。後夫を求めて此家を立べし。親の心をそむき身をたすかる佛法ありやど道理にせめられ。あやまつておもひとまり其後岡山より歷〳〵人の二男を入緣に取。万事を渡して親仁は隱居しまひ世におもひ殘せる事もなし。此娘入聟にはじめの夜心底の程を語りて。親孝行のためかく夫婦のかたらひなすといへども。さりとは心にそまざりきまつたくおぬしさまを嫌ふにあらず。身を觀すれば夢なるかな。錦のしとねをかさねても人間つゐの烟はのがれがたし。菟角後世の心入つど〳〵に語り至極のなみだにしづめば。入聟是を感じ心やすかれそなたの望みにまかせ。二親一生のうちは隨分ねん比にあたり死去の後我もろとも出家になるべしと。二世かけて約束かため。面むきは夫婦のかたひして同じ枕はならべながら。夢にもちぎりをこめずして十一年すきしうちに。父は病死母はのこりてひさしく孫子のなき事佛神をいのり給へどさらに其甲斐もなひはずぞかし。是もよる

年の惜からぬ程にしてむなしく給へば。今は願ひ発心と夫婦一度に髪をおろし。財寶親類わけて所をさつて備中の國細谷川の奥山居して。むかしの人にあはず二人とも佛道堅固に勤めける。此事人皆不思議のさたせしに。子細を京よりきたりて朝暮付添たる女のかたりて。聞人かんるい肝にめいじかゝる事世にためしなし。親の命をそむかず男は持ながらつゐにさいあいの道を断て。今の世の中將姫是ぞかし。殊に夫の心中末代のかたりくこれらなるべし

西鶴俗つれ／＼巻三　目録

一　世上ハ嘘きの絵姿

乱行のなれゆへ
自ら二日ハ父母の命日
男にうくる世の恩暮
又大仏の柱建立
も茶の万金を無の道

二　酒はあらは　菊の花

ちそうのなし
酒ハ肴の傍点ヘ
くらわかきの秘伝
世中そくさいさ
めし卯つらし

(三)

一滴(てき)の酒一生の命やまる

まそうしきも母の恩の
枕に夜な〳〵ねむる
むその頃のかなしさを
深き御恩を儲けるを
日の暮がた夜明ハ御

(四)

酔(ゑひ)ざめの酒うらしを

女房ハ若人ハう
夫婦の中に一福ハ
善前漢山椒の令かう
令とハかと他の御ハ
三林女つの和を識

〔一〕世にはふしぎのなまず釜

名利の千金は頂を摩るよりもやすく。善根の半錢は爪をはなつよりもかたし。むかし南都の大佛こんりうの勸進坊諸國をめぐらし時。大坂より泉刕にかよふ擱買あべ野海道歸るに。住吉の里はなれより一錢と進めしに。此商人聞入ずして先に立ゆくを跡をしたひて氣根くらべに付ゆけば。随分しはき者なれども此御坊に我をゝつて。天王寺の石鳥居にて百ざしより壱文ぬきてなげ出し。是しんじんの一錢にはあらず是までつかれし勢力をかんじぬ。其心さしにては大願成就すべしと。せちかしこき事をいひながら出茶に休みて色つくりたる女と。しばらくうき世の事どもを語りて立歸る時。二十錢あまり置てゆけど此女は嬉しき良をもせざりき。其大佛ひさしく燒野に立せ給ひ雨露雪霜にみぐしの損るも見るにかなしかりしに。今又ひとりの沙門建立の願ひ國〳〵に通じ。奉加の心ざしふかし爰に吉野の片里に。天の川の神主何之進とかやのめしつかひ下女。若年の時二親にはなれたのむべき一門もなく。此旦那を親にして奉公にわたくしなくて。あるじもひとしほふびんかけてすゑ〳〵は我世をわたる緣の事までも聞立ける。此所のならひにて惣じて男は家にありてうちはやしに日を暮し。女は山畠に出て鋤鍬を握りあるひは谷水をになひ。柴をいたゞき牛を引男の業にかはれり。此下女つね〳〵人毎にやさしく月に二日は父母の命日とて。野邊に茶釜しかけ嵐の落葉を拾ひ是を燒火の種となして。はたらく野女の咽どゆかはきをたすけしに。みな〳〵是をよろこびひとつに集り田植哥を同音に。山もひゞきわたりていづれよねんはなかりき。此釜にめいよの德有。朝にしかけゆふぐまでかさねて水をさすといふ事もなくて。数百人して呑得とも見えず是重寶のひとつなり。此事傳て里つゞきの山寺に盗ゆきしにつねに持る事なし。法師腹立して瀧津川の淵になげ入しに。沈みて跡なくなりぬ。下女わ是をなげくに年へし大鯰是をかづきあけで。二たびくどく茶を涌しける。いにしへ念佛行者の鯰鉦今又鯰釜と里人のいひならはせける此女の世なき親に孝をつくせる心ざしをいたはり。田かへし畠うつ事も大勢の里女いとなみたすけしと也。傳へ聞し見ぬ唐土の象てんせいのめぐみにも是ぞおとるまじき万人の心ざし深し。其後

彼女奈良の佛の奇進に。是兩親のためとて朝夕わが面影うつせし丸鏡をあげて。長者万金ひんによの一鏡とそのひかりをならにあらはせしはかの。大佛みくしそのほかそんじ給ふをゐものしをもつてゐさせたまへともところ〳〵にあな明成就のかたちを見たまはす勸進の沙門いかゝとあんし給ふにある夜の夢に三笠山より鹿ひとつ來り彼鏡を角をもつてたゝくふりを幾度もせしと見たまひ扨は志のふかき鏡なるへしと是を湯にしゐたまふにたちまち。滿德圓滿の釈迦の像と拜まれ給ふ皆人聞傳えて感涙をもよほしけるとかや是ひとへに孝のふかきよりなす所なり

二　惡性あらはす螢の光

都の辰巳宇治の夏川涼しく。螢の火花夜の詠めは吉野まさりと。昼より模よ

ふして馬はあれ共歩行路の友。木幡の舞鶴。いづれかあしからず。大宮人の里に待あはせ休む重荷に小付の樽。京御前酒。爰に住ばこそ地下人の口にもの名酒を揃へし先は花橘　井堰重衡柳　あへり。上戸中間の長者町のおの〳〵

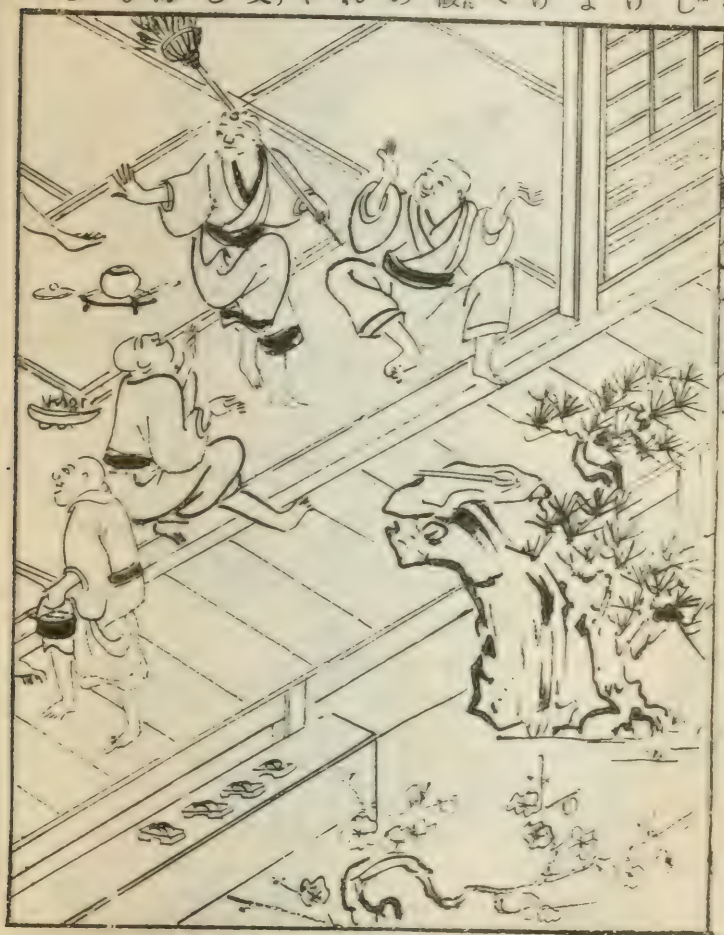
河原の役者まじりに。立噪ぎ行に朝日山も夕暮ちかくなり。虹はうつりて掛橋の詰なる通圓茶屋にしばらく川音を聞しに。水の水上の清く。さし下しくる笹舟に乗てさゝれ浪のはやき瀬に行て蠅がしらの鮠釣玉狭網におとしかけて是を手づまの利し人は間もなく数釣けるに。素人はひとつもかゝらぬ事の口をし。是に傳受ありとて祇園町清藏といへる者花崎左吉に傳へて印可を渡しぬ。此一流にて手の中を覺へ釣ずといふ事なし。物毎に鍛練有。嶋原の局女郎に淺野といへる者爪をはなつに細小刀にして二牧にへぎ。いたまぬやうにうすく指に殘しける。此程は太夫天神に至る迄此淺野を頼みいたいめをせぬにて。よはき女も爪はなつ事がはやると大笑ひして人の身の上をかきさがしける。其中に品こそかはれ勤めは同じ野郎の口から客の咄を聞覺て無用の惡事と。いづれもきかぬ㒵して酒呑けるに。此若衆我姿の浮出る大盃に請て。彼是名の酒數かさなりて我を忘れ人も聲高に成時螢暮まち兼て飛出るを此野郎扇に打留ておのれも尻貢に爰迄來た

か。いまた襧子そふなほどに律義千万に人まかせに成す　の足のもじりやうも知まい。延紙の仕舞所は肌着の上替つま先を綻ばせ置て是へ隱し素客にふしぎからす。其外痔の養生粕味噌の行水我身の秘傳くすね拔の毛の穴迄を問す語の懺悔後には聞人うるさし。是を思ふに宵より過たる手樽が物いへり

三　一滴の酒一生をあやまる

家造らんには夏をむねとすべしといへり九月の末つかたには合羽に氷柱のさがる北國も暑は凌がたし。越前の永平寺は世塵を遠ざかりて蜀魂も早く聞ゑ會下の詩人も魂を樹頭に飛す。未明の垣根に咲る花夘木夏ながら雪の夕暮かと思はれ遠里の蚊遣火。煙絶〻なるに筧の音の幽に。此山に住ば自づと持戒なり唱ざるに松風おのづから法の聲。竹窓は衆寮立ならび數百人壺をあつめ壁を穿ち勤學にいとまなく。あるが中に智辨といへる僧の老母國郷はる〳〵の所を此歳ばかりの命のうちに我子の住る山ながら靈地拜みたき願ひに

て。今更までの旅路の難義抑はいやしからぬ人なりしが。思はざる仕合有て一族みなたえ。杖にも柱にも此僧一人を頼みに未來佛の御詞にたがはじと。自もたのもしく此世は見はてぬ夢葉末の露の消やすきを。松か枝の根ばりつよく腰のぬけながら其年もくれしに。此僧きはめて孝なる事氷に臥せるたぐひ夏は蚊に身をあたへし。つぎの秋より煩付て思ひもよらぬ老母を跡に殘して。廿三霜夢一場の偈作り眠るがごく終りけるを。山陰の霧煙となす行衞はしらぬ身の果。をしからぬ命はながき老母の歎き大かたならずおはせしを。加賀の玄海といへる僧にくれ〴〵病中に頼み置けるに。頼しくも頼まれ智辨にかはりて孝を盡されける心さし殊勝にこそ。惣して老たるをば父母の思ひをなせとあるに。今の世間を見るに眞実の親にさへ終日無禮のみにくとの薬物まで心をつけて。麓の里の片らすに。奇特千万の玄海が心底と。入庵に自身持運びていたはりける。其年みな感し入ぬ。朝夕はいふに及ばず折も暮て明れば春たつ嶺の霞。溪の鶯

法花經の安樂行品讀初給ふ事開山の記錄に見えたり。正月は衆寮にあつまる僧も摸相をゆるされながら。過し夜學の空腹を忘れす法衣の餅を鼠とあらそひ歲旦の詩も淵明とまけす。酒事催して梢に殘る餘寒を防ぎ。春山花は遲けれども。たま／＼都の由的順正が席より東山に遊ぶ心ち。樽の口に硫黃まげて。榼子椀にて汲など肴なきかといへば。納所坊主に輕箔云て玉味噌の片破も千金にかへず。一つ飲出すより例の浮藏主が聲明聲の淨るりも可笑それにつれて常は座禪眼の玄海も好もしく飲かゝるより獨りして拍子とり。方丈へは遠しと稀なる思ひ出夜の明るもしらずかたはしよりかたづけられ。玄海獨殘て書院へ御足して行と見へしが。敷居を浪枕。月舟和尚の墨跡にえならぬ物を吹かけ前後を知ず。二日醉過て三日の暮方に日は西に入を朝日の出ると心えて。起あがり我寮に歸れど猶ふらつく頭を惱み。憐なる僧を賴て老母見廻しけるが。常さへあやうき三輪組玉のをの絕ゝなるに。三日食を斷れ元より膝行もならず。はやときれ給ひた

ると歸りて語れば。玄海驚きおもへは三日とふらはず。年來　忽に不孝になりぬ。大きなる過是一杯より起れり悔てもとらず

四　醉ざめの酒うらみ

むかし唐人の細工に十分盃とて。人の心をつもり物にして是をわたしぬ。月も滿れば闕るの道理。万を見るに目八分にかまへてひとつも違ひなし。中にも酒といふ物九分に請ても漏れやすし。其上戶相應に六分に呑べしと御三寸大明神の御詫宣なり。是でおさめた日本一の機嫌千秋樂には民百姓迄もよいといふ程を知べし。神代の大蛇も十分をひかへ九つの壺を呑盡るさへ其身を失ひける。東坡が竹は新酒の驗のために晝。劉伯倫瓶車の後に鋤を持せて。我いづくを定めず飲死せば。馬頭山の麓に埋むべし。土器の細工人の手にかゝり。二たび酒德利の土にもなるべきねがひ。是らは酒を好みて强ち心のおぼるゝにあらず。花山湖月の風景に遊びて詩文を作れる種なり。今又世の人の故もなく酒に長し。それ〴〵の家業

を忘れぬ。古の奈良の都の諸白所から樽の香を覚て。とにもかくにもねぢ上戸百万の厨子といふ町に生駒屋の傳六とて下女に上機織せ。麻布の細元手を漸々に仕出し折ふしは鱶のさしみも喰。春日野の千本の櫻も見に行程の心に成謡も自らに聞習ひ。水屋能の見物にまかりしに猩々の乱れ是一番外は此酒の禰宜と咽を鳴して謡ける聲のおかし。其中に面しる人の社人ありて見付られ。あふた所で編笠ぬげば。飲次第の杉柄杓神の物にてもてなされかへり三笠山。十四五もあるやうに見えて足もとさだめかね。我宿はふしぎに覺え門口よりさはがしく。何の子細もなじみの女房をいやと思ふから今宵を待すと。去状書てなげ出し親里の佐保川へかへれとこいふ女たび〱の酔狂にあきはて。渡りに舟の心ちして尻に帆懸て出て行。其後幾人かよびて暇をやり。此物入に身袋うすくなり。冬も袷重の見苦しかりしに。又縁ありて三輪の里より呼込しに此女神姿かと疑ふ程にうつくしく然も夫大事に掛て世のかせぎにいとまなく。五年あまりに家

榮て瀑布の中買と成。樂を悦び此家の寳は手足のうごく女房共なり。異國より渡したる三つ寳にも替じと自慢をするもかゝる妻を持る男の仕合と人皆浦山敷取沙汰しける。なを相生の松飾りて春のはじめの蓬萊。爰の都にし肴おの〳〵屠蘇を汲かはし木辻の正月買の噂秃なしの十五も里のならひにておもしろく。意氣地立る女の事此年迄見ずして。聞さへ酒も飲たる物ぞと俄に勘六氣を移して。人より先へ内にもどり例の四の五の言出し。内儀を遊女のごとく宵の咄を今更我を悪からぬ心中ならば小指を切れといへば。内儀驚き夫婦となれる身のうちいづれかこなたの物にあらずや。心よく春の初枕よい夢に當年の仕合を見給へといへば。勘六眼色かはり。扨は此男をふるとしれたり。是非きれさもなくは今出て行て親の許へ身あがりとやらをせよと。我を立ていひ募にぞ女心にかなしく。さもあらば爪放ちてそれにて堪忍あそばせと泪に沈て詫けれ共。中〳〵合点せす。せめて髪をきれと押付て髻はらひければ女目もくれ心も乱れ惜むにか

ひなくて命つれなくながらへける社うたてけれ。男は鼾に前後覺へず。常の夜も明て女の替りし形を見て歎き出し。世間の外聞親類の手前そなたのおもはく。かれ是命あつてはと思ひ切を内儀さま〳〵に詢留られ。向後呑とまるべきは是にこりて盃 間鍋鈴徳利肴鉢酒に出合程の者を〳〵く打割て。今迄は元日より大晦日迄腹中に醉のない間はなかりしに。けふより御下戸となりて蘘荷漬山椒にさへ怖て急度其身をかため。女房の髮の延る迄は赤手拭をかづけ物ぞかし

風流俗源氏巻四　　目録

一　孝（かう）や不孝（ふかう）の中に有金

世帯ハひとり娘の宝
ほしてなくされたとさん
さうおハ若子の浮づけ
金ハ一夜の夢らき
今ハ世の人のなかめ事

二　嵯峨（さが）の隠家（かくれが）　好色庵

あの不利なる恵
若人あやうき事
金子千両の黒騒（さわぎ）
勝え女ハ天狗たのしと
やつまてのまん身の
おもて

三

汀乃原ノ袖
色ふかし

四

あまたぞ妹背の
まろ山

情ハかく流こす泪出し
手あやげハ鬼のめん
ひとのこいきてつし
子西念仏ふみさ女
ひまんゞの狸の宝物

かゝなり千歳こけむさと
ひとのこまうま大棚袖
吉野の桜ふりさ女
ぬつはやまふめつきの二人
莵道之称現も仁見え
あげく

（三）孝と不孝の中にたつ武士

清貧はつねに樂しみ。濁富はつねに愁と。光明皇后の御殿の屏風に書置せ給ふと也。いづれ世の人心程さま／＼なる物はなし。駿河のふじさへ煙は雲にかはり雪と成風と成。雨の時は詠め絶て折ふし五月闇。道中姿の合羽も物わびしく。袖の湊のふる里思ふ筑前の侍ひ。東武のつとめにくだられしが日数定まつての旅いそぎ。安部川の夜わたり瀬にかはりゆく石道の難義。やう／＼宿にさしかゝり供まはりにも言葉をかけ。きいたか今のほとゝぎすなかしおもふ草の庵にともし火見ゆる所にて。消たる灯挑をともせと小家がちなる戸ざし氣をつけて行に。にしかわの人家に[illegible]成所あり。火をひとつゝと所望すれど中／＼聞入ずして親子いさかひうるさし。母のこゑいひ分と聞えて疊をたゝき立。今此やうに錢銀持て人も大勢つかふは誰かげとおもふぞ。おかたのわせてからおのれが心ざしが替つて朝茶さへ呑せぬ不自由を見せける。是おかた人にはむくひの有物ぞ。姥ふるひのがこんな祖母に成物じや。千年も貞に皺のよらぬものではなひぞの。今朝も目がうとひとおもふてどこの國にかあらふぞ。莨若盆あして踏出して呑とはあまりつらひしかたなれども。あゝけふもしれぬ年寄の事じやとおもひ流して堪忍したといふ。嫁は口さはがしくこなたも大かたなるよこしまがよい。是此ひだりの手にてさし出したといふ。扨はありさまの手は紫の革たびはいてひぢりめんのきやふして居か。是はよい手が見ゆるわひの。此祖母が目が見えぬとおもやるか。針のみゝずなりとも通して見せん。尻もむすばぬ糸をいやるなそれは跡へぬけ事といへば。むすこはあらけなき声して先ありさまの無用なる長生。娑婆ふさげにひとつも益のなひ事なり。其息のかよふ首くゝつて死れたが浮世の隙があくといふ。是を聞捨てゆくに其ならびに是ぞ雨夜の物がたり品／＼言葉の花をさかし。酒汲かはすたのしみ然もあばら屋にてうちも見えすきける。さし覗ば割松あかして八十余歳の老人をいさめ。雨もたまらぬ板びさしもり補もかぎりあれば。亭主は菅笠かづき破れし傘を彼親仁にさしかけ。それが女房は鍋蓋かつぎ雨をしのぎ。欠徳利にはした酒肴に菜の浅漬やき味噌ならでなくて。孝行の心ざしをくみかけしける。此親是を満足して世にある

人の玉の臺も我竹すこもたのしみさらに替る事なし。汝は子なれば恩をしる道理もあり。妻はもと他人なるにつれそふよしみとて我に孝をつくし。家まづしき渡世をかまはず年月のいとなみ。さりとはいつの世に此恩はおくるべし。夫婦手業の紙子のもみちん骨をわずかの事にくだく。せめてはその手を助んとおもふに足立ざれば是非なしと。なみだもる雨をあらそふ。筑前の侍ひ此あらましを立聞して同じ所の人心。宦前の不孝ものと是各別の逢ひあるをかんじ。ちやうちんの火をもらひて主人は乗かけよりおりて其宿に入て。我ひさしく浪人せしうちに世をわたる種とてさま〴〵工夫仕出して。かたのごとく紙細工を得たり。就中紙絹にしぼを付る事さのみ力をも入ずして。物の見事なるちりめんになすひみつ。矢の竹に巻掛る仕出し念比に傳へて通られける。是はとはじめて色品替て見せけるに此所の名物となつて諸國に廣まり。次第に分限と成財寶ふそくなく。ひとりの親を心のまゝにもてなし彼女房も。むかしの總京小袖に着替てあま

たのはした腰元。其身は乗物の窓より世間のうつりかはれるを詠め。すぎはひの種はつきず人のほめ草と成ぬ

二 序 嵯峨の隠家好色花

紅粉は白皮を採る花。男女にかぎらず身のたしなみふかきを人の風俗鑑といへり。昔日和國は諸人の衣裳も定りなく神代のすゑをうつしけるに。應神天皇十四年に衣服の裁縫はじまり其後推古天皇十九年に男紋女の形など染色を好ませられ。又元正天皇養老三年に萬分有。少年の時は脇明の袖下ながく。男子は十七の春さだまつて丸袖になし。女子はえんにつくもつかざるも十九の秋ふさぐ事。律義千万なる代もあつて過ける。今時の芝居子卅六七までも大振袖は。是世わたりの種ぞかし。また縁遠き娘幾春か櫻に姿をさらし。近所の人に悪まれもせぬ身なれ共。下つかたは慥に見て呼ならひなれば。仲人も頼まれず結ぶの神も祈るにかひはなかりき。ふたりの親の迷惑なれば。形は生ず共。采躰を當世女にそだつてし。作れは作りなせるためしも有。ひと

つは其地其水によれり。爰に嵯峨の山懸〻の隱家。都は人の付合もむつかしく。親仁のゆづりの小判を友とし樂を此山陰に掛て菊酒は西賀茂よりいかよひ樽。海肴はにしきの棚に人ばしをかけ。勢田鰻近江鮒茶壺は宇治にてつめさせ。栂の尾に預け。菓子は二口屋より門前に出見せ。水物は留山のこずゑ四季折〻の枝覆。八木はちかき里より鳥のはねよりにしてはこび。薪は鳥羽より車をとゞろかし小野の焼炭山をかさね。寒ひも暑ひもしらす。あかし暮し。雨の日は河原の太夫もと隙なる野郎めしつれ御見舞申もはてぬに色里の末社は嶋原毎日の珍說を書付にしてやり手のまんが耳の根を蟻のはふ迄を言上申。世間沙汰は出入の藥師申來り精進日には諸山の出家衆駕籠所せきなく。片里の住ゐながら萬の事自由にするは世に銀つかふてあそふより外におもしろき事なし。毎夜手かはりの美形をよりよせ、遊興をするにことをかきぬ。

此人あやかり右衛門といひ。ある名はいはざりき。松に聲なき程春も雪ふりて昼過よりひとしほさゝしさまさり。

愛宕の天狗たのもしとて。あまたの御機嫌とりの男とも立さはぎ御手前にかゝへ置れし素人女に。銘〻の仕合次第に取あたりし。いづれか物になれたる人の見きはめ。金銀に釣かへし者なればあだに見えしはひとりもなかりき。是ぞまたまれものとて思ひ所のなき女もなし。莬角は美女有てなき物ぞと小語を聞れ。我年久しき願ひ筋目をたゞし時に埋れし人にはかきらす。美なる娘あらばそれを継請我一生の妻とさだめ望みは此通りと姿の手本出され是に生移しなるを尋ね出したる人には。其ほうびとして金子千兩。汝ら廣き世界なれば捜出せとあれば。我先と請和す　にたづねめくる國分せし。先五畿内はそれかしが目におよぶまてせんさくすべし。東海道十五ケ國は。針立の休齋是を尋ねべ。し東山道八ケ國は牢人の尉右衛門に頼むなり。扨又北陸道七ケ國を伽羅屋の林斎承り山陰道八ケ國を按摩の文助に仰せられ。山陽道八ケ國人置の又藏。南海道六ケ國は丹波口の傳兵衛。西海道九ケ國を卸の仁左衛門。日比かたじけなき御意にはゝ

れじと。いづれも路銀を内證手代の德右衛門より請取て。此たびの御望み我手筋より調させ給はれと。おもひ〳〵に。諸願をかけ。北野殿を祈るも有。又は貴ふねに頼みをかけ或は七野社に砂車われらがためとはだしまいり。さま〳〵の願狀を籠置。京都を同し日旅立。此秋名月橋のもとへ一度に立歸る約束して諸國をあて所もなく美人見にまはす事。世にはまたかはりたる物ずき。千人の女千人の男の目にいればこそ。壱人もあまらずそれ〳〵のかたらひをなしぬ。今また万人の目によきとさだむる女の。かねのわらんづはきてたづねたればとて。とこの國にあらふぞと是を首途のとはにして。おの〳〵欲の道をいそきける

今宵は月も更に都めきて。雲ふきはらふ嵐山の氣色。我宿の思ひ出心は京にりて。是ぞ美人見の品物語聞に戀ふかなして目の置所は爰ぞと酒もなかばにし。いづれも諸國見極めたる姿繪をさ二千里の外より長旅の銘〻一度に立歸しあげける。御機嫌日本一の女も有ぬ

べしとひらかせ給ふ。先我らが見立たる五幾内五ヶ國の移し繪を見すべし。是大事の吟味なれば。みぢんも用捨なしにその生れ付の當流の風義を定むべし。今時は衣裳のかざりよく。と更よく着こなしてあらけなき貞をも色作りて笠の下など見てはかならずかつくものなり。なをまた御所被人の采躰かくしてしれがたし。うち掛のゐすかた是はと思へど立せて各別の違ひあり。蒐角は道ありかせて其身振をあらため。貞は日のうつりに向はせて影より見すかし。ふきびんのしづみやうにして地髮のすくなきはしれる物ぞかし。口のあきすぎたる女かならず物ごしよろしからず。あしくびしまりてうらすきて。指さきそらぬは惡女也美女は手のゆびおのづから外へそりて胴間つねの女にすぐれてながく。そなはつて腰すはりてをし立ゆかます。上の女はすこしうつむく物なり。中の女あをぬく物。下の女は道いそく物なり。さりとは心にかなひたる女はないに極りぬ。さはいへ汝等が世界をさがし其一國一人の艶女のこらず見るべしと。山城よりはじめて女のすがた繪をひとり〳〵せんぎするに其身の難にはならざる思ひ所あり。みな堪忍のなる事ながらわづかのさはりもゆるし給はず目前の鏡にかけて此內いづれか御氣に入べし此形をもれて外なし。是今の世の女の手本ぞかし

三　御所染の袖色ふかし

山城の國都の北なる千本念佛に。女は物見たけくて出ける。每年の狂言何がひとつ替つた事なし。下向の手土產に鬼の面に杖そへて賣など。角はありてもめづらしからす。目にとまる物には今時の仕出し女房。諸山の花もよしなき京に咲て美女に春を奪はれさぞ口惜かるべし。けふもまた後生大事にながめしに。母親と見へし人は墨衣きて先に立。むすめ盛をおそらくはと思はるる貞つき。いづれとを目にうつくし。近くになる程〳〵素顏にしてみぢんもつくろひなし。いまだ十四なるべししせんと玉をのへたる生れ付。是結ふの神の御寳物にもなるべき女なり。衣裳ゆたかに下には藤色にごばんの紅嶋付。中にはるりこんに同し紅嶋のうら付。上に薄玉子色に同し紅嶋のうら付。肩より壱尺程あを〳〵と御簾のもやう唐糸の縫くれな井の房をさげ。さりとは〳〵至りたる物ずき。すそはみだれ萩まとの男鹿も是にはこかれ鳴へき。帶はくろきびろうどに。大紋の石たゝみうしろにまはして御所むすびのはし

に。銀にて鶴菱の四紋。かへし妻をくび先をすこしあけて帯の下にはさみ。抱へ帯なしにほそきしのび帯をしめ。白きあはせ内具のすそに鉛のしづを掛。惣淺黄こんがうをはきてすり足にあゆみ。しめつけ嶋田髮先も跡も長み同し事にして。中程に平髻をかけ。さし櫛白たんの木地にさんごじゆの切入梅の古木に氣をつくし。前髮にくじらのひれのまかりたる物を入。髮の狂ばぬやうに仕懸わづかうつむき首筋あり／＼と見せて。付肱にひだりの手先にて袖口をあげ右の肩より袖ゆきしとやかに流し。是／＼又とこの國にか有へきと思ながら。戀に欲有て尋ける。世は廣しもし有事もや

【四】是ぞいもせのすがた山

大和の國吉野の花は本朝の姿の山。妹背の川の中に落る神鳴十兵衛といへる太皷持。やかましきを道の友として。櫻やさかりを見る人を見にまかりしに。名所の里ながらさりとては女のあしき所ぞかし。まんさら山家そだちの形の小野。葛の根の土氣はなれず。釣瓶鮓の横ひらたく。いづれをみても是ぞすくれての花。月も雪も爰の事を又も世になく。哥人のよみ殘されしが。女の事はそれとは各別に違ひたる風俗。藏王權現も片足あげてましますは。美女なき里を住うくよき所を見立て飛給はん御けしきに拜まれさせ給ふ。千もと咲はとて山の梢もおもしろからす。麓にさがれは宇多の城下より花見乘物。つき／＼の女もぬからぬ取まはし屋敷がたとは見えすきぬ。緣ばりの窓よりはのかに面影これゆかしく。出茶屋に腰かけてしばし詠めやるに物靜に身ごしらへして歩行路もお慰みと姥かいふ聲うれし。四十四五なる奥のむかしを今に兵庫曲おかしげに。淺黄にうこん裏のした着うへに飛紋のひさやに白うら付て。しゆちんのとをしゑりをかけ。稻妻織の金入の帶。むらさきの革たびに。もへぎの紐をつけ。ぬりかさにめつきのくはんをうたせ。いたゝきなしに赤いしめ緒。萬いやなる乘躰。跡にたてたる新し駕籠も。あの人の娘ならは見る迄もなしと立行に。はらをのわら草履なをすをしやれたるやうにおもはれ戸を明るを待兼しにそれ見たか年の程。十四か五にもせよ。いまだ若木のつぼみ。櫻色とは是ぞ此丸びたいの當世顏。鼻すじ次第にたかくまなこさし細きもよしや耳ちいさからずなかみあつて首すじ立のび。おとしがけの大嶋田しのひもとゆひのうへに。

中疊平むすび先は一文字にして。庵形のさし櫛に切金の折菊伽羅の角揷枝に青貝の折菊。水鹿子の下着中紫鹿子。うへには紅鹿子の兩面弐尺三寸の袖下。おびは糀じゆすに小鳥つくしを繡ぬいにちらし。白糸の綱をかけて。吉弥仕出しのうしろ結び。くけめの角にしづをかけて。白りんずの二重內具紅うらの絹たびに河はらの弥郎紐をつけ。水口の八兵衛さしの木地のつゞら笠に鼠地こもやうなる菊の金入をうらうたせ。千筋ごよりの紙紐をつけて跡なる下女に持せ。姿自慢の蹴出し歩み。是よしや吉野の里人男女にかぎらず立出数年の花見に諸國人をあまた見し中にも是惣一古今のまれもの。此所に都のありし。むかしもかゝる女は傳へ聞ずといふこそ道理なれ。今の京の者の目にも是はとつと〳〵見とめけるに。

いづれにひとつの思ひ所なくいかなる御かたと。御里を下〻に尋ねよりしに。御鼻のあな其かつこうよりすこし大きに見えける。吟味のうへからは是も堪忍なりがたしいへり

両鏡俗徒然巻五

目録

一 今の世男子どやかし
御殿の見え

肉髭かゆいの夢
国光八正 銘
天神のおんの御守
口おしや猫の欠
宝づく百円大名

二

佛のためぬ常燈

揚女の為に縁催

新町の女郎千三百
ばかりくそろの念論
三浦か御心のちやうさん
浅葉か久しき文かよ揚銭
あんまるの見世物

三

祇七番門の分限

又一番の貧者

ともして京の福徳
兄井三人思ひ候者
まくの道へこひ
是見ても中時きる
女郎買の男あつま
なりけり

〔二〕金の土用干伽羅の口乞

和朝に遊女の色作つて。金銀に賣身と定めての此かた。此美興に銀つかひかしらの大臣今の都に有。其所は上長者町に住なれ御所にちかければ。よろしき事ばかりを見およびº。形は武士めきて心は公家に移しぬ。是渡世をおもふ人のなるべき事にはあらず。祖父より三代商賣は仕舞屋にして。二十人余の男女心にまかせて年中を暮しぬ。此親父死去の時門跡様へ百貫目あげての外は。釜下の炭までもゆずり狀ひとつに濟て。誰か七つの內藏に指のさしてもなかりき。此銀何程といふ其つもりしつたものなし。腰元つかひの若葉といへる女親御様の時見およびしを語りけるは。毎年六月中はこばんの土用干をあそばしけるに。新左衛門の澁紙一枚に百兩づゝ針がねくゝりにして。いまだ人の手にわたらざるを明所もなふならべ置。烏帚にてほこりを拂ひ箱におさめて封を付。一日に是程づゝ幾かぎりもなく風に當られて。此家ひさしき小判ども夜〳〵うめく事大かたならず。たま〳〵諸人のほしがるものに出世して。つゐに揚屋の手にもわたらずまして野良宿の花にもならず。一生男を持すに朽はつる娘のごとく是は口惜やと。声を立る事我等寝耳に入てかくと旦那殿に申あぐれば。それはだいたんなる小判目やと箱を針付あそばして其後は土用干にも出すいつが大節季の拂ひやら。大名かしに成事もしらず年ひさしく埋れしが。若代の物と成此金子時にあふて。嶋原太夫職こそも〳〵の野秋にかゝり。名殘おしさは朱雀の細道とうとふたる戀草の朝露踏て。すぐに芝居に行て玉村吉弥に壺入。夕ぐれよりは又丹波口におしかけ。しばしも我宿を見ず夢覺てゆめに又現のごとく。五とせあまりの大さはぎ年〳〵うめきし小判箱。あけくれの付とゞけにいつともなふ殘すくなく。今三千兩に成時やう〳〵我と合点して。さてもつかへば金銀程はかのゆく物はなし十五年此かたに弐万八千兩銀になをして千六百八拾貫目也。此銀外の事にはいかな〳〵壱匁もつかはず。是皆色道に捨ける。さるによつて日本るいなしの惡所かねつかひがしらとめいよの名を取ける。是をおもふに一日に千貫目にても遣ひ果してしれぬ所は京の色町ぞかし。遠國にては銀はありてもつかふべきやうなし。長者町の見事大臣殘る三千兩おもひ切てとまり所。是程の時もやめか

ね其後太夫はかほるに嫌をしかへ。家屋敷傳はりの諸道具迄も賣拂ひ。何の子細もなく着のまゝに成てもなをとまりかね。男は自然の時のたましひなるに只一腰の國光まで賣かよひ扇一本。とまりける。女良くるひのかたみとて殘る物には文反古。一座の酒振なげぶしの間の手しかけのうそを見出すばかり。此外何もなく身からひとつも暮しかね。さま〴〵分別をするにさながら京にて茶筅うりもならす。人良の見えぬ時夜ふねにのりて大坂にくだり。世に有時こしらへ置し長堀の下屋敷をあづけし。炭屋善太郎といへる者賴みにしてくたれば。是も熊野の新山にかゝり身体くづれて分散と成。門口に眉せかたよりきびしく番を付置折ふしなれば。爰に音信もせず此首尾かなしく。それより天滿天神の鳥居筋に花屋の杢兵衛すみぬ。是が女房は御夢想のあんやきして。面〴〵過けふを暮せしが。此女京にて茶の間につかひし其よしみに爰にやう〳〵なげきをいひて賴みをかけ。同じ横町に作り花の見せを出し。春咲藤やまぶきを秋つくり。時

節違ひの紙子を六月に着もおかしく。かるひ世帯を柳にやつて。櫻をある時酒中花にしかけ。是にて小錢を取やうになるも元ひとつなる口よりおもひつきぬ。其比當社に万灯のありし時。北濱の淀屋橋の法師あまた末社をつれて。通りがけに見付られ扨もありしにかわる身の上。奢よりかく成果るならひなればさらりとむかしの氣を替て折ふしは私宅へも御出とあれば。是かたじけなし御家來同前にたのみたてまつると。いせんは下目に見し人に様の字を百も付て。其後は此法師太皷中間に入て。お次につめて提たばこ盆そうじするなど。すこし口惜かりしに小坊主がいへるは。飛石のうへなる猫の糞をかけとは。もはや堪忍成がたく喰ずに死だがましと。暇乞なしに座を立んとする時。夕御膳とて先めい〳〵杉燒。小鳥づくし田樂初鮭にもろみをかけて出る。かゝる調菜今の身にしてくふ事はおもひよらずと。又時の氣になつて町人ながら大名ぞとゆたかな暮しうらやましき時。彼法師の仰せられしは。今宵のさはぎはあのものを大名の

御隱居に仕立。九軒の師ども手とらして一興とありしに此男申は。色所にて大名に成事よろつ付てむつかし。此成貸に御ひそうの伽羅を壱匁御意にかけられましたらばと申欲なり。此家に本はつねとて百そうの名の木なり。壱匁あまりとらせば巾着におさめ。衣裳付して罷出たるは百目大名と笑ひける。揚屋町をざゝめきて住吉屋の甚太が廣座敷に居ながれ。法師宿のかゝに小謡あれはさる御かた様御しのびの御遊山。つねの客とは各別なり物毎しめやかに。いづれとも定めず太夫四五人つかめと。出羽高はし小太夫まじりに酒も大かた成時まで。百目大名も古今のものしなれば随分大へいをさばきかねす。かしらから高はしに肩をひねらせ出羽がひざ枕して。むかしの心に成時又法師勝手に立。あなたの御家にめいよの伽羅有。是を所望すゝし次手なおらすこし聞たいとあれば。内義ゑんりよなく其通り申あぐれば。よくしつた事の何よりやすい事法師焼て聞されよとくだんの巾着なげ出す。時に小太夫が香灯に火かげんして。彼壱匁の伽羅割もせず其まゝ焼ば。座中しつめて聞くらべしはまたいやのならぬきやしや事なり。百めの大名歯をくひしめしばらくあたりを見まはし。大かた火の通りかゝる時。法師さま是りやならぬと彼伽羅つかんで巾着に入。女良の手前も恥る事なく大名やめると置つきんをとれば。一座笑ひしまひに床に入ける。此男むかしは一焼に百目も惜まぬ大臣のかくひける事は。其時代とそしりをやめてふびんがりて。お床のあかるまでさびしくば是を讀しやれと。太夫の名まセたゝきの本を禿がかしける。是にも惡氣まはしてもし又宸前の伽羅すこし。くださりませいといひかゝられては返事がむつかしいと。置所を替てふんどしのむすみめにつゝみこみ。跡先をこよりにてくゝり置。幾たびもさぐりて見しは食燒女のかくし男にもらいし。こまかねを二十色の心當にするに似たり。人は其時に移りてかくあさましく成果坊主

〔二〕佛の爲の常灯遊女の爲の髮の油

遠國にも色さはぎのありとはいへど。氏神のたゝりをおもふてかはりたる事は成がたし。人をおそれず我まゝをしけるに三ケ津の町人の徳なり。大坂にある大じん世間をつら〱おもふに。此四町の女良高下合て千三百余人。毎日の髮油めい〱買にする事もふびん

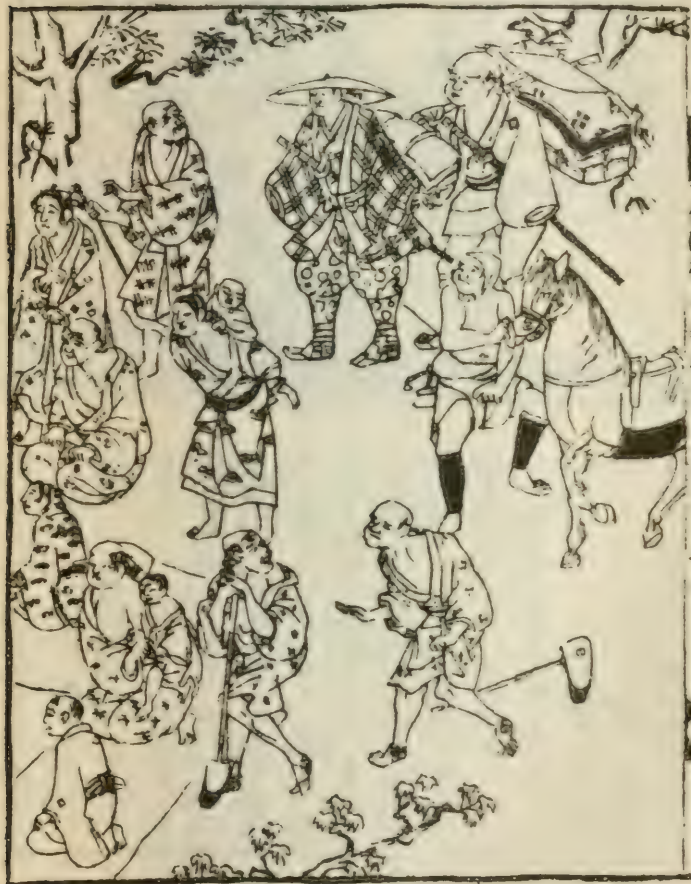
なれば。一人一日を壱分につもりて。一年中に四十六貫八百目にて濟事なれば。阿波座に家を一軒求めて唐かねの油壺を居て。永代髪油寄進すべし。是は後生にもなつて又の世にけいせいの好男にも生るべし。諸山のれいちに常燈は大名のともしてはめづらしからず。そもく此おもひ立願所よりのゆづり銀五百貫目あれば。是をたしかなる大じんに月一割にしてあづけ共利銀にて成事といふ。其座に欲の孫吉といふ末社。同じ事ならば女良の身あがり程かなしきものはなし是に御合力あらば深きせこんになるべしと進めける。此談合いまだ極まらぬうちに。よき事閙捨にして京へのぼれば。嶋原の踊に袋忠弥七瘤人丸惜(?)になつて。惣身を金箔にだみて其まゝこがねのおどり佛。うき世を夢のやうにおもふあの心が極樂と。此身も色道の宿もさだめず一へん上人に藤沢を越て江戸にくだりしに。吉原は淋しく見えて内證のはれじやう。葛角金沢山所ゆへなりさるによつて女良の心ざしおのづからつよく成ぬと。宮島といふ書物に見へしにたがはず。遊女はよき男次第にて其時くの色を増物なり。紅葉は千人の目にも太夫と見えしは中比の高尾にそありける。風義いふまでもなし宿に歸りても衣裳着かゆる事なくつねなり。いかにしても上がたの太夫のならぬ事なり。揚屋の見(?)をつとめて身仕舞にかへるに。道中ゆたかに行ひだりに對の禿歩行ながら眠れる程靜に位をとつて慮(?)ひ所なく。宿ちかくなれば六尺に先へはしらせ門口より高尾さまお歸りといへば。行水の役人は御趣の湯をはこぶ料理人手ばしかく。貝かたの者は火吹竹を取まはし。定紋の蓋かけたる賄立。不斷いしや持豚を取。此太夫御きねんの日待坊も毎日お見舞中御勤め二十年もと心中に祈ける。たとへ女良と成てもこれは一生のほまれなれば。此人の耳の垢を此道の女守り袋に入置べし。殊に高尾は流女古今の能書。文にして人をころし諸人おもひをかけぬれば。いかなる大名高家にも行て玉殿にも住べきものなれなれども。緣程おかしきはなし油三といへる男に請出されて。今はれいがん嶋に詫すまひながら是よりおもひ出何かあるべし。いづれ女良くるひの結末かならず無用なり其銀とて殘る物にはあらず。何ぞ世にとゞまる事を色町に殘したき物ぞかし。淺草の久慶がわらはせけるは。むかひ町の大じん十九年此かたに壱万二千兩有金を。後家の米の錢を構ふやう

に。人しれず一度〳〵に揚屋へわたしけるが。誰にあふとも又は女良買とも見へずして。世上へかくすを大事〳〵とおもふうちにつかひ果し。今は堺町にて見せ物のゑんま鳥の木戸番。萬九といふ大臣是じや〳〵

〔二三〕四十七番目の分限又一番の貧者

現銀三千七百貫目持て大きな貞をしやるな。都の身体袖鑑を見るにやう〳〵四十七番目に書り。然ば京の分限は遠國の手前よしとは各別ぞかし家につたへし諸道具ばかりも大分なり。此金銀をゆすられては一生榮花に。五十人口など居喰にしてもあまるべき事なるに。惡所つかひはかぎりのなき物にてはてられていまだ十五六年のうちに。兄弟三人して蒔捨ける程に。親仁あい家藏までも賣拂ひ三人一所に借家すまひして。かなしき身とはなりぬ世はしれぬ物ぞ。むかしは三条通りに大名かしをして今は米屋に當座かりして。一日暮しに只居ては埒があかねば。綿秋を見かけて美濃路より尾張の里〳〵

をまはり。京へはしれぬ身過兄弟三人　申ます。只今つかまつりますは都しま外はませず。辻うち太鼓はじまり〳〵　はらはやり太夫せんせいのなりふり。と聲立て。見物あつまれば先お斷りを　買手の大じん取あげられましてさん〳〵の仕合と成。舌喰きりて死れはいたしませず。つらの皮をさらしまして觀進仕りまする風俗までを。こまかに心を付ていたしまする。今程は上方に坂田藤十郎と申ましてやつし藝の名人あれども。それは移らぬ所も御座ります。我等のいたしますは其まゝ生のやうしてお目にかけますと。身の上の事を狂言に。兄は大じんになれば弟は太夫のかほるに成。中男子は末社の花崎左吉になり。世に有時の座はい口舌のつめひらき。女良の僞のあらためやう。むしんいひそふな色を見て手をよくはづしやう。今のやうにかしこければ何かなげく事なし。親の異見を聞ず内を追出さるゝ身ぶり。見る人も哀がよふ似と大笑ひいたしける。其跡は勘當せられかなしき世わたりのおもひ入見物に泪こぼさせ。投編笠をぬきて此里の

お衆は各別。通りお衆さまがた持あはせが御座らばすこしの露をうたしやりましよ。祖父の年忌にあたりまして汗水を流しますでも御座りませぬ。壱人に千貫目づゝ入ました藝御座ると。人はしらぬ事をいひける。此見物の中に京万太夫が芝居より江戸へ役者見立につかはしけるに。すこし仕こなして上かたでもあたりそふなる者は。手付弐百兩などいひけるが是もよいには極まりがたし。先のぼりての一談合と道中をいそぎしが。自分の用にて美濃路にまはり。此辻藝に我を折てさてもしたり〳〵。ぬれをあれほどに師のすくやうにするもの。廣き江戸にもなし此三人は六百が立役はふるかね買に見せてもあり。今まで見しらぬ素人藝にかゝる上手もあるものかな。是をかへて此たびの貞見せ都に花をふらせんと。一筋におもひ入子細をきけば。四条の川原に我〳〵貞さらす事一もんの恥といひ。思ひよらずと同心せぬをさしあたつて小判すくめにして。やう〳〵京につれのぼり先男ぶりはよし。太夫元も外へは沙汰なしに珍重がる事あさから

ず。扨ひそかに狂言にかけて見しに。三人ながらけいせい買の事より外は。物申といふ事もならずさりとてはおかし。銀つかふて遊女の道ばかりのみこみけるやと大笑ひしていそき暇を出せばそんのゆかぬ牢人して後は三人肩揃へて。伏見の色町へ京よりの御とはなりぬ。一切の身過其道〳〵に身をたすかるなれば。親よりゆづりの家業をはげみ主の影なる商〳〵を油斷なく〳〵共家たしかにはんじやうさせて。世間を男子にわたしうき世際になつて。六十過て年月の氣晴しに女良くるひはする物なりと。さる法師の語りおかれし。かならず色道に仕過し多し無分別さかんの時。行べき所にあらず是よりこにひ所なし

元禄八乙亥暦孟春吉日

京洛寺町條上ル町

田中庄兵衛

書林

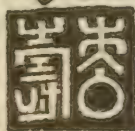
洛烏丸蛸筋備後町

八尾甚四郎

見ぐるしからぬ
は文車の文と
兼好が書残せし
は世〳〵のかし
こき人のつくり
おかれし諸〳〵
の書物是皆人の
助となれり見ぐ
るしきは今の世
間の獃文なれば
心を付て捨べき
事そかしかなら
ず其身の恥を人
に二たび見さが
されけるひとつ
也すきし年の暮
に春侍宿のすゝ
掃ひに鼠の引込
し書捨なるを小
倅の葉するゑにか
けてはき集め是
もすたらず求め

る人有それは高津の里のほとりにわすかの隠家（かくれが）けふをなりわひにかるひ取置今時花（はやる）張貫の形女（すがた）を紙細工せられしに塵塚のごとくなる中に女筆も有または芝居子の書るも有おかしき噂（うはさ）かなしき沙汰あるひは嬉しきはじめ栄（ゑい）花（くわ）終りながく〱と讀（よみ）つゞけ行に大江の橋のむかし人の心も見えわたりて是

其月其日

西鶴

新反文奇古

初巻目録

一巻

一　帯丸太郎が留月住舞

隠分て隠れよりかゝる浪屋乃[illegible]
千里を分けても借換へゆるぎなし

二　草花乃門の秘

渡し守代筆自筆
擂會へ隠居の尋切

三

百三十里れ和を揺る風雲

はろげの江戸ヶ尋と今れ揺梅

いづきての形見見切自ら揺動変

四

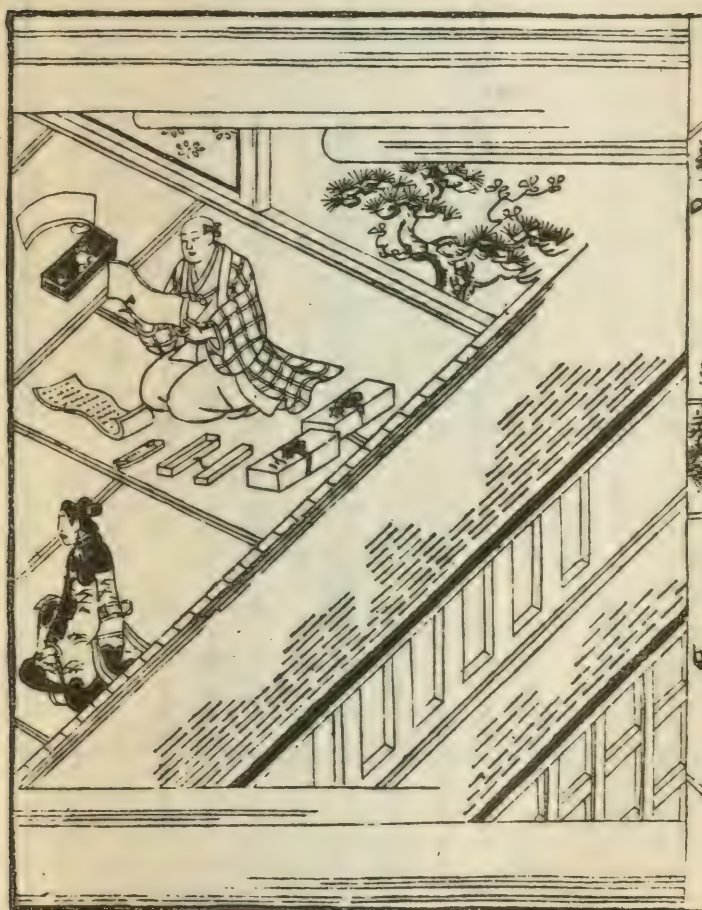
来十九日れ草稿獻之

ちゑの源ここ原といひど家ある

東西そびゆ野られ天せかや離隔

〔二〕世帶の大事は正月仕舞

十二月九日の書中伊勢屋十左衛門舛十二日にくだりつき請取申候一家無事にて大かた節季仕舞いたされ候よし滿足申候爰元商ひ物は殘らず賣申候得ども當年は俄に米さがり申候ゆへ侍衆のつきりと手づまり申され一圓掛寄申さず難義仕候此体ならば我等は此方に越年いたし候其心得に其方萬事しまい申さるべく候先七兵衛をのぼせ申候三番と書付の箱に銀子御座候目錄見合違ひなきやうに拂ひ申さるべく候屋賃は霜月師走兩月は斷り申七月ゟ四ケ月百八拾目御渡しあるべく候米屋へ金子三兩内上ケにして算用は追付年内に我等のぼる分にして年取物三俵成程加賀の上々御取内一俵は新米申白ふませ外に餅米三斗御取あるべし定めて女房ども五斗と申候ともかならず無用にいたされ毎年の嘉例違て廿九日の夜更て突申候がよく候お龜おひさ娘どももまた餅花よろこぶ時分にはあらず候長四郎がかたへはま弓まいり申候とも祖母に斷り申歸し候やうに談合いたさるべし正月着物の事今年は娘等には春の事にいたすべく候長四郎には先日も申遣はし候通りに我等淺黄こもんの羽織を何茶に成とも目を引袖下はともぎにして着せ申さるべく候帶はわれら首卷三つ割に繼延ふたへまはりにゆるりとなるべく候其方も我等花色紬をきて元日の禮をつとめ毎年の手帳を見あはせ旦那場失念なくまはりいつもかなしやくし遣ひ申候方へ柱暦に仕替申さるべく候弐本入の扇遣ひ候かたへ安筆一對づゝにいたさるべし町内へ例年ぬり箸二膳づゝ年玉つかひ候へども是も門〳〵多し無用に仕べく候今迄やり付たる門なれば夜の明ぬうちにあしもとはやく戸を扣て名いひ捨に禮を仕舞申さるべしたとへやすくとも鰤無用にいたし大目黑壱本塩鯛二枚で埒明申さるべし拔下女どもか仕きせも皆紋なし淺黄か千種色かにして袷に仕立申さるべく候玄孝樣への藥代やわた牛房三把に錢五百濟て親仁留守のよしを申夜もたしてやり申さるべく候大津屋へ六十めりんとかけて利銀相わたし正月のするには元利ともに相濟し申べしと慥に請合段〳〵斷り申さるべし家主へ五人与へ付とゝけ申とかさだかにいふともこはひ事はなく候又堺筋から椀折敷の銀取にまいり申候時九月前の算用に違ひ有其時の若衆をおこしやれ今一度帳面を見あはせ相濟し申べしと成程けつかうに斷り申

置べし其手代江戸へくだり此方居申さず此節季はのばし申候惣しての拂ひ前に一間もわたし申候事無用に候大晦日の四つ過に百目の所へ二十五匁づゝ割付惣並に此通りと物やはらかに其相手次第に言葉をさげ申さるべし人に鬼はなく候ともし火ひとつにして茶釜下を燒ずに下〳〵寢せて其方一人居て拂ひ申さるへく候かならす〳〵我等がやうに宿を出違ひ申されまじく候何事も親仁のいたされやうあしくおの〳〵樣へ足をひかせますと我事さん〳〵にしかり申程首尾よく候將又信國の小脇指右に砥屋杢兵衞金子三兩弐歩迄に付申候是は元來正銘には極り申さす候頼みて賣拂ひ仕舞かねのたよりにいたさるべしさま〳〵に分別仕り見申候得ども四十四五貫目たり申さず候まだも人の氣のつかぬうちに覺悟して播刕のよき所にて四五人暮す程の田地をもとめ置申心得に候何時をしれぬ事には女房ども親仁より借申候銀子さし引してかり道具ももどし申さるべしかやうの內證申事親子の中にてもよき事聞せ申樣にはあらず近比迷惑ながら二十九年此か

たの勘定いたし見申候へは随分もうけも御座候四百三十九貫目と見え申候然ども銀の利ばかり三百十四貫六百目余出し又掛のすたり三十七貫目あまり此外目に見えての買ぞん米ばかりにて八十四五貫目其上拾九貫目親仁のゆづり借銭すます根にもたぬ銀をかりあつめ人の手代をいたし候事口惜く候此上ながら我等思案仕る事候何とぞ〳〵今年斗の節季くろうながらしのぎ申さるべし正月中比には罷上り内談申べく候何にても勝手の物一錢も御出し候事あるましく候さりながら焼木は樫の枯れ物を弐十掛ばかりあけ申さるべし此外は蓬莱の海老も無用ニ候

極月十八日　　同藤四良

大和屋藤五郎殿

此文の子細を考見るに親は幡刕の内へ商ひに行て子がかたへ節季の仕舞をこまかにいひ越と見えたり尤賣人は皆才覺の世わたりながら是就中せつなき手まはし借銀ゆへ次第に手づまりたる事にぞ是をおもふに人の内證は大からくり也

二十　榮花の引込所

重九良樣御事何ともてあまし。御異見申種もつき果手代中間九人。御居所のごふくたなあづかり申候者どもおそれながら愚札をもつて所存の通り申上候。御出家あそばされ然も御當地の御見舞申人さへ嫌はせられ。鎌倉へ御引込なされ世の事には御かまいあそばさぬ御事いづれもそんじながら。かやうの段ゝ申上候はよく〱の事とおぼしめされ。只御一宿の御覺悟にて御越なされくだされ。こゝろざしのなをり申候やうに御しめしくだされ候ば。皆〱あり難くそんじたてまつり候。ひとつは御慈悲にも成申候御事。ほかより其身のお爲に成事申せば。はや其人は出入なくいよ〱我まゝさかんに罷成候。第一御母義樣御しかけ惡敷存候は。うき世くるひは若ひ時の物とて御望み小袖を間もなく仕立。勘定の外なる金子を袖の下より毎月晦日に百兩づゝつかはされ申候。我〱が手前からは旦那御いひげんの通り。年中のこづかひ金三十兩づゝ正月に相渡し申候。今のやうだいを見申候へば三十兩は伽羅の代にもたり申さず候。只今まで内證借四千五百兩程御座候はよし。是も借人此程は分別いたしむつかしく罷成候へば。中間のせり物を大ぶん取込是をそんして賣拂ひ。千三四百兩程我〱ぞんせぬ金子相濟申候。かさねては若旦那に賣物無用と斷り申置自由成申さず候へば。先〱の掛金あつめ是も貳千兩あまり取づかひにいたされ候。此六年に九千兩ばかり肴かねを捨申され候。さて〱親旦那のよろしく御しこなしなされ。只今で三十四人緩〱と暮し。毎年千兩づゝはたしかに相のび申候身体を。わけもなくつぶし申候事手代ども口惜く存候。此通りに二三年我まゝなされ候へば惡事さま〱出來申候。金子の義は大かたしれ申候事に御座候へども。世間より馬鹿と申所是非もなき御事に候。縁組のさまたげにも罷成申候大かた是沙汰しらぬ人は御座なく候。遊興もあのごとくには身のつゞかぬ事にぞんじ候。よし原かよひして太夫を月に十五日づゝ請あい。堺町にては名高き藝子になづみ太夫本へのつけとゞけ。お大名を望む美童に合力此外日夜の色あそび。こがねの山があつてもつゞき申さず候。何とぞ二三年鎌倉へ引こませ置その心ざしもおとなしう成申され候ば。よび歸し申度存候此御相談頼み上申候。手代中存立候一通り書付重九良樣御目にかけ申候。自然此

段御しやういんなきにおゐては。九人の者ども御隙申請罷出候。勘定の義は御町中へ明白に仕立。有物は三十五に御成なされ候まで預ヶ置。當分は相わたし申さす候御思案此時に存候。御心底次第の御返事御聞あそばされくださるべく候。扨鎌倉三年御隱居なされ我〳〵願ひかない申候ば。此通りに仕り御不自由は見せ申まじく候。此外御望みも御座候は何やうにも御好みなさるべく候。面々相談の目錄。所は御見立あそばされ廣座敷を作事仕り。米油みそ塩焼木折々の御小袖は此方より進上申。年中の御つかひ金として弐百四十兩相わたし京より百兩きりまいの御妾女弐人かゝへ。此大ふり袖の腰もとづかひ三人。中居茶の間御物縫女。下女弐人小性弐人小坊主壱人。あんま取の座頭御酒の相手に哥うたひの傳右衛門。御料理人壱人六尺弐人御草履取大小弐人手代の壱人づゝ相つめ以上二十弐人にて。御心のまゝに御暮しなされ候ば。二年三年の立上は夢の間の御事に候。三年過申候ば以前のごとく遊女くるひにてもあそばさるべく候。右

の通り御きゝわけあそばし鎌倉隠居なされくだされ候やうに。此書付重九郎様へ御見せあそばされ。御合点まいり候やうに御取なし頼上候以上

二月廿四日　　重九良手代
　　　　　　　九人連判

南櫻庵
　見山様

此文を考見るに若代の人色このみ過身体のさはりと成を手代どもまことある相談にて親類法師をたのみ異見すると見えたり世には身をしらぬ奢もの有天のとがめも町人の分としてよい程あり此書付の榮花にては夷が嶋にても住べし

[三]百三十里の所を拾匁の無心

此鎌倉屋清左衛門殿と申は爰元にて我らあい棚のさし物細工いたされ人にて御座候別して念比に申合候此度御親父の十七年にあたり高野参りの次手に堺大坂をも見物なされたきよし幸ひのたよりに存じ一筆申上候弥御無事に御座なされ候や御ゆかしく奉存候わたくし義も不仕合ゆへ其後は狀もしんじ申さず御ぶさたに罷成候其段は御ゆるしくださるべく候先もつて吉太良小次良およしいづれもそく才に御座候や定めて吉太良は手習などいたし貴様の御氣たすけにも成申べく候將又其元も近年は商ひ事御座なく屋敷も御賣なされ長町五丁目に宿御替なされはんじ物の團屋をあそばし候よし借屋の住ひさぞ〳〵御不自由さつし申候我等も只今御異見の事ども切目に塩のしむやうにそんじ出し其まゝ其元にて肴屋をいたし居申候はゞ緩〳〵と口過は氣遣ひ御座候をわかげゆへ爰元には抓取もあるやうにそんじふら〳〵と罷くだりさて〳〵後悔仕申候はじめはすこしの銀子にて十文字紙子を請賣いたし候へども是も春に罷成一圓埒明申さずそれより高崎たばこ賣候へども是も掛に罷成半年ばかりいたし取置申候重き物肩に置申事も成がたく印肉の墨をあはして賣申候が是もはかどらず今程は一日暮しに朝の間は佛の花を賣昼は冷水を賣くれかたより蚊ふすべの鋸屑を賣宿に歸りて夜は百を八分づゝにて茶うりの紙袋つぎ申すこしも油斷なくかせぎ申候得どもさりとは世間かしこく利徳をとらせず日に壱匁五分と申銀子は中〳〵もうけかね申候去冬悴子をもうけ三人口に罷成此渡世おくりがたく候其元へ罷のぼり日用はたらきとも仕度候家普請はやり申候様に承申候今程は以前の形氣は捨申候兎角生國なつかしく皆〻様へ御出入申せめて雨風火事などゝい

ふ時分かけつけ御用に立申度候前の事御ゆるしくださるへく候皆酒ゆへ身体取乱しおの／＼様にも御やつかいかけ申候只今は五節句にもたべ申さず候其段は此清左衛門殿に御たづねくださるべく候壁隣事に御座候へば內證御そんじに候又爰元にて女房持申候事夢／＼ゐようにて持申さずさる屋敷がたのお物師針手きゝ申候てめい／＼かせぎにいたしかぬるものにては御座なく候殊に始末ものにて數年給銀を溜置八百目數銀是にて持申候此女も隨分はたらき申候へども近年何商ひ御座なく勝手さしつまりさん／＼の体に罷成其元へのぼり申候も路銀に迷惑仕申候兄弟の御慈悲とおほしめし銀拾弐匁程此たより御越頼上候是を遣ひ銀にいたし爰元仕舞罷のぼり申度候女房が義は忰子共まゝ付置暇の狀を殘し沙汰なしに仕候てくるしからず候金杉と申所に歴／＼の姉縄筵の買置仕居申候これが方へ引取かたづけ申候私の身の取置何とも成申さず候たとへ鉢開き坊主罷成候とも大坂の土に成申度願ひに御座候いよ／＼銀拾弐匁か錢壱貫此人に御こし頼み申上候一日も爰元に居申程かつへ申候なを／＼爰元にて持申候女房わたくし上氣にて持申さず候證據には我等より十二三も年寄にて御座候萬事此清左衛門殿御物語御聞なされくださるへく候以上

江戸白かね町
源右衛門判

五月廿八日

大坂長町五丁目
團屋源五左衛門様

此文の子細を考へ見るに此男手前をしそこない兄にも談合なしに江戸へくたるとしれたり何國にても今の世金がかねをもうける時になりぬ朝夕其覺悟してそれ／＼の家業情に入べしない所には壱匁ない物は銀なり日本國の金銀あつまり瓦石のごとく見えし江戸よりわずか拾匁あまりに手づまり長／＼と無心申越もいまだ兄弟のよしみなればなり他人のかたへ錢壱匁の事にてもいひ難し世は大事也

四 來る十九日の榮耀献立

昨日は御念入兩度まで御手紙北野不動へ參御報延引申上候然は來る十七八九三日の內川舟にて御振舞なされ度よし次手御座候て旦那に其段申聞せ候十七日は堺へ茶の湯に先約十八日生玉へ觀音講十九日も昼までは隙入御座それより夕涼みに出申べきよし申されし十九日當月中の明日貴樣御仕合に御座候

此方より同道申され候は按摩取の利庵針立の自休笛ふきの勘太夫もし牢人の左太兵衛まいらるゝ事もあるべく候其外は小坊主両人めしつれらるゝ分に候其元より碁打の道閑御出候はよし長噺しいたされぬやうに御内證御申あるべく候役者子どもの義先御乗候事御無用に候機嫌を見合せ旦那さしづ次第に仕るべく候殊更御心遣ひの献立御見せなされ候舟あそびにはけつかう過申候諸道具万事やかましき物に候旦那も此程は病後ゆへ美食好み申されす候無用と存候分に点かけ申候大汁の集め雑喉一段竹輪皮鰒御のけあるへしやかましく候膳のさき鮎鱠御用捨川魚つゞき申候面〱椙焼を是に付て御出しあるべく候是も鯛青鷺二色に御申付煮させまし眞竹一種候しやれてよく候割海老青まめのあへ物吸物鱸わた引肴小あぢの塩煮たいらけの田楽又吸物叢集にきんかん麩餅又吸物きすごの細作り酒ひとつ呑れいづれも味噌汁の吸物無用には酒三献て後早鮨蓼はたゞられな候山椒はにかで膳は御取なされ後段に寒漉のひやしみ置合て御出し其跡に日野まくはうり

に砂糖かけ御出し御茶は菓子なしに一ふくづゝたて切になさるべし迚も御地走にちいさき御座舟に湯殿を仕掛蓙かたに行水いたされ候やうに御用意是までにて夜の仕立一色も御無用に候はや太夫本へ十九日の事旦那申つかはれ候日くれよりあがり申され候我等御頼みなされ候ゆへあらまし御さし圖申候兎角此上ながら天氣願ひ申候其内十八日には其元へ御見舞申いよ／＼御内談申べく候日外の生加賀のひとへ羽織すこし長く候小男のおかしく候弐寸四五分切申度候御手代衆御よせ頼申候天滿のおはらひまへさへ出來申せばよく候いそぎ申さず候心事貴面に申あぐべく候

以上

林鐘十一日

長崎屋　八右衛門

こふく屋次左衛門様　御報

此文の子細を考見るにさりとは町人の振舞には奢りたる事なり日比出入を申旦那を申請しと見えたりけふの入目もうちばにとつて三百四五拾とはつもりぬ年中に拾五貫目がごふく物買て一割とつて壱

貫五百目也年に二度もふるまい五節句立れば大かたは元へもとるなり今時の商ひ皆こんな事ぞかし勝手よい事ばかりはさせぬと見えける

一巻終

萬文反古　目録　巻二

一

縁付まへの娘自慢

此文は母親のねがひの乗物

まもるものまうで女房衆の身ぶり

二

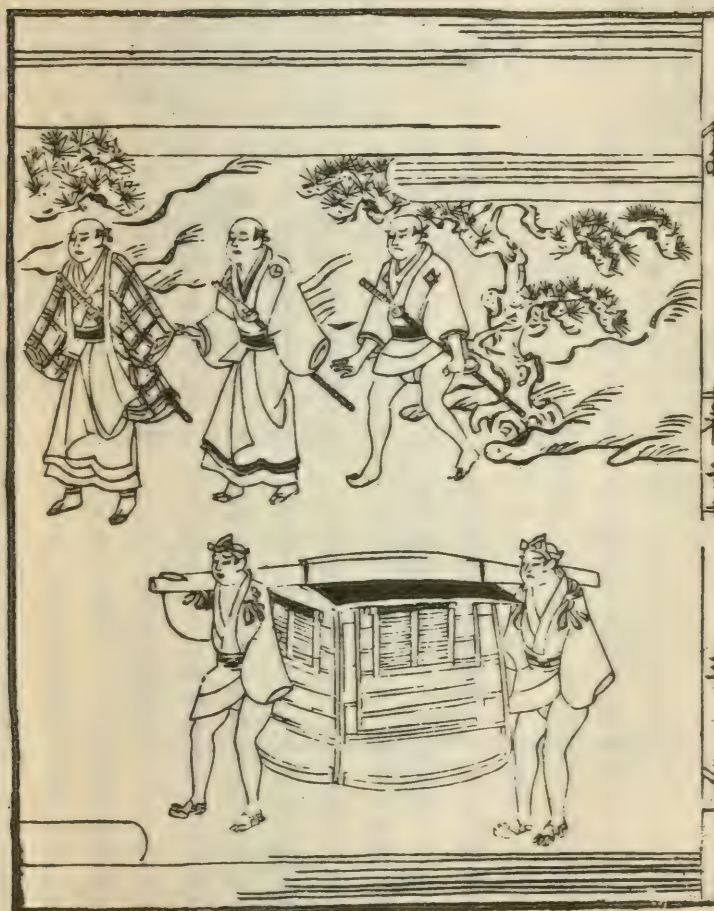
安立町の隠れ家

此文は歌の道のうちそとをあかし

忠義の家来の事を物語

一　縁付まへの娘自慢

貴札恭拜見仕申候殊に鎗海老壱籠濱燒二枚御意に掛られ毎度御心入之段淺からず奉レ存候內〻は祇園かけて涼みに御上りなさるべく由相待申候處におはつ縁付相極まり日出度存候殊に先樣手前者珍重にはさりながら問屋は大かた身体おちつかぬものには此上ながらよく〳〵御聞あはせなされつかはさるべく候家藏の白壁けんふの不斷着世間をもつはらにして振舞好つくり庭鞠楊弓連俳藝のふに名をとる人世の聞はよくて內證あしき物には左樣の人京にもあまた御座候兎角稼はふそくにおもふ程成が勝手によく候其子細は年中つけとゞけ先樣よりりつはを好み鏡の餅に平樽鰤壱本祝義を取集めてつゐ小男に壱荷にしておくりければ半紙一折錢三十包みてとらせ遠ひ所を太義茶呑でいねといふて濟事に御座候を一番男の六尺揃て絹物きせたる腰元に祝義の目錄高蒔繪の長文箱に入唐房の色をかぎりて持せ是につけて置綿きたる中居女に口上いはせしき〳〵に仕掛ぬればつまみ錢にてはやられず腰元に銀子壱兩小杉壱束女に銀三匁うねたび一足男どもに銀弐匁づゝ出して取つくろふて吸物よ酒よ肴よと書出し時分いそがしき中に商賣のじやまといひ外聞ばかりに物入此ごとくの取やりは千貫目より上越儲成身体の人のする事を一拍子違へば手扣ひて仕舞わづか五十貫目七拾目の小商人の我をしらぬ奢とぞんじ候かならず母親あとさきなしに人目ばかりおもひて手前のしつつゐをかまはず棟の高き家の聟自慢して買調へて年中の遣ひ物目に見ずして大き成費に罷成候他人口からは申されぬ事只今迄のおはつそだてやう我等ひとつ氣に入申何の町人の入らざる琴小舞踊までをならはせかぶき者のやうに御仕立わけもなき事に存候我〳〵づれが娘はさながら下子はたらきこそさせまじ似合たる手業眞綿つませ糸屑成ともひねらせ置けば見分はよくて世帶のために成申候今程は爰元の新在家の衆さへ庭の片隅に下機を立られ兩替町に諸職人に借屋出來申事むかしはない事なれども筭用づくにて皆〳〵住ひを替られ內義の花見月見にも大乘物をやめて其用の時ばかり辻駕籠をかりてこどりまはしにして出られしも時代にて見よくは承り申候へはおはつ事四人揃へ紋付ひとへ物きせて外はつねにて內を金砂子に草花書し駕籠に時〳〵の仕出し衣裳ひけらかし天王

寺の櫻住吉の汐干高津の涼み舎利寺參り毎日の芝居見さりとは無用に存候爰元にも衣の棚にひとり娘を自慢して人の見歸るをよろこび歷〳〵の身体をつぶし申候是母親心からに候此たび買物の注文見あはせ我等同心に存せす候先もつてけつかう過候貝桶にわたりの純子蓋無用に候奉公雛も御望みの通りには弐百七十目に出來申候其外手道具時代物いらぬ事に候娌入は新しき紋付よく候扨また鹿子の色〳〵十二までは無用に存候迚も着申物にはあらず数を揃へて持たといふ分に候是も本國寺手木の下のつや鹿子は十二の內にて六百四五拾目の違ひ有是によつて私才覺いたしさる御かたの御息女御死去なされ其あがり物を調へ遣はし申候結句かみのかたひ物に候人はしらぬ事お寺は此方次第にて心やすく求め申候此外は其元お內義よこれぬ上着ども黒紅に御所車の縫箔の小袖所わきのさいはひ菱の袷地なしの綸子小袖これらを皆〳〵脇明て物数にいたさるべし袖下のみじかきを誰吟味するものなく候我等かやうに始末心をを申事定めてお內義御ふそく

におぼしめし候はんづれども我等も姪が事なればあしかれと存ずる事にあらず候今度買物の銀子取替申に付迷惑さに申には神ぞ〳〵御座なく候によるこふとんぶた通りは此方より仕立とらせ申候私の思案に落付申さず候は先様より敷銀かつて望みなく万事拵へきれいと申候を合点まいらず候尤銀をこのみ申候はよろしからぬ事ながら今の世の風義に御座候それも又女は形に寄て物好に男のかたよりこしらへしてよぶも御座候へど是は各別に候わたくし姪ながらさのみ生れ付よいともいはれず然も片足ふそくあつてよほど目に立申候を敷銀なしに親仁の心入たのもしきを親類成を満足と申はいよ〳〵同心に存せず候貴様に金銀こそなけれ三ケ所の家屋敷只今では七拾貫目余が物なれば何ぞ請取事して其請人に立申心ざし見るやうに候づね〳〵其心得なされべく候もはや頼みを御取なされ候上はいやがならず候随分仕立おくり申されべく候私は左様のよい衆づきあい嫌いに御座候はじめからさし出申まじく候いづれとも近日罷くだり可申上候以上

兵庫屋　平九良

六月廿一日

兵庫屋平右衛門様　尊報

此文の子細を考見るに京へ縁組の買物を申遣はしける此娘がためには伯父かたへと見へたり此者の申ごとく一代に一度の大事念を入て後約束申べき事ぞかし今程世間に見せかけのはやる事はなし面むき内證の十露盤入れてからは大かた三五の十八

二　安立町の隠れ家

去冬爰元に罷越德妙寺の御狀持參いたし上寺町に兄弟ながら十日ばかり御やつかいに罷成それより此お寺を頼み住吉安立町のうちにわづかなる小家かりて面むきに古道具出し置下人吉介に朝夕焼せ世間のいひわけに堺の濱なる小肴を求め毎日大坂へ遣はして町／＼を商賣いたさせ敵の隠れ家しのび／＼に見分仕り得とも今に見わたり申さずさて／＼武運につき申候兄弟と人には語られず氣をつくし申候名字はかくし名も傳五良傳九良と替申形はさま／＼になして我等はかうやく賣に成て隅／＼殘らずさがし油斷仕り申さず候又弟が義は次第に形うるはしく罷成人の目に立世上へ出しかね不斷宿に置申候うちに上下六七人にて道具なしの供まはり雨風もなき日和に早駕籠の兩をおろし何とやらしのぶ体に見へ申候を傳九良追かけ窓覗申候へは頭巾引かぶりし風俗敵戸平にうたがふ所なきとて着込は不斷肌をはなさず刀おつ取跡をしたひ打べき首尾を見あはせ泉刕の信太といふ里にて駕籠を立させ出茶屋にたづねて古哥の楠の木葛の葉のうら道を茶屋に案内させて庄屋の坪のうちに行を爰ぞ願ひの所と思ひ極め先に立まわり木陰よりはしり出横井尉左衛門が悴子見わすれたるか奥関戸平のがれぬ所と打てかゝり申候時此侍ひ飛しさりやれまて人たがひと手をあげられしに傳九良なを進みて切入けはしく成時溝川飛越大小をぬき捨無刀になつて下人どものいさむをしづめそれがしは岩塚團之丞とて生國越前の者成が大かた様子も見られよ疝氣に筋骨いたみ主人にお暇申熊野へ湯治いたすの所に是は存知もよらぬ難義此方は多勢なればせんぎの仕やうもあれど若年の敵うつべき心掛はやつて我を見違へらるゝの段すこしも意恨にぞんせぬと利をせめての斷り傳九良承りとゞけしばし思案候てさりとは戸平形に生移しなれども我九才の時

見し事なれば愚覺へにして慥ならず殊に刀脇ざし捨て我にあんどさせての斷り戸平ならばよもや是程落つきて始終のさばきは成まじと思ひ扨は此方のそこつまつびら御しやめんなし給はるべし御年比と申戸平と申者に似させられたる所ありて近比〳〵あやまり申候拙者兄傳五郎と申者念を入戸平が形を書移しすなはち懐中いたし候右のかたの目の上に弐寸斗の切疵髮ちゞみて首筋ふとく色あさくろきと書付申候ひとつ〳〵見合候にあらましあいけるも不思義に存候と申候時此侍ひ横手を打てそれはめいよの人に我は似申あぶない命をひろひ申候と大笑ひしていまだ若年の身の是程の心ざし世になき御親父もさぞ〳〵御滿足たるへし其勢ひにては追付本望とげ給はんもし又北國筋へ御立越なされ候事も御座候はかならず御たづねなさるべしとたかひに禮義申て立別れ宿に歸りて様子を語り申候をひとつ〳〵聞申候へば敵戸平にまぎるゝ所なしさりとては武運のつき又いつの世にめぐりあふべき扨は大坂に隠れしが大和路へのき候には極まれりさり

なから其方に逢申せば分別して遠國へ立のき申候はゝめぐりあふ事不定なりそれがしが目にかゝらぬ事おもへば口惜と殘念皃つき見て傳九良赤面してたとへ人たかへにして私のうたざる事はおくれ申候命を捨るから別条なき事ぞとしばらく後悔して其夕暮に宿を罷出今に行方しれず候定めて彼戸平を二だびうち留る覺悟にて出候とさつし候兄弟一所に心をあはせ雲をわけ地を割乾坤の中はさかし出し父のきやうやうにとそんじ候に傳九郎にはなれさて〳〵是非もなき仕合に候是によつて四月晦日に住吉の借宅を仕舞南都へ立越申候東大寺の末寺にしるべ御座又是にしのび戸平有家をたづね申へく候貴様御事五月下旬に江戸へ御くだり其時分住吉迄御立寄くださるべきよし此度は御目にかゝり申まじく候その御斷りのため舟宿中國屋勘六方に此一通書殘し置申候

卯月廿七日　　風越傳五良

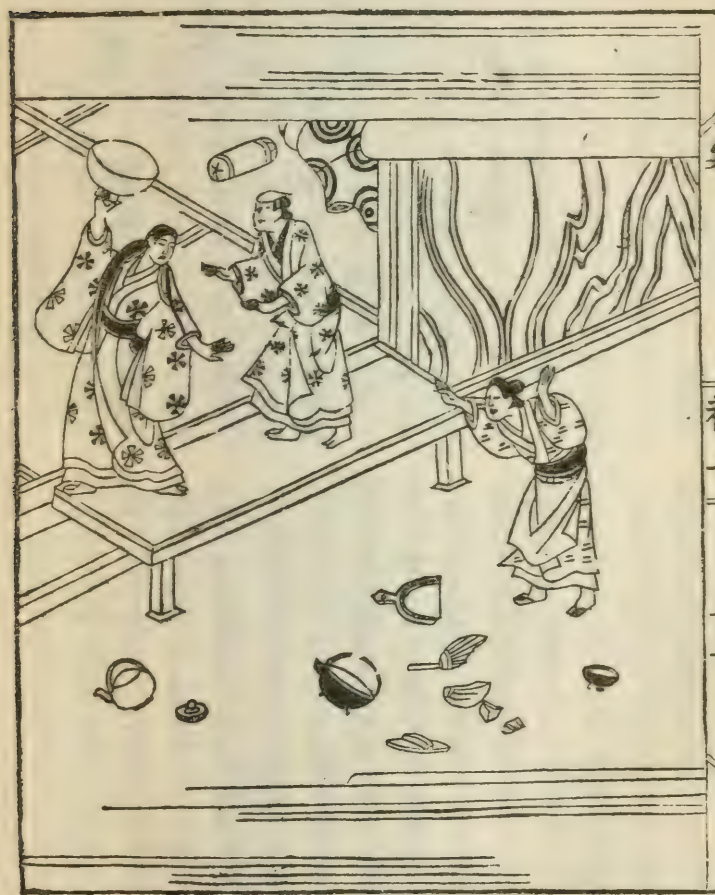
徳明寺久兵衛様

△此の文の子細を考見るに西國にて父をうたれ其敵をねろふと見えたりいづれ武士の身程定めかたきはなし此心さしにては天理をもつてうつべき事也

〔三〕京にも思ふやう成事なし

態飛脚をもつて一書令啓達候其元いづれも御堅固ニ御座なされ候や今になつて生國御なつかしく存候私義わかげにて京都の住居望みおの〳〵の御異見きかず國元を立のき十八年罷過申候得どもむかしの事わすれ申さず候さぞ〳〵置去に仕候女房ども我に恨み申べく候それゆへ兩三度まで暇の狀くだし申候に無用の心中を立縁にはつかぬ事に候惣じての女おとこを持申事一生の身過づくに御座候此方にはふつ〳〵とおもひ切申候是程つらく申候男に何とて執心殘し申候や此段〳〵よく〳〵御申きかせなされいまだ若ひうちにかたづき候が其身のためとぞんじ候一たびかたらひをなし候事なればあしかれとはぞんせず候兎角我等あき申候はつね〳〵りんきいひつのり候にふつ〳〵と皃見る事もうたてく入縁のまゝならぬは捨置爰元にのぼり独も暮しがたく四条通りかはら町のほとりに錢見せを出してつち食燒女三人口をこがまへにもうけもしれぬ身過とぞんじ年中の始末第一薪の高ひ所なれば箸よりこまかに小刀割の黒木爪に火ともすとは此事に候朝夕の鍋釜もそれ〳〵に仕入置てさりとては尻がるに御座候關東の釣鍋に大束

くべて二時ばかり燒どもものゝにへ不申候を所／＼とおかしくそんじ候其元の下女壱人の喰物にては京の女五人はゆるりと夜日をおくり申候人の世帶秤さま／＼替る物は御座なく候其地にて生鰯を一錢に十四五も賣ば下女どもの口へも一度に十ばかりもかしらから燒喰候又都にてはちいさき干鰯を一錢に十六七にも當を壱人に三つあてがひに燒て生醬油につけて下女さへ此かしらはくわず何事もきやしやに世をわたれば女は上かたにて然も手業にゆだんなく大かたはしり婦夫は銘／＼過いたせば女房持も勝手づくに罷成候とぞんじ寺町の白粉屋の娘かたちも十人なみれば是をよびむかひしに其元の女房どもとは各別違ひ遊山夜ありきにかまはずかつて悋氣いたさぬを何とやら合点ゆかず見あはせ候うちに我等を嫌ひ暇乞申事たび／＼に候是は男の口惜くそんじ惡しと引付置申候へはけがのよしにて椀皿箱をうち割作病しての昼ね錢讀すれば長百づゝつなぎてそんをかけ香の物桶の塩入時をかまはずあたら瓜なすびを捨させありあけに灯心六筋七筋入てかゝやかせ傘はほさずに疊門淨溜利に錢米をとらせ毎日湯わかして水へ入るごとく手にも足にもさはる所にて費是もつもりて身体のさはりなれば一日も置がそんと分別して埒を明申候其後思案して菟角年の行たるが世帶藥とぞんし此望み人に頼申候に幸ひ六角堂の門前に順礼宿の娘男に死別れてもどりなるがあのほうから二十七と申せば三つ四つ年かくしてから三十の内外の女と見定めいかにしても風俗のよきにほだされ祝言いたし候へばおもひの外ふるひ所あらはれ脇にて子細しる人にたづね申候に今三十六に成むすめあり是は十七の時の子なれば今年五十二か三かいふ人御座候へば扨も大きなるかづき物と次第にうるさくなつて尻目にかけてためし見るに毎日の仕事に白髪をしのび／＼にぬく手元堪忍ならず物入を無にしさつてのけ申候それより後御所がたに勤めし女﨟衆あがりとて形にいふ所なく心もやさしく我人のきに入是はよきたのしみすゑ／＼までもとおもひしにさりとは世間の事にうとく秤目しらぬは斷りなるが摺碎のうつふせなるをふしをうつせし燒物かと詠めつるべ取を小舟のいかりかとふしぎそふに見ればましてや五合ますなどはしらず候是では小家のだい所あづけられずわかるゝ事かなしく惜く候へども是も隙やり申候其後又烏丸に家賃七十目づゝ居宅の外にとれるいへや敷の有ご

けのかたへ取持人ありてゆきしに外に隱居のをぢをばこれのみ姉の姪のとてかゝりもの八九人も御座候是さへむつかしく存候にいへに付たる借錢二十三貫目一生濟事あるましきとぞんじ爰もすこしのそん仕り出て歸り申候此後竹屋町のふるかね屋の娘うまれつきも人並にて敷銀三貫目付て夏冬の物もさむからぬ程御座候とて十分一取仲人がきも入是は仕合と呼入申候へば月に二三度づゝ乱氣に成て丸裸にて門に飛出る事迷惑いたし其まゝおくり歸し申候爰元女の隨分たくさんなる所にて縁組と申からはおもふやうなる事御座なく候我等も十七年のうちに二十三人持替見申候に皆おもひど御座候て歸し申候我すこしも御座候金銀は此祝言事につかひ込只今は手と身ばかりに罷成候もはや女房持申候力も御座なく候へば竹田通りの町はづれなる伏見にちかきうら屋住ひして菅笠の骨をこしらへて其日くらしに扨も死れぬうき世に御座候是程かなしき身に罷成候得ども其元の女にみぢんも心殘らすはよく／＼の惡縁に候いよ／＼此むごき心底を御物語

りあそばしはやく縁付いたし候やうに頼み申候京も田舎も住うき事すこしもかはらず夫婦はよりあい過とぞんじ候今の身にくらべてはむかしの仙臺の住所ましと存候都ながら櫻を見ず涼みにゆかず秋のさが松茸も喰ず雪のうちの鰒汁もしらずやう／＼鳥羽に歸る車の音をきゝて都かとおもふばかりに候はる／＼の京にのぼり女房さつて身体つぶし候恥かしき事に候かならず／＼他人にはきかせぬ事に候かさねては書中にても申上ましく候我等死だ者分になされ御たづね御無用に候若命ながらへ申候は坊主罷成執行にくたり可申候以上

京より　九平次
福嶋屋

二月廿五日

仙臺本町一丁目
最上屋市右衛門様

此文の子細を考見るに生國仙臺のもの女を置ざりにして京へのぼりたび／＼女房よび替身体のさはりと成けると見えたり

萬文反古　目録　三巻

一

京都乃花娵へ
嵐山の華奢を時ゟ
長芋乃ゑのおりし

二

明ても暮ても動揺
傍輩の娘より之説
女の欲の深き事甲しく

三

代筆(だいひつ)は浮世(うきよ)の闇(やみ)

烏(からす)は目前(もくぜん)あれどもし

恋しれまぬなからぬ因果(いんぐわ)

【二】京都の花嫌ひ

我花にあきて春中は都を立のけば。人は又ひがし山の櫻幕に哥唄ひ三絃を引るを。それ聞にはかりのぼるのよし。たよりを求めて先無事をしらせ候。貴坊御事はつね〳〵赤弁慶とある名をよばざるは。道心堅固の御身目出度存候。さて愚僧が草庵さだめて鼠の會所となるべし。さりながら小鰯ひとつ殘しおかず貧僧笑ひ申べく候。まがきの菊萩おのれに咲て。頓ての霜夜見ぐるしく成行を誰か名殘を惜む人あらじ。鎰あつけ置候御ふしやうには妻戶御あけなされ。若山歸りの唲人あるじは居ずとも見せたく候。北のかたの竹椽の下に栗長芋など生置候。其まゝ捨りゆくもとおもひ出し申候は。竹中氏よりおくらし事外へは沙汰なし〳〵。美童は我等の持病又此だひも戀のやうなる事に。身をなやみてとくにも歸京仕るを今までうか〳〵と暮し申候。すぎし春其元を罷立備前の岡山にしるべの人ありて。しばらく爰にともてなされしに何とやらとゞまりがたく。むかし西行法師が詠めになづみし。瀨戶の曙に便船して世をうら風のふくにまかせ肥の後刕につき。清政のたま屋寺に連句の朋友ありて是にたづね休らふ。折ふし夕嵐の袖に涼しき筑山を詠め。たくみに石をなをしさゞれ水をやりて。仙家に地を縮て翫もうらやまつ。此寺の杉の茂みに訛なきほとゝぎすの一声は都にかはらぬもおかし。是には一作と胸に三重韻を繰かへすうちに。誰の上人とやらん御見舞とつき〳〵の足音する中に。おそばさらずとおぼしき二八にたらぬ美童。かほつきのうつくしさ京にてもつゐに見た事なし。かゝる西のはてにも此ような生ものもあるものか。扨も命はながらへてこそためしなき物を見れと。すゞろに身の毛よだちて中〳〵花やかなるを厭て來る。ひなに凢慮の外のなやみの種を見出す事よと。胸の煙の立さはぎ御茶すぎて御立と聞へし名殘惜く。まきの戶の隙より覗きてなをひとしほのおもひとはなれり。跡にてけふの美人の名はいかにと問ば。やんことなき御かたの御二男なりしがすゑ〳〵出家の望みありて。今の上人にあづけ人と語られしに。此君に腸をさく心地してうつゝなくなれり。あはれ是程の淸僧をなやます事ぞと。我ながら口惜く亭坊のおもわくをもかへり見ず。せめて心は通じて給はれと書簡紙に筆をはめてつかはしける。きの

ふは御俤を見奉るに天性の御誕つき美麗にして是や此。鄭挑が紫綸巾を石季龍に曳。董賢が袞龍袖を漢の哀帝にたつ物なり。見る者李夫人にうたがひ聞者楊貴妃に訝る。夫木石無心にあらざれば見聞こゝろを動す。我も又蟷螂が斧蜘蛛の網雲にかけはしといへども。今やつたなき狂妻をつゞりあつめて懐を述る。かりそめに御顔ばせを拜しより。胸は阿蘇の煙を焦し。泪は白川の浪に滴る。其眸は桂の輪をこらし。御心柳の糸のごとし。さる程に鶴か崎につきしより四海九州花裏の杜丹と承る。しかし熊本にやすらひて。多情一片は玉の中の琥珀と見る。眞實花に勝るゝと底心むがうたがふ。呉國寵愛の西施。日本名譽の小町。ゆきひらの若盛業平の再誕。夢にもわすれねば覺ても戀しければ。但祈を藤崎の宮にかけ。身を菊地川に投んとす。御意には露命惜からず。人間百歳の生涯。半炊の夢を悟る。君一夜の手枕千金の宵より貴し。起て居ても朝な〳〵夕へ〳〵わすれやらぬは大かたならぬ因果と。おもふ程書つゞけて遣はしけるに。

先さま是はとお情の歸しくたされ。それは〳〵いふにたらず筆紙には及がたし。ちかき程の首尾に旅庵へ一夕御まみへあるべしとの御内證。いまだ御日ざししれず是を待うちの物わひしく爰が懸の只中とおもひ暮し申候。此だひ右のかひなの六字夢現書たる入ほくろ用に立申候。あはれちかくば其夜のありさま見せたし。お名は岡嶋釆女さまいふなれば。御かはらけ給はりて夜すがらかたしけない事を御物語り申所。しばし此國の烏其元の祇薗はやしへあづけたく候。此事月西庵の草履取松之介に御沙汰あるましく候頓て罷上りはなし種に書殘し申候以上

九月十一日　慶眼

遊夕御坊

此文を考見るに。京の花見かしましく西國にくだりおもひよらぬ美呪なつみしのばせたる狀のあらまし友とせる方へしらせけると見へたり法師似合たる也

〔一一〕明て駭く書置箱

生死わきまへたる人さへ此別れは取乱

し給へば。ましておろかなる我〱なげき申候も斷りかと存候。兄甚六良義先月廿九日相果申候。すなはち改名春雪道泉と申候其元にても御とむらひあそばさるべく候。寂後の時分まで貴樣の御事申出し。此甚太夫爰元に居申されば候ものならば。内證の談合相手に成申候人を。遠國奏前までの旅商ひ。一門皆〱ふがひなきしかたとくれ〱是を悔み申され候。將又甚六良りんじゆたしかに自筆に書置いたされ。年寄五人組の加判たのみ。一七日過て內藏をひらき親類中立合是をあらため。それ〱に相渡し申せとのいげん。則目錄の通り書しるし。貴樣へも此飛脚に所務分おくり申候慥に御請取くださるべく候。先住宅に諸道具其まゝ銀三百五拾貫目。惣領の甚太郎。同町拾壹間口の家屋敷に銀弐百貫目。二男の甚次良。扨泉州の新田銀三拾貫目。姉妙三。銀五拾貫目弟甚太兵衞。銀弐拾貫目貴樣へ。銀五貫目は手代の九郎兵衞。此外諸親類下〱寺〱まで殘らず書付いたし。殘所もなき身の取置といづれもかんじ申され候。時に後家の事は書置には何とも見えず別紙一枚あり。つね〱兩人の忰子に當りよろしからねば。長持万事ずいぶんそこねぬやうに親許へおくるべし。いまだ若き者なればかさねて緣付のためなり。右に敷銀なければ此たびかへすに別条なし。三十五日より内にかへせとのいひ置。此段は甚太郎おとなしく申出候。此たび親と名の付申候御事なれば。是ばかりは御いひげんをそむき。此屋敷に御隱居をこしらへ。御寺參り銀弐拾貫目しんじ申たきとの所存。いづれも泪をこぼし若年の人のさうとてはやさしき申分と。おの〱肝にめいじ是は後家御もまんぞく成事と町中申され候に。すこしも嬉しき負つきなく。荒和布刻みさして薄刃でまないたをたゝきながら。わが身は女の事なればどうかたずひてもくるしからず。死人のいひ置の歸るか望み。其弐拾貫目の銀子も申請る事いやなり。欲かましきいひ事なれども此五七年我等の親里より。幾度か銀金を取よせ自分の用どもを調へたれば。せめて其かはりにすこしは心付あらばあれ。菟角今晩親のかたへ歸る。かく申せばとてみぢんも不義緣付ののぞみなし。身のおさめやうを後に見給へといひもあへす小袖ぬぎ替へ。つねは乘物のおくりむかひも此なかなればあゆみ出られしを。是はみぢかしとゝむる人あれば。一門のうちにも歸したがる人も有。善惡人間心〱なげきの

中に声立て。後家は歸らける跡にて年かましき人了簡あそばし。尤しにんのふそくあればこそ片手うちなる書置なれ。すこしのしよむわけしてから世間に聞て笑はぬ事と。相談にて銀五貫目手ちか成戸棚にありあはすを幸ひに。諸道具付て親里へ歸し申。其後藏をひらきおの〳〵立合吟味いたされしに。一圓銀箱のあり所しれず。是は不思義とすみ〴〵まであらため申候へは。むかし長櫃の底より手形箱ひとつ取出し。是を朋て見るに銘〻に付札あつて。大分銀子皆大名借の手形をゆづり渡され。當分の用には立ず手に取まではたしかならず。皆〳〵吳入申候手前に有銀は後家へつかはし申候五貫目ばかりにて御座候。はや甚太良小遣ひ銀もなく迷惑ながらわたくしかたより。すこしづゝ取替先只今は其通りに御座候へども。大勢の者ども酒つくるもとから皆〳〵借申され。紙に書たるものでなければ埒のあかぬ事に存さて〳〵今といふ役には立ず。子どもの難義仕思案に落着申さず候。我物大分ありな申候やうに兄者人不覺悟いたし置れ候。

貴様へ先いひげんまかせ銀五拾目の手形。お町衆のさしづによつて態もたせ遣へはし申候。甚六良事兼て御存知の通りすこしも浮たる事はいたさぬ人にて御座候が。京の銀借ども大分限罷成候をうらやましかり。あたら銀を捨られし同前に御座候。右の外芝居の銀親せられ三十貫目の手形見え申候が。是はぬしも物にならぬとおもはれ候や。誰にもゆづり置申されず候。いづれ人の身体は死ねばなれぬ物に御座候。是程手前に銀子あるまじき事とは夢〱存せず候我〱が親道齋申置れしは町人家質の外。金銀借申事無用。其上有銀三ケ一出し申べし皆〻は慥成事にもかさぬ物と。くれ〱いひわたされしに我物時の用に立さる事にて。道齋の御事おもひ出し候。さりとは世の移りかはる事かなしき中にも物わらひさま〱に見え申候。甚六良後家いまだ百ケ日にも立申さぬうちに。はや近〻に縁付の男を極めておくるのよし。世のならひとは申ながらせめてむかはりは待ても人の笑はぬ事に御座候。それも又下〻の友過女はけふを暮しがたく義理かき申も是非なく候。此女房は悪し〱と存候折ふし。最前荷物歸し申候時分誰かつど〱にせんさく仕候人も御座なく。道具藏片角に雑長持ひとつ取殘し置申候を。ことすきて取につかはし申候を私に申來り候程に。さやうのしばしもあづかり申候事うるさし。はやく其使に相わたせと申付候へは。下女ども二三人藏に入て取出しけるに中〱動もせず。其後男ども手をかけてもすこしもにちらず。錠前は念を入然も封印あれば。明申事も成がたく是に難義して。雑長持にはしいしきぬばりなどの入物なるに。是は碓の二十も入けるかとせんぎする所へ行て。此長持を見るに蓋にちいさき穴を明しを不思義なれば。子細なく錠前引はなちて見申候へば。年〻みだけ錢を日夜に入置と見へ申候。さりとては此女の欲心男のやしないを請ながら。すゑの身かまへして是程まではぬすみ溜。自然とあらはれ申候は天理をそむきたるゆへかと存候。大かた目つもりにして八百貫ばかりと見へ申候。かやうに甚六良大やう成ゆへに万事勝手あしく罷成候。此女房兼〱別れを覺悟したる心中むごし。世上にかやうの女心もあまたありそふなる物にて御座候。是をおもへば夫妻のかたらひなしても油斷ならぬ世の中に罷成候。彼長持を取に參候程に。娌入の時分二人して是へおくれば。又弐人して持歸る達者男をつ

かはし候へと申せば。恥てや今に取にまいらすれ候年内に御上り侍申候万ゝ語り申度候此御報相待申候

大津

甚太兵衛

卯月廿二日

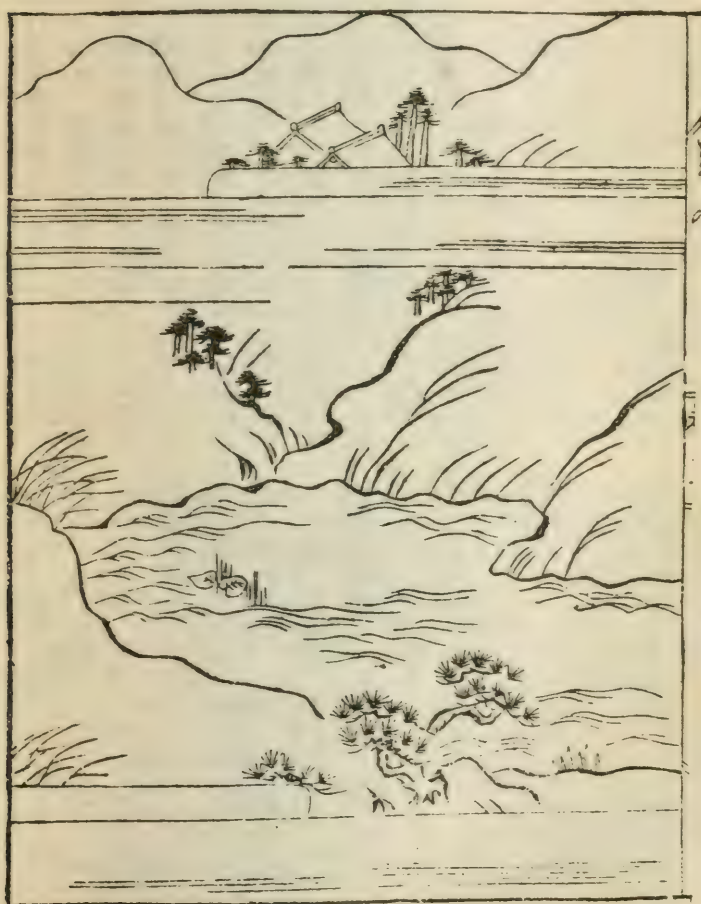
津崎甚太夫様

人ゝ御中

此文を考見るに大名借の手形を所務分したるを同しもらひ物ならば当銀とおもふ心と女房つねゞゞの欲心あらはるゝ事と見へたり

三　代筆は浮世の闇

帰庵越路の春をしたひ。代筆の文ことづて申候御出家は妙心寺の末寺に。久しく御勤めあそばし語ればむかしの女房に筋目ある御方。今又重縁とぞんじ後世の事ども導れ。ありかたく存候。御生国越後の村上まで此たび御通り被成候ニ付。幸ひに申入候幕におよび申候は草庵に御一宿あそばし候やうに申され。法義を御聞なされいよゞゞうき世の覚悟あるべき御事には。まことに兄弟と生れゆくするゑかはらず。たがひにしたしみ深くするは人のつねにて御座候を。女のいひなしにて外になき弟を都にさへ置ずして。おもひかけなき道心発させ年月の難儀さぞゞゞとかなしく存候。さりながら今では其身の仕合。誰かひとりもとゞまる此世にはあらず。然も二親のぼだいの種とも成殊勝千万に存候。惣して女心のよしなく人の身の事申せし我つれあいも。かぎりありて四五年跡に相果申候へは。是にもかならず恨みは晴し給へ。これにつき今まではかくし申候得ども。其手ながら申通し候我身の因果れきせんさりとてはおそろしく候。むかしの住宅三条に酒商売の外に紙見せ出し候に。次第に仕合よく渡世もゆるりとおくり。萬願ひのまゝ成折ふしこゝろかゝりは。軒下のひくき居宅元和年中の普請なればひとつとして気にいらず。近年のうちに何ぞ銀もうけいたさば。思ひのまゝに立なをし衣食住の三つに。楽しみ極めんとぞんじ候処へ。大名の買物使らしき侍ひの挟箱持一人めしつれ。中奉書入よしにて三百まい売わたし代銀請取其人帰られさまに。ひとつふたつ狂言しばゐの物かたり仕り申候が。さいふを取残してゆかれし跡にて引提て見ればしつとりと重より。我あさましき欲心おこりて彼袋をふかく隠してさらぬていに罷有候処へ。くだんの侍ひはやにもどり。最前爰に金袋わすれ行。それをたもれといふ。何も御座りませぬとおもひそふ此侍ひ歯

を喰しめさりとては此所に置わすれしにはうたがひなし。則其中に小判百八十三兩。一歩が弐拾四五。銀が六十めあまり入置候。是はわたくしの金銀にあらず主命なれば。此そこつ武士の一分立がたし。是非に給はれ此恩はわすれじと。ふたこしさす人の町人に手をさげてさまざま詫られしに。心つよく隠しすましかへつていひかけのやうに申なし候へば。せんかたなく立歸り一時ばかりも過て。又彼さむらひ烏を一羽生ながら持きたり。其方隠すにおゐてはゆくすゑを見よといひさまに。此烏の兩目を脇指にてほり出し。それがしになげつけて歸り申候を。世間の取沙汰あしきもかまはず其通りすましけるが。四五日も過て其侍ひは黒谷の奥にて我と切腹して相果申候。是をつたへて世上の人も何となく付合絶て。あるにもあられず家屋敷を賣拂ひ嵯峨の里人をたのみ。けいきよき所に庵をかまへせめては念佛申。我心のおそろしきをひるがへさんと。髮をおろしころもをかけ身をこらしめの山住ひ。子のない事はかゝる時のよろこび

と。いよ〳〵佛の道に入日の岡も程ちかく有時夜に入て。我〳〵洛中の野等と名乗かけて。爰をしる事不思議やおもひ〳〵に家さがしして。一生のたくはへ残ざすとられて。けふをくらすべきたよりも御座なぐれへは。やう〳〵鉦をたゝき申袖に握米をあつめて命をつなぎ申は。是は世に住甲斐もなく菟角身を果して後の世をたすからんとおもひ定め。有夜廣沢の池に行て西のかたの岸に立て。水底のふかき所冣後ためと見あはせ申は時。いつぞやの侍ひあらはれ出松かげより我に取付。悪しやおのれ此世をのがれたき所存おもひもよらず。此一念のかよふうちは眼前に恥をさらさせんと。胸くるしき程しめつけられ。又草庵に立歸り只ぼうぜんと夢のごとく。それより三日すぎて曙に。舌喰きつて死んと起あがれば。彼さむらいまぼろしに見えて。我がかしらをきびしくおさへいくたびにても汝に自害はさせじ。我執心の鬼となつてむかひにきたる火の車を待と。いふ声身にこたへ骨もくだくるばかりかなしく。其後色〳〵一命捨て見しに。

我命の我まゝに死れざるゐんぐわ聞傳へたるためしもなく。せまじき悪心今なげきても歸らず。しんいをもやし生ながらのめいど。然らばがきどうのくげんと食物たつになを無事なり。此事あふ人毎にさんげして泪も血にそめし時。くれかたのとまり烏声淋しく聞へしが。たちまち我宿に飛入と見しが。兩眼つゞる間もなく世界は闇となつて。つねにながめし嵐の山櫻の白ひも。高尾の村紅葉赤いも月も雪も見る事絶て。されども耳はむかしにして小倉山の鹿の声。淸滝の岩浪栂の尾松風を聞より外なく。今は都の友とせし人も道替てたづねもせず。朝夕のけふりも柴木もとむるたよりなく。里童子の山歸りにさま〴〵おかしき小哥うたひて。折〳〵のなり物をもらひ請て。手のとゝく小細水に咽をうるほし。けふまではくらしけるが明日の身の程をわきまへがたし。此御法師さまばかりすきにし市中にまぎれし時より。今に御見捨あそばされずして。我因果の道理御聞せあそばしありかたくぞんじ候。兄弟のよしみには相果し後かならず〳〵一へんの念佛たのみ申候。おもへば筋なき人の銀をかくし人の命を取申候事今後悔身に覺申候さりとは〳〵死かねて是非もなき世に住申候以上

嵯峨野

三月晦日　白心

越前府中

浄行坊まいる

此文を考見るに道をそむきし銀袋をぬすみ人の命をうしない其因果目前にむくい出家せし弟のかたへ浮世の恥をあらはしたよりに人たのみして書おくると見へたり

新可笑記　目録　四巻

一　南部（なんぶ）の人が見たも真言（まこと）
命あるうちに帰（かへ）り人（ひと）
それぞれ命の寄付

二　此通（とほ）りと始末（しまつ）の手付
濡衣（ぬれぎぬ）の振（ふれ）乃ちぎれ
大阪のうしろに新町

三

〔一一〕南部の人か見たも眞言

西國の珍飾ども御聞せくだされ。長崎の事見るやうに存候。貴樣其元に御入なされ候一兩年のうちに我等も罷くだり。又上がたと万事かはりたる大湊一見仕度候。將又爰元にて風聞仕候は良竜のこがい御座候よし。何とぞ御才覺なされ金子五十兩迄ならば御求め賴み申候。川原に見せ物ことをかき申候。春中に大ぶんの錢を取申事には。是にかぎらず角のはへ申候猿か。足の四五本ある唐鳥か。何ぞかはつて生物をのぞみ御座候ない〳〵御心がけくださるべく候。此程は芝居へも本見物は出申さず。客宿も中〳〵あい申さず人〳〵に身過の分別いたし候。京も次第にせちがしこく。ちかき比より東福寺のほとりに。献立看板といふ物を出し置。壱分から弐匁まで當座食を仕出し。御汁干葉に蛤のぬき實。料理鱠子は見あはせ。肴物生貝せんまい。やき物干鱈引てから物。右は五分膳品〳〵道具きれいさ。夜ふねに乘都人是にてしたくをして伏見の宿へよらずくだり申候。惣してこんな事に罷成息も鼻もさす事にはあらず。せつなき命をつなぎ申候。然とも都にて御座候は算用の大じん出申候。あはぬ物とはしりながら又當年も弐千兩までは請合。新芝居取立大坂役者もよきものがゝへ込申候。又一花はいづれも見申べく候。扨是非もなき浮世とぞんじ候は。貴樣御目かけられし川原町の利平此六月十九日に相手と内談してうち果し申候。存知の外なる事にかくは成行申候。利平事丹波の下村より孫八良かたへすこしの銀子を持參いたし養子にまいり。五六年も過申候て共約束なれば孫八娘こよしとめあはせ。万事あいわたし夫婦は寺まいりをうき世の心事に仕り。よろこび申候折ふし利平京にて紙商賣も茶屋へ賣がけおもはしからず。染棉を仕込て奥筋へくだり申候が。其時分五月雨ふりつゞき道中の難義おもひやる所へ。南部よりのぼられし商人孫八きたとなりの問屋に着て。最上川の高水の咄し往來のわたし舟浪にうちこまれ。人馬荷物大ぶんにそこねたるよしを語り申候程に。孫八良是を聞て利平が事心もとなく。年の比風俗をいひてもしかやうの男などは。其舟に見へわたり申さずやとたづねられしに。それは立嶋の雑子にくろきひとへ羽織のもん所に。山形に剱菱を付て色しろなる貞にすこし釣髭ある人ではなかつたかと。利平にひと

つも違わす申せば孫八おどろき扨其人も死ましたかといへば。成程寂後を申は四五度も高浪にうき沈して。念佛の声二三べんせしが其うちに我等の乗し舟は。やう〳〵こなたへつきて命をひらひましたと。小者と口を揃へて申ければ孫八なげき出し。宿に歸るに足立かね男泣に世上をはゞからず。持佛堂へ御あかしをあげ花をさし樒香を盛て。かねをうちならせば祖母の泪の片手にお團子のこしらへ。近所からは思ひもよらぬ弔ひ。娘は狂乱のごとく身もだへ見るさへ是はかなしく。わざ〳〵丹波へ人を仕立本の親のかたへしらせ申はへば。存知の外あきらめてそれまでの事といひかへり申されは。さる人は日〻にうとしとはや百ケ日も過て。此まゝにておかれじせめてなげきのやむためとて。あたりの人取持て緣組の事をいひ出せば。こよしはおもひ切後の利左衛門を丹波よりよひよせし見の夫は求めじと申はを。此家たゝねば二跡をかやうにそうぞくする事世間にお親への不孝と無理に合点させ。利平弟るならいと。是非祝言させて三國一を

うとふて仕舞申候て。いまだ二三日過て利平仕合よく無事立歸り申候へば。いづれもあきれ果申候風情何とも落着かね。日比別しての方にゆき此首尾段ゝ聞とゞけ。度ゝ書狀をのぼせしに一度もとゞかざる事因果にて御座候と。何となくしづまり兄弟ともに一分立がたしとおもひ込申候か。其夜ひそかに同道して高野熊野に參詣して。山中にて二人ともに打果したると沙汰仕申候。孫八娘こよしも宿は出て行方しれす成申候。是程なさけなき兄弟の最後は無御座候。最前の南部商人まざ／＼と見たも僞りはなきよしを申候。兎角利平前生の因果に極り申候以上

霜月三日　京茶屋　又兵衛

長崎にて　林金五良様

此文を考見るにいそがぬ事を取持て是非もなき祝言に三人まで命をうしなひけるはふびんなり

三　此通りと始末の書付

六日飛脚に無用の鑑出して御狀御越な

され候。さしあたつていぞき申さぬ御身体の內談。其元室町の絹荷たび／＼くだり申候へば。いづれにても御頼みなされ候へば。賃なしに相届申候を世の費に罷成候事を扨／＼御そんじなく候。此覺悟からは次第に不勝手御成候事尤に候。せめていづれも御無事御入一段に存候。將又爰許めつらしき干松茸一袋くだされ忝存候さりながら御心入滿足にぞんせず候は。我等。此方へ罷くだり申候ははや十二三年に罷成候に。つねに御状もくだされず候。わたくし方よりは其時分四五度も書中に申上候へども。一度も御へんじなく世の義理といふ事御かまひなまれず。今又御用之義に文くだされ此方滿足にぞんせず候。惣して人に無心いふ前には念比にしかけ又は音信物をつかひ。さま／＼けいはくいふ事上がたの風義に御座候。關東は中／＼さやうの當座たばき合点いたさぬ所に御座候。つね／＼したしく語りあい申候人には金銀は扨置命を捨申候。おの／＼心底親類とは申がたし。私身体やぶり其元を罷立申候時道中のつかひ銀。わづか三十目の事さへ御借なされず。結句世間をたはけ者との御申なし。罷立候宵に御暇乞にまいり申候へば。我等の足音御聞なされ。其まゝ奥の間へかけ入天滿まで念佛講にまいられましたと。お內義まざ／＼と留守御つかひ候は今に／＼わすれ申さず候。他人さへ住所の別れをかなしみ。叶はぬまでも大坂にとゞまる談合たのもしき事に御座候。此衆中御事日夜に存じ出し候近年に罷上りそれ／＼に御礼申あぐべく候。貴樣は從弟の事に御座候へは。酒小作で機嫌よふいとまごひをして給はり候へば何のうらみも御座なく候。せつなき事はわすれもやらず候。然も十月十一日の朝夜番の久藏が所より。茶漬食のかとてさらば／＼わづらはぬやうにして。道中そく才におくだりなされといひも果ずに戸をさす時。せめて見おくりてくれぬかと物うく心ほそく。寒空にふるおはせひとつの旅出立。やう／＼町屋をはなれ枯野の薄ざは／＼と。しやれかうべの露にぎらつき八付場こきみわるく。夜天狗の長九良鬼食の半八挑灯けしの万兵衛。これらは皆〻西國の巾着きりども爰の土となりぬ。是程あさましき身も盗といふ事はせまじ。たちまちあのごとくなるはおそろしと。我とまことの氣に成候に折ふし僞りの時雨ふりて。今市堤のせくざんの木もしばしの宿には成がたく。旅のうき事はじめに是はなさけなく。笠さへもたぬ身を隱

しかね昼の出茶屋が日かくしの許には
しりつけば。我より先に鉢坊主の背よ
り爰を宿として前後もしらずふして。
其年の程八十と見てそんはゆかじ。大
かたながらへてからかぎりしれた身な
れども。命はけふをおくりかね皆まで
覺へぬ観音經を讀て其品／＼見へて。
さてもかるひきやうがいやとあはれに
無常観し申候がしきりにふる雨に其ま
ゝ心かはりて。此法師がかづき捨し竹
の小笠を盗。それのみ手拭ひとつ取て
足はやに立のき申候。身のかなしき時
はぬす人もせまじき物にあらず候。其方
様不断の念佛殊勝に聞え申候が。其日
から人をかたりもいふ物には。兎角貧
者程おもひの外心ざしのかはるものは
なく候。是程うき難におひ小田原と申
宿より路銭なくて。二日は水ばかり呑
てやう／＼くだりつき申候に。天とう
人をころし給はず五六年に弐千両あま
りかせぎ出し。只今弐十三人我等の才
覺ひとつにて緩／＼とやしない申候。
此方も世上かしこくなつて其銀程利を
得徳を取申候。利発なる男の身からく
だりて埒の明事には御座なく候。たと

へば御大名の馬屋に入申候わら買。すゑのきれいなる所を花積の込に仕立。其すゑを花火せんかうのじんいたし候やうに。せちかしこく罷成大かたの事にて中／＼銭はもうけさせ申さす候。もたも我／＼の見立手のよき餅屋仕出し。又は貝からの沢山所なれば細工人をつれくだり。石灰を燒申候か此二色より見立申さず候。是程も大分元の入申事に御座候へば貴様のならぬ事に候へども。よく／＼手前迷惑と見えてはる／＼我を頼みに書状御くだしなされ候。此方所存書付にしてつかはし申候。此通りすこしも御そむきなく御かせぎなされ候はば。其元御仕舞そう／＼御くだりあるべし。我等元銀取替口過の成申候やうにいたししんじ申べく候。先朝は七つ起して自賛に髪をゆひ。扱わらんむかけにて碓をふみかうの物ざいの朝夕。夜は細縄をなつて荒物屋に賣雨のふる日は下駄笠を賣やうにして身洗ふにも日當りに水を撥置。湯をわかす事を世の費と覺へ酒たばこを呑とまり。見物事は錢の入ぬ辻ほうかにも目をふさぎ。女の皃を四五年も見る事なく雜正月のあそぶ時灸を居て身の養生を大事に鼻で息する程はたらく合点ならば替り番衆にやとはれ手前路銀つかはぬやうにして御くだり待申候此外始末の段／＼は其時分面談にて申入候以上

六月廿九日　大坂屋治良右衛門

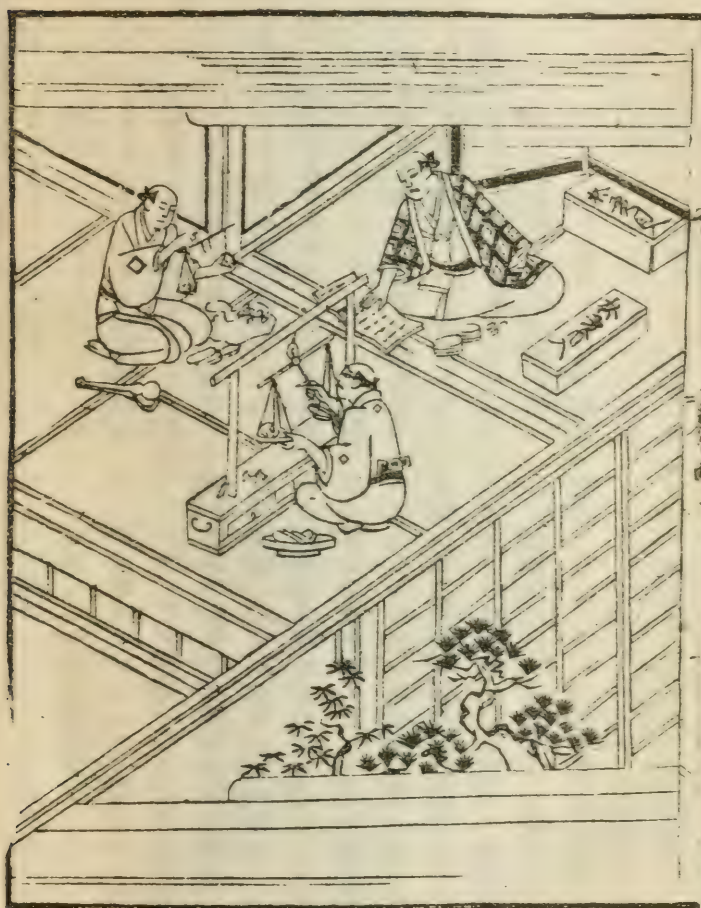
豐後屋徳次良様

此文を考見るに江戸に仕合よき從弟の方身体の事頼みつかはしけると見えたり此書付の通りにかせかばはる／＼の所をくたりゆくまでもなし大坂にても口過の成事なり

二　人のしらぬ祖母の埋み金

御異見たび／＼の御事其時分は耆の宝中にて。悪所くるひやめ申さず今遠國に勘當せられ。さて／＼身にこたへ後悔に存たてまつり候さりとては山家住ひかなしく候。兼て承り申候よりは飛騨の國の萬事不自由なる事。中／＼筆にはつくし難し。口／＼に番所きびしく出入の者に手形の吟味きびしく候へば。わがまゝにのぼり申候事も成がたく。いづれもつみなふして流され人同前に御座候。所にすみなれし人は世界は皆かやうの物と思ひ暮し候。其淋しき事明暮所の人より外を見申さず候。通り筋の本町にて皆／＼立ならび。昼中に鞠を蹴申候に人をよけるといふ事なく。つゐに目の青き鯛を前代見たる人なく。鯖もあぶれば粉に成申候を朔日廿八日

にいわゐ五節句あそぶ日も道ちかき山原にあがり。大木しけりて余所は見えぬ岩の平かなる所にちはむしろを敷て石地の芋を塩煮にして濁酒を呑申候より楽しみなく候何國も謡のふしは違はずかたひ座敷も乱れし時も只山姥にて埒を明申候此程は高野非寺里ども安元の名物蔦納を調へに罷越候が。宮川町にて聞はつり申候や今の時花うたも。そこ／＼をうたひ申れを聞にひとしほ都ゆかしく存候。世間の親仁とは違ひいまだ二十年は慥に無事のうまれつき。それまで侍奉せば我等も四十七八にも罷成申候。然ば浮世に何のおもしろき事も時分すぎ。杖つきての栄花栄しみなく候。殊にそうれい侍ていつまでか定めがたき心當して山家すまひのせつなさに親より先へ死ぬるは見えて御座候もはや定り上に朽果申覚悟きわめ申候命はけふもしれず候跡にてすこしの事に恥をかき申候も口惜く候。其元わけもなふしちらかし申候内證頼み申候。揚屋子ども屋手形借しれたる買かゝりは。残らず親仁手前より相すまし申されよし。色里の外聞はせめての事に御座候わずかの事に我をうらみかなしむ者いかにしてもむごき事に御座候。此分御才覚なされ埒御明たのみ申候。新町通り錦屋いへる質屋へ久七が祖母を使ひにて對のさんごしゆに三百目かり申候我等堀川にて吟味いたし七百目に買申候是を御請なされ伊勢講中の掛錢百七十目かり申候を。此賣出しにて御濟したのみ申候。又石垣町茶屋の林が浅黄むくの肌着を。わかれのあしたおもひの外の嵐なれば。つゐ下にかさねて歸り申候が小宿の庄八かゝがほしそふなる貝つき。つね／＼何ぞとらする約束なれば。人の物をかいやりて其替りもやらず此首尾なり。いかにしても其女のおもふ所も有ひとつ拵へて。此わけを御語りなされ御わたし頼み申候。將又東の洞院森下久庵老へ銀子弐兩つかはし申度候。疝病わつらい申候時分十四五ふくたべ申候。寺町の小間物屋八兵衛かたへ十弐匁四分御わたしたのみ申候内に隠し申候傘八本調へ申候。又奉公人宿の御地の吉良兵衛方へ銀壱兩御わたし頼申候是は子おろし藥買につかはし申候事御座候。謡屋の武太夫殿へ弐匁七分五厘御はらひ是は乘鑓出しの割付と御斷り頼み申候。羽織屋の新五郎に衣裳縫せ申候ちん銀四十匁程。丸山の林阿弥へ錢壱貫九月十三日の座敷貸。七匁弐分堀川牛房二十本の代八百屋九助に御濟し頼み申候。小川の鼠屋へ六匁柄糸の代。柳

風呂へ弐百三十目。佛師左京所へ弐拾五匁觀音の後光の手間賃。藤屋甚九郎方へ三拾六匁ふんとし二筋の代銀。駕籠の九市かかたより銀八百匁の手形貰樣へ御内證申べし。是はやらぬ銀子の子細は四枚の名人をかけて前後に四百兩程取申候。てらはから拾五六貫目春中に取申候。俄に家屋敷買申候は近江屋の五良作と我等との銀子にて御座候。六角の髭間兵衛が所に弥介の鼓の脩孫六の大脇指あづけ置申候。金子一兩弐分つかはされ御請取あそばし御さしなさるべく候。間兵衛久々の牢人なれば折々心付して目をかけ申候に。同し牢人の娘をしかけ物にして大分我をねだらせ。金子百五拾両取申候さりとては悪ひしかたにて御座候。又大宮に九間口の屋敷を買うらに座敷を立万事に八貫目斗入申候。嶌原の中宿に丹波口もやかましきとて。末社どもかすゝめて小耳徳右衛門が名代にて買置申候。賣券状は此方に御座候我等寝所の西のかたの柱の節穴に。慥おしこみ入置候と覺申候御せんさくなされ御取かへし頼み申候。此外御聞合なされ我等

分のわるくすこしの事にてひけ申候分は見事に御済したのみ申候。取あつめて五六貫目の事に御座あるべく候。他人には夢〳〵聞さぬ事に御座候。腹こそかはれ兄弟の御よしみに此義はひとへに頼み候。我等も貴様御一所の御座候時御奉公仕り置申候。此上に何か隠し申べし近比〳〵心掛りのひとつは。御隠居妙貞さまの臍くり金五百両。八十余迄大事にかけ。ちいさき茶壷に入ふたをしめて。随分人しれぬとつて置所。せんざいのひかしの角に三本ならびの椙の木の下に。むかしより此屋敷傳はりし稲荷小宮あり。此下の平石をあげて彼壷をほり埋給ひしを。我等髪置年なれば祖母さま氣づかひしたまはず。是を見せ置給ひしか三つにて見し事金にことかく時おもひ出し。ひそかに盗み跡はありしことくにいたし置けるを。

目に三度夜に一度ある〳〵とおほしめし。見まはしに御出あそはしけるが。此金のない事しらせ給はゞ定めて目をまわし給はん。此とんじやくなきやうに頓死をなされ候やうにと願ひ申候。扨母人貴様はふひんをかけ自子のわたく

しをしみ〴〵と悪み。親仁の手前一門中へも悪敷申候事。世間とは各別に御座候。是非もなき仕合に存極め申候以上

八月十九日　　同宇右衛門

山崎屋宇左衛門様

此文を考見るに親に勘當いたされ飛驒に追こかまれ山家住ひに難義のありさま京なる質替り兄の方へいひ遣と見えたり

前の昆布を引請問屋に成次第に分限に成申候は手にとるやうに覺へ申候得どを銀親なくて手づまり申候は時爰元歴〳〵金持へ出入申さるゝいしやを見すましわざとわづらひ出し其いしやをすこしの事にりやうぢをたのみ藥七八ふく呑て此礼金子一歩ばかり。遣はしよく候を小判五兩に絹綿樽肴を急度つ遣はしければ此いしや心當より各別なればおもひの外手前者のやうに方〳〵にていひありき世間買かゝりも心のまゝに罷成候は時彼いしやを賴み金子の入内證を語れば此いしや請合小判五百兩かりうけ是より手まはしよくいまだ二十四五年のうちに財寶の外金子ばかり九千兩此正月の棚おろしに見え申候金なくて金はもうけられぬうき世には其心得あるへし。何と申ても御江戸にては子どもども惡きのつかぬうちに御くだしあるべし盜人こゝろさへなくば十年のうちには小判三百兩つゝもたせのほせ申べくは其上は銘〳〵の手から次第に御座は爰元町人の風義中〳〵かる行に身を持申候は我等壹万兩の身体なれども今に風呂屋へ供つれずゆかたを自首に

まきて入にゆき申ハ女房どもも大勢い朝夕の食を盛せ申ハ見分あしくはへども此始末年中に五十両やなどの違ひ御座ハ一日に二度しやくしを持ばとて手につゐてもなく又香炉ももたれ申ハおうへさまとてうちかけして大こく柱にもたれて細目づかひしてもあづまそだちの女の足の鍬平がなをるにもあらすハさて／＼世に金もたぬ程かなしき物はなくハ僞もけいはくも悪心も皆貧よりおこり申ハ貴様今の世わたり半分よりはいつわりのましハ様に承り申ハ口惜くおぼしめし子孫のために今一かせきあれかしと存ハ

八月十九日　　松前屋權太夫

江戸ゟ

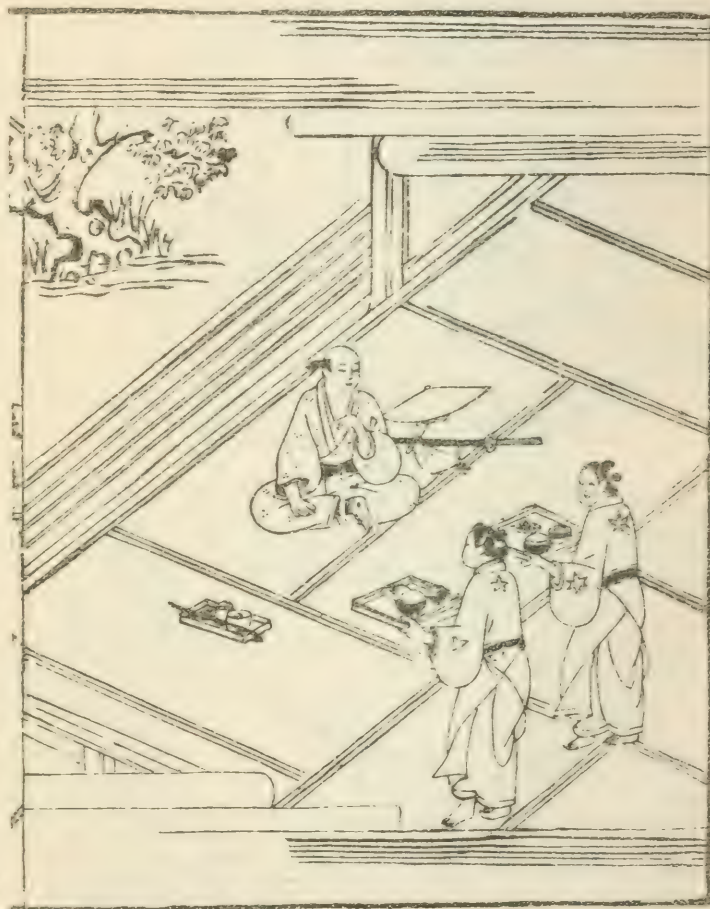
薬屋忠左衛門様

此文の子細を考見るに泉州堺を身体やぶりこたひ江戸にてかせぎ出しむかしの一門のかたへ内證を申つかはせしと見えたり

〔二〕二膳居る旅の面影

抱乳母に氣を付て角の入たるさし櫛さ

さのとがりたる筭さゝせ申されまじく候。此たび長市良におもひ外なるけがをいたさせ申候は。此出棒りより置申候は乳母今迄は問屋方に居と見へ申候て。風義取つくらい過て申〳〵目に立申候へども。いづれにても四季に八十目同じ銀ならば。かつかうの見よきがよいとそんじ置付申候すがたとは万事違ひ氣だてよくこまいたらきして。然もはうはいつきあいよろしく。嬉しく思ふ折ふし長市良を抱あけしが。さし簪の角は鼻のさきにあたり。かうがいにてひだりの目をつき。血はしはらくやみ申さす大方死入程泣申候が。色〳〵りやうじをつくし命は別の事も御座候へとも。目はひとつつぶし申是さへかなしくぞんじ候に。又右のかたの目もつれておしく成。扨も因果なる事にてひとりの孫子かくはなし申候。生れつきも大かたなれば随分そだてあけさせ。老のたのしみと行すゑの事ども思ふ甲斐なく。さりとてはかなしや今は世間の口とて蝉丸のおとし子と。異名を付て指をさゝれ腹立ながらせんかたもなく身をもやし申候。今迄は申さす候へども長市良が母の事世に又もなき惡人。同じ所に蜜夫をこしらへ。二とせあまりもしのびあいしが。七十五度にもおよびけるがはし〳〵此沙汰いたせしに。長之進耳に入れともすこしも動せず。我子ながら落付て一思案して。ひそかに其男をぎんみいたせしに。女房此事を通して隠し男に長之進を闇うちにいたさせ。其身も是をなげきかなしみ申候。それまではかゝるたくみとはしらず夫をうたれ女の身にしてはふびんもひとしほまさりおの〳〵力をつけ申候。女房まことがましく是非に妻のかたきを取て給はれと。此事ふかくなげき申せば御奉行もふびんにおほしめし。色々御せんぎあそばし候へどもしれずして月日をすごしぬ。世は定めなき俄後家となつて。わすれかたみの長市良を愛して。物おもふふせいあはれに見へし折節。蜜夫何とやら心がゝりに成て世上ようたがふやうにおもはれ。有夜欠落して大和より五日路はなれ。勢州桑名の渡し場につきて。夕風おもふまゝふけば夜舟のこゝろがけにて。旅籠屋に立寄かけあいの食を出し給へといひて座敷に通り。すこしのうちかり枕夢もむすばぬうちに。所の名物とて岩花の汁に燒蛤を仕はせ。申〳〵と起してお食まいりませいといふ時。目を覺して見れば膳ふたり前居ければ。我壱人なるに二膳はすへける一膳とれといへば。宿

前御兩人御入なされましたが其おひとりさまは。どれへ御ざりましたといふ是は不思義共ふなる貞つきする時。亭主罷出おまへ樣と跡先に今一人成程座敷へ御入なされましたといふ。それは風俗いかやうの者にてありけるぞとたづねければ。年の程は三十四五と見えまして。すこし横ふとり給ひ髮はちゞみて中びくなる貞。然も目の上に出來物の跡ありて。立嶋の袷に柹染の羽織めしてと。段〳〵申に是はと横手うつて成程此方に覺へありと赤面して。此男泪ぐむをあるじいか成御事と申せば。迚も相果る身なれば大事を包まず語り置。我國元に長之進といふ者をさる子細あつて闇打にいたしひそかに立のき。あつまのかたへ身を隱さんと是迄まいりしが。只今の噺しの男我手にかけし長之進が其夜の出立にうたがひなし扱は我身に付そひ其執心はなれずかくあれば何國までもいかるゝ所なし。我ゆへ迷惑する人もあるべし是より生國に立歸り。ありのまゝに命を歸さんとおもひ定め。こたび大和にて此段ゝを申上すみやかに首うたれし　女もの

かれぬ所と身を姿の池に沈め目前に。おのれが悪事さらし申候。其子なから長市良は長之進が形見とおもひ。此年月二才迄そだてあげしに今又もうもくにいたし。彼是うき事にあい申候是に付ても長生はせまじきものに御座候。生あるものを捨もならずせめて世をわたる藝能をさずけ置申度候。七才ばかりに罷成申候は大坂へつかはし申べく候。名高きお座頭に師弟の御契約頼み申候。後〳〵は勾當になし申程のたくはへ我仕置候いよ〳〵あはれとおほしめし御取持頼み入候以上

大和長市良

十月廿一日　祖母

多田屋利右衛門様

此文を考見るに我娌の悪心蜜夫の因果あらはれおのれと命おはりたるありさまをしらせ孫のふびんを書つゝけしはまことにかなしき心さしとそおもはる

〔三〕御恨みを傳へまいらせ候

今更なけき申事にはあらす候へともあまりなる御しかたむごひともつらひとも恨みありとも御むりともわけては申がたくとかくなみだに筆はそめしが手もふるひ文さへかゝれぬに候もつともつとめは皆僞はりの身にさだめ置てからそれもことによるべしちかふとつて命をすつるより外はなく候神そ〳〵しにかねぬ女に候はじめよりつねとは各別のあいやうかたさま此里に御立入あそはし候うちは外の女良に夢にも御あいあるまじきとの御事はそなた様より御申出しそれは御氣つまりにてかつうは御なくさみにならすわれ事はおあきあそばすまでかはゆがりておたづねあらばみかんちよさいにおはぬに候まづ〳〵すゑをたのみにお目にかゝるにはそれよりうちに御見はなしあそばし候おろかなる事もあるべく候すいぶんつまらん事のなきやうにお氣をとつてそのうへはたゞかはらぬお情に逢女などみの男とては外になしと申候其時はかたさまより外にはなく候されども人も名をしる程に成まいらせすぎし年よりは隙日なくつとめ申候もまたしき時にかたさまの御心つかひゆへとそれは〳〵あだにぞんせぬに候今の身はやるにつけて同じ男になじみをかさねしをにくまれはいたされぬに候しかしかたさまにおもひかゆるなどいかにあさましき身にてもさのみ御をんわすれぬに候此かたにとゞけもなく我等の定紋つけて見せかけられしはすこしうたてくは候へどもめい〳〵の物好此ほうから

とゝのへてつかはし候物にはあらずきのどくながら爰は御りやうけんあそばし御ゆるしなくては我身立がたく候此程越後町扇子かたにて世間の見るをいとはず筑後の衆にひざ枕させて鼻の上なるにきびをほり候を御とがめもつとも見せに出てばつとしたるやうにおもふ目からはかたさまへ傳へられし太夫様よくそんじ候たがひに勤めなる身からはさもしくおもふに候人の事は見おろし給ふが其身は口舌のくれかたにちやうちんを持され先に立ててんぢくまでものぼりつめたる男なればこそ月夜に灯挑もちになつてひかし口までおくりますとよいかげんにまぎらかされしを其客川口屋の格子の先にて手のわるひ女良のくはたひにかくのごとく是をもたぬと此分をいひちらしてあはぬむかしで御座るおの／＼酔狂とおぼしめすなけふにかぎつて小盃の徳右衛門といふ男とわめかれしを小太夫様八重きりも井筒さまも御聞あそばしかくれなき事なれども人にこそ申さねつとめの身にはうれしきはすくなくかなしき事かぎりなく候其太夫さまに京屋にて

九日に御あいはをよく〳〵そんじは一座におかしき人あるのよし我事御しのびとおもひやりてあらため申さぬには又もや戀にあそばしてはかんにんならずは田舍人にひざ枕させました事を御ぎんみづよきはかたさまにはすこしおろかにそんじは地の楽の名をしる男ならば御せきら御もつとも此かたにもそれ。にはいたさぬには口添酒さへうれしかりすきにし菊の節句をつとめ又正月の事を今から宿へことはり申は外へけいやくしやるなやり手にも共通り聞せ違ひなきやうに先約は我等になりと銀遣ふ事に念を入れらるゝ此りちぎなる男にせめてそれ程の事は氣のこりぬ事なれば胸に手を入ひたい撫てよろこばし申は惣してかゝる仕かけども申さぬとても分知の御身の俄なる惡みにはお心ひとつにて我身かたさまへたて申は事をひとつ〳〵御しあんあるべくはそも〳〵誓紙ばかり十三枚御取あそはしは後まげ目の不自由なる髮を御切せなされは其上にひだりの手のひぢにかたさまの年の數二十七迄の入ぼくろ有ふともゝにきせる燒爪をはなさせ小指を切らせ血薬のふくさ物かたさまの一日に千べんづゝの夏書年中の日帳昼夜に十二の一時文女良のする程の事は殘らずかたさまへつとめ申はに今又其御しかたいかにしても世上が立申さすは其わけは一日も隙のない身とはやり申はへはいかな〳〵御氣のつき申は事は申あげぬには又かたさまにも三十日ながら御つとめなされかねまするわけにてかく申にはあらずはわが身を只今までいろ〳〵にきざまれ其男にあはぬ事はならすは今より後たとへばいかなる身に御なりなされ人は見すて申はともわれらは一目も御目にかゝらすば此身を立申さずは女にはにあいたる剃刀御ざは此御かへり事次第に覺悟仕はかたさまにはかまひなくは只ひとり行夢路の旅わき道のなひ所にていつまで成とも有まち申は折ふしつとめ淋しくはばあしき名の立申事も口おしき御事なるに此時節に袖はて申は女良のうんのつきぬ所と神〳〵をおがみ申はこよひ明まして昼よりまへに此かへし駕籠吉右衛門より御こしさなくば是より人遣し申は今やなどかゝるしよかんしんじ申べき事おもはぬ外のなみだには心のさはかしきまゝにあら〳〵申入はもはや人の見はも恥ならずいつものやうに封じ目に印判はおさぬには以上

十月廿一日　白雲

名所屋　七二サマ

〈此文の子細を考見るに分里の口舌

の文はしれた事しれぬは太夫にしら雲といふ替名は誰事ぞ是をひそかにおもふにはやらぬ時によき男にのかれては命も捨る物也時めく身と成意氣知にて死べしとはいかにしても勤め女にはやさしき我も人も無分別に女良を手に入身に疵を付さしかならずのきさまに埒のあかぬ物にしなしける是皆上氣の沙汰也迚も人にも勤ける身なればつよふ吟味だていらぬ物也七二とはいかなる九兵へか九右衛門か本の名がしれずしてせめても也

四　櫻よし野山難義の冬

千里同風其元海居の難義難波風しのぎかね隠れ家はよし野と見定め山居も殊更松風紙衣を通し焼火もひとり坊主のたくはへ絶てふれるしら雪と讀し本哥の詠めもいかな／＼目につかず後世の事も外になりは無用発心おの／＼なされを今は悔しくは櫻時分見たとは中／＼替る飛鳥川月日も長ふ覺へてさりとは明暮住うくはわたくしにかぎらずせつかくむすびし柴の戸をいつとなく乱れ次第の野となし其身は狼に衣形は出家と見えて心底はあさましき事には大かたは京に暮し又親類の里に行て住所のよし野はわすれ跡に残られしそれ／＼の佛達何もない留守を預り彼岸十夜にも香花たゝき鉦の音も聞給はず同じ佛躰ながら爰の山住迷惑なる事には其中にもおこなひすまし座禪に身をかため二六時中の勤めおこたらぬ坊主はまれに見えは大かたは世間僧是非なくま替し者なれば世の嘲しもつはら四五人寄ては讀かるた精進も落鮎のしのび料理大酒の上の言葉とがめ付髪こしらへて芝居奴の口まねかつて佛の道は外より見るもかまはずは殊更近年世上に女出家のはやり都より人の娌子親にふそくあるひは男嫌ひ又は不義の云分にうき世坊主の形とは成はへどもむかし残りて美なる面影つくろひたま／＼まことある法師も是にひかれて一大事を取うしなひ又若びくにのきどくに勤めすますを悪僧たよりていつの程にかそゝのかし山を立のきけんぞくする人數をしらず此中にまぎれて我ひとりすましは得どもおのづからそれに心ざし移りていやな事の目にかゝるといふもはやいまだ佛心にいたらぬ所あればなりしかし愚僧事は一生に妻子持てころし遊女の野良のたはふれに身をなし世におもひ残す事もなく無常を見ての発心けふまではそまつなる御事自身の取あはせながら毛頭御座なくは尤かりな

る世とは兼て覺悟の所百年三万六千日むなしく胡蝶の夢をとまるに似たり菜角夢とそんじ只洞然として萘すうちにも夏は蚊といふ身をいため冬は夜嵐袖に吹込此難義素湯ではしのぎかねおんじゆは破つて寢酒はすこしづゝたべ申候是より外に食物願ひも御座なく候いかな／＼魚鳥は匂ひもいやに成候是は堪忍いたし候へどもいかにしても寢覺淋しく候近比申兼候へども年比は十五六七までの小者壱人御かゝへなされ御越頼み申候見よき生れ付なるは中／＼山家へはおよびなく候髮の風よくすこし備たるを望みに御座候色白にさへ候へばたとへ物かゝずとも口上あしくどもあほうにてもくるしからず候定めは撫きる物生平の帷子絹帶一筋其外も心付いたし候五年程切て五十目ばかり銀子借申べく候それも當分は弐拾五匁か二十目相渡し殘り年／＼遣はし候約束はゝ此草庵ゆづり申候御存知のごとく外に箸かたしとらする者持ず候大かたかつかうは其元備前屋九良右衛門殿に御極め頼み申候すゑ／＼其者の心ざし次第に目をかけ若出家などに成申候

居申候六三郎ぐらい成ものを望みに御座候随分世は捨候へどもはなれがたき物は色欲に極まり申候事今の身に成おもひあたり候此心は出家をつとめ良其甲斐はなく候へどもせめて四五年も身をこらし見申願ひに候此事かならず外へは御沙汰なされくださるまじく候貴様御事は兄弟のけいやく仕申候よしみに心中を申遣はし候預ケ置申候銀子の内又たよりに弐百目御越たのみ申候書物調へ申候先日はわけもなき事御申越御異見は悪敷聞申さず候もつとも爰元へも陰間の子どもまいり候へとも近付にもならず候其段は御氣遣ひなされくだされまじく候此紙包お内義様へ進申候爰元に沢山なる袋葛三又まげ物は塩漬の穂蓼にて御座候近日罷越万〳〵申あくべく候其内てつちの義御聞立置頼み上候以上

卯月十九日　　よし野山　眼夢

伊丹屋茂兵衛様　人々御中

此文の子細を考見るにたくはへありながら物好の発心と見えたり山居たいくつしてげんぞく心ざし世間にかやうの分別なしあまた也魚鳥は堪忍なれども色はと書しはあり事成べし

元禄九年　子

正月吉日

江戸　万屋清兵衛

大坂　雁金屋庄兵衛

京　上村平左衛門板

洛陽を去て七年浪花西鶴か草菴を守る雨の夜跡は消せぬかたみの反古のうちより一書を探り得たり諸國の雜譚例の狂言をしるせりみつから筆を染ぬれは故人にあふこゝろはせして函底に菴置折ふしとの寢覺の友とすこれを傳聞書林菜來て强て求めけるにまかせて梓に行ふと也

浪花滑稽林

團水散人序 印

一　首つゞきて小皿
一夜庵乃あるの人

二　於代の料理乃いろ
若衆かきりぬ浮人

三　今の世好作り真三良
浪人への乞世馬一疋

四　白維のあかり此世
こゝろもとが間の口

五　和七実の祖具
風ちやも役の通筋

一　月の口門浪乃屏
わしまの内裏ら

二
元日も機嫌直して
おもちの真似さばし

三
勝ぬけ乃仙人
寒声の花まるも殿

四
さらしそうか侯海講
商人かしく色一節々よ

五
女真の足よの車
今お世人気機嫌

六
割やかまぬ一巻
三人大勢の稽古し

七
くすぐれて乃果面
武家の殿乃様しう

一　小野の炭しらしら消時
　　女乃中ふりこさ

二　花きく乃名付親
　　無理も勝のおふれ

三　是は天狗の娘哉
　　川原の小きつね

四　乞食も橋の上て泣
　　瞬の声出名

五　何ともおもわぬ京の総堂
　　ときのりかえ

一　宗祇小諸紙
　　一つ紙帳も

書

二 焼野の雉子も喰ふるあ
かしこゝろゐ陰

三 金箪笥乃礼儀
はしかなの下人

四 手習の玉乃陰
梅しるの菊園

五 年ゟすれバ乃鬼嬪
隔ての百足むし

六 人の鳥ハヤれのむし
無月の作ゟ来

三

一　美女に摺小木

神風や伊勢の国の山田に。風月長者荒木田氏の守武。はじめて俳諧の本式を立。是より世〳〵の作者天の岩戸のあかりをはしり。此道の廣き所をわきまへける。それまでは百韵つゞけるといふ事もなく。発句脇第三過てはすゑ〳〵さし合の吟味もせず。前句覚てうち越をわすれし是云捨に同じ。其節守武千句を出す事ならびなき作者。守武宗鑑を俳諧の父母ともいへり。是も和哥の一ていなれば神国のもてあそびによろし。さるによつて山田はすゑ〳〵作者の絶ぬ所なり。其後光貞が妻とて女には古今ためしなき俳の世に隠れなし是かりそめに好るばかりにあらず。歌書の口談などして世のたすけと成。むかしをきく伊勢小町小式部は名を残したる哥人ながら。それは見ぬ世の面影を繪に移して。是ぞといふばかりはまことすくなし。今の光さだつまは目前の沙汰なれば万人のもてはやしけるもことはりぞかし。其比伊賀の上野に正道といへる俳諧師。七十余歳まで明暮たのしみは付句の外なく思ひ入て。古代の作者の事どもひとつもおろかに見ざりし。中にも光さだがつまは女の身として其名を世上にふれし。いかなる艶形にもありつらん夢にも一目見る事もがなと。其女の自筆に天の戸のすかし物かよ三ケの月と書る短尺を肌身に付てわするゝ事なく現にもまぼろしにも。此発句を覚て我又の世にうまれ替り。かゝる哥道に心ざしの深き女になれかし〳〵と。一筋の思ひ入にて枕引よせ我覚ずねしける。此あるじのつれたる女は秋の初風まちて親里に見舞けるが。めしつかへる女ふたり建義なる男一人つれてはる〴〵我宿にかへり。亭主の事いかゞ此程の淋しさぞとおもひやられ。常の居間を見しにあらざらん事を合点しかねて。奥座敷をたづねしにすゝしの蚊屋に朝貝を縫はへ。夏ふとんは紅井の地紋に扇からくさしほらしく。切付の枕にすき鬢をうちかけ年の程四十にあまれる女らうながら。さかりといはゞ今なりしどけなき寝姿をちらりと見るより。内義は胸の火燃あがり摑つく程にも思ひしが。女ばかりにて亭主の見えぬに堪忍して。扨勝手に出て留守あづけし老女に。今宵の女中客は何國いかなる御方とたづねけるにしらぬに極めて申せば。いよ〳〵腹立してあれはとはるかに見せければ。是不思義や忍び道はぞんぜず。お

留守あづかりました臺所よりは鼠も通りいたさぬといふ。さてはと身こしらへしてしやくしかけなる摺小木ふりあげ。月の影うす／＼とさし入窓に身添立聞せしに。今迄見えぬ亭主の声して。同じ女とはいひながらかゝる哥人もあるに。我つれそふ女のふつゝかにして碓を引うたさへ覺ず。いかに田舍なればとてあさましき事ぞ。此道に心をよすれば夫婦の樂しみふかきにと。悔みていふ声聞もあへす女目やらぬとうちければ。亭主夢さめて美女と見えたる形はなし。是はいかなる事ぞとたづねけるに。女はありのまゝに語れば男もかくさず。俳道より思入ての女すがたならんと沙汰してげり

〔一一〕三里違ふた人の心

兼好が作り木を嫌ふ事詠めるためなれば。何をか無用の言葉と思ひしに今時の世間見合とくと合点をいたせり。草木作るはつねなり人を作る程おかしきはなし。心あらん目からは是恥しき事なれば面／＼に慰なむべし。出家は殊更なり今時の俳諧師我をはじめてまこ

とすくなし。掛乞とけんくわする心と人がくれたればとて。あたら伽羅を一日に燒捨國土の費をして。道人のやうに見せかけ世におそれぬ良つきして神鳴のすかぬ時は抹香を燒もおかし。形氣を作らすして身を其まゝ成人こそ殊勝なれ。されば津田休甫といへる人は俗生いやしからす浮田の何がし殿につかえていまた前髮のさかりに。我一人にかきらぬ御別れ二君に心ざしなしとて伊豆の海邊にて拂髮してそれより魂ひ入替りて。魚鳥も人の食せ次第に出家といへはそれなり。世の樂しみに俳道習はずしてかしこく。むかし貴人のまじはり殘りて琴碁書畫とも學び得たり有時大坂天滿の寺町栗東寺といふ所へ參詣せしに。住寺幸とて氣を付客殿の椙戸に何にてもうち付書をとのぞまれしに。休甫筆とつて三疋つれの虎の勢是は〳〵と譽けるうちに。入相の鐘ひゝきわたりて立歸りける。明れば旦那中まいりて此虎すさましくして何とやらつらかまへりちき成といふにぞ。よく〳〵見れば鬚を書すしてありけり。かさねて休甫に此事語れはまこ

とそれよといひもあへず。硯取よせ片角に毛貫一本書添ける。此作意にて俳諧の程思ひやられけると人皆感じぬ。又夏の比京にのぼりしに佐太の宮にて夕立にあいて。ひとつの帷子ぬき捨昼ともかまはず丸裸に成て都を通りぬ。是などまねてなるまじき事ぞかし。其外一代の物語り筆にいとまなし。惣して世にいたせる発句も兼て工にあらず。當座〳〵に思ひよりて書捨にける。其比は泉州の堺にもいまだ俳諧の点者といふも定めかね。有時初心の連中金光寺の藤見に行て。やう〳〵春の一日仕事に百韵つゞりて雲紙に移して。しるべあるかたより休甫に点を願ふに程なく其巻もどれば。いづれもよろこびひらき見るに。発句より点かけ出して長点なしに九十三点かけられし。さては和哥に師匠なし俳諧は成物ぞといさみて。此浦の名物なればとて車海老きすご。小鯛ましりの昼の網の物を進上籠に入て連衆同道して休甫菴にたつね。百韵に大分掛られし点の御礼にまいりたるよし申せば。其俳諧は何の用にも立すかたはしからわるひ分を消て歸し

ぬ。けさぬ句どもは沙汰におよばず以來はすこしたしなみ給へと目をむき出して睨りける

〔三〕京に扇子能登に鯖

物毎に氣のつかぬ人こそおかしけれ。松永貞德都花崎町に年ひさしく住れし。其隣に鞍馬屋の吉左衛門といふ錢見せ出して身過大事と心得たる男あり。春見る櫻嫌ひにて身は花色の紬のつよきをかんがへ。明暮のもてあそびに二十五桁の十露盤を枕にして。三十年此かた同町に居ながら貞德の俳諧せらるゝとは。諸國の目安の談合いたさるゝ分別者とばかり合点し。近ひ隣殿なれども一代公事訴訟いたさねば。貞德をたのみ俳諧書てくだされいと御無心申事もなしと。京に住ながらかゝる人もあれば増て田舍人は。たとへ衛士籠を繼の綿の塵よる物かといふとも笑ふまじ。有時能登國の浦人百韵の一卷点取にのぼしける印に。京都は萬に目はづかしき所とて。随分扇を吟味して五本入の桐の箱。長の道中にてそこねぬやうに幾重か包みて進上申ける。遠國より都へ扇をつかはしけるは。俳諧する程の作者には氣のつかぬ事とて。此返礼に鯖五さしおくられければ。乘掛馬に付て能登の國へ歸りけるもおかし。又北山岩倉のあたりなる里より。歳暮の発句見せける次手に。雉子の足に干鰯むすび付てつかはしける。是はと笑へと世は兎角物くるゝ友ぞよし

〔四〕鬼の妙薬爰に有

道中あふぎの朝風。水無月のはじめ江戸傳馬町より乘掛仕立て。齋藤德元といふ人。都にのぼる夏旅汗水の流るゝ玉川をおもふに。瀑布の袖の色富士の雪かと心の涼しさ。三保の松陰に夕虹今も天人の帶なるかと詠め。まだうつの山蔦も青葉にて秋よりさきに見るもおもしろし。日をかさねてけふ逢坂の関とまり京のちかきを嬉しく。夜をこめて鷄の鳴時燒や出立をいそがせ。まだ人貌見えぬに大津馬を引たりや六藏。旅人の眠り覺しのこうたひとつは酒機嫌ぞとおかし。やう〱粟田口蹴揚の水になれば諸〱の鬼ども火の車を引捨。清水を手してすくひ呑胸の燃るをたがひにあらそひ。後は鉄棒を枕としてやれ〱くるしやと虎の皮の腰當をなやましもはや命がせまるなりむかしより世の人たとへ置しごとく。鬼が死で行所がないとおそろしき目より泪を流し。あの世此世のさかい角のうなたれて此面影見るも哀れなり。中に

も物になれたる鬼らしくかしらすこしはげて。ちごくの虎落分別ありそふなる貞つきなりしが。徳元の薬箱持に氣を付。お馬の前にかしこまり。御覧なさるゝ通り我〳〵はざいにんをさいなみまする役人どもにて。此度大悪人の人ころし目を御せいばいなされましたを見かけ。いづれも火車をはやめ粟田口までむかひにまいり。心見に死骸一口づゝたへしに思ひなる御事。塩八付とはそんじもよらず皆〳〵たべすごして咽をかはかし。此水を呑しにしよくしやういたしての難義。ちごくには近付のおいしやも御座れど。旅の事なればお情に御養生たのみたてまつるといふ。徳元かんかへ是はつねごとくのりやうぢにては行まじと。塩八付をも喰付たる此あたりの鳥をとらせ。是をせんじて呑せけるにあふなき命をたすかり。車を飛せ鉄火をふらせさらば〳〵と声をかけ。あの世へ御越なされた時お礼はあれにてと申ける

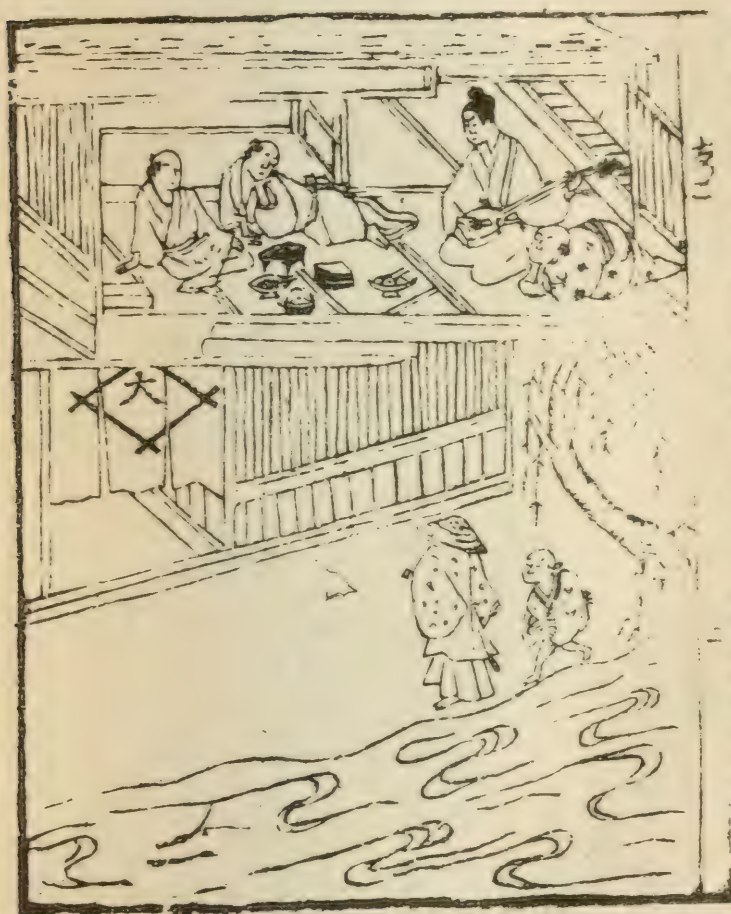
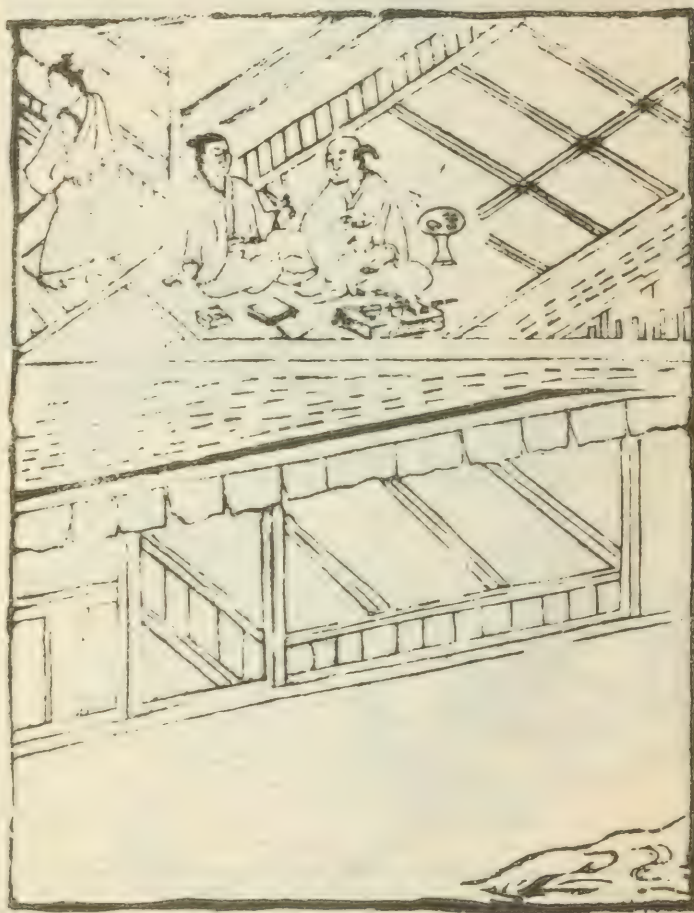
西鶴名殘の友　二

二　昔たづねて小皿

山崎の山のすかたはむかしに替らぬ春の色。年〳〵花は同じ歳〳〵人は同じからず。爰に住給へる宗鑑法師の一夜庵の跡ゆかしく。都にのぼり舟を汀につけさせ。永貞保俊春倫此外香具所の宇野河内といへる俳友。すける道とて岩根の玉笹わけ〳〵て。はるかなる苔路はいつ人の通へるしるべもなく。松椙かしはいやかうへに枝たれて比は弥生のすゑなるに。氣の短かきほとゝきすの鳴わたりあまりに耳ちかければ。めづらし事は外に成て。かしかまし此里過よ時鳥。都の隣馬髾我を待らんと讀れし狂哥も今思ひあはせり。ひたりのかたに筧の竹絶てまかせの水の落行風情爰ばかりの時雨ぞかし。石居の跡もそこ〳〵に殘りて庵は西南を請られ。月はむかしの連俳その法師すがた今見る心して哀れふかし。おの〳〵発句して木陰の瀧板書付歸る時。月夜の四平といふもの是は京のひかし川原にて。遊び宿の亭主成が此商賣する程もなく。さりとてはかしこからずうまれつきての埒明すなり。世の中をあんじましき事は是が女房利発にして。男は年中踊ありきていつが盆やらしらず。此正月の亂に大坂へくだりて。何いやうなきに三月のすゑになつて。さそふ水ありとてのぼり舟の慰みものにせられて智恵のない男こそおもしろけれ。此男宗鑑庵の木の葉の中より瀬戸焼の小皿一枚ひろひあげて。是は宗鑑お内義粉白ときにうたかひしといふ。是は汝一代の見立と大笑ひの種なし。又舟に乘時保俊横手をうつて。扨も惜やおのれが拾ひし小皿を其所に殘し置けるとなけく皃つきせしに。此男さもいそかはしき中に又其所に行て取て歸り。むかしの忠度は狐川よりひつ歸し。定家の許にたばこ入を忘れて見えぬ事をなげかれし。我等も俳諧の心こそなければ宗鑑の持れし道具をあだにはいたさじといふ。いかにもやさしき心入と皆〳〵同音にほめければ。此男しすましたる皃つきおかし。何やかや咄しの次手に。泊り客人下。長あそびの客人中。立歸りの客人上。さる程に宗鑑の作意氣いつかぬ客の心得に成事と。いづれもしばらく感じければ。此男是はもつとも思ひ込都の我宿に歸りて。右のごとく墨黒に書て大座敷の入口に張付置ける。客を引請て世わたりにせし宿の壁書に。さて〳〵道理至極なる事ぞと見る人毎いへるを。よき事を

聞出してしたりとおもふもおかし。今の世にもかゝる愚か成者もある事ぞかし。さぞ此男長生をすべし

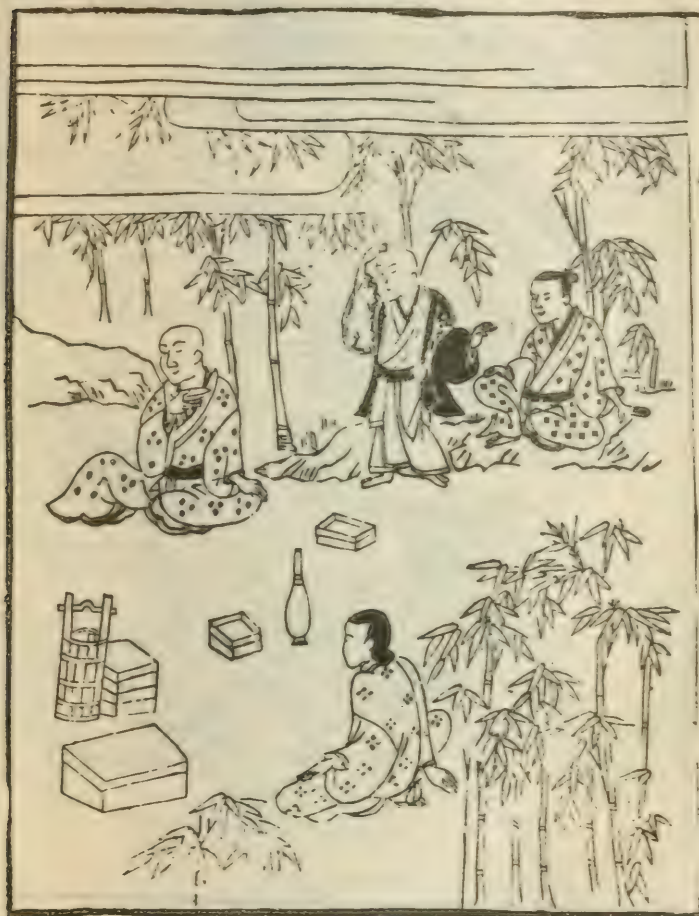
二 神代の秤の家

洛陽の俳諧師安原正章は貞徳の跡に立て。貞室と改めて世に高名を殘されける。地下には住なから歌道にうまれつきたる人にして。渡世の商賣をはなれ朝夕大内山の心の花。常のもてあそびに琵琶をたんじ平家を語り。我ひとりの樂しみとなして然も都に暮しぬ。此琵琶蟬丸の手にふれられし無名といへるびわなり。貞室うき世の形見に智恩院に殘しぬ。惣して和歌に心をよする人はゆたかに年月おくらすしては甲斐そなし。一とせ住吉の汐干を心さして門弟の了味など同道して。弥生のひとへにくだり舟難波の濱につきて。爰もむかしの京なれば民の竈にしやくし掛。青疊敷津のうらを見立しばらく借座敷もよしやと。春の日二日は何となく暮て。けふは三日の桃の花伏見の城山を櫻まさりと詠めしが。旅はさま〴〵に替りて大坂酒に曲水の宴ぞかしと。

心祝ひのこうたび竹葉より思ひ出して。吸筒をわすれな。茶弁當に火箸は入たか。からし酢は此徳利に有塩は堺をはじめて見る事嬉しやと。下〱いさみて駕籠ふとん敷てめしませいといふ時。貞室立出られしが座してけふの參詣成難し。いかにしても汐干の発句おもはしからずと。する〲の者ばかり見せに遣はし其身は宿に殘られける。貞室程の作者世のつねの発句なきにはあらず。世の沙汰にならざる一句はいと口惜と此道に執心ふかき事を感じぬ。其比河州柏原の里に淨久と名乘て無類の俳諧好。老のたのしみ是ひとつと極めて。句の善悪にもかまはず只題目のかはりに是ぞとのおもひ入殊勝なり。貞室旅宿を聞付我宿の面目なれば。是非に草の庵をお目にかけたしとむかへて柏原の里に歸る。近在の俳友せめてはお皃成とも見たしと淨久の門に市をなしぬ。都の客めづらしくもてなしけるに折ふし麦秋もちかくなれば。去年そこねたる唐竿に心は付ど取出す事も成難くて。俳諧師といふものは氣のつかぬものにて長あそびをすると。勝

手の下女どももお客にたいくつするもおかし。何かせかぬ貞室京に歸らん事をわすれ。此次手に金剛山へ參詣せんと申されければ。柏原中の牛に鞍置せて淨久案內して。彼笓笆を大事にかけて中年寄たる小百性にもたせけるに。つゐに目なれ物なれば四五人よりて是は何に成物ぞと。色〳〵僉儀をするにひとつも埒あかずどもの寄合なり。其中に分別らしき皃つきして我目にて見極めたる所一りんも違はじ。是は神代の秤の家なるべしといへり

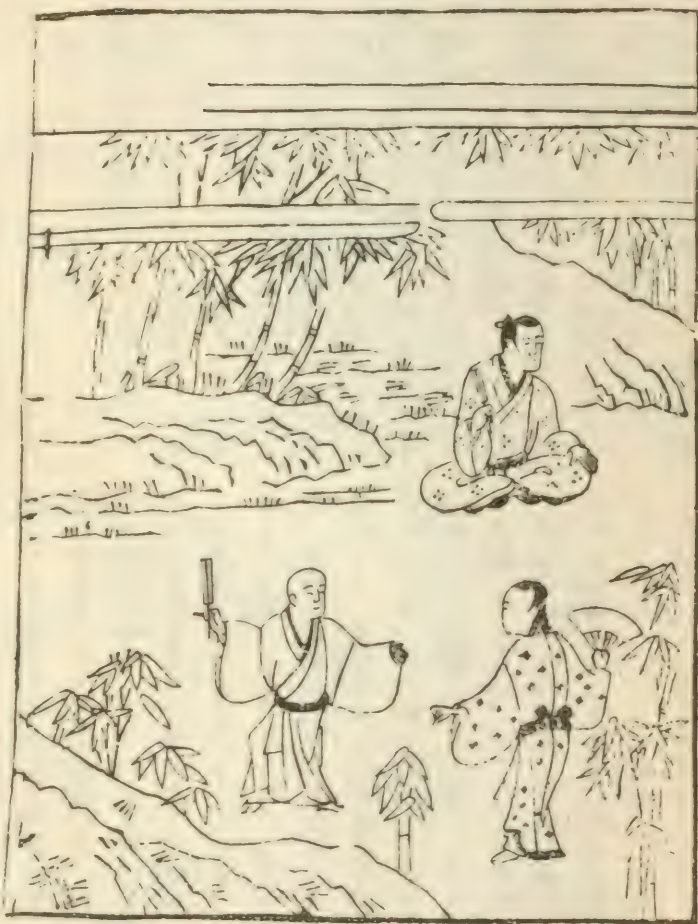
【三】今の世の佐々木三良

都出て横川をわたり心の行水につれて。伏見の里の日高く茶筅賣も見えず酒商人も出す。くだり舟待夕暮までの淋しさに。油掛の地藏の立せたまふ西岸寺の長老任口の許へたづね。たかひに世の物語りもめつらしく難波に歸る事をわすれぬ。折ふし宇治のほたるは夜の花盛見に。此所の俳友に多門院の門加兼松氏友世などさそひて。上林のかたへ行けるに是非とすゝめられしに。隊坊主のこゝろやすさは道すがら云捨

して。木幡の里の歩行路凉みながらの慰み程なく宇治橋つきて。しばらく通圓茶屋に休みしに。同じ伏見の里に身を隱して黒染のほとりに住れし。山名外見といへる浪人むかしは信州にて歴〳〵のよし。今は木曾の麻衣十德になして。ひそかに軍の指南を世わたりの種となし。けふを暮して明月の身の上かまはざる取置埒のあいたる人也。かゝる渡世の中にも桃林にやせ馬一疋つなぎて。朝暮曲乘をすけるに唐土人のかる業も是にはだしと。見る人每度おどろきける。此外見も螢見をもやうして兵法弟子五六人ともなひ。老足のたすけとて彼馬にのりて是も宇治につかれけるが。きのふふりし山水にこりて川浪高く音なして。渦卷落合しばし見るさへおそろしき。むかしの佐ゝ木梶原先陣後陣のわたり口も。かゝる荒浪の中なるべし是によつて。今の世までも名は殘れり。末世にはわたす武士もあるまじと極めて大笑ひしける。外見はなはだしき男なれば此言葉を聞て堪忍しかね。是程の所を今なればとて我渡して見せんと。馬揃へしたまふ時無

用と留る人有是はと望む人有。ふたつ取には舟と橋とのある時なれば心やすく渡り給へと。いづれも氣遣ひして是は〳〵と詠めけるに。此浪人流石手に覺へありてはげしき瀬〻を幾度か乘越。然も一もんじにむかひの汀にあがればおの〳〵横手を拍て。いにしへの高綱を二たび目前に是は〳〵とほめければ。外見もすこししすました皃にて。其時の佐〻木。人間我等も人の形を得たりといひけるを。川岸に物洗ひし老女此人に指さして笑ひやまざれば。外見心にかゝりて汝何ゆへに我を笑ふと問給へば。されば其事此川馬にて渡り給ひなんぞ手柄そふに。高綱と同しやうにおぼしめす心入の程。いかにしても武士にはおろかさに笑ふといふ。其子細はとかさねてたづねければ。其梶原佐〻木が爰を馬にてわたしました時は。むかふの岸に敵が具足甲着て弓矢讀なぎなた持てゐましたとかたりて又笑ひける

〔四〕白帷子かりの世

烏丸大納言殿の御奥書地藏かしらに蓼

摺小木館の入道と千手観音折を嫌ふべきやとあそばれしは。此詞皆俳諧といふ御珍作此心にて付合をしるべし。雛屋立甫はなひ草を種として。鍬をかたげ手をはなつ田夫までも雪月花の数をもわきまへ。世の重寶草とてそも〳〵俳諧のいろは付是を見ぬといふ事なし。されば立甫の一流は一句うつくしく付はだをあらため。風流過たるはやり言葉を出さずして。門弟も此すがたを背かず立以定親可玖すゑ〴〵までも學びて道を廣めぬ。立甫は連歌をしつて句がらをやすらかに仕立られければ俳言うとからず。此程又當流つかふまつる俳諧は連哥しらずして。皆すいりやうの沙汰なれば百韵に六十句は連歌の仕立といへり。是はあさましき事ぞかし連俳のわかちなくては何を以て俳諧と申べきや。是をおもふに此一句のすかたは刀脇指をさしたる男のふんどしかゝざる心なり。菟角古風當風のまん中にありとしるべし。いづれ以前は無用吟味つよき事も有。泉州尾崎の清章といへる作者の。手拭おこせ佐夜の中山といふ一句いたせしに。此手拭は何

者がおこせといひけるぞ一句立難しと其時の吟味今おもへばおろかなり。世に長いきして萬むかしに成事をひとつ〳〵おもひ出すもあはれなり。其立甫もつゐに舟岡山のけふりの種に野邊のおくりをする時。諸方門弟聞つけ次第に都にのぼり死目にあいけるも殊勝なり。殊更京の弟子分は昼夜枕に付添てりんじゆの時迄見屆ける。爰に堀川の上に廣親とて夫婦ながら立甫俳の弟子にて。けふ別れ事をかなしみ女の身なれば代りに手代葬礼に出しけるに。白帷子なければ天蓋持の役も成難しといふ。かたびら二つ取出しいづれにても氣に入たるを着て行といふ。時に腰元がひとつ借ましたひといふ。我は何にかするといへば。紅うこんの着物の上に是着て私も泣ますといふ

［五］和七賢の遊興

世の中に絶て櫻のなかりせばと業平讀しは。交野の原の春やむかし今に其古木といへる根ざし殘れり。此里つゞきに雉子の声はるかに禁野といふ所に。草庵むすびて蒲釼といへる俳の道心うき世を外に見て年久しく住めり。其法師から唐人のごとし。白髮まじりの髭ぼう〳〵として軒の松風に乱し。我と夢の覺め行までの樂寢剛持事むつかしければ。身は蚊に振舞髭は油付て鼠の菓子なせるもかまはず。扨も世のひまに住める捨坊主。ひとり心をすまして折〳〵の氣色を発句の種として。七十余歲の秋の月何の心に曇りもなて詠めし。有時國里をへだてし俳友しせんと一度にたづねける。和刕の正式。大坂の秋月。武刕の末得。京の春可。伏見の道廿。備前の胤及。かれ是客は六人亭坊ともに七人。草庵よりすこしはなれて竹の林にあそびて。わづか手樽ひとつのたのしみ思ひざしに盃まはして。ばうせんと靜にして折ふし唐うたをうたひ扨も氣さんじの樂人揃ひて。和七賢とや是を申べし。されども此心に慰みのかけたる事は。酒呑きりて跡淋しく万事あり次第にといふうちにも。ひとり〳〵呑たらずして今六七升あれば。其外には何の望みなしと酒に古里こひしく。才覺するにある里まではるかなれば。いづれもかなしくひとつの樽の香を伽羅のごとく聞てはまはして又淋しくなりぬ。時に片山里の親仁二人我馬にのりつれて。秋祭の買物と見へて塩肴もありしが目に付物は酒樽なり。ふたりながらよい機嫌にして山寺うたひつれて。ありさまのやうなるき

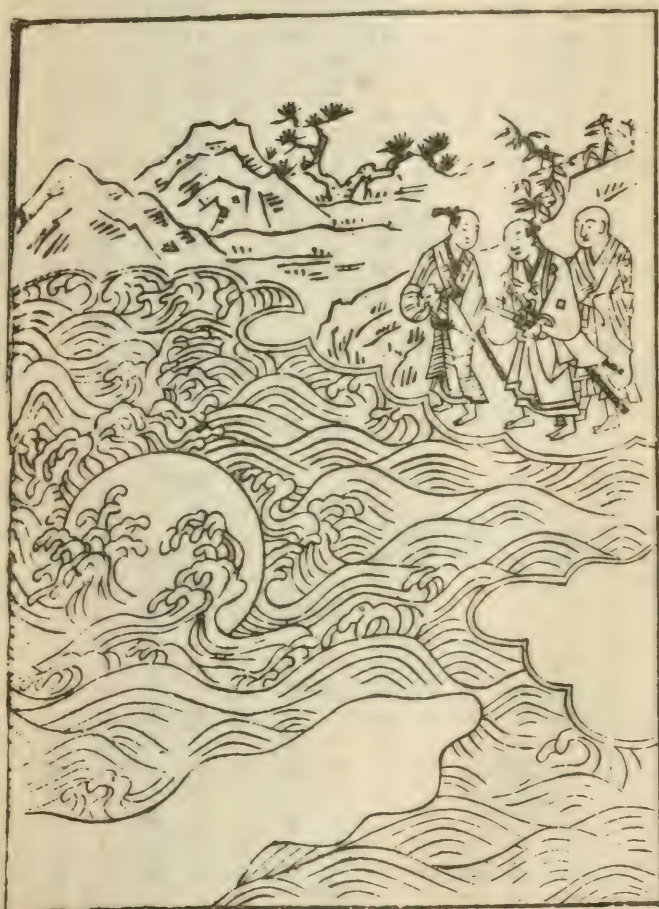
みのよい人と。近ひ隣在所に居ながら今まで近付にならぬもたがひにそんをいたした。酒といふ物もひとりは呑ぬ後の壱升はそなたのよい時。漬山椒くだされてのみ口が各別なり。いづれ二人して一日仕事にゆる〳〵とのまば。八升は大かた残しはせまいと高咄しして行を。扨も浦山し酒呑たらぬ世の中と明樽ふつて見せければ。爰は見捨通りがたしと馬に樽どもおろして。

酒ゆへふしぎの出合なりと前後覚ぬ大酒。和七賢もよい機嫌にてさらば〳〵と別れける。此親仁どもむまのり違へ馬次第に行程に。里の夜道もよくしりてめい〳〵の宿に帰れば。侍かねたる妻や子ども松火ともしておそひ帰りと皃見れば。是の親仁にあらずいかなる事とおどろき。いづれもせんさくする所へ。隣の村より親仁が替りましたと替にきて濟ける

西鶴名殘の友　三

〔二〕入日の鳴門浪の紅井

世の中をわたりくらべて舟路は旅の難儀なり。然も冬海になつて浪風あらき時阿波の鳴門見にさそふ人有。行衞もしらぬ淡路嶋神代のむかし道今に馬次も定まらず。かりや釜口なといふ里をすぎて志筑といふ浦邊につきぬ。此所はむかし礒前司むすめ靜がふる里といひ傳へて。木陰に塚しるしの石は苔むして見るもあはれを殘せり。景野の松原は数万本の木ぶりことごとく異風にして。是都近くあらば公家ひる寢所なるべき物をと詠め捨。ゆづり葉がだけは仰道鉾の一雫よりなれる所國のはじまり此御神ぞかし。程なく阿波の德嶋につきて俳友に雁友釣寂吟夕などにあいて。俳諧興行の會かさなりて心ざしたる鳴門見にまかりしに音に聞つるよりすさましく。高浪白雲の風につるゝごとく渦巻中程は竜宮摺鉢かとひゞきわたるにおどろきぬ。久しく見るさへ魂ひこりければ慰み替て里の海士といふ所。又も來て見ん礒崎の松と西行法師が讀殘せしもまことにおもしろの氣色や。しばらく休まれし跡とて草庵あつて今も法師のひとり住り。常香の火をかりてたばこ呑けるに。其時西行わすれおかれし煙管筒とて取出して見せられける。布の火うち袋に覺書の一冊あり。何かと明て見るに都出て爰までの小遣ひ。五匁四つ塚の茶の錢。十匁牧方の天野川にて昼休み。弐匁西の宮のゑびす殿への散錢と壱匁の事までもこまかに書とめられし。此筆にて哥など書殘されなば世の重寶なるにと惜まれ。おの〳〵くりかへしむかしを今見るに其紙のはしに。文字薄〳〵と消かゝり西行荷持八藏としるせり。扨は其時も錢はむしやうにつかひ捨ぬ事ぞと大笑ひして歸る。濱邊傳ひの物淋しく人倫はなれたる山ぎはにひとつ庵あり。松の風其まゝ琴の音の通ひ谷水落かた岩をたゝきて颯〻の声をなし。しん〳〵としてしばらく立とまりしうちに。入日雲に埋みて時雨一通り間なく霰にふり替り。是さへ身にいたく難義せし程なく又雪氣色になりて。いづれも袖笠して庵たのみにたちかよりしに。板戸うちよりしめてひかりを請る窓とても見えず。ゆがみ柱の壁のすきより立覗しに。年の程は見定めがたき老女の霜いたゞける髮ながら。よしあるさげむすびもしやれておかしく。身は割織の藤ころもなとまとふべきものが。紅井裾をかへし。夜ならぬに灯か

ゝげて書物讀ける風情只事ならずおそろし。とかふの言葉もかけず立のきて是を沙汰して見るに。昔日清少納言世に落て四國の山家にて哀れむなしくなりけると成。もしやはそのほうこんならめといへどいづれゆかしかる心なくていかにしても世の不思義是ぞと半道はかり過て小者ども二たび見せにつかはしけるに。はや野と成て何もなく其庵の跡とおもふ所。つねの地に替りて下より燃こゝちと語りぬ。ねぬに夢見るとは此事なるべしと其官女の思ひ出しぬ。是は歌人の心をしのぶぞかし女ひとしほやさしくありたきものなり。いにしへにかきらず今とても。爰に源氏祖母と名をよばれて阿波の城下を袖乞して。けふもしれぬ命をあすのたくはへするもあさまし。姿は小町に似て心それにはあらず。さころも枕草紙伊せ物語の事は無本にて註まで覺へよく殊更源氏の巻〳〵を水の流るゝごとく清き女なれば。あたら玉を泥中に捨置心といへば。京も田舎も人の大事は一心なりあれ程やさしき藝を持ながら。袖乞の世わたり皆聞給ふまでもな

しと所の人の語りぬ。此祖母年久しく我隙成まゝに明暮四方の雲行を見て。三日五日さきの雨風を見覺へ舟人のためにぞ成ける。有時肥後の國へ此祖母をつれくだり日和見せて所の重寶た成ぬべきものと。きれいに住家を作り榮花にやしなひ置。有時雨の後の日和を見せけるに。祖母立出淡路千光寺山はどこにあると申。それは是からは見えぬといふ。其山の雲行見ねば日和はしらぬとぞ申ける

二　元日の機嫌直し

室町通り西行櫻の町に。御所染の絹商賣して菱屋といへる人有。借宅わずかの世わたりの年月俳諧をすけるもやさし。名乘は重好とて大発句帳にも見えける。此人の妻は五の宮樣のすゑにめしつかわれて。歌書の御文庫をあづかりし四人の中のそのひとりの女なれば。今町人のせはしき世に住ながら。ありしむかしの玉かづら色作れる面影つねに替り。不斷紫に紋なしの小袖いくつも同じ重ね着して。其色のうしろ帶朝見る姿ことにうるはしく。諸人何となく氣を移して大內山の花の香。どこやら自然とそなはりし所ありて。もとより琴をひき哥の道にこゝろさしふかく。俳諧すける男の身にしてはたのしみふかし。誰いふともなく此女房を絹屋のむらさき式部といへり。此亭主俳諧と女とにいつとなく家業外になりて。遊樂の琴の音も確にひきかえ。我すがた見と讀る十方鏡もふるかね買が手に渡して。身のうへ次第におもしろからぬ年くれて。余所の寶をかぞほる隱れ蓑かくれ笠。小袋をうち出の小槌まで繪書たる。舟を敷寝のよるの夢に。女は都の富士に煙絶て黒木小刀で割と見しは心細し。又男は駿河のふじに白突の食を移し。田子の入海は若和布汁程に見たと夫婦夢を語りあはせ。其比世界見通しといふ。安部の清明にうらなはせけるに是は大きなる仕合。いそひで江戸へくだりて內義もろともにかせぎ給へ。我只今拾弐匁にて千貫目に成事見てやるは。是程やすい物はなしといふ。さもあらば我千貫目になる時。今の十二匁百弐拾貫目の手形仕置お初尾あげましよといふ。先はしれぬうき世と十二燈を佛だんへおさめけるも氣短かし。それより江戸にくだり身体取直し八卦の通り。家榮へたる春の初夢にあらたに御つげの句に。藏の內にてなく声ぞする。亭主氣にかけ。て元日の祝義も勤めずして。奥座敷に取籠り鉢卷をして胸をいため。當年は

知して心いわゐの思ひ寄数〳〵なりしは是はいかなる神の御夢想なるぞと。枕もあからずうちなげきし所へ。高崎玄札駕籠に乗ながら喙こはせて。いまだ方〳〵なれば罷通るとの口上。内義聞もあへずはしり出て。あるじのありさまを語れば玄札此宿に入て。これは目出たき前句なり。藏の内にてなく声ぞする。貧神大黒殿にたゝかれてと。聞付られければ亭主扨もと起あかり此一句に心さはりとして。其まゝつねの氣に成ける。良座に俳諧行のかる口とて聞人興をもやうしける

二　腰ぬけ仙人
（原本ノマヽ）

世の時花言葉に人に替りたる風俗を見てしやらくさいといふ事。泉刕の堺に藤井徳庵といへる俳諧師の名乗を社樂といふより。世界のてんがう口になれるはしめなり。此人つねに棲りて髭木しげれる奥座敷に取籠。仙術をおこなふとて三とせあまり氣をすまし。大人のつきあいをやめて。我宿ながら諸かたは春秋の時節もわすれて只ぼうせ

んとして夢のごとし。此心ざし軒ちかき雀も見なれ梢の鳥ちかより。朝夕の飯をわくれば手よりすぐにはみける。扨は仙家も爰になりぬ諸鳥我をおそれぬ事其ためしなり。いよ〳〵是をまなびて万人に目を覺させんと明くれ其心になりぬ。されば唐土の玄宗皇帝は音律の名人にて。二月の初に花の咲ぬ事をおそしと。樓臺にのほり羯鼓うち給へば。餘寒拂つて梢の花開色見せけるとなり。又鄒燕は篳篥の妙を得て六月に冬の調子をふきて霜をふらせし事も語り傳へり。我も仙術の心見にとて有時身を清め。秋の夜の月曇りなく堺の南北一目に見わたし。二階藏のやねより住吉のかたに向ひ。觀念の眼をふさぎ一代の大願此時なり。心ざす所は生馬山までの飛行ぞと兩の手をさしのべて飛ければ。棒樫の枝をこすりて捨石のたゞ中に落かゝりて。其まゝ腰をつけ。なを聞付次第に成安成之顯成なぬかしそれ仙術はかなはぬ手あしとといへる俳友見舞て。徳庵仙人にちかうめかるゝ声におどろきいづれもかけらを付かゝる事の鍛錬するには。腰の

背くだかすして中を飛事成難し。是程の事に氣をうしなふは愚なり。先へうたん酒を呑給へとおの／＼すゝめければ。其時仙人はまなこを見ひらき其瓢箪から馬は出ぬかと。身のいたむ中にも仙人心わすれたまはぬはおかし

「一四」さりとては後悔坊

何事も其人によりて風俗の替りたるも一興あり。むかし連歌師の牡丹花はうしの角を金銀の箔にだみて。くれなゐの引綱付て心の行所へ乘まはられしも。人がらそれにそなはり世の人指はさゝざり。津田休甫が紅鹿子の女小袖着て昼中に大坂の町を通りしも。其身道者の徳あらはれ目にかくる人もなかりき。此人／＼は其心より発らずしてはまねてならざる事なり。讃劦の一三子瓢箪好てさま／＼そのなりの替りたる十四五も腰に付し。ひとつにてもすむべきかといふそれが物好なり。又武劦の桃青は我宿を出て諸國を執行笠に。世にふるはさらに宗祇のやどりかなと書付。何心なく見えけるこれ又世の人沙汰はかまふにもあらず。只俳諧に思ひ入て心ざしふかし。今時の宗匠一体子細らしくせぬはなかりし。何とやら目立けれども面／＼の身なれば無用の異見も成難し。爰に小商ひしてゆるりと渡世する人わづかに俳の道をのぞきしに。うは氣なる若ひものども宗匠になれとすゝめ。俄に法体させひさしきなじみの妻を親里にもどし。浮世の隙になして後連衆ひとりも取もたず。世わたりの種つきて二たび髪の延るまでとて。夜／＼花火線香を賣けるが。秋よりさきはしらず

「一五」幽灵の足よは車

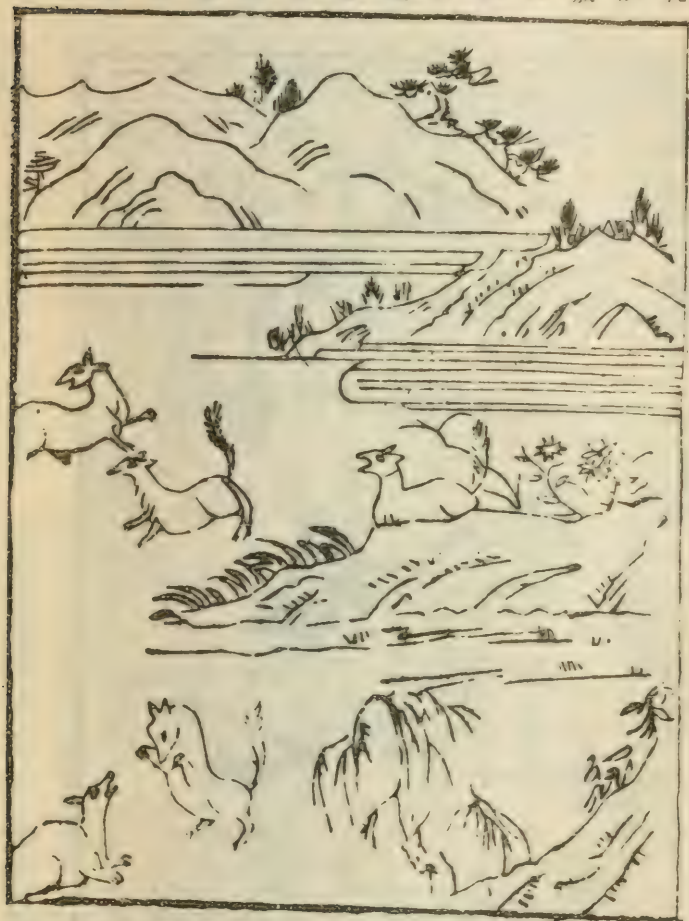
出羽の國蚶潟といふ所は。世に隠れなき夕暮のおもしろき海邊なり。汐越の入江／＼八十八潟九十九森皆名にある所也。蚶満寺の前に古木の櫻あり。是ぞ花のうへこぐ海士の釣ふねと讀しむかしを今見て替る事なし。惣して哥執行の人それ／＼の筆を此寺に殘しぬ。今の世にもてはやしける俳諧師もめくりきて。爰の氣色発句それ／＼に作あり。仙臺の三千風南都の言水大津の道甘南部の友腧。最上の清風など。又は秋田の桂葉祖寛大坂の玖也岩城にめされし折ふし。奥筋の名所日数かさねて詠めつくし此所殊にあかぬさまに道の記にも書り。坂田の湊につゞきて袖の浦といふ所古哥にも讀るとおもへば。すこしの松原もつねならず物さびて詠

めなり。此所に寺有住僧蓮佛すきにて見えわたり床に唐木の文臺あり見れば玖也裏書に。文臺や袖の浦書かへる鴈と。しるせり是もはや古筆になりけるよと其法師なつかし。すぎにし事ども思ひ出して行に同國戀の山といふ麓につきぬ。程なふ日暮てしげき小笹わけ〱てのぼるに。いとゞ木陰のこくらき所に女のさばき髪して。岩もる雫を手して呑息にほのうをつき出し身のくるしげなるありさまうき世にある人ともおもわれず。おそろしき事大かたならずにげあしに成ける。されども同道に出家ありしがかゝる時のためぞかし。すこしも動ぜず汝いかなれば世にまよふと見えてあさまし。心の程をさんげせよ女人成佛の一大事をさすけんといへば。幽灵泪をこぼし是はありがたし然ば思ひ死の物語り。我跡にも前にも一生に男ひとり。然も形見よげなるとて千度戀わびての契り。たがひに死わかれたりとも男持な女もたじとかためて。諸神諸佛をせいちんに立ゆくすゑ長ふ思ひしに。いまだ死もせぬ内にはや男目が氣が移り替つて。我より年行

女にたわふれ自を世にないものになれと。山伏神子を頼みて祈るときけば。世にある甲斐なく身をもたへしより胸に火を焼ておのれ〳〵と㝡後までにらみつめて果ける。今一所に夫婦のかたらひ取ころさで置べきやと。草葉のかげから夜毎に通ひゆきしに。二階座敷にふたりの声を聞つけ心のせくまゝにのぼれば。階の子をふみはづし思ひの外腰をいためぬ。此体ならば本望とげ難くとなげく。今時の人次第〳〵に氣勢なく相果其幽㚑なを又力なし。さるによつて此程㝡後に恨はいふて七日がうちに取ころしてと。おそろしき貞つきはすれどむかしと替り一念よはく届きがたし。汝も思ひとまれ侍ひなれば腰ぬけとて役に立ねと幽㚑はくるしからずとかうやく付てとらして別れぬ

〔一六〕 ひと色たらぬ一巻

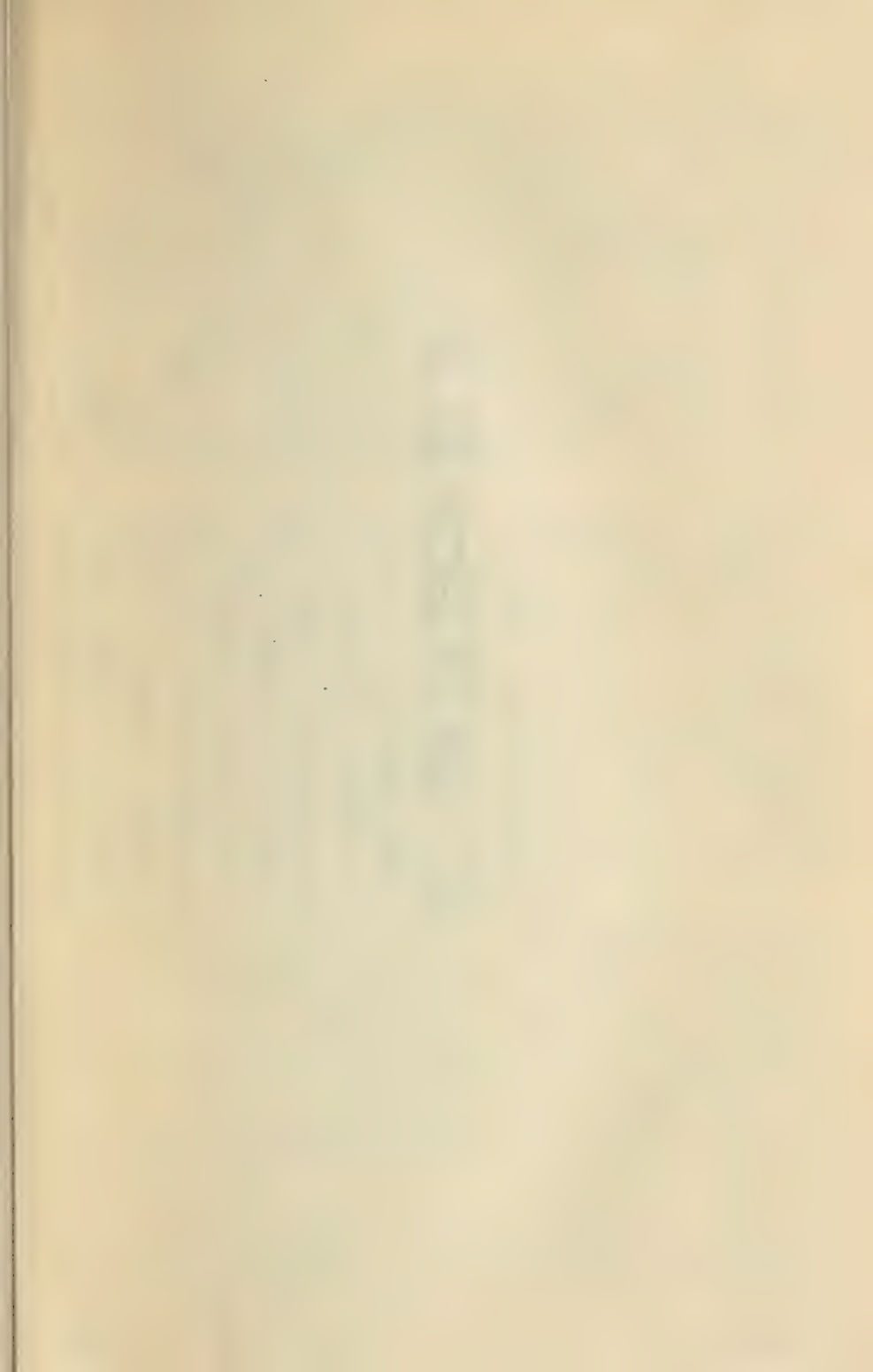
月も又都のひかし山こそおもしろけれ。武蔵野も影には替れる事なし。駒をはやめ関の岩角踏ならしけふ逢坂の山を越て江戸より田代松意俳道執行の

この挿絵は「次章」

ためとて。はる〴〵のぼりて京都の作者に殘らず參會して。ある日知恩院の門前那波葎宿の庵に。好人寄合三吟三百韵取立何かめづらしき事いふにもあらねば。世の笑ひ草になれるはそも〳〵より合点して。琥溪橋と題号するより葎宿松意西鵬是はと三人笑ひはじめて。一日の中におはり花はなき櫻木にちりばめける。やう〳〵執筆文臺を床にあくれば。北野殿御影まきて晝のくたふれを取かへす。行水して枕してしばし氣をやすめける所へ。軒ちかきに去御方の下屋敷より。百韵あそばし三人して評判の点をせよと御内證ありける。いやとは申難ぐ是をひらき見しに。発句當流のしかけ取まはし心行。殊更氣色のおもしろく一句〳〵かんじて脇書にかる口をつくし。付墨七十三点此内長二十八として三人の名判を居ける。大かたならずよき作意と久くり　さりながら此一巻に賢藥存せたくれとかへして見るに百韵に戀の句一句もな　奥書して歸しぬし。さて〳〵御新作老眼おどろかしぬ。

に人るべきもの

「九」（原本ノマヽ） 人にすぐれての早道

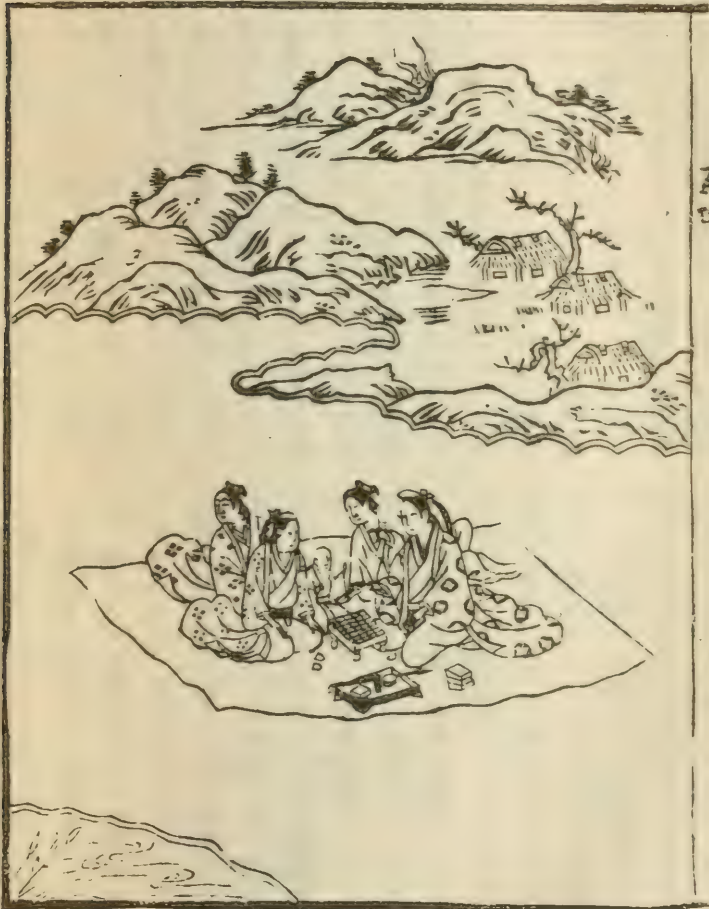
山居の身にも松風の耳にかゝる時も有ける。むかし吉野の奥にて連歌せしに。庵ちかき瀧の音かしましく一座のさはりとなれば。亭坊ひそかに萩柴をなげ込。川音絶て人の心もしづまりさりとは氣の付たる事ぞかし。其草ふきの跡あれてひさしく住める人なくて。軒は落葉の埋み門は諸葛のはいまとひ。麓の道も定めなくいつの枝折の跡もなくて。諸鳥のとまり所と成けるを。近き比より都の人とてひくに爰に住めり。いまだ其年廿といふにそのうへあらじ。悪敷はそだたぬ風俗いかなる人のおとし子にやありけん。殊更手などよく書てちり櫻の花を拾ひさくら色紙を我とこしらへ古歌まじり自哥讀て。ひとりの心を慰めけるもよしや是山居の徳といへり。有時今井の正盛法際寺の可慶法橋など同道四五人大和めぐりして。吉野の山にわけ入彼のびくにの事やさしく聞てはる〳〵たづねのぼり。よの事歌道の物語りに日を暮し。かゝる所にましますかたとは見えず。何ゆへの御発心成ぞとたづねしに。此びくに泪をこぼし麻の衣を負に當。稀人に問れましてのうき物語り。我うまれし里は北國の者なるが。父は其國の守につかえて御前ちかふめされし御祝義の御能有時。太夫翁の面をわすれ式三番わたし兼て身の難義せし。其太夫が里は六里半の所を我父城中をかけ出。しばしのうちに彼取て來てわたせば。よろこび御前を勤めける。其後人の沙汰しけるは鳥にてもならぬ事ぞと。不思議をたてそめ是より御前もうとく成て。誰いふともなく狐の生とて家中のつき合絶ける。是より母人心を付て父をさしころし其身も艮座に果給ふに。父は狐にうたがひなし我十三の事なれば覺てかなしく。世に住甲斐はなけれども。せめ跡とふために此姿と。まことしからぬ物語りのうちに。色〳〵の狐庭につくばい此びくにをいさめける

西鶴名殘の友　四

一　小野の炭かしらも消時

柳櫻も年よりたる人の姿を見ることく。冬山の淋しき比都にのほりて俳諧の友とせし團水言水などゝうき世の事ともを語りなぐさみて。何も心にかゝらぬ樂介世間のいそがしき時。ことに隙坊主と我身をうち笑ひて。北山の在郷道を行に松の嵐のおとのみ。春は爰らも人の山なるべきが折ふしは京のあそびずきもよもや出まじと思ひしに。麓に遠き森の陰に幕うちまはして。今は何か見る事もなきに酒にみだれてのこうた。聞ば女の声もしてすこし浦山敷心になりぬ。なをまた奥の松の木の間にあさぎに紅葉染こみたるきぬ幕の見えて。琴の音かすかに耳をおどろかし。扨都なればこそ師走の廿日過て野遊山の幕を所／＼に見る事。余所の國にはない事ぞと忙しき心ゆたかになりて。それより岡の細道をはるかに行きて龍安寺の池のはたにつきて又おもしろし。岸の枯芝の上に氈花むしろをしきならべ。此池の鴛鴦のつまあらそひを見る事近年はやりて毎日人の絶る事なし。是も京の冬のひとつの詠めとかたりけるうちに。汀なる草庵より法師立出て手ちかく餌をまきてまねきければ。かぎりもなくおし鳥爰にあつまりておのがさま／＼のたはふれ水は紅井にいろどり浪に白玉をちらし。夕日の移り稲妻を久しく見るがごとく。昼とも夜ともわきまへのなき遊興。御所めきたる女﨟中間は此鳥によせての哥給へるも有。又あなたを見れば人の内義。らしき風俗のあまたよりて。哥なぐさみに中將棊さゝるゝなどしやれ過たる今の世なりと思ひ。しばし見まはしけるに又古室の独すましたる良つきして。腰もとに小皷うたせて井筒の曲舞うたはるゝは。是又いたりせんさく彼是見る程目がこえて。同し人間のうまれ所田舎住ひのいと口惜。身は煙の種なる物をとかへるさに小野の炭竈を見物いたしけるに。是を燒翁はいつくにても色の黒きにかはる事なくておかしく。引捨たる柴つみ車に腰掛て三人ともにしばらく足を休め。里人をまねき此所は年ふりたる名所なれば。めつらしき咄はないかとたづねしに此前此里に今浦嶋とて長いきの炭燒ありて節分の大豆を百八十迄は祝ひしが其後は我年さへ覺へず。明くれ炭火に身をかためくろがねのごとくになりぬ。此人すきつる六月の中比俄に身が暑といひ出して。大声あげてなげきければみな

〳〵ふひんに思ひ。手毎に團を持てあふぎけれども。中〳〵此風にて燃る身い堪忍ならずと。是なる沢水へ丸裸にて飛こみしに。此親仁しゆつといふてつゐ消見るうちに形は殘らずとかたる。扨は年〳〵あいつもりての炭火水に消けると哀にこそ

【二】それ〳〵の名付親

人の名も武士はことに替りたる二字名を付べき事ぞかし。外にまぎれすしてよしと江戸勤になれたる使者男の申聞せける。又俳諧師の名乘は別して類のなきを付て德あり。草の名も所によりておもしろし難波の芦かる比ほとゝきすの千句して苔翁由平來山如見豊流賀子万海などうちよりて一日に滿座して夕暮より酒になして。堀江の棚なし舟にかるゞ取乘てほたる見に出しに何やかや世上の咄しするうちに臺所ふねより生醉の九八といふ太鼓持罷出。けふ歷〳〵のお寄合に御むしんが御座ります。わたくしの母親は御そんじの通り取あけばゝは隱れなし。此程さる所御子息間もなふおふたりまて出來まし

て。御親父うれしかりやう大かたならず。本妻は公家衆の御息女又妾女は新町の太夫を請出して下屋敷に置れし。両方ともに男子どのなれば。何とぞ世に替りたる名を付たしと此比色〳〵吟味あそばし。菟角わたくしの母によろしき名を付よと吉日明後日に極まる。どうぞ此名をたのみますといふ。いづれもかる口にまかせ先本妻は高家衆のむすめ。此腹から出生したる子にいやしき名は付られじ。是は琴丸と名付べし。又てかけは元来傾城此はらからうまれ出たるに。位過たる名は無用是は三味線丸とよぶべしといへば。それ〳〵の名付親さまとおの〳〵大笑ひしける

（十一）見立物は天狗の媒鳥

四条川原の貞見せ芝居是ぞ冬咲花のこゝちして一さかりのおもしろさ役者の入替りたる評判も次第にいひやみて。春の事ども何かなと仕組の内談に氣をつくし洛中の人の心を慰めける種ぞかし。又あまかへるの芝居といふ小見せ物の木戸番ども集りて。何ぞかはつた

いきものをほしや春の見せ物にしたし。はや馬に角かしらの白き烏。大女房まめ藏兩頭の鑑べらぼう山椒魚。ふた子のぶすま蟹右衞門。さま／＼の作り物も見せつくしてもしめつらしきけだ物もありやと。丹波の奥山丹後の浦／＼まで人やりて海山せんさくすれども。何か是ぞとおもふ物なく又京さはりの里／＼さがしけるに女の奉公人のなくれ物より外はあらずさりとはことをかきける。有時俳諧の會におの／＼集りて世のおかしき事ども沙汰いたされし折ふし。川原の者のまいりていづれもさまの御作意にて見せ物になりますもの出してくだされませいとたのみければ。其中におどけたる人ありてそれはよき事ありおしへて取にやるべし。此かしこき世なれば。中／＼作りものなどを請とる事にはあらず。古流なれども孔雀か中古なれども力持すこしも手ぬきのない物を人も好事なり。さりながらこれらもふるし新しき物は。松前の一番梟を兩方へはねを廣げあたまに頭巾をきせ。天狗の媒鳥に仕立あたこさんにのぼり。生の天狗をおと

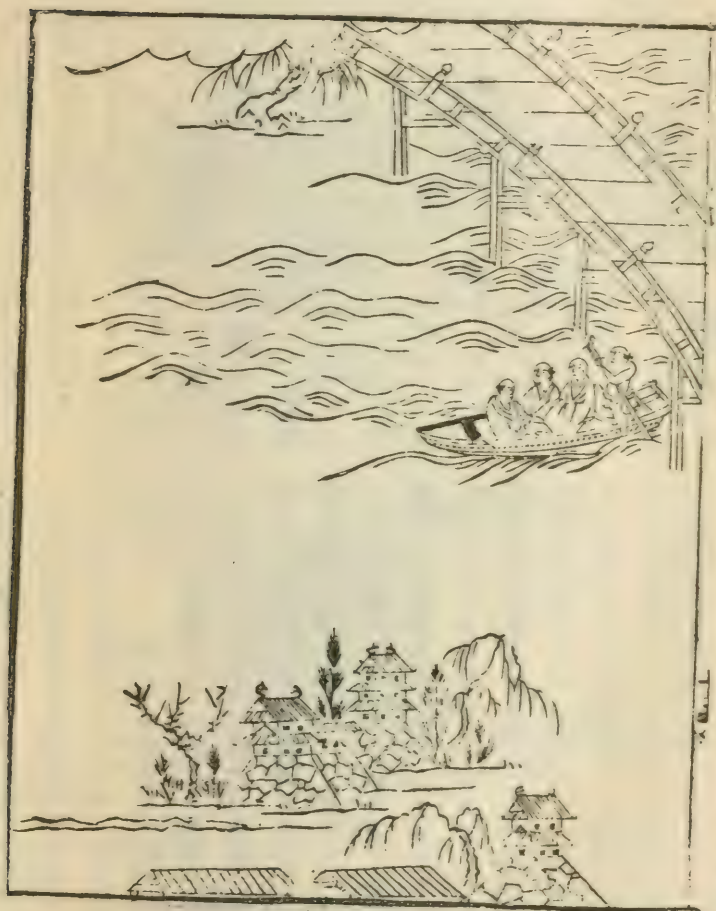
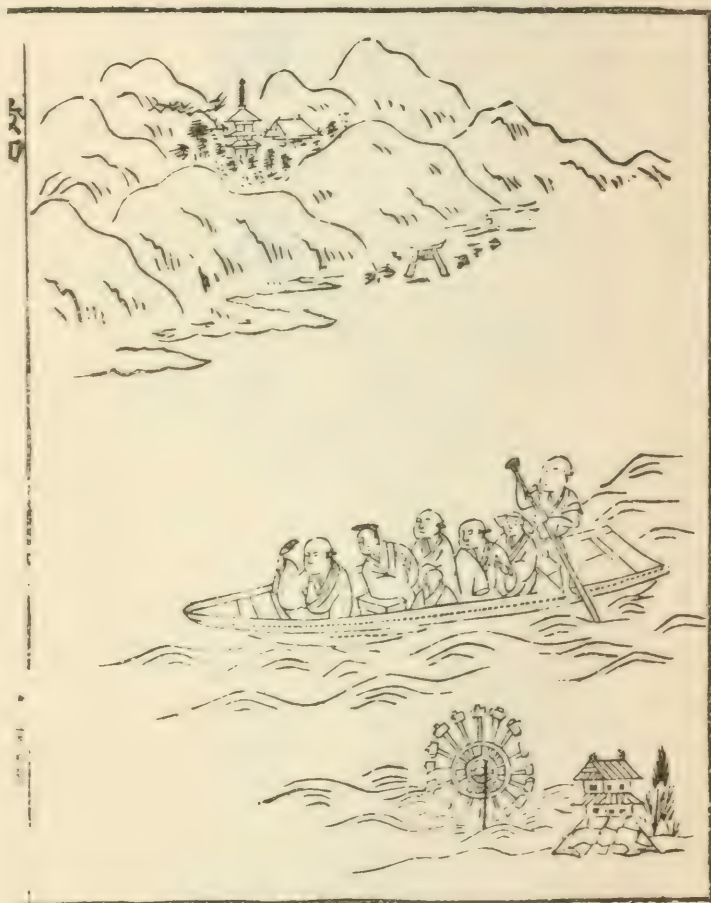
してきて是や中太郎坊のいけ取と。十弐匁づゝにて見する事ならばせにの山を築べし。此まへかゝる媒鳥のためしあり。人にすぐれて鼻高の数馬といへる浪人。毎日浪屋のちや見せに腰かけて京中の後家をおどしけるが。後には鼻自慢の㒵を見しりて。祇園の村からすが笑ひ立て後家もかゝらざると語れば。点者の物かたき似船常牧我黒晩山その外の連中後家のをとりは新しき仕出しと笑ひ捨られけるとぞ

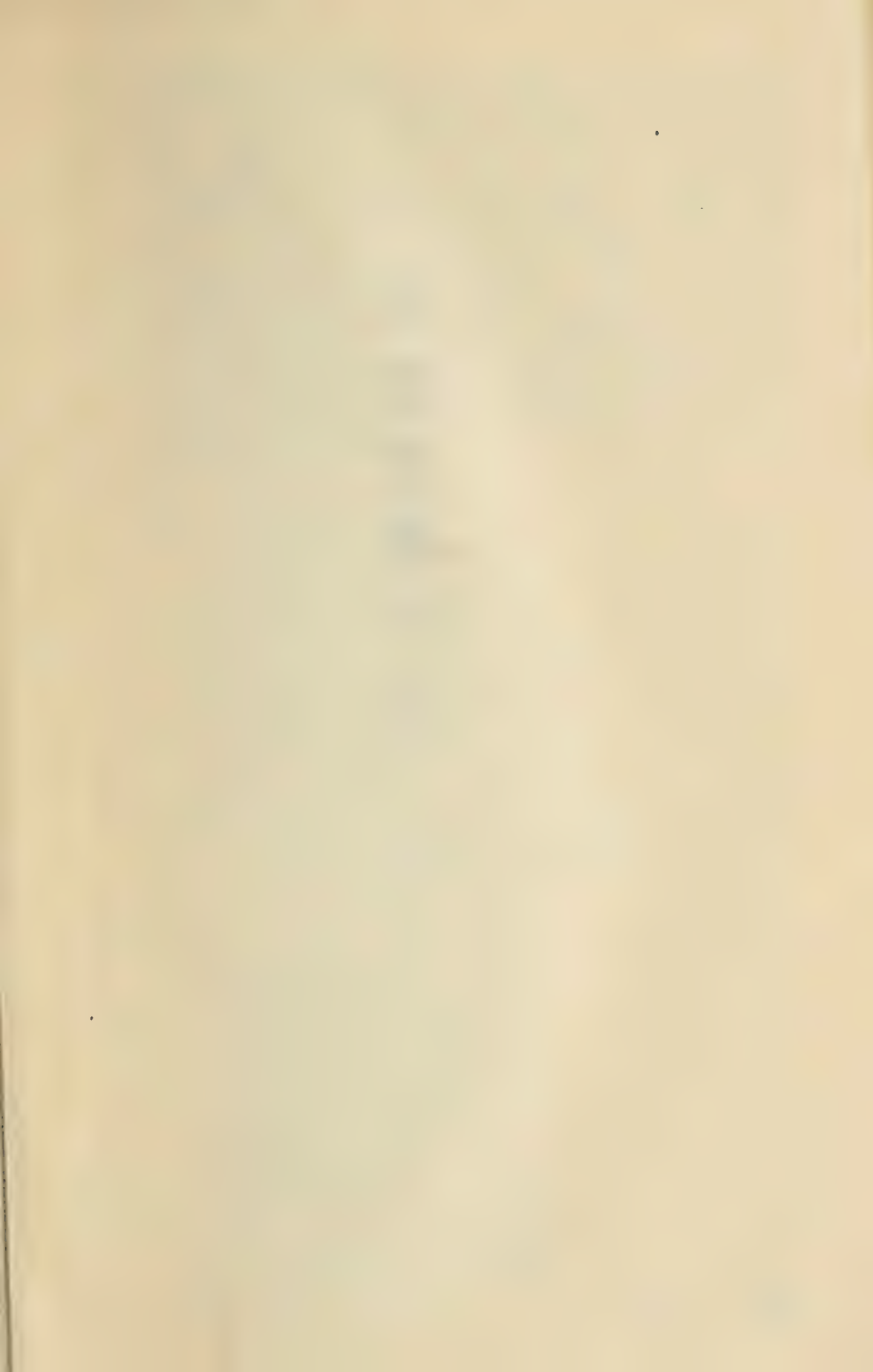
〔四〕乞食も橋のわたり初

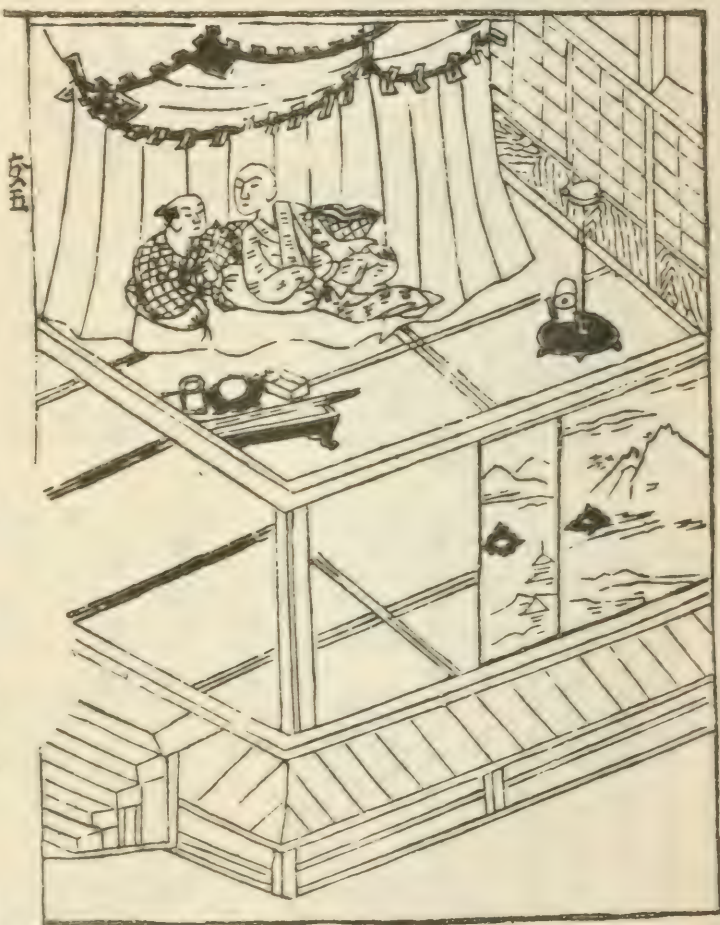
垣根の蔦かづら秋霜にいたみ。朝㒵あさましく花見し朝とは各別に替りて。松の夕風綿入着よといはぬばかりの声さはがしく。南となりには下女が力にまかせて拍子もなきしころ槌のかしましくうき世に住める耳の役に聞ば。北隣には養子との言葉からかい。後には俳言つよき身の恥どもいひさがして。跡は定まつて盃事になるもおかしき人心と。我はひとり淋しく雀の小弓など取出して手慰みするに。竹の組戸たゝきて亭坊〳〵とよぶ声関東めきたり。誰かと立出るにあんのごとく共角江戸よりのぼりたる旅すがたのかるく。年月の咄しの山冨士はふだんの雪ながらさらに又おもしろくなつて。露言一晶立志擧白などの無事をたづねて嬉しく。一日語るうちに互ひに俳諧の事どもいひ出さぬもしやれたる事ぞかし。其つぎの日は轍士にさそはれて。道の程三里にたらぬ八尾といふ里へ俳のもやうしありて行に。野道も折ふしは物の哀れに萩も薄も見るかげなく。たちがれの綿木かゞつきて昼狐うろたへて。案山子の笠は風にとられおどしの弓は色鳥のとまり木と成沢の浮藻かたまりてつなぎ捨たる小舟に柳の落葉埋みて砂川の歩行わたりおかし。なよ竹のむら〳〵茂りたる岸根を見れば。ちいさき棟をならべ莚戸に煙立のほり。乞食のすめる所と見えけるが。海道よりおのが住家への細道にすこしの溝川流しに。木竹をひろひ集めて五尺にたらぬ橋をかけ。けふ渡り初とて欠徳利に酒を入て祝義といふもおかしくしばし立とまりて様子を見るに。白髪あたまの乞食竹杖を腰にさして此橋をわたりそめければ。其あとにつゞきて色〳〵のかたわども渡りて。是はめでたしと声をそろへてよろこびける。時に彼老人あまたのものどもをちかふよびて。よろづを我にあやかるへし十三の年より乞食して一日もひだるいめにあはず。子ども十二人生のまゝそだて

ゝ。夫婦ながらそくさいにて今八十八迄世に住て。何か此上の榮花思ひ殘す事なし。と心のたのしみを申せば。いづれもあやかり物とて竹の箸切てもらいける。それ／＼の身祝ひおかしやと是を笑ふに。其乞食の中よりやせかれて色こじろき男出て。大木の榎木にのぼり枝にかゝりし塵をさがしけるを。何かするとたづねければ是に此程まで鴻の巣をかけしが。此巣の中にありける石は笙の舌をしめすによしと古人つたへける程にたづねまするといふ。汝は笙をふくかといへばむかしはすこし覺し事も御座れど。ふところより手なれし笙を取出して秋風樂の調子をふきける。さるほどに人はしれぬもの乞食に筋なし。あれは極樂の乞食なるべしと聞捨ける

〔五〕何ともしれぬ京の杉重

春の海靜に日影も入相の比より。明石の俳友にまねかれ椎本才麿同道にて。昼の櫻を夜咄しの生花に見て。はやよし野は散てしまい奈良の八重櫻も四五

日のうちを盛と。たよりの筆に大墨但馬よりしらせて。俳諧好の僧中神主町には西流西任。是非此春は待ける甲斐もなしとて。南都諸白と書付たる一樽はる〳〵おくられけれど。我下戸なればさのみ嬉しからず折ふし酒すきの人に。きこしめせとて封を切ば酒樽に餅をつめて越ければ。上戸どもおどろき力をおとしける。呑ぬをしりて此氣の付所當流の作意と語りければ。座中高笑ひしてそれは其日の客は不仕合亭主は大慶。惣して此程は世間氣いたりて大かたの事はおかしからず。近き比西國衆京にのぼられさま〳〵地走の中にも。昼舟のくだりを伏見迄おくり酒にてもてなしさらば〳〵と舟にのらるゝ時。京にて別してかたより使取いそきて杉重ひとつ進上申て歸りぬ。此蓋にめづらしき書付有此杉重牧方のすこし下にて御開きくださるべしとしるせり。其通りにして行に次第に酒の酔出て。もはや取たまへならぬ〳〵といふ。我等もひとつ過ましたがおさしならば呑成ともと。夢に酒もりて我覺へずの御機嫌おかしく。程なふひらかたが見

ゆるといふ時酔覚に成て。最前くはしの杉重を出せとてひらき見しに。一重には香の物焼塩又一重には洗ひ食に若菜こまかにして組合ける。扨も心を付たりと鍋に川水を扱込やき塩のかげんして水雑水を焼立おの〳〵酔をさまして正気になりぬ。さるほどにひらかたあたりにて水雑水のよい程をかんがへて。此色〳〵をおくりけるは中〳〵下戸のなるべき事にはあらず。世に上戸程かしこきものはなしかゝる咄しの種も呑ねばならぬ物と。明石御亭主もひとつはなれば上戸をほめて。ひそうの箱より天の岩戸といふ大徳利に。不老酒といへる名酒をつめ置是をもてなされて人の面はしろ〳〵とさむるや名の酒なるらん

西鶴名殘の友　五

【二】宗祇の旅蚊屋

寺にかわれる猫に鰹節見すれば身をちゞめてにげありき。謳うたひの軒の鶯は口笛の音を出しぬ。されば和歌に師匠なしとはいへど。連俳も其功者に付そひたる人は心ざしなくても自然と道を覺へり。有時旅宿にて山家かよひの商人の集りて。今宵は七月七日星もあふ夜の天の野かさゝぎのわたせるはしといふは。烏口箸をくわへあふて其上を星のわたる事ぞと。子細語ればいづれも手をうつてそなたは下に置れぬ人。もしは公家のおとし子かといへば。我はいやしき身なれど一とせ連歌師の宗祇法師。諸國を執行して給ふ時人の縁はしれぬものなり。東海道の岡部の宿にて相宿。同じ蚊屋に寢たといふむかし物語りおかし。是を聞傳へてある俳諧師無筆無學にして付合をする人有。そなたはいかなる事が種と成て此作の出る事ぞとたづねしに。我等ぬけ參りいたせし時伊勢の望一とひとつの紙帳に寢て。それよりおのづから身が

俳諧になつたといふ。おの〳〵おかしく扨は連俳の間は薄紙程の違ひなり。宗祇と同じ蚊屋にねた人連歌をすれば、望一と同じ紙帳にねて俳諧をせらるゝ事是きどく也。迚も事に望一と同じ病をやみ給はゞ。座頭に成給はん物を目が見えて殘念と笑ひける

[一二]交野の雉子も喰しる客人

誰物好にて遊女の小袖是は難波のうらめつらしや紋付の熨斗目よき絹よりはいたりせんさく。定まつて梅に鶯の茶染もおもしろからず。むかしはこうたの撥音今は茶湯楊弓を。女良の手業にもてあそびける。惣して人の心共時にはやる事ども移り氣になつて。俳諧やうきうに日を暮しひとつ覺へては百もぞんした皃せらるゝもおかし。有時弥七京の師皃をいたさるゝ大臣をりやうり好みして振舞けるに。此客物になれたる座付して萬に氣を付て。ひとつ〳〵ほめらるゝ事皆伊勢や日向なり。まづ此燒物の鯛は西の宮の海でとれたる風味と喰覺たが亭主なんと。成程ゑびす殿の御一門衆よりもらいました。扨此雉子は交野又石花は桑名。殊に柚味噌へたゝきこまれし小鳥はたしか猪野の雲雀。初獻の酒は舞鶴と呑覺へたが何と〳〵。亭主も大きに我をおりました。名物をふるまいましても此ごとく所〳〵を喰覺へなされましたお客申請ました甲斐こそあれ。さても〳〵廣ふ御らんなされたるしると。手を拍てかんじければ。いよ〳〵此客出來だてにて。さりとては此食の湯つねていの水でわかしたる物ではなし。逢坂關の清水か又は美濃國さめが井の水か此二色は違じといふ。亭主あまりおかしく湯は御地走のために有馬へ取につかはしましたと申せば。いづれも相客の物馴男どもよい程に笑ひける。此事神樂が京みやげに聞てくだり。正信竹亭一礼昨俳素龍鬼貫など集りし。俳諧の座にて咄し出して又大坂にて一笑ひたさせける

[一三] 無筆の礼帳

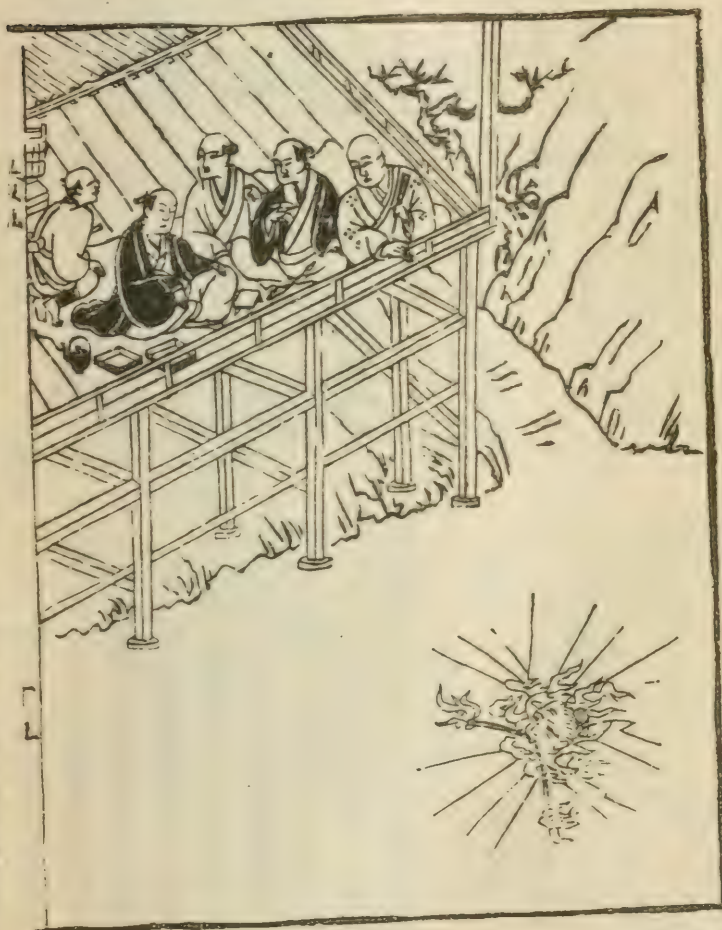
皆上がたの春を心かけて諸國の俳友のぼり舟の大湊。難波の梅すぎて大寺の櫻咲比。豐後の西國筑後の西与。美濃の木因備後の西鷺など寄合て國〳〵の雜談。老の心も春めきておもしろく俳諧は外になして耳をよろこばせける。されば世に物を書ぬ程あさましき物はなし。此すぎし正月豐後の國屋かたにて。其家久しき武士に無筆なる人あり。筋目にて弐百石の知行はもらいながら今の世にあはぬ奉公人なり。物には類に

集りめしつかひの家の子。はや五十におよべども我名をさへ書事ならず。一生物覺へひとつにてよろづをへの字なりに勤めける。此男玄関の番を請取三日日のうち乱帳を付ける。旦那も下人も無筆にて間をあはせけるこそおかしけれ。乱かへしに出るとて彼帳面を見られけるに。鳥居と太鼓と摺砵とを繪に書置けるを旦那合点して是は宮川備前殿かといふ。さて又若杜にさし鯖を書しを。是は八橋能登殿なるべし。其奥に不動を書置けるを見て。是は讀ぬか誰じやぞ。監物様と申。さて／＼當字を書男かな。監物には鐘馗大臣か樊噲をなせ書て置ぬぞ。是不動院に讀まざれて惡敷とてしかられける

〔四〕 下帯斗の玉の段

津の國櫻塚の里に落月庵西吟といへる俳諧師有。一とせ万句興行いたされしに所めつらしければ大坂より連衆つゞきて。程なく滿座のことぶきにまねかれ花すゝき野菊をわけて。池田海道の秋の氣色おもしろく。青木友雪同道して継駕籠たてならべて行に。長柄の渡しを越て心よく眠り機嫌なれば。目覺しに手鞁うつて山姥をうたへば。跡肩の者息杖を取なをし休む重荷にかた棒さまに。又けふも不拍子なる旦那殿をのせて次第にもちおもりがするといふ。此言葉耳にかゝりてそれは我／＼が謡の事か。おそらく下がゝり一流の大事残らず習ひ請て。世におそろしきものはなきに。汝いやしき渡世の身として何をか聞しりていふぞわたくしは何も存ぜねどもうたひの拍子かたしき御かたをのせました時はかるし。素人のうたひの時はかならず駕籠がゆるき出まして。かたほねがたまりませぬと無用の論をいたす時。さきがたかきたる男いいへるは。跡なる男はすこしうたひの事は覺へましたはづか御座る。うちはやしに千貫目程の身体をなくなしまして。さる。から大名の能太夫になつて居ましたが。御意をそむきましてお國をにげてまいつて。今は我等と棒組いたしますと語る。あれがうたひしりの能太夫ならば。是から櫻塚まで二里こそあれ其間うたひうたはねば濟事じや。さりながら口をたゝかねばならぬによつて。虚太夫ふじのしゆらを語る程に十面つくりて身ゆすつてあと程駕籠がおもたくとも。此方は習ひでかたる程にいづれにてもふしの逢ふた所があらば申せ。菟角あの男は人の氣に入まじき生れつき。その大名の御前は何としてそむきけるぞ。其殿世にかくれもな

き身体ならすなれば。能道具残らず賣拂ひて後儀能を仰せ付られしに。装束のない事を申上れば。何そいしやうのいらぬ能を吟味して仕れとの仰せ。家老中相談して然らば紙子をひとつ仕立させつかはさるべし。浪人に拵へ鉢の木をいたさせましやうより外はなしと申上る。それもおもへば太義なる事なれば。それかしがおもひつけた。丸裸になつて海士の玉の段をつかまつれと申せ。せつかく衣裝着ても。彼海底に飛入れば。ぬれて世の費なれば新しき布のふんどし一筋とらせと小納戸衆へ仰せ出されける。そもや此秋風の身にしむ比。はだかて海へはいるまねもなる物かと御暇乞捨にして此仕合と語りける

五 年わすれの糸鬢

暮て行とし浪の心よく。名殘の芝居見て大和屋甚兵衛宇治右衛門藤川武左衛門坊主百兵衛などひとつに。ゆふべ人よりはやく道頓堀の大黒風呂に入て。身のきよくなれる事毎日絶ぬ垢おかしく折ふし江戸草履取の墓原角蔵といへ

る者髮腓を得たれば是を板の間によびて。ひとり〳〵髭まで剃せてきさんじに産毛も殘らず。さりとてはきみよし。是をおもふに下手にあたま剃すと若ひ醫者の藥を呑程。世に心かゝりなる物はなしといへば。いかにも其通りさらばお上手にひとつ御無心と。百兵衞があたまを持てかゝれば。角藏是を見て骨はおしみませねども。此お中剃は御免なりませい。物節季の心おちつきませぬ時は。男と坊主との糸鬢のさかいが見えませぬといふ。いづれも大笑ひして何のために見えぬ程の細鬢にいたしけるぞ。まづひえてひとつのそんといへば其替りに夏の涼しさといふ。面〳〵あたまなれば我心まかせの物好と笑ひ立にしてそれより玉造の和氣遠船の樂庵へ。年わすれの俳諧にまかりて。師走の月見る人もありとおの〳〵連立て觀音堂の舞臺にて酒事にあそぶはすこし物好過たり。東にかづらき山あきじのゝ里。高安につゞきてくらかり峠平岡明神も手ちかふ見えわたりぬ。亭主山〳〵を案內して扨あれなる森より世に沙汰いたす姥が火を御馳走に御目に懸べし。もはや八つの鐘も突たれば出る時分といひもはてぬに。雲にひかり移りて子どものもてあそぶ程成鬼灯ちやうちん程成火に。數百筋の糸を引てきり〳〵と舞あがるはおそろしくおもしろし。まゝならばあの火を爰に取よせたばこ呑たしといふ。火鉢へ入てあたりたしといふ。伽羅を焼たしと心〳〵にてんがう口をいひ捨ける。あれは手をたゝけば是へくるといふ。皆〳〵立ならひて手をうてども此火きもせずへんじもせず。扨は此なかに本客がないと姥が火も見立てふあしらいにすると見えたり。是非ともによびよせといへばこんがうども氣勢にまかせほい〳〵とまねけば此声に付て飛きたり。いづれものかしらの上に火をふけば氣を取うしないておそれをなし。やう〳〵魂ひすへてこんがうども我身を見れば。やけどにあふて髮の毛のこげぬはなし。百兵衞ばかり何の子細もなきは糸鬢の德此時見せたり

〔六〕入歯は花のむかし

梅椿も室咲はかぢけておもしろからす。時節と春の梢はおのづから詠めもよしと。柳に去年の水仙を生させて釣釜のたぎりを聞る樂しみ何かあるべし。此心詫數寄をよしといへどことたらずしてはたのしみなし。世を心のまゝなる人の茶事は不自由なる体に仕かけたるこそよけれと宇治の上林の法師

俳諧の座にて語れしか是も尤に思ひあたる事あり。津の國の野田といふ里に藤の咲比かならず彌作のほとゝぎす の來りて鳴事有。是をきゝにこよといへる樂坊主に約束して。俳友五七人其日の晝まへより草庵にたづねしに。見越の松杉さま〳〵に枝ふらせ。びやくしん滝に作りつゝじの帆かけ舟。こてまり山吹のおのれと咲し外は皆兼好が嫌ひたる庭木。へうたんの手水ひしやくさし釣瓶のふるきに間砯きせたる燈籠。いつれを見ても子細の過て氣のつまる物好なり。發句望まれて八吟の歌仙詠草書にしてしまへは。あるし釜仕かけ置てけふおの〳〵御出とそんじ。老人の手にかけて引ましたばかりを御地走。さらば大ふくにたてましてあけんと。手前つくろひ過てむかし行なり。殊に鍃たてして見せ貞に正客にさし出せば。身をつくりて呑かゝられしか。其次へもまはしかね俄に赤面して。是はこれにてしまいますとひとりして呑て。茶碗うちまで改め近比〳〵面目なけれどわたくしの入歯此なかへ落込まして。いかにしても外へは進じ難くてかくの仕合なれば。御免と斷りいひ立に亭座敷へ出ける。ちつともくるしからぬ御事と。亭坊も客も同音に申ながら興を覺して其跡おかしくなりぬ。

爰は又あらためて一ふく是非たつる所なれども。外に引たる茶もなく又亭坊の仕舞おさまりかねて。はやり哥をうたひ出しどつと笑ふくれける是をおもふに惣して詫たる事のよいといふ事はなし。あたま數の燒物猫といふもの世に住ば。用心して替釜かけ置茶の湯ありたき物ぞかし。次第にいたりたる世のさま豐なる御時のためし也

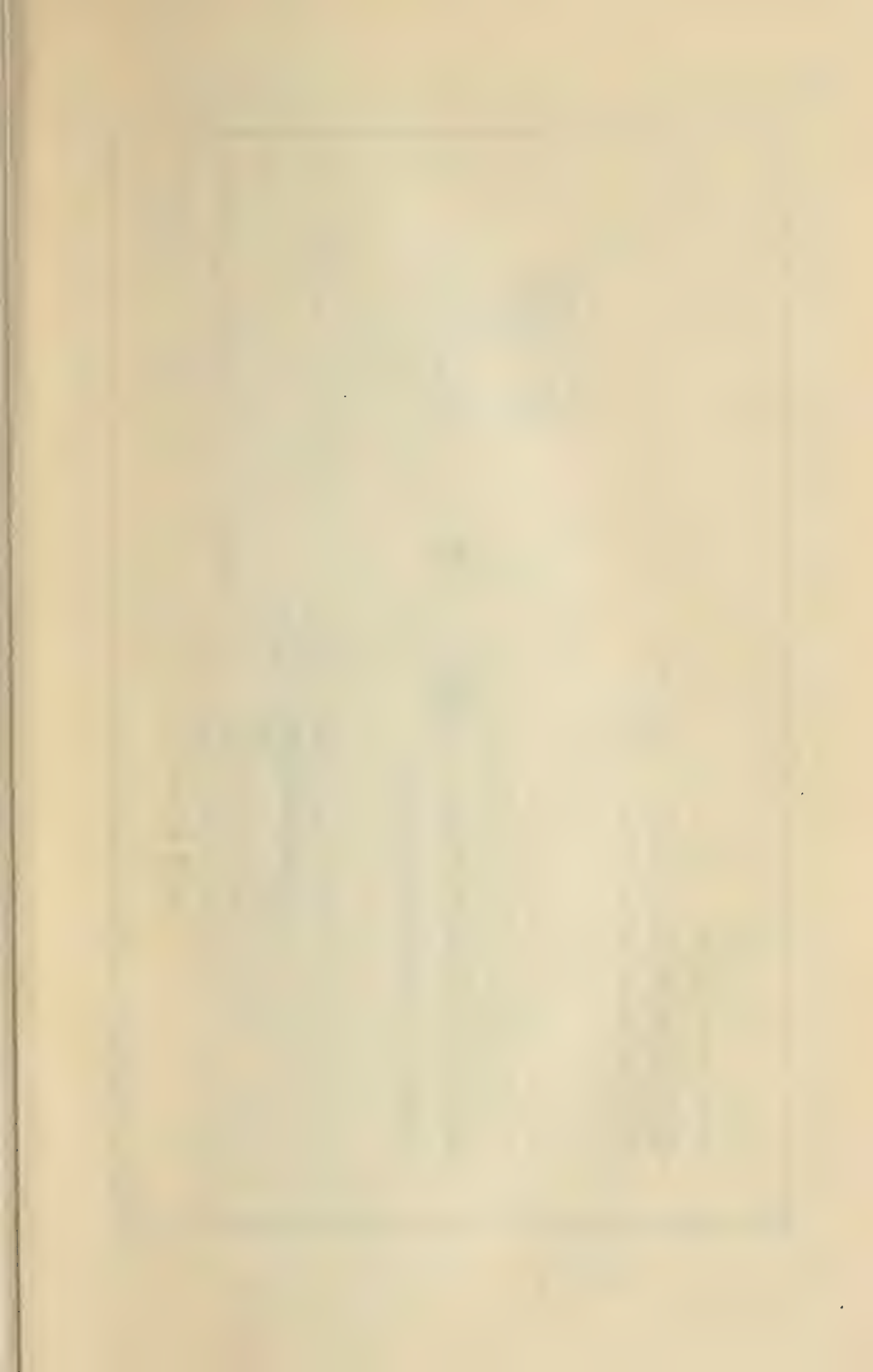
西鶴一生涯の[illegible]書なをしおかれし[illegible]
覚書一冊あり[illegible]書のこしたるの
おほしかれこれ二冊を[illegible]
自筆のかはり近日板行の[illegible]
請りのし

元祿十二己卯歲首蓂吉辰　浪花書林　開板

昭和四年十月十日印刷
昭和四年十月十三日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第二卷
西鶴名作集下
（非賣品）

東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
編輯兼發行者
印刷者
日本名著全集刊行會
代表者 石川寅吉

東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
發行所 日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番・一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全三十卷 書目一覽

第一巻 第二巻 **西鶴名作集** 上（第廿八回配本濟） 下（第廿九回配本濟）

○好色一代男 ○好色二代男 ○西鶴諸國咄 ○近代艶隱者 ○好色一代女 ○本朝二十不孝 ○男色大鑑 ○懐硯 ○武道傳來記 ○日本永代藏 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○本朝櫻陰比事 ○一目玉鉾 ○世間胸算用 ○西鶴置土產 ○織留 ○俗つれ〴〵 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○好色五人女

第三巻 **芭蕉全集**（第廿四回配本濟）

正篇 ○俳句集 芭蕉句選・句選拾遺・補遺 ○連句集 俳諧集・補遺 ○俳文集 文集・補遺 ○評言集 貝おほひ・田舍句合・常盤屋句合・初懐紙評註・雪の薦 ○紀行集 甲子吟行・鹿島紀行・笈の小文・更級紀行・奥の細道・嵯峨日記 ○書簡集 消息集・補遺 ○語錄集 葛の松原・去來抄・三冊子・山中問答

外篇 ○虛栗 ○冬の日 ○蛙合 ○春の日 ○曠野 ○其袋 ○瓢 ○猿蓑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○笈日記 ○續猿蓑 ○韻塞 ○小文庫 ○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○全傳 ○芭蕉翁繪詞傳

附錄 ○年譜

第四巻 第五巻 **近松名作集** 上（第二回配本濟） 下（第六回配本濟）

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習并新暦 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蟬丸 ○最明寺殿百人上﨟 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀河波鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧德 ○五十年忌歌念佛 ○祀狩劍本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡

○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔暦 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川 ○心中天網島 ○津國女夫池 ○女殺油地獄 ○信州川中島合戰 ○心中宵庚申 ○關八州繋馬

第六巻 第七巻 浄瑠璃名作集 上（第十四回配本済） 下（第廿三回配本済）

○暦 ○本海道虎石 ○心中涙の玉井 ○金屋金五郎浮名額 ○金屋金五郎後日雛形 ○梅久末松山 ○富仁親王嵯峨錦 ○お染久松袂の白しぼり ○鬼鹿毛無佐志鐙 ○愛護若塒箱 ○傾城思升屋 ○八百屋お七 ○心中二つ腹帯 ○大塔宮曦鎧 ○須磨都源平躑躅 ○鬼一法眼三略卷 ○壇浦兜軍記 ○蘆屋道滿大內鑑 ○苅萱桑門筑紫轢 ○敵討襤褸錦 ○釜淵雙級巴 ○ひらかな盛衰記 ○夏祭浪花鑑 ○菅原傳授手習鑑 ○義經千本櫻 ○假名手本忠臣藏 ○双蝶々曲輪日記 ○一谷嫩軍記 ○本朝廿四孝 ○奥州安達原 ○關取千兩幟 ○近江源氏先陣館 ○神靈矢口渡 ○妹背山婦女庭訓 ○攝州合邦辻 ○新版歌祭文 ○伊賀越道中雙六 ○近頃河原達引 ○絲櫻本町育 ○繪本太閤記 ○名錄伽羅千代萩 ○鎌倉三代記

第八巻 歌舞伎脚本集（第十九回配本済）

○大名なぐさみ曾我 ○好色傳授 ○傾城淺間嶽 ○桑名屋徳三入船物語 ○加賀山廓寫本 ○殿下茶屋聚 ○隅田川續俤 ○男伊達初買曾我 ○あげまき助六廓の花見時 ○東海道四谷怪談 ○十六夜清心 ○忠臣藏年中行事

第九巻 浮世草子集（第十六回配本済）

○好色万金丹 ○御前義經記 ○けいせい色三味線 ○沖津白浪 ○傾城禁短氣 ○日本新永代藏 ○世間息子氣質 ○新小夜嵐 ○世間娘容氣 ○浮世親仁形氣

第十巻 怪談名作集（第十二回配本済）

○伽婢子 ○狗張子 ○怪談全書 ○英草紙 ○繁野話 ○雨月物語 ○唐錦 ○莠句冊 ○垣根草 ○漫遊記 ○附錄百鬼夜行繪卷

第十一巻 黄表紙廿五種（第一回配本済）

○金々先生榮花夢 ○親敵打腹鼓 ○長生見度記

○啌多雁取帳　○狂言好野暮大名　○大悲千祿本
○江戸生艶氣樺焼　○莫切自根金生木　○文武二道
万石通　○孔子縞于時藍染　○心學早染草　○即席
耳學問　○廬生夢魂其前日　○馬鹿長命子氣物語
○世上酒落見繪圖　○桃太郎發端話說　○十四傾城
腹之内　○金々先生造化夢　○忠臣藏前世幕無
世諺口紺屋雛形　○碑史億說年代記　○御誂染長壽
小紋　○的中地本問屋　○人間萬事吹矢的　○人間
萬事吹矢的（草稿）

第十二卷 洒落本集（第廿四回配本濟）

○百花評林　○聖遊廓契○月花餘情　○異素六帖
○遊子方言　○辰巳之園　○當世氣どり草　○婦美
車紫鄭　○妓子呼子鳥　○深川新話　○道中粹語錄
○大通多名於呂志　○愚人贅漢居續借金　○狂訓彙
軌本紀　○和唐珍解　○令子洞房　○通言總籬　○
田舍芝居　○和歌始衣抄　○古契三娼　○女郎買糠
味噌汁　○田舍談義　○娼妓絹籭　○錦の裏　○仕
懸文庫　○辰巳婦言　○傾城買二筋道　○讃極史
○籬の花　○郭字久爲壽　○新瀉後の月見　○河東
方言籔まくら　○色深狹睡夢　○金鄉春夕榮

第十三卷 讀本集（第七回配本濟）

○三七全傳南柯夢　○占夢南柯後記　○天羽衣　○
飛騨匠物語

第十四卷 滑稽本集（第三回配本濟）

○風流志道軒傳　○古朽木　○阿多福假面　○指面
草　○人遠茶懸物　○無彈砂子　○小紋雅話　○奇
妙圖彙　○浮世風呂　○早變胸機關　○客者評判記
○浮世床　○人間萬事虛誕計　○同上後篇　○假名
手本藏意抄　○一盃綺言　○古今百馬鹿　○八笑人
○七偏人　○柳巷訛言　○市川評判圖會室の梅　○
福來雀　○一雅話三笑　○言葉の花　○噂の味噌津

第十五卷 人情本集（第廿一回配本濟）

○假名文章娘節用　○春色梅曆　○春色辰巳園　○春色
惠之花　○英對暖語　○梅見船　○閑情末摘花

第十六卷 第十七卷 第十八卷 南總里見八犬傳

上（第四回配本濟）
中（第九回配本濟）
下（第七回配本濟）

第十九卷 狂文狂歌集（第廿六回配本濟）

○曉月坊酒百首　○世の中百首　○雄長老狂歌集
○貞德狂歌百首　○吾吟我集　○古今夷曲集　○後撰
夷曲集　○狂歌うた合　○卜養狂歌集　○狂歌鳩の
枝　○貞柳全集他○明和十五番狂歌合　○狂歌若葉
集　○万載狂歌集　○德和歌後万載集　○狂歌才藏
集　○四方の留槽　○吾妻なまり

第廿巻 第廿一巻 **修紫田舍源氏** 上（第五回配本濟）下（第十五回配本濟）

第廿二巻 第廿三巻 **膝栗毛其他** 上（第十回配本濟）下（第十一回配本濟）

○東海道中膝栗毛 ○續膝栗毛 ○續々膝栗毛 ○南總記行旅眼石 ○江戸前噺鰻 ○落咄彌次郎口

第廿四巻 第廿五巻 **和文和歌集** 上（第十三回配本濟）下（第二十回配本濟）

○賀茂翁歌集 ○にひまなび ○歌意考 ○天降言 ○うけらが花 ○琴後集 ○楫取魚彥家集 ○ひとよはな ○東遊日次記 ○藤簍册子 ○志濃夫廼舍家集 ○六帖詠草 ○同拾遺 ○桂園一枝 ○同拾遺 ○亮々遺稿 ○浦のしほ貝 ○しのぶぐさ ○言道歌集 ○良寛歌集 ○女流歌文集

第廿六巻 **川柳雜俳集**（第八回配本濟）

○武玉川十八篇 ○柳多留三十一篇 ○誹風柳多留拾遺十篇 ○川傍柳五篇

第廿七巻 **俳文俳句集**（第廿二回配本濟）

○獨言 ○鬼貫句選 ○七車 ○とく〳〵の句合 ○五元集 同拾遺 ○玄峯集 ○去來發句集 ○丈草發句集 ○風俗文選 ○職人盡 ○鶉衣 ○千代尼句集 ○松の聲 ○太祇句選 ○同後篇 ○春泥發句集 ○樗良發句集 ○蕪村句集 ○蕪村文集 ○蓼太句集 ○井華集 ○青蘿發句集 ○白雄發句集 ○曉臺發句集 ○闌更發句集 ○俳ざんげ ○枇杷園發句集 ○成美家集 ○道彥發句集 ○乙二發句集 ○一茶句集 ○おらが春 ○屠龍之技 ○

第廿八巻 **歌謠音曲集**

○義太夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段）○艶容女舞衣（下の巻・酒屋の段）○戀娘昔八丈（下の巻・鈴ケ森の段）○桂川連理柵（下の巻・帯屋の段）○廓文章（吉田屋の段）○傾城戀飛脚（下の巻・新口村の段）○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段）○花上野譽の石碑（四つ目・志渡寺の段）○木下蔭狭間合戰（七つ目・竹中陣屋の段）○蝶花形名歌島臺（八の切・小坂部館の段）○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段）○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段）○八陣守護城（八の切・正淸本城の段）○生寫朝顔日記（宿屋の段）○壺坂靈驗記（澤市內の段）○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郎切腹の段）○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切・碁立の段）

○河東節

○松の内　○神樂獅子　○隅田川舟の内　○禿萬歳　○炎すゑ殿の疊夜着　○酒中花　○水調子　○うかぶ瀬　○ぬれ扇　○亂髪夜編笠　○助六所縁江戸櫻　○常磐帶　○花桐　○道成寺　○淨瑠璃供養　○邯鄲　○熊野　○泰平住吉踊　○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

○一中節

○辰巳の四季　○松づくし　○泰平船づくし　○高砂松の段　○神樂高砂　○墨繪の島臺　○萬屋助六心中　○自然居士過去物語　○源氏妹が宿　○夕霞淺間嶽　○尾上雲賤機帶　○源氏十二段　○賴光大江山入　○鉢の木　○與作小萬夢路の駒　○道行三度笠　○鵜飼石和川　○お夏笠物狂　○競牡丹　○源平妹脊の鷄合

○常盤津節

○老松　○子寶三番叟　○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃）○積戀雪關扉（關の戸）○四天王大江山入（古山姥）○兩顏月姿繪（葱賣）○戻駕色相肩（戻駕）○帶文桂川水（お半）○倭假名色七文字（源太）○壽靱猿　○松色操高砂（太神樂）○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢木　○寄罠娼釣狐（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵衞獅子）○恩愛瞳關守（宗清）○願絲緣苧環（おみわ）○忍寄戀曲者（將門）○花舞臺霞猿曳（新うつぼ）○新負雪間の市川（新山姥）○乘合船惠方萬歳（乘合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景清　○勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女　○戻り橋　○三保の松　○松の島　○三世相錦繡文章（おその六三）○大森彦七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし島）○百夜菊色の世中（關寺）○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）○其俤淺間嶽（淺間）○道行戀飛脚（梅川忠兵衞）○互連理梅（蟲賣）○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春夜曉子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）○徒髪戀曲物（松風）○茂懺悔睦言（扇買高尾）○道行念玉蔓（長作）○幾菊蝶初音道行（忠信）○拙筆力七以呂波（乙姫）○草枕露の玉歌和（玉川）○奈須野　○御代榮益穗富種（豐の前）○高砂女夫

○清元節

○梅の春　○葉能春延壽（長生）○北州千歳壽（北州）○四季三葉草　○其小唄夢廓（權八）○[illegible]五月雨（小菊半兵衞）○深山櫻及兼樹振（保名）○御名殘押繪交張（鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（玉兎）○詠梅松清元（茶筅賣）○色山解深川（待人）○大和い手向五字（子守）○色彩間刈豆（かさね）○法

新獅子 ○三升猿曲舞（猿舞） ○石橋（外記の石橋） ○老松 ○不動 ○七所御撰初鐵漿（西王母・藪入娘） ○大和い手向五字（官女・牛若） ○外記猿 ○復新三組盞（初雁の傾城） ○廓三番叟（廓三番） ○歌へす〳〵餘大津畫（藤娘・關三の座頭・關三の奴） ○月雪花蒔繪の巵（月の巻） ○拙筆力七以呂波（芝翫の傾城・供奴・浦島・瓢箪鯰） ○八重霞賤機帶（賤機） ○後の月酒宴島臺（角兵衛獅子） ○御歳玉海老手遊（とんび奴） ○吾妻八けい（八景） ○六歌仙容彩（業平小町） ○姿花後雛形（小鍛冶） ○初子日 ○俄獅子 ○外記の傀儡師 ○初しぐれ ○巽八景 ○花翫暦色所八景（助六・景清・新鷺娘） ○勸進帳 ○花兄弟十二月所作（若菜摘・鍾馗・雷） ○島臺 ○軒端松 ○上農工商 ○秋色種 ○雛鶴三番叟 ○花見車 ○手習子 ○織どの ○常磐庭 ○鶴龜 ○五色の絲 ○今樣小鍛冶 ○柳糸引御撰（裸三番叟） ○壽 ○鞍馬山 ○翁千歳三番叟 ○廓丹前 ○菖蒲ゆかた ○喜三之庭 ○紀州道成寺 ○連獅子 ○時雨西行

○歌　澤

寅派、芝派の歌詞を全部收める。

○小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

第廿九卷 謠曲三百五十番集（第十八回配本濟）

脇能物

○翁 ○高砂 ○弓八幡 ○志賀 ○淡路 ○御裳濯 ○代主 ○松尾 ○佐保山 ○養老 ○大典 ○放生川 ○老松 ○白樂天 ○鶴龜 ○東方朔 ○白鬚 ○大社 ○源太夫 ○寢覺 ○鵜祭 ○輪藏 ○道明寺 ○難波 ○富士山 ○江島 ○賀茂 ○竹生島 ○氷室 ○和布刈 ○逆矛 ○九世戸 ○要石 ○嵐山 ○金札 ○岩船 ○玉井 ○西王母 ○吳服 ○右近 ○繪馬 ○鱗形 ○內外詣

修羅物

○田村 ○八島 ○箙 ○忠度 ○俊成忠度 ○經政 ○通盛 ○兼平 ○知章 ○賴政 ○實盛 ○清經 ○朝長 ○巴 ○敦盛 ○生田敦盛

三番目物

○野宮 ○井筒 ○東北 ○梅 ○佛原 ○采女 ○芭蕉 ○墨染櫻 ○身延 ○半蔀 ○夕顏 ○雪 ○楊貴妃 ○江口 ○定家 ○千手 ○二人靜 ○六浦 ○藤 ○杜若 ○小鹽 ○雲林院 ○誓願寺 ○羽衣 ○落葉 ○遊行柳 ○西行櫻 ○葛城 ○瀧田 ○三輪 ○卷絹 ○吉野靜 ○住吉詣 ○松風 ○熊野 ○草紙洗小町 ○山姥 ○祇王 ○吉野天人 ○胡蝶 ○[illegible] ○源氏供養 ○大原御幸 ○關寺小町 ○鸚鵡小町 ○檜垣 ○姨捨

四番目物

○三井寺 ○櫻川 ○柏崎 ○百萬 ○玉葛 ○浮船 ○三山 ○籠太鼓 ○[illegible]王 ○隅田川 ○蟬丸 ○花筐 ○雲雀山 ○飛鳥川 ○班女 ○加茂物狂 ○水無月祓 ○室君 ○初雪 ○花軍 ○富士太鼓 ○梅枝 ○鳥追船 ○竹雪 ○藍染川 ○水無瀬 ○砧 ○求塚 ○卒都婆小町 ○女郎花 ○通小町 ○戀の松原 ○善知鳥 ○阿漕 ○藤戸 ○松虫 ○錦木 ○船橋 ○綾鼓 ○戀重荷 ○鐵輪 ○葵上 ○道成寺 ○雨月 ○木賊 ○弱法師 ○景清 ○俊寛 ○接待 ○鉢木 ○土車 ○高野物狂 ○蘆刈 ○盛久 ○小督 ○春榮 ○仲光 ○重盛 ○

備譽○櫻井○正行○木曾○七騎落○安宅○切兼曾我○元服曾我○小袖曾我○藤榮○自然居士○東岸居士○花月○放下僧○歡占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲○菊慈童○枕慈童○天鼓○咸陽宮○大佛供養○夜討曾我○橋辨慶○筒之後○湛海○忠信○錦戸○現在巴○關原與市○禪師曾我○正尊○草薙○秦山府君○現在七面○調伏曾我○望月

五番目物

○鵜飼○鐵輪○熊坂○項羽○昭君○松山鏡○野守○檀風○烏帽子折○鞍馬天狗○善界○車僧○第六天○大會○葛城天狗○松山天狗○舍利○殺生石○小鍛冶○鵺○雷電○谷行○國栖○春日龍神○大蛇○愛宕空也○龍虎○飛雲○大江山○羅生門○土蜘蛛○現在鵺○安達原○紅葉狩○船辨慶○碇潜○張良○皇帝○一角仙人○融○須磨源氏○絃上○海士○當麻○來殿○山姥○石橋○合甫○猩々○大瓶猩々

番外物

○鼓の瀧○徑山寺○兵揃○横山○玉取○和閑○門季○由良物狂○香椎○內府○鳥追○玉島○現在經政○卒都婆流○當願碁當○徒然○上宮太子○松浦物狂○蛙○碁○吉野○定家一字題○眞方○近江八景○博多物狂○初瀬六代○舞車○舞車○俱利加羅落○隱岐院○阿古屋松○反魂香○笠取○太刀堀○仕衣○更科○五輪碎○西濱八景○鶴龜○曙○菊鐙○奈良八景○山家秋○東國下○西國下○弓矢立合○箱崎○鵜羽○布留○鼓瀧○阿古屋松○芳野○香椎○浦島○休見○上宮太子○吉野詣○笠卒都婆○貞任○伏木曾我○明智討○柴田○北條○空蟬○高安○狭衣○高安○小町○安達靜○宮城野○朝顏○實方○高野詣○隱岐院○丹後物狂○笛物狂○島廻○松浦物狂○和國○松浦○粉川寺○反魂香○鶏龍田○池贄○苅萱○守屋○佐々木○齋藤五○横山○春近○十番切○千引○豐干○護法○常陸帶○現在千方○泣不動○橋天狗

第三十卷　風俗圖繪集（第廿七回配本濟）

○和國諸職繪盡　○和國百女　○浮世繪（師宣、清信、清倍、清重、政信、清滿、清長、清隆、俊滿）○大和耕作繪抄　○繪本江戸紫　○繪本花葛蘿　○浮世繪（春信）○繪本吾妻抉　○浮世繪（政演）○四時交加　○浮世繪（重政、寫樂、湖龍齋、文調）○役者夏の富士　○浮世繪（春章、春好、春潮）○繪本滿都鑑　○浮世繪（北齋、豐春、英山、豐國）○繪本江戸土產　○浮世繪（廣重、國長、國貞）○駿河舞　○青樓年中行事　○浮世繪（歌麿、英之、英昌）○繪本家賀御伽　○繪本御伽品鑑　○百人女郎品定　○繪本常盤草　○女中風俗艷鏡　○長崎繪

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一册あて二圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので毎月の會費とは別從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一册あて金十二錢を要す。

（終）